栃木県埋蔵文化財調査報告第350集

和田遺跡

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XXI－

2012.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団

和田（わだ）遺跡

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XXI －

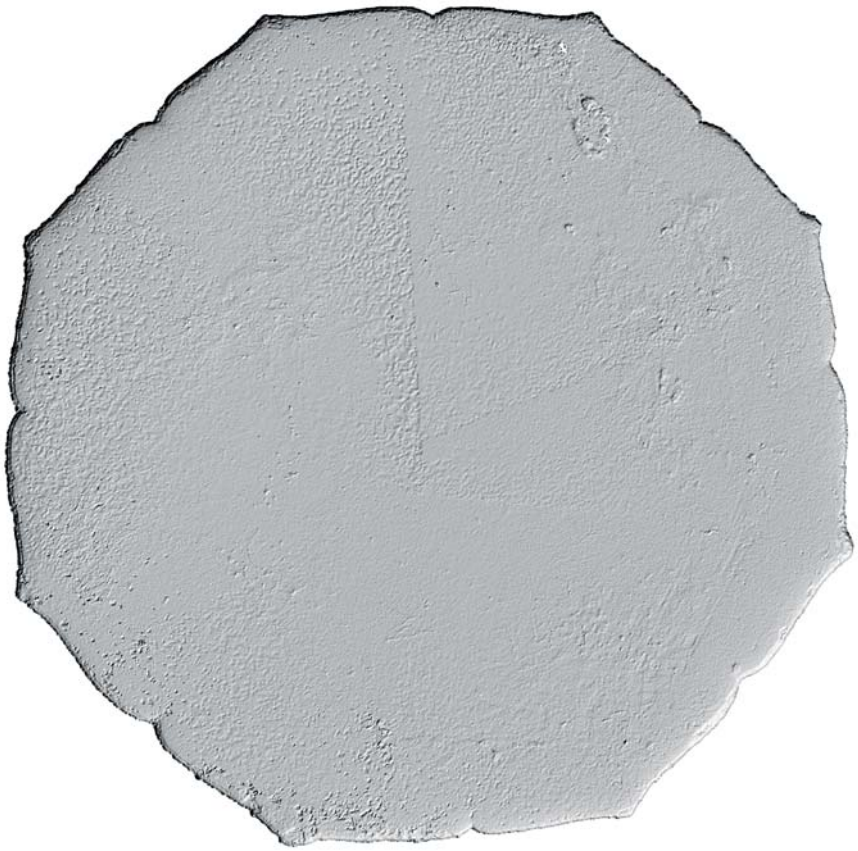
2012.3

栃木県教育委員会
㈶とちぎ未来づくり財団

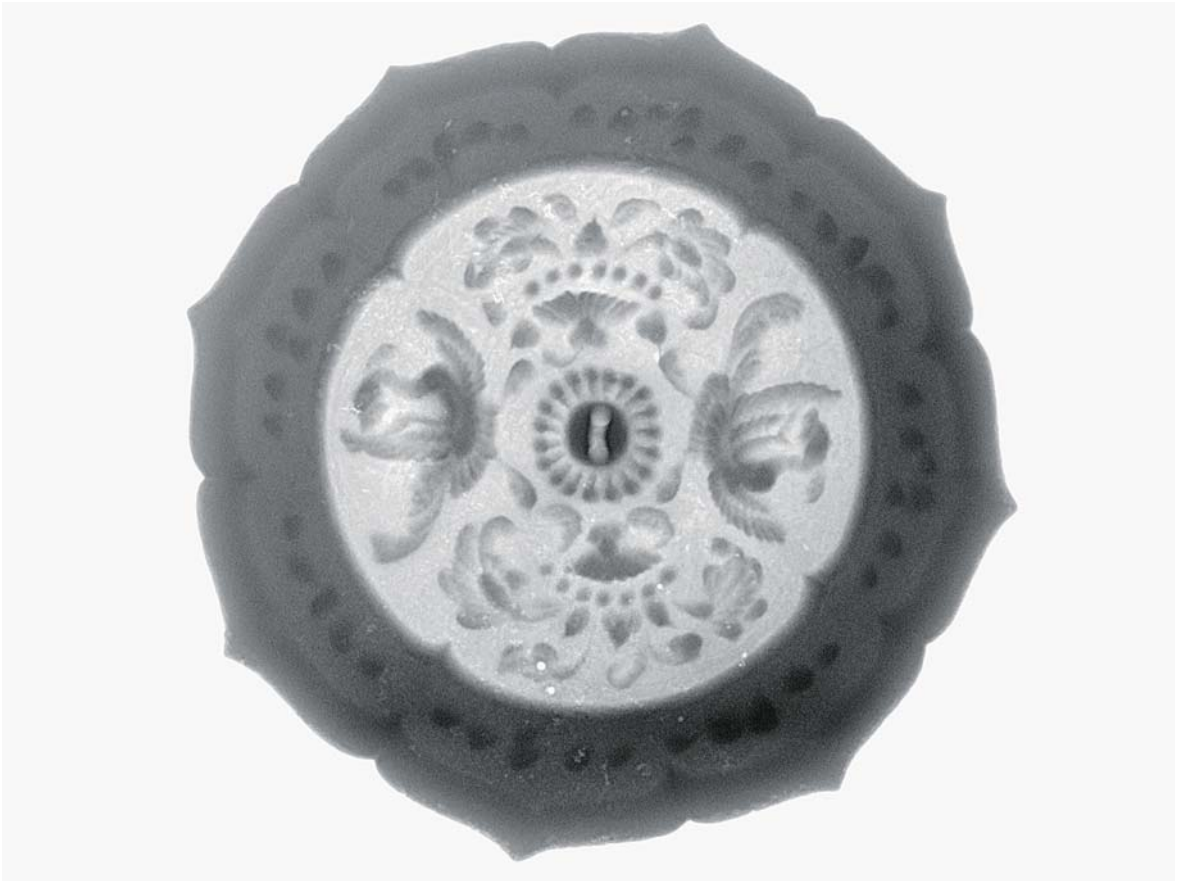
和田遺跡調査区全景（東上空から）

和田遺跡出土瑞花双鳳八稜鏡

瑞花双鳳八稜鏡　三次元ＣＧ画像（鏡背面）



瑞花双鳳八稜鏡　三次元ＣＧ画像（鏡面）



瑞花双鳳八稜鏡　レントゲン画像

序

北関東自動車道は群馬・栃木・茨城の３県を結ぶ高速道路で、古くからの歴史・産業を合わせ持つ北関東の各市町を繋ぎ、沿線の産業の発展や観光の振興などを目指して計画されました。その建設に先立ち、路線内に所在する遺跡について関係機関と協議の結果、記録による保存のための発掘調査を実施することとなりました。

和田遺跡は群馬県境と足利インターチェンジ間に位置する遺跡で、県西部の足利市に所在しています。自然豊かな遺跡周辺は、栃木県名勝第１号の行道山浄因寺、古代に瓦・須恵器生産を行った田島岡古窯跡群をはじめ数多くの歴史遺産があることで知られています。

今回の発掘調査では奈良・平安時代を中心とした集落が発見され、当時の人々の生活をうかがい知るための様々な資料を得ることができました。特に、県内で５例目となる土師器焼成遺構の確認、足利市の市章と同じ形をした八稜鏡の出土は、古代の生産活動や信仰を知る上での貴重な成果として特筆されます。

本書はその調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで多くのご協力をいただきました東日本高速道路株式会社、足利市教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成 24 年３月

栃木県教育委員会

教育長　須　藤　　稔

例　言

1．本書は、栃木県足利市月谷町地内に所在する和田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、北関東自動車道（足利～岩舟地区）の建設に伴う記録保存調査であり、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の委託事業として、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ未来づくり財団（平成 22 年度までは財団法人とちぎ生涯学習文化財団）埋蔵文化財センターが実施した。

3．確認調査から本調査、整理作業、報告書作成までの期間及び調査担当者は以下のとおりである。

平成 16（2004）年度（確認調査）　平成 16 年 6 月 11 日～平成 16 年 7 月 5 日
主査　中村享史

平成 16（2004）年度（本調査）　平成 16 年 8 月 9 日～平成 17 年 3 月 31 日
主査　中村享史、主任　横田　桂、主任　吉田　哲

平成 17（2005）年度（本調査）　平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
主査　西田　知生、主任　横田　桂、主任　吉田　哲、嘱託　玉橋さやか、
嘱託　鈴木芳英

平成 18（2006）年度（本調査）　平成 18 年 4 月 1 日～平成 18 年 8 月 31 日
主任　磯　寿人、主任　吉田　哲

平成 22（2010）年度（整理作業）　平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日
副主幹　芹澤清八、主査　谷中　隆

平成 23（2011）年度（整理作業、報告書作成）　平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
主査　谷中　隆、嘱託　田中　裕子

4．本書の執筆は、第 1 ・第 2 ・第 3 章を田中が、第 4 ・第 6 章を谷中が行い、編集作業は谷中が行った。これ以外の執筆は第 5 章第 1 節がパリノ・サーヴェイ株式会社、第 5 章第 2 節が株式会社加速器分析研究所である。須恵器・灰釉陶器の産地推定については津野　仁・中山敏行、中・近世遺物については田代隆の教示を得た。

5．和田遺跡の発掘調査にあたり、以下の委託事業を実施した。
基準点測量及び杭打ち・航空写真撮影：中央航業株式会社　火山灰分析・樹種同定・種実同定：パリノ・サーヴェイ株式会社　放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社加速器分析研究所　遺構図版及び全体図のデジタル図化・編集：株式会社松井ピ・テ・オ・印刷　遺跡周辺地形図のデジタル図化・編集：株式会社シン技術コンサル東京支店　木製品保存処理：株式会社東都文化財保存研究所　遺物写真撮影・図版作成：日立レフテクノ株式会社

6．遺構写真は各調査担当者が撮影した。鉄製品と銭貨のＸ線撮影は車塚哲久、航空写真は中央航業株式会社が撮影した。青銅鏡の三次元形状計測及びＸ線撮影については、奈良県立橿原考古学研究所に依頼した。

7．発掘調査の実施並びに報告書作成にあたっては、次の方々より御指導、御協力を賜った。記して謝意を表したい。
東日本高速道路株式会社関東支社宇都宮工事事務所、栃木県教育委員会事務局文化財課、栃木県県土整備部、足利市教育委員会、足立佳代、板橋　稔、大澤伸啓、奥山誠義、齋藤和行、酒寄雅志、菅谷文則、冨　祐次、橋本澄朗、塙　静夫、中村紀男

8．発掘調査参加者は次のとおりである。（五十音順）

阿由葉道雄、新井　武、石井郁夫、今井徳次、上杉勝彦、植竹勝男、小川和英、小島正晴、片上　茂、片上ユキエ、加藤節子、金井多加代、菊池　清、木村　登、木村ユキ、久米武夫、桒原邦弘、小林善雄、小谷野芳枝、近藤福治、島田セツ子、清水奈美子、杉山文平、鈴木芳英、高橋富子、瀧川浩司、滝口千尹洪、竹内育子、玉橋さやか、為貝直文、永井雄二、永瀬文男、長竹良子、長濱健一、中山アヤ子、中山トシ、根岸文子、橋本一夫、橋本春美、羽田正克、初谷知利、平野邦男、廣上　隆、福田真純、船田理一、堀江トミ、堀江良一、堀越充男、松島年次郎、松場克子、村田沙織、籾山重夫、安見嘉雍、山藤美子、柳田　清、吉田　昇、渡辺賢明、渡辺公熙

9．整理作業・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。（順不同）

中山真理、松岡葉子、吉田優一、赤羽根清美、坪山さわ香、野末亮子、岸布美子、五十嵐寿子、君島みどり、関口かおり、戸﨑眞弓、元西幸子

10．本遺跡の調査概要については年報等で報告されているが、本書をもって正式報告とする。

11．本遺跡に係わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

遺跡

1．本遺跡の略称はＡＫ－ＷＤである。

2．調査区全体図等には、世界測地系平面直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を記入した。

遺構

3．遺構略号は、奈良国立文化財研究所での略号を用い、竪穴住居跡（竪穴建物跡）：ＳＩ、掘立柱建物跡：ＳＢ、井戸：ＳＥ、溝：ＳＤ、土坑（土師器焼成遺構等も含む）：ＳＫ、性格不明遺構：ＳＸと表記した。ピット（柱穴）についてはＰと略記している。遺構番号は、基本的に種別によらず確認された順に１，２，３，・・・と発番している。本報告掲載にあたっては基本的に調査時に付された遺構番号を踏襲したが、遺構内容を確認した上で遺構名の修正、削除、発番を行っている。調査時に重複して発番した遺構については、Ａ・Ｂ・Ｃのアルファベットを付して区別した。また、１遺構が２遺構以上の重複であることが判明した場合は、新しい時期の遺構からａ・ｂ・ｃのアルファベットを付して区別した。

4．遺構実測図は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡土坑などは縮尺 1/80、カマドについては縮尺 1/40 を原則とし、必要に応じて縮尺を変えている。

5．図示した方位は、座標北（平面直角座標第Ⅸ系のＸ軸方向）である。遺構の主軸方向は座標北に対する振れを示す。竪穴住居跡の主軸方向は、縦横２軸のうち、入口関連施設を通る方向の軸で示し、入口が不明の場合はカマドの位置や長軸方向等から決定した。

6．断面図基準線の値は海抜標高で、水糸記号の下段に記載した。

7．遺構の掲載は、古い方から時代毎に行っている。種別では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑その他の順に、遺構番号順に行った。土坑とピットの遺構図版は、すべて第３章第３節内の６．土坑、８．ピットの項に掲載している。

遺物

8．遺物番号の発番は、出土遺構単位に１，２，３，４，‥‥とした。出土遺構単位の発番は原則として、土器（土師器、須恵器。皿、坏、碗、高坏、鉢、壷、甑、甕等）、瓦、土製品、石器、石製品、礫、金属製品の順で行った。この番号は、本文、遺物出土位置、遺物実測図、遺物観察表、写真図版等に共通する。

9．遺物実測図の縮尺は、原則として、縄文土器・弥生土器：1/4、縄文時代石器（剝片）：1/2、縄文時代石器（打製石斧・磨製石斧・石皿等）：1/4、土師器・須恵器・石器（編物石等）・土製品（支脚・粘土塊等）：1/4、石製品・鉄製品・土製品（紡錘車・土錘）：1/2 の縮尺で掲載した。なお、遺物写真図版の縮尺は不統一である。

10. 破片の拓影図は、縄文・弥生土器では左から外面－断面とし、古代以降は内面－断面－外面の順で配置した。

11．瓦は、小破片以外ほぼ全点を図示した。

12. 遺物実測図の断面は、須恵器：■、灰釉陶器・陶器：▒とした。土器内外面の施釉範囲は一点鎖線で、表面処理についてはその範囲を黒色処理：▒、漆仕上げ：▒で示すとともに、観察表中に表記した。器面調整のうちケズリについては、その方向を矢印で示している。

13．遺物観察表中の法量は、口：口縁部径、高：器高、最大：最大径、底：底部径、高台：高台部径、長：最大長、幅：最大幅、厚：最大厚、重：重さを示す。数字は計測値で、復元値は「復」、残存値は「残」を数字の前に付して示した。土器の重さは、完形の場合のみ計測している。法量の単位は cm・ g である。

14. 土器・土製品の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監査の『新版　標準土色帖 1996 年度版』に従い、焼成当時の色調に近い箇所で観察した。表面処理や塗彩、黒斑、煤付着などによる色調の変化は、色調とは別に遺物の特徴の欄に記述している。

15．土器・土製品の胎土に含まれる鉱物などの混和材の量は、「粗い / やや粗い / やや緻密 / 緻密」の４段階で示した。混和材の大きさは、微粒：0.25mm 以下、細粒：0.25 ～ 0.5mm、粗粒：0.5 ～２mm、礫：２mm 以上とする。鉱物のうち透明、黒色、白色など明確な色調を持つ場合は色で表記し、それ以外は「砂」とする。ただし、雲母のみは金、白などの色調とともに鉱物名を記した。

16．土器・土製品の焼成は、「硬質 / やや硬質 / やや軟質 / 軟質」とする。

17．観察表中の注記にある№後の数字は、調査時の取り上げ番号を示す。各遺物には遺跡略号、遺構名、遺物番号などが記されているが、表では番号のみを示した。他遺構の遺物注記が書かれている場合は、遺構名から記載している。遺物番号がない覆土中出土の場合は、記述を省略した。

18．各遺構から出土した図化以外の遺物については、土師器・須恵器・土製品など器質ごとの破片点数と重さを示した。器種が判明するものは、器種ごとの数量も記している。

19．木製品は第４章第３節内の９．その他の遺構・遺物の最後にまとめて掲載した。観察表は各遺構の記述のところに記載している。表面に砂粒が食い込む部分については、▒で示した。

目　次

序

例言

凡例

第１章　調査の経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 5
（1）　確認調査…… 5　（2）　本調査…… 5　（3）　整理・報告書作成…… 6

第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　調査の方法と概要
第１節　調査の方法 …… 15
第２節　基本土層 …… 15
第３節　確認された遺構と遺物の概要 …… 19

第４章　確認された遺構と遺物
第１節　縄文時代 …… 21
第２節　弥生時代 …… 21
第３節　古代 …… 24
１．竪穴住居跡……24　２．掘立柱建物跡……229　３．井戸……234
４．溝……236　５．土師器焼成遺構…242　６．土坑……246
７．性格不明遺構…337　８．ピット……353　９．その他の遺構・遺物…374
第４節　中・近世 …… 397
１．掘立柱建物跡……397　２．溝……397　３．土坑……399
４．その他の遺構・遺物…404
第５節　時期不明 …… 407
１．掘立柱建物跡……407　２．溝……411　３．土坑……416
４．ピット……448

第５章　自然科学分析
第１節　自然科学分析１ …… 449
第２節　自然科学分析２ …… 460
第３節　自然科学分析３ …… 472
第４節　自然科学分析４ …… 474

第６章　まとめ
第１節　縄文・弥生時代の遺物……479
１．縄文時代　　２．弥生時代
第２節　古代の遺構と遺物……479
１．土器の変遷について　　２．各遺物の様相について　　３．各遺構の様相について
４．集落の動向　　５．和田遺跡と周辺遺跡との関係
第３節　中・近世の遺構と遺物……506
１．中世　　２．近世

挿　図　目　次

第　１　図　北関東自動車道（足利～岩舟間）埋蔵文化財発掘調査箇所図（1/100,000）…… 2
第　２　図　和田遺跡調査区図 …… 7
第　３　図　和田遺跡グリッド配置及び確認調査トレンチ配置図 …… 8
第　４　図　周辺地形図（1/400,000）…… 10
第　５　図　遺跡位置図・地形図（1/1,250,000）… 10
第　６　図　周辺の遺跡分布図（1/25,000） …… 13
第　７　図　和田遺跡　グリッド配置図 …… 16
第　８　図　和田遺跡　遺構全体配置図 …… 17
第　９　図　和田遺跡　基本土層 …… 18
第１０図　和田遺跡　縄文時代出土遺物実測図（１）…… 22
第１１図　和田遺跡　縄文時代出土遺物実測図（２）…… 23
第１２図　和田遺跡　弥生時代出土遺物実測図 … 23
第１３図　和田遺跡　SI- ５実測図 …… 24
第１４図　和田遺跡　SI- ５出土遺物実測図 …… 25
第１５図　和田遺跡　SI-14 実測図…… 26
第１６図　和田遺跡　SI-14 出土遺物実測図…… 26
第１７図　和田遺跡　SI-15 実測図…… 27
第１８図　和田遺跡　SI-15 出土遺物実測図…… 28
第１９図　和田遺跡　SI-18 実測図…… 28
第２０図　和田遺跡　SI-18 出土遺物実測図…… 29
第２１図　和田遺跡　SI-25 実測図…… 29
第２２図　和田遺跡　SI-25 出土遺物実測図…… 30
第２３図　和田遺跡　SI-31 実測図…… 31
第２４図　和田遺跡　SI-31 出土遺物実測図…… 31
第２５図　和田遺跡　SI-35 実測図…… 32
第２６図　和田遺跡　SI-35 出土遺物実測図…… 32
第２７図　和田遺跡　SI-36 実測図…… 34
第２８図　和田遺跡　SI-36 出土遺物実測図…… 35
第２９図　和田遺跡　SI-42 実測図…… 37
第３０図　和田遺跡　SI-42 出土遺物実測図…… 37
第３１図　和田遺跡　SI-43 実測図…… 39
第３２図　和田遺跡　SI-43 出土遺物実測図…… 39
第３３図　和田遺跡　SI-45 実測図…… 40
第３４図　和田遺跡　SI-45 出土遺物実測図…… 40
第３５図　和田遺跡　SI-60・61 実測図 …… 42
第３６図　和田遺跡　SI-60 出土遺物実測図…… 43
第３７図　和田遺跡　SI-61 出土遺物実測図…… 44
第３８図　和田遺跡　SI-62 実測図…… 46
第３９図　和田遺跡　SI-62 出土遺物実測図…… 47
第４０図　和田遺跡　SI-63 実測図…… 48
第４１図　和田遺跡　SI-63 出土遺物実測図…… 49
第４２図　和田遺跡　SI-68 実測図…… 50
第４３図　和田遺跡　SI-68 出土遺物実測図…… 50
第４４図　和田遺跡　SI-70 実測図…… 51
第４５図　和田遺跡　SI-70 出土遺物実測図…… 51
第４６図　和田遺跡　SI-77 実測図…… 53
第４７図　和田遺跡　SI-77 出土遺物実測図…… 53
第４８図　和田遺跡　SI-87 実測図…… 54
第４９図　和田遺跡　SI-87 出土遺物実測図…… 54
第５０図　和田遺跡　SI-88 実測図…… 55
第５１図　和田遺跡　SI-88 出土遺物実測図…… 55
第５２図　和田遺跡　SI-89 実測図…… 56

第 53 図　和田遺跡　SI-89 出土遺物実測図…… 56
第 54 図　和田遺跡　SI-90 実測図…… 57
第 55 図　和田遺跡　SI-90 出土遺物実測図…… 57
第 56 図　和田遺跡　SI-91 実測図…… 59
第 57 図　和田遺跡　SI-91 出土遺物実測図…… 59
第 58 図　和田遺跡　SI-92 実測図…… 60
第 59 図　和田遺跡　SI-92 出土遺物実測図…… 61
第 60 図　和田遺跡　SI-93 実測図…… 62
第 61 図　和田遺跡　SI-93 出土遺物実測図…… 62
第 62 図　和田遺跡　SI-194 実測図 …… 63
第 63 図　和田遺跡　SI-194 出土遺物実測図
（1）…… 64
第 64 図　和田遺跡　SI-194 出土遺物実測図
（2）…… 65
第 65 図　和田遺跡　SI-195 実測図 …… 68
第 66 図　和田遺跡　SI-195 出土遺物実測図 …… 68
第 67 図　和田遺跡　SI-196 実測図 …… 69
第 68 図　和田遺跡　SI-196 出土遺物実測図 …… 70
第 69 図　和田遺跡　SI-197 実測図 …… 73
第 70 図　和田遺跡　SI-197 出土遺物実測図 …… 73
第 71 図　和田遺跡　SI-198 実測図 …… 75
第 72 図　和田遺跡　SI-198 出土遺物実測図 …… 76
第 73 図　和田遺跡　SI-199 実測図 …… 78
第 74 図　和田遺跡　SI-199 出土遺物実測図 …… 78
第 75 図　和田遺跡　SI-200b 実測図 …… 80
第 76 図　和田遺跡　SI-200b 出土遺物実測図 … 80
第 77 図　和田遺跡　SI-201 実測図 …… 81
第 78 図　和田遺跡　SI-201 出土遺物実測図 …… 82
第 79 図　和田遺跡　SI-202 実測図 …… 83
第 80 図　和田遺跡　SI-202 出土遺物実測図
（1）…… 84
第 81 図　和田遺跡　SI-202 出土遺物実測図
（2）…… 85
第 82 図　和田遺跡　SI-203 実測図 …… 88
第 83 図　和田遺跡　SI-203 出土遺物実測図 …… 88
第 84 図　和田遺跡　SI-204 実測図 …… 89
第 85 図　和田遺跡　SI-207 実測図 …… 90
第 86 図　和田遺跡　SI-207 出土遺物実測図 …… 90
第 87 図　和田遺跡　SI-208 実測図 …… 92
第 88 図　和田遺跡　SI-208 出土遺物実測図 …… 93
第 89 図　和田遺跡　SI-209a 実測図 …… 95
第 90 図　和田遺跡　SI-209a 出土遺物実測図 … 96
第 91 図　和田遺跡　SI-209b 実測図 …… 98
第 92 図　和田遺跡　SI-209b 出土遺物実測図 … 99
第 93 図　和田遺跡　SI-209c 実測図 ……101
第 94 図　和田遺跡　SI-209c 出土遺物実測図 …101
第 95 図　和田遺跡　SI-210 実測図 ……102
第 96 図　和田遺跡　SI-210 出土遺物実測図
（1）……103
第 97 図　和田遺跡　SI-210 出土遺物実測図
（2）……104
第 98 図　和田遺跡　SI-212 実測図 ……107
第 99 図　和田遺跡　SI-212 出土遺物実測図 ……107
第 100 図　和田遺跡　SI-213 実測図 ……108
第 101 図　和田遺跡　SI-213 出土遺物実測図 ……109
第 102 図　和田遺跡　SI-214 実測図 ……111
第 103 図　和田遺跡　SI-214 出土遺物実測図 ……111
第 104 図　和田遺跡　SI-215 実測図 ……113
第 105 図　和田遺跡　SI-215 出土遺物実測図 ……113
第 106 図　和田遺跡　SI-216 実測図 ……114
第 107 図　和田遺跡　SI-216 出土遺物実測図 ……115
第 108 図　和田遺跡　SI-217 実測図 ……116
第 109 図　和田遺跡　SI-217 出土遺物実測図 ……117
第 110 図　和田遺跡　SI-218 実測図 ……120
第 111 図　和田遺跡　SI-218 出土遺物実測図 ……121
第 112 図　和田遺跡　SI-219 実測図 ……123
第 113 図　和田遺跡　SI-219 出土遺物実測図 ……123
第 114 図　和田遺跡　SI-220 実測図 ……124
第 115 図　和田遺跡　SI-220 出土遺物実測図 ……125
第 116 図　和田遺跡　SI-221 実測図 ……127
第 117 図　和田遺跡　SI-221 出土遺物実測図 ……127
第 118 図　和田遺跡　SI-225 実測図 ……129
第 119 図　和田遺跡　SI-225 出土遺物実測図 ……130
第 120 図　和田遺跡　SI-226 実測図 ……132
第 121 図　和田遺跡　SI-226 出土遺物実測図 ……132
第 122 図　和田遺跡　SI-227 実測図 ……133
第 123 図　和田遺跡　SI-227 出土遺物実測図 ……133
第 124 図　和田遺跡　SI-228 実測図 ……135

第 125 図　和田遺跡　SI-228 出土遺物実測図 ……136
第 126 図　和田遺跡　SI-403 実測図 ……139
第 127 図　和田遺跡　SI-403 出土遺物実測図 ……139
第 128 図　和田遺跡　SI-631 実測図 ……141
第 129 図　和田遺跡　SI-631 出土遺物実測図 ……141
第 130 図　和田遺跡　SI-632 実測図 ……143
第 131 図　和田遺跡　SI-632 出土遺物実測図 ……143
第 132 図　和田遺跡　SI-670 実測図 ……145
第 133 図　和田遺跡　SI-670 出土遺物実測図 ……146
第 134 図　和田遺跡　SI-727 実測図 ……147
第 135 図　和田遺跡　SI-727 出土遺物実測図 ……148
第 136 図　和田遺跡　SI-728 実測図 ……150
第 137 図　和田遺跡　SI-728 出土遺物実測図 ……151
第 138 図　和田遺跡　SI-729 実測図 ……154
第 139 図　和田遺跡　SI-729 出土遺物実測図 ……155
第 140 図　和田遺跡　SI-730 実測図 ……157
第 141 図　和田遺跡　SI-730 出土遺物実測図 ……157
第 142 図　和田遺跡　SI-731 実測図 ……158
第 143 図　和田遺跡　SI-731 出土遺物実測図 ……158
第 144 図　和田遺跡　SI-732 実測図 ……160
第 145 図　和田遺跡　SI-732 出土遺物実測図 ……161
第 146 図　和田遺跡　SI-733 実測図 ……164
第 147 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図
（1）……165
第 148 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図
（2）……166
第 149 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図
（3）……167
第 150 図　和田遺跡　SI-734 実測図 ……168
第 151 図　和田遺跡　SI-734 出土遺物実測図 ……168
第 152 図　和田遺跡　SI-736a・736b 実測図 ……170
第 153 図　和田遺跡　SI-736a 出土遺物実測図 …171
第 154 図　和田遺跡　SI-737 実測図 ……173
第 155 図　和田遺跡　SI-737 出土遺物実測図 ……173
第 156 図　和田遺跡　SI-741 実測図 ……174
第 157 図　和田遺跡 SI-741 出土遺物実測図……174
第 158 図　和田遺跡　SI-742 実測図 ……175
第 159 図　和田遺跡　SI-742 出土遺物実測図 ……176
第 160 図　和田遺跡　SI-743 実測図 ……178
第 161 図　和田遺跡　SI-743 出土遺物実測図 ……179
第 162 図　和田遺跡　SI-744 実測図 ……182
第 163 図　和田遺跡　SI-744 出土遺物実測図 ……182
第 164 図　和田遺跡　SI-745 実測図 ……183
第 165 図　和田遺跡　SI-745 出土遺物実測図 ……184
第 166 図　和田遺跡　SI-747 実測図 ……186
第 167 図　和田遺跡　SI-747 出土遺物実測図 ……187
第 168 図　和田遺跡　SI-748 実測図 ……189
第 169 図　和田遺跡　SI-748 出土遺物実測図 ……190
第 170 図　和田遺跡　SI-749 実測図 ……191
第 171 図　和田遺跡　SI-749 出土遺物実測図 ……192
第 172 図　和田遺跡　SI-750 実測図 ……193
第 173 図　和田遺跡　SI-750 出土遺物実測図 ……194
第 174 図　和田遺跡　SI-751 実測図 ……197
第 175 図　和田遺跡　SI-751 出土遺物実測図 ……197
第 176 図　和田遺跡　SI-752 実測図 ……199
第 177 図　和田遺跡　SI-752 出土遺物実測図 ……199
第 178 図　和田遺跡　SI-753 実測図 ……201
第 179 図　和田遺跡　SI-753 出土遺物実測図 ……201
第 180 図　和田遺跡　SI-754 実測図 ……202
第 181 図　和田遺跡　SI-754 出土遺物実測図 ……203
第 182 図　和田遺跡　SI-755 実測図 ……205
第 183 図　和田遺跡　SI-755 出土遺物実測図 ……205
第 184 図　和田遺跡　SI-756 実測図 ……207
第 185 図　和田遺跡　SI-756 出土遺物実測図 ……208
第 186 図　和田遺跡　SI-757 実測図 ……209
第 187 図　和田遺跡　SI-757 出土遺物実測図 ……210
第 188 図　和田遺跡　SI-900 実測図 ……212
第 189 図　和田遺跡　SI-900 出土遺物実測図 ……212
第 190 図　和田遺跡　SI-901 実測図 ……213
第 191 図　和田遺跡　SI-901 出土遺物実測図 ……214
第 192 図　和田遺跡　SI-902 実測図 ……217
第 193 図　和田遺跡　SI-902 出土遺物実測図 ……217
第 194 図　和田遺跡　SI-903 実測図 ……219
第 195 図　和田遺跡　SI-903 出土遺物実測図 ……219
第 196 図　和田遺跡　SI-904 実測図 ……221
第 197 図　和田遺跡　SI-904 出土遺物実測図 ……221
第 198 図　和田遺跡　SI-905 実測図 ……222
第 199 図　和田遺跡　SI-905 出土遺物実測図 ……222

第 200 図　和田遺跡　SI-919 実測図 ……223
第 201 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図
（1）……224
第 202 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図
（2）……225
第 203 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図
（3）……226
第 204 図　和田遺跡　SB-233 実測図……229
第 205 図　和田遺跡　SB-235 実測図（1）……230
第 206 図　和田遺跡　SB-235 出土遺物実測図……231
第 207 図　和田遺跡　SB-235 実測図（2）……231
第 208 図　和田遺跡　SB-951 実測図……233
第 209 図　和田遺跡　SE-549　実測図 ……234
第 210 図　和田遺跡　SE-549 出土遺物実測図……235
第 211 図　和田遺跡　SD-38 実測図 ……236
第 212 図　和田遺跡　SD-238 実測図……236
第 213 図　和田遺跡　SD-78 実測図 ……237
第 214 図　和田遺跡　SD-78 出土遺物実測図 ……238
第 215 図　和田遺跡　SD-238 出土遺物実測図
（1）……239
第 216 図　和田遺跡　SD-238 出土遺物実測図
（2）……240
第 217 図　和田遺跡　SD-240 実測図……242
第 218 図　和田遺跡　SD-240 出土遺物実測図……242
第 219 図　和田遺跡　SK-643b 出土遺物実測図 …243
第 220 図　和田遺跡　SK-738 出土遺物実測図……244
第 221 図　和田遺跡　SK-739 出土遺物実測図……245
第 222 図　和田遺跡　SK-8・11・12・37・46・49 ～
53・58・64・67・69 実測図 ……247
第 223 図　和田遺跡　SK-16・24・26 ～ 30・32 ～ 34
実測図 ……249
第 224 図　和田遺跡　SK-39 ～ 41・44・55・56・59・
65・66・76 実測図……250
第 225 図　和田遺跡　SK-80 ～ 83・85・86・94 ～ 99
実測図 ……253
第 226 図　和田遺跡　SK-102 ～ 107・110・111・158b・
159b・167・168・188・190 実測図……255
第 227 図　和田遺跡　SK-738・739・761 ～ 764・766
～ 769・864・866 実測図……257
第 228 図　和田遺跡　SK-735・765・793・849・ 852・
853・855・867・874・875・879・880・
882・934・935・946 実測図 ……259
第 229 図　和田遺跡　土坑集中地区（Ⅵ区）
土坑全体図 ……260
第 230 図　和田遺跡　土坑実測図① ……261
第 231 図　和田遺跡　土坑実測図② ……261
第 232 図　和田遺跡　土坑実測図③ ……262
第 233 図　和田遺跡　土坑実測図④ ……263
第 234 図　和田遺跡　土坑実測図⑤ ……264
第 235 図　和田遺跡　土坑実測図⑥ ……265
第 236 図　和田遺跡　土坑実測図⑦ ……266
第 237 図　和田遺跡　土坑実測図⑧ ……267
第 238 図　和田遺跡　土坑実測図⑨ ……268
第 239 図　和田遺跡　土坑実測図⑩ ……268
第 240 図　和田遺跡　土坑実測図⑪ ……269
第 241 図　和田遺跡　土坑実測図⑫ ……270
第 242 図　和田遺跡　土坑実測図⑬ ……272
第 243 図　和田遺跡　土坑実測図⑭ ……273
第 244 図　和田遺跡　土坑実測図⑮ ……275
第 245 図　和田遺跡　土坑実測図⑯ ……276
第 246 図　和田遺跡　土坑実測図⑰ ……277
第 247 図　和田遺跡　土坑実測図⑱ ……278
第 248 図　和田遺跡　土坑実測図⑲ ……279
第 249 図　和田遺跡　土坑実測図⑳ ……279
第 250 図　和田遺跡　土坑実測図㉑ ……280
第 251 図　和田遺跡　土坑実測図㉒ ……281
第 252 図　和田遺跡　土坑実測図㉓ ……282
第 253 図　和田遺跡　土坑実測図㉔ ……283
第 254 図　和田遺跡　土坑実測図㉕ ……283
第 255 図　和田遺跡　土坑実測図㉖ ……284
第 256 図　和田遺跡　土坑実測図㉗ ……286
第 257 図　和田遺跡　土坑実測図㉘ ……287
第 258 図　和田遺跡　土坑実測図㉙ ……289
第 259 図　和田遺跡　土坑実測図㉚ ……290
第 260 図　和田遺跡　土坑実測図㉛ ……290
第 261 図　和田遺跡　土坑実測図㉜ ……292
第 262 図　和田遺跡　土坑実測図㉝ ……294
第 263 図　和田遺跡　土坑実測図㉞ ……294

第 264 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（1）……302
第 265 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（2）……303
第 266 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（3）……304
第 267 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（4）……305
第 268 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（5）……306
第 269 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（6）……307
第 270 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（7）……308
第 271 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（8）……309
第 272 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（9）……310
第 273 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（10）……311
第 274 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（11）……312
第 275 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（12）……313
第 276 図　和田遺跡　SX-17 実測図 ……337
第 277 図　和田遺跡　SX-17 出土遺物実測図 ……337
第 278 図　和田遺跡　SX-54 実測図 ……339
第 279 図　和田遺跡　SX-54 出土遺物実測図 ……340
第 280 図　和田遺跡　SX-205 実測図……342
第 281 図　和田遺跡　SX-205 出土遺物実測図……343
第 282 図　和田遺跡　SX-229・230・231・232 実測図 ……344
第 283 図　和田遺跡　SX-229 出土遺物実測図……344
第 284 図　和田遺跡　SX-230 出土遺物実測図……345
第 285 図　和田遺跡　SX-231 出土遺物実測図……346
第 286 図　和田遺跡　SX-232 出土遺物実測図……348
第 287 図　和田遺跡　SX-700 実測図……351
第 288 図　和田遺跡　SX-700 出土遺物実測図……352
第 289 図　和田遺跡　ピット全体図 ……354
第 290 図　和田遺跡　ピット実測図① ……359
第 291 図　和田遺跡　ピット実測図② ……360
第 292 図　和田遺跡　ピット実測図③ ……361
第 293 図　和田遺跡　ピット実測図④ ……362
第 294 図　和田遺跡　ピット実測図⑤ ……363
第 295 図　和田遺跡　ピット実測図⑥ ……364
第 296 図　和田遺跡　ピット実測図⑦ ……365
第 297 図　和田遺跡　ピット実測図⑧ ……366
第 298 図　和田遺跡　P-266・277・281・413・429・496・503・510・612・623・823・952 実測図 ……367
第 299 図　和田遺跡　P-327・387・397b・625・803・804 実測図 ……368
第 300 図　和田遺跡　古代ピット出土遺物実測図（1）……368
第 301 図　和田遺跡　古代ピット出土遺物実測図（2）……369
第 302 図　和田遺跡　遺物集中区 1 実測図 ……374
第 303 図　和田遺跡　遺物集中区 1 出土遺物実測図 ……375
第 304 図　和田遺跡　遺物集中区 2 実測図 ……377
第 305 図　和田遺跡　遺物集中区 2 出土遺物実測図 ……378
第 306 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（1）……382
第 307 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（2）……383
第 308 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（3）……384
第 309 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（4）……385
第 310 図　和田遺跡　木製品実測図（1）……390
第 311 図　和田遺跡　木製品実測図（2）……391
第 312 図　和田遺跡　木製品実測図（3）……392
第 313 図　和田遺跡　木製品実測図（4）……393
第 314 図　和田遺跡　木製品実測図（5）……394
第 315 図　和田遺跡　木製品実測図（6）……395
第 316 図　和田遺跡　木製品実測図（7）……396
第 317 図　和田遺跡　SB-79 実測図 ……397

第 318 図　和田遺跡　SB-79 出土遺物実測図 ……397
第 319 図　和田遺跡　SD-758 実測図……398
第 320 図　和田遺跡　SB-758 出土遺物実測図……398
第 321 図　和田遺跡　中・近世土坑出土遺物
実測図（1）……401
第 322 図　和田遺跡　中・近世土坑出土遺物
実測図（2）……402
第 323 図　和田遺跡　中・近世出土遺物実測図 …404
第 324 図　和田遺跡　中・近世出土遺物実測図 …405
第 325 図　和田遺跡　SB-100 実測図……407
第 326 図　和田遺跡　SB-101 実測図……408
第 327 図　和田遺跡　SB-234 実測図……409
第 328 図　和田遺跡　SB-508 実測図……410
第 329 図　和田遺跡　SB-960 実測図……410
第 330 図　和田遺跡　SB-961 実測図……411
第 331 図　和田遺跡　SD- 4 ・19 実測図 ……412
第 332 図　和田遺跡　SD-19 出土遺物実測図 ……413
第 333 図　和田遺跡　SD-21・22 実測図 ……413
第 334 図　和田遺跡　SD-236 実測図……414
第 335 図　和田遺跡　SD-239 実測図……414
第 336 図　和田遺跡　SD-242 実測図……414
第 337 図　和田遺跡　SD-759 実測図……415
第 338 図　和田遺跡　SD-865a 実測図 ……415
第 339 図　和田遺跡　時期不明土坑出土遺物
実測図 ……447
第 340 図　不明テフラおよび As-C の軽石屈折率
測定結果 ……453
第 341 図　テフラ ……455
第 342 図　炭化材 ……459
第 343 図　テフラ ……463
第 344 図　木材 ……469
第 345 図　炭化材（1）……470
第 346 図　炭化材（2）・種実遺体……471
第 347 図　木材 ……473
第 348 図　［参考］暦年較正年代グラフ……476
第 349 図　和田遺跡　縄文・弥生時代の
遺物出土位置図 ……480
第 350 図　和田遺跡　土器の変遷（1）……482
第 351 図　和田遺跡　土器の変遷（2）……483
第 352 図　和田遺跡　土器の変遷（3）……484
第 353 図　竪穴住居跡出土須恵器の
時期別産地変遷図 ……485
第 354 図　和田遺跡出土遺物（1）……486
第 355 図　和田遺跡出土遺物（2）……488
第 356 図　和田遺跡出土遺物（3）……490
第 357 図　八稜鏡三次元ＣＧ画像 ……491
第 358 図　栃木県内の土師器焼成遺構 ……493
第 359 図　和田遺跡　古代集落の変遷（1）……495
第 360 図　和田遺跡　古代集落の変遷（2）……496
第 361 図　和田遺跡　古代集落の変遷（3）……497
第 362 図　和田遺跡　古代集落の変遷（4）……498
第 363 図　和田遺跡　古代集落の変遷（5）……499
第 364 図　和田遺跡　古代集落の変遷（6）……500
第 365 図　和田遺跡　古代集落の変遷（7）と
中・近世の遺構配置 ……501
第 366 図　大岩山毘沙門堂出土の瓦 ……503
第 367 図　足利北部における古墳時代後期集落と
古墳群 ……504
第 368 図　足利北部における古代遺跡 ……505

表　目　次

第　1　表　北関東自動車道（足利～岩舟間）
埋蔵文化財発掘調査箇所一覧表 …… 3
第　2　表　調査の経過と発掘対象面積 …… 6
第　3　表　周辺の遺跡一覧 …… 14
第　4　表　和田遺跡　遺構一覧表 …… 20
第　5　表　和田遺跡　SI- 5 出土遺物観察表 …… 25
第　6　表　和田遺跡　SI-14 出土遺物観察表…… 27
第　7　表　和田遺跡　SI-15 出土遺物観察表…… 28
第　8　表　和田遺跡　SI-18 出土遺物観察表…… 29
第　9　表　和田遺跡　SI-25 出土遺物観察表…… 30
第 10 表　和田遺跡　SI-31 出土遺物観察表…… 31
第 11 表　和田遺跡　SI-35 出土遺物観察表…… 33

第 12 表　和田遺跡　SI-36 出土遺物観察表…… 35
第 13 表　和田遺跡　SI-42 出土遺物観察表…… 37
第 14 表　和田遺跡　SI-43 出土遺物観察表…… 39
第 15 表　和田遺跡　SI-45 出土遺物観察表…… 41
第 16 表　和田遺跡　SI-60 出土遺物観察表…… 43
第 17 表　和田遺跡　SI-61 出土遺物観察表…… 45
第 18 表　和田遺跡　SI-62 出土遺物観察表…… 47
第 19 表　和田遺跡　SI-63 出土遺物観察表…… 49
第 20 表　和田遺跡　SI-68 出土遺物観察表…… 50
第 21 表　和田遺跡　SI-70 出土遺物観察表…… 52
第 22 表　和田遺跡　SI-77 出土遺物観察表…… 53
第 23 表　和田遺跡　SI-87 出土遺物観察表…… 54
第 24 表　和田遺跡　SI-88 出土遺物観察表…… 55
第 25 表　和田遺跡　SI-89 出土遺物観察表…… 56
第 26 表　和田遺跡　SI-90 出土遺物観察表…… 58
第 27 表　和田遺跡　SI-91 出土遺物観察表…… 60
第 28 表　和田遺跡　SI-92 出土遺物観察表…… 61
第 29 表　和田遺跡　SI-93 出土遺物観察表…… 62
第 30 表　和田遺跡　SI-194 出土遺物観察表 …… 66
第 31 表　和田遺跡　SI-195 出土遺物観察表 …… 68
第 32 表　和田遺跡　SI-196 出土遺物観察表 …… 71
第 33 表　和田遺跡　SI-197 出土遺物観察表 …… 74
第 34 表　和田遺跡　SI-198 出土遺物観察表 …… 76
第 35 表　和田遺跡　SI-199 出土遺物観察表 …… 79
第 36 表　和田遺跡　SI-200b 出土遺物観察表 … 80
第 37 表　和田遺跡　SI-201 出土遺物観察表 …… 82
第 38 表　和田遺跡　SI-202 出土遺物観察表 …… 85
第 39 表　和田遺跡　SI-203 出土遺物観察表 …… 88
第 40 表　和田遺跡　SI-207 出土遺物観察表 …… 91
第 41 表　和田遺跡　SI-208 出土遺物観察表 …… 93
第 42 表　和田遺跡　SI-209a 出土遺物観察表 … 96
第 43 表　和田遺跡　SI-209b 出土遺物観察表 … 99
第 44 表　和田遺跡　SI-209c 出土遺物観察表 …102
第 45 表　和田遺跡　SI-210 出土遺物観察表 ……104
第 46 表　和田遺跡　SI-212 出土遺物観察表 ……107
第 47 表　和田遺跡　SI-213 出土遺物観察表 ……109
第 48 表　和田遺跡　SI-214 出土遺物観察表 ……112
第 49 表　和田遺跡　SI-215 出土遺物観察表 ……114
第 50 表　和田遺跡　SI-216 出土遺物観察表 ……115
第 51 表　和田遺跡　SI-217 出土遺物観察表 ……117
第 52 表　和田遺跡　SI-218 出土遺物観察表 ……121
第 53 表　和田遺跡　SI-219 出土遺物観察表 ……123
第 54 表　和田遺跡　SI-220 出土遺物観察表 ……125
第 55 表　和田遺跡　SI-221 出土遺物観察表 ……128
第 56 表　和田遺跡　SI-225 出土遺物観察表 ……131
第 57 表　和田遺跡　SI-226 出土遺物観察表 ……132
第 58 表　和田遺跡　SI-227 出土遺物観察表 ……134
第 59 表　和田遺跡　SI-228 出土遺物観察表 ……136
第 60 表　和田遺跡　SI-403 出土遺物観察表 ……140
第 61 表　和田遺跡　SI-631 出土遺物観察表 ……142
第 62 表　和田遺跡　SI-632 出土遺物観察表 ……144
第 63 表　和田遺跡　SI-670 出土遺物観察表 ……146
第 64 表　和田遺跡　SI-727 出土遺物観察表 ……148
第 65 表　和田遺跡　SI-728 出土遺物観察表 ……152
第 66 表　和田遺跡　SI-729 出土遺物観察表 ……155
第 67 表　和田遺跡　SI-730 出土遺物観察表 ……157
第 68 表　和田遺跡　SI-731 出土遺物観察表 ……159
第 69 表　和田遺跡　SI-732 出土遺物観察表 ……161
第 70 表　和田遺跡　SI-733 出土遺物観察表 ……167
第 71 表　和田遺跡　SI-734 出土遺物観察表 ……169
第 72 表　和田遺跡　SI-736a 出土遺物観察表 …171
第 73 表　和田遺跡　SI-737 出土遺物観察表 ……173
第 74 表　和田遺跡　SI-741 出土遺物観察表 ……174
第 75 表　和田遺跡　SI-742 出土遺物観察表 ……176
第 76 表　和田遺跡　SI-743 出土遺物観察表 ……179
第 77 表　和田遺跡　SI-744 出土遺物観察表 ……182
第 78 表　和田遺跡　SI-745 出土遺物観察表 ……184
第 79 表　和田遺跡　SI-747 出土遺物観察表 ……187
第 80 表　和田遺跡　SI-748 出土遺物観察表 ……190
第 81 表　和田遺跡　SI-749 出土遺物観察表 ……192
第 82 表　和田遺跡　SI-750 出土遺物観察表 ……195
第 83 表　和田遺跡　SI-751 出土遺物観察表 ……198
第 84 表　和田遺跡　SI-752 出土遺物観察表 ……200
第 85 表　和田遺跡　SI-753 出土遺物観察表 ……201
第 86 表　和田遺跡　SI-754 出土遺物観察表 ……203
第 87 表　和田遺跡　SI-755 出土遺物観察表 ……206
第 88 表　和田遺跡　SI-756 出土遺物観察表 ……208
第 89 表　和田遺跡　SI-757 出土遺物観察表 ……210

第 90 表　和田遺跡　SI-900 出土遺物観察表 ……212
第 91 表　和田遺跡　SI-901 出土遺物観察表 ……214
第 92 表　和田遺跡　SI-902 出土遺物観察表 ……218
第 93 表　和田遺跡　SI-903 出土遺物観察表 ……220
第 94 表　和田遺跡　SI-904 出土遺物観察表 ……221
第 95 表　和田遺跡　SI-905 出土遺物観察表 ……222
第 96 表　和田遺跡　SI-919 出土遺物観察表 ……226
第 97 表　和田遺跡　SB-235 出土遺物観察表……231
第 98 表　和田遺跡　SB-951 出土遺物観察表……234
第 99 表　和田遺跡　SE-549 出土遺物観察表……235
第 100 表　和田遺跡　SD-78 出土遺物観察表 ……238
第 101 表　和田遺跡　SD-238 出土遺物観察表……240
第 102 表　和田遺跡　SD-240 出土遺物観察表……242
第 103 表　和田遺跡　SK-643b 出土遺物観察表 …243
第 104 表　和田遺跡　SK-738 出土遺物観察表……244
第 105 表　和田遺跡　SK-739 出土遺物観察表……245
第 106 表　和田遺跡　SK-27 出土遺物観察表 ……313
第 107 表　和田遺跡　SK-34 出土遺物観察表 ……314
第 108 表　和田遺跡　SK-37 出土遺物観察表 ……314
第 109 表　和田遺跡　SK-39 出土遺物観察表 ……314
第 110 表　和田遺跡　SK-41 出土遺物観察表 ……314
第 111 表　和田遺跡　SK-44 出土遺物観察表 ……314
第 112 表　和田遺跡　SK-50 出土遺物観察表 ……314
第 113 表　和田遺跡　SK-52 出土遺物観察表 ……314
第 114 表　和田遺跡　SK-53 出土遺物観察表 ……314
第 115 表　和田遺跡　SK-58 出土遺物観察表 ……315
第 116 表　和田遺跡　SK-65 出土遺物観察表 ……315
第 117 表　和田遺跡　SK-67 出土遺物観察表 ……315
第 118 表　和田遺跡　SK-94 出土遺物観察表 ……315
第 119 表　和田遺跡　SK-95 出土遺物観察表 ……316
第 120 表　和田遺跡　SK-96 出土遺物観察表 ……316
第 121 表　和田遺跡　SK-97 出土遺物観察表 ……317
第 122 表　和田遺跡　SK-98 出土遺物観察表 ……318
第 123 表　和田遺跡　SK-103 出土遺物観察表……319
第 124 表　和田遺跡　SK-104 出土遺物観察表……319
第 125 表　和田遺跡　SK-106 出土遺物観察表……319
第 126 表　和田遺跡　SK-159b 出土遺物観察表 …319
第 127 表　和田遺跡　SK-167 出土遺物観察表……319
第 128 表　和田遺跡　SK-200a 出土遺物観察表 …319
第 129 表　和田遺跡　SK-211 出土遺物観察表……319
第 130 表　和田遺跡　SK-222 出土遺物観察表……319
第 131 表　和田遺跡　SK-223B 出土遺物観察表 …321
第 132 表　和田遺跡　SK-224 出土遺物観察表……321
第 133 表　和田遺跡　SK-248 出土遺物観察表……321
第 134 表　和田遺跡　SK-250 出土遺物観察表……321
第 135 表　和田遺跡　SK-251 出土遺物観察表……321
第 136 表　和田遺跡　SK-253 出土遺物観察表……321
第 137 表　和田遺跡　SK-254・255 出土遺物
観察表 ……322
第 138 表　和田遺跡　SK-267 出土遺物観察表……322
第 139 表　和田遺跡　SK-270 出土遺物観察表……322
第 140 表　和田遺跡　SK-278 出土遺物観察表……322
第 141 表　和田遺跡　SK-286 出土遺物観察表……322
第 142 表　和田遺跡　SK-300 出土遺物観察表……322
第 143 表　和田遺跡　SK-308 出土遺物観察表……323
第 144 表　和田遺跡　SK-313 出土遺物観察表……323
第 145 表　和田遺跡　SK-319 出土遺物観察表……323
第 146 表　和田遺跡　SK-323 出土遺物観察表……323
第 147 表　和田遺跡　SK-324 出土遺物観察表……323
第 148 表　和田遺跡　SK-333 出土遺物観察表……323
第 149 表　和田遺跡　SK-363 出土遺物観察表……323
第 150 表　和田遺跡　SK-407a 出土遺物観察表 …323
第 151 表　和田遺跡　SK-422 出土遺物観察表……324
第 152 表　和田遺跡　SK-423 出土遺物観察表……324
第 153 表　和田遺跡　SK-425 出土遺物観察表……324
第 154 表　和田遺跡　SK-445a 出土遺物観察表 …324
第 155 表　和田遺跡　SK-452 出土遺物観察表……324
第 156 表　和田遺跡　SK-464 出土遺物観察表……325
第 157 表　和田遺跡　SK-469 出土遺物観察表……325
第 158 表　和田遺跡　SK-477 出土遺物観察表……325
第 159 表　和田遺跡　SK-484a 出土遺物観察表 …325
第 160 表　和田遺跡　SK-485 出土遺物観察表……326
第 161 表　和田遺跡　SK-528 出土遺物観察表……326
第 162 表　和田遺跡　SK-529a 出土遺物観察表 …326
第 163 表　和田遺跡　SK-536 出土遺物観察表……326
第 164 表　和田遺跡　SK-538a 出土遺物観察表 …326
第 165 表　和田遺跡　SK-544A 出土遺物観察表 …327
第 166 表　和田遺跡　SK-550 出土遺物観察表……327

第 167 表　和田遺跡　SK-567 出土遺物観察表……327
第 168 表　和田遺跡　SK-570 出土遺物観察表……327
第 169 表　和田遺跡　SK-572 出土遺物観察表……327
第 170 表　和田遺跡　SK-582 出土遺物観察表……327
第 171 表　和田遺跡　SK-583 出土遺物観察表……328
第 172 表　和田遺跡　SK-588 出土遺物観察表……328
第 173 表　和田遺跡　SK-592 出土遺物観察表……328
第 174 表　和田遺跡　SK-594 出土遺物観察表……328
第 175 表　和田遺跡　SK-597 出土遺物観察表……328
第 176 表　和田遺跡　SK-613b 出土遺物観察表 …329
第 177 表　和田遺跡　SK-616 出土遺物観察表……329
第 178 表　和田遺跡　SK-620 出土遺物観察表……329
第 179 表　和田遺跡　SK-640 出土遺物観察表……329
第 180 表　和田遺跡　SK-642 出土遺物観察表……330
第 181 表　和田遺跡　SK-650 出土遺物観察表……330
第 182 表　和田遺跡　SK-656 出土遺物観察表……330
第 183 表　和田遺跡　SK-661 出土遺物観察表……330
第 184 表　和田遺跡　SK-673 出土遺物観察表……330
第 185 表　和田遺跡　SK-690 出土遺物観察表……330
第 186 表　和田遺跡　SK-694 出土遺物観察表……330
第 187 表　和田遺跡　SK-698 出土遺物観察表……331
第 188 表　和田遺跡　SK-735 出土遺物観察表……331
第 189 表　和田遺跡　SK-767 出土遺物観察表……332
第 190 表　和田遺跡　SK-768 出土遺物観察表……332
第 191 表　和田遺跡　SK-808 出土遺物観察表……333
第 192 表　和田遺跡　SK-809 出土遺物観察表……333
第 193 表　和田遺跡　SK-836・837 出土遺物
観察表 ……333
第 194 表　和田遺跡　SK-838B 出土遺物観察表 …333
第 195 表　和田遺跡　SK-845 出土遺物観察表……334
第 196 表　和田遺跡　SK-864 出土遺物観察表……334
第 197 表　和田遺跡　SK-866 出土遺物観察表……335
第 198 表　和田遺跡　SK-875 出土遺物観察表……335
第 199 表　和田遺跡　SK-879 出土遺物観察表……336
第 200 表　和田遺跡　SK-880 出土遺物観察表……336
第 201 表　和田遺跡　SK-911 出土遺物観察表……336
第 202 表　和田遺跡　SK-912 出土遺物観察表……336
第 203 表　和田遺跡　SK-946 出土遺物観察表……336
第 204 表　和田遺跡　SK-977 出土遺物観察表……336
第 205 表　和田遺跡　SX-17 出土遺物観察表 ……338
第 206 表　和田遺跡　SX-54 出土遺物観察表 ……341
第 207 表　和田遺跡　SX-205 出土遺物観察表……343
第 208 表　和田遺跡　SX-229 出土遺物観察表……345
第 209 表　和田遺跡　SX-230 出土遺物観察表……345
第 210 表　和田遺跡　SX-231 出土遺物観察表……347
第 211 表　和田遺跡　SX-232 出土遺物観察表……349
第 212 表　和田遺跡　SX-700 出土遺物観察表……352
第 213 表　和田遺跡　古代ピット一覧表 ……354
第 214 表　和田遺跡　時期不明ピット一覧表 ……355
第 215 表　和田遺跡　P-128 出土遺物観察表 ……370
第 216 表　和田遺跡　P-152 出土遺物観察表 ……370
第 217 表　和田遺跡　P-246 出土遺物観察表 ……370
第 218 表　和田遺跡　P-249 出土遺物観察表 ……370
第 219 表　和田遺跡　P-266 出土遺物観察表 ……370
第 220 表　和田遺跡　P-277 出土遺物観察表 ……370
第 221 表　和田遺跡　P-281 出土遺物観察表 ……370
第 222 表　和田遺跡　P-327 出土遺物観察表 ……370
第 223 表　和田遺跡　P-387 出土遺物観察表 ……370
第 224 表　和田遺跡　P-397b 出土遺物観察表……370
第 225 表　和田遺跡　P-412 出土遺物観察表 ……371
第 226 表　和田遺跡　P-413 出土遺物観察表 ……371
第 227 表　和田遺跡　P-415 出土遺物観察表 ……371
第 228 表　和田遺跡　P-418 出土遺物観察表 ……371
第 229 表　和田遺跡　P-429 出土遺物観察表 ……371
第 230 表　和田遺跡　P-457 出土遺物観察表 ……371
第 231 表　和田遺跡　P-460 出土遺物観察表 ……371
第 232 表　和田遺跡　P-462 出土遺物観察表 ……371
第 233 表　和田遺跡　P-491 出土遺物観察表 ……371
第 234 表　和田遺跡　P-494 出土遺物観察表 ……371
第 235 表　和田遺跡　P-496 出土遺物観察表 ……372
第 236 表　和田遺跡　P-503 出土遺物観察表 ……372
第 237 表　和田遺跡　P-510 出土遺物観察表 ……372
第 238 表　和田遺跡　P-532 出土遺物観察表 ……372
第 239 表　和田遺跡　P-575 出土遺物観察表 ……372
第 240 表　和田遺跡　P-610 出土遺物観察表 ……372
第 241 表　和田遺跡　P-612 出土遺物観察表 ……372
第 242 表　和田遺跡　P-623 出土遺物観察表 ……373
第 243 表　和田遺跡　P-625 出土遺物観察表 ……373

第 244 表　和田遺跡　P-649 出土遺物観察表 ……373
第 245 表　和田遺跡　P-696 出土遺物観察表 ……373
第 246 表　和田遺跡　P-803 出土遺物観察表 ……373
第 247 表　和田遺跡　P-804 出土遺物観察表 ……373
第 248 表　和田遺跡　P-823 出土遺物観察表 ……373
第 249 表　和田遺跡　P-918 出土遺物観察表 ……373
第 250 表　和田遺跡　P-952 出土遺物観察表 ……373
第 251 表　和田遺跡　遺物集中区 1 出土遺物観察表 ……376
第 252 表　和田遺跡　遺物集中区 2 出土遺物観察表 ……379
第 253 表　和田遺跡　遺構外出土遺物観察表 ……386
第 254 表　和田遺跡　木製品一覧表 ……389
第 255 表　和田遺跡　SB-79 出土遺物観察表 ……397
第 256 表　和田遺跡　SD-758 出土遺物観察表……399
第 257 表　和田遺跡　SK-16 出土遺物観察表 ……403
第 258 表　和田遺跡　SK-28 出土遺物観察表 ……403
第 259 表　和田遺跡　SK-554 出土遺物観察表……403
第 260 表　和田遺跡　SK-763 出土遺物観察表……403
第 261 表　和田遺跡　SK-849 出土遺物観察表……403
第 262 表　和田遺跡　SK-874 出土遺物観察表……404
第 263 表　和田遺跡　中・近世出土遺物観察表 …405
第 264 表　和田遺跡　SB-234 出土遺物観察表……409
第 265 表　和田遺跡　SB-508 出土遺物観察表……410
第 266 表　和田遺跡　SD-19 出土遺物観察表 ……413
第 267 表　和田遺跡　SK-24 遺物観察表 ……448
第 268 表　和田遺跡　SK-59 遺物観察表 ……448
第 269 表　和田遺跡　SK-335 遺物観察表……448
第 270 表　和田遺跡　SK-832 遺物観察表……448
第 271 表　和田遺跡　SK-833 遺物観察表……448
第 272 表　和田遺跡　SK-1070 遺物観察表 ……448
第 273 表　テフラ分析結果 ……452
第 274 表　放射性炭素年代測定結果 ……457
第 275 表　暦年較正結果 ……458
第 276 表　樹種同定結果 ……458
第 277 表　テフラ分析結果 ……462
第 278 表　放射性炭素年代測定結果 ……465
第 279 表　暦年較正結果 ……465
第 280 表　炭化材の樹種同定結果 ……466
第 281 表　柱材・礎板等の樹種同定結果 ……468
第 282 表　種実分析結果 ……468
第 283 表　樹種同定結果 ……472
第 284 表　遺構別樹種構成 ……472
第 285 表　表 1 ……475
第 286 表　表 2 ……475
第 287 表　和田遺跡　古代遺構の時期 ……494

図版目次

巻頭図版一
　和田遺跡調査区全景（東上空から）
　和田遺跡出土瑞花双鳳八稜鏡
巻頭図版二
　瑞花双鳳八稜鏡　三次元 CG 画像 (鏡背面)
　瑞花双鳳八稜鏡　三次元 CG 画像 (鏡面)
巻頭図版三
　瑞花双鳳八稜鏡　レントゲン画像
図版一　和田遺跡　航空写真
　遺跡全景 (東上空から)
　南西部〔Ⅰ区〕全景（南上空から）
図版二　和田遺跡　航空写真
　東部〔Ⅴ区〕全景（西上空から）
　南東部〔Ⅱ区〕全景（東から）
図版三　和田遺跡　航空写真
　東部〔Ⅵ区東半〕全景（西上空から）
　東部〔Ⅵ区西半〕全景（西上空から）
図版四　和田遺跡　航空写真
　西部〔Ⅶ区〕全景（南上空から）
　西部〔Ⅶ区南西部〕全景（南上空から）
図版五　和田遺跡　古代の遺構
　SI-5　完堀（西から）
　SI-5　カマド遺物出土状況（西から）
　SI-5　完堀（西から）
　SI-14・35　土層断面（南から）
　SI-14　カマド遺物出土状況（西から）

SI-15　全景（東から）
SI-18　完堀（南から）
SI-18　北カマド完堀（南から）
図版六　和田遺跡　古代の遺構
SI-18　西カマド遺物出土状況（東から）
SI-25　土層断面（西から）
SI-31　カマド完堀（西から）
SI-35　北東隅 遺物出土状況（南から）
SI-35　カマド土層断面（東から）
SI-35　カマド遺物出土状況（南から）
SI-36・SK-37・SD-38　完堀（西から）
SI-36　完堀（東から）
図版七　和田遺跡　古代の遺構
SI-36　カマド遺物出土状況（西から）
SI-36　カマド内礫出土状況（西から）
SI-36　カマド完掘（西から）
SI-42　完堀（北西から）
SI-42　カマド完堀（西から）
SI-43　完堀（南西から）
SI-43　カマド完掘（南から）
SI-45　完堀（南西から）
図版八　和田遺跡　古代の遺構
SI-45　カマド遺物出土状況（南から）
SI-61　完堀（東から）
SI-60・61・62　遺物出土状況（南から）
SI-61　南西隅 遺物出土状況（南東から）
SI-61　西壁付近 遺物出土状況（南東から）
SI-61　P-3 完掘（南から）
SI-61　カマド完掘（南から）
SI-62　土層断面（南から）
図版九　和田遺跡　古代の遺構
SI-62　カマド遺物出土状況（南から）
SI-62　カマド遺物出土状況（東から）
SI-63　遺物出土状況（南東から）
SI-63　カマド完掘（北から）
SI-68　完掘（北から）
SI-68　カマド遺物出土状況（南から）
SI-70・77　完掘（南から）
SI-70　カマド遺物出土状況（南から）
図版一〇　和田遺跡　古代の遺構
SI-77　カマド完掘（西から）
SI-77　カマド土層断面（北から）
SI-87　遺物出土状況（南から）
SI-88　完掘（南から）
SI-88　カマド完掘（南から）
SI-89　完掘（東から）
SI-89　遺物出土状況（西から）
SI-89　カマド完掘（西から）
図版一一　和田遺跡　古代の遺構
SI-90　完掘（南から）
SI-90　遺物出土状況（南から）
SI-90　カマド完掘（南から）
SI-91　完掘（南から）
SI-91　北カマド完掘（東から）
SI-91　東カマド完掘（西から）
SI-92　完掘（南から）
SI-92　カマド遺物出土状況（南から）
図版一二　和田遺跡　古代の遺構
SI-93　完掘（南から）
SI-93　カマド完掘（南から）
SI-194　遺物出土状況（南から）
SI-194　カマド遺物出土状況（南から）
SI-194　遺物出土状況（東から）
SI-194　南西隅 遺物出土状況（南から）
SI-194　須恵器高台付坏出土状況（南から）
SI-195　完掘（南から）
図版一三　和田遺跡　古代の遺構
SI-195　カマド完掘（南から）
SI-196　完掘（南から）
SI-196　遺物出土状況（南から）
SI-196　P-4 土層断面（南から）
SI-196　カマド完掘（南から）
SI-197　完掘（南から）
SI-197　遺物出土状況（南から）
SI-197　北東隅 遺物出土状況（南から）
図版一四　和田遺跡　古代の遺構
SI-197　カマド遺物出土状況（南から）
SI-198　完掘（南から）

SI-198　遺物出土状況（南から）
SI-198　P-1 完掘（南から）
SI-198　カマド完掘（南から）
SI-199　完掘（南から）
SI-199　カマド完掘（南から）
SI-200b・SK-200a　完掘（南から）
図版一五　和田遺跡　古代の遺構
SI-200b　土層断面（南から）
SI-200b　カマド完掘（南から）
SI-201　完掘（西から）
SI-201　カマド完掘（西から）
SI-201　P-1 遺物出土状況（西から）
SI-202　完掘（南から）
SI-202　遺物出土状況（南から）
SI-202　北東隅 遺物出土状況（西から）
図版一六　和田遺跡　古代の遺構
SI-202　カマド遺物出土状況（南から）
SI-203　完掘（南から）
SI-203　北東隅 遺物出土状況（南から）
SI-204　完掘（南から）
SI-204　北東隅 赤変部分（南西から）
SI-207　完掘（南東から）
SI-207　作業風景（南東から）
SI-207 カマド、SK-666 完掘（東から）
図版一七　和田遺跡　古代の遺構
SI-208　完掘（南から）
SI-208　カマド完掘（南から）
SI-209a　完掘（南から）
SI-209a　北東隅 遺物出土状況（南から）
SI-209a　P-7 遺物出土状況（南から）
SI-209a・209b　完掘（柱穴部に人・南から）
SI-209c　完掘（南から）
SI-209c　P-11 土層断面（南から）
図版一八　和田遺跡　古代の遺構
SI-210　完掘（東から）
SI-210　カマド遺物出土状況（南から）
SI-212　完掘（南から）
SI-212　遺物出土状況（南から）
SI-213　完掘（南から）
SI-213　カマド遺物出土状況（南から）
SI-214　完掘（南から）
SI-214　カマド完掘（南から）
図版一九　和田遺跡　古代の遺構
SI-215　完掘（南から）
SI-216　遺物出土状況（東から）
SI-217　完掘（南から）
SI-217　カマド遺物出土状況（南から）
SI-217　カマド袖部内遺物出土状況（南から）
SI-218　遺物出土状況（東から）
SI-218　カマド完掘（東から）
SI-219　完掘（南から）
図版二〇　和田遺跡　古代の遺構
SI-219　カマド完掘（南から）
SI-220　完掘（南から）
SI-220　カマド遺物出土状況（南から）
SI-220　P-1 遺物出土状況（南から）
SI-221　完掘（南から）
SI-221　カマド遺物出土状況（南から）
SI-225　完掘（西から）
SI-226　遺物出土状況（南から）
図版二一　和田遺跡　古代の遺構
SI-227　遺物出土状況（南から）
SI-228　完掘（南から）
SI-228　作業風景（東から）
SI-403　完掘（南から）
SI-403　カマド完掘（南から）
SI-631　完掘（南から）
SI-632　完掘（南から）
SI-632　カマド遺物出土状況（南から）
図版二二　和田遺跡　古代の遺構
SI-670　完掘（南から）
SI-670　カマド完掘（南から）
SI-727　完掘（北西から）
SI-727　北カマド遺物出土状況（西から）
SI-727　南カマド遺物出土状況（北から）
SI-727　南カマド礫出土状況（北西から）
SI-727　北・南カマド礫出土状況（北西から）
SI-727　北・南カマド堀方 完掘（北西から）

図版二三　和田遺跡　古代の遺構
SI-728　完掘（西から）
SI-728　カマド遺物出土状況（西から）
SI-729　完掘（南から）
SI-729　カマド完掘（南から）
SI-730　完掘（西から）
SI-730　カマド完掘（西から）
SI-731　完掘（南東から）
SI-731　カマド遺物出土状況（南東から）
図版二四　和田遺跡　古代の遺構
SI-732　遺物出土状況（南から）
SI-732　P-1 完掘（北から）
SI-733　完掘（西から）
SI-733　カマド遺物出土状況（西から）
SI-733　カマド遺物出土状況（西から）
SI-734　完掘（南東から）
SI-736a・736b　完掘（南から）
SI-736a　カマド袖部内遺物出土状況（西から）
図版二五　和田遺跡　古代の遺構
SI-737　完掘（南から）
SI-737　カマド遺物出土状況（南から）
SI-741　完掘（南から）
SI-741　カマド完掘（南西から）
SI-742　完掘（南から）
SI-742　カマド完掘（南から）
SI-743　完掘（南から）
SI-743　遺物出土状況（南から）
図版二六　和田遺跡　古代の遺構
SI-743　西部遺物出土状況（北西から）
SI-743　西カマド遺物出土状況（南から）
SI-743　東カマド遺物出土状況（南から）
SI-743・744　完掘（東から）
SI-744 P-4　完掘（南から）
SI-745　完掘（南から）
SI-745　カマド遺物出土状況（南から）
SI-747　完掘（南から）
図版二七　和田遺跡　古代の遺構
SI-747　北西カマド遺物出土状況（南から）
SI-748　完掘（南から）
SI-748　P-1 遺物出土状況（北から）
SI-748　カマド完掘（南から）
SI-749　完掘（西から）
SI-749　カマド遺物出土状況（西から）
SI-750　完掘（南から）
SI-750　遺物出土状況（南から）
図版二八　和田遺跡　古代の遺構
SI-750　カマド完掘（南から）
SI-751　完掘（南から）
SI-752　完掘（南から）
SI-752　カマド遺物出土状況（南から）
SI － 753　完掘（南から）
SI － 753　カマド完掘（南から）
SI-754　完掘（南から）
SI-754　遺物出土状況（南から）
図版二九　和田遺跡　古代の遺構
SI-754　西カマド完掘（南から）
SI-754　P-1 遺物出土状況（南から）
SI-755　完掘（南から）
SI-755　カマド完掘（南東から）
SI-756　完掘（南から）
SI-756　カマド完掘（南から）
SI-757　完掘（南から）
SI-757　カマド遺物出土状況（南から）
図版三〇　和田遺跡　古代の遺構
SI-900・901　完掘（南から）
SI-900　カマド遺物出土状況（南から）
SI-901　完掘（南から）
SI-901　カマド遺物出土状況（南西から）
SI-902　完掘（西から）
SI-902　遺物出土状況（西から）
SI-902　カマド土層断面（南から）
SI-902　カマド遺物出土状況（西から）
図版三一　和田遺跡　古代の遺構
SI-903　堀方完掘（南から）
SI-904　完掘（南から）
SI-905　完掘（南から）
SI-905　カマド完掘（南から）
SI-919　完掘（南から）

SI-919　遺物出土状況（南から）
SI-919　南東隅 遺物出土状況（北東から）
SI-919　カマド遺物出土状況（南から）
図版三二　和田遺跡　古代の遺構
SB-233　完掘（南から）
SB-235　完掘（南から）
SB-235　完掘（南から）
SB-235　P-1 柱痕確認状況（南から）
SB-235　P-1 柱材出土状況（南から）
SB-235　P-1 柱材出土状況（南東から）
SB-235　P-1 礎板出土状況（南東から）
SB-235　P-3 礎板出土状況（南から）
図版三三　和田遺跡　古代の遺構
SB-235　P-12 礎板出土状況（西から）
SB-951　P-350 柱材出土状況（北から）
SE-549・SK-693　完掘（南東から）
SE-549　完掘（南西から）
SD-38　完掘（南東から）
SD-78　A-A’ 土層断面（南から）
SD-78　B-B’ 土層断面（南から）
SD-238　完掘（東から）
図版三四　和田遺跡　古代の遺構
SD-238　A-A’ 土層断面（東から）
SD-240　完掘（東から）
SD-240　土層断面（東から）
SK-643b・P-643a　完掘（東から）
SK-643b・P-643a　土層断面（南から）
SK-643b　完掘（東から）
SK-738・739　土層断面（南から）
SK-738・739　土層断面（東から）
図版三五　和田遺跡　古代の遺構
SK-738　煙道部半截（南から）
SK-738　煙道部土層断面（北東から）
SK-738　煙道部土層断面（北東から）
SK-738　煙道完掘（南東から）
SK-738　煙道完掘（南から）
SK-835　完掘（東から）
SK-835　土層断面（南東から）
SK-835　土層断面（南から）
図版三六　和田遺跡　古代の遺構
SK-27　完掘（南東から）
SK-37　完掘（南西から）
SK-49・50　完掘（南から）
SK-53　完掘（北東から）
SK-97・98　遺物出土状況（南から）
SK-222　遺物出土状況、SK-452　完掘（東から）
SK-250　遺物出土状況（南東から）
SK-256　土層断面（南から）
図版三七　和田遺跡　古代の遺構
SK-267　完掘（南から）
SK-312　完掘（南から）
SK-333　遺物出土状況（南から）
SK-363　遺物出土状況（東から）
SK-694　遺物出土状況（北から）
SK-768　遺物出土状況（東から）
SK-864　遺物出土状況（北東から）
SK-946　遺物出土状況（西から）
図版三八　和田遺跡　古代の遺構
SX-17　完掘（北から）
SX-17　遺物出土状況（西から）
SX-54　完掘（南西から）
SX-205　完掘（南から）
SX-205　南北土層断面（東から）
SX-229・P-958・P-959　完掘（南から）
SX-230　完掘（南から）
SX-231・P-952 ～ 957　遺物出土状況（南から）
図版三九　和田遺跡　古代の遺構
SX-232・P-959　完掘（南から）
SX-232　遺物出土状況（南から）
SX-232　遺物出土状況（南から）
SX-232　遺物出土状況（北西から）
SX-232　遺物出土状況（南東から）
SX-700　完掘（南から）
P-277　土層断面（断ち割り・東から）
P-277　柱材出土状況（東から）
図版四〇　和田遺跡　古代の遺構
P-429　遺物出土状況（東から）
P-491　遺物出土状況（南西から）

P-496　土層断面（西から）
P-496　柱材出土状況（西から）
P-503　完掘（南から）
P-510　土層断面（東から）
P-510　柱材出土状況（東から）
P-610　柱材出土状況（南から）
図版四一　和田遺跡　古代、中・近世の遺構
P-612　遺物出土状況（南東から）
P-625　柱材出土状況（南東から）
P-625・635・803・804・815　完掘（南東から）
P-803　柱材出土状況（北西から）
遺物集中区 1　遺物出土状況（南東から）
遺物集中区 2　遺物出土状況（東から）
八稜鏡出土状況（南から）
SB-79　完掘（南から）
図版四二　和田遺跡　中・近世の遺構
SB-79　P-8 遺物出土状況（東から）
SD-758　完掘（東から）
SD-758　D-D’ 土層断面（東から）
SK-28　完掘（北から）
SK-763　遺物出土状況（南東から）
SK-763　柱材出土状況（北西から）
SK-849　完掘（東から）
SK-849　遺物出土状況（北西から）
図版四三　和田遺跡　中・近世、時期不明の遺構
SK-874　完掘（西から）
SB-100　完掘（南から）
SB-101　完掘（東から）
SB-234　完掘（東から）
SB-234　完掘（柱穴に人・南から）
SB-234　P-5 柱材出土状況（南から）
SB-508　完掘（東から）
SB-508　P-2 完掘（東から）
図版四四　和田遺跡　時期不明の遺構
SB-508　P-3 土層断面（南から）
SB-508　P-3 柱材出土状況（北東から）
SB-960　完掘（南から）
SB-961　完掘（南西から）
SD-4　完掘（北西から）
SD-19　F-F’ 土層断面（東から）
SD-21　完掘（南から）
SD-22　完掘（東から）
図版四五　和田遺跡　時期不明の遺構
SD-239　完掘（南から）
SD-242　完掘（東から）
SD-759　完掘（東から）
SD-865a・SK-738・739・864・866　遺物出土状況（東から）
SK-364・395・399・423・435　完掘（北から）
SK-511・637・639・640　完掘（南東から）
P-623　柱材出土状況（西から）
P-804　柱材出土状況（南から）
図版四六　和田遺跡　縄文・弥生時代の遺物
縄文時代の土器　1 ～ 5
縄文時代の石器　6 ～ 13
弥生時代の土器　1 ～ 4
図版四七　和田遺跡　古代の遺物
SI-202・217・遺物集中区 2
図版四八　和田遺跡　古代の遺物
SI-14・36・45・61・62・63・68・70・87
図版四九　和田遺跡　古代の遺物
SI-90・194・195・196
図版五〇　和田遺跡　古代の遺物
SI-197・198・201・202
図版五一　和田遺跡　古代の遺物
SI-202・208・209a・210・213・215
図版五二　和田遺跡　古代の遺物
SI-213・217・218・220・221・228・403
図版五三　和田遺跡　古代の遺物
SI-403・631・632・727・728・731・732・733・736a
図版五四　和田遺跡　古代の遺構
SI-733・742・743
図版五五　和田遺跡　古代の遺物
SI-743・745・747・748・749・752・754・755・757・900・903
図版五六　和田遺跡　古代の遺物
SI-750・756・901・903・919

図版五七　和田遺跡　古代の遺物
SI-919・SE-549・SD-238・SK-37・50・53・97・98・222・363・738・845
図版五八　和田遺跡　古代の遺物
SK-845・864・866・911・SX-17・54
図版五九　和田遺跡　古代の遺物
SX-54・231・232・700・P-510・823・遺構外
図版六〇　和田遺跡　古代の遺物
遺物集中区 1・遺物集中区 2・遺構外
図版六一　和田遺跡　古代の遺物（墨書土器）
SI-91・209a・SB-235・SE-549・SK-94・98・P-510・SX-229・SD-238・遺物集中区 1・遺構外
図版六二　和田遺跡　古代の遺物（青銅製品）
遺構外
図版六三　和田遺跡　古代の遺物（鉄製品）中・近世の遺物
SI-207・632・SK-16・849・874・遺構外・X 線写真
図版六四　和田遺跡　中・近世の遺物、遺物（木製品）
SK-849・SI-754・SB-235・遺構外
図版六五　和田遺跡　遺物（木製品）
SB-235
図版六六　和田遺跡　遺物（木製品）
SB-235・951・P-277・496
図版六七　和田遺跡　遺物（木製品）
P-387・510・610・803・SB-234
図版六八　和田遺跡　遺物（木製品）
SB-508・SK-335・832・833・P-397b・623・625・804・918・952

第 1 章　調査の経過

第 1 節　調査に至る経緯

北関東自動車道（路線名「北関東自動車道高崎水戸線」）は、群馬県高崎市から茨城県ひたちなか市に至る延長約 150 ㎞の国土開発幹線自動車道である。群馬、栃木、茨城 3 県の主要都市並びに国際港常陸那珂港を結ぶとともに、上信越自動車道や中部横断自動車道と一体となり、東京から 100 ㎞～ 150 ㎞圏を環状に結ぶ「関東環状道路」を形成する高速道路である。関東地方における高速道路網の強化により各主要都市の交流の促進や地域の総合的発展の基盤施設としての役割が期待されている。

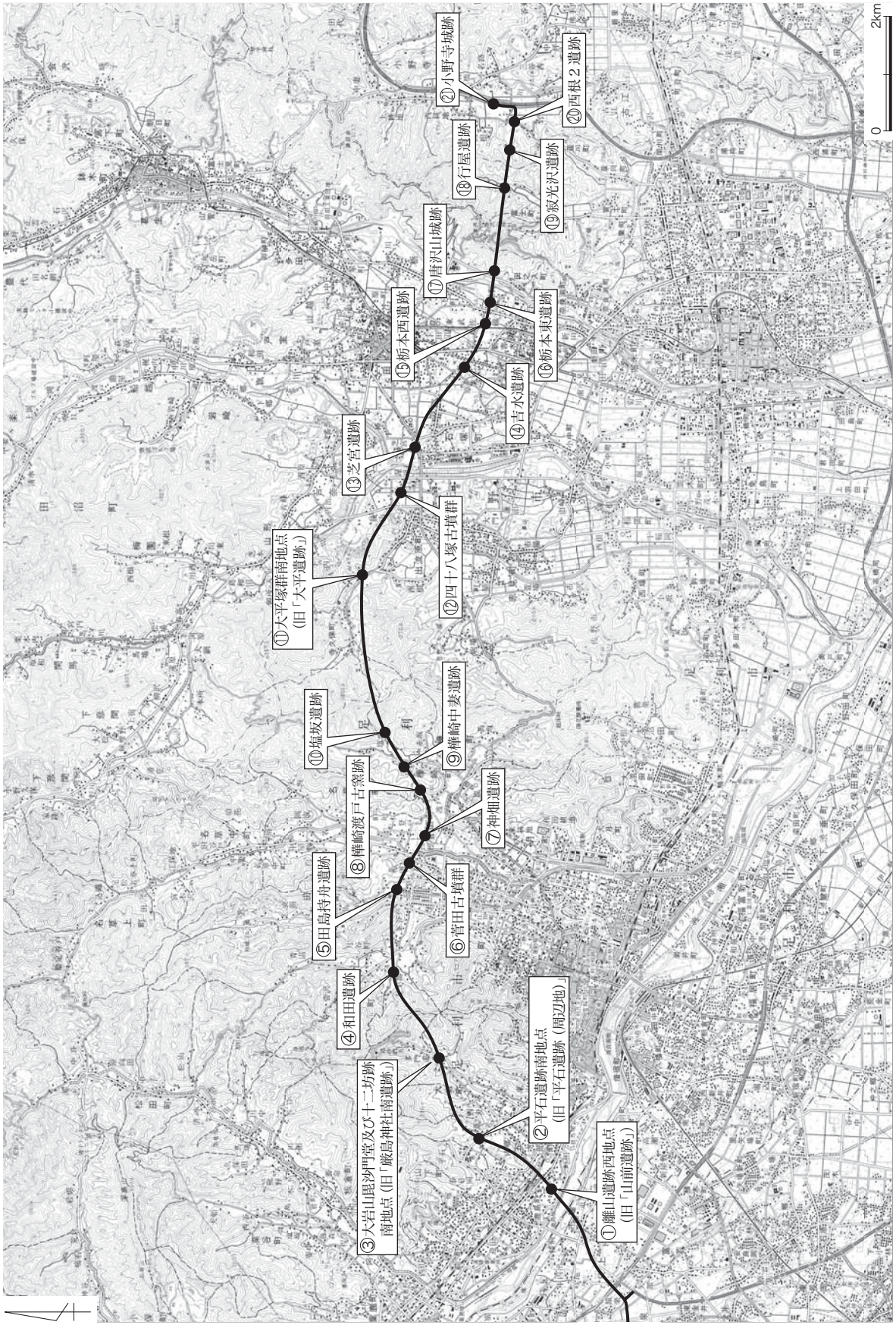
栃木県内は足利市、佐野市、岩舟町、栃木市、壬生町、下野市、宇都宮市、上三川町、真岡市の 6 市 3 町、約 58 ㎞を通過する。このうち、東北自動車道（栃木都賀 J.C.T）から新 4 号国道（宇都宮上三川 I.C）までの約 19 ㎞は優先着工区間とされ、平成 12 年 7 月 27 日に開通している。次いで、宇都宮上三川 I.C から真岡 I.C までの約 8 ㎞が平成 20 年 3 月 15 日に、真岡 I.C から桜川筑西 I.C までの約 14 ㎞が平成 20 年 12 月 20 日に、東北自動車道（岩舟 J.C.T）から佐野田沼 I.C までの約 5 ㎞が平成 22 年 4 月 17 日に、佐野田沼 I.C から太田桐生 I.C までの約 18 ㎞が平成 23 年 3 月 19 日にそれぞれ開通している。

東北自動車道重複区間及び優先着工区間の両側に位置する上三川～旧二宮間、足利～岩舟間においては平成 3 年 2 月 8 日都市計画決定、平成 3 年 12 月 20 日基本計画決定、平成 8 年 12 月 27 日整備計画決定をへて、群馬県境～足利は平成 9 年 12 月 25 日、真岡～茨城県境は平成 10 年 4 月 8 日にそれぞれ施行命令が出されている。

日本道路公団東京第一建設局（当時、以下公団）長は施行命令を受け、平成 9 年 7 月 1 日、栃木県土木部高速道路対策室（当時、以下県高対室）を経由し栃木県教育委員会教育長（以下県教育長）あて路線内の埋蔵文化財について照会した。そこで栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成 11 年度より県文化財課）は、平成 9 年 7 月 8 日から 18 日にかけて所在調査を実施した。この調査により周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に上三川～旧二宮間で 14 箇所、足利～岩舟間で 18 箇所の調査必要箇所が確認された。結果は平成 10 年 3 月 18 日付で公団局長あて回答され、あわせて県高対室長あて報告された。

これら調査必要箇所の取り扱いについて、県文化課、公団、県高対室による協議の結果、工事の影響を免れない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。そのため、平成 13 年 1 月 15 日、公団局長、県教育長及び発掘主体者の財団法人とちぎ生涯学習文化財団（以下財団）理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（以下協定書）が締結された。この協定書において、上記の 32 箇所について現地発掘調査期間は平成 18 年 3 月まで、整理作業・報告書作成期間は平成 19 年 3 月まで、費用概算額は 2,167,967,000 円とされた。また、平成 12 年度は上三川～旧二宮間の柳林遺跡、西物井遺跡、峰高前遺跡について調査に着手することとなり、協定書に基づき公団局長及び財団理事長間で「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、北関東自動車道上三川～旧二宮間及び足利～岩舟間の発掘調査が開始された。

その後、財団は文化財課の指導にもとづき発掘調査業務を実施してきたところ、工事予定の変更や新たな埋蔵文化財包蔵地の確認等により協定書中全体実施計画等の見直しが必要となった。そのため、平成 18 年 3 月 29 日付、東日本高速道路株式会社（平成 17 年 10 月 1 日、日本道路公団の民営化に伴い設立：以下東日本高速（株））関東支社宇都宮工事事務所長、県教育長及び財団理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する変更協定書（第 1 回変更）」が締結された。この協定においては新たに 4 箇所を加えた 36 箇所（壬生 P.A 新規建設に伴う旧都賀～上三川間、谷向遺跡を



第１図　北関東自動車道（足利～岩舟間）埋蔵文化財発掘調査箇所図（1/100,000）

含む）について、現地発掘調査は平成 23 年３月まで、また整理作業・報告書作成は平成 24 年３月までの期間、費用概算額は 3,302,692,000 円と変更された。

平成 19 年３月には、上三川～旧二宮間における 14 箇所の現地発掘調査が総て終了し、平成 20 年３月までに足利～岩舟間及び旧都賀～上三川間における 22 箇所の現地発掘調査も終了した。整理作業・報告書作成作業においては、総ての遺跡について平成 24 年３月に報告書を刊行し、これをもって北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の全作業が終了となる。なお、調査に係る費用の総額は 2,824,295,250 円である。

和田遺跡は足利市月谷町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地（県遺跡番号 4908）で、平成 16 年度本発掘調査・確認調査、平成 17 ～ 18 年度本発掘調査、平成 22 年度整理作業、平成 23 年度整理作業・報告書作成を実施し、このたび報告書上梓のはこびとなったものである。

第１表　北関東自動車道（足利～岩舟間）埋蔵文化財発掘調査箇所一覧表

No.	遺跡名・調査箇所名称	所在地	当初調査対象面積（㎡）	調査区分	調査面積（㎡）	遺跡の概要
1	離山遺跡西地点	足利市鹿島町	4,300	試掘	480	平成 14 年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「山前遺跡」
2	平石遺跡南地点	足利市山下町	11,700	試掘	365	平成 17 年試掘調査。遺構・遺物なし。旧「平石遺跡（周辺地）」
3	大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点	足利市大岩町	19,845	試掘	910	平成 17 年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「厳島神社南遺跡」
4	和田遺跡（23 年度報告）	足利市月谷町	29,320	確認	840	平成 16 年度確認調査。
				発掘	28,000	平成 16 ～ 18 年度本調査。古墳～平安時代の竪穴住居跡 94 軒、掘立柱建物跡 10 棟、溝跡 14 条、土坑 310 基。
5	田島持舟遺跡（22 年度報告）	足利市田島町	15,800	試掘・確認	1,396	平成 16 年度試掘・確認調査。
				発掘	19,750	平成 16 ～ 18・21 年度本調査。弥生時代の住居跡 3 軒、古墳時代の住居跡 43 軒、古代の住居跡 17 軒、円墳 1 基ほか
6	菅田古墳群（23 年度報告）	足利市菅田町	12,000	発掘	11,300	平成 17 ～ 18 年度本調査。古墳時代の円墳 9 基 前方後円墳 1 基、箱式石棺 2 基、土坑墓 1 基。
7	神畑遺跡（23 年度報告）	足利市菅田町	8,030	試掘	90	平成 17 年度遺跡隣接地試掘調査。
				確認	1,037	平成 15 年度確認調査。
				発掘	8,030	平成 15 ～ 16 年度本調査。縄文時代後・晩期の住居跡 2 軒、土坑 2 基、古墳・平安時代の溝跡 2 条ほか。
8	樺崎渡戸古窯跡（23 年度報告）	足利市樺崎町	2,900	試掘・確認	160	平成 17 年度試掘・確認調査。旧「渡戸遺跡」
				発掘	2,900	平成 18 年度本調査。古墳時代の須恵器窯跡灰原。
9	樺崎中妻遺跡（23 年度報告）	足利市樺崎町	7,000	試掘	310	平成 17 年試掘調査。旧「中妻遺跡」（仮称）
				発掘	7,000	平成 18 年度本調査。中世の竪穴状遺構 1 基、土坑 6 基。
10	塩坂遺跡	足利市樺崎町	7,350	確認	170	平成 17 年度確認調査。遺構・遺物なし。
11	大平塚群南地点	佐野市寺久保町	7,400	試掘	125	平成 19 年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「大平遺跡」
12	四十八塚古墳群（22 年度報告）	佐野市出流原町	30,560	確認	4,320	平成 17 年度確認調査。
				発掘	20,200	平成 17 ～ 19 年度本調査。古墳時代後期の円墳 15 基。中世土坑群、溝跡。
13	芝宮遺跡	佐野市戸奈良町	8,200	試掘	634	平成 15 年度試掘調査。遺構・遺物なし。
14	吉水遺跡	佐野市吉水町	5,500	試掘	500	平成 14 年度試掘調査。遺構なし。
15	栃本西遺跡（23 年度報告）	佐野市吉水町	12,400	試掘	821	平成 15 年度試掘調査。
				発掘	9,325	平成 17 年度本調査。 平安時代住居跡 3 軒・溝 1 条・土坑 5 基。
16	栃本東遺跡	佐野市栃本町	10,600	試掘	970	平成 17 年度試掘調査。栃本西遺跡の隣地。遺構なし。
17	唐沢山城跡（23 年度報告）	佐野市栃本町	9,000	発掘	5,800	平成 18 年度本調査。城に付随する中世の竪堀。
18	行屋遺跡	佐野市富士町	2,100	確認	260	平成 17 年度確認調査。遺構・遺物なし。
19	寂光沢窯跡（22 年度報告）	下都賀郡岩舟町小野寺	12,415	試掘	1,000	平成 15 ～ 16 年度試掘調査。旧「寂光沢遺跡」
				発掘	12,415	平成 16 ～ 17 年度本調査。奈良～平安時代の須恵器窯跡 3 基。窯跡に付随する溝跡。
20	西根２遺跡（20 年度報告）	下都賀郡岩舟町小野寺	4,620	確認	186	平成 16 年度確認調査。
				発掘	4,620	平成 17 年度本調査。古墳～平安時代の竪穴住居跡 7 軒。古代～中世の溝跡 16 条、井戸跡 23 基ほか。
21	小野寺城跡（20 年度報告）	下都賀郡岩舟町小野寺	4,500	確認・発掘	793	平成 15 年度確認調査時遺構精査。中世の堀 1 条。

※　試掘・確認調査のみの箇所については、23 年度に一括して報告

※　1～3・8・9・11 の各遺跡については、当該市教育委員会との協議により名称を変更した。

調査組織

平成 16 年度

埋蔵文化財センター所長　篠原　洋
管理部長　大田原　博
管理部管理担当　主任　桜井　恭子
主幹兼調査部長兼大規模調査班班長　橋本　澄朗
北関東道路調査担当係長　藤田　典夫
主査　芹澤　清八　主査　塚本　師也　主査　西田　知生
主査　中村　享史　主任　池田　敏宏　主任　田代　己佳
主任　横田　桂　主任　吉田　哲　技師　合田恵美子
嘱託調査員　玉橋さやか　平山　紋子　鈴木　芳英

平成 17 年度

埋蔵文化財センター所長　篠原　洋
管理部長　大田原　博
管理部管理担当　主任　桜井　恭子
主幹兼調査部長　橋本　澄朗
大規模調査班班長兼北関東道路調査担当リーダー　川原　由典
主査　芹澤　清八　主査　椎名　聡　主査　仲山　英樹
主査　西田　知生　主査　中村　享史　主査　篠原　浩恵
主査　田代　己佳　主任　池田　敏宏　主任　江原　英
主任　横田　桂　主任　吉田　哲　主任　宮田　宣浩
主任　合田恵美子
嘱託調査員　玉橋さやか　鈴木　芳英
調査補助員　平山　紋子　村田　沙織

平成 18 年度

埋蔵文化財センター所長　篠原　洋
管理部長　大田原　博
管理部管理担当　主任　桜井　恭子
調査部長　川原　由典
北関東道路調査担当副主幹　初山　孝行
主査　進藤　敏雄　主査　椎名　聡　主査　仲山　英樹
主査　中村　享史　主査　伊藤　信二　主査　高野　欽哉
主査　田代　己佳　主査　江原　英　主査　磯　寿人
主任　横田　桂　主任　今平　昌子　主任　亀田　幸久
主任　吉田　哲　主任　宮田　宣浩　主任　合田恵美子
主事　峰崎　武昭
嘱託調査員　田村　雅樹　玉橋さやか　鈴木　芳英
調査補助員　長濱　健一　村田　沙織

平成 22 年度

埋蔵文化財センター所長　会沢　登
管理普及部長　川田　政通
管理部管理担当　主査　桜井　恭子
調査部長　初山　孝行
整理第二担当副主幹　芹澤　清八
係長　進藤　敏雄　係長　津野　仁　係長　仲山　英樹
主査　篠原　浩恵　主査　谷中　隆

平成 23 年度

埋蔵文化財センター所長　会沢　登
管理普及部長兼調査部長　初山　孝行
管理部管理担当　係長　桜井　恭子
整理第二担当副主幹　芹澤　清八
係長　進藤　敏雄　主査　谷中　隆　主任　合田　恵美子
嘱託調査員　阿部　茂　村田　沙織　田中　裕子

第２節　調査の経過

（１）　確認調査

確認調査は平成 16 年６月 11 日～７月５日に行った。調査対象範囲は山麓に広がる扇状地形部分であり、調査前は主に水田などの耕作地であった。試掘トレンチは幅２ｍで調査区内に 15 ヶ所設置し、遺構や遺物の分布や土層堆積状況、遺構確認面の位置などを確認した。確認調査面積は 840 ㎡であり、調査対象地区面積の約２％に相当する。

各試掘トレンチの土層は、基本的に表土･砂礫層･シルト層の順に堆積しており、関東ローム層は見られない。本遺跡は西から東に向かって低くなる斜面上にあり、山地からの湧水を集める小河川によって形成された粘土や砂礫層で土層が形成されるという扇状地独特の様相を呈している。

確認調査の結果、古墳時代から平安時代の集落跡と見られる遺構・遺物が確認された。調査区内北東部にあたる３・４トレンチ、東部の５トレンチ、西側の７～９トレンチからは浅間Ｂ軽石と見られる砂層を検出したほか、古墳時代から平安時代の土器や瓦が出土した。３トレンチでは古代の瓦が数点、７トレンチでは須恵器片が集中して出土している。出土遺物から、近隣にある古代窯跡の製品が遺跡内に搬入されていることが推定された。南部の６・11 トレンチは島状にやや高い部分に設定されたものだが、ここは前述のような砂層はなく、地表下 20 ～ 30cm でシルト質粘土や礫が堆積する遺構確認面が認められる。６トレンチでは竪穴住居跡のほか溝や土坑が確認でき、いくつかの遺構からは古墳時代の土師器が出土した。11 トレンチでは、東カマドを有して平安時代の土器を持つ竪穴住居跡が確認された。

調査の結果、西端の山麓部分を除く対象地区中央～東端の範囲において調査が必要になることを想定できたため、この結果を基に本調査の実施に至ることとなった。

（２）　本調査

本調査は平成 16 年度～ 18 年度に実施した。高速道路建設工事の工程にあわせて調査を終了させ引き渡す必要があったため、工事範囲や引渡時期等から調査区をⅠ～Ⅷ区に区分して調査を行った。

平成 16 年度の本調査は８月９日～３月 31 日で、年度前半に実施した確認調査の成果に基づき、先行工事区間である側道・用水路部分 10,200 ㎡を発掘した。調査区ではⅠ区～Ⅴ区に相当する。発掘調査準備ののち調査区を設定し、Ⅰ区から重機による表土除去作業と人力による遺構確認作業を開始し、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区へと順次確認作業を進めていった。 調査の結果、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡 26 軒・掘立柱建物跡３棟・溝状遺構６条・土坑 143 基等を確認した。出土した遺物は土師器・須恵器・瓦片・古銭等で収納箱 20 箱分である。南部のⅠ区東部と南東部のⅡ区、東部のⅤ区西半では遺構・遺物とも多数確認されたため、これから調査を実施する隣接地区では遺構が集中することを想定して調査すべきことが判明した。中央北部に位置するⅢ区では遺構、遺物とも確認できなかった。Ⅳ区東半で確認したのは溝１条のみであり、ここが遺跡の東限とみることができる。なお、Ⅳ区中央部に堆積していた砂層については理化学分析を実施し、平安時代に降下した浅間Ｂ軽石であることが確認された。

平成 17 年度は、11,600 ｍの発掘調査を実施した。調査区は東寄りのⅥ区と中央部のⅦ区である。４月～５月に重機による表土除去とともに発掘作業員による遺構確認作業を行い、その後各遺構の調査を実施して

いった。調査の結果、調査区内でもやや高い場所を中心に古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴住居 74 軒・掘立柱建物跡３棟・溝状遺構８条・土坑 571 基等を確認できた。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦・金属製品・木製品などで、整理箱約 50 箱分である。湧水が豊富なためか木製品が残存する例が多いのが特徴的で、Ⅵ区で確認された間尺 2.1 mの３間×３間の掘立柱建物跡 SB-235 では、12 基の柱穴のうち半数以上から柱材や柱材の下に敷かれた礎板などが発見された。このほか同地区では、浅間Ｂ軽石と考えられる砂状の覆土で埋まった竪穴住居跡が確認された他、遺構には伴わないが平安時代の鏡である八稜鏡も出土している。なお、８月 26 日には地元住民を対象に現地説明会を行い、130 名の参加者があった。

平成 18 年度の本調査は４月１日～８月 31 日までで、4,800 ㎡の発掘調査を実施した。地区は調査区内中央部のⅦ区と西端のⅧ区である。ただし、Ⅷ区では遺構・遺物とも確認されていない。Ⅶ区では竪穴住居跡 30 点、溝状遺構２条、土坑 105 基が確認され、遺物は整理箱約 20 箱分であった。地区内北部では、Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区などでみられたものと同様の砂の堆積があり、理化学分析の結果浅間Ｂ軽石であることが確認されている。Ⅶ区の調査をもって、発掘対象地区全ての調査が完了した。遺跡全体として竪穴住居跡 94 軒、掘立柱建物跡 10 棟という、この地域では類を見ない大規模な集落遺跡となった。

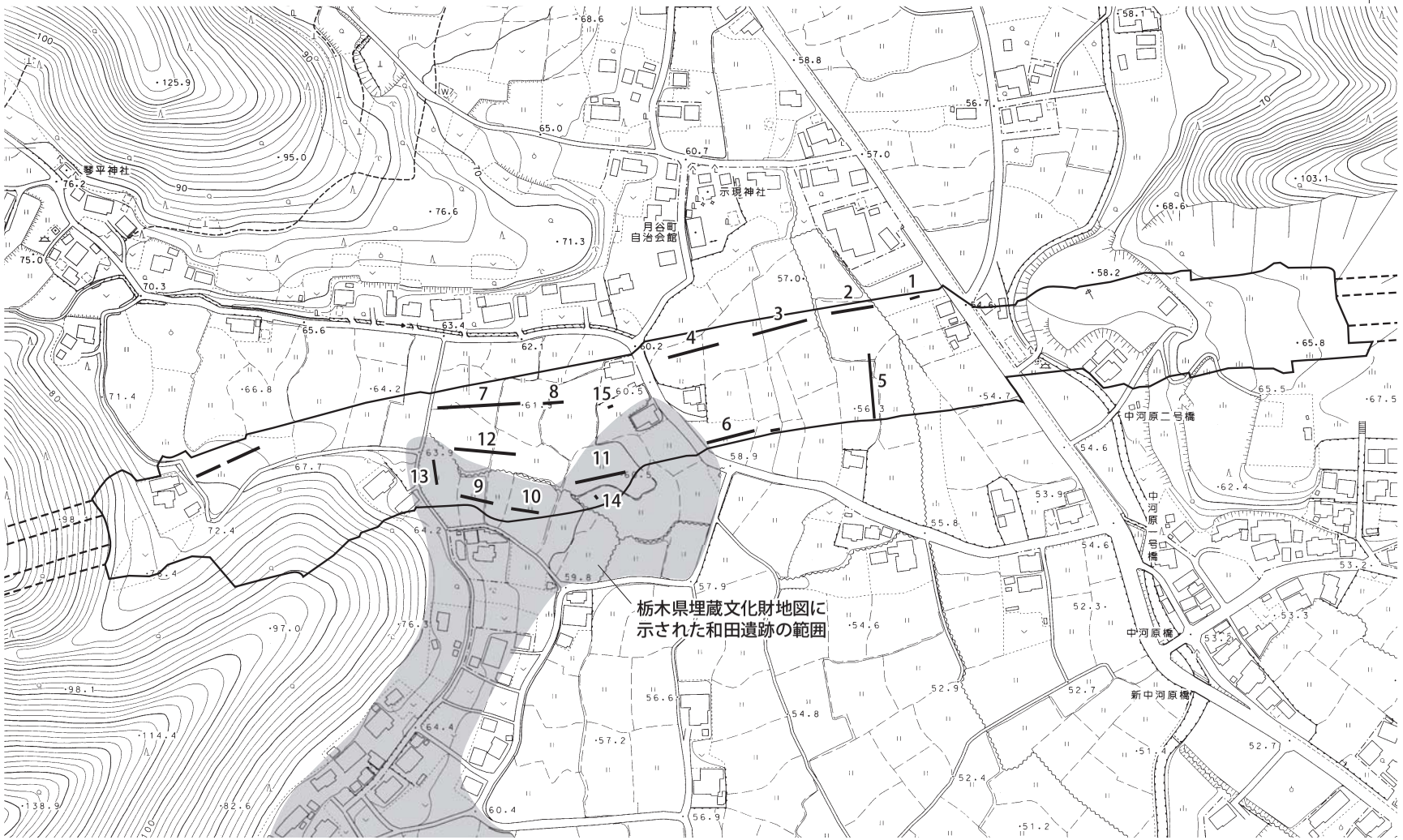
第２表　調査の経過と発掘対象面積

年　度	調査方法	調査地区	実 施 期 間	発掘実施面積	調査面積
平成 16 年度	試掘	Ⅰ区～Ⅷ区	平成 16 年６月 11 日～７月５日	840 ㎡	28,000 ㎡
	本調査	Ⅰ～Ⅴ区	平成 16 年８月９日～平成 17 年３月 31 日	10,200 ㎡	
平成 17 年度	本調査	Ⅵ区・Ⅶ区	平成 17 年４月１日～平成 18 年３月 31 日	11,600 ㎡	
平成 18 年度	本調査	Ⅶ区・Ⅷ区	平成 18 年４月１日～８月 31 日	4,800 ㎡	

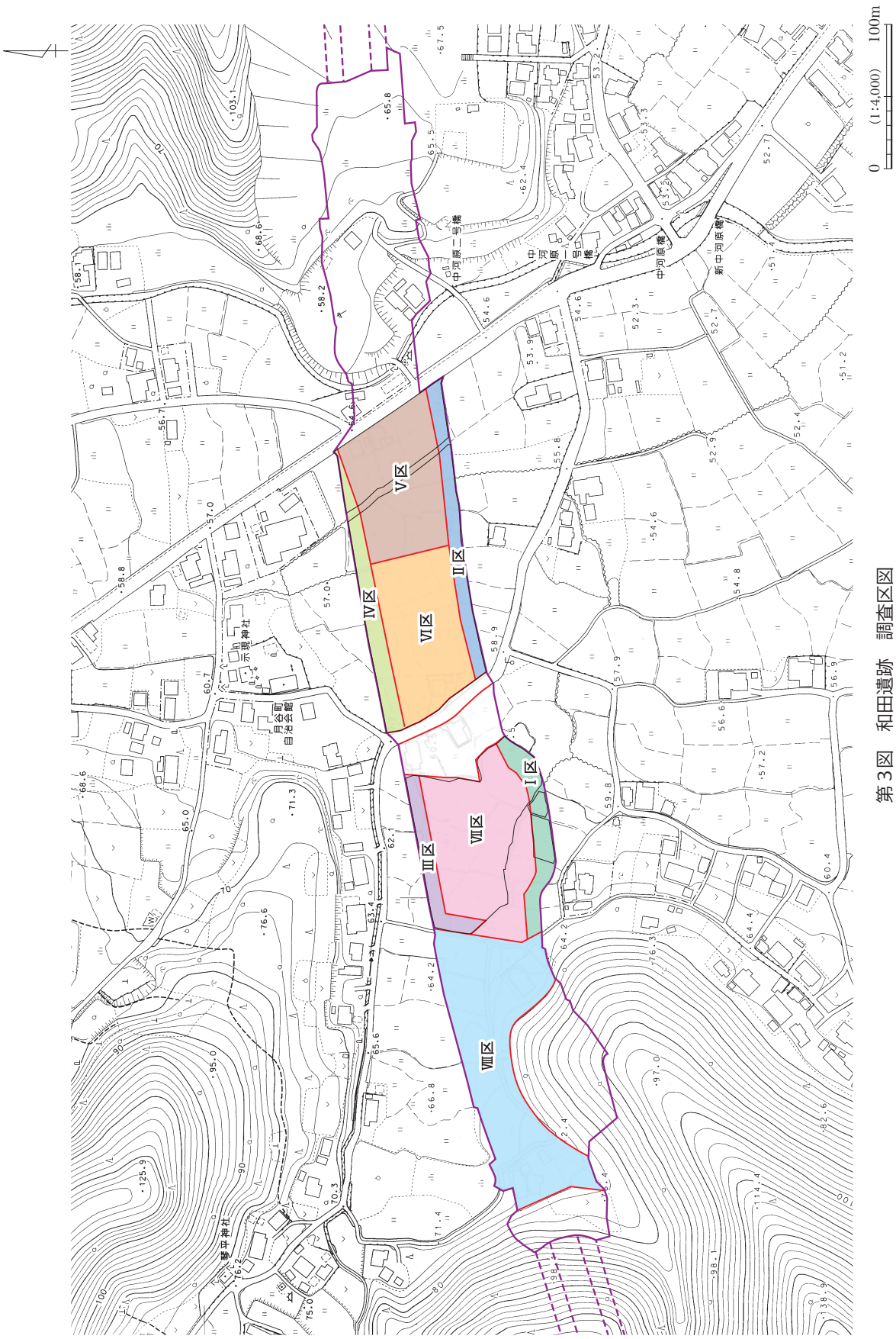
（３）　整理・報告書の作成

整理作業は平成 22 年度・23 年度に実施した。平成 22 年度は、遺構図面整理・修正と写真整理から作業を開始し、図面については７月まで出土遺物と図面に書かれた内容の照合・確認や土層注記修正、台帳作成を行い、10 月には図面整理・修正を実施、以後は遺構ごとのコンピュータートレース作業を行い、掲載遺物に係わる部分を除いて遺構図版に関する大部分の作業を終了した。写真整理は４月から開始し、断続的に１月まで行った。遺物については６・７月に水洗を行い、８月から１月までは注記を実施、１月以降３月まで遺物接合を進めた。注記はインクジェットプリンターを導入して行い、一部については手書きしている。

平成 23 年度は、前年度からの継続作業である遺物接合から開始した。遺物接合と実測遺物の選出は４月中に終了し、５月から９月にかけて実測を行った。実測遺物は土師器・須恵器・瓦などであり、点数は 1,400 点を超えている。木製品 34 点については、実測およびトレース、写真撮影を外部に委託して実施、金属製品についてはクリーニング等の処理後 11 月に実測、拓本、トレース等の作業を行った。11 月には遺物すべてのトレース作業が完了し、１月まで版組作業を行った。遺物出土状況図や遺物観察表等の作成は、遺物版組と併行して実施している。遺物の復元は 11・12 月に行い、12 月に写真撮影を実施した。原稿執筆は９月より取りかかり、12 月～１月には原稿や遺構・遺物図版、写真図版等の全体割付を行い、２月には原稿や図版を整えた上で業者と印刷・製本業務の契約を締結した。１月から３月までは校正を行い、３月に本報告書の刊行の運びとなった。



第２図　和田遺跡　確認調査トレンチ配置図



第３図　和田遺跡　調査区図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

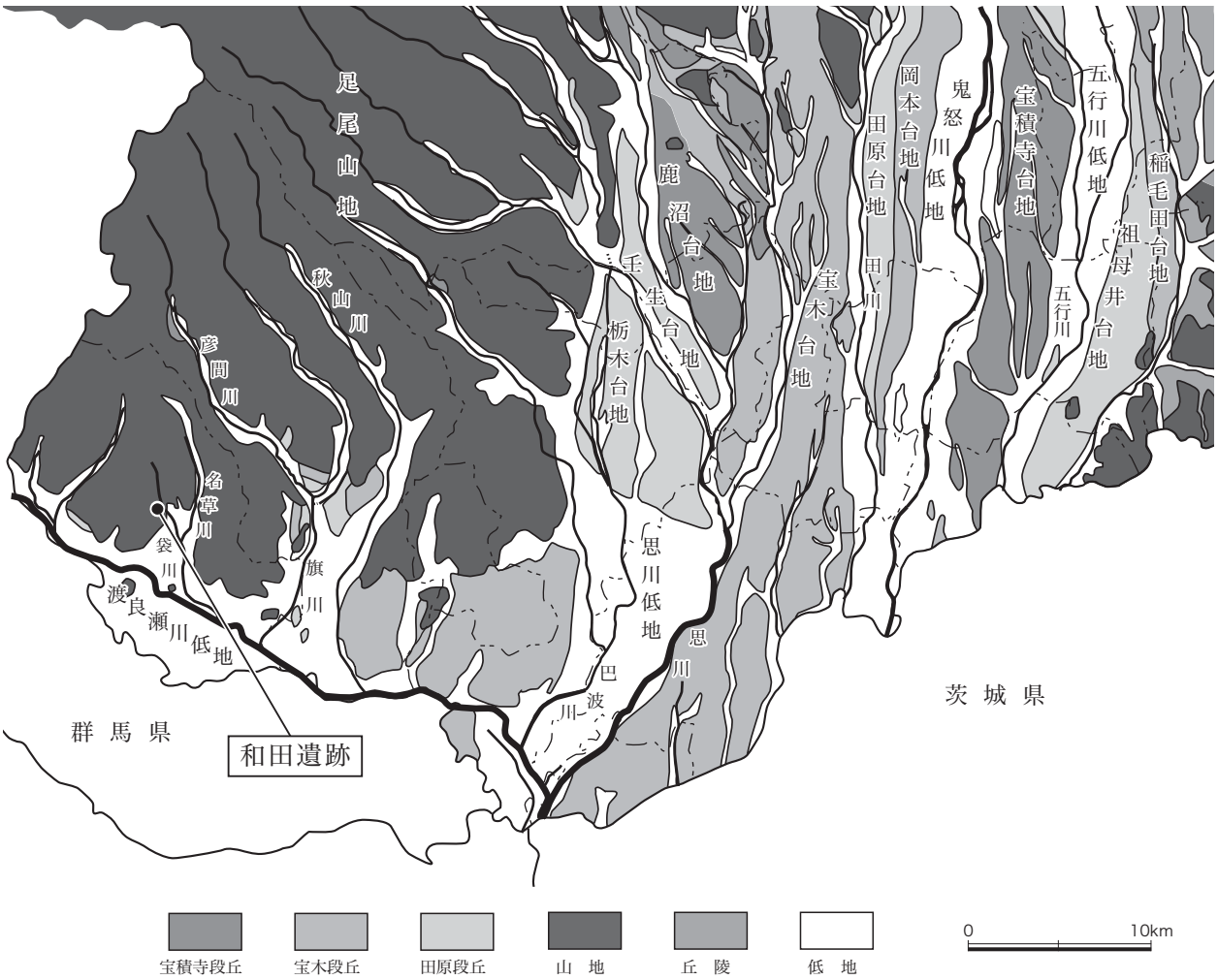
和田遺跡は栃木県足利市月谷町に所在し、足利市街地の北東部、袋川右岸の沖積地上に立地する。

足利市は栃木県の南西部に位置し、北東は栃木県佐野市、南は群馬県太田市・邑楽郡・館林市、西は群馬県桐生市に接する。地形的には関東平野の北縁に立地するため市域南部には平地が広がっており、北部は日光や足尾の山々に連なる山地となる。平地と山地の境には、渡良瀬川が北西から南東に向かって流れている。渡良瀬川は足尾山地に源を有し、群馬県太田市の八王子丘陵および金山丘陵と足尾山地端部の間を南東に流れ、群馬県太田市北部から足利市南部付近にかけて渡良瀬川扇状地を形成している。現在の渡良瀬川はこの扇状地の北縁に沿って流れるが、その南側には旧河道の低地や自然堤防起の微高地が各所に認められており、流路の変遷がたどれる。現在群馬県境付近を流れる矢場川は、旧渡良瀬川と考えられている。また、渡良瀬川南岸に存在する浅間山（標高 108.6 ｍ）、八幡山（標高 69.0 ｍ）などの独立丘陵は、足尾山地の端部が渡良瀬川の浸食によって分離されたものと考えられている。

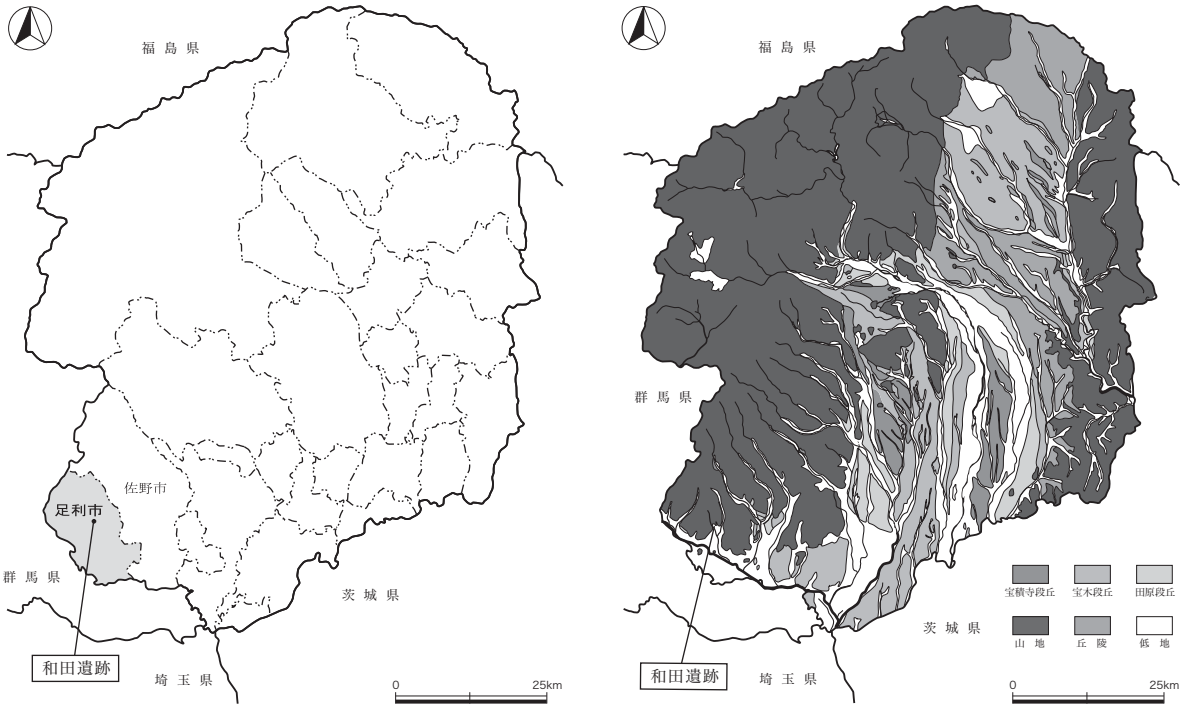
市域北部では、山地が松田川・袋川・田島川・名草川・樺崎川などの南流する小河川に浸食され、深い谷地形が形成されている。特に松田川、名草川によって開析された谷は山地の奥まで及んでおり、流域には谷底平野が見られる。現在の足利市街地北部では、田島川、名草川、樺崎川が谷の出口付近で扇状地を作っており、袋川に合流する。袋川は流域に沖積地を形成しながら南流し、やがて渡良瀬川に注ぐ。この沖積地の中には、浸食の進んだ足尾山地の末端が、北から稲荷山（標高 88.6 ｍ）、助戸新山（63.0 ｍ）、助戸東山（115.8 ｍ）などの独立丘陵となって残されている。鑁阿寺（源姓足利市の居館跡）や足利学校跡の所在する足利市街地は、こうして形成された沖積地の南西部分に位置し、渡良瀬川北岸の自然堤防上を中心に発達してきたのである。標高は 35 ｍ前後である。なお市街地は、現在では渡良瀬川を挟んだ南側の平地にも広がっている。

和田遺跡は市街地の北西約２㎞に位置し、東西が足尾山地から延びる標高 200 ～ 300 ｍの尾根に囲まれた谷地形内にある。谷の中央には南流する袋川があり、遺跡は袋川の西岸に相当する。ここから南に下るとすぐに市街地となっている広い沖積地になるため、遺跡は谷の入口に位置すると表現することもできる。遺跡周辺を詳細にみると、調査区は南・西・北の三方を尾根に囲まれており、尾根からの湧水によって形成された小さな扇状地地形上の南寄りに立地する。調査区は東に向かって低くなる斜面であり、西端は尾根の麓に接しており、東端は袋川に近い位置に達する。標高は約 55 ～ 62 ｍである。遺跡周辺の土壌は、尾根からの湧水による堆積作用で形成された砂礫層と粘土層で構成される。こうした地形のため遺跡周辺は地下水位が高く、調査時にも土層を掘り下げるとしばしば湧水した。遺構が集中する部分は、冠水を免れるためか微高地となっている場所である。調査前の現地は、そのほとんどが水田であった。なお、遺跡地図に示された和田遺跡の範囲は、調査区内中央を北端にし、尾根山麓に沿って南に細長く続いている。今回の調査は、和田遺跡の北側部分のみの調査を行ったものと言えよう。

遺跡周辺は景勝地としても知られており、遺跡北西には昭和 50 年に栃木県の名勝第１号に指定された行道山浄因寺がある。和田遺跡の北西にある小支谷の管沢を登った先に位置し、「関東の高野山」ともいわれている。遺跡のすぐ西側の尾根上には大岩山毘沙門堂跡及び十二坊跡がある。ここは大岩山最勝寺として信仰の対象になっているが、山麓を見渡す展望がきく場所としても知られている。市街地を見下ろす織姫神社から大岩山を通り行道山浄因寺へと通じる尾根筋は、現在「関東ふれあいの道」として整備されており、名刹・古刹など見所がたくさんあるコースとして多くのハイキング客に親しまれている。



第４図　周辺地形図（1/400,000）



第５図　遺跡位置図・地形図（1/1,250,000）

第２節　歴史的環境

和田遺跡は、袋川右岸の沖積地に位置する。遺跡からは古代を中心に、縄文時代から中・近世の遺構・遺物が確認された。周辺の遺跡の分布より、本遺跡を取り巻く歴史的な環境を概観する。

旧石器時代　本遺跡の周辺には旧石器時代の遺物を出土する遺跡はない。

縄文時代　縄文時代草創期の遺跡は山麓の斜面や、平地の微高地上に分布する。昭和 56 年に発掘調査された菅田西根遺跡（18）では、ローム層を地山とする微高地上から撚糸文系の土器が出土する。早期には遺跡数が増加し、山麓斜面の他に北部山麓の平坦地や南部の洪積台地にも分布し始める。北郷小裏遺跡（14）や足利公園遺跡（39）などは早期の散布地である。前期には遺跡数が更に増加し、早期同様の立地に加えて扇状地や洪積台地でも遺跡がみられるようになる。反過遺跡（62）では羽状縄文の土器を伴う竪穴住居跡が発見され、和田遺跡の東 2.4Km に所在する神畑遺跡では関山Ⅲ～黒浜式古段階にかけての土器や前期初頭から後半にかけての石器などが住居跡に伴って出土、市街地北部の田島川沿岸に位置する田島持舟遺跡（10）では黒浜式を主体に関山式期、諸磯式期の土器片が多数出土する。中期には遺跡数が減少するが、この傾向は栃木県南部と同様である。山地斜面に立地する遺跡は減少し、山麓の平坦地や微高地上に多くなる。沖積地内の微高地に位置する新田町遺跡（42）は中期の散布地の一つである。後期には、県内他地域と同様遺跡数が再び増加する。立地は中期と同じく平坦地だが、山麓斜面の遺跡も再び多くなる。この時期の遺跡には、北郷小裏遺跡（14）、足利公園遺跡（39）、反過遺跡（62）がある。晩期には遺跡数は激減し、後期から継続する遺跡が台地や微高地上に営まれる。本遺跡北側には月谷遺跡（６）があるが､時期等の詳細は不明である。

弥生時代　市内の弥生時代の遺跡は、水稲耕作に適した平地や低湿地を臨む山裾や低台地、低地などに立地する。名草川流域や渡瀬川北岸の市街地などに分布するが、発掘調査が行われた遺跡は少なく、大半は散布地である。名草川西岸の菅田西根遺跡（18）では、弥生時代後期の住居跡や古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代後期に廃絶するとみられる水田跡等が確認された。神畑遺跡でも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓が確認されている。田島持舟遺跡（10）からは、中期後半の壺棺墓、後期吉ヶ谷式と樽式の土器を伴う住居跡３軒等が発見されたほか、前期～後期の土器等が出土する。菅田古墳群（15）からは中期の土器が出土している。市街地の本城一丁目遺跡 (30) は中期から後期の散布地で須和田式や樽式土器が確認され、赤松台遺跡（13）、利保南遺跡（20）からは後期赤井戸式の土器片が発見されている。

古墳時代　足利市内には 1,300 基以上の古墳があるとされ、全国有数の古墳集中地域である。前期古墳では小曽根浅間山古墳（前方後円墳）や国指定史跡の藤本観音山古墳（前方後方墳）などがあり、渡良瀬川南部に多く分布する。前期の早い段階から前方後円墳が存在することは、前期に前方後方墳が築かれ続ける栃木県の様相とは異なっており、群馬県域との関連を強く感じさせる。中期には渡良瀬川南部に加え、渡良瀬川北岸の市街地東部周辺に勧農車塚古墳（前方後円墳か）、助戸十二天古墳（円墳か、61）といった古墳が築かれる。分布域はやや広がるが、数にさほど変化はない。後期になると築造数は爆発的に増加し、渡良瀬川北岸の支流によって開析された山麓や山頂に多数の古墳群を形成する。墳形は円墳主体だが、足利公園古墳群（38）や機神山古墳群（36）などのように 30 ～ 40m クラスの前方後円墳を主墳とする古墳群もある。袋川下流の常見古墳群では全長 103m の前方後円墳である正善寺古墳など大規模な古墳が集中する。本遺跡近隣では円墳２基からなる月谷古墳群（７）があるが､詳細は不明である。菅田古墳群は本遺跡の東部に位置し、前方後円墳・円墳等約 50 基で構成される。うち 13 基が北関東自動車道建設に伴い調査され、後期主体の古墳群であることが明らかになっている。

集落跡は、古墳の様相と一致する動向が看取される。前期では足利市南部に多く、反過遺跡（62）では昭

和 57・58 年の調査で３軒の前期住居跡が確認されている。利保南遺跡（20）でも前期土器が認められる。中期は前期に比べ遺跡数はさほど変わらないが、渡良瀬川南岸地域に加え国府野遺跡（60）など市街地周辺でも確認できるようになる。後期になると東部・西部・北部の山間部へ分布域を広げており、遺跡数も増加する。本遺跡周辺では田島宮前遺跡（４）や田島持舟遺跡（10）、岩花遺跡（12）、江川遺跡（17）といった集落があるが、いずれも田島川に面した遺跡であり、岩花遺跡より西側の袋川上流域では、確実に古墳時代に位置付けられる遺跡はない。

奈良・平安時代　足利市における奈良時代の遺跡数は古墳時代後期と比較して大きな変化はないが、平安時代になると遺跡数は減少する。

郡衙　足利郡の郡衙推定地は現在のＪＲ両毛線足利駅周辺に所在する国府野遺跡（60）である。国府野遺跡からは、基壇、掘立柱建物跡、柵列や区画溝等の遺構が発見されている。第９次調査においては、正倉の跡とみられる総柱建造物群が確認された。８世紀中葉から９世紀代の瓦が大量に出土する。

窯跡　和田遺跡から東側に尾根を一つ挟んだ田島川右岸に田島岡古窯跡（３）で須恵器窯と瓦窯が確認されている。瓦は国府野遺跡へ運ばれたとみられ、極印文叩きと縄叩きを特徴とする。30Km ほど離れた下野国府跡でも出土例があり、９世紀初頭に編年されている。赤松台遺跡（13）でも同古窯跡産と推定される瓦の出土の報告がある。この他、田中瓦窯跡（68）からも下野国分寺跡出土瓦と同様の軒丸瓦が出土する。

寺院　和田遺跡の西部、標高 410 mの大岩山には大岩山毘沙門堂および十二坊跡（５）があり、桶巻造りとみられる平瓦や巴文宇瓦などが出土しており、奈良時代～中世に堂塔があったと考えられている。緑町廃寺跡（37）でも奈良時代の瓦等が採集されており、古代寺院と考えられている。

集落　国府野遺跡（60）と助戸・勧農遺跡（58）はともに古墳時代から継続する集落で、助戸・勧農遺跡はこれまでに９次にわたって発掘調査が行われ、８世紀末から９世紀の住居跡 45 軒が確認されている。本遺跡周辺では、田島宮前遺跡（４）、田島持舟遺跡（10）、岩花遺跡（12）、江川遺跡（17）などの古墳時代から継続する遺跡がある一方、赤松台遺跡（13）など奈良時代以降に現れる例もある。岩花遺跡より西側の袋川上流域には和田南遺跡（11）があるが、時期等の詳細は明らかになっていない。

条里跡　旧市街地中央部には助戸・大月条里跡（49）があり、平安時代末の水田が確認されている。田中・朝倉条里跡（63）では浅間Ｂ軽石に覆われた水田を確認している。

中世・近世　平安時代末期には、足利郡・梁田郡という国衙領を支配する藤原足利氏と、足利庄・梁田御厨の荘園を掌握する源姓足利氏が並立する。和田遺跡の位置する月谷町周辺の北郷地区は、鑁阿寺堀之内を中心とした名草、三重、山辺地区の一部とともに、足利庄に包括される。治承・寿永の乱による藤原足利氏の滅亡の後は、源姓足利氏の支配となる。鎌倉時代の初めには、源義家の孫にあたる足利義兼が当地を支配した。現在の国の重要文化財である鑁阿寺（43）は足利氏の居館跡で、境内の大御堂や鐘楼は鎌倉時代のものである。また、市街地北東部の八幡山東麓には、足利氏の菩提寺として浄土庭園を持つ樺崎寺が造営された。

和田遺跡の北西、行道山の中腹には行道山浄因寺（２）が所在する。境内・参道には室町時代の宝篋印塔があり、江戸時代の石造物もみられる。また、大岩十二坊の一つである高松坊跡（８）は月谷川左岸の標高 100 ～ 120 mに所在しており、石塔や板碑が確認されている。

戦国時代になると、足利城跡（28）や尻無山城跡（47）といった山城や、浅間山城跡（64）、富士山城跡（65）などの平山城が築かれ、有力地侍層の居住する岡田氏館跡（66）など城郭遺跡が築かれた。

史跡足利学校（44）は近世には徳川幕府による百石の所領を受け繁栄した。史跡整備に伴う発掘調査では、方丈や庫裏、書院などの建物跡や庭園、土塁と掘が確認され、陶磁器や漆椀、古銭等が出土している。

第６図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第３表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時期
1	和田遺跡	集落跡	古墳～平安
2	行道山浄因寺	寺院跡	中世・江戸
3	田島岡古窯跡	古窯跡	奈良・平安
4	田島宮前遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
5	大岩山毘沙門堂及十二坊跡	寺院跡	奈良～中世
6	月谷遺跡	散布地	縄文
7	月谷古墳群	古墳	古墳
8	高松坊跡	寺院跡	中世・近世
9	田島古墳群	古墳	縄文・古墳
10	田島持舟遺跡	散布地	縄文～近世
11	和田南遺跡	散布地	古墳～平安
12	岩花遺跡	散布地	縄文・古墳～平安
13	赤松台遺跡	散布地	弥生・奈良・平安
14	北郷小裏遺跡	散布地	縄文
15	菅田古墳群	古墳	縄文～古墳
16	江川古墳群	古墳	古墳
17	江川遺跡	散布地	古墳～平安
18	菅田西根遺跡	集落跡	縄文～古墳
19	江川・利保条里跡	条里跡	奈良・平安
20	利保南遺跡	散布地	弥生・古墳～平安
21	中堀古墳群	古墳	古墳
22	物見古墳群	古墳	古墳
23	吾妻古墳群	古墳	古墳
24	東山古墳群	古墳	古墳
25	西宮遺跡	散布地	縄文
26	西宮西古墳群	古墳	古墳
27	西宮東古墳群	古墳	古墳
28	足利城跡	城館跡	平安・中世
29	本城一丁目古墳群	古墳	古墳
30	本城一丁目遺跡	散布地	縄文・弥生・平安
31	心通院裏遺跡	散布地	弥生
32	本城二丁目古墳群	古墳	弥生・古墳
33	本城三丁目古墳群	古墳	古墳
34	法楽寺院	寺院跡	中世
35	徳正寺院	寺院跡	奈良・平安
36	機神山古墳群	古墳	古墳
37	緑町廃寺	寺院跡	平安

No.	遺跡名	種別	時期
38	水道山・足利公園古墳群	古墳	古墳
39	足利公園遺跡	散布地	縄文
40	蓮岱寺跡	寺院跡	中世
41	宝憧寺跡	寺院跡	平安～中世
42	新田町遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良
43	足利氏居館跡及び鑁阿寺十二坊遺跡	居館跡・寺院跡	平安～近世
44	史跡足利学校跡	学校跡	中世・近世・近代・現代
45	丸山耕地遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良
46	稲荷山西耕地古墳群	古墳	古墳
47	尻無山城跡	城館跡	中世
48	助戸新山古墳群	古墳	古墳
49	助戸・大月条里跡	条里跡	奈良～平安
50	助戸山古墳群	古墳	古墳
51	助戸山遺跡	散布地	縄文
52	大町車塚古墳	古墳	古墳
53	大町天神塚古墳	古墳	古墳
54	助戸大車塚古墳	古墳	古墳
55	助戸車塚古墳	古墳	古墳
56	山川遺跡	散布地	縄文
57	宮先古墳群	古墳	古墳
58	助戸・観農遺跡	集落地	縄文～平安
59	助戸宮脇館跡	城館跡	中世
60	国府野遺跡	官衛跡	古墳・奈良・平安・中世
61	助戸十二天古墳	古墳	古墳
62	反過遺跡	集落跡	縄文～奈良
63	田中・朝倉条里跡	条里跡	奈良・平安
64	浅間山城跡	城館跡	中世
65	富士山城跡	城館跡	中世
66	岡田氏館跡	城館跡	中世
67	田中古墳群	古墳	古墳
68	田中瓦窯跡	窯跡	奈良
69	坊主山古墳群	古墳	古墳
70	富士の越遺跡	散布地	縄文
71	坊主山城跡	城館跡	中世

参考文献

足利市教育委員会編　1989『足利市遺跡地図』足利市教育委員会

足利市教育委員会　1989『足利市文化財総合調査総括報告書』足利市教育委員会

篠原浩恵・藤田典夫　2011『田島持舟遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 339 集

手塚達弥　2004『神畑遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 284 集

第３章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

発掘調査の対象とする区域は、袋川西岸にある県道 284 号線を東端とし、大岩トンネル部分までの長さ約 560m、幅 80 ～ 90m の部分である。東に向かって低くなる傾斜地で西端はちょうど山麓に達しており、東端は袋川に近い。調査対象区域の東西では約 15m の標高差がある。和田遺跡として遺跡地図に掲載されている範囲は山麓に沿って南北に延びる長さ約 400m の部分で、対象地区の中央が和田遺跡の北端に相当する。

発掘調査は、基本的には確認調査を実施した上で調査範囲を設定する方針で調査を進めた。対象地区の中央付近に遺構が集中することが予想されたため、その周辺を中心に対象地区全体に幅２m の確認調査トレンチ 15 ヶ所を設定し（第２図）遺構の広がりを確認、その結果から本調査の範囲を決定した。現況は水田だが、土地改良時に標高の高い側を削平し、低い側に盛土して耕作地を水平にする工事が随所で施工されていた。これにより標高の高い側では遺構が破壊され、低い方は遺構確認面が深くなっていたため、遺構確認は困難であった。確認調査面積は 840 ㎡で、対象地区面積の約２％に相当する。なお対象地区内については、工事範囲や引渡時期等から便宜上Ⅰ～Ⅷ区の調査区を設定して調査を進めた（第３図）。確認調査の結果、Ⅷ区を除くすべての地区から遺構が確認されたため、Ⅰ～Ⅶ区を本調査範囲と決定、範囲は幅 80 ～ 90 m、長さ約 370 mで、面積は 28,000 ㎡となった（第８図）。

調査で使用するグリッドは 10 × 10 m方眼とし、調査区の南東に相当する日本測地第Ⅸ系方眼の X ＝ 40,720、Y ＝ -33,630 の交点を起点として対象範囲全体に方眼を設定した。各グリッドの数値は南北方向のX軸をアルファベットで表記し南から北へ「A・B・C」の順、東西方向のＹ軸は数字で表記し東から西へ「１・２・３」の順に附した。グリッド名は「A －１」等と呼称することとし、グリッドの南東コーナー杭がそのグリッド範囲を示すものとした（第７図）。

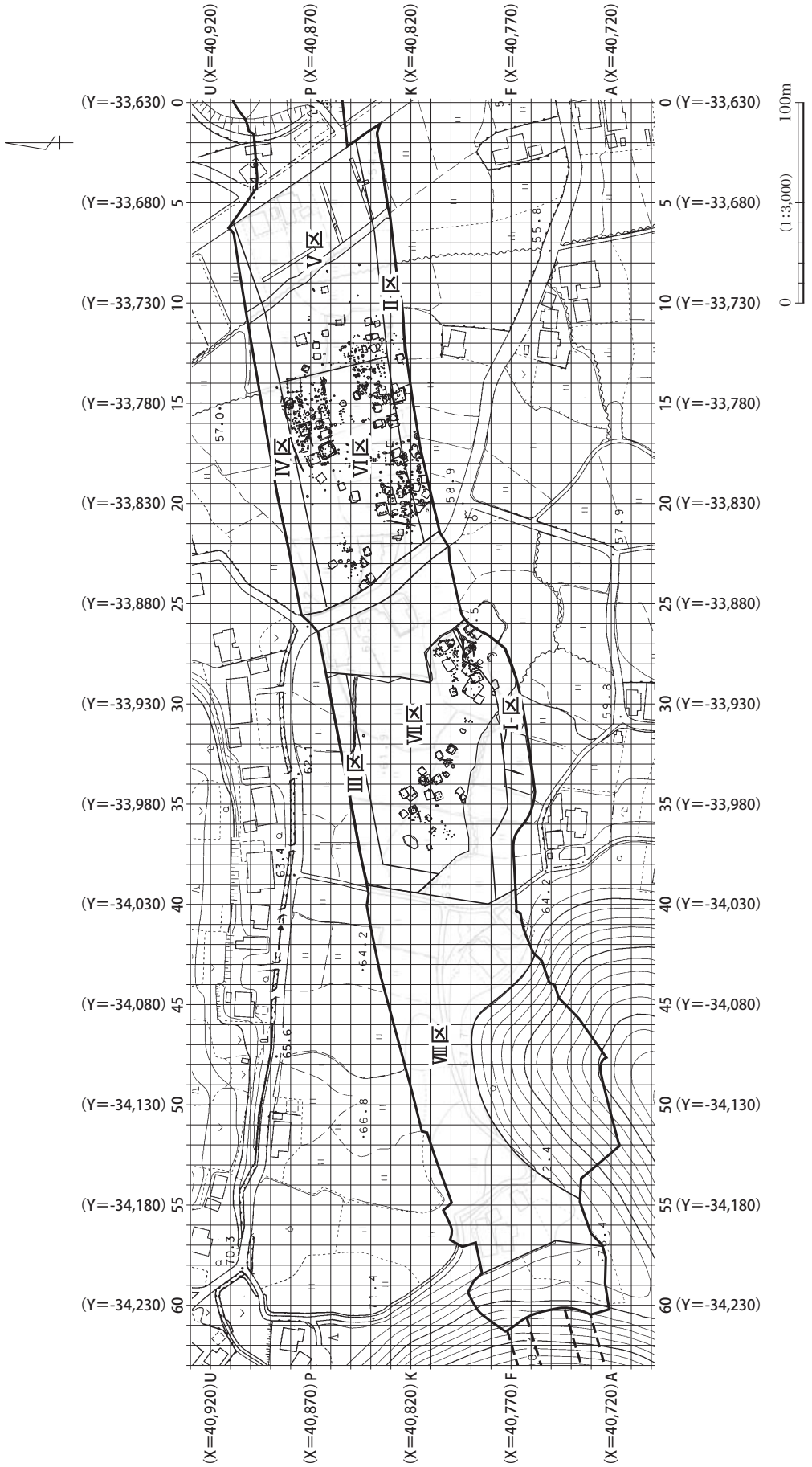
調査の経過及び調査区の配置については、第１章第２節（１）確認調査、（２）本調査の項で記述しているので、そちらを参照していただきたい。

第２節　基本土層

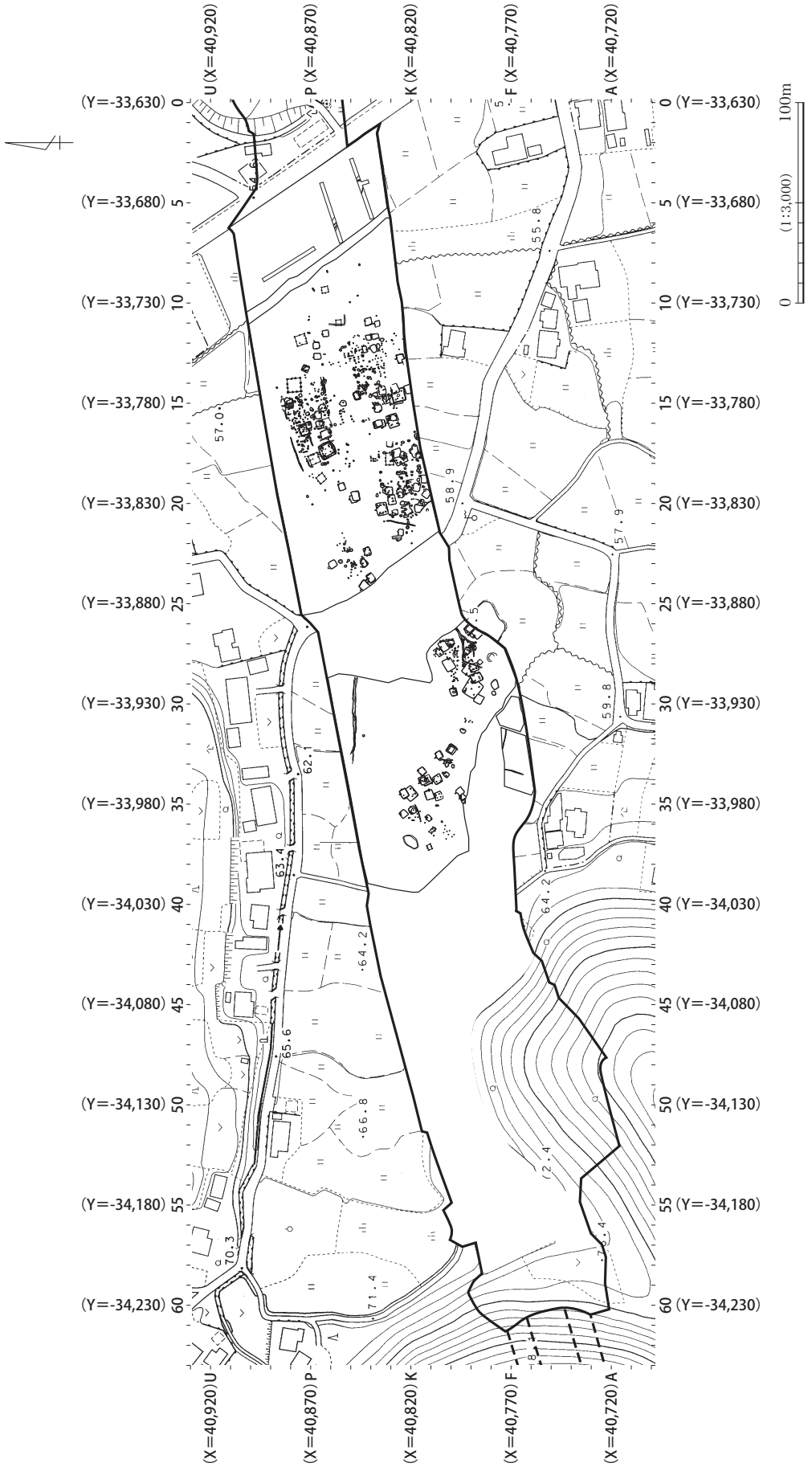
和田遺跡の基本層序は、第９図のとおりである。確認調査のために掘削した各トレンチの土層堆積状況を示し、本遺跡の基本層序を解説する。

本遺跡は西から東へ低くなる斜面に所在し、標高は 62 ～ 55 mと高低差がある。西側の山地を水源とする扇状地地形であり、表土下の堆積土は山地からの流水ないし湧水によって形成された粘土層や砂礫層からなる。表土より下層では火山灰が検出されており、第Ⅱ層では 1108 年に降灰した浅間Ｂ軽石（As-B）を含むことが確認されている。As-B は遺構内覆土や低地でも検出される。第Ⅳ層は白色テフラを含んでおり、遺構覆土中の同様のテフラを分析結果などから、６世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）の可能性が高いと考えられる。なお、堆積土層中から関東ローム層は検出されなかった。

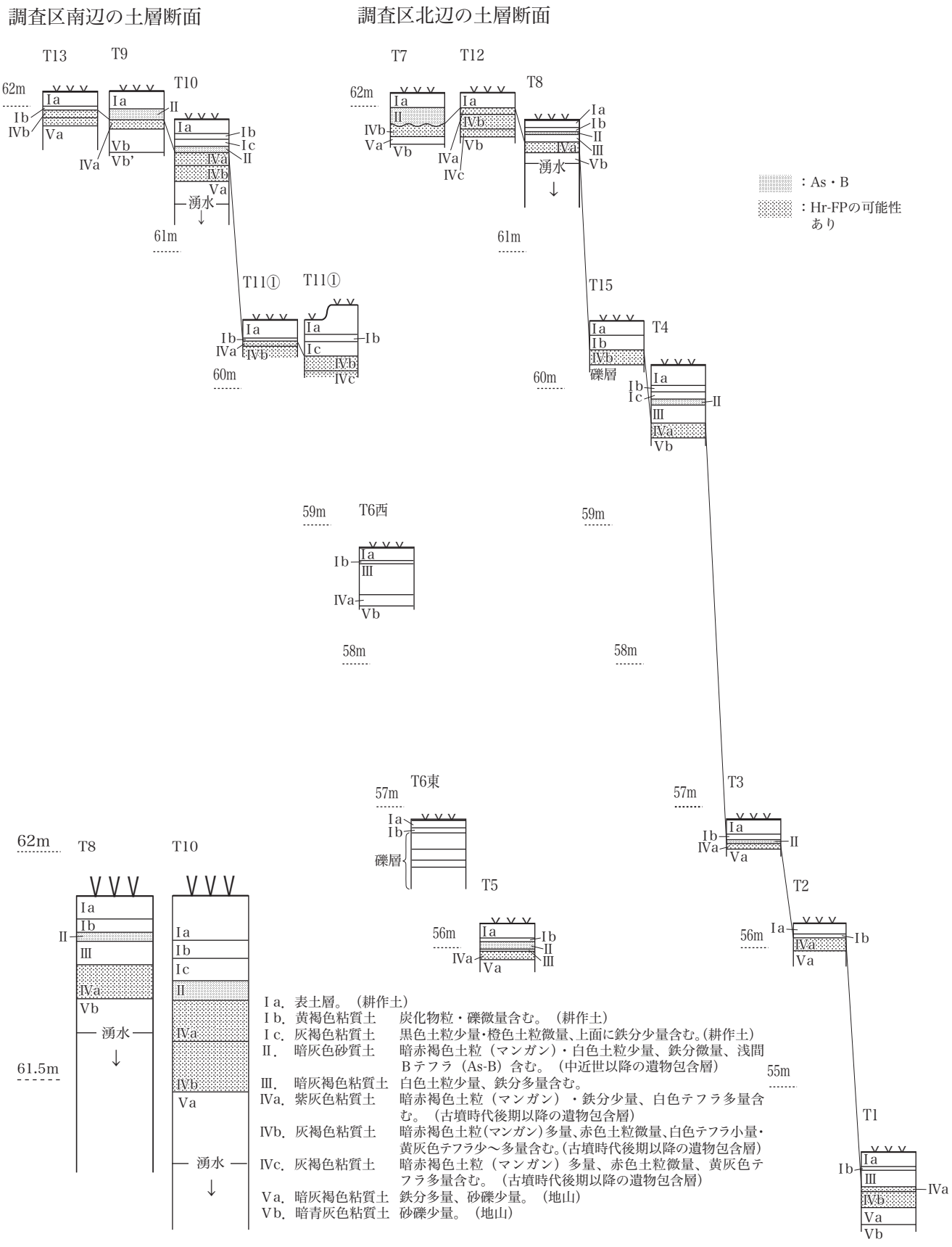
Ⅰ：黄褐色～灰褐色粘質土層　表土および耕作土層で、約 15 ～ 45cm の層厚がある。３層に細分できるため、Ⅰのあとに abc ･･･を付して区別した。Ⅰａ層は表土層、Ⅰｂ層は礫や炭化物を少量包含する水田耕作土下面の床土である。Ⅰｃ層は黒色土粒や橙色土粒を微量に含み、上面に鉄分が少量みられる場合もある。



第７図　和田遺跡　グリッド配置図



第８図　和田遺跡　遺構配置図



Ⅰa．表土層。（耕作土）
Ⅰb．黄褐色粘質土　炭化物粒・礫微量含む。（耕作土）
Ⅰc．灰褐色粘質土　黒色土粒少量･橙色土粒微量、上面に鉄分少量含む。(耕作土)
Ⅱ．暗灰色砂質土　暗赤褐色土粒（マンガン）・白色土粒少量、鉄分微量、浅間Ｂテフラ（As-B）含む。（中近世以降の遺物包含層）
Ⅲ．暗灰褐色粘質土　白色土粒少量、鉄分多量含む。
Ⅳa．紫灰色粘質土　暗赤褐色土粒（マンガン）・鉄分少量、白色テフラ多量含む。（古墳時代後期以降の遺物包含層）
Ⅳb．灰褐色粘質土　暗赤褐色土粒(マンガン)多量、赤色土粒微量、白色テフラ小量・黄灰色テフラ少～多量含む。(古墳時代後期以降の遺物包含層)
Ⅳc．灰褐色粘質土　暗赤褐色土粒（マンガン）多量、赤色土粒微量、黄灰色テフラ多量含む。（古墳時代後期以降の遺物包含層）
Ⅴa．暗灰褐色粘質土　鉄分多量、砂礫少量。（地山）
Ⅴb．暗青灰色粘質土　砂礫少量。（地山）

第９図　和田遺跡　基本土層

Ⅱ：暗灰色砂層　天仁元年（1108 年）噴出の浅間Ｂ軽石（As-B）を含み、白色土粒、暗赤褐色土粒（マンガン）を少量含む砂礫層で、層厚は約５～ 10cm である。５トレンチでは土器片が採集されており、中・近世以降の遺物包含層と考えられる。中世遺構は本土層の前後より掘り込まれる。覆土と色調が近いため識別は難しく、中世の遺構確認面はさらに下の層となっている。

Ⅲ：暗灰褐色粘質土層　白色土粒を少量、鉄分を多量に含む。白色テフラが少量混じる場合もある。厚さ約５～ 25cm で、主に調査区北側のトレンチでみられる。

Ⅳ：紫灰色～暗灰色粘質土層　白色テフラを主体とする粘質土層である。暗赤褐色土粒や礫がまじる。白色テフラは６世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）である可能性が高いため、本土層は古墳時代後期以降の堆積層といえよう。テフラの多寡で、白色テフラを多量に含むⅣａ層、白色テフラと黄灰色テフラを少量含むⅣｂ層、黄灰色テフラを多量に含むⅣｃ層に細分できる。Ⅳ層を除去すると古代の遺構が確認できる。古代の遺構はこの層の前後より掘り込まれている。

Ⅴ：暗灰褐色～暗青灰色粘質土層　鉄分が多く、砂礫の混じる粘土層である。古墳時代以前の堆積土であり、古代遺構調査時における地山層に相当する。

以上が表土から地山までの層序である。Ⅴ層以下は湧水のため水没する地区もあった。６トレンチ西で表土層（第Ⅰ層）直下が砂礫層になるという、近接した場所で土層がまったく違う状況が確認される点は、土層堆積が水の作用よってなされる扇状地地形特有のあり方と言える。各土層の色調は上記のとおりだが、実際には色調の差はさほど大きくない。自然堆積土と遺構内覆土の色調もよく似ており、両者の判別は困難であった。調査区全体若しくは一部が常時冠水ないし湧水しており、常に排水ポンプを使用しながらの調査であったことも、調査を難しくさせた要因であろう。なお、水位が高いことで土器などの摩滅は著しいが、一方で木製品は良好な保存状態が保たれ、柱材など多数の生材が出土することに繋がっている。

第３節　確認された遺構と遺物の概要

今回の調査により確認された遺構は第４表に示すとおりであり、古代・中世・近世の遺構が確認できた。古代とした遺構の年代はおよそ７世紀から 11 世紀であり、奈良時代、平安時代に古墳時代終末期ないしは飛鳥時代と呼称する時代までも含めている。

縄文・弥生時代は遺物の出土はあるが、遺構は確認されていない。遺物としては縄文土器５点、石器８点、弥生土器４点が出土する。縄文土器は早期鵜ヶ島台式、前期関山式・黒浜式の破片である。石器は、剥片、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿であり、調査区内西部のⅦ区からの採集が半数を占める。弥生土器は中期中葉と後期二軒屋式土器の破片があり、Ｍ－ 11 グリッドに集中する。

古代は和田遺跡の中心となる時期で、確認された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土師器焼成遺構、溝、土坑、柱穴、性格不明遺構、遺物集中区等である。遺物は土師器主体で、須恵器、瓦、土製品、石器、鉄製品、青銅製品等も出土する。遺構は調査区内に一様に存在するのではなく、水の害を受けにくい微高地上に集中しており、地区としてはⅥ区とⅦ区に相当する。竪穴住居跡や掘立柱建物跡の中軸線は南北方向を指向しつつも、地形の制約からか等高線に沿う方向に建てられているものがほとんどである。この傾向は傾斜の緩やかな東寄りでは弱く、山麓に近い西寄りほど強く表れている。こうした立地の特徴は古代に限ったことではなく、中・近世及び時期不明の遺構も同様である。遺構覆土などには火山灰が特徴的に含まれており、その分析は遺構の時期決定の手がかりとなっている。竪穴住居跡は 94 軒ある。平面形は方形ないしは長方形で、

やや不整な形状のものもある。壁高は浅く、床面が明確に硬化しているものは少ない。柱穴や貯蔵穴を持つものも少なく、入口ピットがあるのは SI-196 と SI-209c のみである。カマドは多くの住居跡に設けられる。位置は北壁か東壁で、例外的に西壁にあるものが２例、南壁に設置されるものが１例確認できる。カマドの残存状態は概して悪く、天井部や掛け口がそのまま遺存する例はない。構築材として瓦が使用される例があり、SI-733 では瓦７点が袖部内面に貼られていた。構築材にチャートの角礫を使用する例は SI-727 等で確認されている。建て替えが行われた住居跡は SI-209a・209b・209c と 736a・736b であり、ともに拡張を伴う建て替えが行われたことが確認された。掘立柱建物跡は SB-233・235・951 の３棟ある。３棟とも側柱建物で、調査区東部のⅥ区にある。SB-235 では柱痕が平面と土層断面で確認できるほか、柱材や下に敷かれた礎板が出土する。各遺構の規模・形状や各ピットの様相は様々であり、３棟に類似する点は少ない。井戸は SE-549 １基のみである。北東部のⅥ区にあり、土師器、須恵器が出土する。溝は SD-38・78・238・240 の４条ある。SD-78 は流水の痕跡が顕著であり、水路の可能性があろう。SD-238 からは土師器、須恵器が比較的多く出土する。土師器焼成遺構は SK-643b・738・739・835 の４基が確認されている。SK-738 が最も残存状態が良好で、楕円形のプランにトンネル状に掘り込まれた煙道が付随する。煙道周辺は被熱痕跡が著しく、広範囲が硬化赤変する。これ以外の３基も、形態はほぼ同様と推定される。遺物は土師器主体だが、焼成遺構との関連がうかがえる資料は少なく、SK-738 で土師器坏の失敗品とみられる破片が出土する程度である。土坑は 143 基ある。形状は円形や楕円形がほとんどで、希に方形や長方形がある。覆土中に焼土や炭化物を多く含むものがあり、何らかの焼成を行った可能性も考えられる。また、形状や覆土からみて柱穴になるものも含まれていると思われる。性格不明遺構 SX-17・54・205・229・230・231・232・700 はすべて古代遺構である。遺構形状は不整形で、遺物は土師器、須恵器を中心に多数出土する。複数の時期の遺物が混在する遺構もあることから、土坑数基の重複や遺物の流入・混入も想定される。ピットは 88 基あり、柱材が残存するものもある。遺物集中区は２ヶ所あり、２ヶ所とも住居跡などの遺構が集中する微高地の北側斜面に位置する。谷部における祭祀の可能性もあろう。遺構に伴わない遺物としては、調査区北部で出土した和鏡がある。平安時代後期の瑞花双鳳八稜鏡である。本遺跡では遺構が少なくなる時期であり、集落の動向とどのように関連するのかが注目される。

中・近世の遺構は少なく、掘立柱建物跡１棟（SB-79）、溝１条（SD-758）、土坑６基である。SK-28・849・874 は井戸の可能性がある。出土遺物は土師質土器や青磁、陶器、石製品、古銭などである。

時期不明の遺構は掘立柱建物跡６棟（SB-100・101・234・508・960・961）、溝９条（SD-4・19・21・22・236・239・242・759・865a）、土坑 161 基、ピット 479 基である。時期決定の決め手に欠けるため時期不明としたが、遺構の形状や立地の類似性などから多くは古代遺構と推定される。中・近世遺構も含まれるだろうが、数量的には少ないと思われる。

第４表　和田遺跡　遺構一覧表

	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	井戸	溝	土師器 焼成遺構	土坑	性格不 明遺構	ピット	その他	総　数
縄文・弥生	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
古代	94	3	1	4	4	143	8	88	2	347
中・近世	-	1	-	1	-	6	-	-	-	8
時期不明	-	6	-	9	-	161	-	479	-	655
総　数	94	10	1	14	4	310	8	567	2	1010

第４章　確認された遺構と遺物

第１節　縄文時代

縄文時代の遺構は確認されていないが、遺物がわずかに出土する。遺物は調査区内中央周辺に多い。

土器（第 10 図、図版四六）

図化した遺物は早期から前期の破片５点で、このほか前期黒浜式と考えられる土器片が 21 点 257.6 ｇ出土する。１は早期後半の鵜ヶ島台式で、胎土に植物繊維を含む。２段のくびれを有する口縁部片であり、横位と縦位に微粒起線を貼付けた後太めの沈線を施す。文様の交点には円形の刺突が見られる。２は平口縁の口縁部片で、内外面とも摩滅が著しく文様は不明である。先細りになる口縁部形状から、早期条痕文系の可能性が考えられる。胎土には植物繊維と微量の黒雲母を含む。３は前期関山Ⅱ式と見られ、外面は組紐による斜縄文である。４は前期黒浜式で、外面には羽状縄文を横方向に施文する。縄文は上段が２段 RL、下段が２段 LR の横回転である。平口縁深鉢の口縁部の可能性があり、植物繊維を多量に含む。５の外面は２段 RL を横回転させた単節斜縄文で、植物繊維を含む。前期黒浜式であろう。１はⅠ－ 32 グリッド、２は確認調査 12 トレンチ、３はM－ 12 グリッド、４は SX-54、５は SI-216 出土である。

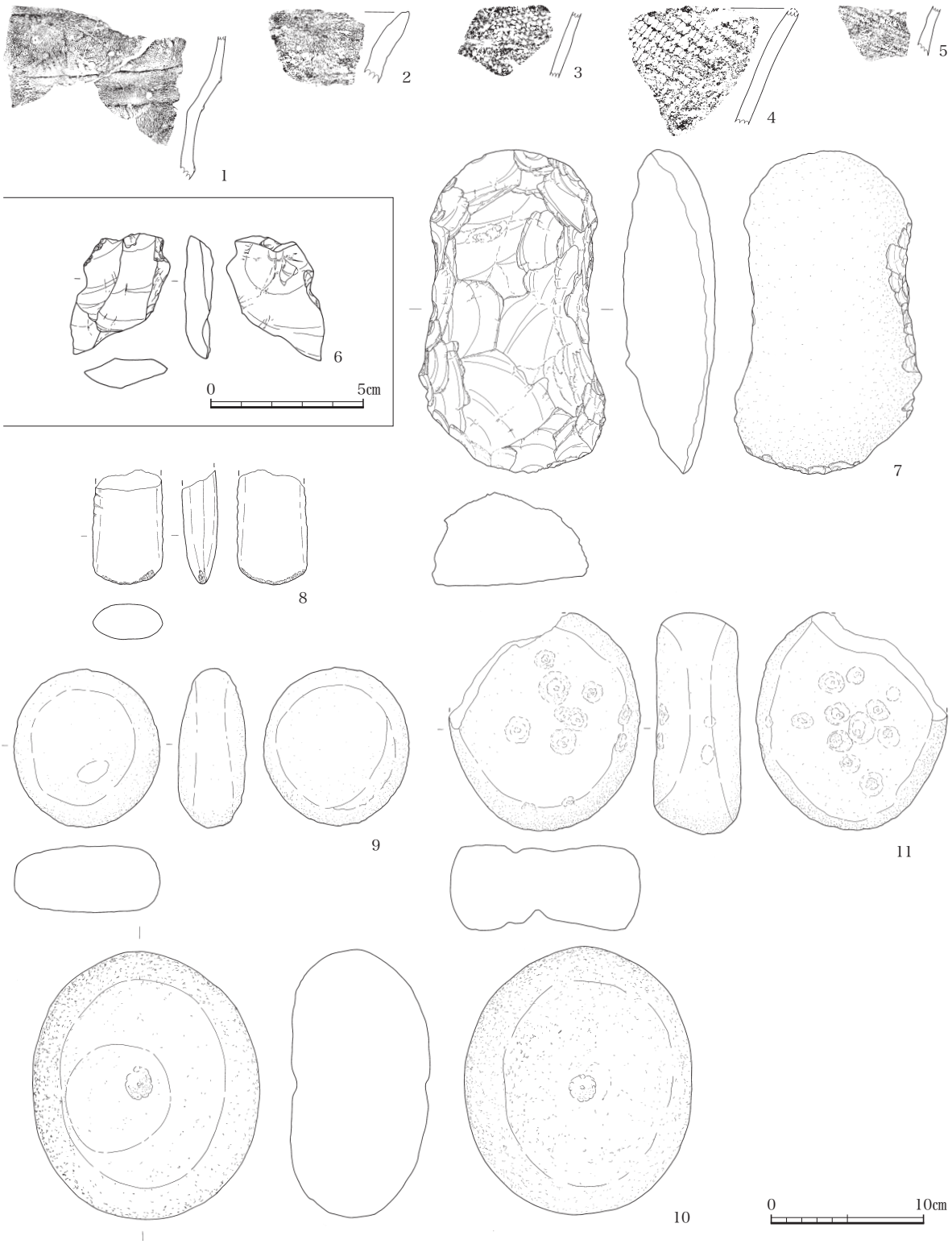
石器（第 10・11 図、図版四六）

石器は８点ある。６は節理面を打面にした縦長剥片で、左右両側面上端に微細剥離痕がある。左辺中央の抉りはカジリの可能性があろう。チャート製、長 4.0 ×幅 3.2 ×厚 0.9cm、重さ 10 ｇ。７は大形の分銅形を呈する打製石斧である。片面にのみ剥離が施され、裏面には自然面を残す。側面の抉り部は剥離のみで作出されており敲打はほとんど認められない。刃部には使用によると見られる剥離がある他、表側左寄りは使用のためかやや研磨されたように磨滅する。ホルンフェルス製、長 21.2 ×幅 12.2 ×厚 6.0cm、重さ 1,778.5 ｇ。８は定角式の磨製石斧で全面が研磨されており、基部を欠損する。刃部先端には敲打痕が顕著なことから、基部欠損後敲石として使用された可能性がある。蛇紋岩製、長残 7.3 ×幅 4.6 ×厚 2.3cm、重さ残 134.4 ｇ。９は磨石である。表裏とも研磨面とみられるが、表面は風化により荒れている。側面の 1/2 ほどは細かな凹凸を持つ平坦面であるため、側面も使用されたと考えられる。安山岩製、長 10.4 ×幅 9.6 ×厚 4.3cm、重さ 562.2 ｇ。10 は凹石で、表裏とも中央に直径約２㎝の凹みがある。表側には研磨によるとみられる平滑な部分があるが、裏側には認められない。石皿の可能性もあろうか。安山岩質溶岩製、長 17.6 ×幅 15.0 ×厚 9.0cm、重さ 2,555 ｇ。11 ～ 13 は石皿である。11 は表裏両面が浅い石皿面で、Ｖ字形断面の多孔を持つ。孔は表側６、裏側 11 で、側面にやや形状の不明確なものが６ヶ所ある。安山岩質溶岩製、長 14.5 ×幅 12.6 ×厚 5.7cm、重さ 1,145 ｇ。12 は楕円形の石皿と見られ、表側に浅くくぼんだ石皿面を作出する。表裏両側に断面皿状の多孔を持つ。多孔は表側１、裏側３、側面１で、裏側にはこのほかにわずかに凹む部分が数ヶ所ある。安山岩製、長残 12.8 ×幅 16.7 ×厚 6.2cm、重さ残 1,528.1 ｇ。13 は表側中央の縦長の部分が浅く凹む片面の石皿で、石皿面作出のための加工はあまりなされない。断面皿状の凹みは表側１、裏側２である。安山岩質溶岩製、長 37.5 ×幅 25.8 ×厚 10.2cm、重さ 12,250 ｇ。６は SI-728、７は SI-902、８は SI-744、９・13 はⅦ区、10 はⅥ区、11 は遺物集中区２（№ 38）、12 はＧ－ 32 グリッド出土である。

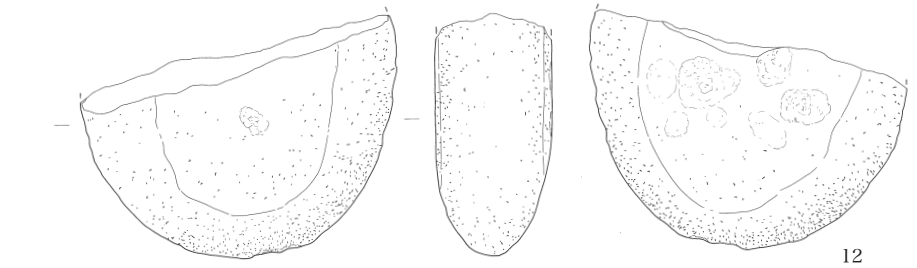
第２節　弥生時代

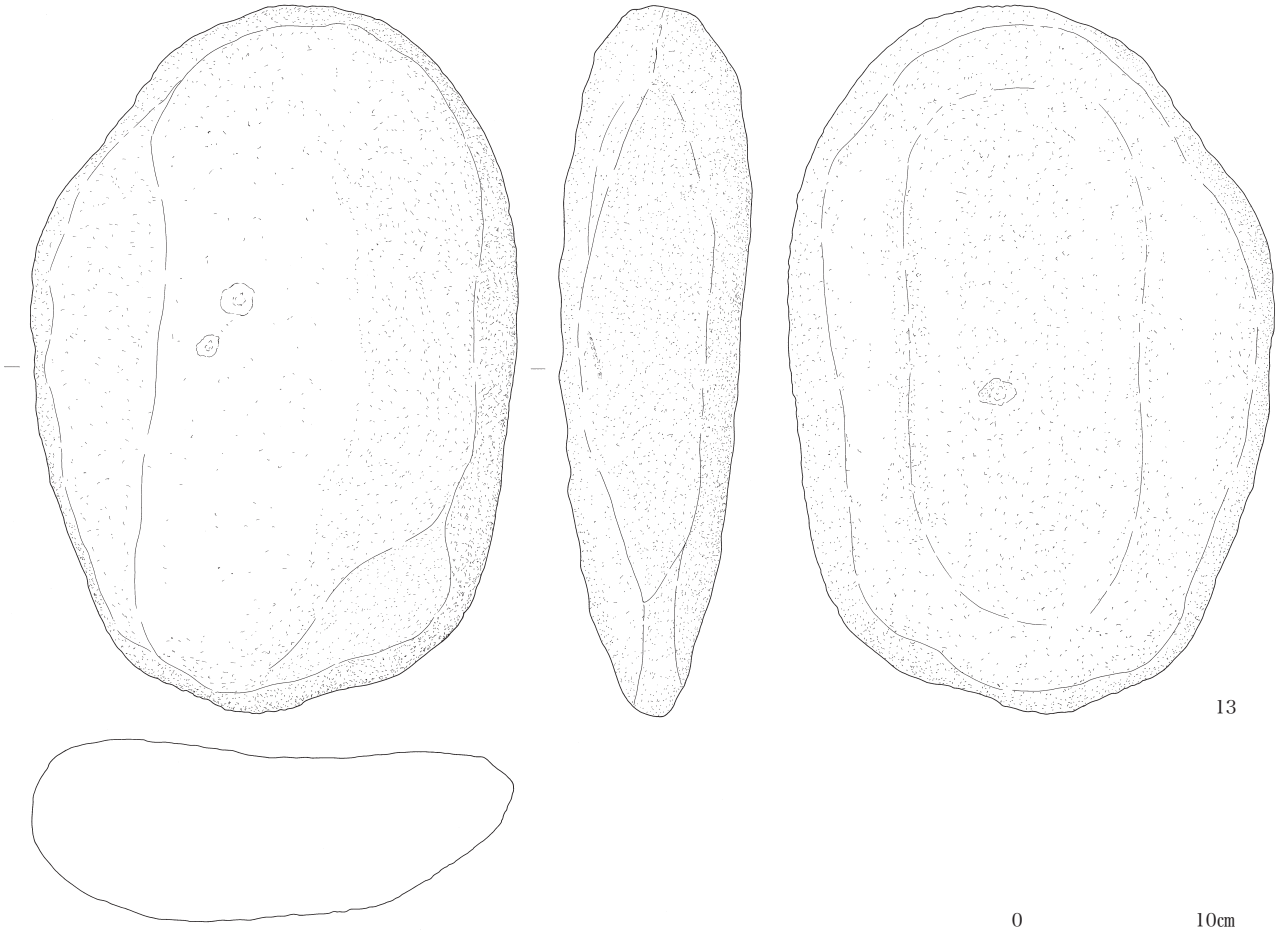
土器（第 12 図、図版四六）

弥生時代の遺構は確認されておらず、遺物のみがわずかに出土する。図化したのは甕片４点で、この他胴



第 10 図　和田遺跡　縄文時代出土遺物実測図（1）

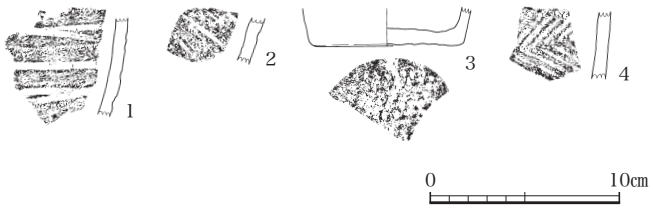




0　10cm

第 11 図　和田遺跡　縄文時代出土遺物実測図（２）

部片２点（48 ｇ）がＭ－ 11 グリッドより出土する。１は胴部片で内面はナデ、外面には斜方向に幅４㎜の沈線が施される。２も胴部片で内面はナデ、外面には斜方向の条痕文（幅約２㎜）が施される。１・２は中期中葉と考えられる。３は底部片で、内面はナデ、外面底面には網代痕が残る。中～後期であろう。４は内外面とも磨滅が著しく調整は不明瞭だが、外面胴部に横方向の羽状縄文が施文される。縄文は附加条Ⅰ種で原体は２段 LR ＋２R と２段 RL ＋２L の可能性が高い。後期後半であろう。１～３はⅤ区Ｍ－ 11 グリッド、４は SI-207 から出土する。



0　10cm

第 12 図　和田遺跡　弥生時代出土遺物実測図

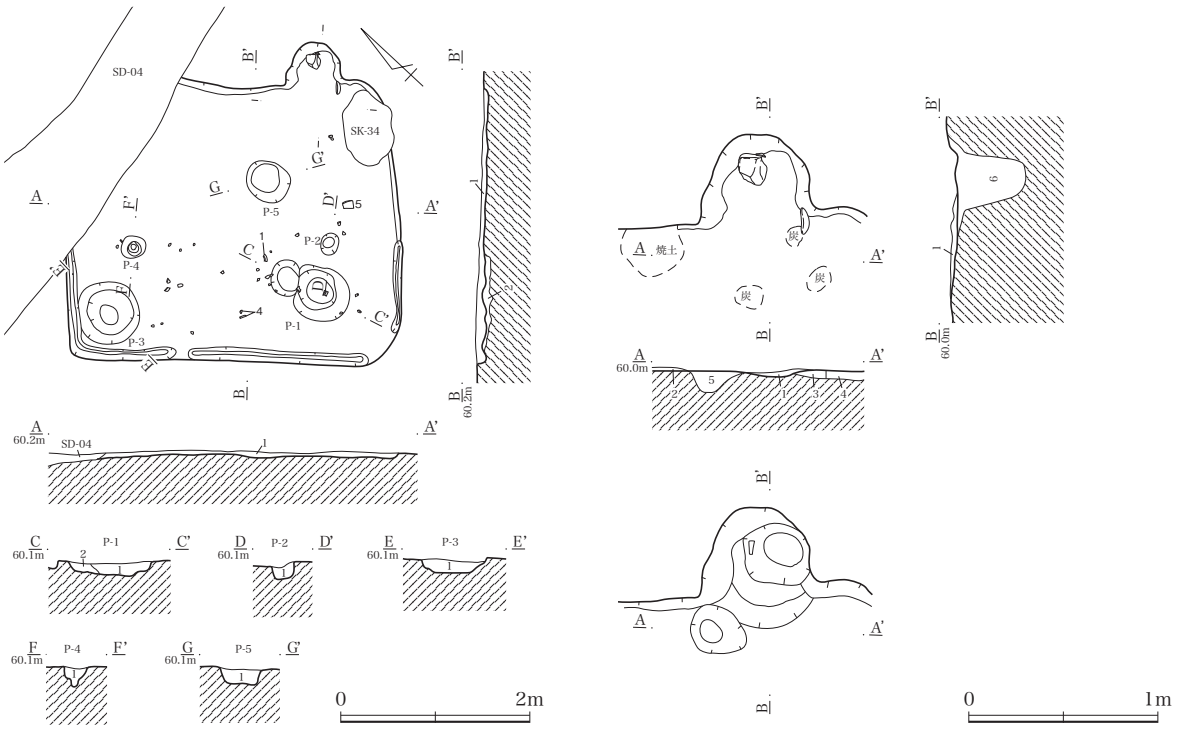
第３節　古代

１. 竪穴住居跡

ＳＩ－５（第 13・14 図、第５表、図版五）

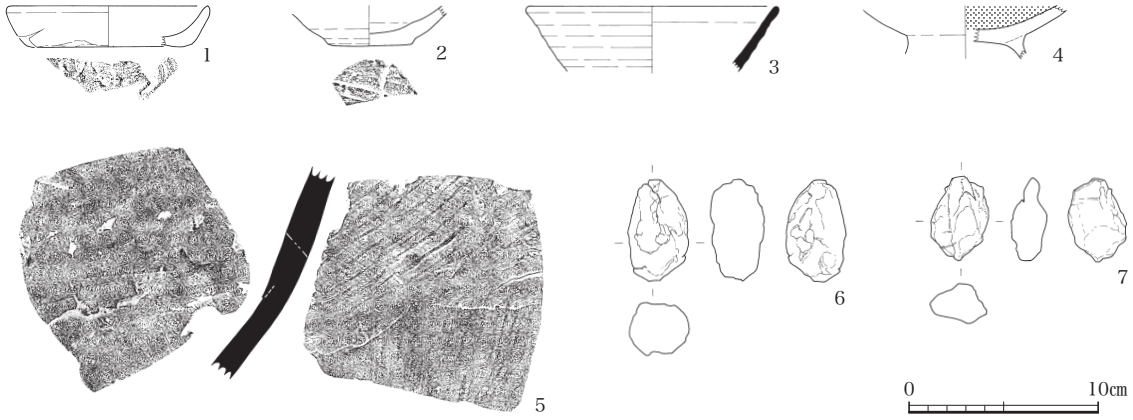
位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－27、Ｈ－27 グリッドに位置する。南に SI-18、南東に SK-24・33 が近接し、南１m に SD-19 がある。　**重複**　北隅が SD-04 に切られる。東端が SK-34 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　北西－南東方向がやや長い方形で、中軸線はＮ－ 48°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 3.57m、北東－南西方向が 2.90m である。　**覆土の状態**　覆土は１層のみで、炭化物粒や小礫を含む。

壁　掘り込みが浅いためか、確認できた壁高は５～７cm である。壁は短く緩やかに立ち上がる。　**床面**　細かな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。　**掘方・貼床**　カマド周辺と住居跡南部が部分的に貼床される。床面からの深さは 7cm で、堀方底面には凹凸がある。　**柱穴**　５ヶ所のピットがあり、このうち径の小さい P- ２・４は柱穴の可能性がある。規模は P- ２が径 23 × 19cm、深さ 13cm、P- ４が径 28 × 25cm、深さ 21cm、P- ２・P- ４間の柱間寸法は、2.08m である。P- １・３・５は土坑状で、P- １が径 88 × 57cm、深さ 14cm、P- ３が径 68 × 67cm、深さ 14cm、P- ５が径 50 × 42cm、深さ 15cm である。P- １は北側のピットと南側



SI-05
1　褐色土　ローム粒・炭化物粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　ローム粒・炭化物粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
SI-05　P- 1
1　明褐色土　炭化物粒少量。しまりあり。
2　褐色土　炭化物粒・焼土粒多量。しまりあり。
SI-05　P- 2
1　褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-05　P- 3
1　明褐色土　赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SI-05　P- 4
1　褐色土　炭化物粒少量。しまりあり。
SI-05　P- 5
1　褐色土　赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SI-05　カマド
1　褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土粒主体。しまりあり。
3　暗黄褐色土　ローム粒・白色土粒少量。しまりあり。（掘方）
4　褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
5　暗褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。（掘方）
6　暗褐色土　炭化物粒少量。しまりあり。（掘方）

第 13 図　和田遺跡　SI- ５実測図



第 14 図　和田遺跡　SI- 5出土遺物実測図

第５表　和田遺跡　SI- 5出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 皿	口　復 10.7 高　2.1 底　復 8.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し。底部には指で押さえた指頭圧痕が残り、歪みが生じている。また、切り離し時に糸が器壁を抉る。	7.5YR5/6 明褐 緻密　白粗粒少量、透明粗粒微量 やや硬質	P-1 の北、中央部床面上 4cm 口～体 1/4、底 1/6 No.17
2 土師器 坏	高　残 2.1 底　復 4.5	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部一方向のヘラ切り離し。底部は突出する。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 体～底 1/3
3 須恵器 坏	口　復 13.3 高　残 3.5	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。ロクロ目を明瞭に残す。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒粗粒多量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
4 土師器 高台付坏	高　残 2.8	内面黒色処理。外面ヨコナデ、高台貼り付け。高台はやや高め。	5Y5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒多量、灰褐粗粒微量 やや硬質	南部床面上 2cm と 5cm が接合 体 1/4 ～底 1/2 No.25・26
5 須恵器 甕	高　残 11.4	内面ナデ・ヘラナデ。外面粗い平行叩き。胴部下半の粘土接合部の破片。内面に調整しきれなかった粘土の段差がある。	5Y6/1 灰 緻密　白粗粒微量 硬質	東部床面上 3cm 胴破片 No.22
6 土製品 粘土塊	長　5.4 幅　3.1 厚　2.8 重　38.5	捏ねた粘土をそのまま焼成している。表面は凹凸が目立ち、皺状の粘土の隙間も多い。ナデなどの調整はない。線状のくぼみがあるが植物の圧痕によるものかどうかは不明。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　赤褐礫少量 やや硬質	P-1 完形
7 土製品 粘土塊	長　4.5 幅　3.0 厚　2.1 重　18.0	捏ねた粘土をそのまま焼成している。表面は凹凸が目立ち、含有する礫が突出する部分もある。ナデなどの調整はない。植物の圧痕とも見られる線状のくぼみあり。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤褐礫多量、白粗粒微量 硬質	P-1 完形

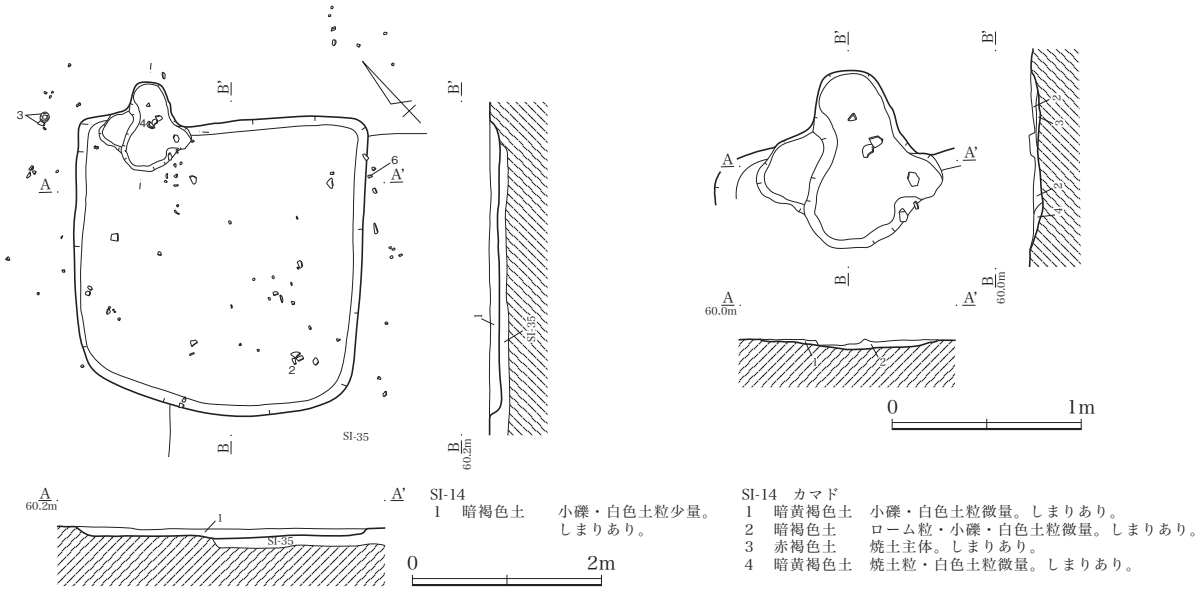
の土坑部分とからなり、土坑部分がピットを切ることが土層からわかる。P- 1のピット部分には多量の焼土と炭化物粒が含まれる。　**壁溝**　南西壁際を中心に断続的に掘り込まれる。断面形は「U」字状で、幅は８～ 14cm、深さは床面から２～ 5cm である。　**火処**　住居跡の東隅、北東壁の東端にカマドがある。天井部、袖部とも失われ、右袖部に相当する位置に袖芯材とみられる長さ 14cm ほどの河原石が置かれているのみで、残存状態は良くない。周辺にはカマド崩壊時に流出したとみられる炭化材や焼土が散在するが、粘土は確認されない。煙道部は壁を約 44cm「U」字状に掘り込み、煙胴底面から火床面は炭化物を含む第６層を埋め戻して作られており、第６層上面は被熱により赤変している。火床面上には、第１層が堆積する。煙道先端には約 15cm 四方の立方体状のチャート質礫が置かれている。平坦面を上にしているため、支脚として使用された可能性が考えられる。　**貯蔵穴**　住居跡内の土坑状ピットである P- １・３・５のうち、西隅にある P- ３

と南隅に位置するP- 1のいずれかが貯蔵穴になると推定されるが、確定はできない。遺物はP- 1に多く、土師器片や粘土塊などが出土する。　**遺物**　遺物は住居跡全体から出土するが、中軸線より南西部に比較的集中する。水による影響か、出土土器の表面は荒れている。土師器皿1は中央部の床面上4cmから、粘土塊2点はP- 1出土である。図化以外には小破片主体の土師器片151点（530 g）、須恵器片2点（30g）、粘土塊50点（30 g）があり、須恵器は少ない。土師器片は坏46点（250 g）、甕類55点（250 g）で、甕は厚手なものが多い。7世紀代の遺物が若干混入する。本遺構の時期は10世紀前葉と考えられる。

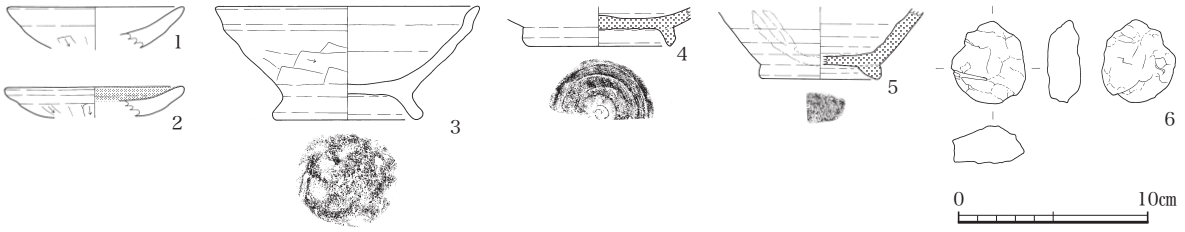
ＳＩ－１４（第15・16図、第6表、図版五・四八）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｇ－26、Ｈ－26グリッドに位置する。北東にSI-25・31が近接してあり、西2mにSD-19とSK-28が隣接してある。　**重複**　SI-35を切る。　**平面形**　方形で、中軸線はＮ－44°－Ｅである。　**規模**　北東－南西方向が3.13m、北西－南東方向が3.10mである。　**覆土の状態**　覆土は1層のみで、小礫を含む。　**壁**　掘り込みが浅いため、残存壁高は7～13cmほどであり、壁は緩やかに立ち上がる。

床面　ほぼ平坦である。　**掘方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北東壁際北端にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は98 × 94cmで、煙道部は壁を約43cm「U」字状に掘り込んでいる。カマド全体は床面より低くなっており、煙道部に天井内面の崩落とみられる焼土を主体とする第3層が堆積したのち、火床面を含むカマド全体に暗褐色土が堆積する。煙道先端は緩やかに立ち上がる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、住居跡全体から破片の状態で出土する。光ヶ丘1号窯式新段階とみられる灰釉陶器の高台付椀4は、カマドの中央部より出土する。土師器の高台付坏3



第15図　和田遺跡　SI-14実測図



第16図　和田遺跡　SI-14出土遺物実測図

第６表　和田遺跡　SI-14 出土遺物観察表

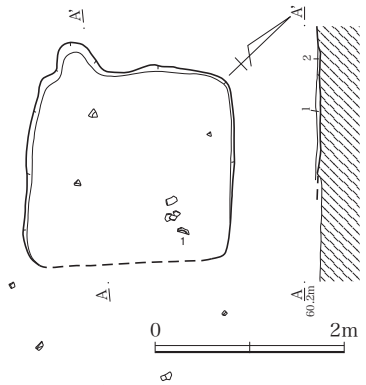
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 皿	口　復 9.4 高　残 2.2	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデ後一部ケズリ。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　赤褐粗粒少量、黒細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/3
2 土師器 皿	口　復 9.6 高　残 1.6	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後一部ケズリ。内面全面ウルシ仕上げ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量 やや硬質	南部床面上 8cm 口～体 1/6 No.33
3 土師器 高台付坏	口　復 14.0 高　6.0 高台　8.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで上位に無調整部分あり。体部ケズリ後高台貼り付け。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　黒細粒微量、白粗粒少量、砂礫微量、粗～細砂粒多量 硬質	遺構外 口～体 2/3、底完存 No.76・77・周辺
4 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.0 高台　復 8.2	内面底部ロクロナデ。ハケヌリで灰釉施釉。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け後ロクロナデ。高台断面は退化した三日月形。光ヶ丘１号窯式新段階、東濃産。	10YR7/1　灰白 緻密　灰黒細粒少量 硬質	カマド中央部床面上 8cm 口一部、底 1/2 No.68
5 灰釉陶器 壷	高　残 3.6 高台　復 6.4	内面体～底部ロクロナデ、底部に灰釉付着、釉は貫入が入る。外面体部ロクロナデ、細長く釉がかかる。底部は高台貼り付け後ロクロナデ。高台は低く丸味を帯びて開く。東濃産。	10YR7/1　灰白 緻密　黒粗粒少量 硬質	覆土 体～底一部
6 土製品 粘土塊	長　4.5 幅　3.9 厚　1.8 重　21.1	平面不整形。断面楕円形。捏ねた粘土をそのまま焼成している。一部平坦面あり。植物圧痕あり。	7.5YR6/8　橙 粗い　灰褐礫少量、白粗粒微量、赤褐粗粒少量 やや硬質	遺構外 完形 No.10

と粘土塊６は遺構外からの出土だが、本住居跡に関連するものとして掲載した。図化以外には土師器片 496 点（3,840 ｇ）、須恵器 10 点（80 ｇ）がある。土師器は坏と甕がほぼ同量だが、このうち多く出土する丸底の坏は、重複する SI-35 の遺物と考えられる。甕は厚手の破片が多い。須恵器は、坏、鉢、甕などの小破片である。粘土塊は図化以外に７点（60 ｇ）出土する。本遺構の年代は 10 世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－１５（第 17・18 図、第７表、図版五）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 27・28 グリッドに位置する。南３ｍに SK-16 が隣接してある。　**重複**　なし。住居跡南東部は遺構確認面が低すぎたため、住居跡の一部が失われている。　**平面形**　ややいびつな方形で、中軸線はＮ－ 46°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 2.20m、南東－北西方向が 2.04m である。　**覆土の状態**　炭化物を含む第１層である。　**壁**　掘り込みが浅いため残存壁高は４cm ほどであり、壁は短く外傾して立ち上がる。南東壁では床面よりも確認面の方が低いことから、壁が確認できない。

床面　ほぼ平坦である。　**掘方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北西壁際南寄りにカマドがある。壁から突出する煙道部と焼土の集中からカマドと考えたもので、天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 33cm「Ｕ」字状に掘り込んでいる。火床面、煙道とも床面とほぼ同じ高さであり、焼土主体の第２層が堆積する。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は住居跡内からわずかに出土する。ロクロ成形の土師器坏１が本住居跡に伴うもので、須恵器甕２は混入と考えられる。図化以外には土師器片が坏 148 点（870g）、甕 153 点（1,580g）、須恵器片１点（10g）、粘土塊



SI-15　カマド
１　褐色土　　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
２　赤褐色土　焼土粒主体。炭化物粒・小礫微量。しまりあり。

第 17 図　和田遺跡　SI-15 実測図

第 18 図　和田遺跡　SI-15 出土遺物実測図

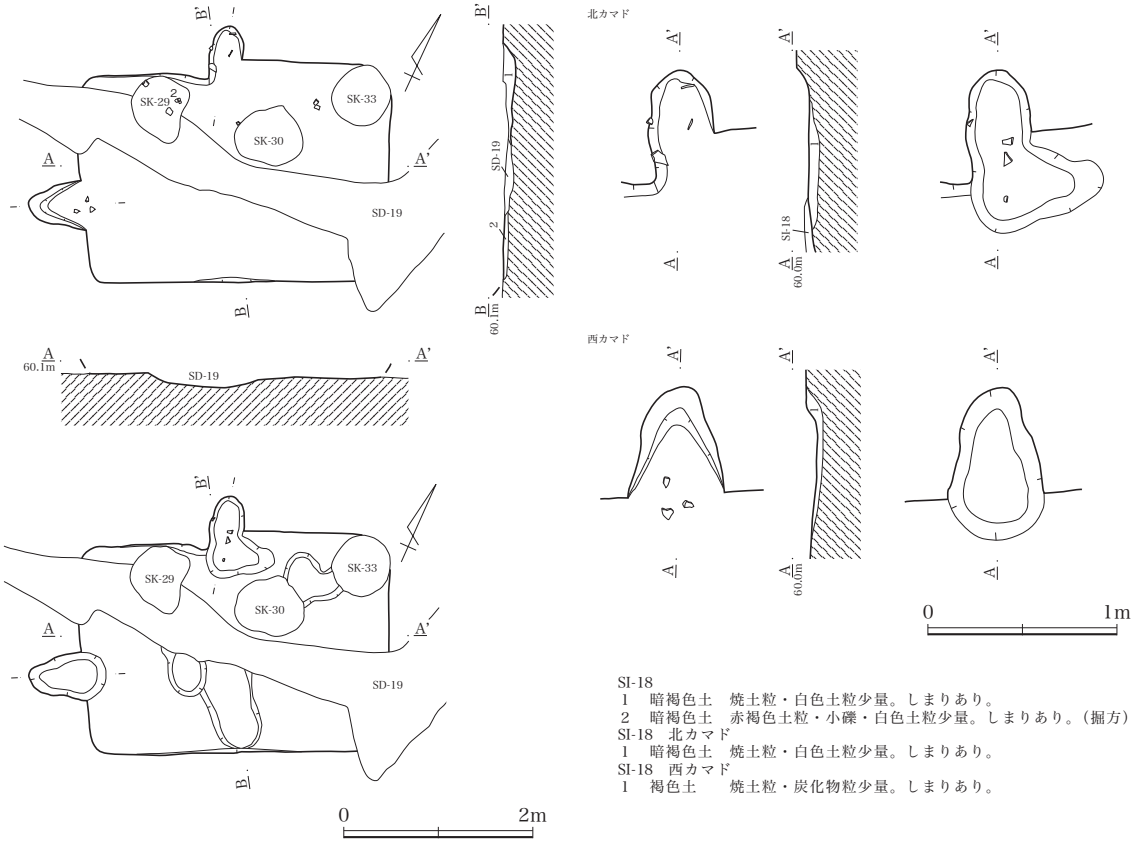
片２点（10g）があり、数としては土師器坏と甕が同量くらいある。古墳時代遺物の混入があると考えられるほか、中・近世の陶磁器片もわずかに混入する。本遺構の年代は、10 世紀頃と考えられる。

第 7表　和田遺跡　SI-15 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.9 底　復 4.1	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しか。表面磨滅のため調整不明瞭。底部が突出する平底。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 硬質	東部床面上 27cm 体～底 1/3 No.3
2 須恵器 甕	高　残 4.4	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。上下両端は粘土の接合部分で水平に割れる。混入か。	N6/0　灰 緻密　黒微粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 胴破片 周辺

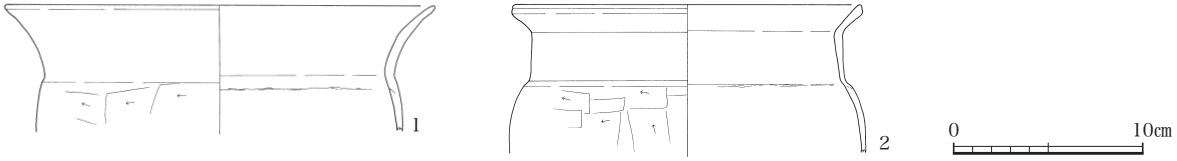
ＳＩ－１８（第 19・20 図、第８表、図版五・六）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 27、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。北に SK-24 が近接し、北１ｍに SI-05、南東１ｍに SK-28 が隣接してある　重複　住居跡の中央部が東西方向の溝である SD-19 に、北半が SK-29・30・33 に切られる。　平面形　覆土の多くはすでに失われていたため、掘方と判断した掘り込み、カマドのあり方などから住居跡の範囲を決定した。やや東西方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 21°－Wである。　規模　東西方向が 3.28m、南北方向が 2.34m である。　覆土の状態　不明である。　壁



SI-18
1　暗褐色土　焼土粒・白色土粒少量。しまりあり。
2　暗褐色土　赤褐色土粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。（掘方）
SI-18　北カマド
1　暗褐色土　焼土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SI-18　西カマド
1　褐色土　　焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。

第 19 図　和田遺跡　SI-18 実測図

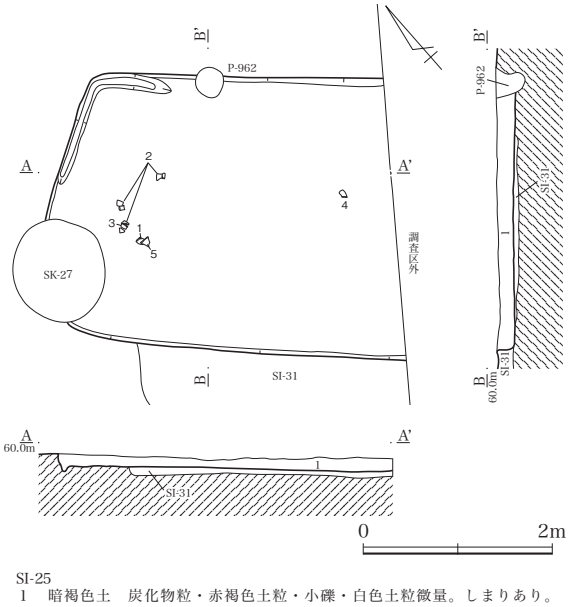


第 20 図　和田遺跡　SI-18 出土遺物実測図

第８表　和田遺跡　SI-18 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口　復 22.7 高　残 6.7	内面口縁ヨコナデで頸部紐積痕あり。薄手。外面口縁ヨコナデ、頸部でゆるやかに屈曲、紐積痕あり。武蔵型。口縁部が最大径の可能性あり。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　黒細粒微量、白細粒少量 軟質	覆土 口一部、頸～体 1/6
2 土師器 甕	口　復 18.6 高　残 7.3 最大 復 18.8	内面口縁～頸部ヨコナデ、頸部紐積痕あり。外面口縁～頸部ヨコナデ、肩～胴部下から上にケズリの後横方向ケズリ。武蔵型。最大径は胴部。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白細粒少量、赤・砂微粒微量 軟質	北西部 SK-29 上、床面上 3cm 口～胴上半一部 SK-29 No.2

北カマド西側でわずかに確認できる。残存壁高は３～ 12cm であり、短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**掘方・貼床**　北東隅と中央南寄りに土坑状の掘方があり、小礫などを含む第２層で貼床される。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北壁際と西壁際にカマドがある。ともに天井部、袖部が失われており、残存状態は良くない。北カマドは北壁際中央にあり、煙道部は東寄りの壁を約 35cm、西寄りの壁を約 54 ㎝「U」字状に掘り込んでいる。火床面、煙道底面には深さ約６cm の不整形の掘方があり、暗褐色土（第１層）で埋め戻されて作られる。火床面、煙道底面の高さは床面とほぼ同じで、煙道先端は緩やかに丸みを持って立ち上がる。使用の痕跡は明瞭であり、燃焼部左側壁面が被熱により硬化赤変している。西カマドは西壁際やや南寄りにあり、煙道部は壁を約 56cm「U」字状に掘り込んでいる。北カマドと同様に火床面、煙道底面には深さ約３cm の楕円形の掘方があり、褐色土（第１層）で埋め戻されて作られる。火床面と煙道は床面より３cm ほど低く作られていて、煙道先端は外傾して立ち上がる。使用の痕跡は明瞭で、煙道部右側壁面から先端部が被熱により硬化赤変している。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、北・西の両カマド周辺と掘方内からわずかに出土する。図化以外には、武蔵型甕を主体とする土師器片 21 点（200g）のみである。本遺構の年代は、９世紀代と考えられる。



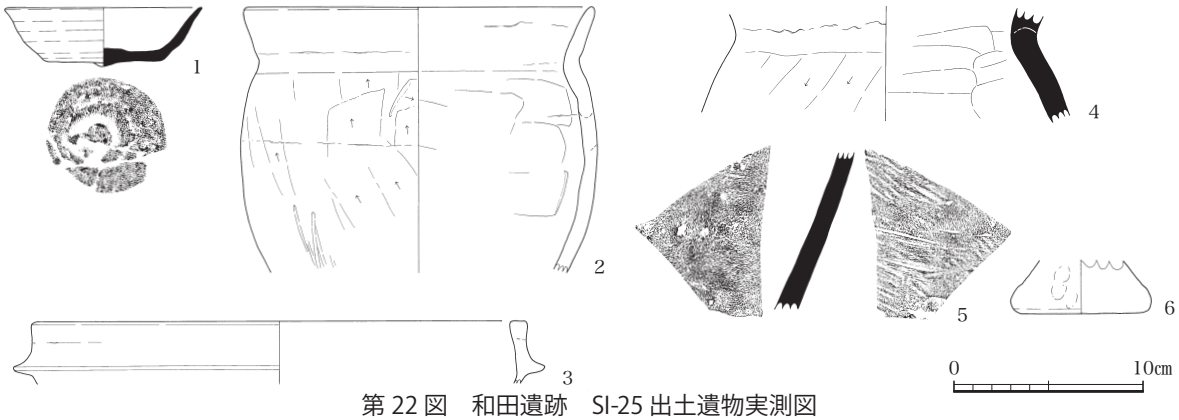
SI-25
1　暗褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 21 図　和田遺跡　SI-25 実測図

ＳＩ－２５（第 21・22 図、第９表、図版六）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 26、Ｈ－ 26 グリッドに位置する。南西に SI-14・35 が近接してあり、北３m に SD-04 が隣接してある。　**重複**　住居跡中央から南部で SI-31 を切り、北東辺が P-962 に切られる。西隅で SK-27 と重複するが、新旧関係は不明である。南東部が調査区外となっている。

平面形　南東部が調査区外となっているが、調査部分から北西－南東方向に長い長方形とみられる。長辺に直交する方向の中軸線はＮ－ 44°－Ｅである。



第 22 図　和田遺跡　SI-25 出土遺物実測図

第９表　和田遺跡　SI-25 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口　復 10.4 高　3.1 底　復 6.4	酸化焔焼成。内面ロクロナデ。外面ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。平底だがヘラ切りの中央部が突出する。突出部を除く器高は 2.8 ㎝。体部の立ち上がりは器壁が薄く、底部は厚い。全体に粗雑なつくり。	2.5YR5/8　明赤褐 緻密　黒細粒多量、白粗粒微量、赤褐細粒少量 やや硬質	西部床面上 4cm 口～体 1/6、底 4/5 No.7
2 土師器 甕	口　復 18.3 高　残 14.0 最大 復 18.8	内面口縁ヨコナデ、胴部横方向ヘラナデ。外面口縁部～頸部ヨコナデ、下半一部ミガキ。胴部縦方向ケズリ。胴部上半に紐積痕が残される。胴部上端に無調整部分あり。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密　黒・赤褐細粒少量、透明微粒少量、白粗粒微量 やや硬質	北部床面上と西部床面上 2cm が接合 口 1/3 ～胴一部 SI-25 No.5・6、SI-31 No.2
3 土師器 羽釜	口　復 26.4 高　残 3.4 鍔径 復 28.2	内面ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、鍔部貼り付け。	10YR7/3　にぶい黄橙 粗い　黒細粒少量、白粗粒少量、透明細粒多量 硬質	西部床面上 4cm 口辺破片 No.4
4 須恵器 甕	高　残 5.9 頸　復 15.8	内面横方向のナデ。外面頸部ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向ケズリ。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密　黒・赤褐細粒少量白細粒多量、透明粗粒微量、 やや硬質	東部床面上 9cm 頸～胴一部 No.1
5 須恵器 甕	高　残 8.3	内面横方向のナデ。外面平行叩き。	N7/0　灰白 緻密　白微粒少量、赤褐微粒微量 硬質	西部床面上 5cm 胴一部 No.2
6 土製品 支脚か	高　残 2.8 底　復 7.4	手捏ね。底面は平坦で側面は垂直に立ち上がり、上方ほど径を小さくしていく。底面、側面ともナデ。内部は中実であり、空洞にはならない。	5YR6/6　橙 やや粗い　透明細粒微量、白微粒少量、赤褐細粒多量 やや硬質	覆土 底一部

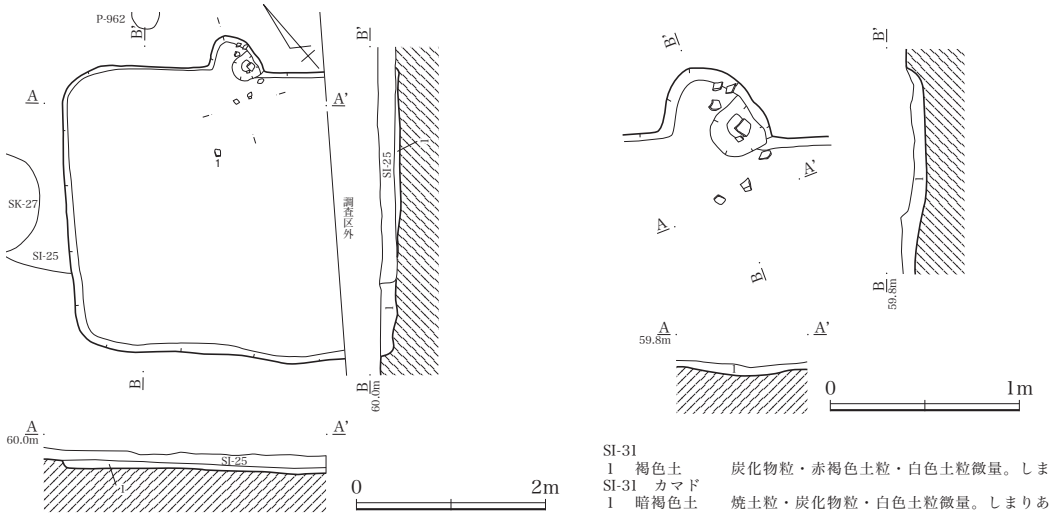
規模　南西－北東方向 2.92m、北西－南東方向は不明だが、調査した部分は 3.64m である。　**覆土の状態**　炭化物などを含む第 1 層である。　**壁**　残存壁高は 13 ～ 20cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　北隅に認められる。断面形は浅い「U」字状で、幅は 13 ～ 16cm、深さは床面から 4 ～ 6 cm である。覆土は住居跡覆土と同様の暗褐色土である。

火処　なし。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少ない。須恵器坏 1 と甕 2、羽釜 3、須恵器甕 5 は住居跡内西部にあり、床面からやや浮いた状態で出土する。図化以外には、土師器甕片主体の土師器 32 点（320g）、須恵器片 1 点（25g）がある。なお、重複する SI-31 との区別がつかない遺物としては、厚手な甕主体の土師器片のほか、多数の須恵器片、灰釉陶器片がある。本遺構の年代は 10 世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－３１（第 23・24 図、第 10 表、図版六）

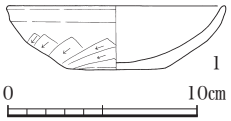
位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 26、Ｈ－ 26 グリッドに位置する。南西に SI-14・35、北西に SK-27

が近接してある。　**重複**　南西辺を除く住居跡の大部分がSI-25に切られるが、本住居跡の床面には達していないため、失われるのは覆土部分のみである。南東部が調査区外となっている。　**平面形**　南東部が調査区外となっているため不明であるが、方形ないしは長方形と考えられる。カマドが北東壁際中央にあるものと仮定すれば、北西－南東方向にやや長い方形と推定できる。中軸線はＮ－40°－Ｅである。　**規模**　南西－北東方向が3.04m、北西－南東方向は不明だが、調査した部分は2.84mである。　**覆土の状態**　炭化物粒などを含む第１層である。　**壁**　残存壁高は４～18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北東壁際にカマドがある。天井部、袖部とも失われているほか、上面がSI-25に切られるなど残存状態は良くない。煙道部は壁を約34cm「Ｕ」字状に掘り込んでいる。火床面は床面よりわずかに低く、火床面から煙道へは同じ高さで続き、先端は丸みを持って立ち上がる。カマド内右寄りにはピット状の掘り込みがあるが、火床面からの深さは３cm程度であり、用途は不明である。カマドの使用痕跡は明瞭ではなく、カマド内に堆積する第１層に焼土粒や炭化物粒が含まれる程度である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、調査範囲ではカマド周辺で遺物が数点ま



第23図　和田遺跡　SI-31実測図

とまって出土する以外､特に集中する部分もない。図示した土師器坏１は､住居中央部、床上2cmから出土する。非ロクロ成形で、体部から底部にケズリがなされる。図化以外は土師器坏・甕片12点（160g）のみで、甕は厚手なものばかりである。なお、重複するSI-31との区別がつかない遺物としては、厚手な甕主体の土師器片のほか、多数の須恵器片、灰釉陶器片がある。本遺構の時期は、10世紀前～中葉と考えられる。



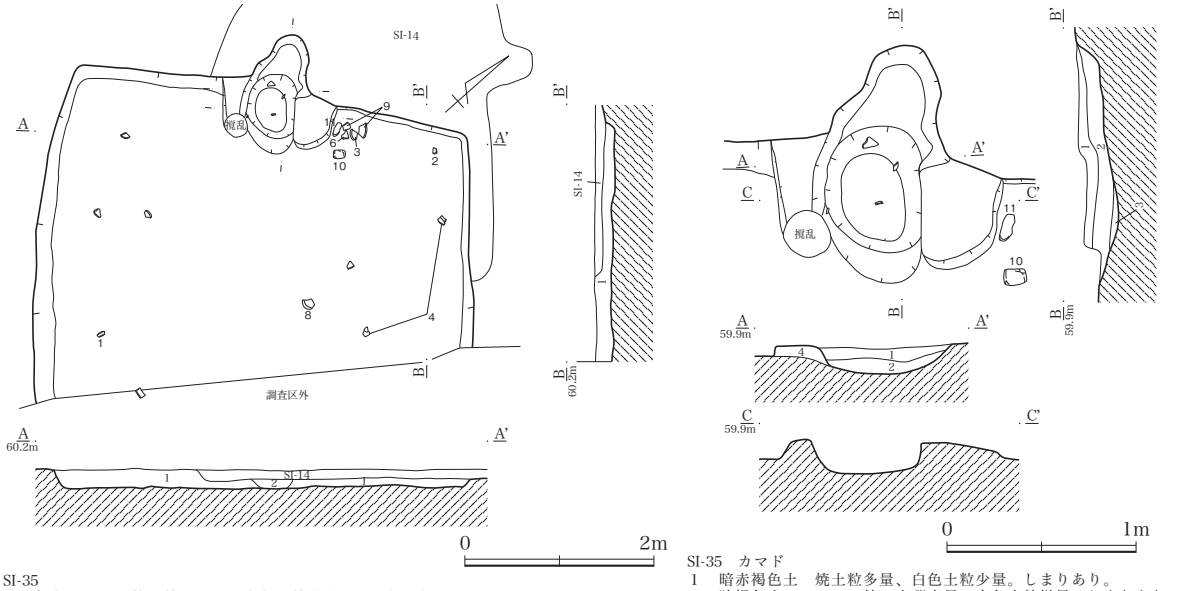
第24図　和田遺跡
SI-31出土遺物実測図

第10表　和田遺跡　SI-31出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土･焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復11.5 高　3.4 底　復5.1	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。平底。	5YR5/6　明赤褐 粗い　黒細粒多量、赤褐細粒少量、白細粒微量 硬質	中央部床面上2cm 口～体1/3 No.1

ＳＩ－３５（第25・26図、第11表、図版六）

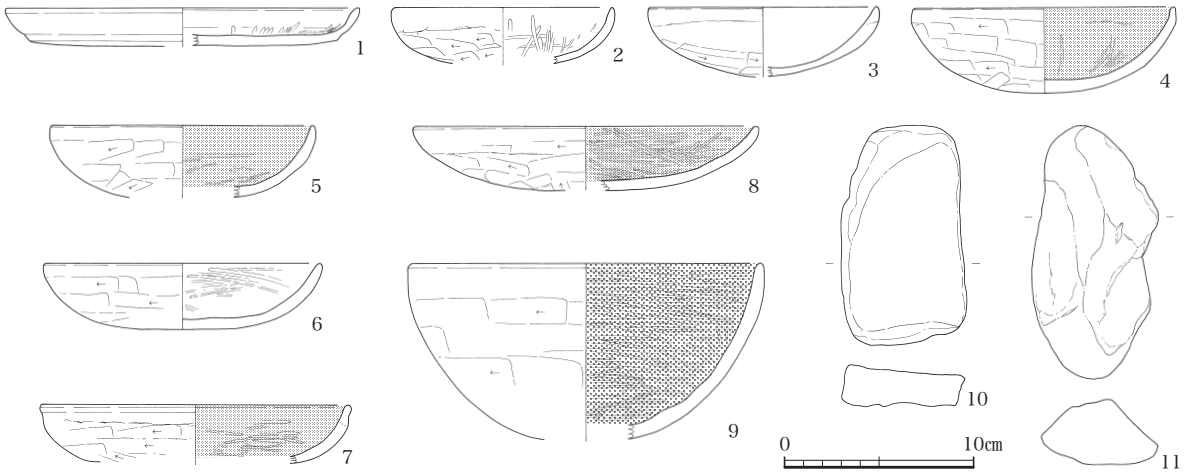
　位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－26グリッドに位置する。北東にSI-25・31が近接し、北西1.5mにSK-28がある　**重複**　SI-14に切られる。カマド部分にピット状の撹乱がある。　**平面形**　方形に近い形状と



SI-35
1　褐色土　　焼土粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。
2　暗赤褐色土　焼土粒多量、白色土粒少量。しまりあり。

SI-35　カマド
1　暗赤褐色土　焼土粒多量、白色土粒少量。しまりあり。
2　暗褐色土　　ローム粒・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
3　赤褐色土　　焼土主体。しまりあり。
4　暗黄褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。

第 25 図　和田遺跡　SI-35 実測図



第 26 図　和田遺跡　SI-35 出土遺物実測図

推定されるが、南東部が調査区外となっているため不明である。中軸線はＮ－ 44°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.65m、南東－北西方向は不明だが、調査した部分は 3.28m である。　**覆土の状態**　焼土を含む第１層が住居跡全体に堆積する。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 21cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北西壁際中央にカマドがある。天井部は失われているが、本遺跡の調査例としては比較的良好な残存状態である。袖部はローム粒を含む暗黄褐色土で構築され、左袖先端はピット状の撹乱に切られる。袖部内面の被熱の痕跡は明瞭で、左右双方とも内面が広範囲に硬化赤変する。火床面は床面より 10cm ほど低くなっており、天井部の崩落とみられる焼土主体の第３層が堆積したのち、ローム粒を含む第２層、焼土を多量に含む第１層が堆積する。煙道部は壁を約 56cm「U」字状に掘り込んで作られていて、火床面から煙道へは緩やかに高くなった後平坦面となり、先端は直線的に外傾して立ち上がる。煙道部の覆土は火床面から続く第１・第２層である。カマド内からは、土師器坏片数点が出土する。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、調査した部分ではカマド右袖部外側で遺物が数点まとまって出土する以外、特に集中する部分はない。遺物は半球状の土師器坏主体

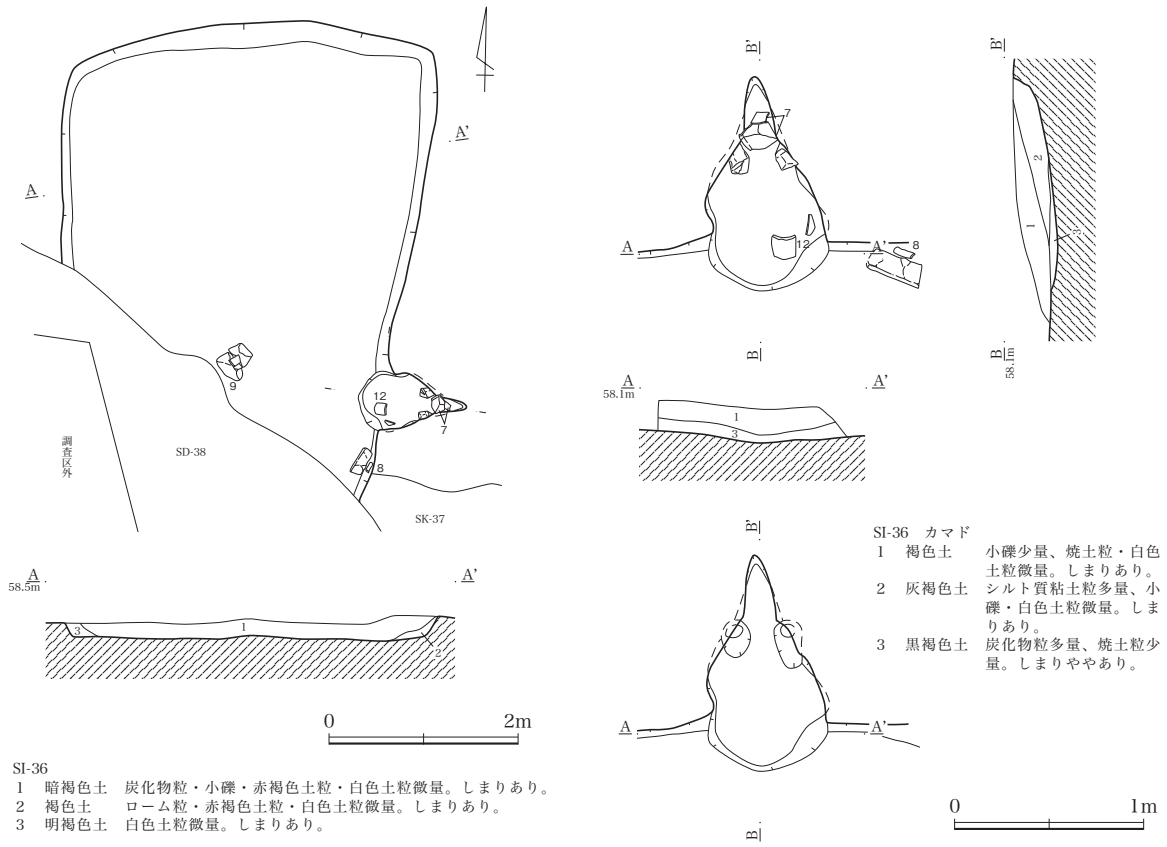
第 11 表　和田遺跡　SI-35 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 18.8 高　2.0 底　復 16.4	内面口縁ヨコナデ、体部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、下位横方向のケズリ。口縁が外反し、体部中位に段を持つ。扁平な底部。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒少量、赤褐細粒微量 硬質	南隅床面上 2cm 口～体 1/4 No.1
2 土師器 坏	口　復 11.6 高　残 3.0	内面ヨコナデ後多方向のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部下位横方向のケズリ。器壁薄い。	7.5YR6/6　橙 緻密　黒微粒微量、赤褐細粒少量 硬質	北隅床面上 5cm 口～体 1/5 No.8
3 土師器 坏	口　復 12.3 高　残 3.7	内面ヨコナデ及びナデと推察されるが磨滅のため不明瞭。ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデで頸部紐積痕あり。体部横方向のケズリ。丸底。器壁薄い。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗粒少量 硬質	カマド東側床面上 6cm 口～体 1/2 No.9
4 土師器 坏	口　復 14.0 高　4.5	内面口縁～底部表面磨滅のため調整不明瞭。多方向のミガキ、全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体部横方向ケズリ、底部ケズリ。丸底。	5YR6/6　橙 緻密　赤褐粗粒少量 やや硬質	東部床面上 13cm と北東壁際床面上 13cm が接合 口～底 1/4 No.5・7、SI-14
5 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 3.8	内面口縁～体部横方向主体のミガキ、全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。丸底。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　赤褐微粒微量 硬質	覆土 口～底 1/6
6 土師器 坏	口　復 14.7 高　3.5	内面口縁～底部ミガキ、表面剥離のため調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部横方向のケズリ。扁平な丸底。	5YR5/8　明赤褐色 やや粗い　赤褐粗粒少量、白細粒微量 硬質	カマド東側床面上 3cm 口 1/4 ～体・底 1/6 No.10
7 土師器 坏	口　復 16.4 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向のミガキ、全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。扁平な丸底。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
8 土師器 坏	口　復 18.4 高　残 3.4	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向主体のミガキ。底部ナデ後一方向のミガキ、全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。扁平な丸底。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、白粗粒微量 やや硬質	中央部床面上 3cm 口～底 1/2 No.4
9 土師器 鉢	口　復 18.8 高　残 9.3	内面口縁～体部横方向のミガキ、全面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部横方向のケズリ。口縁直立。器壁やや厚い。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	カマド東側床面上 6cm と 3cm が接合 口～体 1/3 No.9・10、SI-14
10 石 礫	長　11.5 幅　6.5 厚　2.1 重　293.0	長方形、板状。特に加工の痕跡なし。	5B4/1　暗青灰 緻密　チャート	カマド東側床面上 3cm。構築材か。 完形 KNo.6
11 石 礫	長　13.4 幅　6.2 厚　3.4 重　368.1	棒状。一面が平坦。特に加工の痕跡なし。	2.5YR7/3　浅黄 やや緻密　砂岩	カマド右袖東側床面上 4cm。構築材か。 完形 KNo.5

であり、漆仕上げされたものが半数以上ある。坏片は住居全体から出土するが、坏３、坏６は鉢９と共にカマド右袖外側からまとまって出土する。ともに出土した礫 10・11 は、カマド構築材の可能性もあろう。図化以外の遺物は土師器片 128 点（1,410g）で坏片主体（半球状３、口縁部が外反する模倣坏１など）であり、甕は厚手の小破片のみである。大型甑らしき破片１点を含むが、鉢片はない。須恵器は坏、甕など小破片５点（40ｇ）、粘土塊は２点（20 ｇ）である。本遺構の時期は、８世紀前半（第２四半期頃か）と考えられる。

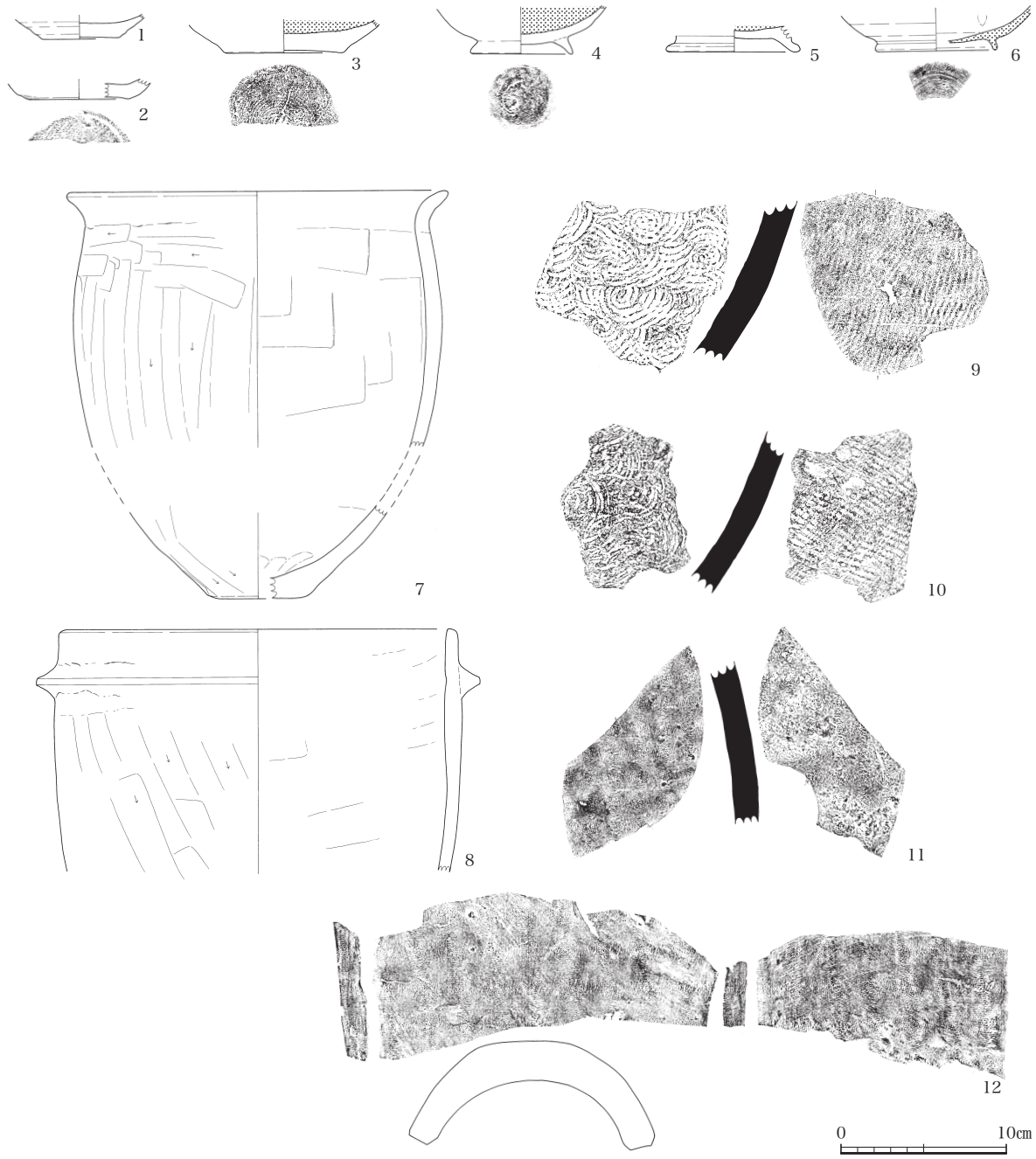
ＳＩ－３６（第 27・28 図、第 12 表、図版六・七・四八）

位置　Ⅱ区西部及びⅥ区南西部にあたる台地平坦面、Ｊ－ 20 グリッドに位置する。東に SK-39・41 が近接してある。　重複　Ⅱ区西部とⅥ区南西部にまたがっており、調査は２回に分けて実施された。住居跡南



第 27 図　和田遺跡　SI-36 実測図

部が SD-38 と SK-37 に切られる。　**平面形**　南部が SD-38 と SK-37 に切られるため明確にしえないが、南北方向に長いやや不整な長方形とみられる。南北方向の中軸線はＮ－６°－Ｅである。　**規模**　東西方向が 3.62m、南北方向は不明だが、確認できた部分は 3.85m である。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第１層は炭化物を含む。なお土層断面には示していないが、第１層上に本遺構と SD-38 を覆う灰褐色土があり、そこに天仁元年（1108 年）噴出の浅間Ｂ軽石が含まれることが判明している。　**壁**　表土層からの土層を確認できた部分では、残存壁高は 40cm である。壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**掘方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　東壁際にカマドがある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。火床面は床面より約４cm 低くなっており、炭化物のほか天井部内面の崩落とみられる焼土を含む第３層が堆積したのち、天井部粘土と推定されるシルト質粘土を多量に含む第２層が堆積する。煙道部及び燃焼部は壁を約 85cm「凸」字状に掘り込んで作られていて、燃焼部先端には左右にややオーバーハングする小孔を設け、中に角柱状をしたチャート質の礫を柱のように埋め込んでいる。小孔の規模は左 26 × 15cm、底面からの深さ８cm、右は 20 × 15cm、底面からの深さ７cm である。礫は左右ともおよそ 10cm 角で、長さは左が９cm、右が 21cm である。長さは左右で異なるが、左の礫は垂直気味に立て小孔内に浅く埋め込むのに対し、右の礫は手前に傾斜するように埋め込まれるため上面の高さはあまり変わらず、左の礫が３cm ほど高くなっている程度である。礫間の距離は 14cm である。これらは燃焼部先端で礫を門形に組む構造材の一部と推定され、上に架けられたとみられる礫はカマド右側から出土する。板状のこの礫もチャート質で、長さは 30cm、幅 12cm、厚さ 14cm である。火床面から煙道へは緩やかに高くなり、先端は外傾して立ち上がる。煙道部の覆土は火床面から続く第２層である。燃焼部から煙道部内面には被熱により赤変する部分が多い。煙道及び火床面、カマド右側などからは、土師器甕片など遺物数点が出土する。　**貯**



第 28 図　和田遺跡　SI-36 出土遺物実測図

第 12 表　和田遺跡　SI-36 出土遺物観察表

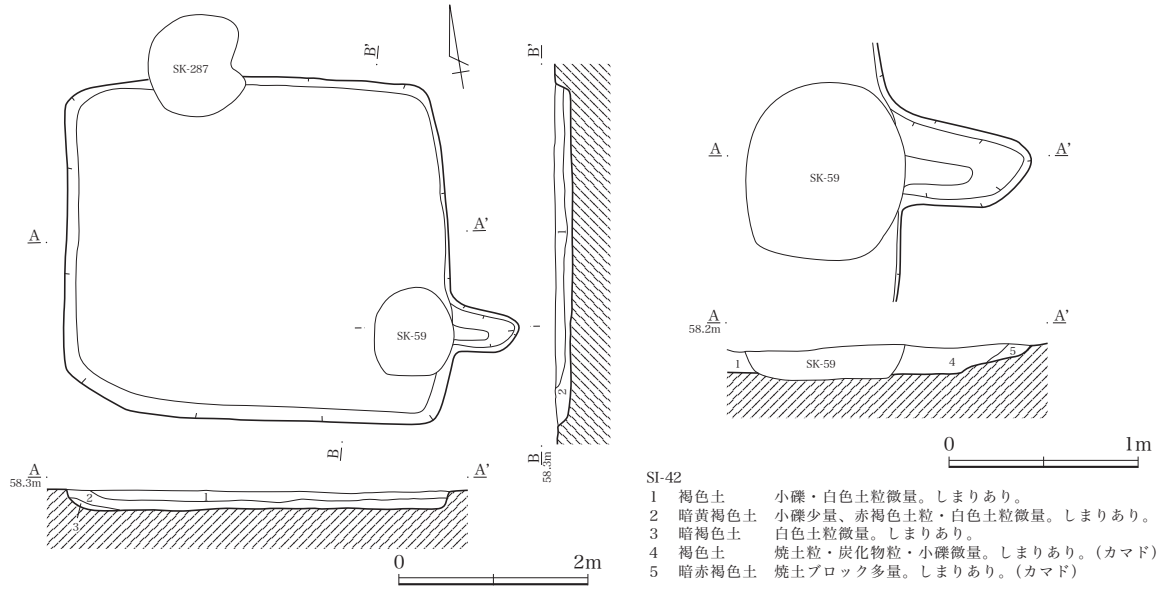
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.2 底　復 4.8	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ヘラケズリか。磨滅のため不明瞭。底部はやや厚く、わずかに上げ底。	5YR7/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、灰褐礫微量、白粗粒微量 軟質	覆土 底 1/2
2 土師器 坏	高　残 1.2 底　復 6.4	ロクロ成形。内面ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部は回転糸切り離し。平底。底部外周に切り離しの糸があたった痕跡あり。	7.5YR8/2　灰白 やや緻密　赤褐細粒少量、白礫微量 やや硬質	覆土 底 1/3
3 土師器 坏	高　残 2.0 底　復 7.2	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ、黒色処理。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整。器壁は厚く、底部はわずかに上げ底。	2.5YR7/8　橙 やや緻密　白細粒微量 やや軟質	覆土 体～底 1/3

4 土師器 高台付坏	高　残 2.9 高台　6.1	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ､表面が磨滅し調整不明瞭。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。高台はやや高く、器壁はやや薄い。	5YR7/6　橙 やや粗い　砂礫微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 体 1/3 ～底完存
5 土師器 高台付坏	高　残 1.6 高台　復 8.2	ロクロ成形。高台部と底部中央部のみ残る。内面黒色処理。表面剝落が著しく調整不明瞭。外面高台貼り付け。底部切り離しはヘラ切りのようだが不明瞭。高台は大きく外反する。	7.5YR8/2　灰白 やや粗い　赤褐細粒微量 やや硬質	カマド 高台部完存 K
6 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.7 高台　復 7.2	内面ロクロナデ。灰釉が垂れており、ツケガケと考えられる。外面ロクロナデ、高台貼り付け。高台は薄く内湾しており、下端は丸くおさまる。薄手。高台は三日月形。光ヶ丘 1 号窯式。東濃産。	5Y8/1　灰白 緻密　白細粒少量、灰礫微量 硬質	覆土 体～底 1/5
7 土師器 甕	口　復 23.0 高　復 24.5 底　復 6.0	内面口縁ヨコナデ、胴部横方向ナデ、底部ナデ後指ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリの後頸部横方向ケズリ、紐積痕あり。底部一方向のケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・青灰粗粒多量、赤褐粗粒少量、金雲母細粒微量 硬質	カマド煙道内火底面上 10cm と 12cm が接合 口～胴 1/6、底 1/4 KNo.1・2・K
8 土師器 羽釜	口　復 24.0 高　残 14.7 鍔径 復 26.8	内面口縁部～胴部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のヘラケズリ、口縁部下に断面方形の鍔を貼り付け。	7.5YR7/4　にぶい橙 粗い　赤褐礫少量、灰褐礫微量、白細粒少量 やや硬質	カマド南側床面上 6cm 口～胴 1/6 KNo.5・K
9 須恵器 甕	高　残 9.6	内面胴部同心円当具痕。外面やや不明瞭な平行叩き後横方向の細線を施す。厚手。混入。	N4/0　灰 緻密　白細粒多量 硬質	中央部床面上 2cm 胴一部 No.1
10 須恵器 甕	高　残 9.9	内面同心円当具痕がわずかに残る。外面擬格子叩き。混入。	N3/0　暗灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 胴一部
11 須恵器 甕	高　残 9.9	内面ナデ。外面胴部ナデで自然釉付着。混入。	N5/0　灰 緻密　黒・白粗粒少量 硬質	覆土 胴一部
12 瓦 丸瓦	長　残 8.7 幅　14.8 厚　2.4 高　6.5 重　残 544.0	凹面は布目、凸面はナデでヘラ書きあり。側面はヘラケズリにより面取りを行う。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　白細粒多量、黒細粒少量 硬質	カマド内火床面上 4cm 破片 KNo.4

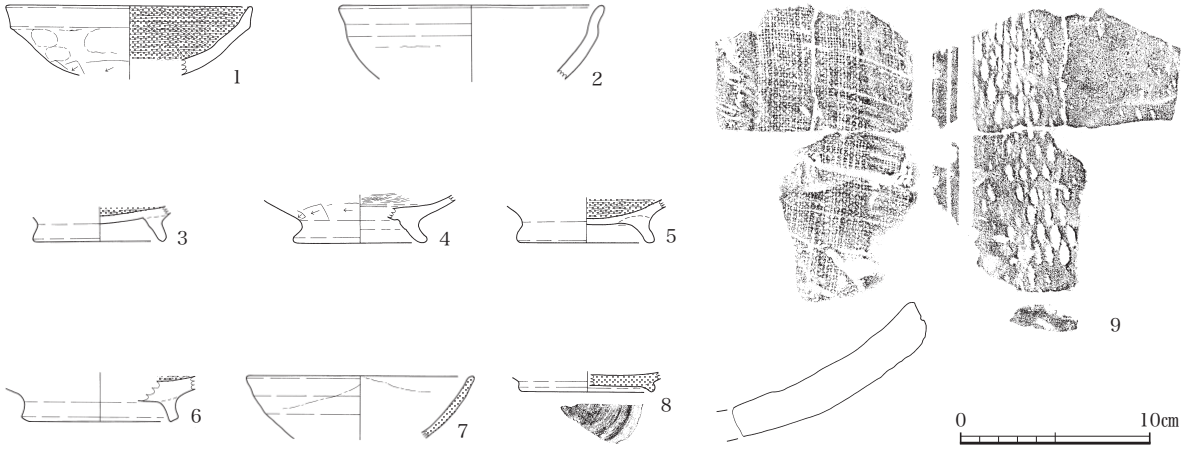
蔵穴　なし。　**遺物**　調査した部分では遺物は少なく、カマド周辺以外ではカマド西側で礫がまとまって出土する程度である。土師器甕 7 はカマド煙道部からの出土で、カマドにかけられていた可能性もある。羽釜 8 はカマド東側の床面上 4cm から出土する。丸瓦 12 はカマド中央部の火床面上 4cm から出土したもので、カマドの構築材か支脚として使用されたと見られる。須恵器甕 10・11・12 はいずれも混入だろう。図化以外の遺物は、土師器片は坏 54 点（662g）、甕 36 点（214g）で、坏はロクロ成形を主体として非ロクロ系も含まれる。甕は羽釜を含む厚手の甕片が多い。須恵器片は坏 7 点（48g）、甕 18 点（704g）で混入品が多いと見られる。粘土塊は 1 点（15g）である。本遺構の年代は 10 世紀前葉であろう。

ＳＩ－４２（第 29・30 図、第 13 表、図版七）

位置　Ⅱ区西部及びⅥ区南西部にあたる台地平坦面、Ｊ－ 18・19 グリッドに位置する。東 1 m に SK-58、南 1 m に SK-44、西 1.2m に SK-40 が隣接してある。　**重複**　Ⅱ区西部とⅥ区南西部にまたがっており、調査は 2 回に分けて実施された。北壁付近で SI-198 を切り、南東部にあるカマド火床面付近が SK-59 に、北壁西寄りが SK-287 にそれぞれ切られる。　**平面形**　方形で、東西方向がやや長い。南北方向の中軸線はＮ－ 11°－Ｅである。　**規模**　東西方向が 4.06m、南北方向が 3.65m である。　**覆土の状態**　覆土は第 1 ～第 3 層で、各層とも焼土や炭化物を含まない。　**壁**　残存壁高は 17 ～ 21cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　東壁際南寄りにカマドがある。天井部、袖部とも失われているほか、火床面付近が SK-59 に大きく切られるなど残存状態は良くない。煙道部は壁を約 65cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面より 8 cm 低く、火床面から



第 29 図　和田遺跡　SI-42 実測図



第 30 図　和田遺跡　SI-42 出土遺物実測図

第 13 表　和田遺跡　SI-42 出土遺物観察表

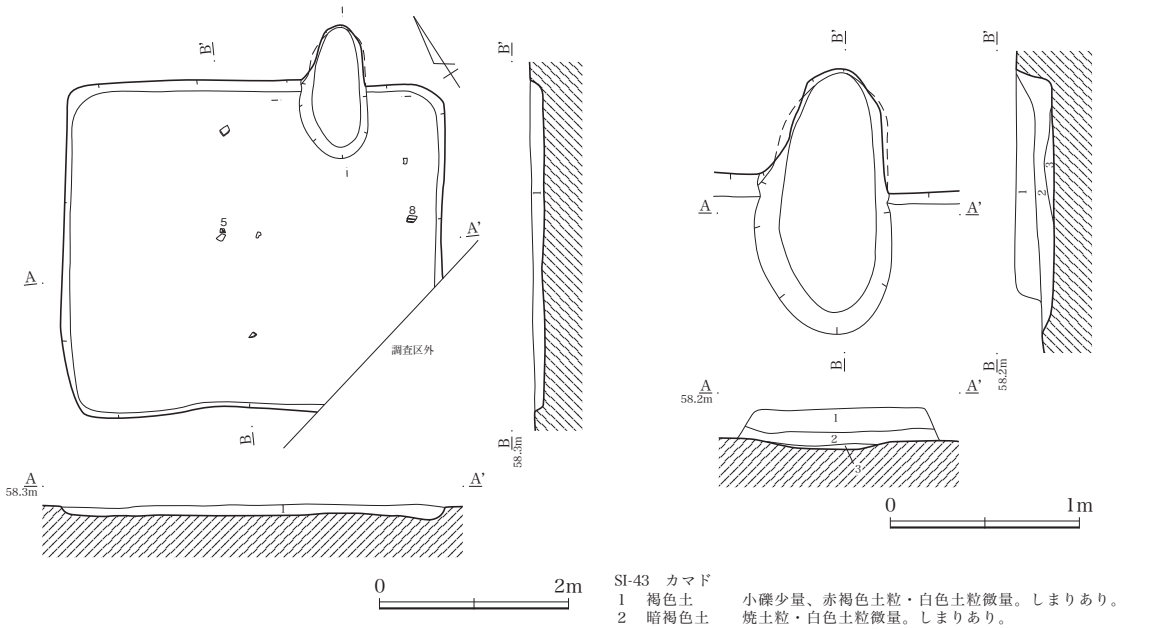
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.7	非ロクロ成形。内面ナデ・ヨコナデ後やや乱雑な横方向のヘラミガキ、黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部上半は整形時のナデそのままであり無調整、下半はケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　灰褐細粒多量、白細粒少量、赤褐細粒微量、金雲母粗～細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 2/3
2 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 4.0	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデないしナデと見られるが表面剥落のため不明確。外面口縁ヨコナデで頸部紐積痕あり。口縁は外反する。外面体部は粗いナデ。整形時のまま無調整の可能性高い。	2.5Y5/4　黄褐 やや緻密　灰黒・赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部
3 土師器 高台付坏	高　残 1.8 高台　復 7.0	内面底部ナデ後ミガキ。黒色処理。外面底部高台貼り付け、底部の調整はナデか。高台は「ハ」の字状に開く、やや高め。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　灰黒・白細粒少量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 底 1/2
4 土師器 高台付坏	高　残 2.5 高台　復 7.0	内面ナデ後ミガキ、内面やや色が暗く何らかの表面処理をしている可能性あり。外面体部ケズリ後高台貼り付け。「ハ」の字状に広く外反する高台。	5YR6/6　橙 やや緻密　灰黒・白細粒少量、赤褐細粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/3

5 土師器 高台付坏	高　残 2.3 高台　復 7.2	内面底部ケズリ、黒色処理。外面底部ナデ後高台貼付け。高台はやや薄い造りで「ハ」の字状に低く開く。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　灰黒粗粒少量、赤褐細粒少量、白細粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 底部 1/2
6 土師器 高台付坏	高　残 2.4 高台径 復8.3	内面底部ミガキ、黒色処理。外面底部ナデ後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。高台部下端は斜めの面となる。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　灰黒粗粒少量、白細粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 底一部
7 灰釉陶器 高台付椀	口　復 12.0 高　残 3.3	内面ロクロナデ。外面ロクロナデ。口縁部周辺にツケガケで灰釉施釉。大原２号窯式・東濃産。	10Y7/1　灰白 緻密　白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部
8 灰釉陶器 高台付椀	高　残 1.2 高台　復 7.2	内面ロクロナデ。外面ロクロナデ。底部高台貼り付け、高台は低く断面は丸味をおびる。大原２号窯式・東濃産。	5Y8/1　灰白 緻密　赤褐微粒少量 硬質	覆土 底一部
9 瓦 平瓦	長　残 16.5 幅　残 11.2 厚　1.7～2.0	凹面布目痕、ケズリ痕、模骨痕あり。凸面縄目叩き。側面はヘラケズリで凸面側のみ面取り状のケズリあり。端面は垂直方向のケズリのみ。	5Y7/1　灰白 緻密　灰黒礫微量、灰黒細粒少量 硬質	SI-43 と遺構間接合 破片 覆土・SI-43

煙道へはやや急に立ち上がったのち緩やかな傾斜となり、先端は外傾して立ち上がる。燃焼部から煙道部の内面には、被熱により赤変する部分がある。煙道先端には天井内面の崩落とみられる焼土層の５層、カマド全体には焼土や炭化物をわずかに含む４層が堆積する。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかである。土師器坏１・２は非ロクロ成形で、１と高台付坏３・５・６は内面黒色処理される。灰釉陶器の高台付椀７は灰釉ツケガケと見られ、８と共に大原２号窯式と考えられる。SI-43 と遺構間接合する、凹面に模骨痕を持つ平瓦９は混入と考えられる。図化以外には、土師器坏片 125 点（736g）、甕片 150 点（1,844g）、須恵器片 21 点（380g）、灰釉陶器片１点（９g）、土製品２点（42g）、粘土塊２点（28 ｇ）がある。土師器・須恵器とも８世紀代の遺物が多く混入する。本遺構に伴う土師器坏・高台付坏には図化以外でもロクロ成形が多いが、非ロクロ系も一定量含まれているのが特徴といえようか。さほど厚手ではない土師器甕は、小破片ばかりのため図示できなかった。本遺構の年代は、10 世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－４３（第 31・32 図、第 14 表、図版七）

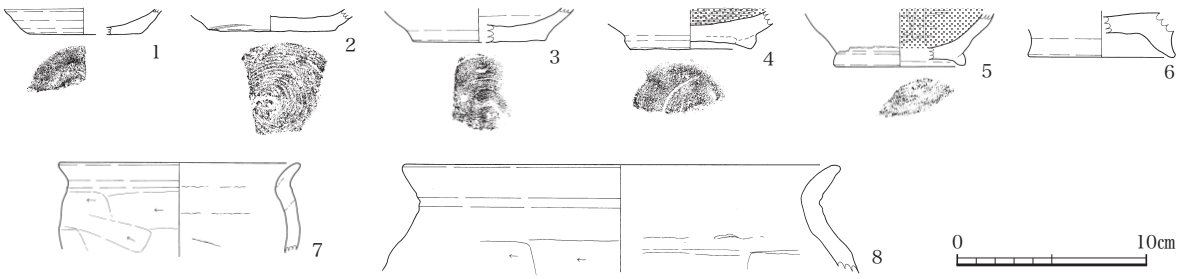
位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。北東 1m に SK-44、北西 1.3m に SK-41、北２m に SI-42 が隣接してある。　**重複**　なし。南隅が調査区外となる。　**平面形**　北西－南東方向がやや長い方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 32°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 4.00m、南西－北東方向が 3.47m である。　**覆土の状態**　覆土は第１層で、ローム粒をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は８～15cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北東壁際東寄りにカマドがある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は 73 × 140cm で、煙道部は壁を約 65cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面より６cm 低く、焼土を微量に含む第２層、住居跡覆土に類似する第１層が堆積する。火床面から煙道へは平坦に続き、先端は直線的に急角度で立ち上がる。煙道覆土最下層は天井崩落の一部とみられる焼土ブロックと炭化物を多量に含む第３層で、その上に第２・第１層が堆積する。燃焼部から煙道部にあたるカマド内面は緩やかにオーバーハングしていて、被熱により赤変する部分が多い。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土した遺物はわずかである。土師器坏１・２・３、高台付坏４・５・６はすべてロクロ成形で、４・５は内面が黒色処理される。４は底部回転糸切離し後無調整で、底部が厚く層状に剥離するため円柱造りの可能性がある。５は住居中央部の床面上 7cm より逆位で、厚手な土師器甕８は東部の床面上 6cm から出土する。図化以外には、土師器坏片 44 点（280g）、甕片 44 点（702g）、須恵器蓋片１点（22g）、甕片４点（296g）がある。土師器坏はロクロ成



SI-43
1　暗褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-43　カマド
1　褐色土　　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　　焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗黄褐色土　炭化物粒多量、焼土ブロック微量。しまりあり。

第 31 図　和田遺跡　SI-43 実測図



第 32 図　和田遺跡　SI-43 出土遺物実測図

第 14 表　和田遺跡　SI-43 出土遺物観察表

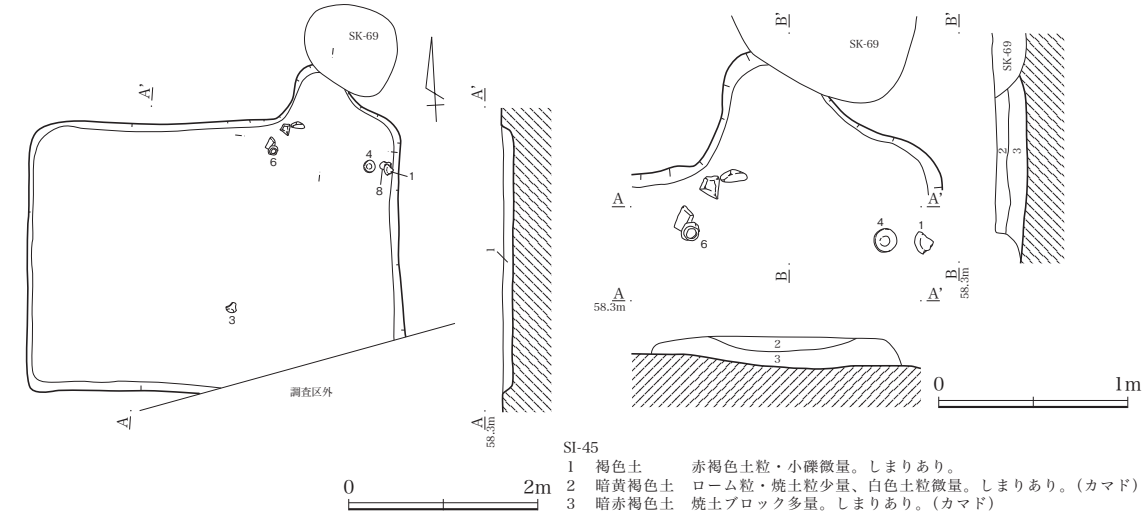
番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.4 底　復 6.2	ロクロ成形。内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ナデ。回転糸切り離しか。	5YR7/4　にぶい橙 緻密　黒・赤褐細粒少量 硬質	覆土 底 1/4
2 土師器 坏	高　残 1.2 底　復 6.6	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。切り離し後の糸の痕跡が体部にも入る。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　黒細粒多量、赤褐細粒少量、細砂粒少量 硬質	覆土 底 1/3
3 土師器 坏	高　残 1.7 底　復 7.0	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5YR6/6　橙 緻密　黒・赤褐細粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 体～底 1/3
4 土師器 高台付坏	高　残 2.0 高台　復 6.8	ロクロ成形。内面底部一方向ミガキ、黒色処理か。外面体部ロクロナデ、底面回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は低い。底部の剝離状況から円柱造りの可能性あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒微量、透明細粒少量、黒微粒少量 硬質	覆土 体～底 1/3
5 土師器 高台付坏	高　残 2.9 高台　復 7.0	ロクロ成形。内面体～底部ミガキ、黒色処理。外面体部ナデ、底部ナデ後高台貼り付け。高台は断面三角形で低い。切り離しは糸切りの可能性あるが不明。	5Y3/2　オリーブ黒 緻密　黒細粒微量、白細粒少量 やや硬質	中央部床面上 7cm、逆位 体～底 1/5 No.2

6 土師器 高台付坏	高　残 2.2 高台　復 7.7	ロクロ成形。内面底部ナデか？表面磨滅のため不明瞭。外面底部ナデ？後高台貼付け、切り離しは不明。高台は断面三角形で器壁厚い。	7.5YR6/6　橙 緻密　白細粒微量、赤細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 底 1/2
7 土師器 甕	口　復 12.8 高　残 4.8 最大 復 12.8	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデで紐積痕わずかにあり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。小型。	7.5YR4/6　褐 やや粗い　黒・白細粒少量、透明細粒微量、粗～砂細粒少量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 口～胴一部
8 土師器 甕	口　復 23.2 高　残 5.6	内面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ナデで上端に紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ケズリ。武蔵型。最大径は胴部。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　黒・白細粒少量、透明細粒微量、砂礫微量、砂粗粒多量 硬質	東部床面上 6cm 口～胴上端 1/6 No.7

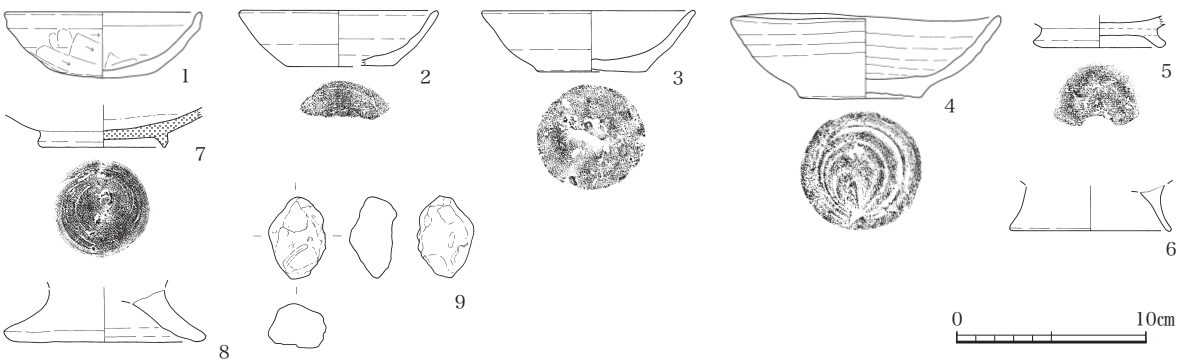
形、底部糸切離しが主体で、土師器甕は球胴で口縁部は「く」の字形を呈するものが多い。須恵器蓋・甕はより古い時代の遺物が混入したものだろう。本遺構の年代は、10 世紀前葉と考えられる。なお、ほぼ同時期の SI-42 で一定量みられた非ロクロ系坏は、本遺構ではみられない。時期の違いによるものであろうか。

ＳＩ－４５（第 33・34 図、第 15 表、図版七・八・四八）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。北西に SI-42 が近接してあるほか、北 1 m に SK-58、北西 1 m に SK-59 がある。　**重複**　住居跡北東部にあるカマド煙道部が SK-69 に切られる。南東隅は調査区外となる。　**平面形**　東西方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はＮ－３°－Ｅである。　**規模**　東西方向が 3.93m、南北方向が 2.87m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第 1 層）である。　**壁**　掘り込みが浅いため残存壁高は 10 ～ 12cm 程度であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天



第 33 図　和田遺跡　SI-45 実測図



第 34 図　和田遺跡　SI-45 出土遺物実測図

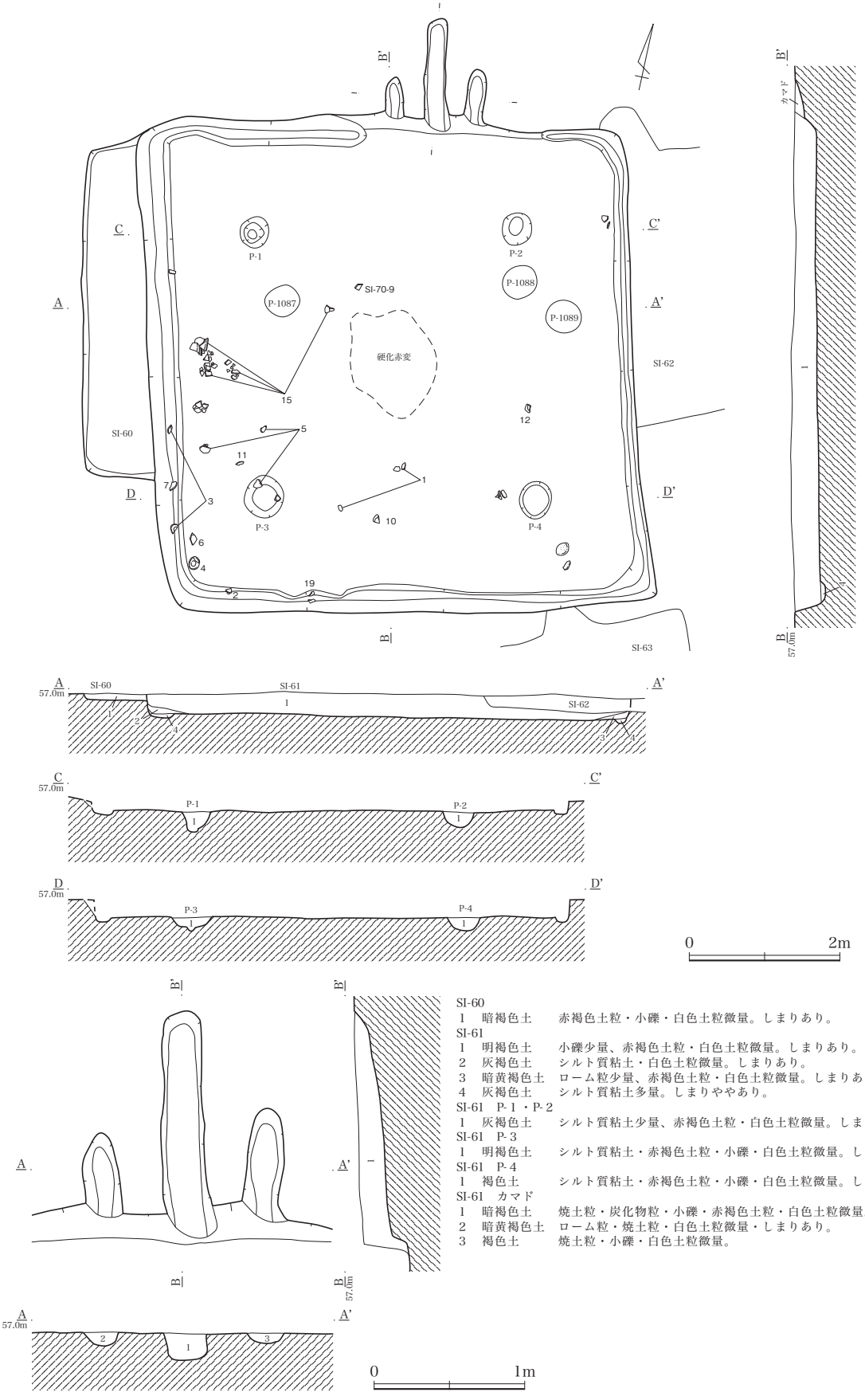
第 15 表　和田遺跡　SI-45 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.5 高　3.5 底　5.4	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部下位斜方向ケズリ、底部ほぼ一方向の数回のケズリ。体部上半は整形時のナデのみであり無調整。底部細砂粒多量に付着。丸味を帯びるややいびつな平底。	5YR6/6　橙 やや緻密　灰褐・白粗粒多量、赤褐粗粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	北東隅床面上 6cm、逆位、８の上 口～体 2/1、底完存 KNo.1
2 土師器 坏	口　復 10.6 高　2.9 底　復 5.8	ロクロ成形。内面ロクロナデ。外面ロクロナデで底部ヘラ切り離しと見られるが磨滅のため不明確。	5Y7/1　灰白 やや緻密　灰褐・白細粒多量 やや軟質	覆土 口一部、体 1/6、底 1/4
3 土師器 坏	口　復 11.2 高　3.3 底　5.7	ロクロ成形。内面ロクロナデ。内面には植物由来と見られる黒色物質が付着しており調整不明瞭。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り離し後無調整。平底。	10YR8/2　灰白 緻密　赤粗粒少量、白細粒少量 やや軟質	中央部床面上 口一部、底完存 No.1
4 土師器 坏	口　14.4 高　4.5 底　6.5 重　211.6	ロクロ成形。内面ロクロナデ。ロクロ目が顕著に残る。外面口縁～体部ロクロナデ､底部回転糸切り離し後無調整。やや上げ底。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐・青灰粗粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	カマド東南部床面上、正立 完形 KNo.2
5 土師器 高台付坏	高　残 1.7 高台　復 7.0	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面底部ナデ､高台貼り付け。高台は断面方形で下端は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り離し痕の残る粘土板を貼り合わせた円柱づくり。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐礫微量、白細粒少量、砂礫微量 やや硬質	カマド 底 1/2 K
6 土師器 高台付坏	高　残 2.4 高台　8.5	貼り付けてあった高台部分のみが残る。内外面高台部分ナデ。高台は薄く「ハ」の字状に開き、高い。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　灰褐・赤褐粗粒微量、粗砂粒微量 やや軟質	カマド南西部床面上 2cm、逆位 高台完存 KNo.3
7 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.2 高台　6.9	内面ロクロナデ、体部灰釉ハケヌリ。重ね焼きの痕跡あり。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼付け。高台は断面三角形で低い。光ヶ丘１号窯式新段階。東濃産。	5Y7/1　灰白 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 高台ほぼ完存
8 土師器 台付甕	高　残 2.7 高台　10.2	内面上半ナデ、下半ヨコナデ、外面も上半ナデ、下半ヨコナデと見られるが表面磨滅のため不明確。貼り付けた台部のみ剥がれて残る。「ハ」の字状に開き、やや厚い。	5YR6/3　にぶい橙 やや緻密　白粗粒少量 やや硬質	北東隅床面直上、1の下 台 3/4 No.2
9 土製品 粘土塊	長　4.3 幅　2.9 厚　2.2 重　20.0	平面・断面ともに楕円形。捏ねた粘土をそのまま焼成している。礫を含み、植物繊維が付着していた痕跡あり。	5YR6/6　橙 緻密　赤褐礫少量 やや硬質	覆土 完形

井部、袖部とも失われ、煙道先端は SK-69 に切られるなど、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 55cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面より３cm ほど緩やかに低くなった部分で、火床面から煙道へはほぼ平坦に続き、先端付近は外傾して立ち上がる。カマド覆土最下層は天井の崩落とみられる焼土ブロックを多量に含む第３層で、その上にはローム粒と焼土粒を含む第２層が堆積する。SK-69 に切られていないカマド左側内面を見ると、燃焼部から煙道部にあたるカマド内面はわずかにオーバーハングしていて、被熱により赤変する部分が多い。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、カマド周辺にやや集中する。非ロクロ成形の土師器坏１は、北東隅で台付甕８の上に重なり、伏せられた状態で出土した。２・３・４はロクロ成形で、２、３は底部ヘラ切り離し、４は回転糸切り離しと見られる。３は中央部床面直上、４はカマド前面の床面直上からの出土である。高台付坏５はロクロ成形で円柱造りと見られる。６は高めの高台のみで、カマド前面の床面上２cm から出土する。灰釉の高台付椀は高台周辺のみの出土で、光ヶ丘１号窯式新段階と考えられる。図化以外には、土師器片 41 点（400g）、粘土塊１点（6g）、須恵器片１点（20g）がある。土師器は坏・高台付坏が主体である。本遺構の年代は、10 世紀前葉と考えられる。

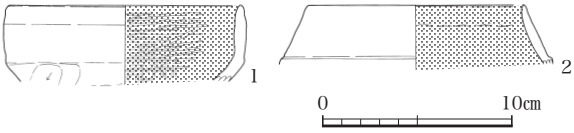
ＳＩ－６０（第 35・36 図、第 16 表、図版八）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 14・15 グリッドに位置する。東側に SI-62・63 が近接してある。



SI-60
1　暗褐色土　　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-61
1　明褐色土　　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　　シルト質粘土・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗黄褐色土　ローム粒少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　　シルト質粘土多量。しまりややあり。
SI-61　P-1・P-2
1　灰褐色土　　シルト質粘土少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-61　P-3
1　明褐色土　　シルト質粘土・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-61　P-4
1　褐色土　　シルト質粘土・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-61　カマド
1　暗褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　ローム粒・焼土粒・白色土粒微量・しまりあり。
3　褐色土　　焼土粒・小礫・白色土粒微量。

第 35 図　和田遺跡　SI-60・61 実測図



第 36 図　和田遺跡　SI-60 出土遺物実測図

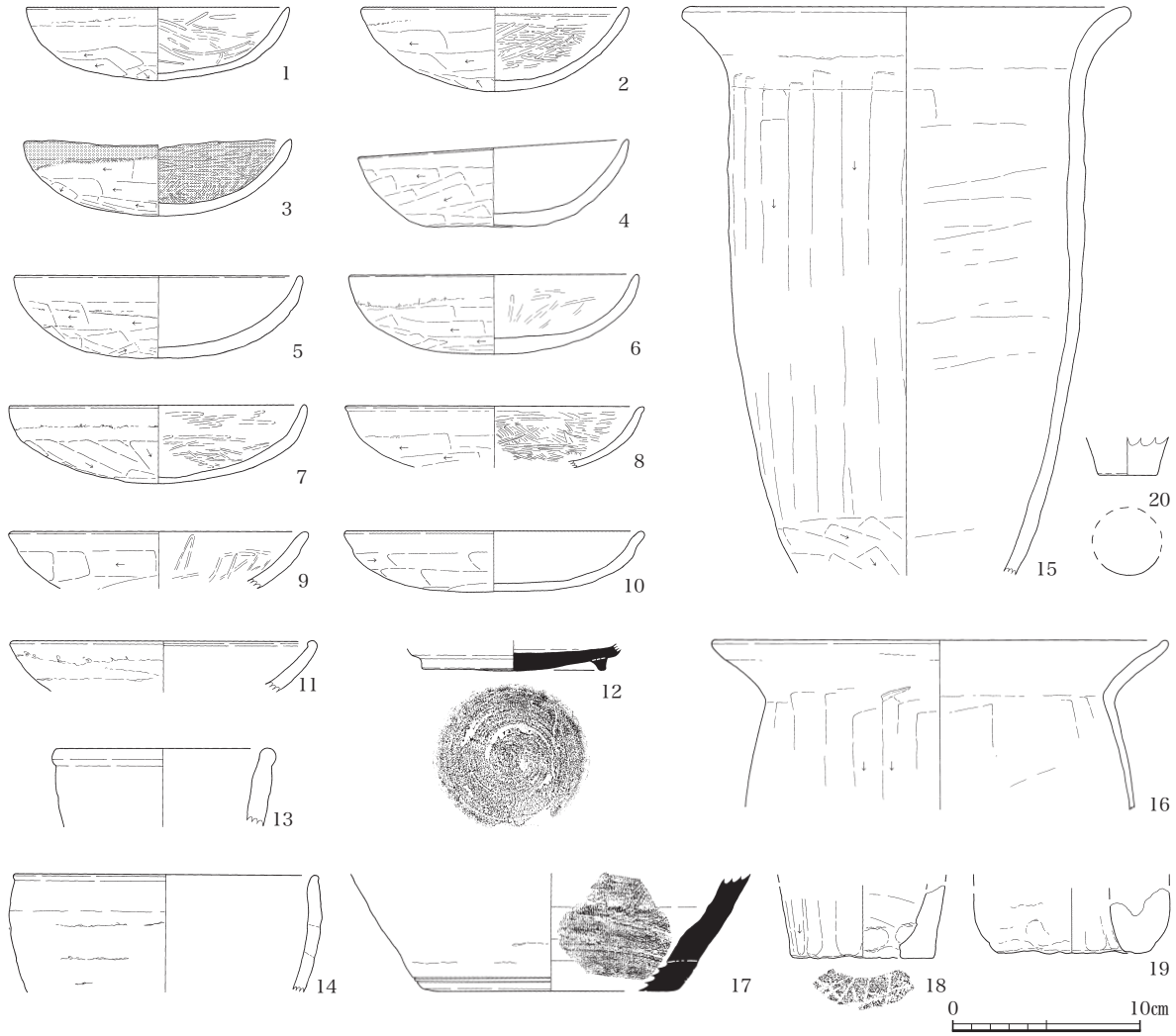
重複　住居跡の大半が SI-61 に切られる。　**平面形**　方形ないし長方形と推定されるが、住居跡の西辺のみしか残存していないため不明である。西壁から導き出した南北方向の中軸線はＮ－ 12°－Ｗである。　**規模**　南北方向が 4.50m である。東西方向は不明だが、調査により確認した部分は 0.84m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　掘り込みが浅いため残存壁高は８cm 程度であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　なし。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかである。図化した土師器坏１、鉢２は、いずれも内面が黒色処理されている。図化しなかった遺物は土師器長胴甕の破片６点（40g）のみである。本遺構の年代は７世紀前半だろう。

第 16 表　和田遺跡　SI-60 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.6 高　残 4.0 最大 復 12.8	内面口縁横方向ミガキ、体部多方向ミガキ、黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部斜方向ケズリ、口縁と体部の間に稜をもち、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。器壁厚い。	10R5/8　赤 やや粗い　白細粒少量、赤褐細粒微量、砂細粒少量 やや硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 鉢	口　復 11.6 高　残 3.2	内面口縁ヨコナデ、黒色処理。外面口縁ヨコナデ。口縁が内傾し、体部上端に段を持つ。器壁薄い。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒微量、赤褐細粒少量 やや硬質	覆土 口一部

ＳＩ－６１（第 35・37 図、第 17 表、図版八・四八）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 14・15、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。南東 12m に SI-70・77 がある。　**重複**　西部で SI-60 を、南東部で SI-63 のカマド煙道部を切り、東部が SI-62 に切られる。SI-62 の掘り込みは浅いため、切られるのは覆土部分のみである。住居跡中央部で P-1087・1088・1089 のピット３本と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　方形で、中軸線はＮ－ 10°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 6.45m、南北方向が 6.57m である。　**覆土の状態**　覆土は４層で、第４層は壁溝覆土である。壁際のシルト質粘土を含む第２層、ローム粒を含む第３層ののち、ほぼ住居跡全体に第１層が堆積している。　**壁**　残存壁高は 24 ～ 35cm であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。中央部には、被熱のためか硬化赤変している部分がある。範囲は不整楕円形で、規模は 1.40 × 1.15m である。炉とも考えられるが、平坦で付属施設はなく、甕などの遺物が集中することもない。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが４本（P- １～ P- ４）ある。P- １は径 40 × 38cm、深さ 26cm、P- ２は径 44 × 40cm、深さ 20cm、P- ３は径 54 × 54cm、深さ 18cm、P- ４は径 48 × 42cm、深さ 17cm である。P- １・P- ３には柱部分を示すと見られる凹みが底面にある。図示してはいないものの、同様のものは P- ２・P- ４でも確認できており、それらからすると柱材の直径は９～ 12cm ほどと推定できる。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 3.50m、P- ３－ P- ４間が 3.61m、P- ３－ P- １間が 3.53m、P- ４－ P- ２間が 3.65m、であり、主柱穴はほぼ方形に配置される。　**壁溝**　北壁際のカマド部分を除き壁際を全周する。断面形は逆台形となる部分が多く、幅は 16 ～ 34cm、深さは床面から４～７cm である。覆土は灰褐色土（第４層）で、シルト質粘土を含む。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。通例と異なり、北壁に直交して北に延びる直線的な３本の溝として確認された。天井部、袖部は失われており、火床面や燃焼部も確認できない。煙道と考えられる中



第 37 図　和田遺跡　SI-61 出土遺物実測図

央の溝は幅 25 ～ 32cm、長さ 26cm、確認面からの深さ 35cm で、床面から 10cm の段差を持って始まる。底面は緩やかに北に向かって高くなり、先端は外傾して立ち上がる。両側面はほぼ垂直な立ち上がりで、オーバーハング気味になる部分もある。被熱による硬化赤変は広範囲で認められており、南寄りほど顕著である。覆土は住居跡内から続く均質な暗褐色土（第 1 層）で、焼土・炭化物とも微量しか含まない。焼土ブロックなども認められないため、天井部崩落前に一気に埋没したものと推定される。煙道左側の溝は幅 24cm、長さ 1.50cm、確認面からの深さ 17cm で、覆土は微量の焼土やローム粒を含む暗黄褐色土（第 2 層）、右側は幅 25cm、長さ 75cm、確認面からの深さ 13cm で、覆土は微量の焼土を含む褐色土（第 3 層）である。これらの溝については用途不明だが、粘土などで構築したカマド本体の両側縁に接して掘られたものと推定できよう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器坏主体に比較的多く、住居跡内南東部にやや集中する。土師器坏は半球状のものが主体だが、平底もある。漆仕上げされる坏 3 は壁溝内底面直上からの出土、ほぼ完形の坏 4 は南西隅の床面上 8 cm からの出土である。甕は長胴の破片が多く、武蔵型は少ない。長胴甕 15 は住居の中央～西部から床面直上ないしやや浮いて出土した破片の接合である。筒形土製品 19 は南壁際の高い位置より出土する。三足土器の脚部片 20 は 9 世紀代の混入と見られる。図化以外には土師器坏片 307 点(3,831g)、甕片 572 点（5,462g)、須恵器片 11 点（170g）があり、盤の破片もわずかに認められる。本遺構の年代は、

第 17 表　和田遺跡　SI-61 出土遺物観察表

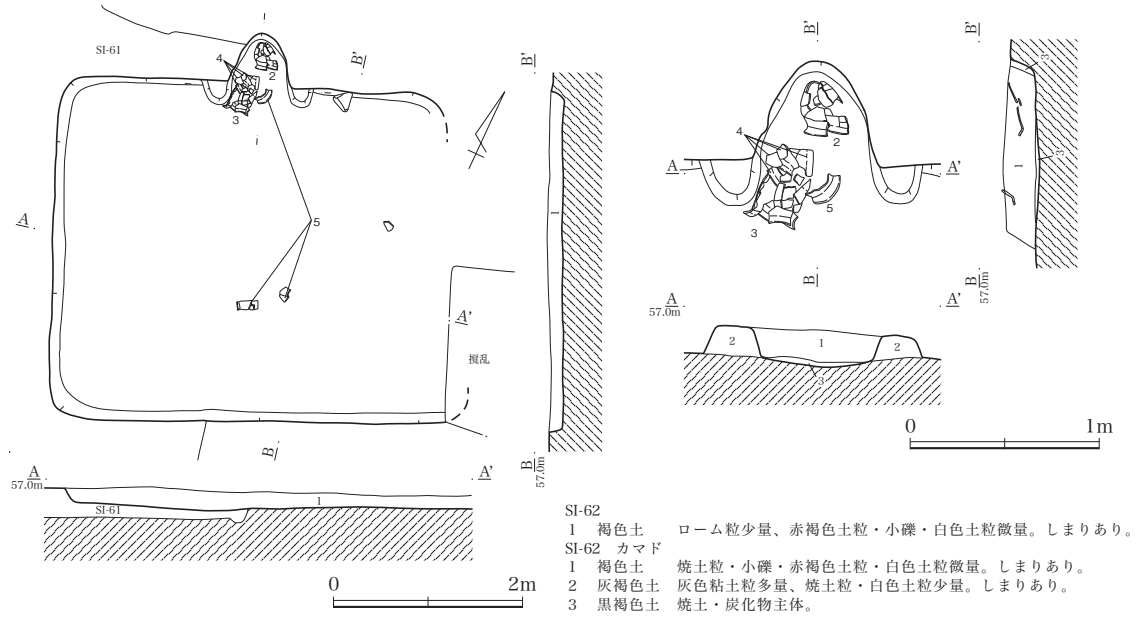
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.0 高　3.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。内面表面剝落のためミガキの粗密は不明。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部上半ナデ、体部下半～底部ケズリ。偏平な丸底で器壁薄い。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白細粒微量、赤褐細粒多量 やや硬質	南部床面上 3cm と 12cm が接合 口～体 1/2、底 1/4 No.4・7
2 土師器 坏	口　復 14.2 高　4.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。表面磨滅がすすむ。口縁部にはわずかな段あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白・赤褐細粒少量 やや硬質	南西隅床面上 12cm 口～体 1/3、底 5/6 No.10
3 土師器 坏	口　14.3 高　4.0 重　202.3	内面口縁部～底部ヨコナデ・ナデ後密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部に端ナデで一部ケズリで紐積痕あり。体部下半～底部ケズリ。内面全体から口縁部外面漆仕上げ。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒微粒多量、白細粒少量、赤褐細粒多量 やや硬質	西壁溝底面直上、正立と南西隅床面上 3cm が接合 完形 No.13・15
4 土師器 坏	口　14.5 高　4.7 底　6.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。表面磨滅が著しい。ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、底部ケズリ後ナデ。底部はやや上げ底気味に丸味を持ち、いびつで平坦。器壁厚い。口縁部内面は、全周が被熱により赤変している。	2.5YR7/3　淡赤橙 やや緻密　黒細粒多量、白細粒少量 やや硬質	南西隅床面上 8cm、正立 ほぼ完形 No.11
5 土師器 坏	口　15.4 高　4.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキとも見られるが表面磨滅が著しく不明確。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、体部上半ナデのみの部分あり。口縁部～体部紐積痕あり。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや粗い　黒細粒少量、赤褐細粒微量、白細粒微量、透明細粒微量、砂礫微量 やや軟質	南西部床面上 2cm と 9cm と 15cm が接合 ほぼ完形、口一部欠 No.16・18・19
6 土師器 坏	口　復 15.6 高　4.2	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ、表面磨滅のためミガキの粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。体部上端紐積痕あり。浅い丸底。器壁やや厚い。	5YR6/8　橙 やや粗い　黒・白細粒少量、透明細粒微量、赤褐礫少量 やや硬質	南西隅床面上 8cm 口 1/4、体 1/2、底 5/6 No.12
7 土師器 坏	口　復 15.9 高　4.2	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後口縁～体部横方向のミガキ。底部一方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。外面口縁のヨコナデは上半が丁寧で下半は条線が目立つ粗いもの。体部上半に稜があり、口縁はわずかに外反する。浅い丸底。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや緻密　黒・白細粒少量、透明細粒少量、赤褐粗粒少量 やや硬質	西壁際床面直上 5cm 口 1/2 ～体 2/3、底完存 No.14
8 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ後多方向の緻密なミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、口縁下をやや強くナデているため口縁が若干玉縁状に外反する。器壁は薄い。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒少量、白細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	覆土 口 1/6 ～体一部
9 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ後ミガキ。表面磨滅のためミガキの粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。口縁部は短く外反する。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒・赤褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
10 土師器 坏	口　復 16.0 高　3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ナデ、体～底部ケズリ、口縁部は薄くやや外反する。内外面とも表面剝落が著しい。漆仕上げの可能性あり。浅い丸底。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　黒細粒多量、白細粒少量、赤褐粗粒多量、透明細粒少量 やや硬質	南部床面上 8cm 口～体 1/6、底一部 No.6
11 土師器 坏	口　復 16.4 高　残 2.7	内面口縁部～体部ナデ後ミガキの可能性あるが表面磨滅のため調整不明瞭。口縁直下を強くナデており口唇部内側が肥厚する。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで紐積痕を明瞭に残す。白色軟質の胎土。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　黒細粒多量、白細粒少量、赤褐細粒少量、透明細粒微量 やや硬質	南西部床面上 12cm 口～体 1/5 No.17
12 須恵器 高台付坏	高　残 1.4 高台径　9.8	内面底部ロクロナデ。外面底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。高台は断面方形でほぼ垂直、外面底部中央は高台より突出する。	2.5Y7/1　灰白 やや緻密　黒粗粒多量、白細粒少量 硬質	東部床面上 8cm と SI-62 の破片が接合 底完存 No.3・SI-62
13 土師器 鉢	口　復 12.0 高　残 4.2	内外面とも口縁部はヨコナデ、体部ナデと思われるが表面磨滅のため調整不明瞭。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　褐細粒少量、砂礫微量 軟質	覆土 口～体上半一部

14 土師器 鉢	口　復 16.4 高　残 6.3 最大 復 16.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部軽いナデで紐積痕を明瞭に残す。最大径は胴部上位。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒少量、黒褐細～微粒多量 やや硬質	覆土 口～体一部
15 土師器 甕	口　復 24.0 高　残 30.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面胴部上半縦方向ケズリ後口縁ヨコナデ。外面胴部下半は強く火を受ける。長胴。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白褐細粒多量、灰黒礫～粗粒多量、金雲母細粒微量 やや硬質	中央部床面直上と西部床面上 4cm・5cm・12cm が接合 口～胴 2/3 No.21・29・30・31
16 土師器 甕	口　24.2 高　残 9.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向ケズリ後胴部上端軽いナデ。武蔵型。	5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒多量、黒褐細粒少量 硬質	覆土 口完存、胴上半一部
17 須恵器 甕	高　残 6.3 底　復 13.8	内面胴部ロクロナデ後同心円当具痕。外面胴部ナデ、下端に二重沈線、粘土の継ぎ目、底部ケズリで細い棒の圧痕あり。	10Y5/1　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 胴下位～底一部
18 土製品 筒形	高　残 3.8 底　復 7.6 重　残 42.4	内面体部下半ナデで紐積痕・指頭圧痕あり。外面体部下半ナデ、底部木葉痕あり。比較的整った円筒状になるものか。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　灰粗粒少量、白細粒少量、赤褐礫微量 硬質	覆土 体～底 1/5
19 土製品 筒形	高　残 3.4 底　復 8.2 重　残 83.6	内面体部下端ナデで指頭圧痕あり。外面体部下端ナデ、底部ナデ。円筒状で上端は粘土の継ぎ目で欠損する。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量、赤褐礫微量 やや硬質	南壁際床面上 23cm 体一部～底 1/3 No.8
20 土師器 三足土器	高　残 2.0 底　復 3.2	三足土器の脚部下端破片。中実棒状で断面円形。外面、底面ともに丁寧なナデ。混入。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 脚下端破片

7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

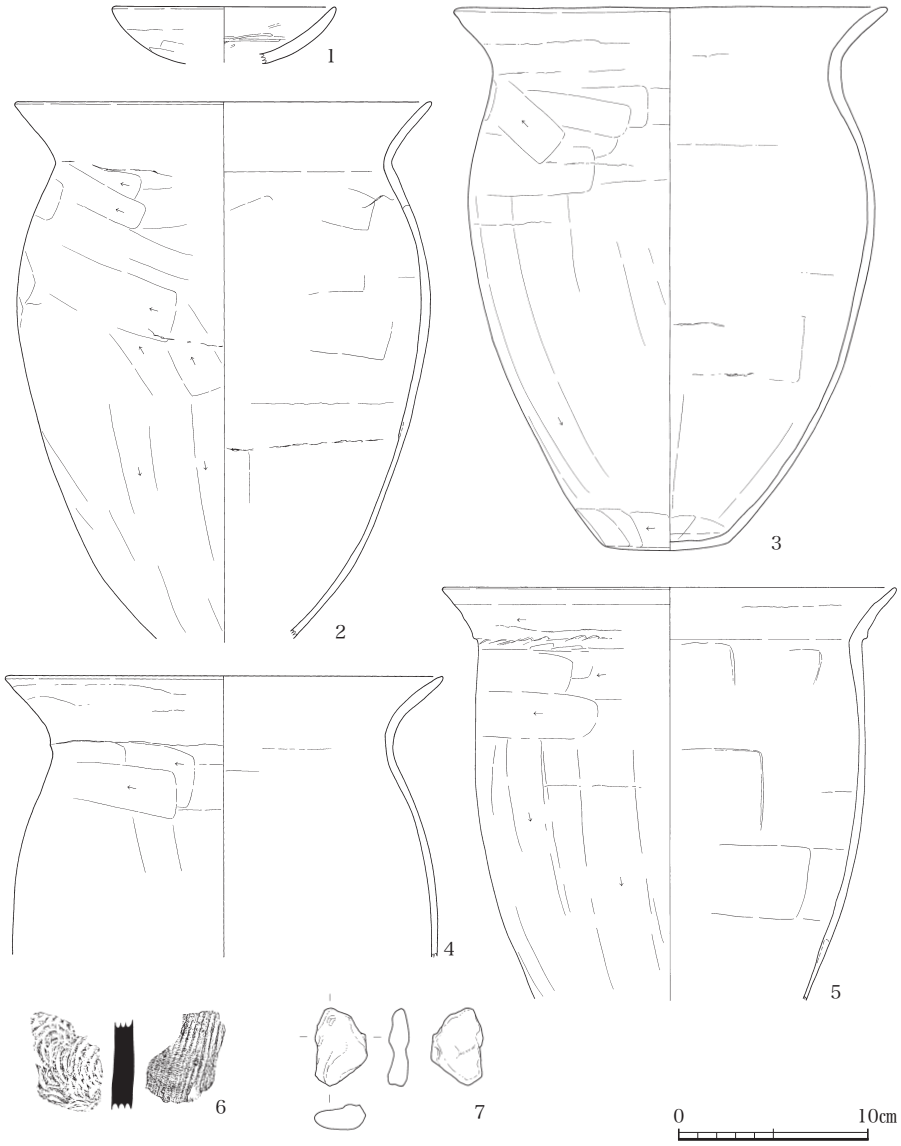
ＳＩ－６２（第 38・39 図、第 18 表、図版八・九・四八）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 14、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。西に SI-60 、南に SI-63 が近接してある。　**重複**　西半で SI-61 を切る。南東部は、表土除去時の掘り下げにより失われている。Ⅶ区調査区にかかる北東部は、Ⅶ区の遺構確認面が低かったため掘り込みを確認できていない。　**平面形**　東辺が不



第 38 図　和田遺跡　SI-62 実測図

明だが、東西方向に長い長方形とみられる。南北方向の中軸線はＮ－ 20°－Ｗである。　**規模**　南北方向は 3.52m である。東西方向は不明だが、調査により確認した部分は 3.90m である。　**覆土の状態**　覆土はローム粒を少量含む褐色土（第１層）である。　**壁**　掘り込みが浅いため残存壁高は 15cm 程度であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　北壁際中央付近にカマドがある。天井部は失われているが袖部は残っており、残存状態は比較的良好である。規模は 120 × 80cm で、袖部は床面上に灰色粘土からなる第２層を置いて作っている。火床面は床面とほぼ同じ高さで、焼土と炭化物主体の第３層ののち、住居跡覆土に類似する緻密な第１層が堆積する。火床面から煙道へはわずかに高くなったあと平坦になり、先端は外傾して直線的に立ち上がる。煙



第 39 図　和田遺跡　SI-62 出土遺物実測図

第 18 表　和田遺跡　SI-62 出土遺物観察表

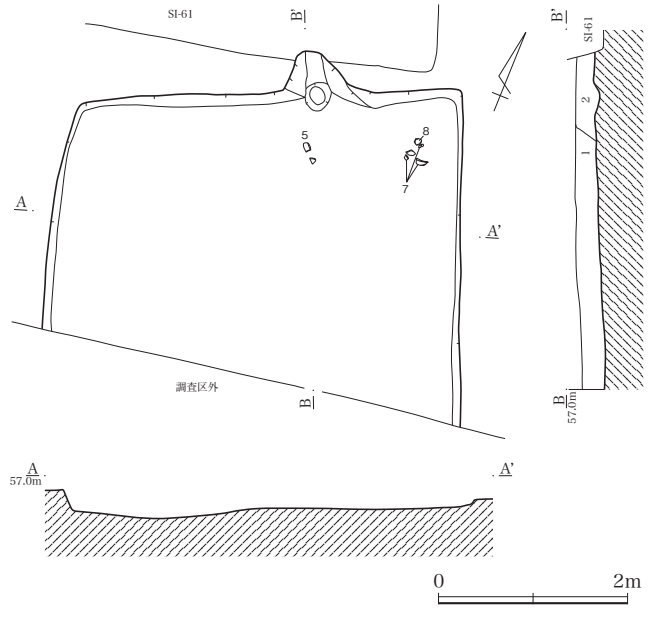
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.8 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ後ミガキ。表面剝落により調整不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。丸底。	7.5YR8/1　灰白 やや緻密　黒粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口 1/6
2 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 28.5 最大 復 22.0	内面口縁ヨコナデ、胴部横方向ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部下位縦方向ケズリ。中位斜方向ケズリ後上位横方向ケズリ。武蔵型。最大径は口径と胴部上位がほぼ同じ。口縁部下 17 ㎝位に接合痕あり。内面で器壁の違いと粘土の繋ぎ目として確認できる。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　青灰微粒多量、白細粒多量、赤褐粗粒少量 やや硬質	カマド中央部火床面直上、横位 口～胴 1/2 KNo.4・K
3 土師器 甕	口　復 22.9 高　28.7 底　6.4	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部中～下位を縦方向ケズリ後上位を横方向にケズリ。胴部下端は横方向ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。底部は丸味を帯びた平底でやや大きい。外面底部のみ黒褐色。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量 やや硬質	カマド中央部火床面上 10cm と 5cm が接合、横位 口 3/4､胴 1/2､底完存 KNo.2・3・K

4 土師器 甕	口　復 23.2 高　残 14.7 最大 復 23.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端横方向ケズリ、中位縦方向ケズリ。ケズリは縦方向後横方向で胴部上端はヘラ状工具によるケズリが深く施され段が形成される。最大径は口縁部、武蔵型。	5YR6/6　橙 緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	カマド中央部火床面上 5cm、横位 口～胴上半 2/3 KNo.3
5 土師器 甕	口　復 24.0 高　残 21.8	内面口縁ヨコナデ、胴部横方向のナデ。外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半ナデ、胴部下位縦方向ケズリ後上位横方向ケズリ。武蔵型。最大径は口径。胴部上端にケズリの際にヘラ状工具があたった痕跡顕著に残る。胴部下半接合痕あり。上位の胎土は白味を帯び下半は褐色のため明瞭に確認できる。接合部分のみ器壁厚い。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐・白粗粒少量、青灰細粒多量 やや軟質	中央部床面上 2cm とカマド内部火床面上 10cm が接合 口 3/4 ～胴 1/4 No.1・2・KNo.1・K
6 須恵器 甕	高　残 4.7	内面胴部同心円当具痕。外面平行叩き。内面の色調は黄灰色、外面は灰色、内部は赤褐色であり完全な還元焔焼成ではない。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　白微粒少量 硬質	覆土 胴一部
7 土製品 粘土塊	長　4.1 幅　2.7 厚　1.3 重　11.2	平面不正三角形。断面楕円形。捏ねた粘土を固めて焼成している。小礫を含み、焼成は不良。無調整。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐・青灰礫少量 やや軟質	カマド 完形 K

道部は壁を約 55cm「U」字状に掘り込んで作られ、第１層が堆積する。燃焼部から煙道部にあたるカマド内面は、左側は垂直気味、右側は外傾で、ともに被熱により赤変する部分が多い。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器甕主体に比較的多く、カマド内に集中する。２・３・４は口縁部径と胴部径がほぼ同じで、３・４はカマド内左寄りから火床面よりやや浮いて、２は煙道底面直上より横位の状態で出土する。５はカマド内の破片と住居中央部で出土した破片の接合である。粘土塊７もカマド内から出土する。図化以外の破片は土師器のみで、坏 64 点（472g）、甕 227 点 (1,416g) である。坏は胎土白色で半球状のものを主体に、口縁が外傾する坏も少量見られる。甕は底径のやや大きい武蔵型がほとんどだが、長胴、球胴と見られる破片も含まれる。本遺構の年代は、8 世紀前葉である。

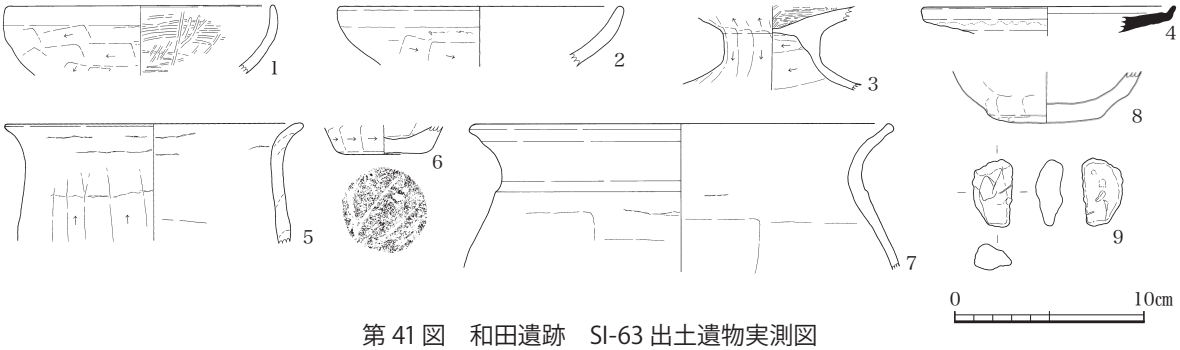
ＳＩ－６３（第 40・41 図、第 19 表、図版九・四八）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 14 グリッドに位置する。北西に SI-60、北に SI-62 が隣接している。**重複**　北壁にあるカマドの煙道が SI-61 に切られる。南側は調査区外となる。　**平面形**　方形ないし長方形と推定されるが、住居跡の南辺が調査区外となっているため不明である。南北方向の中軸線はＮ－ 20°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.37m である。南北方向は不明だが、調査により確認した部分は 3.09m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は８～ 23cm であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部、袖部とも失われ、煙道先端は SI-61 に切られるなど残存状態は良くない。規模は 70 × 64cm で、煙道部は壁を約 47cm「U」字状に掘り込んで作



SI-63
1　暗褐色土　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　焼土粒・炭化物粒・灰白色粘土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 40 図　和田遺跡　SI-63 実測図



第 41 図　和田遺跡　SI-63 出土遺物実測図

第 19 表　和田遺跡　SI-63 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 3.6 最大 復 14.5	内面口縁～体部ヨコナデ後多方向にミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐細粒少量、金雲母細粒微量、粗砂粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 坏	口　復 15.1 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、口縁部下位に無調整部分あり。器壁やや厚手で漆仕上げの可能性あるが表面磨滅のため不明。	10YR8/1　灰白 やや緻密　白細粒微量、砂粒少量 やや軟質	覆土 口一部
3 土師器 高坏	高　残 4.3 脚上半　3.8	内面底部一方向にミガキ後 90°直交する方向で周囲 4 方をミガキ。上から見ると方形状のミガキとなる。外面体部縦方向ケズリ後脚部縦方向ケズリ。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、細砂粒少量 やや硬質	カマド 底～脚上半完存 K
4 須恵器 高坏	口　復 13.4 高　残 1.3	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ後体部ケズリ。内面全体、外面、口縁部～体部自然釉付着。	5PB6/1　青灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口～体一部
5 土師器 甕	口　復 15.8 高　残 6.3	内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半ケズリ。外面ナデとケズリの前後関係は不明。長胴。	5YR7/6　橙 粗い　砂礫多量 やや硬質	カマド南側床面上 9 cm 口～胴上半一部 No.5
6 土師器 甕	高　残 1.5 底　残 4.4 最大　残 6.2	内面底部ヘラナデ。外面胴部下端横方向ケズリ。底部木葉痕あり。長胴だろう。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　砂礫多量 やや硬質	覆土 底完存
7 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 7.6	内面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ヘラナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ケズリ。球胴。	5YR7/6　橙 やや粗い　砂礫少量、赤褐細粒微量 やや硬質	北東隅床面上 3 cmと 5 cmが接合 口～胴上半 1/4 No.1・2・3
8 土師器 甕	高　残 2.8 底　6.2	内面胴部上端～底部調整不明。表面剝離著しい。外面も表面が剝離しており調整は不明瞭。胴部下端～底部ナデと見られる。球胴か。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐礫少量 やや軟質	北東隅床面上 3 cm 胴下半 1/3、底完存 No.1
9 土製品 粘土塊	長　3.6 幅　2.1 厚　1.2 重　8.8	平面・断面ともに楕円形。捏ねた粘土をそのまま焼成している。	5YR7/8　橙 やや緻密　白灰礫少量 やや軟質	覆土 完形

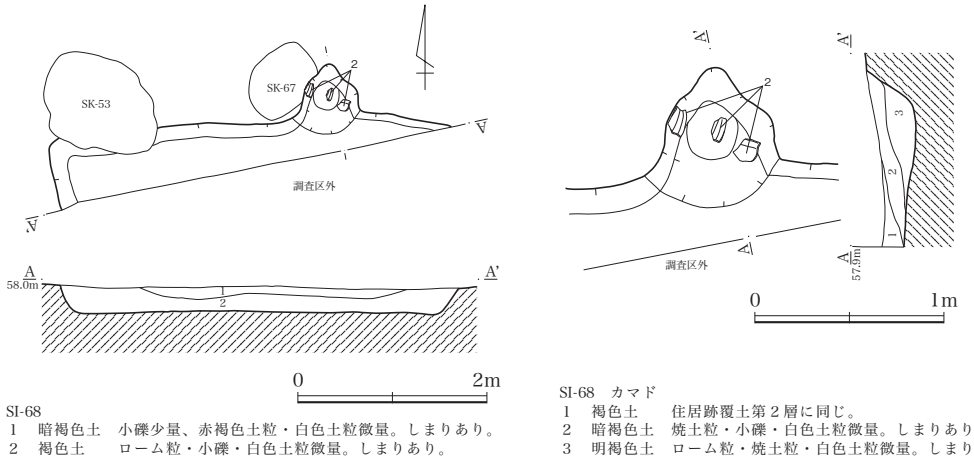
られる。火床面は床面より 5 cm ほどピット状に低くなった部分で、火床面から煙道へは外傾して立ち上がったのち平坦になる。左右両壁は、燃焼部付近では被熱により硬化赤変している部分が多い。覆土は焼土、炭化物、カマドの構築材とも考えられる灰白色粘土などを微量に含む褐色土（第２層）で、天井の崩落とみられるような堆積土はない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　土師器甕を主体とする。出土量は少なく、北東隅及びカマド周辺にややまとまる。長胴甕 5 はカマド前面より出土、球胴とみられる甕７・８は北東隅のやや浮いた位置からの出土である。図化以外には、土師器坏片 153 点（1,086g）、甕片 133 点（1,840g）、須恵器片

1 点 12g、粘土塊 1 点 5g がある。土師器甕は長胴、球胴、武蔵型などがあるが、長胴が最も多い。坏は白色を呈する半球状のもの主体で、径が小さいものはない。本遺構の時期は、7 世紀後様と考えられる。

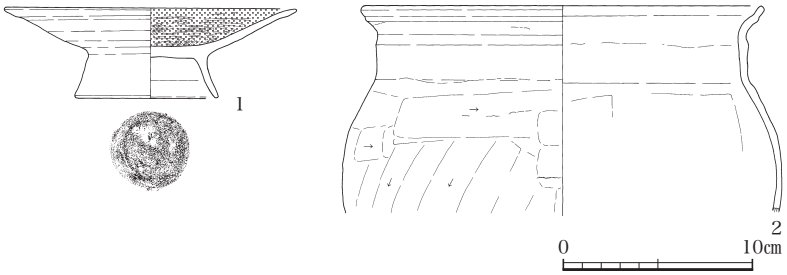
ＳＩ－６８（第 42・43 図、第 20 表、図版九・四八）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。北に SX-54 が近接してあるほか、北西 1.5m に SK-51・52 が隣接してある。　**重複**　住居跡の北辺のみの調査であり、大部分は調査区外である。北西隅が SK-53 と、カマド煙道部が SK-67 とそれぞれ重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　北辺の一部のみの調査であるため、不明である。調査部分のみから判断される南北方向の中軸線は、Ｎ－３°－Ｗである。

規模　調査した部分は、東西方向が 4.23m、南北方向が 0.74m のみである。　**覆土の状態**　覆土は２層で、下層となる第２層は微量のローム粒を含む。



第 42 図　和田遺跡　SI-68 実測図



第 43 図　和田遺跡　SI-68 出土遺物実測図

壁　残存壁高は 26 ～ 28cm であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。

床面　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は 74 × 75cm で、煙道部は壁を約 54cm

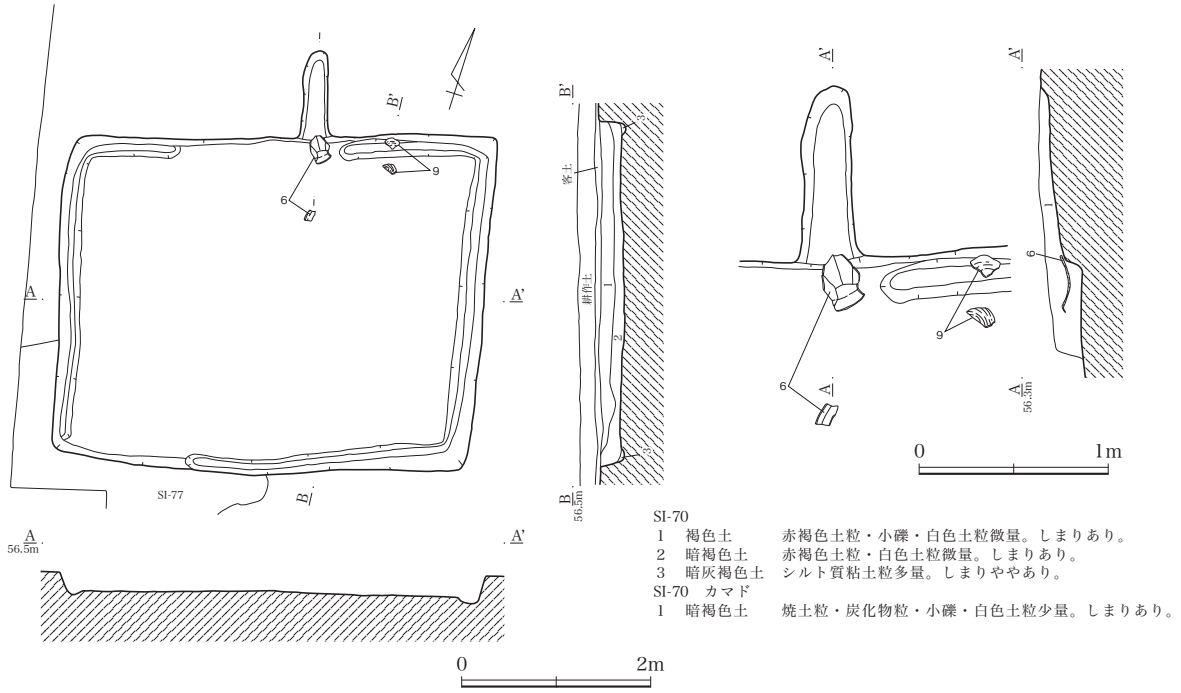
第 20 表　和田遺跡　SI-68 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高台付皿	口　復 15.5 高　4.7 高台　復 7.6	ロクロ成形。内面口縁～体部横方向ミガキ、底部一方向ミガキ。黒色処理。ミガキは底部後口縁～体部。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ナデ、高台貼り付け。皿部は大きく外反して開く。脚部は薄く底部切り離しは回転ヘラ切りの可能性がある。	10YR6/6　明黄褐 やや緻密　青灰粗粒少量、白細粒多量、透明細粒微量 やや軟質	覆土 皿 3/4、脚一部欠損
2 土師器 甕	口　復 21.3 高　残 10.9 最大 復 23.2	内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部横方向ヘラナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半縦方向ケズリ後上端横方向ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白粗粒多量、赤褐粗粒少量 やや硬質	カマド中央部火床面上 11 ㎝と２㎝が接合 口 3/4、胴 1/4 KNo.1・2・3

「凸」字状に掘り込んで作られる。床面から火床面へは 10cm ほど緩やかに低くなり、煙道先端は外傾して直線的に立ち上がる。左右両壁は、燃焼部付近では被熱により硬化赤変している部分がある。覆土は焼土などを微量に含む第１・第２層で、天井の崩落とみられるような堆積土はない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物

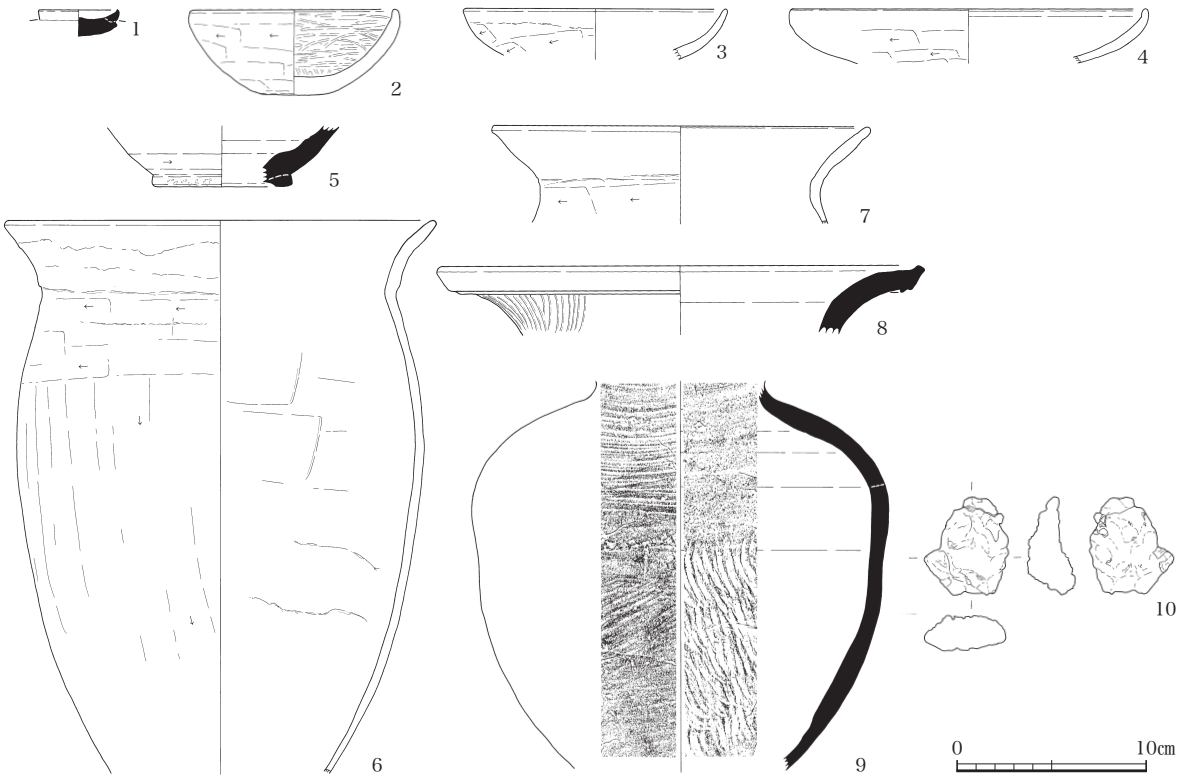
はごくわずかで、カマド内から少量出土する程度である。図化以外には、ロクロ成形の土師器坏など土師器片２点（112g）、須恵器片１点（22g）のみである。本遺構の時期は、10 世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－７０（第 44・45 図、第 21 表、図版九・四八）



SI-70
1　褐色土　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　シルト質粘土粒多量。しまりややあり。
SI-70　カマド
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。

第 44 図　和田遺跡　SI-70 実測図



第 45 図　和田遺跡　SI-70 出土遺物実測図

第 21 表　和田遺跡　SI-70 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.3	天井部ロクロナデ、貼り付けたつまみ部が剝落したもの。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや緻密　灰黒粗粒少量 やや硬質	覆土 つまみ 3/4
2 土師器 坏	口　11.0 高　4.4 底　3.6	内面横方向を主とするミガキ、底部ミガキは一方向。外面口縁ヨコナデ後体部横方向ケズリ、底部ケズリ。器壁厚く平底。	5YR6/8　橙 やや粗い　灰黒粗粒少量、赤褐・白粗粒微量 やや硬質	南辺中央床面直上 ほぼ完形 南辺中央床面直上
3 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 2.6	内面口縁～体部ヨコナデと見られるが表面剝離のため不明確。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部横方向ケズリ。丸底か。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤褐礫少量、白細粒少量、灰黒細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
4 土師器 坏	口　復 19.0 高　残 2.8	内面口縁～体部ナデ・ヨコナデ。口縁が内湾気味にやや丸く立ち上がる。ミガキの可能性があるが表面は荒れており、不明確。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐礫～細粒少量、白・灰黒細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
5 須恵器 台付長頸瓶	高　残 3.2 高台　復 7.4	内面体部下半ロクロナデ。外面体部下半ロクロナデ後回転ヘラケズリ。底部欠損のため切り離し調整不明。高台は断面方形で低い。高台部外面及び底部内面にわずかに自然釉付着。	5Y7/1　灰白 緻密　灰黒粗粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 底～体 1/4
6 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 29.3	内面口縁ヨコナデ、胴部主体のナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。頸部にケズリを行う工具があたってできた沈線状の痕跡あり。胴部は縦方向ケズリ後胴部上半横方向ケズリ。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　白微粒多量、透明微粒少量 やや硬質	北部床面直上の口辺部とカマド中央部火床面上 6 ㎝、横位の口～胴 1/2 が接合 口 2/3、胴 1/2 KNo.3・4・K
7 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 5.2	内面口縁ヨコナデ、胴部はナデと見られるが表面磨滅のため不明確。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ、頸部にケズリの工具痕により３段ほど沈線が入る。武蔵型。	5YR6/8　橙 やや緻密　白・灰黒細粒多量 やや硬質	カマド 口 1/4 K
8 須恵器 甕	口　復 25.8 高　残 3.5	内面口縁ロクロナデ、口縁断面方形。外面口縁縦方向に粗いハケ目痕後ロクロナデ。口縁端部は直線的に面取りされ、下側に２条の段を有する。酸化焔焼成。	5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　灰黒粗粒少量、白礫微量 硬質	覆土 口一部
9 須恵器 甕	高　残 20.8 最大 復 22.0	内面胴部下位、同心円当具痕後胴部上位横方向のナデ。外面下位平行叩き後上位カキ目。内面当具痕は、左から右へと施される。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、白粗粒少量 硬質	北東隅床面上２～３㎝、南辺中央床面直上と SI-61 中央部床面上 15 ㎝、SI-62 覆土が遺構間接合 胴 1/2 KNo.1・2・南辺中央床面直上・SI-61 No.22・SI-62
10 土製品 粘土塊	長　5.2 幅　4.5 厚　2.5 重　28.0	平面不正楕円形。断面楕円形。直径約５㎜の赤褐色礫を含む粗い粘土を捏ねて焼成している。気泡が多い。	7.5YR7/6　橙 粗い　赤褐礫少量、灰黒粗粒少量 やや軟質	覆土 完形

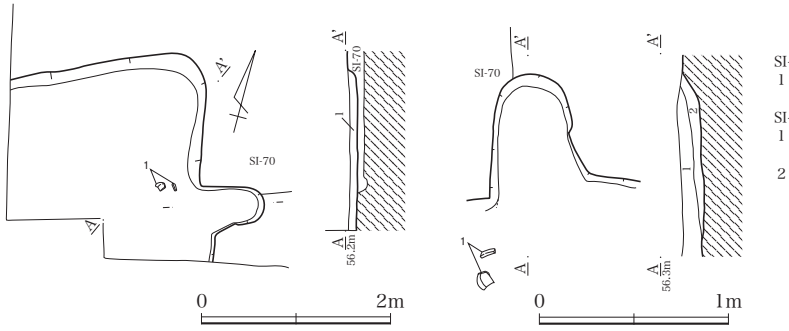
位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、K－12・13 グリッドに位置する。東 2.2m に P-71 が、北西 12m に SI-61 が隣接してある。　**重複**　南西隅が SI-77 に切られる。掘り込みは SI-77 の方が浅いため、切られるのは覆土のみである。　**平面形**　東西方向に長い長方形である。南北方向の中軸線は、N－18°－Wである。

規模　東西方向が 4.50m、南北方向が 3.58m である。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第３層は壁溝覆土である。　**壁**　残存壁高は 25 ～ 30cm であり、壁は直線的に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　カマドがある北壁際中央付近と南壁際西部を除く壁際にある。断面形は「U」字状で、幅は 15 ～ 28cm、深さは床面から３～８cm である。覆土は暗灰褐色土（第３層）で、シルト質粘土を多量に含む。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。直線的な溝状の煙道のみが確認されたもので、天井部、袖部は失われており、火床面や燃焼部も確認できない。煙道は幅

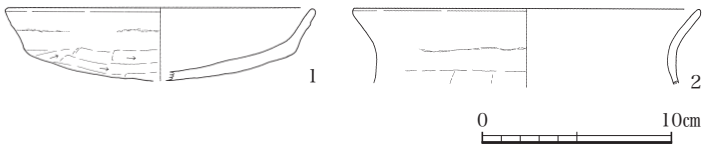
25cm、長さ 97cm、確認面からの深さ 30cm で、床面から 17cm の段差を持って始まる。底面は緩やかに北へと高くなり、先端は外傾して立ち上がる。両側面は比較的急な立ち上がりになっていて、南寄りには被熱により硬化赤変している部分がある。覆土は住居跡内から続く均質な暗褐色土（第１層）で、焼土・炭化物などを少量含んでいる。焼土ブロックなどは認められないため、天井部崩落前に埋没したものと推定される。なお、火床面があったと考えられる煙道南側床面付近では、炭化物や焼土が多く認められている。煙道南端からは、カマドで使用したと見られる土師器甕６が出土する。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　武蔵型の甕片が主体を占める。量は少なく、カマド周辺にやや集中する。ほぼ完形の土師器坏２は、南辺中央の床面直上から出土する。甕６はカマド煙道南端、火床上 6cm からの出土である。図化以外には土師器坏片 46 点（320 ｇ）、甕片 76 点（612g）、須恵器片７点 (142g) がある。土師器坏は半球状のものばかりで、径が小さいものはない。本遺構の時期は、７世紀末～８世紀初頭と考えられる。

ＳＩ－７７（第 46・47 図、第 22 表、図版九・一〇）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 12・13 グリッドに位置する。北東５ｍに P-71 が、北西 12m に SI-61 が隣接してある。　**重複**　住居跡の北東隅のみの調査であり、これ以外の部分は調査区外となっている。北東隅で SI-70 を切る。　**平面形**　方形ないし長方形と推定されるが、住居跡の大半が調査区外となっているため不明である。　**規模**　調査部分のみから判断される南北方向の中軸線は、Ｎ－ 17°－Ｗである。調査した部分は、東西方向が 2.04m、南北方向が 2.17m のみである。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 15 ～ 23cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　調査部分ではほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが東壁際にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は



第 46 図　和田遺跡　SI-77 実測図



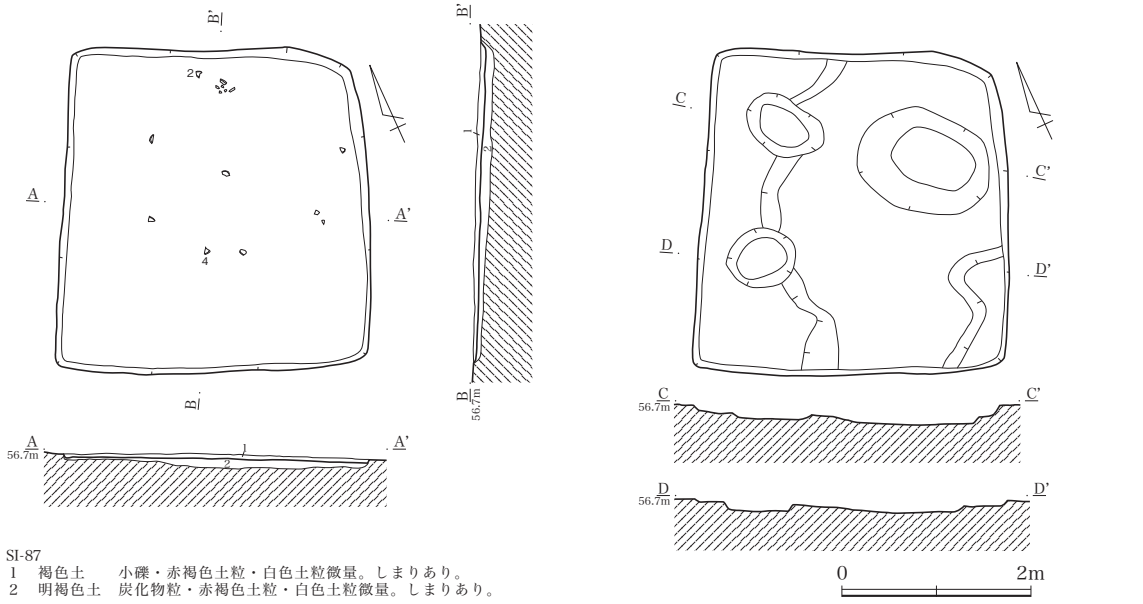
第 47 図　和田遺跡　SI-77 出土遺物実測図

第 22 表　和田遺跡　SI-77 出土遺物観察表

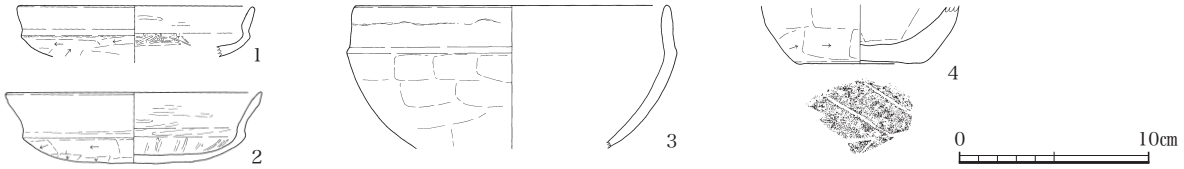
番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 16.4 高　残 3.9	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部横方向ヘラケズリ。口縁は直線的に外反し、体部との境に稜を有する。底部はやや偏平な丸底。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、白微粒微量 硬質	カマド前面床面上 4 cm 口～体 1/3 KNo.1・2
2 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 4.1	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで頸部に紐積痕あり。胴部は縦方向にケズリ。武蔵型。器壁薄い。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐細粒微量、細砂粒多量 硬質	覆土 口破片

壁を約 60cm「U」字状に掘り込んで作られる。床面から火床面へは平坦に続き、わずかな段差で高くなったあと平坦な煙道となり、先端は外傾して直線的に立ち上がる。左右両壁は垂直に近く、燃焼部付近では被熱により硬化赤変している部分が多く認められる。覆土は焼土と炭化物を多量に含む第 2 層と住居跡覆土に類似する第 1 層で、第 1 層は天井内面の崩落とも考えられる。　貯蔵穴　なし。　遺物　出土遺物はごくわずかであり、図化以外には甕片など土師器片 8 点 (74g) があるのみである。大型の坏の形態などから、本遺構の時期は 8 世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－８７（第 48・49 図、第 23 表、図版一〇・四八）



第 48 図　和田遺跡　SI-87 実測図



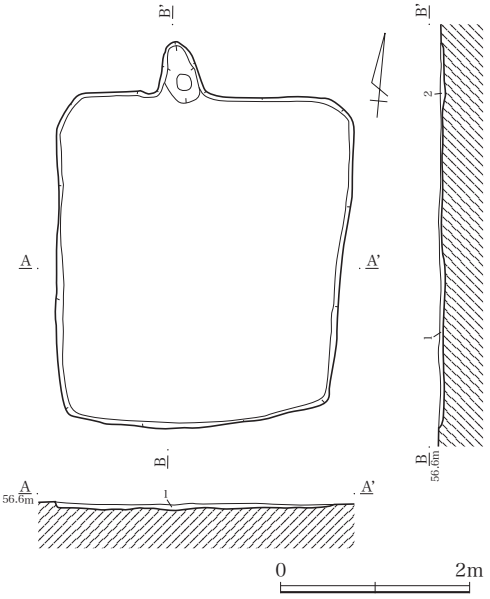
第 49 図　和田遺跡　SI-87 出土遺物実測図

第 23 表　和田遺跡　SI-87 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ後体部ミガキ。ミガキは横方向及び放射状。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。口縁は外反し体部との境に稜を持つ。	2.5Y5/1　黄灰 やや緻密　白・砂細粒微量 やや硬質	堀方 口～体上半一部 堀方
2 土師器 坏	口　13.4 高　残 3.4	内面口縁ヨコナデ後横方向の粗いミガキ、体～底部ナデ・ヨコナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。口縁が外反し、体部との境に稜を持つ。偏平な丸底。	5YR6/8　橙 やや緻密　白・透明細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	北部床面直上と堀方が接合 口 1/2、体～底 4/5 堀方・No.9
3 土師器 鉢	口　復 16.4 高　残 7.5 最大 復 17.4	内面口縁～体部ヨコナデ。ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。器壁やや厚く深い。口縁が内傾し体部上端部に段を持つ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	覆土 口～体上半 1/6
4 土師器 甕	高　残 3.1 底　復 6.6	内面胴部下端縦方向のナデ。外面胴部下端横方向ケズリ、底部木葉痕あり。	2.5YR6/8　橙 粗い　砂礫多量 やや硬質	中央部床面直上 胴下半～底 1/3 No.5

位置　Ⅴ区北半の台地平坦面、Ｐ－ 13 グリッドに位置する。西 1.2m に P-109 、南東 4.5 mに SI-88 が隣接してある。　重複　なし。　平面形　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 23°－Ｅである。　規模　東西方向が 3.24m、南北方向が 3.38m である。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）である。　壁　掘り込みが浅いため残存壁高は４～６cm ほどであり、壁は短く外傾して立ち上がる。　床面　ほぼ平坦で、北に向かってわずかに傾斜している。　堀方・貼床　中央部から東半が深く掘り込まれ、炭化物を含む明褐色土（第２層）でほぼ住居跡全体が貼床される。床面からの深さは２～ 10cm である。　柱穴　なし。　壁溝　なし。

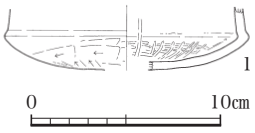
火処　なし。　遺物　遺物は少なく、中央部から北辺中央付近にややまとまる。土師器坏２と甕４は床面直上からの出土である。図化以外には、土師器坏片 87 点（570g）、甕片 132 点（1,534g）、高坏片１点（40g）、粘土塊４点（2g）がある。坏は口縁が外反するものが多く、半球状や口縁部が直立するものがわずかに含まれる。甕は長胴甕のみである。本遺構の年代は、７世紀前葉と考えられる。



第 50 図　和田遺跡　SI-88 実測図

ＳＩ－８８（第 50・51 図、第 24 表、図版一〇）

位置　Ⅴ区北半の台地平坦面、Ｏ－ 12 グリッドに位置する。　重複　なし。　平面形　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－４°－Ｗである。　規模　東西方向が 3.14m、南北方向が 3.50m である。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）である。　壁　掘り込みが浅いため残存壁高は３～５cm ほどであり、壁は短く外傾して立ち上がる。　床面　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　堀方・貼床　なし。　柱穴　なし。　壁溝　なし。　火処　カマドが北壁際西寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 53m「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。床面から火床面へは２cm ほど低くなっており、火床面から煙道へは平坦に続き、煙道先端は外傾して短く立ち上がる。覆土は焼土と炭化物を含む赤褐色土（第２層）である。　貯蔵穴　なし。　遺物　出土遺物はごくわずかで、図化以外には土師器坏片２点（10g）、甕片３点（92g）のみである。甕には球胴、小型の長胴、武蔵型の破片などがある。本遺構の年代は限定しにくいが、７世紀前葉～中葉と考えられる。



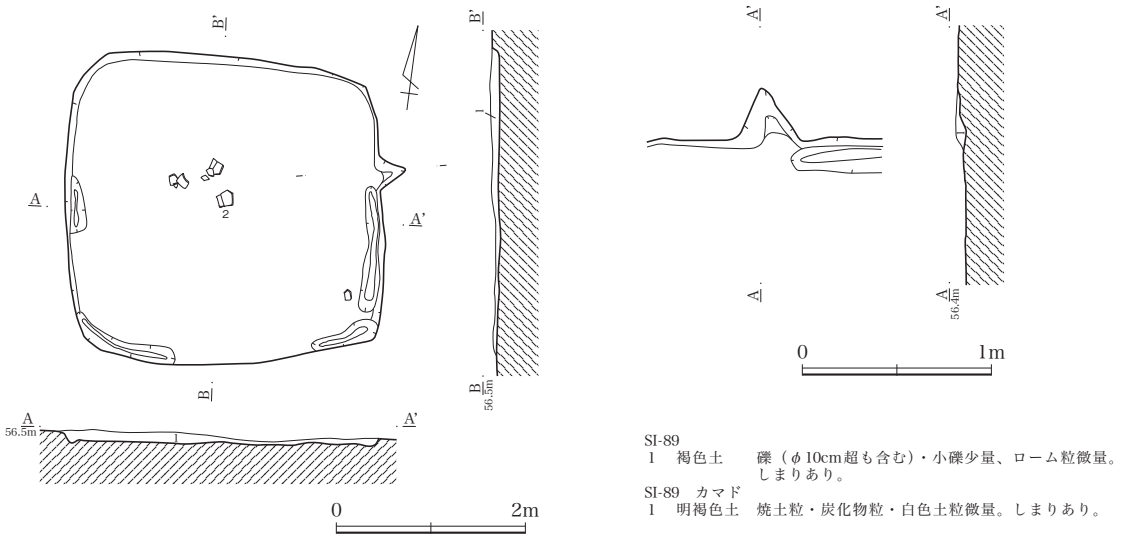
第 51 図　和田遺跡
SI-88 出土遺物実測図

第 24 表　和田遺跡　SI-88 出土遺物観察表

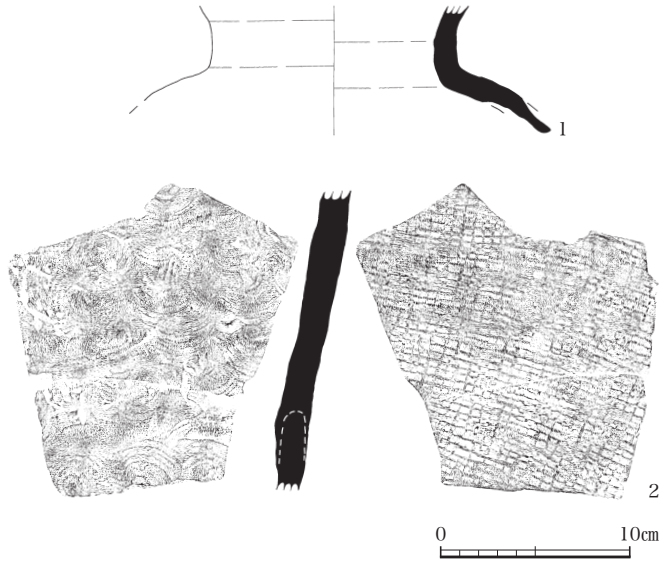
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 3.4 最大 復 13.0	内面口縁～体部ヨコナデ後体～底部ミガキ。横方向にミガキ後放射状にやや粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、口縁下端稜あり体～底部はケズリ。偏平な丸底。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒微粒少量、白微粒微量 硬質	覆土 底 1/3

ＳＩ－８９（第 52・53 図、第 25 表、図版一〇）

位置　Ⅴ区北半の台地平坦面、Ｏ－ 11・12 グリッドに位置する。西 2.5m に SI-88、北東３m に SB-101



第 52 図　和田遺跡　SI-89 実測図



第 53 図　和田遺跡　SI-89 出土遺物実測図

がある。　**重複**　なし。　**平面形**　各辺が住居跡外へとわずかに湾曲する方形で、南北方向の中軸線はＮ－４°－Ｗである。

規模　東西方向が 3.38m、南北方向が 3.28m である。　**覆土の状態**　覆土は褐色土（第１層）で、直径 10cm を超える礫も含む。　**壁**　掘り込みが浅いため残存壁高は８～ 10cm ほどであり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。

堀方・貼床　なし。　**柱穴**　なし。

壁溝　住居跡南半の壁際に断続的に認められる。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 14 ～ 20cm、深さは床面から３～５cm であ

第 25 表　和田遺跡　SI-89 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 6.9 頸部 復 13.2	内外面とも頸～胴部はロクロナデないしナデと思われるが表面磨滅のため不明瞭。焼成不良。	7.5YR8/6　黄橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、白粗粒微量 軟質	覆土 頸 1/4
2 須恵器 甕	高　残 15.8	内面胴部下半同心円当具痕。外面胴部下半格子目叩き。内外表面は灰色で内部は淡赤褐色。下半は粘土接合部であり壁は厚く、内面に当具痕の後ナデが施される。	7.5Y7/1　灰白 緻密　砂粒微量 やや軟質	中央部床面直上 胴一部 No.2

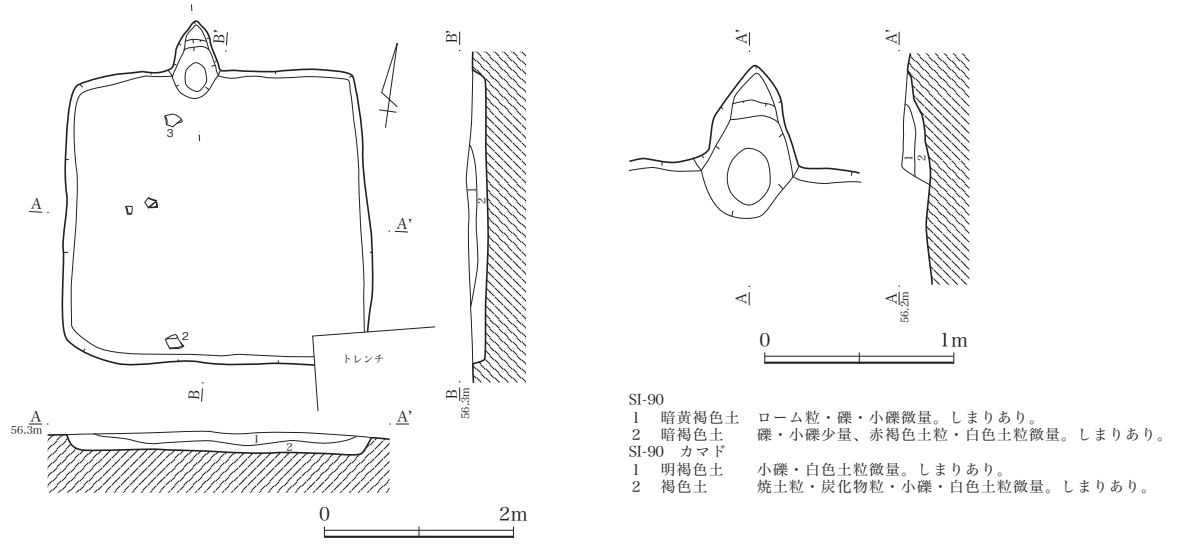
る。覆土は住居跡覆土と同様の褐色土である。　**火処**　カマドが東壁際北寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 28cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さで、煙道へは約４cm の段差を持って高くなったのち平坦になり、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。カマド内面となる左右両壁やカマド左側の住居跡壁面などには、被熱により硬化赤変している

部分がある。覆土は焼土と炭化物を含む明褐色土（第１層）である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、住居跡中央部に破片がまとまる。土師器も出土しているが、小破片のため図示できない。図化以外の遺物は土師器坏片 49 点 (552g)、甕片 10 点（670g)、鉢片１点（24g）である。坏は半球形を主体として、口縁部直立ないし内傾するものをわずかに含む。内面ミガキはほとんどなく、口径が大きめのものが多い。甕は球胴が多く、武蔵型と思われる薄手の破片も出土する。遺物の年代は７世紀後葉と考えられる。

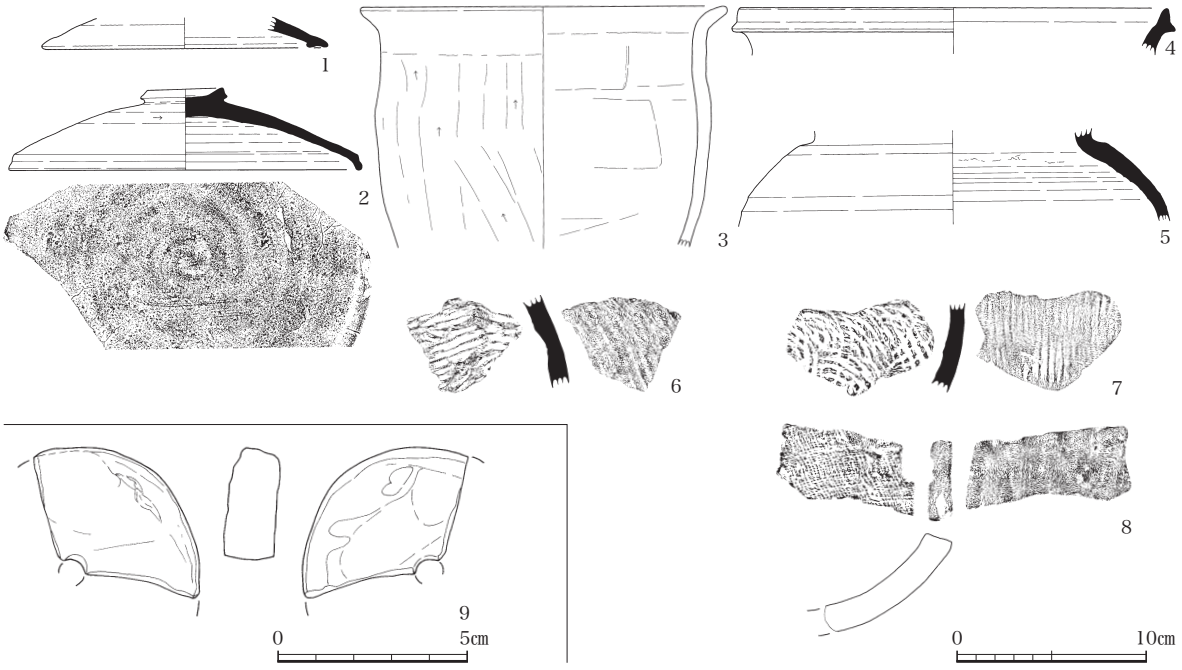
ＳＩ－９０（第 54・55 図、第 26 表、図版一一・四九）

位置　Ⅴ区北半の台地平坦面、Ｏ－11 グリッドに位置する。北西 4.3m に SI-89、南東 4.5m に SB-100 がある。

重複　なし。南東隅は確認調査時のトレンチにより失われている。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－８°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.22m、南北方向が 3.10m である。　**覆土の状態**　覆土は２層



第 54 図　和田遺跡　SI-90 実測図



第 55 図　和田遺跡　SI-90 出土遺物実測図

第 26 表　和田遺跡　SI-90 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 15.2 高　残 1.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。かえりの部分と口縁部外縁はほぼ同じ高さとなる。	N7/0　灰白 緻密　黒微粒微量 硬質	覆土 口一部
2 須恵器 蓋	口　18.6 高　4.3	内面口縁～天井部ロクロナデ後天井部一部ナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後上半部ケズリ。つまみ貼り付け。	N6/0　灰 やや緻密　白粗粒少量、白礫粒微量 硬質	南部床面上 4 ㎝、逆位 口1/3､体1/2､天井完存 No.4
3 土師器 甕	口　復 19.3 高　残 12.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ。長胴。胴部上半は直立気味で口縁部上半が強く外反する。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い　黒・白礫微量、黒・白粗粒少量、砂礫微量 硬質	カマド南側床面上 2 ㎝、横位 口 1/2、胴上半 1/2 No.1
4 須恵器 甕	口　復 23.4 高　残 2.4	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、断面三角形の突出部を作り出す。	N6/0　灰 緻密　白微粒少量、黒微粒微量 やや硬質	覆土 口一部
5 須恵器 甕	高　残 4.9 頸部 復 14.6	内面頸～胴部ロクロナデ、粘土接合痕あり。胴部と口縁部を接合した痕跡残る。外面頸～胴部ロクロナデ。	N5/0　灰 やや緻密　黒・白細粒微量 やや軟質	覆土 頸～胴上位 1/6
6 須恵器 甕	高　残 4.9	内面胴部平行当具痕、強くあてているため器面の凹凸著しい。外面胴部平行叩き。	N5/0　灰 やや緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部
7 須恵器 甕	高　残 4.7	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密　黒細粒微量、赤褐微粒微量 硬質	覆土 胴一部
8 瓦 平瓦	長　残 4.5 幅　残 6.8 厚　1.5 重　残 81.0	凹面布目痕。凸面ナデ。側縁はケズリで凸面側に面取り状のケズリが施される。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒粗粒微量、砂粗粒微量 やや軟質	覆土 破片
9 土製品 紡錘車	厚　1.9 重　残 28.4 径　復 13.6 孔　復 1.4	大形の須恵器の破片を用い穿孔整形して作成したもの。外周は丁寧に研磨されるが一部に欠損面が残る。上面は軽く全面を研磨。下面は凹面のため外周付近のみが研磨される。下面中央には、もとの土器の器面が残る。	N6/0　灰 緻密　黒細粒少量 硬質	覆土 1/3

であり、第１層はローム粒を含む。　**壁**　残存壁高は 13 ～ 20cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、東に向かってわずかに傾斜している。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。

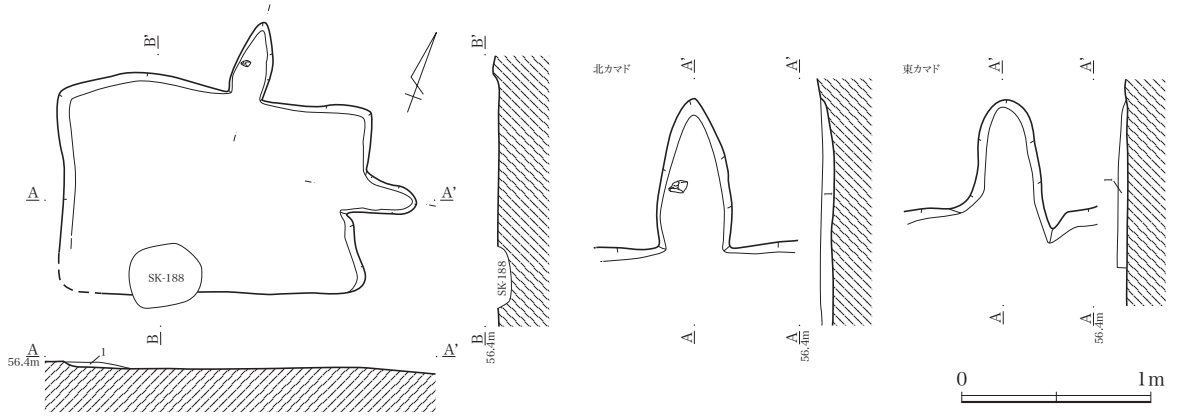
火処　カマドが北壁際西寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は 56 × 82cm で、煙道部は壁を約 53cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面より３cm ほど皿状に窪んでおり、煙道へは約８cm 緩やかに高くなったのち平坦となり、先端は丸みを持って立ち上がり確認面に至る。カマド内面に被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は緻密な明褐色土（第１層）と、焼土や炭化物をわずかに含む褐色土（第２層）である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物は少ない。土師器甕３はカマド前面、リング状のつまみを持つ須恵器蓋２は南壁際からそれぞれ床面からやや浮いた状態で出土した。紡錘車９は大形の須恵器片を加工したもので、外周を中心に丁寧に研磨して成形している。図化以外の遺物は土師器主体だが須恵器も一定量あり、土師器坏片 45 点 (334g)、鉢片 11 点（264g）、甕片 97 点（956g）、須恵器坏片８点（36g）、甕片７点（180g）である。土師器坏は半球状のものばかり、甕は長胴・球胴・武蔵型それぞれの破片がある。本遺構の年代は、７世紀末～８世紀初頭と考えられる。

ＳＩ－９１（第 56・57 図、第 27 表、図版一一・六一）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｍ－ 12 グリッドに位置する。北に SK-190、東に P-163 、南に P-164 ・165 が近接してあるほか、北西１m に SK-158b、南 1.5m に SK-94 がある。　**重複**　南壁際で SK-188 と重

複するが、新旧関係は不明である。南西隅は撹乱される。　**平面形**　不整な長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 18°－Ｗである。南辺は壁の立ち上がりが失われていたが、床面や覆土の痕跡などから住居跡の範囲を確認した。　**規模**　東西方向が 3.05m、南北方向が 2.28m である。東辺は西辺に比べると短く、1.99m ほどである。　**覆土の状態**　覆土は炭化物を含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　南辺を除く各辺で壁の立ち上がりが確認できる。残存壁高は５～７cm であり、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際やや東寄りと東壁際中央にある。両カマドとも壁から張り出す溝状の掘り込みが確認されたもので、天井部、袖部は失われている。被熱の痕跡はともに少なく、使用頻度の差は確認できない。北カマドは、壁を約 79cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られており、掘り込みの幅が最も広くなった部分が火床面と推定される。火床面の高さは床面とほぼ同じで、煙道へは緩やかな斜面となっており、先端は短く外傾して立ち上がる。火床面北西には、支脚と考えられる６～７cm 角の柱状の礫が立った状態で確認された。下端は埋め込まれている。先端を欠損するものの、火床面上に 10cm ほどが確認できる。覆土は焼土や炭化物を少量含む褐色土（第１層）である。東カマドは、東寄りの壁を約 70cm、西寄りの壁を約 50 ㎝「Ｕ」字状に掘り込んで作られており、住居跡の壁と接するあたりが火床面と推定される。火床面の高さは床面とほぼ同じで、煙道まで平坦に続き、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。覆土は焼土や炭化物を多量に含む赤褐色土（第１層）で、覆土中からは土師器甕片が多量に出土する。なお、北・東両カマドの新旧関係は明確ではないが、カマド内面の崩落と見られる焼土の堆積、カマドで使用されたと見られる土器の出土から、東カマドの方が新しいと推測する。　**貯蔵穴**　なし。

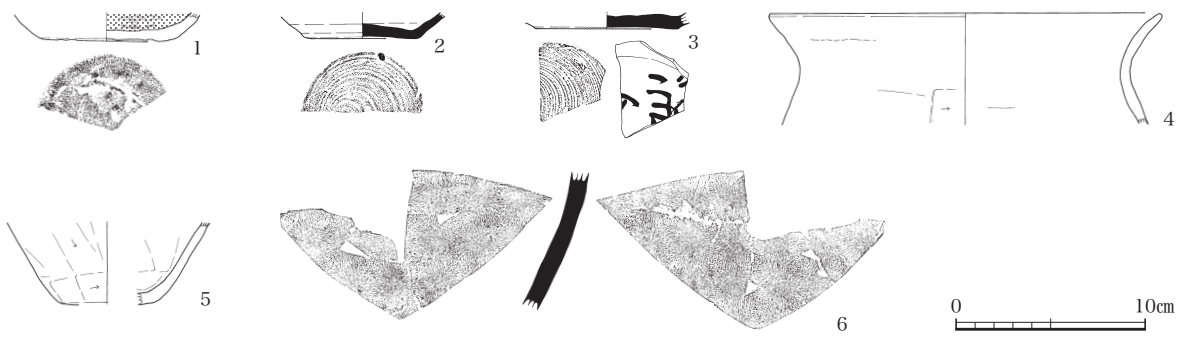
遺物　遺物はわずかで器種も坏と甕しかなく、構成は単純である。遺物の主体は武蔵型の土師器甕で、東



SI-91
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-91　北カマド
1　褐色土　　焼土粒・炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-91　東カマド
1　赤褐色土　焼土粒・炭化物粒多量、小礫微量。しまりあり。

第 56 図　和田遺跡　SI-91 実測図



第 57 図　和田遺跡　SI-91 出土遺物実測図

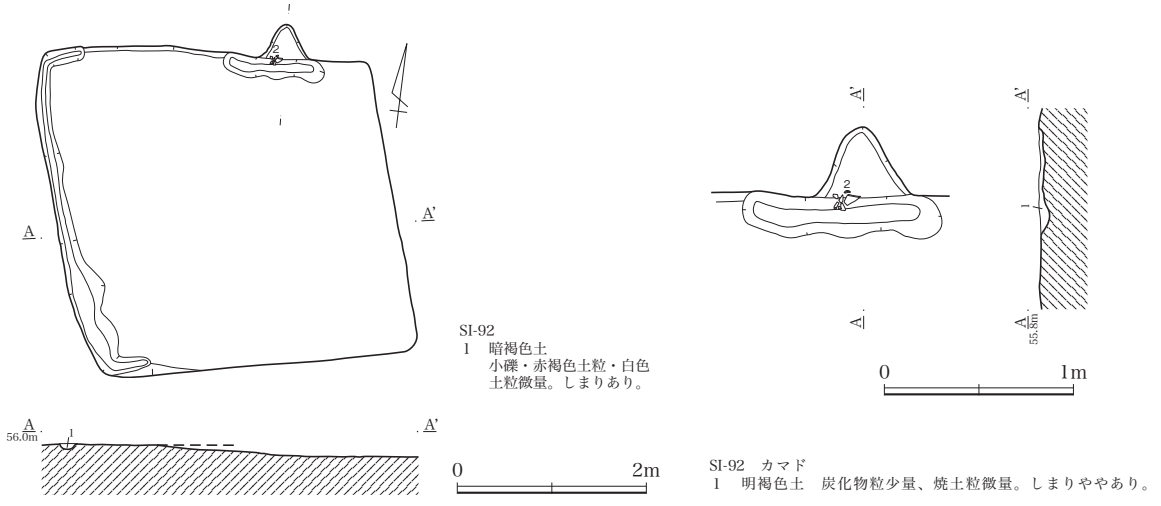
第 27 表　和田遺跡　SI-91 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.5 底　復 7.0	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後ミガキ、黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒細粒少量、砂粗粒微量 硬質	覆土 底 1/2
2 須恵器 坏	高　残 1.4 底　復 6.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色軟質の胎土。	N8/0　灰白 緻密　黒細粒微量 やや軟質	覆土 底 1/2
3 須恵器 坏	高　残 0.8 底　復 7.5	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後無調整。墨書の痕跡あるが不明瞭で判読できず。わずかに上げ底。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 底 1/4
4 土師器 甕	口　復 20.8 高　残 5.9	内面口縁ヨコナデ、体部上半ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部上半ケズリ。武蔵型。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　白細粒少量、細砂粒多量 やや硬質	東カマド 口 1/3、胴上半一部 東 K
5 土師器 甕	高　残 4.4 底　復 5.0	内面胴部下端～底部ヘラナデ。外面胴部下端～底部ケズリ。甕４底部の可能性あり。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　白細粒少量、細砂粒多量 やや硬質	東カマド 胴下端～底 1/3 東 K
6 須恵器 甕	高　残 7.3	内面胴部ナデ。外面胴部ケズリ後ナデ。	N6/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部

カマドから破片の状態で多数出土している。このうち同一個体の可能性もある４・５の２点を図示した。須恵器坏３は底部に墨書を持つが、文字は判読できない。図化以外には、土師器甕片 275 点（758 g）、須恵器は坏・甕片各３点（65 g）がある。須恵器甕は内外面ともナデ調整が多い。本遺構の年代は９世紀中葉前後と考えられる。

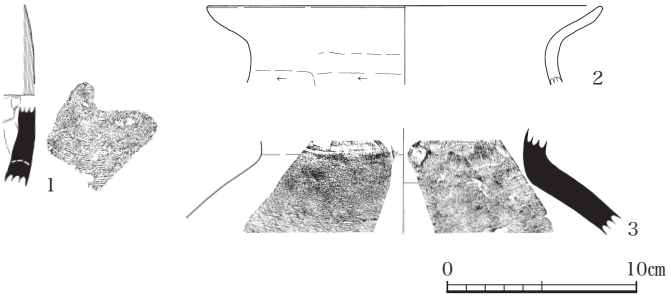
ＳＩ－９２（第 58・59 図、第 28 表、図版一一）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 10・11、Ｍ－ 10・11 グリッドに位置する。南西に SI-93 が近接してあるほか、南東 3.7m に P-187 がある。　**重複**　なし。　**平面形**　不整な方形で、南北方向の中軸線はＮ－５°－Ｗである。南東部は壁の立ち上がりが失われていたが、床面や覆土の痕跡などから住居跡の範囲を確認した。　**規模**　東西方向が 3.64m、南北方向が 3.46m である。東辺は西辺に比べると短く、3.10m ほどである。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　北辺西半で壁の立ち上がりが確認できる。残存壁高は２～３cm のみであり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、東に向かっ



第 58 図　和田遺跡　SI-92 実測図

てわずかに傾斜しているとみられる。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　西壁際と北壁際東部のカマド前面に認められる。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 15 ～ 40cm、深さは床面から２～５cm である。覆土は西壁際では住居跡覆土と同様の暗褐色土、カマド前面ではカマド覆土と同様の明褐色土が堆積



第 59 図　和田遺跡　SI-92 出土遺物実測図

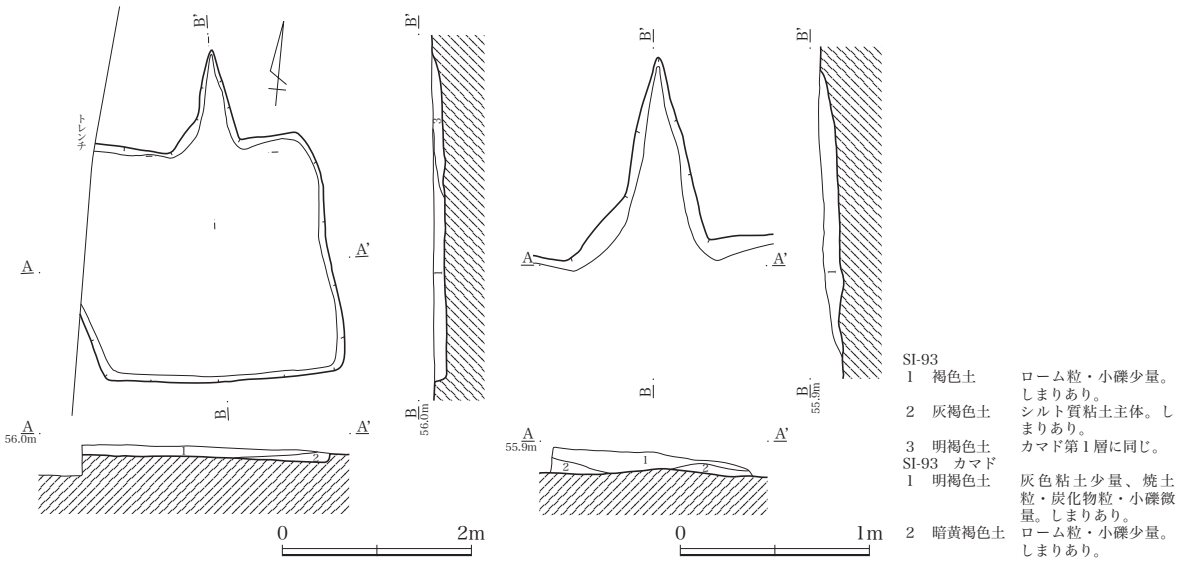
第 28 表　和田遺跡　SI-92 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 横瓶	高　残 4.2	内面端部閉塞部分あり。シボリジワあり。外面端部同心円状のカキ目。	N4/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	覆土 体一部
2 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 4.1	内面口縁～頸部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向ケズリ後上端を横方向にケズリ。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白微粒微量 やや硬質	カマド前面壁溝底面 直上 口～胴上端 1/4 KNo.1
3 須恵器 甕	高　残 5.6	内面頸部ロクロナデ、胴部上半ナデ。外面頸部ロクロナデ、胴部上半擬格子叩き後ナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量、黒微粒少量 硬質	覆土 胴上端一部

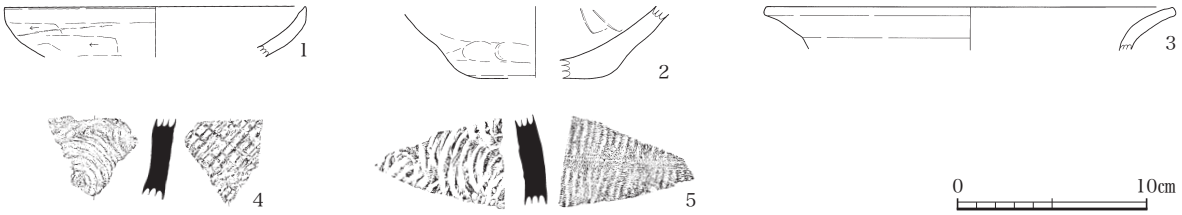
する。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 37cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られる。カマド前面には長さ 108cm、幅 18 ～ 23cm、深さ５cm の壁溝があり、壁溝底面から煙道へは緩やかに高くなったのちおおむね平坦な煙道底面となり、先端は外傾して立ち上がる。覆土は焼土や炭化物を含む明褐色土（第１層）で、壁溝にも同様の覆土が堆積する。壁溝から煙道にかかる位置からは図示した土師器甕２が出土しており、壁溝はカマド使用時にも開口していた可能性がある。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はわずかで、武蔵型の土師器甕片が主体である。須恵器横瓶１は、端部の閉塞部分のみの破片である。図化以外には、土師器坏片 64 点（265g）、甕片 43 点（300g）、須恵器蓋片２点（4g）がある。土師器坏は胎土白色で半球状のものが主体で、口縁部が直立・外傾するものやロクロ成形された坏はない。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

ＳＩ－９３（第 60・61 図、第 29 表、図版一二）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－10・11 グリッドに位置する。北東に SI-92 が近接してあるほか、東 2.5m に P-187 がある。　**重複**　なし。北東隅は確認調査時のトレンチに切られる。　**平面形**　やや不整な方形で、南北方向の中軸線はＮ－８°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 2.73m、南北方向が 2.50m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、シルト質粘土主体の第２層は壁際に堆積する。　**壁**　残存壁高は 11 ～ 13cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、東に向かってわずかに傾斜している。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部、袖部は失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 99cm「Ｖ」字状に大きく掘り込んで作られる。火床面と考えられる煙道部掘り込みと壁が接する付近は、床面とほぼ同じ高さとなっている。火床面から煙道へはそのまま平坦に続いていて、先端は緩やかに立ち上がる。カマド内面には被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は灰色粘土や焼土などをわずかに含む明褐色土（第１層）で、火床面の左右のみには袖部の一部とも推定される暗黄褐



第 60 図　和田遺跡　SI-93 実測図



第 61 図　和田遺跡　SI-93 出土遺物実測図

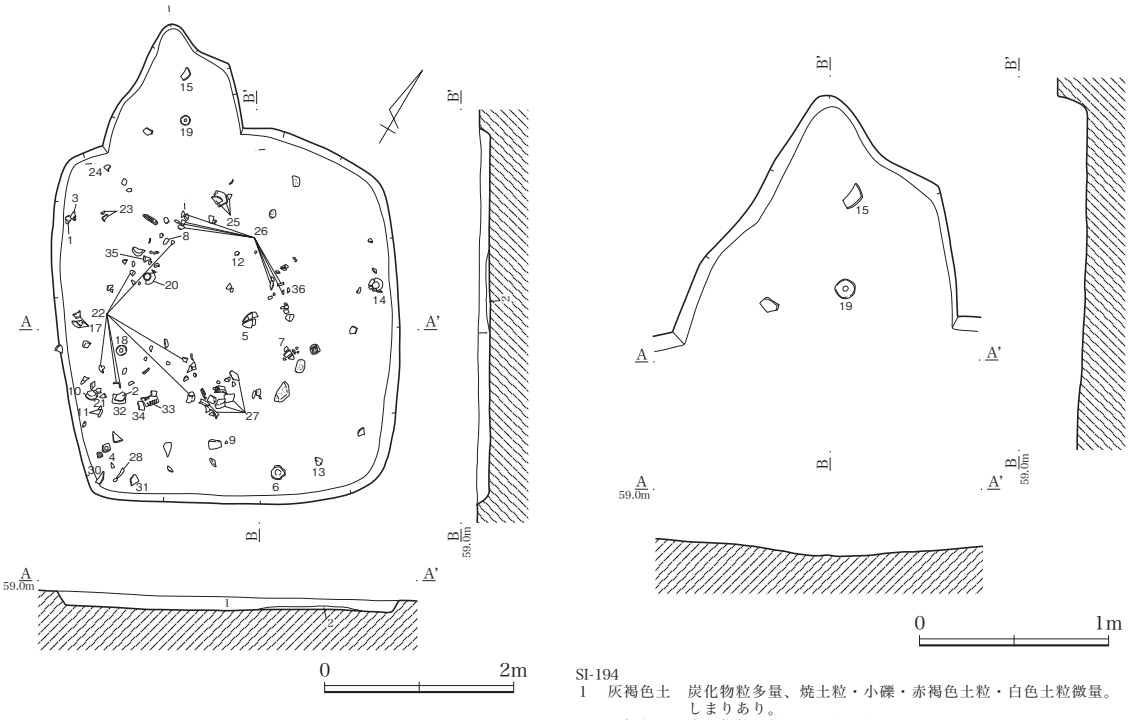
第 29 表　和田遺跡　SI-93 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 2.6	内面口縁～体部ヨコナデ、ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。口縁部下にわずかな稜があり口縁部外面は垂直な面となる。白色胎土、器壁やや厚い。	10YR7/2　にぶい黄橙 緻密　黒細粒少量 硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 甕	高　残 3.8 底　復 7.4	内面胴部下端～底部ナデ。外面胴部下端～底部ナデと見られるが表面磨滅のため不明確。指頭圧痕残る。丸味を帯びた平底。器壁やや厚い。球胴か。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　黒細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	覆土 底 1/6
3 土師器 甕	口　復 21.7 高　残 2.2	内面口縁ヨコナデ、ミガキの可能性あるが不明瞭。外面口縁ヨコナデ。器壁やや厚い。武蔵型。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒細粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 口一部
4 須恵器 甕	高　残 4.4	内面胴部同心円当具痕。外面胴部格子叩き。焼成やや甘い。表面は青灰色だが内部は赤褐色。	N5/0　灰 やや緻密　黒細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部
5 須恵器 甕	高　残 4.8	内面胴部上半同心円当具痕強く残る。外面胴部上半擬格子叩き。自然釉付着。カキ目あり。	N5/0　灰 緻密　黒細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部

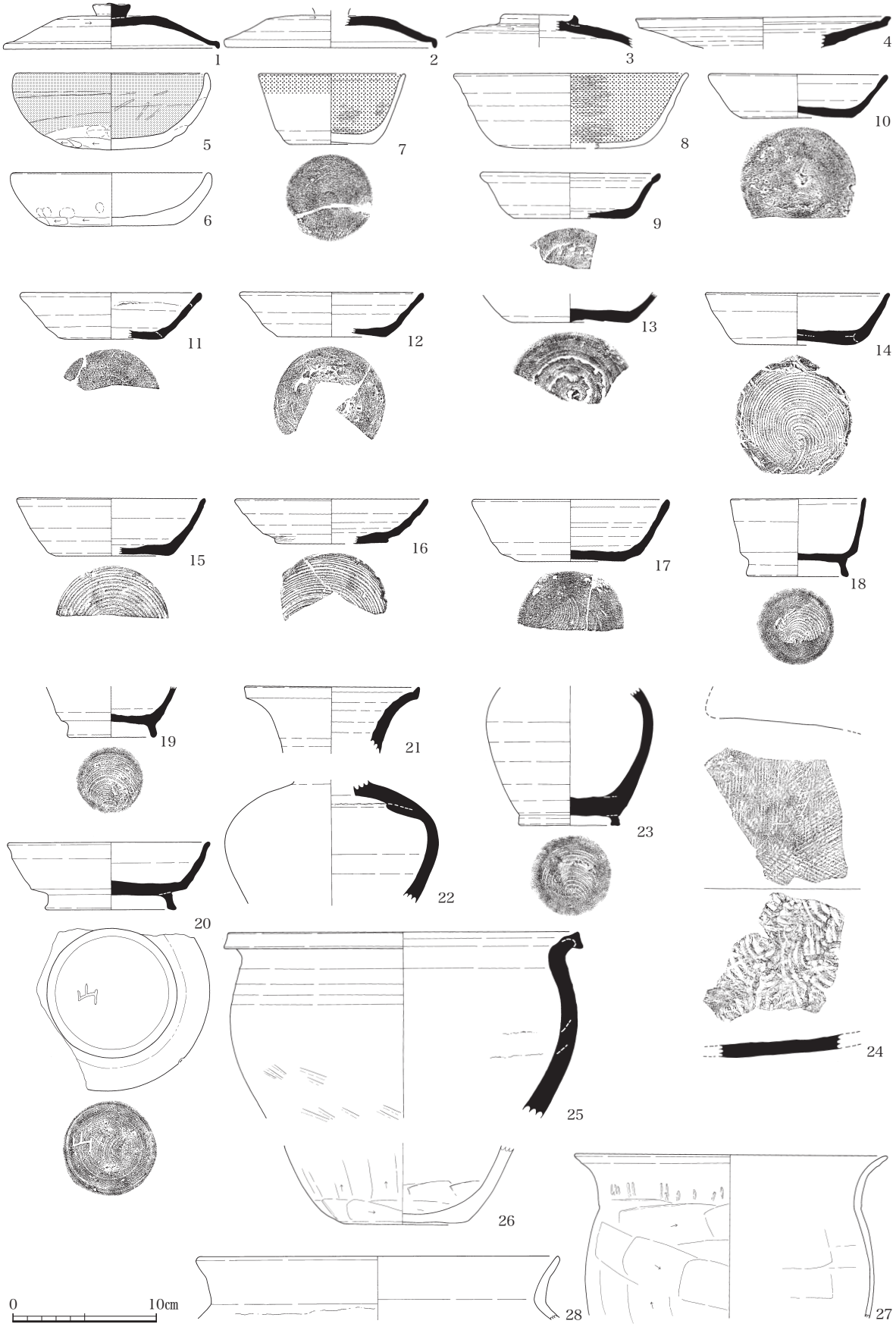
色土（第 2 層）が堆積する。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はわずかである。図化以外には、土師器坏片 35 点（345g）、甕片 25 点（240g）、須恵器蓋片 2 点（8g）、甕片 5 点（118g）がある。土師器坏は胎土白色の半球形のもの主体であり、摸倣坏やロクロ成形坏はない。甕は球胴とみられるもの 2 と武蔵型 3 を図示したが、破片としては球胴と長胴主体であり、武蔵型は少ない。本遺構の年代は、8 世紀前葉頃と考えられる。

ＳＩ－１９４（第 62 ～ 64 図、第 30 表、図版一二・四九）

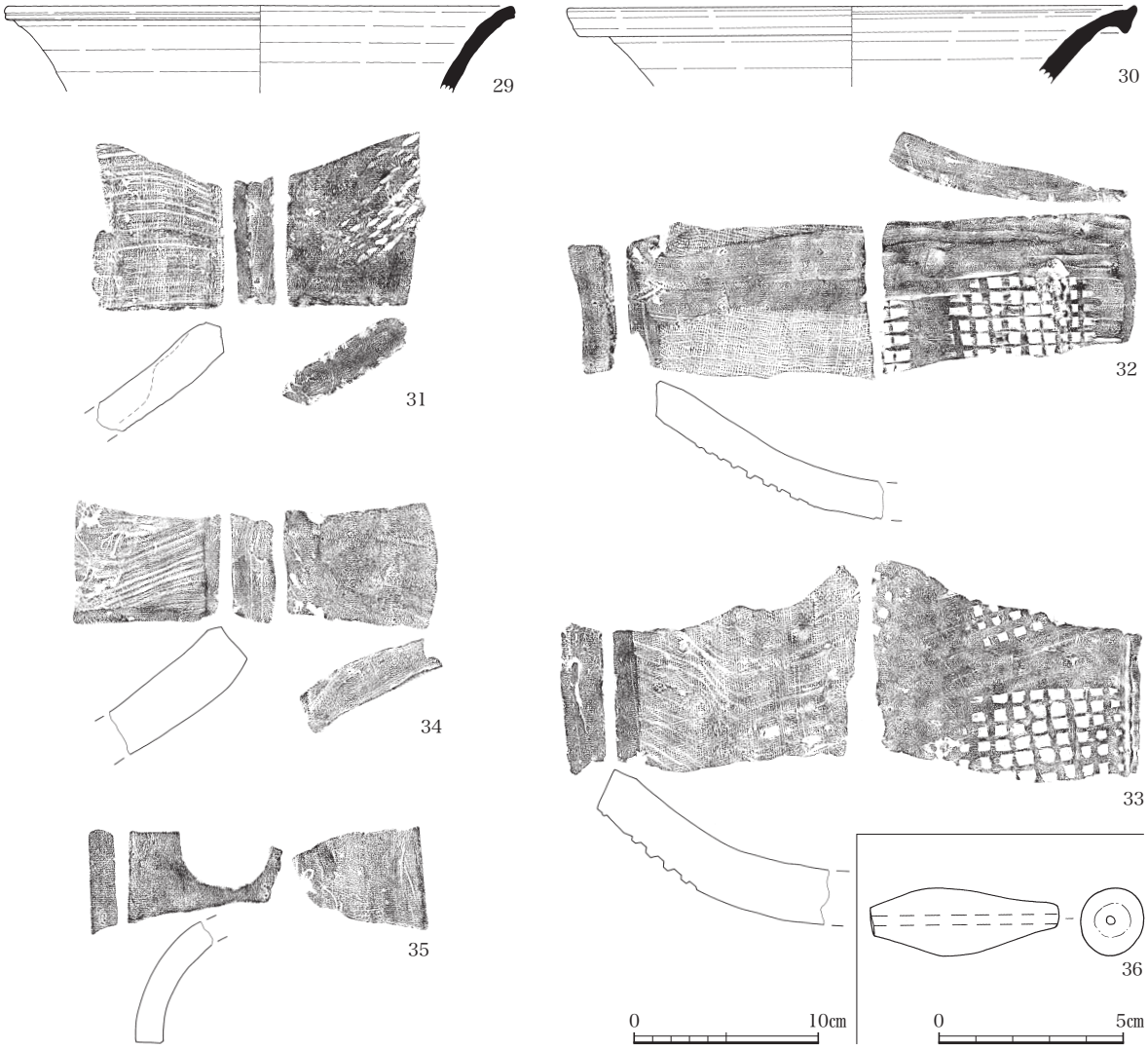
位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22・23、Ｏ－ 22・23 グリッドに位置する。南に SK-251 をはじめとする多数の土坑やピットがあるが、北側には遺構は存在しない。付近に住居跡はなく、最も近い SI-902 とは 11m の距離がある。　**重複**　なし。　**平面形**　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 36°－Ｗである。東・北の各隅部は丸みを持つ。　**規模**　南西－北東方向が 3.62m、南東－北西方向が 4.00m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、全体に炭化物を多量に含む。中央付近の床面直上には、特に炭化物が集中する。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 15cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際西寄りにある。住居跡覆土第１層とほぼ同様の覆土であるなど燃焼したことを示す根拠は少ないが、壁を「凸」字状に掘り込んだ形状などからカマドと判断した。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 127cm 掘り込んで作られる。底面は床面とほぼ同じ高さとなっており、先端は外傾して立ち上がる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は多く、中央部及び南隅を中心に住居跡全体から出土する。体部に紐積み痕を明瞭に残す土師器坏５は、中央部床面直上から正立の状態で出土した。須恵器坏は９点、高台付坏は３点図示したが、このほか掲載していないものが底部でみると 30 個体ある。底部切り離しはヘラ切り４点、回転糸切り８点（うち高台付坏１点）、不明 18 点であり、高台付坏はすべて糸切り、坏は糸切りが多い。切り離し後ナデやケズリを施すものもある。ほぼ完形の坏 14 は北東壁際中央から、底部外面に「山」字の刻書を持つ 20 は中央西寄りからそれぞれ逆位の状態で出土する。坏 15、高台付坏 19 はカマド内からの出土である。瓦は、丸瓦 35 は中央部出土だが、平瓦 31 ～ 34 はすべて南隅にまとまっている。図化以外の遺物は、土師器坏・鉢片 100 点（1,450 ｇ）、甕片 281 点（2,030 ｇ）、須恵器坏片 175 点（1,450 ｇ）、蓋片 27 点（390 ｇ）、瓶・甕片 18 点（540 ｇ）である。本遺構の年代は、８世紀後葉と考えられる。



第 62 図　和田遺跡　SI-194 実測図



第 63 図　和田遺跡　SI-194 出土遺物実測図（１）



第 64 図　和田遺跡　SI-194 出土遺物実測図（２）

ＳＩ－１９５（第 65・66 図、第 31 表、図版一二・一三・四九）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。北西に SK-613a・613b・614 が近接してあるほか、北２ｍに SI-196、東３ｍに SI-197 が隣接する。　**重複**　SK-615 に北西隅が切られる。住居跡内には新旧関係が確認できない P-1050 ～ 1054 があるが、本住居跡よりも新しいものと推定する。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 15°－Ｗである。南～東壁は壁の立ち上がりが失われていたが、床面や覆土の痕跡などから住居跡の範囲を確認した。　**規模**　東西方向が 2.62m、南北方向が 2.87m である。　**覆土の状態**　覆土は第１層で、炭化物をわずかに含む。　**壁**　壁が確認できる西壁・北壁での残存壁高は２～ 5cm であり、短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　西壁際から南西隅にかけて認められる。断面形は浅い「Ｕ」字状で、幅は 12 ～ 18cm、深さは床面から２～４cm である。覆土は暗褐色土（第３層）である。　**火処**　カマドが北壁際西寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 32cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面や煙道底面は床面とほぼ同じ高さで、先端は緩やかに外傾して立ち上がる。カマド内面に被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土である赤褐色土（第２層）は、焼土を多量に含んでいることから天井内面の崩落と考えら

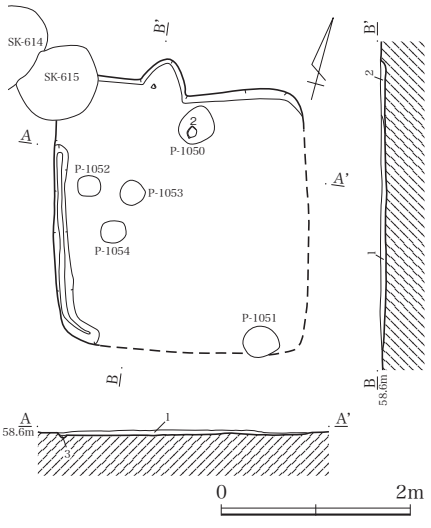
第 30 表　和田遺跡　SI-194 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 15.0 高　3.1	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後天井部ケズリ後つまみ部貼り付け。つまみは逆台形状で中央部が突出する。口縁部に重ね焼きの痕跡あり（黒褐色）。範囲は外面が口縁部から 0.9 ㎝、内面は 3.0 ㎝。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰粗粒多量 やや硬質	西隅床面上 2 ㎝ 口 1/6、体 1/3、天井 1/2 No.41
2 須恵器 蓋	口　復 15.0 高　残 2.2	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後天井部回転ケズリ。外面口縁～内面外周に重ね焼きの痕跡あり（黒灰色）。範囲は外面が口縁から 0.8 ㎝、内面は 2.8 ㎝。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰礫微量 やや軟質	南部床面上 6 ㎝、32 の上に重なる 口～天井 1/3、つまみ欠損 No.11
3 須恵器 蓋	高　残 2.2	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後回転ヘラケズリ後つまみ部貼り付け。つまみはリング状。	N8/0　灰白 緻密　青灰細粒多量 やや軟質	西隅床面上 4 ㎝ 天井 1/4 No.40
4 須恵器 高坏	口　復 17.8 高　残 2.1	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	2.5Y7/1　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	南隅床面上 6 ㎝ 口～体 3/4 No.101
5 土師器 坏	口　13.5 高　5.4 底　8.2 最大　13.8	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後口縁～底部わずかにミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部軽いナデ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。体部は成形が充分でなく、紐積痕を明瞭に残す。底部粗いケズリにより不整な平底となる。器壁厚い。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒少量 やや硬質	中央部床面直上、正立 口～体 1/2、底完存 No.53
6 土師器 坏	口　復 14.0 高　3.7 底　9.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ、表面剝落が著しい。外面口縁～体部ヨコナデ・ナデで体部指頭圧痕あり。体部下端ケズリ、底部多方向のケズリ。器壁厚く平底。	5Y8/2　灰白 緻密　黒細粒多量、赤褐細粒少量、白微粒多量 やや硬質	南壁際床面上 5 ㎝、正立 口 1/4、体～底完存 No.49
7 土師器 坏	口　復 10.2 高　5.0 底　6.0	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後繊密なミガキ、内面全体・口縁部外面黒色処理。外面口縁～体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り離し後軽いナデ。	7.5YR5/4　にぶい褐 緻密　白色微粒多量 やや軟質	中央部床面上 4 ㎝ 口 1/4、体 1/2、底完存 No.52
8 土師器 坏	口　復 16.4 高　5.3 底　復 10.4	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後繊密なミガキ。内面黒色処理、内面剝離顕著。外面口縁～体部ロクロナデ、口縁周辺が一部黒色化する。底部ナデ。表面磨滅のため切り離し方法不明。	10YR8/2　灰白 緻密　赤褐・青灰粗粒少量 やや軟質	中央部床面上 4 ㎝ 口～体 1/4、底 1/2 No.69
9 須恵器 坏	口　復 12.6 高　3.2 底　復 8.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、外面回転ヘラ切り離し後軽いナデ。底部わずかに上げ底。口縁部下端は器壁薄い。口縁部はやや玉縁状で大きく外反する。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、白・青灰細粒少量 硬質	南部床面直上 体 3/4 No.102
10 須恵器 坏	口　12.6 高　3.2 底　8.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後軽いナデ調整。焼成良好。体部下半がやや膨れ、体部中位から口縁部は直線的に外反する。底部は上げ底。	N7/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	西壁際床面上 7 ㎝、正立 口～底 1/2 No.10
11 須恵器 坏	口　復 12.7 高　3.2 底　復 7.3	内面口縁～底部ロクロナデ、体部に紐積痕残る。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り離し後軽いナデ。	N7/0　灰白 緻密　黒・白細粒多量 硬質	西壁際床面上 6 ㎝ 口～底 2/3 No.8
12 須恵器 坏	口　復 12.8 高　3.1 底　復 7.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後軽いナデ。底部は上げ底。	N7/0　灰白 緻密　白・青灰細粒多量 硬質	中央部床面上 3 ㎝ 口一部、体 1/3、底 1/2 No.33
13 須恵器 坏	高　残 2.1 底　復 8.4	内面体部下半～底部ロクロナデ。外面体部下半ロクロナデ、底面回転ヘラ切り離し後無調整。	5Y8/1　灰白 緻密　青灰・白粗粒微量 やや軟質	東隅床面上 7 ㎝ 体下位～底 1/3 周 No.26
14 須恵器 坏	口　12.9 高　3.7 底　8.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後一部ナデ、平行に 3 本棒の圧痕のような痕跡あり。底部は上げ底で厚く粘土を貼り合わせた痕跡あり。円柱造りの可能性あり。	5Y7/1　灰白 緻密　白微粒多量、青灰細粒少量 硬質	東壁際床面上 2 ㎝、逆位 ほぼ完形 No.29
15 須恵器 坏	口　復 13.2 高　4.0 底　復 8.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部丁寧な回転糸切り離し後無調整。底部はやや上げ底気味。色調が白っぽくやわらかい。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰微粒多量、白細粒微量 やや軟質	カマド中央部火床面上 6 ㎝、正立 口～底 1/2 No.108

16 須恵器 坏	口　復 13.4 高　3.1 底　復 7.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。体部下端に糸切りの糸が食い込んだ痕跡あり。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量、白粗粒微量 やや軟質	覆土 口～体一部、底 1/2
17 須恵器 坏	口　復 13.8 高　4.4 底　復 7.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ。ケズリは底部を見て時計回り。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや軟質	西壁際床面上９㎝ 口～底 1/2 No.20
18 須恵器 高台付坏	口　9.4 高　5.5 高台　7.1 重　130.7	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は高くわずかに外反する。	N7/0　灰白 緻密　白細粒少量 やや硬質	西部床面上３㎝、正立 ほぼ完形 No.17
19 須恵器 高台付坏	高　残 3.5 高台　6.3	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は高くわずかに外反する。	N4/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	カマド中央部火床面上５㎝、正立 体下位～高台完存 KNo.106
20 須恵器 高台付坏	口　復 14.1 高　4.8 高台　9.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。底部外面に刻書「山」字あり。高台は高くわずかに外反する。	N6/0　灰 緻密　白粗粒少量、灰褐粗粒微量 硬質	中央部床面上４㎝、逆位 口～体 1/3、底～高台完存 No.36
21 須恵器 瓶類	口　復 12.2 高　残 4.6	内面口縁～頸部ロクロナデ、ロクロ目が強め。外面口縁～頸部ロクロナデ。口縁端部はつまみ上げられ、外面は平坦面となる。	N6/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	南西部床面上13㎝ 口～頸 1/6 No.9
22 須恵器 瓶類	高　残 8.5 最大 復 14.9	内面頸部下端ロクロナデ。胴部上半ロクロナデ、紐土の繋ぎ目あり、下半ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	西部床面上５～13㎝と中央部床面上５㎝・６㎝が接合 胴 1/2 No.12・13・23・35・38・42
23 須恵器 瓶類	高　残 9.6 高台　7.0 最大　11.6	内面胴～底部ロクロナデ、底部に粘土を継いだ痕あり。外面胴部ロクロナデ後下半回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り離し後高台貼り付け後ロクロナデ。高台は断面方形でほぼ垂直。胴部中位に乳白色の自然釉付着。	5Y5/1　灰 緻密　白粗粒少量、青灰細粒微量 硬質	西隅床面上６㎝ 胴 1/2、底完存 No.39
24 須恵器 横瓶	高　残 12.0	内面胴部同心円当具痕強く残る。外面胴部平行叩き後カキ目、平行叩きは、一部擬格子状。表面は灰色、内部は赤褐色を程する。	10YR4/1　褐灰 やや緻密　白礫～粗粒少量 硬質	西隅床面上５㎝ 胴破片 No.43
25 須恵器 鉢	口　復 25.2 高　残 13.0	内面口縁～体部ロクロナデ、体部中位に粘土の継ぎ目あり、口縁部は粘土を貼付けて外向きの平坦面を作り出す。外面口縁ロクロナデ、体部上半ロクロナデ、体部下半平行叩き後ナデ。口縁は大きく外反する。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白粗粒少量、青灰細粒少量 硬質	カマド南側床面直上 口～胴 1/4 KNo.34
26 土師器 甕	高　残 5.5 底　9.2	内面胴部下半～底部ナデ。外面胴部下半ナデ、下端ケズリ、底部ケズリ。胎土白っぽく厚手。底部はいびつな平底。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰細粒多量、白細粒少量 やや硬質	中央部床面上３㎝とカマド南側床面上４㎝が接合 胴下半 1/4、底完存 No.55・65
27 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 11.4	内面口縁ヨコナデ、体部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、口縁下半にヘラ状工具のあたりと見られる縦の沈線あり。体部上半縦方向ケズリ後体部上端を横方向にケズリ。武蔵型。	5Y5/6　明赤褐 やや粗い　白細粒多量、青灰粗粒少量、雲母粗～細粒少量 やや硬質	南部床面直上 口 3/4、胴 1/2 No.87
28 土師器 甕	口　復 25.4 高　残 4.5	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端紐積痕あり。武蔵型。	5Y6/6　橙 やや粗い　白粗粒多量、赤褐粗粒少量 やや硬質	南隅床面上 11 ㎝ 口破片 No.46
29 須恵器 甕	口　復 27.8 高　残 4.6	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。内外表面に乳白色の自然釉付着。	N5/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口辺一部
30 須恵器 甕	口　復 31.0 高　残 4.3	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量、青灰粗粒少量 硬質	南隅床面上 17 ㎝ 口 1/4 No.5
31 瓦 平瓦	長　残 9.2 幅　残 7.0 厚　2.2 重　残 241.5	凹面布目痕側縁ケズリ模骨痕あり、桶巻作り。凸面縄叩き、側面・端面ケズリ。白色胎土。断面で粘土板の合わせ目が確認できる。	5Y8/1　灰白 緻密　白粗粒少量、青灰礫少量 硬質	南隅床面上６㎝ 破片 No.1

32 瓦 平瓦	長　残 7.5 幅　残 12.0 厚　2.0 重　残 403.3	凹面目の細かい布目痕後側縁端に近い部分ケズリ。凸面端面と平行するケズリ後格子叩き、側縁ケズリ。側面・端面ケズリ。	N5/0　灰 緻密　青灰粗粒少量 硬質	南部床面上２㎝、２の下 破片 No.98
33 瓦 平瓦	長　残 10.5 幅　残 12.6 厚　3.1 重　残 664.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後格子叩き。側面はケズリ、白っぽい胎土。	5Y8/2　灰白 緻密　白礫～細粒少量、青灰粗粒少量 硬質	南部床面直上 破片 No.3
34 瓦 平瓦	長　残 6.8 幅　残 7.6 厚　3.0 重　残 270.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。側面・端面ケズリ。白色の胎土。	2.5Y8/2　灰白 緻密　青灰粗粒多量、赤褐・白粗粒少量 やや軟質	南部床面上８㎝ 破片 No.2
35 瓦 丸瓦	長　残 4.7 幅　残 4.4 厚　1.5 重　残 92.4	凹面細かい布目痕後一部ケズリ。凸面ナデ。側面丁寧なケズリ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　白粗粒少量、赤褐礫微量 やや軟質	中央部床面上４㎝ 破片 No.4
36 土製品 土錘	長　5.1 幅　1.8 孔径　0.2 重　13.3	平面棗形。断面円形。表面ナデ調整。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　白微粒少量、赤褐細粒微量 やや軟質	中央部床面上４㎝、横位 完形 No.88

れる。　貯蔵穴　なし。　遺物　遺物は少ない。図化した遺物２点はともにカマド南側にあるP-1050の範囲内から出土したものだが、本遺構から混入したものと考え掲載した。図化以外には、土師器坏片４点（40 g）、甕片７点（150g）、須恵器片２点（30g）がある。土師器はロクロ・非ロクロ成形ともみられ、やや高台の高い高台付坏もある。武蔵型甕はない。本遺構の年代は、10世紀前半と考えられる。

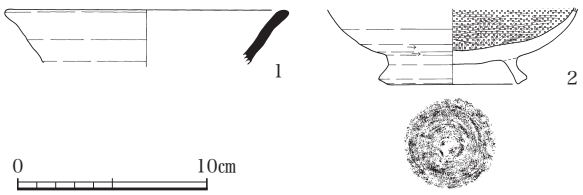


SI-195
1　褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土粒多量、炭化物粒少量。しまりあり。
3　暗褐色土　小礫微量。しまりあり。

第 65 図　和田遺跡　SI-195 実測図

ＳＩ－１９６（第 67・68 図、第 32 表、図版一三・四九）

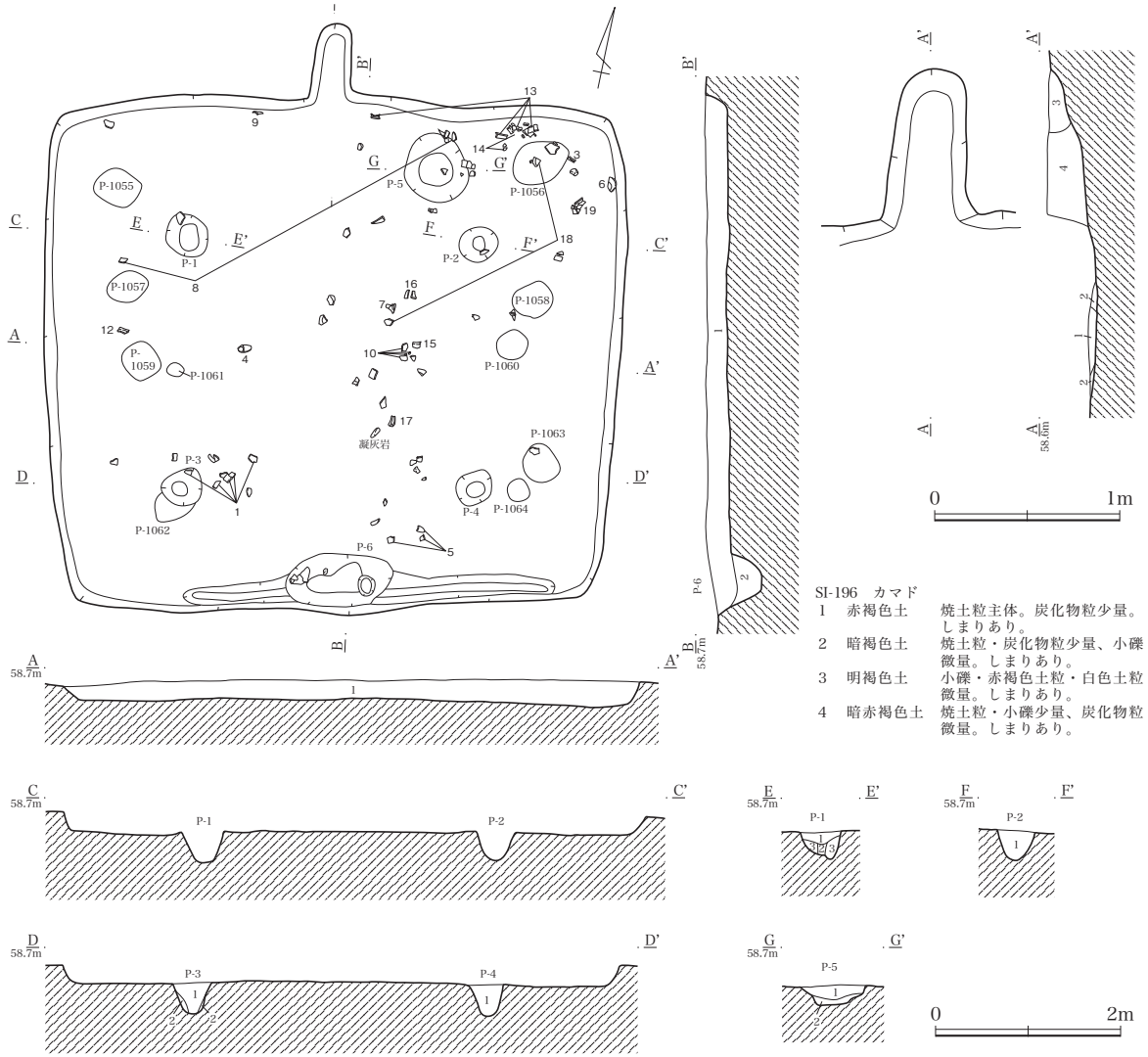
位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19・20 グリッドに位置する。南東に SI-197、南西に P-612 が近接してあるほか、南西２ｍに SI-195 が隣接する。　重複　なし。　平面形　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 14°－Ｗである。　規模　東西方向が 6.22m、南北方向が 5.64m である。　覆土の状態　覆土は褐色土（第１層）



第 66 図　和田遺跡　SI-195 出土遺物実測図

第 31 表　和田遺跡　SI-195 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口　復 15.0 高　残 2.9	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。表面磨滅が著しく調整不明瞭。	7.5Y7/1　灰白 やや粗い　赤褐細粒微量、粗～砂細粒多量 やや軟質	P1050 口～体 1/4 P-1
2 土師器 高台付坏	高　残 4.0 高台　7.8	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後多方向の密なミガキ。表面黒色処理。外面体部ロクロナデ、体部下端ケズリ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に外反する。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	P1050 内ピット底面上５㎝ 体～高付完存 No.1



SI-196　カマド
1　赤褐色土　焼土粒主体。炭化物粒少量。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗赤褐色土　焼土粒・小礫少量、炭化物粒微量。しまりあり。

SI-196
1　褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(P- 6 覆土)

SI-196　P- 1
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫微量。しまりあり。
3　褐色土　小礫微量。しまりあり。

SI-196　P- 2
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-196　P- 3
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄褐色土　白色土粒微量。しまりあり。

SI-196　P- 4
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-196　P- 5
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫微量。しまりあり。

第 67 図　和田遺跡　SI-196 実測図

で、南壁際の覆土上層と北壁際中央付近では焼土と炭化物が多量に出土する。北壁際の方はカマドに関連する堆積物の可能性があろう。　**壁**　残存壁高は 15 ～ 27cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが 4 本（P- 1 ～ P- 4）ある。P- 1 は径 50 × 46cm、深さ 33cm、P- 2 は径 43 × 37cm、深さ 32cm、P- 3 は径 45 × 33cm、深さ 34cm、P- 4 は径 40 × 33cm、深さ 35cm である。柱間寸法は、P- 1 － P- 2 間が 3.15m、P- 3 － P- 4 間が 3.20m、P- 3 － P- 1 間が 2.73m、P- 4 － P- 2 間が 2.67m である。4 本とも規模はほぼ同様で、覆土も類似する。　**入口ピット**　南壁際中央にある（P- 6）。平面形は楕円形で、規模は 120 × 24cm、床面からの深さは 6 ～ 10cm である。底面は丸みを持ち、東端にはピット状のごく浅い掘り込みがある。壁は外傾して立ち上がる。覆土

第 68 図　和田遺跡　SI-196 出土遺物実測図

は､炭化物などをわずかに含む暗褐色土（第２層）である。　**壁溝**　南壁際のみで認められる。断面形は「U」字状で､幅は 20 ～ 24cm､深さは床面から６～ 10cm である。　**火処**　カマドが北壁際西寄りにある。天井部、袖部とも失われているため、残存状態は良くない。煙道部は壁を溝状に掘り込んで作られており、長さは約 75cm、幅は約 cm40 である。火床面は床面からわずかに深くなった平坦面で、そこから４cm ほど緩やかに高くなり平坦な煙道底面へと続いている。煙道先端には比高７cm ほどの段があり、一度平坦になったあと外傾して立ち上がり確認面に至る。カマド内面に被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は第１～第４層で、焼土を主体とする第１層は天井内面の崩落と考えられる。煙道底面に堆積する第４層は、天井部の崩落の可能性もあろうか。　**貯蔵穴**　北壁際東寄りにある（P- ５）。平面形は円形で、規模は 76 × 75cm、床面からの深さは 20cm である。底面はほぼ平坦で壁は外傾して立ち上がるが、壁面の途中には幅 10cm 程度の全周する段がある。覆土は第１・第２層で、第１層は焼土や炭化物などをわずかに含む。　**遺物**　遺物は一定量

第 32 表　和田遺跡　SI-196 出土遺物観察表

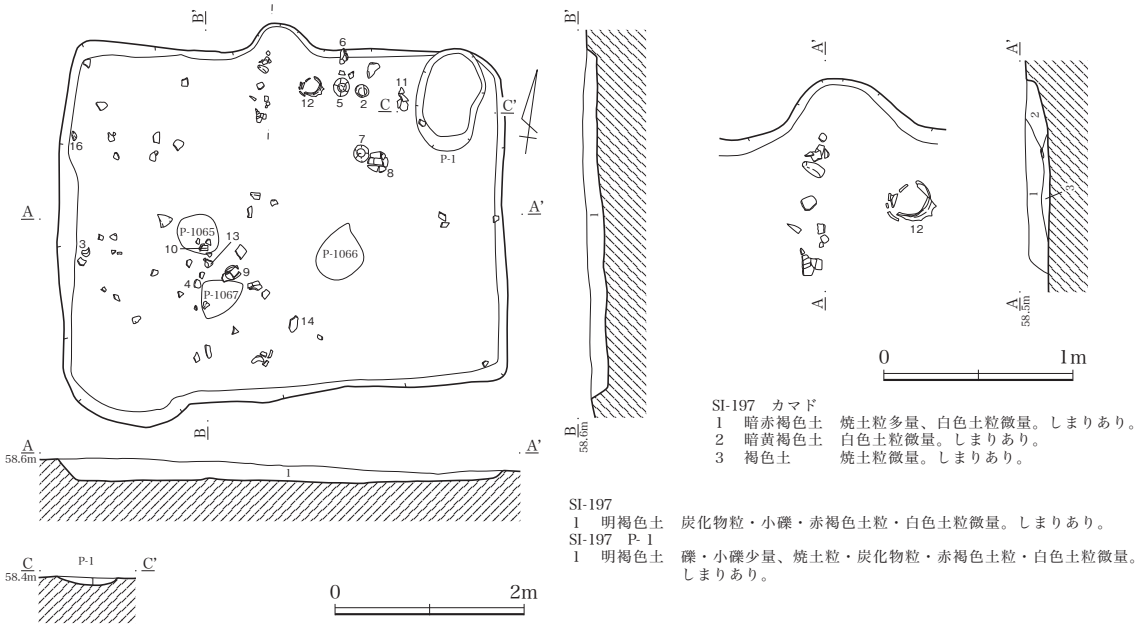
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 17.5 高　残 3.1	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後天井部ヘラケズリ。ややひずむ。ロクロ目が明瞭。	N8/0　灰白 緻密　白微粒微量 硬質	南西部床面直上と床面上 4 cm と 16 cm が接合 口～天井 1/3 No.7・9・11・13
2 土師器 坏	口　復 10.6 高　残 2.5	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向及び放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。口縁が外反し体部との境に稜を持つ。内面全面黒色処理。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密　白細粒微量、砂細粒微量 やや硬質	覆土 口 1/4、体一部
3 土師器 坏	口　復 16.2 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。口縁が外反し体部との境に稜を持つ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	北東隅床面上 7 cm 口 1/6 No.48
4 土師器 坏	口　復 12.2 高　残 4.0	内面口縁～体部ヨコナデ後多方向ミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。内面全体及び口縁部外面漆仕上げ。半球形の丸底。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白細粒微量、砂細粒微量 やや軟質	中央部床面上 14 cm 口 1/4 No.8
5 土師器 坏	口　復 14.8 高　残 5.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。表面剝離が著しく調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。半球形の丸底で器壁厚め。口縁部周辺は、被熱のため赤変している。	7.5YR7/8　黄橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	南部床面上 3 cmと 4 cmと 8 cmが接合 口～体 1/2 No.45・46・47
6 土師器 坏	口　復 14.9 高　残 5.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。内面全面ミガキの様だが表面剝離のため不明瞭。外面口縁軽いヨコナデ、体～底部ケズリ。体部上端は成形が甘く、紐積痕と粘土の隙間が残る。丸底器壁やや厚い。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	北東隅床面上 7 cm 口～底 4/5 No.50
7 土師器 坏	口　復 17.4 高　残 5.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。表面剝離のため調整不明瞭。内面ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、体部上端紐積痕あり。口縁は薄く、短く外反する。浅い丸底。	5YR7/8　橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白微粒微量 やや硬質	中央部床面上 14 cm 口～底 1/5 No.21
8 土師器 坏	口　復 18.0 高　3.6	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後口縁～底部多方向のミガキ。外面口縁～体部ヨコナデで紐積痕明瞭、底部ケズリ。外面体部下端稜をなす。丸味をおびた平底で浅く、器壁薄い。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	西部床面上 7 cmと北部床面上 12 cmが接合 口～底 1/2 No.2・32
9 土師器 坏	口　復 15.8 高　残 4.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あるが表面剝離のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部上半ナデで紐積痕あり。体部中位～底部ケズリ、底部中央に木葉痕あり。偏平な丸底器壁薄い。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　黒褐粗粒微量、赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	北壁際床面上 16 cm 口～底 1/4 No.15
10 土師器 坏	口　復 18.2 高　残 4.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後繊密な多方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部上半ナデ、体～底部ケズリで底部中央木葉痕あり。半球系の扁平な丸底で器壁薄い。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、粗～砂細粒少量 やや硬質	中央部床面上 5 cm 口～体 1/4 No.23
11 土師器 坏	口　復 16.4 高　残 4.1 最大 復 16.8	内面口縁～体部ヨコナデ後体部粗い放射状のミガキ。表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ後口縁～体部粗いミガキ。外面のミガキは強く施されており、深い沈線状になっている部分が多い。	7.5YR8/2　灰白 緻密　砂粗粒微量、白微粒微量 やや軟質	覆土 口一部、体 1/6
12 須恵器 横瓶	高　残 9.0	内面体部ロクロナデ、端部閉塞部には粘土シワあり、円盤閉塞。外面胴部～端部平行叩き。平行叩きは一部擬格子状となる。	N7/0　灰白 緻密　白粗粒微量 硬質	西部床面上 19 cm 胴破片 No.3
13 土師器 甕	口　復 11.0 高　残 9.7 最大 復 12.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。表面磨滅が著しく調整不明瞭。小型。最大径は胴部中央。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや軟質	北部床面上 22 cmと北東隅 7 cm、11 cm、13 cmが接合 口一部欠損、胴部 1/2 No.16・58・59・60
14 土師器 甕	口　復 12.6 高　残 10.9 最大 復 13.0	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半縦方向ケズリの後胴部下半横方向ケズリで指頭圧痕あり。底部ケズリ。やや丸味を帯びた平底。最大径は胴部中央。小型。口縁～胴部中位が強く被熱する。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　砂礫少量、赤褐礫少量 やや硬質	北東隅床面上 11 cmと 13 cmが接合 口 3/4、胴～底 1/2 No.58・59
15 土師器 甕	口　復 14.1 高　残 9.2 最大 復 17.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半軽いナデで紐積痕あり。胴部下半ケズリ。小型。最大径は胴部中位。	7.5YR8/8　黄橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	中央部床面上 5 cm 口～胴上半一部 No.36

16 土師器 甕	口　復 25.2 高　残 5.5	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ。やや厚い。	7.5YR7/8　黄橙 やや粗い　灰褐細粒多量、赤褐細粒微量 硬質	中央部床面上９㎝ 口～胴上端一部 No.20
17 土師器 甕	口　復 25.6 高　残 7.9	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ケズリ。表面磨滅が著しい。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐粗粒微量、白細粒少量、砂細粒多量、金雲母微粒微量 やや硬質	中央部床面上４㎝ 口～胴上半一部 No.29
18 土師器 甕	高　残 4.4 底　復 8.2	内外面とも表面磨滅が著しい。内面胴部下半～底面ナデ。外面胴部下半ケズリ、底部ケズリ、丸味を帯びた平底。球胴か。	5YR7/6　橙 やや緻密　白細粒微量、灰褐細粒少量 やや軟質	中央部床面上 15 ㎝と北西隅床面上５㎝が接合 胴下半～底 1/2 No.22・56
19 土師器 甕	口　復 21.2 高　残 5.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　白・赤褐細粒微量 やや硬質	北東隅床面上７㎝ 口～胴上半一部 No.51
20 須恵器 甕	高　残 4.6	内面胴部同心円当具痕。外面擬格子叩き後カキ目。	5B5/1　青灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 胴一部
21 土製品 筒形	口　復 17.4 高　残 7.2 最大 復 18.4	内面口縁部～体部ナデで紐積痕・指頭圧痕あり。外面口縁部～体部ケズリ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒少量、透明粗粒微量 やや硬質	覆土 口 1/4、体一部
22 土製品 筒形	高　残 2.2 底　残 8.0	内面底部ナデ。外面胴部下端ナデで指頭圧痕あり。底部木葉痕。粘土の継ぎ目で剝離する。	5YR7/6　橙 やや緻密　白細粒微量 やや軟質	覆土 底 1/4
23 土製品 粘土塊	長　5.6 幅　5.0 厚　3.3 重　51.8	平面・断面ともに不正楕円形。捏ねた粘土をそのまま焼成している。裏面に植物の圧痕とも見られる沈線状の痕跡あり。	5YR7/8　橙 やや粗い　砂礫少量、赤褐粗粒微量、白粗～細粒少量 硬質	覆土 完形
24 土製品 粘土塊	長　6.8 幅　4.3 厚　1.5 重　28.7	平面・断面ともに楕円形。捏ねた粘土をそのまま焼成している。平坦面あり。	7.5YR8/8　黄橙 やや粗い　白細粒微量、赤褐礫微量、砂礫微量 硬質	カマド 完形 K

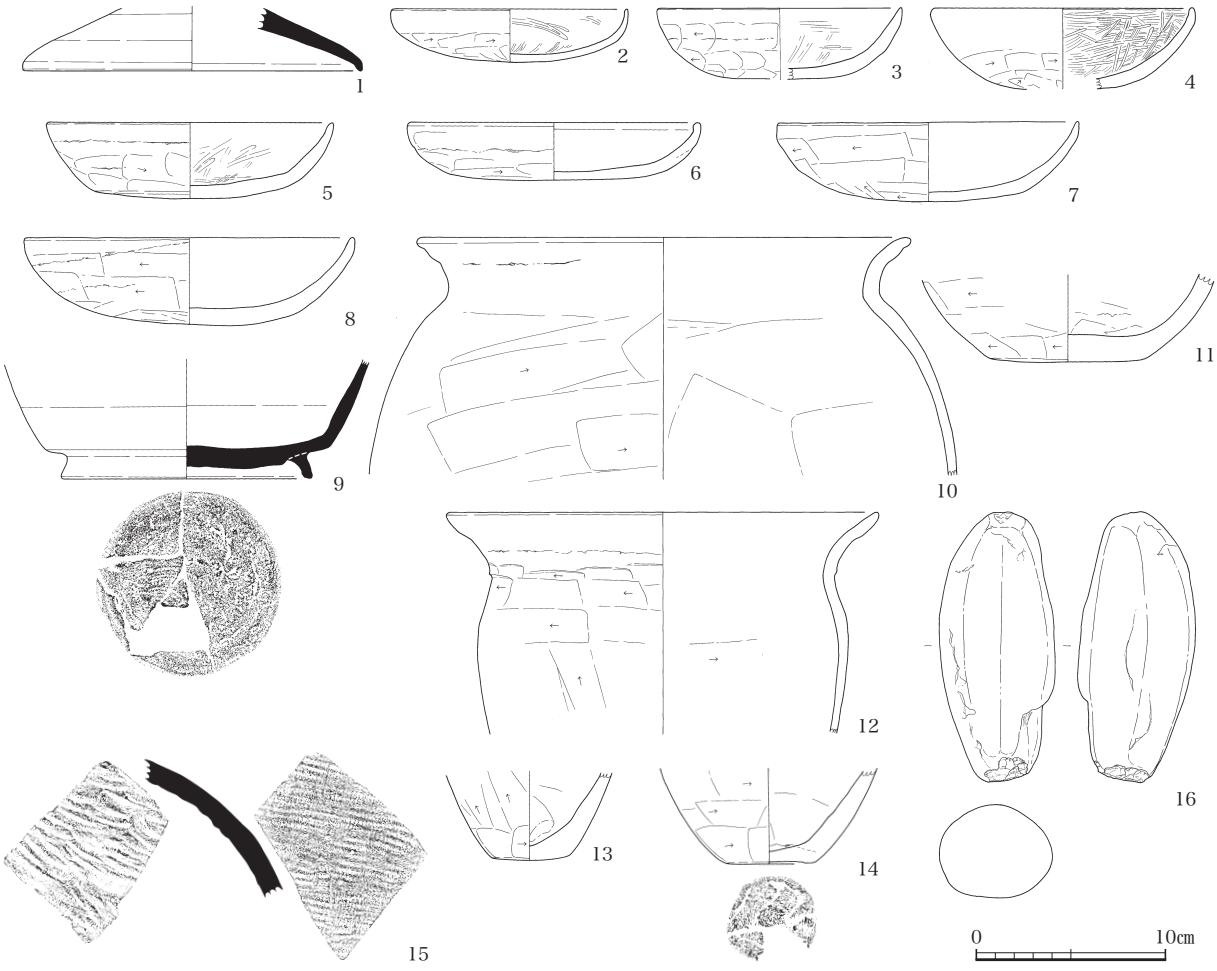
ある。住居跡全体から出土するが、中央東寄りから北東部にやや集中する。土師器坏は半球状のものが主体で、盤状坏８や底部に木葉痕を持つ坏９・10 もある。甕は、図化しなかったものも含めると長胴と武蔵型がほぼ同じ割合である。13･14･15 のような小型の甕が多いのも特徴といえる。。須恵器横瓶 12 は西壁際中央、粘土塊 24 はカマド周辺から出土する。図化以外には、土師器片坏 307 点（3,300g）、甕 733 点（6,760g）、粘土塊 20 点（160g）、須恵器片５点（100g）、灰釉陶器片１点（10g）がある。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－１９７（第 69・70 図、第 33 表、図版一三・一四・五〇）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－19・20、Ｌ－19・20 グリッドに位置する。北に SI-196、南に SI-200b、東に SI-631 がそれぞれ近接してあるほか、西３m に SI-195、南２m に SK-977 が隣接する。　**重複**　住居跡内に P-1065 ～ 1067 があるが、本住居跡との新旧関係は不明である。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－８°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.71m、南北方向が 3.57m である。　**覆土の状態**　覆土は明褐色土（第１層）で、炭化物などをわずかに含む。　**壁**　残存壁高は８～ 23cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 29cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、被熱によ



第 69 図　和田遺跡　SI-197 実測図



第 70 図　和田遺跡　SI-197 出土遺物実測図

第 33 表　和田遺跡　SI-197 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 18.0 高　残 3.3	内外面とも口縁～天井部ロクロナデ後外面天井部回転ヘラケズリ。	7.5Y5/1　灰 緻密　白粗粒少量、白礫微量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
2 土師器 坏	口　12.5 高　2.8 重　88.2	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後緻密なミガキと思われるが剥離のため不明瞭。ミガキは口縁～体部横方向、体～底部放射状。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。器壁薄く偏平な丸底。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・灰黒粗粒少量 やや硬質	北東隅床面上 8 ㎝、正立 ほぼ完形 No.54
3 土師器 坏	口　復 12.8 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ後ミガキ。表面剥離が著しく調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ､体部ケズリで体部上半紐積痕あり。丸底。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　灰褐細粒多量、黒褐粗粒～礫微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	西壁際床面上 9 ㎝ 口～体 1/3 No.11
4 土師器 坏	口　復 13.9 高　残 4.3	内面口縁～体部ヨコナデ後多方向の緻密なミガキ。外面口縁～体部上半ヨコナデ、体部ケズリ。体部上半に無調整部分があると見られるが表面剥離のため不明瞭。器壁やや厚く丸底。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒褐・赤褐粗粒少量、白粗粒微量 やや硬質	中央部床面上 3 ㎝ 口～体 1/6 No.28
5 土師器 坏	口　15.0 高　4.0 重　261.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。表面剥離が著しく調整不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。底部には棒状物質の圧痕やヘラ状工具のあたりのような痕跡がある。器壁厚く偏平な丸底。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　灰褐微粒～細粒多量 やや硬質	カマドの東側床面上 9 ㎝、逆位 完形 No.55
6 土師器 坏	口　復 15.6 高　残 3.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あるが表面剥離のため不明瞭。外面口縁ナデ、体～底部ケズリで口縁部に紐積痕あり。偏平な丸底。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　灰褐・白粗粒微量 やや硬質	北壁際、カマドの東側床面上 11 ㎝、逆位 口～底 1/2 No.57
7 土師器 坏	口　16.0 高　4.2 重　216.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。表面剥離著しくミガキ及び漆仕上げの可能性あるが不明確。外面口縁ヨコナデ、体部横方向ケズリ、底部多方向ケズリで丸底を成形。偏平な丸底。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　黒褐微粒～細粒多量、赤礫～粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	北東部床面上 6 ㎝、正立 完形 No.51
8 土師器 坏	口　17.5 高　4.6	内面口縁～底部ヨコナデ。表面剥離著しくミガキの可能性あるが不明確。外面口縁ナデ、体～底部ケズリ、口縁～体部紐積痕あり。外面も表面磨滅著しい。偏平な丸底。器壁厚い。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　黒褐・白粗粒少量、赤褐礫微量 やや軟質	北東部床面上 8 ㎝、正立 ほぼ完形 No.50
9 須恵器 高台付坏	高　残 6.2 高台　13.4	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後ケズリ高台貼り付け。高台は断面方形でやや外反する。器壁厚く大型。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒褐細粒少量、白色粗～細粒少量 硬質	中央部床面上 10 ㎝ 体一部、底ほぼ完存 No.40
10 土師器 甕	口　復 26.1 高　残 12.5	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半斜方向ケズリ。球胴。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　黒褐微粒～細粒多量、白細粒少量、赤褐細粒少量 やや硬質	中央部床面上 2 ㎝ 口～胴上半 1/6 No.24
11 土師器 甕	高　残 4.5 底　8.4	内面底～胴部ヘラナデ。外面胴部下半はケズリ、底部ケズリ。丸味をおびた平底で器壁厚い。球胴。赤みの強い胎土と白っぽい胎土がマーブル状に混じる。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒褐細粒多量、赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	北東部床面上 8 ㎝、正立 胴一部、底完存 No.53
12 土師器 甕	口　22.8 高　残 11.7	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向ケズリの後上端を横方向にケズリ、頸部にケズリの工具痕明瞭。	5YR6/8　　橙 やや緻密　白細粒多量、赤褐粗粒～細粒少量、黒褐細粒少量 やや硬質	カマド前面床面直上、逆位 口完存、胴上半一部 No.58
13 土師器 甕	高　残 4.6 底　4.2	内面胴部下端～底部ヘラナデで指頭圧痕あり。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR6/8　　橙 粗い　黒褐礫～粗粒多量、白粗粒少量、赤褐粗粒～細粒多量 やや硬質	中央部床面上 7 ㎝ 胴下端一部、底完存 No.26
14 土師器 甕	高　残 5.1 底　4.8	内面胴部下端～底部ヘラナデで紐積痕あり。外面胴部下半横方向ケズリ、底部木葉痕後外周一部ナデ。武蔵型。	10YR6/3　にぶい黄橙 粗い　黒褐礫～粗粒多量、白粗粒～細粒少量、金雲母微量 硬質	南部床面上 5 ㎝ 胴下端一部、底 3/4 No.37

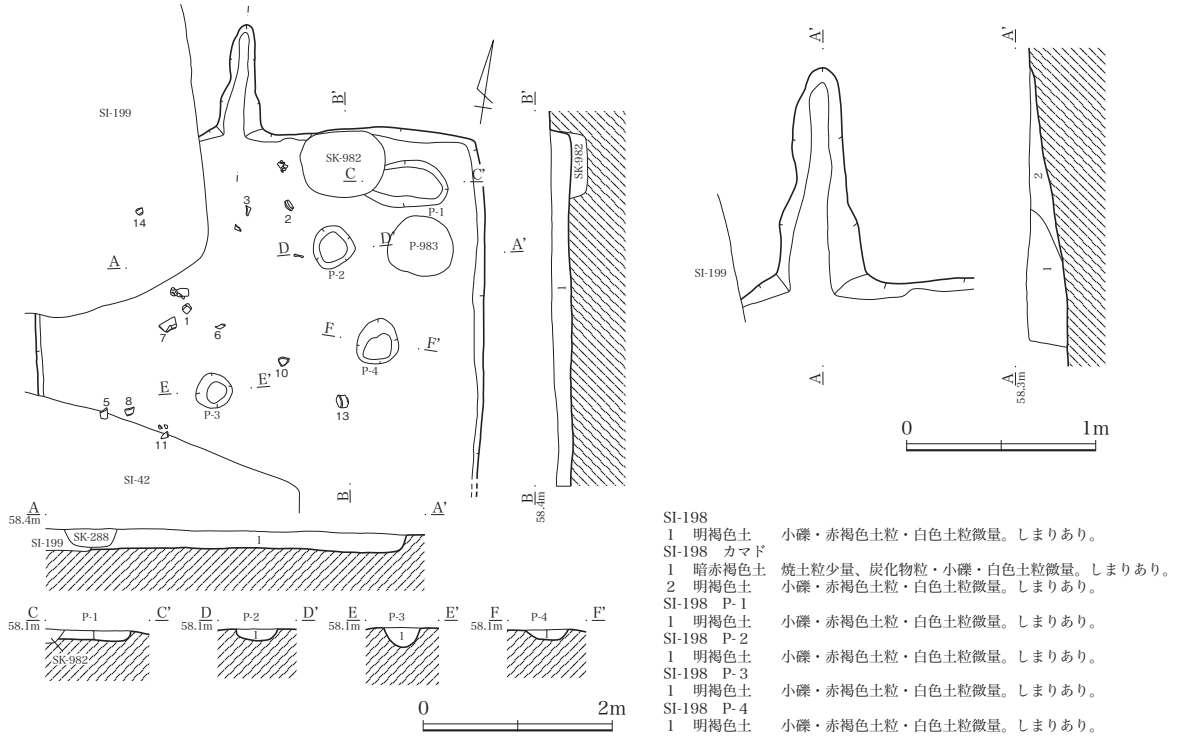
15 須恵器 甕	高　残 7.5	内面胴部下半波状当具痕。外面胴部下半擬格子叩き。	N6/0　灰 黒褐粗粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部
16 石 敲石	長　14.3 幅　6.1 厚　4.9 重　586.9	平面・断面ともに楕円形。下端に使用による鼓打痕と剝離あり。	5Y5/1　　灰 緻密　ホルンフェルス	西壁際床面上８㎝ 完形 No.1

り硬化赤変している部分が目立つ。煙道へは平坦に続き、先端は緩やかに高くなったあと急に立ち上がり確認面に至る。煙道先端から 50cm 南には、約５cm 角で長さ 15cm ほどの柱状の礫が出土しており、支脚として使用されたものの可能性がある。火床面右側で床面直上から逆位で出土する甕口縁部 12 は、カマド袖部の構築材が残存したものだろう。覆土は３層で、焼土を多量に含む第１層は天井内面が崩落したものとみられる。

貯蔵穴　北東隅にある（P- 1）。平面形は楕円形で、規模は 110 × 68cm、床面からの深さは８cm である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。覆土は明褐色土（第１層）で、少量の礫を含む。

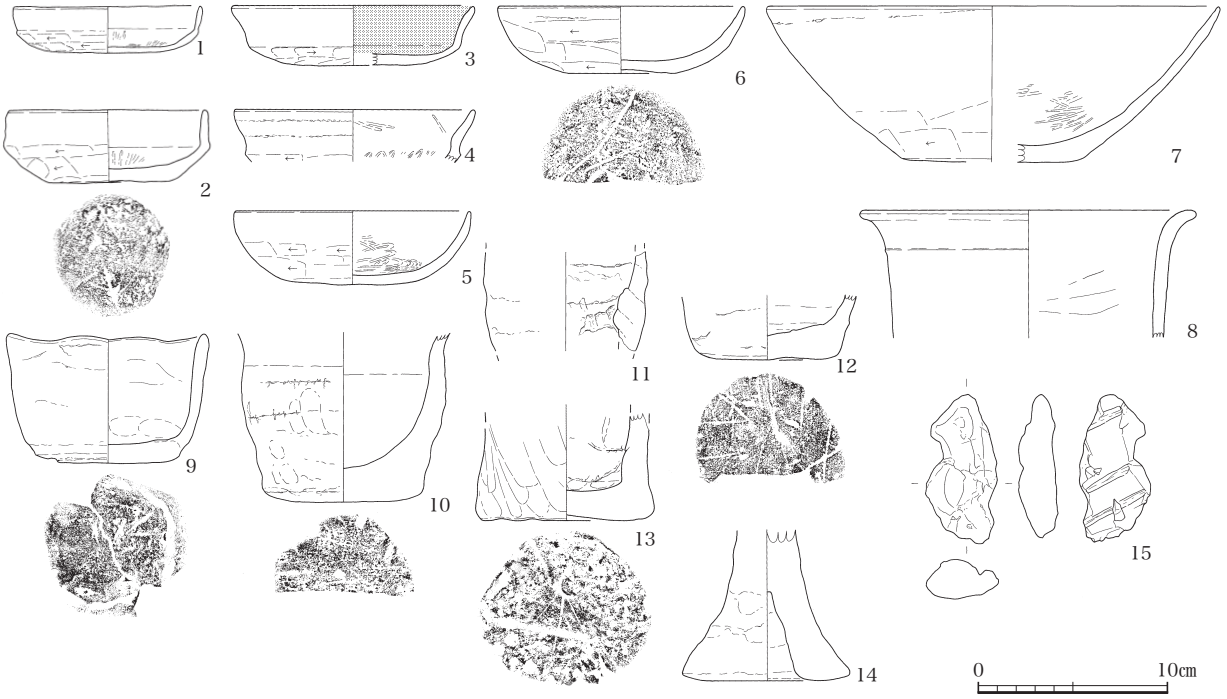
遺物　遺物は多く、南東部を除く住居跡内各所から出土する。北東部及び南西部に比較的集中する。須恵器は少ない。２・５・７・８は完形ないしほぼ完形の土師器坏で、カマド前面となる住居跡北東部の床面からやや浮いた状態で出土する。土師器甕は球胴 (10・11) と武蔵型（12 ～ 14）を図化した。11 が貯蔵穴の西側より、また 12 がカマド南東部の床面直上より出土する他は、住居中央部のやや浮いた位置からの出土である。土師器坏は半球状のものが主体であり、丸底ないし丸みを持つ平底で、器壁は薄いものと厚いものがある。甕は長胴、球胴、武蔵型があるが、武蔵型が多い。図化以外の遺物は土師器坏片 204 点（2,160g）、土師器甕片 601 点（5,140g）、須恵器片 11 点（220g）、粘土塊４点（20 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－１９８（第 71・72 図、第 34 表、図版一四・五〇）



SI-198
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-198　カマド
1　暗赤褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-198　P- 1
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-198　P- 2
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-198　P- 3
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-198　P- 4
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 71 図　和田遺跡　SI-198 実測図



第 72 図　和田遺跡　SI-198 出土遺物実測図

第 34 表　和田遺跡　SI-198 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.0 高　2.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状主体のミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上端稜あり、体～底部ケズリ。器壁薄く偏平な丸底。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや緻密　黒・赤褐・透明細粒少量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上 7 cm ほぼ完形 No.4
2 土師器 坏	口　10.7 高　3.9 底　6.3 最大　10.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後体～底部放射状のミガキ内面の表面剥離著しく調整不明瞭。内面漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上端稜あり、体部ケズリ、底部木葉痕後一部ケズリ。外面体部の表面剥離著しい。わずかに上げ底となる平底。	2.5Y8/3　淡黄 緻密　黒細粒多量、白・透明細粒微量 やや硬質	カマド南側床面上 7 cm、横位 完形 KNo.10
3 土師器 坏	口　復 12.9 高　3.1	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明瞭内面全体漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、稜あり、体～底部ケズリ。偏平な丸底。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐細粒多量,白・透明細粒少量,黒細粒微量 硬質	カマド南側床面上 6 cm 口～底 1/3 KNo.12
4 土師器 坏	口　復 12.8 高　残 2.7	内面口縁～体部上半ヨコナデ後粗いミガキ。ミガキは放射状か。外面口縁ナデで紐積痕残す。体部上端稜あり、体部ケズリ。	2.5Y3/1　黒褐 緻密　透明細粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 口～体上半 1/5
5 土師器 坏	口　復 12.5 高　残 3.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外面とも表面磨滅により調整不明瞭な部分あり。器壁は薄く、丸底。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、黒細粒少量　透明微粒少量 硬質	南西部床面上 10 cm 口～底 1/6 No.8
6 土師器 坏	口　復 13.0 高　3.5 底　6.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと見られるが表面剥離のため不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。底部中央わずかに上げ底で木葉痕残る。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、黒・透明微粒少量 やや硬質	中央部床面上 8 cm 口～底 1/2 No.3
7 土師器 鉢	口　復 24.0 高　8.2 底　復 9.5	内面口縁～体部上半表面剥離のため調整不明。体部下半～底部ナデ後ミガキ、表面剥離が著しく調整の密度は不明。外面口縁～体部上半表面剥離のため調整不明。口縁部紐積痕あり。体部下半～底部ケズリ。やや丸味をおびた平底。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤細粒多量、黒微粒多量、金雲母微粒微量 やや硬質	中央部床面上 6 cm 口～底 1/3 No.5
8 土師器 甕	口　復 17.7 高　残 6.7	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部は表面剥離のため調整不明。ケズリか。長胴。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　黒・赤褐細粒少量、白・透明細粒微量 やや硬質	南西部床面上 12 cm 口～胴上半 1/6 No.7

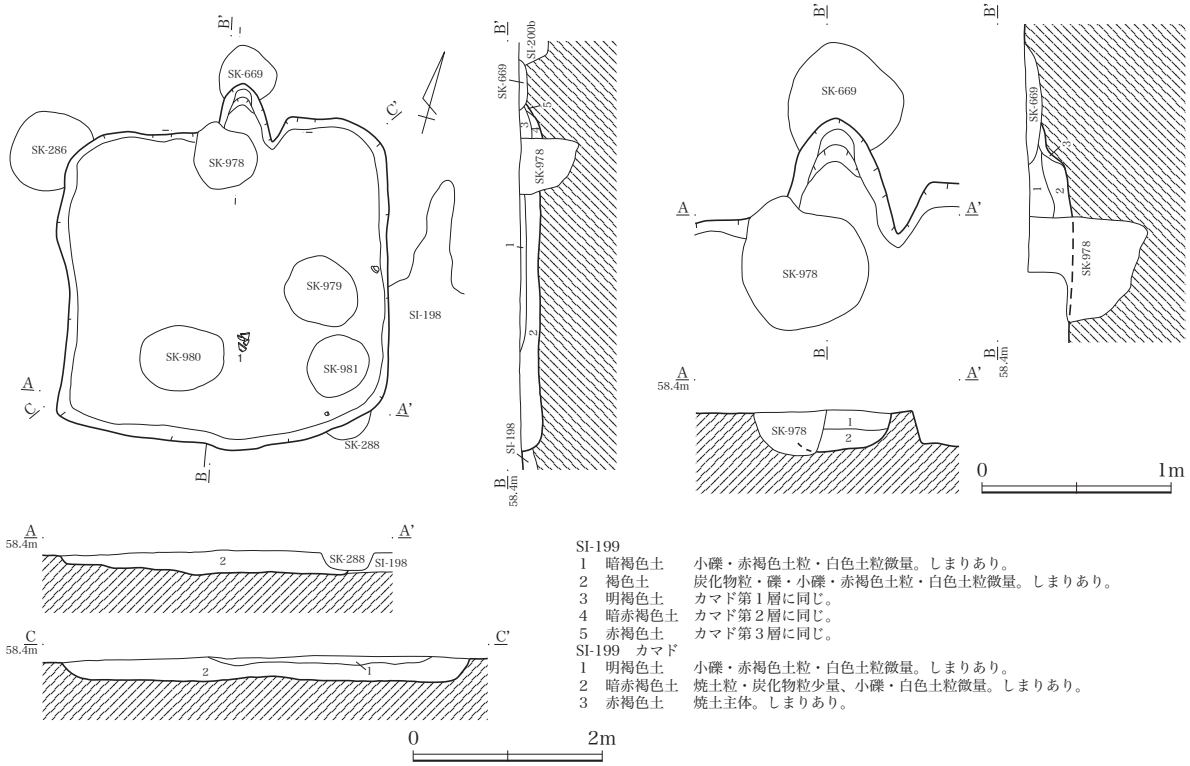
9 土師器 手捏ね	口　復 10.7 高　残 6.8 底　5.9	鉢形。内面口縁～底部ナデで指頭圧痕あり。外面口縁～体部ナデで紐積痕あり。底部木葉痕あり、軽いナデ。底部外面被熱により赤変する。	5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤細粒少量、白微粒微量、赤褐・灰褐礫微量 やや硬質	覆土 口～体 1/6、底完存
10 土師器 手捏ね	高　残 8.9 底　復 8.3	内面口縁ヨコナデ、体～底部丁寧なナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで紐積痕・指頭圧痕を明瞭に残す。底部木葉痕あり。	5YR5/6　明赤褐 緻密　黒・赤微粒少量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上 11 ㎝ 口一部、体～底 1/2 No.2
11 土製品 筒形	高　残 5.2 最大　復 8.7	内面体部無調整、紐積痕顕著。外面体部ナデ、断面の上・下とも紐積部分で剥離。内面黒褐色。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤細粒多量、白細粒微量 硬質	南西部床面上 3 ㎝ 体 1/4 No.6
12 土製品 筒形	高　残 3.4 底　7.3	内面体～底部ナデでヘラ状工具が底部に強くあたった痕跡あり。外面体部下半ナデで紐積痕あり。底部棒状の凹みがあり木葉痕後軽いナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 体下半 1/2、底 3/4 No.14
13 土製品 筒形	高　残 5.6 底　9.4	内面体～底部ナデで指頭圧痕・紐積痕粗く残る。外面体部強いナデ。底部木葉痕で外周は砂や礫、植物の茎状の物質などの圧痕が残る。粘土が硬くなる前に地面などに置いたためか。	5YR6/6　橙 粗い　赤細粒微量、白微粒微量、砂礫～砂細少量 硬質	南東部床面上 2 ㎝ 体下半完存、底完存 No.1
14 土製品 支脚	高　残 8.0 底　8.9	内面ナデ。外面ナデで紐積痕あり。外面・底面とも成形時のナデのみであり表面調整は施されない。中心の孔は、棒状工具で粘土を穿って作り出される。被熱の痕跡は明瞭ではない。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・白微粒微量、赤細粒少量 やや硬質	北西部床面上 11 ㎝、(SK-981 の上) 下半完存 覆土・SI-199 No.1
15 土製品 粘土塊	長　7.6 幅　3.7 厚　2.1 重　42.8	平面・断面ともに不正形。捏ねた粘土をそのまま焼成しており、小礫を多量に含む。裏面は平坦で３本の棒の圧痕が残る。	7.5YR6/6　橙 粗い　砂礫多量 やや硬質	覆土 完形

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 18・19、Ｋ－ 18・19 グリッドに位置する。北西２m に SI-200b、南４m に SI-45 が隣接する。　**重複**　北西部が SI-199 に、南西部が SI-42 に、北東部が SK-982 と P-983 に切られる。SK-287・288 には覆土のみが切られる。SI-199 範囲内の SK-979・980・981 とも重複するとみられるが、新旧関係は不明である。住居跡南辺はⅡ区に及ぶが、確認面の違いのためⅡ区側では本住居跡を確認できなかった。　**平面形**　方形ないし長方形とみられるが、南辺が確認できないため確定できない。南北方向の中軸線はＮ－ 11°－Ｗである。　**規模**　東西方向は 4.73m である。南北方向は、確認部分だけで 3.70m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 18 ～ 21cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット３本（P- ２～ P- ４）がある。P- ２は径 43 × 42cm、深さ 11cm、P- ３は径 37 × 36cm、深さ 20cm、P- ４は径 48 × 44cm、深さ 11cm である。覆土は３本ともほぼ同様の明褐色土である。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を溝状に掘り込んで作られるもので、長さは 115cm、幅は 27 ～ 43cm である。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、煙道へは段差なく続いている。煙道底面は緩やかな斜面となっており、先端でやや角度を急にして確認面に至る。被熱の痕跡は少なく、燃焼部に近い煙道内面の一部が硬化赤変している程度である。覆土は２層で、第１層は焼土を多く含む。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- １）。平面形は楕円形で、西端は SK-982 に切られるため長さは不明である。確認できる長さは 98cm、幅 49cm、床面からの深さは 10cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は明褐色土（第１層）で、微量の礫などを含む。　**遺物**　遺物は少なく、住居跡中央付近にややまとまる。遺物の主体は土師器甕で、須恵器はわずかである。土師器甕は長胴で、ごく薄く仕上げた甕片もある。土師器坏は口縁部が直立する小型・扁平な模倣坏が多く、１～３はカマド南部及び住居中央部よりやや浮いた位置で出土する。手捏ね土器（９・10）や土製品も多く、底部に木葉痕を持つ筒形土製品（11 ～ 13）や支脚（14）、粘土塊（15）もある。図化以外の遺物は、長胴甕を中心とする土師

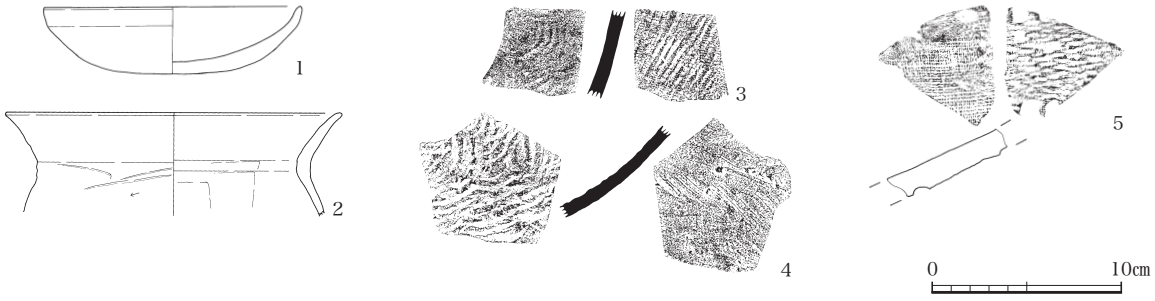
器甕片 1,203 点（1,830g）が大半で、他に土師器坏や須恵器の坏、甕がごくわずかにある。本遺構の年代は 7 世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－１９９（第 73・74 図、第 35 表、図版一四）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 19、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。北に SI-200b と SK-977 が、南に SI-42 がそれぞれ近接してある。　**重複**　南東部で SI-198 を切り、北西部が SK-286 に、南東部覆土が SK-288 に、カマドが SK-669・978 にそれぞれ切られる。住居跡南部には SK-979・980・981 があるが、新旧関係は確認できていない。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 18°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.54m、南北方向が 3.26m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、第２層は炭化物などをわずかに含む。第１層は当初別遺構としていたものだが、平面的な形状が不規則なため本住居跡の覆土の一部とした。別住居跡の一部が残存したものの可能性はあるだろう。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 26cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**



第 73 図　和田遺跡　SI-199 実測図



第 74 図　和田遺跡　SI-199 出土遺物実測図

第 35 表　和田遺跡　SI-199 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.7 高　残 3.5	内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、漆仕上げの可能性あり、体～底部ケズリか。器壁やや厚く、浅い丸底。白色胎土。	2.5Y8/3　淡黄 やや緻密　灰黒粗～細粒多量、白細粒微量 やや軟質	中央部床面上 4 cm 口～底 1/2 No.2
2 土師器 甕	口　復 17.8 高　残 5.4	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデでヘラ状工具痕強く残る。外面口縁ヨコナデ、胴部上位横方向ケズリ。武蔵型。	5YR6/8　　橙 やや緻密　白細粒多量、灰細粒少量 やや硬質	覆土 口一部、胴上端一部
3 須恵器 甕	高　残 4.7	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き。	10YR4/2　灰黄褐 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 胴一部
4 須恵器 甕	高　残 4.8	内面胴部同心円当具痕。外面胴部ケズリ後ナデ。器壁薄い。	5Y6/1　　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 胴一部
5 瓦 平瓦	高　残 3.5	凹面布目痕後一部ナデで模骨痕あり。凸面縄目叩き後格子叩き。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒少量、灰褐礫微量 やや硬質	覆土 破片

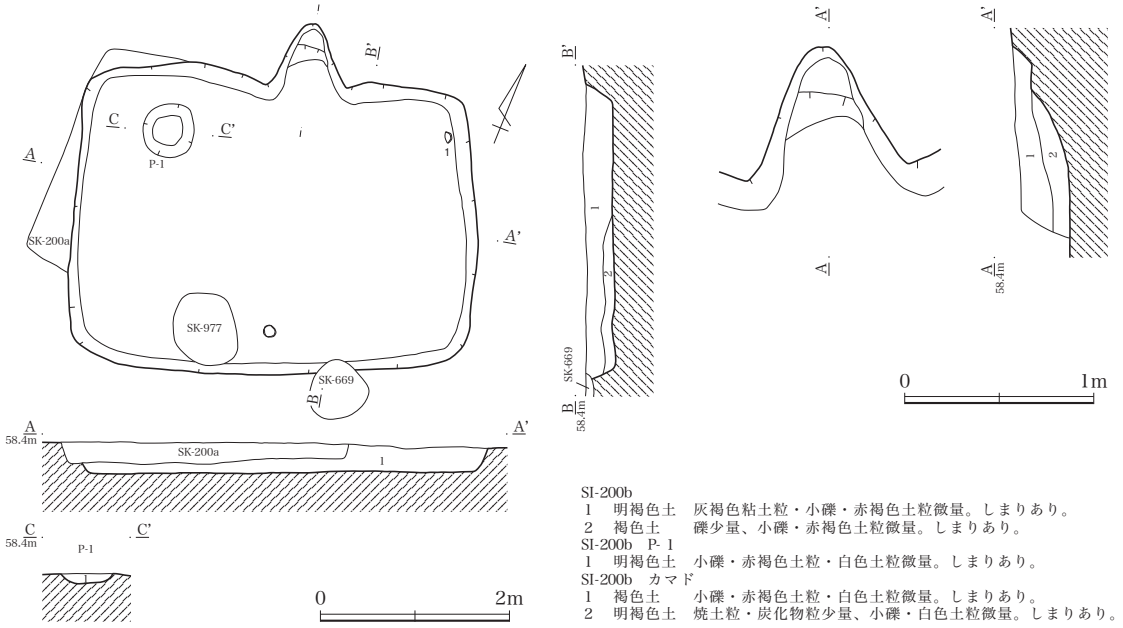
なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部は失われている上、火床面から左袖が SK-978 により大きく切られるほか、煙道先端は SK-669 に切られており、残存状態は良くない。煙道部は壁を「U」字状に 53cm 掘り込んで作られている。袖部は地山掘り残しによるもので、内面は被熱により広範囲が硬化赤変する。火床面は床面からやや低くなった平坦面とみられ、煙道へはなだらかに続いたあと約 10cm の段をもって立ち上がり先端に至る。覆土は３層で、焼土を多量に含む第３層は天井部内面の崩落と考える。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、住居跡の南東部よりわずかに出土する。土師器坏は、1 に図示した丸底で半球形、厚手の器形が主体である。薄手の坏も若干みられる。土師器甕は長胴と武蔵型があり、武蔵型の方がやや多い。須恵器の出土は少ない。図化以外の遺物は、土師器片が 195 点（1,690 g）、須恵器片が７点（110 g）である。本遺構の年代は８世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－２００ｂ（第 75・76 図、第 36 表、図版一四・一五）

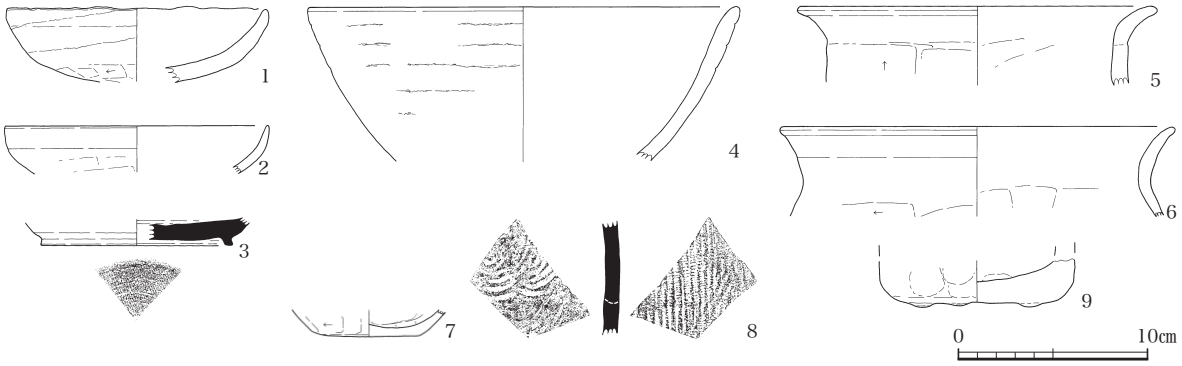
位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。北に SI-197・631、南に SI-199、東に SK-289 がそれぞれ近接してある。　**重複**　西半が SK-200a に、南辺の一部が SK-669 に切られる。南部で SK-977 と重複するが、新旧関係は確認できていない。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 22°－Ｗである。

規模　東西方向が 4.30m、南北方向が 3.10m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、第１層は粘土粒などをわずかに含む。　**壁**　残存壁高は 26 ～ 31cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット１本（P- 1）がある。規模は径 55 × 53cm、深さ 10cm で、覆土は緻密な明褐色土（第１層）である。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央やや東寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 67cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、燃焼部に面するカマド内面左側の一部は被熱により硬化赤変している。煙道は徐々に傾斜が急になる斜面で、先端で一度平坦になったあと外傾して直線的に立ち上がり確認面に至る。覆土は２層で、第１層は焼土と炭化物を比較的多く含む。　**貯蔵穴**　なし。

遺物　遺物は少ない。1 に図示した半球形の土師器坏が北東部より出土するほかは、いずれも覆土中の出土である。土師器坏は半球状主体、甕は長胴（５）と武蔵型（６）がある。図示しなかった遺物は土師器片が多く 431 点（4,280 g）、須恵器片は 16 点（460 g）である。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。



第 75 図　和田遺跡　SI-200b 実測図



第 76 図　和田遺跡　SI-200b 出土遺物実測図

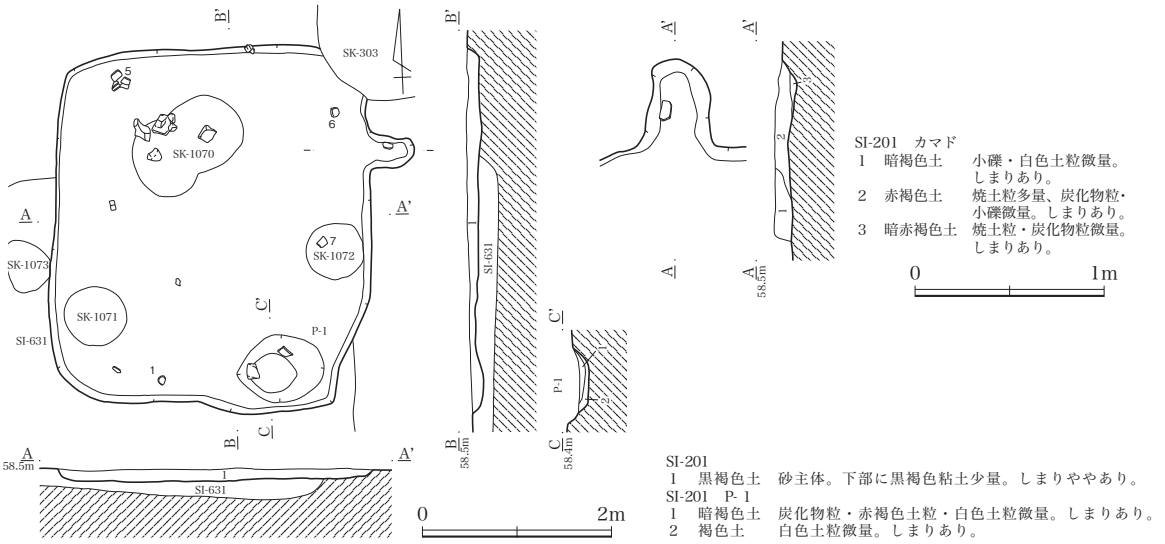
第 36 表　和田遺跡　SI-200b 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.8 高　残 3.8	内外面とも表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデか。内面漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部上半ナデと見られるが無調整の可能性もあり。体部下半～底部ケズリ。器壁やや厚く丸底。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	東壁際北部床面上 2 cm 口～体 1/4 No.1
2 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 2.5	内外面とも表面磨滅著しい。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデか。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、一部無調整部分あり。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒褐色細粒多量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
3 須恵器 高台付坏	高　残 1.4 高台 復 10.2	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。高台は断面方形やや「ハ」の字状に開き低い。	5Y6/1　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 高台～底 1/4 c
4 土師器 鉢	口　復 22.8 高　残 8.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅が著しいため調整不明確。外面口縁～体部上半は紐積痕を明瞭に残す。口縁部ヨコナデ、体部ナデと思われるが表面磨滅のため調整不明確。意図的に紐積痕を残したものだろう。	5YR6/8　橙 やや粗い　灰粗～細粒多量、黒褐粗粒微量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部 b

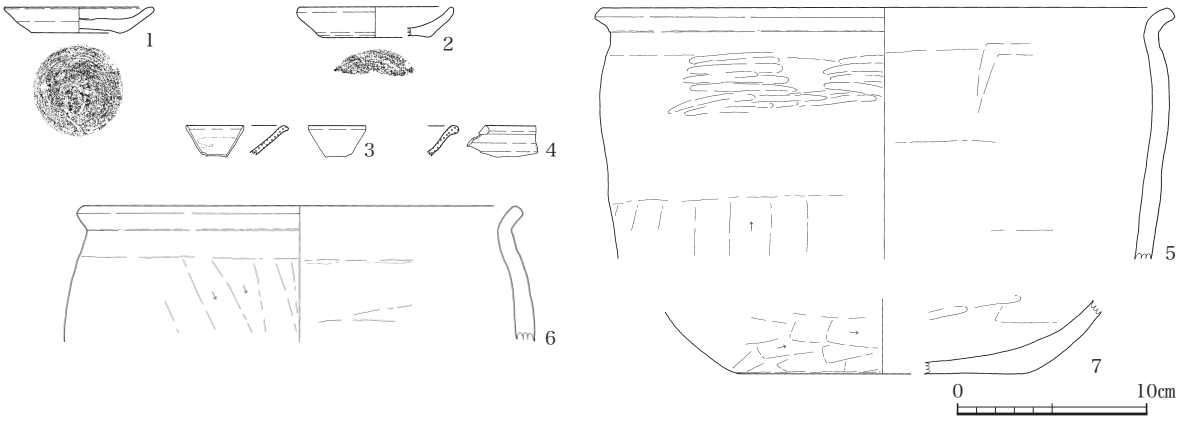
5 土師器 甕	口　復 19.0 高　残 4.2	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。内外面とも表面磨滅が著しい。最大径は口縁部で器壁厚め。長胴。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　灰・黒礫～粗粒多量、黒褐・白細粒少量 やや硬質	覆土 口一部、胴上端一部 b
6 土師器 甕	口　復 20.9 高　残 4.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで胴部上位にヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。器壁やや薄く口縁が大きく外反する。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒褐・白細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 口一部、胴上端一部 b
7 土師器 甕	高　残 1.4 底　5.7	内面底部ヘラナデで工具痕残る。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。	2.5Y5/3　黄褐 やや緻密　白細粒少量、黒褐細粒微量 硬質	覆土 底 1/2
8 須恵器 甕	高　残 5.9	内面胴部中位同心円当具痕。外面胴部中位擬格子叩き。粘土の継ぎ目あり、継ぎ目部分で厚さが変化している。内外表面が灰褐色で内部が青灰色を呈す。	10YR4/1　灰褐 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 胴一部
9 土製品 筒形	高　残 2.4 底　復 8.5	内面底部ナデで指頭圧痕あり。外面胴部下端ナデで指頭圧痕あり。底部木葉痕のあと粘土片が貼り付く。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 底一部

ＳＩ－２０１（第 77・78 図、第 37 表、図版一五・五〇）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。西に SI-197、北に SK-302 がそれぞれ近接してある。　重複　住居跡中央から南西側の大部分で SI-631 を切り、北東隅が SK-303 に切られる。SK-1070・1071・1072 と重複するが、床面で確認したものであるため新旧関係は明らかではない。西辺が SK-1073 と重複するが、新旧関係は不明である。　平面形　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－５°－Ｅである。　規模　東西方向が3.10m､南北方向が3.52mである。　覆土の状態　覆土は砂を主体とする黒褐色土(第１層)で、部分的に黒褐色粘土を含む。火山灰分析では第１層に天仁元年（1108 年）噴出の浅間Ｂ軽石が含まれることが判明している。　壁　残存壁高は７～ 12cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　床面　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。住居跡中央南寄りと SK-1072 南西部には、被熱のためか赤変する部分がある。本住居跡に伴うと推定するが、重複する SK-1070・1071・1072 といった礫や小礫、炭化物を多く含む土坑に類する遺構か、あるいは重複する SI-631 覆土中に堆積したものの可能性もあろう。　堀方・貼床　なし。　柱穴　なし。　壁溝　なし。　火処　カマドが東壁際北寄りにある。天井部、袖部とも失われており、



第 77 図　和田遺跡　SI-201 実測図



第 78 図　和田遺跡　SI-201 出土遺物実測図

第 37 表　和田遺跡　SI-201 出土遺物観察表

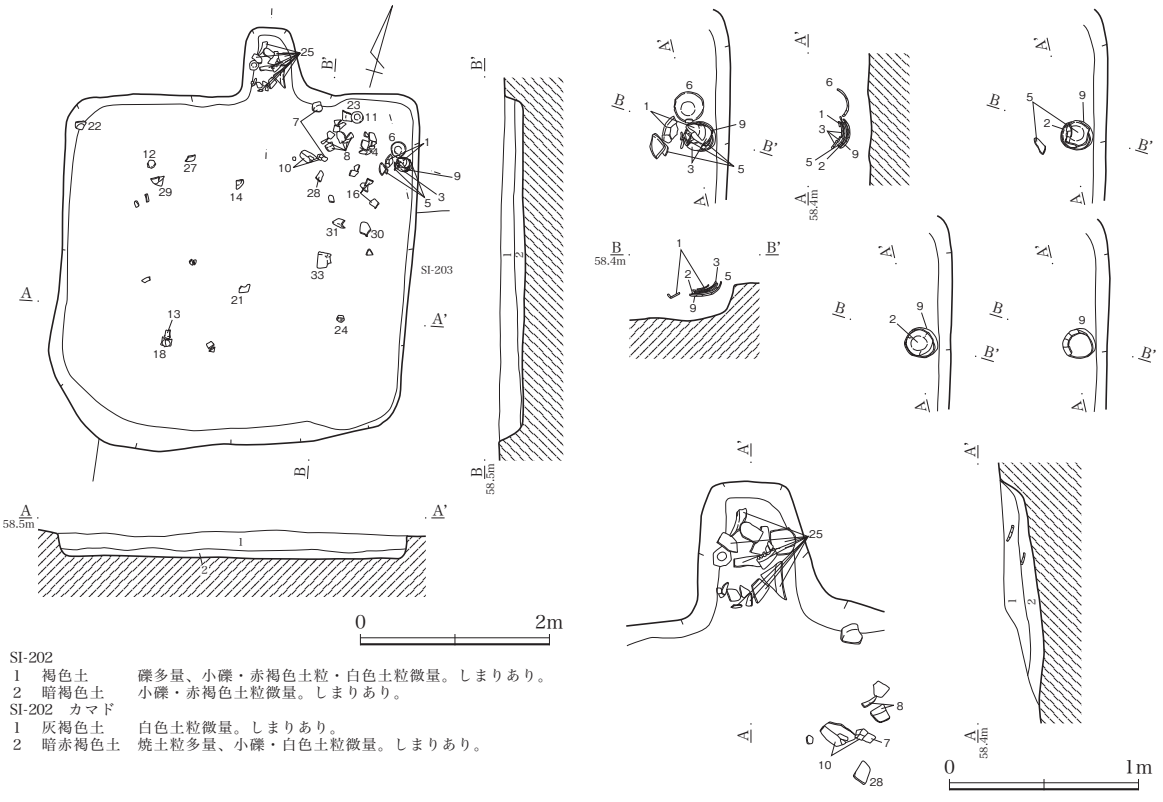
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 皿	口　7.9 高　1.3 底　4.7	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。上げ底。	7.5Y6/6　橙 やや緻密　黒褐細粒少量､白細粒多量､金雲母細粒少量 硬質	南部床面上 2 cm 口～体 2/3、底完存 No.1
2 土師器 皿	口　復 8.3 高　1.6 底　復 6.0	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。やや上げ底。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒多量、金雲母微粒微量 やや硬質	覆土 口～底一部
3 灰釉陶器 高台付椀	高　残 1.6	内面口縁ロクロナデ、灰釉ハケヌリ。外面口縁ロクロナデ、口唇部はやや外反。光ヶ丘 1 号窯式。東濃産。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　黒細粒微量 硬質	覆土 口一部
4 灰釉陶器 高台付椀	高　残 1.6	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。灰釉全面ハケヌリ。光ヶ丘 1 号窯式古段階。東濃産。混入。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　黒微粒微量 硬質	覆土 口一部
5 土師器 甕	口　復 30.6 高　残 13.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後胴部上位ナデ後一部棒状工具によるナデ。棒状工具のナデは器面補修ないし修正のためかもしれない。	2.5Y3/3　暗オリーブ褐 粗い　灰粗粒多量、白粗～細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	北西部床面上 3 cm 口～胴上半 1/5 No.5
6 土師器 甕	口　復 23.6 高　残 7.2	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ヨコナデ、胴部上半斜方向のケズリ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　灰粗～細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	北東部床面上 5 cm 口～胴上半一部 No.7
7 土師器 甕	高　残 3.9 底　復 15.4	内面胴部下端～底部ナデで工具痕残る。外面胴部下端横方向ケズリ後ナデ。底部ナデ。砂付着の可能性あり。	2.5Y3/3　暗オリーブ褐 粗い　灰粗粒多量、白粗～細粒多量、赤褐粗粒微量 やや硬質	東部床面上 10 cm 胴～底 1/6 No.8

残存状態は良くない。煙道部は壁を約 44cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、煙道へは段差なく続き、先端では一度緩やかに低くなったあと外傾して直線的に立ち上がり確認面に至る。火床面から煙道付近の被熱痕跡は明瞭で、火床面と煙道のほぼ全面が硬化赤変している。覆土は３層で、焼土を多量に含む第２層は天井部内面の崩落したものだろう。　**貯蔵穴**　南東隅にある（P- 1）。平面形は楕円形で、規模は 87 × 67cm、床面からの深さは 11cm である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は第１・第２層で、第１層は炭化物をわずかに含む。　**遺物**　遺物は少なく、住居全体よりわずかに出土する。ロクロ成形の土師器皿１・２や灰釉陶器碗３・４がある。５～７の土師器甕は、住居跡の壁際から出土している。図示しなかった遺物は、土師器片 160 点（1,980 g）、須恵器片９点（150 g）で、一部重複する SI-631 の遺物も混入していると思われる。小破片しか出土しない須恵器も混入だろう。本遺構

の年代はここでは 11 世紀代と考えられ、覆土中に浅間Ｂ軽石が含まれることから 11 世紀末～ 12 世紀初頭となる可能性もある。

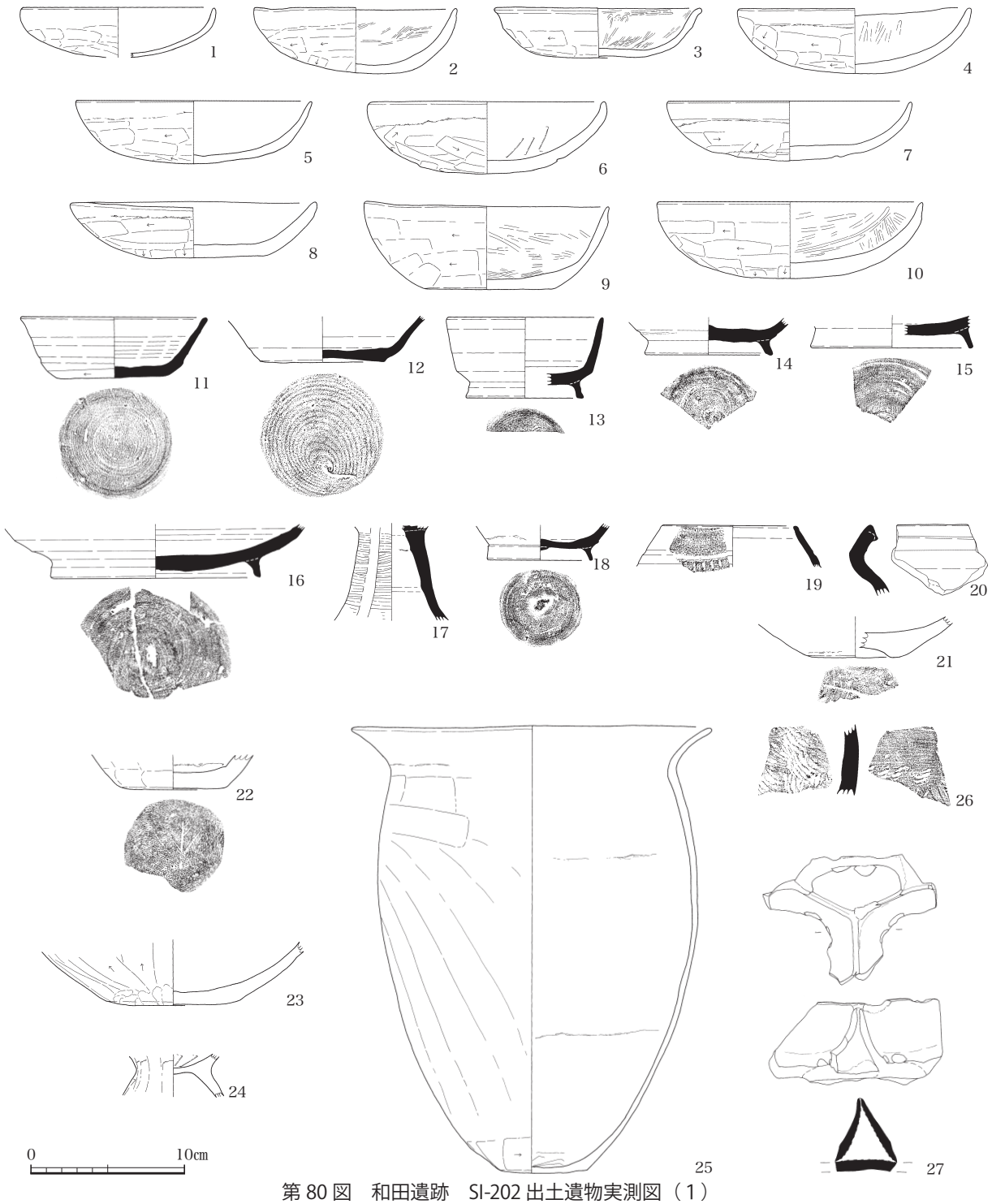
ＳＩ－２０２（第 79 ～ 81 図、第 38 表、図版一五・一六・五〇・五一）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｍ－ 19、Ｎ－ 19 グリッドに位置する。北東 4 m に SI-204 が隣接する。周囲に遺構は少なく、これ以外には重複する SI-203 があるのみである。　**重複**　住居跡中央部から南東側の大部分で SI-203 を切る。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 16°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.72m、南北方向が 3.71m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、第１層は礫を多量に含む。　**壁**　残存壁高は 18 ～ 25cm であり、壁は直線的に立ち上がる部分と、外傾する部分とがある。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 73cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面よりわずかに低く、緩やかに傾斜する煙道へと続いたあと、先端は外傾して立ち上がる。被熱痕跡は少なく、煙道内面の一部が硬化赤変しているのみである。覆土は２層で、焼土を多量に含む第２層は天井部内面の崩落したものとみられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は多量に出土している。住居跡中央から北東部に多く、カマド周辺にも集中する。カマドからは、図示した 25 をはじめとして土師器甕が多量に出土する。甕 25 はカマドに掛けられていたものか。カマド前面右側から北東隅にかけては土師器坏が集中しており、このうち９・２・５・３・１の５個体は壁際から正立の状態で重なって出土する。器種不明の須恵器 27 は住居跡中央部の床面からかなり浮いた位置での出土である。瓦（28 ～ 31）はカマドに集中せず、土器が多い北東部からやや離れた位置から、床面から浮いて出土している。出土遺物の器種としては土師器坏が多く、須恵器坏・高台付坏も多い。土師器甕は武蔵型ばかりだが、球胴や台付もわずかにある。



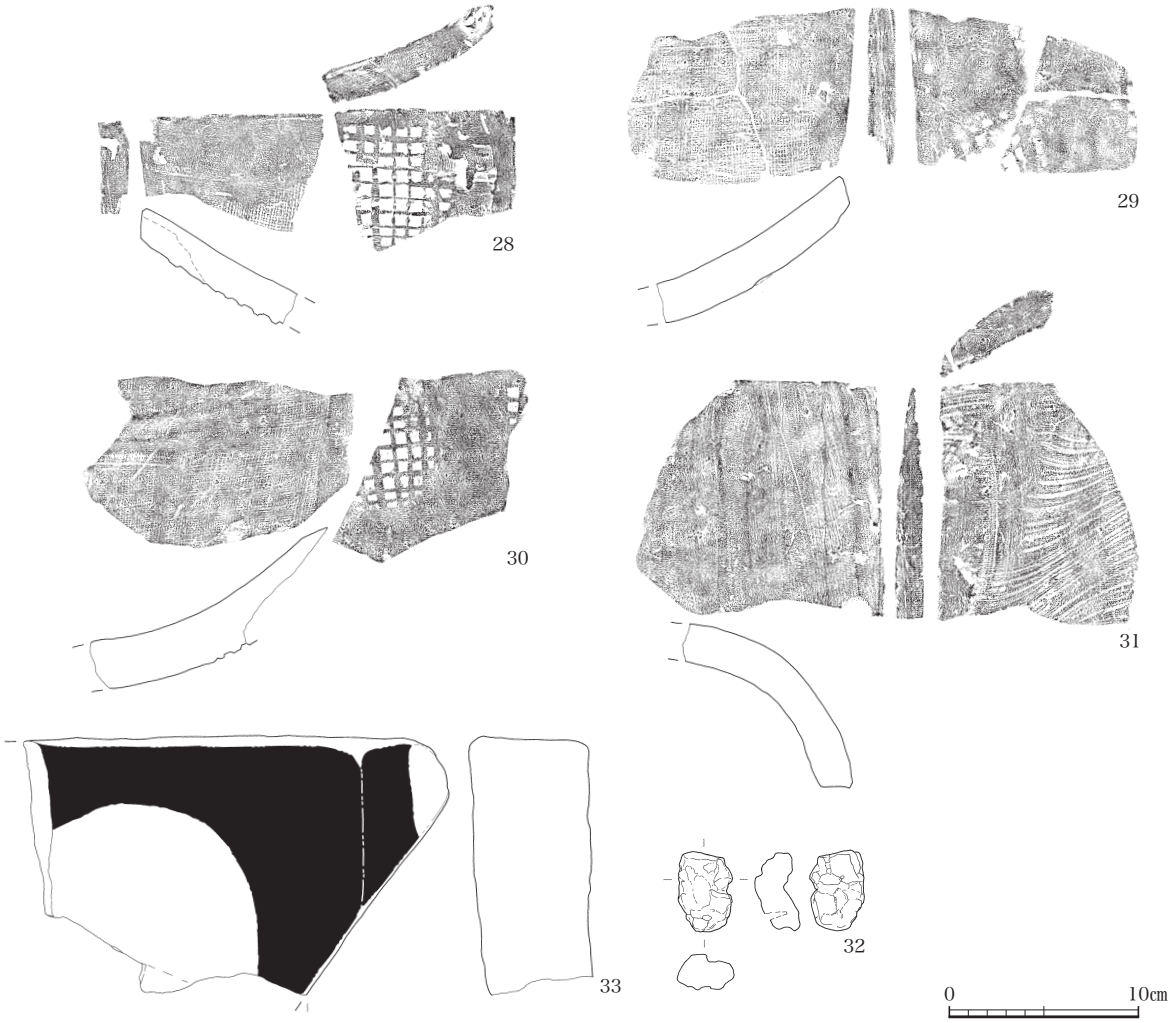
SI-202
1　褐色土　　礫多量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SI-202　カマド
1　灰褐色土　　白色土粒微量。しまりあり。
2　暗赤褐色土　焼土粒多量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 79 図　和田遺跡　SI-202 実測図



第 80 図　和田遺跡　SI-202 出土遺物実測図（1）

坏は丸底・平底の半球状のものであり、胎土は白色とオレンジ色がある。各胎土とも図化したものを含め 10 個体くらいあり、大きさも大型から小型まで似たようなものがそれぞれ揃っている。須恵器坏は底部切り離しが糸切り、ヘラ切りとも見受けられるが、ヘラ切りの方が糸切りの倍くらい多い。糸切りの須恵器底部は上げ底になるものが目立つ。大形の礫 33 は被熱の他煤の付着も認められており、カマド構築材の可能性があろう。図化しなかった遺物は土師器片 426 点（3,320 g）、須恵器片 70 点（770 g）である。本遺構の年代は 8 世紀後葉と考えられる。



第 81 図　和田遺跡　SI-202 出土遺物実測図（２）

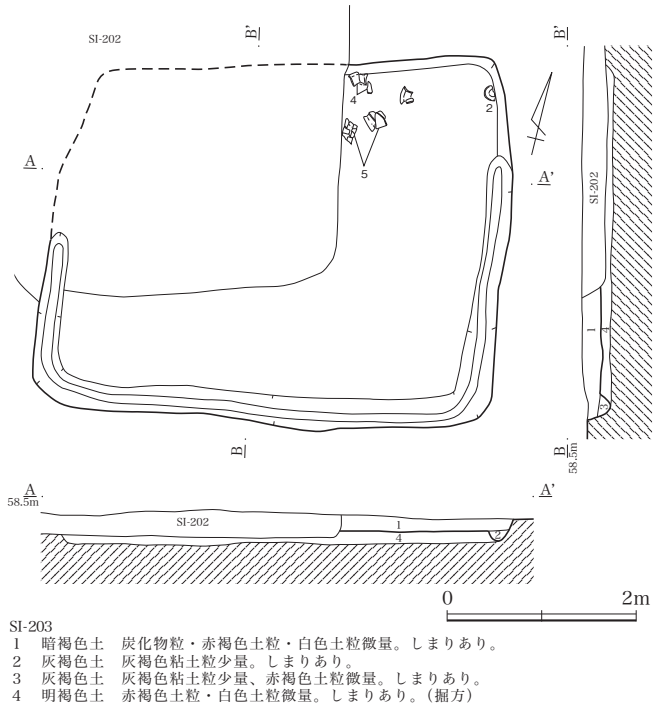
第 38 表　和田遺跡　SI-202 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.8 高　残 3.2	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性もあるが表面磨滅が著しく調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁は薄く偏平な丸底。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤褐細粒少量、透明粗粒少量 やや軟質	北東隅床面上 13 ㎝と 17 ㎝が接合、2・3・5・9 の上に重なった状態で出土 口～底 1/2 No.30・32
2 土師器 坏	口　13.3 高　4.3 重　219.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。表面磨滅が著しく調整不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。体部上端無調整部分あり。全体的に歪み大きい。器壁厚めで調整荒い。丸底。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　青灰細粒多量、白細粒少量 やや硬質	北東隅床面上 14 ㎝、1・3・5 の下、9 の上に重なった状態で出土 完形 No.35
3 土師器 坏	口　13.5 高　3.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。ミガキは口縁～体部まで横方向にミガキ後放射状に密なミガキ。外面口縁ヨコナデでやや外反する。体部上位に稜あり、体～底部はケズリ。平坦な丸底。口唇部は短く外反する。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒多量 やや硬質	北東隅床面上 16 ㎝、1 の下、2・5・9 の上に重なった状態で出土 ほぼ完形 No.33

4 土師器 坏	口　15.2 高　4.2 重　265.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状のミガキ。表面磨滅のためミガキの密度は不明。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部多方向ケズリ。体部上端に無調整部分わずかにあり。器壁は厚め。口縁部がわずかにひずむ。丸底。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒少量 やや硬質	北東隅床面上６㎝ ほぼ完形 SI-202・203 No.18
5 土師器 坏	口　15.5 高　4.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキあり。表面磨滅のため調整不明瞭。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。器壁やや厚め。浅い丸底。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐・白粗粒少量 やや硬質	北東隅床面上 10 ㎝と 15 ㎝が接合、1・3 の下、2・9 の上に重なった状態で出土 口～体 1/2、底完存 No.34・39・40
6 土師器 坏	口　15.5 高　4.7 重　296.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデでヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部多方向にケズリ、体部に無調整部分あり。器壁は厚い。外面ケズリは荒く底部外面はいびつ。丸底。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・青灰細粒多量 硬質	北東隅床面上 10 ㎝、坏の集中する地点。正立 ほぼ完形 No.29
7 土師器 坏	口　16.0 高　3.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部軽いケズリで紐積痕残す。体部に無調整部分多く残る。全体に調整甘く、歪み大きい。器壁やや厚く浅い丸底。	10YR8/2　灰白 緻密　青灰細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマドの南東側床面上７㎝と 10 ㎝が接合 口～底 1/2 KNo.2・8
8 土師器 坏	口　16.0 高　3.6 底　7.8 重　279.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと見られるが表面磨滅の為調整不明。外面口縁ヨコナデと見られるが磨滅のため範囲確定できず。紐積痕あり。体～底部ケズリ。器壁は厚め。いびつな平底。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫～細粒少量、白細粒少量、雲母 やや軟質	カマドの南東側床面上６㎝と７㎝が接合 ほぼ完形 KNo.5・7、SI-203 No.16
9 土師器 坏	口　16.0 高　5.7 底　8.6 重　333.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後密なミガキ。口縁～体部ミガキは横方向。底部は磨滅のため方向は不明だが密なミガキと思われる。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部軽いケズリ。器壁厚く大型。平底。内外面とも表面磨滅著しい。	5YR6/6　橙 やや緻密　青灰礫～細部多量、赤褐細粒多量、白粗粒少量 やや硬質	北東隅床面上 13 ㎝、1･3･5･2 の下、重なった状態で出土 ほぼ完形 No.36
10 土師器 坏	口　復 17.3 高　5.0	内面口縁～体部ナデ・ヨコナデ後口縁～体部上から見て方形状、底部一方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部多方向のケズリ。表面磨滅著しい。器壁厚く丸底。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　白粗～微粒少量、青灰粗粒少量 やや軟質	カマドの南東側床面上６㎝と７㎝が接合 口～体 1/4、底完存 KNo.2・3・K
11 須恵器 坏	口　12.2 高　4.1 底　7.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部切り離し後底～体部下端回転ヘラケズリ。回転方向は底部を見て左回転。切り離し方法不明。全体的に歪む。	N7/0　灰 緻密　白礫多量、青灰細粒少量 硬質	北東隅床面上４㎝、逆位 口辺 1/4 欠損 SI-202・203 No.17
12 須恵器 坏	高　残 3.0 底　8.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。胎土白色。体部下端は沈線状にくぼむ。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　青灰礫少量、白粗～細粒少量 やや軟質	北西部床面上 20 ㎝ 体下位 1/4、底完存 SI-202・203 No.4
13 須恵器 高台付坏	口　復 10.2 高　5.2 高台　復 7.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデで底部切り離しは糸切りと見られ高台貼付け。高台は薄く高め。「ハ」の字状にやや外反する。	N7/0　灰白 緻密　白粗粒微量 硬質	南西部床面上６㎝ 口～高台 1/4 SI-202・203 No.8
14 須恵器 高台付坏	高　残 2.4 高台　復 8.4	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデで白色の自然釉かかる。底部ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ後高台貼り付け。高台は断面方形でやや「ハ」の字状に開く。切り離し・回転ヘラケズリとも底部を見て左回転。	N6/0　灰 緻密　白礫～粗粒少量 硬質	北部床面上 10 ㎝ 高台～底 1/4 SI-202・203 No.12
15 須恵器 高台付坏	高　残 1.8 高台 復 10.6	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後周囲をヘラケズリ後高台貼り付け。高台は薄く高めで「ハ」の字状に外反する。	5Y7/1　灰白 緻密　白・青褐粗粒微量 やや軟質	覆土 底～高台 1/4 周
16 須恵器 盤	高　残 3.5 高台 復 13.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデで底部回転糸切り離し後回転ヘラケズリ後高台貼り付け。高台はほぼ垂直でやや高い。胎土白色。表面磨滅。	5Y8/1　灰白 緻密　青灰礫～細粒多量、白粗粒少量 やや軟質	北東部床面上 13 ㎝と 17 ㎝が接合 高台～底 1/2 周 SI-202・203 No.20・21
17 須恵器 高坏	高　残 6.1 脚基　復 4.3	内面脚部ロクロナデ。外面脚部ロクロナデ後カキ目。脚部接合面に接合のための沈線あり。三方向スカシ（二方向残存）。	N6/0　灰 緻密　白粗粒多量 硬質	覆土 脚上半 1/3 周 SI-202・203
18 須恵器 高台付坏	高　残 2.3 高台　6.9	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデで底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は薄くやや高い。底部外面中央に切り離せなかった粘土塊が残る。	N6/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	南西部床面上６㎝ 高台ほぼ完存、底完存 SI-202・203 No.8

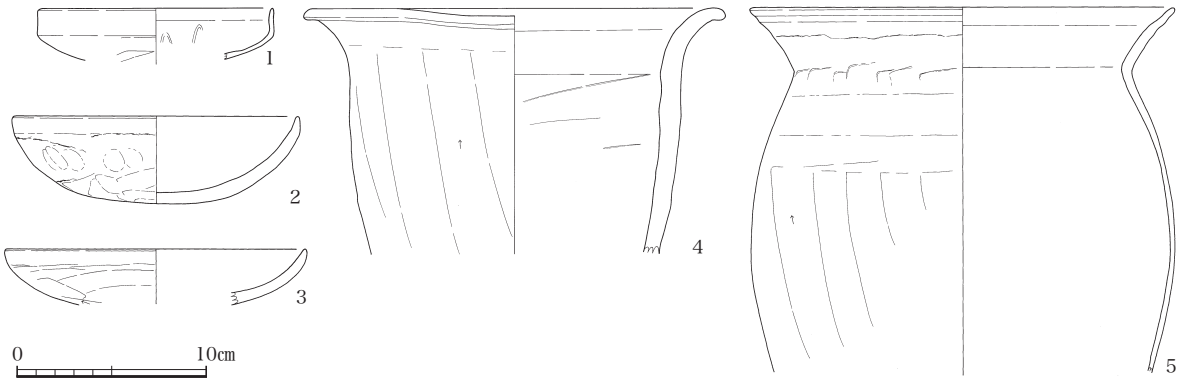
19 須恵器 壺	口　復 8.9 高　残 2.6	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、体部上半２条の沈線の間に櫛歯文施文。無頸。	N5/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 口～体上半 1/6 SI-202・203
20 須恵器 鉢	高　残 4.6	内面口縁ロクロナデ。外面ロクロナデ。	N4/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	カマド 口辺破片 K 一括
21 土師器 甕	高　残 2.7 底　復 6.5	内面底部ナデで表面磨滅のため調整不明瞭。外面体部下半～底部ナデで底部中央木葉痕あり。底部やや突出し、中央が大きくくぼむ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐色粗粒少量、白細粒少量、青灰微量多量 やや軟質	中央部床面上 18 ㎝ 胴下端～底 1/2 SI-202・203 No.10
22 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 6.8	内面胴～底部ナデで紐積痕あり。外面胴部下半横方向ナデ、底部ナデ、底部中央に木葉痕あり。表面磨滅により調整不明瞭。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白粗粒少量、青灰細粒多量、赤褐粗粒微量 やや軟質	北西隅床面上 22 ㎝ 底 4/5 SI-202・203 No.1
23 土師器 甕	高　残 4.1 底　復 8.6	内面胴部下半～底部ナデ。外面胴部下半縦方向ケズリ、底部ケズリ後底部外周をナデ。	7.5YR8/1　灰白 やや緻密　白細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	北東部床面上 8 ㎝ 胴下半 1/4、底 1/4 SI-202・203 No.13
24 土師器 台付甕	高　残 2.7	内面胴部底面ナデでヘラ状工具痕あり。脚部上端ナデ。外面胴部下端～脚部上端縦方向ケズリ後軽い横方向のナデ。器壁薄い。	5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	南東部床面上 3 ㎝ 底～脚上端完存 SI-202・203 No.27
25 土師器 甕	口　23.5 高　29.2 底　5.6	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデで底部ヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデ、胴部中～上位縦方向ケズリ後上位を横方向ケズリ。口縁部下半に横方向ケズリの工具痕が残る。胴部下端横方向ケズリ、底部一方向ケズリ。武蔵型。最大径は口縁部。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白粗粒微量、赤褐粗粒微量、雲母 やや硬質	カマド煙道部火床面直上～ 13 ㎝が接合、カマドにかけられていたと考えられる。 口 3/4、胴 1/2、底完存 KNo.9・10・11・12・16・17・18・19・21・22
26 須恵器 甕	高　残 4.7	内面胴部同心円当具痕。外面浅いカキ目後平行叩き後ヘラ描き波状文。波状文は途切れており櫛歯文風。焼成がやや甘く、断面の内外表面は灰褐色、内部は赤褐色を呈する。	7.5Y6/3　にぶい褐 緻密　白粗・青灰・赤褐粗粒微量 軟質	覆土 破片 SI-202・203
27 須恵器 不明	高　残 5.7	碗身３個体を貼り合わせ、その中央下に高台を貼り付ける。碗身下部には穿孔あり。穿孔は両面穿孔と見られる。高台内面底部はロクロ目が強く残る。群馬県大道東遺跡より類例出土。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白礫～細粒少量、青灰粗粒微量 硬質	中央部床面上 17 ㎝ 破片 SI-202・203 No.6
28 瓦 平瓦	長　残 7.9 幅　残 8.2 厚　1.9 重　残211.1	凹面布目痕後周縁ケズリ、側縁部ケズリ。凸面格子目叩き後周縁部ケズリ。	5Y4/1　灰 緻密　赤褐粗粒少量、白粗～細粒多量 硬質	カマドの南東側床面上 9 ㎝ 破片 KNo.1
29 瓦 平瓦	長　残 9.1 幅　残 10.3 厚　2.2 重　残342.0	凹面布目痕周後縁部ケズリ、側縁ケズリ。凸面ナデ後格子叩き後周縁部ケズリ。	5Y8/2　灰白 やや緻密　青灰礫～粗粒多量、赤褐粗粒少量 やや軟質	中央部床面上 18 ㎝ 破片 SI-202・203 No.5
30 瓦 丸瓦	長　残 9.5 幅　残 12.8 厚　2.6 重　残465.4	凹面布目痕後一部ナデ、周縁ケズリ。凸面ナデ、格子叩き。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐細粒少量、青灰礫～細粒多量、白礫～細粒少量 やや軟質	東部床面上 17 ㎝ 破片 SI-202・203 No.22
31 瓦 丸瓦	長　残 12.5 幅　残 9.0 厚　2.1 重　残496.3	凹面布目痕後周縁ケズリ、側縁ケズリ。凸面縦方向ケズリ後軽いナデ。	2.5Y8/1　灰白 やや粗い　青灰礫微量、青灰細粒多量 やや軟質	東部床面上 7 ㎝ 破片 SI-202・203 No.23
32 土製品 粘土塊	長　4.2 幅　2.8 厚　1.8 重　19.0	捏ねた粘土をそのまま焼成している。直径５㎜の小孔あり。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 完形 SI-202・203
33 石 礫	長　残 22.2 幅　残 13.7 厚　6.3 重 残 3228.1	厚い板状の礫。スス付着のためか、裏側の大部分が黒色化するほか、左下部分は被熱により赤変する。	2Y3/1　黒褐 砂岩	東部床面直上 破片 SI-202・203 No.25

ＳＩ－２０３（第 82・83 図、第 39 表、図版一六）



第 82 図　和田遺跡　SI-203 実測図

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｍ－ 19 グリッドに位置する。北東３ｍに SI-204 が隣接する。周囲に遺構は少なく、これ以外には重複する SI-202 があるのみである。　**重複**　住居跡中央から北西部が SI-202 に切られる。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 14°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.87m、南北方向が 3.85m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 12cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。住居跡中央から北西部は、SI-202 に切られるため床面は確認できない。　**堀方・貼床**　住居跡のほぼ全体が明褐色土（第４層）により貼床される。床面からの深さは６～ 12cm である。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　南半で認められる。断面形



第 83 図　和田遺跡　SI-203 出土遺物実測図

第 39 表　和田遺跡　SI-203 出土遺物観察表

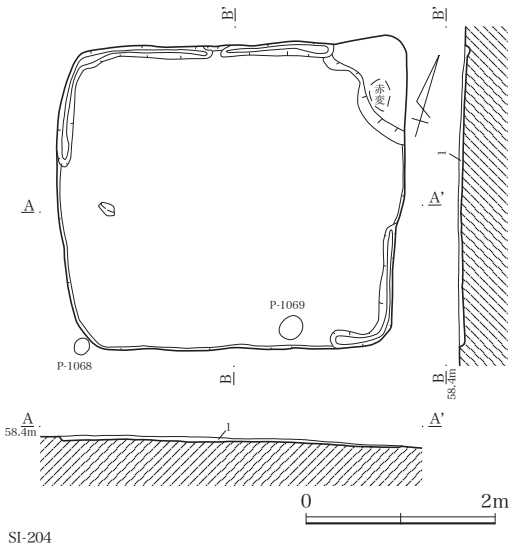
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。口縁～体部放射状ミガキの可能性あるが不明確。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。内外面とも表面磨滅著しい。器壁が非常に薄い。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤褐礫～細粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
2 土師器 坏	口　復 15.3 高　4.6	内外面とも表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われる。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、体部上半は紐積痕が残り細かな凹面も見られるため成形時のナデのみで無調整であろう。丸底。	2.5Y8/1　灰白 やや粗い　青灰粗～微粒多量、赤褐粗～細粒少量、白細粒少量 軟質	北東隅床面上 17 ㎝、正立 口～底 1/2 No.1

3 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ。ミガキの可能性あるが不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部軽いケズリ。	7.5Y6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白微粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
4 土師器 甕	口　復 22.2 高　残 13.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕明瞭に残る。外面胴部上半縦方向のケズリ後口縁ヨコナデ。口縁部歪む。長胴。	5Y6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、白細粒少量、青灰粗粒少量 硬質	北部床面上 10 ㎝ 口～胴 1/4 No.5・6
5 土師器 甕	口　復 22.4 高　残 19.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向ケズリ後上半横方向ケズリ。口縁部上端は内面受け口状にくぼむ。武蔵型。口縁部と胴部径がほぼ同一。	7.5Y7/6　橙 やや粗い　白細粒少量、赤褐礫～粗粒少量 やや硬質	北部床面上 2 ㎝と 6 ㎝が接合 口～胴 1/2 周 No.1・3・4

は「U」字状で、幅は 18 ～ 30cm、深さは床面から３～ 12cm である。覆土は第２・第３層とした灰褐色土である。　**火処**　なし。SI-202 に切られる北西部の北壁際にカマドが存在した可能性はあろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少ないが、住居跡北東部に土師器坏２、土師器甕４・５などがまとまる。遺物の様子からも、火処となるカマドが北壁際にあったことが推定される。図示しなかった遺物は土師器坏・甕片のみ 30 点（525 ｇ）で、一部 SI-202 の混入も考えられる。半球状の坏は丸底のみであり、平底はない。本遺構の年代は８世紀前葉と考える。

ＳＩ－２０４（第 84 図、図版一六）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 18・19 グリッドに位置する。東に SK-307、南西に P-1068 が近接してあるほか、南西３～４ｍに SI-202・203 が隣接する。　**重複**　南東隅で P-1069 と重複する。新旧関係は不明である。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 19°－Ｗである。北東隅は壁の立ち上がりが確認できなかったが、残存する覆土の状況などから住居跡の範囲を決定した。　**規模**　東西方向が 3.76m、南北方向が 3.72m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は２～７cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、南西から北東へとわずかに傾斜している。北東隅は床面より約２cm 高くなっているが、上面は削られている可能性があり、本来はより大きな高低差があった可能性がある。なお、北東隅には被熱のためか赤変している部分がある。範囲は 34 × 22cm である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　南東隅、北西隅および北壁際に断続的に認められる。断面形は「U」字状で、幅は 12 ～ 20cm、深さは床面から２～４cm である。覆土は住居跡覆土と同じ明褐色土（第１層）である。　**火処**　なし。北東隅に赤変する部分があることから、ここがカマドであった可能性はあるだろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器坏片２点、甕片５点のみである。いずれも小破片であり、図示できない。甕は長胴のほか武蔵型があり、坏は胎土白色・厚手なものである。本遺構の年代は特定しにくいが、８世紀代の可能性があろう。



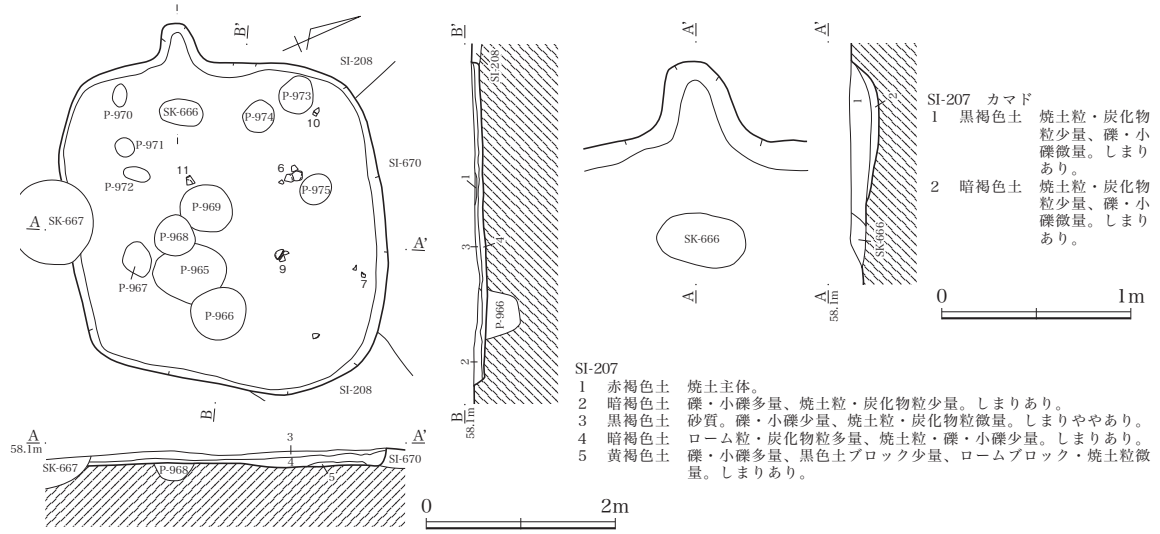
SI-204
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

第 84 図　和田遺跡　SI-204 実測図

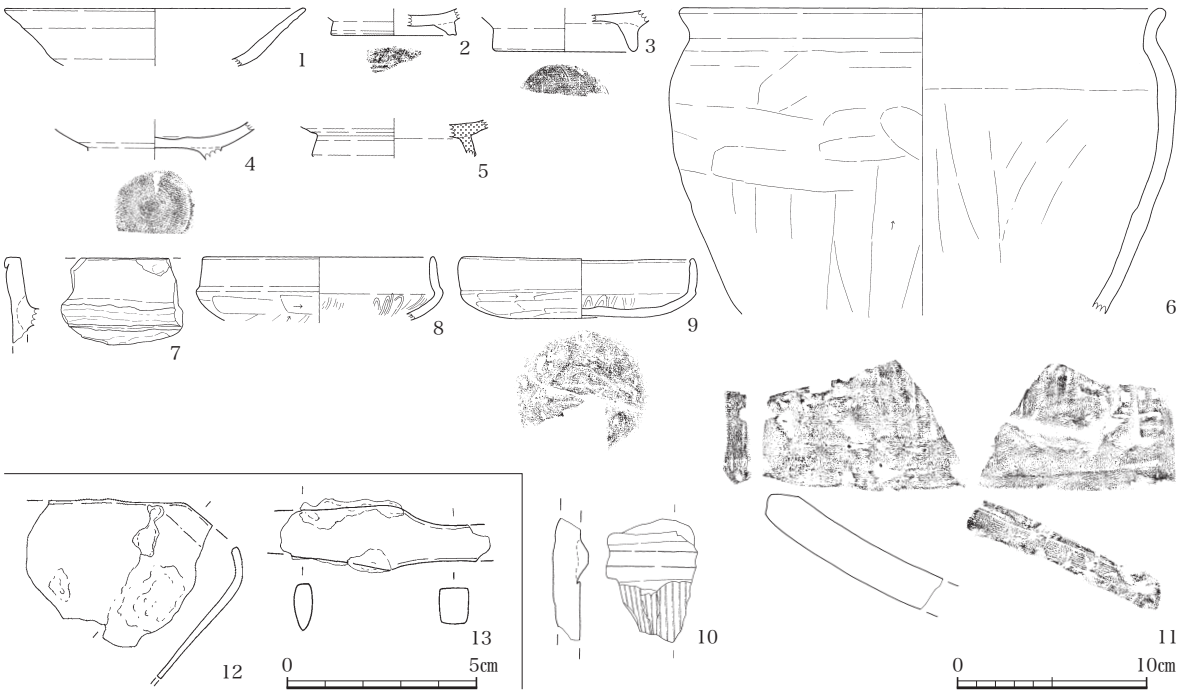
ＳＩ－２０７（第 85・86 図、第 40 表、図版一六・六三）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。南２ｍに SX-54、北３ｍに SB-951 が隣接する。

重複　西半で SI-208 を、北部で SI-670 を切り、西壁際のカマド部分が SK-666 に、南壁が SK-667 に切られる。住居跡内では P-965・966・967・968・969・970・971・972・973・974・975 と重複しており、このうち P-966・968 に切られる。これ以外の各ピットとの新旧関係は不明だが、覆土の状況などから住居跡よりも新しい遺構と推定する。　平面形　やや不整な隅丸方形で、東西方向の中軸線はＮ－ 67°－Ｗである。　規模　南北方向が 3.35m、東西方向が 3.43m である。　覆土の状態　覆土は５層で、全体に焼土や炭



第 85 図　和田遺跡　SI-207 実測図



第 86 図　和田遺跡　SI-207 出土遺物実測図

第 40 表　和田遺跡　SI-207 出土遺物観察表

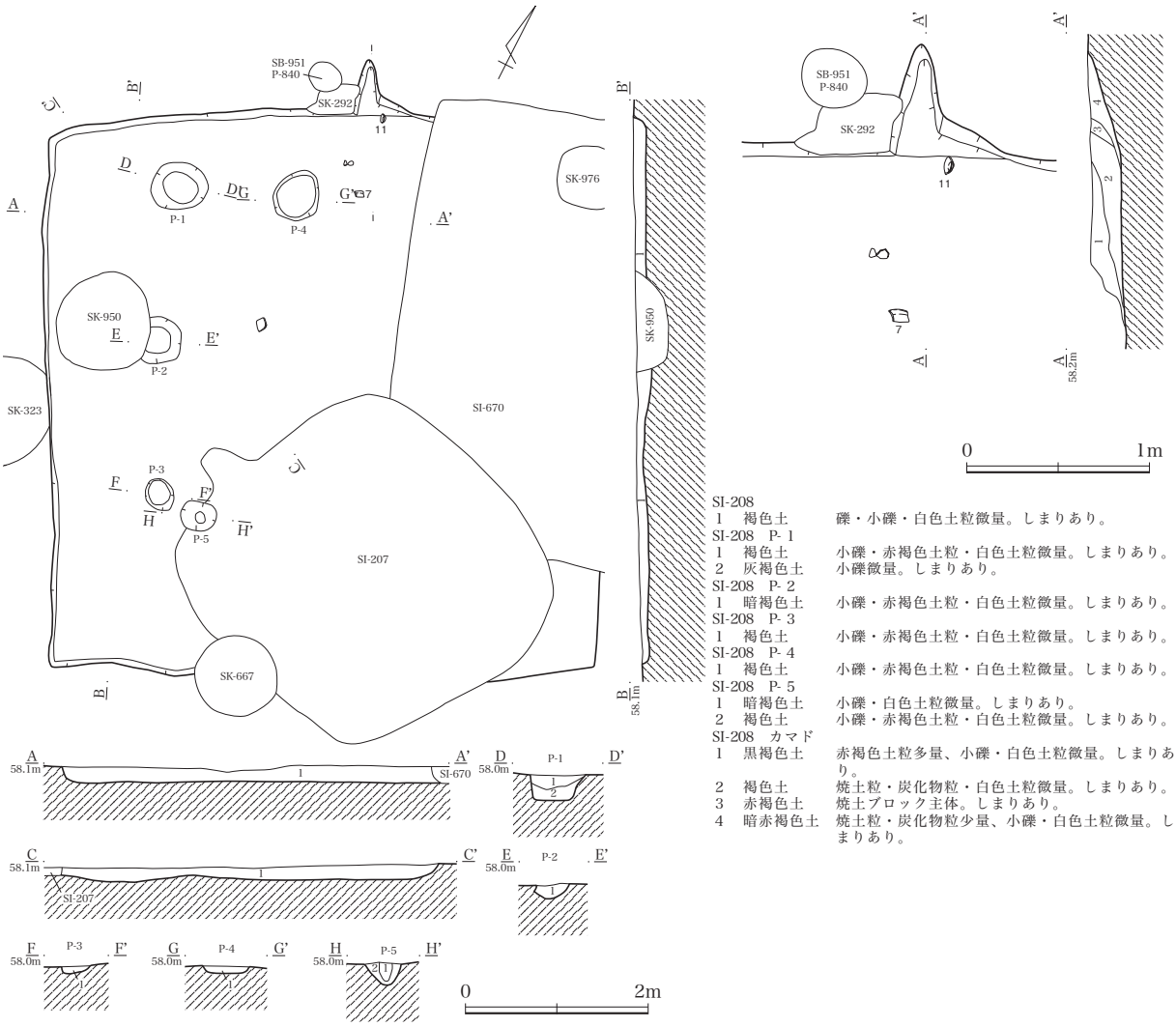
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 15.9 高　残 3.0	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。大きく外反する口縁。	5YR5/6　明赤褐 緻密　灰粗粒少量、金雲母細粒少量 硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 高台付坏	高　残 1.3 高台　復 6.7	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形でやや「ハ」の字状に開き低い。	7.5YR6/6　橙 粗い　灰細粒多量、赤褐細粒少量、透明微粒微量 硬質	覆土 高台～底 1/4
3 土師器 高台付坏	高　残 2.2 高台　復 7.7	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台はやや高くわずかに「ハ」の字状に開く。	7.5YR6/6　橙 緻密　透明細粒少量、赤褐微粒少量、灰微粒微量、金雲母細粒少量 硬質	覆土 高台～底 1/2
4 土師器 高台付坏	高　残 2.0	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白・赤褐細粒少量、金雲母粗粒微量 硬質	覆土 体下半一部、底 2/3
5 灰釉陶器 高台付椀	高　残 1.8	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部高台貼り付け。光ヶ丘 1 号窯式。東濃産。	2.5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒微量 硬質	覆土 破片
6 土師器 甕	口　復 25.8 高　残 16.1 最大 復 26.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後上半横方向主体のナデ。	7.5YR8/3　浅黄橙 粗い　砂粗粒多量、赤褐細粒微量、砂礫微量 硬質	北部床面上 9 ㎝ 口～胴 1/4 No.2
7 土師器 羽釜	高　残 4.6	内面口縁部～胴部上半ナデ。外面口唇部上面～口縁軽いヨコナデ、鍔部上下ナデ。	5YR5/6　明赤褐 粗い　砂礫多量、黒細粒微量 やや硬質	北壁際床面上 10 ㎝ 口～胴上端一部 No.4
8 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 3.3 最大 復 13.1	内面口縁ヨコナデ、体部上半ヨコナデ後放射状ミガキ。内面全面漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上端稜あり、その下ケズリ外面口縁部～体部漆仕上げの可能性あり。	7.5YR4/1　褐灰 緻密　透明細粒少量 硬質	覆土 口～体上半 1/4
9 土師器 坏	口　12.2 高　3.3 最大　12.6	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後放射状のミガキ。表面磨滅のため調整不明瞭。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上端稜あり、体～底部ケズリ。底部中央木葉痕あり。やや上げ底となる平底。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、灰微粒多量 やや硬質	中央部床面直上 口～底 4/5 No.3
10 埴輪 円筒	高　残 6.5	内面体部ナデ。外面体部縦のハケ目（3 本 /1 ㎝）。突帯貼付け後上下ナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白・赤褐細粒少量 やや硬質	北隅床面上 9 ㎝ 胴破片 No.1
11 瓦 平瓦	長　残 6.8 幅　残 9.4	凹面側縁部ケズリ、凸面格子叩き後側縁部ケズリ。側面ケズリ凹面・凸面とも粘土接合面から剝離している。剝離面には糸切りと見られる条線あり。条線は側面と平行する。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　黒微粒少量、赤微粒微量、砂礫微量 やや硬質	中央部床面上 4 ㎝ 破片 No.6
12 鉄製品 鎌	長　残 4.9 幅　残 3.8 厚　0.2 重　残 15.2	着柄部付近の破片。刃部は失われているが背部の縁辺が着柄用の折り返し部分とともに残存する。		覆土 基破片
13 鉄製品 刀子	長　残 5.6 幅　1.7 厚　0.9 重　残 10.7	関部を中心とする破片。茎は太く、断面は刃部側がやや狭い方形。関部は両関でいづれも撫角。刃部は平造りではなく断面は棟側、刃側とも先端が尖っており両刃のようにも見える。刀子ではない可能性もあろうか。		覆土 茎残存

化物が目立つ。覆土上位に堆積する第 1 層は焼土層で、平面的には径 40cm ほどの円形を呈する。　**壁**　残存壁高は 9 ～ 20cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが西壁際南寄りにある。火床面付近が SK-666 に切られるほか、天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 43cm「U」

字状に掘り込んで作られる。火床面は床面から８cmほど緩やかに低くなった位置にあり、煙道へは平坦に続いたのち先端で丸みを持って外傾して立ち上がる。被熱による赤変などの痕跡は確認できない。覆土は２層で、ともに炭化物と焼土を少量含む。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少ない。土師器はロクロ成形の坏・高台付坏、甕は胴が張る甕と羽釜である。図化した８以降の遺物は混入と考えられる。土師器坏８・９は、重複するSI-208・670からの混入の可能性がある。須恵器は甕片があるが混入だろう。覆土中出土の鉄製品２点についても伴うかどうか確定できない。刀子13は刃部断面が刃側・棟側とも尖っており、刀子以外の器種となる可能性も指摘できる。図化しなかった遺物は土師器片が主体で、須恵器片７点を含む152点（1,150ｇ）である。本遺構の年代は、10世紀前葉であろう。

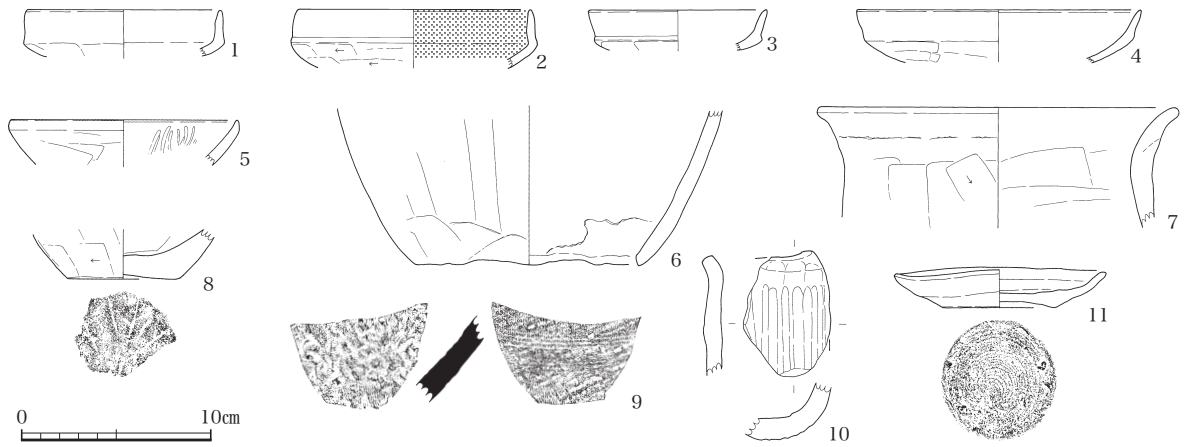
ＳＩ－２０８（第87・88図、第41表、図版一七・五一）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－17・18グリッドに位置する。カマド部分がSK-651・652と近接するほか、南東３mにSX-54が隣接する。　**重複**　東部がSI-670に、南東部がSI-207に、西部がSK-950に、カマド左袖付近がSK-292とSB-951を構成するP-840にそれぞれ切られる。遺構確認の状況などから、西部がSK-323に、東部がSI-670と重複するSK-976に切られるとみられる。南部は、SI-207を切るSK-666・667



SI-208
1　褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-208　P-1
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　小礫微量。しまりあり。
SI-208　P-2
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-208　P-3
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-208　P-4
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-208　P-5
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-208　カマド
1　黒褐色土　赤褐色土粒多量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　赤褐色土　焼土ブロック主体。しまりあり。
4　暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第87図　和田遺跡　SI-208実測図



第 88 図　和田遺跡　SI-208 出土遺物実測図

第 41 表　和田遺跡　SI-208 出土遺物観察表

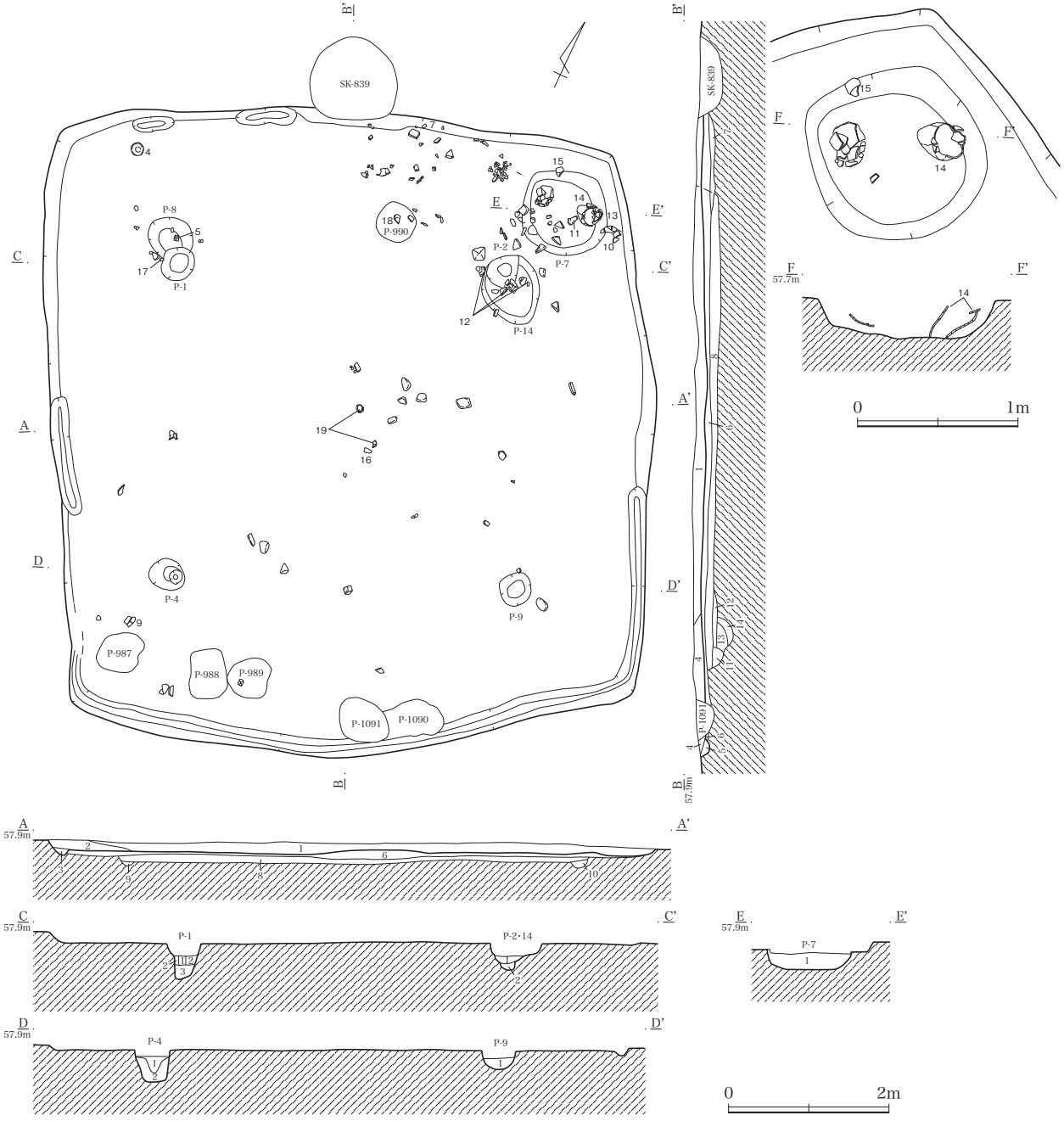
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.2 高　残 2.4 最大 復 10.5	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため不明。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデで稜あり。体部ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐・灰細粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
2 土師器 坏	口　復 12.3 高　残 3.1 最大 復 13.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。内面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　灰・透明微粒少量、白微粒微量 硬質	覆土 口～体 1/4
3 土師器 坏	口　復 9.4 高　残 2.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため不明。外面口縁ヨコナデ、稜あり、体部ケズリ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/5
4 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため不明瞭。外面口縁ヨコナデで稜あり。体部ケズリ。全体に被熱し赤変する。器壁薄い。口縁は外反する。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片
5 土師器 坏	口　復 12.0 高　残 2.4 最大 復 12.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後放射状にミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　灰微粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体上半破片
6 土師器 甑	高　残 9.3 底　復 12.0	内面胴部下半丁寧なナデで紐積痕あり。下端ナデ。外面胴部下半ケズリでミガキの可能性あり。下端ナデ。無底式、大形。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　赤褐細粒少量、砂礫少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 胴下半 1/6
7 土師器 甕	口　復 19.1 高　残 6.4	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向ケズリ。	5YR5/8　明赤褐 粗い　赤褐細粒少量、砂礫少量 硬質	カマド南側火床面上 7 cm 口～胴上端破片 KNo.1
8 土師器 甕	高　残 2.6 底　復 6.0	内面胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半ケズリで底部木葉痕あり。底部がやや上げ底。	2.5YR4/8　赤褐 粗い　赤褐細粒多量、砂礫多量 やや硬質	覆土 胴下端 1/5、底 1/4
9 須恵器 甕	高　残 4.6	内面胴部同心円当具痕、表面に白色の自然釉かかる。外面胴部擬格子叩き後カキ目。	7.5GY4/1　暗緑灰 緻密　黒微粒少量、白細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 胴破片
10 土師器 不明	長　残 7.7 幅　残 4.6	断面円形。内面横方向のナデ。外面口縁部ナデで体部ナデ後縦方向に棒状工具による強いナデ。上方の孔がややすぼまり、全体として筒状の空洞になる。全体に歪み大きく、円径の器種として作図できず。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、砂礫少量 硬質	覆土 口～体破片

11 土師器 皿	口　11.2 高　2.1 底　5.9 重　91.3	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整。上げ底。平面は楕円形となり全体的にひずむ。口径 10.5 ～ 11.3 ㎝	7.5YR7/3　にぶい橙 やや緻密　赤褐微粒微量、灰細粒少量、金雲母細粒少量、白細粒微量 硬質	カマド南側火床面上 ２㎝、横位 完形 KNo.4

に切られるほか、SI-207 と重複する P-965・966・967・968・969・970・971・972・973・974・975 と重複し、P-966・968 に切られる。２基以外のピットは、SI-207 と同様に住居跡よりも新しい遺構と推定する。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 27°－Ｗである。南東隅は壁の立ち上がりが確認できなかったため、床面の痕跡などから決定した。　**規模**　東西方向が 6.00m、南北方向が 6.15m である。　**覆土の状態**　覆土は礫などを含む褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は７～ 15cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット５本（P- １～ P- ５）がある。P- １は径 54 × 51cm、深さ 27cm、P- ２は径 53 × 53cm、深さ 12cm、P- ３は径 38 × 31cm、深さ８cm、P- ４は径 54 × 50cm、深さ８cm、P- ５は径 40 × 33cm、深さ 24cm である。P- ５は柱穴の可能性がある。５本とも覆土は緻密な褐色土や暗褐色土などであり、特徴的な堆積物はない。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際ほぼ中央にある。天井部、袖部とも失われているほか、左側は SK-292 と SB-951 を構成する P-840 に切られるため、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 40cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、煙道は緩やかな斜面となっており、傾斜を変えずに立ち上がり確認面に至る。煙道右側内面は垂直に近い壁であり、使用時の状態を良好に残しているとみられる。被熱痕跡は顕著で、右側の煙道内面上半を中心に広範囲が硬化赤変している。覆土は４層で、焼土ブロック主体の第３層は天井部内面の崩落したものとみられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少ない。土師器坏は、口縁部が内傾・直立・外傾する須恵器模倣坏主体で、半球状のものがわずかに混じる。土師器甕は長胴で、武蔵型のような甕片がわずかにみられる。土師器皿 11 などの本遺構より新しい遺物は、重複する SI-207 などからの混入であろうか。本遺構の年代は７世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－２０９ａ（第 89・90 図、第 42 表、図版一七・五一・六一）

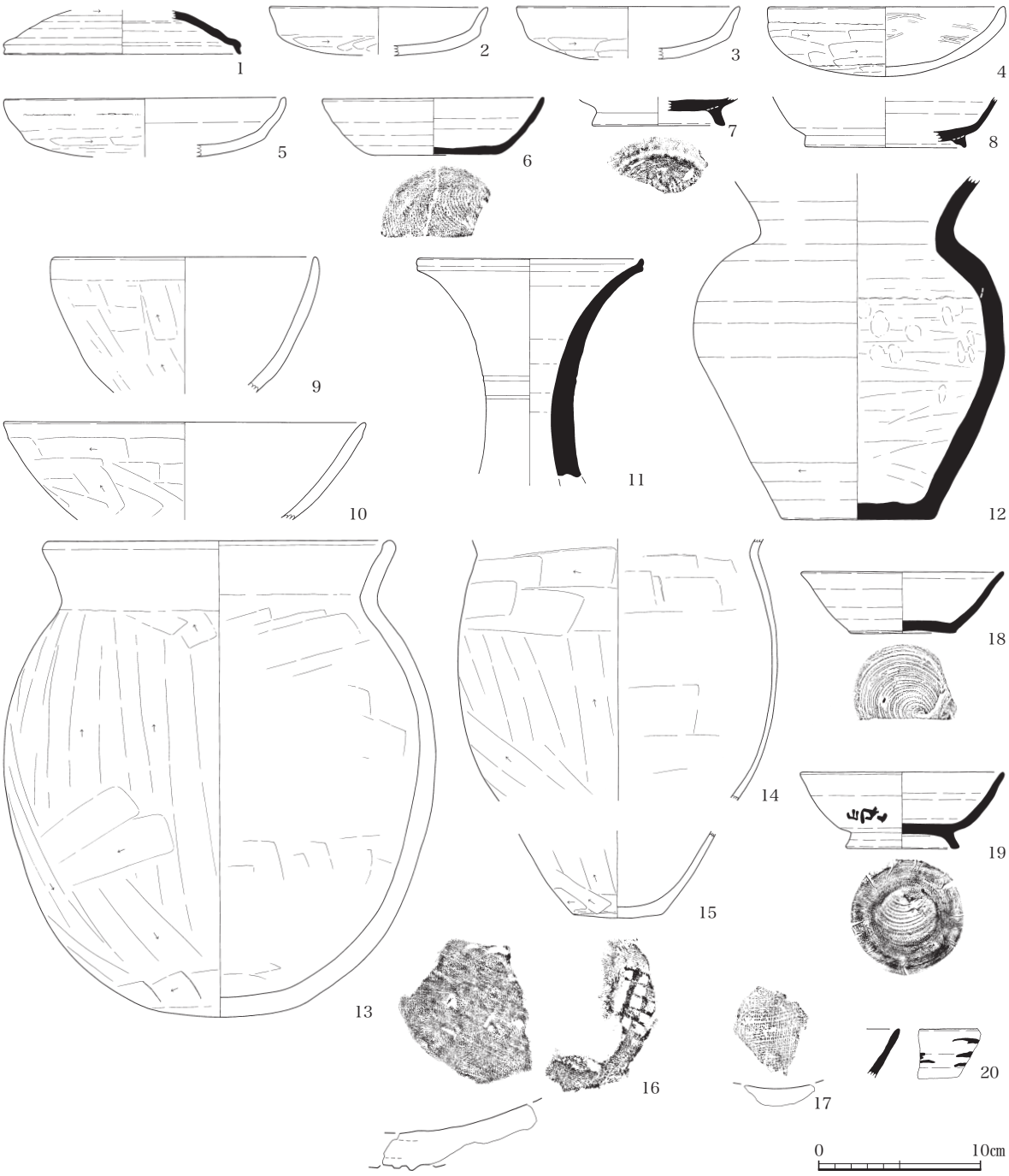
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16・17、Ｏ－ 16・17 グリッドに位置する。南側にはピット以外に遺構はなく、東に SI-210、北に SB-234 が近接してある。西１～２ｍには SK-328・329・620 などが並んでいる。　**重複**　二度建て替えられた住居跡と考えられ、SI-209a が最後の段階となる。SI-209b・209c を切る。北壁際中央が SK-839 に切られる。P-987・988・989・1090・1091 と重複しており、調査時の状況などから本住居跡を切るとみられる。北部で重複する P-990 との新旧関係は不明である。　**平面形**　方形で、南辺は丸みを持って張り出す。南北方向の中軸線はＮ－ 28°－Ｗである。　**規模**　SI-209b からの建て替えに伴い、西辺の一部を除く各辺を 60 ～ 100cm 拡張している。東西方向が 7.58m、南北方向は 8.18m で、東西各辺はやや短く 6.95m、7.32m である。　**覆土の状態**　覆土は第１～第５層で、第１層は炭化物をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は９～ 13cm であり、壁は大きく外傾して立ち上がる。　**床面**　標高 57.6 ～ 57.65m 付近が床面で、緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。南西部の床面直上には、炭化物が集中する部分がある。　**堀方・貼床**　北辺中央付近に第７層を敷いたのち、SI-209b からの拡張部分を含む住居跡全体を第６層で貼床する。床面からの深さは３～ 15cm である。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが４本（P- １・P- ２・P- ４・P- ９）ある。P- １は径 40 × 43cm、深さ 45cm、P- ２は径 40 × 38cm、深さ 33cm、P- ４は径 45 × 40cm、深さ 40cm、P- ９は径 40 × 40cm、深さ 23cm である。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 4.10m、P- ４－ P- ９間が 4.24m、P- ４－ P- １間が 3.94m、P- ９－ P- ２間が 4.00m である。径に大きな差はない



SI-209a・209b・209c
1　暗褐色土　小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a覆土)
2　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a覆土)
3　黄褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a覆土)
4　褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a覆土)
5　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a覆土)
6　褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a掘方)
7　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209a掘方)
8　暗褐色土　小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c覆土)
9　褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c覆土)
10　暗灰褐色土　灰色粘土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c覆土)
11　暗灰褐色土　灰色粘土粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c覆土)
12　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c覆土)
13　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-209c　P-13覆土)
14　褐色土　小礫微量。しまりあり。(SI-209c　P-13覆土)

SI-209a・209b　P-1
1　褐色土　灰褐色粘土粒少量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰褐色粘土粒多量。しまりあり。
SI-209a・209b　P-2
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫微量。しまりあり。
SI-209a・209b　P-4
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-209a・209b　P-9
1　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-209a　P-7
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

第89図　和田遺跡　SI-209a 実測図



第 90 図　和田遺跡　SI-209a 出土遺物実測図

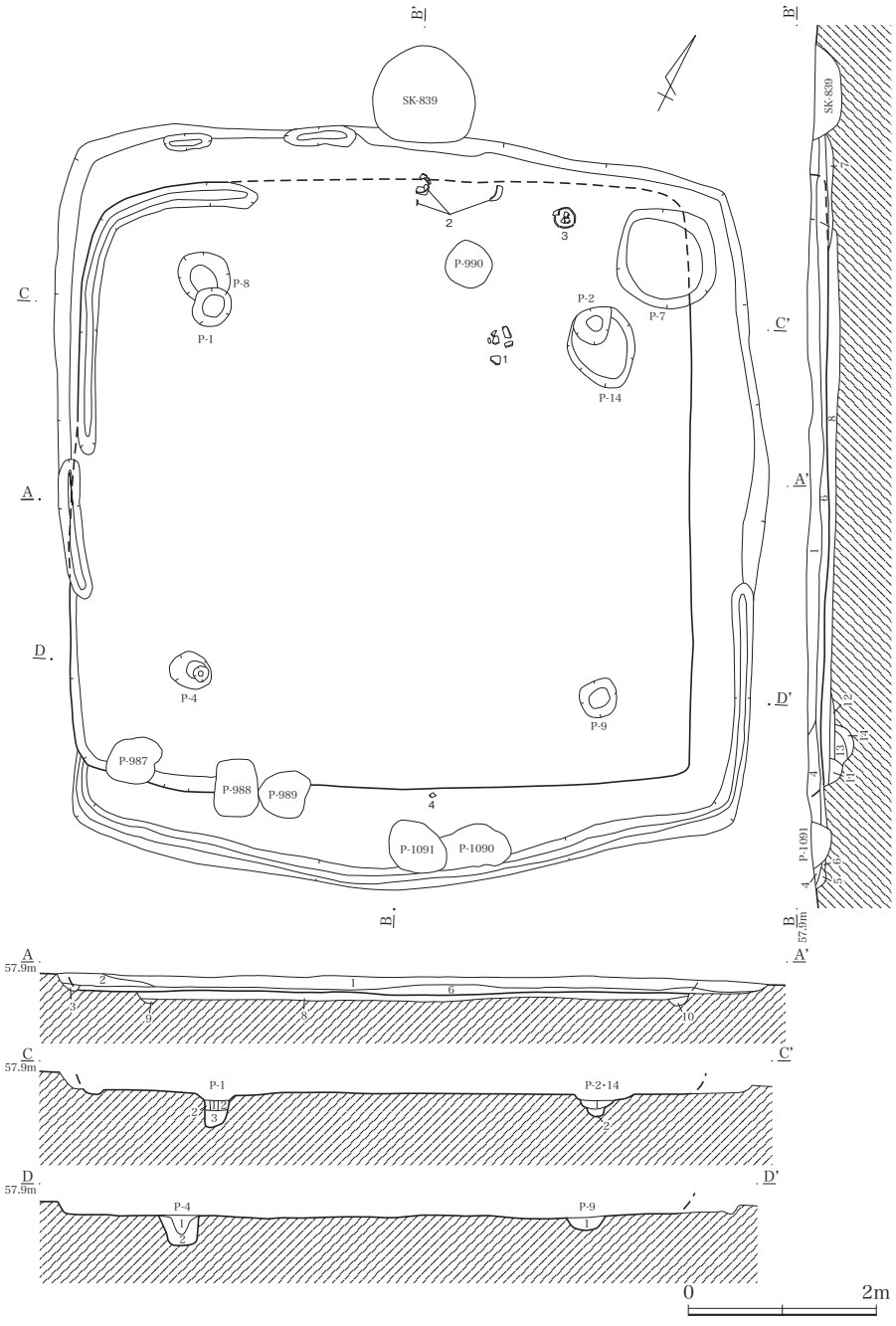
第 42 表　和田遺跡　SI-209a 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 14.8 高　残 2.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N6/0　灰 緻密　白細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 口～天井破片
2 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 3.0	内面口縁～底部ナデ、表面磨滅が著しく調整不明。外面口縁～体部上半ヨコナデ、体部下半～底部ケズリ。口縁が外反する。丸底。体部中央に稜あり。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/2

3 土師器 坏	口　復 13.9 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと見られるが表面磨滅が著しく調整不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。いびつな丸底で体部上端に稜あり。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや粗い　黒粗粒微量、黒微粒少量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
4 土師器 坏	口　14.7 高　4.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向を主としたミガキ。表面磨滅が著しく調整の密度は不明。口縁から体部上半と底部は淡赤褐色の粘土を用い体部下半は淡黄灰色の粘土を用いる。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。器壁はやや厚く丸底。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　黒微粒多量、白細粒微量 やや硬質	北西隅床面上８㎝、正立 ほぼ完形 No.22
5 土師器 坏	口　復 17.4 高　残 3.6	内面口縁～底部ヨコナデ･ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。体部上端に稜あり。丸底。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒微量、黒微粒少量 やや硬質	P-8 中央部底面上３㎝ 口～底 1/6 No.49
6 須恵器 坏	口　復 13.8 高　3.5 底　復 7.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部わずかに上げ底となる。白色で軟質。	N8/0　灰白 緻密　白粗粒微量、黒微粒少量 軟質	覆土 口～体一部、底 1/2
7 須恵器 高台付坏	高　残 1.6 高台　復 8.2	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形「ハ」の字状に開きやや高い。	10BG5/1　青灰 緻密　白粗粒微量、黒・白微粒少量 硬質	北壁際床面上２㎝ 高台～底 1/4 No.8
8 須恵器 高台付坏	高　残 3.0 高台 復 10.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部切り離し方法不明。高台は断面三角形で「ハ」の字状に開く。	5Y8/1　灰白 やや緻密　黒微粒少量 軟質	覆土 体一部、高台～底 1/4
9 土師器 鉢	口　復 16.4 高　残 8.4 最大　16.7	内面口縁～胴部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ、表面磨滅著しい。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白・赤褐細粒少量、黒礫微量 やや硬質	南西部床面直上 口～体 1/4 No.41
10 土師器 鉢	口　復 22.4 高　残 6.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　白・赤褐粗粒微量、黒微粒少量 やや硬質	北東隅床面上６㎝ 口～体 1/2 No.1
11 須恵器 長頸瓶	口　復 14.0 高　残 13.5	内面口縁～頸部ロクロナデ。外面口縁～頸部ロクロナデ。頸部中央に粘土の継ぎ目あり。頸部中央に２条の浅い沈線あり。下端は体部との接合部から剝離したものか。	5Y8/1　灰白 やや緻密　灰礫微量、白細粒少量 やや軟質	貯蔵穴中央部底面上 24.8 ㎝ 頸ほぼ完存、口一部 No.3
12 須恵器 甕	高　残 21.2 底　9.2 胴部 復 19.1 頸部 復 11.9	内面口縁～胴部ロクロナデ後ナデ。上部に粘土の繋ぎ目と指頭圧痕あり。底部荒いナデで指頭圧痕残る。外面口縁～胴部ロクロナデ、胴部下半ケズリ、底部ナデ。	N7/0　灰白 緻密　白・灰礫少量、白細粒少量 やや硬質	北東部床面直上と P-14 底面直上が接合 胴～頸 1/2、底ほぼ完存 No.21・20
13 土師器 甕	口　復 21.8 高　29.5 最大 復 26.8	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後下半横ないし斜め方向のケズリ、底部ケズリ。球胴で最大径は胴部中央。底部は丸底だが中央の径９㎝ほどの部分がやや平坦な面となる。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　黒・赤褐礫少量、白粗粒少量 硬質	貯蔵穴底面上３㎝と 18 ㎝が接合、正立 口～胴 1/2、底ほぼ完存 No.2、P-5 貯、貯 No.1、SI-211
14 土師器 甕	高　残 16.2 胴　復 19.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで胴部ヘラ状工具痕あり。紐積部分で割れる。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後上半横方向ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒少量、砂細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	貯蔵穴底面上３㎝、正立 胴 1/2 貯 No.1
15 土師器 甕	高　残 5.4 底　復 5.6	内面胴部下半～底部ナデと思われるが水中にあったためか表面に鉄分が付着するため調整不明。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白礫微量、白細粒微量 硬質	貯蔵穴底面上 15 ㎝ 胴下端～底 1/4 貯 No.4
16 瓦 平瓦	長　残 9.8 幅　残 9.0 厚　残 2.4 重　残 256.5	凹面布目痕後ケズリ。凸面格子叩き。白色胎土。	5Y8/1　灰白 やや緻密　白・黒礫微量、白微粒微量 やや軟質	中央部床面直上 破片 No.34
17 瓦 平瓦	長　残 5.4 幅　残 4.2 厚　残 1.1 重　残 29.5	凹面布目痕。	5Y6/1　灰 やや緻密　黒・赤褐礫微量、白微粒微量 やや軟質	P- 1 の西側床面直上 破片 No.26
18 須恵器 坏	口　復 12.6 高　3.8 底　復 6.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。体部「ハ」の字状に開き、口縁部やや外反する。混入。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白・黒粗粒微量、白微粒微量 硬質	北部床面直上 口～体 1/6、底 3/4 No.15

19 須恵器 高台付坏	口　復 12.6 高　4.7 高台　7.1	内面口縁部～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。外面体部下半に墨書あり、２文字。口縁部わずかに外反する。混入。	5Y8/1　灰白 緻密　白礫微量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上２㎝ 口～体 1/4、底・高台ほぼ完存 No.28・33
20 須恵器 坏	高　残 3.0	口縁部～体部破片。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、墨書あり。混入。	N7/0　灰白 緻密　白礫微量、黒微粒微量 硬質	覆土 口～体破片

が、西側が深く、東側が浅い傾向がある。このほかピット２本（P- ８・P-14）があるが、それぞれ主柱穴と重複しており、主柱穴に関連する遺構の可能性がある。P- ８は径 60 × 55cm、深さ６cm、P-14 は径 85 × 74cm、深さ 16cm である。　**壁溝**　南壁際を中心に長くあるほか、各辺壁際に断続的に認められる。断面形は「U」字状で、幅は 17 ～ 33cm、深さは床面から３～ 12cm、覆土は第３・第５層である。　**火処**　なし。SK-839 に切られる南壁際中央にカマドが存在した可能性はあるが、焼土や炭化物の集中といった痕跡は認められない。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- ７）。平面形は隅丸方形で、規模は 108 × 107cm、床面からの深さは 24cm である。底面は丸みを持ち、壁は一部が垂直気味となるが、大部分は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は炭化物などをわずかに含む暗褐色土（第１層）である。　**遺物**　遺物は多く、土師器は甕・坏主体、須恵器は坏、高台付坏、長頸瓶、

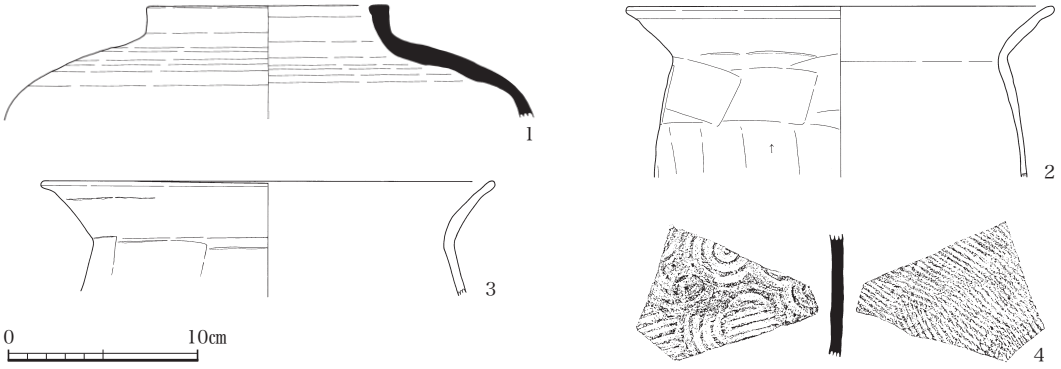


第 91 図　和田遺跡　SI-209b 実測図

壷、甕などである。SI-209 として個別に取り上げた遺物のほとんどが SI-209a の遺物とみられる。遺物は住居跡北東部に多く、特に貯蔵穴がある北東隅に集中する。また、北壁際中央と南西隅付近にも遺物がまとまる傾向がみられる。土師器の球胴甕 13 と武蔵型甕 14・15、須恵器の長頸瓶 11 が貯蔵穴内より、また土師器の鉢 10 が貯蔵穴の周辺より出土する。また、柱穴付近では、P- 1 の付近から土師器坏 5 や平瓦 17、P-2 付近からは須恵器壷 12 が出土している。混入とみられる須恵器 18・19・20 は、覆土中にあった別遺構のものの可能性がある。土師器坏は半球状のものが主体で、口縁部が外傾するものもわずかにある。大形の半球状の坏は８世紀前葉だろうか。甕は長胴、球胴、武蔵型があり、武蔵型は口縁部くの字で底部がやや大きい。遺物からみた時期は８世紀中葉（古）～８世紀後葉と考えられる。SI-209b・209c の遺物が混入していると考えれば、本遺構の時期は８世紀後葉となろう。図化以外の遺物は土師器片主体であり、点数は 1,260 点（10,300 ｇ）である。

ＳＩ－２０９ｂ（第 91・92 図、第 43 表、図版一七）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16・17、Ｏ－ 16・17 グリッドに位置する。南側にはピット以外に遺



第 92 図　和田遺跡　SI-209b 出土遺物実測図

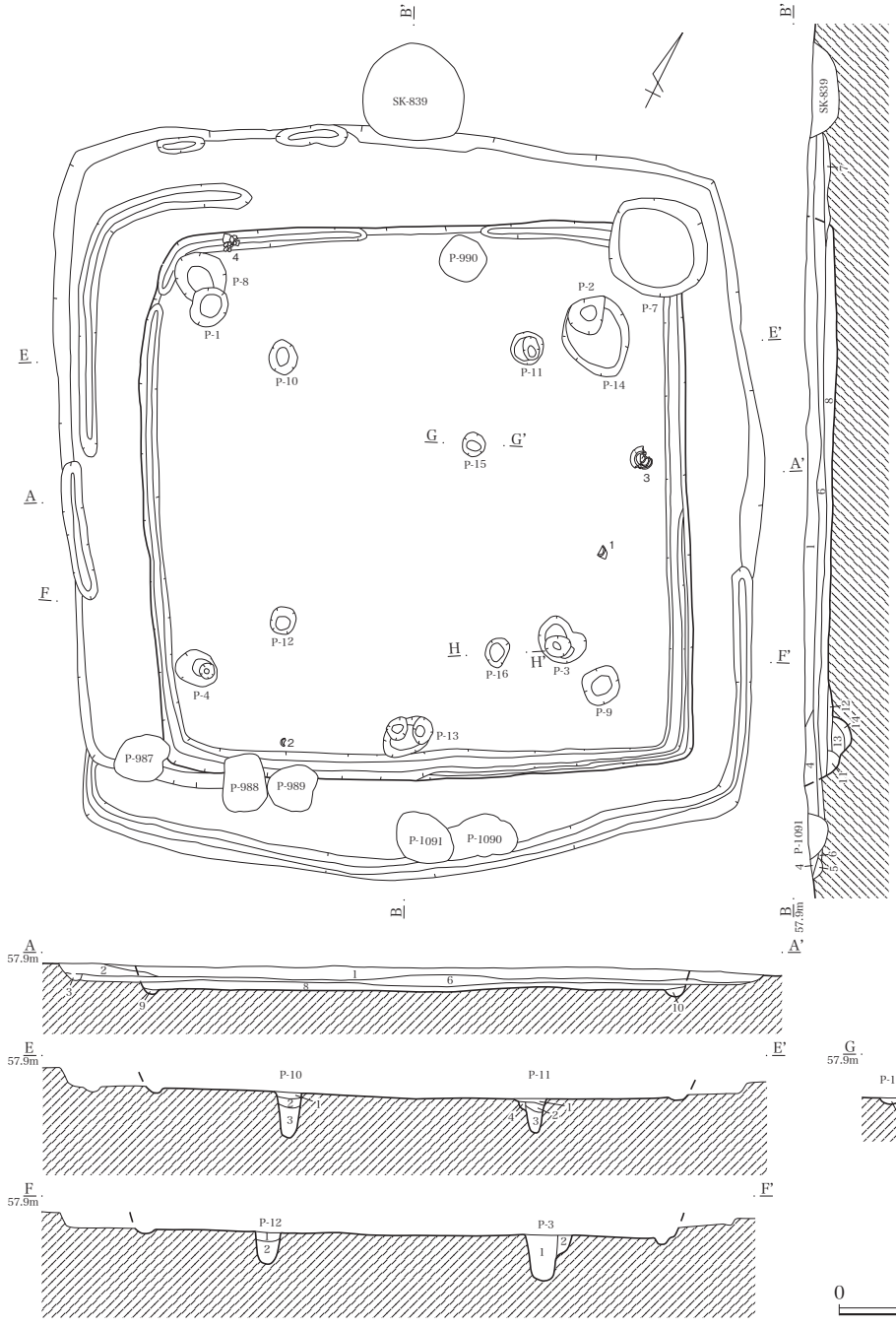
第 43 表　和田遺跡　SI-209b 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 短頸壷	口　復 12.8 高　残 6.0	内面口縁～胴部ロクロナデ。外面口縁～胴部ロクロナデ。外面に白色自然釉かかる。	N7/0　灰白 緻密　白礫微量、黒粗粒少量 硬質	中央部、第６層床面上２㎝ 口 1/3、胴上位 1/4 No.19
2 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 9.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後上端横方向ケズリで口縁下にヘラ状工具痕残る。武蔵型。	5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒少量 硬質	北壁際、第７層床面上２㎝と５㎝が接合 口 1/2、胴上位 1/3 No.14・51・56
3 土師器 甕	口　24.0 高　残 6.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ケズリで胴部上端にヘラ状工具痕あり。武蔵型。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　灰礫微量、白細粒少量 硬質	北東部、第６層床面上２㎝ 口ほぼ完存、胴上端 1/3 No.5
4 須恵器 甕	高　残 6.5	内面同心円当具痕後平行当具痕。外面平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	南部、第６層床面上３㎝ 胴破片 No.45

構はなく、東に SI-210、北に SB-234 が近接してある。西１～２ｍには SK-328・329・620 などが並んでいる。　**重複**　二度の建て替えのうち一回目が実施された住居跡と考えられ、SI-209c を切り、SI-209a に切られる。Ｐ－ 987・988・989 は、調査時の状況などから本住居跡を切るとみられる。北部で重複する P-990 との新旧関係は不明である。　**平面形**　東辺・南辺については SI-209c とほぼ共通するとみたほか、南西隅の明確な段差と北東部の壁溝を根拠として、平面形は方形と推定した。南北方向の中軸線はＮ－ 26°－Ｗである。　**規模**　SI-209c からの建て替えに伴い、東辺・南辺は共有させて北辺と西辺を 50 ～ 80cm 拡張している。東西方向が 6.59m、南北方向が 6.52m である。　**覆土の状態**　SI-209a の貼床である第６層が覆土となる。　**壁**　SI-209a 構築に伴い、本住居跡の壁はほとんど失われている。SI-209a と共有する部分とみた南西部で確認すると、残存壁高は 16 ～ 20cm であり、壁は外傾して立ち上がっている。　**床面**　第６層下面、標高 57.55 ～ 57.6m 付近が床面と考えられる。緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　SI-209c との重複部分については、第８層などで埋めて貼床する。床面から SI-209c 床面までの深さは８～ 15cm である。拡張部分は地山面をそのまま床面としているとみられるが、北辺の一部については貼床した可能性もある。　**柱穴**　SI-209a の主柱穴とした４本（P- １・P- ２・P- ４・P- ９）が本住居跡の主柱穴と推定する。平面的な規模は SI-209a の時点とほとんど変わらないが、深さは床面が低くなった分浅くなる。P- １は径 40 × 43cm、深さ 35cm、P- ２は径 40 × 38cm、深さ 24cm、P- ４は径 45 × 40cm、深さ 31cm、Ｐ－９は径 40 × 40cm、深さ 13cm である。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 4.10m、P- ４－ P- ９間が 4.24m、P- ４－ P- １間が 3.94m、P- ９－ P- ２間が 4.00m である。なお、可能性としては SI-209c の主柱穴と推定した P-10・11・12・３の４本が主柱穴となることも考えられる。このほか、SI-209a のピットとした P- ８・P-14 も存在する可能性がある。P- ８は径 60 × 55cm、深さ１cm、P-14 は径 85 × 74cm、深さ７cm である。　**壁溝**　北西部に認められる。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 17 ～ 25cm、深さは床面から３～５cm である。南～東壁際にも存在した可能性がある。　**火処**　なし。北壁際で確認された、本住居跡の床面を掘り込み貼床したと考えた SI-209a 第７層には焼土や炭化物が含まれているため、ここに本住居跡のカマドがあった可能性は指摘できる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　本遺構に確実に伴うと判断できる遺物はない。ここでは、SI-209a の貼床に相当する土層から出土した遺物を、本遺構に伴う可能性があるものとして掲載する。須恵器甕片４が南壁際付近から出土するほかは、須恵器短頸壷１、土師器甕２・３はいずれも北東部にまとまる。本遺構の年代を知る手がかりは少ないが、SI-209c と 209a の間となることからすれば、８世紀中葉頃となろうか。

ＳＩ－２０９ｃ（第 93・94 図、第 44 表、図版一七）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16・17、Ｏ－ 16・17 グリッドに位置する。南側にはピット以外に遺構はなく、東に SI-210、北に SB-234 が近接してある。西１～２ｍには SK-328・329・620 などが並んでいる。　**重複**　二度建て替えられた住居跡の最初期の段階と考えられ、SI-209a・209b に切られる。P-987・988・989 は、調査時の状況などから本住居跡を切るとみられる。北部で重複する P-990 との新旧関係は不明である。　**平面形**　残存する壁溝などから、平面形は方形と推定した。南北方向の中軸線はＮ－ 25°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 5.85m、南北方向が 5.97m である。　**覆土の状態**　SI-209b の貼床である第８層が住居跡全体の覆土となる。　**壁**　SI-209a・209b 構築に伴い、本住居跡の壁の多くは失われている。残存壁高は 22 ～ 25cm のみだが、SI-209a 確認面からすると 23 ～ 31cm である。壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが。おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが４本（P-10・P-11・P-12・P- ３）ある。P-10 は径 38 × 31cm、深さ 50cm、P-11 は径 36 × 35cm、深さ 37cm、P-12



SI-209c　P-10
1　暗褐色土　炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　礫・小礫微量。しまりあり。
3　褐色土　小礫微量。しまりあり。

SI-209c　P-11
1　暗褐色土　炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　小礫微量。しまりあり。
4　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-209c　P-12
1　褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫微量。しまりあり。

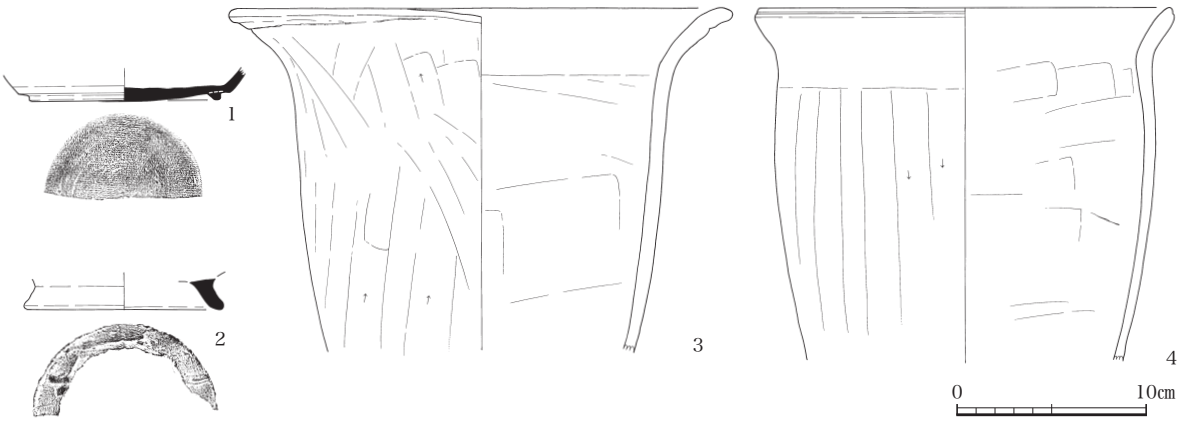
SI-209c　P-3
1　明黄褐色土　灰色粘土粒少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-209c　P-15
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-209c　P-16
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

0　2m

第 93 図　和田遺跡　SI-209c 実測図

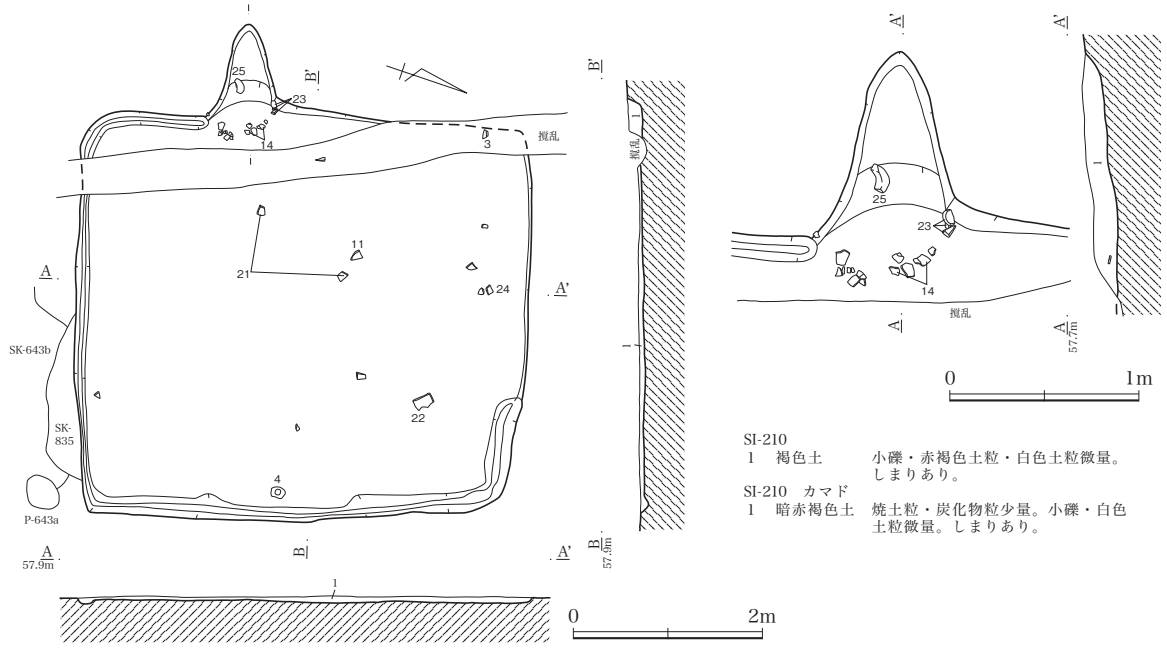


第 94 図　和田遺跡　SI-209c 出土遺物実測図

第 44 表　和田遺跡　SI-209c 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 高台付坏	高　残 1.8 高台　10.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後軽いナデ後高台貼り付け。低い高台でほぼ垂直に下がり、底部中央は高台よりわずかに突出する。	N8/0　灰白 緻密　灰粗粒微量 やや硬質	東壁際、第 8 層床面 上 5 cm 高台～底 1/2 No.48
2 須恵器 高台付坏	高　残 1.6 高台 復 10.6	高台のみ貼付けた部分で剝離する。高めで「ハ」の字状に開く。剝離面に残る痕跡から坏底部の貼り付け前の調整はケズリであることがわかる。	N5/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	南西部、第 8 層床面 上 3 cm 高台 1/2 No.47
3 土師器 甕	口　復 26.6 高　残 18.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁部～胴部縦及び斜位のケズリ後口縁軽いヨコナデ。口縁部紐積痕あり。口縁部やや歪む。	10YR6/3　にぶい黄橙 粗い　黒・白・赤褐礫少量、白細粒少量、金雲母粗～細粒微量 硬質	東壁際、第 8 層床面 直上 口 1/2、胴上半 1/2 No.57
4 土師器 甕	口　復 22.2 高　残 18.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面胴部縦方向ケズリ後口縁ヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白礫微量、白細粒微量 硬質	北西隅、第 8 層床面 上 7 cm 口一部、胴一部 No.50

は径 30 × 27cm、深さ 35cm、P － 3 は径 53 × 49cm、深さ 50cm である。柱間寸法は、P-10 － P-11 間が 2.68m、P-12 － P- 3 間が 2.95m、P-12 － P-10 間が 2.90m、P- 3 － P-11 間が 3.16m である。4 本とも比較的深く、東側の P-11・3 は柱痕のほかに掘方が確認できる。このほかピット 2 本（P-15・P-16）があるが、ともに浅いため柱穴とは考えにくい。P-15 は径 26 × 25cm、深さ 6 cm、P-16 は径 33 × 25cm、深さ 17cm である。　**入口ピット**　南壁際中央にある（P-13）。平面形は楕円形で、規模は 59 × 41cm、床面からの深さは 27cm である。底面北側にはピット状に深くなる部分が 2 ヶ所あり、底面からの深さは西側が 5 cm、東側が 7 cm である。覆土は第 13・第 14 層で、P-13 全体を明褐色土（第 12 層）が覆っている。　**壁溝**　壁際をほぼ全周しており、北西部と北辺中央に途切れる部分がある。断面形は「U」字状で、幅は 15 ～

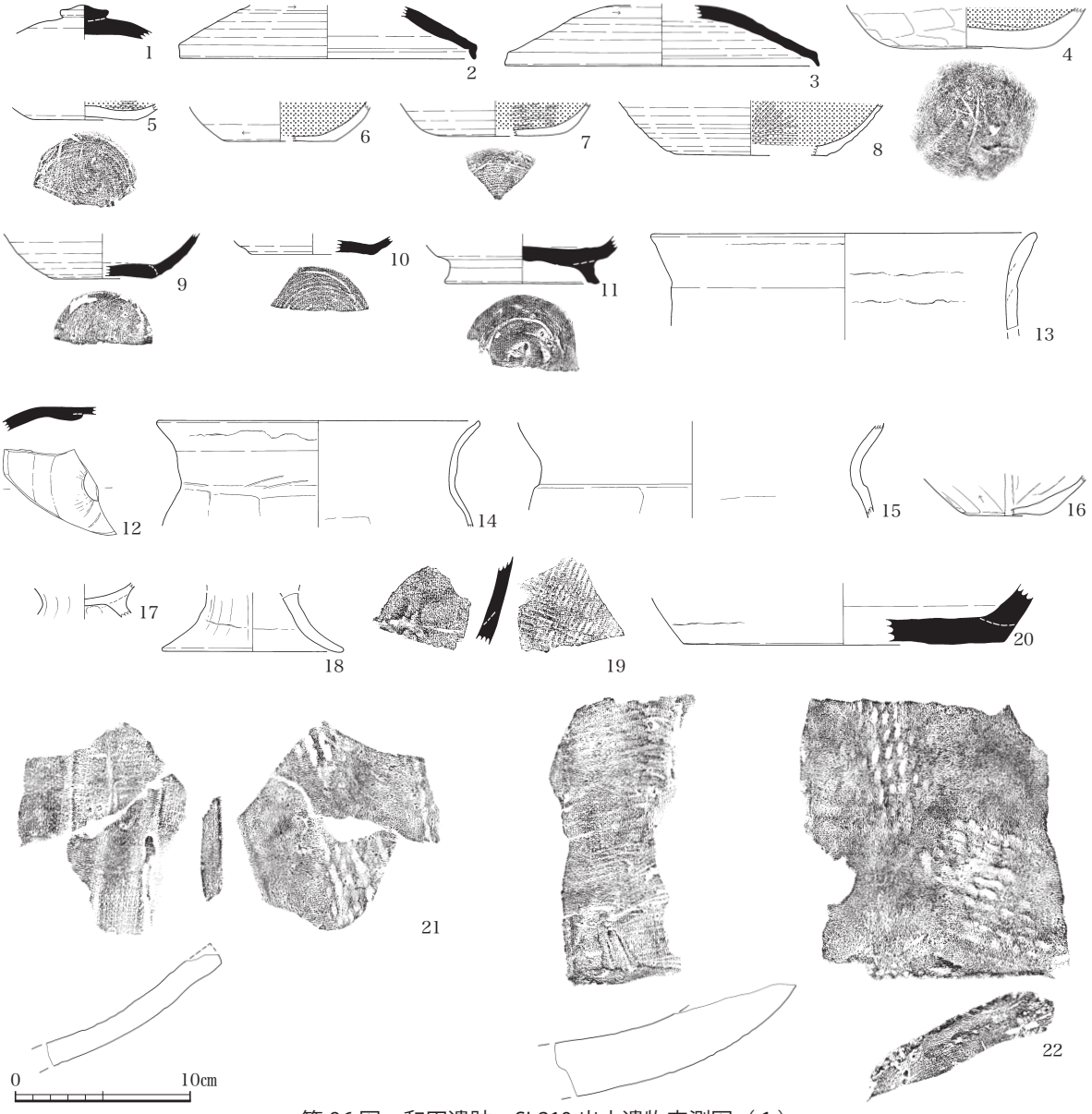


第 95 図　和田遺跡　SI-210 実測図

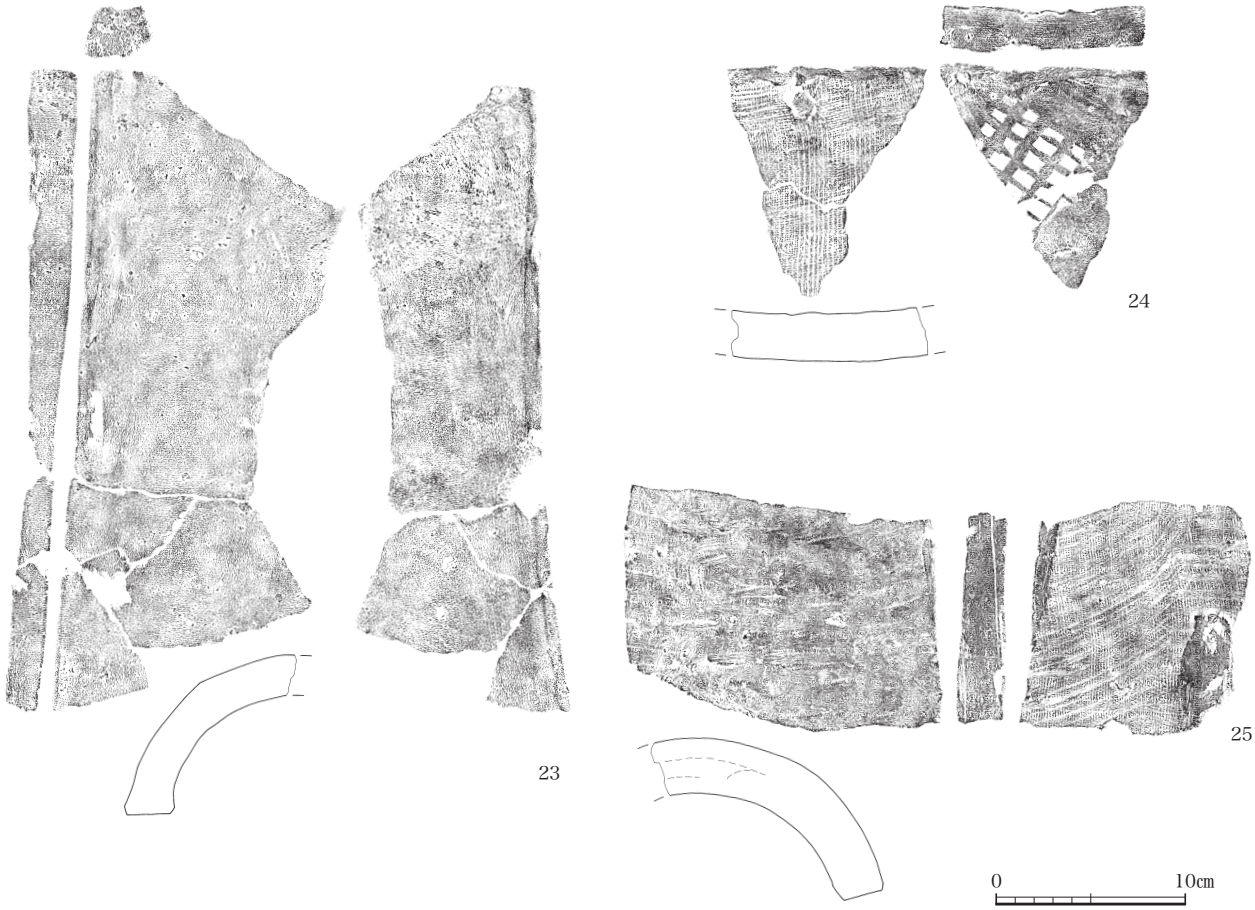
28cm、深さは床面から５～ 14cm である。覆土は第９～ 11 層で、第 10・第 11 層は灰色粘土を含む。　火処　なし。北壁際中央で大きく途切れる壁溝の状況からすると、この位置にカマドがあった可能性はあるだろう。　貯蔵穴　なし。　遺物　出土位置を計測して取り上げた遺物のうち、層位との対比から本遺構に伴う可能性が高い遺物は４点ある。すべて壁際に寄った位置から出土する。本遺構の年代は、８世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－２１０（第 95 ～ 97 図、第 45 表、図版一八・五一）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。東に SI-212・213、西に SI-209a・209b・209c、北に SK-211 がそれぞれ近接してある。　重複　南壁が SK-643b・835 と重複する。土層では確認できていないが、調査時の状況などから本住居跡が SK-643b・835 を切る可能性が高いと考える。西壁際には暗渠による溝状の撹乱がある。　平面形　南北方向にやや長い長方形で、東西方向の中軸線はＮ－ 72°－Ｅである。　規模　南北方向が 4.30m、東西方向が 4.39m である。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第



第 96 図　和田遺跡　SI-210 出土遺物実測図（１）



第 97 図　和田遺跡　SI-210 出土遺物実測図（２）

第 45 表　和田遺跡　SI-210 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.9	内面天井部ロクロナデ。外面天井部回転ケズリ、つまみ貼付け、つまみは偏平な断面台形で中央が突出する。内外面とも表面磨滅が著しい。酸化焔焼成。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白粗粒少量 軟質	覆土 天井 1/3、つまみほぼ完存
2 須恵器 蓋	口　復 17.0 高　残 3.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。重ね焼きのため口縁の外周約 1 cmと内面全体が黒褐色を呈する。	5Y7/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口辺～天井破片
3 須恵器 蓋	口　復 18.0 高　残 3.4	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみ欠損。	N7/0　灰白 緻密　白粗粒少量 硬質	北西隅床面直上と住居北側 SK-211 の周辺トレンチ出土破片が接合 口～天井 1/4 No.14・SK-211 周辺トレンチ
4 土師器 坏	高　残 2.5 底　9.0	内面体～底部ヨコナデ・ナデでヘラ状工具痕あり、全面に黒色処理。外面体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕。底部はやや上げ底。器壁厚く大型。底部内面中央はロクロ成形の土器のように円形に突出する。	2.5Y8/3　淡黄 緻密　白粗粒少量 やや軟質	東壁際床面直上、正立 体下位 3/4、底完存 No.13
5 土師器 坏	高　残 0.9 底　復 5.9	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後一方向の緻密なミガキ。全面黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後軽いナデ。細い棒状の圧痕あり。	10YR8/2　灰白 やや緻密　赤褐礫～細粒少量、白色粗粒微量 硬質	覆土 体下半～底 1/2
6 土師器 坏	高　残 2.2 底　復 6.4	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後全面黒色処理。外面体部ロクロナデ、体部下半はケズリ、底部ヘラ切りと見られるが表面磨滅のため不明確。底部が非常に薄い。	7.5YR6/6　橙 緻密　白礫微量､青灰粗粒少量 軟質	覆土 底～体半 1/4

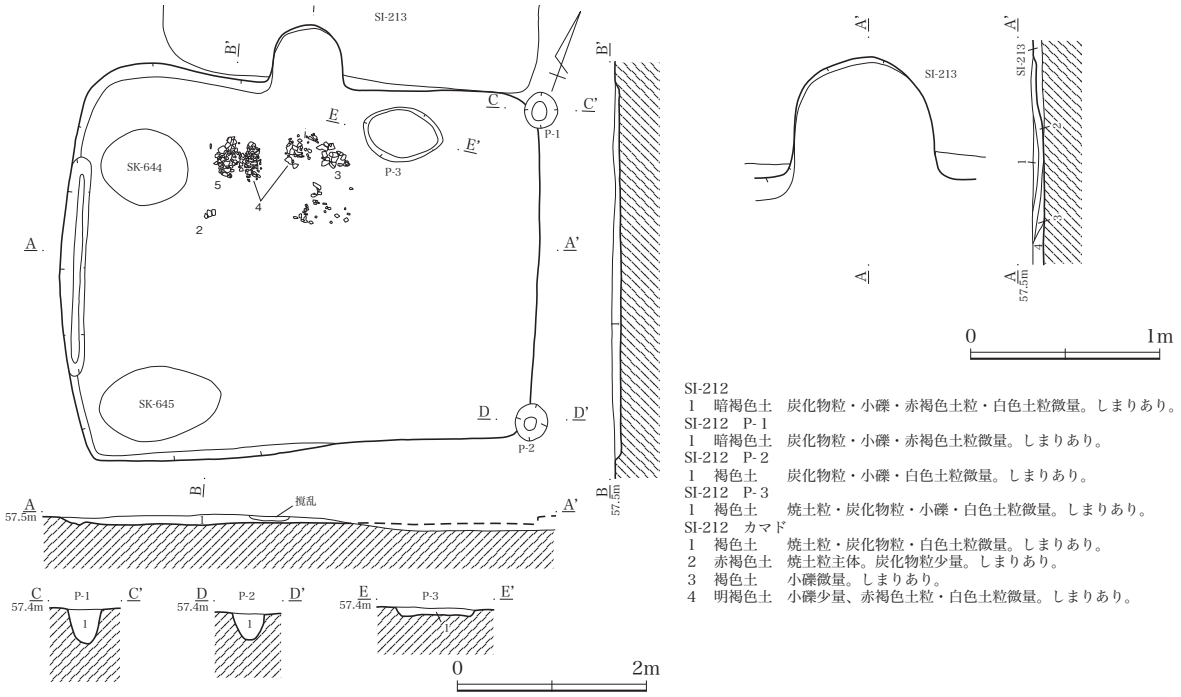
7 土師器 坏	高　残 1.9 底　復 7.0	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後緻密なミガキ。全面黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR8/1　灰白 緻密　青灰・白粗粒微量 硬質	覆土 底～体下位 1/4
8 土師器 坏	高　残 3.0 底　復 8.8	ロクロ成形。内面体部～底部ロクロナデ後全面に緻密なミガキ。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR6/6　橙 緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	覆土 体～底破片
9 須恵器 坏	高　残 2.6 底　復 5.6	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後軽いナデ。やや上げ底で底部やや厚い。	N7/0　灰白 緻密　白粗～微粒多量 軟質	覆土 体 1/8、底 1/2
10 須恵器 坏	高　残 1.0 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色胎土。わずかに上げ底。	2.5Y8/1　灰白 緻密　赤褐粗粒少量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 体一部、底 1/4
11 須恵器 高台付坏	高　残 2.8 高台　復 8.8	内面体部～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形「ハ」の字状に開く。白色胎土。	N8/0　灰白 緻密　青灰礫～細粒少量 やや硬質	中央部床面上 3 ㎝ 高台 1/3、底 1/2 No.6
12 須恵器 瓶類	高　残 1.3	内面体部ロクロナデ、上面に円盤を貼り付け体部を閉塞する。貼付部付近はやや厚く、粘土シワが認められる。外面体部緑灰色の自然釉が厚く付着するため調整不明。	7.5YR8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 硬質	覆土 体破片
13 土師器 甕	口　復 22.2 高　残 5.5	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上端に稜あり胴部上半の調整はケズリと思われるが表面磨滅のため不明。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白細粒微量、青灰礫～粗粒少量、赤褐礫～粗粒少量 やや軟質	覆土 口～胴上端破片
14 土師器 甕	口　復 18.5 高　残 6.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端横方向にケズリ。口縁部下半に工具のあたり残る。器壁薄い。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや粗い　青灰・白細粒多量、赤褐細粒少量 硬質	カマド中央部火床面上 6 ㎝と 9 ㎝が接合 口 1/4、胴上端 1/4 KNo. 5・7
15 土師器 甕	高　残 5.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向にケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　青灰・白細粒多量、赤褐細粒微量 硬質	覆土 口辺破片
16 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 5.0	内面胴部下端～底部ナデでヘラ状工具痕あり。底部中央が上に突出する。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ、底部中央が凹む。武蔵型。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白細粒多量、青灰粗粒多量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 胴下半～底 1/2
17 土師器 台付甕	高　残 1.9	内面底部ナデ、脚部上半ナデで指頭圧痕あり。外面下端～脚部上端ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白微粒少量、赤褐粗～細粒少量 硬質	覆土 胴下端～脚上端 3/4
18 土師器 台付甕	高　残 3.3 底　復 10.4	内面脚部上半ナデ、下半ヨコナデ。外面脚部縦方向ケズリ後下半ヨコナデで紐積痕あり。胴部との接合面で剝離する。「ハ」の字状に開く。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白粗粒多量、透明粗粒微量 硬質	覆土 脚 1/3
19 須恵器 甕	高　残 4.9	内面胴部ナデ、粘土の継ぎ目あり。外面平行叩き。	N6/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 胴破片
20 須恵器 甕	高　残 3.4 底　復 18.4	内面胴部下端ロクロナデ、底部ナデ。外面胴部ロクロナデ、粘土の継ぎ目あり。底部ナデ。わずかに上げ底。	5Y6/1　灰 緻密　白細～礫粒少量 硬質	覆土 胴下端一部、底 1/6
21 瓦 平瓦	長　残 12.5 幅　残 10.1 厚　残 1.3 重　残 208.4 高　6.8	凹凸面ともに表面磨滅が著しい。凹面布目痕、模骨痕。側縁が粘土板の合わせ目で剝離する。剝離面には、端面と平行する方向に糸切痕残る。凸面縄目叩き後側縁ケズリと見られるが表面磨滅のため不明瞭。側面ケズリか。器壁薄い。	5Y7/1　灰白 やや粗い　白粗粒少量、青灰礫微量 やや硬質	中央部床面直上、床面上 3 ㎝が接合 破片 No.5・9
22 瓦 平瓦	長　残 16.1 幅　残 13.7 厚　3.0 重　1046.2 高　残 6.5	凹面布目痕後端縁部ケズリ、一部表面が剝離する。凸面縄目叩き後部分的にケズリ。狭端面ケズリ。表面黒褐色。右側縁側は粘土板の合わせ目が剝離欠損しており、欠損面には端面と平行する糸切痕が明瞭に残る。	2.5Y5/1　黄灰 やや粗い　青灰礫～細粒多量、白細粒少量 硬質	北東部床面直上 破片 No.12

23 瓦 丸瓦	長　残 36.0 幅　残 9.3 厚　2.2 重　1026.7 高　8.4	凹面布目痕後側縁丁寧なケズリ。凸面ナデ後側縁部ケズリ。側面丁寧なケズリ、狭端面ケズリ。白色胎土。	2.5Y8/2　灰白 やや粗い　白・青灰礫多量、白粗粒少量 やや軟質	カマド右袖付近、床面上8㎝と12㎝、床面下14㎝の破片が接合、構築材か。 KNo.2・3・14
24 瓦 平瓦	長　残 12.0 幅　残 10.5 厚　2.5 重　341.2 高　2.9	凹面布目痕後広端縁ケズリ。凸面ナデ後格子叩き、広端縁ケズリ。広端面ケズリ。	5Y8/1　灰白 やや粗い　灰礫微量、白粗粒微量 硬質	北壁際床面直上 破片 No.4
25 瓦 丸瓦	長　残 12.7 幅　残 12.4 厚　2.9 重　868.0 高　8.5	凹面布目痕後一部ナデ、側縁ケズリ。凸面ナデ。側面ケズリ。断面より３枚の粘土板を重ねて成形したことが分かる。	5Y6/1　灰 緻密　白粗～微粒少量 硬質	カマド中央部火床面直上 破片 KNo.1

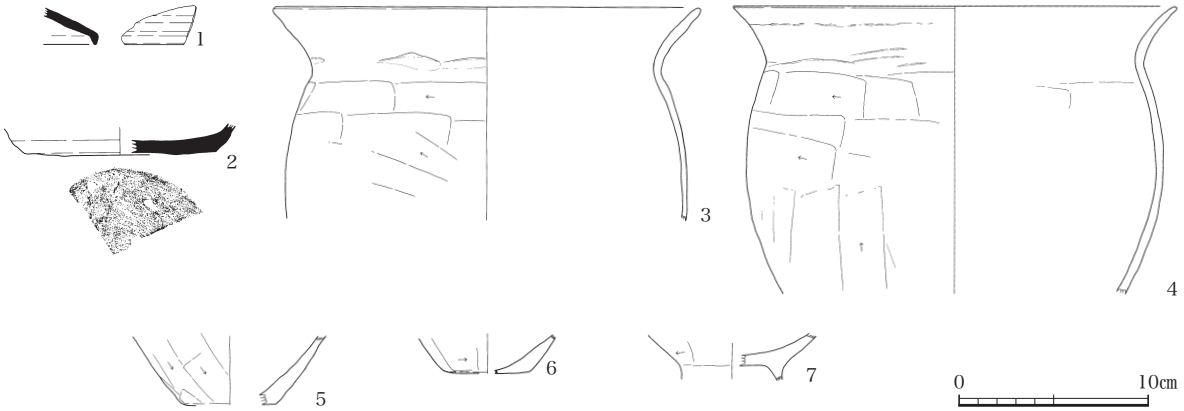
１層）である。　**壁**　残存壁高は８～ 28cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　南～東壁際にある。断面形は「U」字状で、幅は８～ 28cm、深さは床面から５～７cm である。覆土は住居跡覆土と同様の褐色土（第１層）である。　**火処**　カマドが西壁際南寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を 93cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、比高約５cm の緩やかな段差を経て平坦な煙道へと続き、先端は丸みを持って大きく外傾して立ち上がる。被熱の痕跡は顕著で、火床面から右袖部内面にかけての広い範囲が硬化赤変している。火床面奥の斜面直上では丸瓦片 25 が直立の状態で出土する。掘方内に据えられているわけではないが、支脚として使用された可能性があろう。覆土は焼土や炭化物を含む暗赤褐色土（第１層）である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は一定量あり、須恵器と瓦が多い。須恵器は坏主体で、土師器は半球状主体の坏と、武蔵型の甕が主体となる。瓦はカマド内部より出土しており、25 は支脚の可能性がある。右袖の部分にある 23 はカマド構築材であろうか。厚手で内面が黒色処理された土師器坏４や、模骨痕のある縄叩きの平瓦 21 は住居内の床面直上からの出土である。図化しなかった遺物は甕片を主体とする土師器片 482 点（2,980 ｇ）、須恵器片 61 点（690 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－２１２（第 98・99 図、第 46 表、図版一八）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16、Ｏ－ 15・16 グリッドに位置する。北東に SI-228、西に SI-210、SK-643b・835 がそれぞれ近接してある。　**重複**　カマド部分で SI-213 を切り、西側が SK-644・645 と重複する。SK-644・645 との新旧関係は不明であるが、調査時の状況などから両土坑を切る可能性が高い。本住居跡の貼床の一部となることも考えられる。　**平面形**　東半は耕作による削平により床面と壁が失われているが、部分的に残存する床面の痕跡などから住居跡の範囲を推定した。東西方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 20°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.57m、南北方向が 3.55m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などを含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は４～６cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット２本（P- １・P- ２）があり、想定する住居跡範囲の南東隅、北東隅にそれぞれ位置する。P- １は径 34 × 31cm、深さ 30cm、P- ２は径 36 × 31cm、深さ 24cm であり、ともに柱穴の可能性がある。　**壁溝**　西壁際にある。断面形は開いた「U」字状で、幅は 15 ～ 24cm、深さは床面から２～５cm である。覆土は住居跡覆土と同様の暗褐色土（第１層）である。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道



第 98 図　和田遺跡　SI-212 実測図



第 99 図　和田遺跡　SI-212 出土遺物実測図

第 46 表　和田遺跡　SI-212 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　1.9	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁体部ロクロナデ。白色胎土。	N8/0　灰白 緻密　灰褐・白細粒微量 やや軟質	覆土 口一部、体一部
2 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 10.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周手持ちケズリ。やや上げ底となる。	10Y7/1　灰白 やや緻密　白粗粒少量、灰褐細粒微量 軟質	中央部床面上 5 ㎝ 体下半～底 1/4 KNo.4
3 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 11.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半斜位のケズリ、上端は横方向ケズリ、口縁部にケズリのヘラ状工具痕が深く残る。器壁薄い。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	カマド南側床面直上～ 2 ㎝ 口～胴上半 1/2 KNo.2
4 土師器 甕	口　復 23.4 高　残 15.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向ケズリ後胴部上半を横方向ケズリ。縦方向ケズリ時の工具痕が口縁部下半にある。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白細粒少量、赤褐粗～細粒微量 硬質	カマド南側床面直上～ 4 ㎝が接合 口一部、胴一部 KNo.1・2

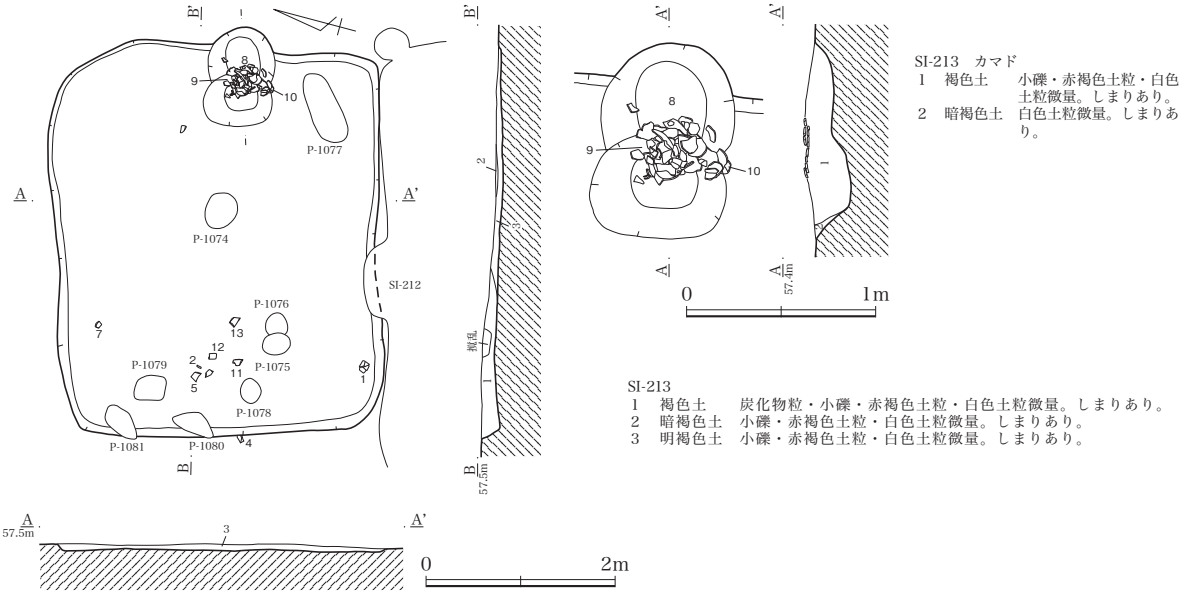
5 土師器 甕	高　残 3.6 底　復 4.8	内面胴下半～底部ナデと見られるが表面磨滅のため調整不明。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。武蔵形。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	カマド南側床面上 5 cm 胴下半 1/4、底 1/4 KNo.1
6 土師器 甕	高　残 2.1 底　復 4.4	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒微量 やや硬質	覆土 胴下端 1/2、底 1/2
7 土師器 台付甕	高　残 2.5	内面底部ナデ、脚部上端ナデ。外面胴部下端ケズリ、脚部上端ナデ。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白・赤褐細粒微量、砂細粒少量 やや硬質	覆土 胴下端～脚上端 1/2

部は壁を約 57cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、比高２～３cm の緩やかな段差を経て平坦な煙道へと続き、先端は大きく外傾して短く立ち上がる。被熱の痕跡は顕著ではない。覆土は４層で、焼土主体の第２層は天井部内面の崩落と考えられる。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- ３）。平面形は楕円形で、規模は 75 × 54cm、床面からの深さは６cm である。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。覆土は炭化物や焼土などをわずかに含む褐色土（第１層）である。　**遺物**　遺物は少ない。カマド前面からは、床面直上ないし床面からやや浮いて、３・４・５などの土師器甕が多数の小破片となった状態で出土する。カマドに関連する遺物であろう。長胴甕はない。図示しなかった遺物は甕主体の土師器片 903 点（2,680 ｇ）、須恵器片 12 点（170 ｇ）である。土師器坏は、半球状のものの他ロクロ成形の高台付坏が１点出土する。本遺構の時期は、８世紀後葉とみられる。

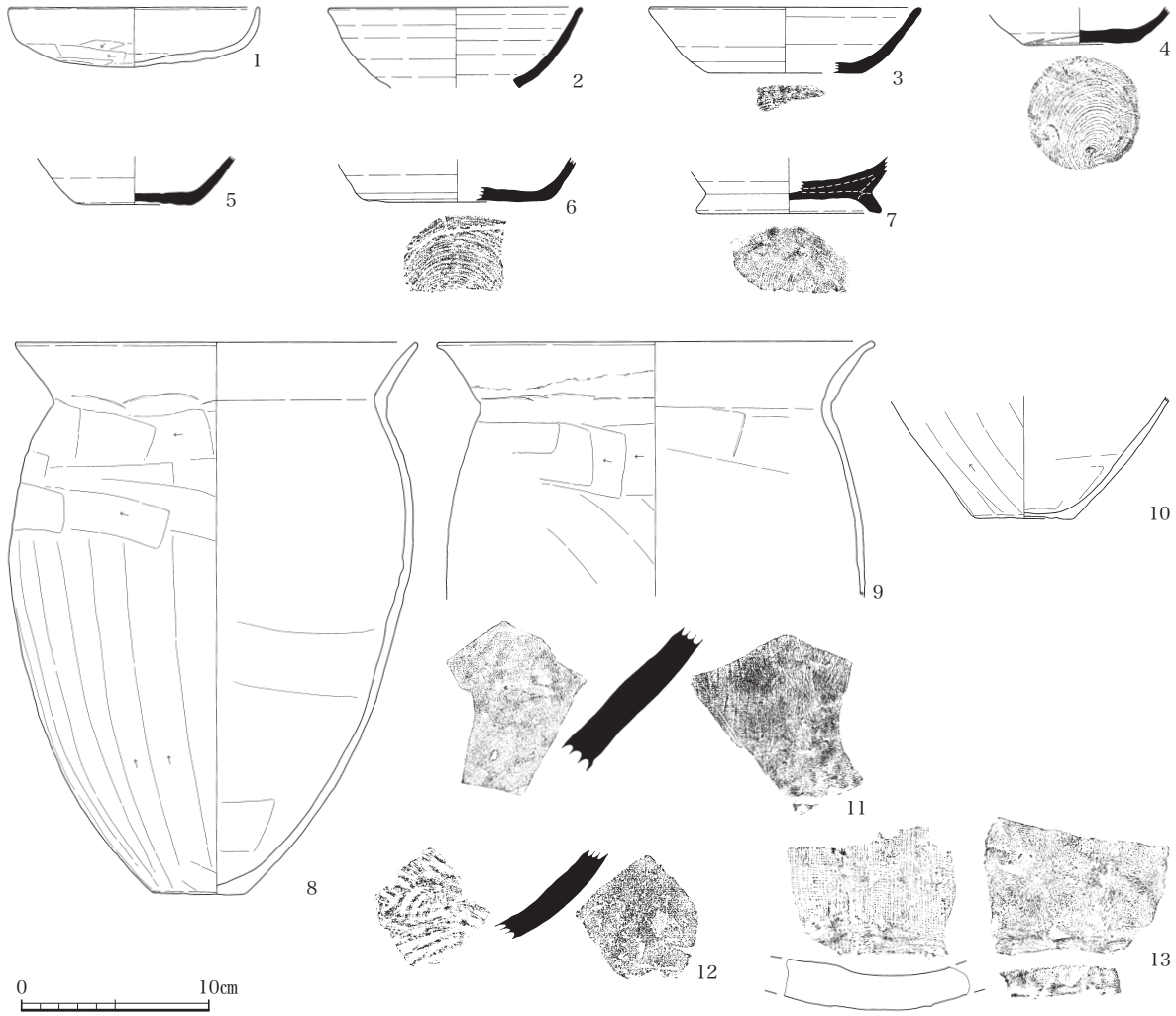
ＳＩ－２１３（第 100・101 図、第 47 表、図版一八・五一・五二）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15・16 グリッドに位置する。東に SI-228、西に SI-210 がそれぞれ近接してある。北２m には SI-403 が隣接する。　**重複**　南辺が SI-212 と接しており、一部が SI-212 カマドに切られる。このほか、住居跡内では新旧関係が不明なピット８本（P-1074 ～ 1081）と重複する。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 17°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.18m、南北方向が 3.45m である。

覆土の状態　覆土は３層で、第１層にはわずかに炭化物が含まれる。　**壁**　残存壁高は３～ 20cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦だが、東半は西半よりやや低くなっている。　**堀方・貼床**



第 100 図　和田遺跡　SI-213 実測図



第 101 図　和田遺跡　SI-213 出土遺物実測図

第 47 表　和田遺跡　SI-213 出土遺物観察表

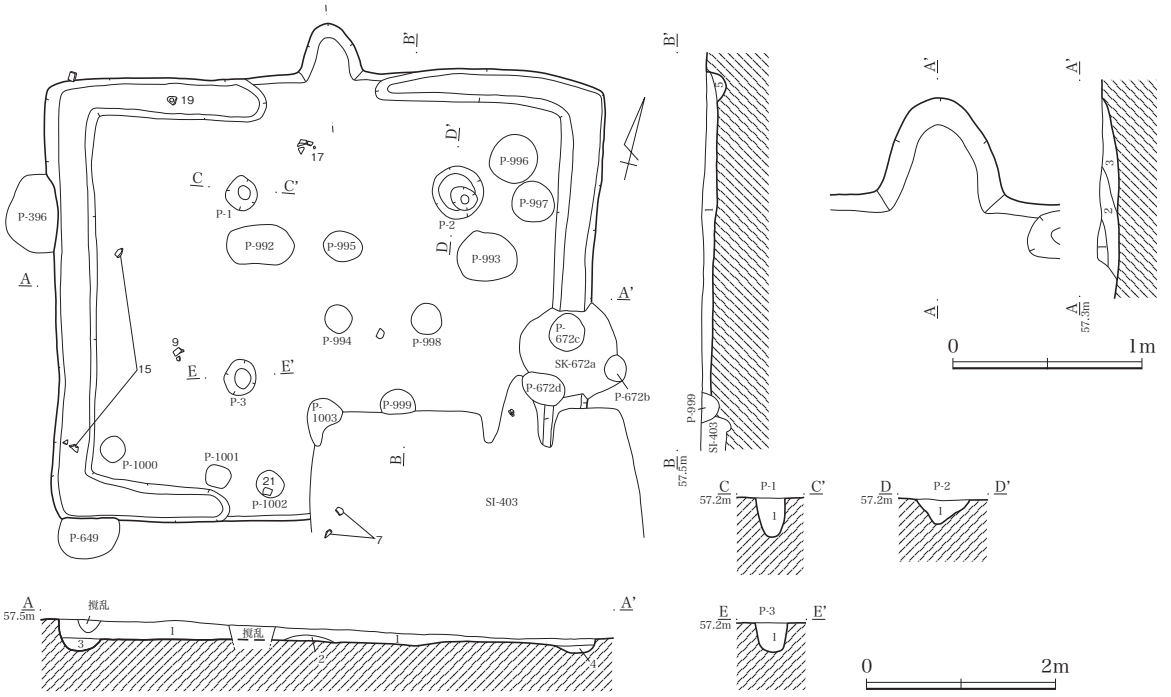
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　13.4 高　3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデと思われるが表面剥離のため不明確。底部薄くくぼむ。外面体部ケズリ後口縁ヨコナデ。器壁薄い。全体にやや歪みあり。浅い丸底。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　白細粒微量、黒粗粒少量 やや硬質	南隅床面上 11 ㎝、正立 口 2/3、体ほぼ完存、底完存 No.3
2 須恵器 坏	口　復 13.6 高　残 4.3	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。白色。	N8/0　灰白 緻密　灰褐粗粒微量 やや軟質	東部床面上 9 ㎝ 口～体 1/5 SK-420 No.1
3 須恵器 坏	口　復 14.5 高　3.5 底　復 8.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端回転ケズリ、底部回転糸切り離し後周囲を軽い回転ケズリ。白色胎土。	10Y8/1　灰白 緻密　灰褐細粒微量、白微粒微量 やや軟質	覆土 口一部、体 1/5、底一部
4 須恵器 坏	高　残 1.9 底　復 6.1	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。糸切りの糸が体部下端にくい込んでいる。	N6/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	東部床面上 6 ㎝ 体下半 1/4、底完存 SK-420 No.6
5 須恵器 坏	高　残 2.6 底　復 6.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ヘラケズリ、回転糸切り離しの可能性あるが不明確。表面磨滅が著しい。白色胎土。	7.5YR8/1　灰白 緻密　灰褐粗粒微量、白礫～微粒微量 軟質	東部床面上 9 ㎝ 体 1/2、底完存 SK-420 No.1

6 須恵器 坏	高　残 2.3 底　復 10.0	内面ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR6/1　灰 緻密　白細粒微量 やや軟質	覆土 体～底 1/4 SK-420
7 須恵器 高台付坏	高　残 3.0 高台　復 9.8	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。底部は３枚の粘土板を貼り合わせている。円柱造りの可能性あり。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。白色胎土。	7.5YR8/1　灰白 緻密　白・灰褐細粒微量 硬質	北西床面上 13 ㎝ 底 1/2、高台 1/3 No.2
8 土師器 甕	口　21.5 高　29.5 底　4.9	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後上半横方向のケズリ。上端に工具のあたりあり、底部ケズリ。武蔵型。口縁部最大径。	5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒微量、赤褐粗粒微量 硬質	カマド中央部火床面上４～ 12 ㎝。カマドにかけられていた可能性あり 口・胴下半・底部各 3/4、胴上半ほぼ完存 KNo.1・No.2
9 土師器 甕	口　復 23.3 高　残 13.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部斜方向ケズリ後上部を横方向ケズリ。口縁部にヘラ状工具のあたりあり。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　白・灰褐細粒少量、赤褐微粒微量 硬質	カマド中央部火床面上 19 ～ 21 ㎝、K №２の上に重なる 口 1/2、胴上半 1/4 KNo.1
10 土師器 甕	高　残 6.6 底　復 5.5	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半ケズリ、底部ケズリ、表面剝離する。武蔵型。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒微量、白粗粒微量 硬質	カマド中央部火床面上４～８㎝。K №１の下 胴下半 1/4、底一部 KNo.2
11 須恵器 甕	高　残 7.6	内面胴部ナデ。外面胴部平行叩き。	10BG5/1　青灰 緻密　灰褐・白粗粒微量 硬質	南西床面上 15 ㎝ 胴破片 SK-420 No.4
12 須恵器 甕	高　残 4.6	内面同心円当具痕。外面ナデ。	N5/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	南西床面上 10 ㎝ 胴破片 SK-420 No.3
13 瓦 平瓦	長　7.1 幅　9.9 厚　2.2 重　残 203.9	凹面布目痕模骨痕あり、端縁ケズリ。端面ケズリ。凸面端縁ケズリ。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、灰礫微量 硬質	南西床面上６㎝ 破片 SK-420 No.5

なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。重複する２基の土坑のような状態であり、天井部、袖部とも失われているため残存状態は良くない。煙道部は壁を約 23cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は楕円形の掘り込み部底面とみられ、床面下約 20cm に位置する。火床面から煙道へは 10cm の段差をもって高くなったのち平坦面となり、先端は外傾して立ち上がる。被熱の痕跡は顕著ではない。覆土は２層で、第１層に焼土がわずかに含まれる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、カマド周辺以外に集中する部分はない。須恵器では坏、高台付坏、甕、土師器では武蔵型甕が主体である。土師器坏は半球状のもののみで、器壁の厚いものと薄いもの双方とも出土する。カマド内からは、武蔵型甕が少なくとも３個体（８・９・10）出土する。カマドにかけられていたものだろう。図化以外の遺物は土師器甕主体であり、土師器片 252 点（1,420 ｇ）、須恵器片 41 点（260 ｇ）、粘土塊１点（20 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

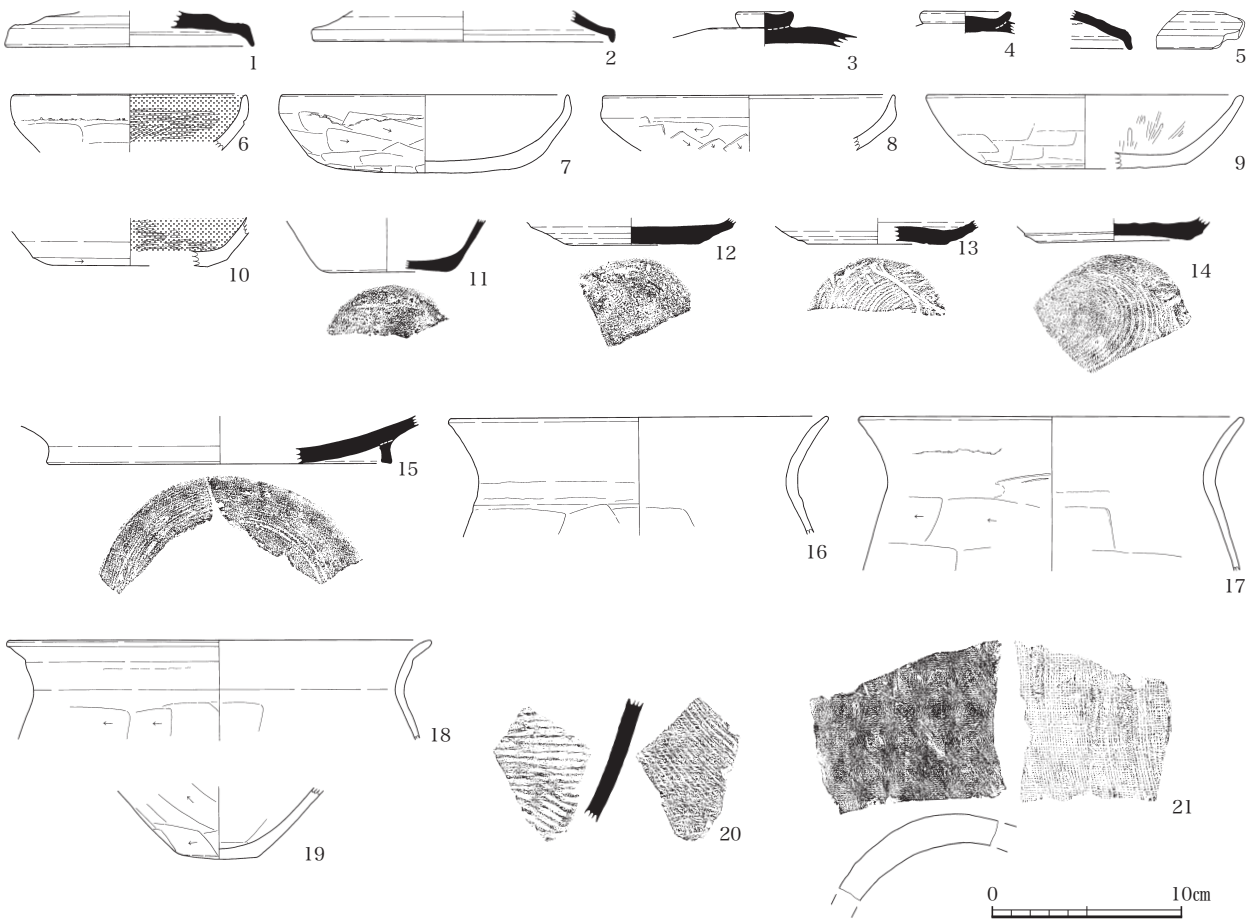
ＳＩ－２１４（第 102・103 図、第 48 表、図版一八）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。南側４～５ｍには SI-210・213・228 などが東西に並んでいる。ピットが集中する部分のため、住居跡内外には多数のピットがある。　**重複**　南東部が SI-403 と SK-672a に、西辺が P-396 に、南西隅が P-649 に、南辺が P-999・1003 にそれぞれ切られる。このほか新旧関係が不明なピット 12 本（P-672c・P-672d・992・993・994・995・996・997・998・1000・1001・1002）と重複するが、P-999・1003 などと覆土が類似することなどから、これらは本住居跡



SI-214
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土粒多量、炭化物粒少量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　灰色粘土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
5　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-214　P- 1
1　灰褐色土　小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SI-214　P- 2
1　暗灰褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-214　P- 3
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-214　カマド
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土粒主体。炭化物粒少量。しまりあり。
3　明褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 102 図　和田遺跡　SI-214 実測図



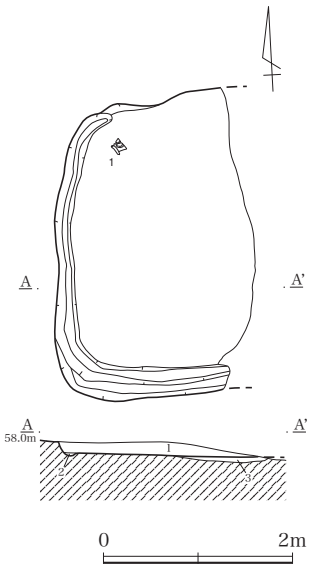
第 103 図　和田遺跡　SI-214 出土遺物実測図

第 48 表　和田遺跡　SI-214 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 13.2 高　残 1.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。白色胎土。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/4、天井一部
2 須恵器 蓋	口　復 16.0 高　残 1.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。白色胎土。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰細粒少量 やや軟質	覆土 口辺破片
3 須恵器 蓋	高　残 1.9	内面天井部ロクロナデ。外面天井部ロクロナデ後回転ケズリ、つまみ貼り付け低い逆台形状で中央部が突出する。白色胎土。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや軟質	覆土 つまみ一部欠損、体～天井一部
4 須恵器 蓋	高　残 1.1	内面天井部ロクロナデ。外面天井部つまみ貼付け。リング状のつまみ。白色胎土。	5Y8/1　灰白 緻密　青灰細粒多量、白粗粒微量、赤褐粗粒少量 やや硬質	覆土 つまみ完存
5 須恵器 蓋	高　残 2.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N5/0　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	覆土 口辺破片
6 土師器 坏	口　復 12.6 高　残 2.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向に緻密なミガキ。全面黒色処理。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。丸底と思われる。	2.5Y8/2　灰白 緻密　青灰微粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/8
7 土師器 坏	口　復 15.4 高　残 4.1 底　10.4	内面口縁～体部ヨコナデ､体～底部ナデ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。偏平な丸底。器壁やや厚い。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白細粒少量、青灰細粒多量 やや硬質	南部床面上 4 ㎝と SI-403 西壁際、床面上 7 ㎝が接合 口～底 1/4 No.1・SI-403 No.1
8 土師器 坏	口　復 15.4 高　残 2.9 最大 復 15.6	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、稜あり、体部ケズリ。口縁が垂直に立ち上がる。	2.5Y8/2　灰白 緻密　青灰細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口辺一部、体一部
9 土師器 坏	口　復 16.4 高　残 3.9 底　復 10.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。表面磨滅のためミガキの方向や粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸味を帯びた平底。器壁やや厚い。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白細粒少量 やや硬質	中央部床面直上 口 1/8、体～底 1/2 No.5
10 土師器 坏	高　残 2.6 底　復 8.2	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後緻密なミガキ。内面全面黒色処理。外面体部ロクロナデ、下端回転ヘラケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白細粒少量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 体下端～底 1/3
11 須恵器 坏	高　残 2.8 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部一方向ヘラケズリ。やや上げ底。	5Y6/1　灰 緻密　青灰細～微粒多量、白細粒少量 やや軟質	P- 3（新番号） 体下端～底 1/3 P-10
12 須恵器 坏	高　残 1.4 底　復 7.0	内面底部ロクロナデ。外面体～底部ロクロナデ、底部糸切り離し後無調整。表面磨滅が著しく調整不明瞭。わずかに上げ底。白色胎土。	N8/0　灰白 やや緻密　青灰礫～細粒少量 軟質	覆土 体下位～底 1/4
13 須恵器 坏	高　残 1.3 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。上げ底。白色胎土。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰細～微粒少量 やや軟質	覆土 底 1/2
14 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 8.2	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後無調整。上げ底。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白細粒少量 やや軟質	覆土 底 1/3 一括
15 須恵器 高台付皿	高　残 2.5 高台 復 18.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形でほぼ垂直に立つ。底部が高台より突出する。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白粗～細粒少量、青灰粗～微粒多量 硬質	西壁際床面上 8 ㎝と南西部床面上 7 ㎝が接合 高台～底 1/4 No.3・6
16 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 6.2	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。武蔵型。	7.5YR4/3　褐 やや緻密　白細粒少量、青灰微粒多量 硬質	覆土 口～胴上端 1/4

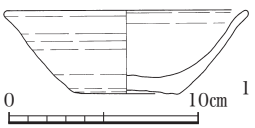
17 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 8.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半ヨコ方向のケズリ、上端に工具のあたりが残る。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	カマド南側床面直上 口 1/4、胴上位 1/6 KNo. 8
18 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 5.3	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ。口縁がわずかに「コ」の字状を呈する。武蔵型。	7.5YR4/3　褐 やや緻密　白細～微粒多量、青灰粗粒少量、透明粗粒微量 やや硬質	覆土 口辺～胴上端破片
19 土師器 甕	高　残 3.8 底　4.2	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半斜方向ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白細粒少量 硬質	北壁溝内、底面上 8 ㎝ 胴下位 1/4、底完存 No.10
20 須恵器 甕	高　残 6.1	内面胴部平行当具痕。外面胴部平行叩き。断面内部は赤褐色。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 胴破片
21 瓦 丸瓦	長　残 8.0 幅　残 8.4 厚　1.7 重　181.6	凹面布目痕後一部ナデ。凸面ナデ。白色胎土。	5Y8/1　灰白 緻密　白礫～細粒多量 硬質	南部床面上 13 ㎝ 破片 No.2

を切る可能性が高いと推定される。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 15°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 5.70m、南北方向が 4.72m である。　**覆土の状態**　覆土は５層で、第２層は多量の焼土を含む。第３～第５層は壁溝覆土である。　**壁**　残存壁高は８～ 20cm であり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが３本（P- １・P- ２・P- ３）ある。P- １は径 37 × 35cm、深さ 41cm、P- ２は径 55 × 55cm、深さ 19cm、P- ３は径 38 × 35cm、深さ 30cm、柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 2.35m、P- ３－ P- １間が 1.95m である。P- ２は上半が広く浅い形状となっており、覆土中には焼土や炭化物を多く含む。　**壁溝**　南東部は不明だが、北壁際中央と南壁際中央付近を除いて壁際を全周するものとみられる。断面形は開いた「U」字状で、幅は 37 ～ 45cm と幅広く、深さは床面から７～ 13cm である。覆土は第３～第５層で、第３・第４層は灰色粘土を含む。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 52cm「U」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、煙道へはほぼそのまま平坦に続き、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡は少なく、火床面付近がわずかに硬化赤変するのみである。覆土は３層で、焼土主体の第２層は天井部内面の崩落と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、住居全体より分散して出土する。須恵器は一定量あり、底部切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがある。図化した坏の他、須恵器坏はヘラ切り６個体、糸切り１個体が確認できる。図化しなかった遺物は、土師器片 557 点（3,790 ｇ）、須恵器片 58 点（420 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。



SI-215
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　白色土粒微量。しまりあり。（掘方）

第 104 図　和田遺跡
SI-215 実測図



第 105 図　和田遺跡
SI-215 出土遺物実測図

ＳＩ－２１５（第 104・105 図、第 49 表、図版一九・五一）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17、Ｌ－ 17 グリッドに位置する。西に SI-670 が近接してあるほか、西３m に SB-951、東７～８m には SI-217・218・632 が

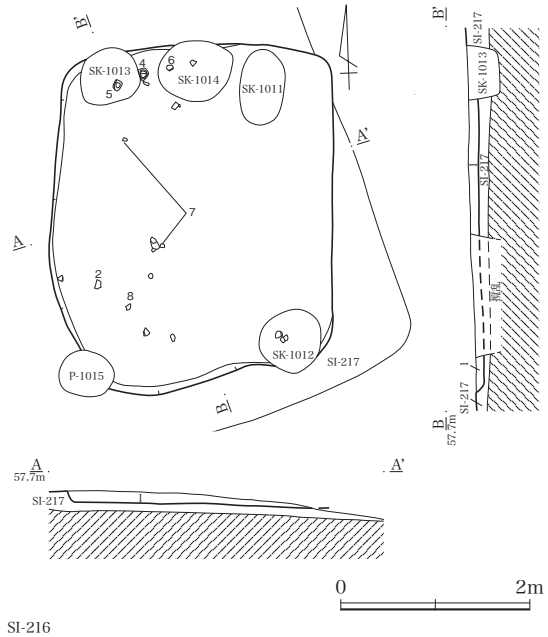
第 49 表　和田遺跡　SI-215 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.8 高　4.3 底　5.6	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後一部ケズリの可能性あり。やや上げ底。	5YR7/6　橙 やや緻密　白粗粒多量、黒褐粗粒少量 やや硬質	北西隅床面上 27 ㎝ 口 2/3、体 4/5、底 完存 No.1

隣接する。　**重複**　なし。削平のためか、東半は遺構が確認できなかった。　**平面形**　方形ないしは長方形になると思われるが、西辺付近しか確認できないため不明である。南北方向の中軸線は、残存部分からするとＮ－３°－Ｅである。　**規模**　南北方向は 3.11m である。東西方向は不明で、調査した部分は 2.10m である。　**覆土の状態**　覆土は第１・第２層で、第２層は壁溝覆土である。第１層は炭化物をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は 12cm であり、壁はやや外傾して短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　住居跡中央付近が浅く掘り窪められ、明褐色土（第３層）で貼床される。床面からの深さは約６cm である。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　西壁際と南壁際に認められる。断面形は開いた「U」字状で、幅は 17 ～ 26cm、深さは床面から２～５cm、覆土は暗褐色土（第２層）である。　**火処**　不明である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物は図化したロクロ成形の土師器坏１のみである。住居北西隅の床面上 27cm から出土した。本遺構の年代は９世紀後半と考えられる。

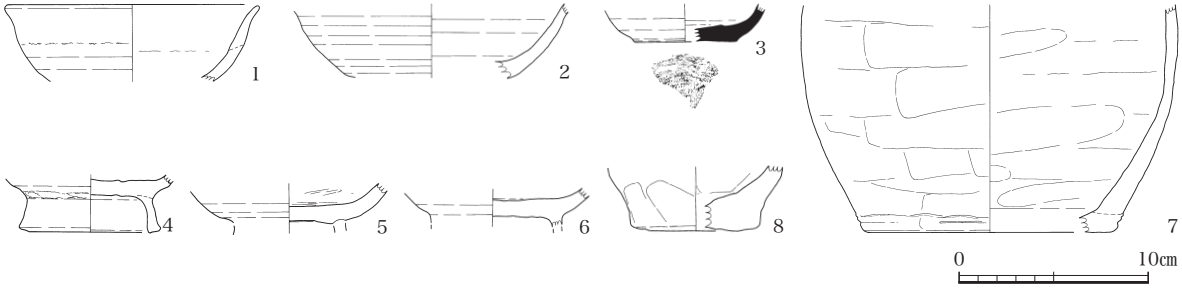
ＳＩ－２１６（第 106・107 図、第 50 表、図版一九）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｋ－ 15、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。北２m に SI-218、東５～６m には SI-60・61・219・220 が隣接する。　**重複**　SI-217 の覆土中に作られた住居跡である。住居跡のほぼ全体で SI-217 を切り、北西隅が SK-1013 に切られる。北壁際で SK-1011・1014、南壁際で SK-1012、P-1015 と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。SK-1013 と覆土などが類似していることからすると、本住居跡を切る遺構の可能性もあろう。中央南寄りには撹乱がある。　**平面形**　削平により東辺～北東隅では壁の立ち上がりが確認できないため、残存する床面の痕跡などから住居跡の範囲を推定した。平面形は南北方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はＮ－６°－Ｅである。ただし、東壁の位置は想定より東側であった可能性はある。　**規模**　東西方向が 2.96m、南北方向が 3.72m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などを含む褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は８～ 11cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。中央部南東寄り床面直上には径 20cm ほどの焼土集中部分があるが、重複する SI-217 覆土中の堆積物かもしれないため、本住居跡に関連するかどうかは確実ではない。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　不明である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかで、住居北部と南東部にまとまる傾向がある。ロクロ成形の土師器



SI-216
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 106 図　和田遺跡　SI-216 実測図



第 107 図　和田遺跡　SI-216 出土遺物実測図

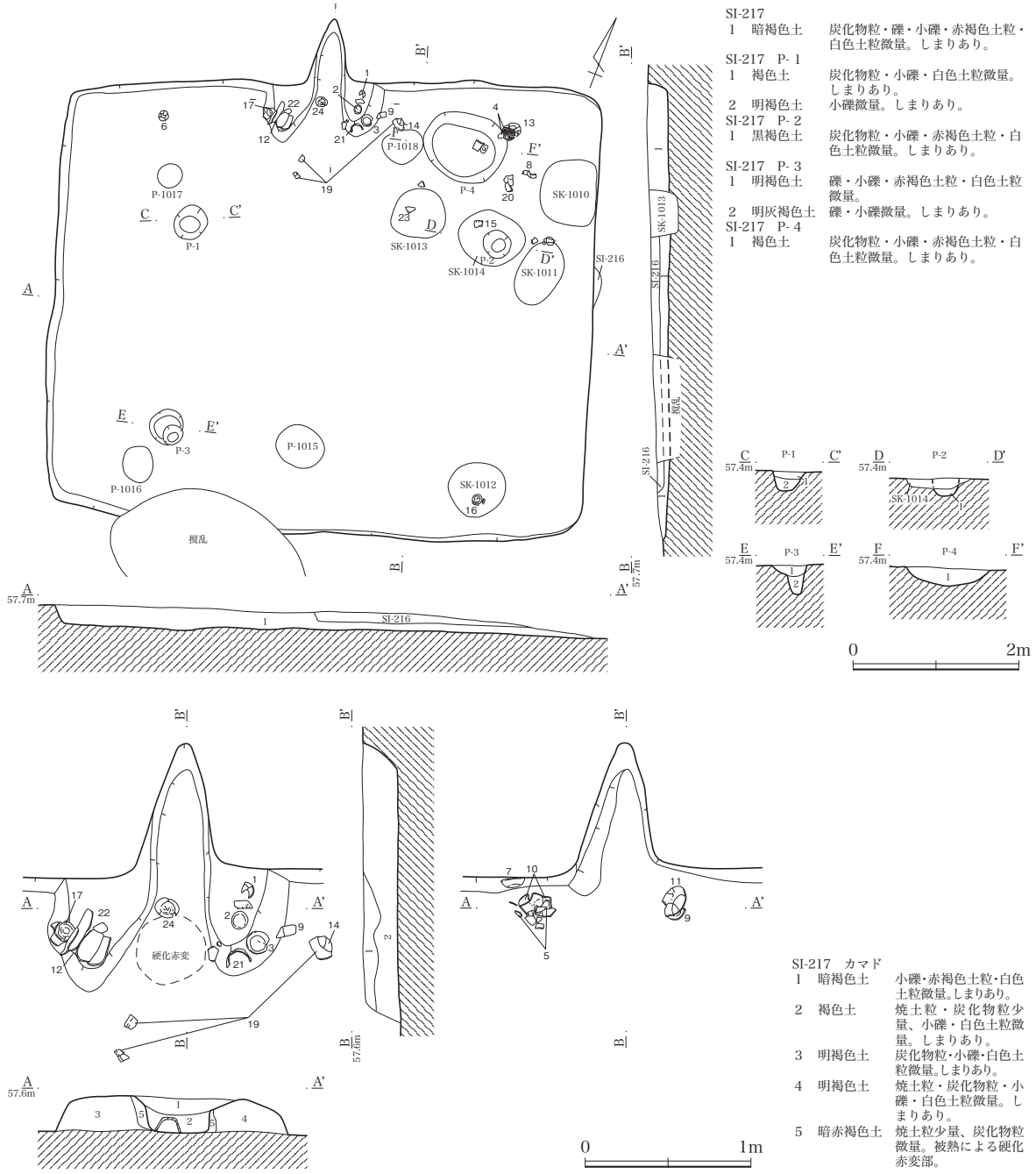
第 50 表　和田遺跡　SI-216 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.4 高　残 4.0	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部上端に紐積痕あり。	5YR6/8　橙 やや粗い　灰褐粗粒少量、赤褐・白細粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 口一部、体一部
2 土師器 坏	高　残 4.0	ロクロ成形。内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。	5YR6/8　橙 やや粗い　白細粒微量、砂細粒多量、砂粗粒微量 硬質	南西部床面上 2 ㎝ 体破片一部 No.10
3 須恵器 坏	高　2.0 底　5.4	内面体部～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。焼成不良で灰褐色を呈する。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	覆土 体下位～底 1/4
4 土師器 高台付坏	高　残 3.0 高台　復 7.4	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ、ロクロ目が強く残る。外面体部ロクロナデ、底部切り離し方法不明。高台貼付け。高台貼付け部分の粘土が肥厚する。高台は断面方形「ハ」の字状に外反する。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐粗粒微量、白細粒少量、砂細粒少量、金雲母細粒微量 硬質	北西隅床面上 7 ㎝ 底完存、高台 1/2 No.3
5 土師器 高台付坏	高　残 2.1	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後密なミガキ、底部は一方向。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しと思われるが表面磨滅のため不明。高台貼り付け。高台基部径 6.0 ㎝。	5YR6/8　橙 やや粗い　白・赤褐細粒微量、灰褐細粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	北西隅床面直上 体 1/4、高台欠損、底完存 No.5
6 土師器 高台付坏	高　残 2.0	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台基部径 7.0 ㎝。	5YR6/8　橙 やや粗い　白・赤褐細粒微量、砂細粒多量 硬質	北部床面上 4 ㎝ 体 1/4、高台一部、底完存 No.2
7 土師器 甕	高　残 12.0 底　復 13.4	内面胴～底部ナデ。ナデは強く施される。外面胴部横方向にケズリ、底部ケズリ。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量、金雲母細粒微量、砂粗粒少量 硬質	北西部床面上 9 ㎝と中央部床面上 12 ㎝が接合 胴下半 1/4、底一部 No.6・8
8 土師器 手捏ね	高　残 3.4 底　復 6.8	表面磨滅著しい。内面胴部下半ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部下半ナデ、底部木葉痕の可能性あるが磨滅のため不明。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐粗粒微量、白細粒微量 やや軟質	南西部床面直上 胴下位～底 1/2 No.12

坏・高台付坏、土師器甕が遺物の主体である。非ロクロ成形の坏はない。土師器坏５は SK-1013 から、坏６は SK-1014 の位置から出土するが、本住居跡からの混入の可能性が高いと考えてここに掲載した。手捏ね土器８は住居南西部の床面直上より出土する。図化しなかった遺物は、土師器片のみ 99 点（1,050 ｇ）で、７世紀代の遺物の混入もわずかにある。本遺構の年代は 10 世紀中葉であろう。

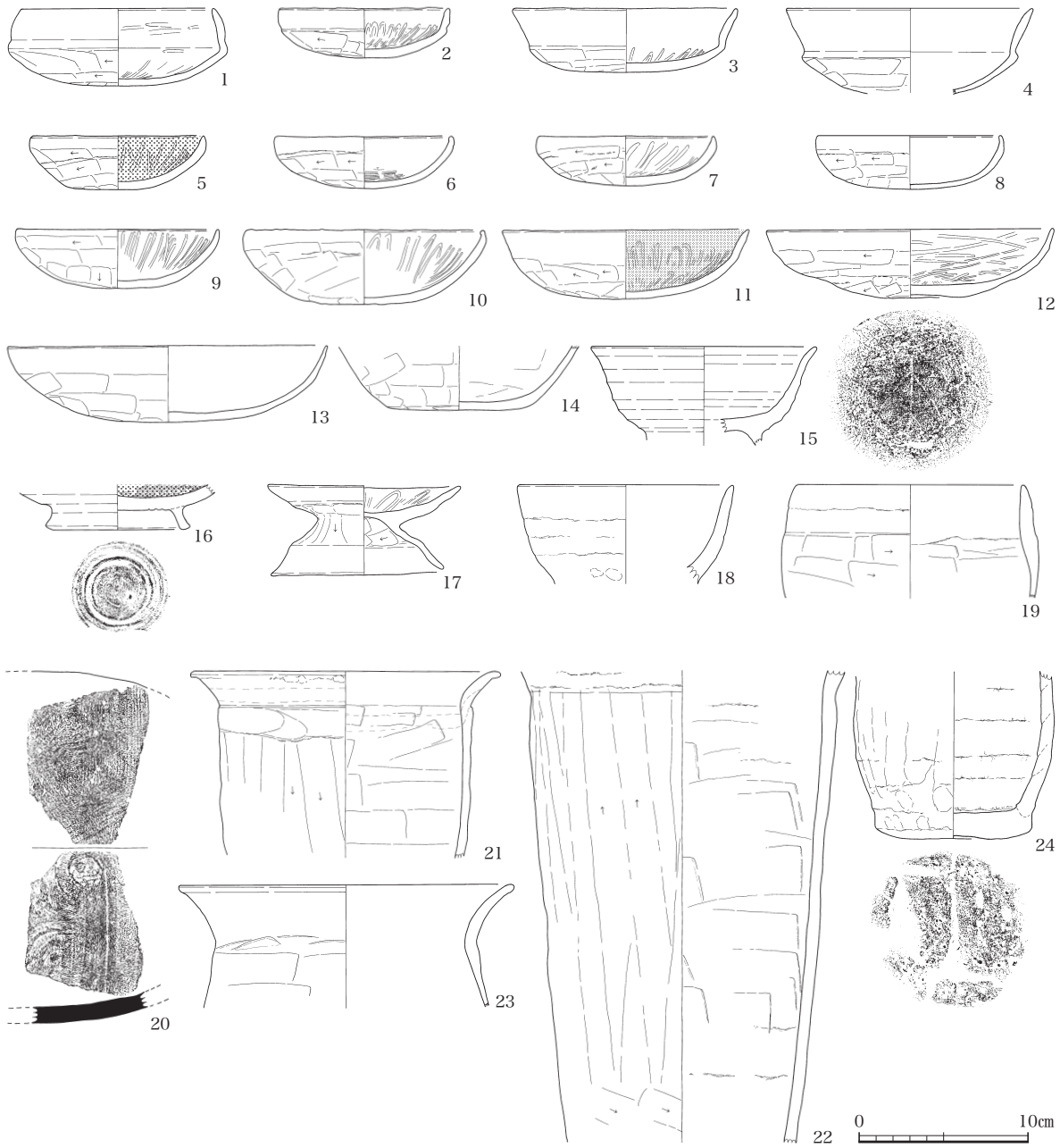
ＳＩ－２１７（第 108・109 図、第 51 表、図版一九・五二）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｋ－ 15・16、Ｌ－ 15・16 グリッドに位置する。北に SI-218・632 が近接



第 108 図　和田遺跡　SI-217 実測図

するほか、東５～６ｍには SI-60・61・219・220 が隣接する。　**重複**　住居跡東部覆土中に SI-216 があり、覆土とともに東壁の一部が SI-216 に切られる。北東部が SK-1013 に切られる。SK-1012・1014 は SI-216 床面で確認されているため、本住居跡を切る遺構と考えられる。SK-1010・1011、P-1015・1016・1017・1018 と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。南辺西寄りと南東部には撹乱がある。　**平面形**　削平により東辺は壁の立ち上がりが確認できないため、残存する床面の痕跡などから住居跡の範囲を推定した。平面形は長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 19°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 6.57m、南北方向が 5.46m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などを含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 22 ～ 24cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、東に向かってわずかに傾斜する。　**堀方・貼床**　なし。



第 109 図　和田遺跡　SI-217 出土遺物実測図

第 51 表　和田遺跡　SI-217 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.4 高　4.5 最大 復 12.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後口縁部横方向、体～底部放射状ミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、口縁部はミガキの可能性あり。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	カマド右袖床面上 14 ㎝ 口～底 1/3 KNo.9
2 土師器 坏	口　10.2 高　2.9 重　90.0	内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデ後放射状のミガキ、漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。丸底。	5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、透明微粒少量 やや硬質	カマド右袖床面上８ ㎝、正立 完形 KNo.7
3 土師器 坏	口　13.4 高　3.8 重　139.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状ミガキ。外面口縁ヨコナデ、稜あり、体～底部ケズリ。丸味を帯びた平底。	7.5YR8/8　黄橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量 やや硬質	カマド右袖床面上２ ㎝ ほぼ完形 KNo.6

4 土師器 坏	口　復 14.6 高　残 5.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、稜あり、体部ケズリ。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	北東床面上 29 ㎝ 口～底 1/6 No.5
5 土師器 坏	口　10.4 高　3.1	内面口縁部～底部ヨコナデ・ナデ、放射状に粗いミガキ。内面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで紐積痕あり。丸底だが底部にケズリにより平坦面ができているため安定が良い。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	カマド左袖床面上 7～８㎝が接合 口 4/5、体～底ほぼ完存 KNo.16・21
6 土師器 坏	口　10.6 高　3.1 重　83.1	内面口縁部～底ヨコナデ・ナデ後底部に平行なミガキ。口縁～体部もミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。器壁薄い。丸底。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	北西部床面上 13 ㎝ ほぼ完形 No.9
7 土師器 坏	口　10.7 高　2.9 重　101.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後斜位の放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで紐積痕あり。丸底。口縁部がやや円湾する。	5YR7/8　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒微量 やや硬質	カマド左袖床面上 8㎝、側位、構築材 ほぼ完形 KNo.20
8 土師器 坏	口　復 11.1 高　3.2	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ、漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで口縁部紐積痕あり。底部に長径 3.5 ㎜の孔あり。混和剤などが抜け落ちた痕跡か。器壁薄い。浅い丸底。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	北東部床面直上 口～底 1/2 No.11
9 土師器 坏	口　12.1 高　3.5 重　119.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。丸底。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマド右袖東側床面上と右袖床面上 2 ㎝が接合、構築材 ほぼ完形 KNo.1・19
10 土師器 坏	口　14.1 高　4.5 最大　14.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状に粗いミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで紐積痕あり。底部が偏平な丸底。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマド左袖床面上 6㎝と 7 ㎝が接合、構築材 口～体 4/5、底完存 KNo.22・23
11 土師器 坏	口　14.6 高　4.1 重　170.3	内面口縁～底部ヨコナデ･ナデ後放射状にミガキ、全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデで稜あり。体～底部ケズリ。丸底。口縁部を中心に被熱しており口縁部内面は表面剝離、外面は赤変している。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	カマド右袖床面上 3㎝、横位、構築材 ほぼ完形 KNo.18
12 土師器 坏	口　復 17.0 高　4.0 底　4.8	内面口縁～底部ナデ・ヨコナデ、口縁～体部横方向、底部一方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで下半ややくぼむ部分にはケズリが及ばないため指頭圧痕や紐積痕残る。底部はやや上げ底、中央に木葉痕。外面口縁部～底部被熱により一部赤変。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒多量 やや硬質	カマド左袖床面上 4㎝、22（K № 12）の下に重なる。構築材 口～体 1/4、底完存 KNo.15
13 土師器 坏	口　19.0 高　4.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデミガキの可能性あるが表面剝離のため不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁薄い。丸底。大型。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	北東隅床面上 4 ㎝、4 の上に重なる 口～体 3/4、底完存 No.6
14 土師器 坏	高　残 3.8 底　8.5	内面体～底部ナデ。外面体～底部ケズリ。平底。被熱により体～底部外面 1/3 が赤変している。	5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマド右袖東側床面直上 体 1/3、底完存 KNo.2
15 土師器 高台付坏	口　復 13.4 高　残 5.8	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部切り離し不明。高台貼り付け。	7.5YR4/3　褐 やや緻密　白細粒多量、黒褐細粒多量、金雲母粗粒微量 やや硬質	北東部床面上 29 ㎝ 口～底 1/4、高台一部 No.3
16 土師器 高台付坏	高　残 2.7 高台　8.6	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後底部一方向にミガキ、黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。やや高め。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　灰褐粗～細粒多量、白細粒多量、金雲母細粒少量 やや硬質	南東部床面上 11 ㎝ 体一部、高台～底 5/6 No.1
17 土師器 高坏	口　11.4 高　5.3 脚　10.2 重　169.5	内面坏部口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状に粗いミガキ。漆仕上げの可能性あり。脚部上半ケズリ、下半ヨコナデ。外面坏部口縁ヨコナデ、体～脚部上半縦方向にケズリ後軽いナデ脚部下半ヨコナデ。全体的に薄く大きくひずむ。脚部は全面接地せず一部が浮く。坏部は浅い皿状で稜をもち大きく外反する。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマド左袖床面上 10 ㎝、構築材か ほぼ完形 K・KNo.13

18 土師器 鉢	口　復 12.8 高　残 5.8	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため不明。外面口縁ヨコナデ、体部軽いナデで紐積痕を明瞭に残す。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒少量、白細粒少量 やや軟質	覆土 口～体一部
19 土師器 鉢	口　復 13.4 高　残 6.7 最大 復 15.2	内面口縁ヨコナデ、体部上半ナデでヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部上端に稜あり、ケズリ。口縁がほぼ垂直に立ち上がる。胴部最大径。胴部外面は被熱により赤変する。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量、透明細粒少量 やや硬質	カマド前面、床面直上と床面上 10 ㎝・22 ㎝が接合 口～体上半 1/6 P-5・KNo.2・3・4
20 須恵器 横瓶	高　残 11.0	内面体部ロクロナデ後同心円当具痕。外面体部擬格子叩き後カキ目。	10Y5/1　灰 緻密　白細粒多量 硬質	北東部床面直上 体破片 No.4
21 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 11.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向にケズリ後上端を横方向にナデ。長胴。口縁～胴部上端の一部にやや緻密な白っぽい粘土を使用しているため内外面の巾 1 ㎝ほどが帯状に白く見える。	5YR5/6　明赤褐 粗い　灰黒粗粒多量、白粗～細粒多量、砂礫少量 硬質	カマド右袖床面上 4 ㎝ 口 1/2、胴上半 1/2 KNo.10
22 土師器 甕	高　残 28.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕・紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ、下端は斜方向横方向にケズリ。口縁～胴部紐積痕を明瞭に残す。長胴。	10YR5/6　黄褐 粗い　灰黒礫～細粒多量、白礫～細粒少量 硬質	カマド左袖床面上 3 ㎝、構築材 胴完存 KNo.12
23 土師器 甕	口　復 19.8 高　残 7.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端は横方向ケズリ､口縁下端に工具の当たりあり。「ハ」の字状口縁。武蔵型。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量、雲母微量 やや硬質	中央部床面上 4 ㎝ 口～胴上端一部 No.7
24 土製品 筒形	高　残 10.0 底　復 9.2	内面体～底部ナデで紐積痕を明瞭に残す。外面体部ナデで指頭圧痕残る。底部ナデ、中央に木葉痕あり棒状の圧痕残る。	7.5YR7/6　橙 粗い　灰褐礫～粗粒多量、白礫～粗粒少量 やや硬質	カマド中央部火床面直上､支脚として使用 体 1/3、底ほぼ完存 K・KNo.11

柱穴　主柱穴と推定されるものが３本（P- １・P- ２・P- ３）ある。P- １は径 42 × 37cm、深さ 24cm、P- ３は径 43 × 42cm、深さ 35cm である。P- ２は上面が SK-1014 に切られており、SK-1014 底面での規模は径 44 × 32cm、深さ８cm、床面からの深さは 22cm である。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 3.74m、P- ３－ P- １間が 2.59m である。P- ３は P- １・２よりもやや深く掘り込まれる。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部は失われているが、袖部は比較的良好に残存する。規模は 141 × 151cm で、煙道部は壁を「V」字状に掘り込んで作られる。袖部は炭化物や焼土などを含む明褐色土（第３・第４層）で構築されており、構築時の状態を良好に残すカマド内側の垂直面は被熱による硬化赤変が顕著である（第５層)。左袖部で横転する甕や重ねられた坏類、右袖部では甕や坏、先端付近には倒立状態の甕があるなど袖部からは多数の遺物が出土するが、これら遺物の多くもカマド構築材と考えられる。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、被熱により径 40cm ほどの範囲が硬化赤変している。硬化赤変範囲の奥側、カマド中心からやや左の位置には、支脚とみられる筒形土製品 24 がある。火床面直上の状態であり、上面は 10cm ほどの高さがある。火床面から煙道へは段差なく続いており、煙道先端は丸みを持って外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土（第１層）と褐色土（第２層）で、焼土や炭化物を含む第２層は天井内面の崩落とみられる。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- ４)。平面形は楕円形で、規模は 102 × 84cm、床面からの深さは 21cm である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は炭化物などをわずかに含む褐色土（第１層）である。

遺物　遺物は多く、住居北部のカマド周辺部と貯蔵穴周辺に集中する。カマドの中央部の火床面直上からは筒形土製品 24 が出土する。右袖部からは土師器坏２・９・11 と倒立した長胴甕 21 が、左袖内部からは土師器坏５・７・10・12 と高坏 17、横位の長胴甕 22 が出土しており、大部分がカマドの構築材として使用されたものと考えられる。カマド東側の土師器坏 14 と住居東北部の横瓶 20 は床面直上からの出土である。土師器坏２・３・６・７・９・11 と高坏 17 は完形もしくはほぼ完形である。なお、土師器高台付坏 15 は SK-1014 から、16 は SK-1012 から、土師器甕 23 は SK-1013 より出土しており、各土坑の遺物の可能性が

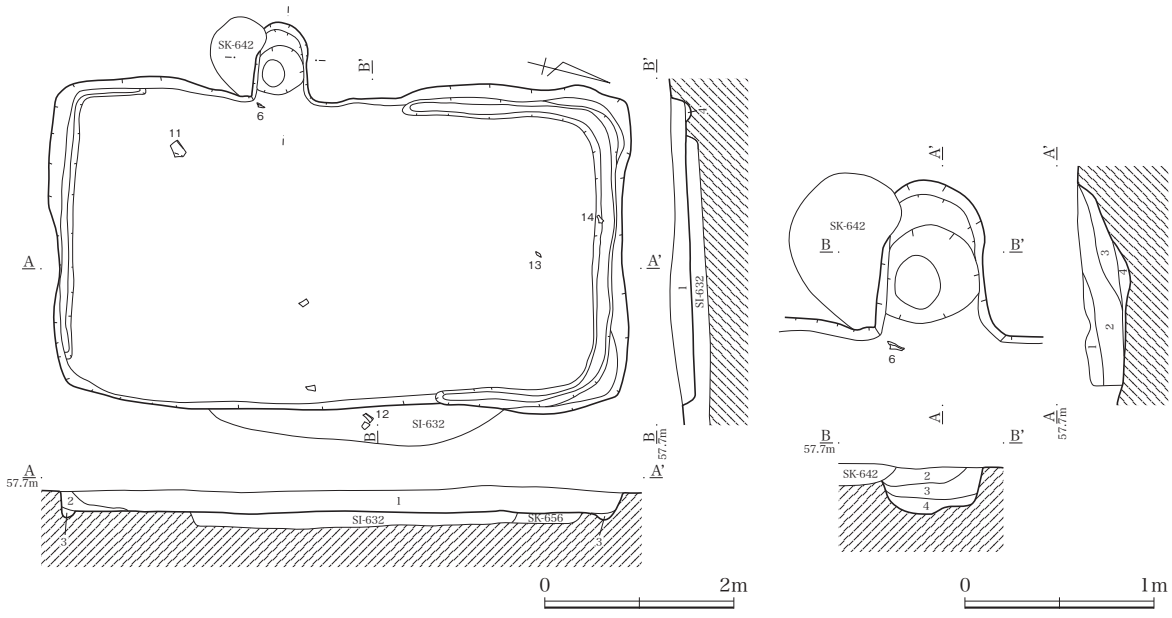
ある。遺物は坏・甕を主体とする土師器のみで、坏の法量は大中小がある。甕は長胴主体である。図化しなかった遺物は土師器片のみ 671 点（5,755 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

ＳＩ－２１８（第 110・111 図、第 52 表、図版一九・五二）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15・16 グリッドに位置する。南に SI-216・217 が近接してあるほか、東４ｍには SI-219 が隣接する。　**重複**　住居跡中央部で SI-632 を、東部で SK-656 を切り、SK-642 にカマド南側が浅く切られる。　**平面形**　平面形は南北方向に長い長方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 76°－Ｅである。　**規模**　南北方向が 5.97m、東西方向が 3.25m である。　**覆土の状態**　覆土は４層で、第３・第４層は壁溝覆土である。第１層は炭化物をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は 15 ～ 24cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、東に向かってわずかに傾斜する。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。

壁溝　東半と西壁際に認められる。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は９～ 30cm、深さは床面から４～９cm、覆土は灰褐色粘土などを含む褐色土（第３層）と暗褐色土（第４層）である。　**火処**　カマドが西壁際南寄りにある。天井部、袖部とも失われているほか、カマド左側が SK-656 に切られるなど残存状態は良くない。煙道部は壁を約 80cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、土坑状に丸みを持って窪む煙道底面へとなだらかに続く。火床面との比高は約５cm である。煙道先端は緩やかに立ち上がっており、先端付近でやや角度を急に変えて確認面に至る。被熱の痕跡は明瞭で、先端部を除く煙道内面上半が硬化赤変している。覆土は４層で、焼土を多く含む第２・第３層は天井部内面の崩落と考えられる。

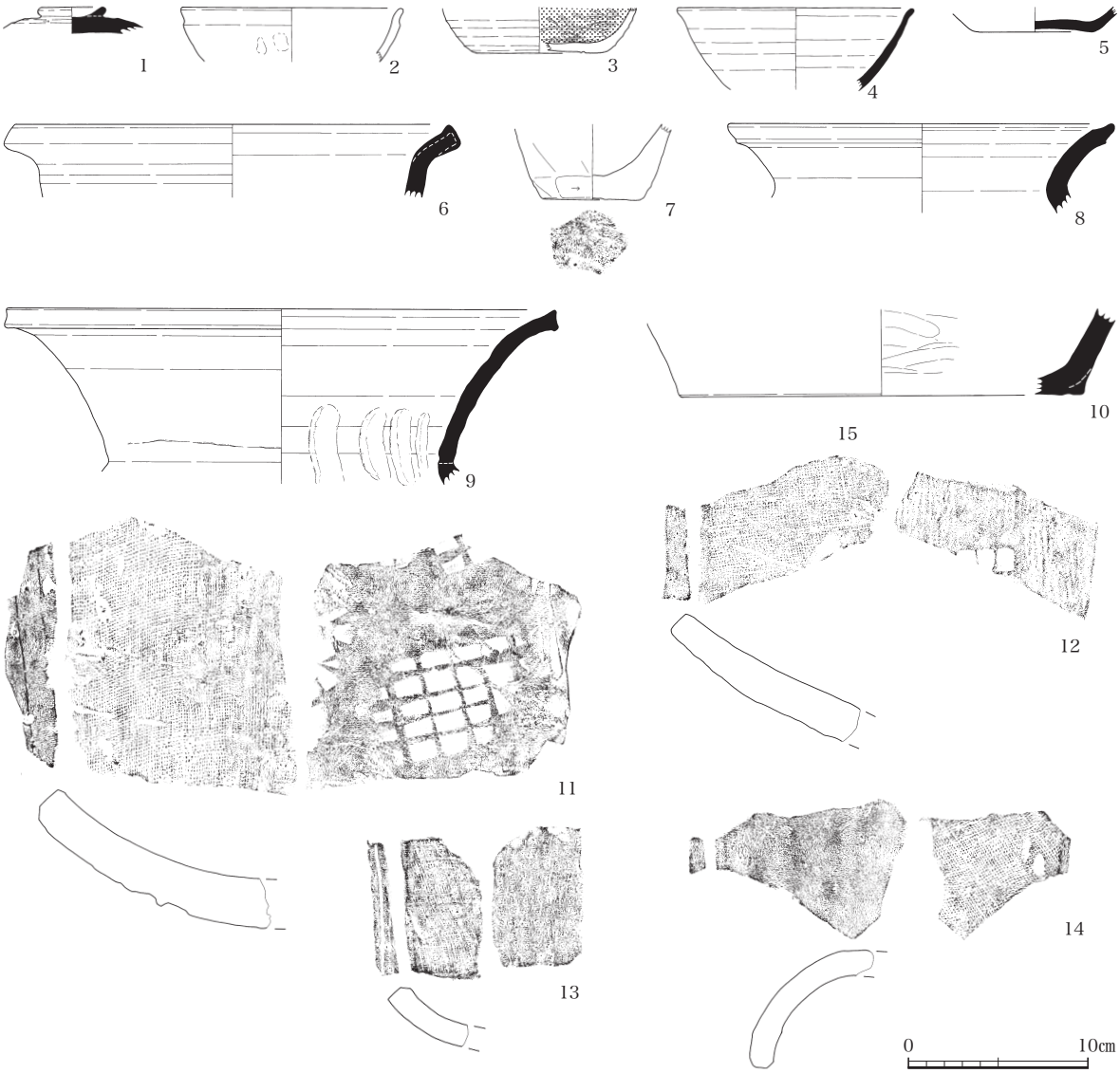
貯蔵穴　なし。　**遺物**　出土遺物は少なく、住居周縁部に分散している。須恵器が多く、蓋１、坏４・５、鉢６、甕８～ 10 を図化した。土師器では、坏は非ロクロ及びロクロ成形の坏、甕は武蔵型と球胴気味のものなどがある。瓦は平瓦（11 ～ 13）と丸瓦（14）があり、住居周縁部の床面よりやや浮いた位置で出土している。図化しなかった遺物は土師器片 174 点（1,170 ｇ）、須恵器片 19 点（470 ｇ）である。本遺構の年代



SI-218
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　灰褐色粘土粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗褐色土　灰褐色粘土粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

SI-218　カマド
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土粒多量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫微量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 110 図　和田遺跡　SI-218 実測図



第 111 図　和田遺跡　SI-218 出土遺物実測図

第 52 表　和田遺跡　SI-218 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.5 つまみ 復3.8	内面天井部ロクロナデ。外面天井部ケズリ、つまみ貼付け。リング状のつまみ。白色胎土。	10Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、灰粗粒微量 やや硬質	覆土 つまみ～天井 1/2
2 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで指頭圧痕残る。器壁薄い。武蔵型に似た胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白細粒少量、金雲母細粒微量、黒粗粒少量、透明細粒微量 硬質	覆土 口～体一部
3 土師器 坏	高　残 2.6 底　復 7.2	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後緻密なミガキ。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部ケズリ切り離し方法不明。	5YR7/8　橙 緻密　白細粒少量、黒・透明細粒微量 やや硬質	覆土 体下半～底 1/4
4 須恵器 坏	口　復 13.2 高　残 4.6	内面口縁～体部ロクロナデ後体部ナデ。外面口縁～体部ロクロナデ後体部ナデ。口唇部は短く外反する。ロクロナデ後のナデは歪みを修正するためのものか。	N5/0　灰 緻密　白細粒微量、灰粗～礫微量 硬質	覆土 口～体破片

5 須恵器 坏	高　1.3 底　復 6.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色胎土。被熱のため一部赤変する。底部は上げ底。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白・灰褐細粒微量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/4
6 須恵器 鉢	口　復 24.4 高　残 4.0	内面口縁～胴部ロクロナデ。外面口縁～胴部ロクロナデ。口唇部が垂直に立つ。	N8/0　灰白 緻密　白・灰褐細粒微量 やや軟質	カマド前面火床面直上８㎝ 口～胴上端破片 KNo.1
7 土師器 甕	高　残 4.2 底　復 5.8	内面胴～底部ナデ。外面胴部ケズリ、底部木葉痕後一部ケズリ。	7.5YR8/6　浅黄橙 粗い　砂礫少量、赤褐・白細粒微量 硬質	覆土 胴下端～底 1/3
8 須恵器 甕	口　復 21.5 高　残 4.9	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。大きく外反する口縁。	5B5/1　青灰 やや緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口 1/6
9 須恵器 甕	口　復 30.8 高　残 9.7	内面口縁ロクロナデ、白色・灰色の自然釉付着。粘土の継ぎ目で割れる。下半には絞ったことによる粘土のシワがある。外面口縁ロクロナデ、灰緑色の自然釉付着。	N7/0　灰白 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 口破片 一括
10 須恵器 甕	高　残 4.8 底　復 22.6	内面胴部ロクロナデ後ナデ、底部ナデ。外面胴部ロクロナデ、底部ナデ、棒状物質の圧痕あり。	N7/0　灰白 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 底破片
11 瓦 平瓦	長　14.7 幅　12.8 厚　2.8 重　残847.8	凹面布目痕後側縁ヘラケズリ、部分的に軽いナデ。凸面ナデ後格子叩き、側縁ヘラケズリ。側面ケズリ、狭端面ケズリ。	N8/0　灰白 緻密　白礫微量、灰褐粗粒少量 硬質	南西部床面上 10 ㎝ 破片 No.7
12 瓦 平瓦	長　5.3 幅　10.6 厚　2.0 重　残181.3	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面縄目叩き後格子叩き、側縁ケズリ。側面ケズリ。白色胎土。表面磨滅が著しい。	N8/0　灰白 緻密　灰褐粗粒少量 やや軟質	東部床面上３㎝ 破片 No.4
13 瓦 平瓦	長　7.6 幅　4.4 厚　1.2 重　残 73.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ。側面ケズリ。薄手。表面磨滅著しい。	2.5GY8/1　灰白 緻密　灰褐・白細粒微量 やや軟質	北部床面上２㎝ 破片 No.2
14 瓦 丸瓦	長　6.7 幅　6.9 厚　1.3 重　残122.0	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ側縁ケズリ。側面ケズリ。	7.5YR8/1　灰白 緻密　灰褐・赤褐・白細粒微量 やや軟質	北壁際床面上 17 ㎝ 破片 No.1

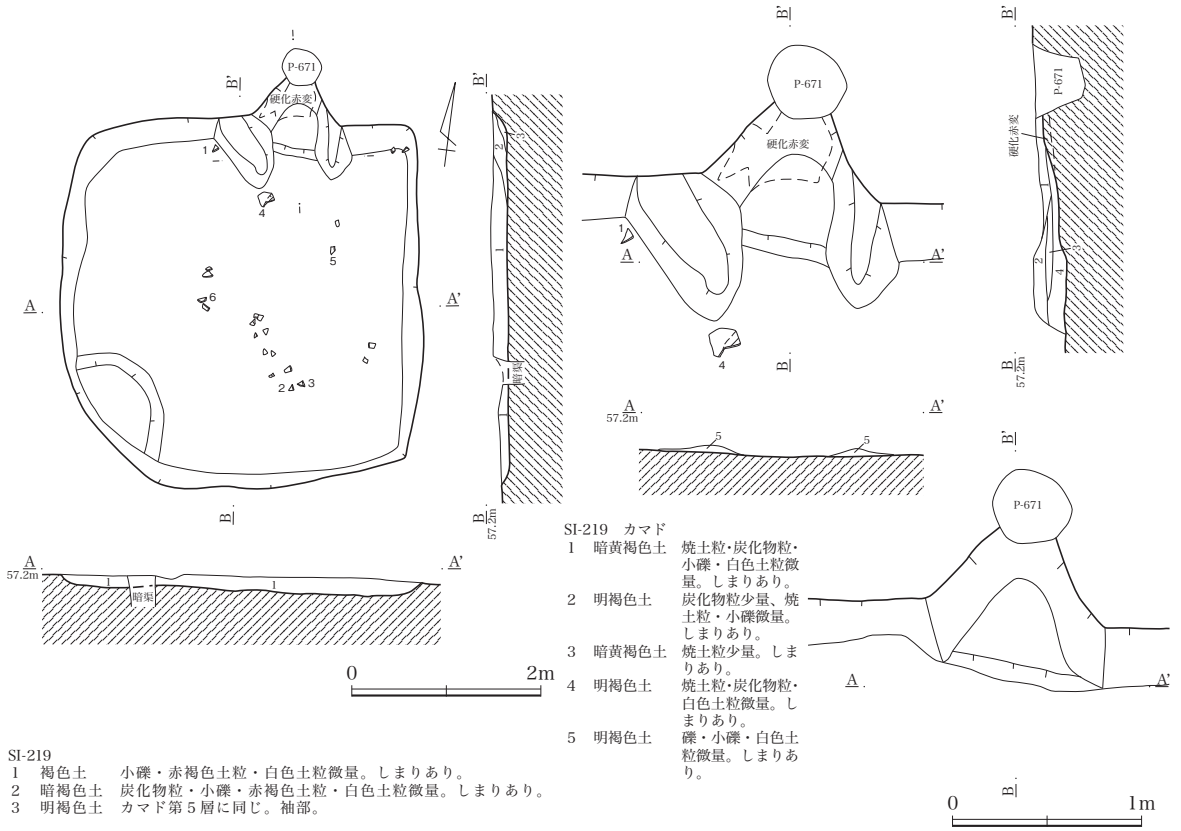
は９世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－２１９（第 112・113 図、第 53 表、図版一九・二〇）

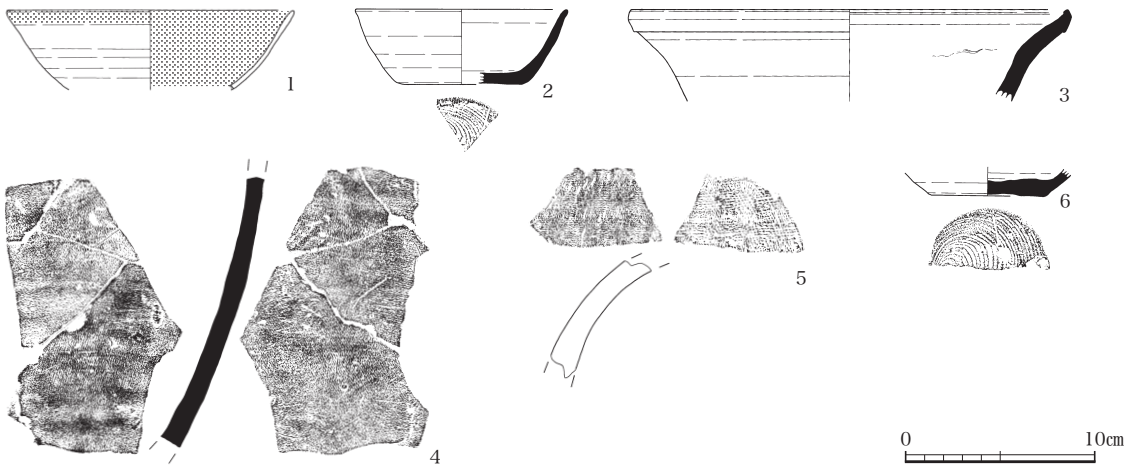
位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。東に SK-445a、P-444・445b・446・447・448・684 が近接してあるほか、南東２ｍに SI-220、西４ｍには SI-216・217・218・632 がそれぞれ隣接する。

重複　P-671 にカマド煙道先端が切られる。西壁中央から南東隅に向かっては幅 20cm ほどの暗渠があり、これによって溝状に撹乱されている。　**平面形**　方形で、南西隅は丸みを持つ。南北方向の中軸線はＮ－９°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.81m、南北方向が 3.91m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）である。第２層はカマド周辺にのみ存在する暗褐色土、第３層はカマド袖部である。　**壁**　残存壁高は７～ 15cm であり、壁は大きく外傾して丸みを持って立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、南西部には床面より約５cm 高い段がある。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。

火処　カマドが西壁際南寄りにある。天井部が失われているほか、カマド煙道先端が P-671 に切られるなど残存状態は良くない。規模は 115 × 153cm である。煙道部は壁を「Ｕ」字状に掘り込んで作られており、袖部は明褐色土（第５層）で構築される。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、比高４cm の段を経て平坦な煙道へと続き、緩やかに高くなったあと先端付近で再度平坦となる。煙道の被熱の痕跡は明瞭で、先端に近い平坦面とその周囲の側面までが硬化赤変している。覆土は４層で、焼土を比較的多く含む第３層は天



第 112 図　和田遺跡　SI-219 実測図



第 113 図　和田遺跡　SI-219 出土遺物実測図

第 53 表　和田遺跡　SI-219 出土遺物観察表

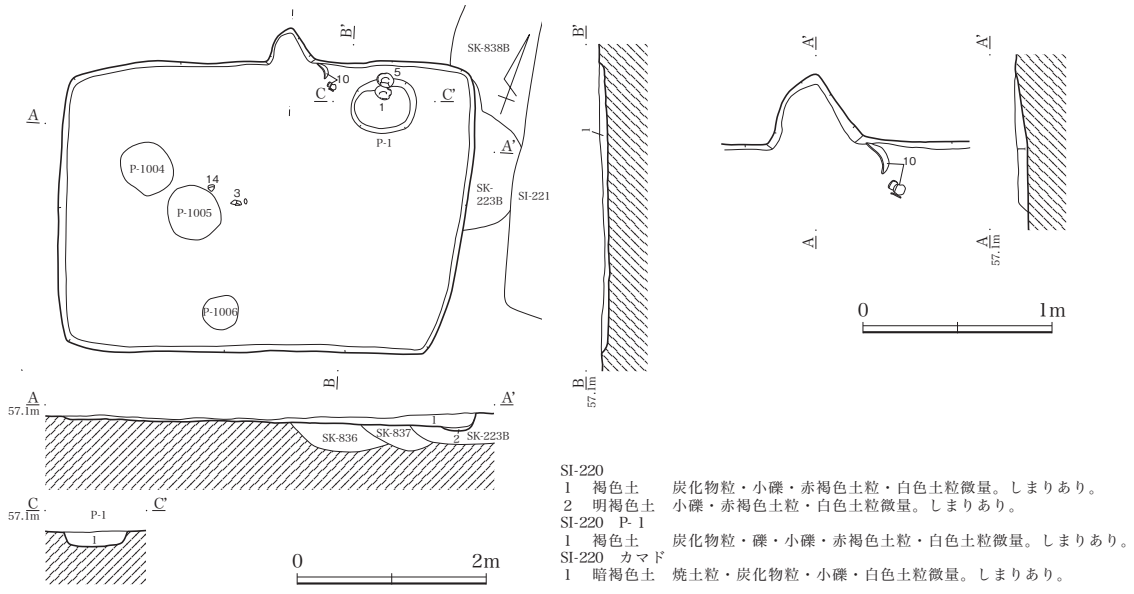
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 15.2 高　残 4.2	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～内面全体黒色処理。器壁きわめて薄い。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白礫微量 やや硬質	カマド左袖の西側床面上７cm 口～体破片 KNo.2
2 須恵器 坏	口　復 11.2 高　3.9 底　復 6.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。わずかに上げ底となる。	N7/0　灰白 緻密　白細粒少量、黒灰粗粒少量 硬質	中央南部床面上２cm 口～底 1/6 No.4

3 須恵器 甕	口　復 23.4 高　残 4.8	内面口縁部ロクロナデ。外面口縁部ロクロナデ。口唇部は短く立ち上がる。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、白細粒微量 硬質	南東部床面上 4 ㎝ 口破片 No.3
4 須恵器 甕	高　残 14.1	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ後浅い平行叩き。粘土の接合部分で割れる。	10YR7/2　にぶい黄橙 緻密　白・灰礫微量、白細粒少量 やや軟質	カマド左袖南側床面直上 胴破片 KNo.1
5 瓦 丸瓦	長　残 4.7 幅　残 5.3 厚　1.5 重　残 51.3	凹面布目痕。凸面ナデ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　白・灰礫微量、白細粒微量 やや軟質	中央部床面上 2 ㎝ 破片 No.17
6 須恵器 坏	高　残 1.4 底　復 6.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。わずかに上げ底。白色胎土。混入。	5Y7/1　灰白 緻密　白・黒礫微量、黒微粒少量 やや軟質	中央部床面上 2 ㎝ 体下端～底 1/2 No.14

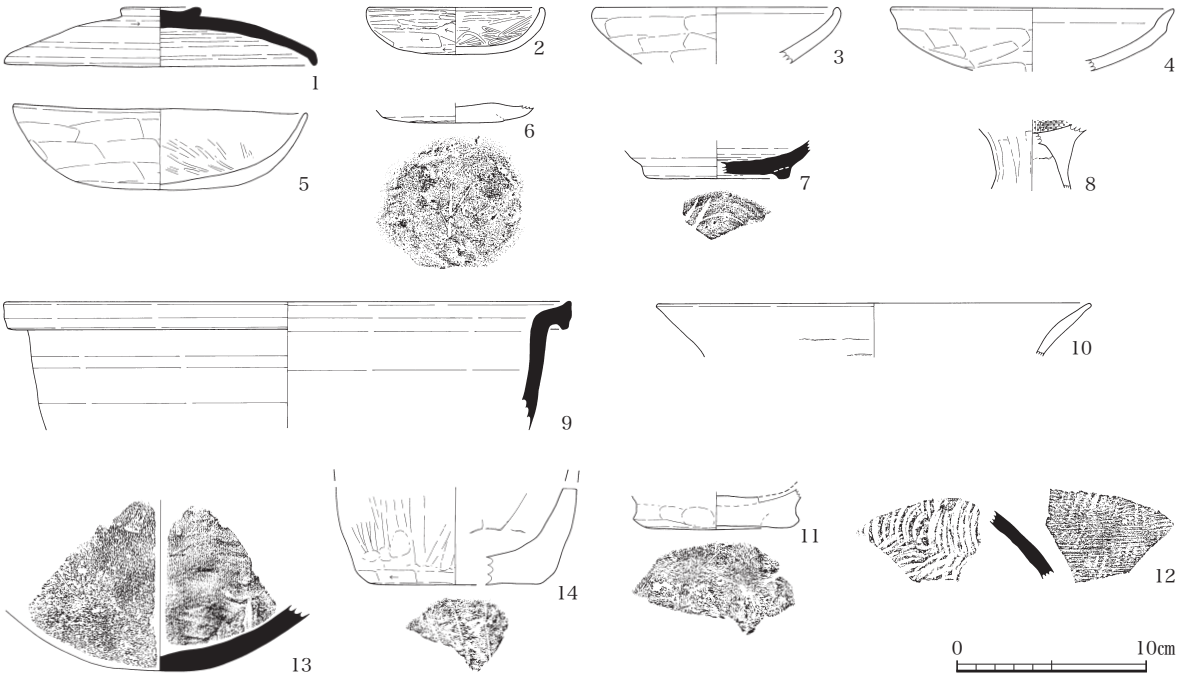
井部内面の崩落と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はわずかである。比較的遺物が集中する住居の中央部からは、床面近くより出土する須恵器坏２・６、甕３を図化した。６は新しい遺物の混入だろう。カマド周辺では須恵器甕４が床面直上から、ロクロ成形で黒色処理が施された土師器坏１は床面より浮いた状態で出土している。図化しなかった遺物は土師器片９点（80 ｇ）、須恵器片９点（500 ｇ）であり、土師器では武蔵型甕片、半球状で白色体土の坏片などが含まれる。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－２２０（第 114・115 図、第 54 表、図版二〇・五二）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14・15 グリッドに位置する。南に SI-61、東に SI-221 が近接し、北西２ｍには SI-219 が隣接する。　**重複**　SK-223B・836・837・838B を切る。西部で P-1004・1005・1006 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 20°－Ｗである。**規模**　東西方向が 4.35m、南北方向が 3.09m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、第１層は炭化物をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は５～９cm であり、壁はやや外傾して短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央東寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を「Ｕ」字状に掘り込んで作られている。火床面



第 114 図　和田遺跡　SI-220 実測図



第 115 図　和田遺跡　SI-220 出土遺物実測図

第 54 表　和田遺跡　SI-220 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　16.6 高　3.1 つまみ　4.3 重　248.2	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部ケズリ。つまみ貼付け。つまみはボタン状で中央部が突出する。内面口縁部周辺から外面全体が重ね焼のためか黒色を呈する。	5Y7/1　灰白 やや粗い　青灰粗粒多量、白粗～細粒少量、黒粗～細粒多量 やや硬質	貯蔵穴（P-1）北部 床面上 6 cm、逆位 ほぼ完形 No.4
2 土師器 坏	口　復 9.4 高　残 2.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後全面を多方向にミガキ。外面口縁ヨコナデ後ヨコ方向のミガキ、体～底部ケズリ。器壁薄く丸底。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、透明細粒少量 硬質	P-1004 口～底 1/4 P-2
3 土師器 坏	口　復 13.2 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白細粒多量、赤褐粗粒少量、透明細粒少量 硬質	中央部床面上 3 cm 口～体 1/4 No.2
4 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 3.3	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデで稜あり、体～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 口～体 1/5
5 土師器 坏	口　15.6 高　4.3 底　8.9	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後ミガキ。表面磨滅のため調整は不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、底部ケズリ後ナデ。丸味を帯びた平底。内面底部中央が小さくくぼむ。	5Y8/1　灰白 やや粗い　赤褐礫～粗粒多量、青灰細粒多量、白細粒少量 やや軟質	貯蔵穴（P-1）北部床 面上 14 cm、正立 口～底 3/4 No.3
6 土師器 坏	高　残 1.0 底　復 7.6	内面底部ナデ。外面体部ナデ、底部ナデで紐積痕あり。中央に木葉痕あり。底部は丸味を持つ。	5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白細粒多量、赤褐礫～粗粒多量 やや硬質	覆土 底ほぼ完存
7 須恵器 高台付坏	高　残 2.0 高台　復 7.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離しの可能性あり。高台貼り付け。高台は断面方形でほぼ垂直に立つ。白色胎土。	7.5YR8/1　灰白 緻密　白粗粒微量 やや軟質	覆土 底～高台 1/4
8 土師器 高坏	高　残 3.4	内面坏底部ナデ後多方向に粗いミガキ。内面黒色処理。脚部ナデで紐積痕あり。外面脚部縦方向にケズリ後ナデ。	5YR6/6　橙 緻密　白細粒少量、細砂粒微量 硬質	覆土 底～脚上半 1/2

9 須恵器 甕	口　復 30.0 高　残 6.7	内面口縁～胴部ロクロナデ。外面口縁～胴部ロクロナデ。口縁は大きく外反し、口唇部上端が垂直に短く立ち上がる。	N6/0　灰 緻密　白粗～細粒少量 硬質	SI-221 と接合 口～胴上半破片 SI-221、覆土
10 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 2.8	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。下端部に工具のあたりあり。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　白粗～細粒多量、灰褐細粒多量 硬質	カマド南東部火床面上５㎝。横位 口 1/2 KNo.1・2
11 土師器 甕	高　残 2.2 底　復 8.8	内面底部ナデ、表面の大部分が剝離する。外面胴部下端ナデで指頭圧痕あり。底部ナデで木葉痕あり。わずかに上げ底。被熱のため破片全体が赤変する。	2.5Y5/1　黄灰 やや粗い　赤褐礫多量、白礫微量 やや硬質	覆土 底 1/2
12 須恵器 甕	高　残 3.5	内面同心円当具痕。外面平行叩き後カキ目。	N7/0　灰白 緻密　青灰細～微粒多量、白微粒少量 やや軟質	覆土 胴破片
13 須恵器 甕	高　残 3.5	内面胴部同心円当具痕、底部ナデ。外面胴部下端～底部ナデ。	5YR5/2　灰褐 緻密　白粗～細粒多量 硬質	覆土 胴下半～底破片
14 土製品 筒形	高　残 5.1 底　復 9.0	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部下半ナデで棒状工具によると見られる細いナデあり。底部木葉痕残る。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐礫多量、黒・白粗粒少量 硬質	中央部床面上５㎝ 胴下位～底 1/4 No.1

は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、わずかに傾斜がつけられた煙道へ続いたあと、先端で角度を増し短く外傾して立ち上がる。被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は焼土や炭化物をわずかに含む第１層である。カマド右側からは土師器甕などが出土するが、これらは袖部構築材の可能性もあるだろう。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- １）。平面形は隅丸方形で、規模は 70 × 59cm、床面からの深さは 15cm である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。覆土は炭化物などをわずかに含む褐色土（第１層）である。

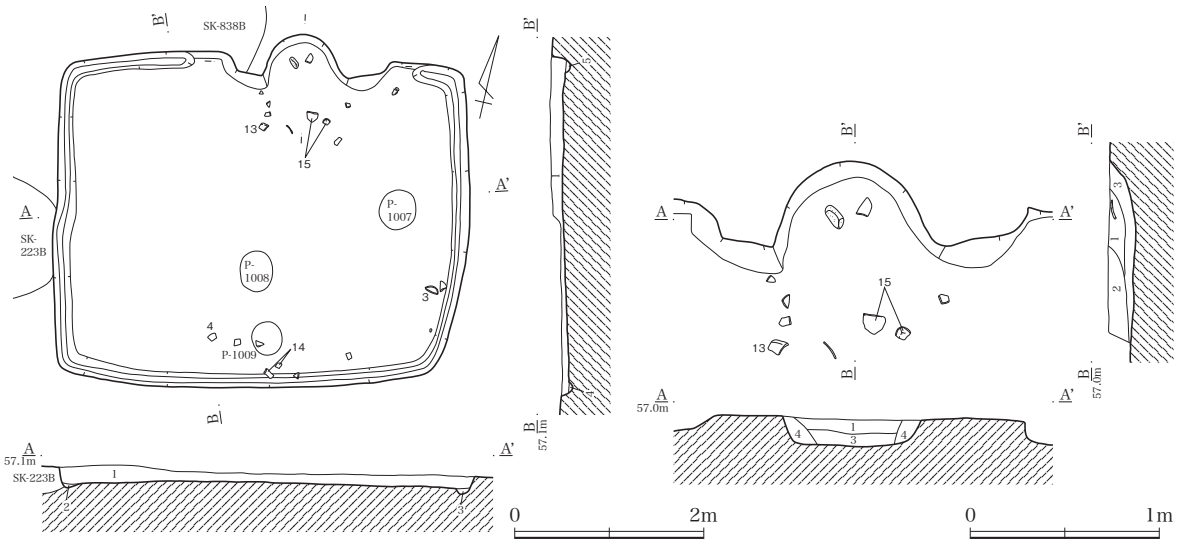
遺物　遺物は少なく、住居跡中央部とカマド右袖付近及び貯蔵穴周辺にまとまる。貯蔵穴北側では須恵器蓋１と土師器坏５が重なって出土した。また、カマドの右袖付近より横位の状態で出土する甕 10 はカマド袖部の構築材と考えられる。住居跡中央部では、床面よりやや浮いた位置で土師器坏３と筒形土製品 14 が出土する。須恵器甕９は、隣接する SI-221 出土の破片との接合が確認されている。図化しなかった遺物は、甕主体の土師器片 405 点（3,870 ｇ）、須恵器片４点（50 ｇ）である。土師器坏は半球状のもの主体、土師器甕は長胴と球胴の破片が多く、武蔵型は少ない。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－２２１（第 116・117 図、第 55 表、図版二〇・五二）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。西に SI-220、北に SK-222 が近接してあるほか、南に２m には SI-62 が隣接する。　**重複**　SK-223B・838B を切る。P-1007・1008・1009 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 15°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.41m、南北方向が 3.56m である。　**覆土の状態**　覆土は５層で、第１層は炭化物をわずかに含む。　**壁**　残存壁高は７～ 18cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。

柱穴　なし。　**壁溝**　北壁際にあるカマド部分を除き壁際を全周する。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は 13 ～ 22cm、深さは床面から４～６cm、覆土は第２～第５層である。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部が失われているが、地山を掘り残すことで作り出した袖部は残存する。規模は 60 × 183cm である。煙道部は壁を「Ｕ」字状に掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、煙道へは平坦に続いたあと緩やかに高くなり、先端では角度を増して外傾して立ち上がっている。被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は４層で、第１・第２層は天井部や袖部構築材の崩落と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。

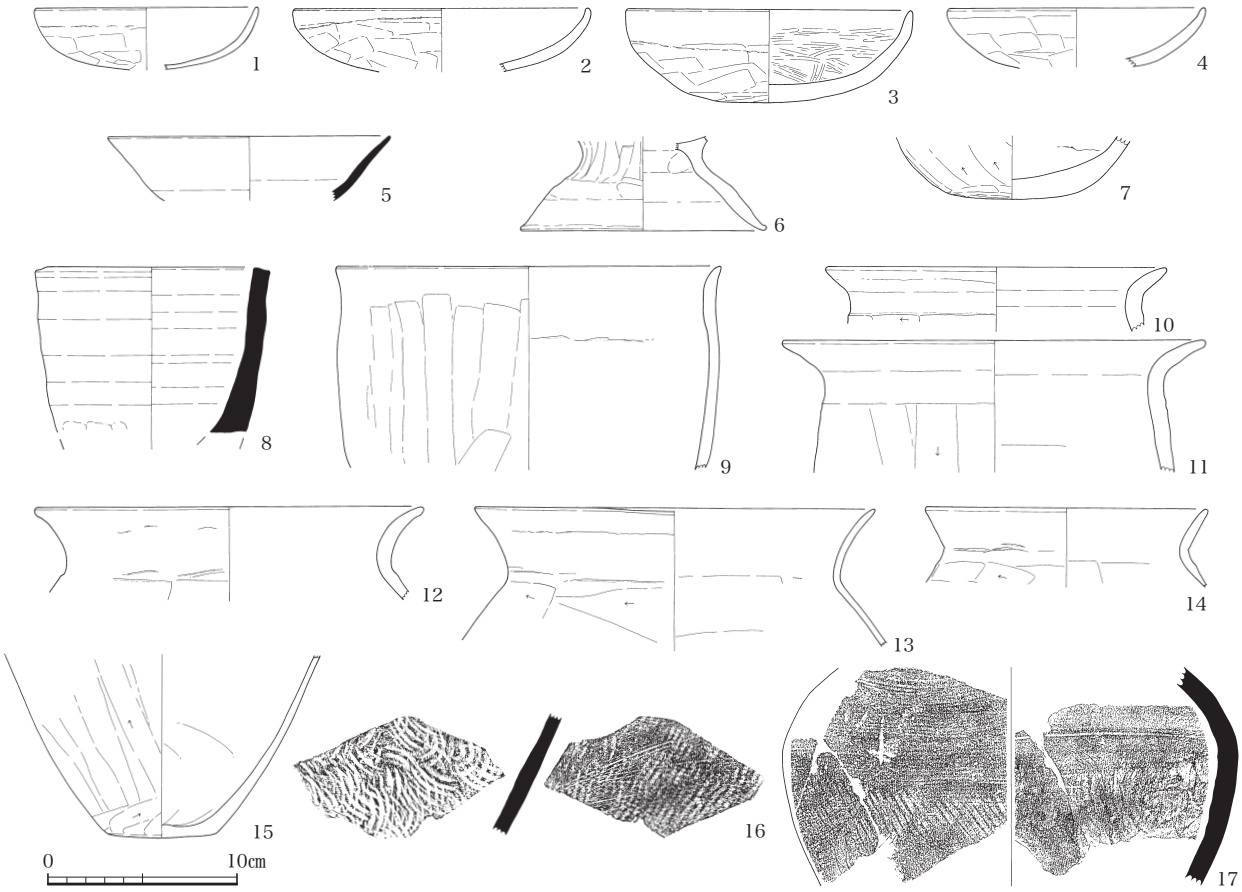
遺物　遺物は少量で、カマド付近と住居の南部に集中する。土師器主体であり、須恵器は少ない。土師器



SI-221
1　褐色土　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗褐色土　小礫微量。しまりあり。
5　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-221　カマド
1　褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒多量、小礫微量。しまりあり。
4　明褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 116 図　和田遺跡　SI-221 実測図



第 117 図　和田遺跡　SI-221 出土遺物実測図

は武蔵型主体に甕片が多く、長胴などの破片がわずかに混じる。坏は半球状のものばかりで、胎土は白色と明褐色がみられる。法量は大小ある。カマド前面からは武蔵型甕 13・15 が出土する。カマドにかけられて

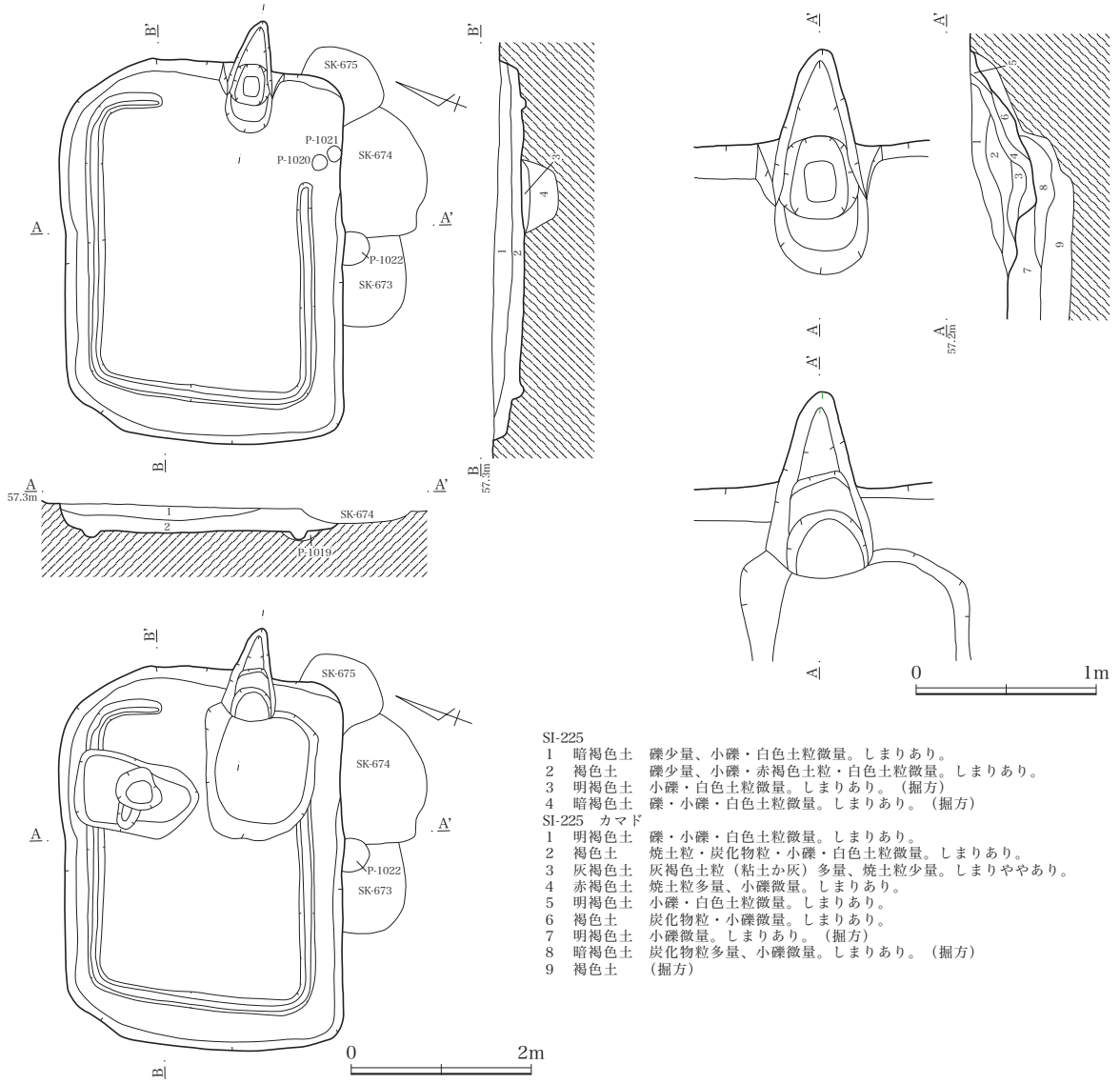
第 55 表　和田遺跡　SI-221 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.8 高　残 3.3	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。器壁薄い。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～底 1/4
2 土師器 坏	口　復 13.7 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。浅い丸底と考えられる。	2.5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
3 土師器 坏	口　15.2 高　4.9	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後粗い横方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁厚い。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	東壁際床面上 21 ㎝ 口～体 2/3、底完存 No.8
4 土師器 坏	口　復 15.7 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	南部床面上 2 ㎝ 口～体 1/4 No.1
5 須恵器 坏	口　復 15.0 高　残 3.4	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量、赤褐粗粒微量、灰礫微量 硬質	覆土 口～体一部
6 土師器 高坏	高　残 5.0 脚　復 13.0	内面坏底部ナデ、脚部上端ケズリ後ナデで指頭圧痕あり。中位ナデ、下半ヨコナデ。外面脚部上半縦方向のケズリ後下半ナデ後ヨコナデ。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　灰黒礫～細粒多量、赤褐・白細粒少量 やや硬質	SK-222 と接合 坏下端～脚 1/3 覆土、SK-222
7 土師器 鉢	高　残 3.3 底　6.8	内面体～底部ナデ。外面体部下半ケズリ、底部ケズリ。丸味を帯びた平底。	5YR7/6　橙 やや粗い　白・赤褐細粒多量 やや硬質	覆土 体一部、底 1/2
8 須恵器 捏鉢	口　復 12.4 高　残 8.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端ナデ。器壁は厚く直線的に立ち上がる。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　黒褐礫微量、黒褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	SI-220 と接合 口～体 1/2 SI-220、覆土
9 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 10.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。器壁は比較的薄め。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　黒褐粗～細粒多量､白細粒微量､赤褐粗粒少量 やや硬質	覆土 口 1/6、胴一部
10 土師器 甕	口　復 18.0 高　残 3.3	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端ケズリ。	7.5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐細粒多量、白細粒少量、灰黒粗粒少量 硬質	覆土 口一部
11 土師器 甕	口　復 22.5 高　残 7.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ。	7.5YR7/6　橙 粗い　灰黒礫～細粒多量、白細粒少量 硬質	覆土 口～胴上半一部
12 土師器 甕	口　復 20.6 高　残 5.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ。球胴。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上端一部
13 土師器 甕	口　復 21.2 高　残 7.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半ケズリ、胴部上端にヘラケズリ時の工具痕残る。口縁がひずむ。武蔵型。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	カマド南部火床面上 5 ㎝ 口～胴上半 1/6 KNo.6
14 土師器 甕	口　復 15.0 高　残 4.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ口縁下端にケズリ時の工具が残る。武蔵型。小形。	7.5YR4/6　褐 やや緻密　白細粒多量 硬質	南壁際床面上 2 ㎝ 口～胴上半 1/6 No.4・5
15 土師器 甕	高　残 9.7 底　復 5.6	内面胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半ケズリ、底部ケズリ。底部外面が黒褐色。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒褐・白細粒多量 硬質	カマド前面火床面上 5 ㎝と 8 ㎝が接合 胴下半一部､底ほぼ完存 KNo.3・4

16 須恵器 甕	高　残 6.5	内面胴部同心円当具痕。外面擬格子叩き後カキ目。	5Y7/2　灰白 緻密　黒細粒少量、赤褐細粒微量、白礫微量 やや軟質	覆土 胴一部
17 須恵器 甕	高　残 11.5 最大 復 24.0	内面胴部ロクロナデ後同心円当具痕。外面胴部擬格子叩き後カキ目。	2.5Y5/1　黄灰 緻密　白細粒多量 硬質	SI-222、SI-838 と接合 胴上半 1/3 覆土、SI-222、SI-838

いた可能性があろう。土師器坏４は住居南部の床面２cm より出土する。須恵器捏鉢８は隣接する SI-220 と、須恵器甕 17 は SI-222 及び SI-838 と、高坏６は SK-222 と遺構間接合している。図化しなかった遺物は土師器片 422 点（3,560 ｇ）、須恵器片 12 点（285 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀中葉と考えられる。

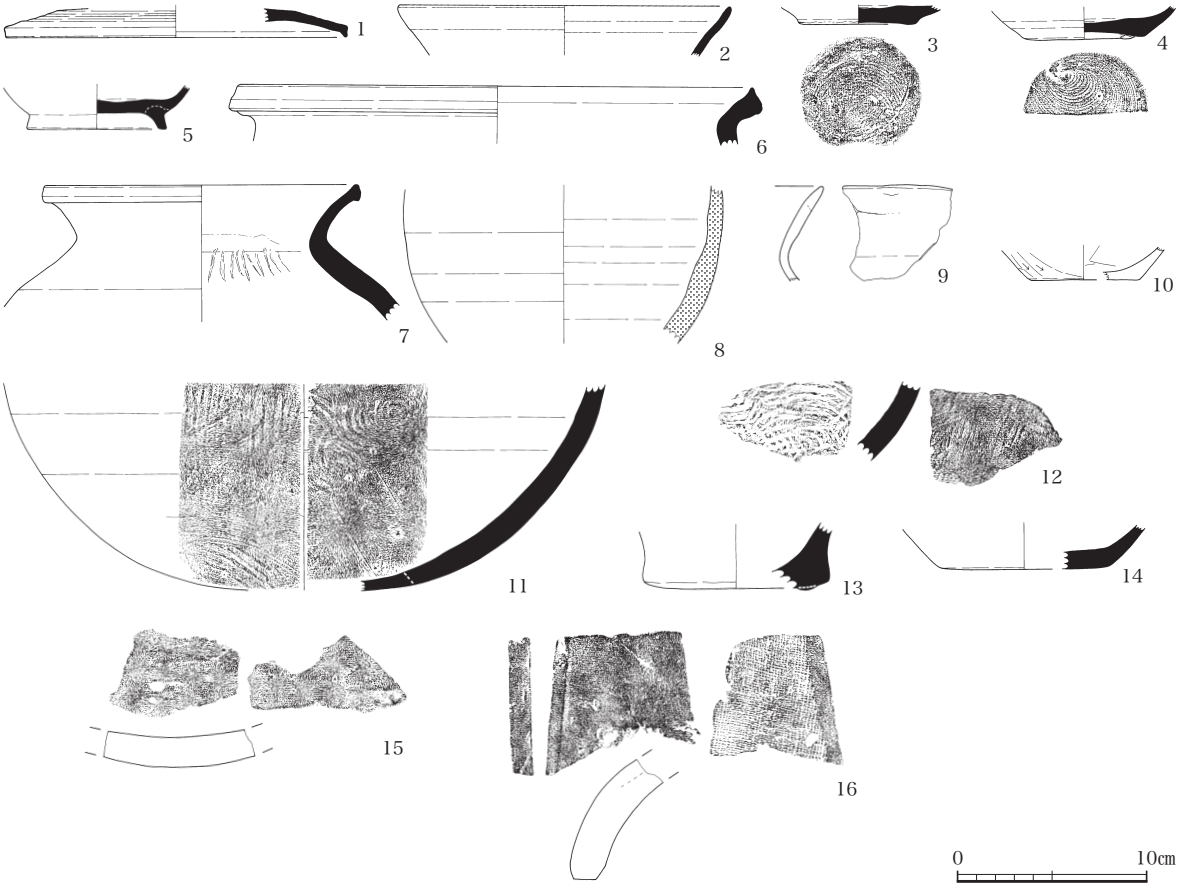
ＳＩ－２２５（第 118・119 図、第 56 表、図版二〇）



SI-225
1　暗褐色土　礫少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　礫少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
4　暗褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
SI-225　カマド
1　明褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰褐色土粒（粘土か灰）多量、焼土粒少量。しまりややあり。
4　赤褐色土　焼土粒多量、小礫微量。しまりあり。
5　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
6　褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
7　明褐色土　小礫微量。しまりあり。（掘方）
8　暗褐色土　炭化物粒多量、小礫微量。しまりあり。（掘方）
9　褐色土　（掘方）

第 118 図　和田遺跡　SI-225 実測図

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 14 グリッドに位置する。南東に土坑やピットが多く存在するが、近接する住居跡はない。北西５m に SI-226、南西８m に SI-219、南 10m に SI-221 がそれぞれ隣接する。　**重複**　南東部での重複が多く、P-1019・1022 を切り、SK-673・674・675 に切られる。P-1020・1021 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　長方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 74°－Ｅである　**規模**　南北方向が 3.10m、東西方向 4.21m である。　**覆土の状態**　覆土は２層で、ともに少量の礫を含む。　**壁**　残存壁高は 12 ～ 24cm であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　東半に土坑状の掘り込みが２ヶ所ある。南東部のものは平面形が凸字状で、規模は 145 × 122cm、床面からの深さは 30cm であり、明褐色土（カマド第７層）、暗褐色土（カマド第８層）、褐色土（カマド第９層）で貼床されて床面やカマド底面となる。カマド第８層の暗褐色土は炭化物を多量に含んでいることから、この掘り込みはカマド構築に関連するものとみられる。北東部のものは平面不整方形で、規模は 138 × 85cm、床面からの深さは 34cm であり、明褐色土（第３層）と暗褐色土（第４層）で貼床される。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　カマドがある南東部を除き住居跡の平面形と相似形に全周する。断面形は「U」字状で、幅は 13 ～ 20cm、深さは床面から４～７cm、覆土は住居跡下層覆土の褐色土（第２層）である。壁溝は壁に接しておらず、壁との距離は北辺で 10 ～ 20cm、それ以外では 20 ～ 35cm である。拡張の結果とも推定できる。　**火処**　カマドが東壁際南寄りにある。天井部は失われており、残存状態は良くない。規模は 106 × 60cm で、煙道部は壁を「U」字状に掘り込んで作られている。暗褐色土で構築される袖部は壁から 30cm 前後の長さが残る。カマド付近には平面凸字状の掘方があり、明褐色土（カマド第７層）、暗褐色土（カマド第８層）、褐色土（カマド第９層）で貼床されて火床面などが形成される。暗褐色土（カマド第８層）は炭化物を多量に含むため、

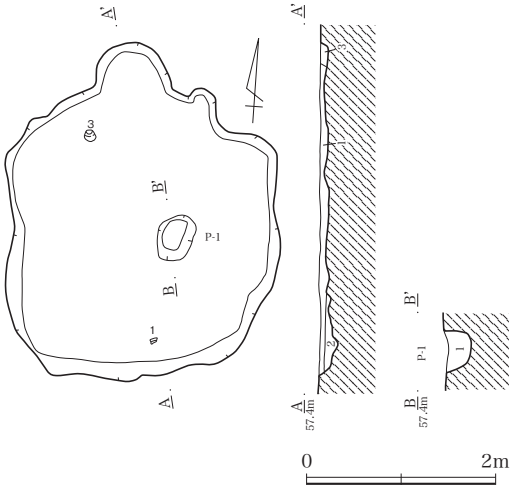


第 119 図　和田遺跡　SI-225 出土遺物実測図

第 56 表　和田遺跡　SI-225 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 18.2 高　残 1.5	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N7/0　灰白 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口～天井一部
2 須恵器 坏	口　復 17.6 高　残 2.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。器壁薄い。白色胎土。	7.5Y8/1　灰白 緻密　白粗粒少量、青灰細～微粒多量 やや硬質	覆土 口～体上半一部
3 須恵器 坏	高　残 1.0 底　6.2	内面底部ロクロナデ。外面底部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部は厚めで突出し、体部との間に粘土の貼り合わせが観察できる。円柱造りの可能性あり。白色胎土。断面が一部淡赤褐色を呈し、酸化焔焼成に近い。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰粗～微粒多量 やや軟質	覆土 底完存
4 須恵器 坏	高　残 1.7 底　復 6.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。切り離し時の粘土塊が突出するため底部の一部は接地しない。白色胎土。	5Y7/1　灰白 緻密　青灰微粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 体下位～底 1/2
5 須恵器 高台付坏	高　残 2.4 高台　7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離しの可能性あるが表面磨滅のため不明瞭。高台貼り付け。高台は断面方形でわずかに「ハ」の字状に外反する。白色胎土。表面磨滅が著しい。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰粗粒少量、白粗粒微量 やや軟質	床面直上 体下端、底～高台 1/2 床直
6 須恵器 鉢	口　復 28.2 高　残 3.0	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。口縁は外反し、口唇部が短く上に立ち上がる。	7.5Y6/1　灰白 緻密　白粗～微粒多量 硬質	覆土 口辺破片
7 須恵器 壺	口　復 16.8 高　残 7.1	内面口縁～胴部上半ロクロナデ、口縁部に自然釉付着、胴部上端に頸部を絞ったことによってできたと見られる粘土のシワあり。外面口縁部～胴部上半ロクロナデ。	5Y7/1　灰白 緻密　青灰細粒多量、白粗粒微量 硬質	SK-674 と接合 口～胴上半 1/8 覆土、SK-674
8 灰釉陶器 壺	高　残 8.4 胴　復 16.9	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、下半回転ケズリ。外面全面に施釉。混入。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰細粒多量 硬質	覆土 体下半破片
9 土師器 甕	高　残 6.1	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。武蔵型。	7.5YR7/2　明褐灰 やや緻密　白粗粒少量、金雲母細粒 硬質	カマド 口辺破片 K
10 土師器 甕	高　残 1.7 底　復 5.8	内面胴部下端～底部ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白微粒多量、金雲母細～微粒微量 硬質	カマド 胴下位～底 1/2 K
11 須恵器 甕	高　残 10.9	内面胴部ロクロナデ後同心円当具痕後下半縦方向主体のケズリ後底部ナデ。下半に自然釉付着し底部に黒色物質が溶着する。外面胴部平行叩き後浅いカキ目。粘土の合わせ目残る。下半自然釉付着。	7.5Y7/1　灰白 やや緻密　青灰粗～微粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 胴破片
12 須恵器 甕	高　残 4.2	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	N7/0　灰白 緻密　白細～微粒少量 硬質	覆土 胴破片
13 須恵器 甕	高　残 3.5 底　復 9.8	内面胴～底部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、底部ケズリ、粘土小塊付着。断面内部は褐色を呈する。	7.5Y5/1　灰 やや緻密　白細～微粒多量、赤褐粗粒微量、黒灰粗粒少量 やや硬質	覆土 胴下端～底 1/2
14 須恵器 甕	高　残 2.3 底　復 8.6	内面胴～底部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、底部ナデ。	N4/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 胴～底 1/4
15 瓦 平瓦	長　残 5.0 幅　残 8.0 厚　1.6 重　残 70.9 高　残 2.1	凹面布目痕と思われるが磨滅のため調整等不明。凸面ナデ。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　白礫微量、白・灰褐粗～細粒少量 やや軟質	覆土 破片
16 瓦 丸瓦	長　残 6.8 幅　残 5.0 厚　2.0 重　残 139.3 高　残 6.3	凹面布目痕側縁ケズリ。凸面ナデ側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR8/2　灰白 やや粗い　白・青灰細粒少量、灰褐礫微量 やや硬質	覆土 破片

カマド構築前に何らかの目的で燃焼させることがあったと推定される。火床面は床面から 15cm 階段状に低くなった位置にある平坦面で、そこから緩やかな段を持って傾斜する煙道へと続き、煙道先端で短く外傾して立ち上がる。被熱の痕跡は明瞭で、袖部内面や燃焼部に面した奥側の斜面、火床面の一部など広範囲で硬化赤変範囲が確認できる。覆土は６層で、灰褐色粘土を含む第３層が天井部、焼土を多く含む第４層は天井部内面の崩落と考えられる。　貯蔵穴　なし。　遺物　遺物はわずかで、床面直上より出土した須恵器高台付坏５を除き、全て覆土中の出土である。須恵器が多く、土師器は武蔵型のほか長胴、球胴の甕、坏は半球状の胎土白色のもの主体である。須恵器は蓋１、坏２～４、高台付坏５、鉢６、壺７、甕 11 ～ 14 などがある。灰釉陶器壺８も１点出土している。このうち須恵器壺７は SK-674 の破片と接合した。図化しなかった遺物は、土師器片 63 点（800 ｇ）、須恵器片 25 点（630 ｇ）で、須恵器坏など一部に新しい時期の遺物の混入がある。本遺構の年代は８世紀後葉頃であろう。

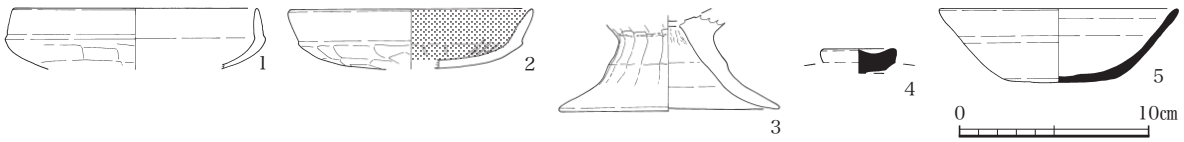


SI-226
1　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック・礫・小礫少量。砂質。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒・炭化物粒・礫・小礫微量。砂質。しまりあり。
3　褐色土　ロームブロック多量、ローム粒・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SI-226　P-1
1　暗褐色土　ローム粒・炭化物粒・礫・小礫微量。砂質。しまりあり。

第 120 図　和田遺跡　SI-226 実測図

ＳＩ－２２６（第 120・121 図、第 57 表、図版二〇）

位置　Ⅵ区調査区の東部、Ｎ－ 14・15 グリッドに位置する。近接する住居跡や土坑はない。南東５ｍに SI-225、北西６ｍに SI-227 がそれぞれ隣接する。　重複　なし。　平面形　小さな凹凸がある不整な方形で、北

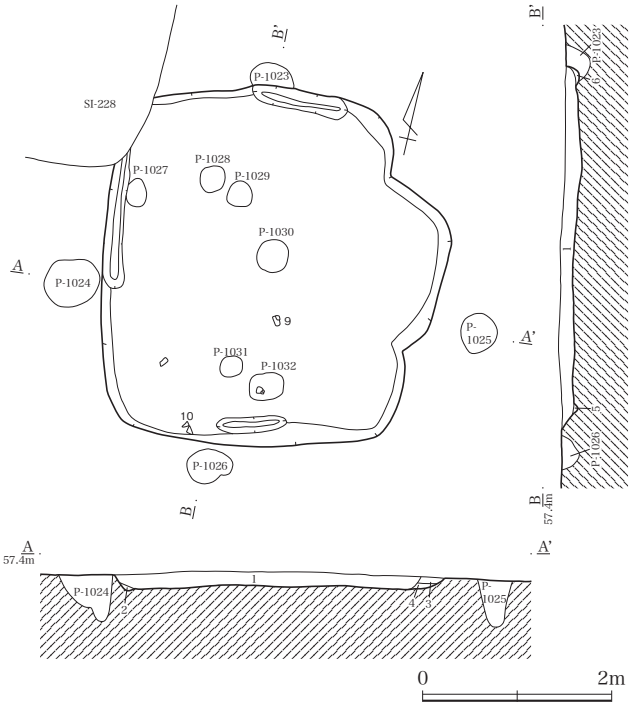


第 121 図　和田遺跡　SI-226 出土遺物実測図

第 57 表　和田遺跡　SI-226 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.3 最大 復 13.6	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上端に稜、無調整部分あり、その下ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白粗粒微量、赤褐粗粒少量 やや硬質	南部床面上 12 cm 口～体 1/6 No.2
2 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後放射状に粗いミガキ。内面全面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部上端稜あり、体～底部ケズリ	2.5Y6/1　黄灰 やや緻密　黒灰・白粗粒少量 やや硬質	覆土 口～底 1/4
3 土師器 高坏	高　残 5.1 脚　11.6	内面坏部底面全体的に表面が剝離する。脚部上半ナデ、上半に粘土シワあり、中位～下半ヨコナデ。外面脚部縦方向ケズリ中位～下半ヨコナデ、坏部との境に紐積痕あり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白礫～細粒多量、赤褐粗粒微量 硬質	北部床面上 12 cm 脚上半完存、脚下半 3/4 No.1
4 須恵器 蓋	高　残 1.2 つまみ　4.0	ボタン状のつまみ、貼り付け部分で剝離する。白色胎土。	7.5Y8/1　灰白 緻密　青灰微粒多量 やや硬質	覆土 つまみ完形
5 須恵器 坏	口　復 12.6 高　3.9 底　復 6.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整の可能性あるが表面磨滅のため不明。	7.5Y6/1　灰 緻密　白粗～微粒多量、黒砂粒少量 硬質	覆土 口～底 1/6

壁際中央が突出する。南北方向の中軸線はＮ－６°－Ｗである。不整な形状に加え、凹凸がある床面で火処も確認できないため、住居跡とするのに疑問が残る。使用しなかった住居跡の可能性もあろうか。　**規模**　東西方向が 2.84m、南北方向が 2.97m である。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第１・第３層はローム粒を多く含む。第１層は砂質である。　**壁**　残存壁高は７～ 12cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　大きく傾くことはないが、こまかな凹凸が著しい。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット１本（P- １）がある。規模は径 50 × 36cm、深さ 23cm で、住居跡覆土第２層に類似する暗褐色土（第１層）が堆積する。　**壁溝**　なし。　**火処**　不明である。北壁際中央の突出部がカマドとなる可能性があるが、覆土や床面などに使用の痕跡は認められない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はごくわずかである。土師器ばかりで、甕は球胴などのみであり、長胴はない。坏は模倣坏主体に、半球状のものもある。図化した坏１は住居南部から、床面よりやや高い位置で出土する。須恵器２点（蓋４・坏５）は後世の混入であろう。図化しなかった遺物は土師器片 23 点（230 ｇ）、須恵器片１点（10 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀前葉と考えられる。

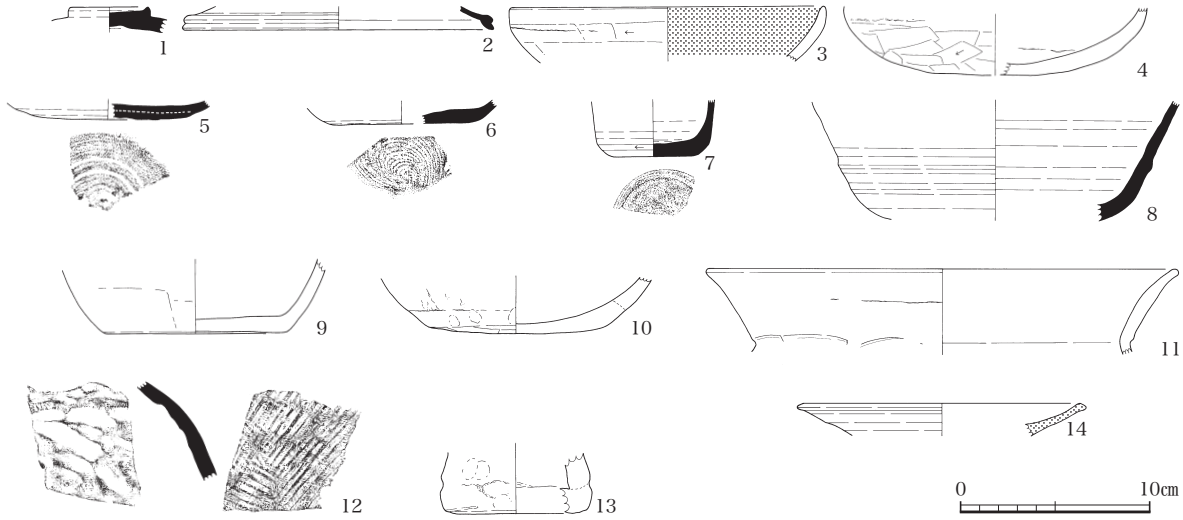


SI-227
1　褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　礫・小礫微量。しまりあり。
3　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　黄褐色土　小礫微量。しまりあり。
5　明褐色土　小礫微量。しまりあり。
6　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 122 図　和田遺跡　SI-227 実測図

ＳＩ－２２７（第 122・123 図、第 58 表、図版二一）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。ピットと土坑が集中する部分のため、それらが遺構周囲に多数存在する。西４ｍに SI-212・213、南東６ｍには SI-226 が隣接する。　**重複**　北西隅が SI-228 に切られる。ピットと土坑が集中する地区のためそれらとの重複が著しく、P-1023・1027・



第 123 図　和田遺跡　SI-227 出土遺物実測図

第 58 表　和田遺跡　SI-227 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.3 つまみ 復 4.3	表面磨滅が著しい。内面天井部ロクロナデで指頭圧痕あり。外面天井部調整不明瞭、つまみ貼付け。リング状のつまみ。	N8/0　灰白 緻密　灰褐細粒少量 やや軟質	覆土 つまみ～天井 1/4
2 須恵器 蓋	口　復 16.4 高　残 1.2	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。体部の器壁は非常に薄い。	N6/0　灰 緻密　白・灰褐細粒微量 硬質	覆土 口破片
3 土師器 坏	口　復 16.7 高　残 2.8	内面口縁～体部ナデ・ヨコナデ、黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密　白細粒微量、黒細粒少量 やや硬質	覆土 口～体上半 1/5
4 土師器 坏	高　残 3.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明確。紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。偏平な丸底。器壁やや厚い。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白・灰細粒微量 やや軟質	覆土 口一部、体～底 1/4
5 須恵器 坏	高　残 1.1 底　復 8.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ。切り離し方向不明。糸切り離しの可能性高い。底部断面の観察から底が二重になっている可能性あり。円柱造りか。底部はやや厚めで内面中央がわずかに突出する。	7.5Y7/1　灰白 やや粗い　白細粒微量 やや硬質	覆土 体下端～底 1/4
6 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 7.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し。酸化焔焼成。白色胎土。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰褐細粒少量、白細粒微量 やや軟質	覆土 体下半～底 1/4
7 須恵器 小型壺	高　残 3.0 底　復 4.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ後下端回転ヘラ切ケズリ。底部ナデ。小型。	10BG5/1　青灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 体下半～底 1/2
8 須恵器 高坏	高　残 6.4	内面坏～体部ロクロナデ。外面坏～体部ロクロナデ、下半部はロクロ目を強く残す。無蓋高坏。	N6/0　灰 やや緻密　白礫微量、白細粒微量 硬質	覆土 坏体破片
9 土師器 鉢	高　残 3.9 底　復 9.6	内面体～底部ナデ。外面体部下半ケズリ後ナデ、底部ケズリ。平底。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上 9 ㎝ 体下半 1/4、底 3/4 No.1
10 土師器 鉢	高　残 3.0 底　復 9.4	内面体部下半～底部ナデと見られるが表面剝離のため調整不明瞭。外面体部下半ナデで紐積痕・指頭圧痕あり。底部ケズリ。底部は丸く突出する。	5Y8/3　淡黄 やや緻密　白細粒微量、細砂粒少量 やや軟質	南壁際床面上 3 ～ 4 ㎝ 体下半～底 1/2 No.3
11 土師器 甕	口　復 25.0 高　残 4.5	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。口縁下端に工具のあたりあり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤褐細粒微量 やや硬質	覆土 口 1/4
12 須恵器 甕	高　残 5.0	内面胴部上半円形当具痕、強くあたる。当具の文様は無文。外面胴部上半平行叩き。	N7/0　灰白 緻密　青灰細粒微量、白微粒微量 硬質	覆土 胴破片
13 土製品 筒形	高　残 3.7 底　復 7.4	内面体部下半ナデで紐積痕あり。外面体部粗いナデで指頭圧痕あり、底部粗いナデ。草の茎のような細い棒状の圧痕あり。	7.5YR6/6　橙 粗い　砂礫少量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	覆土 体下半～底 1/4
14 灰釉陶器 Ⅲ	口　復 15.3 高　残 1.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。釉は施されない。K90 窯式併行。東濃以外の窯か。	7.5Y8/1　灰白 緻密　青灰細粒微量 硬質	覆土 口～体上端一部

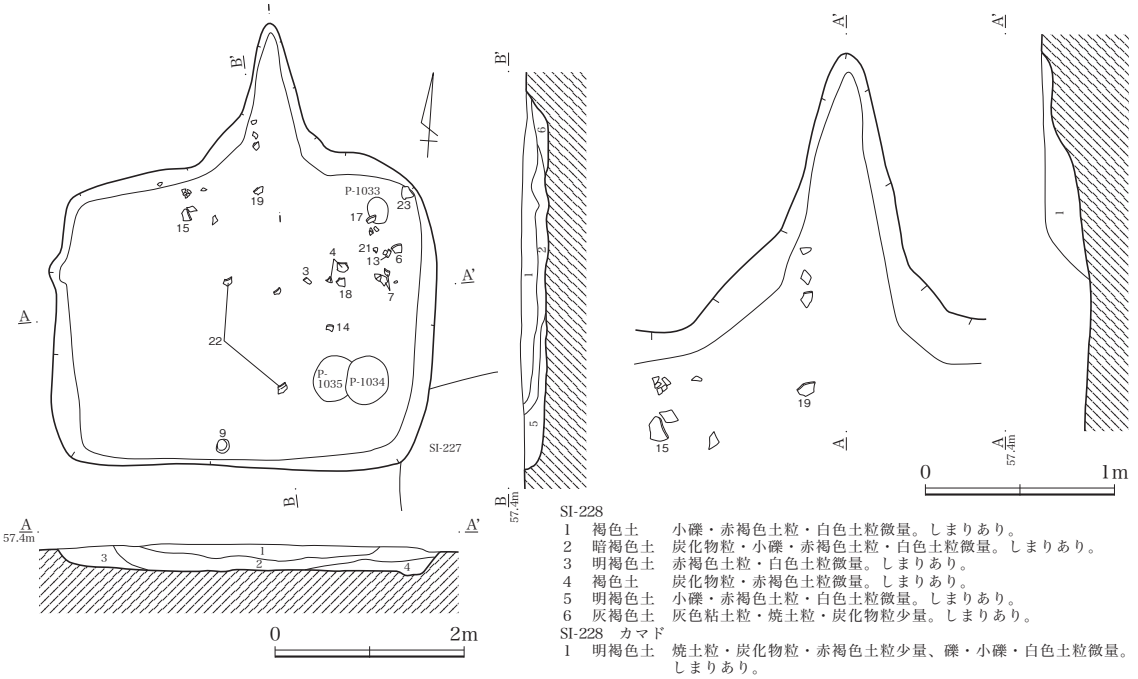
1028・1029・1030・1031・1032 と重複する。このうち P-1023 を切ることは確認できるが、これ以外については新旧関係は不明である　**平面形**　長方形で、東壁際中央が広く突出する。南北方向の中軸線はＮ－12°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.18m、南北方向が 3.80m である。東側の突出部を含めると、東西方向の規模は 3.70m となる。　**覆土の状態**　覆土は 6 層で、第 1 層は緻密な褐色土である。第 3・第 4 層は東側突出部の覆土である。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 15cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな

凹凸はあるが、おおむね平坦である。東側突出部床面はほかの部分よりもわずかに高い。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　西・南・北の各壁際に断続的に認められる。断面形は開いた「U」字状で、幅は 15 ～ 22cm、深さは床面から３～５cm、覆土は第２・第５・第６層である。　**火処**　不明である。ただし、東側突出部中央付近の床面には硬化赤変部分があることが確認できるため、ここがカマドであった可能性はあるだろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、住居跡南部にまとまる。図示した遺物の中では、土師器鉢９・10 が住居南部からの出土である。土師器坏は白色及び明褐色胎土の厚手な半球状のものが多く、丸底主体である。甕は武蔵型ばかりで、長胴は少ない。須恵器は蓋１・２、坏５・６、高坏８、甕 12 などがある。須恵器坏の底部切り離しは回転ヘラケズリ（５）と回転糸切り（６）がある。灰釉陶器皿 14 は混入である。図示しなかった遺物は土師器片 344 点（2060 g）、須恵器片 20 点（320 g）、灰釉陶器片１点（5 g）である。本遺構の年代は８世紀中葉でもやや古い段階と考えられる。

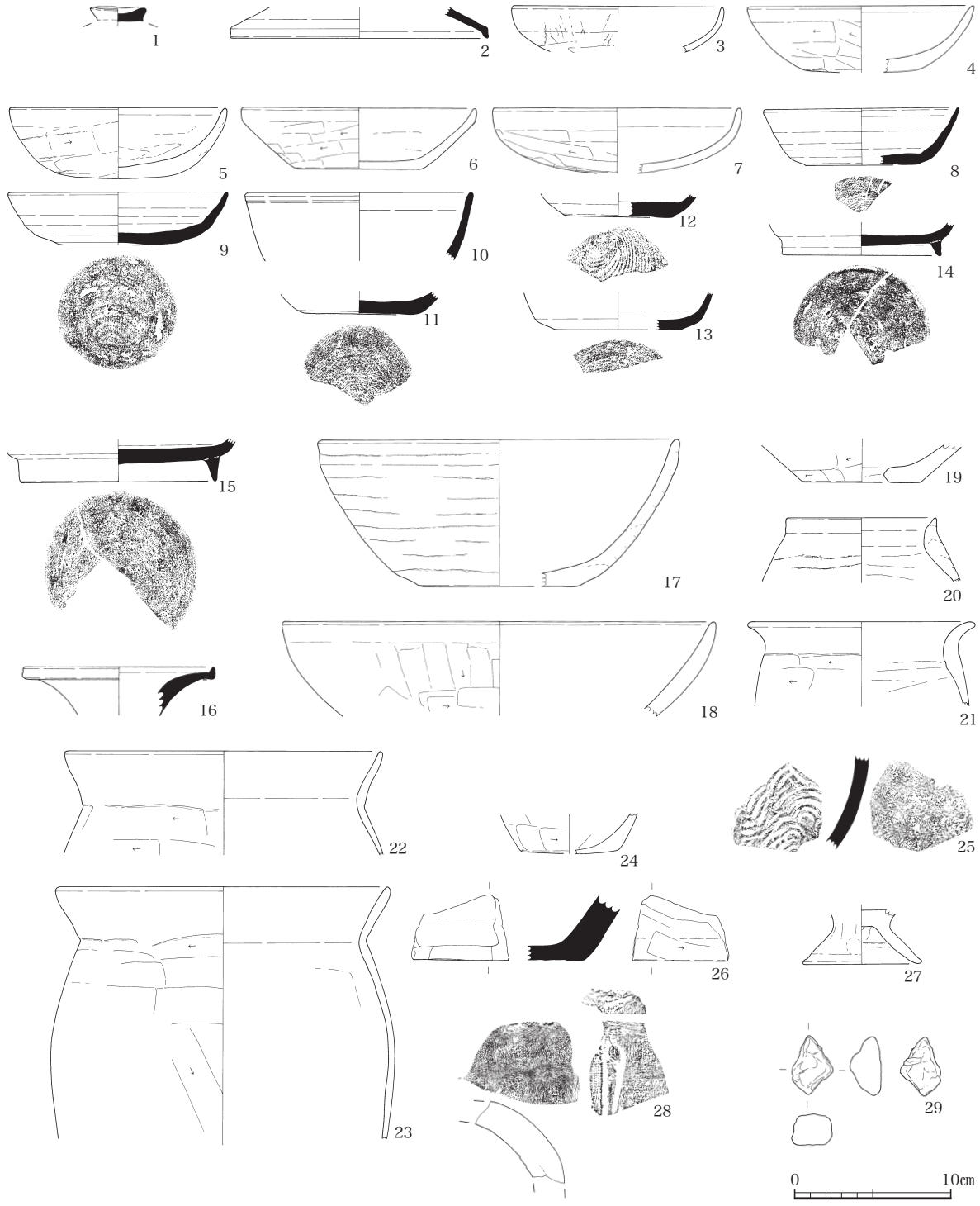
ＳＩ－２２８（第 124・125 図、第 59 表、図版二一・五二）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。ピットと土坑が集中する部分のため、それらが遺構周囲に多数存在する。西に SI-212・213 が近接してあるほか、北西３m には SI-403 が隣接する。　**重複**　南東隅で SI-227 を切る。住居跡東部で P-1033・1034・1035 と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－７°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.04m、南北方向が 3.39m である。　**覆土の状態**　覆土は６層で、第６層はカマド部分の覆土である。　**壁**　残存壁高は 18 ～ 29cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を「Ｖ」字状に 141cm 掘り込んで作られている。火床面は床面からわずかに窪んでおり、緩やかな傾斜がつけられた煙道へと続いている。煙道は先端で角度を増したあと平坦になり、そこから短く外傾して立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡はほとんど認められない。覆土は焼土や炭化物



第 124 図　和田遺跡　SI-228 実測図



第 125 図　和田遺跡　SI-228 出土遺物実測図

第 59 表　和田遺跡　SI-228 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　0.9 つまみ　3.6	小型のリング状つまみ、貼り付け面から剥離する。白色胎土。	7.5YR8/1　灰白 緻密　黒微～細粒多量、黒粗粒少量 やや軟質	覆土 つまみのみ残存

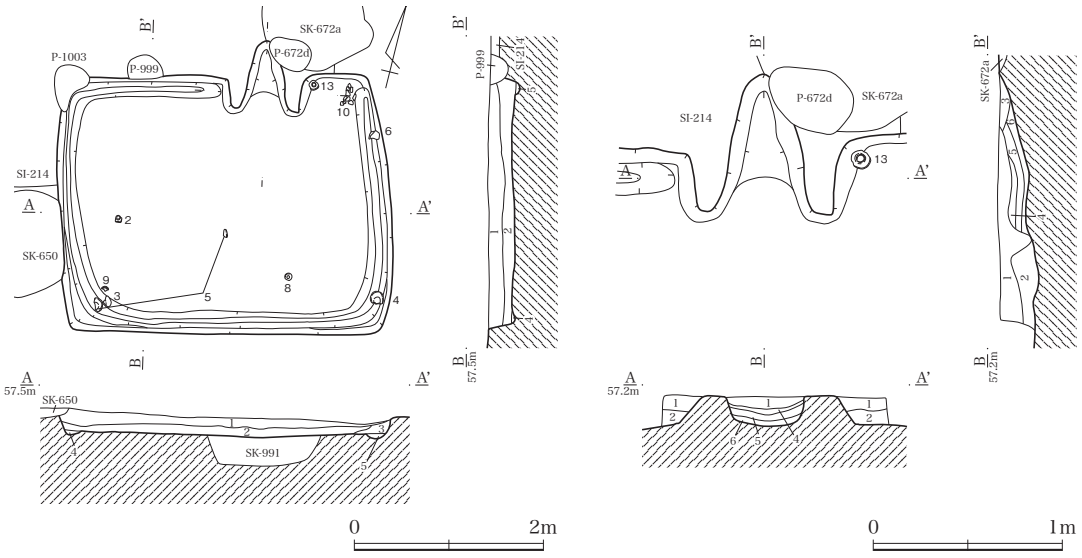
2 須恵器 蓋	口　復 16.6 高　残 2.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。白色胎土。	N7/1　灰白 緻密　白・黒微粒少量、砂粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片
3 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 2.8	内面口縁～体部ヨコナデと思われるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。体部上半は無調整で表面にヒビ割れ状の粘土の隙間が広がる。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　黒微粒多量、黒・透明粗粒少量、白細粒少量 やや軟質	中央部床面上 15 ㎝ 口～体 1/6 No.6
4 土師器 坏	口　復 13.9 高　4.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。体～底部ヘラ状工具の痕跡あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁厚く偏平な丸底。木葉痕あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　黒・赤微粒多量、白・透明微粒少量、赤礫微量 やや軟質	中央部床面上 9 ㎝ 口～底 2/3 No.7
5 土師器 坏	口　復 14.6 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。偏平な丸底。器壁やや厚い。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　黒微粒多量、黒細粒少量、白微粒微量、黒・透明粗粒微量 やや軟質	覆土 口～体上半一部、体下半～底 1/6
6 土師器 坏	口　復 15.1 高　3.9 底　7.8	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ、内面は表面剝離著しい。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。平底。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、黒・透明細粒少量、赤褐粗粒微量 やや軟質	北東部床面上 11 ㎝ 口～底 1/2 No.11
7 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 4.2	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ後ミガキの可能性あるが表面剝離のため不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。偏平な丸底。器壁やや厚い。	7.5YR7/3　にぶい橙 やや緻密　黒・赤微粒多量、白細粒少量、白粗粒微量 やや軟質	東部床面上 9 ㎝ 口～体 1/2 No.9
8 須恵器 坏	口　復 12.5 高　3.6 底　残 7.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後周縁を手持ちケズリ。わずかに上げ底。底部やや厚め。断面内部は酸化焔焼成のような褐色を呈する。白色胎土。	5Y7/1　灰白 緻密　黒・白微粒多量、黒粗粒少量、白礫微量 やや硬質	覆土 口～底破片
9 須恵器 坏	口　14.1 高　3.35 底　7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後周囲を回転ケズリ。	N7/0　灰白 やや粗い　黒・白微粒多量、白粗粒少量、白礫・灰礫微量 軟質	南壁際中央床面上 10 ㎝ 口～体 5/6、底完存 No.1
10 須恵器 坏	口　復 14.6 高　残 4.3	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、口縁下端に沈線あり。内外面ともロクロ成形による凹凸はほとんどない。	10Y6/1　灰 緻密　黒・白微粒多量、白粗粒少量、白礫微量 硬質	覆土 口～体上半破片
11 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 7.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後周縁部回転ケズリ。内外面とも表面磨滅が著しい。白色胎土。	5Y7/1　灰白 緻密　黒・白微粒多量、白粗粒微量、灰礫微量 やや軟質	覆土 底 1/4
12 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 7.1	内外面とも表面磨滅が著しい。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。わずかに上げ底。底部やや厚め。	5Y7/1　灰白 やや粗い　黒・白微粒多量、白細粒少量、黒粗粒微量、白礫微量 やや軟質	覆土 底 1/3
13 須恵器 坏	高　残 2.4 底　復 8.2	内面体部下端～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ、切り離し方法不明。白色胎土。部分的に酸化焔焼成のような褐色を呈する部分あり。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや緻密　黒・白微粒多量、赤褐細粒少量 やや軟質	東部床面直上 10 ㎝ 体一部、底 1/4 No.10
14 須恵器 高台付坏	高　残 2.1 高台 復 10.2	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼付け。切り離し方法不明。高台はわずかに外反する。	5Y7/1　灰白 やや粗い　黒・白微粒多量、黒・白細粒少量、白礫・灰礫微量 やや軟質	中央部床面上 8 ㎝ 底～高台 1/2 No.3
15 須恵器 高台付皿	高　残 2.7 高台 復 12.6	大形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼付け。高台はやや高めでほぼ垂直に立つ。切り離し方法不明。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　黒・白微粒多量、白粗粒少量、黒礫微量 やや軟質	北部床面上 10 ㎝ 底～高台 2/3 No.19

16 須恵器 瓶類	口　復 12.4 高　残 3.1	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。口唇部が短く立ち上がる。	N4/4　灰 緻密　白微粒多量、白細粒少量 硬質	覆土 口破片
17 土師器 鉢	口　復 23.2 高　9.4 底　残 10.4	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデ、紐積痕を明瞭に残す。底部ナデ。２条の細い沈線あり。口縁～体部上位、体部下位～底部に赤褐色、体部中位に淡黄色の２色の粘土を用いる。	2.5YR5/6　明赤褐・10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒・白・赤褐微粒多量、白・赤細粒微量 硬質	北東部床面上７㎝と SI-227 が接合 口～底 1/5 No.13、SI-227
18 土師器 鉢	口　復 27.8 高　残 6.1	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上半縦方向ケズリ後下半横方向ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白細粒多量 やや硬質	東部床面上４㎝ 口～体上半破片 No.8
19 土師器 甑	高　残 2.4 底　復 7.3	内面胴～底部丁寧なナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。底部中央に直径 2.8 ㎝の孔あり。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白細粒少量、赤褐礫微量 硬質	カマド南側床面上 10 ㎝ 胴下端～底 1/4 No.15
20 土師器 甕	口　復 9.6 高　残 4.1	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半軽いナデで紐積痕を明瞭に残す。小型。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　黒・白微粒多量、赤褐・白細粒微量 やや硬質	覆土 口～胴上半 1/5
21 土師器 甕	口　復 14.6 高　残 5.4	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ケズリ。小型。	2.5YR5/6　明赤褐 緻密　黒・白微粒多量、黒・赤褐細粒少量 硬質	北東部床面上６㎝ 口～胴上半 1/6 No.21
22 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 6.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ、ケズリに伴う工具のあたりが残る。武蔵型。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　黒微粒・白微粒・赤褐細粒多量、赤褐粗粒・白粗粒微量 やや硬質	中央部床面上８㎝と９㎝が接合 口～胴上位 1/6 No.2・4
23 土師器 甕	口　復 21.4 高　残 16.1 最大　復 22.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部斜方向ケズリ後上位横方向ケズリ。胴部上端にケズリ時の工具のあたりあり。武蔵型。口縁部はやや厚く、最大径は胴部中位。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・白・赤褐微粒多量、赤褐粗粒微量、金雲母細粒微量 硬質	北東隅床面上７㎝ 口～胴上半 1/4 No.14
24 土師器 甕	高　残 2.5 底　復 6.2	内面胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下端横方向ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　黒・白微粒多量、白細粒微量 やや硬質	覆土 底 1/4
25 須恵器 甕	高　残 5.9	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴破片
26 須恵器 甕	高　残 4.1	内面胴～底部ロクロナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白微粒少量、白・黒微粒微量 硬質	覆土 胴下端～底破片
27 土師器 台付甕	高　残 3.5 台基部　3.6 台部　復 7.6	内面脚部上半ナデ、下半ヨコナデ。外面脚部縦方向ケズリ後ナデ、下端ヨコナデ。	2.5YR4/6　赤褐 粗い　白微粒多量、白・灰細粒少量、透明粗粒微量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 底完存、台 1/6
28 瓦 丸瓦	長　残 6.2 幅　残 7.2 厚　2.2 重　残 115.5	凹面布目痕、布の重ね目と思われる段あり。広端縁ケズリ。凸面ナデ。広端面ケズリ。	2.5YR8/2　灰白 緻密　白細粒少量、黒微粒少量、灰白礫微量 やや軟質	覆土 破片
29 土製品 粘土塊	長　3.7 幅　2.6 厚　2.0 重　11.5	平面いびつな稜形。断面方形。捏ねた粘土をそのまま固めて焼成している。裏面は平坦面、表面は凹凸多く無調整。	7.5YR6/8　橙 やや粗い　白・赤褐細粒少量、赤褐礫微量 やや硬質	覆土 完形

を含む明褐色土（第１層）である。なお、住居跡の土層断面Ｂ－Ｂ’で確認されたカマド覆土（住居跡覆土第６層）は灰色粘土を含むものであり、これは袖部ないしは天井部の構築材と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。

遺物　出土遺物は多く、カマド付近と住居跡北東部に集中する。床面直上から出土した遺物はない。土師器の器種は坏・鉢・甕・台付甕などで、坏は厚手な半球状の坏主体で平底もある。甕は武蔵型ばかりである。土師器坏３・４・６・７は北東部より出土しており、６が平底である。土師器鉢 17・18 も北東部より出土する。須恵器は坏・高台付坏主体で、底部の調整は回転糸切り離し後周辺ケズリ（８・９・11）と回転糸切り離し後無調整（12）がある。図化しなかった遺物は、土師器片 590 点（4,390 ｇ）、須恵器片 22 点（200 ｇ）、灰釉陶器片３点（40 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀中葉と考えられる。

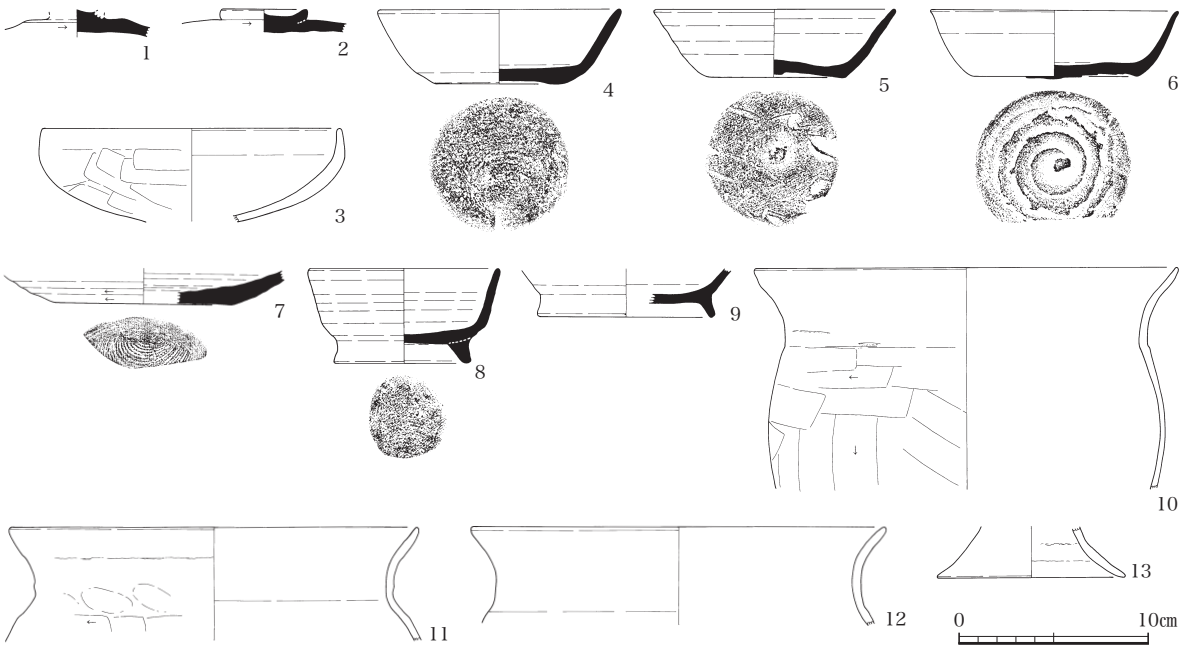
ＳＩ－４０３（第 126・127 図、第 60 表、図版二一・五二・五三）



SI-403
1　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
5　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-403　カマド
1　暗黄褐色土　住居跡覆土第１層に同じ。
2　暗褐色土　住居跡覆土第２層に同じ。
3　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒多量。しまりあり。
4　黒褐色土　炭化物粒主体。焼土粒少量。しまりややあり。
5　灰褐色土　灰色粘土粒多量、焼土粒・炭化物粒少量。しまりややあり。
6　黒褐色土　炭化物粒多量、焼土粒少量。しまりややあり。

第 126 図　和田遺跡　SI-403 実測図



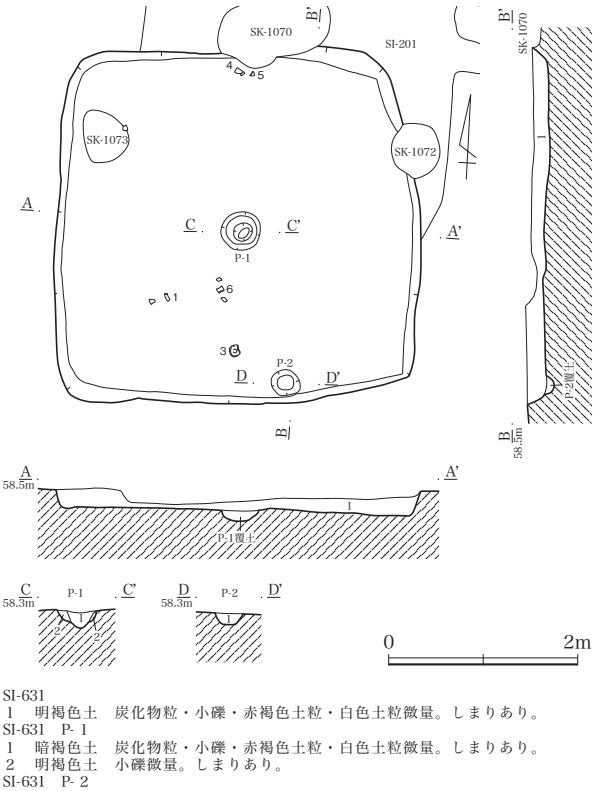
第 127 図　和田遺跡　SI-403 出土遺物実測図

第 60 表　和田遺跡　SI-403 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.4	内面天井部ロクロナデ。外面天井部ケズリ、つまみ貼付け。ボタン状のつまみだろう。つまみ部基部の直径は 3.0 ㎝。	7.5Y5/1　灰 緻密　白粗粒少量 硬質	覆土 つまみ、体一部
2 須恵器 蓋	高　残 1.2 つまみ　4.6	内面天井部ロクロナデ。外面天井ケズリ後つまみ貼付け、ボタン状のつまみ。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　灰黒・白細粒少量 硬質	西部床面直上 つまみ完存､天井一部 No.2
3 土師器 坏	口　復 15.9 高　残 4.9 最大 復 16.1	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR5/8　明赤褐 緻密　灰黒細粒多量、白細粒微量 やや硬質	南西隅床面上 13 ㎝ 口～体 1/5 No.5
4 須恵器 坏	口　12.8 高　3.9 底　6.8	内外面とも表面磨滅が著しい。内面口縁～底部ロクロナデ。体部と底部の境は明確に屈曲する。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端わずかに二重底部状となる。底部回転糸切り離し後無調整。わずかに上げ底。底部厚手。	5Y7/2　灰白 やや粗い　赤褐粗～細粒少量、白細粒少量、白礫微量 やや軟質	南東隅床面上 2 ㎝ 口～体 4/5、底完存 No.8
5 須恵器 坏	口　12.8 高　3.6 底　7.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後外周軽いナデ。棒状の圧痕あり。底部は上げ底。重ね焼きにより、外面口縁～体部全面は灰褐色を呈する。口唇部の 6 ㎝ほどの部分はやや黒味の強い粘土を使っているため、重ね焼きの痕跡とは別に黒褐色を呈する。	5Y7/2　灰白 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや軟質	南西隅床面上 11 ㎝と中央部床面直上 8 ㎝と接合 口～体 4/5、底完存 No.4・6
6 須恵器 坏	口　復 13.0 高　3.4 底　8.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。ヘラ切りによって削られなかった粘土が坏底面より突出する。	5Y7/1　灰白 やや粗い　灰黒細粒多量、白細粒少量、灰黒・白礫微量 やや軟質	北東隅床面上 10 ㎝ 口 1/4、体 1/4、底ほぼ完存 No.9
7 須恵器 坏	高　残 1.9 底　復 9.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ後下半回転ケズリ、底部回転糸切り離し後外周回転ケズリ。白色胎土。	5Y8/1　灰白 緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 体一部、底 1/4
8 須恵器 高台付坏	口　復 10.1 高　5.0 高台　7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台はやや高めで「ハ」の字状に開く。	10Y6/1　灰 緻密　黒褐細粒少量、白細粒少量 硬質	南部床面上 10 ㎝と SI-214 覆土が接合 口 1/4、体 1/3、底完存 No.7、SI-214
9 須恵器 高台付坏	高　残 2.5 高台　復 9.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ナデで切り離し方法不明。高台貼り付け。高台はわずかに「ハ」の字状に開く。	10Y5/1　灰 緻密　白細粒多量、白粗粒微量 硬質	南西隅床面上 9 ㎝ 底～高台 1/3 No.3
10 土師器 甕	口　復 22.4 高　残 11.7	内面口縁ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後上半横方向ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/8　橙 やや粗い　黒・白細粒多量 やや硬質	北東隅床面直上 口～胴一部 No.10
11 土師器 甕	口　復 21.6 高　残 6.0	内面口縁ヨコナデ・ナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半横方向ケズリ。武蔵型。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　黒褐・白細粒多量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 口一部、胴上端一部
12 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 5.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ケズリ。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや粗い　白細粒多量、黒褐粗粒少量 硬質	覆土 口一部
13 土師器 台付甕	高　残 2.7 台　9.9	内面脚部上半ナデ、下半ヨコナデ。外面脚部ナデ・ヨコナデ。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐細粒多量、砂細粒少量 硬質	カマド東脇床面上 13 ㎝ 脚完存 KNo.1

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15・16、Ｐ－ 15・16 グリッドに位置する。ピットと土坑が集中する部分のため、それらが遺構周囲に多数存在する。南２ｍに SI-213、南東３ｍには SI-228 が隣接する。　**重複**　住居跡北西部で SI-214 を、中央部で SK-991 を切り、西部が SK-650、P-999・1003 に切られる。北辺のカマド煙道部は SK-672a、P-672d と重複しており、調査時の状況からこれらに切られると判断される。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 15°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.51m、南北方向が 2.74m

である。　**覆土の状態**　覆土は５層で、第４・第５層は壁溝覆土である。第２・第３層は炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は 11 ～ 27cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる部分が多い。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　カマドがある北辺東寄りを除き壁際を全周する。断面形は開いた「U」字状で、幅は 17 ～ 21cm、深さは床面から３～５cm である。覆土は褐色土（第４・第５層）である。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部は失われているが、袖部は残存している。煙道部は壁を約 43cm「U」字状に掘り込んで作られており、カマドの規模は 100 × 79cm である。袖部は地山であるローム層を掘り残して作り出される。火床面は床面から５cm ほど高い位置にあり、緩やかな斜面となる煙道へと続き、先端はやや角度を急にして立ち上がる。袖部～煙道内面の被熱の痕跡は明瞭で、燃焼部に面した袖部内面が広範囲に硬化赤変するほか、煙道内面でも上半を中心に硬化赤変が認められる。覆土は６層で、焼土主体の第３層は天井内面が崩落したものとみられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はわずかで、土師器よりも須恵器の方が多い。須恵器は蓋・坏主体、土師器は武蔵型甕と胎土白色の平底の坏、武蔵型甕に似た胎土の坏などがある。住居跡内では周縁部に分散しており、北東部と南西部にまとまりを見せる。土師器甕 10 は北東隅の床面直上より出土した。近くからは台付甕の台部 13 も出土する。リング状のつまみを持つ須恵器蓋２は、住居南西部の床面直上から出土した。東壁溝上より出土する須恵器坏６の底部は回転ヘラ切り離し後無調整で、渦巻き状の痕跡が明瞭に残る。このほか須恵器坏は、回転ヘラ切り離し後周縁ナデ（５）、回転糸切り離し後外周ケズリ（７）、回転糸切り離し後無調整（４）などがありバラエティに富む。図化しなかった遺物は、土師器片 43 点（360 ｇ）、須恵器片８点（90 ｇ）である。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

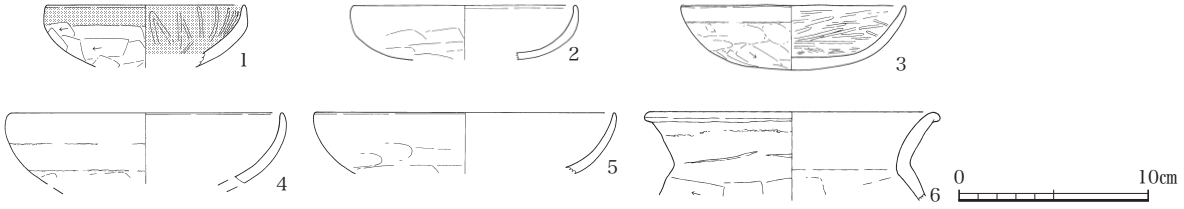


SI-631
１　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-631　P-1
１　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
２　明褐色土　小礫微量。しまりあり。
SI-631　P-2
１　灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 128 図　和田遺跡　SI-631 実測図

ＳＩ－６３１（第 128・129 図、第 61 表、図版二一・五三）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。西に SI-197、北に SK-302 がそれぞれ近接してあるほか、南２m に SI-200b が隣接する。　**重複**　住居跡北半が SI-201 に、中央西寄りが SK-1071 に覆土を切られる。また、北辺中央が SK-1070 に、東辺北寄りが SK-1072 に、北西部が SK-1073 に切られる。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－２°－Ｗである。　**規模**



第 129 図　和田遺跡　SI-631 出土遺物実測図

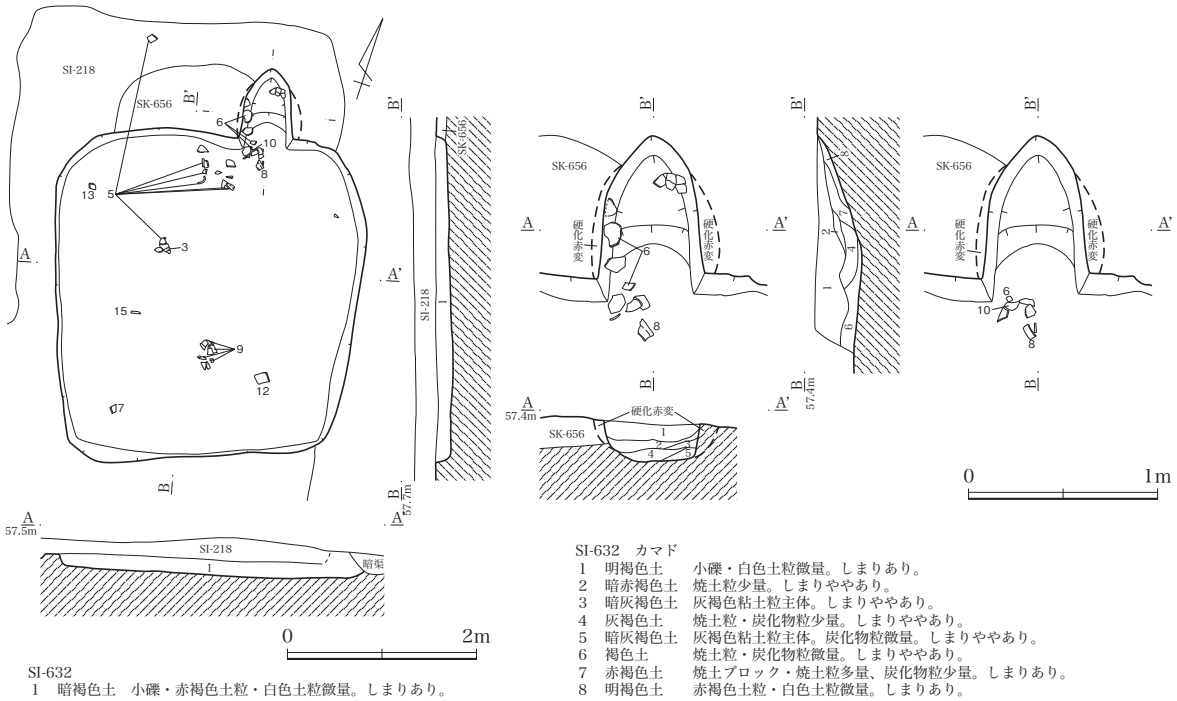
第 61 表　和田遺跡　SI-631 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.4 高　残 3.2 最大 復 10.7	内面口縁～体部ナデ後ヨコナデ後放射状の粗いミガキ。内面全体漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、口縁部外面漆仕上げ。口縁がほぼ垂直に立ち上がる。丸底。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上２㎝ 口～体上半 1/3 No.7
2 土師器 坏	口　復 12.1 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。器壁薄い、偏平な丸底。全体に被熱のためか赤変している。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐礫～粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/3
3 土師器 坏	口　11.9 高　3.4 重　115.4	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後全面を緻密なミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部下半～底部ケズリ後体部上半軽いナデ。器壁やや薄い。丸底。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒褐粗粒多量、白細粒微量 やや硬質	南部床面上８㎝ 完形 No.3
4 土師器 坏	口　復 14.4 高　残 3.7 最大 復 14.8	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅著しく不明瞭。放射状ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上半ナデで紐積痕を明瞭に残す。体部下半ケズリ。口縁部やや内湾する。口縁部外面被熱により赤変。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗粒多量、白細粒微量 やや硬質	北壁際床面上５㎝ 口～体 1/3 No.1
5 土師器 坏	口　復 15.9 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明瞭。外面も磨滅により調整は不明瞭だが口縁ナデ、体部上半軽いナデ、体部ケズリと見られる。器壁薄い、被熱のためか内面赤変。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	北壁際床面上２㎝ 口～体一部 No.2
6 土師器 甕	口　復 15.6 高　残 4.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕・ヘラ状工具痕あり。胴部上端ケズリ。口縁は粘土を折り返して成形し口唇部玉縁状に肥厚する。小型。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒微量 硬質	中央部床面上８㎝ 口一部、胴上端一部 No.5

東西方向が 3.87m、南北方向が 3.70m である。　**覆土の状態**　覆土は明褐色土（第１層）で、炭化物を微量に含む。住居跡北東部の覆土上層には、焼土が集中する部分がある。重複する SI-201 に伴うと推定するが、本住居跡覆土中に堆積したものの可能性もあろう。　**壁**　残存壁高は 15 ～ 25cm であり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　２本（P- １・２）ある。P- １は径 42 × 41cm、深さ 16cm、P- ２は径 30 × 27cm、深さ 12cm である。P- １は段を持って掘り込まれる。P- ２は入口ピットの可能性もあろうか。　**壁溝**　なし。　**火処**　なし。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　出土遺物はわずかで、住居北部及び南部にまとまる傾向がある。土師器がほとんどで、坏は丸底・半球状のもの、甕は長胴ばかりである。図化した遺物は土師器のみで坏の大きさは大小があり、小型の坏２・３は南部から、やや大きな坏４・５は住居跡北壁際から出土する。図化しなかった遺物は土師器片 95 点（1,120 ｇ）、須恵器片１点（50 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀前～中葉と考えられる。

ＳＩ－６３２（第 130・131 図、第 62 表、図版二一・五三・六三）

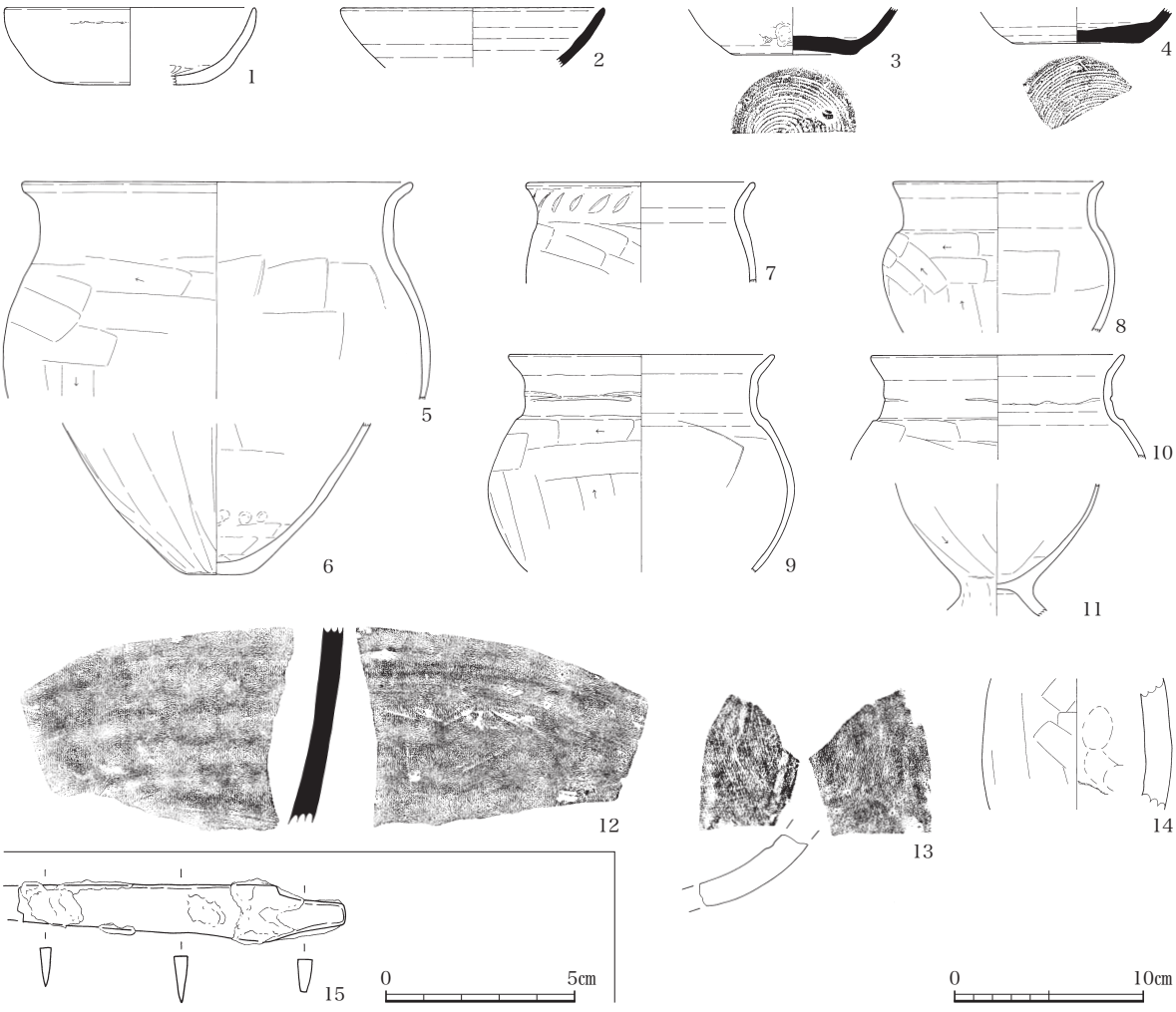
位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15・16 グリッドに位置する。南側では２ｍに SI-217、４ｍに SI-216 が、東４ｍには SI-219 がそれぞれ隣接する。　**重複**　北部で SK-656 を切り、東辺を除く住居跡の大部分が SI-218 に切られる。　**平面形**　やや不整な方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 19°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.48m、南北方向が 3.50m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 12 ～ 15cm であり、壁は外傾して立ち上がる。仮に SI-218 の確認面からの深さを測ると、28 ～ 38cm となる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際東寄りにある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 75cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られている。火床面は床面からわずかに低くなっていく斜面で、煙道へは急に立ち上がったのち緩斜面となり、先端はやや傾斜を増して立ち上がり SI-218 床面である確認面に至る。燃焼部と煙道の



SI-632
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-632　カマド
1　明褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗赤褐色土　焼土粒少量。しまりややあり。
3　暗灰褐色土　灰褐色粘土粒主体。しまりややあり。
4　灰褐色土　　焼土粒・炭化物粒少量。しまりややあり。
5　暗灰褐色土　灰褐色粘土粒主体。炭化物粒微量。しまりややあり。
6　褐色土　　焼土粒・炭化物粒微量。しまりややあり。
7　赤褐色土　　焼土ブロック・焼土粒多量、炭化物粒少量。しまりあり。
8　明褐色土　　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 130 図　和田遺跡　SI-632 実測図



第 131 図　和田遺跡　SI-632 出土遺物実測図

第 62 表　和田遺跡　SI-632 出土遺物観察表

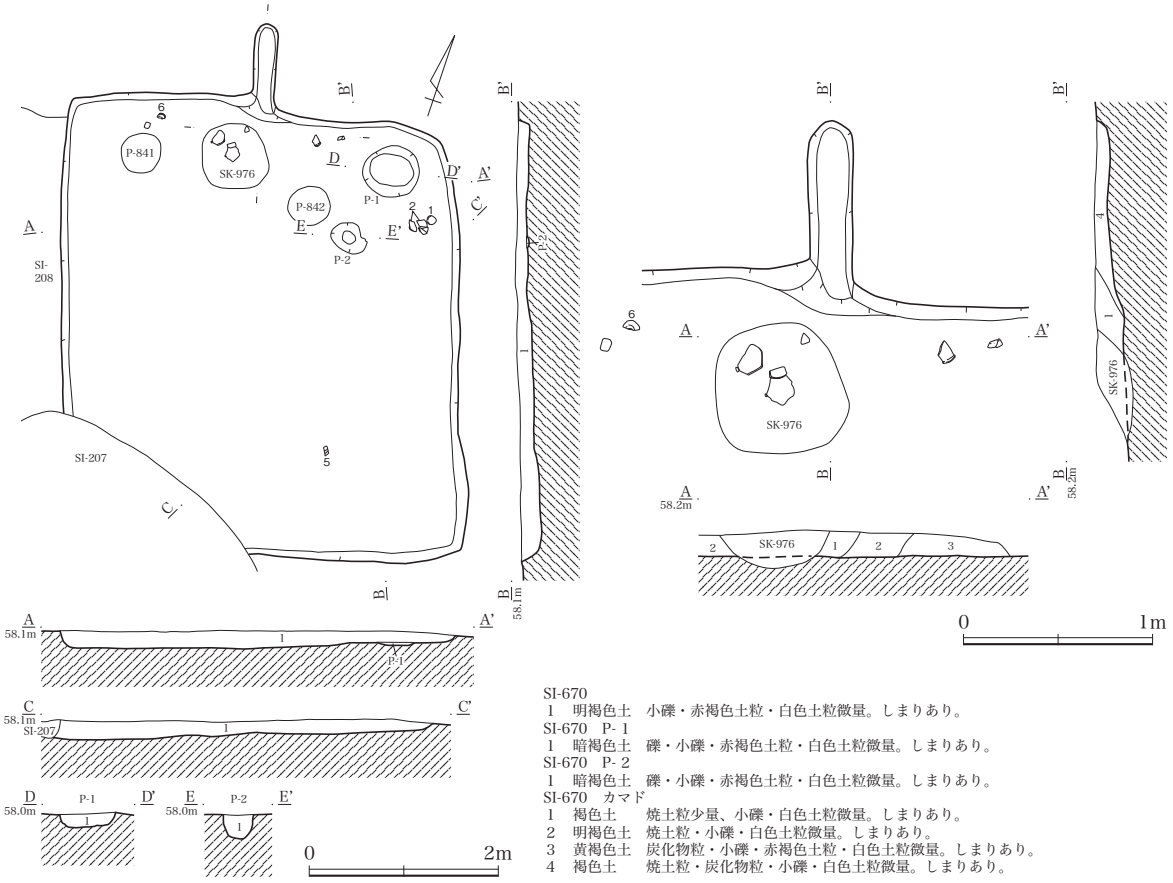
番号 種類 器種	法量 （㎝・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.4 高　4.1 底　復 8.0	内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデ、底部には放射状のヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ナデ、底部ケズリ。武蔵型のような胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白粗粒微量、白細粒少量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/6
2 須恵器 坏	口　復 14.0 高　残 3.1	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口～体上半 1/6
3 須恵器 坏	高　残 2.5 底　復 6.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。体部一部にロクロナデ後ナデを施す部分あり。穴が開くなどのロクロ成形の不具合を修正したものか。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、白細粒少量 硬質	中央部床面上 3 ㎝ 体一部、底 1/2 No.3
4 須恵器 坏	高　残 1.9 底　復 6.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N7/0　灰白 緻密　白・黒微粒微量 硬質	覆土 体下半～底 1/4
5 土師器 甕	口　20.8 高　残 11.5 最大　22.6	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後上半横方向のケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・赤褐礫微量、白細粒少量 硬質	中央部床面直上とカマド南側床面直上、床面上 2 ㎝・12 ㎝と SI-218 覆土が接合 口ほぼ完存、胴上位 1/2 K・No.2・11・12・13、SI-218 No.8
6 土師器 甕	高　残 8.0 底　復 3.4	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。胴部下端に小さな円形のくぼみあり。指頭などの圧痕か。外面胴部下半斜方向にケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　白礫微量、白微量多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド中央部火床面上 2 ㎝・9 ㎝・12 ㎝が接合 胴下半 1/2、底ほぼ完存 KNo.3・5・17
7 土師器 甕	口　復 12.2 高　残 5.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ。斜方向のくぼみは指頭圧痕がヨコナデなどで変形したものか。胴部上半横方向ケズリ。小型。器壁薄い。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤褐細粒微量 硬質	南部床面上 3 ㎝ 口～胴上位 1/3 No.16
8 土師器 台付甕	口　11.2 高　残 8.0 最大　12.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後上端を横方向ケズリ。器壁非常に薄い。武蔵型、小型。11 と同一個体の可能性あり。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　白・黒細粒少量、白微粒多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド中央部火床面直上 口ほぼ完存、胴上位 1/2 KNo.10・11
9 土師器 台付甕	口　14.1 高　残 11.5 最大　16.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、中位にケズリのヘラ状工具のあたりあり。胴部上半縦方向ケズリ後上端横方向ケズリ。器壁かなり薄い。小型。	2.5YR4/6　赤褐 緻密　白微粒多量 硬質	中央部床面直上と床面上 6 ㎝が接合 口ほぼ完存、胴上位 1/2 No.17・5
10 土師器 台付甕	口　復 13.4 高　残 5.5	内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、工具のあたりが鋭く残る。胴部上半横方向のケズリ。小型。武蔵型。	5YR4/6　赤褐 やや緻密　白細～微粒少量、金雲母細粒微量 硬質	カマド中央部火床面上 7 ㎝ 口 1/2、胴上端 1/3 KNo.15
11 土師器 台付甕	高　残 7.0	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。台部上半ナデ。外面胴部下半斜方向のケズリ、台部上半ケズリ後ナデ。小型。8 と同一の可能性高い。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　黒・白細粒微量、白微粒少量、金雲母細粒微量 硬質	カマド 胴下端～台上半完存 K
12 須恵器 甕	高　残 10.4	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ後平行叩き。白色胎土。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰礫微量、白細粒微量 やや軟質	南東部床面上 7 ㎝ 胴破片 No.7
13 瓦 平瓦	長　残 7.9 幅　残 5.7 厚　1.5 重　残 88.2	凹面布目痕模骨痕。凸面ナデ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　灰礫微量、白細粒微量 軟質	北西隅床面上 8 ㎝ 破片 No.1

14 土製品 筒形	高　残 6.9	内面ナデで指頭圧痕・紐積痕あり。外面縦方向に軽いケズリ後多方向の軽いケズリ。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒・赤褐礫微量、白細粒微量 やや硬質	カマド 体部破片 K
15 鉄製品 刀子	長　残 8.8 幅　1.6 厚　0.4 重　残 14.3	刃部先端を欠損する。茎は短く、断面は長方形を呈する。関部は両関で、棟側は直角、刃側は撫角、刃部は平造り。		覆土 切先欠損

側面は構築時の状態を良好に残す垂直気味の壁であり、被熱による硬化赤変が極めて顕著に認められる。覆土は８層で、焼土を多く含む第２・第４・第７層は天井部内面の崩落とみられる。灰褐色粘土を含む第３・第５層は天井部構築材の可能性もあろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は一定量の出土があり、カマドの周辺を中心にまとまる傾向がある。遺物の主体は武蔵型甕・台付甕であり、このほかは武蔵型甕に似た胎土の土師器坏１、須恵器坏・甕などのみである。須恵器高台付坏はない。カマド左袖付近からは、武蔵型甕６・８・10 が出土しており、小型の８は火床面直上からの出土である。武蔵型甕５は、カマドの前面の床面直上から多数の破片となって出土した。図化しなかった遺物は土師器片 237 点（3,100 ｇ）, 須恵器片 12 点（180 ｇ）である。本遺構の年代は９世紀中葉と考えられる。

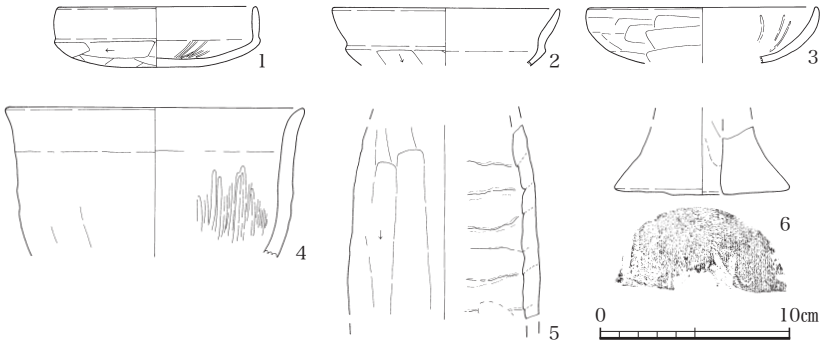
ＳＩ－６７０（第 132・133 図、第 63 表、図版二二）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17、Ｌ－ 17 グリッドに位置する。北東に SI-215 が近接してある。　**重複**　西半で SI-208 を切り、南西隅が SI-207 に、カマド周辺が SK-976 と SB-951 を構成する P-841・842 に切られる。SI-207 内に位置する P-975 とは、南西部が重複するとみられ、覆土の状況などから P-975 の方が新



SI-670
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-670　P- 1
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-670　P- 2
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-670　カマド
1　褐色土　　焼土粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　焼土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　黄褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 132 図　和田遺跡　SI-670 実測図



第 133 図　和田遺跡　SI-670 出土遺物実測図

しいと推定される。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 20°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.14m、南北方向が 4.75m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は７～ 16cm であり、壁は外傾

第 63 表　和田遺跡　SI-670 出土遺物観察表

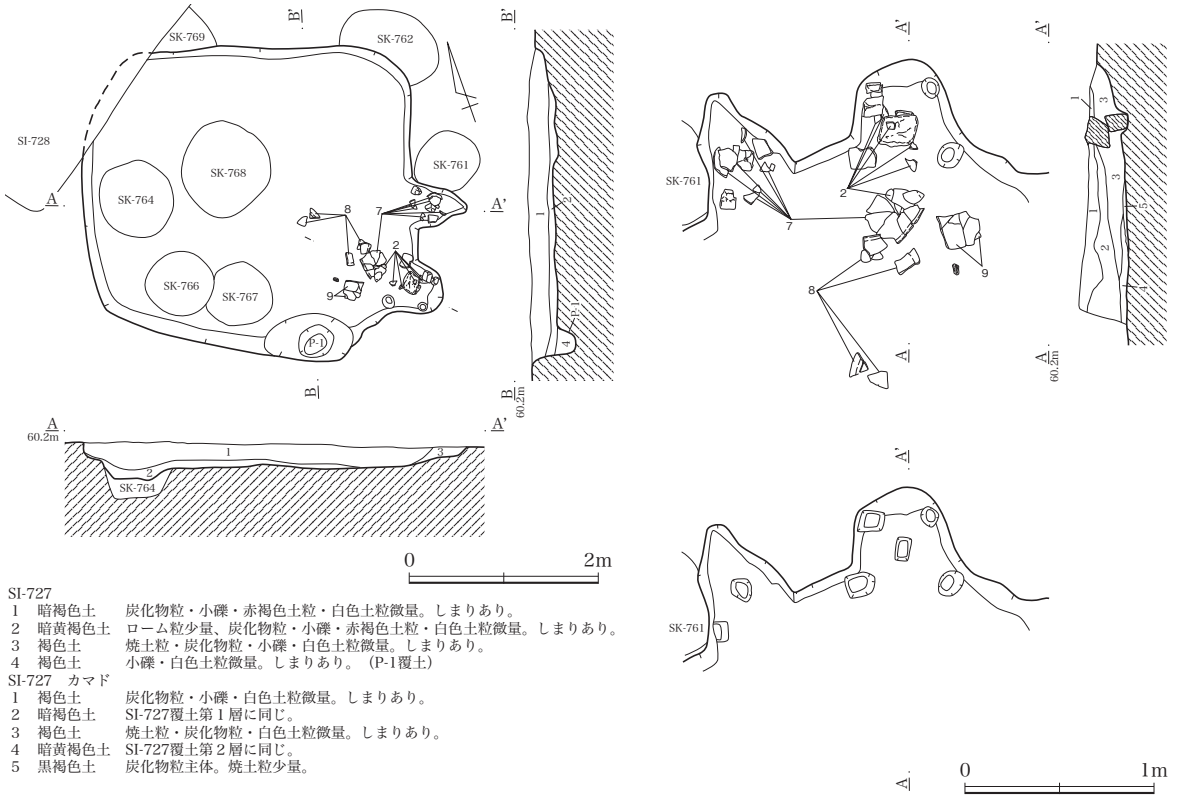
番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.4 高　3.1 最大復 10.9	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後体部～底部ミガキ。表面剝離のためミガキの密度は不明。外面口縁ヨコナデ、体部上端に稜あり、その下をケズリ。平坦な丸底。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量、白微粒微量 やや硬質	東北部床面上４㎝と SI-208（670 か）が接合 口～体 1/3、底ほぼ完形 No.3、SI-208
2 土師器 坏	口　復 12.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上端に稜あり、体部ケズリ。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや硬質	東北部床面上２㎝ 口～体部 1/4 No.1
3 土師器 坏	口　復 12.2 高　残 2.9 最大 復 12.4	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後ミガキ表面剝離のためミガキの粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。器壁薄く、丸底。	5YR2/1　黒褐 やや緻密　赤褐微粒少量、白微粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 口～体上半 1/4
4 土師器 甕	口　復 15.9 高　残 7.9	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後縦方向に粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部被熱により赤変し、表面剝離のため調整不明。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　砂礫少量、白・赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体上半 1/4
5 土製品 筒形	長　残 10.2	内面体部軽いナデで紐積痕を明瞭に残す。外面体部縦方向にケズリ。上下端とも粘土接合面から欠損する。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、赤褐細粒多量、砂礫多量 やや硬質	南部床面上６㎝ 体 1/6 No.4、SI-208
6 土製品 支脚	高　残 3.6 底　復 9.2 孔　2.0	円錐形。外面はやや丁寧なナデ、底面ナデで棒状の圧痕あり。中心に孔あり、孔内面ナデ。外面には赤褐色粘土付着。支脚を固定していた粘土か。	5YR6/6　橙 やや緻密　白礫～細粒少量 やや硬質	北壁際床面上 13 ㎝ 体～底 1/2 SI-680 No.1

して立ち上がる。　**床面**　おおむね平坦で、南に向かってわずかに傾斜する。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　柱穴とみられる P- ２が１本ある。規模は径 40 × 31cm、深さ 20cm である。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は溝状で、東寄りの壁を約 95cm、西よりの壁を約 72 ㎝掘り込んで作られる。煙道の幅は 23cm である。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、５cm ほどの段差を経て平坦な煙道へと続き、先端は外傾して立ち上がる。煙道内面は、被熱により部分的に硬化赤変している。覆土は４層で、第３層は袖部や天井部であったカマド構築材が崩落したものとみられる。このほか、カマド左側でも焼土とともにカマド構築材とみられる明褐色土が確認されていることから、崩落した袖部や天井部はカマド左右に散乱したものと推定できる。　**貯蔵穴**　なし。P- １が貯蔵穴となる可能性はある。　**遺物**　出土遺物は土師器のみで、量も少ない。甕は長胴と球胴、坏は口縁部が直立ないし外傾する模倣坏と半球状のものである。住居北部に比較的まとまっている。床面直上の出土遺物はない。１と２は住居跡の北東部から、筒形土製品５は住居中央部からそれぞれ床面よりやや浮いた状

態で出土している。火床面にあるべき支脚６は、カマドからやや離れた西側から出土である。袖部や天井部の所見とあわせてみると、意図的にカマドを破壊したものと考えられようか。図化しなかった遺物は、土師器甕片のみ 17 点（720 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

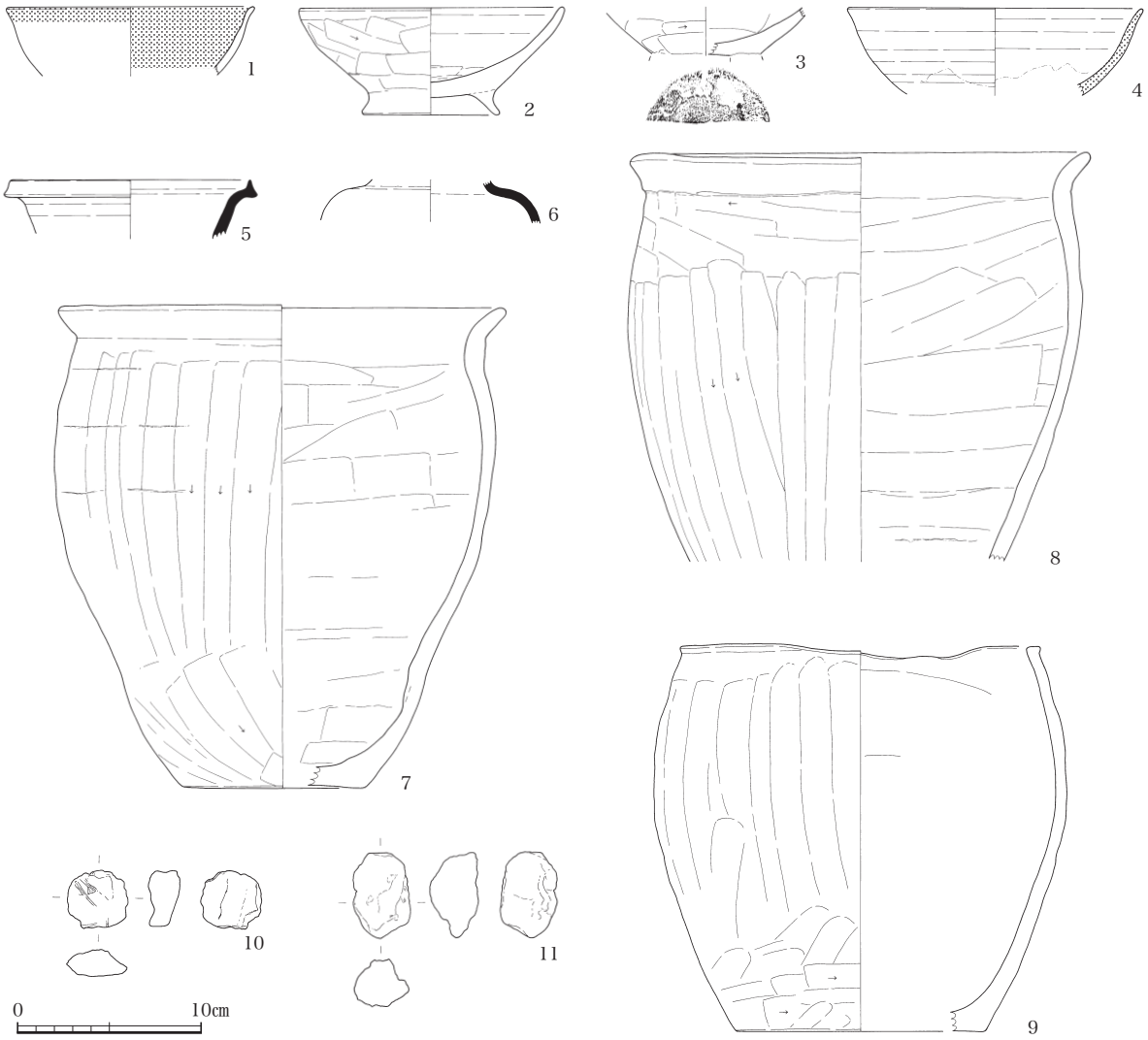
ＳＩ－７２７（第 134・135 図、第 64 表、図版二二・五三）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｈ－ 26・27、Ｉ－ 26・27 グリッドに位置する。北西約３ｍに SI-729、西５ｍに SI-730 が隣接する。　**重複**　北西隅で SI-728 を切る。北東隅が SK-762 に、北西隅が SK-769 に切られる。北カマドが重複する SK-761 とは、土坑覆土に被熱による硬化赤変が認められるため本住居跡の方が新しいと判断する。住居跡内では、中央で SK-768 を、西部で SK-764 を切る。SK-764 と重複する部分の床面と覆土は土坑内に落ち込むように湾曲しているため、SK-764 は本住居跡に伴う可能性もあろう。南壁際にある SK-766・767 は SK-768 などと形状・覆土が類似しており、本住居跡に切られるとみられる。　**平面形**　やや不整な方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 19°－Ｅである。　**規模**　東西方向が 3.50m、南北方向が 3.27m である。　**覆土の状態**　覆土は第１・第２層で、ともに微量の炭化物を含む。第３層は北カマドの覆土である。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 18cm であり、西壁は外傾して緩やかに、他は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸がある。本住居跡に切られる SK-764 部分などでは、床面が大きく窪んでいる。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　東壁際に２基のカマドがある。両カマドとも天井部・袖部は失われており、残存状態は良くない。覆土や構造材の遺存度、遺物の出土状態などから、北寄りのカマド（以下、北カマドとする）から南寄りのカマド（以下、南カマドとする）へと作り替えられたと考えられる。北カマドは壁を約 56cm「Ｖ」字状に掘り込んで作られ、火床面は床面から緩やかに高くなる斜面で、煙道へは一度平坦になったのち先端で丸みを持って立ち上がる。覆土は燃焼部・煙道とも焼土や炭化物を微量に含む褐色



SI-727
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　ローム粒少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。（P-1覆土）
SI-727　カマド
1　褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　SI-727覆土第１層に同じ。
3　褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　SI-727覆土第２層に同じ。
5　黒褐色土　炭化物粒主体。焼土粒少量。

第 134 図　和田遺跡　SI-727 実測図



第 135 図　和田遺跡　SI-727 出土遺物実測図

第 64 表　和田遺跡　SI-727 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 3.8	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。器壁薄い。外面口縁～内面全体黒色処理。	5YR7/6　橙 やや粗い　白細粒多量、白・灰礫微量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 口～体 1/4
2 土師器 高台付坏	口　復 14.5 高　残 5.8 高台　復 7.6	非ロクロ成形。内面口縁～底部ヨコナデ後底部ナデ。調整が粗いため底部細かな凹凸あり。外面口縁ヨコナデ後体部ケズリ、底部ケズリ後ナデか。高台貼り付け。	7.5YR7/8　黄橙 粗い　白細粒多量、砂細粒～砂礫少量 硬質	南カマド中央部火床面上 4 ㎝ 口～体 1/2、底完存、高台 1/5 第 2KNo.2・4・5
3 土師器 高台付坏	高　残 2.6 高 台 基　復 6.0	非ロクロ成形。内面体～底部ナデ。外面体部ケズリ、底部ケズリ後ナデか。高台は貼り付け部分で欠損。内面黒色仕上げの可能性あり。	5YR7/8　橙 やや粗い　細砂粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 体下半～底 1/2、高台欠損 覆土、SK-764、SK-766
4 灰釉陶器 高台付椀	口　復 16.1 高　残 4.7	内面口縁～体部ロクロナデ、灰釉施釉。外面口縁～体部ロクロナデ。灰釉施釉。東濃以外。猿投もしくは遠江か。	2.5Y8/2　灰白 緻密　灰褐細粒微量 硬質	覆土 口～体一部

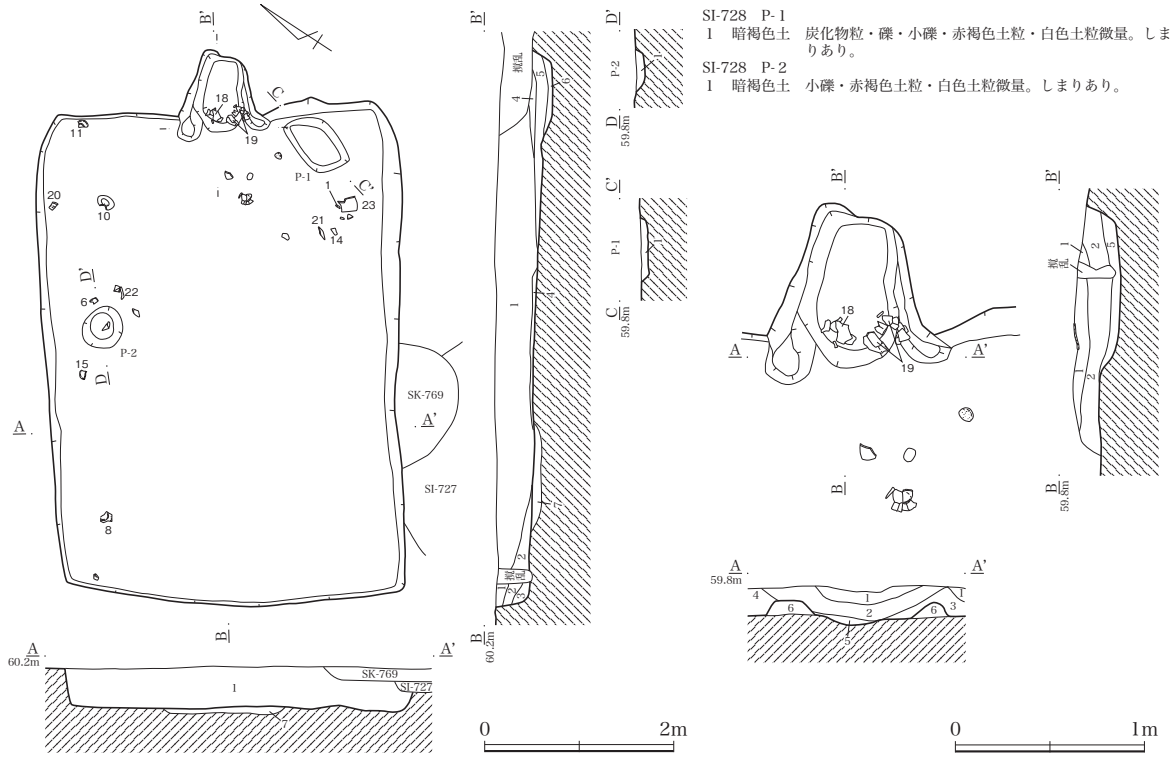
5 須恵器 長頸瓶	口　復 13.8 高　残 3.2	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	5B7/1　明青灰 緻密　白細粒微量、青灰細粒少量 やや硬質	P-1 口破片 P-1
6 須恵器 短頸壺	高　残 2.3	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、自然釉付着。	N 3/0　暗灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 胴上半破片
7 土師器 甕	口　復 24.4 高　26.3 底　復 9.8	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデでヘラ状工具痕明瞭で紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上～中位縦方向のケズリ、下位斜方向のケズリ。底部ケズリ。胴部下半の接合部があり、ここで器壁がやや厚くなるとともに傾斜角度が変化する。外面は平滑だが内面の調整はやや荒い。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒少量、赤褐細粒～礫微量、細砂粒多量、金雲母細粒少量 硬質	北カマド中央部火床面直上～５㎝と南カマド床面上４㎝が接合、北カマドにかけられていた可能性あり 口 5/6、胴上半 2/3、胴下半 1/4、底 1/2 第 1KNo.1・3・4・5・第 2KNo.2
8 土師器 甕	口　復 25.0 高　残 22.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上端工具のあたり痕が残る横方向ケズリ、上半～下半縦方向ケズリ。口縁部下端は胴部のケズリにより段となる。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　砂礫～細粒多量、赤褐粗粒微量 硬質	南カマド床面直上と床面上４㎝が接合 口～胴一部欠損 第 2KNo.1・2
9 土師器 甕	口　復 19.6 高　残 21.0 底　復 13.6 最大 復 22.4	内面口縁ヨコナデ、胴部～底部ナデ。内面胴部全面には横方向の浅い条線が認められる。木目などの凹凸を持つ工具によるナデか。外面口縁ヨコナデ、胴部上～中位縦方向のナデ、下位横方向のケズリ後一部ナデ、底部ケズリ。口縁部は面取りされる。	5YR7/6　橙 やや粗い　白・赤褐細粒微量、砂礫少量、金雲母細粒微量 硬質	南カマド床面上５㎝と６㎝が接合 口 1/3、胴 1/3、底 1/5 覆土、第 2Kno.3・6
10 土製品 粘土塊	長　3.1 幅　3.3 厚　1.7 重　13.0	平面不正円形。断面不正楕円形。捏ねた粘土を固めてそのまま焼成している。裏面は平坦。表面には植物の茎状のものの圧痕あり。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　白粗粒微量、砂礫微量 やや硬質	覆土 完形
11 土製品 粘土塊	長　4.7 幅　3.1 厚　2.6 重　27.8	平面楕円形。断面不正方形。捏ねた粘土を固めてそのまま焼成している。調整なし。	5YR6/8　橙 やや緻密　砂礫微量、白細粒微量 やや硬質	覆土 完形

土であり、人為的な堆積ともみられる。燃焼部を中心としたカマド内面は、被熱の痕跡とみられる硬化赤変が著しい。燃焼部左壁際にはオーバーハングする小孔があり、中に角柱状をしたチャート質の礫を柱のように埋め込む。小孔の規模はおよそ 10cm 角、火床面からの深さは８cm である。礫もおよそ 10cm 角で、長さは 22cm である。相対する右壁際には礫・小孔はないものの矩形の抉り込みが残っており、同様の礫を据えたとみられる。これらは焚口付近を構成する天井部の構造材であろう。火床面中央には支脚とみられる柱状のチャート礫が設置される。礫は約 10cm 角、長さ 17cm で、径 12cm、火床面からの深さ約５cm の小孔内に据えられている。南カマドは、壁を約 40cm「U」字状に掘り込んで作られている。火床面は床面とほぼ同じ高さで、煙道で緩やかな斜面となり先端は丸みを持って立ち上がる。覆土最下層は炭化物主体の第５層で、その上に焼土や炭化物などをわずかに含む第１～第４層が堆積する。燃焼部を中心としたカマド内面は、被熱の痕跡とみられる硬化赤変が著しい。チャート礫のカマド構造材はここでも認められるが、礫を据える小孔は燃焼部の他煙道先端にもあり、ここにも礫を据えたとみられる。小孔の規模は左手前径 16 × 13cm、深さ６cm、右手前径 15 × 12cm、深さ３cm、左奥径 12 × 10cm、深さ２cm、右奥径 10 × ８cm、深さ２cm で、方形を意図した形状をしている。礫が残存するのは左側のみで、左手前が 14 × 11cm、長さ 21cm、左奥は摂理面で割れてしまっているが、およそ 10cm 角、長さは 15cm 程度とみられる。カマド中央覆土中から出土する 14 × 13cm、長さ 20cm のチャート礫は、カマド右側の構造材であろうか。火床面中央には支脚とみられる柱状のチャート礫があり、大きさは約 10cm 角で長さ 12cm で、径 12 × ８cm、火床面からの深さ約５cm の小孔内に据えられている。カマド内及び前面からは、床面からやや浮いた状態で遺物が多量に出

土する。なお、北・南カマドとも種実遺体の検出を目指して覆土の一部を採取し分析を行ったが、種実は検出されなかった。　**貯蔵穴**　南東隅にある（P- 1）。平面形は楕円形で、長軸は南壁と平行する。規模 95 × 51cm、床面からの深さは 20cm である。土層観察上は本住居跡に伴うとすることができるが、全体の形状はピット状であり、貯蔵穴かどうか疑問も残る。　**遺物**　遺物は一定量あり、カマドのある南東部に集中して出土する。土師器甕主体であり、土師器坏や須恵器はわずかである。土師器坏は甕のような荒い胎土のものが目立つ。高台付坏は図化以外にも２個体あるが、平底の坏底部片はない。北カマドの火床直上では、支脚と見られる礫の周囲に破片が分散した状態で土師器甕７が出土する。南カマドの火床面中央部、やや浮いた位置からは土師器高台付坏２が出土する。南カマド前面では、土師器甕８が床面直上から、９がやや浮いた位置から出土している。甕はいずれもカマドにかけられていた可能性がある。カマドの新旧関係からすれば、甕７は古く、甕８・９が新しい段階とみることができる。灰釉陶器椀４は覆土中の出土である。図化しなかった遺物は、土師器坏片 137 点（700 ｇ）、甕片 152 点（1,600 ｇ）、羽釜片１点（15 ｇ）、須恵器片 30 点（392 ｇ）、粘土塊４点（20 ｇ）である。本遺構の年代は 10 世紀中葉頃と考えられる。

ＳＩ－７２８（第 136・137 図、第 65 表、図版二三・五三）

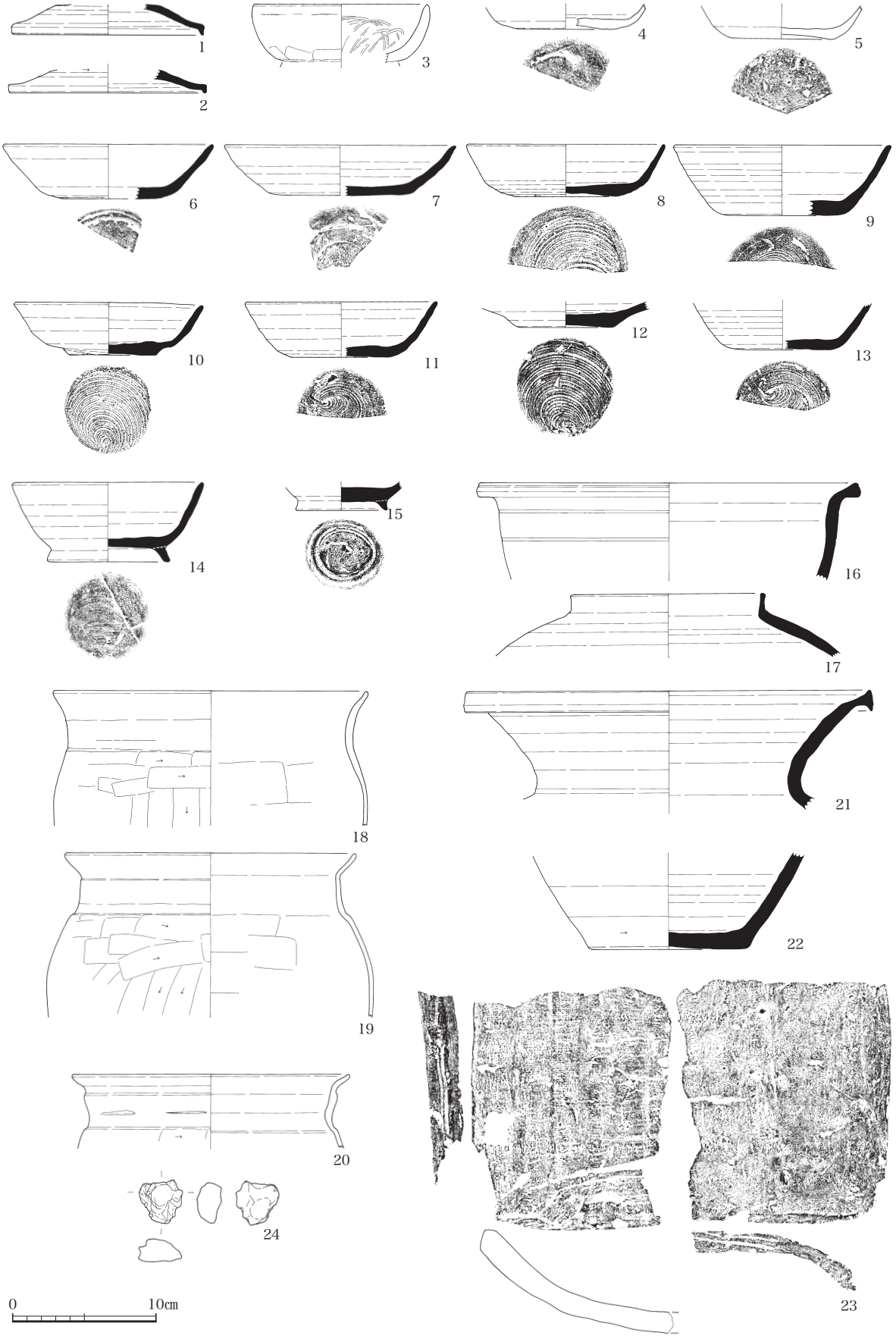
位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｉ－ 26・27 グリッドに位置する。北西に SI-729 が近接してあるほか、西約３ｍに SI-730 が隣接する。　**重複**　南東辺南部が SI-727 と SK-769 に切られる。　**平面形**　長方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 53°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 3.77m、南西－北東方向が 5.26m である。　**覆土の状態**　覆土は第１～第４層で、炭化物が各層に含まれる。このうち、カマドを中心に堆積



SI-728
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　黒褐色土　カマド第１層に同じ。
5　暗褐色土　カマド第２層に同じ。
6　暗灰褐色土　カマド第５層に同じ。
7　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）

SI-728　カマド
1　黒褐色土　炭化材・焼土粒・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土ブロック多量、炭化物粒少量、ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　ローム粒多量、小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗灰褐色土　小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
6　灰褐色土　ローム粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

第 136 図　和田遺跡　SI-728 実測図



第 137 図　和田遺跡　SI-728 出土遺物実測図

第 65 表　和田遺跡　SI-728 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 13.4 高　残 2.1	内面口縁 ～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N6/0　灰 緻密　白微粒少量、黒・白細粒微量 硬質	東部床面上 3 ㎝ 口～天井 1/3 No.8
2 須恵器 蓋	口　復 13.8 高　残 1.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。外面口縁部は、重ね焼きのためか端部から 1 ㎝くらいが濃い色を呈する。	10YR7/1　灰白 緻密　黒・白微粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 口～体 1/5
3 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 4.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半～底部ケズリ。口縁部外面紐積痕あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　黒・白微粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口～底 1/6
4 土師器 坏	高　残 1.8 底　復 6.8	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し。	5YR6/6　橙 緻密　黒・白微粒多量、黒・赤褐細粒少量、白礫微量 硬質	覆土 体～底 1/4
5 土師器 坏	高　残 2.4 底　復 7.0	ロクロ成形。内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しか？	7.5YR7/6　橙 やや粗い　黒細粒少量、黒粗粒・黒礫微量 やや軟質	覆土 体～底 1/3
6 須恵器 坏	口　復 14.8 高　残 3.8 底　復 8.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。口縁部外面黒褐色。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒多量、黒細粒少量、黒粗粒微量 やや軟質	西壁際床面上 3 ㎝ 口～底破片 No.10
7 須恵器 坏	口　復 16.2 高　3.5 底　復 10.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白微粒多量、白細粒少量、白粗粒微量 やや硬質	カマド 口～底 1/6 東 K
8 須恵器 坏	口　復 13.8 高　3.6 底　7.0	内面口縁部～底部ロクロナデ。外面口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周回転ケズリ。	N6/0　灰 やや緻密　白微粒多量、白粗粒少量、白礫微量 硬質	西隅床面上 7 ㎝、正立 口一部、体～底 1/2 No.14
9 須恵器 坏	口　復 15.2 高　4.9 底　復 7.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ。	5GY6/1　オリーブ灰 緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量、白粗～白礫微量 やや硬質	覆土 口～底 1/3
10 須恵器 坏	口　13.2 高　3.7 底　6.0 重　148.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～底部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。焼成にムラがあり、1/3 ほどが硬質で 2/3 は硬質。内面底部にヘラ状工具をあてた痕跡あり。	N5/0　灰 緻密　黒・白微粒多量、白粗粒微量 硬質	北部床面直上、正立 ほぼ完形 No.3
11 須恵器 坏	口　復 13.4 高　3.8 底　復 7.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。口縁部外面は重ね焼きのためか黒褐色を呈する。	10Y6/1　灰 緻密　黒・白微粒多量、黒細粒少量、黒粗粒・灰礫微量 硬質	北隅床面上 7 ㎝ 口～底 1/3 No.1
12 須恵器 坏	高　残 1.8 底　6.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒・白微粒多量、白粗粒少量、白礫微量 やや軟質	覆土 体一部、底完存
13 須恵器 坏	高　残 3.2 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5Y7/1　灰白 緻密　黒・白微粒多量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 体～底 1/3
14 須恵器 高台付坏	口　復 13.4 高　5.6 高台　復 8.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。	5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒多量、黒褐細粒少量、灰褐粗粒微量 やや軟質	東部床面直上 口～体 1/3、底ほぼ完存、高台 1/3 No.6
15 須恵器 高台付坏	高　残 2.0 高台　6.4	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部調整不明。高台貼付け。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　白微粒多量、黒細粒少量、白礫～細粒微量 やや軟質	西壁際床面上 14 ㎝ 底～高台完存 No.13

16 須恵器 鉢	口　復 26.8 高　残 6.8	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部に２条のごく浅い沈線あり。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒多量、黒・白微粒少量、黒礫微量 やや軟質	覆土 口～体破片
17 須恵器 壺	口　復 13.6 高　残 4.4	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白微粒多量、白粗粒少量、白礫微量 硬質	覆土 口～胴上破片
18 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 9.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　黒・白微粒多量、黒細粒少量、白粗粒微量、金雲母細粒微量 硬質	カマド中央部火床面上 22 ㎝、横位 口～胴上半 1/6 KNo.3・東 K
19 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 11.5 最大 復 22.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデ、中位に巾 1.3 ㎝の無調整帯あり。胴部上端横方向、上半縦方向のケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量、砂礫微量、金雲母細粒微量 硬質	カマド中央部火床面上 12 ㎝と 21 ㎝が接合、横位、カマドのかけられていた可能性あり 口～胴上半 1/3 KNo.1・2
20 土師器 甕	口　復 19.4 高　残 5.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白細粒多量、砂微粒少量、砂礫微量 硬質	西壁際床面直上 口 1/6 No.2
21 須恵器 甕	口　復 28.6 高　残 8.3	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、自然釉付着。	10Y7/1　灰白 緻密　黒褐・白微粒多量、白細粒少量、白粗粒微量 硬質	東部床面上 11 ㎝ 口破片 No.5
22 須恵器 甕	高　残 6.7 底　復 11.2	内面胴部下半～底部ロクロナデで指頭圧痕残る。外面胴部下半ロクロナデ後下端ケズリ。底部ナデ。	5GY6/1　オリーブ灰 緻密　黒褐・白微粒多量、白細粒少量、白礫微量 硬質	北西部床面直上 胴～底 1/4 No.12
23 瓦 平瓦	長　残 17.0 幅　残 13.2 厚　1.3 重　634.8 高　残 7.6	凹面布目痕後一部ナデ、模骨痕あり、側縁ケズリ、狭端縁ケズリ。凸面縄叩き。側面ケズリ。狭端面ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 粗い　黒褐・赤褐微粒多量、白細粒少量、黒粗粒少量、砂礫微量、赤褐礫～細粒少量 硬質	東部床面上６㎝ 破片 No.9
24 土製品 粘土塊	長　3.1 幅　3.0 厚　2.0 重　11.4	平面不正三角形。断面不正楕円形。捏ねた粘土を固めてそのまま焼成している。調整なし。	5YR5/6　明赤褐 粗い　白細粒多量、礫多量 やや硬質	覆土 完形

する第４層は炭化物を多量に含む。　**壁**　残存壁高は 36 ～ 40cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　中央部南寄りが浅い土坑状に掘り窪められ、炭化物を含む暗褐色土（第７層）で貼床される。床面からの深さは約 10cm である。　**柱穴**　北西壁際中央に１ヶ所のピットがある（P- ２）。規模は径 47 × 40cm、深さ 17cm であり、形状から柱穴とは考えにくい。覆土中から遺物が少量出土する。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北東壁際中央にある。天井部は失われており、残存状態は良くない。規模は 100 × 97cm で、煙道部は壁を約 70cm「U」字状に掘り込んで作られている。袖部は炭化物などを微量に含む灰褐色土（第６層）で構築されており、燃焼部から煙道の内面には同様の土が貼られる。火床面は床面から約 10cm 掘り込まれていて、煙道へはほぼ同じ高さで平坦に続き、先端は外傾して立ち上がる。カマド内面の被熱の痕跡は明瞭ではない。覆土は第１～第５層で、焼土ブロックを多量に含む第２層が天井部内面の崩落だろう。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- １）。平面形は不整長方形で、規模は 64 × 45cm、床面からの深さは９cm である。底面は平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**遺物**

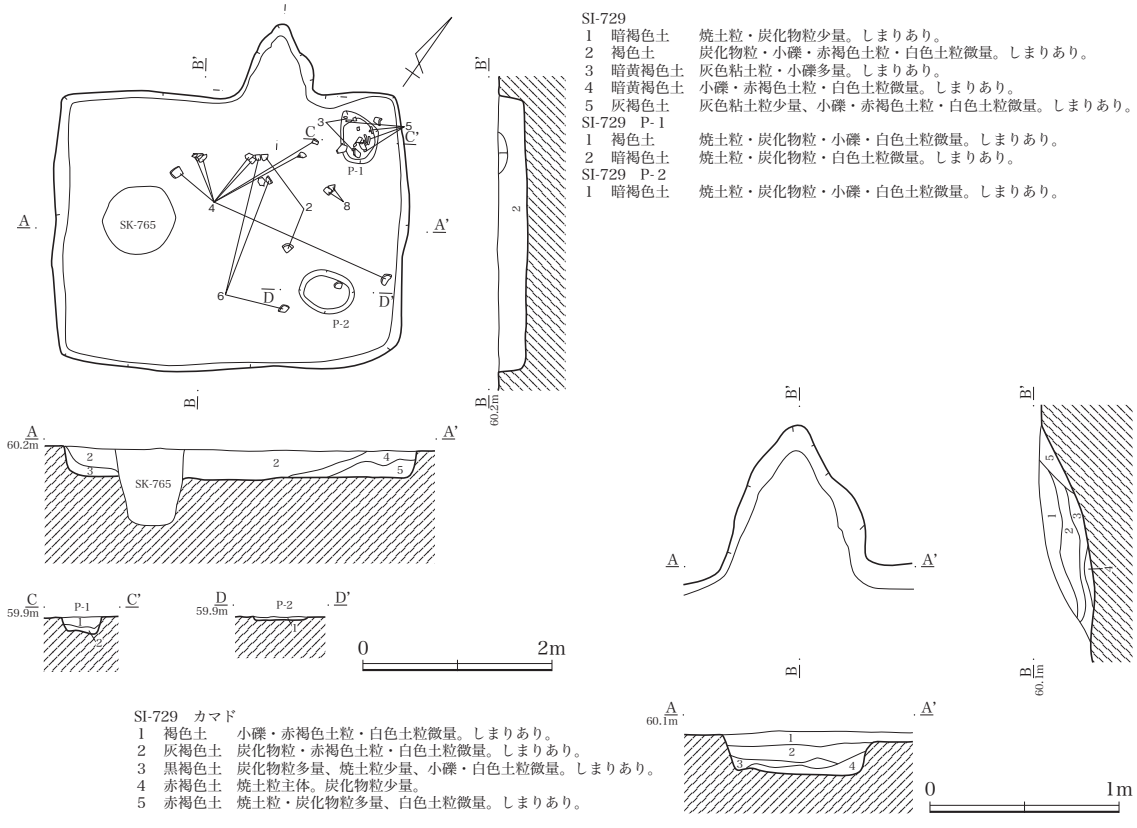
出土遺物は多く、住居跡北半の北壁際やカマド付近、貯蔵穴のある南東部周辺にまとまる。土師器は武蔵

型甕主体で、厚手な甕片もわずかにみられる。平底の坏はあるが、高台付坏はない。カマドからは、武蔵型甕 18・19 が火床底面よりやや高い位置で出土する。貯蔵穴南西からは須恵器蓋１、高台付坏 14、甕 21、平瓦 23 がまとまっており、14 は床面直上での出土である。ほぼ完形の須恵器坏 10 は住居北部の床面直上より正立の状態で出土している。須恵器甕 21 は、隣接する SK-767 出土甕須恵器甕２と同一個体の可能性がある。須恵器坏の出土数は多く、底部切り離しは糸切りが主体となる。回転糸切り離し後無調整は 10 ～ 13、回転糸切り離し後外周回転ケズリは８・９、回転ヘラ切り離し後無調整は６・７である。図化以外では糸切り後無調整・糸切り後外周回転ケズリは７～８個体、ヘラ切りは３～４個体確認できる。図化しなかった遺物は土師器坏片 72 点（510 ｇ）、甕片 598 点（4,050 ｇ）、須恵器蓋片８点（50 ｇ）、坏片 123 点（1,010 ｇ）、甕片 20 点（500 ｇ）、粘土塊９点（50 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

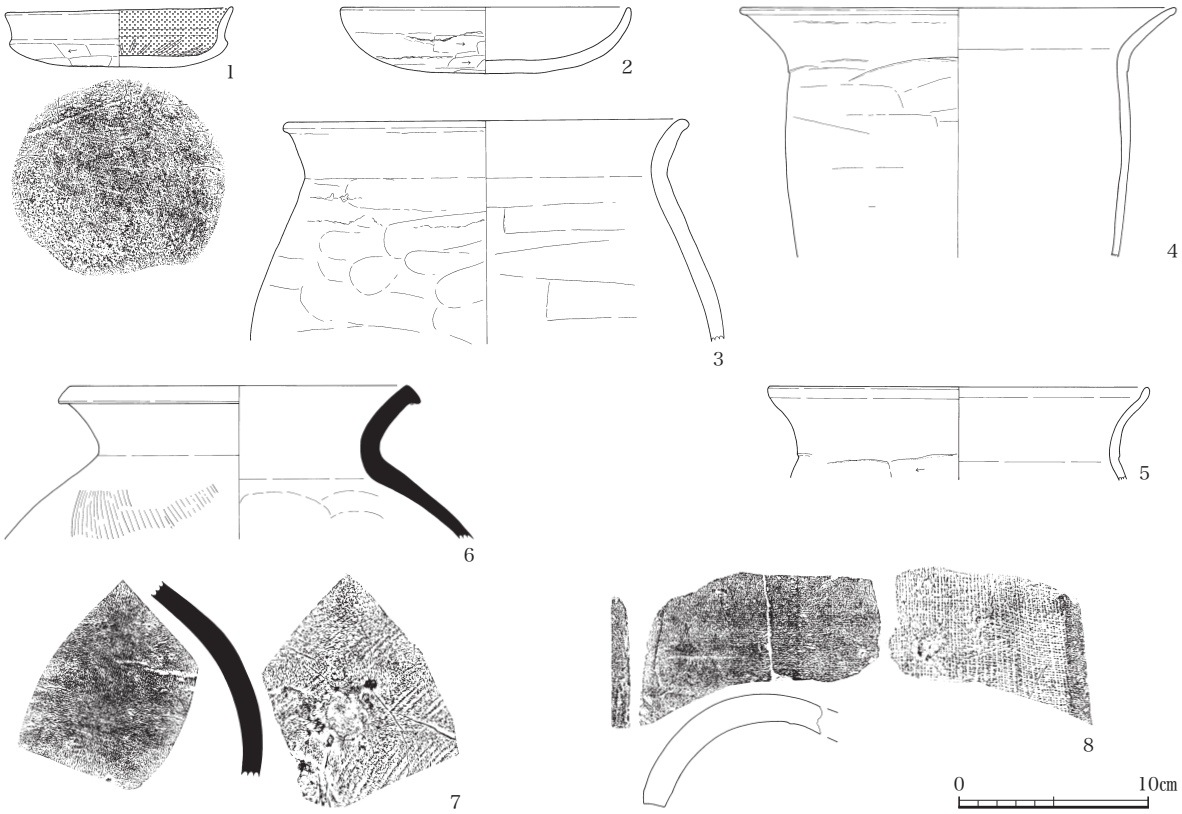
ＳＩ－７２９（第 138・139 図、第 66 表、図版二三）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｉ－ 27 グリッドに位置する。南東に SI-728 が近接してあるほか、南東約３ｍに SI-727、南西約２ｍに SI-730 が隣接する。　**重複**　西部が SK-765 に切られる。　**平面形**　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 45°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 2.87m、北西－南東方向が 3.74m である。　**覆土の状態**　５層で、壁際に堆積する第３・第５層には灰色粘土が含まれる。第１層は撹乱の可能性がある。　**壁**　残存壁高は 27 ～ 32cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。

堀方・貼床　なし。　**柱穴**　東隅に楕円形のピットがある（P- ２）。規模は径 58 × 45cm、深さは 4cm しかなく、柱穴とは考えにくい。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約 74cm「Ｕ」字状に掘り込んで作られていて、火床面は



第 138 図　和田遺跡　SI-729 実測図



第 139 図　和田遺跡　SI-729 出土遺物実測図

第 66 表　和田遺跡　SI-729 出土遺物観察表

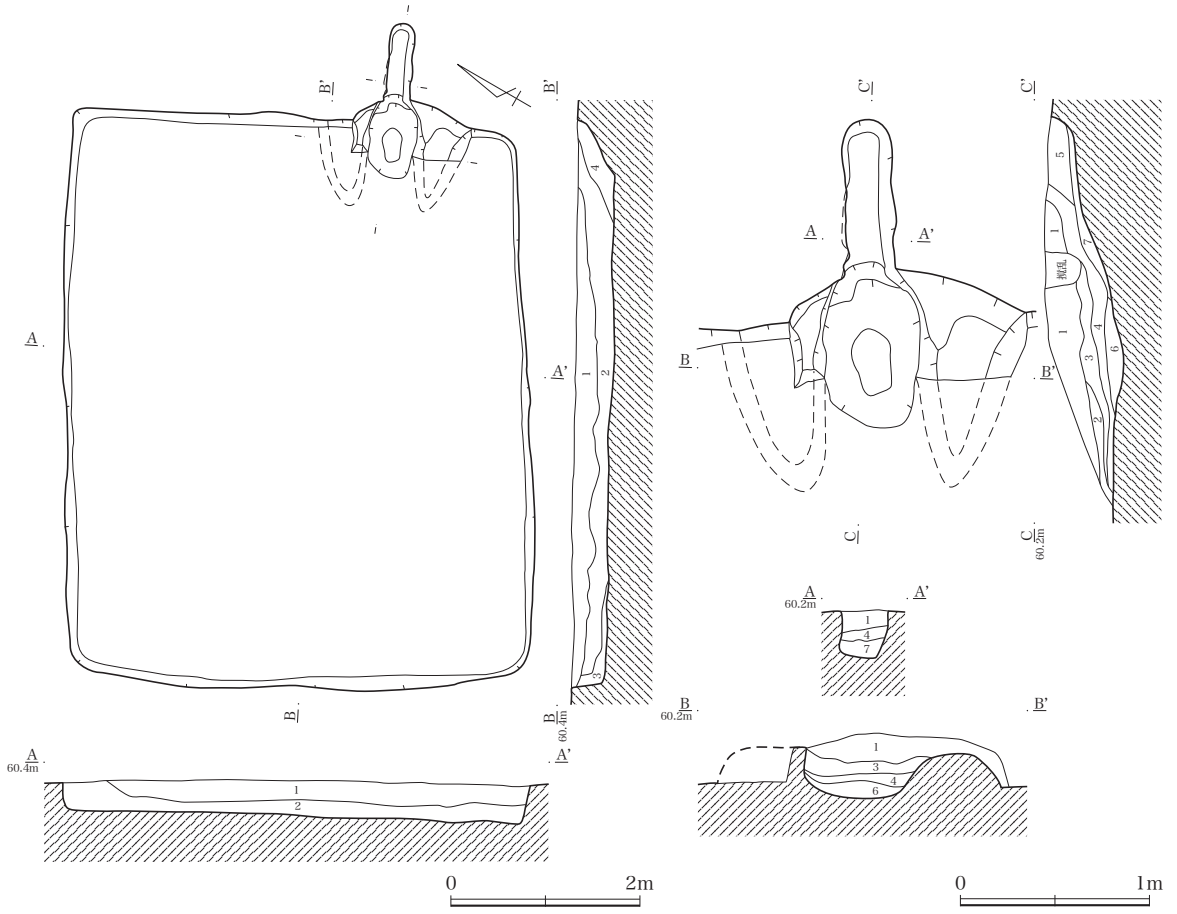
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　12.0 高　3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後体～底部放射状のミガキ、内面全面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、底部中央ややくぼみわずかに木葉痕残る。全体的にややひずむ。	10Y3/1　オリーブ黒 やや緻密　灰黒・白細粒多量、透明微粒多量 やや硬質	覆土 口～体 4/5、底完存
2 土師器 坏	口　復 15.3 高　3.5	内外面とも表面磨滅著しい。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁～ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5Y8/4　淡黄 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや軟質	北部床面上３㎝と中央部床面上３㎝が接合 口一部、体一部、底完存 No.8・16
3 土師器 甕	口　復 21.4 高　残 11.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面調整は荒く、細かな凹凸や紐積痕残る。球胴。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒少量 軟質	貯 蔵 穴（P-1）　内、底面直上と上３㎝が接合 口 1/3、胴上半 1/3 P-1・P-1 No.1・4
4 土師器 甕	口　復 23.1 高　残 13.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量、砂細粒少量 硬質	中央部床面直上～上２㎝と東部床面上５㎝が接合 口 3/4、胴上半 1/2 K・No. 1・2・5・6・9・10・18
5 土師器 甕	口　復 20.2 高　残 4.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。口縁上端は内湾する。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒多量、赤褐粗粒～細粒微量 やや硬質	貯 蔵 穴（P-1）　内、底面直上と上３㎝と６㎝が接合 口～胴上半 1/3 P-1・P-1No.1・2・3・4

6 須恵器 甕	口　復 19.2 高　残 8.1	内面口縁ロクロナデ、胴部上端無文当具痕あり。外面口縁ロクロナデ、胴部上端平行叩き。	2.5Y8/2　灰白 やや粗い　灰黒細粒多量、白粗～細粒少量 軟質	中央部床面直上と東部床面上２㎝が接合 口～胴上端 1/3 K・No.4・7・15
7 須恵器 甕	高　残 10.5	内面胴部ナデ、粘土の接合痕あり。外面胴部平行叩き、自然釉とともに窯壁片付着。破片中央がえぐれているのは、付着した窯壁片を除去した壁に欠損したものだろう。	2.5Y7/1　灰白 緻密　黒褐細粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 胴破片
8 瓦 丸瓦	長　残 7.0 幅　残 9.4 厚　1.5 重　残 184.6 高　6.0	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白礫～細粒多量、赤褐細粒多量 硬質	北部床面直上 破片 No.11・12

床面よりわずかに低くなったあと徐々に高くなっていく。火床面から煙道へはほぼ同じ傾斜で続き、先端はそのまま立ち上り確認面に至る。覆土は５層で、火床面直上の第４層と煙道部の第５層は多量の焼土を含んでおり、天井部内面の崩落とみられる。灰褐色の第２層は天井部の崩落であろう。カマド内面の被熱の痕跡は燃焼部、煙道部とも顕著であり、広い範囲が被熱により硬化赤変する。　**貯蔵穴**　北隅にある（P- 1）。平面形は不整楕円形で、規模は 51 × 39cm、床面からの深さは 18cm である。底面は凹凸があり、壁は外傾して短く立ち上がる。覆土は焼土や炭化物を含む第１・第２層である。　**遺物**　遺物は少なく、カマドと貯蔵穴がある住居中跡北部にまとまる。貯蔵穴内からは土師器甕３・５が出土する。丸底の土師器坏２と“武蔵型甕４、須恵器甕６は、住居中央部に破片が散乱した状態で出土した。４と６の破片中には床面直上から出土するものもある。摸倣坏１は古墳時代後期遺物の混入であろう。図化しなかった遺物は土師器片 119 点（1,320ｇ）、須恵器片３点（145 ｇ）で、土師器では坏と甕が同量ずつくらいある。本遺構の年代は８世紀代であろう。

ＳＩ－７３０（第 140・141 図、第 67 表、図版二三）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｈ－ 27・28、Ｉ－ 27・28 グリッドに位置する。北東約２ｍに SI-729、北東３ｍに SI-728、東約５ｍに SI-727、南約４ｍに SI-731 がそれぞれ隣接する。　**重複**　なし。　**平面形**　長方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 61°－Ｅである。　**規模**　南西－北東方向が 6.30m、南東－北西方向が 4.96m である。　**覆土の状態**　４層で全体に炭化物が含まれており、南西－北東方向断面図のカマドに近い部分では第１層下部に炭化物粒が特に集中する。第４層はカマドに関連する堆積土である。　**壁**　残存壁高は 31 ～ 40cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北東壁際南寄りにある。天井部は失われているが地山掘り残しによる袖部は確認でき、規模は 138 × 163cm である。煙道部は長く、壁を溝状に約 78cm 掘り込んで作られている。調査時に袖部左右先端と左袖外側を削ってしまったが、両袖部とも壁から 90cm ほど張り出していたことが痕跡から推定される。火床面は床面から約５cm 掘り込まれていて、煙道へは緩やかに高くなったあと平坦面となり、先端は外傾して立ち上がる。カマド内面の被熱の痕跡は明瞭で、燃焼部から煙道にかけての広範囲が硬化赤変している。また、カマド左側では使用時の内面形状を保っている部分が多く、丸みを持ってオーバーハングする燃焼部と煙道の内壁が見られる。覆土は７層で、焼土ブロック主体の第３・第５層が天井部内面の崩落だろう。火床面直上の第６層は多量の炭化物を、煙道部最下層の第７層も炭化物を比較的多く含む。なお、種実遺体の検出を目指して覆土の一部を採取し分析を行ったが、種実は検出されなかった。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、土師器は甕片主体である。甕は武蔵型が、坏は半球状で丸みを持つ平底のものが多い。ロクロ成形の坏はない。図化した遺物はすべて覆土中の出土で、甕底部２はカマ



SI-730
1　褐色土　　礫少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-730　カマド
1　褐色土　　ローム粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　赤褐色土　焼土ブロック主体。しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。
5　赤褐色土　焼土ブロック主体。しまりあり。
6　黒褐色土　炭化物粒多量、焼土粒少量。しまりあり。
7　明褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、粘土粒微量。しまりあり。

第 140 図　和田遺跡　SI-730 実測図

第 141 図　和田遺跡　SI-730 出土遺物実測図

第 67 表　和田遺跡　SI-730 出土遺物観察表

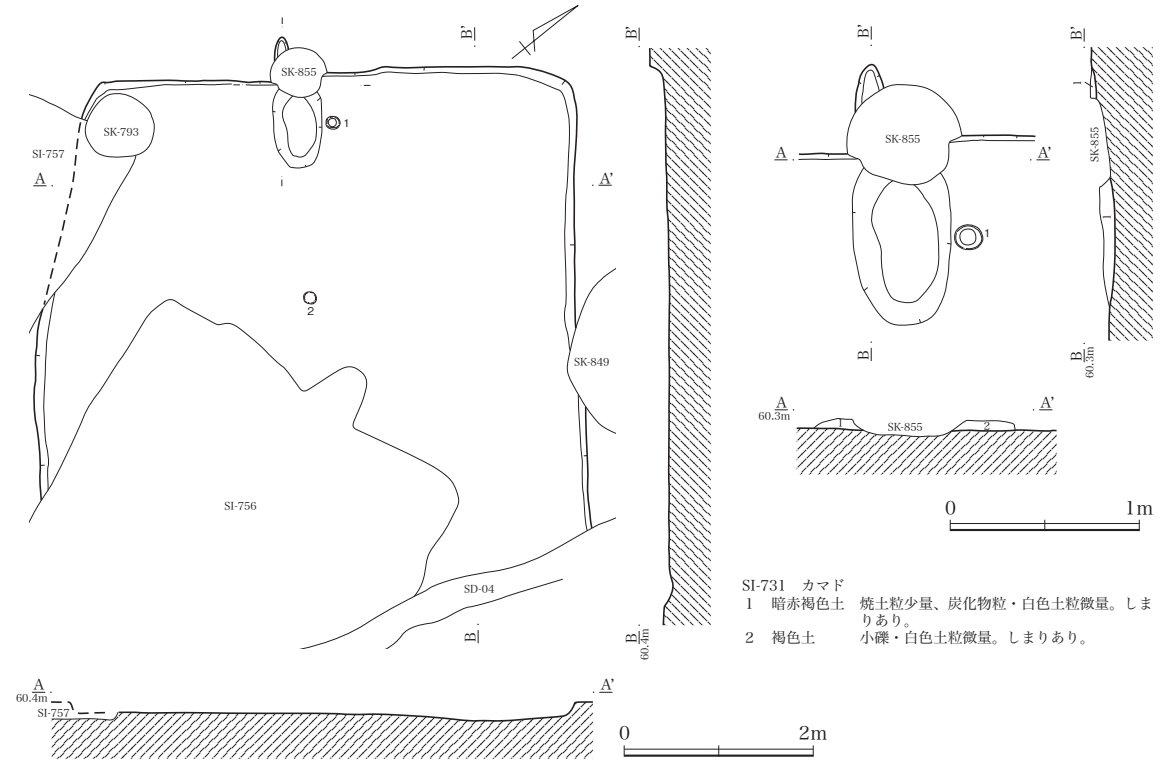
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 2.9 底　復 7.0	内面体～底部ナデ後放射状の粗いミガキ、内面黒色処理。外面体部ナデ、底部ナデ、外面調整は荒く紐積痕や細かな凹凸が目立つ。丸味を持つ平底。	2.5Y8/3　淡黄 やや緻密　灰黒細粒多量、灰黒礫微量 やや軟質	覆土 体～底 1/3
2 土師器 甕	高　残 3.0 底　復 7.0	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ、外面には被熱赤変した粘土が付着する。武蔵型。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　赤褐・白細粒多量、砂細粒多量 硬質	カマド 胴下端～底 1/3 K
3 土製品 支脚	高　4.8	内面体部ナデでヘラ状工具痕あり。外面体部ナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗粒多量 やや軟質	覆土 体破片

4 石 礫	長　4.9 幅　2.8 厚　0.9 重　20.0	平面不正長方形。断面長方形。側面が平滑、砥石の可能性あり。	5Y3/1　オリーブ黒 緻密　粘板岩 硬質	覆土 完形

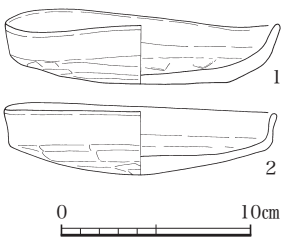
ド周辺より出土した。図化しなかった遺物は土師器坏片 37 点（410 ｇ）、甕片 36 点（430 ｇ）、甑片 1 点（20 ｇ）、須恵器片 4 点（160 ｇ）である。古墳時代後期遺物の混入も見られる。本遺構の年代はおよそ 8 世紀後半以降と考えられる。

ＳＩ－７３１（第 142・143 図、第 68 表、図版二三・五三）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｇ－ 28、Ｈ－ 27・28 グリッドに位置する。西に SI-732 が近接するほか、北約 4 m に SI-730 が隣接する。　**重複**　住居跡南部が SI-756 に大きく切られるほか、東隅付近が SD-04 に、西隅が SK-793 に、北西部のカマド付近が SK-855 にそれぞれ切られる。西隅付近は、SI-757 にも切られるとみられる。北東辺中央付近が SK-849 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　方形か長方形とみら



第 142 図　和田遺跡　SI-731 実測図



第 143 図　和田遺跡
SI-731 出土遺物実測図

れるが、南東壁の位置が不明のため特定できない。仮に南東壁が SD-04 との重複地点付近と考えれば、ほぼ方形と推定できる。南東－北西方向の中軸線はＮ－ 52 °－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 5.80m である。南東－北西方向は不明だが、南東壁が SD-04 付近とすれば、およそ 5.60m である。　**覆土の状態**　記載はないが、写真から判断すると緻密な暗褐色土である。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 15cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦だが、北東壁寄りはやや低くなっている。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。

第 68 表　和田遺跡　SI-731 出土遺物観察表

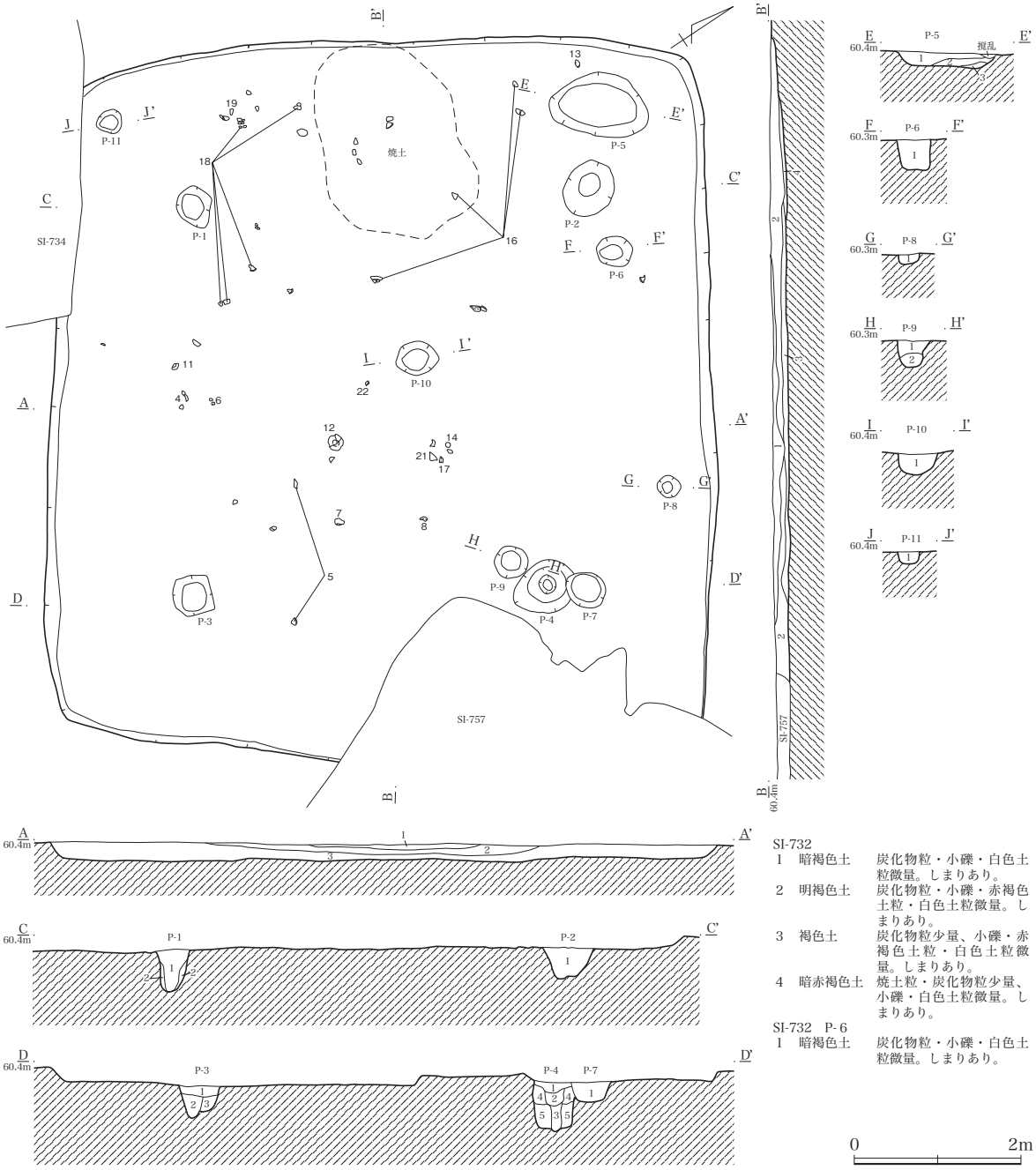
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　14.6 ～ 13.4 高　3.9 重　200.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ工具痕。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。全体的にひずみあり。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　青灰礫微量、赤褐礫～粗粒多量 硬質	カマド西側床面直上、正立 完形 KNo.1
2 土師器 坏	口　14.4 高　3.8	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。口縁部ややひずむ。	7.5YR8/2　灰白 やや緻密　赤褐礫～粗粒多量、白細粒微量 硬質	中央部床面上２cm ほぼ完形 No.1 SI-756 周辺

火処　カマドが北西壁際中央にある。天井部・袖部とも失われているほか、SK-855 に大きく切られるため残存状態は良くない。煙道部は壁を約 47cm 細い溝状に掘り込んで作られていて、火床面は床面よりわずかに低くなったあと徐々に高くなっていく。煙道底面は平坦で、先端は緩やかに立ち上り確認面に至る。覆土は２層で、第１層は少量の炭化物を含む。　貯蔵穴　なし。　遺物　遺物はごくわずかで、完形の土師器坏１はカマド前面右側の床面直上より正立した状態で出土した。坏２もほぼ完形で、住居中央部の床上２cm より出土する。図化しなかった遺物は土師器片 24 点（260 g）、須恵器片２点（40 g）である。土師器は甕と坏が同量ずつくらいあるが、重複する SI-756 の遺物も混入していると見られる。本遺構の年代は７世紀前半と考えられる。

ＳＩ－７３２（第 144・145 図、第 69 表、図版二四・五三）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｇ－ 28・29、Ｈ－ 28・29 グリッドに位置する。東に SI-731 が近接してあるほか、北約２m に SI-733 が隣接する。　重複　西隅が SI-734 に、東隅が SI-757 にそれぞれ切られる。　平面形　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 58°－Ｗである。　規模　南西－北東方向が 7.95m、南東－北西方向が 8.65m である。　覆土の状態　４層で、第１層と第２層下面～第３層上面に炭化物が多量に含まれる。第４層は北西壁際中央付近にある焼土集中部分の土層で、平面的には 244 × 174cm の楕円形をしている。　壁　残存壁高は７～ 21cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　床面　ほぼ平坦で、北西壁際は壁に向かってわずかに高くなる緩斜面となっている。　堀方・貼床　なし。　柱穴　主柱穴と推定されるものは４本（P- １～ P- ４）ある。P- １は径 52 × 43cm、深さ 50cm、P- ２は径 70 × 57cm、深さ 37cm、P- ３は径 49 × 46cm、深さ 48cm、P- ４は径 78 × 60cm、深さ 58cm である。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 4.75m、P- ３－ P- ４間が 4.75m、P- ３－ P- １間が 4.70m、P- ４－ P- ２間が 4.82m である。P- ４は柱穴と掘方が明瞭に分層できる。このほか、住居跡内にはピットが６本（P- ６～ P-11）ある。P- ６は径 43 × 38cm、深さ 37cm、P- ７は径 50 × 42cm、深さ 23cm、P- ８は径 29 × 25cm、深さ 11cm、P- ９は径 40 × 38cm、深さ 31cm、P-10 は径 51 × 41cm、深さ 25cm、P-11 は径 30 × 28cm、深さ 14cm である。　壁溝　なし。

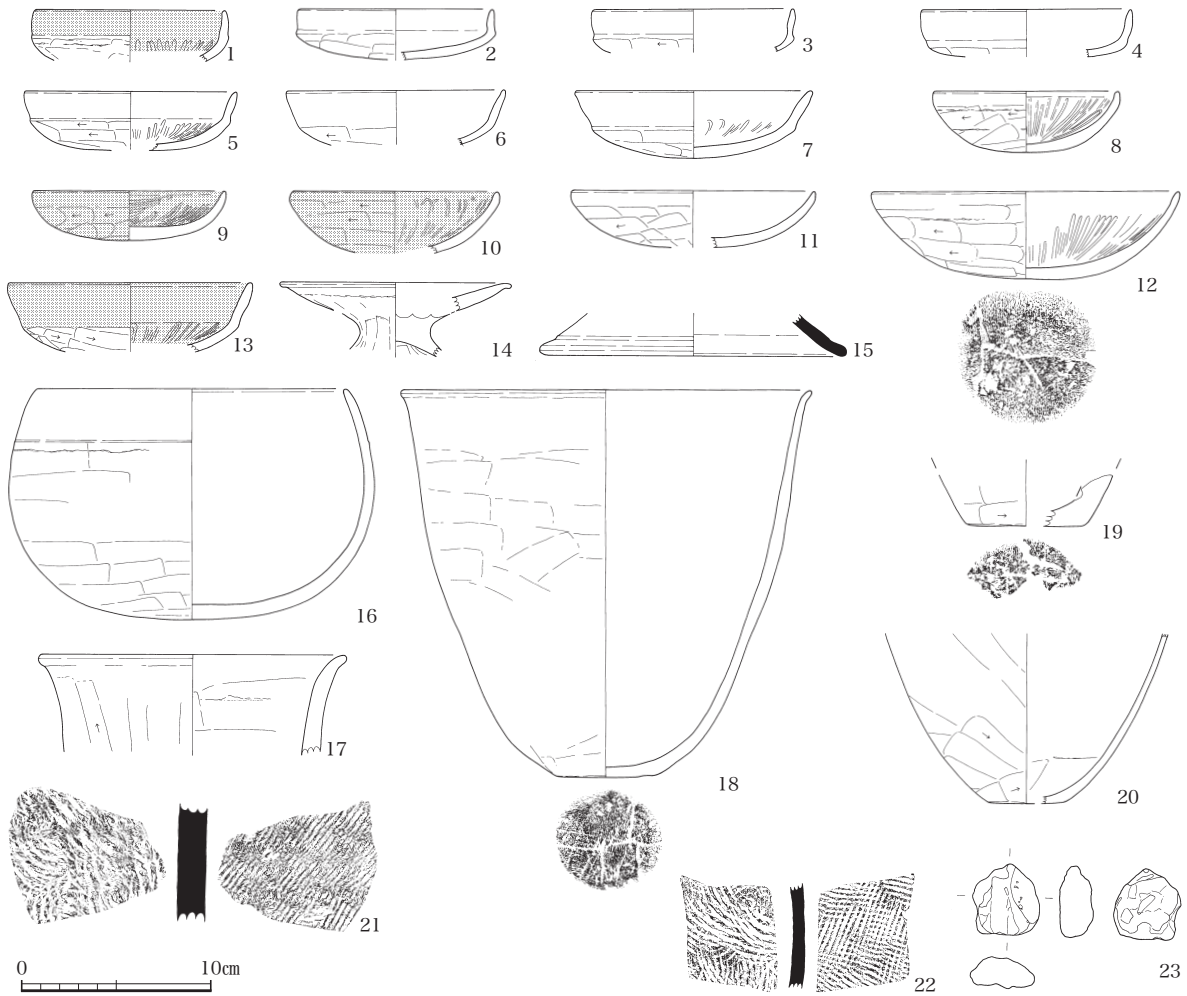
火処　なし。北西壁際中央の床面直上で焼土が確認できたが、カマドや炉と特定するには至らない。　貯蔵穴　北隅にある（P- ５）。平面形は不整楕円形で、規模は 120 × 77cm、床面からの深さは 17cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は３層で、第１層に炭化物を含む。　遺物　遺物は多く、住居跡全体から出土する。土師器主体で、坏よりも甕の方が多い。甕は器壁が厚いものが多く、小さな長胴甕が目立つ。武蔵型のような胎土の破片も少量含まれる。坏５・12、須恵器甕片 21 は床面直上より出土する。図化しなかった遺物は土師器片 901 点（7,865 g）、須恵器片４点（20 g）、粘土塊９点（65 g）である。図化以外には、長胴甕 10 個体、鉢３個体、坏は口縁部が直立ないし外傾する模倣坏が 13 個体、半球状 10



SI-732　P- 1
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P- 2
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P- 3
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫少量。しまりややあり。
3　褐色土　小礫多量。しまりややあり。
SI-732　P- 4
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗褐色土　小礫少量、炭化物粒・礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SI-732　P- 5
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明灰褐色土　礫・小礫微量。しまりあり。
SI-732　P- 7
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P- 8
1　暗灰褐色土　ローム粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P- 9
1　暗褐色土　小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P-10
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-732　P-11
1　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 144 図　和田遺跡　SI-732 実測図



第 145 図　和田遺跡　SI-732 出土遺物実測図

第 69 表　和田遺跡　SI-732 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.0 高　残 2.7 最大 復 10.3	内面口縁～体部ヨコナデ後体部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。外面口縁内面全面漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐・白粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/3
2 土師器 坏	口　復 10.4 高　残 2.7 最大 復 10.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。漆仕上げの可能性あり。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐礫少量、黒・白細粒少量 やや硬質	覆土 口～底 1/4
3 土師器 坏	口　復 10.7 高　残 2.3	内面口縁～体部ヨコナデ、漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒粗～微粒少量 硬質	覆土 口～体 1/4
4 土師器 坏	口　復 11.2 高　残 2.5	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白・黒細粒微量 やや硬質	中央部床面上 2 cm 体一部 No.17
5 土師器 坏	口　復 11.2 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。漆仕上げの可能性あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐・白礫微量、白細粒微量 硬質	中央南部床面直上 口～体ほぼ完存 No.12・14

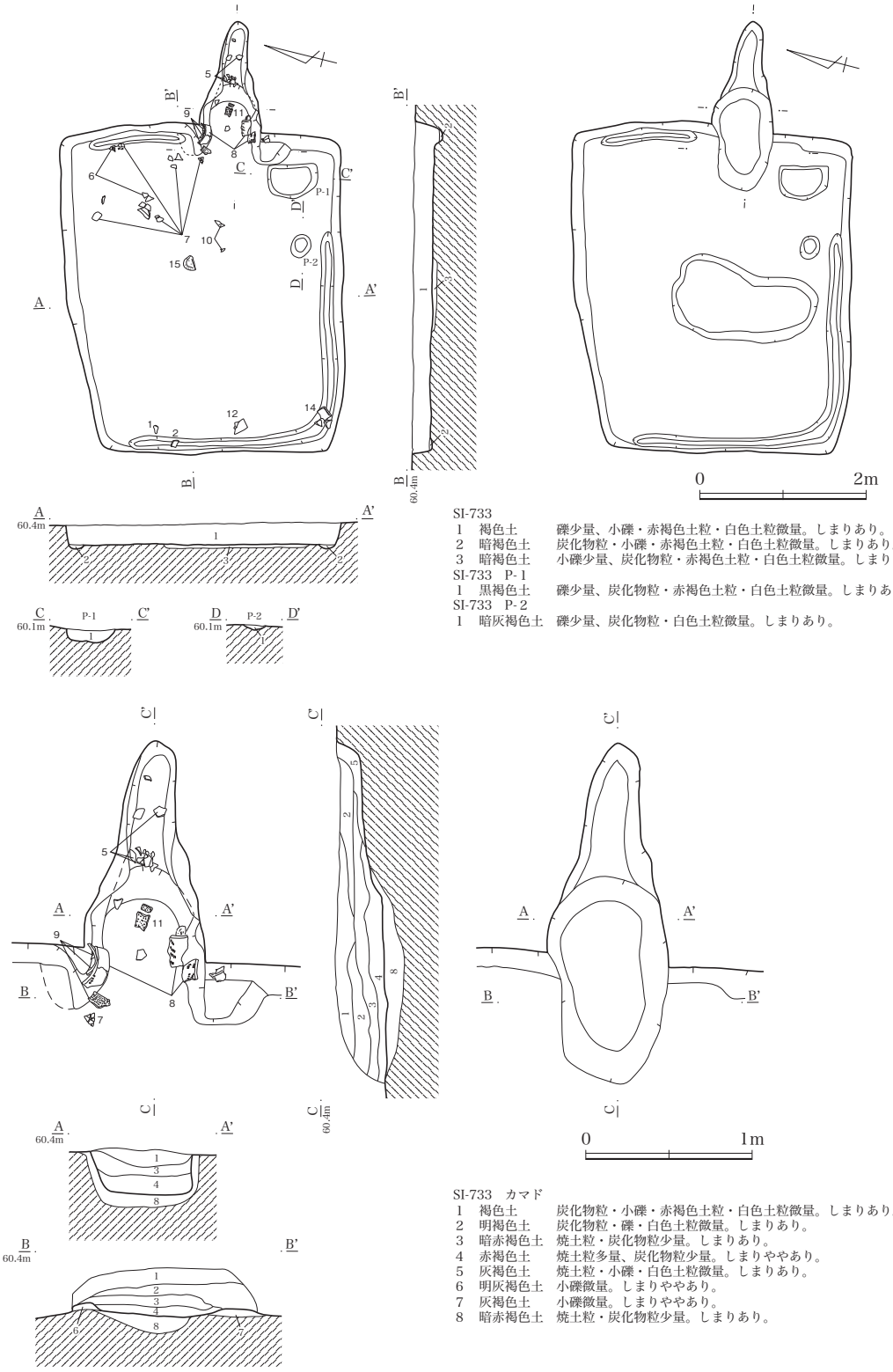
6 土師器 坏	口　復 11.6 高　残 2.8	内面口縁～体部ヨコナデ･ナデ後ミガキ、漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒･赤褐礫微量、細砂粒少量 やや硬質	中央部床面上 6 ㎝ 口 1/4、体 1/6 No.16
7 土師器 坏	口　復 12.5 高　3.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外面とも表面磨滅が著しい。	10YR8/2　灰白 緻密　黒礫微量、黒細粒少量、砂細粒少量 硬質	中央部床面上 14 ㎝ 口～体 1/2、底ほぼ完存 No.11
8 土師器 坏	口　復 9.9 高　3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・赤褐粗～細粒微量、白粗粒微量 やや硬質	中央部床面上 14 ㎝ 口～底 3/4 No.10
9 土師器 坏	口　復 10.2 高　2.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後斜方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外面全面漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/4、底ほぼ完存
10 土師器 坏	口　復 11.1 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。内外全面漆仕上げ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐・白粗～細粒微量、微砂粒少量 硬質	覆土 口 1/4、体 1/6
11 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ、ミガキの可能性あるが不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　白粗～細粒微量、赤褐粗粒少量 やや硬質	中央部床面上 5 ㎝ 口～底 1/4 No.18
12 土師器 坏	口　16.3 高　4.7 重　275.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。底部に沈線 1 本あり。木葉痕か。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　赤褐・白粗粒少量、白・灰黒細粒少量 やや硬質	中央部床面直上 ほぼ完形 No.4
13 土師器 坏	口　復 12.9 高　残 3.6	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後放射状の粗いミガキ、内面全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、口縁漆仕上げ。口縁部上半内湾気味となる。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒細粒少量 やや硬質	北隅床面上 7 ㎝ 口～体 1/4 No.28
14 土師器 高坏	口　復 12.2 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ､脚部上端ヘラナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリと思われるが表面磨滅のため不明瞭。脚部縦方向のケズリ、紐積痕あり。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、赤褐細粒・微粒多量 硬質	中央部床面上 8 ㎝ 口 1/5、脚上端完存 No.7
15 須恵器 高坏	高　残 2.2 底　復 16.2	内面脚部ロクロナデ。外面脚部ロクロナデ、端部に段あり。	N5/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 脚端破片
16 土師器 鉢	口　復 16.6 高　12.2 最大 復 19.4	内面口縁ヨコナデ､体～底部ヨコナデ･ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで体部上端紐積痕あり。半球状。外面口縁～体部外面全体表面剥離著しい。被熱により赤変する。丸底。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒微量、黒微粒少量 やや硬質	中央部 2 ㎝・6 ㎝と北部 5 ㎝・6 ㎝が接合 口～体 1/2、底ほぼ完存 No.25・26・27・29
17 土師器 甕	口　復 16.2 高　残 5.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ケズリ。長胴、小型。	5YR6/8　橙 やや粗い　黒・白・灰礫微量、粗砂粒少量 硬質	中央部床面直上 10 ㎝ 口～胴上位 1/5 No.8
18 土師器 甕	口　復 21.8 高　20. 5 底　5.2	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリか。底部木葉痕あり。内外面とも表面剥離著しい。特に外面体部は被熱により赤変しているためさらに剥離が激しい。長胴。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　黒･赤褐礫微量、白粗粒微量、砂礫少量 やや硬質	中央部床面上 5 ㎝・6 ㎝と西部 10 ㎝・16 ㎝が接合 口～胴 1/2、底完存 No.20・21・22・32・33
19 土師器 甕	高　残 2.7 底　復 6.2	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部木葉痕。長胴。	7.5YR4/6　褐 やや粗い　黒・赤褐粗粒微量、粗砂粒少量 硬質	西部床面上 10 ㎝ 胴下端～底 1/3 No.33
20 土師器 甕	高　残 9.0 底　復 4.0	内面胴部～底部ナデ。外面胴部下半ケズリ､底部ケズリ。武蔵型。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒･白細粒微量、黒微量少量、砂細～砂微粒多量 硬質	覆土 胴下半～底 1/3

21 須恵器 甕	高　残 6.2	内面胴部同心円当具痕。外面平行叩き。	N4/0　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	中央部床面直上 胴破片 No.35
22 須恵器 甕	高　残 5.5	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。内面は青灰色だが、表面・断面は褐色。	N5/0　灰 緻密　白礫～微粒微量 やや硬質	中央部床面上 8.8 ㎝ 胴破片 No.1
23 土製品 粘土塊	長　3.7 幅　3.6 厚　1.8 重　16.0	平面不正円形。断面不正楕円形。捏ねた粘土を固めてそのまま焼成している。上面にナデた痕跡あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　灰・赤褐礫微量、砂礫少量 やや硬質	覆土 完形

個体、口縁部が外傾し上半で内湾するもの３個体が確認できる。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

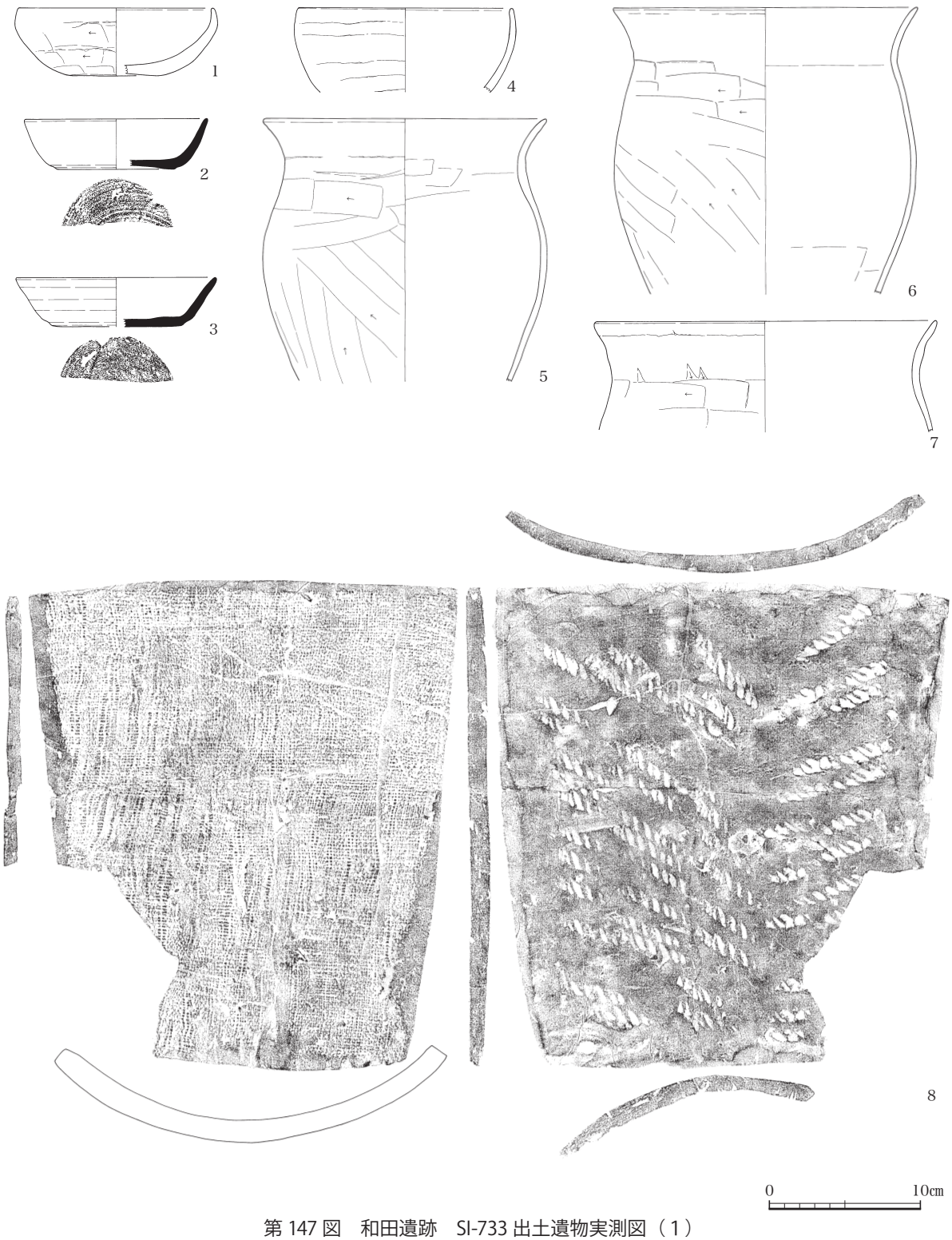
ＳＩ－７３３（第 146 ～ 149 図、第 70 表、図版二四・五三・五四）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｈ－ 29、Ｉ－ 29 グリッドに位置する。南２ｍに SI-732、南約９ｍに SI-734 が隣接する。　**重複**　なし。　**平面形**　長方形で、東西方向の中軸線はＮ－ 77°－Ｅである。　**規模**　南北方向が 3.38m、東西方向が 3.98m である。　**覆土の状態**　緻密な褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 21 ～ 30cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　中央部が楕円形に浅く掘り込まれ、炭化物を含む暗褐色土（第３層）で埋め戻されて貼床される。床面からの深さは３～６cm である。　**柱穴**　南東部に１本（P- ２）ある。規模は径 28 × 24cm、深さ６cm であり、柱穴とは考えにくい。　**壁溝**　南西部と東壁北半に掘り込まれている。断面形は「U」字状で、幅は 12 ～ 28cm、深さは床面から３～５cm である。　**火処**　東壁際やや南寄りにカマドがある。天井部は失われているが、袖部は確認できる。規模は 123 × 168cm である。煙道部は長く、壁を溝状に約 79cm 掘り込んで作られている。左袖部は調査時に外側を削ってしまったが、規模は右袖部と同程度だったとみられる。燃焼部内面には袖部と同様の第６・第７層が貼られた上に、平瓦８・９を構築材として使用する。平瓦８は、一枚を分割して左右両袖に使用する。左側は旧状を良く残しており、平瓦９に平瓦８の一部を重ねて立てている。右側は平瓦８が１枚で、瓦の裏側からは径 10cm ほどの円礫が出土することから、一部に礫を裏込めとしたことがわかる。燃焼部内面は被熱により硬化赤変する部分が多い。火床面は床面から約 10cm 掘り込んだのち、焼土や炭化物を含む第８層で埋め戻して構築しており、高さは床面とほぼ同じである。煙道へ段を持って高くなったのち平坦面となり、先端は外傾して立ち上がる。燃焼部から煙道にかけては使用時の内面形状を良く保っており、丸みを持ってオーバーハングする燃焼部と煙道の内壁が見られる。覆土は５層で、焼土を多く含む第３・第４層が天井部内面の崩落、第２層は天井部本体の崩落したものだろう。なお、種実遺体の検出を目指して覆土の一部を採取し分析を行ったが、後世の混入と考えられるもの以外に種実は検出されなかった。　**貯蔵穴**　南東隅にある（P- １）。平面形は楕円形で、規模は 60 × 41cm、床面からの深さは 13cm である。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して丸みを持って立ち上がる。覆土は炭化物を含む第１層である。　**遺物**　遺物は少なめで、土師器は甕主体、須恵器はわずかである。土師器甕は武蔵型が多く、器壁の厚い甕片は少ない。住居跡内ではカマド内に集中するほか、中央部と西壁際より出土する。平瓦８・９は燃焼部内面に張られたカマド構築材である。カマド中央部の火床面直上からは平瓦 11 が出土している。煙道出土の甕５はカマドに掛けられていた可能性がある。甕６・７は、住居中央部と北隅から分散した状態で床面直上より出土した。瓦は、凸面に格子目叩きがある 12・13 以外は、内面の布目の様相が類似する。岡窯跡群との関連が考えられる凸面の入子状極印文は平瓦９・10 で確認できており、本遺構出土瓦が同窯跡群産である可能性はあろう。９・



第 146 図　和田遺跡　SI-733 実測図

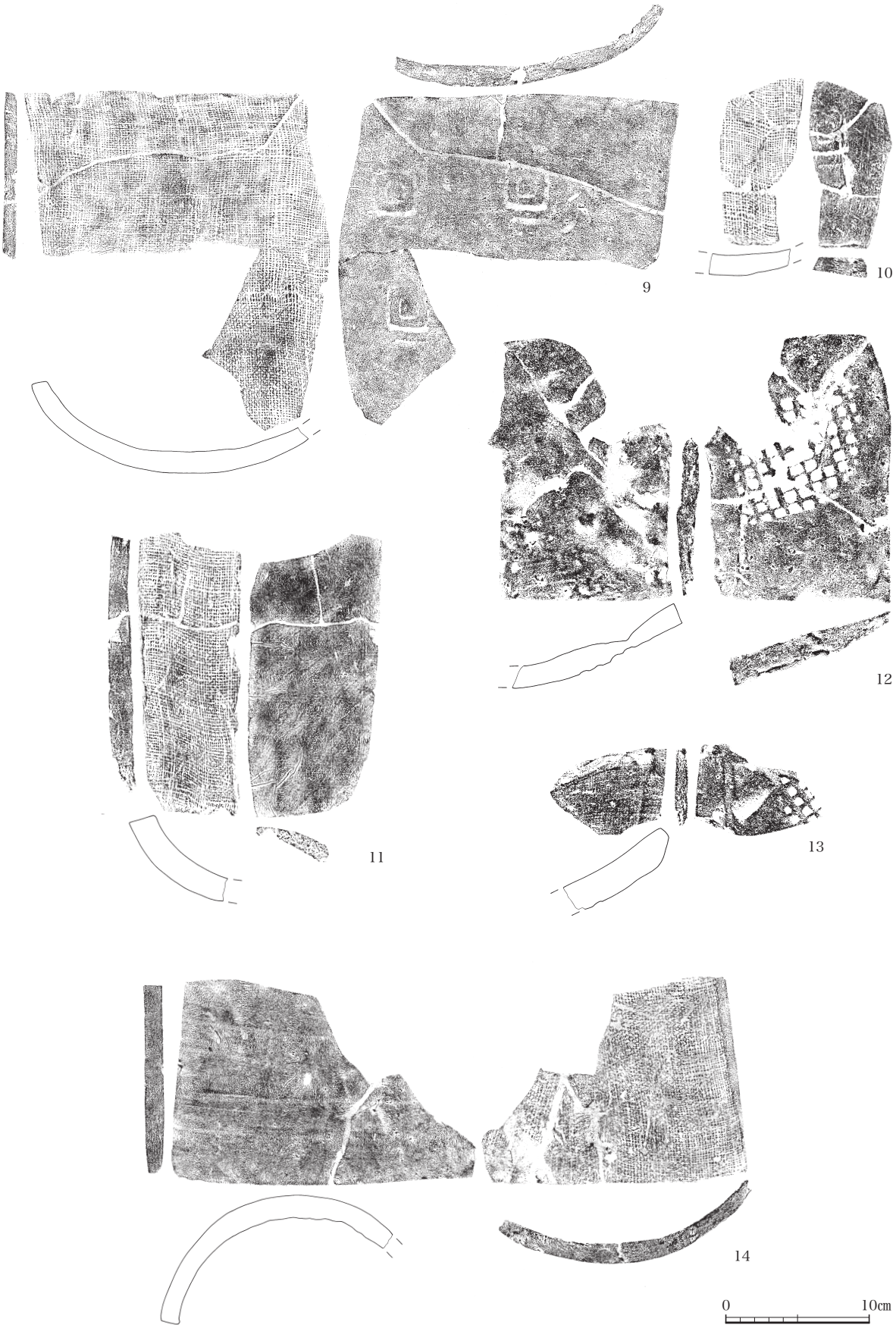
10・11 は、胎土の特徴などから同一個体ともみられる。格子目を持つ 12・13 が仮に同一とすれば、本遺構内の瓦は平瓦３枚、丸瓦１枚となる。図化しなかった遺物は、土師器坏片 15 点（90 ｇ）、甕片 276 点（1,850 ｇ）、須恵器片７点（85 ｇ）で、古墳時代後期遺物の混入もある。本遺構の年代は８世紀中葉～後半と考えられる。



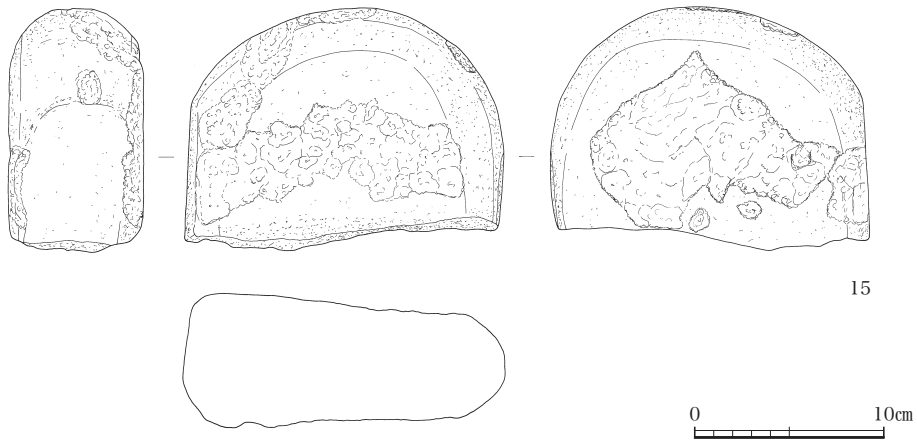
第 147 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図（１）

ＳＩ－７３４（第 150・151 図、第 71 表、図版二四）

位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｇ－ 29・30 グリッドに位置する。東６ｍに SI-757 が近接してあるほか、北約９ｍに SI-733 が隣接する。西側に隣接する遺構はない。　**重複**　北東辺で SI-732 を切る。住居跡中央部



第 148 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図（2）

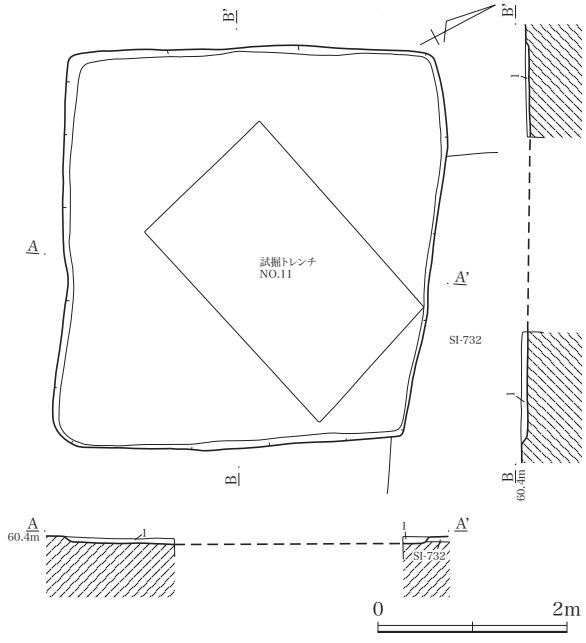


第 149 図　和田遺跡　SI-733 出土遺物実測図（３）

第 70 表　和田遺跡　SI-733 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.4 高　4.4 底　復 6.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで体部紐積痕残る。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗～細粒多量、白細粒微量、灰黒粗～細粒少量 やや軟質	西壁際床面上３cm 口～底 1/4 No.11
2 須恵器 坏	口　復 12.2 高　残 3.3 底　7.7	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部切り離し不明。手持ちケズリ。	7.5Y6/1　灰 緻密　白粗～細粒多量、灰黒細粒微量 やや硬質	西壁際床面上３cm 口～底 1/3 No.10
3 須恵器 坏	口　復 13.2 高　残 3.2 底　復 8.6	内面口縁部～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部切り離し不明。回転ケズリ。	7.5Y8/1　灰白 やや緻密　黒褐粗～細粒多量 軟質	覆土 口～底 1/3
4 土師器 埦	口　復 14.2 高　残 5.5 最大 復 14.6	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで紐積痕を明瞭に残す。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒多量、灰黒粗粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
5 土師器 甕	口　復 18.8 高　残 17.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向のケズリでヘラ状工具のあたり残る。下半斜方向のケズリ。武蔵型。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　赤褐・白細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド煙道部底面上３cmと６cmが接合 口～胴 1/4 K・KNo.11・12・15
6 土師器 甕	口　復 20.2 高　残 19.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ、下端斜め方向ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐・白細粒多量、金雲母粗粒少量 硬質	東壁際床面上９cmと中央部床面直上が接合 口～胴 1/4 K・No.3・5
7 土師器 甕	口　復 22.9 高　残 7.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ケズリ、上端に縦方向に動かしたヘラ状工具の痕跡あり。武蔵型。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　灰褐細粒多量、白細粒少量、赤褐粗～細粒微量 硬質	北壁際直上と東壁際床面上９cm・６cm、中央部床面直上及びカマド前面床面上８cmが接合 口～胴上端 1/2 No.1・3・4・5・K・KNo.8
8 瓦 平瓦	長　32.5 幅　27.2 厚　2.2 重　2633.1 高　6.3	凹面布目痕、模骨痕、両側縁、広・狭端縁ケズリ。凸面縄目叩き、両側縁、広・狭両端縁ケズリ。両側面ケズリ。広・狭端面ケズリ。カマド構築材。	10Y8/1　灰白 やや緻密　灰黒礫微量、白細粒少量、白礫微量 硬質	カマド火床南壁掘方底面上 14 cmと火床北壁掘方底面上８cm、火床面上２cmが接合、袖部壁面に設置。 ほぼ完形 KNo.1・2・4

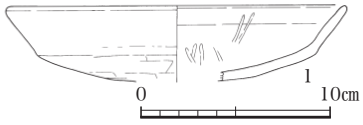
9 瓦 平瓦	長　残 23.7 幅　残 19.5 厚　1.6 重　残817.1 高　6.2	凹面布目痕後広端縁一部ケズリ。凸面入子状極印文叩き後広端面ケズリ。側面ケズリ。カマド構築材。	5Y7/1　灰白 やや緻密　灰黒粗～細粒多量、砂礫微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	カマド火床面直上と 2 ㎝が接合。袖部壁面に 8 の一部と重ねて設置。 1/2 残 KNo.2・6・16
10 瓦 平瓦	長　残 11.8 幅　残 5.7 厚　1.5 重　125.1 高　残 2.0	凹面布目痕。凸面入子状極印文叩き後狭端面ケズリ。9 と同一個体の可能性あり。	5Y7/3　浅黄 やや緻密　灰黒粗～細粒多量、赤褐細粒微量、砂礫微量 やや硬質	中央部床面直上と掘方底上 4 ㎝が接合 破片 No.6・7
11 瓦 平瓦	長　残 19.8 幅　残 6.7 厚　1.9 重　残444.4 高　残 5.9	凹面布目痕。凸面ナデ後狭端面ケズリ。側縁ケズリ。9､10 と胎土、色調が類似する。	5Y7/3　浅黄 やや緻密　灰黒粗粒～細粒多量、赤褐細粒微量、砂礫微量 やや硬質	カマド中央部、火床面直上 一部残 K・KNo.5
12 瓦 平瓦	長　残 18.5 幅　残 11.8 厚　残 1.8 重　残557.3 高　残 6.0	凹面ほぼ全面が粘土板の合わせ目で剝離、一部表面が残存するが磨滅のため布目痕らしき痕跡が確認できるのみ。凸面格子叩き。側面ケズリ。狭端面ケズリ。	5Y7/2　灰白 やや粗い　灰黒礫～粗粒多量、赤褐粗粒～細粒多量、白礫～粗粒少量 やや硬質	西壁際中央部床面上 5 ㎝ 1/4 残 No.9
13 瓦 平瓦	長　残 6.1 幅　7.2 厚　2.0 重　残131.0 高　残 5.7	凹面布目痕。凸面格子叩き後側縁大きくケズリ。側面ケズリ。	5Y8/2　灰白 やや粗い　灰黒礫～細粒多量、白礫微量 やや硬質	覆土 一部残
14 瓦 丸瓦	長　残 14.6 幅　残 16.1 厚　1.6 重　518.0 高　残 9.0	凹面布目痕、側縁ケズリ。凸面ケズリ、端面と平行する多数の浅い条線あり、表面調整の痕跡か。狭端面ケズリ。側面ケズリ。	5Y8/3　淡黄 やや粗い　灰黒礫～細粒多量 やや硬質	南西隅床面上 6 ㎝ 1/4 残 No.8
15 石器 台石	長　12.9 幅　16.8 厚　残 7.2 重　1661.9	平面不正楕円形。断面隅丸長方形。側面を平坦に加工した楕円形の石皿の上半 1/2 ～ 1/3 ほどを台石として再利用したもの。表裏のややくぼんだ石皿面に敲打が集中するほか、側面にも敲打痕あり。表側下端の石皿側は丸く研磨されており、この状態で石皿としても使用した可能性がある。	10YR6/1　褐灰 やや粗い　安山岩質溶岩 硬質	中央部掘方底面上 3 ㎝ 完形 No.12



SI-734
1　褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 150 図　和田遺跡　SI-734 実測図

は確認調査時のトレンチにより床面下まで失われている。　**平面形**　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 60°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.06m、南東－北西方向が 4.27m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第 1 層）である。　**壁**　残存壁高は 4 ～ 8 cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦で、南東壁際中央には被熱のためか赤変した部分がある。範囲は径 20cm ほどである。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　南東壁際の床面に被熱のためか赤変した部分があるが、カマドや炉とは特定できない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかで、土師器坏しか出土しない。その



第 151 図　和田遺跡　SI-734 出土遺物実測図

第 71 表　和田遺跡　SI-734 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 18.0 高　残 4.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後口縁～底部粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤褐粗粒少量、白細粒少量、砂細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/6

うち１点を図化した。図化以外には坏片３点（５ｇ）のみである。本遺構の年代は、８世紀前半と考えられる。

ＳＩ－７３６ａ（第 152・153 図、第 72 表、図版二四・五三）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｈ－ 32、Ｉ－ 32 グリッドに位置する。北西２ｍに SI-737 が隣接するほかは、周辺に竪穴住居跡はない。　**重複**　SI-736b から SI-736a へと拡張するように建て替えが行われたと考えられる。南東部が暗渠により撹乱される。　**平面形**　方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 34°－Ｅである。

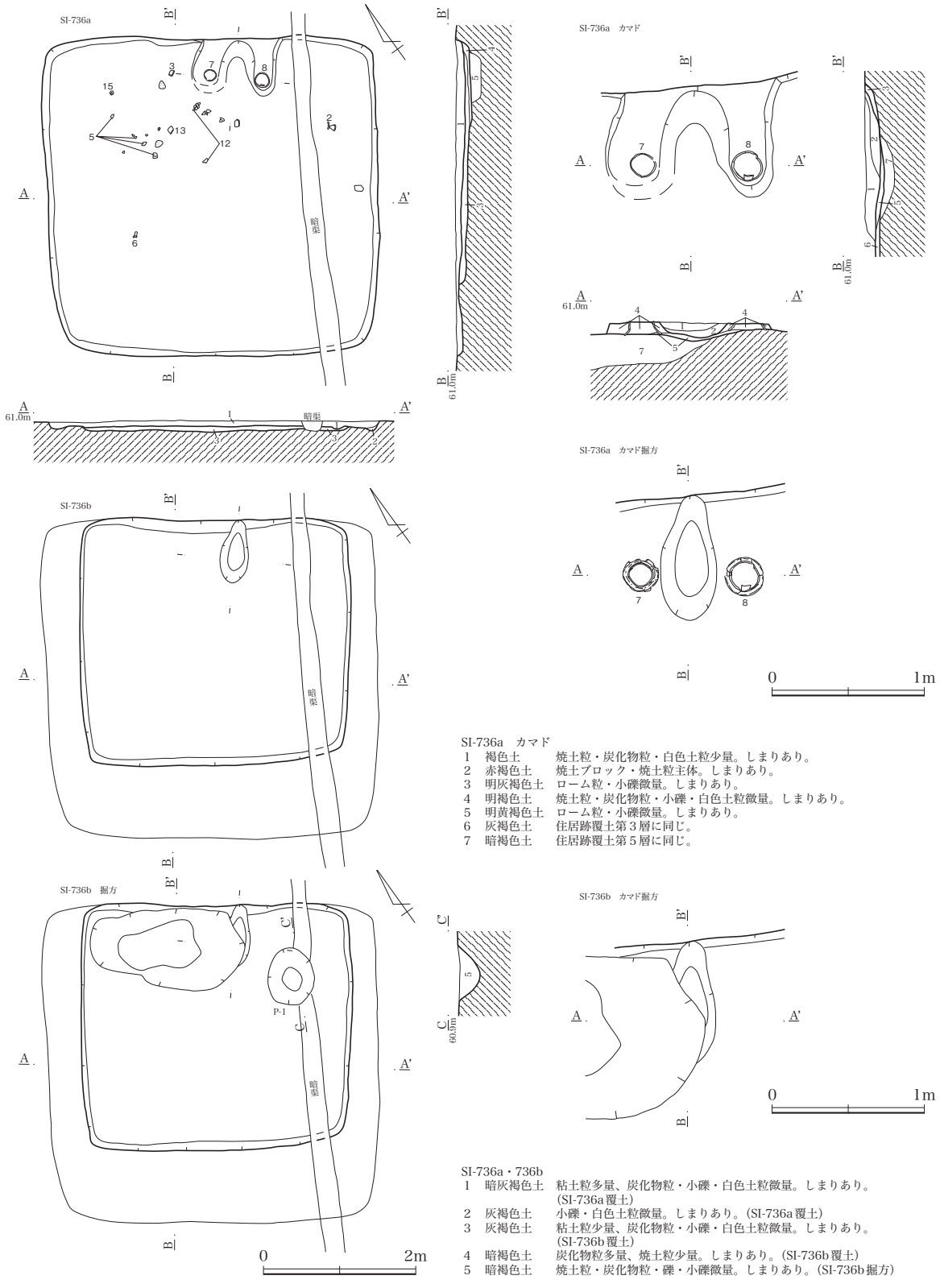
規模　北西－南東方向が 4.34m、南西－北東方向が 4.17m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗灰褐色土（第１層）で、多量の粘土粒を含む。　**壁**　残存壁高は７～ 13cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。

床面　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　掘方底面には、SI-736b のプランを示す方形の一段低い部分がある。床面からの深さは５～８cm で、粘土粒などを含む灰褐色土（第３層）で貼床される。北東壁際では、カマドからの混入と考えられる、焼土や炭化物が特徴的な第４層も見られる。拡張部分は貼床されない。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　北西及び南東壁際がやや深いが、壁溝とするほどではない。

火処　北東壁際やや東寄りにカマドがある。天井部は失われているが、袖部は確認できる。規模は 125 × 78cm で、煙道部は壁を掘り込まない。ｂ期のカマドと同一の場所に作られたものと考えられ、ｂ期カマドを撤去したのち火床面上に明黄褐色土（第５層）を貼ってａ期カマドの火床面及びカマド構築の基礎としたとみられる。調査時に左袖部先端を削ってしまったが、両袖部とも壁から 70cm ほど張り出していたと考えられる。袖部先端には構築材として使用された土師器長胴甕７・８が倒立の状態で出土する。袖部、燃焼部、煙道部の壁面は袖部と同様の第４層ないしは第３層で作られる。火床面は床面から約５cm 低く、煙道は緩斜面になっており、先端までそのままの傾斜で続き確認面に至る。覆土は第１・第２層で、焼土ブロック主体の第２層は天井部内面の崩落であろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、カマドの前面から左袖周辺で出土する。土師器甕主体で坏はわずかであり、甕には長胴のほか武蔵型もある。カマド構造材である長胴甕７・８は、建替前の住居跡である SI-736b に伴う遺物の可能性もあろうか。武蔵型甕 10・11 はカマド出土であり、カマドに掛けられていたとも考えられる。カマド前面では須恵器甕 12・13 が床面付近から、完形の石製紡錘車 15 は住居跡北隅からの出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片 54 点（320 ｇ）、甕片 445 点（2,880 ｇ）、須恵器片３点（40 ｇ）で、重複する SI-736b の遺物が混入している可能性もある。土師器坏の主体となる半球状の坏は図化以外約４個体あるが、特に小型のものはない。口縁部が外傾する模倣坏は２個体確認できる。本遺構の年代は７世紀後半と考えられる。

ＳＩ－７３６ｂ（第 152 図、図版二四）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｈ－ 32、Ｉ－ 32 グリッドに位置する。北西２ｍに SI-737 が隣接するほかは、周辺に竪穴住居跡はない。　**重複**　建て替えにより、上面が SI-736a に切られる。南東部が暗渠により撹乱される。　**平面形**　方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 34°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 3.55m、南西－北東方向が 3.21m である。　**覆土の状態**　粘土粒などを含む灰褐色土（第３層）、焼土や炭化

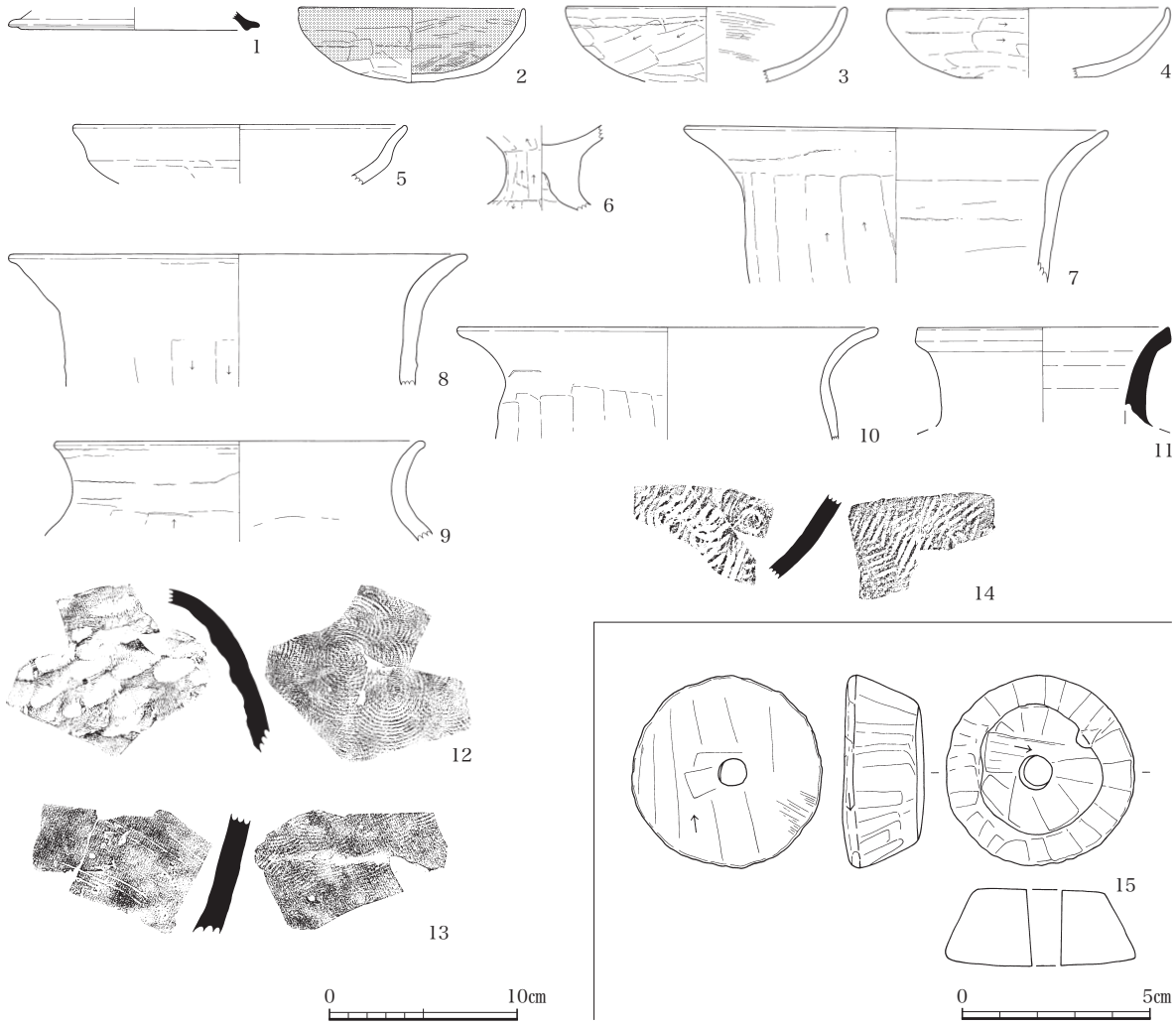


SI-736a　カマド
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒少量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒主体。しまりあり。
3　明灰褐色土　ローム粒・小礫微量。しまりあり。
4　明褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
5　明黄褐色土　ローム粒・小礫微量。しまりあり。
6　灰褐色土　住居跡覆土第３層に同じ。
7　暗褐色土　住居跡覆土第５層に同じ。

SI-736a・736b
1　暗灰褐色土　粘土粒多量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-736a覆土)
2　灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-736a覆土)
3　灰褐色土　粘土粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SI-736b覆土)
4　暗褐色土　炭化物粒多量、焼土粒少量。しまりあり。(SI-736b覆土)
5　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。(SI-736b掘方)

第 152 図　和田遺跡　SI-736a・736b 実測図

物が特徴的な暗褐色土（第４層）であり、ともに人為的な堆積と考えられる。　**壁**　残存壁高は５～８cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**



第 153 図　和田遺跡　SI-736a 出土遺物実測図

第 72 表　和田遺跡　SI-736a 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 13.4 高　残 1.1	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。内面は焼成不良のため赤褐色を呈する。小破片のため径が異なる可能性あり。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量、白礫微量 やや軟質	覆土 口～体破片
2 土師器 坏	口　復 12.2 高　4.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後縦方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。外面体～内面全面漆仕上げ。底部は赤褐色、口縁～体部は褐色の粘土を使用する。赤褐色の部分は軟質のためか表面剝離著しい。	7.5YR8/6　浅黄橙 緻密　赤褐・白細粒微量、灰黒粗～細粒多量 やや硬質	東部床面上２㎝ 口～底 1/2 No.5
3 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 4.0	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向のミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。褐色の粘土主体だがごく一部に赤褐色の粘土を使用するため帯状に赤褐色の部分が見られる。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	カマド左袖北側床面上６㎝ 口～体 1/3 K・No.10
4 土師器 坏	口　復 15.1 高　残 3.7	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面漆仕上げの可能性あり。	10YR8/2　灰白 緻密　赤褐・白細粒微量、灰黒粗～細粒少量 やや軟質	覆土 口～底 1/5
5 土師器 坏	口　復 17.9 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ、ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR8/8　黄橙 やや粗い　赤褐粗～細粒少量、白細粒微量 やや硬質	北部床面上２㎝と中央部掘方底面上８㎝が接合 口 1/5 No.11・12

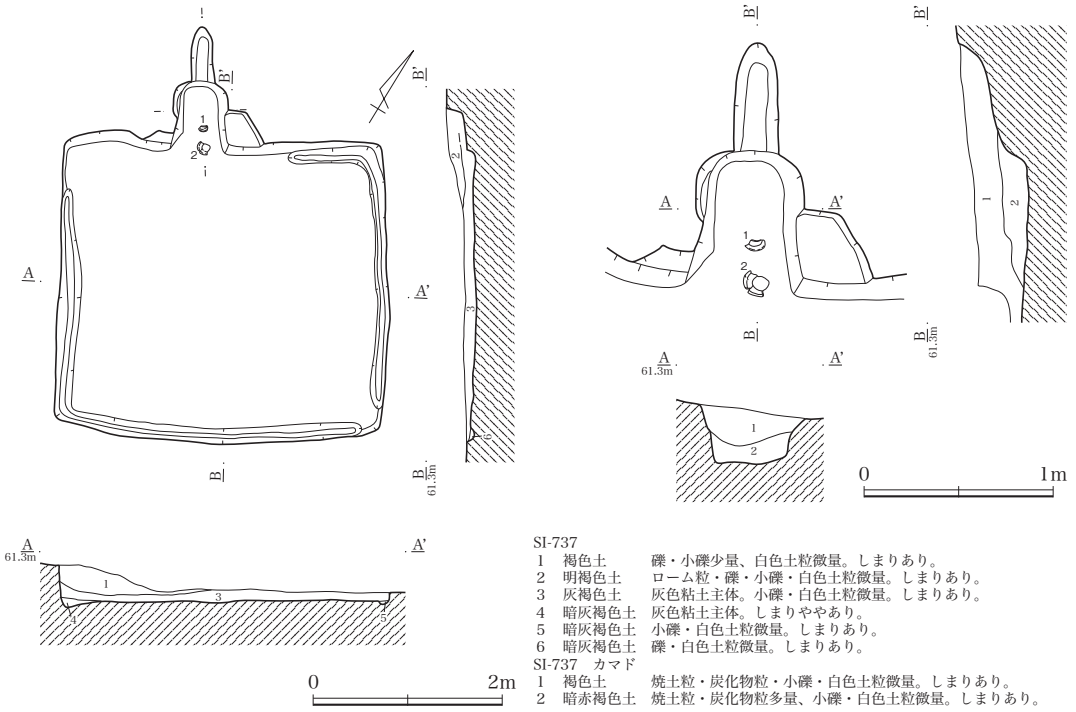
6 土師器 高坏	高　残 4.5	内面底部ナデ、脚部上端螺旋状にケズリ。外面底部ケズリ、脚部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐粗～細粒微量、白細粒微量 やや硬質	中央部床面上 4 ㎝ 底～脚上端完存 No.14
7 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 8.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。長胴。口縁部にのみ胴部とは異なる赤褐色の粘土を使用する。カマド右袖部の構築材。	7.5YR6/8　黄橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量、砂礫～砂細微量 硬質	カマド左袖内掘方底面上 18 ㎝、カマド袖の構築材 口 3/4、体上半完存 K・No.1
8 土師器 甕	口　復 24.5 高　残 7.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。長胴。	2.5Y8/2　灰白 やや粗い　白細粒少量、砂細粒多量、砂礫微量 やや硬質	カマド右袖内床面上 3 ㎝、カマド袖部の構築材 口 1/6、口辺完存 K・No.2
9 土師器 甕	口　復 19.8 高　残 5.3	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ケズリで上端に工具のあたりが残る。球胴。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐・白細粒微量、灰褐細粒少量 軟質	覆土 口～胴上端 1/5
10 土師器 甕	口　復 22.4 高　残 5.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐細粒微量 やや硬質	カマド 口 1/4、胴上半 1/6 K
11 須恵器 甕	口　復 13.6 高　残 5.2	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　青灰・白細粒微量 やや硬質	カマド 口辺 1/5 K
12 須恵器 甕	高　残 8.5	内面胴部無文当具痕。外面胴部同心円文叩き。	N6/0　灰 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	中央部床面上 3 ㎝とカマド前面床面直上 胴破片 No.1・3
13 須恵器 甕	高　残 6.7	内面胴部無文当具痕後ケズリ。外面同心円叩き。粘土接合面があり、外面に凹みとして表れている。	N6/0　灰 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	中央部床面上 2 ㎝ 胴破片 No.2
14 須恵器 甕	高　残 4.4	内面胴部同心円文当具痕。外面胴部平行叩き。断面内部は赤褐色を呈す。	10Y7/1　灰白 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや軟質	覆土 胴破片
15 石製品 紡錘車	長　残 5.1 幅　残 5.0 厚　残 2.1 重　残 75.4	平面円形。断面逆台形。全面に工具による加工痕を明瞭に残す。使用のためか上面は平滑になっている。	10BG5/1　青灰 緻密　結晶片岩か	北部床面上 4 ㎝ 完形 No.15

北東壁際のカマド右側に円形の、左側に楕円形の掘り込みがあり、ともに焼土や炭化物などをわずかに含む暗褐色土（第５層）で貼床される。円形の掘り込みは径 75 × 60cm、深さ 26cm、楕円形のものは径 205 × 107cm、深さ 15cm である。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北東壁際やや東寄りにある。建て替えに伴いカマドも撤去されているため、確認できるのは火床面から煙道付近の底面のみである（SI-736a カマド掘方図中央の掘り込み）。火床面は床面より約３cm 低くなっており、段差のない緩やかな斜面のまま煙道へと続き、先端は丸みを持って立ち上がる。火床面付近は第５層、煙道先端には第３層が貼られてａ期カマドが構築されるが、底面の一部はａ・ｂ期で共有される。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　本遺構に確実に伴うと考えられる遺物の出土はない。SI-736a のカマド構築材となっている長胴甕７・８は、SI-736b に伴う可能性もあろうか。本遺構の年代を決める手がかりは少なく、重複関係から７世紀後半以前と言えるのみである。

ＳＩ－７３７（第 154・155 図、第 73 表、図版二五）

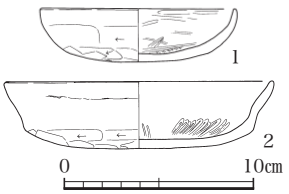
位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｉ－32 グリッドに位置する。南東２m に SI-736a・736b、西側８～ 10m に SI-741 ～ 745 がそれぞれ隣接する。西側には SK-946 が近接してある。　**重複**　なし。　**平面形**　方形で、

南東－北西方向の中軸線はＮ－28°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が3.50m、南東－北西方向が3.18mである。　**覆土の状態**　覆土は第１～第３層で、床面直上に堆積する第３層は灰色粘土主体である。　**壁**　西側は残存状態が良いが、東側は耕作による撹乱が深くまで及んでいる。残存壁高は９～35cmであり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　北西壁際～西隅及び東隅を除く壁際に掘り込まれている。断面形は「Ｕ」字状で、幅は16～24cm、深さは床面から４～10cmである。　**火処**　カマドが北西壁際中央にある。天井部・袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を約108cm「凸」字状に掘り込んで作られていて、火床面は床面よりわずかに低い平



第154図　和田遺跡　SI-737実測図

坦面である。火床面から煙道へは急角度の段差ののち緩やかな斜面となり、先端は外傾して立ち上る。平面的には、火床面を含む燃焼部は隅丸長方形で、規模は75×57cm、深さ33cm、煙道は溝状で、長さ57cm、幅24cm、深さ16cmである。内面の被熱の痕跡は顕著ではない。燃焼部左右には浅い掘り込みがあり、左側は斜面、右側は火床面上約10cmに平坦面が作り出される。覆土は第１・第２層で、火床面上に堆積し多量の焼土を含む第２層は、天井部内面の崩落とみら



第155図　和田遺跡
SI-737出土遺物実測図

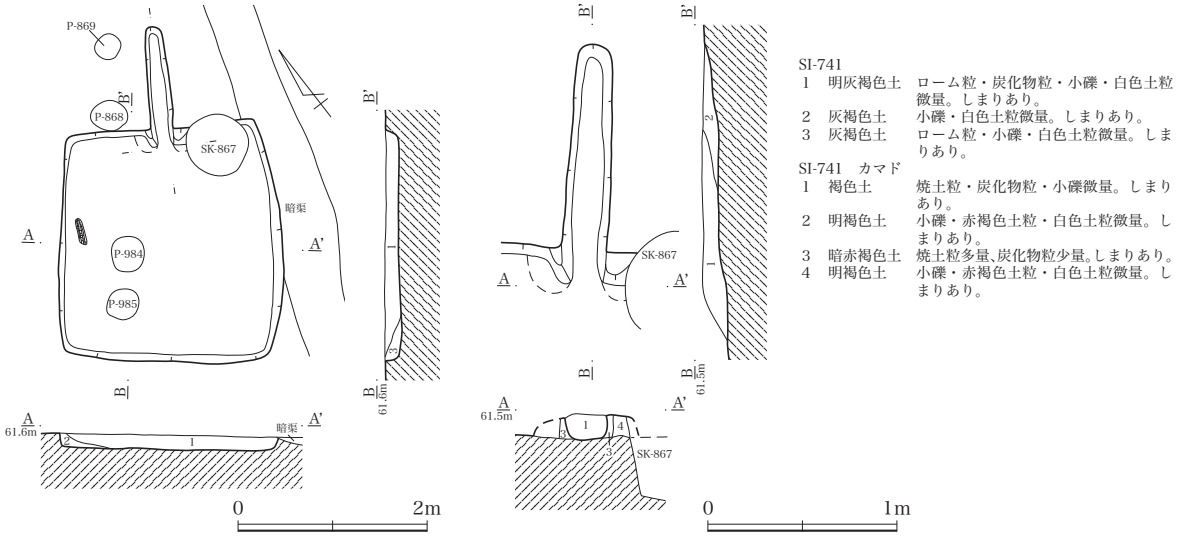
第73表　和田遺跡　SI-737出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復10.2 高　2.8	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後多方向の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁薄い。	5YR6/6　橙 緻密　赤褐礫～粗粒少量、白細粒微量 硬質	カマド内中央部火床面上８cm正立 口～底1/2 No.1
2 土師器 坏	口　復14.2 高　3.5	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後体～底部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ、口縁部外面被熱により一部赤変。焼けハジケあり。内外面ともに漆仕上げの可能性あり。口縁部上半内湾する。	7.5YR8/3　浅黄橙 やや緻密　赤褐粗粒多量、青灰微粒多量 やや硬質	カマド内中央部火床面上５cm、正立 口～体1/2、底完存 KNo.2

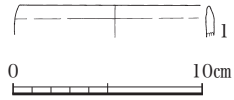
れる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかで、図化した土師器坏２点はいずれもカマド内より出土する。坏２は口縁部中心に被熱しており、カマド内で支脚などとして使用された可能性がある。図化しなかった遺物は土師器片 12 点（155 ｇ）、須恵器片１点（10 ｇ）である。遺構の年代は、７世紀後葉でもやや古い時期かと考えられる。

ＳＩ－７４１（第 156・157 図、第 74 表、図版二五）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｉ－33 グリッドに位置する。北 1.5m に SI-742 があるほか、東８m に SI-737 が、東２m に SK-739 がそれぞれ隣接する。　**重複**　東隅が SK-867 に切られ、南東辺北部が暗渠に切られる。西部で P-984・985 と重複するが、新旧関係は不明である。　**平面形**　方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－ 39°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 2.37m、南西－北東方向が 2.45m である。　**覆土の状態**　３層で、各層とも灰褐色を呈する。　**壁**　残存壁高は 12 ～ 17cm であり、壁は垂直気味に短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北東壁際中央にある。天井部は失われているが袖部は確認でき、規模は 47 × 128cm である。煙道部は長く、壁を溝状に約 108cm 掘り込んで作られている。袖部は明褐色土（第４層）で構築されており、内側は被熱による硬化赤変が顕著である（第３層）。調査時に左右先端と左袖外側を削ってしまった上、右袖外側は SK-867 に切



第 156 図　和田遺跡　SI-741 実測図



第 157 図　和田遺跡
SI-741 出土遺物実測図

られるが、両袖部とも壁から 24cm ほど張り出していたと推定される。焚口部の高さは床面と同一で、両袖部に挟まれた火床面付近では５cm ほど緩やかに高くなる。煙道底面は火床面からほぼ同一の高さで続いたのち緩斜面となり、先端はそのままの傾斜で高くなっていき確認面に至る。煙道両壁は丸みを持ち、上半は垂直気味である。

第 74 表　和田遺跡　SI-741 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　10.4 高　残 1.7	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白細粒微量、青灰粗粒多量 やや硬質	覆土 口 1/4

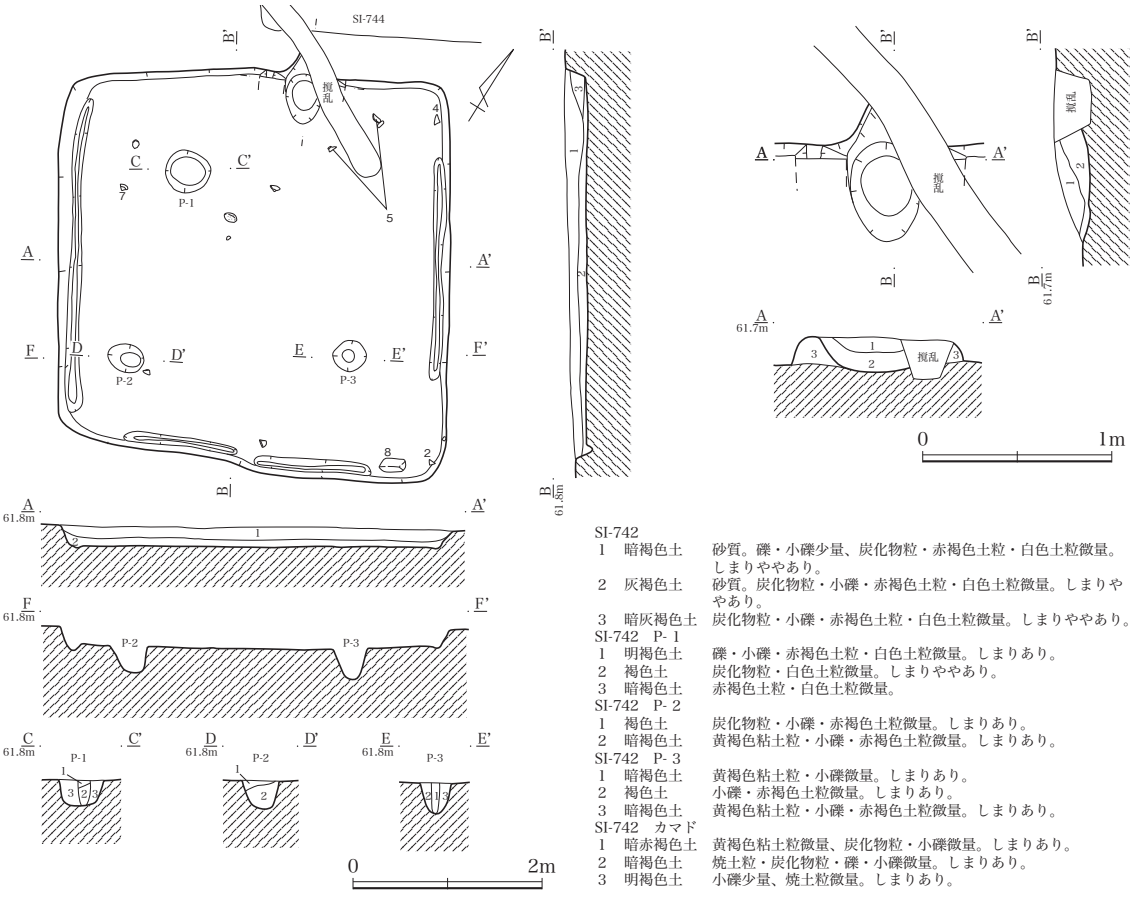
被熱の痕跡は燃焼部付近にはあるが、煙道では認められない。覆土は第１・第２層で、焼土や炭化物は少ない。

貯蔵穴　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかで土師器坏１点と甕１点のみであり、このうち半球状の器形と見られる坏１点を図化した。図化しなかった甕片は５ｇのみである。図化した坏は小型、深身であり、隣接するSI-742などと近い時期とみることもできる。遺物としては７世紀中葉から後葉の可能性があるものの、これのみでは判断できないため、本遺構の年代は時期不明とする。

ＳＩ－７４２（第158・159図、第75表、図版二五・五四）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｉ－33・34グリッドに位置する。北にSI-744が近接してあるほか、南1.5mにSI-741、西４ｍにSI-749・750、北東４ｍにSI-745、東８ｍにSI-737がそれぞれ隣接する。　**重複**　なし。北隅付近が暗渠により撹乱される。　**平面形**　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－31°－Ｗである。

規模　南西－北東方向が4.15m、南東－北西方向が4.26mである。　**覆土の状態**　３層で、住居跡全体に堆積する第１・第２層は砂質である。　**壁**　残存壁高は13～20cmであり、壁は外傾して立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　３本（P-１～３）ある。P-１は径49×45cm、深さ27cm、P-２は径38×30cm、深さ30cm、P-３は径35×32cm、深さ33cmである。P-１・３は土層断面で柱痕が確認できる。　**壁溝**　北西辺を除く各壁際に断続的にある。断面形は「Ｕ」字状で、幅は10～17cm、深さは床面から２～６cmである。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部は失われている上、暗渠により大きく撹乱されており、残存状態は良くない。煙道部は、壁を「Ｕ」字状に掘り込んで作られているとみられる。袖部は明褐色土（第３層）で構築されるが、調査時に左袖先端を削ってしまった上、



SI-742
1　暗褐色土　砂質。礫・小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
2　灰褐色土　砂質。炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
3　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SI-742　P-１
1　明褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりややあり。
3　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。
SI-742　P-２
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　黄褐色粘土粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SI-742　P-３
1　暗褐色土　黄褐色粘土粒・小礫微量。しまりあり。
2　褐色土　小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　黄褐色粘土粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SI-742　カマド
1　暗赤褐色土　黄褐色粘土粒微量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫少量、焼土粒微量。しまりあり。

第158図　和田遺跡　SI-742実測図

第 159 図　和田遺跡　SI-742 出土遺物実測図

第 75 表　和田遺跡　SI-742 出土遺物観察表

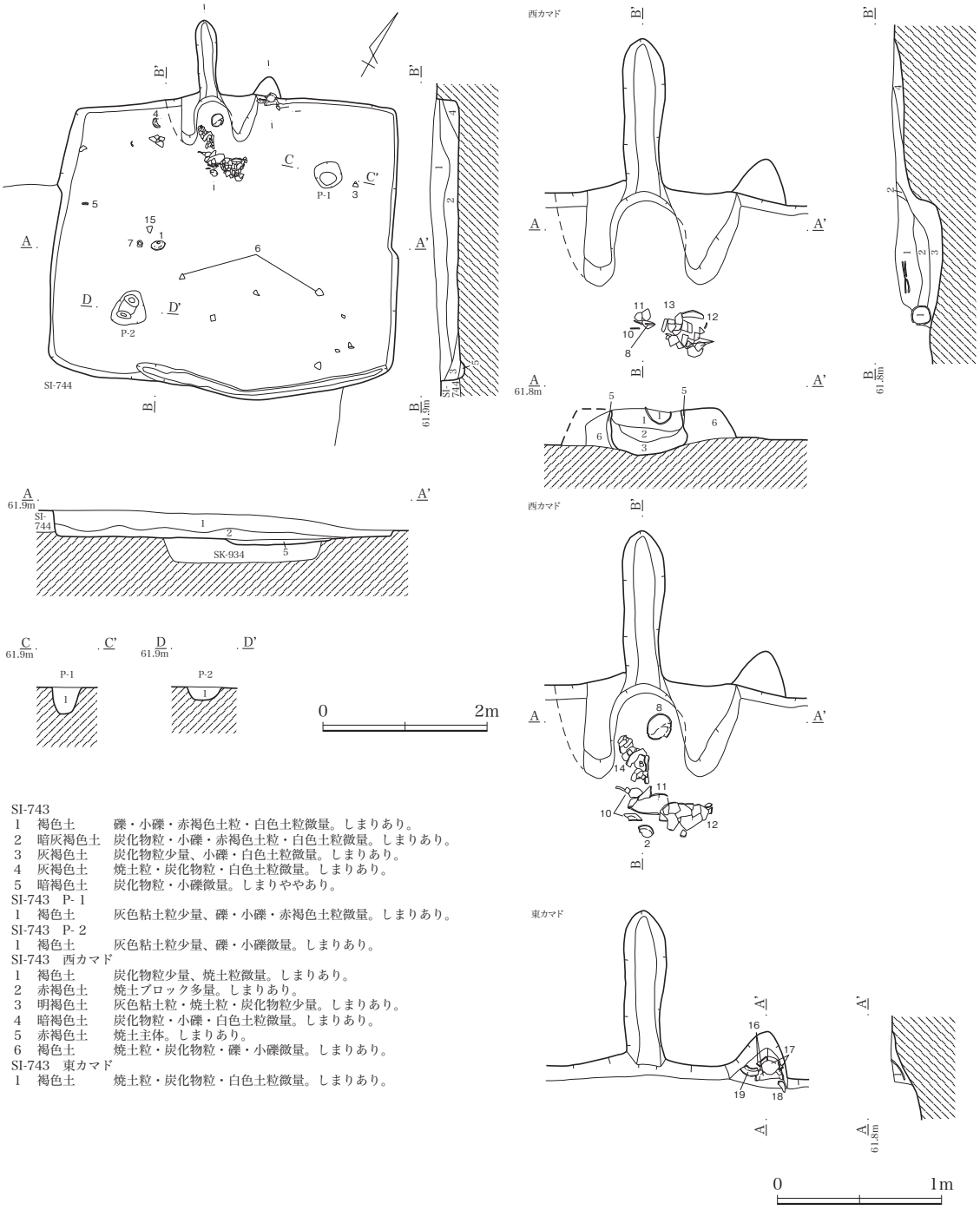
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.7 高　残 3.5	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや緻密　白細粒微量、赤褐細～微粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片
2 土師器 鉢	口　復 17.2 高　残 6.9	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部縦方向のケズリ後横方向のナデ。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや軟質	東隅床面上 7 ㎝ 口～胴上半破片 No.11
3 須恵器 小型壺	高　残 1.6 底　2.2	内面体部下半～底部ロクロナデ。外面体部下半～底部ロクロナデ後手持ちケズリ。	N4/0　灰白 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 体下半～底 1/2
4 土師器 甕	口　復 25.0 高　残 8.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。球胴。口唇部は面取りされる。	7.5YR8/6　浅黄橙 やや緻密　赤褐粗～細粒微量、白細粒微量 やや硬質	北隅床面上 18 ㎝ 口～胴上半 1/6 No.1・北アンキョ
5 土師器 甕	口　復 19.8 高　残 4.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ。球胴。口唇部は面取りされる。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量 やや硬質	北部床面上 7 ㎝と 9 ㎝が接合 口 1/5 No.3・4
6 須恵器 甕	高　残 2.5	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。焼成不良のため赤褐色を呈する。	10Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐・白細粒微量 軟質	覆土 胴破片
7 土製品 筒形	高　残 3.7 上面 復 10.3	内面上面～体部荒いナデで指頭圧痕・紐積痕残る。外面上面木葉痕、体部ナデ、底部外周にヘラ状工具のあたりあり。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐粗粒微量、粗砂粒微量 やや軟質	西部床面上 9 ㎝ 上面～体 1/3 No.8

8 石器 砥石	長　22.5 幅　10.9 厚　9.8 重 残 4350.0	平面長方形。断面方形。角柱状の砥石であり、整形のための剝離が一部残る。表面、左右両側面は使用による研磨痕が顕著であり、縁辺には工具があたった痕跡が残る。裏面はほとんど使用されていない。上端は欠損している可能性がある。	N7/0　灰白 緻密　砂岩	東隅壁溝床面直上 完形 No.14

右袖は撹乱により外側の一部しか残っていない。両袖部とも壁からの張り出しの規模は不明、残存する袖部からみたカマドの幅は 92cm である。火床面は床面から約４cm 低い位置にあり、煙道へは緩やかに高くなる。撹乱のため先端の状況は明確ではないが、煙道左半部の煙道は外傾して立ち上がったのち先端付近で角度を緩やかに変え確認面に至っている。覆土は第１・第２層で、焼土を多量に含む第１層は天井部内面の崩落と考える。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかで、住居跡全体より出土する。土師器は、甕主体に坏や鉢が混じる。甕は長胴、武蔵型などが見られる。土師器坏は口縁部が外傾する模倣坏や半球状の坏主体である。カマド近くの住居北隅では土師器甕４・５が床面よりやや浮いた破片の状態で、東隅の床面直上からは角柱状の砥石８が出土する。図化しなかった遺物は土師器坏片 40 点（200 ｇ）、甕片 88 点（1,030 ｇ）、須恵器片２点（20 ｇ）である。遺構の年代は７世紀中葉～後葉と考えられる。

ＳＩ－７４３（第 160・161 図、第 76 表、図版二五・二六・五四・五五）

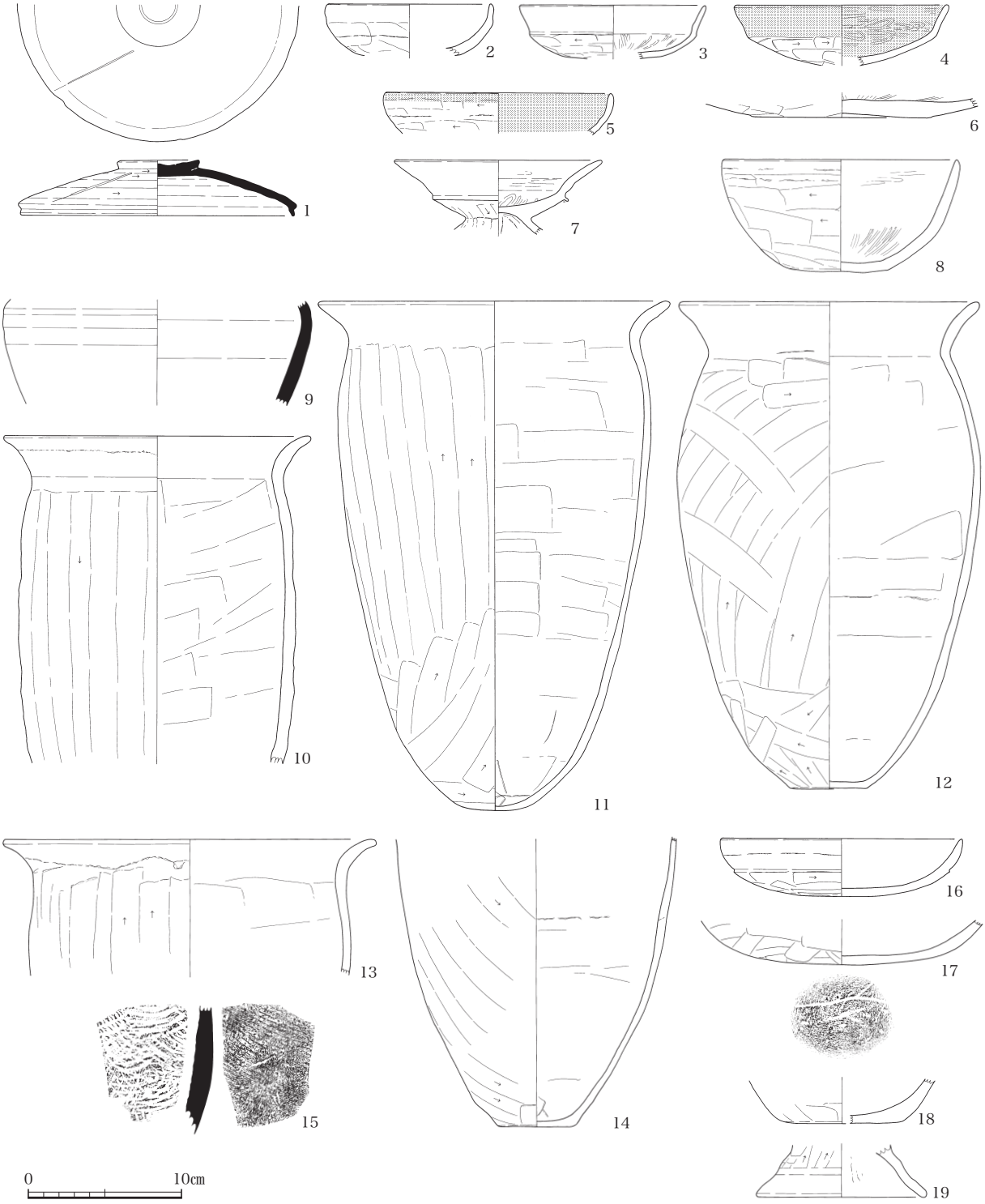
位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｊ－33・34 グリッドに位置する。東に SI-745 が近接してあるほか、北西４m に SI-748、西 3.5m に SI-749、南３m に SI-742、南東 10m に SI-737 がそれぞれ隣接する。　**重複**　住居跡南部で SI-744 を、中央付近で SK-934・935 を切る。土坑２基はともに粘土・焼土を多く含んでおり、SI-743 の貼床であった可能性もあろう。　**平面形**　南西－北東方向がやや長い方形で、中軸線はＮ－30°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.22m、南東－北西方向が 3.63m である。　**覆土の状態**　５層で、第１層以外は炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は８～31cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。住居跡南部には、被熱のためか硬化赤変する部分がある。範囲は南東壁際南寄りの壁面から床面に至る径 60cm ほどの部分で、その中に４ヶ所の硬化赤変が確認できる。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　２本（P- 1・2）ある。P- 1 は径 41 × 32cm、深さ 33cm、P- 2 は径 48 × 40cm、深さ 15cm である。P- 1・２とも覆土中に灰色粘土粒を含む。　**壁溝**　南東壁際にある。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 13 ～ 20cm、深さは床面から２～６cm である。　**火処**　カマドが北西壁際中央に２基ある。東西に近接して並んでおり、残存状態などから東カマドから西カマドへと作り替えられたと考えられる。西カマドは天井部がなく、左袖部外側を調査時に失っているが、燃焼部付近については使用時の状態を良く残している。規模は 97 × 152cm と推定され、煙道部は壁を 92cm 溝状に掘り込んで作られている。袖部は褐色土（第６層）で構築されており、内側はオーバーハング気味となるカマド内面の状態がそのまま残っており、被熱による硬化赤変が顕著に認められる（第５層）。火床面は床面から約７cm 緩やかに低くなった位置にあり、煙道へは垂直気味に立ち上がる。煙道の幅は 21 ～ 25cm で底面は平坦であり、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第１～第４層で、焼土ブロックを多量に含む第２層が天井部内面の崩落と考える。第３層は、天井部構築材とみられる灰色粘土を含む。カマド前面からは土師器が多数出土するが、これらの多くはカマドで使用されていたものとみられる。東カマドは、北西壁を「Ｕ」字状に掘り込む煙道部分のみが確認されたものであり、袖部などは作り替えに伴い撤去されたとみられる。火床面付近でも、使用による被熱の痕跡は残っていない。煙道の壁への掘り込みは 24cm、幅は 34cm である。住居跡内から煙道へは斜面となっており、先端で一度平坦になったのち緩やかに立ち上がって確認面となる。覆土は焼土や炭化物をわずかに含む褐色土（第１層）である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器甕主体で、粗い胎土の長胴のほか武蔵型のような胎土を持つ長胴甕（12）もみられる。坏では半球状のほか口縁部が直立ないし外傾気味となる坏がある。口縁部上半



SI-743
1　褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりややあり。
SI-743　P- 1
1　褐色土　　灰色粘土粒少量、礫・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SI-743　P- 2
1　褐色土　　灰色粘土粒少量、礫・小礫微量。しまりあり。
SI-743　西カマド
1　褐色土　　炭化物粒少量、焼土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土ブロック多量。しまりあり。
3　明褐色土　灰色粘土粒・焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。
4　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
5　赤褐色土　焼土主体。しまりあり。
6　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。
SI-743　東カマド
1　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 160 図　和田遺跡　SI-743 実測図

が内湾する坏はない。住居跡内ではカマド内及びカマド前面に遺物が集中する。西カマドでは、火床面上のやや高い位置から完形の土師器鉢８が正立状態で出土する。火床面直上では長胴甕 10・11・12 が、やや浮いた位置からは 12・13 がそれぞれ横転した状態で出土している。カマドに掛けられていたか、あるいはカマド構築材となっていたものであろう。東カマドでは土師器坏 16・17、鉢 18、台付甕台部 19 が重なって出土している。これらは東カマドに伴う遺物と考えられ、西カマドなどから出土する土器より古く位置づけ



第 161 図　和田遺跡　SI-743 出土遺物実測図

第 76 表　和田遺跡　SI-743 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　18.2 高　3.6 重　297.8 つまみ　5.4	内面口縁～天井部ロクロナデ後天井部ナデ。外面口縁ロクロナデ後体～天井部一部回転ケズリ。つまみ貼付けでリング状。外面体～天井部１本の線刻あり。	N8/0　灰白 灰褐・白細粒微量 やや軟質	中央部床面直上、斜位 ほぼ完形 No.1

2 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒･白微粒多量、赤褐粗～細粒多量、白細粒微量 硬質	西カマド内中央部火床面直上 正立口～体 1/4 KNo.11
3 土師器 坏	口　復 12.2 高　残 3.5	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒･白微粒多量、黒・白細粒少量 やや硬質	東隅床面上 4 ㎝ 口～体 1/4 No.17
4 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 3.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、外面口縁～内面全面漆仕上げ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒微粒多量、黒･赤褐・白細粒少量 硬質	北壁際西カマドの西 床面上 4 ㎝ 口～底 1/3 No.2
5 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 2.6	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。外面口縁～内面全面漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　白微粒多量、黒・白細粒少量 硬質	西壁際床面上 4 ㎝ 口～体 1/6 No.6
6 土師器 盤	高　残 1.3 底　復 11.6	内面底部ナデ後密な放射状のミガキ、ミガキは強く施されるためか痕跡は大きく凹む。外面体部ケズリ、底部ケズリ。大形、偏平。	5YR7/6　橙 緻密　白細粒・赤褐細粒多量、黒粗粒微量 やや硬質	中央部床面上 8 ㎝と東部床面上 2 ㎝が接合 体～底 1/3 No.9・16
7 土師器 高坏	口　復 13.6 高　残 4.8 脚接合　4.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ、体部ヨコ方向、底部一方向主体のミガキ。脚部上端ケズリ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、脚部上端ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒･白微粒多量、黒･赤褐・白細粒少量、白細粒微量 硬質	中央部床面上 10 ㎝ 坏口～体一部、底～脚接合部のみ完存 No.7、SI-744
8 土師器 鉢	口　15.6 高　7.4 底　6.5	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ･ナデ後口縁～体部横方向･底部一方向のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 緻密　黒微粒多量、黒・赤褐細粒少量、赤褐礫微量 硬質	西カマド内中央部火床面上 13 ㎝、正立完形 KNo.6
9 須恵器 瓶類	高　残 6.9 体　復 20.2	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。	2.5Y7/1　灰白 緻密　黒・白微粒多量、黒細粒少量 やや軟質	覆土 体破片
10 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 21.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向のケズリ。口縁部下 12 ㎝より下は、被熱により外面は赤変している。	7.5YR5/6　明褐 粗い　砂礫、金雲母細粒・赤褐微粒微量、黒褐粗～細粒多量 硬質	西カマド内中央部火床面直上 口～胴 1/3 KNo.8
11 土師器 甕	口　復 23.0 高　33.3 底　5.4	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデでヘラ状工具痕を残す。外面口縁ヨコナデ､胴部上～中位縦方向ケズリ。下位斜方向のケズリ、底部ケズリ。長胴。最大径は口縁部。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　黒微粒多量､黒･白細粒少量、白礫～粗粒微量、砂粗～細粒少量 硬質	西カマド内、中央部、火床面直上と上 10 ㎝が接合 口 1/3、胴下半～底完存 KNo.1・9
12 土師器 甕	口　復 19.7 高　31.7 底　5.0 最大　19.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕残る。外面口縁ヨコナデ、胴部斜方向のケズリ、底部ケズリ。長胴。胎土は武蔵型に近い。最大径は胴部中位。底部周辺黒褐色に変色。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐・白微粒多量、砂粗～細粒少量、黒・白細粒微量 硬質	西カマド内中央部火床面直上 口 1/3、体下半～底ほぼ完存 KNo.4・10
13 土師器 甕	口　復 24.4 高　残 8.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向のケズリ。長胴。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　黒・赤褐・白微粒多量、赤褐・白粗粒微量 硬質	西カマド内中央部火床面上 5 ㎝ 口 1/3、胴上半 1/3 KNo.2
14 土師器 甕	高　残 18.9 底　5.0	内面胴部ナデ、底部ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部斜方向のケズリ、底部ケズリ。長胴。	5YR5/6　明赤褐 緻密　黒・白微粒多量、赤褐・白細粒少量、砂細～微粒少量 硬質	西カマド内中央部火床面上 13 ㎝ 胴下半 1/2、底完存 KNo.7
15 須恵器 甕	高　残 8.4	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白微粒多量、白細粒少量、灰礫微量 やや軟質	中央部床面直上 胴破片 No.8

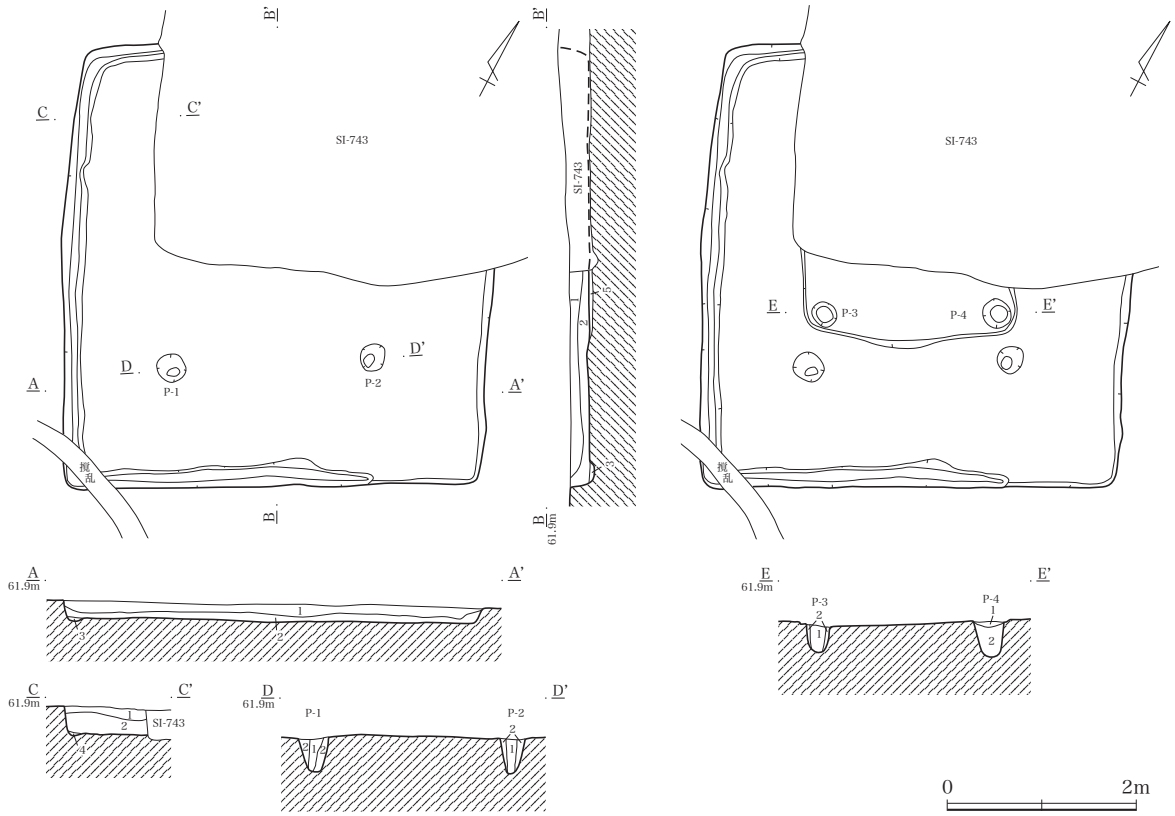
16 土師器 坏	口　15.8 高　3.7	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。被熱のため全体的に赤変する。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白粗粒少量、赤褐礫微量 硬質	東カマド内中央部火床面上４㎝と５㎝が接合 ほぼ完形 第 2KNo.2・4
17 土師器 坏	高　残 3.0	内面体～底部ナデ。外面体～底部ケズリ、底部中央木葉痕あり。	2.5Y3/1　黒褐 緻密　白微粒多量、白細粒少量、砂微粒少量 やや硬質	東カマド内中央部火床面直上と上４㎝が接合 体 1/6、底ほぼ完存 第 2KNo.2・3
18 土師器 鉢	高　残 2.9 底　復 8.0	表面剝離が著しく調整不明瞭。内面底部ナデ。外面胴～底部ケズリ。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒少量、黒・白細粒微量 軟質	東カマド内中央部火床面上２㎝ 底破片 第 2KNo.1
19 土師器 台付甕	高　残 3.4 高台　11.2	内面台部ヨコナデ・ナデ、粘土のシワあり。外面台部上半縦方向のケズリ、下半ヨコナデ。	2.5YR5/6　明赤褐 粗い　黒・白細粒多量、黒粗粒微量、白礫微量、金雲母粗粒微量 硬質	東カマド内中央部火床面直上 台 1/3 第 2KNo.5

られる。完形の須恵器蓋１、須恵器甕 15 は床面直上からの出土である。図化しなかった遺物は土師器のみで坏片 60 点（470 ｇ）、甕片 365 点（2,470 ｇ）である。本遺構の年代は、７世紀末～８世紀初頭と考えられる。

ＳＩ－７４４（第 162・163 図、第 77 表、図版二六）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｊ－33･34 グリッドに位置する。南に SI-742 が、東に SI-745 が近接してあるほか、北西５ｍに SI-748、西３ｍに SI-749、南東９ｍに SI-737 がそれぞれ隣接する。　**重複**　住居跡中央から北部が SI-743 に切られる。南隅は暗渠により撹乱される。　**平面形**　南東－北西方向がやや長い方形で、中軸線はＮ－ 29°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.55m、南東－北西方向が 4.70m である。　**覆土の状態**　覆土は第１・第２層で、第２層は炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は 16 ～ 27cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　住居跡中央部が住居跡と相似形となるような形に約４cm 掘り込まれ、炭化物を含む暗灰褐色土（第５層）で貼床される。底面はほぼ平坦である。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが２本（P- １・２）ある。配置から４本の主柱穴を持つと推定されるが、北西側の２本があるとみられる部分は SI-743 に切られているため不明である。P- １は径 32 × 30cm、深さ 35cm、P- ２は径 30 × 28cm、深さ 37cm、P- １－ P- ２間の柱間寸法は 2.08m である。P- １・２とも規模は類似していて、土層断面では柱痕が確認できる。このほか、掘方底面でピット２本（P- ３・４）を確認している。P- ３は径 25 × 22cm、掘方底面からの深さ 28cm、Ｐ－４は径 32 × 29cm、掘方底面からの深さ 37cm である。P- ３・４は P- １・２の北西側にそれぞれ近接していて、対をなすような配置とも見て取れる。P- ３・４から P- １・２へと、主柱穴の作り替えが行われた可能性も考えられよう。P- ３－ P- ４間の柱間寸法は、P- １－ P- ２間よりやや狭い 1.85m である。　**壁溝**　南西～南東壁際にある。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 18 ～ 29cm、深さは床面から３～５cm、覆土は第３･第４層である。　**火処**　不明である。　**貯蔵穴**　不明である。

遺物　遺物は少量でいずれも覆土中出土であり、出土位置が特定できる遺物はない。土師器甕主体であり、坏や鉢、高坏などがわずかに混じる。甕は武蔵型が多く、長胴甕、球胴甕もわずかに確認できる。坏は半球状ばかりで、口縁部外傾ないしやや内湾するものも少量ある。図化しなかった遺物は、土師器坏片 49 点（350 ｇ）、甕片 229 点（1,830 ｇ）、高坏片１点（20 ｇ）、須恵器片１点（30 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀後半から末葉と考えられる。隣接する SI-745 との新旧は決めがたい。



SI-744
1　明褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　　灰色粘土粒多量。しまりあり。
5　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(掘方)

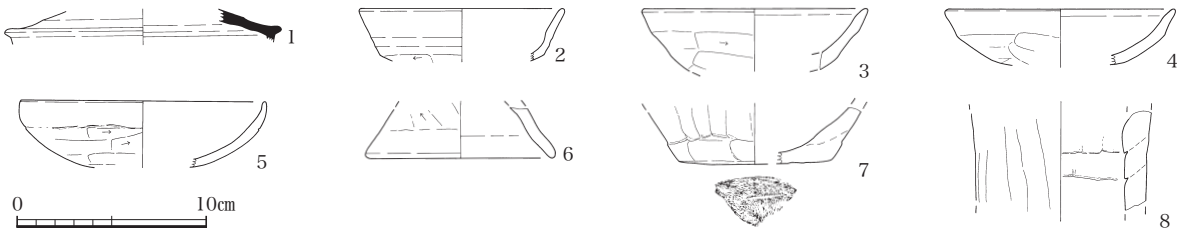
SI-744　P- 1
1　暗褐色土　　灰色粘土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　褐色土　　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。

SI-744　P- 2
1　褐色土　　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

SI-744　P- 3
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりややあり。
2　褐色土　　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりややあり。

SI-744　P- 4
1　明褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　灰褐色土　黄褐色粘土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりややあり。

第 162 図　和田遺跡　SI-744 実測図



第 163 図　和田遺跡　SI-744 出土遺物実測図

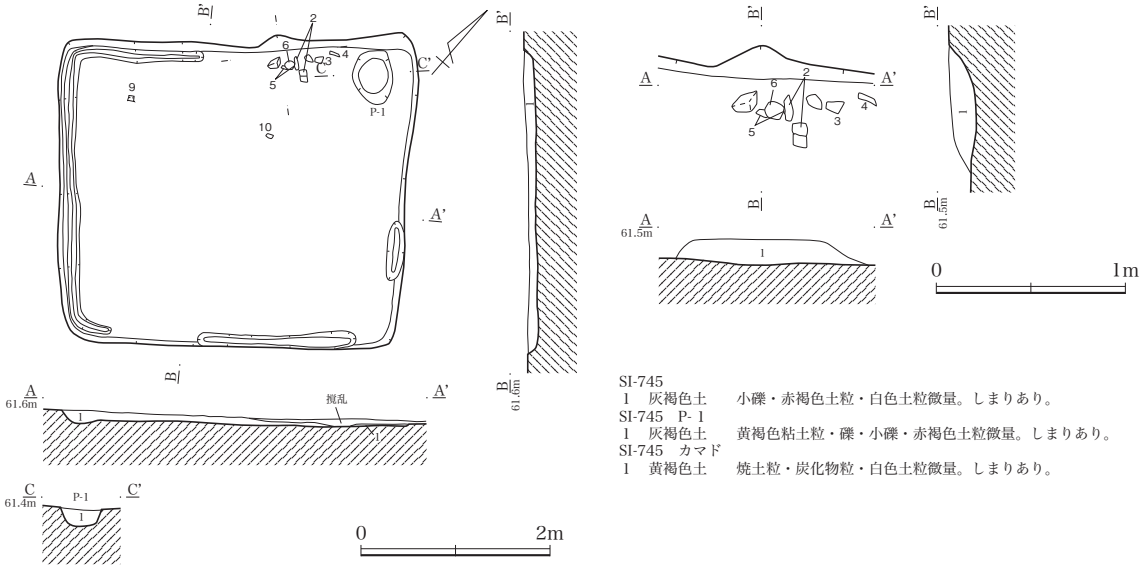
第 77 表　和田遺跡　SI-744 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.8 最大 復 14.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。赤褐色を呈する。酸化焔焼成。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白細粒少量、微砂粒少量 やや硬質	覆土 口～体破片
2 土師器 坏	口　復 10.8 高　残 2.7	表面磨滅が著しい。内面口縁部～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、下半沈線状に凹む部分あり。体部ケズリ。全体に被熱している可能性あり。	10YR8/1　灰白 緻密　赤褐・白粗粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
3 土師器 坏	口　復 12.8 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤褐礫微量、灰白礫少量、砂礫～粗粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6

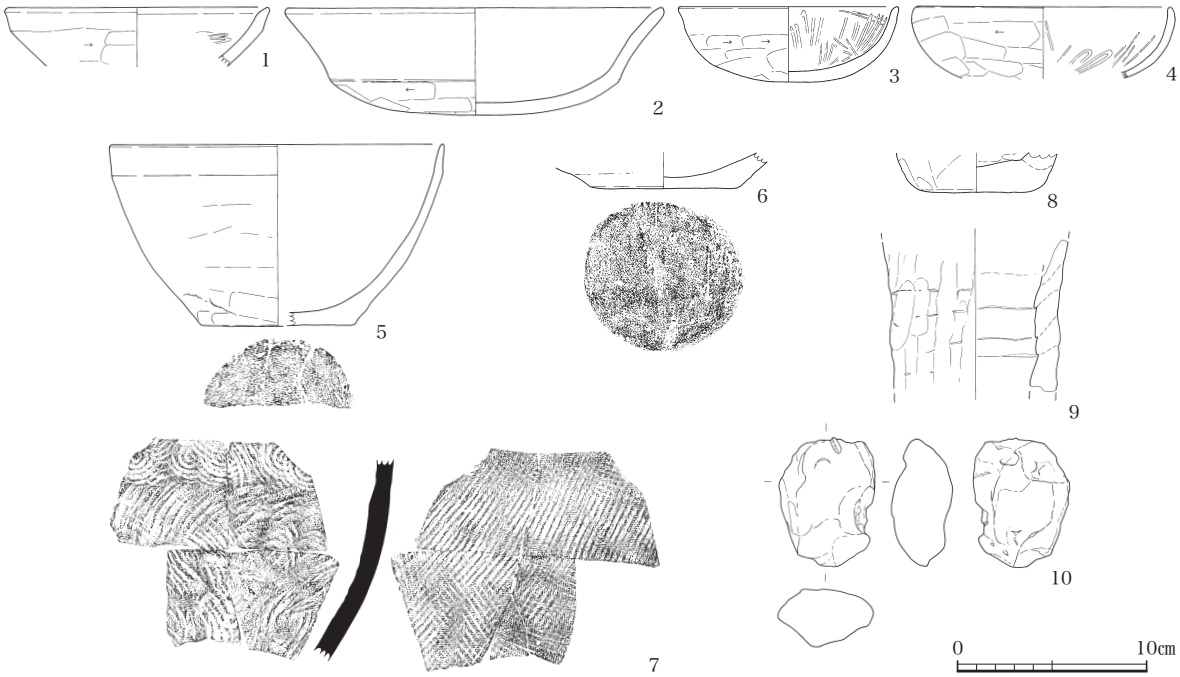
4 土師器 坏	口　復 12.2 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部丁寧なケズリ。	7.5YR6/6　橙 緻密　白粗～細粒微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/8
5 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.4	表面磨滅が著しい。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白粗～細粒微量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
6 土師器 高坏	高　残 2.7 高　台　復 10.0	内面脚部下半ヨコナデ。外面脚部下半ケズリ、裾部ヨコナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・青灰粗粒微量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 脚下半 1/4
7 土製品 筒形	高　残 3.0 高台　復 8.0	内面体～底部荒いナデで指頭圧痕残る。外面体部下半荒いナデ、底部木葉痕。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐・礫少量、砂礫～粗粒少量 硬質	覆土 体～底 1/4
8 土製品 筒形	高　残 5.1 体　復 9.5	内面体部軽いナデで紐積痕明瞭に残す。外面体部強い縦方向のナデ。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤褐礫～粗粒少量、青灰粗粒少量、砂礫～粗粒少量 硬質	覆土 体 1/4

ＳＩ－７４５（第 164・165 図、第 78 表、図版二六・五五）

位置　Ⅶ区調査区の南部、Ｊ－33 グリッドに位置する。西に SI-743・744 が近接してあるほか、北西８m に SI-748、南西４m に SI-742、南東８m に SI-737 がそれぞれ隣接する。　重複　なし。北東壁際は、耕作などによる平面的な撹乱が深くまで及んでいる。　平面形　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 40°－Wである。　規模　南西－北東方向が 3.66m、南東－北西方向が 3.21m である。　覆土の状態　緻密な灰褐色土（第１層）である。　壁　残存壁高は９～ 11cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　床面　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、南西辺から北東辺に向かってわずかに傾斜している。　堀方・貼床　なし。　柱穴　北隅に１本（P- １）ある。規模は径 56 × 42cm、深さ 17cm で、黄褐色粘土粒を含む灰褐色土（第１層）を覆土とする。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。貯蔵穴ともみられたが、規模や形状などから用途不明とした。　壁溝　北隅を除く各辺の壁際に断続的にある。断面形は「U」字状で、



第 164 図　和田遺跡　SI-745 実測図



第 165 図　和田遺跡　SI-745 出土遺物実測図

第 78 表　和田遺跡　SI-745 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部スス付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白礫少量、青灰礫微量 硬質	覆土 口～体 1/6
2 土師器 坏	口　復 20.0 高　残 5.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われるが磨滅のため不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外面とも表面磨滅がすすむ。歪みなく、丁寧に成形されている。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　白粗粒少量、灰黒粗粒微量、砂細粒少量 やや軟質	カマド前面火床面直上と上 6 cmが接合 口～底 1/4 KNo.4・7
3 土師器 坏	口　11.6 高　4.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。	7.5YR4/2　灰褐 やや粗い　白粗～微粒多量、砂礫微量、砂粗～細粒少量 やや硬質	カマド前面火床面上 2 cm 口 2/3、体 3/4、底ほぼ完存 KNo.2
4 土師器 坏	口　復 13.9 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	2.5Y4/2　明灰黄 やや緻密　赤褐・白粗粒少量、細砂粒少量 やや硬質	カマド前面火床面直上 口～体 1/4 KNo.1
5 土師器 鉢	口　復 17.7 高　9.6 底　復 8.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで下端のみケズリか。外面調整は不明瞭。底部木葉痕。内外面とも表面磨滅が著しい。特に外面。全体的に被熱のため赤変する。	5YR6/4　にぶい褐 やや粗い　赤褐礫少量、白粗粒少量、砂礫～粗粒少量 やや硬質	カマド前面火床面直上と上 2 cmが接合 口～体破片、底 1/3 KNo.4・6
6 土師器 甕	高　残 1.8 底　7.6	内面底部ナデ。外面胴部下端ナデで紐積痕あり。底部木葉痕後ナデ。球胴と考えられる。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫少量、白粗粒少量、砂粗～細粒少量 硬質	カマド前面火床面直上 胴下端～底完存 KNo.5
7 須恵器 甕	高　残 10.8	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。酸化焔焼成。	7.5YR8/6　浅黄橙 緻密　赤褐粗～微粒多量、白細粒少量 軟質	SI-737 カクランと接合 胴破片 覆土、SI-737カクラン
8 土製品 筒形	高　残 2.1 底　6.0	内面底部荒いナデで指頭圧痕あり。外面体部～底部荒いナデ。	7.5YR5/6　明褐色 やや緻密　白礫微量、青灰礫少量、赤褐粗～細粒少量 硬質	覆土 体下端～底 1/4

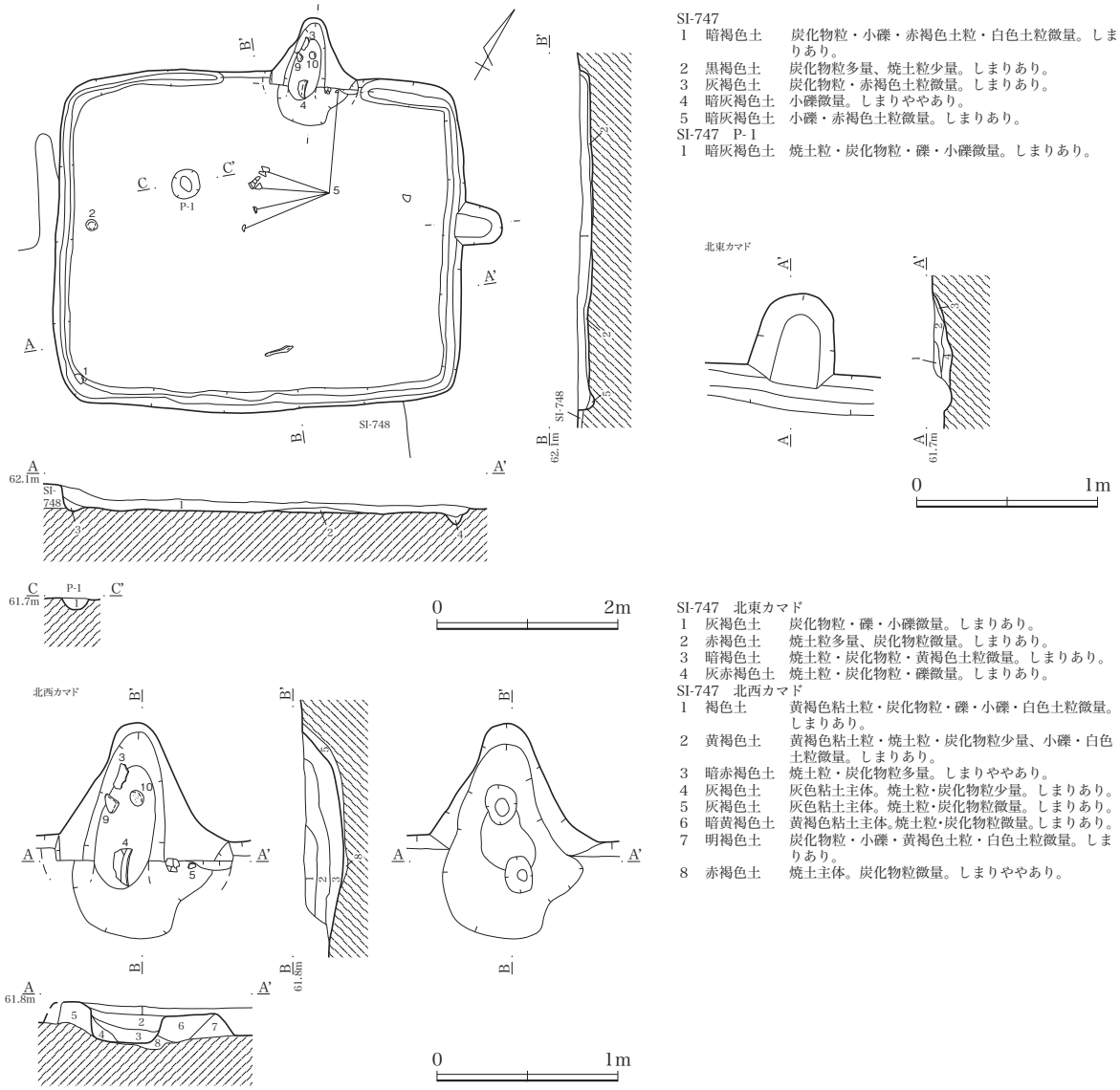
9 土製品 筒形	高　残 8.0 残存最大 9.8	内面体部軽いナデで紐積痕を明瞭に残す。外面体部荒いナデで紐積痕を明瞭に残す。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明粗粒少量、赤褐粗粒多量 硬質	北西隅床面上６㎝ 胴破片 No.1
10 土製品 粘土塊	長　6.8 幅　5.1 厚　3.1 重　81.7	平面・断面ともに不正楕円形。捏ねた粘土を固めて焼成している。赤褐色と灰白色がマーブル状に混じる胎土。大型。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　白礫少量、赤褐礫微量 やや軟質	中央部カマドの南側 完形 No.2

幅は 11 ～ 18cm、深さは床面から１～２cm である。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は、壁を 10cm ほど浅く「U」字状に掘り込むのみであるため、住居跡の下端はカマドの存在と関係なく直線的に続いている。火床面は床面からわずかに低い位置にあり、煙道は外傾して立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡は顕著で、煙道部内面の大部分は硬化赤変している。覆土は炭化物や焼土を微量に含む黄褐色土（第１層）である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器甕片主体に少量の坏などが含まれる。甕は武蔵型や球胴ばかりで、長胴はない。坏は半球状主体で、小形が多い。住居跡内ではカマドの周辺にまとまっていて、丸底の土師器坏４、口縁が外反する大形の坏２、鉢５、甕６がカマドの火床面直上から出土している。完形の粘土塊 10 はカマド南側から出土した。図示しなかった遺物は土師器のみで坏片 23 点（130 ｇ）、甕片 60 点（700 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－７４７（第 166・167 図、第 79 表、図版二六・二七・五五）

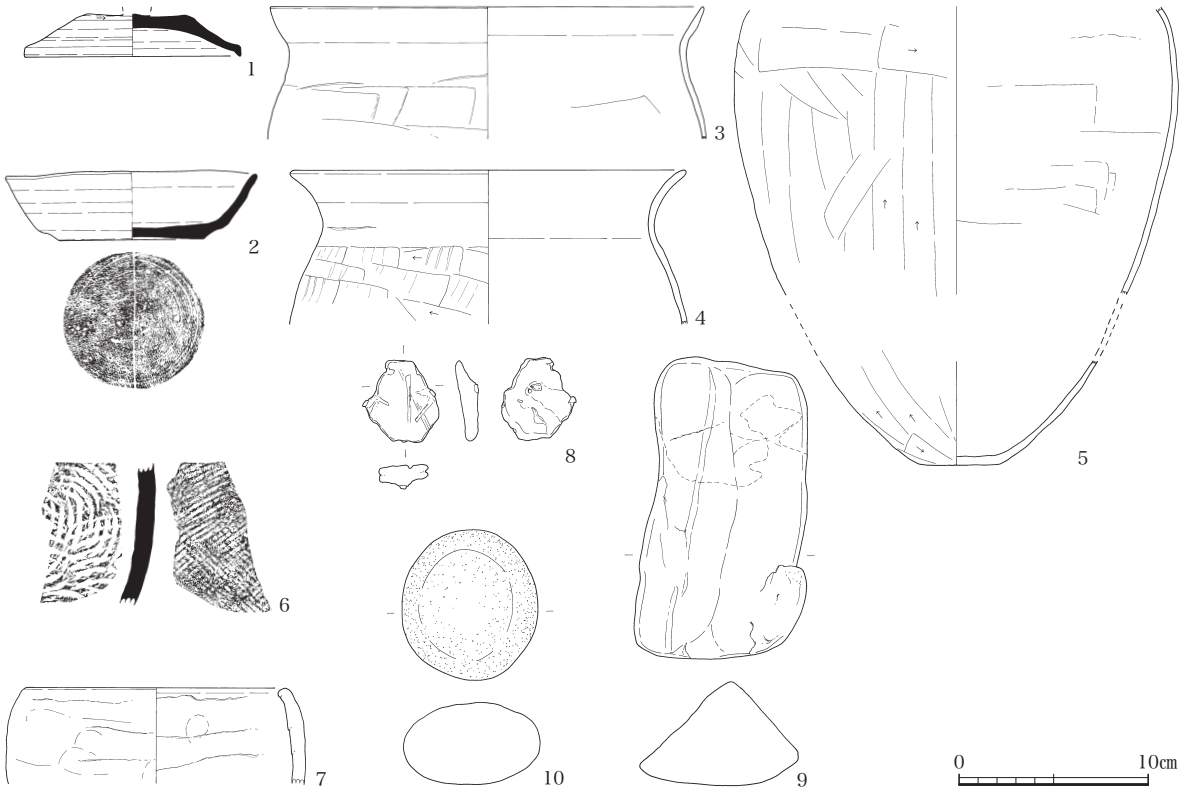
位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｋ－ 34 グリッドに位置する。西６ｍに SI-753・754、南８ｍに SI-749 がそれぞれ隣接する。　**重複**　SI-748 を切る。　**平面形**　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 30°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.50m、南東－北西方向が 3.78m である。　**覆土の状態**　第１・第２層で、床面直上に堆積する第２層は多量の炭化物を含む。南東－北西方向の住居跡中央付近に集中しており、北西壁際にあるカマドからの流出の可能性もあろうか。　**壁**　西寄りは確認面が高いため、壁高も高い。残存壁高は西側で 20cm、東寄りで 13cm であり、壁はやや外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　西部に１本（P- １）ある。規模は径 33 × 30cm、深さ 12cm で、焼土や炭化物を含む暗灰褐色土（第１層）を覆土とする。深さなどから、柱穴とは考えにくい。

壁溝　北西壁際中央のカマド部分を除き壁際を全周する。断面形は「U」字状で、幅は 17 ～ 24cm、深さは床面から５～９cm である。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りと北東壁際北寄りにあり、残存状態などから北東カマドから北西カマドへと作り替えられたと考えられる。北西カマドは天井部を失っているが袖部は確認でき、煙道部は壁を「U」字状に約 62cm 掘り込んで作られる。袖部は灰色粘土主体の灰褐色土（第５層）や黄色粘土主体の暗黄褐色土（第６層）などで構築される。調査時に袖部左右先端と左袖外側を失ったため規模は不明だが、両袖部とも壁からの張り出しは 30cm ほどと推定される。火床面は床面から８cm 低い位置にあり、煙道は火床面から緩やかに高さを増していく平坦面で、先端は外傾して立ち上がる。煙道内面には袖部と同様の灰褐色土（第５層）などが広範囲に貼られるほか、火床面の一部にある径 30 × 40cm、深さ 5cm の掘り込みは赤褐色土（第８層）で埋め戻される。煙道底面には径 43 × 35cm、深さ 5cm の掘り込みがあり、周辺から被熱した礫２点が出土する。１点は円礫（10）、もう１点は長方形の礫（９）で、長方形礫は左にやや傾いてはいるが立った状態である。出土状況から長方形礫９は支脚で、掘り込みは支脚を据えた掘方と想定できるだろう。燃焼部付近を中心にカマド内面の被熱痕跡は明瞭で、硬化赤変している部分が多い。覆土は４層で、第４層は天井部粘土、焼土や炭化物を多く含む第２・第３層は天井部内面の崩落だろう。カ



第 166 図　和田遺跡　SI-747 実測図

マド内からは土師器片の出土も目立つ。北東カマドは、壁を「U」字状に約 43cm 掘り込む煙道部のみが残存する。底面はほぼ平坦で、先端は緩やかに立ち上がる。壁に近い部分を中心にカマド内面は硬化赤変しており、被熱の痕跡は明瞭である。覆土は第１～第４層で、第２層は焼土を多量に含む。天井部や袖部を構成したとみられるような粘土は全くなく、人為的に破壊され、粘土は再利用に向けられたと推定される。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器甕主体である。甕は武蔵型のほか長胴の破片もあるが、長胴は重複するSI-748からの混入の可能性もあろう。坏は口縁部が外傾するものもあるが、半球状が多くみられる。小破片ばかりであり、本遺構に伴うかどうかは明らかにできない。住居跡内の遺物は北側のカマド内のほか各所から出土する。武蔵型甕３・４はカマド内の火床面直上より出土、５はカマド右袖付近の破片と住居跡中央部床面直上のものが接合した。いずれもカマドに使用されたものだろう。楕円形の礫 10 は火床面よりやや浮いた位置からの出土で、カマド構築材の可能性もある。三通窯段階とみられる須恵器坏２は床面上２cm で出土する。南隅出土の須恵器蓋１はやや新しい様相である。図化しなかった遺物は土師器甕片 117 点（1,000



第 167 図　和田遺跡　SI-747 出土遺物実測図

第 79 表　和田遺跡　SI-747 出土遺物観察表

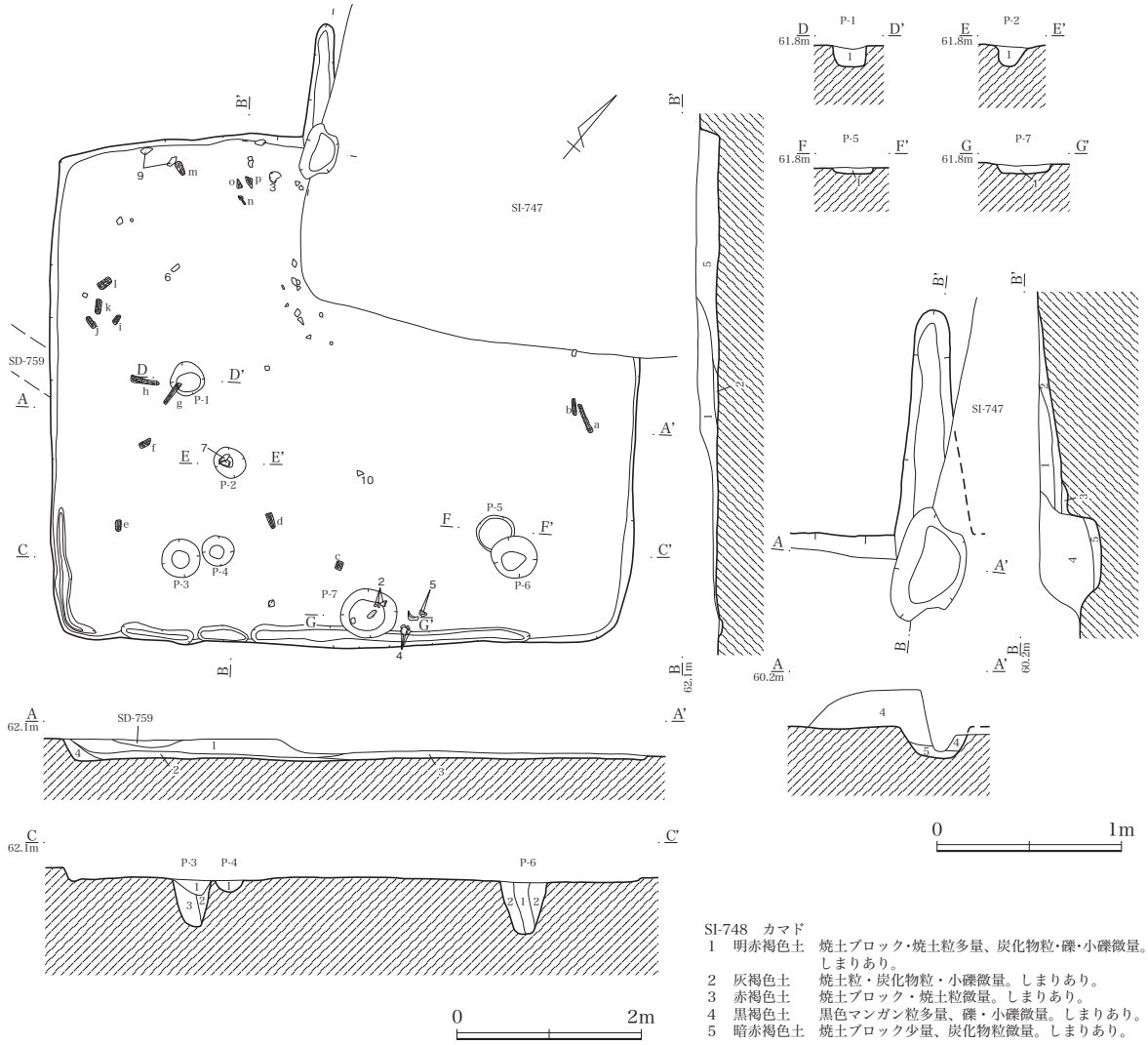
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　残 11.5 高　残 2.2 つまみ基 1.5	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみ欠損。	N6/0　灰 やや緻密　白・青灰細粒微量、白礫～粗粒微量 硬質	南西隅床面上 9 cm 口～天井ほぼ完存、つまみ欠損 No.8
2 須恵器 坏	口　13.3 高　3.6 底　7.7 重　151.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ。口縁がややひずむ。	2.5YR8/2　灰白 やや緻密　茶褐細粒多量、砂礫～粗粒微量 やや軟質	西壁際床面上 2 cm ほぼ完形 No.7
3 土師器 甕	口　復 22.9 高　残 7.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上位横方向のナデ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒多量、赤褐細粒少量、黒微粒多量 硬質	カマド中央部火床面直上 口～胴上半 1/5 No.4K
4 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 8.1	内面口縁～胴部上位ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上位横方向のケズリ。ケズリはローラー状の凹凸を伴う。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒少量、白粗～細粒多量、砂細～微粒少量 硬質	カマド中央部火床面上 8 cm 口～胴上半 1/3 No.1K
5 土師器 甕	高　残 20.7 (上　残 15.2 下　残 5.5) 底　4.2 最大 復 23.5	内面胴～底部ナデ。外面胴部上位横方向、中位縦方向、下位斜方向のケズリ、底部ケズリ。最大径は胴部上位。武蔵型。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　赤褐細粒少量、白微粒少量、黒微粒多量 硬質	中央部床面直上とカマド前面火床面上 11 cmが接合 胴～底 1/3 No.1・2・3・4・No.3K
6 須恵器 甕	高　残 7.6	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	10Y7/1　灰白 やや緻密　黒微粒少量、白微粒微量、赤褐微粒微量 やや軟質	覆土 胴破片

7 土製品 筒形	口　復 14.0 高　残 5.0 最大　復 15.8	内面口縁～体部上半ナデで紐積痕を明瞭に残す。外面口縁～体部上半ナデで紐積痕が部分的に残る。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐細粒少量、砂細粒少量 やや軟質	掘方 口～体上半 1/6 掘方
8 土製品 粘土塊	長　4.4 幅　4.1 厚　残 1.1 重　12.7	平面・断面ともに不正形。捏ねた粘土を固めて焼成している。表面は平坦でナデ、植物の茎状の圧痕を多く残す。裏面細かな凹凸が目立つ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　砂礫少量、赤褐細粒少量 硬質	覆土 完形
9 石 礫	長　16.0 幅　9.1 厚　5.5 重　995.9	平面長方形。断面三角形。特に加工の痕跡なし。三角柱状を呈し、上部が被熱のため赤変する。カマドの支脚として利用されていたと考えられる。	2.5Y7/2　灰黄 緻密流紋岩質凝灰岩	カマド内中央部火床面上７㎝、正立、支脚として使用 完形 No.5K
10 石 礫	長　7.9 幅　7.2 厚　4.4 重　310.7	平面・断面ともに楕円形。特に加工の痕跡なし。カマドの構築材か？	2.5Y7/1　灰白 やや粗い　安山岩	カマド内中央部火床面上６㎝ 完形 No.6K

ｇ）、坏片 30 点（160 ｇ）須恵器片５点（40 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－７４８（第 168・169 図、第 80 表、図版二七・五五）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｊ－ 34、Ｋ－ 34 グリッドに位置する。西３ｍに SI-754、南３ｍに SI-749、南東４ｍに SI-743、南東５ｍに SI-744 がそれぞれ隣接する。　**重複**　北部が SI-747 に切られ、西部が SD-759 に浅く切られる。　**平面形**　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 40°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 6.35m、南東－北西方向が 5.51m である。　**覆土の状態**　５層で、焼土や炭化物を多量に含む点が特徴的である。焼土を多く含むのは第１層、炭化物を含むのは第２・第３・第５層である。　**壁**　西寄りは確認面が高いため、壁高も高い。残存壁高は西側で 24cm、東寄りで５cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものは２本（P- ３・P- ６）ある。P- ３は径 41 × 41cm、深さ 50cm、P- ６は径 47 × 45cm、深さ 55cm、P- ３・P- ６間の柱間寸法は 3.60m である。P- ３の第２層、P- ６では第１層が柱に相当するとみられ、土層中に空洞が確認できる。このほか、住居跡内にはピットが５本（P- １・P- ２・P- ４・P- ５・P- ７）ある。P- １は径 36 × 33cm、深さ 23cm、P- ２は径 35 × 33cm、深さ 22cm、P- ４は径 34 × 33cm、深さ 12cm、P- ５は径 40 × 40cm、深さ 7cm、P- ７は径 60 × 53cm、深さ 11cm である。P- ７はカマドに相対する壁際の中央に位置しており、入口ピットの可能性もあろう。　**壁溝**　南東辺と南隅壁際に断続的にある。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は 13 ～ 20cm、深さは床面から９～ 12cm である。　**火処**　カマドが北西壁際中央にある。天井部・袖部が失われているほか、カマド右側は SI-747 に切られるため残存状態は良くない。煙道部は長く、壁を溝状に約 120cm 掘り込んで作られる。火床面は床面から約 10cm 低い位置にあり、燃焼部全体は縦方向に長い楕円形土坑状となっている。規模は 63 × 49cm、覆土は５層で、第１層は焼土ブロックを多量に含んでおり、天井部内面が崩落したものともみられる。カマド内面には被熱の痕跡があり、燃焼部から煙道手前側は部分的に硬化赤変している。燃焼部の覆土は第４・第５層で、火床面直上の第５層は焼土ブロックを含む。煙道へは垂直に立ち上がったあとわずかな段差を経て平坦となっていて、先端に向かっては一定の傾斜で緩やかに高くなり、そのままの傾斜で確認面に至る。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器甕主体に少量ある。甕は長胴が多く球胴がわずかに混じり、武蔵型は少ない。坏は模倣坏もあるが器壁の薄い半球状主体で、小径のものや暗文状のミガキが施されるものもある。住居跡内では遺物は各所から出土する。内面にミガキを持つ坏３は、カマド前面の床面直上より、４は住居南壁際中央から床面からやや浮いて出土している。また、底部に木葉痕を持つ坏２は P- ７より、ほぼ完形の須恵器坏７は P-2 より出土する。

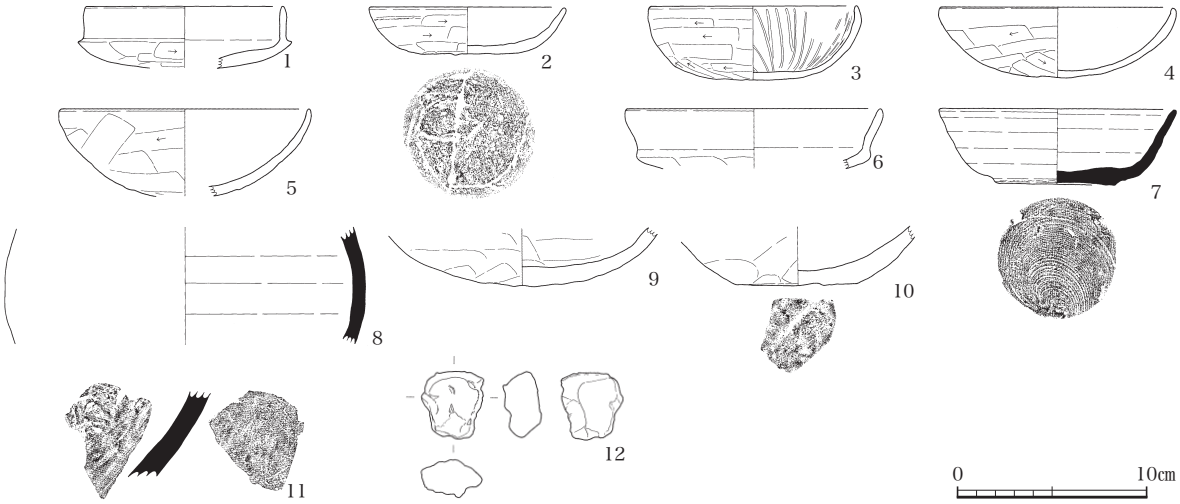


SI-748　カマド
1　明赤褐色土　焼土ブロック･焼土粒多量、炭化物粒･礫･小礫微量。しまりあり。
2　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
3　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒微量。しまりあり。
4　黒褐色土　黒色マンガン粒多量、礫・小礫微量。しまりあり。
5　暗赤褐色土　焼土ブロック少量、炭化物粒微量。しまりあり。

SI-748
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　炭化物ブロック･炭化物粒多量､焼土ブロック･焼土粒少量。しまりあり。
3　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　灰色粘土粒・炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-1
1　褐色土　炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-2
1　褐色土　炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-3
1　灰褐色土　焼土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄灰褐色土　黄褐色粘土粒少量､焼土粒･炭化物粒微量。しまりややあり。空洞あり。
3　黄褐色土　黄褐色粘土粒多量、焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SI-748　P-4
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-5
1　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-6
1　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりややあり。空洞あり。
2　褐色土　白色土粒微量。しまりあり。
SI-748　P-7
1　灰褐色土　黄褐色粘土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 168 図　和田遺跡　SI-748 実測図

土師器甕は球胴甕２点（９・10）を図化した。図化しなかった遺物は、土師器坏片 64 点（450 ｇ）、甕片 216 点（2,190 ｇ）、須恵器片５点（35 ｇ）、粘土塊１点（５ｇ）である。遺構の年代は７世紀中葉でも後半寄りと考えられる。なお、住居跡内出土炭化材 16 点（ａ～ｐ）については樹種同定を実施し、コナラ属コナラ亜属コナラ節１点（ｐ）、コナラ属アカガシ亜属７点（ｃ・ｆ・ｇ・ｉ・ｍ・ｎ・ｏ）、クリ２点（ｅ・ｈ）、カエデ属３点（ｊ・ｋ・ｌ）、広葉樹１点（ｄ）、不明２点（ａ・ｂ）と判明した。うち比較的大型の材ｄ・ｈ・ｏは放射性炭素年代測定を実施し、ｄ・ｈは７世紀中葉～８世紀後半、ｏは９世紀末～ 12 世紀中葉との結果が得られている。ｄ・ｈ２点が示す年代は、遺物からみた年代と整合する。



第 169 図　和田遺跡　SI-748 出土遺物実測図

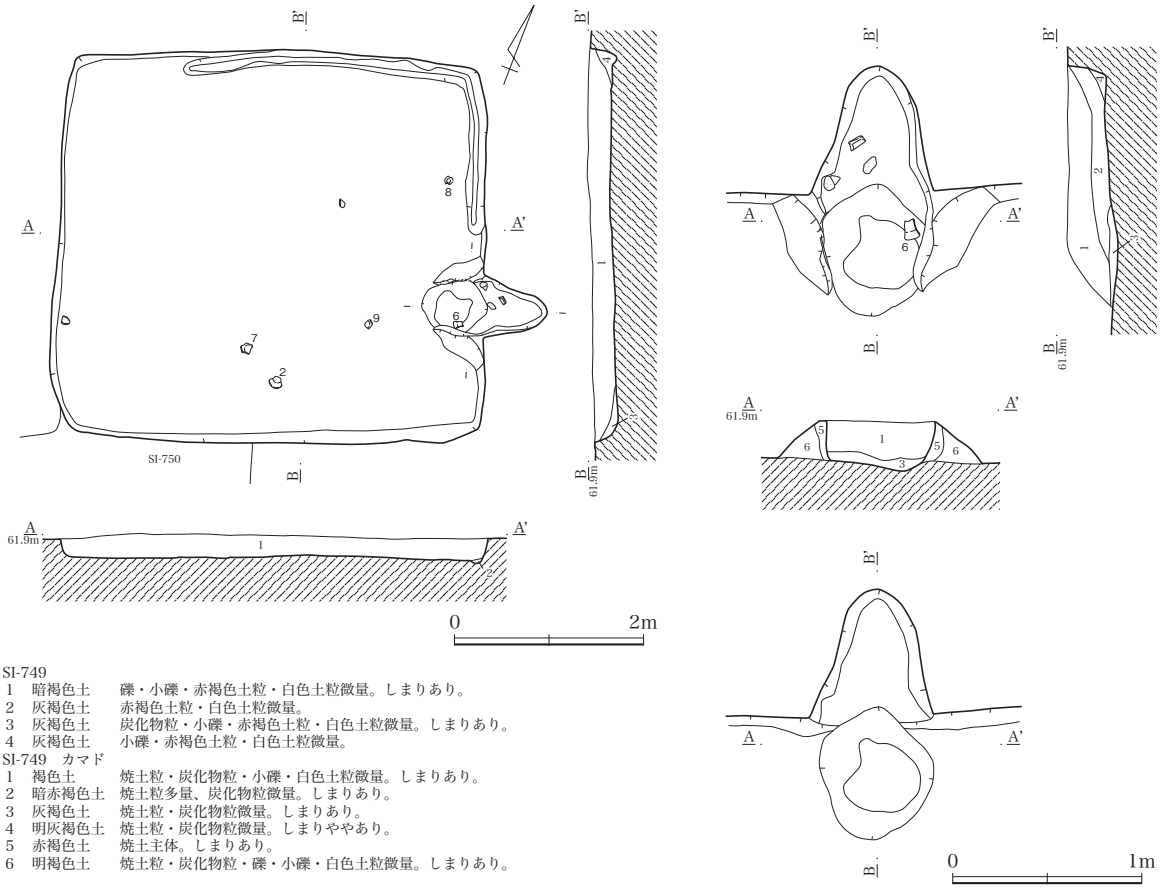
第 80 表　和田遺跡　SI-748 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.4 高　残 3.2 最大 復 11.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	10YR8/1　灰白 やや緻密　白・灰褐細粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/5
2 土師器 坏	口　10.4 高　2.5 重　69.1	表面剝離著しい。内面調整不明。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕わずかに残る。小型。	7.5YR8/3　浅黄橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや軟質	P- 7 底面上 12 ㎝と 13 ㎝が接合 ほぼ完形 No.3・4
3 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 3.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。全面被熱。	10YR7/8　明黄褐 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐粗～細粒微量 やや硬質	カマド前面床面直上 口～体 3/4、底完存 No.20
4 土師器 坏	口　復 12.6 高　残 3.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われるが表面剝離のため不明確。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐細粒少量 やや硬質	南壁際床面上 2 ㎝と 3 ㎝と 7 ㎝が接合、重なった状態 口～体 1/2、底 3/4 No.5・31・32
5 土師器 坏	口　復 13.3 高　残 4.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明確。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、外面成形はやや甘く、歪み残る。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐・白細粒少量 やや硬質	南壁際床面上 9 ㎝と 10 ㎝が接合 口～底 1/4 No.7・30
6 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。被熱のため全体が赤変する。	10YR6/6　赤橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 硬質	西部床面上 33 ㎝ 口～体上半 1/6 No.22
7 須恵器 坏	口　12.5 高　3.9 底　6.3 重　146.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N6/0　灰 緻密　白粗～細粒少量、灰刻細粒微量、白礫微量 やや軟質	P-2 底面上 13.5 ㎝、横位 ほぼ完形 No.1
8 須恵器 瓶類	高　残 6.2 最大体 復 19.0	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。	N5/0　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	覆土 体破片
9 土師器 甕	高　残 3.0	内面底部ナデ。外面胴部～底部ケズリ。丸底。球胴か？	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐粗～細粒多量、白細粒少量 やや軟質	北壁際床面上 14 ㎝と 16 ㎝が接合 底ほぼ完存 No.26・27

10 土師器 甕	高　残 3.1 底　復 6.5	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ後ナデ、底部木葉痕。球胴。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量、粗砂粒少量 やや軟質	中央部床面直上 胴下半 1/4、底 1/4 No.8
11 須恵器 甕	高　残 4.5	内面胴部同心円当具痕後ナデ。外面胴部平行叩き。断面の内部は赤褐色を呈する。	2.5GY7/1　明オリーブ灰 緻密　赤褐・白・青灰細粒微量 やや軟質	覆土 胴破片
12 土製品 粘土塊	長　3.6 幅　3.3 厚　2.0 重　17.8	平面不正四角形。断面不正楕円形。捏ねた粘土を固めて焼成している。胎土中に含まれる礫が突出する。調整なし。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　砂礫少量 やや硬質	覆土 完形

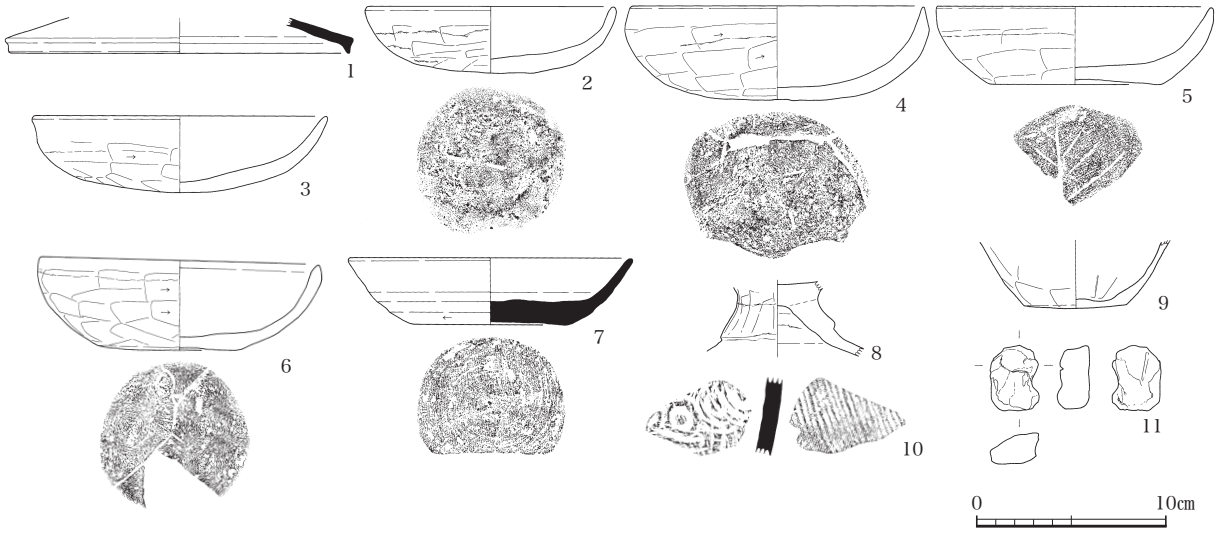
ＳＩ－７４９（第 170・171 図、第 81 表、図版二七・五五）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－34、Ｊ－34 グリッドに位置する。北３ｍに SI-748、東３ｍに SI-744・SI-743、南東４ｍに SI-742 がそれぞれ隣接する。　**重複**　南西部で SI-750 を切る。　**平面形**　東西方向にやや長い方形で、東西方向の中軸線はＮ－69°－Ｅである。　**規模**　南北方向が 4.15m、東西方向が 4.53m である。　**覆土の状態**　４層で、南壁際に堆積する第３層は炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は 17 ～ 21cm であり、壁はやや丸みを持って垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　北東隅を中心とした壁際にある。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は 17 ～ 21cm、深さは床面から５～８cm である。　**火処**　カマドが東壁際南寄りにある。天井部は失われているが袖部は確認でき、規模は 136 × 123cm である。煙道部は、壁を「Ｕ」字状に 70cm 掘り込んで作られている。袖部は明



SI-749
1　暗褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　　赤褐色土粒・白色土粒微量。
3　灰褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。
SI-749　カマド
1　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗赤褐色土　焼土粒多量、炭化物粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　　焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
4　明灰褐色土　焼土粒・炭化物粒微量。しまりややあり。
5　赤褐色土　　焼土主体。しまりあり。
6　明褐色土　　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 170 図　和田遺跡　SI-749 実測図



第 171 図　和田遺跡　SI-749 出土遺物実測図

第 81 表　和田遺跡　SI-749 出土遺物観察表

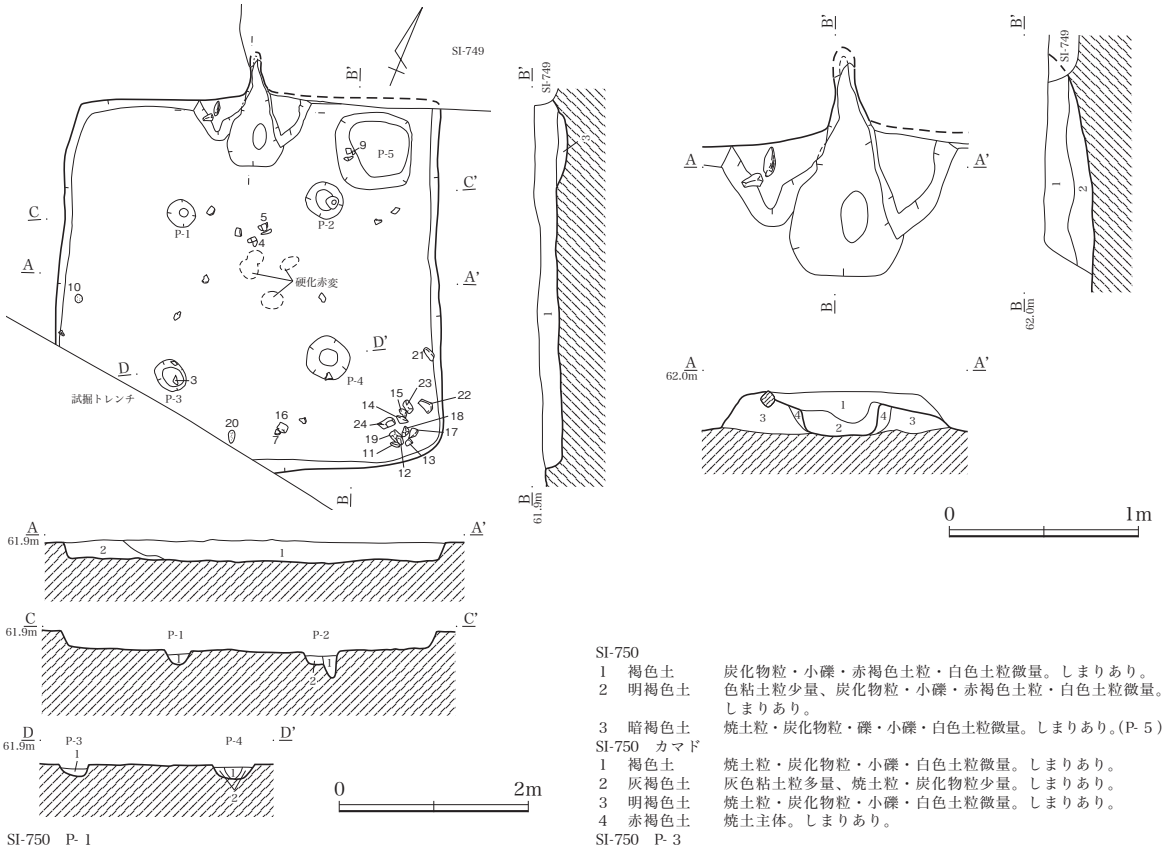
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 18.4 高　残 1.8	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰粗粒少量 やや硬質	覆土 口辺破片
2 土師器 坏	口　復 13.4 高　3.5	表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部粗いケズリで紐積痕残す。中央に木葉痕わずかに残る。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白・青灰細粒多量、赤褐粗粒少量 やや軟質	南部床面上 15 cm、正立 口～体 2/3、底完存 No.5
3 土師器 坏	口　復 15.6 高　4.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5Y8/2　灰白 緻密　青灰微粒多量、白細粒少量 やや軟質	カマド掘方 口～底 1/2 K 掘方
4 土師器 坏	口　復 15.6 高　4.9 最大 復 16.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデで漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕。口縁部は被熱のため赤変する。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白粗粒少量、白細粒少量、赤褐粗粒微量 やや軟質	暗渠 口～底 1/2、底完存 アンキョ
5 土師器 坏	口　復 14.6 高　復 4.1 底　復 9.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ、漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部軽いケズリ、底部木葉痕。	5Y8/1　灰白 緻密　白細粒少量、青灰粗粒少量 やや軟質	覆土 口～底 1/4
6 土師器 坏	口　15.0 高　4.9 底　7.6	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕わずかに残る。	10YR8/1　灰白 緻密　白細粒微量、青灰微粒多量、赤褐粗粒微量 やや軟質	カマド中央部火床面上 9 cm、正立 口～底 2/3 KNo.1・アンキョ
7 須恵器 坏	口　復 15.0 高　3.5 底　8.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁部～体部ロクロナデ、体部下端～底部回転ケズリ。底部ケズリ面は平坦ではなく、波打っている。	N6/0　灰 やや粗い　白礫～細粒多量 硬質	南部床面上 11 cm 口 1/6、体 1/2、底 2/3 No.4
8 土師器 高坏	高　残 3.9	内面底部ナデ、脚部上半ナデで紐積痕あり。下半ヨコナデ。外面脚部上半縦方向のケズリ、稜あり、下半ヨコナデ。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　赤褐・白粗粒少量 やや硬質	東壁際床面上 18 cm、逆位 底～脚上半完存 No.1
9 土師器 甕	高　残 3.6 底　復 5.4	内面胴部下端～底部ナデで工具痕残る。外面胴～底部ケズリ。武蔵型。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや緻密　白細粒多量、金雲母粗粒少量、砂粗粒少量 硬質	カマド前面床面上 14 cm 体下位～底 1/2 No.3
10 須恵器 甕	高　残 4.2	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白粗粒微量、白細粒少量 やや軟質	覆土 胴破片

11 土製品 粘土塊	長　3.4 幅　2.5 厚　1.7 重　12.2	平面不正楕円形。断面不正長方形。捏ねた粘土を固めて焼成している。平坦面あり。裏面はほぼ平坦。	7.5Y6/6　橙 やや緻密　赤褐・白粗粒少量、青灰礫微量 硬質	覆土 完形

褐色土（第６層）で構築されており、内側には被熱による硬化赤変が顕著に認められる（第５層）。火床面は床面から約４cm 低い平坦面で、平面円形に浅く窪んでいる。火床面から煙道へは緩やかに高くなったのち平坦面となり、先端はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。煙道側面には袖部と同様の明褐色土（第６層）が貼られており、燃焼部に近い部分では被熱により硬化赤変する部分も多く認められる。覆土は火床面に灰褐色土（第３層）、煙道先端に明灰褐色土（第４層）ののち、全体に焼土を多量に含む暗赤褐色土（第２層）、褐色土（第１層）が堆積する。第２層は天井内面の崩落であろう。煙道左側からは長さ 10cm 程度の礫４点が出土するが、カマド構造に関わるものかどうかは定かではない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少ない。全体としては胎土白色の半球状の坏が目立ち、底部平底で木葉痕を持つものもある（５・６）。このほかには口縁部が外傾ないし上半が内湾するもの、半球状だが器壁の薄いものなどもある。甕は長胴の他に武蔵型がある。鉢は少ない。坏６はカマド内中央部のやや浮いた位置から出土しており、カマドに関連する遺物とも考えられる。図化しなかった遺物は土師器坏片 26 点（185 ｇ）、甕片 196 点（1,560 ｇ）、須恵器片４点（60 ｇ）、粘土塊４点（40 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＩ－７５０（第 172・173 図、第 82 表、図版二七・二八・五六）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－34 グリッドに位置する。東４m に SI-742、南８m に SI-751・752、北



SI-750　P- 1
1　灰褐色土　灰褐色粘土粒多量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SI-750　P- 2
1　灰褐色土　灰褐色粘土粒・炭化物粒少量、小礫微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。

SI-750
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　色粘土粒少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(P- 5)
SI-750　カマド
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　灰色粘土粒多量、焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。
3　明褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　赤褐色土　焼土主体。しまりあり。
SI-750　P- 3
1　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-750　P- 4
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 172 図　和田遺跡　SI-750 実測図

第 173 図　和田遺跡　SI-750 出土遺物実測図

第 82 表　和田遺跡　SI-750 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 20.7 高　残 4.9 つまみ 復 5.6	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ後天井部つまみ貼付け。リング状つまみ。内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。焼成不良。	2.5Y8/1　灰白 緻密 灰粗粒微量、黒微粒少量 やや軟質	覆土 口～天井一部、つまみ 1/2
2 土師器 坏	口　復 10.0 高　残 2.8	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや粗い　黒・赤褐粗粒微量、黒微粒少量 やや硬質	カマド 口～体 1/3 K
3 土師器 坏	高　残 3.8 体部 復 11.4	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ、表面磨滅のため調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白微粒微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	P-3 内底面上 3 cm 口一部、体～底 1/3 P-1 No.1
4 土師器 坏	口　10.7 高　3.3	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後多方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕わずかにあり。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒・赤褐粗粒微量、黒微粒少量 やや硬質	中央部床面直上 口～体 1/3、底完存 No.5
5 土師器 坏	口　復 13.4 高　4.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ、内面全体漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　灰礫微量、黒微粒少量 やや硬質	中央部床面上 17 cm 口～底 1/4 No.6
6 土師器 甕	口　復 15.3 高　残 4.3	表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ナデかケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐・白礫微量、細砂粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上端一部
7 土師器 甕	高　残 3.4 底　6.6	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部木葉痕。	5YR6/6　橙 粗い　黒・白・赤褐礫微量、粗砂粒多量 硬質	南壁際床面上 7 cm 胴下端～底 1/3 No.8
8 須恵器 甕	高　残 6.0	内面胴部同心円当具痕。外面胴部擬格子叩き。	N7/0　灰白 緻密　灰礫微量、黒微粒少量 やや軟質	覆土 胴部破片
9 土製品 粘土塊	長　5.0 幅　3.6 厚　1.5 重　16.3	平面三角形。断面楕円形。捏ねた粘土を固めてそのまま焼成している。表面は平坦、ナデ。長胴の胎土に似る。	7.5YR4/3　褐 やや緻密　赤褐礫微量、砂粗～細粒少量 やや硬質	貯蔵穴（P-5）内底面直上 完形 P-5 No.3
10 石器 編物石	長　9.0 幅　6.4 厚　4.5 重　313.3	平面不正長方形。断面不正三角形。特に加工の痕跡なし。転石。	N7/0　灰 やや緻密　泥岩	西壁際床面直上 完形 アミモノ石・No.29
11 石器 編物石	長　9.8 幅　4.6 厚　3.6 重　203.8	平面棒状。断面台形状。特に加工の痕跡なし。丸味を持つ角礫。	10BG5/1　青灰 緻密　砂岩	南東隅床面上 7 cm 完形 アミモノ石・No.20
12 石器 編物石	長　11.0 幅　4.4 厚　4.2 重　284.2	平面棒状。断面不正方形。特に加工の痕跡なし。丸味を持つ角礫。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密　チャート	南東隅床面上 9 cm 完形 アミモノ石・No.25
13 石器 編物石	長　10.7 幅　6.2 厚　3.0 重　261.2	平面楕円形。断面長方形。右側縁中央部に敲打による剝離が施され、わずかに凹む縁辺部となる。丸みを持つ角礫。	N3/0　暗灰 やや緻密　チャート	南東隅床面上 8 cm 完形 アミモノ石・No.24
14 石器 編物石	長　10.6 幅　6.2 厚　3.5 重　257.6	平面不正三角形。断面不正楕円形。特に加工の痕跡なし。角礫。	10Y3/1　オリーブ黒 緻密　チャート	南東隅床面上 7 cm 完形 アミモノ石・No.18
15 石器 編物石	長　11.5 幅　7.5 厚　5.5 重　384.9	平面不正三角形。断面不正三角形。特に加工の痕跡なし。転石。	N6/0　灰 やや緻密　砂岩	南東隅床面上 7 cm 完形 アミモノ石・No.17

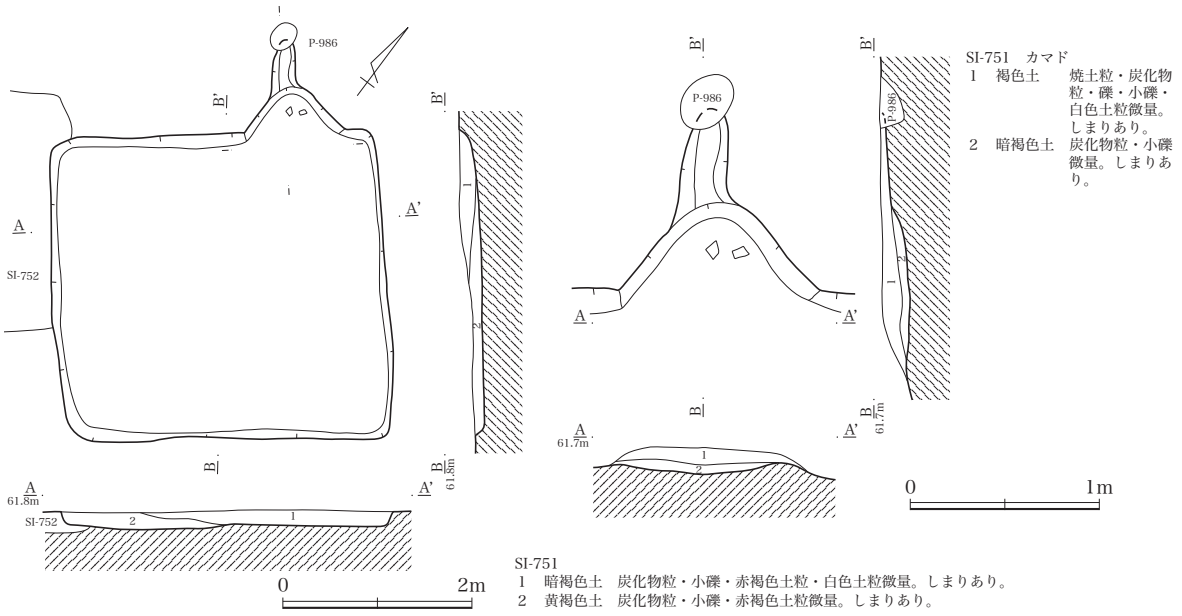
16 石器 編物石	長　11.2 幅　6.4 厚　4.4 重　316.2	平面棒状。断面不正方形。特に加工の痕跡なし。角礫。	10Y6/1　灰 やや緻密　砂岩	南部床面上６㎝ 完形 アミモノ石・No.26
17 石器 編物石	長　11.4 幅　6.2 厚　4.3 重　408.4	平面不正長方形。断面方形。特に加工の痕跡なし。角礫。	5Y4/1　灰 やや緻密　砂岩起源のホルンフェルス	南東部床面上８㎝ 完形 アミモノ石・No.23
18 石器 編物石	長　12.1 幅　7.9 厚　3.0 重　218.4	平面不正楕円形。断面三角形。特に加工の痕跡なし。転石。	5Y6/1　灰 やや緻密　砂岩	南東隅床面上８㎝ 完形 アミモノ石・No.22
19 石器 編物石	長　12.8 幅　7.8 厚　3.9 重　570.6	平面長方形。断面不正楕円形。特に加工の痕跡なし。やや丸味を持つ角礫。	5Y5/2　灰オリーブ やや緻密　チャート	南東隅床面上７㎝ 完形 アミモノ石・No.21
20 石器 編物石	長　14.0 幅　6.0 厚　2.5 重　299.7	平面棒状。断面楕円形。特に加工の痕跡なし。カドが目立つ転石。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　チャート	南部床面上４㎝ 完形 アミモノ石・No.27
21 石器 編物石	長　14.2 幅　6.7 厚　3.1 重　393.1	平面・断面ともに楕円形。右側縁に敲打による剝離が施され、小さな抉りを作り出している。転石。	5B3/1　暗青灰 緻密　結晶片岩	南東隅床面上９㎝ 完形 アミモノ石・No.14
22 石器 編物石	長　16.0 幅　10.3 厚　4.0 重　827.3	平面長方形。断面不正長方形。特に加工の痕跡なし。やや丸味を持つ角礫。	7.5YR6/6　橙 緻密　チャート	南東隅床面上10㎝ 完形 アミモノ石・No.15
23 石器 編物石	長　16.1 幅　7.5 厚　3.2 重　709.0	平面・断面ともに長方形。特に加工の痕跡なし。やや丸味を持つ角礫。	5B3/1　暗青灰 緻密　チャート	南東隅床面上８㎝ 完形 アミモノ石・No.16
24 石器 編物石	長　17.4 幅　9.7 厚　6.0 重　1053.5	平面不正長方形。断面長方形。特に加工の痕跡なし。やや丸味を持つ角礫。	5GY4/1　暗オリーブ灰 やや緻密　チャート	南東隅床面上６㎝ 完形 アミモノ石・No.19

西８ｍに SI-755 がそれぞれ隣接する。　**重複**　カマドを含む住居跡北東部が SI-749 に切られる。南西部は、試掘調査時のトレンチにより失われている。　**平面形**　方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 23°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.02m、南北方向が 3.98m である。　**覆土の状態**　第１・第２層で、第２層は灰色粘土粒を含む。炭化物は第１・第２層ともわずかに含む。　**壁**　残存壁高は 16 ～ 20cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、被熱のためか硬化赤変する部分がある。硬化赤変部分は住居跡中央部の径 60cm の範囲内にあり、楕円形の赤変部分３ヶ所が確認できる。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　主柱穴と推定されるものが４本（P- １～ P- ４）ある。P- １は径 30 × 28cm、深さ 15cm、P- ２は径 40 × 38cm、深さ 30cm、P- ３は径 36 × 30cm、深さ 11cm、P- ４は径 45 × 45cm、深さ 15cm である。柱間寸法は、P- １－ P- ２間が 1.60m、P- ３－ P- ４間が 1.66m、P- ３－ P- １間が 1.75m、P- ４－ P- ２間が 1.65m である。P- ２以外は浅く、P- ２・４では柱部分と掘方が明瞭に分層できる。P- １の第１層と P- ２の第１層には、灰褐色粘土が含まれる。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部は失われ、煙道先端からカマド右側が SI-749 に切られるが、袖部は比較的良好に残存する。規模は 125 × 112cm である。煙道部は壁を溝状に掘り込んで作られており、残存部分での北壁からの距離は 35cm、推定される全長は 122cm である。袖部は明褐色土（第３層）で構築されており、内側には被熱による硬化赤変が顕著に認められる（第４層）。左袖部内には、長さ 10 ～ 15cm の礫が含まれる。火床面は床面からわずかに低い位置で、火床面から煙道へは緩やかに高くなっていき、先端に向けて徐々に傾斜が急になる。被熱によ

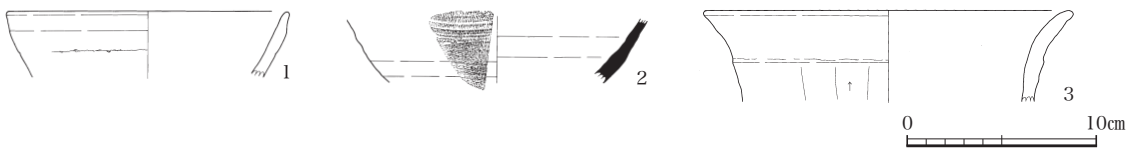
る硬化赤変は袖部内面から燃焼部に近い煙道付近に認められるほか、火床面でも顕著である。覆土は灰褐色土（第２層）と褐色土（第１層）で、第１層はカマド構築材の崩落の可能性も考えられる。第２層は天井内面の崩落であろう。煙道左側からは長さ 10cm 程度の礫４点が出土するが、カマド構造に関わるものかどうかは定かではない。　**貯蔵穴**　北東隅にある（P- ５）。平面形は不整方形で、規模は 81 × 81cm、床面からの深さは 10cm である。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は焼土や炭化物を含む第１層である。　**遺物**　遺物は少ない。土器は土師器中心で、坏と甕が同量くらいある。甕は長胴と球胴が多く、武蔵型のような破片もみられる。坏は半球状主体で、口縁部が外傾するものがわずかに混じる。土器類は住居跡内各所から出土するが、南東隅には礫が集中している。出土状況から編物石（10 ～ 24）としてよかろう。一部敲打により側縁部に抉りを作り出すもの（13・21）もある。粘土塊９は貯蔵穴内底面直上出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片 74 点（540 ｇ）、甕片 206 点（2,180 ｇ）、須恵器片３点（40 ｇ）である。遺構の年代は７世紀中葉～後葉と考えられる。

ＳＩ－７５１（第 174・175 図、第 83 表、図版二八）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｈ－ 34 グリッドに位置する。北７ｍに SI-750、北東８ｍに SI-741・742 がそれぞれ隣接する。　**重複**　住居跡南西部で SI-752 を切り、カマド煙道先端が P-986 に切られる。　**平面形**　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 38°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 3.22m、南東－北西方向が 3.53m である。　**覆土の状態**　第１・第２層で、ともに微量の炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 16cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　おおむね平坦であるが、南から北へと緩やかに高くなっている。南北の高低差は約 12cm である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火**



第 174 図　和田遺跡　SI-751 実測図



第 175 図　和田遺跡　SI-751 出土遺物実測図

第 83 表　和田遺跡　SI-751 出土遺物観察表

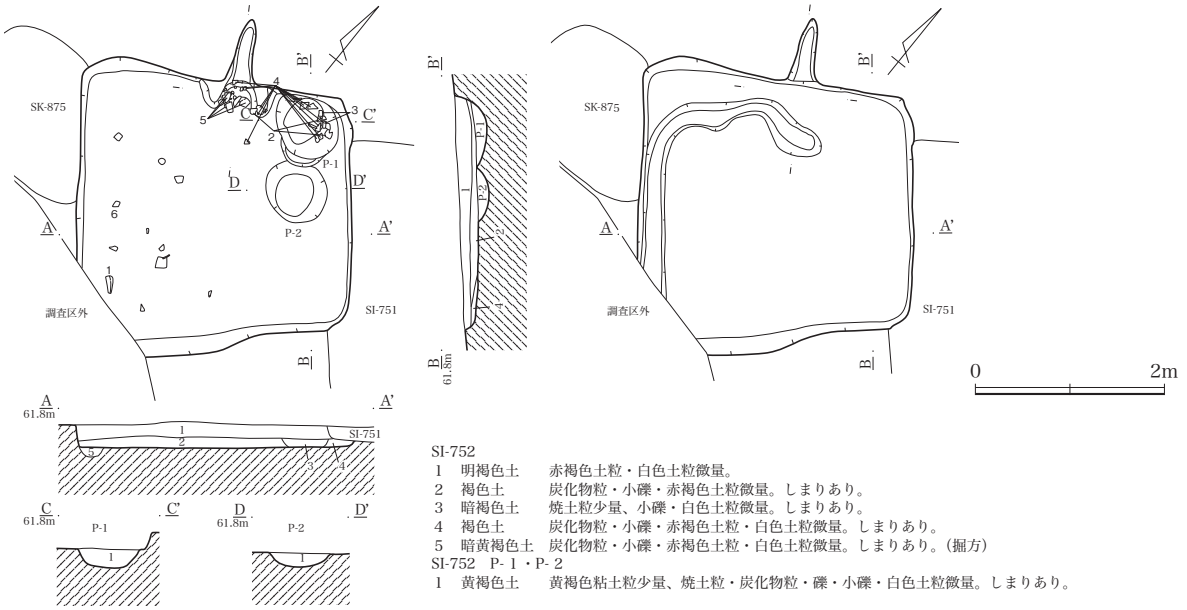
番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 3.5	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデと思われるが表面磨滅のため調整不明瞭。紐積痕あり。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
2 須恵器 瓶類	高　残 3.5	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ後回転ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白粗細粒少量 硬質	覆土 体下半破片
3 土師器 甕	口　復 19.6 高　残 4.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　白細粒少量、砂礫～粗粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上端一部

処　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部・袖部ともに失われており、残存状態は良くない。カマドは壁を「U」字状に 45cm 掘り込んだのち、さらに溝状に掘り込んで作られる。溝先端は P-986 に切られるため長さは確定できないが、残存部からおよそ 50cm と推定され、カマドの全長は 95cm となる。火床面は床面からわずかに低くなった位置にあり、煙道へは緩やかに立ち上がったのち平坦な溝状の煙道となる。袖部は確認できないが、火床面の左右はわずかに高くなっており、地山を掘り残して袖の基礎にしたものとも考えられる。被熱の痕跡は少なく、火床面などの一部に硬化赤変した部分が認められる程度である。覆土は２層で、第１層には天井内面の崩落とみられる焼土をわずかに含む。燃焼部では礫２点が出土するが、カマド構造に関わるものかどうかは定かではない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器甕は長胴主体で武蔵型は少ない。土師器坏は口縁部が外傾するものと半球状の坏が中心となる。ロクロ成形の坏はない。図化しなかった遺物は土師器のみで坏片 14 点（70 ｇ）、甕片 153 点（1,100 ｇ）である。時期を決定する手だては少ないが、坏と甕の様相から本遺構の年代は８世紀前葉と考える。

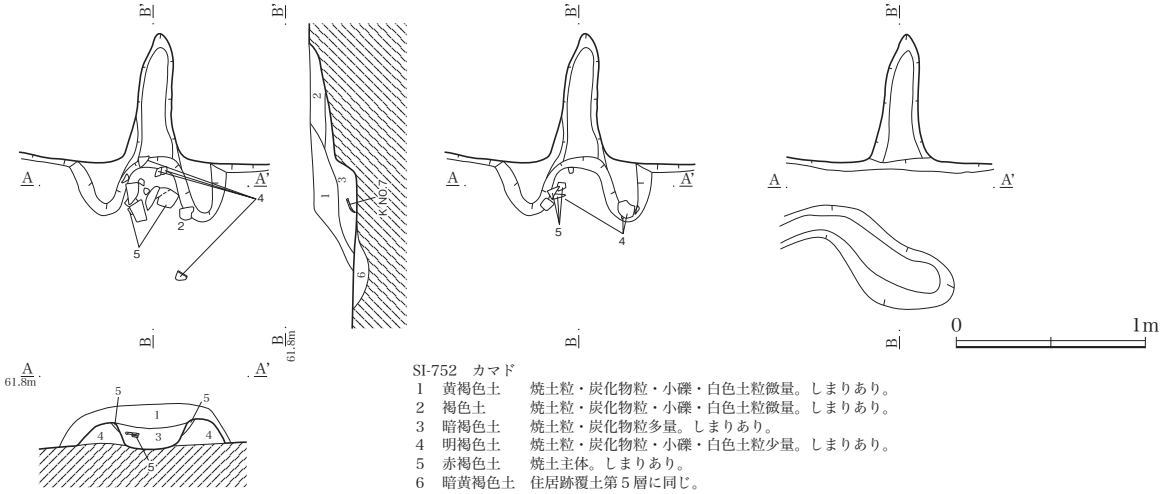
ＳＩ－７５２（第 176・177 図、第 84 表、図版二八・五五）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｈ－ 34 グリッドに位置する。北８ｍに SI-750、北東 11m に SI-741・742 がそれぞれ隣接する。　**重複**　西部で SK-875 と重複する。土層断面での確認はできていないが、SK-875 を切ると考えられる。東部が SI-751 に切られる。南隅は調査区外となる。　**平面形**　台形に近い方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 36°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 2.91m、南東－北西方向が 2.90m である。北東辺は 2.45m と短く、相対する南西辺は推定 3.10m と長い。　**覆土の状態**　第１～第４層で、第１層以外は炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は 12 ～ 24cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。平面図には示していないが、床面中央付近には被熱のためか硬化赤変する部分がある。　**堀方・貼床**　南西壁から北西壁際が溝状に掘り込まれ、炭化物を含む暗黄褐色土（第５層）で貼床される。床面からの深さは８～ 14cm、溝の幅は 16 ～ 25cm である。　**柱穴**　東部に１本（P- ２）ある。規模は径 70 × 65cm、深さ 15cm で、焼土や炭化物を含む黄褐色土（第１層）を覆土とする。規模などから柱穴とは考えにくい。貯蔵穴とした P- １と同様の覆土であり、貯蔵穴に関連するものとも考えられる。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部は失われているが、袖部は比較的良好に残存する。規模は 167 × 199cm で、煙道部は壁を溝状に 130cm 掘り込んで作られている。袖部は明褐色土（第４層）で構築されており、内側の特に上半は被熱による硬化赤変が顕著である（第５層）。火床面は床面よりもわずかに低い平坦面で、ちょうど住居跡の壁に相当する位置から外傾して立ち上がり煙道へと続いている。幅 35cm の溝状の煙道底面は斜面となっており、先端は急角度に立ち上がって確認面に至る。被熱による硬化赤変は袖部内

面から燃焼部に近い煙道付近に認められるほか、火床面でも顕著である。覆土は第１～第３層で、第３層は炭化物を多量に含む。第１層はカマド構築材の崩落の可能性も考えられよう。なお、カマド前面付近には住

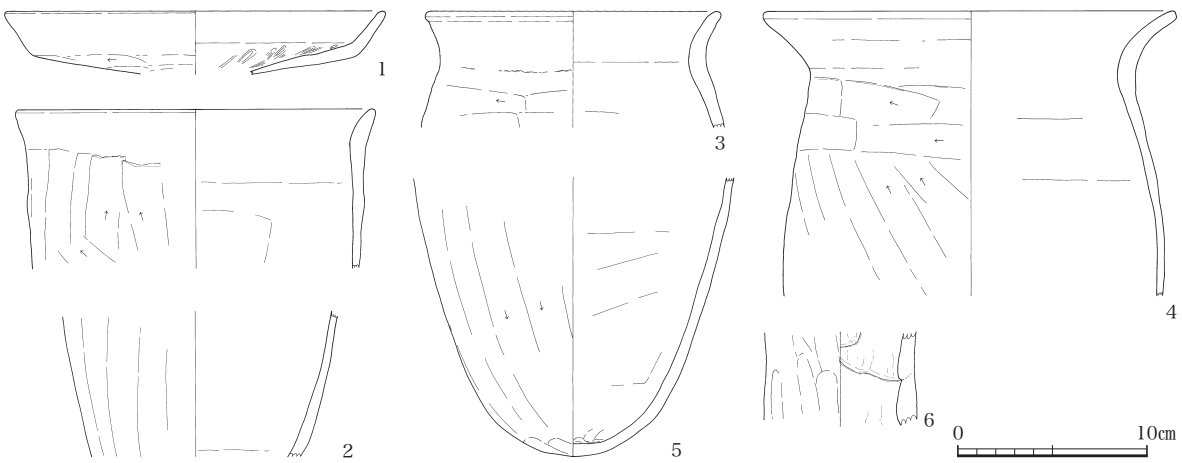


SI-752
1　明褐色土　　赤褐色土粒・白色土粒微量。
2　褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　　焼土粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗黄褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(掘方)
SI-752　P-１・P-２
1　黄褐色土　　黄褐色粘土粒少量、焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。



SI-752　カマド
1　黄褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　　焼土粒・炭化物粒多量。しまりあり。
4　明褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。
5　赤褐色土　　焼土主体。しまりあり。
6　暗黄褐色土　住居跡覆土第５層に同じ。

第 176 図　和田遺跡　SI-752 実測図



第 177 図　和田遺跡　SI-752 出土遺物実測図

第 84 表　和田遺跡　SI-752 出土遺物観察表

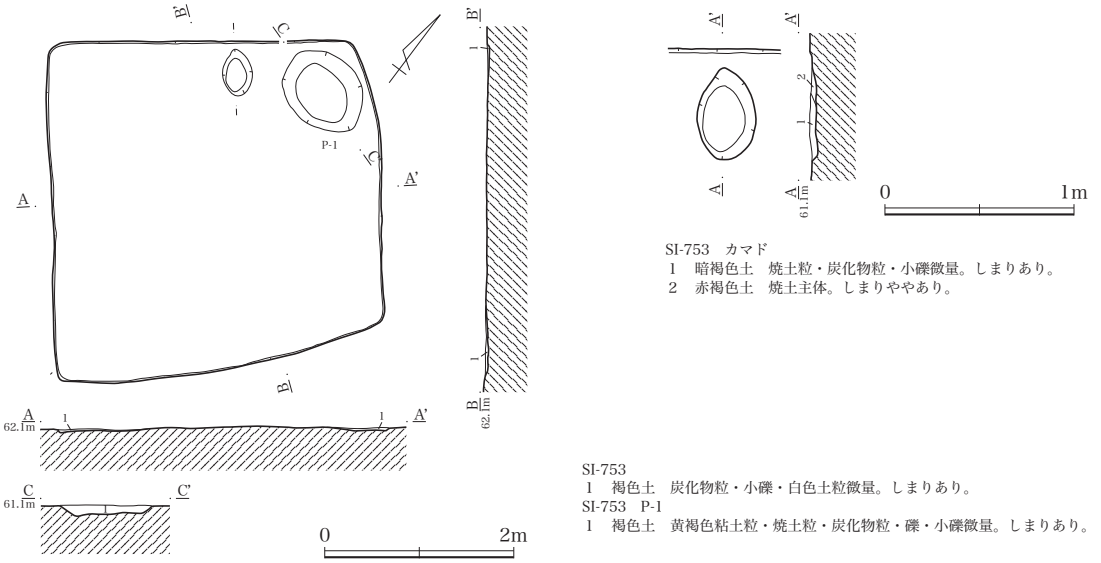
番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 盤	口　復 20.1 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後放射状の粗いミガキ、表面剝落のため調整不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　砂礫微量、赤褐粗～細粒少量、白細粒少量 やや硬質	南部床面上６㎝ 口～底 1/6 No.9
2 土師器 甕	口　19.0 高　16.1 (上　残 8.4 下　残 7.7)	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ。長胴。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　砂礫少量、赤褐・白微粒微量 硬質	貯蔵穴内底面上 15 ㎝と 11 ㎝とカマド中央部火床面直上及び掘方内が接合 口～胴 1/5 No.14・17・28・KNo.8、P-1、掘方、K
3 土師器 甕	口　復 15.6 高　残 6.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒細粒多量、赤褐細粒少量、砂細～微粒少量 やや軟質	貯蔵穴（P-1）内底面上 13 ㎝と 15 ㎝が接合 口～胴上端 1/6 No.13・15
4 土師器 甕	口　復 21.9 高　残 15.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向、上半斜方向のケズリ。長胴。武蔵型の様な胎土。	7.5YR4/6　褐 やや粗い　黒・白微粒多量、金雲母粗粒少量 やや硬質	貯蔵穴（P-1）内底面上６～ 18 ㎝とカマド内中央部火床面上２～ 13 ㎝、右袖先端２～３㎝が接合 口～胴上半 3/4 No.18・19・20・21・22・25・26、K、P-1、KNo.1・2・13・16・19・20
5 土師器 甕	高　残 14.8	内面胴～底部ナデ、底部に指頭圧痕残る。外面胴部縦方向の丁寧なケズリ、底部ケズリ後ナデ。丸底。長胴。武蔵型の様な胎土。	7.5YR6/6　橙 緻密　砂礫微量、灰褐微粒多量、細砂粒微量 やや硬質	カマド中央部火床底面上７㎝とカマド左袖火床底面上８㎝が接合 胴下半～底 1/4 KNo.10・12・16・18
6 土製品 支脚	体部　復 8.0 底　残 4.8	内面軽いナデ。紐積痕明瞭に残す。外面体部軽いナデ。SK-875 遺物の可能性あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐細粒少量、砂礫微量 やや軟質	西壁際床面上 13 ㎝ 体一部 No.3

居跡西部で確認された溝状の掘方があり、暗黄褐色土（第６層）で貼床されている。　**貯蔵穴**　北隅にある（P- １）。平面形は不整楕円形で、規模は 74 × 62cm、床面からの深さは 20cm である。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、南側にわずかに段を持つ。覆土は、P- ２覆土と同じく焼土や炭化物を含む黄褐色土（第１層）である。　**遺物**　遺物は少量で、土師器のみであり、須恵器はない。器種としては甕主体で、坏や鉢がわずかに含まれる。甕は長胴と武蔵型が同量くらいで、長胴の中には器壁が薄く胎土が武蔵型に類似するもの（４・５）がある。坏は口縁部が外傾するもので、半球状はない。住居跡内の遺物は、カマド内部と貯蔵穴内に集中する。カマド内からは甕２が火床直上より出土、カマド内出土の長胴甕４・５は貯蔵穴内出土の破片も接合する。甕３は貯蔵穴からの出土である。盤１と支脚６は、南部のやや浮いた位置で出土する。６は SK-875 の遺物が混入した可能性もある。図化しなかった遺物は、土師器坏片 17 点（80ｇ）、甕片 181 点（1,535 ｇ）、鉢片５点（90 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀初頭と考えられる。

ＳＩ－７５３（第 178・179 図、第 85 表、図版二八）

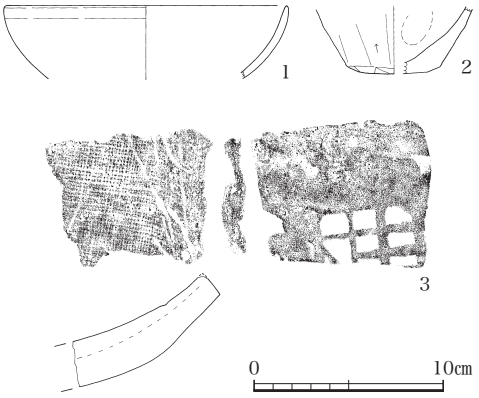
位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｋ－ 35 グリッドに位置する。南に SI-754 が近接してあるほか、東５ｍに

SI-747・748 が隣接する。　**重複**　なし。　**平面形**　確認面がほぼ床面と同じ高さであったため、わずかに残存する覆土とその痕跡などから住居跡の範囲を決定した。平面形は台形に近い方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 39°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 3.48m、南東－北西方向が 3.50m である。北東辺は 3.10m と短く、相対する南西辺は 3.60m と長い。　**覆土の状態**　炭化物を含む褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は２～３cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**



第 178 図　和田遺跡　SI-753 実測図

なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。確認できたのは楕円形の浅い掘り込みのみだが、確認された位置や硬化赤変する底面、焼土や炭化物を含む覆土（第１・第２層）などからこれをカマド火床面が残存したものと考えた。掘り込みの規模は 49 × 32cm、深さは床面から４cm である。火床面の被熱の度合いは壁寄りほど高く、覆土中の焼土も同様に壁に近いほど多い。　**貯蔵穴**　北隅にある（P-１）。平面形は楕円形で、規模は 100 × 76cm、床面からの深さは 10cm である。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上



第 179 図　和田遺跡　SI-753 出土遺物実測図

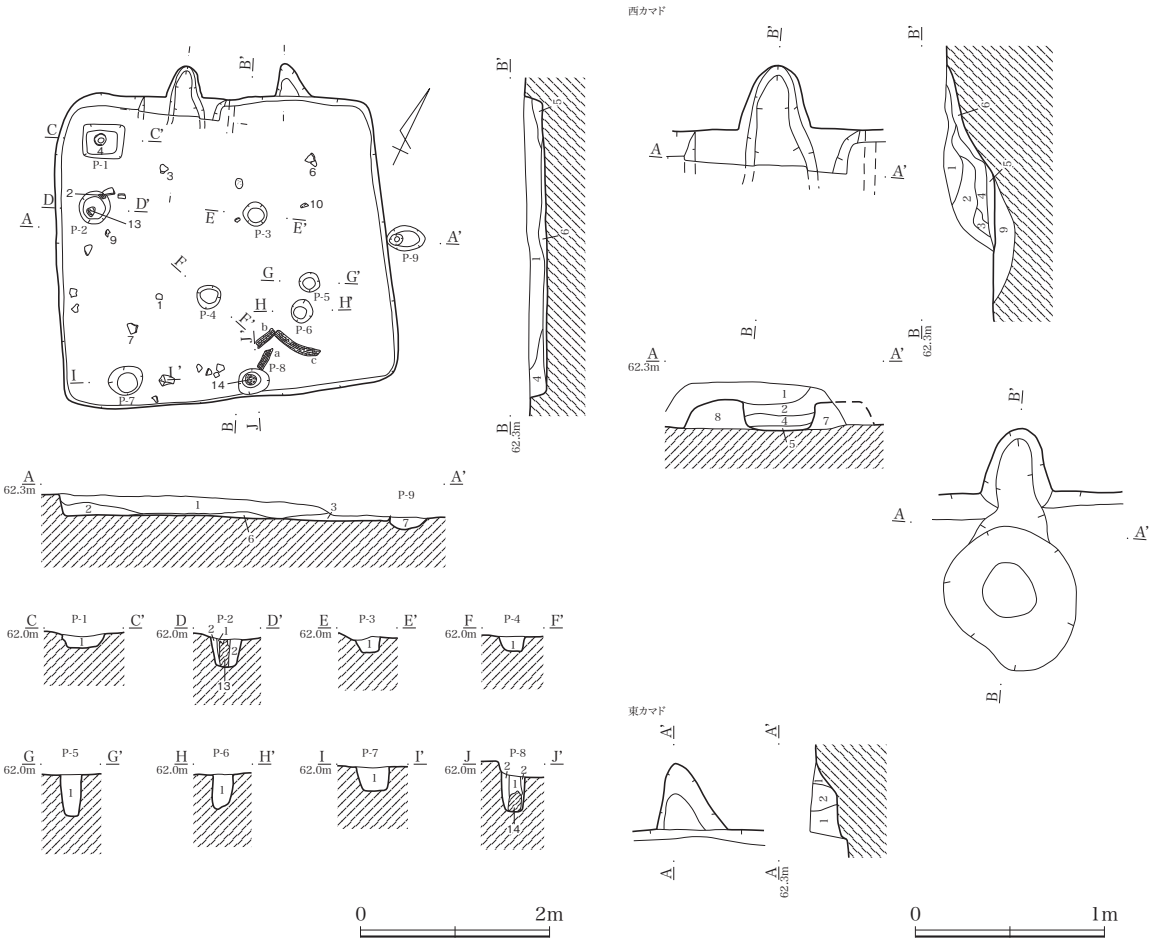
第 85 表　和田遺跡　SI-753 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデかケズリ。内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。	5YR4/6　赤褐 やや緻密　白細粒少量、赤褐礫微量 やや硬質	P-1 口～体 1/6 P-1
2 土師器 甕	高　残 3.5 底　復 5.0	内面底部ナデで指頭圧痕あり。外面胴部下端縦方向のケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　青灰礫少量、白礫～細粒少量 やや硬質	P-1 底～胴下位 1/4 P-1
3 瓦 平瓦	長　残 8.0 幅　残 7.7 厚　1.5～2.4 重　229.4 高　残 6.0	凹面布目痕。凸面格子叩き。側面ケズリ。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　白礫～細粒少量、灰褐礫～細粒少量 硬質	覆土 破片

がる。覆土は、黄褐色粘土や焼土、炭化物などを含む褐色土（第１層）である。　遺物　遺物はごくわずかである。土師器甕は武蔵型と球胴があり、坏は半球状でロクロ成形はみられない。薄手で半球形の坏１と底径の小さな武蔵型甕底部２はP-1より出土する。平瓦３は覆土中出土である。図化しなかった遺物は土師器のみで坏片１点（10 ｇ）、甕片４点（50 ｇ）である。本遺跡の年代は８世紀代とする。遺構から見ると隣接するSI-747などと方向が似ており、それらと近い時期の可能性もあろう。

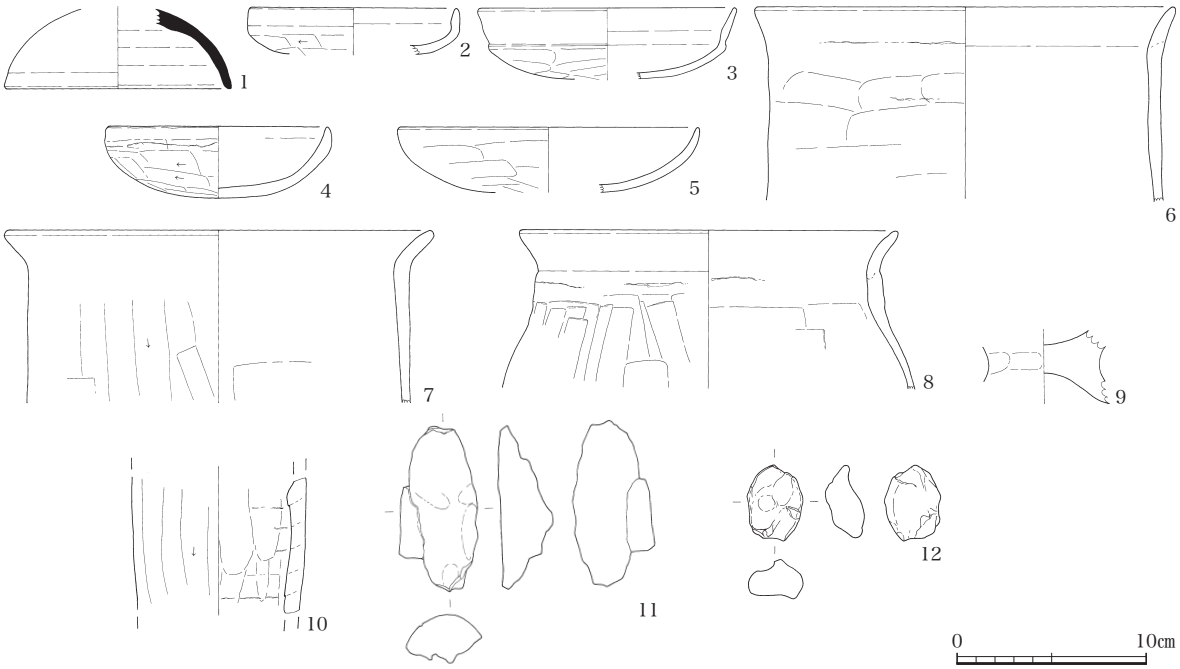
ＳＩ－７５４（第180・181・310図、第86表、図版二八・二九・五五・六四）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｊ－35、Ｋ－35グリッドに位置する。北にSI-753が近接してあるほか、東



SI-754
1　暗黄褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　明灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
6　黒褐色土　炭化材・炭化物粒多量、焼土粒少量。しまりあり。
7　暗黄褐色土　黄褐色粘土粒少量、炭化物粒微量。しまりあり。(P-9覆土)
SI-754　P-1
1　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SI-754　P-2
1　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。柱材残存。しまりあり。
2　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SI-754　P-3
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SI-754　P-4
1　灰褐色土　焼土粒・小礫微量。しまりあり。
SI-754　P-5
1　灰褐色土　黄褐色粘土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SI-754　P-6
1　灰褐色土　黄褐色粘土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SI-754　P-7
1　灰褐色土　黄褐色粘土粒少量、焼土粒・炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。
SI-754　P-8
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫微量。柱材残存。しまりあり。
2　灰褐色土　黄褐色粘土粒少量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SI-754　西カマド
1　黒褐色土　マンガンブロック・マンガン粒多量、焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土ブロック・焼土粒微量。しまりあり。
3　赤褐色土　焼土主体。炭化物粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
5　暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒多量、炭化物粒微量。しまりあり。
6　暗黄褐色土　炭化物粒微量。しまりあり。
7　黄褐色土　黄褐色粘土粒多量、焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
8　暗黄褐色土　黄褐色粘土粒少量、焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
9　褐色土　焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SI-754　東カマド
1　明赤褐色土　焼土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第180図　和田遺跡　SI-754実測図



第 181 図　和田遺跡　SI-754 出土遺物実測図

第 86 表　和田遺跡　SI-754 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 12.0 高　残 4.1	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～天井部ロクロナデ、外面天井部は表面剝落のため調整不明。焼成やや不良、一部赤褐色を呈す。	5Y5/1　灰 緻密　白粗粒微量、灰黒細粒少量 軟質	中央部床面上 4 ㎝ 口～天井 1/6 No.10
2 土師器 坏	口　復 11.2 高　残 2.5	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒少量、白細粒少量 やや硬質	P-2 内底上 39 ㎝ 口～体 1/6 No.15
3 土師器 坏	口　復 13.8 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　赤褐・白粗粒少量 硬質	カマドの南側床面上 5 ㎝ 口～体 1/6 No.18
4 土師器 坏	口　復 12.0 高　3.8 重　162.4	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで口縁部紐積痕あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　赤褐粗～細粒少量、白細粒微量、青灰微粒少量、砂微粒多量 硬質	貯蔵穴（P-1）内底直上、正立 完形 No.19
5 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 3.4	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。器壁薄い。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白細粒少量 やや硬質	カマド 口～体 1/6 K
6 土師器 甕	口　復 22.2 高　残 10.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部横方向のナデ。長胴。	7.5Y7/4　にぶい橙 やや緻密　白礫少量、赤褐礫少量 やや軟質	北部床面上 10 ㎝ 口～胴上半 1/6 No.1
7 土師器 甕	口　復 22.6 高　残 9.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。長胴。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白粗粒多量、赤褐粗粒少量、砂細粒少量 硬質	南西部床面上 3 ㎝ 口～胴上半一部 No.9
8 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 8.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向のケズリ。球胴。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐粗粒少量、黒灰細粒少量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口～胴上半 1/6

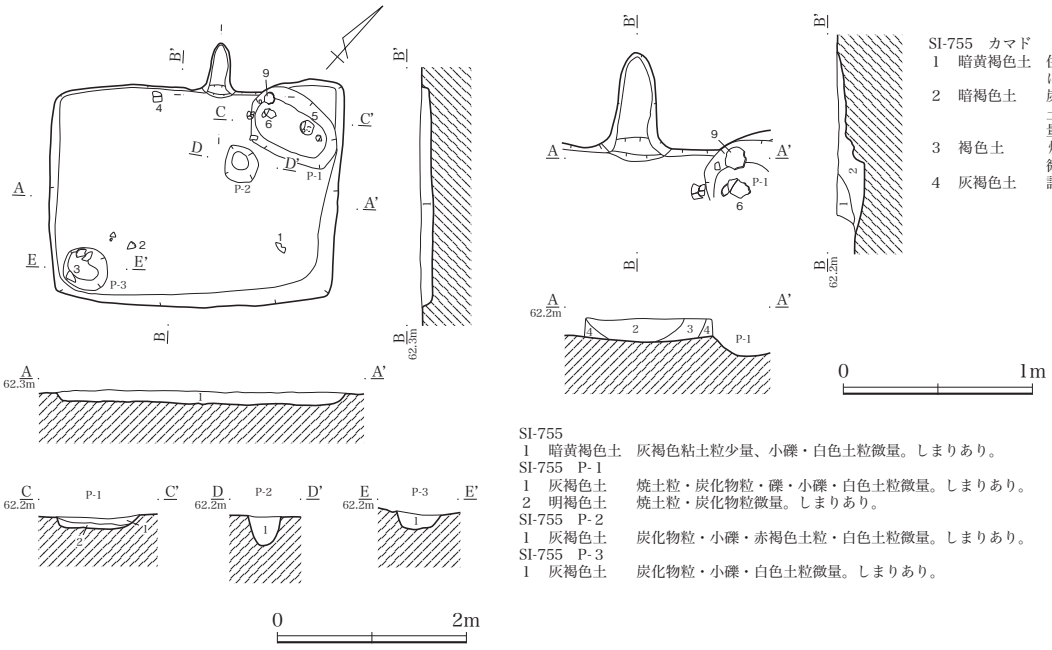
9 土師器 台付甕	高　残 3.7	内面底部ナデ、台部ナデ。外面胴部ナデ、台部ナデ。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白細粒少量、灰褐粗粒少量 やや軟質	西部 P-2 の東南側床面上 13 ㎝ 底～脚上半完存 No.14
10 土製品 筒形	高　残 7.0 体　復 9.2	内面体部ナデで紐積痕が明瞭に残る。外面体部縦方向のケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや粗い　白細粒微量、赤褐粗粒多量、青灰粗粒少量 やや硬質	中央部床面上 5 ㎝ 体破片 No.2
11 土製品 棒状	長　残 8.8 幅　残 4.3 重　残 54.6	平面楕円形。断面扇形。粘土塊を棒状に固めて焼成している。表面はナデ調整。支脚の可能性あり。残存部からすると直径 4.5 ㎝くらいの棒状と見られる。	10YR8/4　浅黄橙 緻密　白細粒少量、青灰粗粒微量 硬質	覆土 破片
12 土製品 粘土塊	長　4.0 幅　3.0 厚　2.0 重　15.4	平面・断面ともに楕円形。捏ねた粘土を固めて焼成している。表面無調整。	5Y5/8　明赤褐 やや緻密　青灰粗粒微量 やや硬質	覆土 完形
13 木製品 柱材	高　残 5.1 径　残 3.3 × 1.7	柾目の破片。分析試料 No.27。	クリ	P -2 底面直上 柱下 P -2
14 木製品 柱材	高　残 14.9 径　13.1 × 6.3	分割材。底面に平坦面あり。側面形状不明。分析試料 No.12。	クリ	P -8 底面直上 柱下 P -8

３ｍに SI-748、南西５ｍに SI-755 が隣接する。　**重複**　なし。　**平面形**　方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 27°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 3.52m、南東－北西方向が 3.18m である。　**覆土の状態**　第１～第６層で、焼土と炭化物を多く含む。床面直上に堆積する第６層では、炭化物の堆積が最も顕著である。　**壁**　残存壁高は 18cm であり、壁は垂直気味に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。床面直上付近では、大小の炭化材が多量に認められる。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット８本（P- ２～ P- ９）がある。P- ２は径 35 × 33cm、深さ 31cm、P- ３は径 26 × 25cm、深さ 17cm、P- ４は径 30 × 25cm、深さ 16cm、P- ５は径 22 × 20cm、深さ 44cm、P- ６は径 25 × 22cm、深さ 37cm、P- ７は径 35 × 30cm、深さ 24cm、P- ８は径 33 × 26cm、深さ 37cm、P- ９は径 40 × 27cm、深さ 13cm である。柱材が良好に残存する P- ２・P- ８、深さがある P- ５・P- ６などは柱穴とみられるが、配置などから主柱穴とは考えにくい。周囲のピット確認状況と考え合わせると、本住居跡に伴わないものも多いと推定される。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際の西寄り（西カマド）と東寄り（東カマド）にあり、残存状態などから東カマドから西カマドへと作り替えられたと考えられる。西カマドは天井部を失っているが袖部は確認でき、煙道部は壁を「Ｕ」字状に約 38cm 掘り込んで作られる。袖部は黄褐色粘土主体に焼土や炭化物を含む黄褐色土（第７層）と暗黄褐色土（第８層）で構築される。調査時に左右先端と右袖外側を失ったため規模は不明だが、幅は 100cm ほどと推定される。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、床面から 11cm ほど円形に掘り込んだのち、炭化物を微量に含む暗黄褐色土（第９層）で埋め戻して作られる。煙道は先端に向かって高くなる斜面で徐々に傾斜が緩やかになっており、先端は短く外傾して立ち上がる。煙道内面には袖部と同様の黄褐色土（第７層）と暗黄褐色土（第８層）などが広範囲に貼られる。カマド内面の被熱痕跡は明瞭で、特に左袖部内面で硬化赤変が著しい。覆土は第１～第６層で、第２層は天井部の構築材、焼土主体の第３層は天井部内面の崩落だろう。東カマドは、壁を「Ｕ」字状に約 35cm 掘り込む煙道部のみが残存する。底面は住居跡側に向かってわずかに傾斜する平坦面で、先端は外傾して立ち上がる。被熱の痕跡は比較的明瞭で、壁に近い部分を中心にカマド内面が硬化赤変している。覆土は第１・第２層で、第１層は焼土を微量に含む。天井部や袖部を構成したとみられるような粘土は全くなく、人為的に破壊されたとみられる。粘土は、西カマド構築のため再利用された可能性もあろう。　**貯蔵穴**　西隅にある（P- １）。平面形は長方形で、規模は 43 × 36cm、床面からの深さは 15cm である。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。

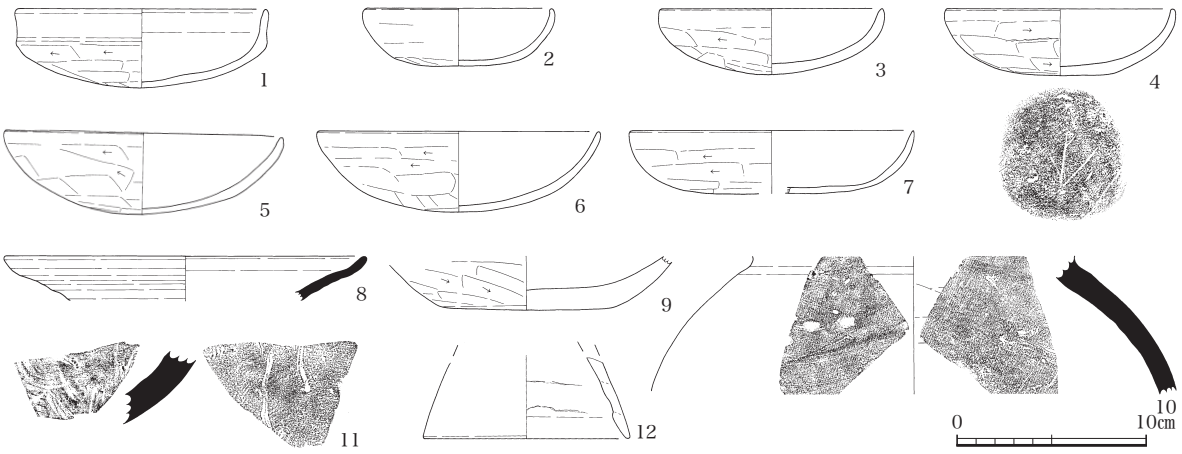
覆土は、焼土や炭化物などを含む灰褐色土（第１層）である。　遺物　遺物は土師器甕主体で、土師器坏も少量ある。甕は長胴が多く、球胴がわずかに含まれ、坏は半球状主体である。遺物は住居跡全体に分散している。須恵器蓋１は中央部のやや浮いた位置から、半球状の坏４は貯蔵穴底面直上より正立状態で出土した。図化しなかった遺物は土師器坏片 64 点（380 ｇ）、甕片 289 点（2,930 ｇ）、須恵器片２点（10 ｇ）である。本遺構の年代は、７世紀中葉と考えられる。なお、P- ２・８から出土した柱材は、樹種同定の結果クリ材と判明している。また、P- ８の材は放射性炭素年代測定を実施し、土器の年代よりやや新しい 689 ～ 778cal. AD. との結果が出ている。柱穴のあり方からしても、P- ８は本住居跡に伴わない可能性があろう。

ＳＩ－７５５（第 182・183 図、第 87 表、図版二九・五五）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－ 35、Ｊ－ 35 グリッドに位置する。北東５ｍに SI-754、東８ｍに SI-749 が隣接する。　重複　なし。　平面形　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 41°－Ｗである。　規模　南西－北東方向が 3.06m、南東－北西方向が 2.32m である。　覆土の状態　灰褐色粘土粒を含む暗黄褐



第 182 図　和田遺跡　SI-755 実測図



第 183 図　和田遺跡　SI-755 出土遺物実測図

第 87 表　和田遺跡　SI-755 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.4 高　4.1	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 緻密　白粗粒微量、細砂粒少量 やや硬質	東隅床面上 7 cm 口～底 1/6 No.4
2 土師器 坏	口　復 10.2 高　3.0	表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。薄手。	2.5Y4/1　黄灰 緻密　赤褐粗粒少量 やや硬質	南隅床面上 2 cm 口～底 1/4 No.3
3 土師器 坏	口　復 11.8 高　3.4	内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。やや薄手。	7.5YR5/6　明褐 やや粗い　赤褐粗粒多量、白粗粒少量 やや硬質	南隅床面上 10 cm 口～底 1/4 No.1
4 土師器 坏	口　復 12.2 高　3.5	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、木葉痕あり。やや薄手で平底。	10YR6/1　褐灰 やや緻密　赤褐・白粗粒少量 硬質	北壁際床面上 6 cm 口～底 1/3 No.6
5 土師器 坏	口　14.8 高　4.3 重　159.7	内外面とも磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。やや薄手。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐粗粒多量、白細粒少量 やや硬質	貯蔵穴（P-1）内底面上 9 cm、正立 ほぼ完形 KNo.4
6 土師器 坏	口　復 15.0 高　4.2	内外面とも表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。器壁薄い。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒微量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	貯蔵穴（P-1）内底面上 14 cm、斜立 口～底 1/2 KNo.2
7 土師器 坏	口　復 15.0 高　3.3	内外面とも表面磨滅のため調整不明瞭。内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	5Y8/2　灰白 やや緻密　白細粒微量、青灰微粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/5
8 須恵器 高坏か？	口　復 19.2 高　残 2.3	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	5Y7/1　灰白 緻密　白粗粒微量、青灰粗粒少量 やや硬質	覆土 口～体破片
9 土師器 甕	高　残 2.8 底　9.0	内面底部ナデ。外面胴部下端斜方向のケズリ、底部ケズリ。球胴。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒多量、白粗粒少量 硬質	貯蔵穴（P-1）内底面上 17 cm 胴下端 1/4、底完存 KNo.3
10 須恵器 甕	高　残 7.3	内面胴部上半ナデ。外面胴部上半ロクロナデ後平行叩き。	5Y7/1　灰白 緻密　白微粒微量、青灰細粒少量 やや硬質	覆土 胴上端破片
11 須恵器 甕	高　残 3.8	内面胴部下半同心円当具痕。外面胴部下半平行叩き。	5Y7/1　灰白 緻密　白礫微量 硬質	覆土 胴下半破片
12 土製品 筒形	高　残 4.3 下端 復 11.0	内外面とも表面磨滅が著しい。内面体部ナデで紐積痕を明瞭に残す。外面体部ナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白細粒微量、赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 体～下端破片

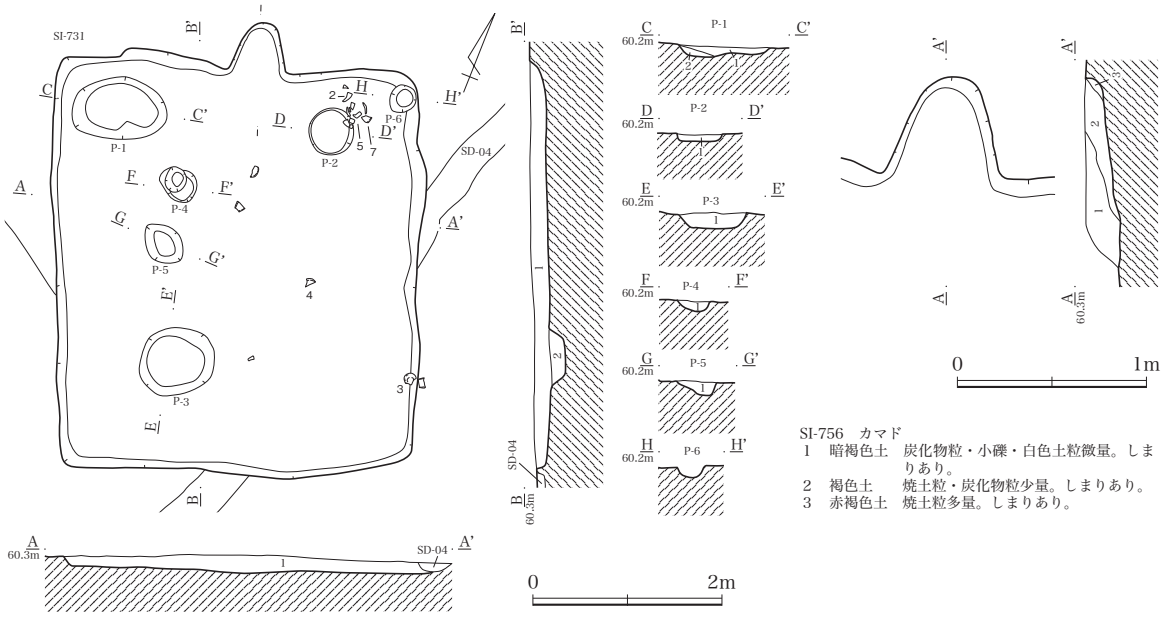
色土（第 1 層）である。　**壁**　残存壁高は 7 ～ 12cm であり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット 2 本（P- 2・P- 3）がある。P- 2 は径 37 × 35cm、深さ 30cm、P- 3 は径 48 × 45cm、深さ 17cm で、P- 2 は深さもあるため柱穴と考えられる。覆土は、P- 2・P- 3 とも炭化物を含む灰褐色土である。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は、壁を 48cm ほど溝状に掘り込んでおり、煙道幅は 22cm である。火床面は床面から約 5 cm 低い位置にあり、煙道へはちょうど住居跡の壁と同じ位置で段を持って高くなっている。煙道底面は平坦で、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡はあまり認められない。覆土は 4 層で、炭化物や焼土などを微量に含むのみであり、カマド構築材は認められない。ただ、

カマド左右に存在する第４層は、その位置などから袖部の可能性も考えられよう。　**貯蔵穴**　北隅にある（P-１）。平面形は楕円形で、北西部は住居跡の壁をわずかに切り込む。規模は 105 × 69cm、床面からの深さは 12cm である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は、炭化物などを含む第１・第２層である。

遺物　遺物は土師器坏主体で、甕は少ない。甕は長胴が多く、球胴もわずかにある。坏は半球状（２～７）主体で径が大きいものが多い。坏１のような口縁部が直立するものは少ない。貯蔵穴と P-3 周辺にまとまる傾向があり、坏４は南隅の P-3 から、坏５・６と球胴甕底部９は貯蔵穴内からの出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片 72 点（230 ｇ）、甕片 123 点（590 ｇ）、鉢片２点（120 ｇ）、須恵器片３点（70 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀後葉でもやや古い方かと考えられる。

ＳＩ－７５６（第 184・185 図、第 88 表、図版二九・五六）

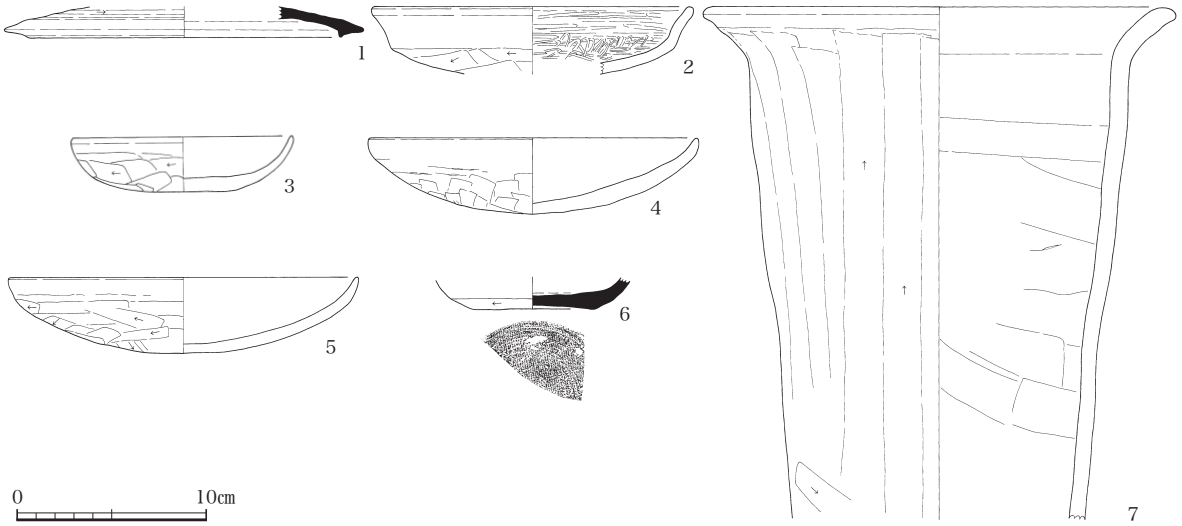
位置　Ⅶ区調査区の南東部、Ｇ－ 27・28、Ｈ－ 28 グリッドに位置する。西に SI-732・757、南にⅠ区 SI-15 が近接してあるほか、東５ｍに SI-05 が隣接する。　**重複**　住居跡中央から北半で SI-731 を切り、南東部が SD-04 に切られる。SD-04 は浅く、床面には達しない。　**平面形**　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 19°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 3.80m、南北方向が 4.28m である。　**覆土の状態**　礫などをわずかに含む暗褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は 10 ～ 15cm であり、壁は外傾して立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　ピット５本（P- ２～P- ６）がある。P- ２は径 50 × 48cm、深さ７cm、P- ３は径 83 × 70cm、深さ 17cm、P- ４は径 40 × 35cm、深さ 22cm、P- ５は径 40 × 39cm、深さ 14cm、P- ６は径 30 × 30cm、深さ 12cm である。P- ４・P- ５は覆土中に焼土を含む。P- ４は深さもあり、柱穴と考えられる。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北壁際中央にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は、壁を「Ｕ」字状に 50cm ほど掘り込んで作られる。火床面は



SI-756　カマド
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。
3　赤褐色土　焼土粒多量。しまりあり。

SI-756
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　P-3覆土。
SI-756　P-1
1　暗褐色土　焼土粒・小礫・黒色土粒多量、炭化物粒少量。しまりあり。
SI-756　P-2
1　暗褐色土　小礫・白色土粒多量。しまりあり。
SI-756　P-3
1　暗褐色土　小礫・黒色土粒多量。しまりややあり。
SI-756　P-4
1　黒褐色土　焼土粒少量、白色土粒微量。しまりあり。
SI-756　P-5
1　黒褐色土　焼土粒少量、白色土粒微量。しまりややあり。

第 184 図　和田遺跡　SI-756 実測図



第 185 図　和田遺跡　SI-756 出土遺物実測図

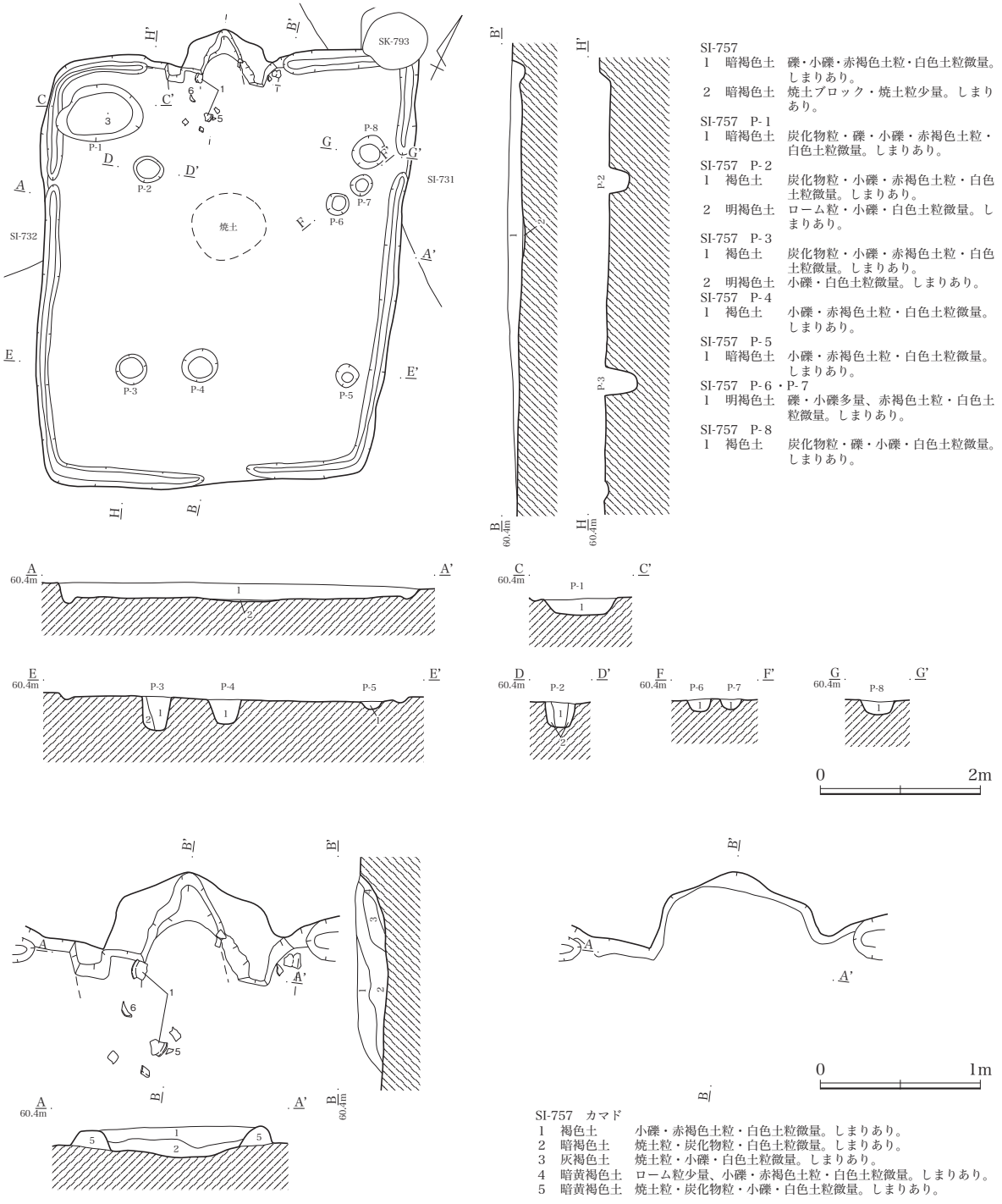
第 88 表　和田遺跡　SI-756 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 19.0 高　残 1.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、体部回転ケズリ。	N4/0　灰 やや緻密　白細粒少量、黒微粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 坏	口　復 17.0 高　残 3.5	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向主体の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒少量、白微粒少量、砂粗粒微量 硬質	北東隅床面上 7 cm 口～体 1/3 No.1
3 土師器 坏	口　復 11.8 高　2.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、棒状の圧痕あり。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、白微粒少量、透明微粒微量 硬質	東壁際南部床面上 4 cm、逆位 口～体 1/3、底完存 No.4
4 土師器 坏	口　復 17.5 高　残 4.0	内面口縁ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ、体部上端紐積痕あり。内外面とも口縁部が被熱赤変。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　砂細～微粒少量、赤褐細粒少量、白細粒少量 硬質	中央部床面上 12 cm 口～底 1/6 No.6
5 土師器 坏	口　復 18.5 高　4.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐・灰褐細粒少量 やや硬質	北東隅床面上 7 cm 口～底 1/6 No.1
6 須恵器 坏	高　残 1.7 底　復 6.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ後下端回転ケズリ、底部回転ケズリ。	N4/0　灰 緻密　白微粒少量、黒褐微粒微量 硬質	覆土 体～底 1/6
7 土師器 甕	口　復 25.0 高　残 27.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕を明瞭に残す。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向のケズリで表面被熱しており赤変した粘土付着する。長胴。	10YR5/3　にぶい黄褐 粗い　灰黒礫～細粒多量、黒褐礫～細粒多量、砂礫～細粒少量 硬質	北隅床面上 7 cm 口完存、胴 1/2 No.1

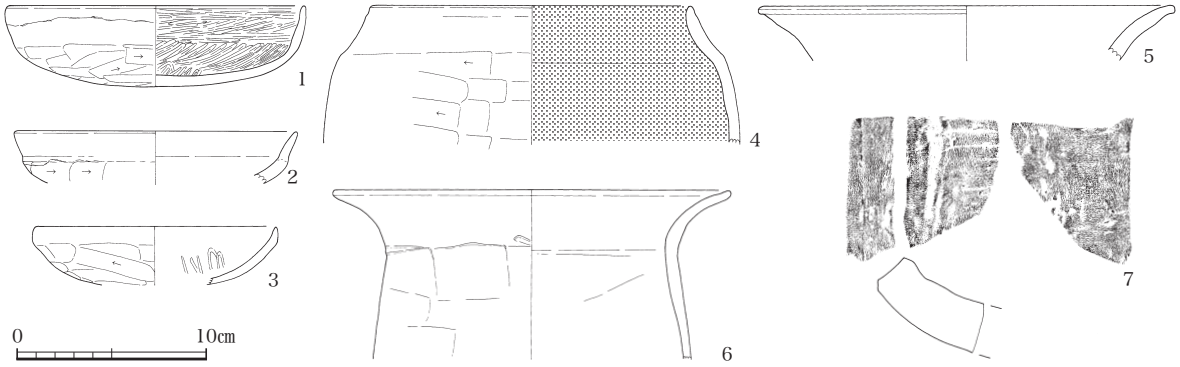
床面から約５cm 高くなった位置にあり、煙道へ平坦に続いたのち先端は丸みを持って垂直気味に立ち上がる。被熱の痕跡は明瞭で、火床面付近と燃焼部に近い壁面が硬化赤変している。覆土は３層で、焼土層である第３層は煙道先端の硬化赤変した部分の可能性もある。　**貯蔵穴**　北西隅にある（P- １）。平面形は楕円形で、規模は 100 × 66cm、床面からの深さは 11cm である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して丸みを持って立ち上がる。覆土は、焼土や炭化物などを含む暗褐色土（第１層）である。　**遺物**　遺物はわずかで、住

居跡全体より出土する。土師器は坏と甕が同量くらいあり、甕は厚手な長胴主体である。武蔵型の破片もあるが、これは重複するSI-731からの混入であろうか。坏２と坏５、長胴甕７は、住居北東隅のやや浮いた位置から出土している。図化しなかった遺物は、土師器坏片48点（530 g）、甕片70点（820 g）、須恵器片１点（10 g）である。本遺構の年代は７世紀末から８世紀初頭と考えられる。

ＳＩ－７５７（第186・187図、第89表、図版二九・五五）



第186図　和田遺跡　SI-757実測図



第 187 図　和田遺跡　SI-757 出土遺物実測図

第 89 表　和田遺跡　SI-757 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　15.9 高　4.2	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後口縁～底部密なミガキ。ミガキは口縁部ヨコ、体～底部斜位。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	7.5Y5/4　にぶい褐 緻密　赤褐・白粗粒少量 硬質	カマド前面火床面上 8 ㎝と 14 ㎝が接合、正立 口～底 1/2 KNo.3・7
2 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白粗～細粒・赤褐礫～粗粒多量、細砂粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
3 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤褐粗粒多量、白粗粒少量、灰黒細粒多量 やや硬質	P-1 底面直上 口～体 1/4 P-1 No.1
4 土師器 鉢	口　復 17.2 高　残 7.3 最大 復 22.0	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後内面全体黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5Y5/4　にぶい褐 やや粗い　白粗粒多量、赤褐粗粒少量 やや硬質	覆土 体部 1/4
5 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 2.8	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ。長胴。	7.5Y5/6　明褐 粗い　白礫～細粒多量、青灰礫多量、透明粗粒微量 硬質	カマド前面火床面上 3 ㎝ 口 1/6 KNo.4
6 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 9.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部横方向のケズリでヘラ状工具のあたり残る。武蔵型。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白粗粒少量、赤褐粗粒微量、砂微粒多量 硬質	カマド前面火床面上 2 ㎝ 口～胴上位 1/4 K・KNo.6
7 瓦 平瓦	長　残 8.0 幅　残 5.6 厚　2.5 重　残 157.4 高　残 5.0	凹面布目圧痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。側面ケズリ。	5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや硬質	覆土 破片

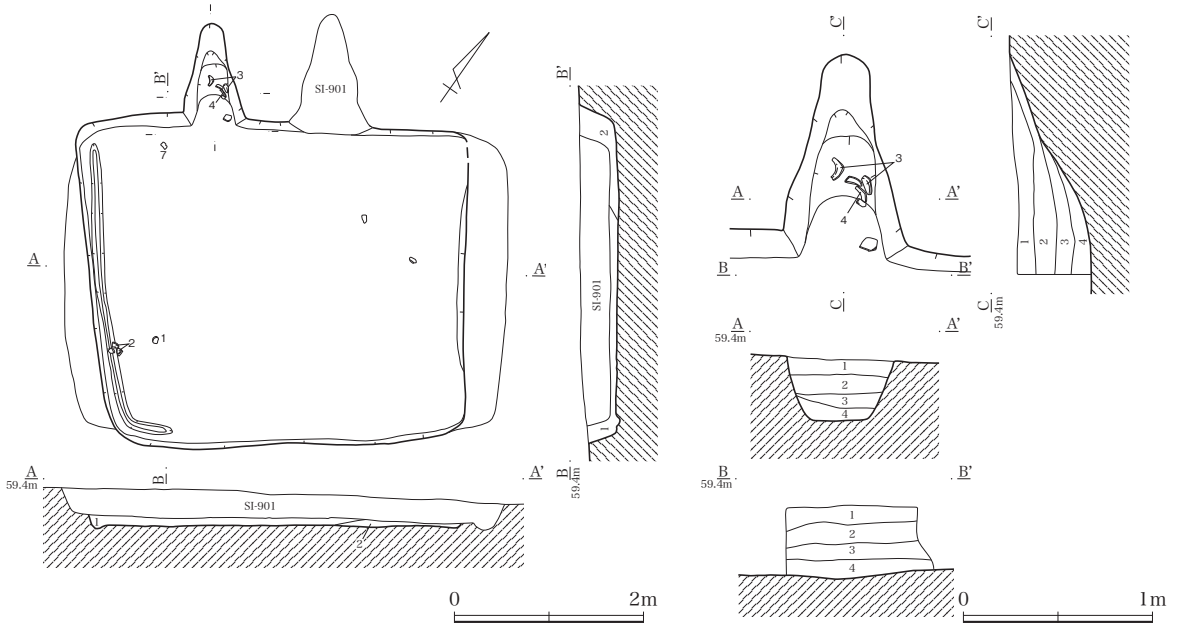
位置　Ⅶ区調査区の南東部、G－28、H－28 グリッドに位置する。東に SI-756 が近接してあるほか、西６m に SI-734 が隣接する。　重複　住居跡北西部で SI-732 を切り、北東隅が SK-793 に切られる。北東隅で SI-731 を切るとみられる。　平面形　長方形で、南北方向の中軸線はＮ－ 24°－Wである。　規模　東西方向が 4.47m、南北方向が 5.35m である。　覆土の状態　礫などをわずかに含む暗褐色土（第１層）である。　壁　残存壁高は９～ 18cm であり、壁は外傾して立ち上がる。南辺では遺構確認面が低かったため、壁の立ち上がりが確認できなかった。　床面　緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、床面中央付近に被熱のためか硬化赤変する部分がある。硬化赤変範囲は 88 × 82cm で、床面から約３cm 浅く窪んでいる。　堀

方・貼床　なし。　柱穴　主柱穴と推定されるものが２本（P- ２・P- ３）ある。P- ２は径 39 × 33cm、深さ 31cm、P- ３は径 38 × 38cm、深さ 42cm、P- ２－ P- ３間の柱間寸法は 2.50m である。２本とも柱痕部分には炭化物などを含む褐色土が堆積する。このほか住居跡内にはピット５本（P- ４～ P- ８）がある。P- ４は径 44 × 41cm、深さ 31cm、P- ５は径 30 × 28cm、深さ９cm、P- ６は径 28 × 27cm、深さ 15cm、P- ７は径 27 × 26cm、深さ 14cm、P- ８は径 43 × 38cm、深さ 17cm である。　壁溝　壁際をほぼ全周しており、北壁のカマド部分をはじめとして各辺に途切れる部分がある。断面形は開いた「U」字状で、幅は 17～ 26cm、深さは床面から５～７cm である。　火処　カマドが北壁際中央にある。天井部は失われ、袖部も壁に近い部分が確認できるのみであり、残存状態は良くない。煙道部は北壁から 44cm、幅 130cm にわたって大規模に掘り込んで作られている。袖部は暗黄褐色土（第５層）で構築されており、残存部分から推定すると片側で 40cm 程度の幅があったとみられるが、旧状をとどめる部分は少ない。火床面は床面よりもわずかに低い平坦面で、煙道へは平坦に続いたのち外傾して立ち上がり、先端でさらに角度を急にして確認面に至る。煙道は、壁から張り出す掘方内に袖部と同様の暗黄褐色土を厚く充填して形成される。煙道部の被熱の痕跡は極めて顕著で、内壁のほとんどが被熱によって硬化赤変するなど使用時の状態を良好に残している。覆土は第１～第４層で、第２層に焼土ブロックがわずかに認められる。カマド構築材の崩落と考えられるような土層は認められない。　貯蔵穴　北西隅にある（P- １）。平面形は楕円形で、規模は 109 × 70cm、床面からの深さは 20cm である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は、炭化物などを含む暗褐色土（第１層）である。　遺物　遺物は土師器のみで少なく、カマド前面に集中する。甕は武蔵型ばかり、坏は半球状主体である。坏３は貯蔵穴底面より、土師器甕５・６はカマド内火床面よりわずかに浮いた位置での出土である。図化しなかった遺物は、土師器坏片 26 点（160 ｇ）、甕片 78 点（790 ｇ）である。坏２や鉢４などにやや古い様相があるが、本遺構の年代は８世紀前葉と考える。

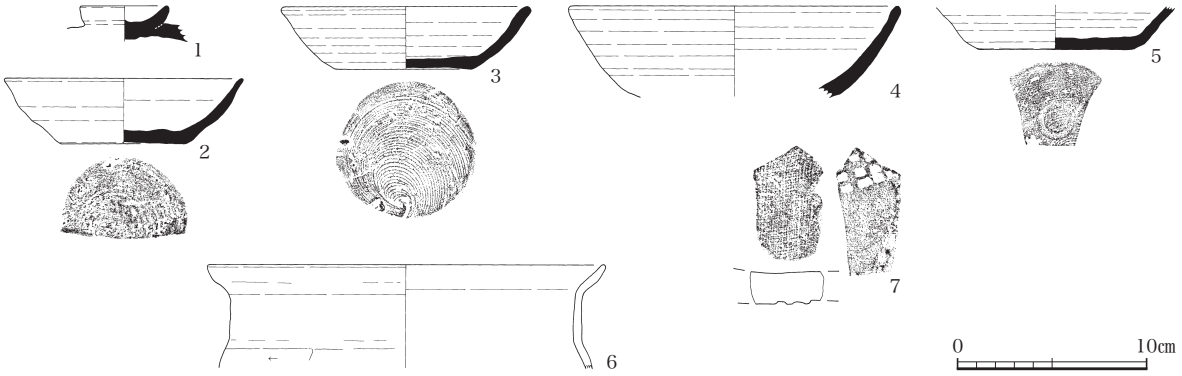
ＳＩ－９００（第 188・189 図、第 90 表、図版三〇・五五）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｌ－ 23、Ｍ－ 23 グリッドに位置する。北西に SI-919 が近接してある。　重複　住居跡の大部分が SI-901 と重複し、SI-901 に切られる。SI-900・901 は平面形や規模などが類似しており、SI-900 から SI-901 へと拡張を伴って建て替えられたものと考えられる。　平面形　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 37°－Ｗである。SI-900・901 の壁は北西壁で一部共有するが、南西・北東両壁は SI-901 で拡張されるほか、カマドに相対する南東壁は SI-900 の壁の方が外側に位置する。　規模　南西－北東方向が 4.00m、南東－北西方向が 3.07m である。　覆土の状態　第１・第２層で、ともに炭化物を含む。SI-901 へと建て替えられる際に人為的に埋め戻されたものと考えられるが、覆土中にブロック状の土壌が目立つということはない。　壁　残存壁高は 31 ～ 37cm であり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　床面　ほぼ平坦である。　堀方・貼床　なし。　柱穴　なし。　壁溝　南西壁際にある。断面形は開いた「U」字状で、幅は 11 ～ 14cm、深さは床面から４～７cm である。　火処　カマドが北西壁際南寄りにある。SI-901 への建て替えに伴いカマドも作り替えられるため、人為的に破壊されていると考えられる。よって天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は大きく、煙道部は壁を「U」字状に 94cm ほど掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、緩斜面である煙道へは丸みを持って接続し、煙道先端ではさらに角度を緩やかに変え確認面に至る。被熱の痕跡は明瞭で、燃焼部に近い側面部分が広く硬化赤変するほか、火床面付近と煙道側面も部分的に硬化赤変する。覆土は４層で、火床面および煙道底面直上には炭化物を多量に含む第４層が堆積する。炭化物は第２・第３層にも含まれており、下層ほど多い傾向がある。

貯蔵穴　なし。　遺物　遺物はわずかで、須恵器坏と土師器甕が主体となる。土師器甕は口縁部コの字状



第 188 図　和田遺跡　SI-900 実測図



第 189 図　和田遺跡　SI-900 出土遺物実測図

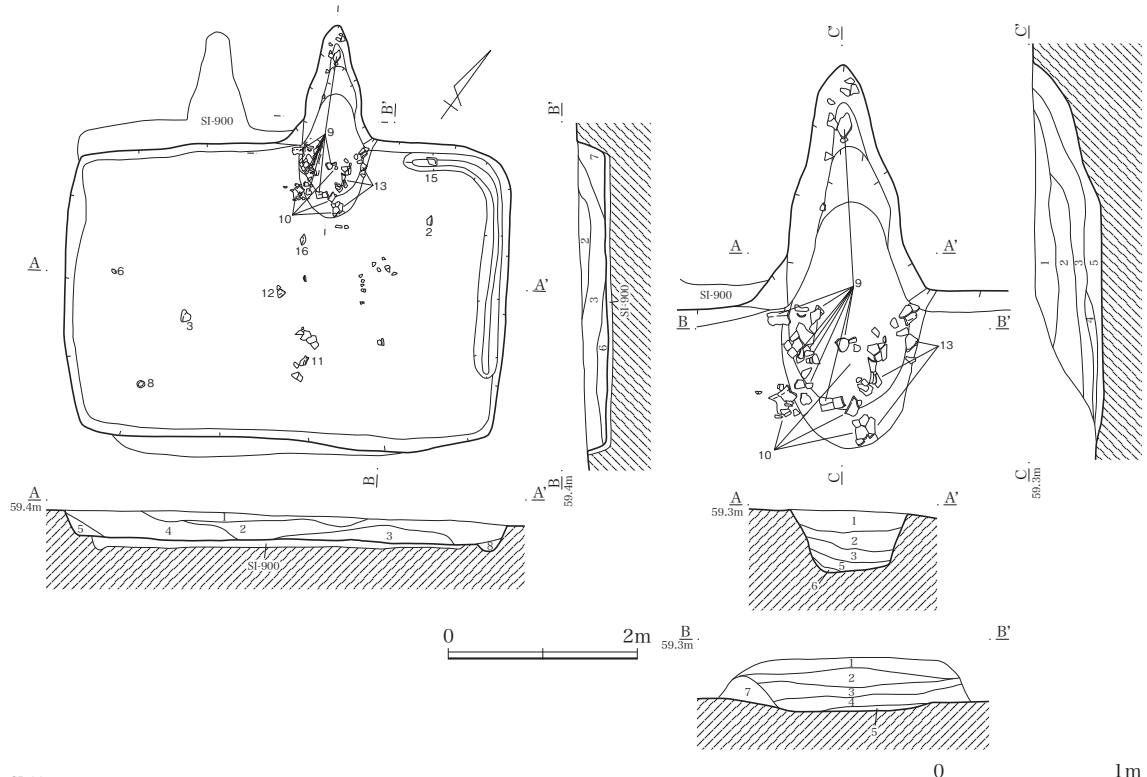
第 90 表　和田遺跡　SI-900 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.7 つまみ　4.7	内面天井部ロクロナデ。外面天井部ケズリ、つまみ貼付け。	5Y6/1　灰 緻密　黒細粒少量、白微粒微量 硬質	南部床面上 6 cm つまみ完形、天井一部 No.1
2 須恵器 坏	口　復 12.5 高　3.4 底　復 6.4	内外面とも表面磨滅が著しい。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。わずかに上げ底。口縁部内外面は黒褐色。重ね焼きの痕跡だろう。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや緻密　砂礫少量、白微粒微量 やや軟質	西壁際床面上 5 cmと 6 cmが接合 口～体 1/4、底 2/3 No.2・3
3 須恵器 坏	口　13.2 高　3.3 底　7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部内面に直径 0.6 cmの円形の粘土塊付着。	N6/0　灰 やや緻密　砂礫少量、黒微粒少量 やや硬質	カマド煙道底面上4cmと直上及び SK-915 の破片が接合 口～底 3/4 KNo.1・3、SK-915

4 須恵器 坏	口　復 17.4 高　残 4.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密　砂礫細粒少量、 赤褐細粒少量 やや硬質	カマド煙道上、底面 上 4 ㎝ 口～体 1/3 KNo.1
5 須恵器 坏	高　残 2.2 底　復 8.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周回転ケズリ、底部中央付近に直径２㎝の円形にナデ施す。	10Y5/1　灰 やや緻密　白細粒多量、黒 灰微粒少量 やや硬質	覆土 体下半～底 1/4
6 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 5.4	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ。武蔵型。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　灰褐細粒多量、 白微粒微量 やや硬質	覆土 口～胴部上端 1/5
7 瓦 平瓦	長　残 6.9 幅　残 3.5 厚　1.8 重　残 64.7	凹面布目痕。凸面格子叩き。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤褐微粒少量、 灰細粒少量、砂礫微量 やや硬質	カマドの南側床面直 上 10 ㎝ 小破片 No.5

の武蔵型がほとんどである。住居跡全体よりまばらに出土し、カマド煙道部とその周辺にやや集中する。カマド煙道部からは須恵器坏３・４が出土した。３は火床面直上からの出土で、SK-915 出土の破片と接合している。カマド前面では床面よりやや浮いて平瓦７が出土する。図化しなかった遺物は土師器坏片２点(40 ｇ)、甕片 56 点（315 ｇ)、須恵器坏片 11 点（70 ｇ)、蓋片１点（10 ｇ)、甕片１点（35 ｇ）である。須恵器坏は図化したものも含め７～８個体確認できる。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

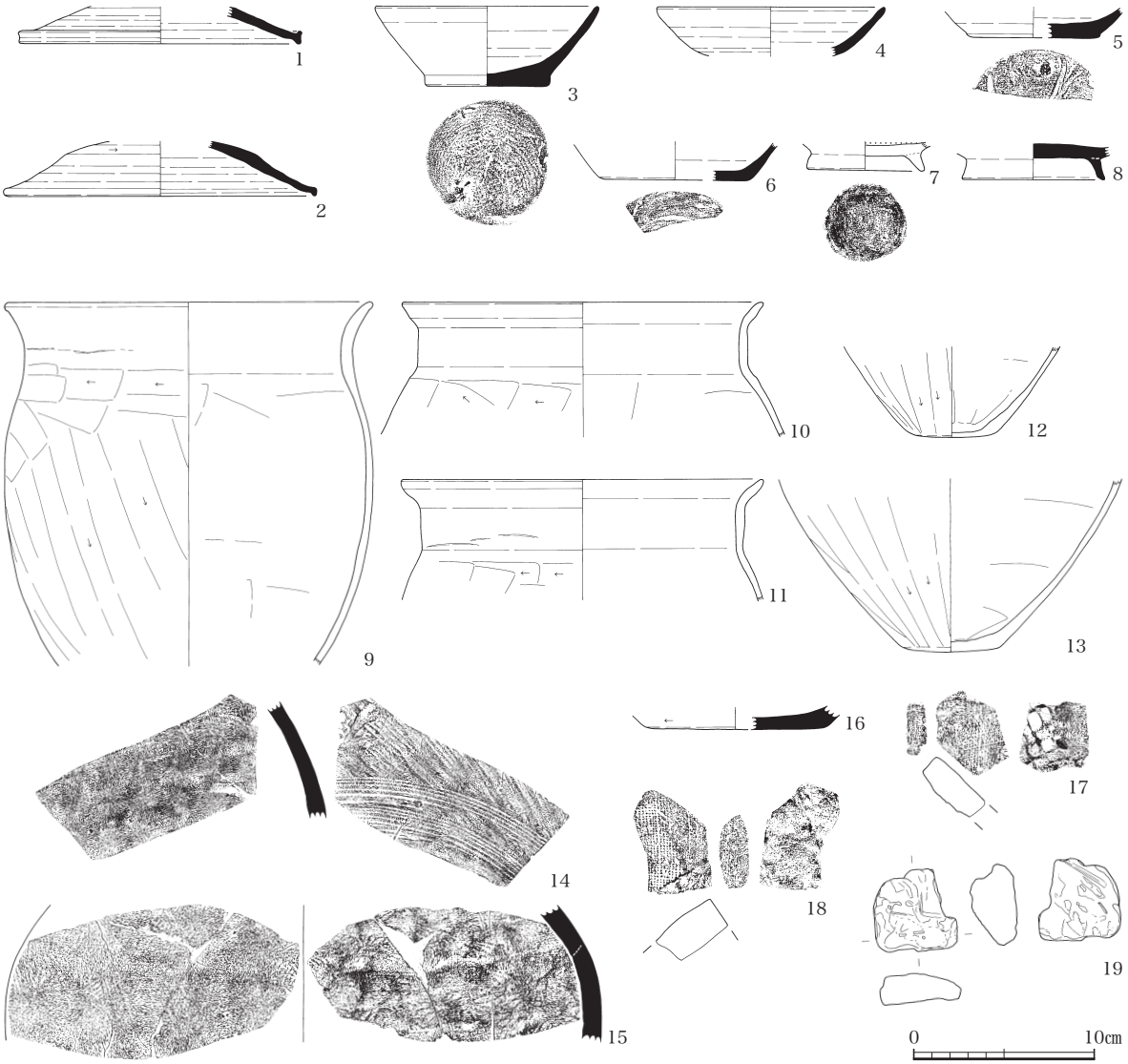
ＳＩ－９０１（第 190・191 図、第 91 表、図版三〇・五六）



SI-901
1　暗黄褐色土　小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　小礫少量、炭化物粒・礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　焼土粒・炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　明灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　明褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
6　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
7　明褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
8　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SI-901　カマド
1　黄褐色土　ローム粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗灰褐色土　炭化物粒多量。しまりあり。
6　赤褐色土　焼土粒多量、炭化物粒微量。しまりあり。
7　明灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 190 図　和田遺跡　SI-901 実測図



第 191 図　和田遺跡　SI-901 出土遺物実測図

第 91 表　和田遺跡　SI-901 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 15.6 高　残 2.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。口縁の上端がやや高く立ち上がる。	N5/0　灰 緻密　白礫微量､白細粒少量 硬質	覆土 口～天井破片
2 須恵器 蓋	口　復 17.3 高　残 3.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰礫微量､白細粒微量 やや軟質	北部床面直上 口～天井 1/4 No.2
3 須恵器 坏	口　復 12.4 高　4.4 底　6.9	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部厚い。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、白細粒少量、黒灰粗粒少量 やや硬質	中央部床面上 2 ㎝ 口一部、体 1/5、底完存 No.14
4 須恵器 坏	口　復 12.6 高　残 2.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	10BG5/1　青灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/4
5 須恵器 坏	高　残 1.7 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部切り離し方法不明。調整はナデ。ミガキ状の細いナデあり。厚めの底部。底部切り離しはヘラ切りの可能性あり。	N6/0　灰 緻密　白礫～細粒少量、灰黒粗粒少量 硬質	覆土 体下端～底 1/2

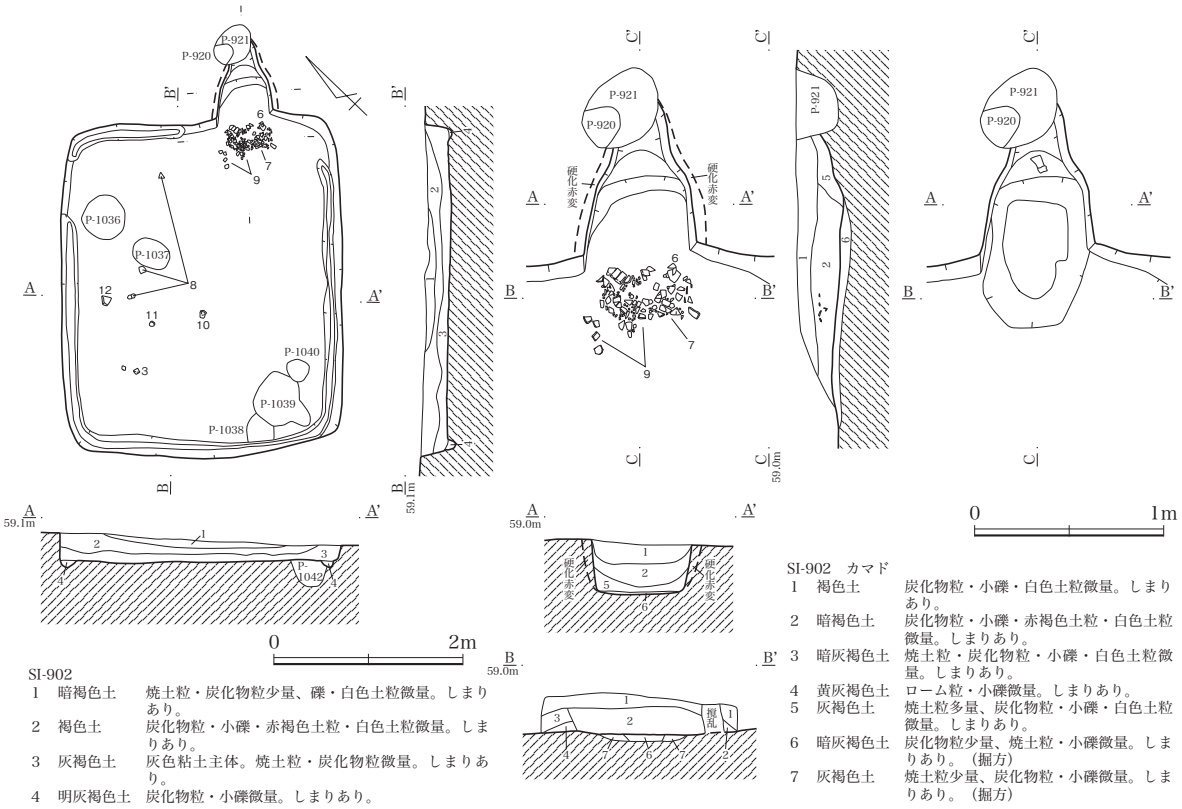
6 須恵器 坏	高　残 2.1 底　復 8.0	内面体部下半～底部ロクロナデ、外面体部ロクロナデ、底部表面磨滅のため調整不明。底部切り離しは糸切りの可能性が高い。内外面とも磨滅が著しい。白色胎土。	N8/0　灰白 やや緻密　灰礫微量、白粗粒微量 軟質	西部床面上６㎝ 体下半～底 1/5 No.16
7 土師器 高台付坏	高　残 1.6 高台　復 6.5	内外面とも磨滅が著しい。内面底部ナデ、内面全面黒色処理。外面底部ナデ後高台貼り付け。底部切り離しは糸切りの可能性あり。高台は「ハ」の字状に開く。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　灰礫微量、白粗粒微量 やや軟質	覆土 底～高台分完存
8 須恵器 高台付坏	高　残 1.9 高台　復 7.9	内外面とも磨滅が著しい。内面底部磨滅のため不明瞭。外面底部磨滅のため切り離し方法・調整不明。高台貼付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。	5Y7/1　灰白 やや粗い　灰礫少量、白礫微量 軟質	南部床面上６㎝ 底～高台分完存 No.15
9 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 20.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向ケズリ後上半横方向ケズリ。武蔵型。口縁部径と胴部径がほぼ同じ。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　黒・白礫微量、白粗～細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド火床面上２～10㎝が接合、カマドにかけられていた可能性あり 口ほぼ完存、胴上半 1/2 KNo.2・4・7・8・10・13・K
10 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 7.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ケズリ。武蔵型。	2.5YR4/8　赤褐 やや緻密　赤褐礫微量、白粗～細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド火床面直上～３㎝が接合 口 1/3、胴上位 1/3 KNo.2・3・5・6・K
11 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 6.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。口縁下端ケズリ時の工具のあたり残る。武蔵型。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　白礫微量、白微粒少量、金雲母細粒微量 硬質	南東部床面上３㎝ 口～胴上端 1/4 No.11
12 土師器 甕	高　残 5.0 底　復 4.6	内面胴部下半ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR4/6　赤褐 やや緻密　黒・赤褐礫微量、白細粒少量、金雲母細粒微量 硬質	中央部床面上３㎝ 胴下位 1/4、底ほぼ完存 No.9
13 土師器 甕	高　残 9.5 底　復 5.4	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部下半縦方向のケズリ、底部ケズリ。胴部下半ひずみあり、開き気味になる。	5YR3/4　明赤褐 やや緻密　黒・白礫微量、白粗粒・細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	カマド火床面上２～３㎝が接合 胴下半 1/4、底 1/4 No.1・2・5・K
14 須恵器 甕	高　残 6.4	内面胴部ロクロナデ。外面胴部上半平行叩き後カキ目。	N5/0　灰 緻密　白礫微量 硬質	覆土 胴上位破片
15 須恵器 甕	高　残 7.6	内面胴部上半同心円当具痕、肩部に粘土の接合部分あり。外面胴部上半平行叩き後カキ目。	N6/0　灰 やや緻密　白礫微量、白粗粒多量、灰褐細粒少量 硬質	北隅床面上９㎝ 胴上位破片 No.1
16 須恵器 甕	高　残 1.2 底　復 9.9	内面底部ロクロナデ。外面胴部下端回転ケズリ、底部回転ケズリ。切り離しはヘラ切りの可能性高い。	10Y7/1　灰白 緻密　灰・白礫微量 やや硬質	中央部床面上４㎝ 底 1/3 No.7
17 瓦 平瓦	長　残 4.6 幅　残 3.5 厚　1.6 重　残 39.0	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子目叩き後側縁ケズリの可能性あるが表面磨滅のため不明。側面ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒・白礫微量、白細粒少量、赤褐細粒微量 やや軟質	覆土 破片
18 瓦 平瓦	長　残 6.5 幅　残 3.9 厚　残 2.1 重　残 58.3	凹面布目痕後側縁ケズリ。側面ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒・白礫微量、赤褐細粒微量 やや軟質	カマド 破片 K
19 土製品 粘土塊	長　4.6 幅　4.6 重　39.1	平面不正方形。断面不正形。捏ねた粘土を固めて焼成している。表面粘土に「L」字状の圧痕あり。裏側はほぼ平坦で、植物の茎のような細い棒状の圧痕あり。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐・白礫微量 やや軟質	覆土 完形

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｌ－23、Ｍ－23 グリッドに位置する。北西に SI-919 が近接してあるほか、北東４ｍには SI-902 が隣接する。　**重複**　住居跡の大部分で SI-900 と重複し、SI-900 を切る。SI-900・901 は平面形や規模などが類似しており、SI-900 から SI-901 へと拡張を伴って建て替えられたものと考えられる。　**平面形**　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－36°－Ｗである。　**規模**　南西－北東方向が 4.70m、南東－北西方向が 3.24m である。　**覆土の状態**　８層で、炭化物を含む層が多い。　**壁**　残存壁高は 21 ～ 25cm であり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　SI-900 との重複部分については、SI-900 覆土第１・第２層により貼床したものと考えられる。床面から SI-900 床面までの深さは４～９cm である。拡張部分は地山面をそのまま床面としている。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　北隅と北東壁際にある。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は 16 ～ 25cm、深さは床面から３～６cm である。　**火処**　カマドが北西壁際北寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。規模は SI-900 のカマドより大きく、煙道部は壁を「Ｕ」字状に６cm ほど掘り込んで作られる。火床面は床面から約４cm 低い位置にある平坦面で、煙道へは同じ高さで続いたあと、緩やかな段を持って立ち上がる。被熱の痕跡は明瞭で、火床面付近と燃焼部に近い壁面が硬化赤変するほか、煙道側面も部分的に硬化赤変する。覆土は第１～第６層で、火床面および煙道底面直上には炭化物を多量に含む第５層が堆積する。天井部の土層は特定できないが、第２・第３層が崩落した天井部、第４層が天井内面の可能性があるだろう。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は多く、住居跡全体から出土するが、東西両隅部では少ない。カマドでは、前面のほか煙道先端からの出土が目立つ。出土遺物は土師器甕と須恵器坏主体であり、SI-900 と類似した様相を示す。土師器甕は武蔵型ばかりである。カマド前面から出土する甕９・10・13 は、カマドに掛けられていたか、あるいはカマド構築材だった可能性が考えられる。甕 11・12 は住居跡内中央部で床面よりわずかに浮いて出土する。須恵器蓋２は北部床面直上出土である。図化しなかった遺物は土師器片 567 点（2,230 ｇ）、須恵器片 40 点（435 ｇ）、粘土塊１点（２ｇ）である。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－９０２（第 192・193 図、第 92 表、図版三〇）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－22・23 グリッドに位置する。南東２ｍに SI-903、南西４ｍには SI-901 が隣接する。　**重複**　カマド先端が P-920・921 に切られる。南東壁際で重複する P-1041・1042 は、土層断面の観察から本住居跡より古いものと考えられる。このほか、北部で P-1036・1037、南隅で P-1038・1039・1040 と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。　**平面形**　長方形で、南西－北東方向の中軸線はＮ－44°－Ｅである。　**規模**　北西－南東方向が 2.97m、南西－北東方向が 3.55m である。　**覆土の状態**　４層で、第４層は壁溝覆土である。第１層は焼土と炭化物を比較的多く含んでいて、直下の第２層上面は硬化している。埋没途中で燃焼を伴う何らかの行為が行われたことを示すものであろうか。　**壁**　残存壁高は 16 ～ 29cm であり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　東隅と北隅の一部を除き壁際をほぼ全周する。断面形は「Ｕ」字状で、幅は 10 ～ 22cm、深さは床面から３～ 10cm、覆土は炭化物などを含む明灰褐色土（第４層）である。　**火処**　カマドが北東壁際東寄りにある。天井部、袖部とも失われているほか、煙道先端は P-920・921 に切られるなど残存状態は良くない。煙道部は壁を「凸」字状に 78cm ほど掘り込んで作られる。床面とほぼ同じ高さの火床面は、床面より約６cm 楕円形に掘り下げられたあと第６・第７層で埋め戻されて作られており、煙道に向かってわずかに低くなる。火床面から煙道へは、比高５cm の段になるとともに全体の幅を狭めている。煙道は、平坦面ののち緩やかに立ち上がり確認面に至るものとみられる。被熱の痕

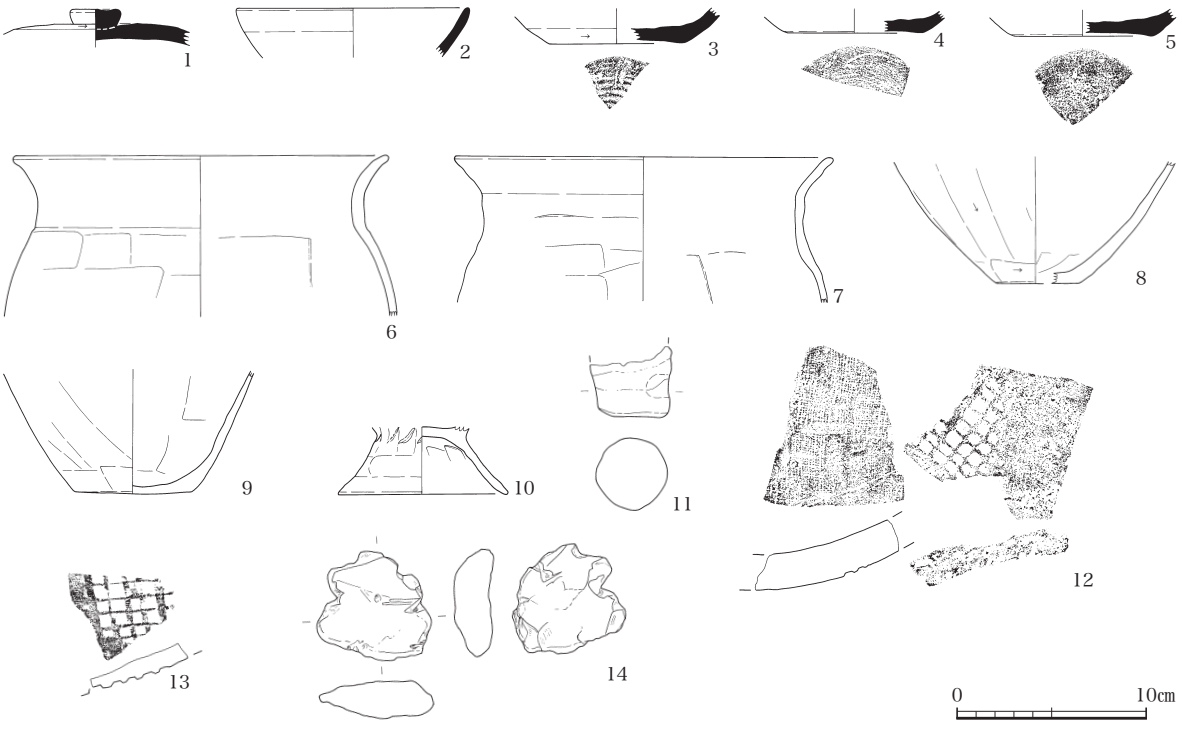
跡は極めて顕著であり、燃焼部、煙道とも側面ほぼ全面が硬化赤変する。覆土は第１～第７層で、全体に炭化物が目立つ。煙道底面直上に堆積し焼土を多量に含む第５層は、天井内面の崩落と考えられる。第３・第



SI-902
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土主体。焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
4　明灰褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。

SI-902　カマド
1　褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　黄灰褐色土　ローム粒・小礫微量。しまりあり。
5　灰褐色土　焼土粒多量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
6　暗灰褐色土　炭化物粒少量、焼土粒・小礫微量。しまりあり。（掘方）
7　灰褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。（掘方）

第 192 図　和田遺跡　SI-902 実測図



第 193 図　和田遺跡　SI-902 出土遺物実測図

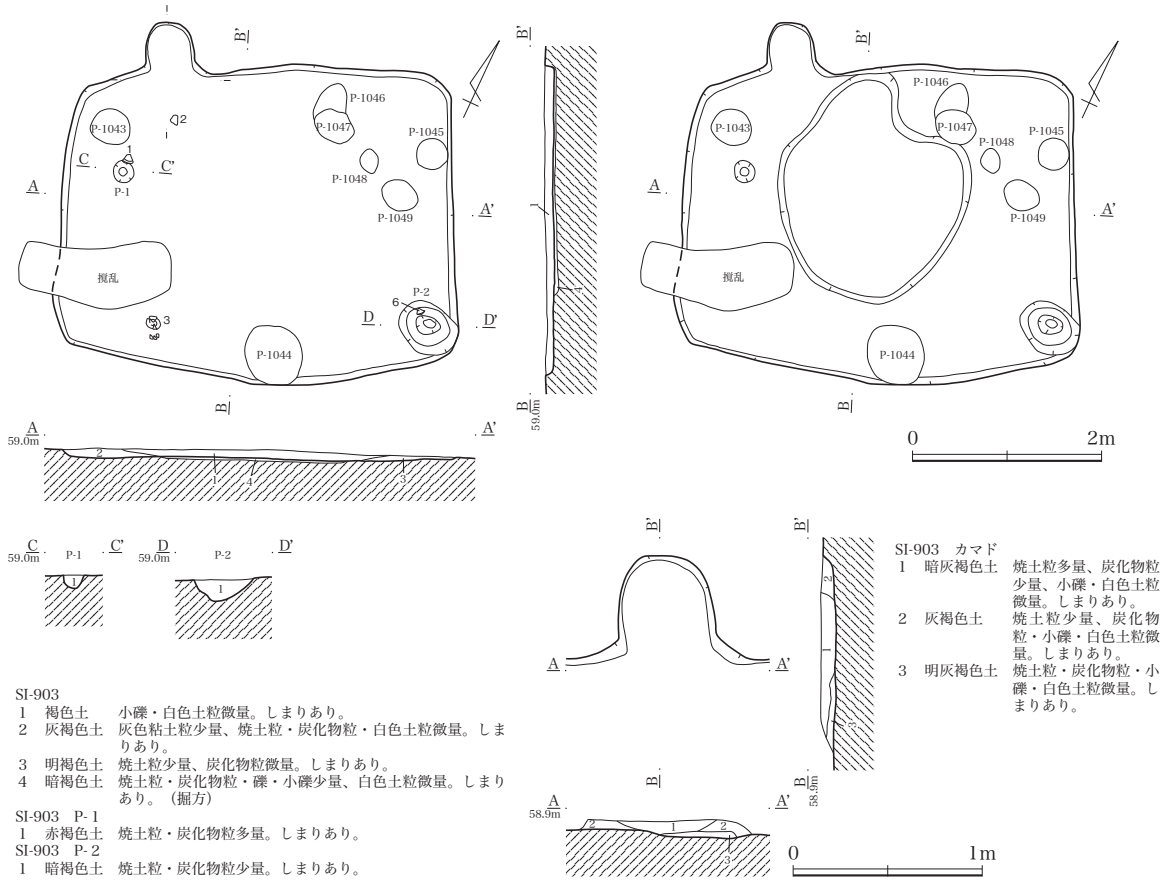
第 92 表　和田遺跡　SI-902 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.6 つまみ　2.6	内面天井部ロクロナデ、外面天井部回転ケズリ、つまみ貼付け。つまみは逆台形で中央がわずかに突出する。	N7/0　灰 やや緻密　黒・白微粒微量 硬質	覆土 天井～つまみ 1/6
2 須恵器 坏	口　復 12.3 高　残 2.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N6/0　灰 やや緻密　灰褐微粒少量、赤褐微粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 口～体上半破片
3 須恵器 坏	高　残 1.8 底　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部回転ケズリ、底部回転糸切り離し後無調整。	10YR7/1　灰白 やや緻密　白細粒微量、灰褐細粒少量 やや硬質	西部床面上 17 ㎝ 体下位～底 1/6 No.7
4 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒・灰褐細粒少量 やや軟質	P-1041 体下端～底 1/5 P-6
5 須恵器 坏	高　残 1.3 底　復 7.6	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周回転ケズリ。	5Y8/0　灰白 やや緻密　灰黒粗～細粒少量、白粗粒微量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/4
6 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 8.5	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向ケズリ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　赤褐微粒多量、白・透明細粒微量、金雲母細粒微量 硬質	カマド火床面上 4 ～ 16 ㎝が接合 口～胴上半 1/6 KNo.1
7 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 7.7	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ。武蔵型。8 の口縁部～胴部可能性あり。	7.5YR4/4　褐 やや粗い　白微粒多量、黒微粒少量、金雲母粗粒微量 硬質	カマド火床面上 4 ～ 16 ㎝が接合 口～胴上位破片 KNo.1
8 土師器 甕	高　残 6.4 底　復 4.3	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半斜方向ケズリ後下端を横方向ケズリ、底部ケズリで細い棒状の圧痕あり。武蔵型。7 の底部の可能性あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　灰褐微粒多量、赤褐微粒少量、金雲母粗粒微量、白微粒微量 硬質	中央部床面直上と床面上 2 ㎝が接合 胴下半～底 1/2 No.1・2・4
9 土師器 甕	高　残 6.4 底　復 6.2	内面胴部下半～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半斜方向ケズリ後下端横方向のケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	7.5YR5/4　にぶい橙 やや粗い　灰褐微粒多量、白微粒多量、赤褐細粒微量 硬質	カマド火床面上 4 ～ 16 ㎝が接合 胴下半～底 1/4 K・KNo.1・2
10 土師器 台付坏	高　残 3.5 台　復 9.0	内面台～底部ナデ、上半ナデ後下半ヨコナデ。外面台部上端ケズリ後下半ナデ、下端ヨコナデ。台部上端には捻りを加えたことによると見られる粘土のシワあり。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　砂礫・白微粒多量、金雲母粗粒微量、赤褐微粒微量 硬質	中央部床面上 18 ㎝ 底～台上半完存、台下半 1/5 No.8
11 土師器 三足土器	長　残 3.7 幅　残 4.3 厚　3.8	平面方形。断面円形。上端は粘土の接合部分で剝離する。直径 4 ㎝前後の中実の脚部。底面は平坦で図の左側にやや傾く。側面粘土の繋ぎ目残る。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　赤褐細粒少量、白微粒微量、砂礫少量 硬質	中央部床面上 2 ㎝ 脚部下端完存 No.5
12 瓦 平瓦	長　残 8.9 幅　残 7.7 厚　1.9 重　残 188.4	凹面布目痕。凸面格子目叩き。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　砂礫少量、赤褐細粒微量 やや硬質	北西部床面上 17 ㎝ 破片 No.3
13 瓦 平瓦	長　残 5.1 幅　残 5.6 厚　残 10.5 重　残 31.5	凸面格子目叩き。粘土貼り合わせ面で剝離する。	10YR4/1　灰 やや緻密　赤褐細粒少量、灰褐微粒少量 やや硬質	覆土 破片
14 土製品 粘土塊	長　5.8 幅　6.0 厚　2.0 重　53.1	平面・断面ともに不正形。捏ねた粘土を固めて焼成している。表面の調整はない。裏側はやや平坦。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　砂礫多量、赤褐細粒少量、白微粒微量 やや軟質	覆土 完形

４層は残存した袖部の可能性があろうか。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は少なく、武蔵型甕主体に須恵器が混じる。土師器坏はほとんど出土しない。須恵器は坏がほとんどで、甕、蓋などがわずかに含まれる。住居跡内ではカマド前面と西部に集中する。カマド前面からは小破片の状態で土師器甕６・７・９が出土する。いずれも火床底面よりやや浮いた位置である。甕７と同一個体ともみられる甕底部８は住居中央部床面直上、三足土器の脚部 11 は中央部床面上２cm からの出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片８点（120 ｇ）、甕片 241 点（1,370 ｇ）、須恵器坏片 10 点（105 ｇ）、甕片５点（135 ｇ）である。図化した須恵器坏は底部糸切りだが、ヘラ切りが図化以外で１個体確認できる。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

ＳＩ－９０３（第 194・195 図、第 93 表、図版三一・五五・五六）

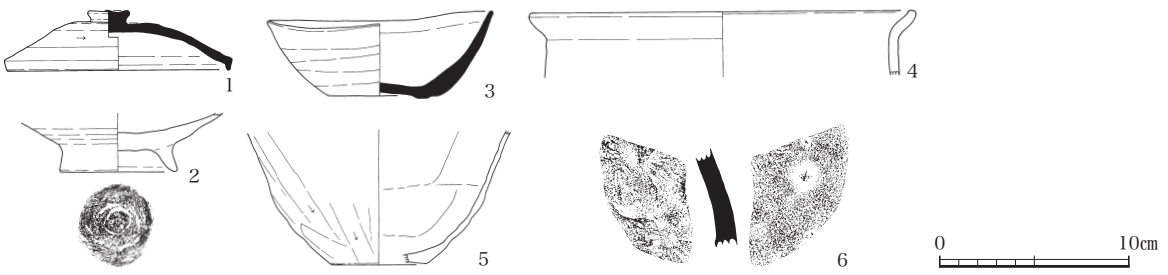
位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｌ－ 22、Ｍ－ 22 グリッドに位置する。北西に SI-902 が近接してある。　**重複**　P-1043・1044・1045・1046・1047・1048・1049 と重複するが、新旧関係は不明である。南西部の



SI-903
1　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　灰色粘土粒少量、焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　焼土粒少量、炭化物粒微量。しまりあり。
4　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
SI-903　P-1
1　赤褐色土　焼土粒・炭化物粒多量。しまりあり。
SI-903　P-2
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。

SI-903　カマド
1　暗灰褐色土　焼土粒多量、炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　明灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 194 図　和田遺跡　SI-903 実測図



第 195 図　和田遺跡　SI-903 出土遺物実測図

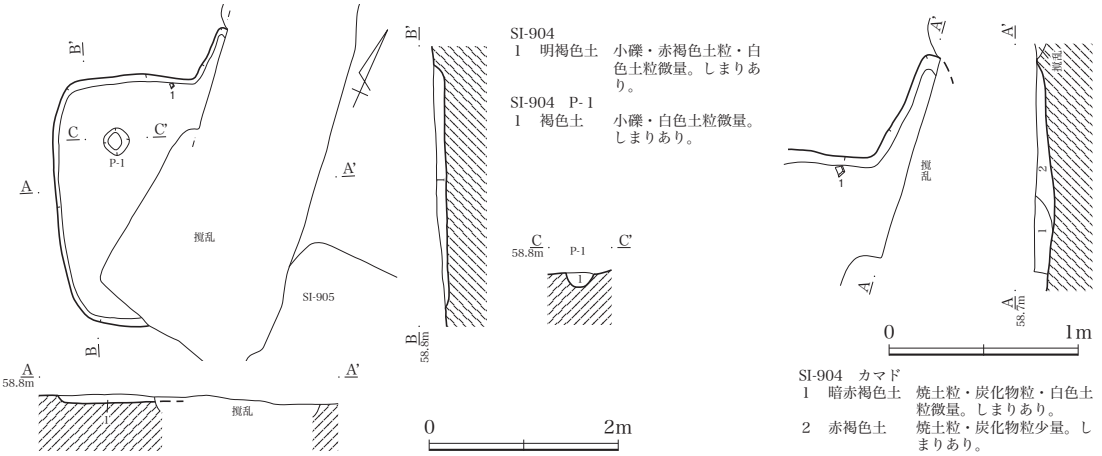
第 93 表　和田遺跡　SI-903 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　11.7 高　3.1 最大　12.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ、つまみ貼付け。つまみは逆台形状で中央がやや突出する。フタの中心よりわずかにずれた位置に付けられている。	N6/0　灰 やや緻密　灰細粒多量、白微粒微量 やや硬質	P-1 北部床面上 4 ㎝ 口～天井 1/2、つまみ完存 No.2
2 土師器 高台付皿	高　残 3.1 高台　6.3	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼付け。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　砂礫少量、赤褐・白細粒少量 やや硬質	北西部床面上 5 ㎝ 体～底完存 No.1
3 須恵器 坏	口　12.0 高　4.7 底　5.8	表面磨滅が著しい。内面口縁～底部ロクロナデ・ナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後は無調整か。上げ底で全体的に歪む。糸切り離し最後の箇所に粘土塊が突出するように残る。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　砂礫・白微粒微量、灰褐細粒少量 軟質	南壁際床面上 7 ㎝、逆位 ほぼ完形 No.3
4 土師器 甕	口　復 20.5 高　残 3.6	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ。武蔵型。	2.5YR4/6　赤褐 やや粗い　砂礫・金雲母細粒・白微粒少量 硬質	覆土 口破片
5 土師器 甕	高　残 7.1 底　復 5.0	内面胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部下半縦方向ケズリ、底部ケズリ。武蔵型。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　灰褐細粒多量、赤褐細粒少量、白微粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 胴下半～底 1/6
6 須恵器 甕	高　残 5.2	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き後ナデ。	N6/0　灰 やや緻密　白・灰褐細粒多量 硬質	P-2 北部底上 8 ㎝ 胴破片 No.5

一部が撹乱を受ける。　**平面形**　長方形で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 26°－Ｗである。　**規模**　東西方向が 4.16m、南北方向が 3.34m である。　**覆土の状態**　第１～第３層で、第２・第３層は焼土や炭化物を含む。　**壁**　残存壁高は３～ 10cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。　**堀方・貼床**　中央部が円形に浅く掘り込まれ、焼土や炭化物を含む暗褐色土（第４層）で貼床される。貼床される範囲は 239 × 203cm、床面からの深さは２～５㎝である。　**柱穴**　北西部に１本（P-１）、南東隅に１本（P- ２）がある。規模は P- １が径 24 × 21cm、深さ 15cm、P- ２が径 65 × 51cm、深さ 23cm で、P- １・２とも覆土中に焼土や炭化物を含む。　**壁溝**　なし。　**火処**　カマドが北西壁際西寄りにある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は壁を「U」字状に 45cm ほど掘り込んで作られる。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、煙道へは同じ高さで続いたあと、先端は外傾して短く立ち上がる。被熱の痕跡は明瞭ではない。覆土は３層で、焼土を多量に含む第１層は天井内面の崩落と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかである。土師器は武蔵型甕ばかりで、坏はロクロ成形の内面黒色処理されたもののみである。南西隅ではほぼ完形の須恵器坏３が床面上７cm より逆位の状態で、土師器高台付皿２は北部床面上５cm より出土している。図化しなかった遺物は、土師器坏片６点（30ｇ）、甕片 79 点（245 ｇ）、須恵器片３点（25 ｇ）である。本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。

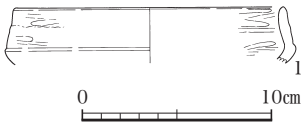
ＳＩ－９０４（第 196・197 図、第 94 表、図版三一）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 21 グリッドに位置する。東に SI-905 が近接してある。　**重複**　なし。東側は大きく撹乱される。SI-905 とは重複する可能性があるが、撹乱のため確認できない。　**平面形**　方形か長方形とみられるが、東半が不明のため特定できない。南北方向の中軸線はＮ－ 30°－Ｗである。住居跡の規模やカマドの形状、西壁からカマドまでの距離などの点は SI-905 とよく似ており、SI-905 と同様の住



第 196 図　和田遺跡　SI-904 実測図

居跡であった可能性はあろう。　**規模**　南北方向は 2.65m である。東西方向は 1.58m 分を確認している。　**覆土の状態**　礫などをわずかに含む明褐色土（第１層）である。　**壁**　残存壁高は５～ 12cm であり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　北西部に１本(P-１）がある。規模は径 27 × 26cm、深さ 15cm である。　**壁溝**　なし。　**火処**



第 197 図　和田遺跡
SI-904 出土遺物実測図

第 94 表　和田遺跡　SI-904 出土遺物観察表

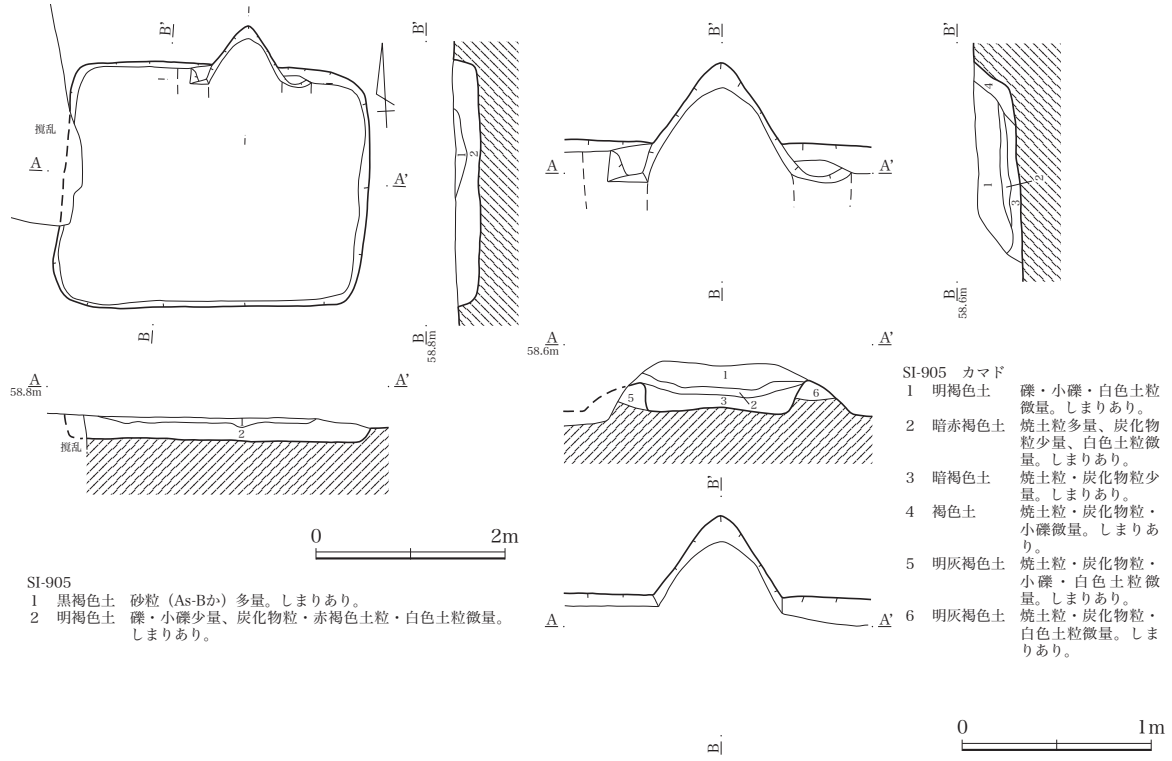
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.4 高　残 2.9 最大 復 15.4	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ後粗いミガキで紐積痕あり。体部ケズリ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白微粒微量 やや硬質	カマド南側床面上 4 cm 口破片 No.1

カマドが北壁際にある。天井部、袖部とも失われているほか、東半は撹乱されているため残存状態は良くない。煙道部は壁を 63cm ほど掘り込んで作られる。掘り込みの形状は不明だが、残存する部分から推定すると「Ｖ」字状であろう。火床面は床面からわずかに低くなった位置にあり、緩やかに高くなっていく煙道へとなだらかに続き、先端は丸みを持って外傾して立ち上がる。被熱の痕跡は明瞭ではない。覆土は２層で、ともに焼土や炭化物を含む。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物は土師器坏片２点と土師器甕片１点である。このうちカマド付近の床面上４cm より出土した坏１点（１）を図化した。遺構に伴うものとすれば、本遺構の年代は６世紀後葉頃となろうか。

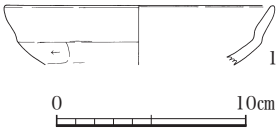
ＳＩ－９０５（第 198・199 図、第 95 表、図版三一）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 21 グリッドに位置する。西に SI-904 が近接してある。　**重複**　なし。西辺中央が撹乱される。SI-904 と重複する可能性があるが、撹乱のため確認できない。　**平面形**　長方形で、南北の中軸線はＮ－８°－Ｅである。　**規模**　東西方向が 3.23m、南北方向が 2.64m である。　**覆土の状態**　２層で、第１層は浅間Ｂ軽石（As-B）とも推定される砂粒を含む。　**壁**　残存壁高は 20 ～ 26cm であり、壁は外傾して立ち上がる。　**床面**　ほぼ平坦である。　**堀方・貼床**　なし。　**柱穴**　なし。　**壁溝**　なし。

火処　カマドが北壁際東寄りにある。天井部は失われているほか、調査時に両袖部先端と左袖部外側を失ってしまっているなど、残存状態は良くない。煙道部は北壁を「Ｖ」字状に 42cm ほど掘り込んで作られる。



第 198 図　和田遺跡　SI-905 実測図



第 199 図　和田遺跡　SI-905 出土遺物実測図

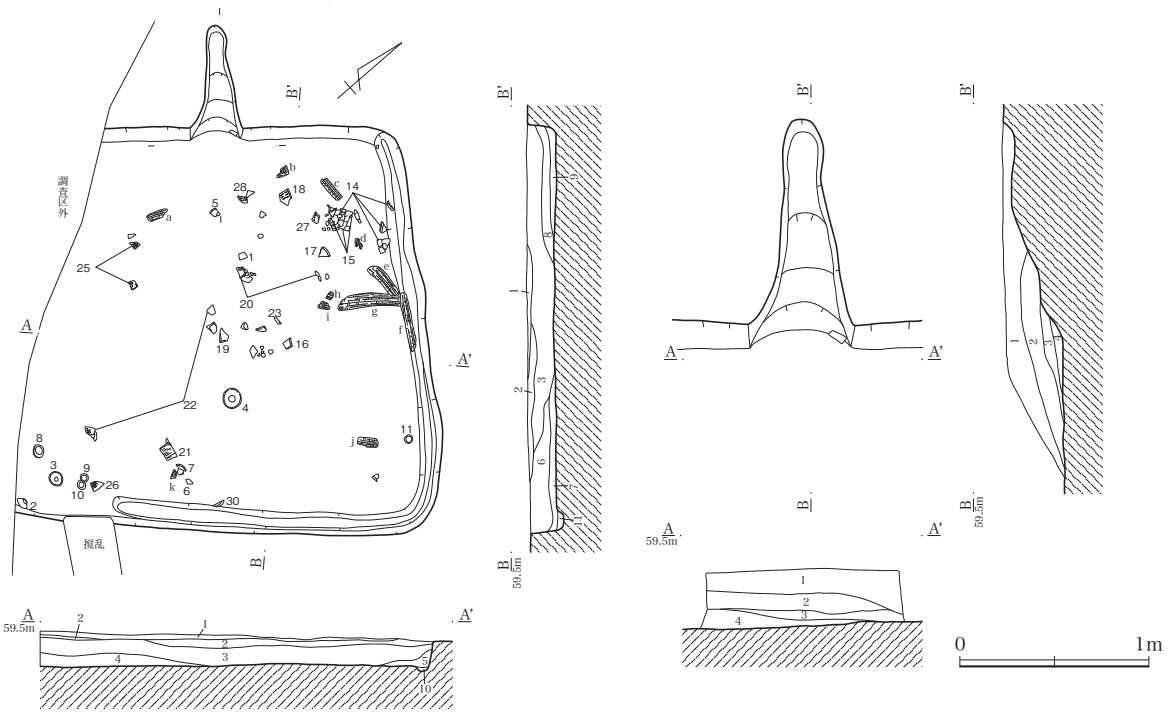
袖部は明灰褐色土（第５・第６層）で構築されており、袖部内側にある火床面は床面と同じ高さの平坦面である。火床面から煙道へはほぼ平坦に続いており、先端で外傾して立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡は顕著で、袖部と煙道の内面は燃焼部付近を中心にほぼ全体が硬化赤変している。覆土は第１～第４層で、火床面および煙道底面直上には炭化物を多く含む第３層が堆積する。焼土を多く含む第２層は天井内面、第１層は天井部がそれぞれ崩落したものと考えられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　遺物はごくわずかで、土師器坏には口縁部が直立するもの、大型で外傾するものがある。このうち坏１点（１）を図化した。図化しなかった遺物は、土師器坏片 11 点（20 ｇ）、甕片２点（95 ｇ）である。中世の土師質土器皿も混入する。本遺構の年代は、およそ８世紀前葉頃と考えられる。

第 95 表　和田遺跡　SI-905 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.3 高　残 3.1	表面磨滅著しい。内面口縁～体部ヨコナデと見られる。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　灰褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 破片

ＳＩ－９１９（第 200 ～ 203 図、第 96 表、図版三一・五六・五七）

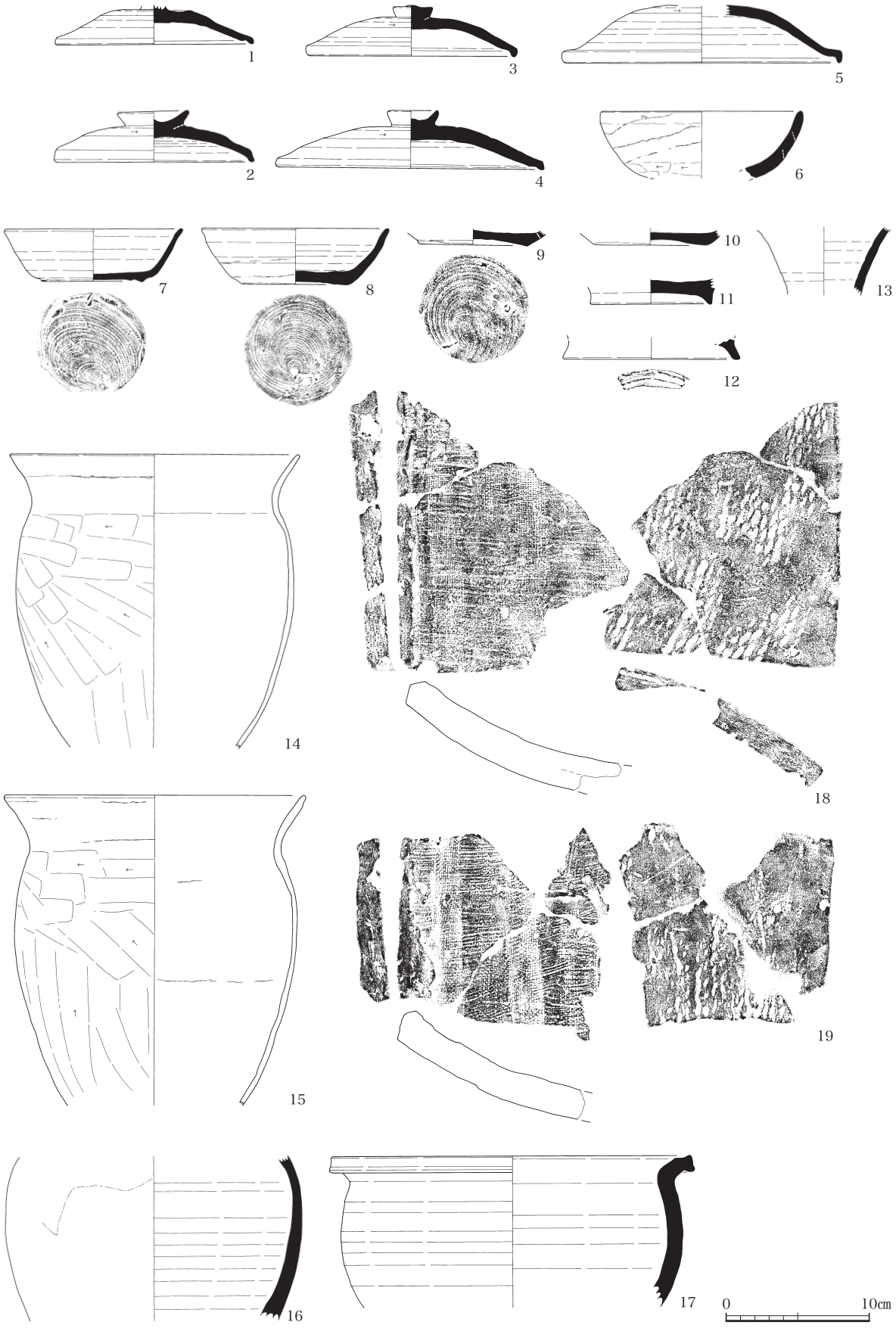
位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－ 23・24 グリッドに位置する。南東に SI-900・901 が近接してある。**重複**　なし。住居跡南西部は調査区外となる。　**平面形**　方形か長方形とみられるが、南西部が不明のため



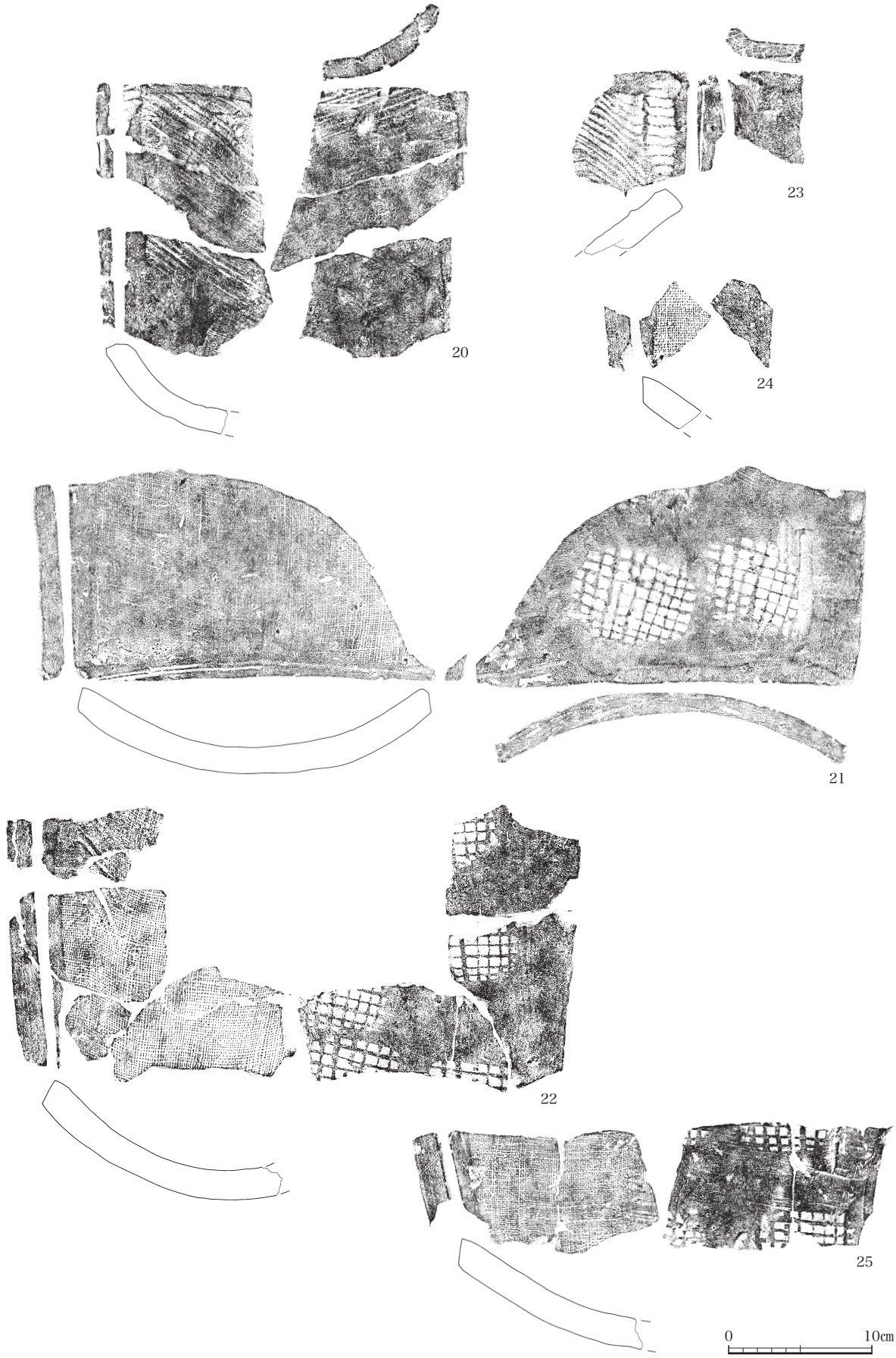
SI-919
1　暗赤褐色土　赤褐色土粒多量。しまりあり。
2　明黄褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　礫・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
4　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗灰褐色土　粘土粒・炭化物粒多量、礫微量。しまりあり。
6　褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
7　暗灰褐色土　粘土粒多量、炭化物粒少量。しまりあり。
8　暗黄褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
9　暗灰褐色土　粘土粒・炭化物粒多量。しまりややあり。
10　灰褐色土　小礫微量。しまりあり。
11　灰褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SI-919　カマド
1　暗褐色土　小礫少量、ローム粒・焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　焼土粒少量、炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
4　明灰褐色土　炭化物粒・小礫少量、焼土粒微量。しまりあり。

第 200 図　和田遺跡　SI-919 実測図

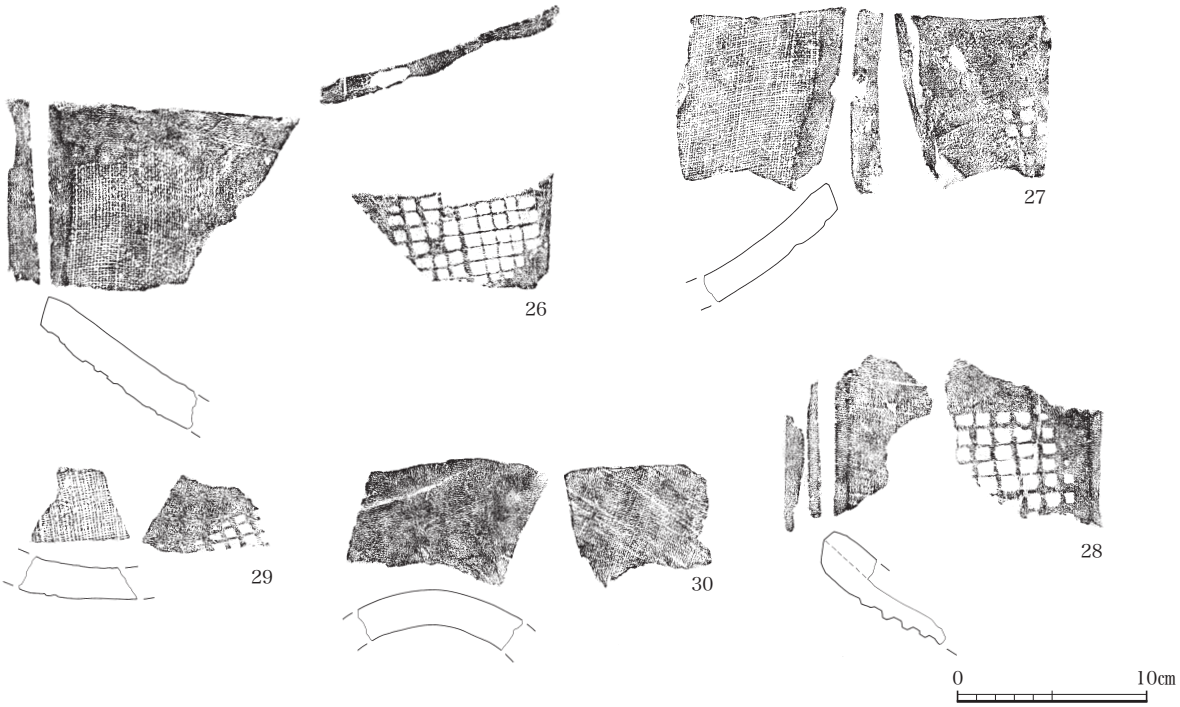
特定できない。南東－北西方向の中軸線はＮ－ 47°－Ｗである。　規模　南東－北西方向が 4.02m である。南西－北東方向は 3.88m 分を確認している。　覆土の状態　11 層で、第 10・11 層は壁溝覆土である。粘土を特徴的に含む第５・７・９層は、住居跡内北半の床面直上付近で多く出土する炭化材を覆うように堆積する。炭化材の多量出土から本住居跡は消失家屋とも考えられるが、その場合粘土層は屋根に葺かれた土の可能性があろうか。第８層の焼土は、崩落したカマドの一部だろう。　壁　残存壁高は 24 ～ 27cm であり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　床面　ほぼ平坦である。　堀方・貼床　なし。　柱穴　なし。　壁溝　北東と南東の壁際にある。断面形は開いた「Ｕ」字状で、幅は 19 ～ 24cm、深さは床面から４～６cm、覆土は灰褐色土（第 10･第 11 層）である。　火処　カマドが北壁際にある。天井部、袖部とも失われており、残存状態は良くない。煙道部は北壁を溝状に 97cm ほど掘り込んで作られる。幅は壁に接する付近で 49cm、先端付近では 20cm である。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、火床面から煙道へは２つの段を持って階段状に立ち上がっており、先端は平坦な状態から丸みを持って外傾して立ち上がり確認面に至る。被熱の痕跡は明瞭ではない。覆土は４層で、焼土を比較的多く含む第３層は天井部の崩落とも考えられる。　貯蔵穴　なし。　遺物　遺物は多く、須恵器と瓦が目立つ。須恵器は坏・蓋主体、土師器は甕が武蔵型、坏は半球状が多く、ロクロ成形の内面黒色処理のものもわずかにある。住居跡内各所から出土するが、中央部と南北両隅部に集中する様子がうかがえる。大きく浮いているものはなく、ほとんどが床面付近からの出土である。床面直上出土遺物は、須恵器蓋１・３・４、坏９・10、高台付坏 11、壺 16、鉢 17、土師器坏６、甕 14・15、平瓦 21・23・26・28、丸瓦 30 である。完形の遺物をみると、須恵器蓋３・４は逆位、須恵器坏８は



第 201 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図（1）



第 202 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図（２）



第 203 図　和田遺跡　SI-919 出土遺物実測図（３）

第 96 表　和田遺跡　SI-919 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　13.9 高　残 2.7	内外面とも表面磨滅が著しい。内面口縁部ロクロナデと思われるが不明瞭。外面口縁～体部ロクロナデと思われるが不明瞭。天井部回転ケズリ後つまみ貼付け。	10Y8/1　灰白 やや緻密　灰褐細粒微量、灰褐礫・白礫微量 やや軟質	中央部床面直上、正立、20（№4、瓦）の下 口 2/3、体～天井完存 No.19
2 須恵器 蓋	口　14.0 高　3.5 つまみ　5.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。つまみ部中央は小さく突出する。	N8/0　灰白 やや緻密　白細粒微量、青灰細粒少量、灰褐礫・白礫微量 硬質	西壁際床面上 20 cm、斜位 口～天井 3/4、つまみ 3/4 No.28
3 須恵器 蓋	口　14.7 高　3.5 重　206.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。つまみは逆台形。内外面ともロクロナデ部分で砂粒のひきずりが顕著。	7.5Y6/1　灰 緻密　白礫～細粒微量、灰褐細粒少量、白礫・灰褐礫微量 やや硬質	南壁際床面直上、逆位 完形 No.26
4 須恵器 蓋	口　18.8 高　4.0 つまみ　復 3.6	内面口縁部～天井部ロクロナデ。外面口縁部～体部ロクロナデ、天井部ケズリ後貼り付け。つまみは高くて小さいリング状。	7.5Y8/1　灰白 緻密　白粗～細粒微量、青灰礫～細粒微量 やや軟質	中央部床面直上、逆位 ほぼ完形 No.22
5 須恵器 蓋	口　復 19.6 高　残 4.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ後天井部回転ケズリ。	N7/0　灰白 やや緻密　白細～粗粒微量、青灰細粒微量、白・灰褐礫微量 硬質	カマド前面床面上 5 cm 口～天井 1/4 No.18
6 土師器 坏	口　復 14.2 高　残 4.6	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上半紐積痕明瞭に残し無調整。体部下半ケズリ。体部下半紐積部分で割れる。	7.5YR8/2　灰白 やや緻密　白細粒微量、赤褐細粒微量 やや硬質	南壁際床面直上 口～体 1/4 No.40
7 須恵器 坏	口　12.5 高　3.6 底　7.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N5/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	南壁際床面上 7 cm、正立 口～体 3/4、底完形 No.23

8 須恵器 坏	口　13.1 高　3.9 底　7.6 重　残196.7	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデで紐積痕あり。底部回転糸切り離し無調整。底部わずかに上げ底。白色胎土。	5Y8/1　灰白 緻密　灰褐細粒少量、白細粒微量、灰礫微量 やや軟質	南部床面上３㎝、正立 完形 No.27
9 須恵器 坏	高　残 1.1 底　残 7.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部やや厚く上げ底。	2.5GY8/1　灰白 やや緻密　白・青灰細粒微量 やや軟質	南壁際床面直上、斜位。10（№ 25）と重なる 底完形 No.24
10 須恵器 坏	高　残 1.1 底　残 7.8	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り後無調整。底部は上げ底となる。内外面とも表面磨滅のため調整不明瞭。	7.5YR7/8　黄橙 緻密　白細粒微量、砂礫微量 軟質	南壁際床面直上、斜位。9（№ 24）の下に重なる 底完形 No.25
11 須恵器 高台付坏	高　残 1.7 高台　残 8.4	内外面とも表面磨滅著しい。内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台はほぼ垂直に立ち上がる。白色胎土。	N8/0　灰白 やや粗い　砂礫少量、白細粒微量 やや軟質	北東隅床面直上、逆位 底完形、高台 3/4 No.29
12 須恵器 高台付坏	高　残 1.4 高台 残 12.4	高台部分の破片で貼り付け部分で剝離する。貼り付け部分には、坏部本体の糸切りの痕跡と見られる同心円状の２条の隆起線あり。	N8/0　灰白 緻密　灰黒細～微粒多量、白細粒少量 硬質	覆土 高台破片
13 須恵器 長頸瓶	高　残 4.8	内面頸部ロクロナデ、自然釉付着。外面頸部ロクロナデ。	10Y7/1　灰白 緻密　青灰細粒少量 硬質	覆土 頸部 1/4
14 土師器 甕	口　復 20.3 高　残 20.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半横方向、中位斜方向、下半縦方向のケズリ。武蔵型。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 硬質	東壁際北部床面直上 口 1/2、胴部上半 1/4、胴下半一部 No.31・32・33・42
15 土師器 甕	口　残 21.0 高　残 21.5	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデで紐積痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ後上半横ないし斜め方向ケズリ。武蔵型。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤褐・白細粒微量 硬質	北部床面直上、横位 口ほぼ完形 胴部 1/2 No.35・36・42
16 須恵器 壺	高　残 11.5 胴　復 20.8	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、自然釉厚く付着。	5PB6/1　青灰 緻密　白礫～細粒微量、青灰細粒微量 硬質	中央部床面直上 胴 1/6 No.20
17 須恵器 鉢	口　復 25.4 高　残 10.5	内面口縁～胴部上半ロクロナデ。外面口縁～胴部上半ロクロナデ。	7.5Y8/1　灰白 緻密　白礫～細粒微量、青灰細粒微量 硬質	北部床面直上 口 1/5 ～体中位 1/5 No.14
18 瓦 平瓦	長　残 19.5 幅　残 15.0 厚　2.4 重　残796.9	凹面布目痕、模骨痕あり、側縁ケズリ。凸面縄叩き、表面磨滅のため不明瞭。側面ケズリ。狭端面ケズリ。	7.5Y8/2　灰白 緻密　白粗粒微量、砂礫微量 やや軟質	北部床面上７㎝ 破片 No.2
19 瓦 平瓦	長　残 14.0 幅　残 13.0 厚　2.2 重　残610.4	凹面布目痕、模骨痕あり、表面一部剝離する、側縁ケズリ。凸面縄叩き。側面ケズリ。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白粗粒微量、灰礫微量 やや軟質	中央部床面上５㎝ 破片 No.7
20 瓦 平瓦	長　残 18.7 幅　残 8.6 厚　1.8 重　残633.8	凹面布目痕、模骨痕あり、側縁ケズリ、広端縁ケズリ。凸面ケズリ、側縁ケズリ。側面ケズリ。広端面ケズリ。	7.5YR6/8　黄橙 緻密　赤褐細粒微量、砂礫少量 硬質	中央部床面上６㎝と 10 ㎝が接合 破片 No.4・37
21 瓦 平瓦	長　残 14.3 幅　24.6 厚　1.8 重 残 1359.3	凹面布目痕、模骨痕あり、側縁・狭端縁ケズリ。凸面ナデ後格子目叩き、左側縁・狭端縁ケズリ。側面ケズリ。狭端面ケズリ。	2.5Y8/4　淡黄 やや緻密　赤褐・白細粒微量、灰褐礫～細粒少量 やや硬質	南部床面直上 破片 No.11
22 瓦 平瓦	長　残 19.7 幅　残 16.8 厚　2.0 重　残838.8	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子目叩き。側面ケズリ。	2.5Y8/4　淡黄 緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	中央部床面上８㎝と南部９㎝が接合 破片 No.6・12
23 瓦 平瓦	長　残 8.0 幅　残 5.8 厚　2.0 重　残154.2	凹面布目痕、縦方向に布を縫いあわせた部分が突線状に残る。側縁・広端縁ケズリ。凸面ナデ。側面ケズリ。広端縁ケズリ。粘土板の合わせ目で剝離する、剝離面には粘土板切り離し時の横方向（端面と平行）の糸切り痕あり。	7.5YR5/8　明褐 緻密　白細粒微量、灰褐粗粒微量 硬質	中央部床面直上 破片 No.5

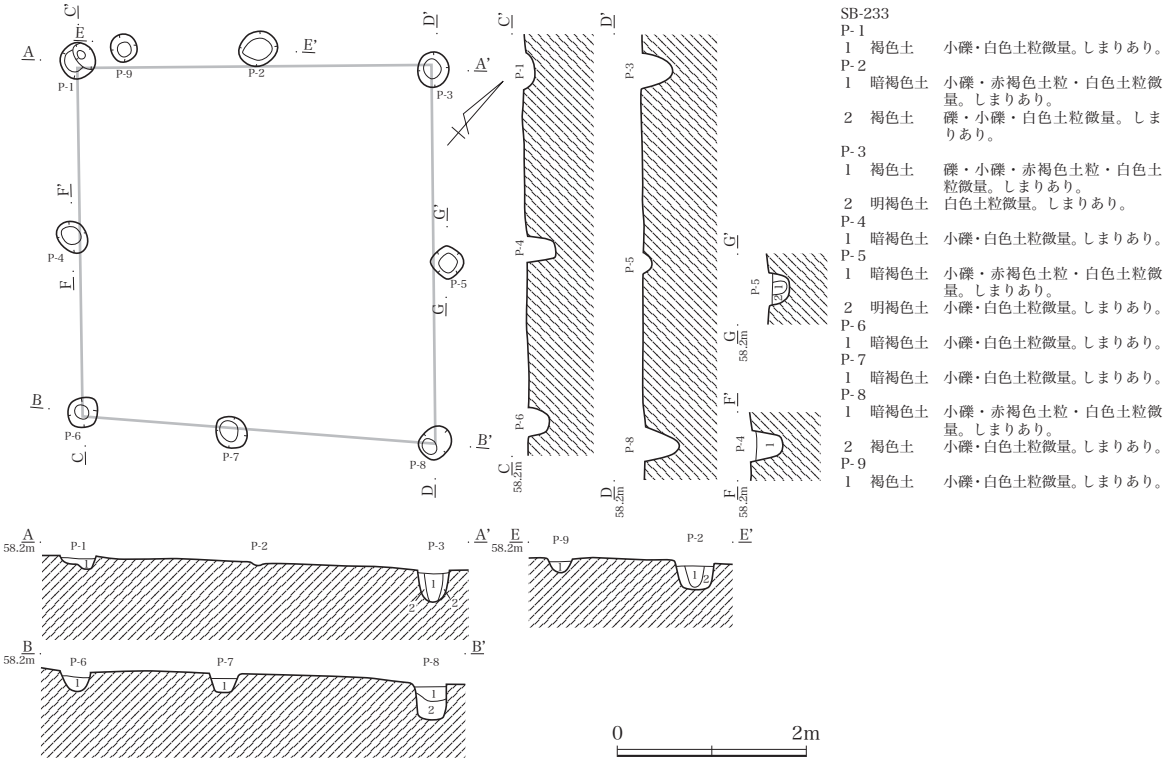
24 瓦 平瓦	長　残 4.4 幅　残 4.0 厚　1.9 重　残 67.3	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ。側面ケズリ。	2.5Y8/4　淡黄 緻密　赤褐・白細粒微量、砂礫微量 やや軟質	覆土 破片
25 瓦 平瓦	長　残 7.7 幅　残 12.8 厚　2.0 重　残414.5	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子目叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。	7.5Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、砂礫微量 やや硬質	中央部床面上 11 ㎝と 18 ㎝が接合 破片 No.8・9
26 瓦 平瓦	長　残 9.8 幅　残 8.3 厚　1.9 重　残285.3	凹面布目痕、側縁･広端縁ケズリ。凸面格子目叩き。側面ケズリ。	7.5Y6/1　灰 緻密　白礫～細粒微量、灰褐細粒微量 硬質	南部床面直上 破片 No.13
27 瓦 平瓦	長　残 8.4 幅　残 7.1 厚　1.5 重　残215.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子目叩き。側面ケズリ。	10Y7/1　灰白 緻密　赤褐細粒微量、白礫～細粒微量 やや硬質	北部床面上 7 ㎝ 破片 No.1
28 瓦 平瓦	長　残 9.5 幅　残 8.3 厚　2.3 重　残129.0	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子目叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。粘土板を貼り合わせた部分で剝離する。貼り合わせ面は平坦であり、糸切り痕などの痕跡は残っていない。	10Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、灰褐細粒少量 やや軟質	カマド前面床面直上 破片 No.3
29 瓦 平瓦	長　残 4.0 幅　残 6.3 厚　1.8 重　残 61.8	凹面布目痕。凸面格子目叩き。	7.5YR8/8　黄橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 破片
30 瓦 丸瓦	長　残 5.2 幅　残 8.7 厚　1.8 重　残178.6	凹面布目痕。凸面ナデ後一部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　赤褐礫～細粒微量、白細粒微量 硬質	南壁際床面直上 破片 No.10

正立の状態であった。瓦も住居跡内各所から出土しており、平瓦では凸面格子目叩き主体で、縄叩きもある。縄叩きの平瓦は凹面に模骨痕を持つ。縁辺の調整はほとんどに認められるが、凹面のナデ調整はごくわずかである。国分寺編年では、Ⅰ－１～Ⅰ－２期前半に相当しようか。平瓦は、胎土の特徴などから８枚ないしそれより少ない枚数と推定する。図化しなかった遺物は土師器坏片 43 点（570 ｇ）、甕片 153 点（870 ｇ）、須恵器蓋片６点（60 ｇ）、坏片 34 点（380 ｇ）、甕片６点（240 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考える。なお、屋根材とみられる住居跡内出土炭化材 11 点（ａ～ｋ）については樹種同定を実施し、ａ・ｂはカヤ、ｃ～ｊはヌルデ、ｋはイネ科と判明した。うち大型の材ｅ・ｆ・ｇは放射性炭素年代測定を実施したが、３点とも弥生時代に相当する結果が出ており、出土遺物からみた年代とは相容れない。

２. 掘立柱建物跡

ＳＢ－２３３（第 204 図、図版三二）

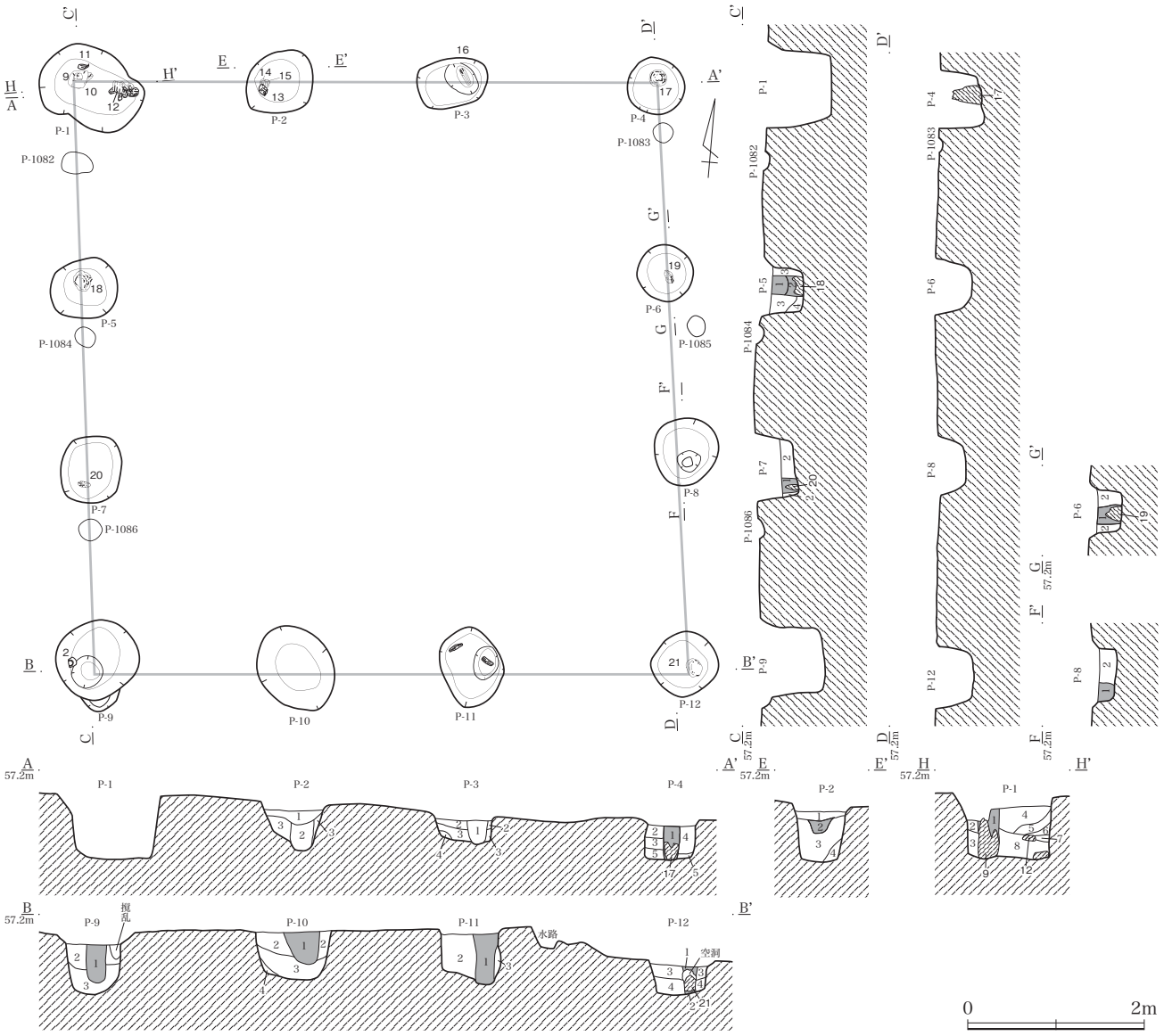
位置　Ⅵ区調査区の北部、Ｏ－ 18･19 グリッドに位置する。北 1.2m に P-304、西４m に SK-299、東 3.5m に SK-620 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　桁行２間（3.77 ～ 4.05m ）、梁間２間（3.70 ～ 3.98 m）の側柱建物で、南東－北西方向の中軸線はＮ－ 41 ° －Ｗである。柱穴は８本に加え P- １・P- ２間に P- ９があるため、計９本となる。配置はほぼ方形で、各辺の中央に位置する P- ２・４・５はやや外側に張り出す。柱間は桁行 1.87 ～ 2.15 m、梁間 1.59 ～ 2.12 mである。P-1 は 37 × 37cm、深さ 15cm、P-2 は 42 × 37cm、深さ 30cm、P-3 は 37 × 33cm、深さ 34cm、P-4 は 37 × 30cm、深さ 34cm、P-5 は 32 × 31cm、深さ 24cm、P-6 は 31 × 30cm、深さ 23cm、P-7 は 34 × 31cm、深さ 20cm、P-8 は 36 × 30cm、深さ 37cm、P-9 は 30 × 26cm、深さ 17cm である。土層から柱痕が確認できるのは P- ２・３・５で、深さは P- ３・８が深く、西隅にある P- １・９はやや浅い。　遺物　図化した遺物はないが、P-5 より武蔵型甕片２点 (20 ｇ) が出土する。台付甕の可能性がある。本遺構の時期は８世紀中葉から９世紀代と考えられる。



第 204 図　和田遺跡　SB-233 実測図

ＳＢ－２３５（第 205 ～ 207・310 ～ 312 図、第 97 表、図版三二・三三・六四・～六六）

位置　Ⅵ区北東部の台地平坦面、Ｐ－ 13・14、Ｑ－ 13・14 グリッドに位置する。南西 1 m に SK-536 が近接し、西 2.5m に SK- 695・698、北西 2.5m に SX-232、南東 2.5m に P-108・109 が隣接してある。　重複　なし。建物の範囲内に P-1082 ～ 1086 があるが、新旧関係は不明である。耕作により東側ほど深く撹乱されているため､西辺柱穴の方が残存状態が良い。　形状･規模　桁行３間（6.66 ～ 6.84m)､梁間３間（6.60 ～ 6.78 m）の側柱建物で、南北方向の中軸線はＮ－ 5 ° －Ｗである。柱材は抜き取られていないとみられ、各柱穴では柱に相当する土層が覆土上層平面（第 206 図）と断面とで確認できているうえ、P- １・２・４・５・



SB-235

P- 1
1　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。しまりややあり。
2　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
3　灰褐色土　灰褐色粘土多量。しまりややあり。
4　灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　明褐色土　ローム粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
6　灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
7　明褐色土　ローム粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
8　明灰褐色土　灰色粘土粒多量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりややあり。

P- 2
1　暗褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　灰色粘土多量。しまりややあり。
4　明灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりややあり。

P- 3
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　ローム粒少量。しまりややあり。

P- 4
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

P- 5
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　灰色粘土粒主体。しまりややあり。
3　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

P- 6
1　暗灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

P- 7
1　暗灰褐色土　灰色粘土粒主体。しまりややあり。
2　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

P- 8
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　礫多量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

P- 9
1　明褐色土　ローム粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　粘土粒多量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。

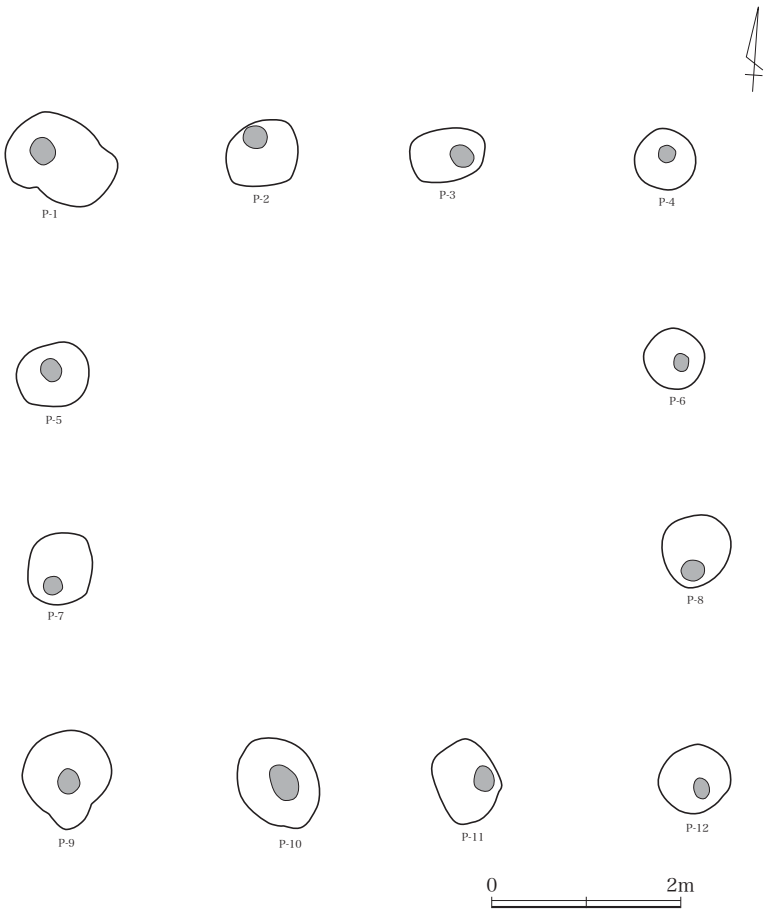
P-10
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　礫・小礫微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土粒多量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　ローム粒多量。しまりややあり。

P-11
1　灰褐色土　灰褐色粘土主体。小礫微量。しまりややあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。小礫微量。しまりややあり。

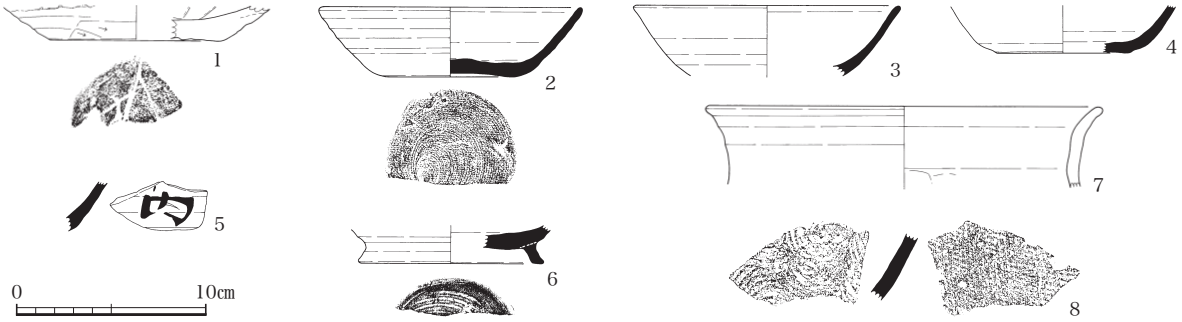
P-12
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　灰色粘土粒主体。しまりややあり。
3　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　灰褐色土　灰色粘土粒多量。しまりあり。

第 205 図　和田遺跡　SB-235 実測図（1）

６・７・12 では柱材が残存する。柱材の上面は標高 56.6m 前後であり、この高さまで常時浸水する状況だったことがわかる。柱材下の礎板とみられる木片は、P- 1 と柱材が残存しない P- 3・11 で確認されている。柱穴の配置は方形を呈するが、各辺は直交しないためやや菱形に近い形状となる。柱穴は 12 本で、柱間は桁行 2.18 ～ 2.33 m、梁間 2.18 ～ 2.32 mである。P-1 は 120 × 86cm、深さ 74cm、P-2 は 74 × 70cm、深さ 63cm、P-3 は 80 × 55cm、深さ 35cm、P-4 は 65 × 65cm、深さ 50cm、P-5 は 76 × 68cm、深さ 48cm、P-6 は 65 × 63cm、深さ 42cm、P-7 は 75 × 69cm、深さ 48cm、P-8 は 80 × 72cm、深さ 28cm、P-9 は 103 × 93cm、 深さ 72cm、P-10 は 105 × 84cm、深さ 55cm、P-11 は 81 × 69cm、



第 206 図　和田遺跡　SB-235 実測図（２）



第 207 図　和田遺跡　SB-235 出土遺物実測図

第 97 表　和田遺跡　SB-235 出土遺物観察表

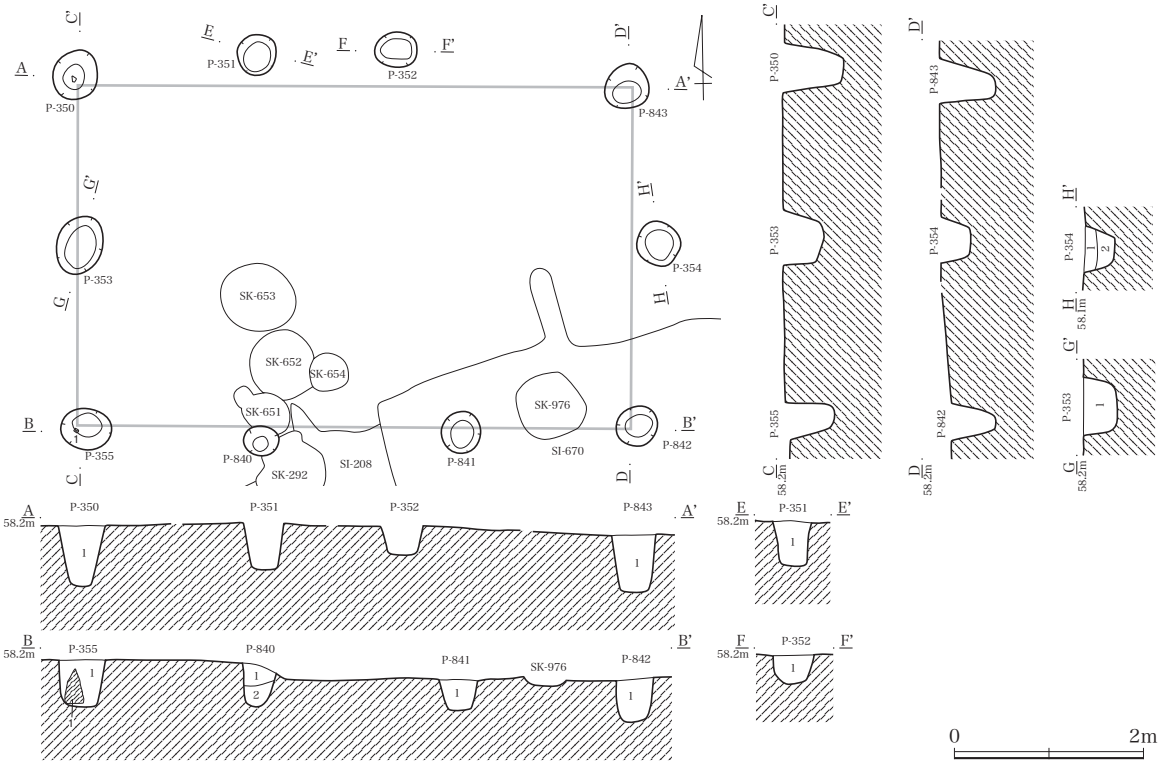
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.8 底　復 9.0	内面体～底部ナデ、ヘラ状工具痕あり。外面体部下端ケズリで紐積痕あり。底部木葉痕。	5Y8/3　灰白 緻密　赤褐礫～細粒多量、白細粒少量 やや硬質	P-6 体下位～底 1/6 P-6
2 須恵器 坏	口　復 13.9 高　3.7 底　6.7	内面口縁～底部ロクロナデ、底部のロクロ目強く残る。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。上げ底。	N5/0　灰 緻密　白細粒多量、灰黒粗粒微量 硬質	P-9 内、底面上 46 ㎝、逆位 口～底 1/2 P-9No.1・P-9

3 須恵器 坏	口　復 14.1 高　残 3.7	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。白色胎土。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰礫少量、白粗粒微量 やや軟質	P-9 口～体 1/6 P-9
4 須恵器 坏	高　残 2.5 底　復 7.0	内外面とも表面磨滅が著しい。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しの可能性あるが磨滅のため不明瞭。底部わずかに突出する。	7.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや軟質	P-3 体下位 1/8 ～底 1/4 P-3
5 須恵器 坏	高　残 2.5	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、墨書あり「内」か。白色胎土。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰・白微粒少量 やや軟質	P-3 体破片 P-3
6 須恵器 高台付坏	高　残 2.0 高台　9.8	内外面とも表面磨滅が著しい。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。白色胎土。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰微粒少量、白細粒少量 やや硬質	P-9 底 1/4 ～高台 1/8 P-9
7 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ。武蔵型。	7.5YR4/3　褐 やや緻密　白細粒少量、白粗粒微量 硬質	P-7 口破片 P-7
8 須恵器 甕	高　残 3.3	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	10YR3/3　暗褐 やや粗い　白礫～微粒多量 硬質	P-3、柱痕 胴破片 P-3・柱痕
9 木製品 柱材	高　残 47.5 径　24.1 × 21.1	芯持丸木。側面を多角形状に加工している。底面は平坦で砂が食い込む。底面に加工痕あり。分析試料 No. 4。	クリ	P-1、10・11 の 上、正立 柱下部 P-1・No.1
10 木製品 礎板	高　25.9 幅　10.0 厚　4.0	完形。表面の加工は明瞭で裏面は平坦。図下端には、柱材底面のような砂付着あり。柱をみかん割りにし礎板として再利用したものだろう。分析試料 No.34。	クリ	P-1、9 の 下、 底 面 直上、横位 完形 P-1 No.6
11 木製品 礎板	高　13.3 幅　7.2 厚　3.0	完形。表面に明瞭な加工痕あり。裏面は平坦で加工痕は確認できない。図の下端には、柱材底面で見られるような砂付着一部にあり。柱材を分割再利用したと考えられる。分析試料 No.24。	クリ	P-1、9 の 下、 底 面 直上、横位 完形 P-1 No.5
12 木製品 不明	高　11.7 幅　11.1 厚　4.7	完形。加工痕は不明瞭で一部樹皮が残る。柱材を分割して礎板に使用した可能性あり。分析試料 No.30。	モミ属	P-1 内、9 の 柱 材 の 束部、底面上 20cm 完形 P-1 No.2
13 木製品 不明	高　9.3 幅　10.4 厚　3.6	完形。柱材の分割・転用とみられ、図下端には柱材としての底面で加工痕残る。表側に明瞭な加工痕あり、表側の一部に砂が食い込む。裏面は平坦。礎板として使用していたと考えられる。分析試料 No.32。	クリ	P-2 No.2・3 の 上、柱痕から外れる。 完形 P-2 No.1
14 木製品 不明	高　16.3 幅　9.4 厚　3.8	完形。柱材を転用。表面に明瞭な加工痕あり。裏面は平坦で加工痕は確認できない。図に下端が柱材として使用時の底面に当たり、一部に砂付着。柱材を分割したものと考えられ、礎板の可能性が高い。分析試料 No.29。	クリ	P-2 No. 1 の 下、 柱痕から外れる。 完形 P-2 No.2
15 木製品 不明	高　8.8 幅　7.0 厚　5.1	木片。みかん割材。平坦な面に砂付着。柱材を転用した礎板の可能性あり。分析試料 No.28。	クリ	P-2　No.2 の 下、 柱痕から外れる。 完形 P-2 No.3
16 木製品 不明	高　24.6 幅　8.9 厚　2.5	完形。加工痕は不明瞭。礎板の可能性あり。分析試料 No.31。	クリ	P-3、底面直上、横位 完形 P-3
17 木製品 柱材	高　残 31.0 径　19.7 × 19.3	芯持丸木。側面を多角形状に加工。底面は平坦で砂が食い込む。底面に加工痕あり。分析試料 No. 5。	クリ	P-4、底面直上 柱下部 P-4
18 木製品 柱材	高　残 16.5 径　残 21.5 × 7.4	底面には平坦面あり、一部砂が食い込む。分析試料 No.11。	クリ	P-5、底面直上 柱下部 P-5

19 木製品 柱材	高　残 23.4 径　残 19.5 × 10.4	遺存状態不良。半割材か。分析試料 No.19。	クリ	P-6、底面直上 柱下部 P-6
20 木製品 柱材	高　14.1 幅　16.0 厚　4.5	遺存状態不良。加工痕不明瞭。分析試料 No.33。	クリ	P-7、底面直上 柱下部 P-7
21 木製品 柱材	高　残 24.9 径　20.1 × 14.4	芯持丸木か？側面は多角形状に加工。底面は平坦で砂が食い込む。加工痕は不明瞭。分析試料 No.17。	クリ	P-12、底面上 3cm 柱下部 P-12

深さ 65cm、P-12 は 78 × 74cm、深さ 40cm である。形状は楕円形や隅丸方形もあるが、円形が多い。平面的な規模は北西隅の P- 1 が最も大きく、P- 1 を含む四隅の柱穴（P-1・４・９・12）が深く掘り込まれる。

遺物　P- 1・2・4・5・6・7・12 で柱材が残存する。柱材下の礎板とみられる木片は P- 1 で２点（10・11）出土する。P-11 では柱穴底面付近から２点出土していて、うち１点が礎板とみられるが、取り上げられなかった。12 ～ 16 の５点も礎板の可能性が考えられる。P- 1 では掘方内部で木片が出土しており、底面付近で数点、底面上 20cm 付近では 12 が確認されている。P- 8・９・10 では木片は出土しない。出土した材の樹種は、P- 1 出土 12 がモミ属である他はいずれもクリ材であった。水に強いクリ材が選択的に使用されたのだろう。なお、P- 1 の柱材９については放射性炭素年代測定を実施し、688 ～ 771cal.AD. との結果が出



SB-951
P-350
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫微量。しまりややあり。
P-351
1　暗褐色土　小礫微量。しまりあり。
P-352
1　暗褐色土　白色土粒微量。しまりなし。
P-353
1　暗褐色土　小礫多量。砂質。しまりややあり。
P-354
1　黒褐色土　焼土粒少量、ローム粒・炭化物粒微量。砂質。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土粒微量。しまりややあり。
P-355
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
P-840
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　礫・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
P-841
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
P-842
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
P-843
1　暗褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 208 図　和田遺跡　SB-951 実測図

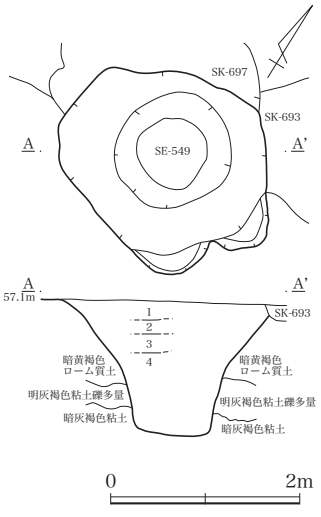
第 98 表　和田遺跡　SB-951 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 柱材	高　残 35.9 径　20.2 × 16.3	芯持丸木。側面を多角形状に加工している。底面は平坦で加工痕わずかに残る。分析試料 No. 7。	モミ属	P-350、底面直上 柱下部 P-350

ている。土器類は比較的多く、P-1 と P-11 を除く全ての柱穴から出土する。土師器は武蔵型甕と白色ないし明褐色の半球状の坏主体、須恵器は坏主体に甕、高台付坏などがある。図化しなかった遺物は、土師器は坏片 27 点（250 ｇ）と甕片 119 点（770 ｇ）、須恵器は坏片 9 点（120 ｇ）と甕片 2 点（20 ｇ）である。本遺構の年代は 8 世紀後葉頃と考えられる。P- 1 柱材の年代測定結果はそれよりやや古い値だが、これは柱材の再利用などのためとも考えられようか。

ＳＢ－９５１（第 208 図、第 98 表、図版三三・六六）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17・18、Ｌ－ 17・18 グリッドに位置する。北東に SK-363 が近接し、東 2.5m に SI-215 が隣接してある。　重複　P-841・842 が SI-670 を切る。P-840 が SI-208 を切り、遺構確認の状況などから SK-292・651 に切られるとみられる。本遺構範囲内には SK-652・653・654 があるが、これらとの新旧関係は確認できない。ただ、形態や覆土などは SK-651 などと類似しているため、本遺構はこれらの土坑より古い可能性が高い。SK-976 との新旧関係は不明である。　形状・規模　東西棟であり、桁行３間（5.84 ～ 4.14m ）、梁間２間（3.54 ～ 4.14 m）の側柱建物である。中軸線はＮ－ 89 °－Ｗである。柱穴は 10 本（P-350・351・352・353・354・355・840・841・842・843）で配置は長方形となるが、P-351・352・354・840 は列からやや外側に外れた位置にある。柱間は桁行 1.50 ～ 2.47 m、梁間 1.65 ～ 1.94 m である。Ｐ -350 は 54 × 49cm、深さ 64m、Ｐ -351 は 43 × 41cm、深さ 50cm、Ｐ -352 は 44 × 37cm、深さ 32cm、Ｐ -353 は 64 × 47cm、深さ 36cm、Ｐ -354 は 46 × 44cm、深さ 32cm、Ｐ -355 は 53 × 44cm、深さ 50cm で、Ｐ -840 は 35 × 32cm、深さ 45cm、Ｐ -841 は 42 × 40cm、深さ 33cm、Ｐ -842 は 45 × 41cm、深さ 45cm、Ｐ -843 は 48 × 45cm、深さ 61cm である。東西両辺中央の P-352･353 のほか、北辺中の P-354 は掘り込みが浅い。P-350 では底面直上から柱材 1 点が出土する。樹種はモミ属である。 遺物　遺物はP-350の柱材 1 点のみで、底面直上から出土する。放射性炭素年代測定では、668 ～ 766cal.AD. との結果が出ている。測定結果をそのまま遺構の年代とはしがたいが、古代の遺構であることは確実と言っていいだろう。



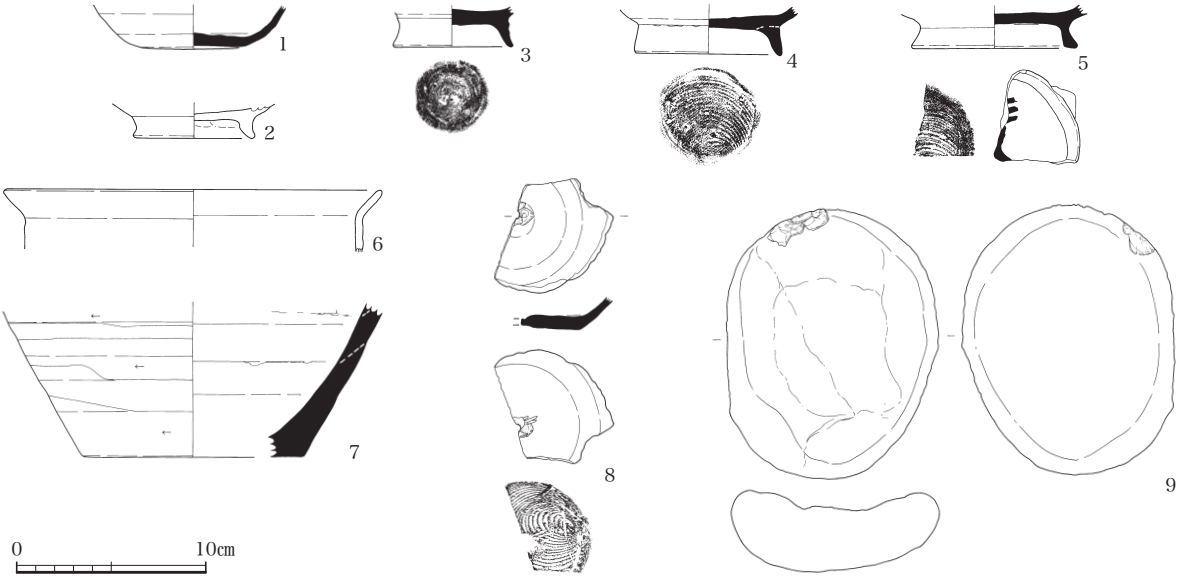
SE-549
1　暗褐色土　ローム粒多量、小礫少量、赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　暗黒褐色土　褐色砂質土ブロック・青灰色砂質土ブロック少量、ローム粒微量。砂質。しまりあり。
3　黒褐色土　青灰色砂質土ブロック少量。砂質。しまりなし。
4　暗黒褐色土　粘質土。

第 209 図　和田遺跡　SE-549　実測図

３. 井戸

ＳＥ－５４９（第 209・210 図、第 99 表、図版三三・五七・六一）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 13・14 グリッドに位置する。西に SK-690・599・845 が近接し、北西 1 m に P-548B が隣接してある。重複　北東部が SK-693 に切られる。北西部は SK-697 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は確認面では不整円形



第 210 図　和田遺跡　SE-549 出土遺物実測図

第 99 表　和田遺跡　SE-549 出土遺物観察表

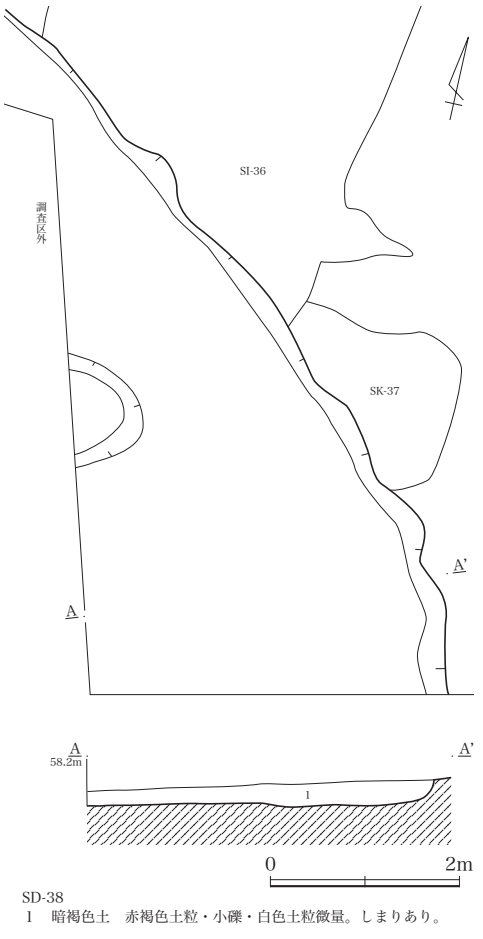
番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	高　残 2.3 底　残 5.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。内外表面磨滅が著しい。酸化焔焼成。	7.5YR8/6　黄橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量、砂礫微量 軟質	覆土 体下半 1/2、底完存
2 土師器 高台付坏	高　残 1.8 高台　6.4	内外表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面底部ナデ、内面黒色処理の可能性あり。外面底部回転ヘラ切り離しの可能性あり。高台はほぼ垂直で下端外反する。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	覆土 体下半 1/4、高台ほぼ完存
3 須恵器 高台付坏	高　残 2.1 高台　残 6.4	内面底部ロクロナデ。外面底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は「ハ」の字状に外反し、やや高め。	N7/0　灰白 緻密　青灰細粒微量、白細粒少量 硬質	覆土 底完存、高台 4/5
4 須恵器 高台付坏	高　残 2.6 高台　残 7.8	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。白色胎土。	10Y8/1　灰白 緻密　青灰・白細粒微量 やや軟質	覆土 体下半一部、底完存、高台ほぼ完存
5 須恵器 高台付坏	高　残 2.2 高台　復 8.8	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面方形で「ハ」の字状に開く。底部に墨書あり。	7.5Y6/1　灰 緻密　白細粒微量、灰黒粗粒微量 硬質	覆土 底 1/4、高台 1/4
6 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 3.0	内面口縁ナデ。外面口縁ヨコナデ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒微量、赤褐粗～細粒微量、金雲母粗粒微量 硬質	覆土 口一部
7 須恵器 甕	高　残 8.2 底　復 11.8	内面胴部ロクロナデで紐積痕あり。外面胴部ロクロナデ後回転ケズリ、底部ケズリ。	N6/0　灰 緻密　白礫～細粒微量、青灰細粒微量 硬質	覆土 胴下半 1/4、底 1/5
8 須恵器 紡錘車 未製品	高　残 1.7 孔　0.5	須恵器坏を紡錘車に転用しようとしたもの。穿孔途中で欠損したものだろう。素材となる坏は内面体部～底部ロクロナデ、外面体部ロクロナデで底部は直径 7.0 ㎝、糸切り離し後無調整。底部中央に穿孔しており、表裏面とも孔の周囲には穿孔の伴う剥離がある。穿孔は裏面からのみの片面穿孔か。表側には貫通しなかった穿孔の痕跡もある。外周は円形になっていないため全体の成形は穿孔後に行うものだったと推測。	N7/0　灰白 緻密　青灰・白細粒微量 硬質	覆土 1/3
9 石 礫	長　14.3 幅　11.2 厚　3.4 重　1070.7	平面楕円形。断面楕円形。表面中央部が凹み、上端が一部剝離する。裏面は加工の痕跡なし。上端の剝離は意図的な敲打の可能性あるが、これ以外に研磨痕などの使用痕跡は認められず。	7.5GY8/1　明緑灰 やや緻密 安山岩	覆土 完存

だが、中段以下は円形となる。規模は長径 2.47m、短径 1.93m、深さ 1.42m、中段での径は 1.25m である。底面はほぼ平坦で垂直気味に立ち上がり、中段で傾斜を緩やかに変え、外傾したまま確認面に至る。底面は礫を多く含む明灰褐色粘土層を掘り抜き、暗灰褐色を呈する粘土層に達している。　**覆土の状態**　図化前に土層が崩落したため一部しか図示できないが、調査時にはレンズ状に堆積する土層の様子を確認できている。覆土は４層であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は少ないが、須恵器坏・高台付坏が多い。土師器は武蔵型甕のほか、武蔵型甕と似た胎土の非ロクロ坏、ロクロ成形の高台付坏などがある。紡錘車未製品８は須恵器坏の底部を加工したもの、５の高台付坏は底部に墨書があるが判読できない。図化しなかった遺物は土師器坏片が４点（30 ｇ）、甕片８点（60 ｇ）、須恵器は坏片２点 (20 ｇ)、甕片３点（140 ｇ）である。本遺構の年代は９世紀後葉から 10 世紀初頭と考えられる。

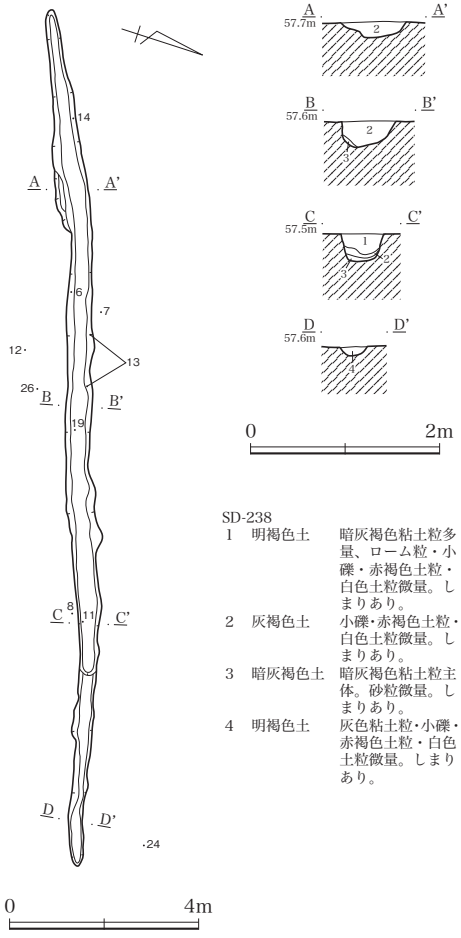
４. 溝

ＳＤ－３８（第 211 図、図版六・三三）

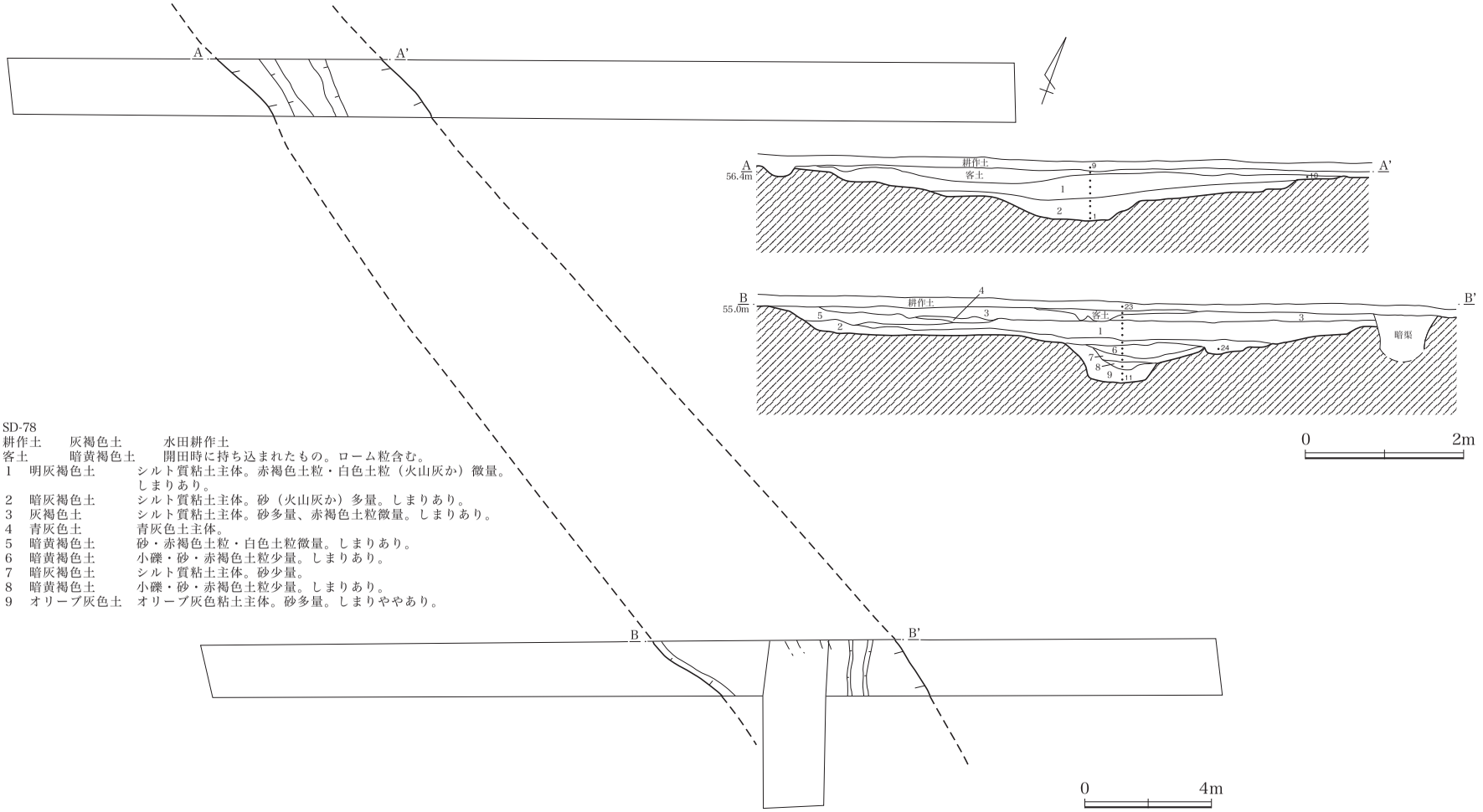
位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｉ－ 19・20、Ｊ－ 19・20 グリッドに位置する。東２ｍに SI-43、SK-41 が隣接してある。　**重複**　北東部で SI-36 を切り、SK-37 に切られる。南側は調査区外となる。北側はⅦ区調査区となるが、遺構確認面が低かったためⅦ区の範囲内では掘り込みを確認できなかった。　**形状・規模**　西に向いた弧状の溝の一部を調査したもので、西側の立ち上がりが確認できないため溝の幅は不明である。調査した部分の長さは 8.20m、幅 3.80m 分で、深さは 0.25m である。底面は広く平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。なお土層断面には示していないが、第１層上に本遺構と SI-36 を覆う灰



第 211 図　和田遺跡　SD-38 実測図



第 212 図　和田遺跡　SD-238 実測図



SD-78
耕作土　灰褐色土　水田耕作土
客土　暗黄褐色土　開田時に持ち込まれたもの。ローム粒含む。
1　明灰褐色土　シルト質粘土主体。赤褐色土粒・白色土粒（火山灰か）微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　シルト質粘土主体。砂（火山灰か）多量。しまりあり。
3　灰褐色土　シルト質粘土主体。砂多量、赤褐色土粒微量。しまりあり。
4　青灰色土　青灰色土主体。
5　暗黄褐色土　砂・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
6　暗黄褐色土　小礫・砂・赤褐色土粒少量。しまりあり。
7　暗灰褐色土　シルト質粘土主体。砂少量。
8　暗黄褐色土　小礫・砂・赤褐色土粒少量。しまりあり。
9　オリーブ灰色土　オリーブ灰色粘土主体。砂多量。しまりややあり。

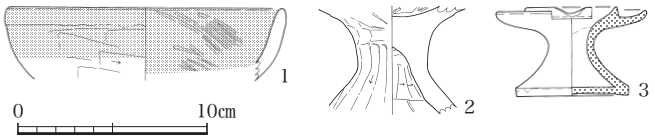
第 213 図　和田遺跡　SD-78 実測図

褐色土があり、そこに天仁元年（1108 年）噴出の浅間Ｂ軽石が含まれることが判明している。　**遺物**　出土遺物はない。重複関係から、10 世紀前葉とする SI-36 より新しく 10 世紀前半と考える SK-37 より古いため、10 世紀前半頃の溝としておく。

ＳＤ－７８（第 213・214 図、第 100 表、図版三三）

位置　Ⅴ区南東部の台地平坦面、Ｍ－３・４、Ｎ－５・６グリッドに位置する。Ｃトレンチで確認されたところから西約 20m に SK-86、南西約 20m に SK-80 があるほかは、近接する遺構はない。　**重複**　なし。Ⅴ区東部に設定したトレンチ３本のうち、南端のＢトレンチと中央のＣトレンチで確認されたものである。

形状・規模　北西－南東方向に延びる直線的な溝とみられ、中軸線はＮ－ 55°－Ｗである。断面形は下半が逆台形状で底面は平坦であり、壁は直線的に立ち上がる部分と途中で屈曲して緩傾斜になるところがある。溝上半は浅い皿状となっていて、東西両側へと緩やかに広がる。長さは確認部分で 25.40m、底面の幅は 6.80 ～ 6.92m、逆台形状となる部分の幅は 0.90 ～ 1.11m、溝の最大幅は 6.8 ～ 9.6m、深さは下半のみで 0.33 ～ 0.56m、上半を含めると 0.72 ～ 1.09m である。なお、南のＢトレンチでは覆土中位に細い逆台形状の溝が確認できるため、少なくとも２時期の流路があったと想定できる。覆土中位にある溝は長さ 1.70m、幅 0.70m、深さ 0.10m で、中軸線はＮ－ 15°－Ｗである。　**覆土の状態**　覆土は９層である。下層ほど砂や粘土を多く含む層が互層をなして堆積しており、流水があったと考えられる。覆土上半の第２･第３層には、火山灰かともみられる白色土粒が多く含まれる。　**遺物**　遺物はごくわずかで、図化以外には土師器坏片５点（38 ｇ）、甕片１点（42 ｇ）のみである。脚付灯明受皿３は混入であろう。出土遺物が少なく本遺構の年代は決めにくいが、およそ７世紀前半頃の年代が想定できよう。なお覆土の火山灰分析では、６世紀中葉の Hr-FP 降灰以降で天仁元年（1108 年）の As-B 降灰以前と推定されている。



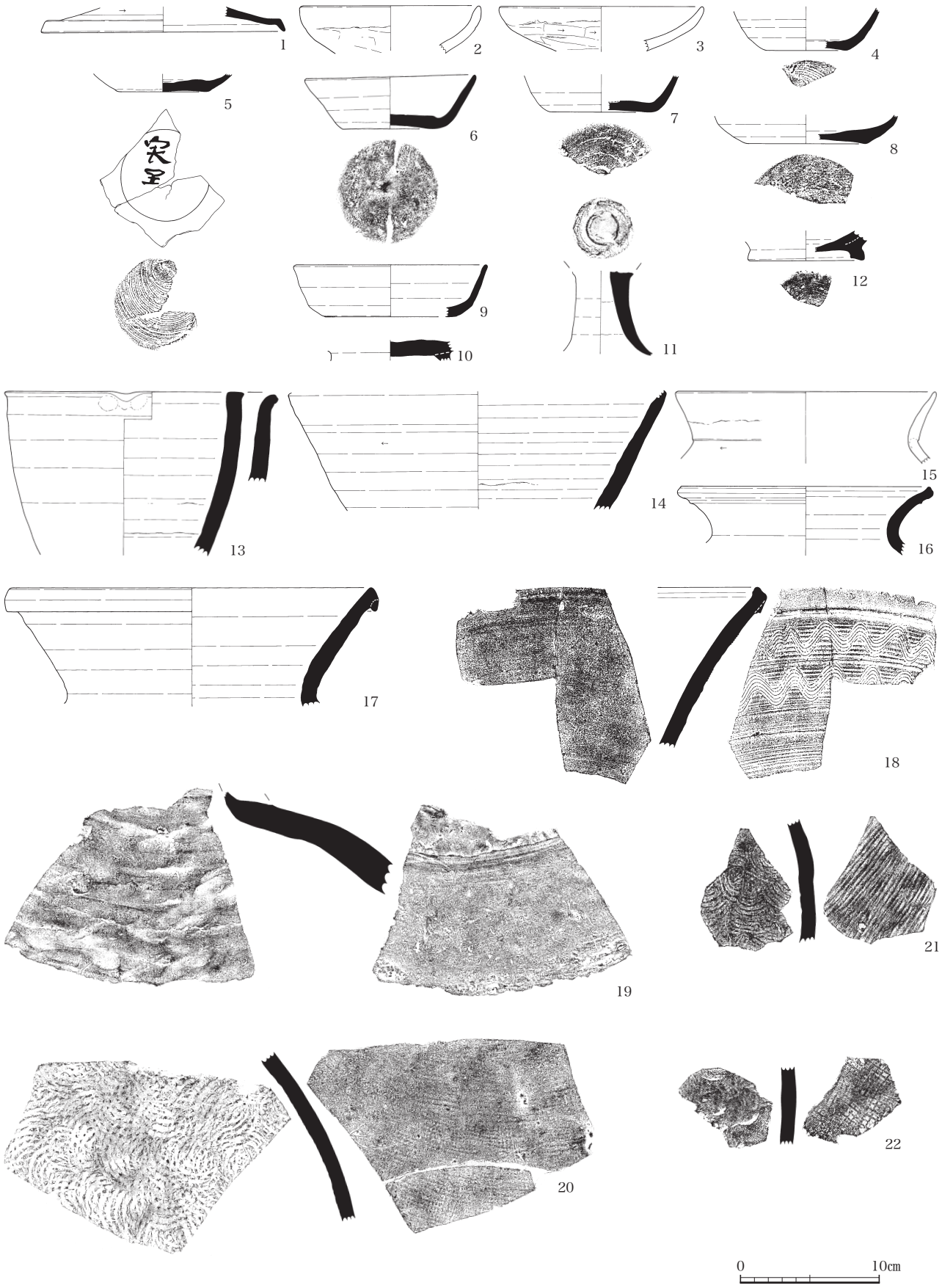
第 214 図　和田遺跡　SD-78 出土遺物実測図

第 100 表　和田遺跡　SD-78 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm･ｇ）	特　　徴	色調 胎土･焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.9 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ後斜方向の粗いミガキ、内面全体漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、口縁～体部漆仕上げ。	10YR5/2　灰黄褐 緻密　白微粒少量、黒褐粗粒少量 硬質	Ｂトレ内 口～体 1/6 Ｂトレ内
2 土師器 高坏	高　残 5.7	内面坏底部ナデ後粗いミガキ、ヘラ状工具痕あり。脚部上半粗いケズリ、中位ケズリ。外面坏体部下半ケズリ、脚部縦方向ケズリ後上端ナデ。脚部上半径 3.7 ㎝。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　白細粒少量、青灰細粒多量 硬質	Ｃトレ内 坏底～脚部上半完存 Ｃトレ内
3 陶器 脚付灯明 受皿	口　8.0 高　4.7 脚　5.9 重　75.9	ロクロ成形。内面ロクロナデ。外面ロクロナデ､底部回転ケズリ。外面（底部を除く）全面、内面上部透明釉施釉。皿部外周のほとんどが欠損する。皿部内側の円形の高まりには半円形の切り込みが入る。混入。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 ほぼ完形、口辺欠け SD-78 or 758

ＳＤ－２３８（第 212・215・216 図、第 101 表、図版三三・三四・五七）

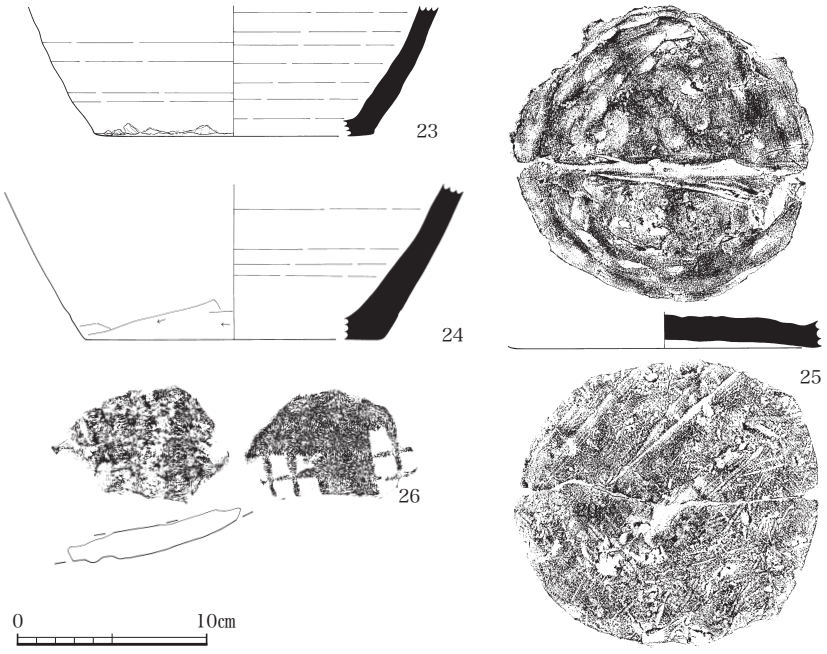
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16・17・18 グリッドに位置する。南 1.3m に P-376、南２m に SK-385、P-802 が隣接してある。　**重複**　なし。本遺構の東延長線上には SD-242 があることから、SD-242 と同一遺構の可能性も考えられよう。　**形状・規模**　東西方向に延びる直線的な溝であり、南に向かってわずかに湾曲する。中軸線はＮ－ 71°－Ｅである。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して



第 215 図　和田遺跡　SD-238 出土遺物実測図（１）

直線的に立ち上がる。東西両端は浅く、中央付近が深く掘り込まれている。長さは 18m、溝の最大幅は 0.28m ～ 0.72m、底面の幅は 0.10m ～ 0.24m、深さは 0.09 ～ 0.29m である。

覆土の状態　覆土は 4 層である。各層とも緻密でレンズ状に堆積しているため、自然堆積と考えられる。　**遺物**　主に中央の深くなった部分から遺物が出土する。遺構外から出土するものもあるが、本遺構に関連する可能性が高いとみられるためここで掲載する。須恵器甕主体に遺物は多く、須恵器では坏、高台付坏、高坏、瓶、鉢が、土師器では坏と甕がある。土師器坏は半球状ばかりで、胎土白色で器壁の厚いものが多く、薄いものがわずかにある。甕は武蔵型である。遺物は溝の全域から出土し、溝内部からは須恵器坏 6、高坏 11、鉢 13・14、甕 19 が、周辺からは須恵器坏 7 ・ 8、瓶類 12、甕 24、平瓦 26 が出土する。



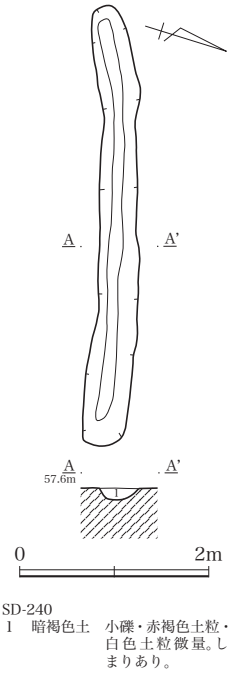
第 216 図　和田遺跡　SD-238 出土遺物実測図（2）

第 101 表　和田遺跡　SD-238 出土遺物観察表

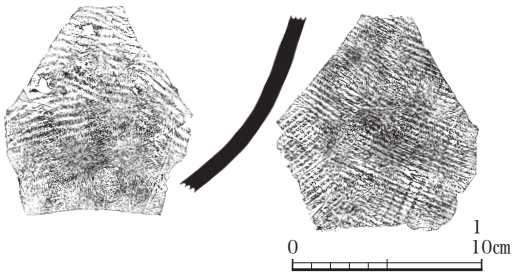
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 17.6 高　残 1.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N7/0　灰白 緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.4	内外表面剝離が著しい。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。紐積痕あり。	5Y7/3　浅黄 やや緻密　黒褐細粒多量、白細粒少量 やや軟質	覆土 口～体一部
3 土師器 坏	口　復 14.7 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒褐粗～細粒少量、白細粒少量 やや軟質	覆土 口～体一部
4 須恵器 坏	高　残 3.1 底　復 5.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。断面内部は赤褐色を呈する。	7.5GY5/1　緑灰 やや緻密　白細粒少量、黒褐粗粒少量 硬質	覆土 体～底一部
5 須恵器 坏	高　残 1.3 底　　6.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部墨書あり「完足」あるいは「究足」か？外面体部には、底部切り離しに使用した糸が触れ多数の条線が付く。	N7/0　灰白 緻密　白細粒多量、灰黒粗粒微量 やや硬質	覆土 体一部、底 5/6
6 須恵器 坏	口　12.4 高　3.9 底　7.0	内外表面磨滅著しい。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後手持ちケズリ。内面体部下端は溝状に深くくぼむ。	7.5Y8/1　灰白 やや緻密　黒褐細粒多量、粗砂粒微量 軟質	中央部南壁際、底面上 7 ㎝、逆位 口～体 3/4、底完存 No.10
7 須恵器 坏	高　残 2.7 底　復 7.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後軽いナデ。器表面は灰白色を呈するが、断面内部は焼成不良のため赤褐色となる。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐細粒多量、白粗～細粒少量 やや軟質	中央部遺構外北側、確認面上 3 ㎝ 体～底一部 No.9

8 須恵器 坏	高　残 2.1 底　復 8.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ､底部回転ケズリ、切り離し方法不明。内外全面黒褐色を呈する。	7.5Y4/1　灰 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや軟質	東部遺構外南側、確認面直上 体～底 1/4 No.14
9 須恵器 坏	口　復 14.0 高　残 3.7 底　復 9.4	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ、切り離し方法不明。	N5/0　灰白 緻密　灰黒細粒少量 硬質	覆土 口～底一部
10 須恵器 高台付坏	高　残 1.4	内面底部ロクロナデ。外面底部表面磨滅のため切り離し方法不明。高台は低く断面三角形。高台基部径 8.5 ㎝。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰粗～細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 底～高台 1/3
11 須恵器 高坏	高　残 5.9	内面脚部ロクロナデ。外面脚部上半ナデで紐積痕あり、下半ロクロナデ。坏部との接合部分に同心円状の凹凸あり。坏部との接合を強くするためか。脚部上端径 3.8 ㎝。	5Y8/1　灰白 緻密　灰黒細粒多量 やや軟質	東部南壁際、底面上 12 ㎝ 脚上半～中位ほぼ全周 No.13
12 須恵器 瓶類	高　残 2.1 高台　復 8.5	内面体～底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け、外面に自然釉付着。高台は断面方形でほぼ垂直に下がり、外周が接地する。高台下部に一部粘土塊付着。	N6/0　灰 緻密　灰黒細粒少量 硬質	中央部遺構外南側、確認面上 2 ㎝ 体～高台一部 No.7
13 須恵器 鉢	口　17.2 高　11.8	内面口縁～体部ロクロナデで紐積痕あり。外面口縁～体部ロクロナデ。片口がつく。片口の両側に指頭圧痕あり。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量、灰黒細粒少量 硬質	中央部北壁際、底面上 18 ㎝と 26 ㎝が接合 口～体 3/4 No.4・8、P-17
14 須恵器 鉢	高　残 8.5	内面口縁～体部ロクロナデで紐積痕あり。外面口縁ロクロナデ、体部ロクロナデ後回転ケズリ。残存最大径は 27.2 ㎝。	5Y7/1　灰白 緻密　赤褐細粒多量 硬質	西部北壁際、底面直上 口～体一部 No.11
15 土師器 甕	口　復 18.8 高　残 5.2	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端は横方向のケズリでケズリにより段となる。武蔵型。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐細粒少量、白細粒多量 硬質	覆土 口～胴上端一部
16 須恵器 甕	口　復 18.4 高　残 4.9	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデで一条の突線あり。	N6/0　灰 緻密　白細粒少量、灰黒粗粒少量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 口一部
17 須恵器 甕	口　復 27.0 高　残 8.5	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。口唇部は外向きの面となり、下端は垂下する。	10Y5/1　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 口一部
18 須恵器 甕	高　残 11.5	内面口縁～頸部ロクロナデ。外面口縁、口唇部肥厚、カキ目後 5 条一単位の櫛描波状文を 2 段。	N4/0　灰 緻密　白・灰黒細粒多量 硬質	覆土 口一部
19 須恵器 甕	高　残 7.2	内面口縁下端ロクロナデ、胴部ナデ、紐積痕を明瞭に残す。外面胴部上端ロクロナデ、胴部ナデ後軽い平行叩き。上端は口縁部との接合面で剥離している。	7.5Y5/1　灰 緻密　白細粒少量 硬質	中央部やや南寄り底面上 20 ㎝ 口下端～胴上位一部 No.2
20 須恵器 甕	高　残 12.2	内面同心円当具痕。外面胴部平行叩き。自然釉付着。	7.5Y4/3　暗オリーブ 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 胴一部
21 須恵器 甕	高　残 8.9	内面同心円当具痕。外面胴部平行叩き。上半に自然釉わずかに付着。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰黒細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部
22 須恵器 甕	高　残 5.5	内面円形当具痕。外面胴部平行叩き。	10Y6/2　オリーブ灰 緻密　白細粒少量 硬質	暗渠付近 胴一部 アンキョフキン
23 須恵器 甕	高　残 6.8 底　復 14.8	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、下端自然釉付着、底部ナデで外周は粘土がめくれ、棒状工具のような圧痕が多く確認できる。	N6/0　灰 緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量、白礫少量 硬質	覆土 胴～底一部
24 須恵器 甕	高　残 8.2 底　復 15.8	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ナデ後下端ケズリ、底部ケズリ。	5Y5/1　灰 緻密　白細粒多量、灰黒細粒少量 硬質	東端遺構外北側、確認面上 3cm 胴～底一部 No.17

25 須恵器 甕	高　残 1.7	内面底部ナデで指頭圧痕あり。中央には最低４本の線刻が確認できるが線刻と同方向のナデにより一部が消される。外面底部ナデ後一方向の粗いケズリ、ミガキのような細いナデがわずかにあり、方向はケズリとほぼ同じ。平底でわずかに上げ底。	N6/0　灰 緻密　灰黒・白細粒少量 硬質	覆土 底完存
26 瓦 平瓦	長　残 9.3 幅　残 9.0 厚　1.5 重　94.4 高　残 3.1	凹面布目痕、模骨痕あり。凸面格子叩き。	10YR8/3　浅黄橙 やや粗い　灰黒細粒多量、白細粒少量、赤褐礫少量 やや硬質	中央部遺構外南側、確認面上５㎝ 破片 No.6



第 217 図　和田遺跡　SD-240 実測図



第 218 図　和田遺跡　SD-240 出土遺物実測図

須恵器坏は底部切り離しがヘラ切り（６・７）と糸切り（４・５）がある。４・５は混入した遺物の可能性があろう。底面直上より出土した遺物は、須恵器鉢 14 のみである。図化しなかった遺物は、土師器坏片 30 点（640g）、甕片 61 点（500 ｇ）、須恵器坏片 21 点（240 ｇ）、甕片 10 点（900 ｇ）である。中近世の遺物も出土するが、多くは暗渠からの混入である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＤ－２４０（第 217・218 図、第 102 表、図版三四）

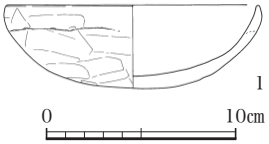
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16・17、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。北東に SK-397a・398b が近接し、東 1.3m に SI-214 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　東西方向に延びる短く直線的な溝であり、中軸線はＮ－ 72°－Ｅである。断面形は皿状で底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。長さは 4.65m、溝の最大幅は 0.33m ～ 0.50m、底面の幅は 0.09m ～ 0.15m、深さは 0.06 ～ 0.12m である。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。　遺物　遺物はごくわずかで、須恵器甕１点のみ図化した（１）。これ以外には、武蔵型の土師器甕片 14 点（70g）と、須恵器甕片１点（40g）があるのみである。本遺構の年代は決めにくいが、須恵器が伴うと考えれば８～９世紀代とできようか。

第 102 表　和田遺跡　SD-240 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 9.6	内面平行文当具痕。外面胴部平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白・灰黒細粒多量 硬質	覆土 胴一部

５. 土師器焼成遺構

土師器焼成遺構は４基確認している。出土遺物は本項目中にあるが、遺構図については次項である土坑中に掲載している。



第 219 図　和田遺跡
SK-643b 出土遺物実測図

ＳＫ－６４３ｂ（第 219・242 図、第 103 表、図版三四）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。東に SI-212、北東 1.3m に SK-644、南東 1.5m に SK-645 が隣接してある。　**重複**　P-643a に切られる。土層では確認できていないが、調査時の状況などから SK-835 を切り、SI-210 に切られる可能性が高いと考える。　**形状・規模**

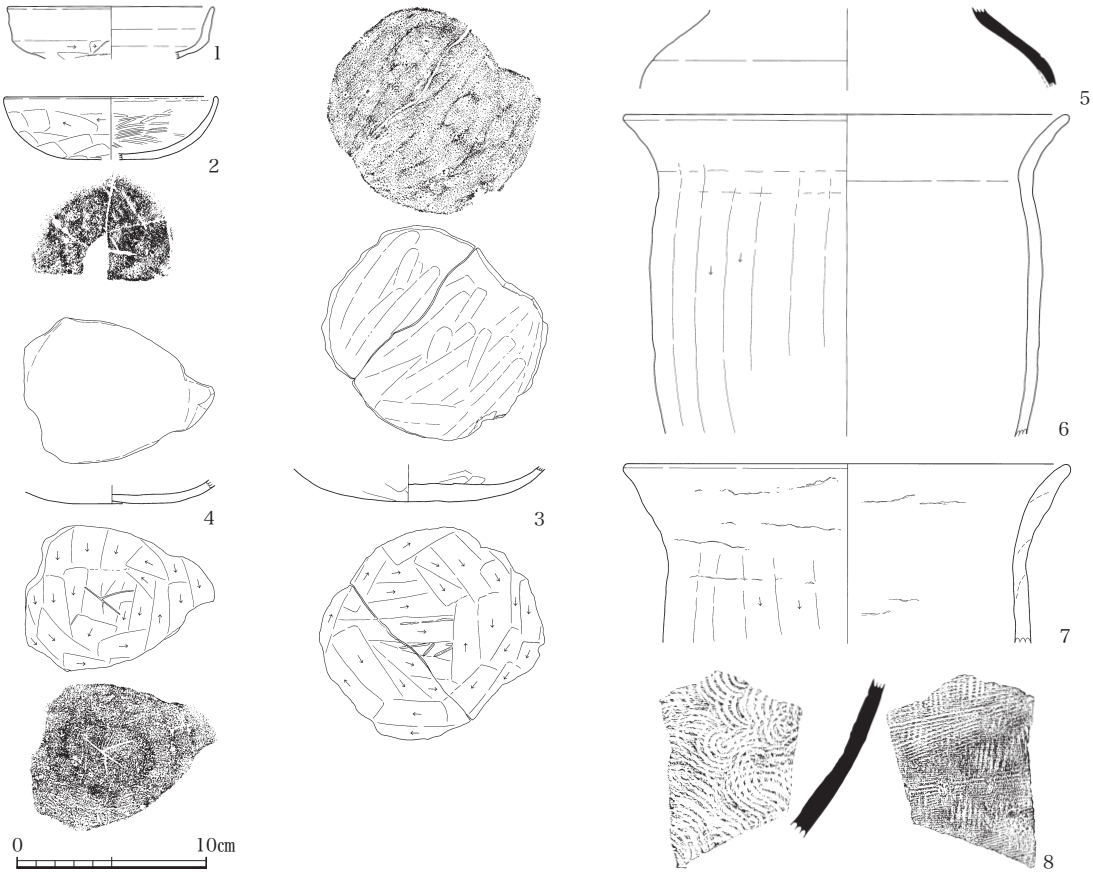
第 103 表　和田遺跡　SK-643b 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.6 高　4.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。ケズリは粗くヘラ状工具のあたりが強く残る。体部には無調整部分あり。丸底。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗～細粒多量、白粗粒多量 やや硬質	北部底面上 4 cm 口～体 1/4、底完存 No.1

SK-738 に類似する遺構と見られる。平面形は楕円形で、西端に煙道とみられる突出部が取り付く。中軸線はＮ－ 63°－Ｅ、規模は長径 2.35m、短径 1.16m、深さ 0.23m である。底面は緩やかな凹凸があり、西端が最も低い。壁は外傾しているが、煙道から離れた東側ほどなだらかな立ち上がりとなっている。西端の煙道は壁を 33cm「Ｕ」字状に掘り込んでおり、幅は 23cm である。土坑最深部である底面から先端へは小さな段を持ちながら外傾して立ち上がるが、両側面は垂直気味である。煙道付近の被熱痕跡は明瞭で、特に北側側面では硬化赤変が顕著である。　**覆土の状態**　覆土は５層で、底面付近に堆積する第３・第５層は多量の炭化物を含む。第２層は焼土ブロックからなる土層であり、天井部があったとすればその内面部分が崩落したものと推測できる。第３～第５層は天井崩落前の堆積土、第１層は天井部の可能性があろう。　**遺物**　出土遺物は土坑内北壁際で出土した土師器坏１点のみである。本遺構の年代はおよそ８世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－７３８（第 220・227 図、第 104 表、図版三四・三五・四五・五七）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｉ－ 32 グリッドに位置する。南西に SK-864 が近接し、北東２m に SK-946 と SI-737、南東２m に SI-736 が隣接する。　**重複**　SD-865a・SK-866 を切り、SK-739 に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、北端に煙道が取り付く。南西－北東方向の中軸線はＮ－ 26°－Ｗ、規模は長径 4.22m、短径 2.32m、深さ 0.15m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。底面中央にはピット状の掘り込みが２ヶ所確認されている。規模は北側が径 0.45 × 0.32m、深さ 0.33m、南側が径 0.32 × 0.27m、深さ 0.12m である。遺構北端の煙道は壁を 40cm「Ｕ」字状に掘り込んでおり、橋梁状に地山を掘り残した天井部が良好に残存する。煙道の幅は土坑側で 63cm あり、先端のピット状となる部分は径 30cm である。底面は天井部がある付近で土坑底面から約４cm 高くなったあと平坦面となり、先端は丸みを持って垂直気味に立ち上がる。先端の深さは 22cm である。煙道付近の被熱痕跡は顕著で、天井部下面から側面にかけて硬化赤変している。底面や先端部では被熱の痕跡はない。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。煙道部は焼土や炭化物を多く含む。先端のピット状部分では土器片数点が積み重ねられたように出土しており、人為的に土器片を重ねて置き、煙道を埋め戻したものともみられる。覆土中の炭化物については放射性炭素年代測定を実施し、576～ 632cal.AD. との結果が出ている。　**遺物**　遺物は土師器甕主体に一定量あるが、本遺構に確実に伴うものは少ない。遺物中には、成形途中の失敗品とみられるものがある。３・４の土師器坏は破損後焼成された底部片であり、成形途中で割れてそのまま焼成されたのだろう。４は土坑中央部の底面上 11cm、３は煙道部の底面上４cm からの出土である。厚手で紐積み痕が顕著な長胴甕７も、同様に失敗品の可能性がある。煙道部



第 220 図　和田遺跡　SK-738 出土遺物実測図

第 104 表　和田遺跡　SK-738 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 2.8	表面磨滅著しい。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　赤褐粗粒多量、白細粒多量 硬質	覆土 口～体 1/6
2 土師器 坏	口　復 11.3 高　残 3.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向のミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、底部中央木葉痕あり。口唇部内側がやや肥厚する。	10YR8/2　灰白 やや緻密　赤褐粗粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/2
3 土師器 坏	高　残 2.0 最大　残 13.3	内面底部やや強いナデで単位明瞭。外面体～底部ケズリで中央に木葉痕あり。製作途中の失敗品と考えられる。焼成はなされている。破片 2 点はうまく接合しない。2 分割後に焼成され、歪みを生じたためだろう。	2.5Y8/3　淡黄 やや粗い　青灰粗粒多量、赤褐・白粗粒少量 やや硬質	北部煙道底面上 4 ㎝と 5 ㎝が接合 底ほぼ完存 No.1・2
4 土師器 坏	高　残 1.3 最大　残 10.0	内面底部ナデ。外面体～底部ケズリで底部中央に木葉痕あり。製作途中の失敗品と考えられる。焼成はなされている。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白・青灰細粒多量、赤褐粗粒少量 硬質	中央部底面上 11 ㎝ 底完存 No.6
5 須恵器 壺	高　残 4.2	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰微粒少量、黒褐・白粗粒微量 やや軟質	覆土 肩破片
6 土師器 甕	口　復 23.6 高　残 17.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ。被熱のため外面は全体的に赤変する。胴部粘土付着。長胴。	7.5YR4/6　褐 粗い　白粗粒多量、青灰礫微量、金雲母粗粒微量、砂細粒多量 硬質	北部煙道 口～胴 1/4 K エンドウ
7 土師器 甕	口　復 23.6 高　残 9.5	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ、口縁・胴部とも紐積痕一部残る。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ、口縁～胴部上端紐積痕顕著。口縁部外面には紐積の凹凸も残る。未製品の可能性もあろうか。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白礫微量、白細粒少量、赤褐粗粒少量、赤褐礫微量 やや軟質	SK-739 と接合 口 1/3、胴上位 1/4 SI-738、SI-739

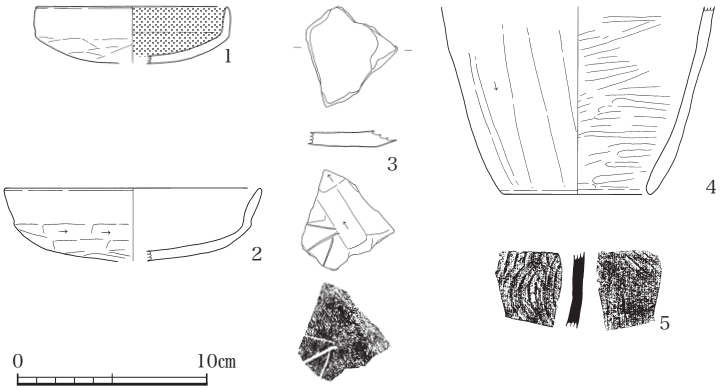
8 須恵器 甕	高　残 8.2	内面同心円当具痕。外面胴部平行叩き後カキ目。	N6/0　灰 緻密　白粗粒微量、青灰細粒少量 硬質	中央部底面上 7 ㎝ 胴破片 No.3

からは被熱した甕が多数出土しており、うち１点（６）を図化した。煙道部の構築材であろうか。図化しなかった遺物は、土師器坏片 29 点（250 ｇ）、甕片 220 点（2,200 ｇ）、須恵器片７点（90 ｇ）である。図化以外の土師器甕は、底部でみて４個体以上ある。遺物から見た本遺構の年代は７世紀中葉と考えられ、炭化物の放射性炭素年代測定結果と近い。

ＳＫ－７３９（第 221・227 図、第 105 表、図版三四・四五）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ⅰ－ 32・33 グリッドに位置する。東に SD-865a、南に SK-864 が近接し、西２m に SI-741、北東４m に SK-946 と SI-737、南東４m に SI-736 が隣接する。　**重複**　SK-738・866 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 74°－W、規模は長径 2.83m、短径 1.88m、深さ 0.38m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっているが直線的になる部分も認められる。北部中央の壁には、被熱により硬化赤変している部分がある。範囲は 0.40 × 0.15m で、この部分だけは壁面上半がオーバーハングする。SK-738 に近い形状だとすれば、この周辺が煙道となろう。

覆土の状態　覆土は緻密な２層であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**



第 221 図　和田遺跡　SK-739 出土遺物実測図

第 105 表　和田遺跡　SK-739 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.4 高　残 3.0	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデと見られる。内面全面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外表面の磨滅が著しく調整不明瞭。小型。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒・赤褐微粒少量、黒・赤褐細粒微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/4
2 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。漆仕上げの可能性あり。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　黒・白微粒少量、黒・白細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/3
3 土師器 坏	高　残 0.9	内面底部ナデ。外面底部ケズリ、中央に木葉痕。失敗品の可能性あり。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒微粒少量、黒・赤褐・白細粒少量 やや硬質	覆土 底破片
4 土師器 甑	高　残 9.9 底　復 7.8	内面胴部下半横方向の密なミガキ。外面胴部下半縦方向のケズリ、下端ナデ。無底式。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒少量、黒・赤褐細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	北部底面上 18 ㎝ 胴下半～底 1/6 No.1
5 須恵器 甕	高　残 4.0	内面同心円当具痕。外面胴部平行叩き。白色胎土。	5Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、白・灰粗粒微量 やや硬質	覆土 胴破片

遺物は土師器甕主体に、土師器坏、須恵器片がわずかにある。甕は球胴が多く、長胴は少ない。坏は半球状のほか、口縁部が直立ないし外傾するものである。須恵器は焼成不良な破片ばかりである。土器焼成に関わる遺物はほとんどないが、底部に木葉痕を有する土師器坏３は成形途中の失敗品の可能性がある。硬化赤変部分から土師器甑４が出ている他は、覆土中の出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片 39 点（230 ｇ）、甕片 156 点（1、840 ｇ）、須恵器片４点（20 ｇ）である。遺構の年代は７世紀中葉～後半と考えられる。

ＳＫ－８３５（第 242 図、図版三五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。東に SI-212 が近接し、北東１ｍに SK-644 、南東２ｍに SK-645 が隣接する。　**重複**　SI-210、SK-643b と重複する。土層では確認できていないが、調査時の状況などから SI-210 と SK-643b に切られる可能性が高いと考える。　**形状・規模**　SK-738 や重複する SK-643b に類似する遺構と見られる。平面形は楕円形で、西端に煙道とみられる小さな突出部が取り付き、東端は直線的となる。中軸線はＮ－ 82°－Ｅ、規模は長径 2.08m、短径 0.95m、深さ 0.20m である。底面は緩やかな凹凸があり、西端が最も低い。壁は外傾しているが、煙道から離れた東側ほどなだらかな立ち上がりとなっている。西端の煙道は壁を 7cm ほどわずかに「Ｕ」字状に掘り込んでおり、幅は 18cm である。土坑最深部である底面から先端へは緩やかに高くなったのち直線的に外傾して立ち上がる。煙道付近には被熱痕跡があるが、SI-210 などに切られるため硬化赤変が確認できる部分はわずかである。　**覆土の状態**　覆土は４層で、煙道側底面に堆積する第３層は多量の炭化物を含む。第２層は焼土を多く含む層であり、橋梁状の天井部があったとすれば、その内面部分が崩落したものと推定できる。第３・第４層は天井崩落前の堆積土で、第１層は天井部の土層を含んでいる可能性がある。　**遺物**　出土遺物はない。よって遺物から本遺構の年代を知ることはできないが、重複する SK-643b との類似性等から８世紀前葉と推定しておく。

６. 土坑

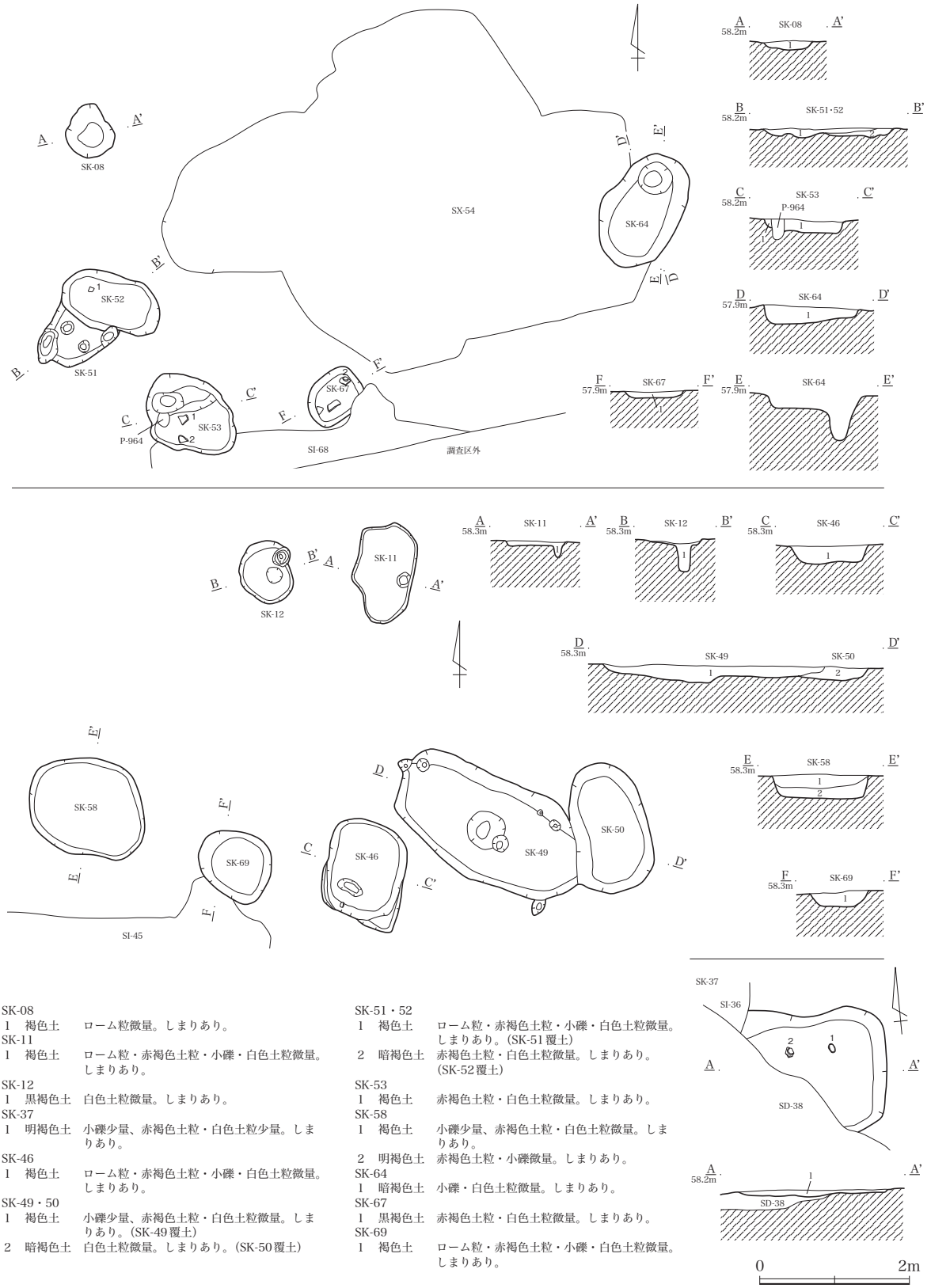
土坑は 310 基確認されており、そのうち古代と考えられるものは 143 基である。遺構図については、他時期および時期不明のものもあわせて掲載した。なお、土坑が集中するⅥ区については、34 枚の平面図に分割して掲載している。

ＳＫ－２７（第 223・264 図、第 106 表、図版三六）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｈ－ 26 グリッドに位置する。西に SK-26、南東に SI-31 が近接してある。　**重複**　遺構の半分以上が SI-25 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.10m、短径 0.96m、深さ 0.30m である。底面は緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦で、壁は外傾したのち垂直気味に角度を変えて立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は少なく、図化した遺物３点はいずれも土坑底面からやや浮いた位置で出土する。図化しなかった遺物は、土師器片のみで坏３点 (30g)、甕 14 点 (150g) である。本遺構の時期は 10 世紀中葉頃と考えられる。ただ、重複する SI-25 の遺物がまとまって混入した可能性も否定できない。

ＳＫ－３４（第 223・264 図、第 107 表）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。南に SK-24 が近接し、北 1.5m に SD- 4 がある。　**重複**　遺構全体が SI- 5 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、



SK-08
1　褐色土　　ローム粒微量。しまりあり。
SK-11
1　褐色土　　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-12
1　黒褐色土　白色土粒微量。しまりあり。
SK-37
1　明褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SK-46
1　褐色土　　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-49・50
1　褐色土　　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SK-49覆土)
2　暗褐色土　白色土粒微量。しまりあり。(SK-50覆土)
SK-51・52
1　褐色土　　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SK-51覆土)
2　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SK-52覆土)
SK-53
1　褐色土　　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-58
1　褐色土　　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　赤褐色土粒・小礫微量。しまりあり。
SK-64
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-67
1　黒褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-69
1　褐色土　　ローム粒・赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第222図　和田遺跡　SK-8・11・12・37・46・49～53・58・64・67・69実測図

規模は長径 0.81m、短径 0.51m、深さ 0.14m、中軸線はＮ－ 38°－Ｅである。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾する部分と垂直気味になる部分とがある。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　覆土中から破片がわずかに出土するが、SI- ５の遺物が混入している可能性ある。土師器坏１は、土坑中央部、底面上 7cm より出土した。図化しなかった遺物は土師器坏片３点 (10g) のみである。本遺構の時期は 10 世紀前葉頃とみられる。

ＳＫ－３７（第 222・264 図、第 108 表、図版三六・五七）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19・20 グリッドに位置する。北東に SK-41 が近接する。　**重複**　南西部で SD-38 を、北西部で SI-36 を切る。　**形状・規模**　平面形は東西方向にやや長い方形で、東西方向の中軸線はＮ－ 85°－Ｅ、規模は長径 2.04m、短径 1.66m、深さ 0.10m である。底面には細かな凹凸があり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土(第１層)であり、自然堆積と考えられる。

遺物　図化した遺物は２点あり、１は須恵器高台付坏で土坑の底面直上より、灰釉陶器の高台付埦２は覆土中より逆位で出土した。高台付椀は光ヶ丘１号窯式併行である。本遺構の年代は９世紀後葉とする。

ＳＫ－３９（第 224・264 図、第 109 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19・20 グリッドに位置する。西に SI-36、南に SK-41 が近接する。　**重複**　なし。Ⅵ区調査区内となる遺構北半は、遺構確認面が低かったため掘り込みを確認できなかった。このため、調査できたのは遺構全体のおよそ半分である。　**形状・規模**　全体を調査していないため不明だが、平面形は円形ないしは楕円形と推定される。規模は東西 2.23m、南北は調査部分で 1.30m、深さは 0.28m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した須恵器高台付坏１は土坑南部覆土中より逆位で出土した。他、図化していない須恵器甕片１点（18g）がある。本遺構の年代は、10 世紀前葉頃と考えられる。

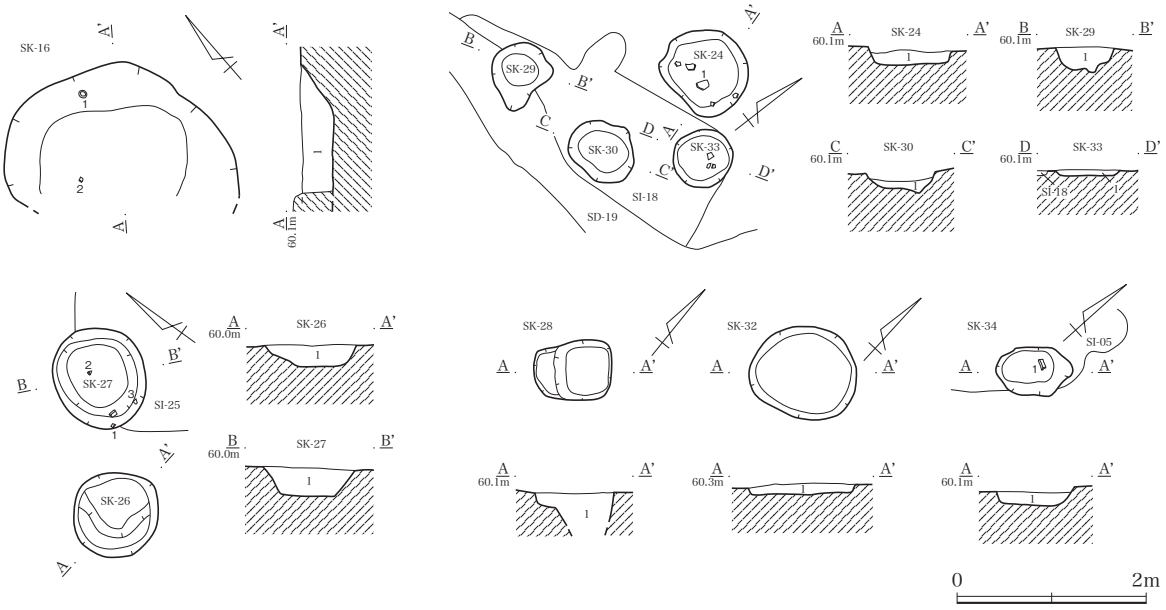
ＳＫ－４１（第 224・264 図、第 110 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19・20 グリッドに位置する。北に SK-39、西に SI-36、南西に SK-37 が近接し、南東に SI-43 が隣接してある。　**重複**　なし。遺構内には大小のピット状の掘り込み６本があるが、すべて本遺構に伴うかどうかは確認できていない。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｗ、規模は長径 2.21m、短径 2.02m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がっており、遺構内各所にはピット状の掘り込みが計６本ある。このうち南及び西の壁際にある小規模なもの３本は深さが確認できておらず、平面的な規模は南端のものから時計回りに長径 0.29m、短径 0.25m・長径 0.25m、短径 0.24m・長径 0.26m、短径 0.25m である。北東部にあるやや規模の大きなピット３本は、北西のものが長径 0.72m、短径 0.57m、底面からの深さ 0.90m、北東のものが長径 0.80m、短径 0.49m、底面からの深さ 0.57m、遺構中央のものが長径 0.90m、短径 0.65m、底面からの深さ 0.07m である。

覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　灰釉陶器の高台付椀１は土坑東部覆土中より出土する。光ヶ丘１号窯式と見られる。図化しなかった遺物は土師器片８点(68g)であるが、混入であろう。本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－４４（第 224・264 図、第 111 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。北に SI-42、南西に SI-43、南東に SI-45 が隣



SK-16
1　明褐色土　礫・小礫多量、ローム粒・赤褐色土粒・炭化物粒・白色土粒少量。しまりあり。
SK-24
1　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-26
1　明褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-27
1　褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-28
1　暗褐色土　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-29
1　明褐色土　褐色土粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。
SK-30
1　褐色土　赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SK-32
1　青灰色土　シルト質粘土主体。ローム粒・小礫微量。しまりあり。
SK-33
1　暗褐色土　赤褐色土粒・小礫少量。しまりあり。
SK-34
1　暗褐色土　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 223 図　和田遺跡　SK-16・24・26 ～ 30・32 ～ 34 実測図

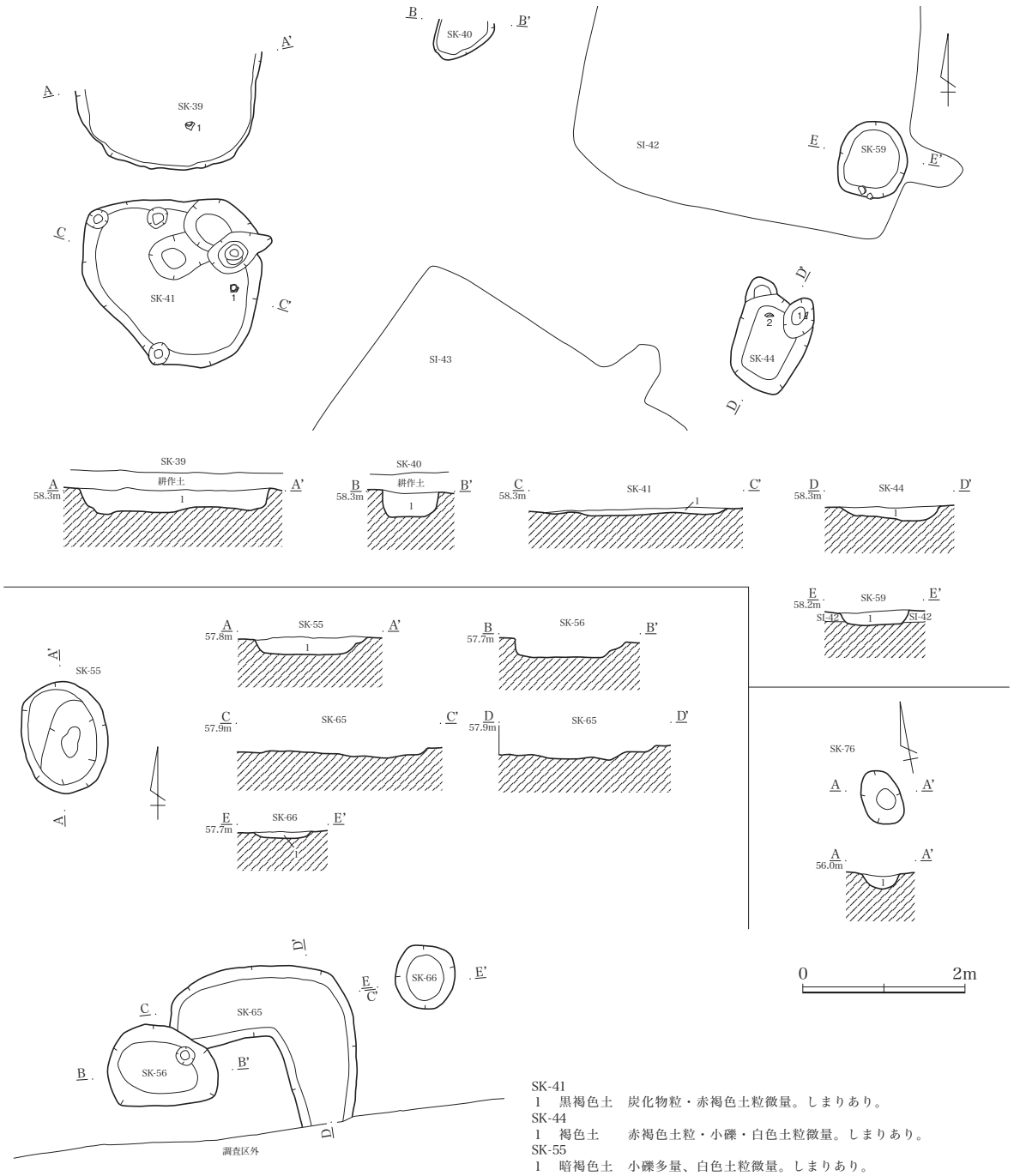
接してある。　**重複**　なし。北辺にピット状の掘り込み２本があるが、このうち西側の一本は本遺構に伴うかどうか不明である。　**形状・規模**　平面形は長方形で、中軸線はＮ－ 23°－Ｅ、規模は長径 1.14m、短径 0.89m、深さ 0.17m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっており、北辺にはピット状の掘り込み２本がある。北西のものが径 0.40m、確認面からの深さ 0.08m、北東のものが長径 0.53m、短径 0.38m、確認面からの深さ 0.22m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はわずかである。須恵器坏１は北東部のピット状の掘り込み内より、大形、厚手な土師器甕２は覆土中からの出土である。図化しなかった遺物は土師器片 12 点(51g)である。本遺構の時期は、甕を重視し 10 世紀代と考える。

ＳＫ－４６（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。西に SK-69、南西に SI-45、東に SK-49 が近接し、西 2.5m に SK-58 がある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は各辺がやや直線的になる楕円形で、南東部が三角形に突出する。中軸線はＮ－ 14°－Ｅ、規模は長径 1.30m、短径 1.05m、深さ 0.25m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっており、南部にはピット状の掘り込みがある。ピットの規模は長径 0.35m、短径 0.27m、深さ 0.15m である。　**覆土の状態**　覆土はローム粒を含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片 13 点（66g）、土師器甕片 47 点（300g）のみで、ロクロ成形の土師器坏や「コ」の字状口縁の武蔵型甕がある。遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－５０（第 222・264 図、第 112 表、図版三六・五七）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。東２m に SK-51・52 が隣接してある。　**重**



SK-39
1　黒褐色土　赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-40
1　黒色土　　赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-41
1　黒褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-44
1　褐色土　　赤褐色土粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-55
1　暗褐色土　小礫多量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-59
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-66
1　暗褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-76
1　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 224 図　和田遺跡　SK-39 ～ 41・44・55・56・59・65・66・76 実測図

複　南西部が SK-49 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 15°－Ｗ、規模は長径 1.74m、短径 1.00m、深さ 0.19m である。底面はやや丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は少なく、紡錘車１の他、土師器甕片３点（58 ｇ）、須恵器甕片１点（38 ｇ）、粘土塊１点（11 ｇ）である。土師器甕は長胴のみである。本遺構の年代は７～８世紀代と考えられる。

ＳＫ－５１（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。東に SX-54 が近接し、南東 1.5m に SK-53 がある。　重複　北東部で SK-52 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 33°－Ｅ、規模は確認できた部分で長径 0.87m、短径 0.64m、深さ 0.12m である。底面は凹凸があり、壁は外傾して緩やかに立ち上がる。遺構内にはピット状の掘り込みが４本あり、規模は北西ピットが 0.2 × 0.18m、底面からの深さ 0.23m、北東ピットが 0.30 × 0.17m、底面からの深さ 0.13m、南西ピットが 0.48 × 0.25m、底面からの深さ 0.20m、南東ピットが 0.17 × 0.15m、底面からの深さ 0.30m である。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　図化した遺物はない。遺物は土師器坏片 24 点（127g）、甕片 10 点（128 ｇ）あるが、SK-51・52 で取り上げられたため本遺構のみの遺物は特定できない。ロクロ成形の土師器坏など 10 世紀代とみられる遺物が多いため、本遺構の時期はそのあたりに推定しておく。

ＳＫ－５２（第 222・264 図、第 113 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。東に SX-54 が近接し、南 1.5m に SK-53 がある。　重複　遺構中央部分が SK-51 に切られる。掘り込みは SK-51 の方が浅いため、切られるのは覆土のみである。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 76°－Ｗ、規模は長径 1.35m、短径 0.78m、深さ 0.13m である。底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第２層）で、自然堆積と考えられる。　遺物　確実に伴う遺物は図化した土師器坏１のみである。SK-51・52 で取り上げられた遺物があるが、多くは本遺構のものだろう。本遺構の年代は 10 世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－５３（第 222・264 図、第 114 表、図版三六・五七）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。北 1.5m に SK-51・52 があり、東に 1.5m に SK-67 がある。　重複　西部が P-964 に切られる。南部で SI-68 と重複するが、新旧関係は不明である。遺構底面に段があること、不整な平面形などから、複数の土坑が重複したものとも考えられる。　形状・規模　平面形は不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 64°－Ｗ、規模は長径 1.32m、短径 1.00m、深さ 0.17m である。底面は南半が高く、北半が低くなっているほか、小さな凹凸もある。壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は図化した須恵器甕１と平瓦２の他は、土師器の坏片２点（20 ｇ）のみである。須恵器甕は内面がナデ後無文当具痕、外面は平行叩き後ケズリ調整が施される。本遺構の時期は限定しにくく、８～９世紀とする。

ＳＫ－５８（第 222・264 図、第 115 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。西１m に SI-42 が近接し、南に SI-45、南東に SK-46・69 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 81°－Ｗ、規模は長径 1.56m、短径 1.30m、深さ 0.32m である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は２層でともに緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物は少なく、図化以外には土師器坏片 17 点（202 ｇ）、甕片 55 点（702 ｇ）、須恵器片４点（91g）があり、８世紀前葉頃の遺物が混入する。本遺構の時期は９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６５（第 224・264 図、第 116 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 16 グリッドに位置する。東に SK-66 が隣接し、北西３m に SK-55 が

ある。　**重複**　西端部がSK-56と重複するが、新旧関係は不明である。南端は調査区外となる。　**形状・規模**　平面形は「Ｌ」字形をしており、長方形の土坑２基の重複のようにも見える。北側の東西に長い部分の中軸線はＮ－82°－Ｅ、幅0.88m、南北に長い部分の中軸線はＮ－6°－Ｗ、幅0.98mであり、全体の規模は東西2.17m、南北は調査した部分で1.93m、深さ0.12mである。底面には細かな凹凸があり、壁は短く外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　不明である。　**遺物**　図化した遺物は平瓦１点で、凸面に縄叩きが施され、内面に模骨痕が残る。図化しなかった遺物は土師器武蔵型甕片２点（20 ｇ）、外面平行叩きの須恵器甕片１点（61 ｇ）である。本遺構の時期は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－６６（第224図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－16グリッドに位置する。西にSK-65が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径0.78m、短径0.74m、深さ0.08mである。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器台付甕片１点（36 ｇ）と内面ナデ調整の須恵器甕片１点（16 ｇ）のみである。図化した遺物はない。遺本遺構の時期は８世紀代と推定する。

ＳＫ－６７（第222・265図、第117表）

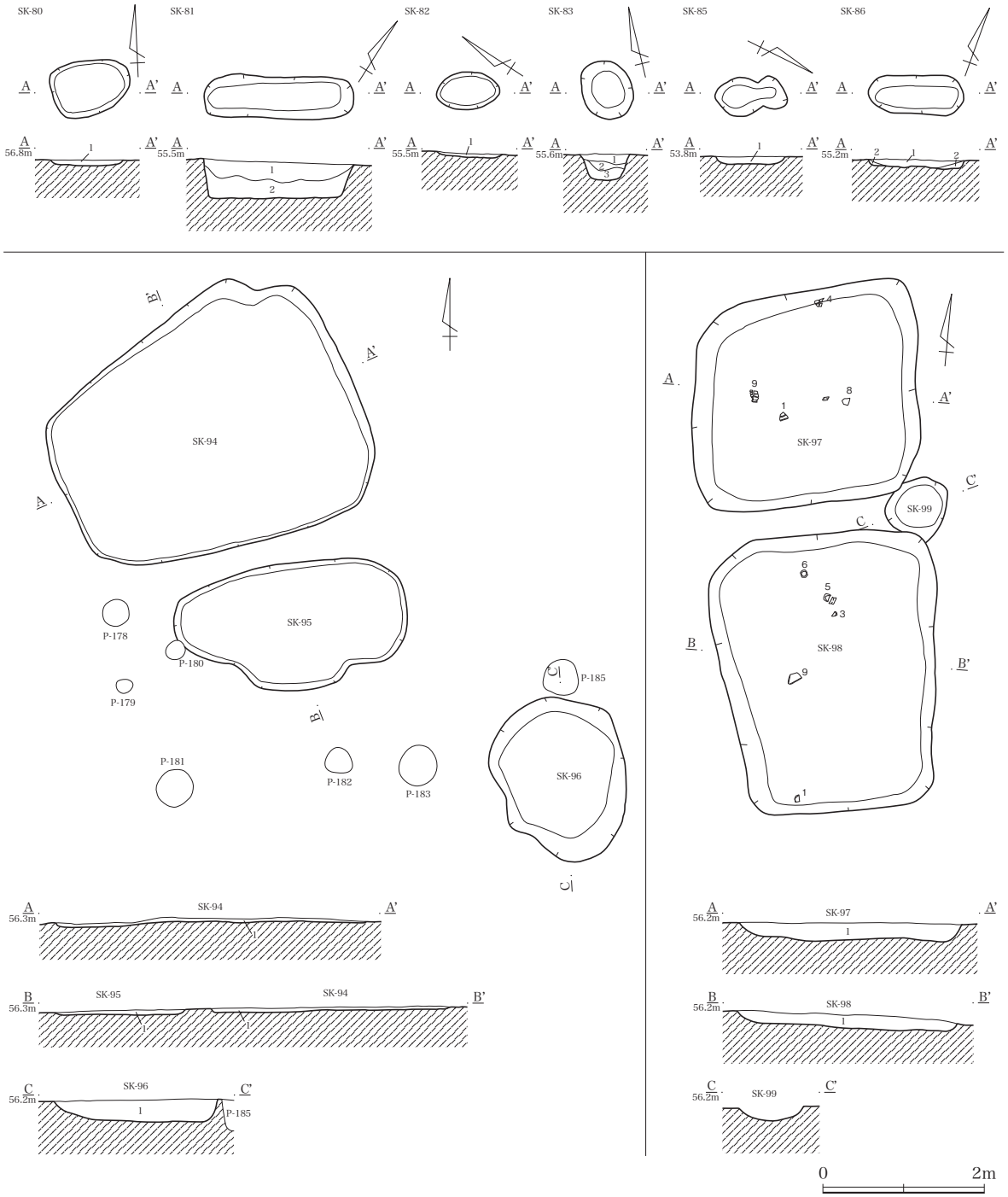
位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－17グリッドに位置する。北にSX-54が近接し、西にSK-53がある。　**重複**　東部がSI-68カマド部分と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－53°－Ｅ、規模は長径0.82m、短径0.64m、深さ0.08mである。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物は土師器坏１、高台付坏２である。２は底面直上から逆位で出土した。図化しなかった遺物は厚手の土師器甕片９点（322 ｇ）のみである。本遺構の年代は10世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－６９（第222図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－18グリッドに位置する。北西にSK-58、東にSK-46が隣接してある。　**重複**　SI-45のカマド部分を切る。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径1.00m、短径0.89m、深さ0.22mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はローム粒を含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物はない。出土遺物は球胴のような土師器甕片１点（30 ｇ）のみである。本遺構に伴うとすれば、古代の遺構となろう。

ＳＫ－９４（第225・265図、第118表、図版六一）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｌ－12、Ｍ－12グリッドに位置する。南にSK-95が近接し、北にはSI-91、SK-188がある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は不整な長方形で、中軸線はＮ－68°－Ｅ、規模は長径3.82m、短径2.97m、深さ0.05mである。底面には緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器、須恵器共に同量くらいある。土師器甕は武蔵型主体で、坏は内面黒色処理の高台付坏や武蔵型甕に類似する胎土の坏も出土する。図化した須恵器坏２点は底部回転糸切り離し後無調整で、底部に墨書がある。図化しなかった遺物は土師器片124点（642g）、須恵器片28点（388g）で、図化以外の須恵器坏は底部で８個体あり、底部切り離しは糸切り３点、ヘラ切り３点、不明２点である。遺物中には



SK-80
1　灰褐色土　　シルト質粘土主体。小礫・砂微量。しまりあり。
SK-81
1　灰褐色土　　シルト質粘土主体。砂少量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　シルト質粘土主体。しまりややあり。
SK-82
1　黒褐色土　　炭化物粒多量。しまりあり。
SK-83
1　灰褐色土　　シルト質粘土主体。小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄褐色土　　黄褐色粘土主体。しまりあり。
3　灰褐色土　　シルト質粘土主体。しまりややあり。
SK-85
1　褐色土　　シルト質粘土粒・炭化物粒・小礫多量。しまりあり。
SK-86
1　暗灰褐色土　シルト質粘土主体。砂微量。しまりなし。
2　明灰褐色土　シルト質粘土主体。しまりややあり。
SK-94
1　褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-95
1　褐色土　　小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-96
1　褐色土　　小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-97
1　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-98
1　暗褐色土　　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 225 図　和田遺跡　SK-80 ～ 83・85・86・94 ～ 99 実測図

７世紀末～８世紀初頭頃の須恵器片の混入もあるが、本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－９５（第 225・265 図、第 119 表）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 12 グリッドに位置する。北に SK-94 が近接し、西に P-178・179、南東 1.5m に SK-98 が隣接してある。　重複　西端がＰ－ 180 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、南に方形の突出部を持つ。中軸線はＮ－ 89°－Ｅ、規模は長径 2.91m、短径 1.59m、深さ 0.05m である。底面には緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はわずかで、器種は武蔵型甕と台付甕、武蔵型甕の様な胎土を持つ土師器坏（１・２）、土師器高台付坏などのみである。坏１・２はロクロ成形ではない。図化しなかった遺物は、土師器片 38 点（273 ｇ）、須恵器片３点（20 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられ、隣接する SK-94 と同時期の可能性がある。

ＳＫ－９６（第 225・265 図、第 120 表）

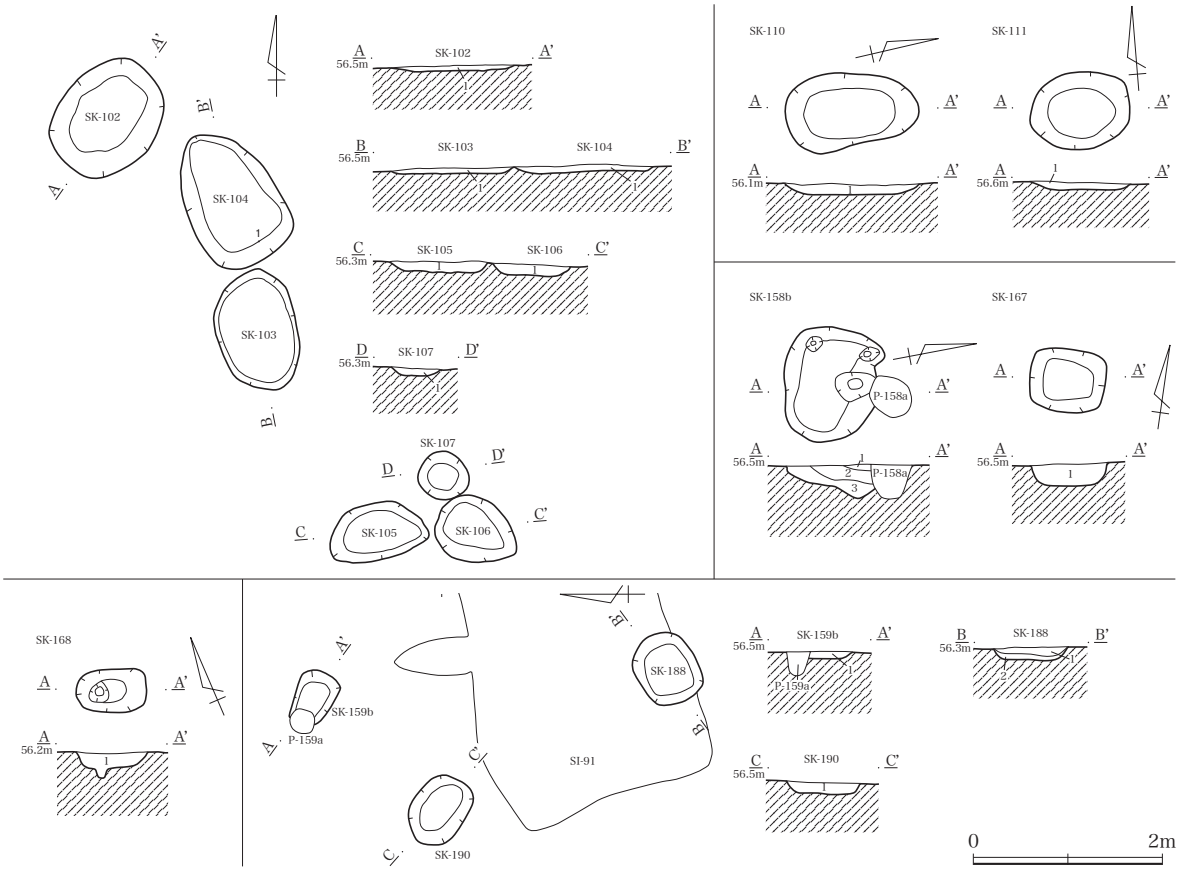
位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 11 グリッドに位置する。北に P-185 が近接し、北東約１ｍに SK-98、北西約 1.5m に SK-95、西に P-183 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－３°－Ｗ、規模は長径 2.00m、短径 1.69m、深さ 0.27m である。底面はやや湾曲しており、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器を中心に数多く出土する。土師器坏は半球形主体で、口縁が外反し体部との境に稜を持つ摸倣坏もみられる。土師器甕は長胴と球胴主体である。武蔵型は少なく、大きな底部を持つ個体が目立つ。図化しなかった遺物は、土師器坏片 96 点（760 ｇ）、甕片 270 点（3,506 ｇ）が多く、須恵器は甕片２点（10g）のみである。本遺物の年代は８世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－９７（第 225・266 図、第 121 表、図版三六・五七）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 11、Ｍ－ 11 グリッドに位置する。南に SK-98 が近接し、北１ｍに P-162、西１ｍには P-166 がある。　重複　南東部で SK-99 と重複する。調査時の所見では、SK-99 を切るとされる。　形状・規模　平面形はやや不整な方形で、中軸線はＮ－９°－Ｅ、規模は長径 2.79m、短径 2.62m、深さ 0.22m である。底面には緩やかな凹凸が連続していて、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は比較的多く、底面から浮いて出土するものが目立つ。武蔵型甕が最も多く、坏は半球状主体にロクロ成形の坏や武蔵型甕のような胎土を持つ坏もわずかにある。扁平な丸底の土師器坏４は土坑北部の底面上 11cm より出土する。図化しなかった遺物は、土師器片は 234 点（1,440 ｇ）、須恵器片は坏主体に 27 点（200 ｇ）ある。本遺構の時期は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－９８（第 225・266 図、第 122 表、図版三六・五七・六一）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 11 グリッドに位置する。北に SK-97、南西に P-186 が近接し、南西 1m に SK-96 がある。　重複　北東部で SK-99 と重複する。調査時の所見では SK-99 を切るとされる。　形状・規模　平面形は台形で、中軸線はＮ－ 10°－Ｅ、規模は長径 3.45m、短径は南辺で 2.30m、北辺で 2.83m、深さ 0.16m である。底面には緩やかな凹凸が連続していて、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は比較的多く、底面から浮



SK-102
1　暗褐色土　小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-103
1　暗褐色土　小礫少量、礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-104
1　暗褐色土　礫・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-105
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-106
1　褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-107
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-110
1　黒褐色土　炭化物粒多量、焼土粒・小礫微量。しまりあり。
SK-111
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-158b
1　赤褐色土　焼土粒少量、炭化物粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　シルト質粘土少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-159b
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-167
1　黒褐色土　小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-168
1　黒褐色土　小礫少量、赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-188
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　小礫微量。しまりあり。
SK-190
1　暗褐色土　焼土粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 226 図　和田遺跡　SK-102 ～ 107・110・111・158b・159b・167・168・188・190 実測図

いて出土するものが目立つ。土師器は甕主体で、長胴、小形球胴、武蔵型などがあり、武蔵型はやや少ない。坏は半球状主体である。須恵器も一定量あり、坏や高台付坏が多い。須恵器蓋１は土坑南部の底面上 11cm より出土する。高台付坏５・６はともに底部ヘラ切り離しで外面底部に墨書があり、いずれも土坑北部の底面より浮いた状態で出土する。図化しなかった遺物は、土師器坏片 93 点（718g）、甕片 342 点（2,378g）、須恵器片 17 点（273g）である。本遺構の時期は、隣接する SK-97 と同じ８世紀後葉頃だろう。

ＳＫ－１０２（第 226 図）

位置　Ⅴ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 12 グリッドに位置する。南東に SK-104 が近接し、南西 1.5m には P-122 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 36°－Ｅ、規模は長径 1.30m、短径 1.14m、深さ 0.06m である。底面は小さな凹凸が目立ち、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はわずかで、土師器片３点（20 ｇ）、須恵器片３点（30 ｇ）である。土師器は武蔵型甕と半球状の坏、須恵器は坏、瓶が

ある。図化した遺物はない。本遺構の時期は８～９世紀代とするが、坏などから８世紀後半前後に限定することもできようか。

ＳＫ－１０３（第 226・267 図、第 123 表）

位置　Ｖ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 12 グリッドに位置する。北に SK-104 が近接し、南東 1.5 ～２m には SK-105・106・107 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 13°－Ｗ、規模は長径 1.26m、短径 0.85m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物はわずかに出土する。須恵器坏１の底部は回転糸切り離しで厚く、円柱造りの可能性がある。図化しなかった遺物は、土師器片 15 点（130g）、須恵器片 10 点（180g）である。土師器は武蔵型甕が主体で、厚手な甕片も１点ある。須恵器は坏と甕があり、坏は底部回転糸切り離しで、底径 5.8 ～ 6.5cm ほどである。本遺構の年代は９世紀中葉～後葉といえるだろう。

ＳＫ－１０４（第 226・267 図、第 124 表）

位置　Ｖ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 12 グリッドに位置する。南に SK-103、北西に SK-102 が近接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 34°－Ｗ、規模は長径 1.49m、短径 1.00m、深さ 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は図化した須恵器高坏１点のみで、土坑南部の底面直上より横位で出土した。長脚で脚部外面中位に３条の浅い沈線を持つ。本遺構の年代は７世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－１０５ｂ（第 226 図）

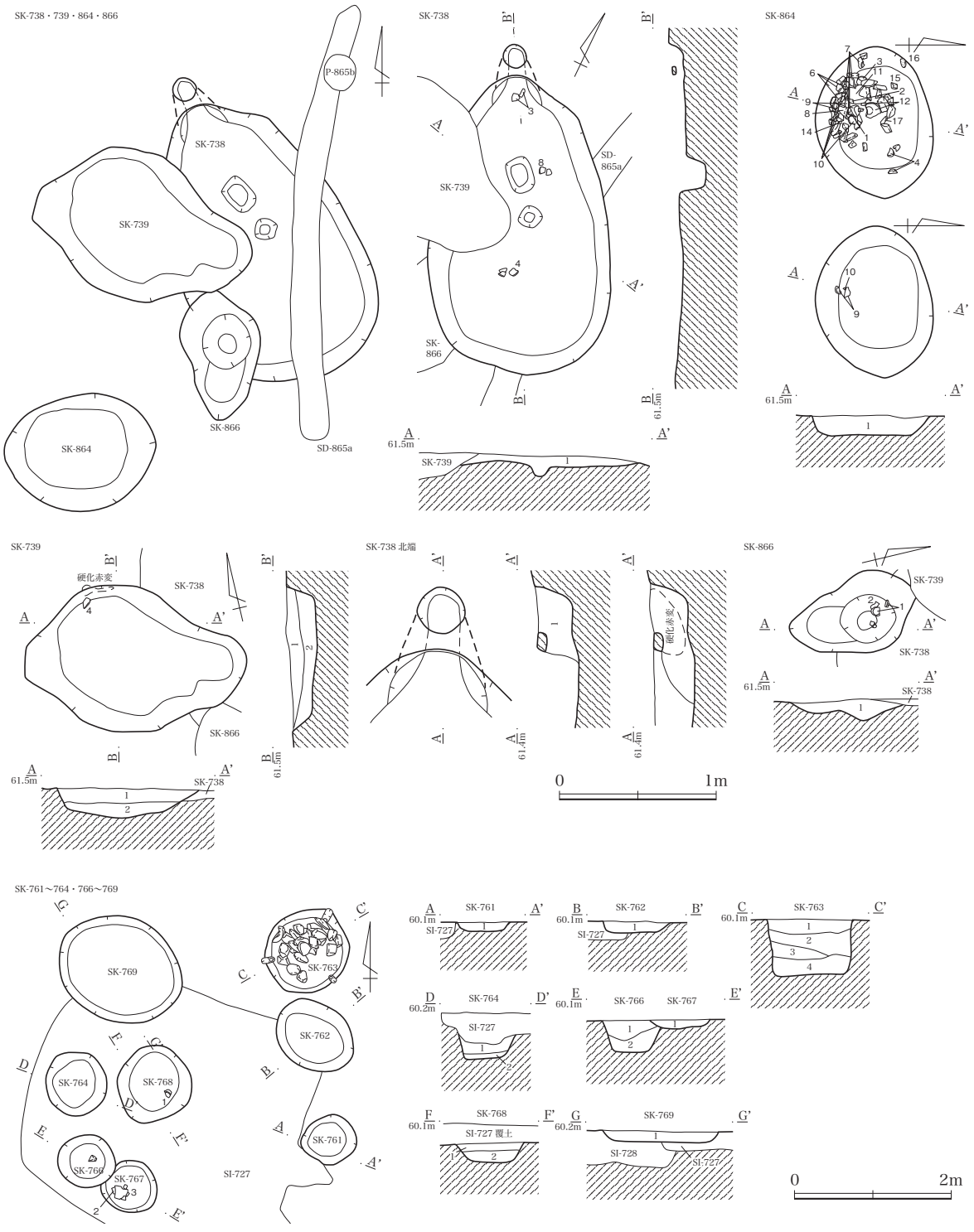
位置　Ｖ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 12 グリッドに位置する。東に SK-106・107 が近接し、北西 1.5m には SK-103 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 85°－Ｅ、規模は長径 1.03m、短径 0.60m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器片２点（５ｇ）、須恵器片２点（50 ｇ）のみであり、図化した遺物はない。土師器は武蔵型甕の破片、須恵器は甕片で外面に平行叩きが施される。本遺構の年代は８世紀に限定することもできそうだが、８～９世紀代とする。

ＳＫ－１０６（第 226・267 図、第 125 表）

位置　Ｖ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 11・12 グリッドに位置する。西に SK-105、北に SK-107 が近接し、南 1.5m には P-151・152 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 45°－Ｗ、規模は長径 0.90m、短径 0.69m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はわずかで、須恵器高台付坏と甕の２点のみ図化した。図化しなかった遺物は、武蔵型甕や半球状の坏片など土師器 25 点（135 ｇ）、須恵器は坏片１点（５ｇ）である。須恵器高台付坏の形態などから８世紀前葉と考える。

ＳＫ－１５８ｂ（第 226 図）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｍ－ 12 グリッドに位置する。東１m に SI-91、SK-190 が隣接してある。



SK-738
1　暗褐色土　炭化物粒・礫・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-739
1　明褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-761
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-762
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-763
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土主体。しまりあり。
4　明灰褐色土　赤褐色土粒微量。しまりややあり。
SK-764
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　炭化物粒多量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-766
1　黒褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒少量、炭化物粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　炭化物粒微量。粘土質。しまりややあり。
SK-767
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-768
1　暗黄褐色土　炭化物粒・ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-769
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-864
1　灰褐色土　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-866
1　黒褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 227 図　和田遺跡　SK-738・739・761 ～ 764・766 ～ 769・864・866 実測図

重複　北辺がP-158aに切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－64°－W、規模は長径1.23m、短径0.98m、深さ0.37mである。底面には緩やかな凹凸が連続していて、ピット状に深くなるところもある。ピットの規模は、西端のものが径0.18×0.15m、深さ0.05m、北西のものが径0.17×0.15m、深さ0.05m、北辺中央のものが径0.42×0.30m、深さ0.30mである。壁は丸みを持って立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層である。第１層のうち特に遺構中央北辺付近に焼土を多く含む部分があることから、何らかの焼成を行った土坑の可能性がある。最下層の第３層は、シルト質の粘土を含む。自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器片39点（285g）、須恵器片３点（30g）のみであり、図化した遺物はない。土師器は「コ」の字状口縁の武蔵型甕主体で、内面黒色処理のロクロ成形坏なども出土する。須恵器は坏、高台付坏の破片である。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－１５９ｂ（第226・267図、第126表）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｍ－12グリッドに位置する。南にSI-91が近接し、東１ｍにP-160、北１ｍにP-149、南西1.5mにはSK-190が隣接してある。　**重複**　P-159aに切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－64°－W、規模は長径0.56m、短径0.40m、深さ0.08mである。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、武蔵型甕に似た胎土の非ロクロ成形の坏１、武蔵型甕２を図化した。図化以外は土師器甕片７点（45g）、須恵器蓋片１点（5g）のみである。遺物の年代は９世紀中葉頃と考えられる。

ＳＫ－１６７（第226・267図、第127表）

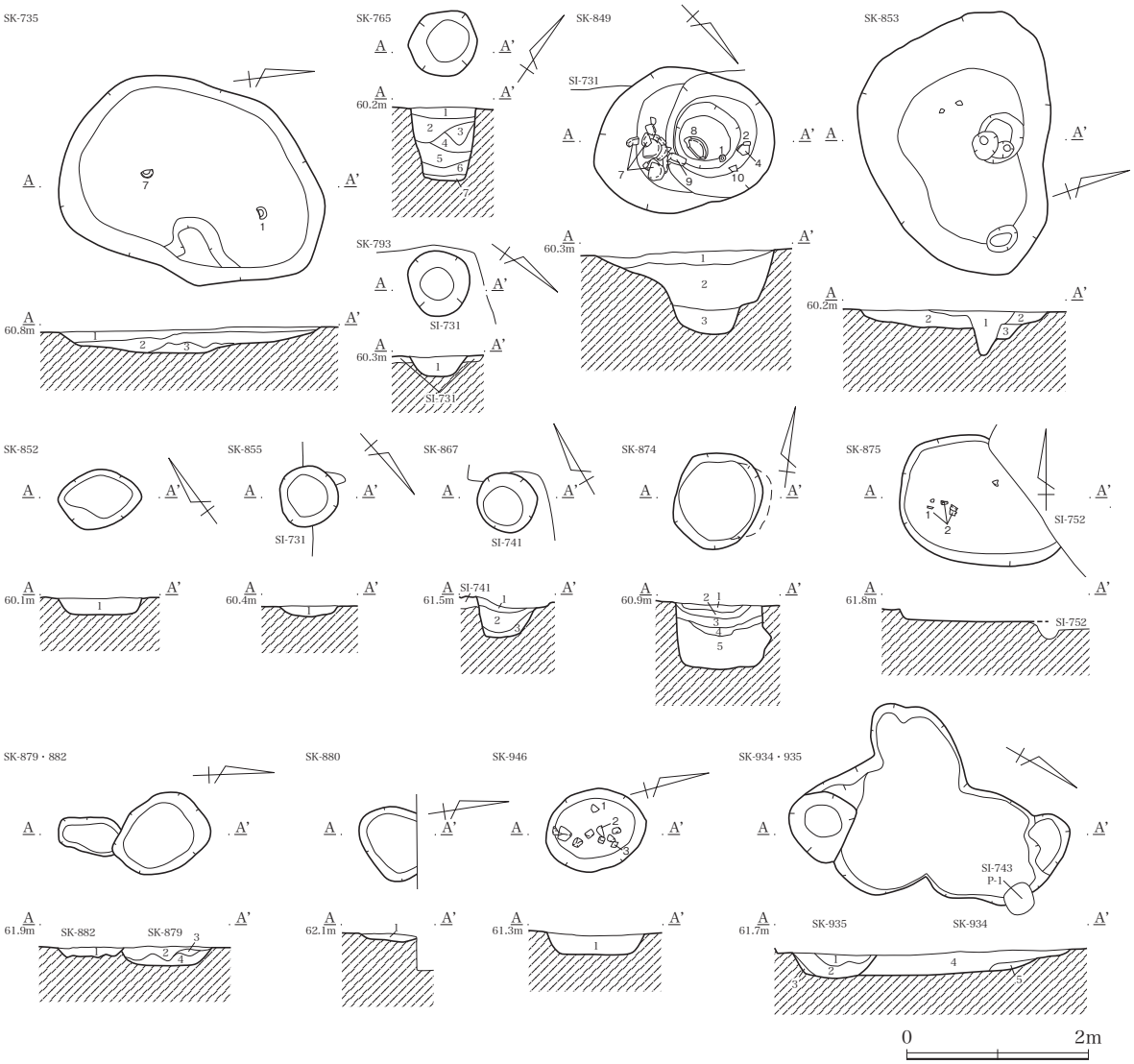
位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｍ－12グリッドに位置する。南東１ｍにP-169が隣接し、南東3.5mにはSK-168がある。形状や覆土がSK-168に類似する土坑である。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は長方形で、中軸線はＮ－88°－Ｅ、規模は長径0.81m、短径0.67m、深さ0.24mである。底面はやや湾曲しており、壁は下半は丸みを持つものの、上半で垂直気味になる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はわずかで、図化以外は武蔵型甕片を含む土師器片８点（30g）と須恵器片３点（50ｇ）である。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－１６８（第226図）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｌ－12グリッドに位置する。西１ｍにP-172が隣接し、北西3.5mにはSK-167がある。形状や覆土がSK-167に類似する土坑である。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は長方形で、中軸線はＮ－67°－W、規模は長径0.75m、短径0.45m、深さ0.15mである。底面はやや湾曲しており、西端には径0.24×0.20m、底面からの深さ0.10mのピット状に深くなる部分がある。壁は丸みを持ち外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器片41点（200ｇ）、須恵器片３点（25ｇ）のみであり、図化した遺物はない。土師器は内面黒色処理のロクロ成形坏、非ロクロ成形坏、器壁の厚い甕片などであり、須恵器は瓶類である。本遺構の年代は10世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－１９０（第226図）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｍ－12グリッドに位置する。南にSI-91が近接し、南東２ｍには



SK-735
1　黄褐色土　ローム粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-765
1　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　小礫微量。しまりあり。
3　黄褐色土　ローム粒主体。しまりあり。
4　暗褐色土　小礫微量。しまりあり。
5　明褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
6　黒褐色土　炭化物粒多量。しまりややあり。
7　明黄褐色土　黄褐色粘土粒主体。しまりなし。
SK-793
1　黒褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-849
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　礫・小礫多量、炭化物粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　礫少量、炭化物粒微量。しまりややあり。
SK-852
1　明褐色土　ローム粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-853
1　褐色土　炭化物粒多量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-855
1　暗褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-867
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　小礫微量。しまりあり。
SK-874
1　黒褐色土　炭化物粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　しまりややあり。
3　暗褐色土　しまりややあり。
4　灰褐色土　白色粘土粒多量、小礫微量。しまりあり。
5　暗褐色土　白色粘土粒少量。しまりややあり。
SK-879・882
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。(SK-882覆土)
2　黒褐色土　炭化物粒多量、焼土粒・礫・白色土粒微量。しまりあり。(SK-879覆土)
3　暗赤褐色土　焼土粒多量、灰褐色土粒・小礫微量。しまりややあり。(SK-879覆土)
4　黄褐色土　黄色粘土粒少量、小礫微量。しまりあり。(SK-879覆土)
SK-880
1　褐色土　黄色粘土粒・焼土粒・炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。
SK-934・935
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SK-935覆土)
2　灰褐色土　灰色粘土主体。焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりややあり。(SK-935覆土)
3　褐色土　黄褐色粘土粒・白色土粒微量。しまりあり。(SK-935覆土)
4　褐色土　黄褐色粘土粒・焼土粒・炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。(SK-934覆土)
5　灰褐色土　灰色粘土ブロック・灰色粘土粒多量、炭化物粒微量。しまりややあり。(SK-934覆土)
SK-946
1　灰褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 228 図　和田遺跡　SK-735・765・793・849・852・853・855・867・874・875・879・880・882・934・935・946 実測図

SK-188 がある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 48°－Ｗ、規模は長径 0.79m、短径 0.58m、深さ 0.12m である。底面には緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器片 11 点（40 ｇ）、須恵器片３点（55 ｇ）のみで、図化した遺物はない。武蔵型甕や内面黒色処理の坏片が出土する。遺構の年代は９世紀代といえるだろう。

ＳＫ－２００ａ（第 258・267 図、第 128 表、図版一四）

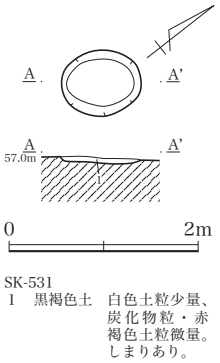
位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。南に SK-286 が近接してあり、西２ｍに SK-278、東 1.5 ｍに SK-289 が近接してある。　**重複**　SI-200b を切る。SK-977 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は方形で、中軸線はＮ－ 84°－Ｗ、規模は長径 2.90m、短径 2.67m、深さ 0.23m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　須恵器坏１点を図化する。これ以外にも遺物はあるが、そのほとんどは重複する SI-200b の遺物と判断した。本遺構の年代は、９世紀中葉～後葉と考えられる。

ＳＫ－２１１（第 242・267 図、第 129 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。南に SI-210 が近接し、西３ｍに SI-209a・209b・209c が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、円形の土坑２基が重複したような瓢箪形を呈する。中軸線はＮ－ 7°－Ｅ、規模は長径 1.40m、短径 1.21m、深さ 0.30m である。底面はほぼ平坦で、北半は南半より８cm ほど高くなっている。壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は多量のマンガン粒を含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられ

第 229 図　和田遺跡　土坑集中地区（Ⅵ区）土坑全体図

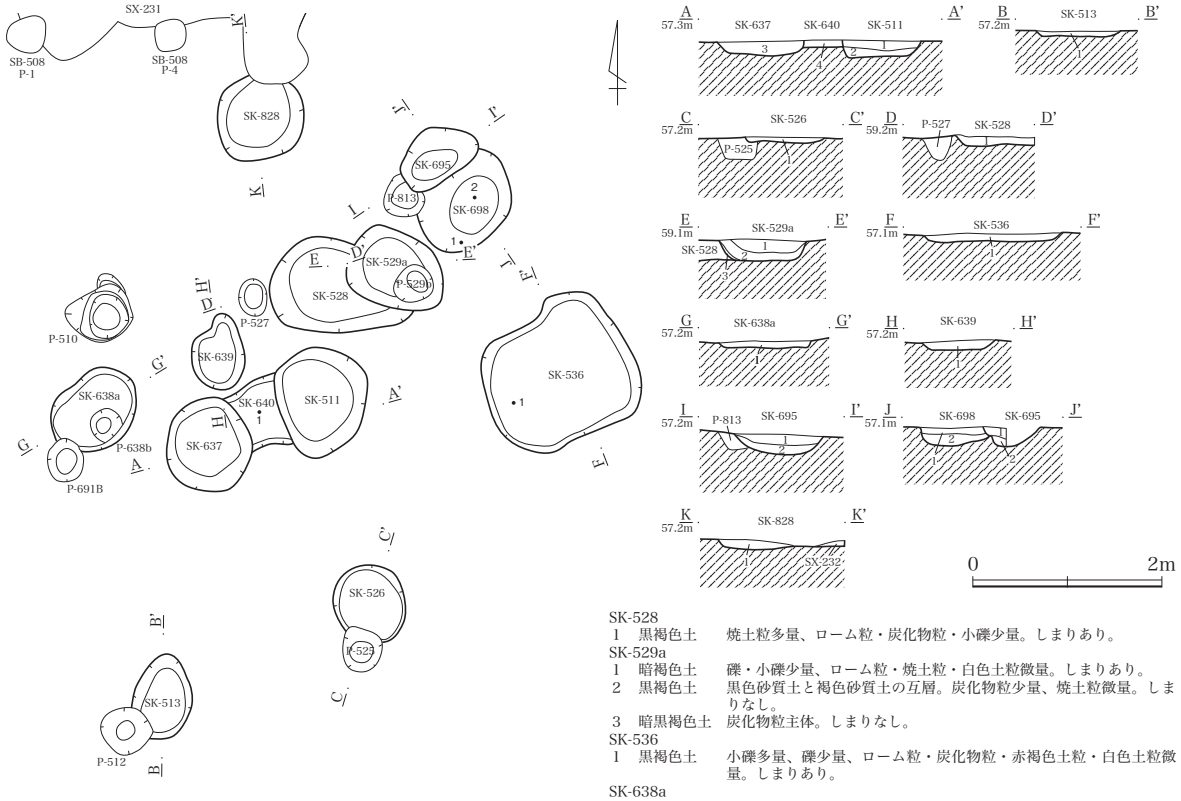
る。　遺物　遺物はわずかで、武蔵型甕片のほかは図化した甑などしか確認できない。図化しなかった遺物は、土師器片 43 点（390 ｇ）、須恵器坏片 1 点（10 ｇ）である。本遺構の年代は 9 世紀代と考えられる。



第 230 図　和田遺跡　土坑実測図①

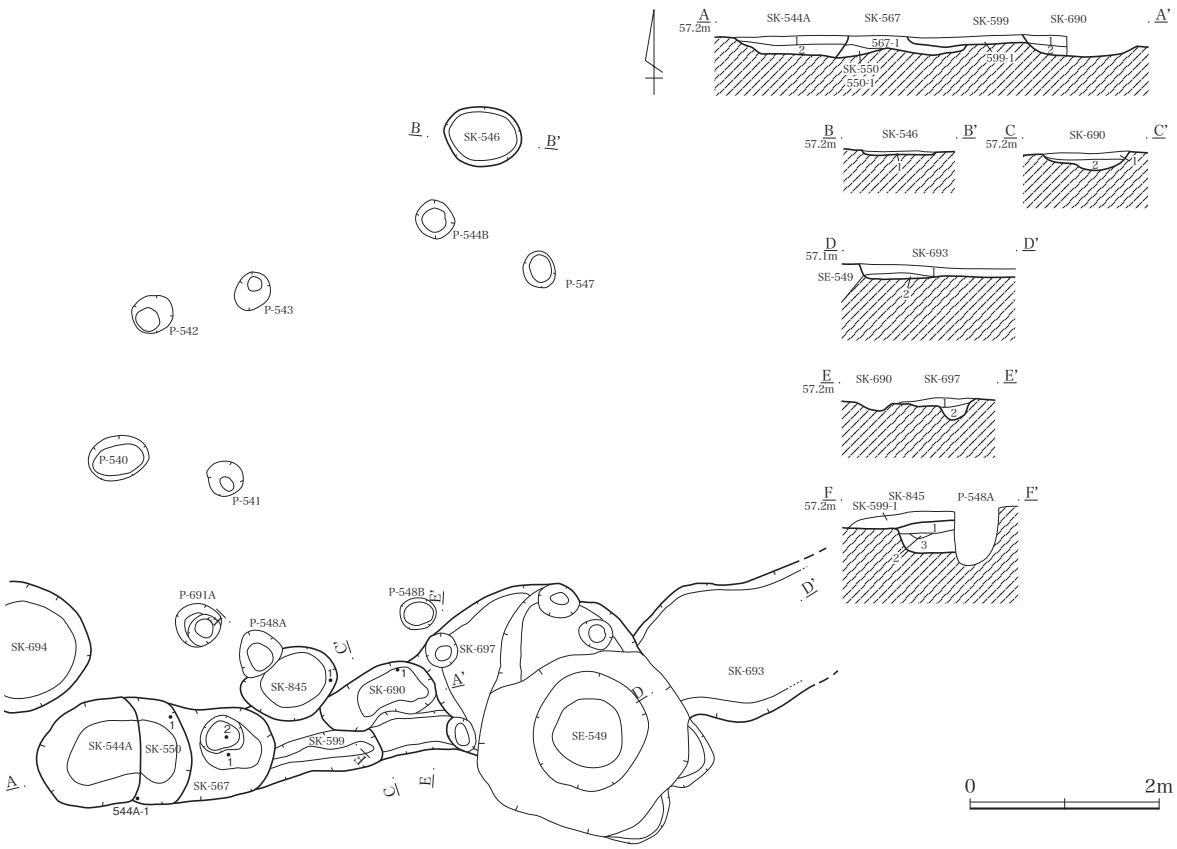
ＳＫ－２２２（第 237・267 図、第 130 表、図版三六・五七）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-452、南に SI-221 が近接し、南西２ｍに SI-220・SK-223B・836・837 が隣接してある。　重複　SK-838B を切る。　形状・規模　平面形は不定形で、南北方向に長い楕円形部分に土坑２基が重複したような形をしている。規模は長径 3.35m、短径 3.19m、深さ 0.20m である。底面はほぼ平坦で、西側の土坑状部分はやや高くなっている。壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　土坑としては多く、南西部にやや集中する。土師器は半球状の坏と長胴甕が主体で、球胴の甕が混じる。長胴甕 14 は土坑南西部の床上８cm から横位の状態で出土した。図化しなかった遺物は土師器坏片 22 点（280 ｇ）、甕片 340 点（3,700 ｇ）、須恵器坏片４点（60 ｇ）、甕片 17 点（390 ｇ）であり、須恵器は少ない。須恵器坏６は三通窯段階と見られるが、全体としては８世紀前葉から中葉が中心であるため、本遺構の年代は８世紀前葉～中葉と考える。



SK-511・637・640
1　黒褐色土　焼土粒多量、ローム粒・炭化物粒・小礫少量。しまりあり。(SK-511 覆土)
2　黒褐色土　ローム粒・灰褐色砂質土粒・黒褐色土粒少量、焼土粒微量。しまりなし。（SK-511覆土）
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。粘質。しまりあり。（SK-637覆土）
4　黒褐色土　焼土粒少量、ローム粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。(SK-640 覆土)
SK-513
1　暗褐色土　焼土粒・礫・小礫微量。しまりややあり。
SK-526
1　黒褐色土　焼土粒多量、炭化材少量、ローム粒・炭化物粒・小礫少量。しまりあり。
SK-528
1　黒褐色土　焼土粒多量、ローム粒・炭化物粒・小礫少量。しまりあり。
SK-529a
1　暗褐色土　礫・小礫少量、ローム粒・焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　黒色砂質土と褐色砂質土の互層。炭化物粒少量、焼土粒微量。しまりなし。
3　暗黒褐色土　炭化物粒主体。しまりなし。
SK-536
1　黒褐色土　小礫多量、礫少量、ローム粒・炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-638a
1　暗褐色土　小礫多量、ローム粒・炭化物粒・白色土粒少量。しまりあり。
SK-639
1　暗褐色土　小礫多量、ローム粒・炭化物粒・白色土粒少量。しまりあり。
SK-695
1　褐色土　ローム粒少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黄褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-698
1　暗褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒少量、ローム粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　褐色土ブロック多量、黒色土ブロック・赤褐色土粒微量。しまりややあり。
SK-828
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 231 図　和田遺跡　土坑実測図②



SK-544A
1　暗褐色土　白色土粒多量、ローム粒少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　赤褐色土粒多量、ローム粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SK-546
1　暗褐色土　黒褐色土ブロック・ローム粒少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-550
1　明黒褐色土　赤褐色土粒多量、ローム粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
SK-567
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒多量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-599
1　暗褐色土　白色土粒多量、ローム粒少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-690
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒少量、小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　灰褐色砂質土と褐色土ブロック主体。赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-693
1　暗褐色土　白色土粒多量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　白色土粒少量、ローム粒・炭化物粒微量。しまりあり。
SK-697
1　暗褐色土　白色土粒多量、赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　褐色土ブロック多量、ローム粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-845
1　暗黒褐色土　褐色砂質土と黒色砂質土の混土層。焼土粒・炭化物粒少量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土層。しまりややあり。
3　黄褐色土　黒色土ブロック多量。しまりややあり。

第 232 図　和田遺跡　土坑実測図③

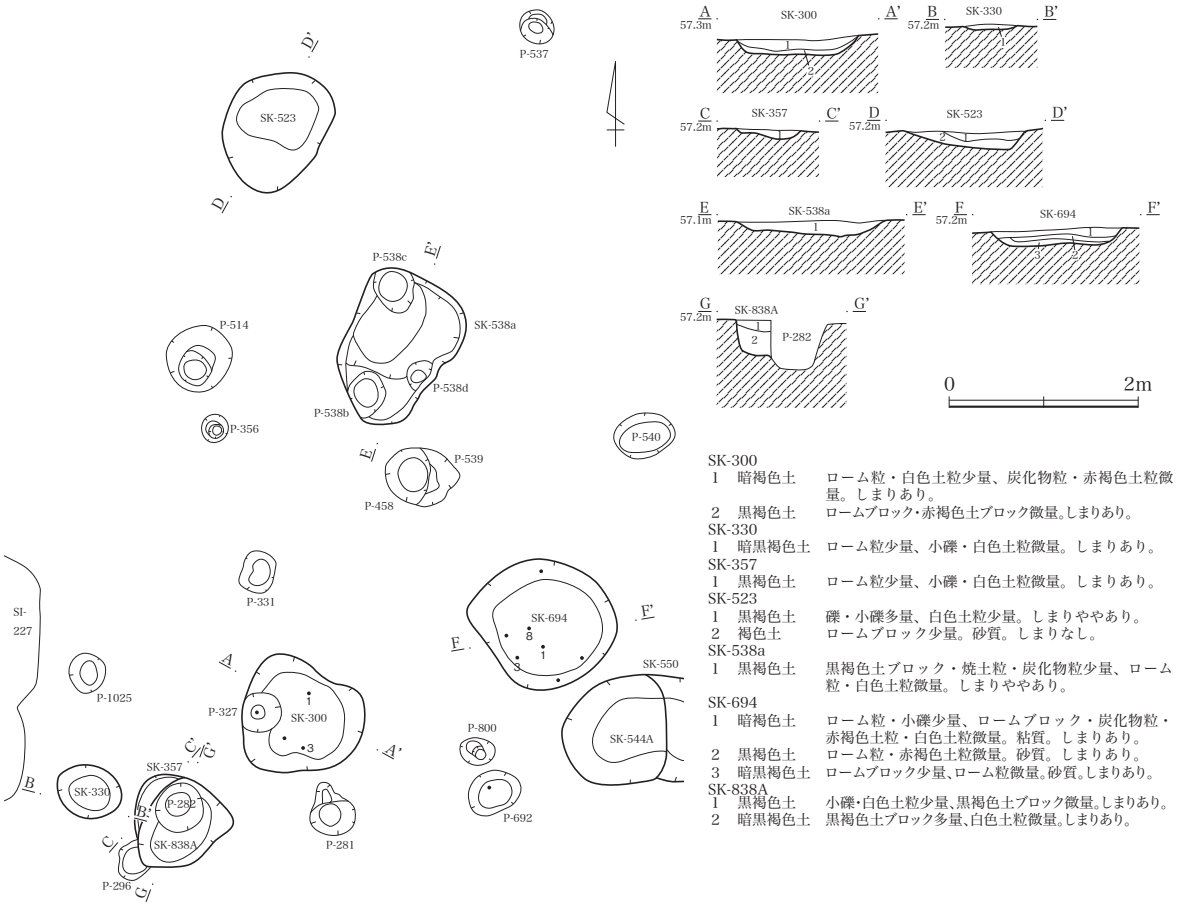
ＳＫ－２２３Ｂ（第 237・268 図、第 131 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。北２m に SK-222、南 1.5m に SK-441 が隣接してある。　重複　SK-837 を切り、SI-220・221 に切られる。SK-838B とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、円形土坑の北側に張出部を追加したような形状である。中軸線はＮ－ 24°－Ｗ、規模は長径 1.68m、短径 1.20m、深さ 0.32m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物

遺物は「SK-223」で取り上げられているため 223A・223B いずれに伴うか確定できないが、土坑のあり方から SK-223B の遺物と考えた。遺物は土師器片のみで、図化した坏１以外に坏７点（80 ｇ）、甕 38 点（350 ｇ）がある。坏は半球状主体で模倣坏はなく、甕は長胴甕のみである。本遺構の時期は、重複関係と遺物から８世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－２２４（第 235・268 図、第 132 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 13・14 グリッドに位置する。南西に SK-223A、北に P-677・678・689



第 233 図　和田遺跡　土坑実測図④

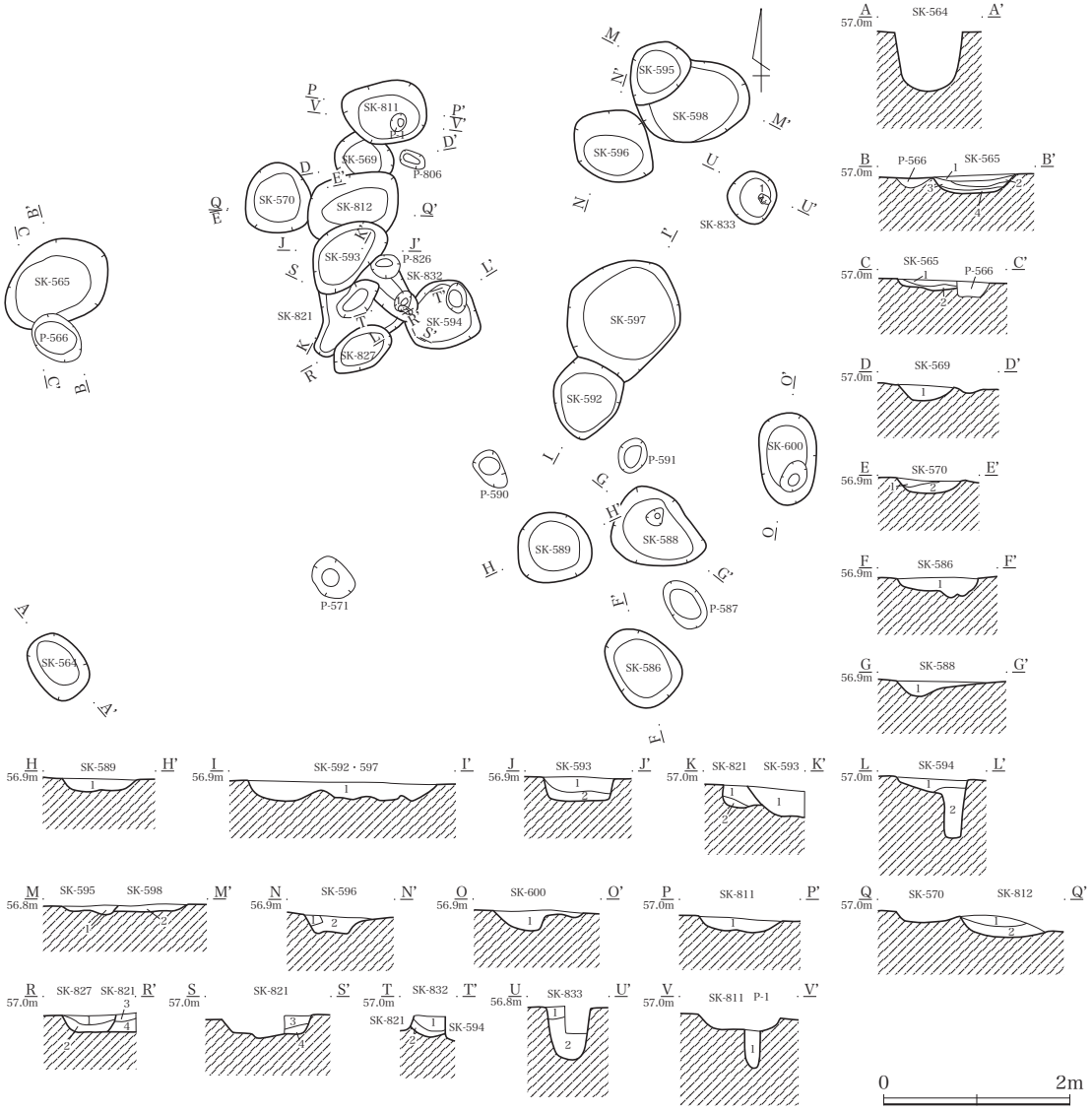
が近接し、西１ｍに SI-221 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 64°－Ｗ、規模は長径 2.13m、短径 1.50m、深さ 0.19m である。底面はほぼ平坦で、西側は一段高くなっている。壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、図化した坏１以外は土師器坏片５点（90 ｇ）、甕片３点（50 ｇ）、須恵器片１点（40 ｇ）のみである。土師器甕は武蔵型に似た胎土の長胴甕である。本遺構の時期は７世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－２４８（第 252・268 図、第 133 表）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－ 23 グリッドに位置する。北東に P-249、南東に SK-912 が近接し、東１ｍに SK-913、南１ｍに SK-909・911、P-908・918 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は隅丸長方形で、中軸線はＮ－ 20°－Ｗ、規模は長径 1.18m、短径 0.85m、深さ 0.13m である。底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかであり、図化した須恵器坏１の他は武蔵型主体の土師器甕片 12 点（75 ｇ）、須恵器坏片９点（60 ｇ）、甕片５点（150 ｇ）である。土師器甕は SK-250 出土の破片と接合しており、同時期の遺構の可能性がある。本遺構の時期は８世紀後葉と考えられる。

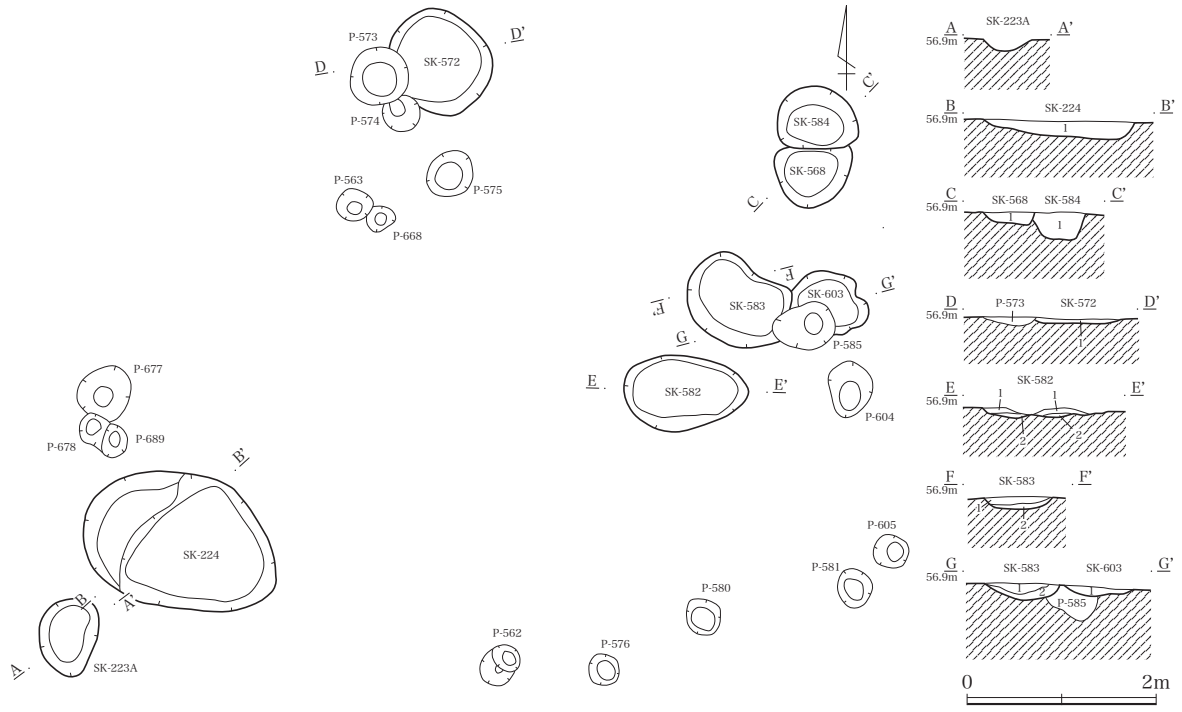
ＳＫ－２５０（第 252・268 図、第 134 表、図版三六）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 23 グリッドに位置する。北東２ｍに SK-251、南東２ｍに SK-253、



SK-565
1　暗褐色土　暗褐色土ブロック少量、炭化物粒・礫・小礫微量。しまりあり。
2　褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　黒褐色土　ローム粒・白色土粒少量、炭化物粒微量。しまりあり。
4　暗黒褐色土　炭化材主体。黒褐色土粒少量。しまりややあり。
SK-569
1　黒褐色土　炭化物粒・礫少量、黒褐色土ブロック・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-570
1　黒褐色土　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-586
1　暗黒褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-588
1　暗黒褐色土　ロームブロック･小礫･赤褐色土粒･白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
SK-589
1　暗黒褐色土　白色土粒少量、黒褐色土ブロック・炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-592・597
1　暗黒褐色土　炭化物粒少量、礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
SK-593
1　褐色土　礫・小礫多量、ロームブロック・ローム粒・炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫少量、炭化物粒・礫微量。砂質。しまりややあり。
SK-594
1　黒褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりあり。
2　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-595・598
1　黒褐色土　礫・小礫多量、白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-595覆土）
2　暗褐色土　礫・小礫多量、白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-598覆土）
SK-596
1　赤褐色土　小礫微量。しまりあり。
2　黒褐色土　礫・小礫多量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-600
1　黒褐色土　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
SK-811
1　黒褐色土　小礫多量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-811　P-1
1　黒褐色土　小礫・赤褐色土粒多量、炭化物粒微量。砂質。しまりややあり。
SK-812
1　黒褐色土　小礫多量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒少量、炭化物粒・礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-821・827
1　暗褐色土　礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-827覆土）
2　暗褐色土　ローム粒少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-827覆土）
3　暗褐色土　礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-821覆土）
4　黒褐色土　ローム粒少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-821覆土）
SK-832
1　暗褐色土　礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒・白色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-833
1　暗褐色土　礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。砂質。しまりあり。

第 234 図　和田遺跡　土坑実測図⑤



SK-224
1　暗褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-568
1　黒褐色土　　白色土粒少量、炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-584
1　暗黒褐色土　炭化物粒・礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-572
1　暗褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
SK-582
1　黒褐色土　小礫少量、礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
2　灰褐色土　小礫少量、ロームブロック・炭化物粒・礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-583・603
1　黒褐色土　炭化物粒・小礫少量、礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。（SK-583・603覆土）
2　灰褐色土　小礫少量、ロームブロック・炭化物粒・礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-583覆土）

第 235 図　和田遺跡　土坑実測図⑥

P-252 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形はやや角が目立つ円形で、規模は長径 1.20m、短径 1.18m、深さ 0.17m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して丸みを持って立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第２・第３層は炭化物をわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかであり、図化した須恵器坏１の他は土師器坏片１点（10 ｇ）、甕片４点（20 ｇ）、須恵器片３点（15 ｇ）のみである。土師器甕は武蔵型、坏は半球状である。須恵器坏は平底であり、体部下半に丸みを持つものはない。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

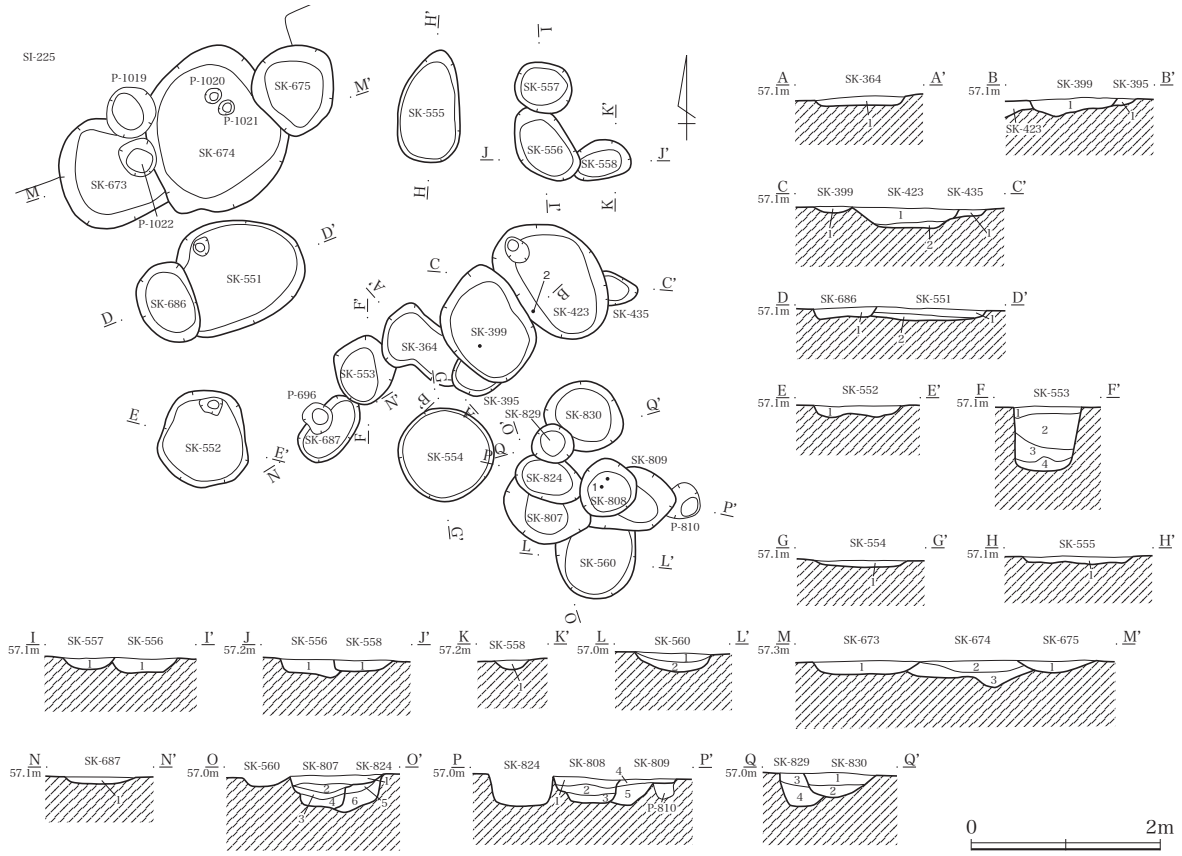
ＳＫ－２５１（第 252・268 図、第 135 表）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22・23 グリッドに位置する。北１ｍに SI-194 が近接し、南２ｍに SK-250･253 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状･規模**　平面形は不整な隅丸方形で、中軸線はＮ－９°－Ｗ、規模は長径2.01m､短径1.88m､深さ0.31mである｡底面は凹凸があり､壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。

覆土の状態　覆土は暗灰褐色土（第１層）と褐色土（第２層）で、ともに炭化物と白色土粒を多量に含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は須恵器主体で、坏と甕が多い。土師器坏は白色胎土の厚手な半球状､土師器甕は武蔵型主体である。図化以外には､土師器坏片１点（20 ｇ）､甕片 13 点（50 ｇ）、須恵器坏片 15 点（100 ｇ）、甕片６点（160 ｇ）がある。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－２５３（第 252・268 図、第 136 表）

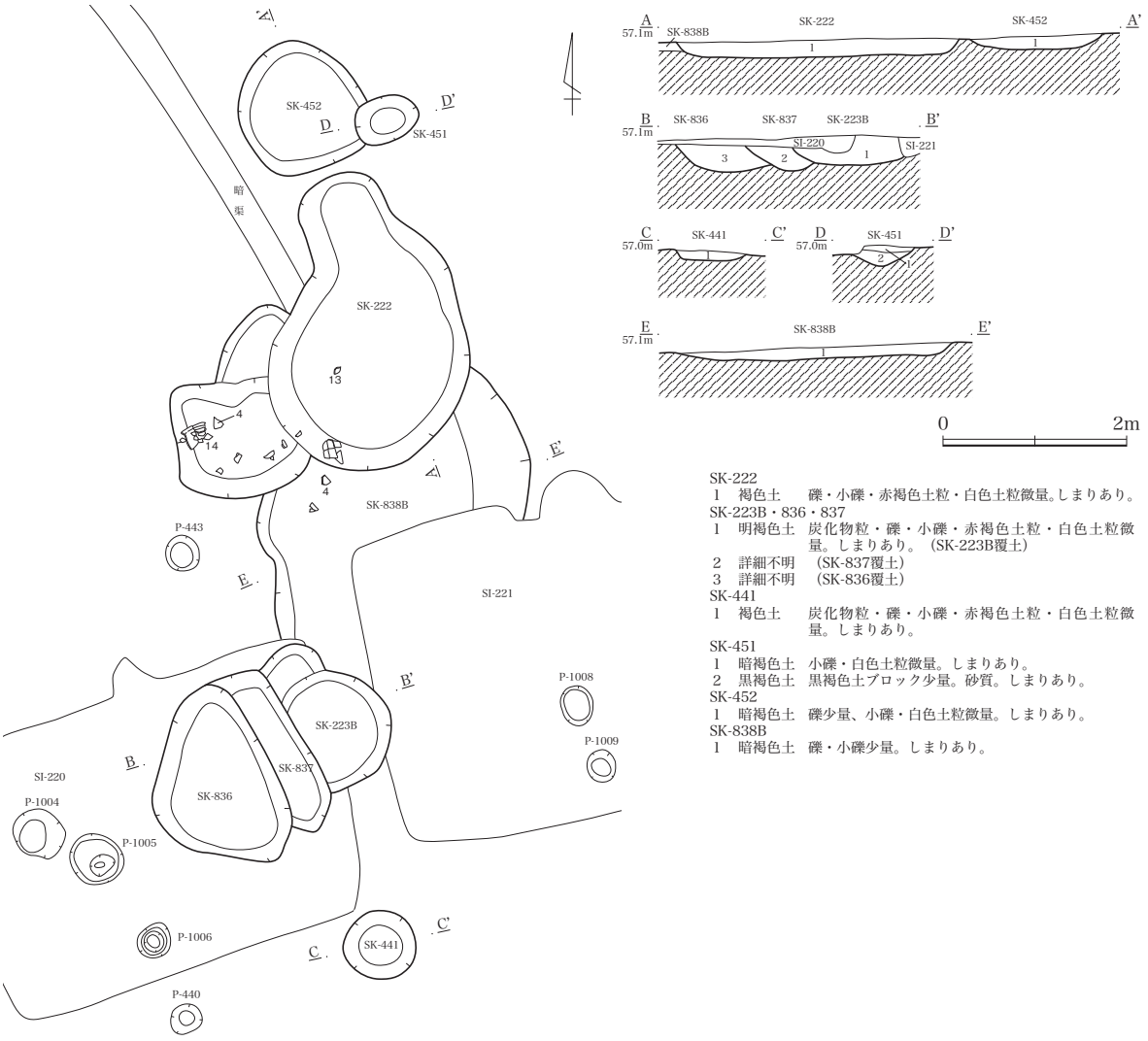
位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。北西に P-252 が近接し、南西１ｍに SK-913、



SK-364
1　褐色土　ローム粒・白色土粒多量、小礫少量、赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-395
1　褐色土　ローム粒･赤褐色土粒･白色土粒少量､炭化物粒･小礫微量。しまりあり。
SK-399
1　暗褐色土　ローム粒・小礫多量、白色土粒少量。しまりあり。
SK-423
1　暗褐色土　ローム粒･白色土粒多量､礫･小礫少量､赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒少量。しまりあり。
SK-435
1　明黒褐色土　ローム粒･白色土粒多量､礫･小礫少量､赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-551
1　暗褐色土　ローム粒･白色土粒少量､礫･小礫･赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫微量。しまりあり。
SK-552
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-553
1　褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
3　不明
4　不明
SK-554
1　暗褐色土　ローム粒･白色土粒少量､礫･小礫･赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-555
1　黒褐色土　ローム粒多量、小礫少量。しまりあり。
SK-556
1　褐色土　褐色土ブロック多量、ローム粒少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-557
1　黒褐色土　黒褐色土ブロック・ローム粒少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-558
1　赤褐色土　焼土ブロック・炭化物粒多量、礫少量。しまりあり。
SK-560
1　暗褐色土　ローム粒少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　黒褐色土ブロック・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-686
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-673・674・675
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。（SK-673・675覆土）
2　明黒褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。（SK-674覆土）
3　黒褐色土　ローム粒・小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-674覆土）
SK-687
1　褐色土　ローム粒・白色土粒多量、礫・小礫少量、赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-807・824
1　暗褐色土　ローム粒多量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。（SK-807覆土）
2　褐色土　褐色土ブロック多量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-807覆土）
3　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-807覆土）
4　黄褐色土　黄褐色土ブロック多量、ローム粒微量。しまりあり。（SK-807覆土）
5　明褐色土　褐色土ブロック多量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-824覆土）
6　明黄褐色土　黄褐色土ブロック多量、ローム粒微量。しまりあり。（SK-824覆土）
SK-808・809
1　暗褐色土　ローム粒・小礫多量、炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-808覆土）
2　黒褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。砂質。しまりあり。（SK-808覆土）
3　褐色土　褐色土ブロック多量、ローム粒・小礫・白色土粒微量。砂質。しまりあり。（SK-808覆土）
4　暗褐色土　ローム粒多量。白色土粒微量。しまりあり。（SK-809覆土）
5　黒褐色土　黒褐色土ブロック少量、ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-809覆土）
SK-829・830
1　暗褐色土　礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-830覆土）
2　黒褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。砂質。しまりあり。（SK-830覆土）
3　褐色土　小礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。（SK-829覆土）
4　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒少量。しまりややあり。（SK-829覆土）

第 236 図　和田遺跡　土坑実測図⑦

北に 2.5m に SK-251 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状･規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 25°－Ｗ、規模は長径 1.44m、短径 1.12m、深さ 0.17m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は灰褐色土（第１層）と明灰褐色土（第２層）で、第１層は炭化物をわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかである。土師器坏は、白色で厚手な１と、



第 237 図　和田遺跡　土坑実測図⑧

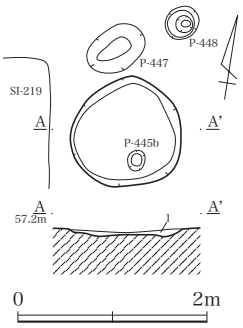
褐色で薄手な２がある。図化以外には、武蔵型の土師器甕片２点（10 ｇ）と須恵器片２点（30 ｇ）が出土する。本遺構の年代は８世紀中葉～後葉と考えられる。

ＳＫ－２５４（第 251・268 図、第 137 表）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。南に SK-914、東に P-916 が隣接し、北に 1.5m に SK-256 が隣接してある。　重複　SK-255・SK-915 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 1.18m、短径 1.13m、深さ 0.20m である。底面は緩やかな凹凸があり、北側には比高４cm ほどのわずかに高い段が設けられる。壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は SK-254・255 として取り上げられており、各土坑の遺物は特定できない。ただ遺物が示す時期はまとまっているため、両遺構の構築時期は近いものと推定する。出土量はわずかで、図化した土師器坏１、須恵器坏２以外には武蔵型主体の土師器甕片６点（20 ｇ）、須恵器片２点（10 ｇ）のみである。本遺構の時期は、SK-255 とともに９世紀代と考えられる。

ＳＫ－２５５（第 251・268 図、第 137 表）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。北に SK-256 が近接し、北東 1.5m に SK-258、



SK-445a
1　黒褐色土　礫・小礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 238 図　和田遺跡　土坑実測図⑨

南１m に SK-914 が隣接してある。　**重複**　SK-254 に切られる。　**形状・規模**　南側が SK-254 に切られるが、平面形は円形と推定される。規模は径 0.92m、深さ 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明灰褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は SK-254 に記述したとおりである。本遺構の時期は、SK-254 とともに９世紀代と考えられる。

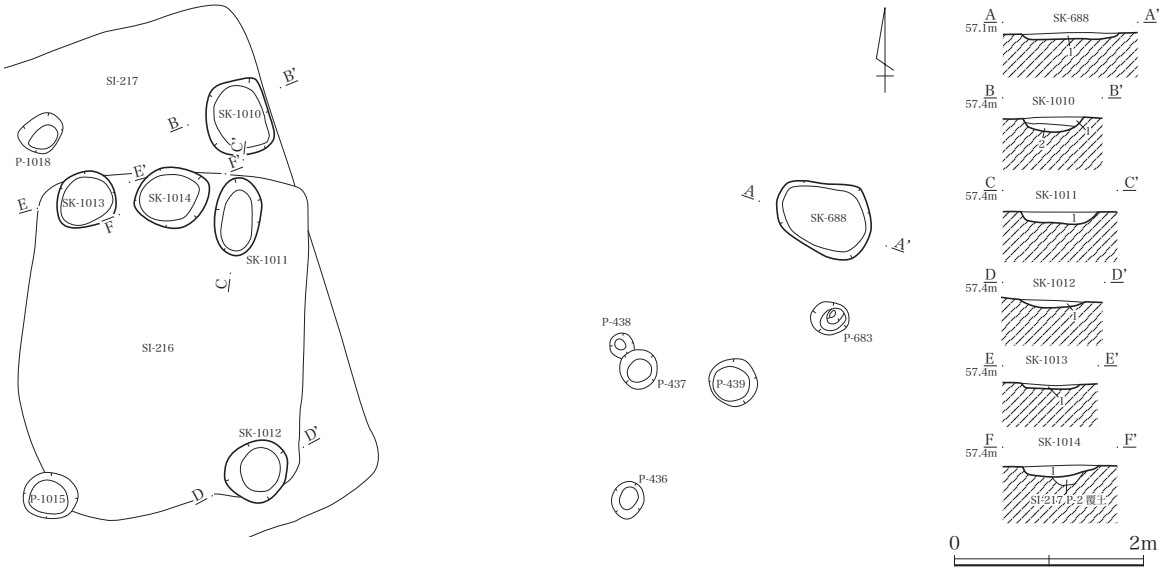
ＳＫ－２５６（第 251 図、図版三六）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。東に SK-258、北に P-257、南に SK-255・254 が近接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 88°－W、規模は長径 0.82m、短径 0.72m、深さ 0.16m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は灰褐色土（第１層）と明灰褐色土（第２層）で、第１層下面には黒褐色粘土の薄い層がある。全体として緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器武蔵型甕片２点（10 ｇ）と須恵器坏片２点（４ｇ）のみで、図化し得た遺物はない。本遺構の年代は８世紀後半から９世紀かと考えられる。

ＳＫ－２６７（第 263・268 図、第 138 表、図版三七）

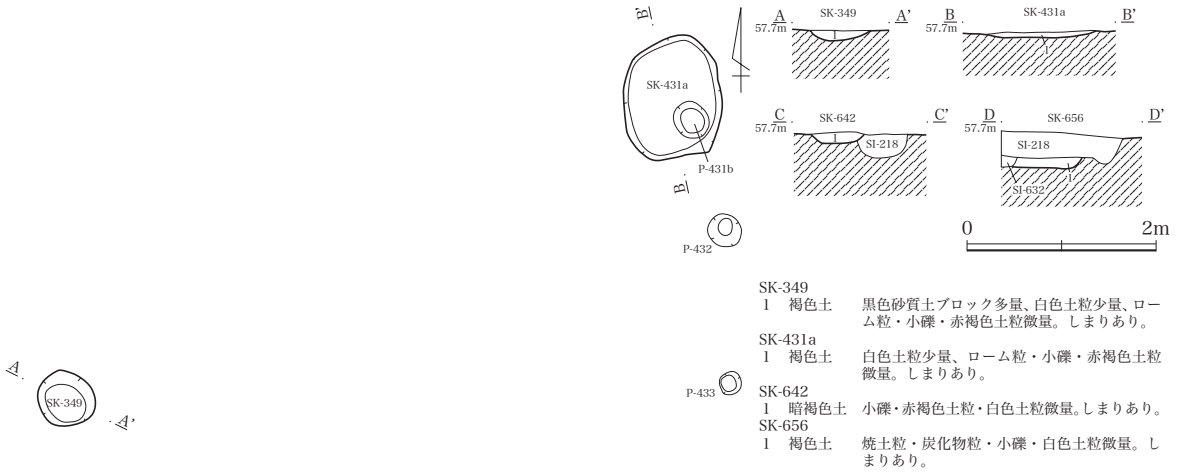
位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 21 グリッドに位置する。東 1.5m に SK-269、北 1.2m に SI-905 が隣接する。

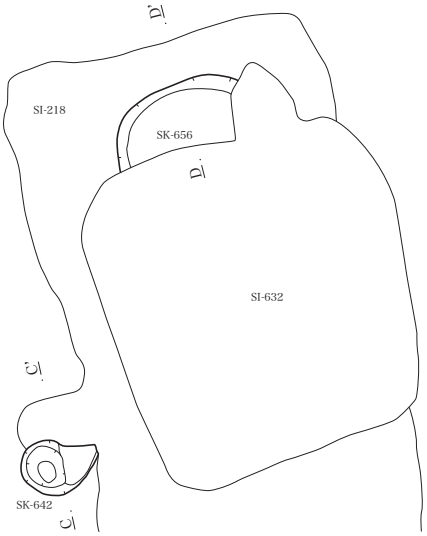
重複　なし。　**形状・規模**　SK-267・269・270・271 の４基は遺構の形状や覆土が類似する。平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 88°－W、規模は長径 1.04m、短径 0.84m、深さ 0.66m である。地山礫層上面となる土坑底面は緩やかな凹凸があり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第



SK-688
1　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫少量、白色土粒微量。砂質。しまりあり。
SK-1010
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明灰褐色土　灰褐色粘土粒多量、小礫微量。しまりあり。
SK-1011
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-1012
1　黒褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-1013
1　褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-1014
1　黒褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 239 図　和田遺跡　土坑実測図⑩





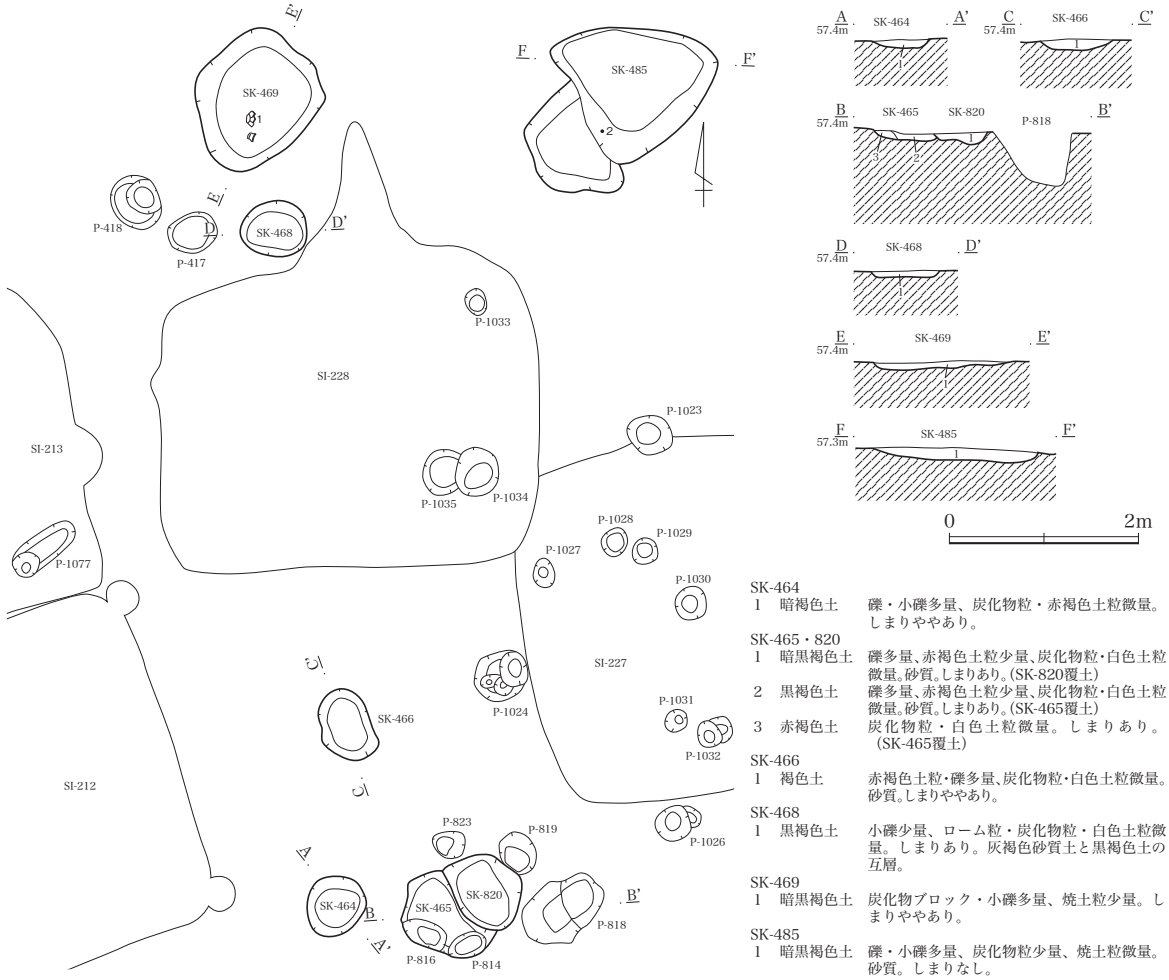
第 240 図　和田遺跡　土坑実測図⑪

１層）と暗灰褐色土（第２層）である。第２層は灰褐色粘土主体だが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。

遺物　図化した須恵器甕１点の他土師器甕片１点（10 ｇ）が出土する。古代の土坑と考えられる。

ＳＫ－２６９（第 262 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 21 グリッドに位置する。東に SD-236 が近接し、東１m に SK-270、西 1.5m に SK-267 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　SK-267・269・270・271 の土坑４基は遺構の形状や覆土が類似する。平面形は円形だが、底面付近では長方形となる。長方形部分から見た中軸線はＮ－ 81°－Ｗで、規模は長径 1.57m、短径 1.50m、深さ 0.81m、長方形部分は長径 1.26m、短径 0.88m である。地山礫層上面となる土坑底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。確認面付近では大きく外傾する部分もあるが、底面に近い長方形部分はやや急な立ち上がりとなっている。　覆土の状態　覆土は SK-270 と類似する暗褐色土（第１層）と暗灰褐色土（第２層）である。第１層が暗褐色土ブロックや礫を少量含むほか、第２層は灰褐色粘土主体となる。全体としては緻密であるため、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器坏片５点（40 ｇ）、甕片５点（55 ｇ）のみであり、図化し得た遺物はない。坏は白色胎土で半球状の器形である。本遺構の年代は８世紀代と考えられる。



第 241 図　和田遺跡　土坑実測図⑫

ＳＫ－２７０（第 262・268 図、第 139 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20・21 グリッドに位置する。東に SK-271 が近接し、西 1 m に SK-269 が隣接する。　重複　SD-236 に切られる。　形状・規模　SK-267・269・270・271 の土坑 4 基は遺構の形状や覆土が類似する。平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 66°－W、規模は長径 1.52m、短径 1.44m、深さ 0.83m である。地山礫層上面となる土坑底面は細かい凹凸があり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。西壁上半のみは大きく外傾する。　覆土の状態　覆土は SK-269 と類似する暗褐色土（第 1 層）と暗灰褐色土（第 2 層）である。第 1 層が暗褐色土ブロックや礫を少量含むほか、第 2 層は灰褐色粘土主体となる。全体としては緻密であるため、自然堆積と考えられる。　遺物　チャート礫がまとまって出土する。大きな礫は 7 点あり、大きさは長さ 6.5cm（150 ｇ）～ 7.4cm（390 ｇ）、小礫は 11 点（330 ｇ）ある。土器類は少なく、図化した平瓦 1 点の他に土師器坏片 6 点（40 ｇ）、甕片 4 点（70 ｇ）、灰釉陶器片 1 点（10 ｇ）が出土する。土師器では、口縁が直立する模倣坏片や長胴甕片がある。遺物は 8 世紀代のものが多そうだが、時期は明確にし得ない。本遺構の時期は古代としておく。

ＳＫ－２７８（第 261・268 図、第 140 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19・20 グリッドに位置する。西に SX-205 が近接し、東 1.5m に SI-200b、SK-200a が隣接してある。　重複　SK-661 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 49°－W、規模は短径 2.24m、深さ 0.21m、長径は SK-661 に切られるため不明で、現状では 2.15m

である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　隣接するSX-205として遺物が取り上げられているため、本遺構に伴うことが確実な遺物は少ない。図化した土師器坏１と甕底部２は底面からやや浮いて出土する。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－２８６（第258・268図、第141表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－19グリッドに位置する。北にSI-200b、SK-200a・977が近接し、南２mにSK-285が隣接する。　**重複**　SI-199を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径0.94m、短径0.85m、深さ0.17mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は、図化した非ロクロ成形の土師器坏１の他、土師器坏片３点（20 g）、甕片20点（90 g）のみである。本遺構の年代は10世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－２９０（第258図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－19グリッドに位置する。北西にSK-289、北東にP-291、西にSI-200bが近接し、南西２mにSK-669が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径1.11m、短径1.04m、深さ0.30mである。底面はほぼ平坦で、壁際には比高５～10cmのなだらかな段が設けられる。壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器坏片３点（20 g）、甕片４点（20 g）、須恵器片１点（20 g）のみで、図化した遺物はない。土師器坏は半球状、内面黒色処理のロクロ成形坏、非ロクロ成形坏など各時期の遺物が混在する。半球状の坏を除いて考えれば、本遺構の時期は９世紀後半～10世紀前半といえようか。

ＳＫ－３００（第233・268図、第142表）

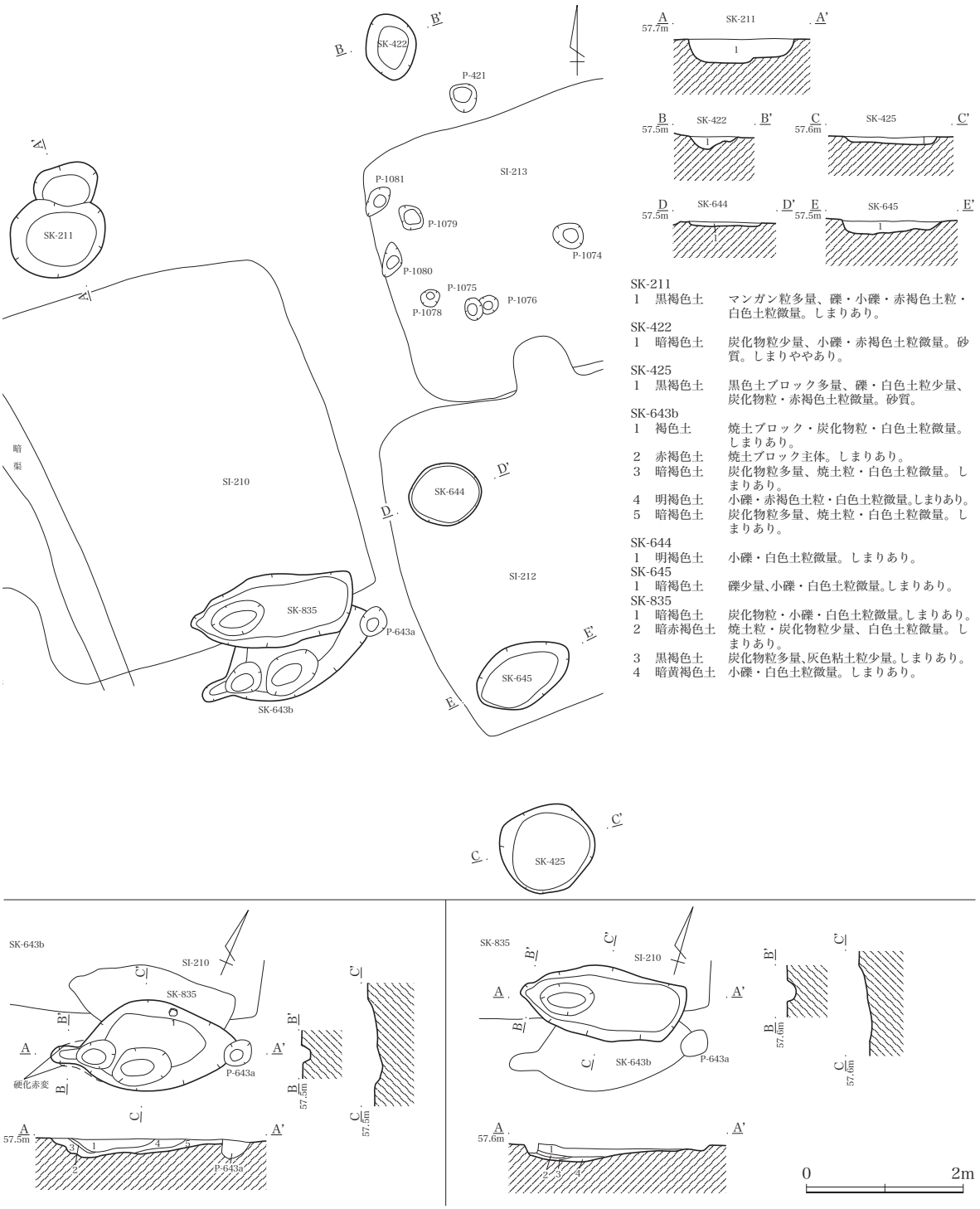
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－14グリッドに位置する。南にP-281、南西にSK-357・838A、P-282・296が近接し、北東1.5mにSK-694が隣接してある。　**重複**　P-327と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－74°－W、規模は長径1.29m、短径1.24m、深さ0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、図化した須恵器短頸壺２以外は土師器ばかりである。坏は半球状で厚手（１）、甕は「く」の字状口縁の武蔵型（３）である。この他土師器坏片２点（50 g）、甕片15点（300 g）がある。本遺構の年代は８世紀中葉頃と考えられる。

ＳＫ－３０８（第257・268図、第143表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－18グリッドに位置する。西１mにSK-303、東3.2mにSK-324が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－89°－Ｅ、規模は長径1.03m、短径0.80m、深さ0.21mである。底面は緩やかな凹凸があり、中央はピット状に窪み、壁は外傾して立ち上がる。ピット状部分の規模は径0.32×0.25m、底面からの深さ0.08mである。柱穴の可能性もあろうか。

覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる　**遺物**　遺物はわずかで、図化した須恵器瓶類１の他は、土師器甕片７点（55 g）、須恵器甕片２点（35 g）のみである。本遺構の年代は９世紀代であろうか。



SK-211
1　黒褐色土　マンガン粒多量、礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SK-422
1　暗褐色土　炭化物粒少量、小礫・赤褐色土粒微量。砂質。しまりややあり。

SK-425
1　黒褐色土　黒色土ブロック多量、礫・白色土粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。砂質。

SK-643b
1　褐色土　焼土ブロック・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土ブロック主体。しまりあり。
3　暗褐色土　炭化物粒多量、焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。
4　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
5　暗褐色土　炭化物粒多量、焼土粒・白色土粒微量。しまりあり。

SK-644
1　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

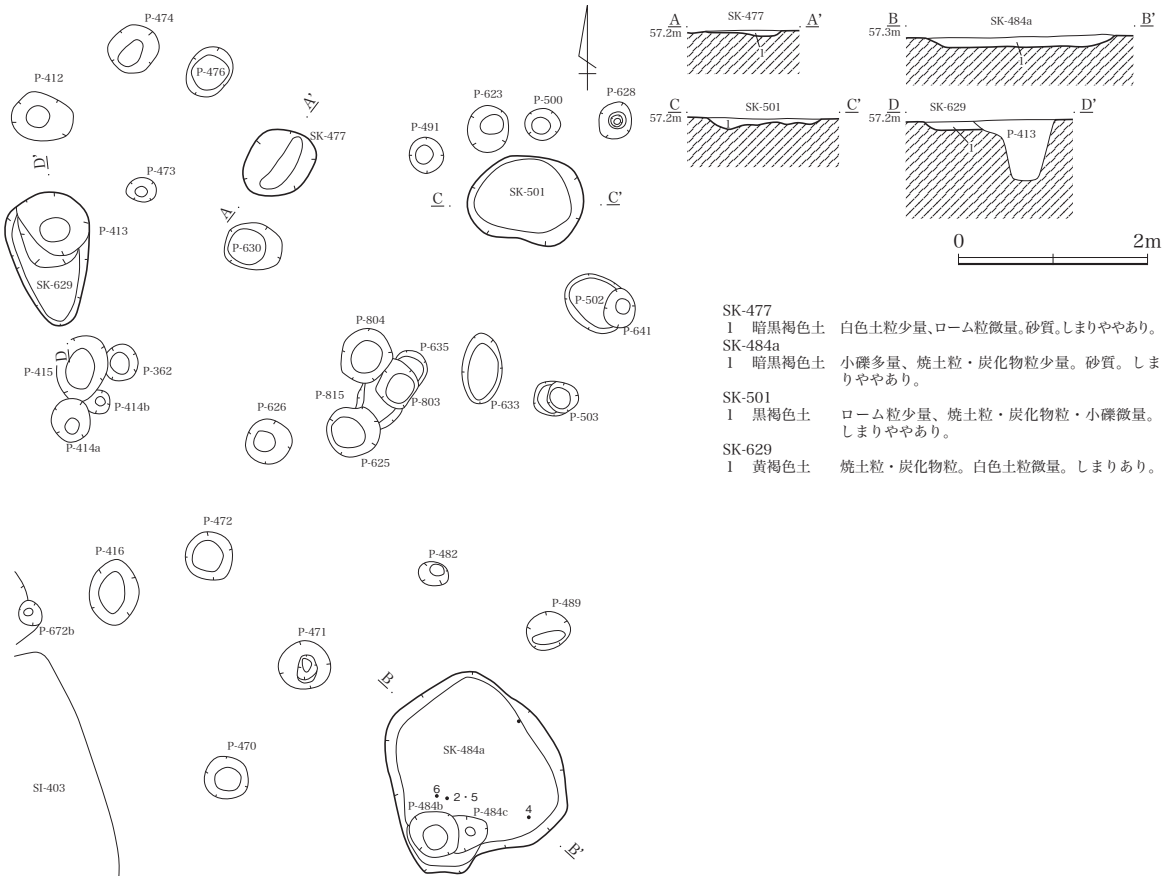
SK-645
1　暗褐色土　礫少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SK-835
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、白色土粒微量。しまりあり。
3　黒褐色土　炭化物粒多量、灰色粘土粒少量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 242 図　和田遺跡　土坑実測図⑬

ＳＫ－３１２（第 256 図、図版三七）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、K － 18 グリッドに位置する。南に SI-198 が近接し、東 1 m に SK-313、北 1.8m に P-311 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　形状や規模から、柱穴の可能性も考えられる。平面形は円形で、規模は長径 0.74m、短径 0.70m、深さ 0.56m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。南側にピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.25 × 0.22m、底面からの深さ 0.06m である。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第 1 層）と暗黄褐色土（第 2 層）であり、自然堆積と考えられる。



第 243 図　和田遺跡　土坑実測図⑭

遺物　遺物は土師器甕片２点のみで、図化した遺物はない。長胴か、あるいは 10 世紀以降の甕であろうか。本遺構の年代は古代とする。

ＳＫ－３１３（第 256・268 図、第 144 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北に P-314 が近接し、西１m に SK-312、東 1.2m に SK-315・316・317・318 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　形状や規模から、柱穴の可能性も考えられる。平面形は不定形で、深い円形部分の東側に浅い掘り込みが伴う。全体の規模は長径 1.25m、短径 1.25m、深さ 0.48m、円形部分のみでは長径 0.97m、短径 0.95m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。南側側にピット状の掘り込みがあり、規模は径0.3×0.2m、底面からの深さ 0.06m である。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）と暗黄褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　図化したのは土師器坏１と須恵器坏２で、このほか土師器甕片５点（25 ｇ）が出土する。本遺構の年代は９世紀後半と考えられる。

ＳＫ－３１９（第 256・268 図、第 145 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。東に SK-320 が近接し、西 1.8m に SI-198 が隣接する。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 20°－Ｅ、規模は長径 1.10m、短径 0.64m、深さ 0.16m である。底面は緩やかな凹凸があり、北端には土坑底面より 10cm ほど低くなる楕円形部分がある。壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）である。礫を多量に含

むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は硬質な須恵器甕１のみで、外面には幅の狭い平行叩きが施される。本遺構の時期は古代とするが、９世紀頃の可能性もあろうか。

ＳＫ－３２０（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。西に SK-319、北に SK-318 が近接し、東１ｍに SK-321、北１ｍに SK-317 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｗ、規模は長径 1.44m、短径 0.93m、深さ 0.14m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。北寄りにピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.35 × 0.31m、底面からの深さ 0.08m である。北壁と東壁には半円形の突出部があるが、これらもピット状の掘り込みであろう。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器坏片２点（10 ｇ）と須恵器片１点（15 ｇ）のみで、図化した遺物はない。古代（８～９世紀）の遺構と考えられよう。

ＳＫ－３２１（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。東に SK-322、西１ｍに SK-320・317・318 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.17m、短径 1.10m、深さ 0.30m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は須恵器片２点（20 ｇ）のみで、図化した遺物はない。古代（８～９世紀）の遺構と考えられよう。

ＳＫ－３２３（第 255・268 図、第 146 表）

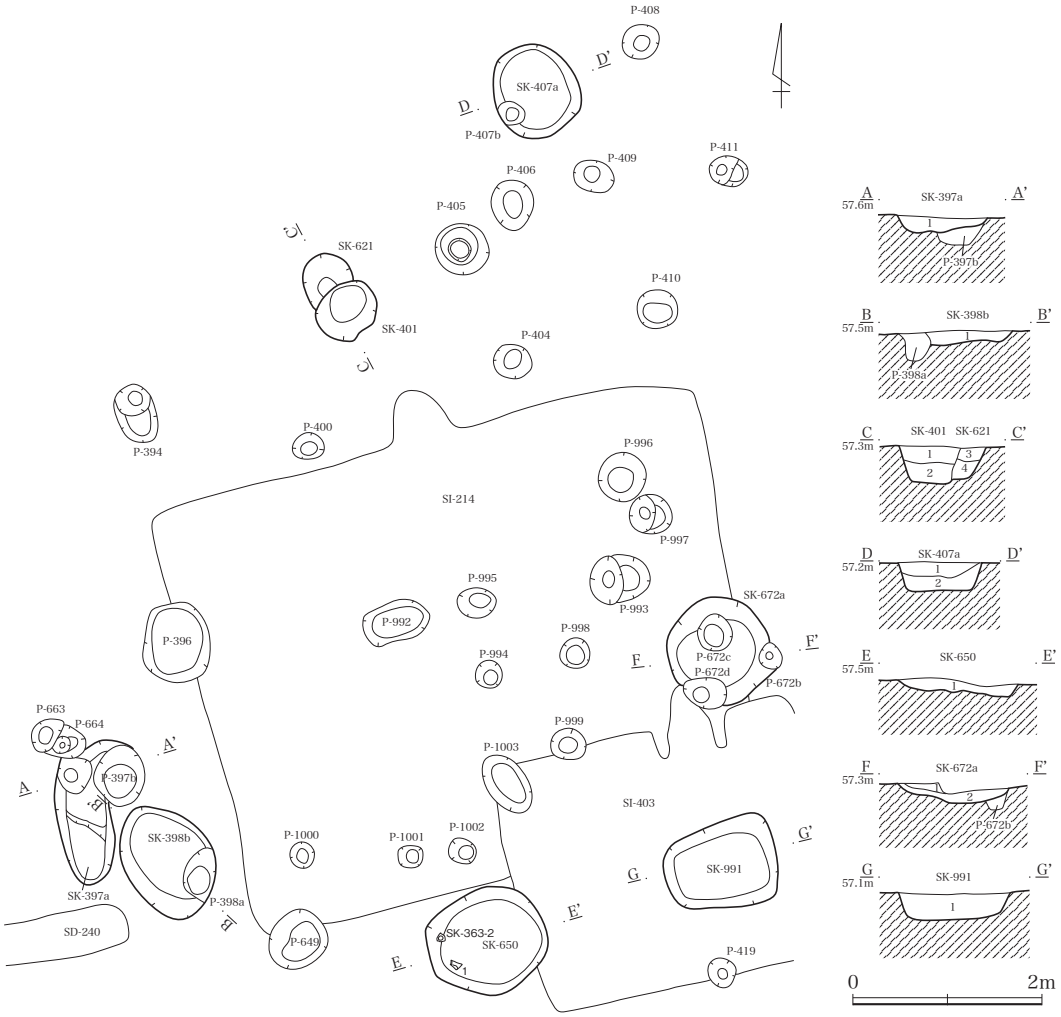
位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。南に SK-322、北東に SK-950 が近接し、西１ｍに SK-321 が隣接してある。　**重複**　遺構確認の状況などから、SI-208 を切るとみられる。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.28m、短径 1.30m、深さ 0.20m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、平瓦１のみ図化した。この他土師器坏片１点、甕片４点、須恵器坏片１点、甕片１点（計 80 ｇ）が出土するが、小破片ばかりである。本遺構の年代は８世紀後葉頃とみられる。

ＳＫ－３２４（第 257・269 図、第 147 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 18 グリッドに位置する。西３ｍに SK-308、南東 3.5m に SB-951 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.30m、短径 1.10m、深さ 0.24m である。北寄りの楕円形部分が深く、南側の平坦面は底面より約５cm 高い。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）である。小礫を多量に含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、図化した須恵器甕１の他土師器甕片６点（60 ｇ）、須恵器片１点（20 ｇ）である。土師器甕には長胴、球胴、武蔵型がある。本遺構の年代は８世紀代と考えられる。

ＳＫ－３３３（第 247・269 図、第 148 表、図版三七）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 18 グリッドに位置する。西に P-332、東に SK-335 が近接し、北東 1.8m に P-334 が隣接してある。　**重複**　P-619 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.58m、短径 0.54m、深さ 0.20m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。



SK-397a
1　黒褐色土　礫・小礫・白色土粒少量、ローム粒微量。しまりあり。
SK-398b
1　暗褐色土　ロームブロック・小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
SK-401・621
1　黒褐色土　ローム粒少量、焼土粒・炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。（SK-401覆土）
2　暗褐色土　ロームブロック多量、ローム粒少量。粘質。しまりあり。(SK-401覆土)
3　暗褐色土　ロームブロック多量、白色土粒少量、焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。（SK-621覆土）
4　暗褐色土　ロームブロック多量、ローム粒少量。粘質。しまりあり。(SK-621覆土)
SK-407a
1　暗褐色土　ローム粒・白色土粒多量、焼土粒・炭化物粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒少量、白色土粒微量。しまりなし。
SK-650
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-672a
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒・礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-991
1　明灰褐色土　炭化物粒・礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。

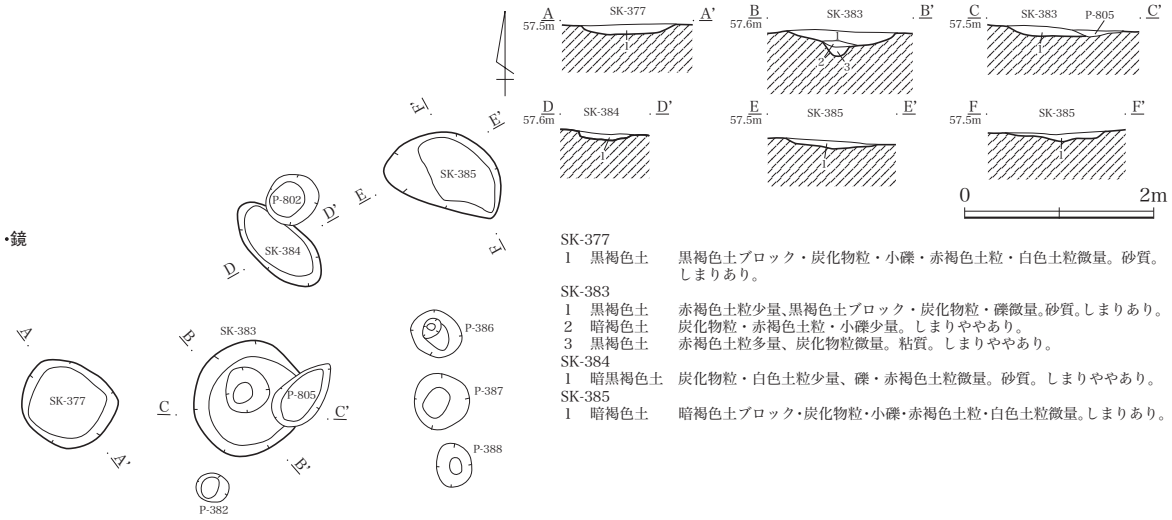
第 244 図　和田遺跡　土坑実測図⑮

覆土の状態　土層堆積状況は、近接する SK-335 や SK-336 に似る。覆土は２層で、焼土と炭化物を多く含む。全体としては自然堆積と考えるが、炭化物主体となる第２層は何らかの焼成行為により形成されたものとみられる。　**遺物**　遺物はわずかで、炭化物層である第２層の上面付近から出土するものが多い。図化した遺物は土師器甕１とチャート礫２で、この他土師器坏片１点（5 ｇ）、甕片 23 点（340 ｇ）がある。本遺構の時期は 10 世紀と考えられる。10 世紀中葉～後葉の可能性もあろうか。

ＳＫ－３６３（第 253・269 図、第 149 表、図版三七・五七）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｌ－ 17 グリッドに位置する。南に SB-951 が近接し、北 1.8m に P-346・347・348 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 2°－Ｗ、規模は長径 1.58m、短径 1.18m、深さ 0.27m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。

覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、第１層は焼土を、第２層は焼土と炭



第 245 図　和田遺跡　土坑実測図⑯

化物をわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　底面から５～ 15cm 浮いた状態で多数の須恵器甕片２と礫が出土する。甕片は１個体とみられ、破片同士はさほど重複せずにほぼ水平の状態で出土するため、面としてとらえることが可能である。第２層の堆積が終了する前後のある段階に意図的に埋めたものであろう。この甕は SK-650 出土の破片とも接合しており、胴部下半の接合面付近の内外面に木葉痕が認められる。須恵器坏１は須恵器片周辺からの出土である。図化以外には、土師器坏片７点（50 ｇ）、粘土塊１点（１ｇ）、須恵器坏片２点（20 ｇ）、甕片 24 点（1,980 ｇ）が出土する。土師器甕には武蔵型のほか、器壁の厚い個体もある。本遺構の年代は、９世紀前葉～中葉と考えられる。

ＳＫ－３９８ｂ（第 244 図）

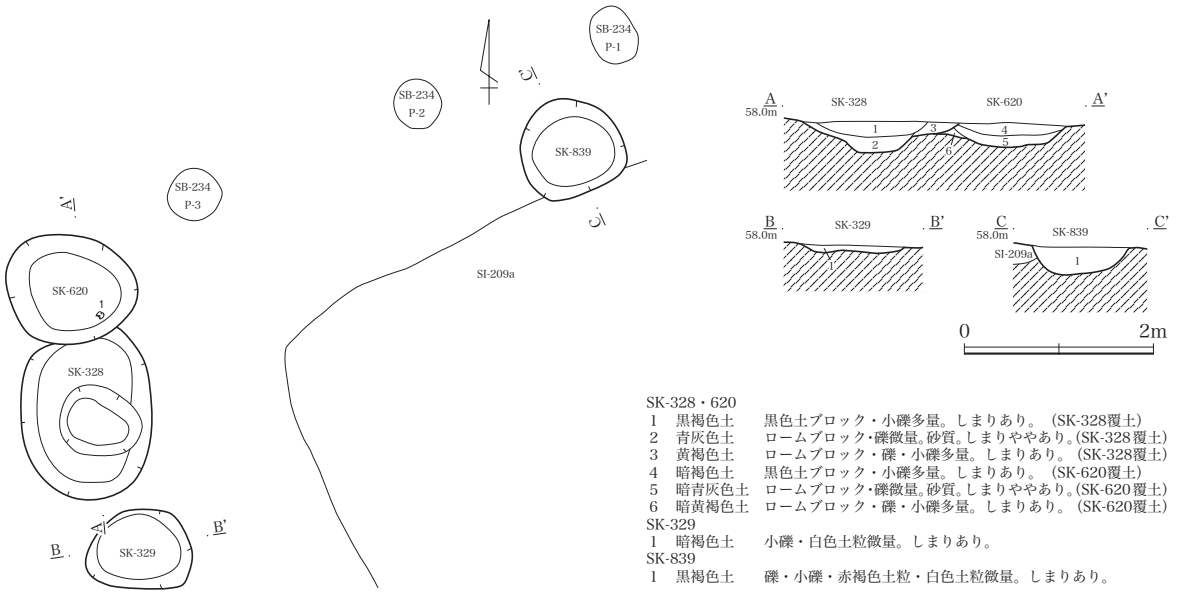
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。西に SD-240、北に P-397b・664、東に SI-214 が近接し、南東１ｍに P-649 が隣接する。　**重複**　P-398a に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 25°－Ｗ、規模は長径 1.28m、短径 0.93m、深さ 0.15m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第１層）である。少量のロームブロックを含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器甕片４点（10 ｇ）、須恵器坏片１点（５ｇ）で、甕は武蔵型だろう。図化した遺物はない。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－３９９（第 236 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-554・807・824・829・830、北 1.2m に SK-555 が隣接する。　**重複**　SK-395・423 を切る。SK-364 とも重複するが、新旧関係は不明である。**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 49°－Ｗ、規模は長径 1.09m、短径 1.09m、深さ 0.06m である。底面は緩やかな凹凸があり､壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は「く」の字状口縁の武蔵型甕片１点（20 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の時期は、重複関係にある SK-423 とほぼ同様の９世紀代としておく。

ＳＫ－４０１（第 244 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。南１ｍに SI-214、東１ｍに P-405 が隣接して



第 246 図　和田遺跡　土坑実測図⑰

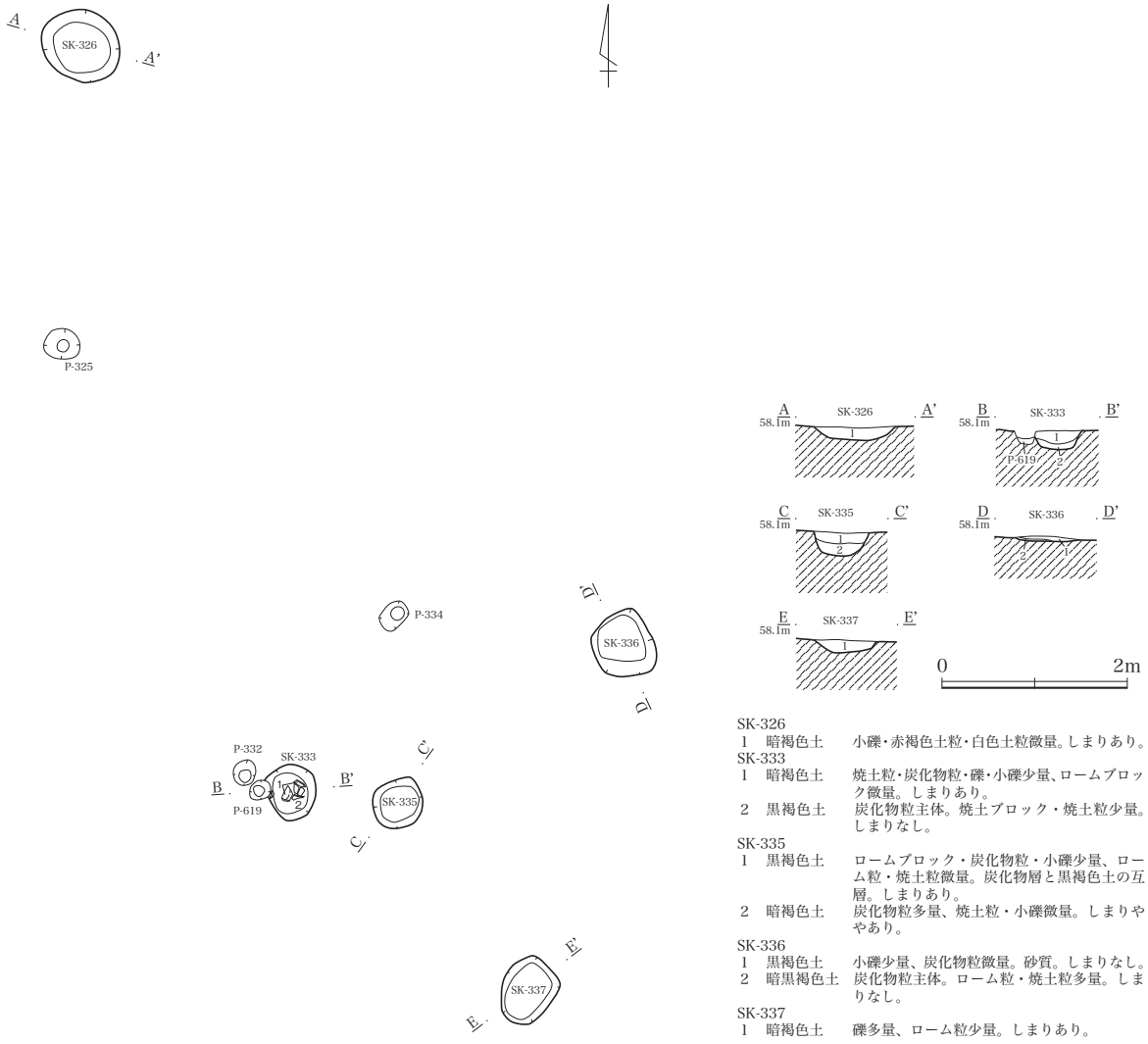
ある。　**重複**　SK-621 を切る。　**形状･規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.55m、深さ 0.40m である。底面は平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。規模はやや大きいが、柱穴の可能性もあろう。　**覆土の状態**　覆土は焼土や炭化物をわずかに含む黒褐色土（第１層）と多量のロームブロックを含む暗褐色土（第２層）である。第１層は緻密であり自然堆積と考えられるが、第２層は人為堆積の可能性がある。　**遺物**　武蔵型甕と球胴甕の破片が４点（40 ｇ）出土するのみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－４０７ａ（第 244・269 図、第 150 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。東に P-408、南に P-409 が近接する。　**重複**　P-407b と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状･規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 24°－Ｗ、規模は長径 1.00m、短径 0.80m、深さ 0.19m である。底面は平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は焼土や炭化物をわずかに含む暗褐色土（第１層）と少量のローム粒などを含む黒褐色土（第２層）である。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は底径の小さい武蔵型甕（４）が主体で、土師器坏は器壁の厚い白色胎土のもの（２）である。図化以外には土師器坏片４点（20 ｇ）、甕片 20 点（90 ｇ）、須恵器片４点（10 ｇ）が出土する。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－４２２（第 242・269 図、第 151 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。南 1m に SI-213、P-421、北 1.3m に SK-650、SI-403 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 11°－Ｗ、規模は長径 0.85m、短径 0.76m、深さ 0.16m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は「く」の字状口縁の武蔵型甕１のみであり、図化以外に甕片３点（20 ｇ）が出土している。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。



第 247 図　和田遺跡　土坑実測図⑱

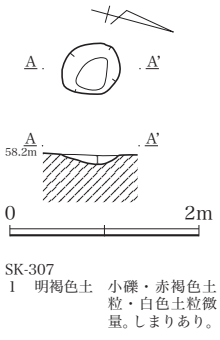
ＳＫ－４２３（第 236・269 図、第 152 表、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-830、北に SK-556・557・558 が近接する。　重複　SK-435 を切り、SK-399 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 27°－Ｗ、規模は長径 1.34m、短径 0.91m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。北寄りにはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.32 × 0.24m、底面からの深さ 0.08m である。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　図化した須恵器坏１と須恵器甕２の他、土師器坏片２点（20 ｇ）、「コ」の字状口縁の武蔵型甕甕片 25 点（80 ｇ）、須恵器坏片８点（30 ｇ）、須恵器甕片１点（20 ｇ）が出土する。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－４２５（第 242・270 図、第 153 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16 グリッドに位置する。北１ｍに SI-212、南２ｍに P-426 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 1.18m、短径 1.10m、深さ 0.10m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む砂質の黒褐色土（第１層）である。多量の黒色土ブロックも含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考

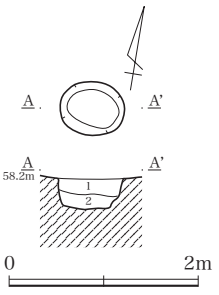
えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器は長胴甕・小形甕片、須恵器は坏・蓋片が認められる。図化以外には、土師器甕片５点（50 ｇ）、須恵器坏片２点（10 ｇ）がある。遺物全体としては８世紀前半頃と見られるが、須恵器蓋から本遺構の年代を７世紀末～８世紀初頭と考えた。



第 248 図　和田遺跡土坑実測図⑲

ＳＫ－４４１（第 237 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。北に SI-220、南に SI-61 が近接し、北東１ｍに SI-221 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.78m、短径 0.76m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器片５点（60 ｇ）と須恵器片２点（70 ｇ）のみで、図化した遺物はない。小型・半球状の土師器坏や口縁部が内傾する土師器鉢などから、本遺構の年代は７世紀後半頃かと考えられる。



第 249 図　和田遺跡土坑実測図⑳

ＳＫ－４４５ａ（第 238・270 図、第 154 表）

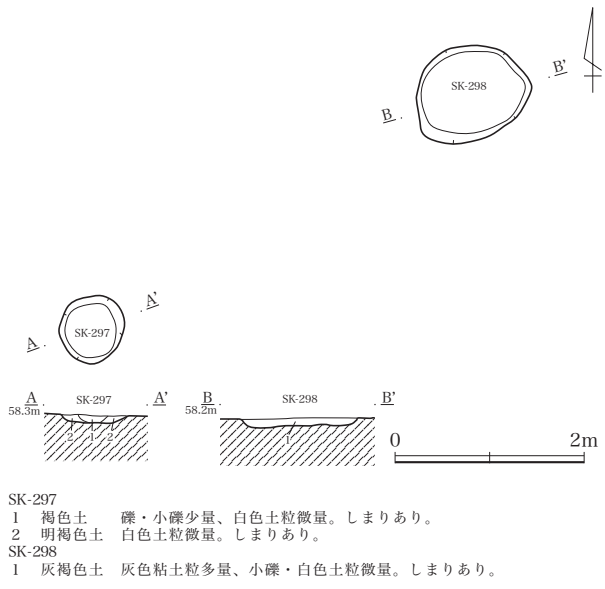
位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14・15 グリッドに位置する。北に P-447・448、南に P-446、西に SI-219 が近接し、東 2.5m に SK-222 が隣接してある。　**重複**　P-445b と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.15m、短径 1.15m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の礫などを含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、P-445b の遺物が混入している可能性もある。図化以外には、土師器坏片１点（３ｇ）、甕片 13 点（70 ｇ）、須恵器片５点（60 ｇ）、粘土塊２点（10 ｇ）が出土する。土師器甕は長胴甕とみられる。本遺構の年代は７世紀後葉から８世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－４５２（第 237・270 図、第 155 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-222 が近接し、北 1.5m に SK-522 が隣接してある。　**重複**　SK-451 と重複するが、新旧関係は不明である。調査は本遺構が先であることから、本遺構の方が新しい可能性はあるだろう。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.40m、短径 1.34m、深さ 0.19m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は礫を少量含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　須恵器は甕主体で坏はわずか、土師器甕は長胴が多く、武蔵型が若干混じる。土師器坏は図化した１・２などだが、ともに器壁の薄いものが多く、平底はない。図化しなかった遺物は、土師器坏片 38 点（300 ｇ）、甕片 169 点（1,310 ｇ）、須恵器片 11 点（280 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－４６４（第 241・270 図、第 156 表）

遺物　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。西に SI-212、東に SK-465、P-814・816 が近接し、北 1.3m に SK-466 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.67m、短



第 250 図　和田遺跡　土坑実測図㉑

径 0.61m、深さ 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は礫を多く含む暗褐色土（第 1 層）である。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　須恵器は坏・蓋が出土する。土師器は口縁部が外傾する坏主体で、口径は 14cm ほどである。図化以外には土師器坏片 10 点（20 ｇ）、甕片 17 点（60 ｇ）、須恵器坏片 1 点（５ｇ）がある。本遺構の年代は８世紀前葉頃となろうか。

ＳＫ－４６９（第 241・270 図、第 157 表）

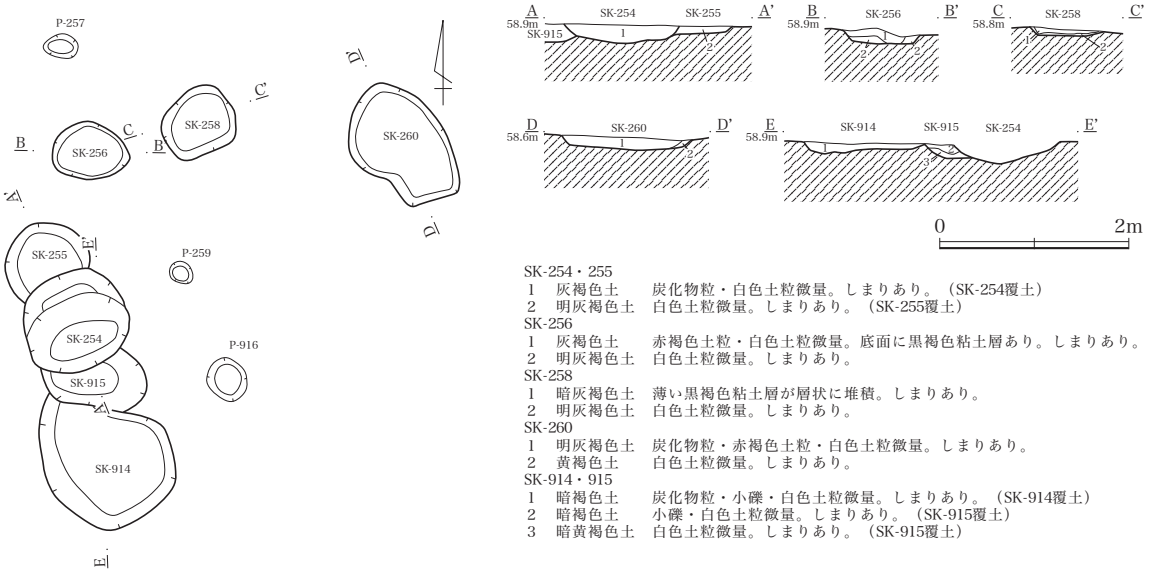
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。南に SK-468、南西に P-417・418、北東に SK-484a、P-484b・484c が近接し、南 1 m に SI-228 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 47°－Ｅ、規模は長径 1.45m、短径 1.21m、深さ 0.07m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗黒褐色土（第 1 層）で、少量の焼土のほか多量の炭化材を含んでいる。小礫も多量に含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、図化以外には土師器坏片６点（40 ｇ）、甕片９点（50 ｇ）、須恵器片 1 点（５ｇ）が出土する。須恵器坏は図化したものを含め３個体確認できる。本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－４７７（第 243・270 図、第 158 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。南に P-630 が近接し、北 1m に P-476、西 1 m に P-473、東 1 m に P-491 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 55°－Ｅ、規模は長径 0.83m、短径 0.68m、深さ 0.06m である。底面はほぼ平坦で東に寄っており、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗黒褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は図化した須恵器坏 1 のみである。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－４８４ａ（第 243・270 図、第 159 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。南西に SK-469 が近接し、南 1 m に SI-228、南東 1.2m に SK-485 が隣接してある。　**重複**　P-484b･484c と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は不整方形で、Ｎ－ 37°－Ｗ、規模は長径 1.97m、短径 1.84m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗黒褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。多量の小礫のほか、少量の焼土や炭化物も含む。　**遺物**　遺物は土師器のみで、甕と台付甕は武蔵型、坏は胎土白色で厚手な平底気味のもの（1・2）が主体である。坏は内面漆仕上げ（1・2）や黒色処理（3）がある。鉢 4 は底面直上から出土する。図化しなかった遺物は土師器坏片 33 点（90 ｇ）、甕片 71 点（560 ｇ）である。遺物は隣接する SK-485 と類似しており、同時期の可能性があるだろう。本遺構の年代は８世紀後葉でもやや古い段階と考えられる。



第 251 図　和田遺跡　土坑実測図㉒

ＳＫ－４８５（第 241・270 図、第 160 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。南西 1 m に SI-228、北西 1.3m に SK-484a、P-484b・484c が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は不整楕円形で、土坑２基の重複のようにも見える。中軸線はＮ－ 50°－Ｅ、規模は長径 2.25m、短径 1.49m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦だが、南西部は北西部に比べ５cm ほど高くなっている。壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる部分が多い。　覆土の状態　覆土は炭化物や焼土を含む暗黒褐色土（第１層）である。礫も多く含んでいるが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は一定量ある。土師器甕は武蔵型主体で、小さな長胴がわずかに見られる。土師器坏は胎土白色で厚手な平底気味のもの（２）が多く、器壁の薄い個体も若干ある。図化しなかった遺物は、土師器坏片６点（120 ｇ）、甕片 99 点（690 ｇ）、須恵器片 12 点（100 ｇ）である。本遺構の年代は、８世紀後葉でもやや古い段階と見られる。

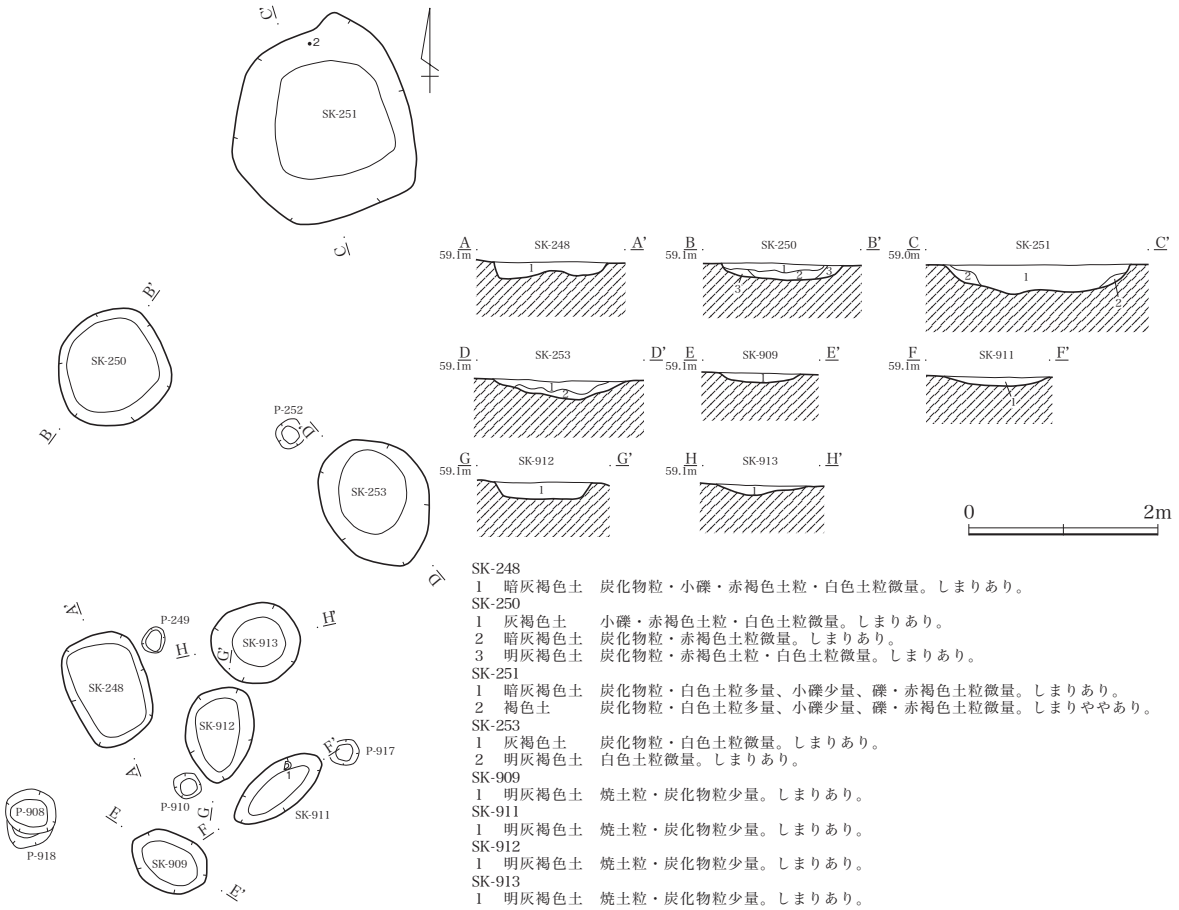
ＳＫ－５１３（第 231 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。東 1.5m に SK-526、P-525、南西２m に SK-485 が隣接してある。　重複　P-512 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 6°－Ｅ、規模は長径 0.90m、短径 0.64m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土はわずかな焼土などを含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。

遺物　遺物は胎土白色で厚手な平底の土師器坏片２点、須恵器蓋片１点のみで、実測した遺物はない。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－５２８（第 231・270 図、第 161 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-511、西に P-527、北東に SK-695・698 が近接し、北 1m に SK-828 が隣接してある。　重複　SK-529a に切られる。P-529b と重複するとみられるが、新旧は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 83°－Ｗ、規模は残存する長径が 1.53m あり、短径は 1.01m、深さは 0.11m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は短く外傾して立



第 252 図　和田遺跡　土坑実測図㉓

ち上がる。　**覆土の状態**　多量の焼土のほか、少量の炭化材などを含む黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　主体となる遺物は底部がやや大きめな土師器武蔵型甕で、器壁の薄い半球状の土師器坏もある。図化以外には、土師器片 60 点（210 ｇ）、須恵器片４点（10 ｇ）が出土する。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－５２９ａ（第 231・271 図、第 162 表）

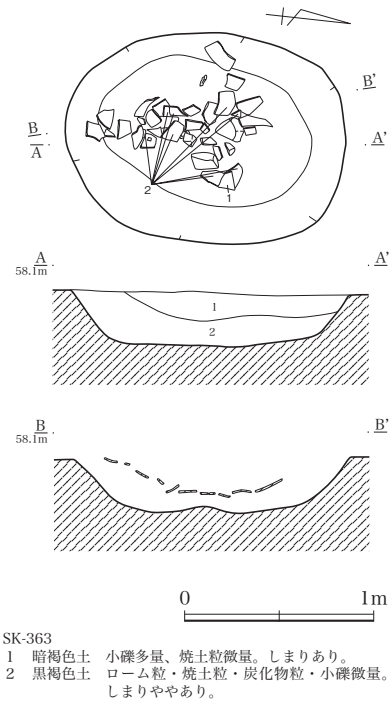
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。北東に SK-695・698、南西に SK-511、南東に SK-536 が隣接する。　**重複**　SK-528 を切る。P-529b と重複するが、新旧は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 70°－Ｗ、規模は長径 1.05m、短径 0.80m、深さ 0.24m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層であり、下層ほど多くの炭化物を含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は須恵器坏主体で、甕、瓶も出土する。土師器は坏や甕などで、甕は武蔵型のほか球胴の様な破片が認められる。土師器坏は半球状で薄手のものである。図化以外には土師器甕片 15 点（110 ｇ）と須恵器片 15 点（90 ｇ）がある。高台付坏３や土師器甕等８世紀代とみられる遺物もあるが、これらは重複する P-529b の遺物の可能性もあるだろう。本遺構の年代は９世紀と考えられる。

ＳＫ－５３６（第 231・271 図、第 163 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。東１ｍに SB-235、北１ｍに SK-698、西 1.3m

に SK-511 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は不整方形で、中軸線はＮ－ 62°－Ｅ、規模は長径 1.61m、短径 1.32m、深さ 0.09m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。

遺物　図化した須恵器高台付坏１の他には、小型球胴形の土師器甕片１点（20 ｇ）、須恵器蓋片１点（10 ｇ）が出土した。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。



SK-363
1　暗褐色土　小礫多量、焼土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物粒・小礫微量。しまりややあり。

第 253 図　和田遺跡　土坑実測図㉔

ＳＫ－５３８ａ（第 233・271 図、第 164 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。南に P-458・539 が近接し、北 1.3m に SK-523、西 1.2m に P-514 が隣接してある。　**重複**　P-538b・538c・538d と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 30°－Ｅ、規模は長径 1.61m、短径 1.06m、深さ 0.17m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。

覆土の状態　覆土は焼土や炭化物を含む黒褐色土（第１層）である。黒褐色土ブロックも含んでいるが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　須恵器は甕や高台付坏、土師器は武蔵型甕や胎土白色で厚手な平底気味の坏が出土する。図化以外には土師器坏片３点（70 ｇ）、甕片７点（110 ｇ）、須恵器甕片１点（20 ｇ）がある。須恵器高台付坏２は他の遺物より古く、重複する P-538b・538c・538d の遺物が混入した可能性もある。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

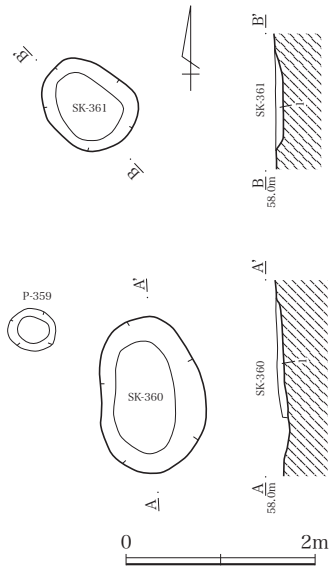
ＳＫ－５４４Ａ（第 232・271 図、第 165 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-694、西に P-692、東に SK-845 が近接してある。　**重複**　SK-550・567 を切る。

形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 1.12m、短径 1.10m、深さ 0.22m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は図化した須恵器坏（１）１点のみである。平面図では SK-550 内に見えるが、SK-544A 覆土中の出土である。本遺構の年代は、９世紀前葉と考えられる。

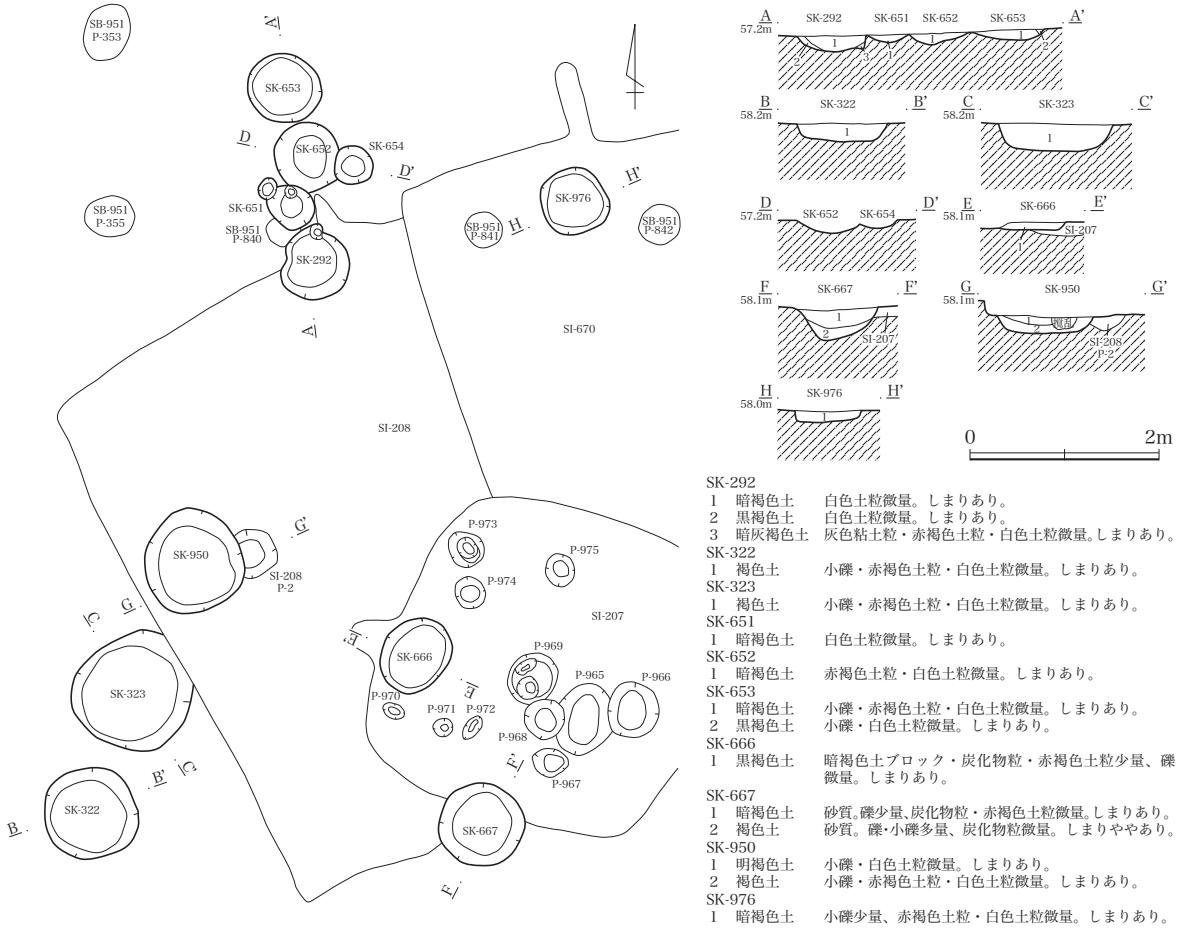
ＳＫ－５５０（第 232・271 図、第 166 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。北西に SK-694、北東に P-691A が近接してあり、東１ｍに SK-599・845 が隣接してある。　**重複**　SK-544A・567 に切られる。　**形状・規模**　平面形は円形ないし楕円形と推定されるが、SK-544A に大きく切られるため確定できない。現状での規模は径 1.10m、深さ 0.23m である。底面は丸みを持ち、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物な



SK-360
1　黒褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-361
1　暗褐色土　小礫少量、礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 254 図　和田遺跡　土坑実測図㉕



SK-292
1　暗褐色土　白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　白色土粒微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　灰色粘土粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-322
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-323
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-651
1　暗褐色土　白色土粒微量。しまりあり。
SK-652
1　暗褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-653
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-666
1　黒褐色土　暗褐色土ブロック・炭化物粒・赤褐色土粒少量、礫微量。しまりあり。
SK-667
1　暗褐色土　砂質。礫少量、炭化物粒・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　砂質。礫・小礫多量、炭化物粒微量。しまりややあり。
SK-950
1　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-976
1　暗褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 255 図　和田遺跡　土坑実測図㉖

どをわずかに含む緻密な明黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は図化した須恵器坏１のみで、底部は回転ヘラケズリが施される。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－５５５（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西１ｍに SI-225、SK-675、東に SK-556・557 が近接し、南２ｍに SK-364・399 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－９°－Ｅ、規模は長径 1.20m、短径 0.67m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はローム粒を多量に含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は須恵器小形壺１点（10 ｇ）のみである。７～９世紀の土坑と考えられる。

ＳＫ－５５６（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-423、西に SK-555、東 1.3m に SK-565、P-566 が隣接してある。　**重複**　SK-557・558 に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 34°－Ｗ、規模は長径 0.89m、短径 0.56m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は褐色土（第１層）である。褐色土ブロックを多量に含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器甕片１点、鉢片１点の計２点（40 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は７世紀代と考えられる。

ＳＫ－５５８（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-555、東 1.2m に SK-565、P-566 が隣接してある。　重複　SK-556 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 78°－Ｅ、規模は長径 0.60m、短径 0.41m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は赤褐色土（第１層）である。少量の礫のほか、焼土ブロックと炭化物を多量に含むことから、人為堆積と考える。　遺物　出土遺物は土師器坏片１点（10 ｇ）のみで、図化した遺物はない。混入の可能性もあるが、本遺構の年代としては古代の可能性があるものとする。

ＳＫ－５６０（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。東に P-810、北に SK-808・824 が近接してあるほか、北西 1.4m に SK-554 が隣接してある。　重複　SK-807･809 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　北側で SK-807・809 と重複するため平面形は明確にしえないが、残存部分からすると円形と推定される。規模は径 0.85m、深さ 0.20m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）である。第２層は黒褐色土ブロックなども含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　口縁部「コ」の字状の武蔵型甕１点（10 ｇ）、底径の小さな須恵器坏片２点（30 ｇ）、須恵器甕片２点（70 ｇ）が出土する。図化した遺物はない。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－５６４（第 234 図）

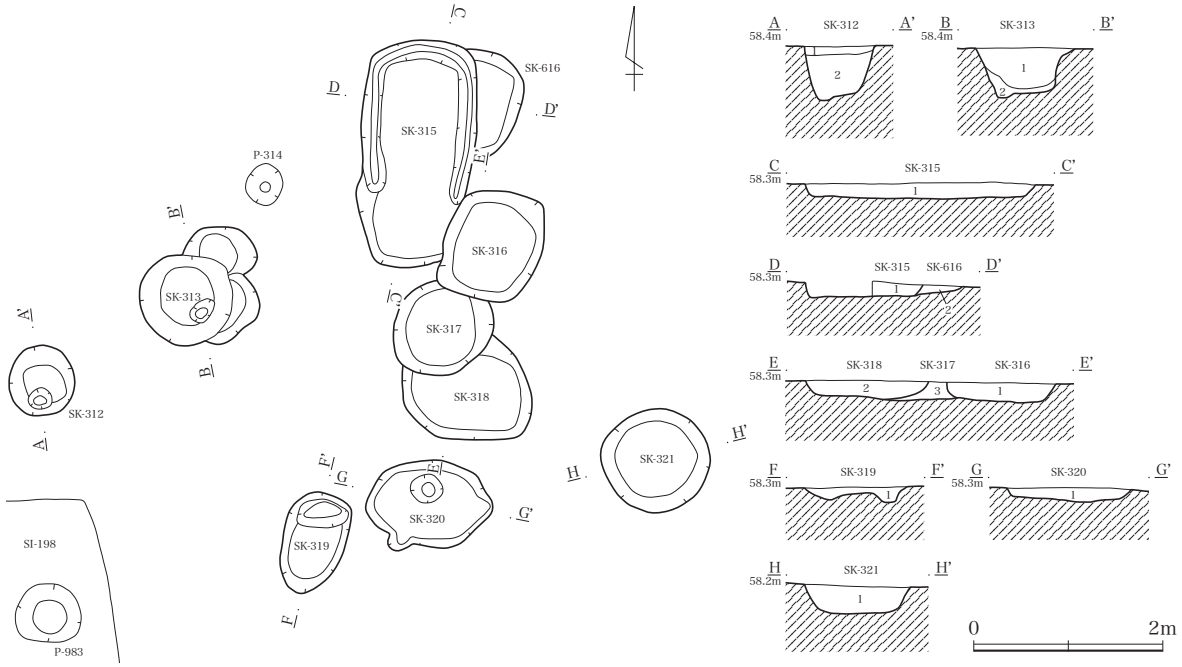
位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。西に P-810、東 1.5m に SK-572、P-573・574 が隣接してある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は楕円形で､中軸線はＮ－ 40°－Ｅ､規模は長径 0.74m、短径 0.54m、深さ 0.64m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　土層を確認していないため不明である。　遺物　出土遺物は土師器坏片３点（10 ｇ）のみで、内面黒色処理されたロクロ成形坏が含まれる。図化した遺物はない。本遺構の年代は８世紀後葉～９世紀と考えられる。

ＳＫ－５６７（第 232・271 図、第 167 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部､Ｏ－ 14 グリッドに位置する。北東に SK-845､P-548A､東に P-548B が近接し、北１ｍに P-691A が隣接してある。　重複　SK-550 を切り、SK-544A・599 に切られる。　形状・規模　平面形は不整円形で、規模は長径 0.95m、短径 0.89m、深さ 0.18m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土はローム粒や白色土粒を多量に含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器が武蔵型甕や胎土白色で厚手な坏、須恵器は鉢と甕である。図化した遺物は須恵器鉢１と甕２で、図化以外は土師器坏片２点（30 ｇ）、甕片３点（30 ｇ）、須恵器片１点（30 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－５６９（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。西に SK-570、南に SK-593 が近接し、東２ｍに SK-596 が隣接する。　重複　SK-811・812 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　南北両側が SK-811・812 と重複するため全体が確認できないが、平面形は円形とみられる。規模は径 0.60m、深さ 0.17m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は少量の炭化物などを



SK-312
1　褐色土　　小礫少量、白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-313
1　暗褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-315・616
1　褐色土　　炭化物粒・礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。（SK-315覆土）
2　暗褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。（SK-616覆土）
SK-316・317・318
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-316覆土）
2　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-318覆土）
3　明褐色土　小礫微量。しまりあり。（SK-317覆土）
SK-319
1　暗褐色土　礫多量、白色土粒少量。しまりあり。
SK-320
1　暗褐色土　白色土粒少量、小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-321
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 256 図　和田遺跡　土坑実測図㉗

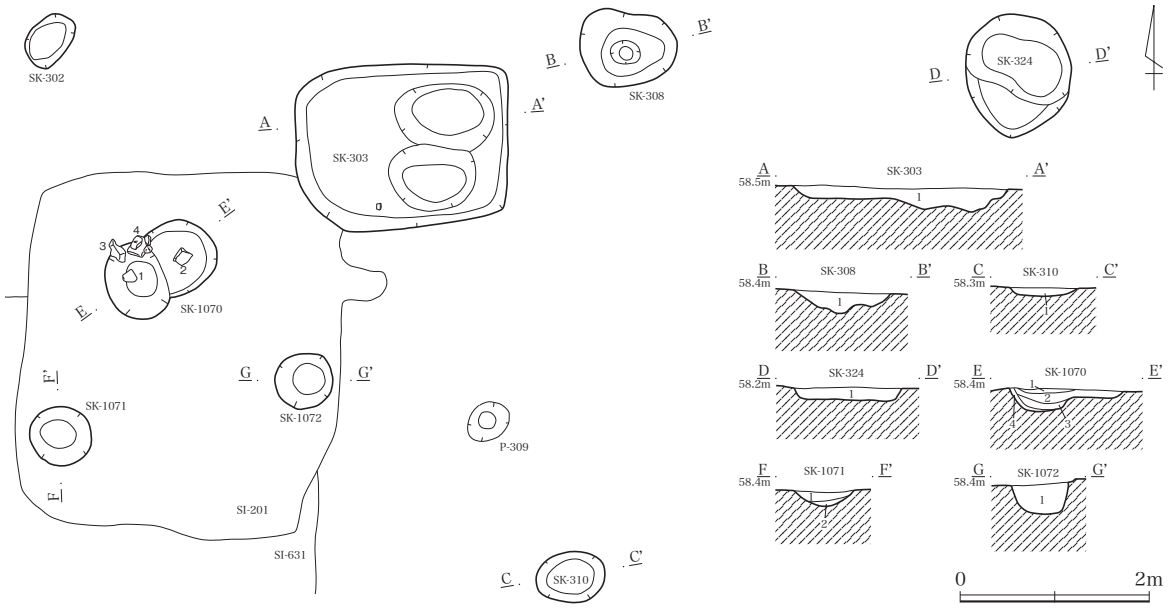
含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片２点（10 ｇ）と須恵器坏片１点（５ｇ）で、図化した遺物はない。本遺構の年代は古代（９～ 10 世紀か）と考えられる。

ＳＫ－５７０（第 234・271 図、第 168 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南東に SK-593、北東に SK-569･811 が近接し、西 1.5m に SK-565 が隣接する。　**重複**　SK-812 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.77m、短径 0.70m、深さ 0.14m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）と暗褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物は薄手で丁寧に調整される土師器坏１と灰釉陶器椀２のみで、他に土師器坏片３点の出土がある。本遺構の年代は９世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－５７２（第 235・271 図、第 169 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南に P-575 が近接し、北 1.2m に P-571 が隣接してある。　**重複**　P-573 に切られる。P-574 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.12m、短径 1.00m、深さ 0.07m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は須恵器坏２個体のみであり、内１点を図化した（１）。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。



SK-303
1　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-308
1　明褐色土　　赤褐色土粒少量。しまりあり。
SK-310
1　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-324
1　暗褐色土　　小礫多量。しまりややあり。

SK-1070
1　暗褐色土　　白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
4　暗黄褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-1071
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　　炭化物粒多量。しまりあり。
SK-1072
1　暗褐色土　　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。

第 257 図　和田遺跡　土坑実測図㉘

ＳＫ－５８２（第 235・271 図、第 170 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 13 グリッドに位置する。北に SK-583 が近接し、東１m に P-585・604 が隣接してある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は楕円形で､中軸線はＮ－ 88°－W､規模は長径 1.32m､短径 0.81m、深さ 0.09m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。

覆土の状態　覆土は黒褐色土（第１層）と灰褐色土（第２層）で、第１層は砂質である。両層とも小礫を比較的多く含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　図化した遺物は武蔵型甕１と丸瓦２で、図化以外には土師器坏片３点（10 ｇ）、甕片８点（50 ｇ）、須恵器片８点（50 ｇ）がある。土師器坏には内面黒色処理や白色胎土のものなどがある。本遺構の年代は８世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－５８３（第 235・271 図、第 171 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 13 グリッドに位置する。南に SK-582 が近接し、南東１m に P-604 が隣接してある。　重複　P-585 を切る。SK-603 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 63°－W、規模は長径 1.22m、短径 0.81m、深さ 0.17m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は黒褐色土（第１層）と灰褐色土（第２層）であり、第１層は砂質で少量の炭化物を含む。両層とも小礫を比較的多く含んでいるが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　須恵器は坏と甕、土師器は高台付坏・坏・甕などが出土する。甕には武蔵型の他球胴に近いものがあり、坏ではロクロ成形ではないものも認められる。図化した土師器高台付坏１と須恵器甕２以外には､土師器坏片２点（20 ｇ）､甕片 29 点（230 ｇ）､須恵器片５点（150 ｇ）がある。本遺構の年代は９世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－５８４（第 235 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。南東に P-602 が近接し、北１m に SK-586、北東 1.2m に P-601 が隣接する。　重複　SK-568 に切られる　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 73°－W、規模は長径 0.87m、短径 0.69m、深さ 0.30m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物は土師器片２点（10 ｇ）と須恵器片３点（30 ｇ）で、図化した遺物はない。武蔵型台付甕や胎土白色で厚手な土師器坏がある。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－５８６（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。北東に P-587、北西に SK-589、南に SK-584 が近接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 40°－W、規模は長径 0.90m、短径 0.70m、深さ 0.21m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物は土師器坏片１点（10 ｇ）、甕片 14 点（90 ｇ）、須恵器坏片２点（10 ｇ）で、図化した遺物はない。 武蔵型甕や、非ロクロで武蔵型甕に似た胎土の平底坏が認められる。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－５８８（第 234・271 図、第 172 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。南に P-587、西に SK-589、北に P-591 が近接し、東１m に SK-600 が隣接する。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 68°－W、規模は長径 1.05m、短径 0.81m、深さ 0.16m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がるが、北寄りはやや急に、南寄りはなだらかな立ち上がりである。北東部にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.20 × 0.17m、底面からの深さ 0.18m である。　覆土の状態　覆土は砂質で緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は武蔵型甕主体で、ロクロ成形の高台付坏、非ロクロ成形の坏などもある。図化したのは武蔵型甕１点のみで、この他土師器坏片３点（20 ｇ）、甕片 55 点（260 ｇ）、須恵器坏片１点（10 ｇ）が出土している。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

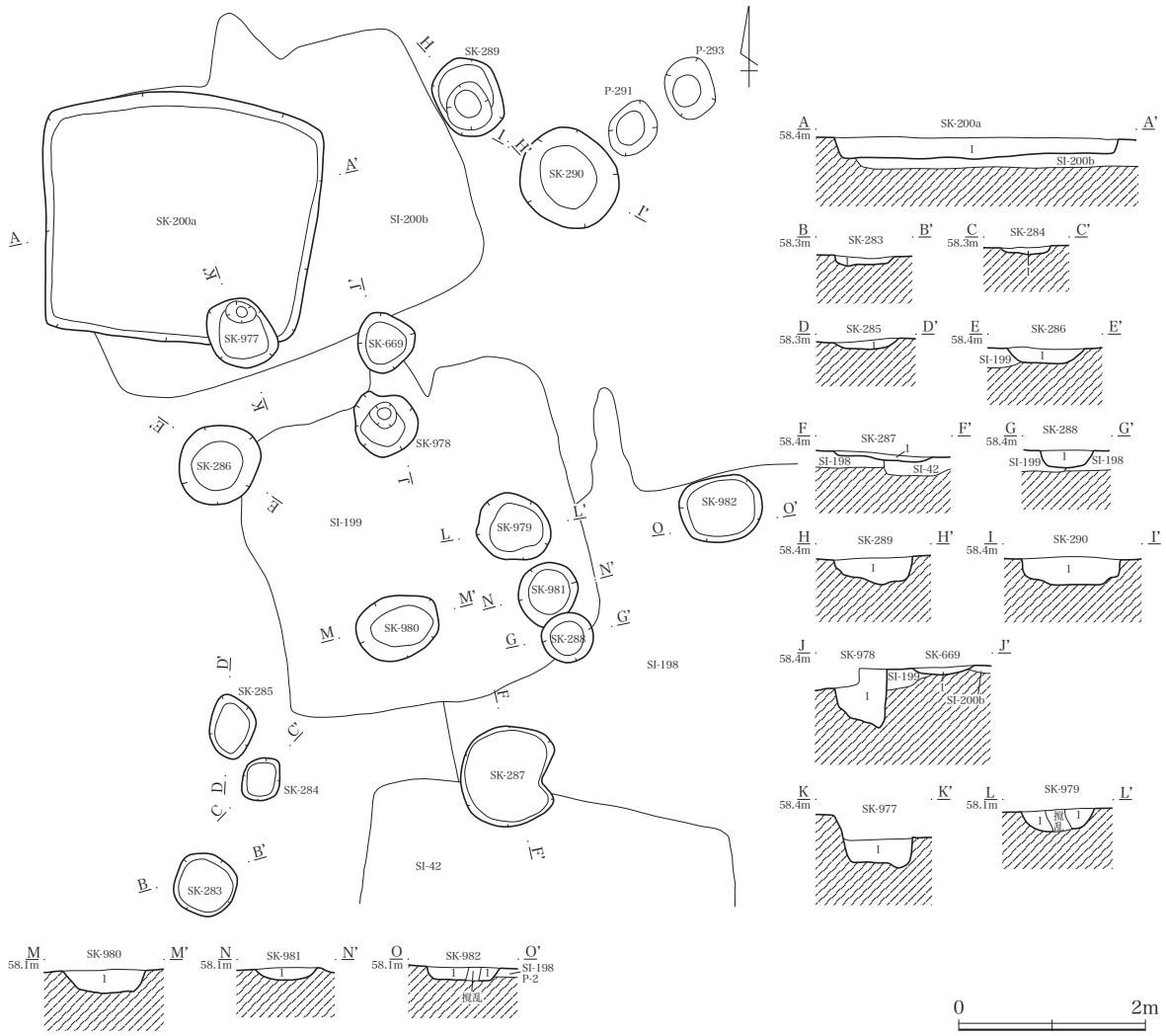
ＳＫ－５８９（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。東に SK-588、北西に P-590 が近接し、北１m に SK-592、南東 1m に SK-586 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.79m、短径 0.76m、深さ 0.15m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は武蔵型甕片１点（10 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－５９２（第 234・271 図、第 173 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。南東に P-951 が近接し、南１m に SK-588・589 が隣接してある。　重複　SK-597 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.84m、短径 0.72m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。

覆土の状態　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。覆土は重複する SK-597 と同様であるため、分層し新旧関係を明確にすることはできなかった。　遺物　土師



SK-200a
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-283
1　黒褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-284
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-285
1　暗褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-286
1　暗褐色土　礫・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-287
1　黒褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-288
1　暗褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-289
1　褐色土　　礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-290
1　暗褐色土　小礫・白色土粒少量。しまりややあり。
SK-669
1　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-977
1　暗褐色土　礫少量、炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-978
1　暗褐色土　礫少量、小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-979
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-980
1　暗褐色土　小礫少量、赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-981
1　明褐色土　焼土粒・炭化物粒少量、小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SK-982
1　褐色土　　焼土粒・炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

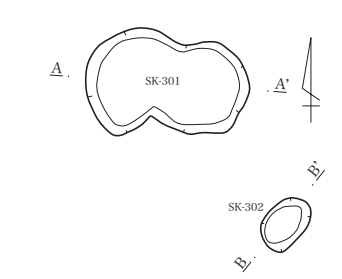
第 258 図　和田遺跡　土坑実測図㉙

器は内面黒色処理のロクロ成形坏、非ロクロ成形坏、高台付坏、武蔵型甕など、須恵器は坏、鉢、甕が出土する。図化した遺物は須恵器坏１点のみで、この他土師器片 13 点（130 ｇ）、須恵器片３点（210 ｇ）が出土する。本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－５９３（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、M－ 13 グリッドに位置する。北西に SK-570、南東に SK-594 が近接してある。

重複　SK-821 を切る。SK-812・832、P-826 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 46°－Ｅ、規模は長径 0.95m、短径 0.47m、深さ 0.27m である。底面は平坦で、



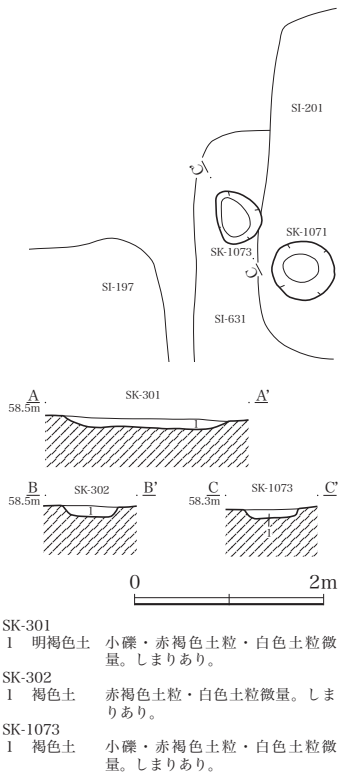
壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は褐色土(第１層)と暗褐色土（第２層）で、ともに砂質である。第１層は礫を多量に含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は内面黒色処理でロクロ成形の土師器坏片１点（20 ｇ）と須恵器甕片１点（20 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は８世紀後葉～９世紀と考えられる。

ＳＫ－５９４（第 234・272 図、第 174 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。西に SK-821、北西に SK-593 が近接し、東１ｍに SK-597 が隣接してある。　**重複**　SK-832 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.78m、短径 0.73m、深さ 0.62m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。東寄りにはピット状の深い掘り込みがあり、規模は径 0.32 × 0.22m、底面からの深さ 0.39m である。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第１層）と砂質の暗褐色土（第２層）で、ともに炭化物をわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は須恵器坏２点で、うち底部中央がわずかに突出する高台付坏１点を図化した。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。

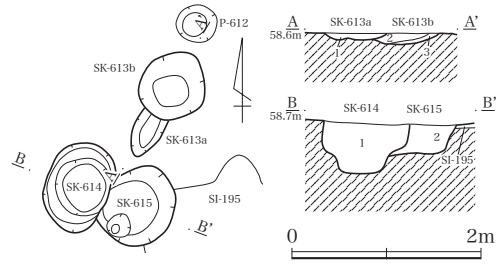
ＳＫ－５９７（第 234・272 図、第 175 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南に P-591 が近接し、北 1m に SK-596 が隣接してある。　**重複**　SK-592 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.31m、短径 1.13m、深さ 0.17m である。底面は細かい凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。覆土は重複する SK-592 と同様であるため、分層し新旧関係を明確にすることはできなかった。　**遺物**　遺物は須恵器が高台付坏６や坏５、土師器は武蔵型甕に似た胎土のロクロ成形坏１・２、非ロクロ成形坏３、内面黒色処理された坏４、武蔵型甕・台付甕７などが出土する。図化以外には須恵器坏２個体、土師器坏は非ロクロ成形坏１個体、内面黒色処理のロクロ成形坏１個体が数えられ、破片数は土師器 24 点（160 ｇ）、須恵器４点（50 ｇ）である。白色胎土で厚手な土師器坏８は８世紀代の混入だろう。本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。



SK-301
1　明褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-302
1　褐色土　赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SK-1073
1　褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 259 図　和田遺跡　土坑実測図㉚



SK-613a・613b
1　明褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-613a覆土）
2　褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。（SK-613b覆土）
3　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。（SK-613b覆土）
SK-614・615
1　暗褐色土　小礫・白色土粒少量。しまりあり。（SK-614覆土）
2　褐色土　褐色土ブロック少量、白色土粒微量。しまりあり。（SK-615覆土）

第 260 図　和田遺跡　土坑実測図㉛

ＳＫ－６１３ａ（第 260 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20、Ｌ－ 20 グリッドに位置する。南に SI-195、SK-614･615 が近接し、北 1m に P-612 が隣接する。　重複　SK-613b を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 28°－Ｅ、規模は長径 0.47m、短径 0.31m、深さ 0.07m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土はわずかに炭化物を含む緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　SK-163b の記述と同様で、本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６１３ｂ（第 260・272 図、第 176 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20、Ｌ－ 20 グリッドに位置する。　重複　SK-613a に切られる。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.70m、短径 0.68m、深さ 0.11m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第２層）と明褐色土（第３層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器のみで、高台付坏１点を図化した。他に坏片２点（10ｇ）、甕片３点（20 ｇ）が出土する。出土遺物が SK-163a、613b のいずれに属するかは不明だが、遺構の年代は共に９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６１４（第 260 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。北に SK-613a･b、東に SI-195 が近接し、西 1.5m に SD-236 が隣接してある。　重複　SK-615 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、底面には円形を呈する一段低い掘り込みがある。中軸線はＮ－ 68°－Ｅ、規模は長径 0.94m、短径 0.67m、深さ 0.47m、円形の掘り込みの規模は径 0.60m、底面からの深さ 0.18m である。円形の掘り込み、楕円形土坑とも底面は丸みを持ち、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる部分が多い。西壁ではオーバーハングする部分も認められる。

覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はわずかである。土師器は非ロクロ成形坏や甕、須恵器は瓶類や甕等で、破片数は土師器 10 点（80 ｇ）、須恵器３点（40 ｇ）のみである。図化した遺物はない。本遺構の年代は 10 世紀前葉頃と考えられる。

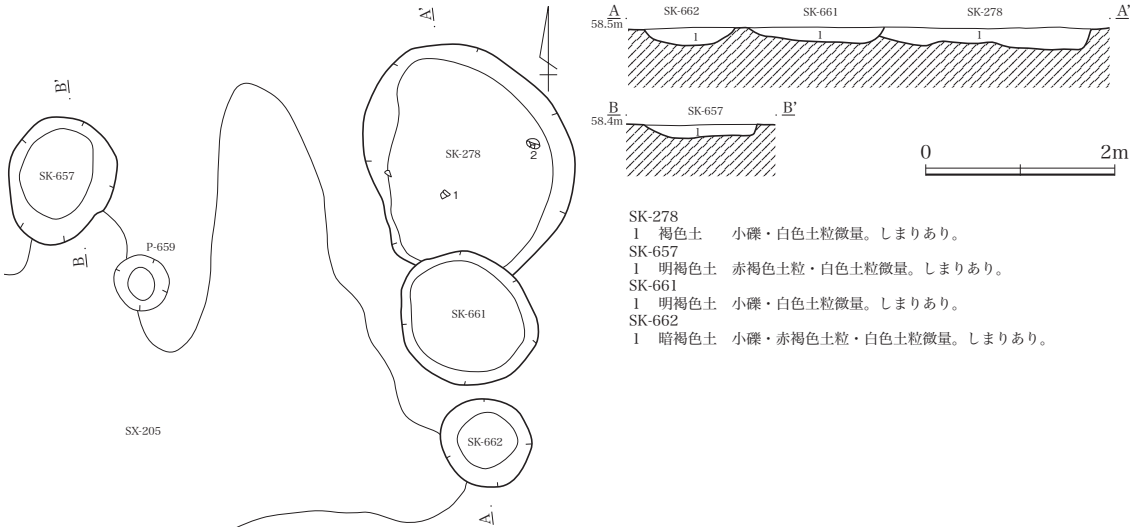
ＳＫ－６１６（第 256・272 図、第 177 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。南に SK-316 が近接し、東 2.6m に SI-208 が隣接する。　重複　SK-315 に切られる。　形状・規模　SK-315 に切られるため平面形は不明である。南北方向に中軸をとる土坑と仮定すると、中軸線はＮ－ 13°－Ｅである。残存する規模は東西 0.50m、南北 1.17m で、深さは 0.10m である。底面はほぼ平坦で西に向かってわずかに傾斜しており、壁は外傾して短く立ち上がる。

覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　土坑としては多く、土師器は非ロクロ成形の坏、ロクロ成形の坏１・２と高台付坏５・６、武蔵型甕７、羽釜８、須恵器は坏３・４と甕である。図化以外には土師器坏片 64 点（520 ｇ）、甕片 70 点（920 ｇ）、須恵器坏片３点（20 ｇ）、甕片８点（150 ｇ）がある。須恵器の一部は混入だろうか。本遺構の年代は 10 世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－６２０（第 246・272 図、第 178 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 17・18 グリッドに位置する。北東に SB-234 が近接し、南東 1.5m に SI-209a・b・c が隣接する。　重複　SK-328 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 64°－Ｗ、規模は長径 1.39m、短径 1.28m、深さ 0.26m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持っ



第 261 図　和田遺跡　土坑実測図㉜

て外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は第４～第６層である。第４層は黒色土ブロック、第５・第６層はロームブロックを含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は図化した須恵器高台付坏１点のみで、土坑南部の底面上４cm から出土した。本遺構の年代は９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６４０（第 231・272 図、第 179 表、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-639、P-527、SK-528 が近接し、西１m に SK-638a が隣接してある。　**重複**　SK-511・637 に東西両側が切られる。　**形状・規模**　東西両側が切られるため、平面形は不明である。規模は南北 0.70m、残存する東西の規模は 0.40m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の焼土のほか、わずかな炭化物などを含む緻密な黒褐色土（第４層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は図化した須恵器坏１点のみで、土坑中央部の底面上８cm より出土した。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６４２（第 240・272 図、第 180 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 16 グリッドに位置する。東に SI-632 が隣接し、北３m に SK-656、南３m に SI-217 が隣接する。　**重複**　SI-218 のカマドを切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、西側の円形部分が深く、東側が浅い。中軸線はＮ－ 75°－Ｅ、規模は長径 0.83m、短径 0.60m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　ロクロ成形の土師器坏１と高台付坏２等が出土する。図化以外は土師器坏片２点（20 ｇ）、甕片 28 点（180 ｇ）、須恵器甕片２点（40 ｇ）で、重複する SI-218 からの混入も考えられる。須恵器甕は混入だろう。本遺構の年代は 10 世紀と考えられる。

ＳＫ－６５０（第 244・272 図、第 181 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。北に SI-214、P-1001・1002 が近接し、南 1.5m に SK-422 が隣接してある。　**重複**　SI-403 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｅ、規模は長径 1.28m、短径 1.12m、深さ 0.14m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は

外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の焼土や炭化物などを含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は武蔵型甕、須恵器坏、瓦等のみである。図化した遺物は平瓦１点で、この他土師器甕片６点（25 ｇ）、須恵器坏片１点（５ｇ）がある。格子叩きのある瓦や重複関係などから、本遺構の年代は９世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－６５６（第 240・272 図、第 182 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 16 グリッドに位置する。南西３ｍに SK-642、北東３ｍに P-433 が隣接してある。　**重複**　上面を SI-218 に、南側を SI-632 に切られる　**形状・規模**　SI-218・632 との重複により半円形の部分しか残存していないため、平面形は不明である。円形ないしは楕円形となる可能性が高い。現状での規模は東西 1.25m、南北 0.73m であり、深さは 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は焼土や炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器のみで、坏１点を図化した。これ以外には坏片５点（25 ｇ）、甕片３点（10 ｇ）が出土する。武蔵型甕の破片は SI-632 からの混入であろう。本遺構の年代は７～８世紀と考えられる。

ＳＫ－６６１（第 261・272 図、第 183 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19･20 グリッドに位置する。南に SK-662、西に SX-205 が近接してある。　**重複**　SK-278 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.52m、短径 1.37m、深さ 0.15m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器のみで、坏１点を図化した。これ以外には坏片７点（40 ｇ）、甕片４点（200 ｇ）がある。甕は球胴甕の可能性がある。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

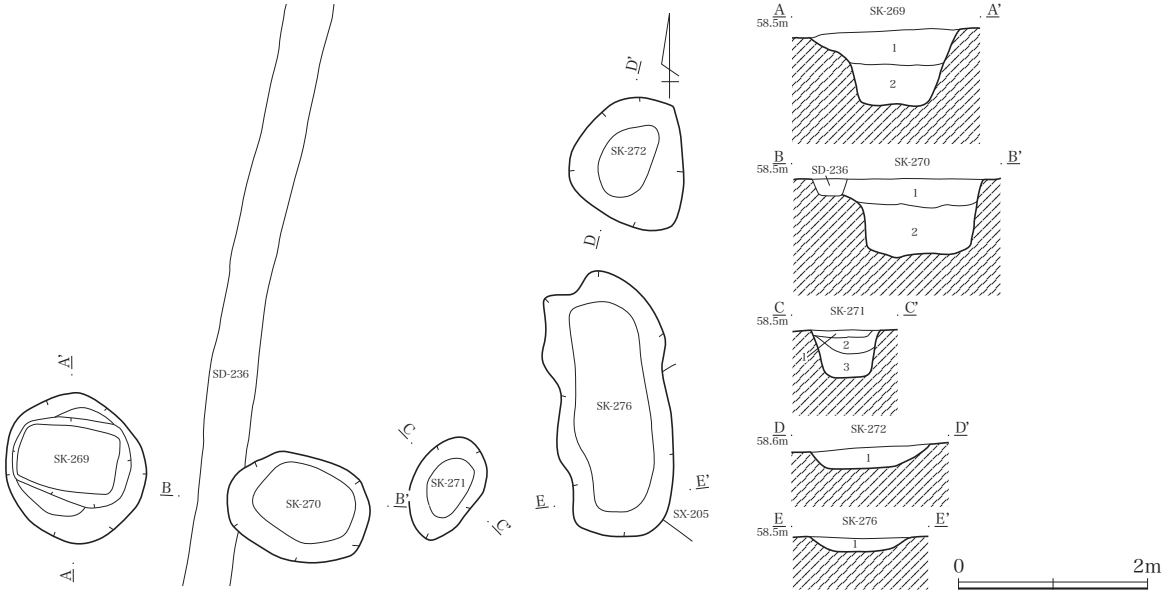
ＳＫ－６７３（第 236・272 図、第 184 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-551・686 が近接し、東１ｍに SK-675 が隣接してある。　**重複**　SI-225、SK-674、P-1022 を切る。重複関係から P-1019 を切ると考えられる。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 1.15m、短径 1.05m、深さ 0.15m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はローム粒などを多量に含む砂質で緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。土層観察では、SK-675 と同質とされている。

遺物　遺物はわずかで、土師器は武蔵型甕、須恵器は坏、甕の小破片である。図化した須恵器坏１点の他、土師器片６点（40 ｇ）、須恵器片５点（50 ｇ）が出土する。須恵器坏片には土師質のものも見られる。本遺構の年代は９世紀後葉頃とする。

ＳＫ－６７４（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-551・686 が近接し、東 1.3m に SK-555 が隣接する。　**重複**　SI-225、P-1022 を切り、SK-673・675 に切られる。重複関係から P-1019 を切ると考えられる。P-1020・P-1021 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 1.57m、短径 1.50m、深さ 0.28m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明黒褐色土（第２層）と黒褐色土（第３層）であり、自然堆積と考えられる。第２層は砂質土である。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片６点（20 ｇ）、甕片 10 点（70 ｇ）、須恵器坏片１点（10 ｇ）、甕片２点（40 ｇ）のみである。土師器・須恵器とも小破片の



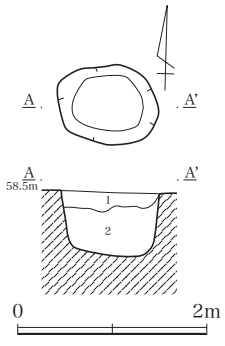
SK-269
1　暗褐色土　暗褐色土ブロック・礫少量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。しまりややあり。
SK-270
1　暗褐色土　暗褐色土ブロック・礫少量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。しまりややあり。
SK-271
1　暗褐色土　赤褐色土粒微量。しまりややあり。
2　褐色土　赤褐色土粒少量、小礫微量。しまりあり。
3　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。しまりややあり。
SK-272
1　暗黒褐色土　赤褐色土粒微量。しまりあり。
SK-276
1　黒褐色土　砂粒多量。しまりなし。

第 262 図　和田遺跡　土坑実測図㉝

ため図化した遺物はない。土師器甕は武蔵型主体である。遺物の大半は混入と見られ、須恵器甕口縁部片はSI-225 の破片と接合する。重複関係などから、本遺構の年代は８世紀後葉から９世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－６８８（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｋ－ 15、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。東に SI-220、南に P-683 が近接し、南 1.5m に SI-61 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｗ、規模は長径 1.00m、短径 0.80m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の焼土や炭化物などを含む砂質で緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は被熱した半球状の土師器坏片や長胴甕片のみで、点数は坏２点（50 ｇ）、甕７点（100 ｇ）である。図化した遺物はない。本遺構の年代は７～８世紀と考えられる。



SK-267
1　黒褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりややあり。
2　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体。しまりややあり。

第 263 図　和田遺跡　土坑実測図㉞

ＳＫ－６９０（第 232・272 図、第 185 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。東に SE-549 が近接し、西 1.2m に SK-567、東２m に SK-693 が隣接する。　**重複**　SK-599・845 を切る。SK-697 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は長方形を２基南北に並列に並べたような形状であり、全体としては不整長方形とみられる。中軸線はＮ－ 75°－Ｅ、規模は長径 1.24m、短径 1.00m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦だが、南半と北半で段差を持つ。壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第１層）と褐色土（第２層）である。第２層は多量の灰褐色砂質土と褐色土ブロックを含んでいるが、覆土全体としては緻密であり、自然

堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物は土師器坏１点で、この他には土師器甕片４点（50 ｇ）、須恵器坏片１点（10 ｇ）のみである。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

ＳＫ－６９４（第 233・272 図、第 186 表、図版三七）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-544A、P-692・800 が近接し、西 1.3m に SK-300 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.34m、短径 1.41m、深さ 0.18m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第１層は粘質、第２・第３層は砂質である。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は須恵器主体で、蓋、坏、高台付坏がある。土師器は武蔵型甕のほか、半球状で厚手な平底気味の坏や長胴甕も認められる。図化以外には土師器坏片７点（50 ｇ）、甕片 28 点（280 ｇ）、須恵器片５点（70 ｇ）がある。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－６９５（第 231 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。南西に SK-529a・528 が近接してあり、南 1m に SK-536、東２m に SB-235 が隣接してある。　**重複**　SK-698、P-813 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 63°－Ｅ、規模は長径 0.87m、短径 0.56m、深さ 0.20m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）や黄褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は球胴や武蔵型の土師器甕片９点（70 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－６９８（第 231・273 図、第 187 表）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。南西に SK-529a、P-529b が近接し、南１m に SK-536 が隣接してある。　**重複**　SK-695 に切られる。P-813 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 27°－Ｅ、規模は長径 1.15m、短径 0.80m、深さ 0.19m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第１層）と褐色土（第２層）である。第２層は多量の褐色土ブロックを含んでいるが、覆土全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　須恵器は蓋、土師器は甕が武蔵型や長胴、坏は半球状で器壁の厚いものと薄いものが出土する。蓋１、坏２は底面より大きく浮いた状態であった。図化しなかった遺物は土師器坏片 11 点（140 ｇ）、甕片 14 点（90 ｇ）で、この他に被熱した砂岩の棒状礫が確認されている。本遺構の年代は８世紀中葉と考えられる。

ＳＫ－７３５（第 228・273 図、第 188 表）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｈ－ 31 グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南東３～５m に P-794 ～ 799 があるほか、北西８m に SI-736 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 23°－Ｅ、規模は長径 2.91m、短径 2.05m、深さ 0.25m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第１層は炭化物をわずかに含む。各層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器の小破片ばかりだが、土坑としては量が多い。坏、甕ともあって甕の方が多く、甑や鉢も少量認められるなど、竪穴住居跡出土遺物のような組成を示す。甕は長胴（13）・球胴（14・15）のほか緻密な胎土で器壁薄く褐色を呈する武蔵型甕に似た破片

が多数出土しているが、接合できなかったため図化していない。坏は半球状ばかりだが口縁端部形状は様々で、内側肥厚（５）、直立（２・８）、短く直立して外反（９）などがある。法量は小～大まであり、胎土もバラエティーに富む。１と７は土坑底面直上から正立状態で出土する。図化しなかった遺物は坏片 176 点（1,340 ｇ）、甕片 256 点（2,400 ｇ）、鉢片６点（80 ｇ）、粘土塊３点（10 ｇ）である。本遺構の年代は７世紀後葉でも第３四半期に近い時期かと考えられる。

ＳＫ－７６７（第 227・273 図、第 189 表）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SK-764・768・769・852 などの土坑が近接する。　**重複**　SI-727 内にあり、SI-727 に切られることが土層で確認されている SK-768 などと形状・覆土が類似しているため、本遺構も SI-727 に切られるとみられる。また、SK-766 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.68m、短径 0.64m、深さ 0.12m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は図化した須恵器坏、甕、土師器羽釜の３点のみである。底面直上から出土する須恵器甕２は、隣接する SI-728 の甕 21 と同一個体の可能性があるため、本遺構は SI-728 と関連する近い時期の土坑とも考えられる。遺物は SI-727 からの混入の可能性もあるが、本遺構の年代は 10 世紀と考えられる。

ＳＫ－７６８（第 227・273 図、第 190 表、図版三七）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SK-761 ～ 764・766・767・769 などの土坑が近接してある。　**重複**　SI-727 内にあり、SI-727 に切られる。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.94m、短径 0.94m、深さは SI-727 床面から 0.25m、SI-727 確認面からは 0.50m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な２層であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器片のみで、高台付坏１点を図化した。この他甕片が７点（40 ｇ）ある。SI-727 の遺物が混入している可能性もあるが、本遺構の年代は 10 世紀前葉から中葉と考える。

ＳＫ－８０７（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-554、北に SK-830 が近接し、北１ｍに SK-364・395・399・423 が隣接する。　**重複**　SK-824 を切る。SK-560・808・809 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　SK-824 などとの重複により平面形は明確にしえないが、残存部分から円形と推定される。規模は径 0.94m、深さ 0.33m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がっているが、南壁のみは途中に段が設けられる。掘方を持つ柱穴の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は第１～第４層である。第２層は褐色土ブロックを、第４層は黄褐色土ブロックをそれぞれ多量に含むため人為堆積の可能性もあるが、全体に緻密であることから自然堆積と考えた。　**遺物**　出土遺物は土師器甕片２点（20 ｇ）、須恵器鉢片１点（40 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の時期は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－８０８（第 236・273 図、第 191 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-830、南に SK-560 が隣接し、東１ｍに SK-564、北 1.4m に SK-399・423 が隣接してある。　**重複**　SK-809 を切る。SK-807・824 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.61m、短径 0.60m、深さ 0.27m である。

底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がっているが、西壁のみ途中に段が設けられる。掘方を持つ柱穴の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は第１～第３層で、第２・第３層は砂質である。第３層は褐色土ブロックを多量に含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、図化した須恵器蓋の他内面黒色処理の土師器坏や非ロクロ成形で武蔵型甕に似た胎土の坏等が出土する。図化以外の遺物は土師器坏片２点（20 ｇ）、甕片 11 点（40 ｇ）、須恵器片１点（10 ｇ）である。本遺構の年代は８世紀後葉から９世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－８０９（第 236・273 図、第 192 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-824・830、東に SK-564 が近接する。　**重複**　SK-808 に切られる。重複する P-810 上面には本遺構覆土があるため、P-810 を切るものとみられる。SK-560・807 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　SK-808 などとの重複により平面形は明確にしえないが、残存部分から楕円形と推定される。規模は長径が残存部分で 0.95m、短径 0.70m、深さ 0.27m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。掘方を持つ柱穴の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第４層）と黒褐色土（第５層）である。第２層は黒褐色土ブロックを少量含むが全体としては緻密で、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は一個体の武蔵型甕とみられ、復元できた甕上半部を図化した。この他、土師器甕片は 22 点（95 ｇ）ある。本遺構の年代は８世紀後葉と考えられる。

ＳＫ－８２１（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。東に SK-594、北に SK-569・570・812 などが近接してある。　**重複**　SK-593・827 に切られる。SK-832 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　SK-593・827・832 との重複もあり全体形はつかめないが、Ｎ－ 37°－Ｅを中軸線とする不定形の土坑と推定する。規模は短径 0.68m、深さ 0.24m で、長径は確認できる部分で 0.98m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。底面には楕円形の掘り込みがあり、規模は径 0.53 × 0.28m、底面からの深さ 0.07m である。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第３層）と黒褐色土（第４層）である。ともに緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片１点（10 ｇ）、甕片４点（40 ｇ）のみで、甕は「コ」の字状の口縁部を持つ武蔵型甕である。図化した遺物はない。本遺構の年代は９世紀と考えられる。

ＳＫ－８３０（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-399・423、南に SK-808・809、南西に SK-824 が近接してある。　**重複**　SK-829 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.76m、短径 0.76m、深さ 0.26m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第１層）と砂質の黒褐色土（第２層）である。両層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片１点（10 ｇ）、甕片１点（５ｇ）、須恵器甕片１点（20 ｇ）のみで、図化した遺物はない。時期の限定はできないが、古代の土坑と考える。

ＳＫ－８３６（第 237・273 図、第 193 表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。東に SK-223B、西に P-1004・1005 が近接し、東 1.2m に SI-221 が隣接してある。　**重複**　SI-220、SK-837 に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 12°－Ｗ、規模は長径 1.77m、短径 1.55m、深さ 0.30m である。底面は丸みを持ち、壁は大

きく外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　不明である。　**遺物**　遺物はSK-836・837として取り上げられており、本遺構固有の遺物は抽出できない。ただ、遺物は時期的なばらつきもなく、調査状況などから両遺構の構築時期もさほど違わないとみられるため、この遺物を両遺構の時期を示すものとして掲載する。図化した遺物は土師器甑、甕、須恵器甕の３点で、この他半球状の土師器坏などがある。図化以外の破片は土師器坏10点（150 g）、甕40点（620 g）である。須恵器甕３はSI-221出土のものと類似しており、混入の可能性もある。本遺構の年代は８世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－８３７（第237・273図、第193表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－14グリッドに位置する。東にSI-221が近接し、南１mにSK-441、北１mにP-443が隣接してある。　**重複**　SK-836を切り、SI-220、SK-223Bに切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－25°－W、規模は長径1.91m、短径0.57m、深さ0.26mである。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　不明である。　**遺物**　出土遺物はSK-836で記載した内容のとおりである。本遺構の年代は８世紀前葉頃と考えられる。

ＳＫ－８３８Ｂ（第237・274図、第194表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－14グリッドに位置する。西にP-443、南西にSK-837・836が近接し、北２mにSK-452が隣接してある。　**重複**　SI-220・221、SK-222に切られる。SK-223Bとも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　他遺構との重複が著しいため平面形は明確にしえないが、残存部分からすると楕円形と推定される。中軸線はＮ－7°－W、規模は短径2.97m、深さ0.13mで、長径は確認できる部分で2.35mである。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は礫を含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は一定量あり、須恵器は甕､土師器は坏と甕である。須恵器甕にはSI-220･221と同一と見られる破片がある。土師器甕は長胴、坏は半球状主体で器壁の厚いものと薄いものがある。模倣坏はない。図化した遺物は土師器坏１点、甑１点、甕１点､須恵器甕３点で､この他土師器坏片61点（350 g）､甕片87点（1,080 g）須恵器甕片２点（40 g）がある。本遺構の年代は７世紀後葉頃と考えられる。

ＳＫ－８４５（第232・275図、第195表、図版五七・五八）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－14グリッドに位置する。東にSK-697、南西にSK-567が隣接し、北西１mにP-691Aが隣接する。　**重複**　SK-599・690に切られ、P-548Aに切られるとみられる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－72°－Ｅ、規模は長径1.03m、短径0.77m、深さ0.44mである。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第２層は焼土層であり、第１層は焼土のほか炭化物も含む。第２層は平面的には径20cm程度の円形の焼土範囲として確認できるもので、第３層上面で被熱により焼土が形成されるような状況があった可能性が考えられる。第３層は黒色土ブロックを多量に含んでおり、人為的な堆積の可能性が高い。焼成遺構とも考えられようか。なお、時期不明の土坑としたSK-838Aとは焼土以外の堆積状況が類似しており、本遺構との関連が想定される。
遺物　出土遺物は、図化した土師器坏、筒形土製品、被熱した礫の３点で、カマド関連の遺物のようにみえる。図化以外は筒形土製品の破片１点（40 g）のみである。礫は支脚とも考えられる。本遺構の年代は７世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－８６４（第 227・274 図、第 196 表、図版三七・四五・五八）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｈ－ 33 グリッドに位置する。北東に SK-866・738・739 が近接し、北東２ｍに SD-865a、北西３ｍに SI-741 が隣接する。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、底面では隅丸方形に近い。中軸線はＮ－ 88°－Ｅ、規模は長径 1.94m、短径 1.50m、深さ 0.26m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺構内からは、多数のチャート質角礫とともに多くの土師器が出土する。図化した遺物は須恵器蓋１点、甕１点、土師器坏３点、鉢３点、甑１点、甕４点、鉢形の手捏ね土器１点、礫３点で、いずれも底面直上かわずかに浮いた位置からの出土である。図化しなかった遺物は土師器坏片 22 点（120 ｇ）、甕片 62 点（933 ｇ）、須恵器片３点（60 ｇ）と少ない。埋没が早く、混入がなかったからであろうか。本遺構の年代は７世紀中葉でもやや古い段階と考えられ、SK-864・866・946 は同時期の可能性がある。本遺構よりやや新しいが、土師器焼成遺構である SK-738・739 との関連も考えられる。

ＳＫ－８６６（第 227・275 図、第 197 表、図版四五・五八）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｉ－ 32・33 グリッドに位置する。東に SD-865a、南に SK-864 が近接し、西２ｍに SI-741、北東４ｍに SK-946 と SI-737、南東４ｍに SI-736 が隣接する。　重複　SK-738・739 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、南北に土坑２基が重複したようにも見える。中軸線はＮ－ 10°－Ｅ、規模は長径 1.47m、短径 0.77m、深さ 0.28m である。底面は北側が円形に深くなっており、南側に浅い楕円形の平坦面が取り付く。壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器坏主体で少なく、土師器坏２点と須恵器蓋１点を図化した。１はほぼ完形で、２とともに土坑底面から浮いた位置で出土する。３は坏の年代よりやや新しいため、混入と考えられる。図化しなかった遺物は土師器坏片６点（50ｇ）、甕片５点（60 ｇ）である。土師器焼成遺構である SK-738・739 との関連も考えられるが、焼成に関連するような遺物はない。本遺構の年代は７世紀中葉でもやや古い段階と考えられ、SK-864・866・946 は同時期の可能性がある。

ＳＫ－８７５（第 228・275 図、第 198 表）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｈ－ 34 グリッドに位置する。東３ｍに SI-751 が隣接してある。　重複　SI-752 と重複する。土層断面での確認はできていないが、SI-752 に切られると考えられる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｗ、規模は長径 1.65m、短径 1.43m、深さ 0.14m である。底面は平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　不明である。　遺物　図化した遺物は土師器甕と筒形土製品であり、この他土師器甕片が 11 点（110 ｇ）出土する。遺物からは年代を決定しにくいが、筒形土製品が多く出土するのは周辺の住居跡でみるとおよそ７世紀中葉を中心とした時期に集中するため、本遺構もそれと大きく違わない時期と推定する。

ＳＫ－８７９（第 228・275 図、第 199 表）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－ 35 グリッドに位置する。東２ｍに SI-750 が、北東３ｍには SI-749 が隣接してある。　重複　南部が SK-882 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 35°－Ｗ、規模は長径 1.01m、短径 0.81m、深さ 0.22m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は第２～第４層で全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。覆土は重複

するSK-882と類似しており、一体の遺構と見ることもできよう。炭化物や焼土が多く含まれることから、何らかの焼成遺構か、竪穴住居跡のカマド部分のみが残存したものの可能性もあろうか。　**遺物**　遺物は土師器のみで、図化した坏１点の他、坏片１点（10 ｇ）、甕片９点（50 ｇ）が出土する。本遺構の年代は７世紀前葉を中心とした時期と推定する。

ＳＫ－８８０（第228・275図、第200表）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－35グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南西２ｍにP-721、北西４ｍにSB-961、北５ｍにSI-755が隣接してある。　**重複**　なし。北側は確認調査時のトレンチにより失われている。　**形状・規模**　平面形は円形とみられ、規模は径0.75m、深さ0.08mである。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物や焼土をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は土師器のみで、甕は長胴である。坏は半球状主体で、口径11cm前後と16～17cmの大形のものがある。図化した坏と甕の他には坏片７点（50 ｇ）、甕片３点（60 ｇ）が出土する。遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。

ＳＫ－９０９（第252図）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－23グリッドに位置する。北にSK-912、P-910、北東にSK-911が近接し、西１ｍにP-908・918、北１ｍにSK-248が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－61°－W、規模は長径0.87m、短径0.62m、深さ0.10mである。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物や焼土を少量含む緻密な明灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は須恵器蓋片１点（５ｇ）のみで、図化した遺物はない。須恵器蓋の形状から、本遺構の時期は８世紀後葉から９世紀と考えられる。

ＳＫ－９１１（第252・275図、第201表、図版五八）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－22・23グリッドに位置する。北西にSK-912、P-910、北東にP-917、南西にSK-909が近接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－53°－Ｅ、規模は長径1.10m、短径0.48m、深さ0.09mである。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。

覆土の状態　覆土は炭化物や焼土を少量含む緻密な明灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。

遺物　出土遺物は図化した須恵器小形短頸壺の蓋１点である。本遺構の年代は８～９世紀と考えられる。

ＳＫ－９１２（第252・275図、第202表）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－22・23グリッドに位置する。北にSK-913、北西にSK-248、南にSK-911、南西にP-910、SK-909が近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－1°－Ｅ、規模は長径1.00m、短径0.73m、深さ0.18mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土の状態　覆土は炭化物や焼土を少量含む緻密な明灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。

遺物　図化した遺物は須恵器甕、平瓦の２点で、この他土師器甕片１点（５ｇ）が出土する。本遺構の年代は８世紀後葉から９世紀前葉と考えられる。

ＳＫ－９１４（第251図）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－22、Ｎ－22グリッドに位置する。北にSK-254・255、北東にP-916が

近接してある。　**重複**　SK-915 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 50°－W、規模は短径 1.30m、深さ 0.11m で、長径は確認できる部分で 1.65m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は口縁部「コ」の字状の武蔵型甕片８点（70 ｇ）と須恵器坏片１点（15 ｇ）のみで、図化した遺物はない。本遺構の年代は９世紀代と考えられる。

ＳＫ－９１５（第 251 図）

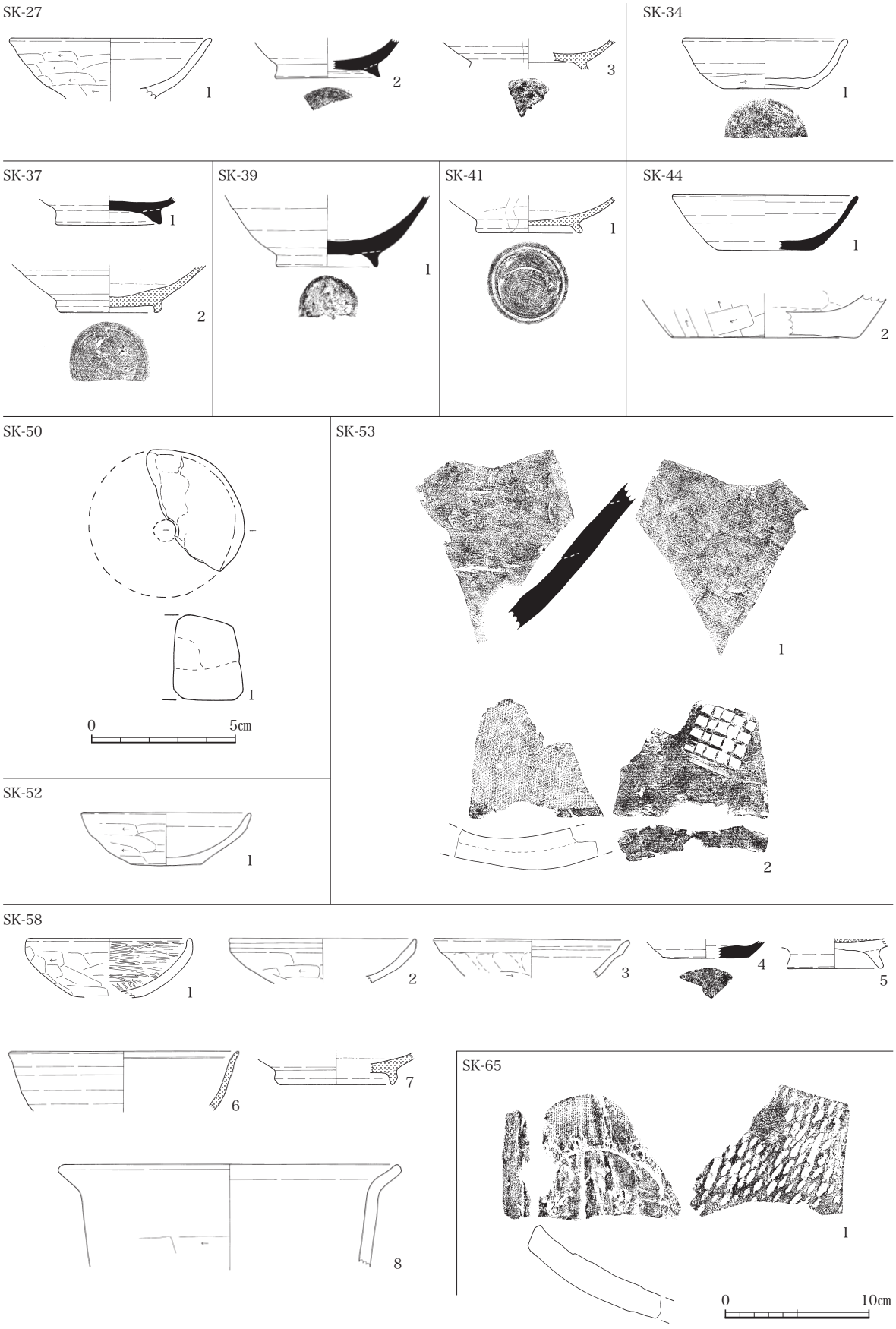
位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。北に SK-255、東に P-916、北東に P-259 が近接し、北１ｍに SK-256 が隣接してある。　**重複**　SK-254 に切られる。SK-914 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　北壁付近が SK-254 に切られるため全体形はつかめないが、平面形は楕円形とみられる。中軸線はＮ－ 82°－W、規模は長径 1.14m、深さ 0.15m で、短径は確認できる部分で 0.64m である。底面は緩ほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第２層）と暗黄褐色土（第３層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は口縁の部「コ」の字状の武蔵型甕５点（30 ｇ）と須恵器坏１点（10 ｇ）のみで、須恵器坏は SI-900 出土破片と接合する。SI-900 と近い時期と考えられるため、本遺構の時期も９世紀中葉と考える。

ＳＫ－９３４（第 228 図）

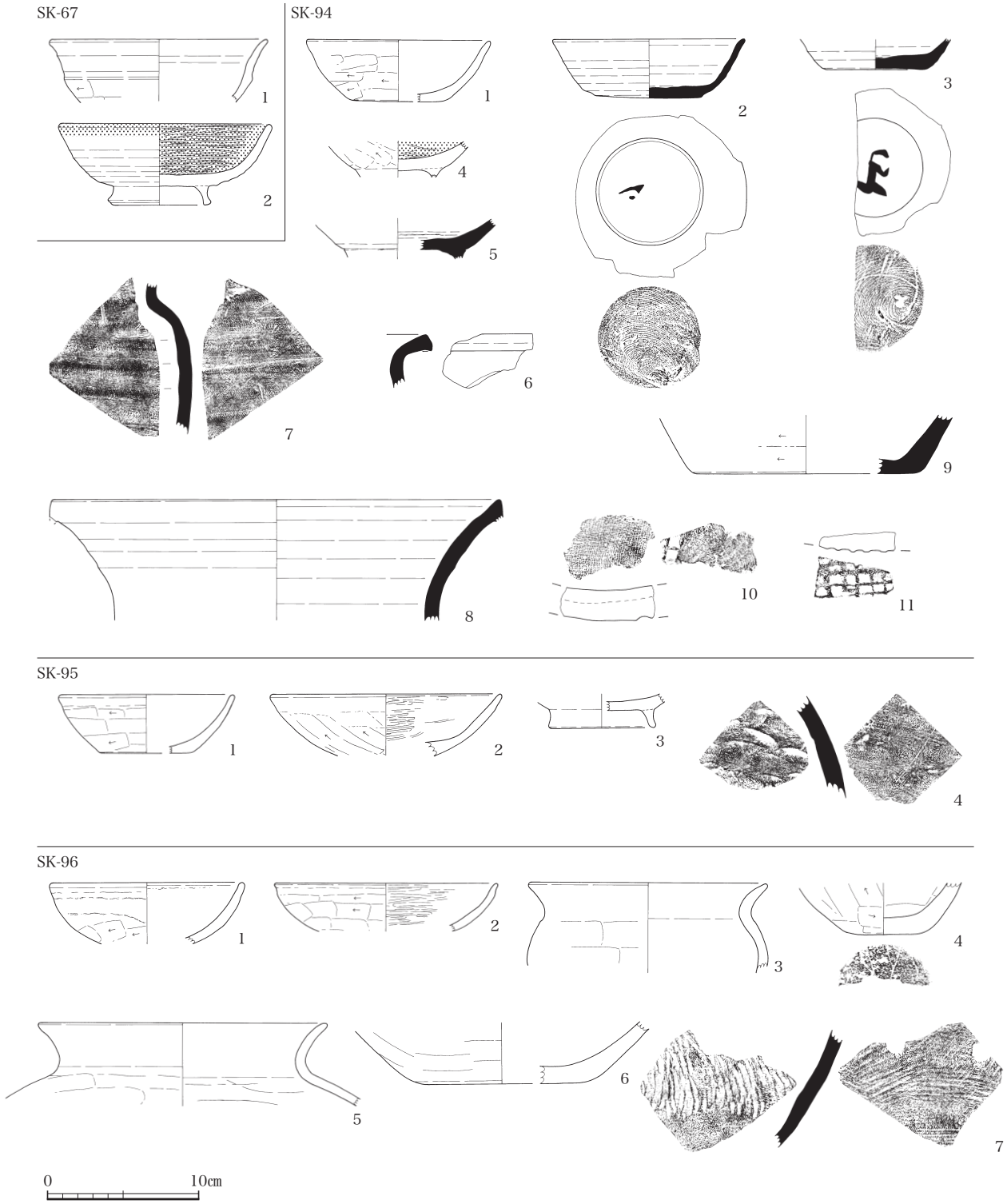
位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｊ－ 33 グリッドに位置する。周辺に土坑はなく、東に SI-745 が近接してある。　**重複**　SI-743・744 内にあり、SI-743・SK-935 に切られる。SI-744 とは直接土層が切り合わないが、SI-744 にも切られると推定される。　**形状・規模**　平面形は不整形で、円形や楕円形土坑数基の重複のようにもみられる。規模は長径 2.81m、短径 2.13m、深さ 0.22m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾する部分や垂直気味に立ち上がる部分がある。　**覆土の状態**　覆土は第４・第５層で、重複する SK-935 覆土と類似する。第５層は粘土ブロックを多量に含む。覆土の大半を占める第４層は比較的緻密だが、全体としては人為堆積の可能性がある。第４層は炭化物や焼土を含んでおり、SI-743 の掘方となるとの想定もできよう。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器坏片２点（20 ｇ）と甕片５点（40 ｇ）が出土する。径の大きな半球状の坏などがあるが、図化した遺物はない。SI-743 に切られるため、本遺構の年代は７世紀末から８世紀初頭と推定する。

ＳＫ－９４６（第 228・275 図、第 203 表、図版三七）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｉ－ 32 グリッドに位置する。北に SI-737、南に SD-865a が近接し、南西２～７ｍには SK-738・739・864・866 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－３°－Ｅ、規模は長径 1.10m、短径 0.89m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。覆土は焼土や炭化物を含む。隣接する SK-738・739 との関連もあろうか。　**遺物**　土師器が多く、径 10cm 前後の角礫も多数出土する。図化した遺物は土師器坏４点で、１～３は底面から浮いて出土する。この他土師器坏片１点（８ｇ）、甕片４点（100 ｇ）が出土する。土師器焼成遺構である SK-738・739 に切られる SK-866 などと近い時期とみられ、器形や器種組成も類似する。４は内面の調整が荒いままの坏底部破片であり、未製品もしくは失敗品の可能性があると考えられる。SK-738・739 との関連も想定されよう。本遺構の年代は７世紀中葉と考えられる。



第 264 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（1）

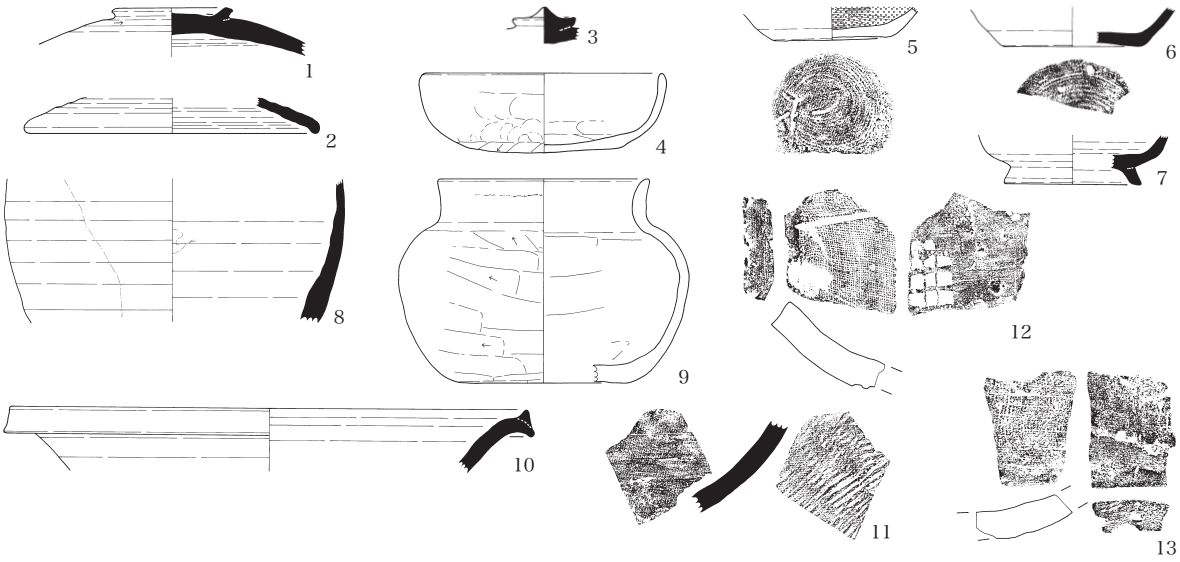


第 265 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（２）

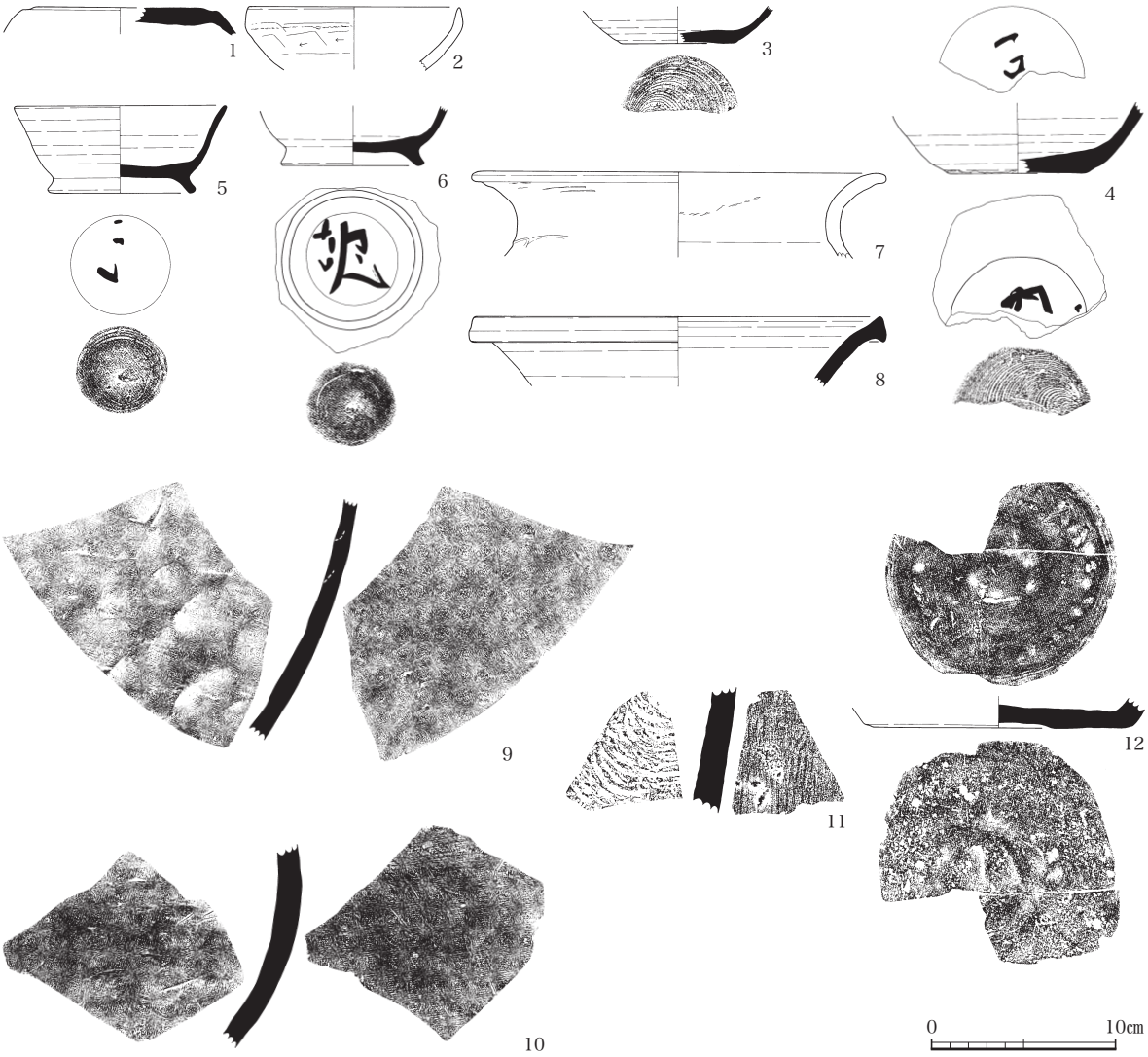
ＳＫ－９７７（第 258・275 図、第 204 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。南に SI-199、SK-286 が近接し、南東１ｍに SK-669・978 が隣接してある。　重複　SI-200b、SK-200a と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　底面にピット状の掘り込みを持つことなどから、柱穴の可能性もあろう。平面形は隅丸方形に近い楕

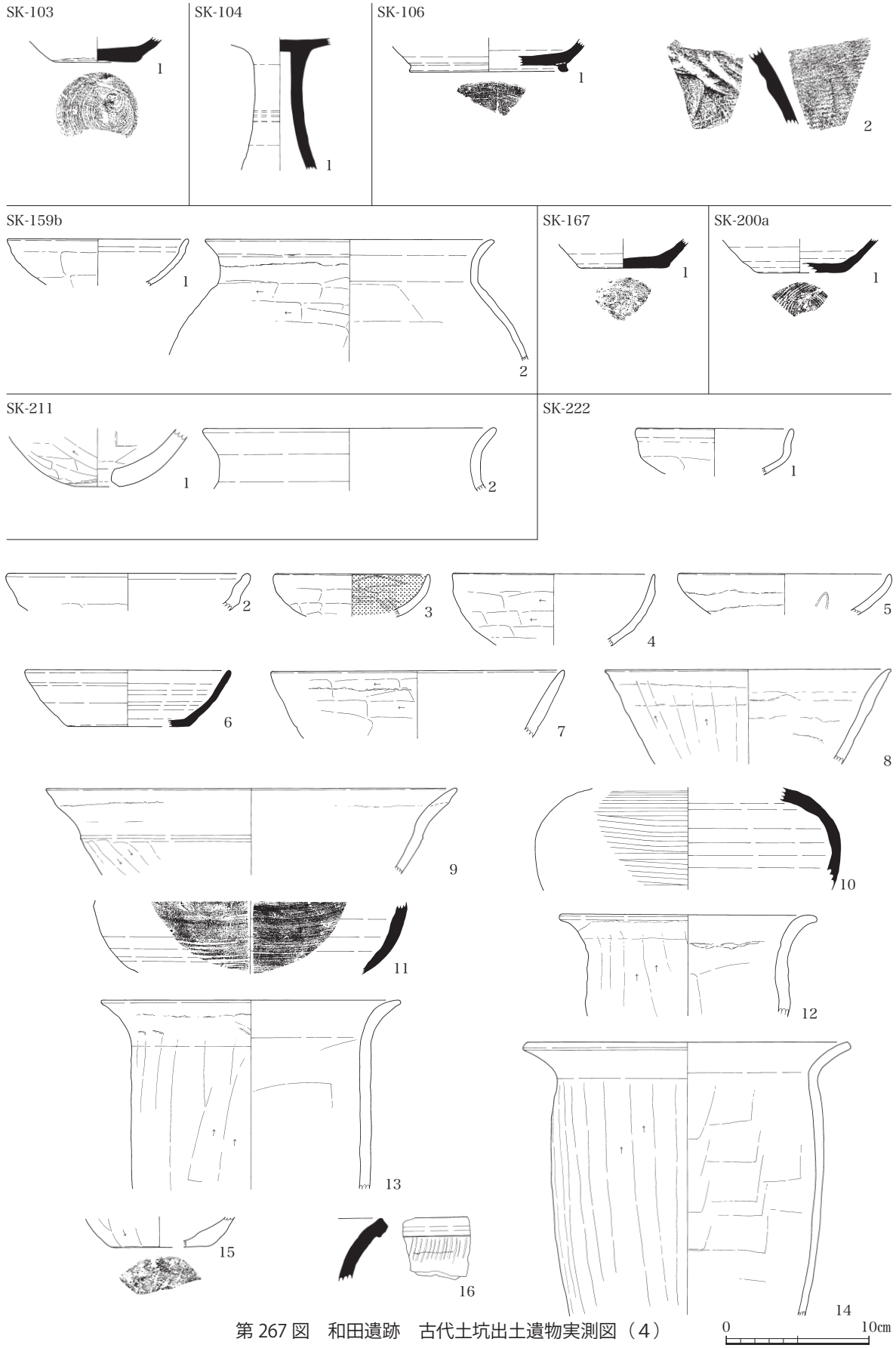
SK-97



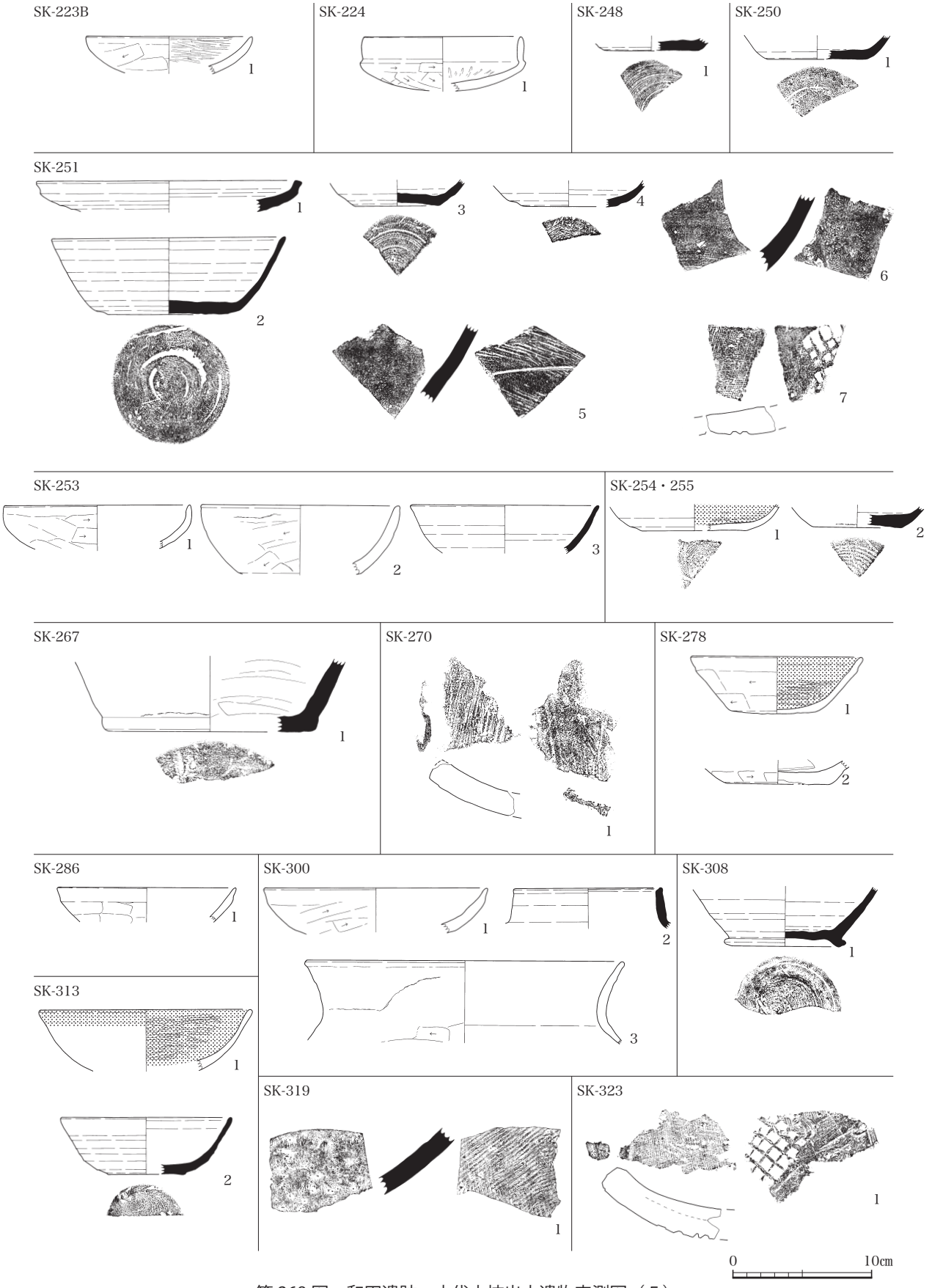
SK-98



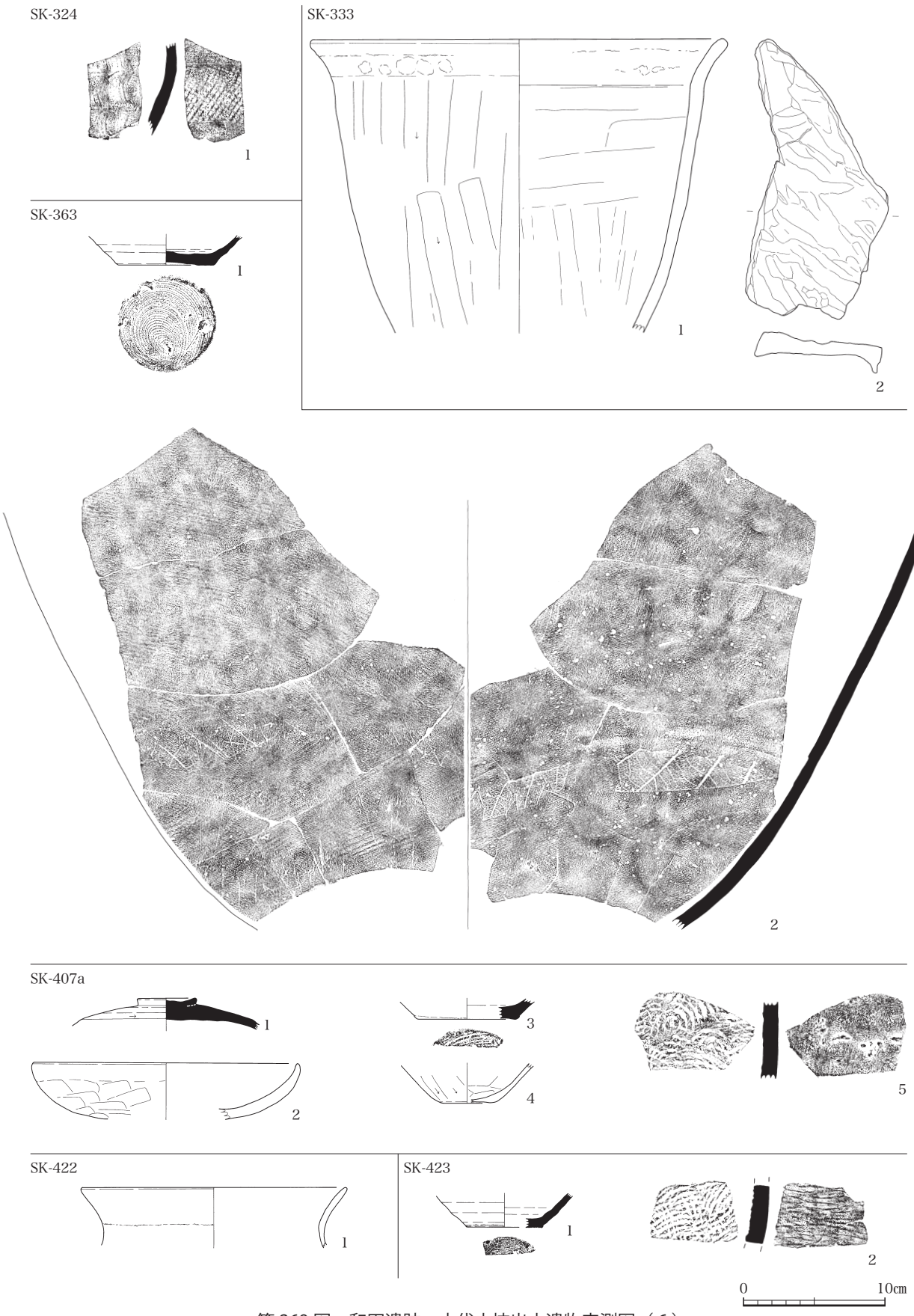
第 266 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（3）



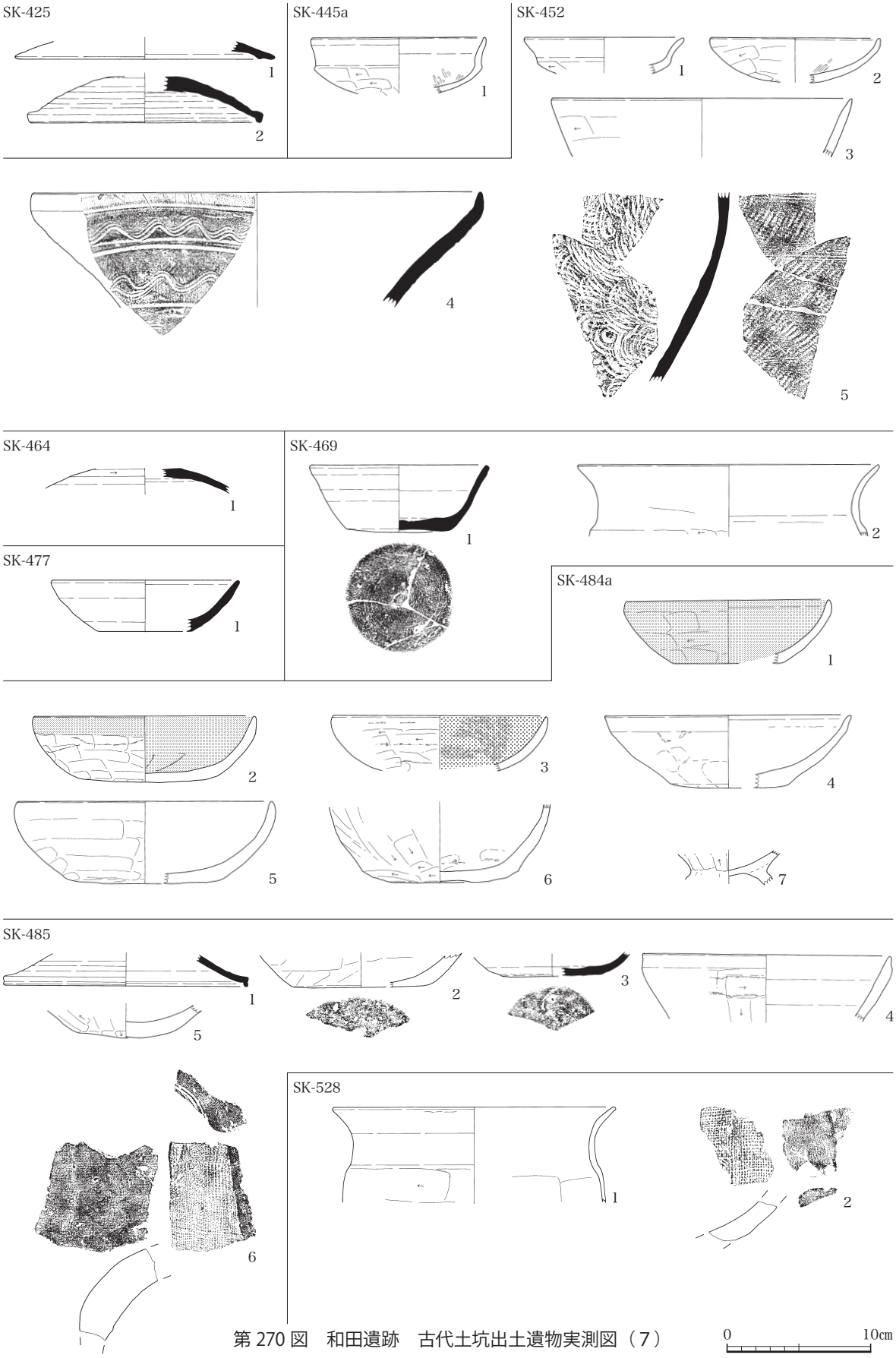
第 267 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（４）



第 268 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（5）

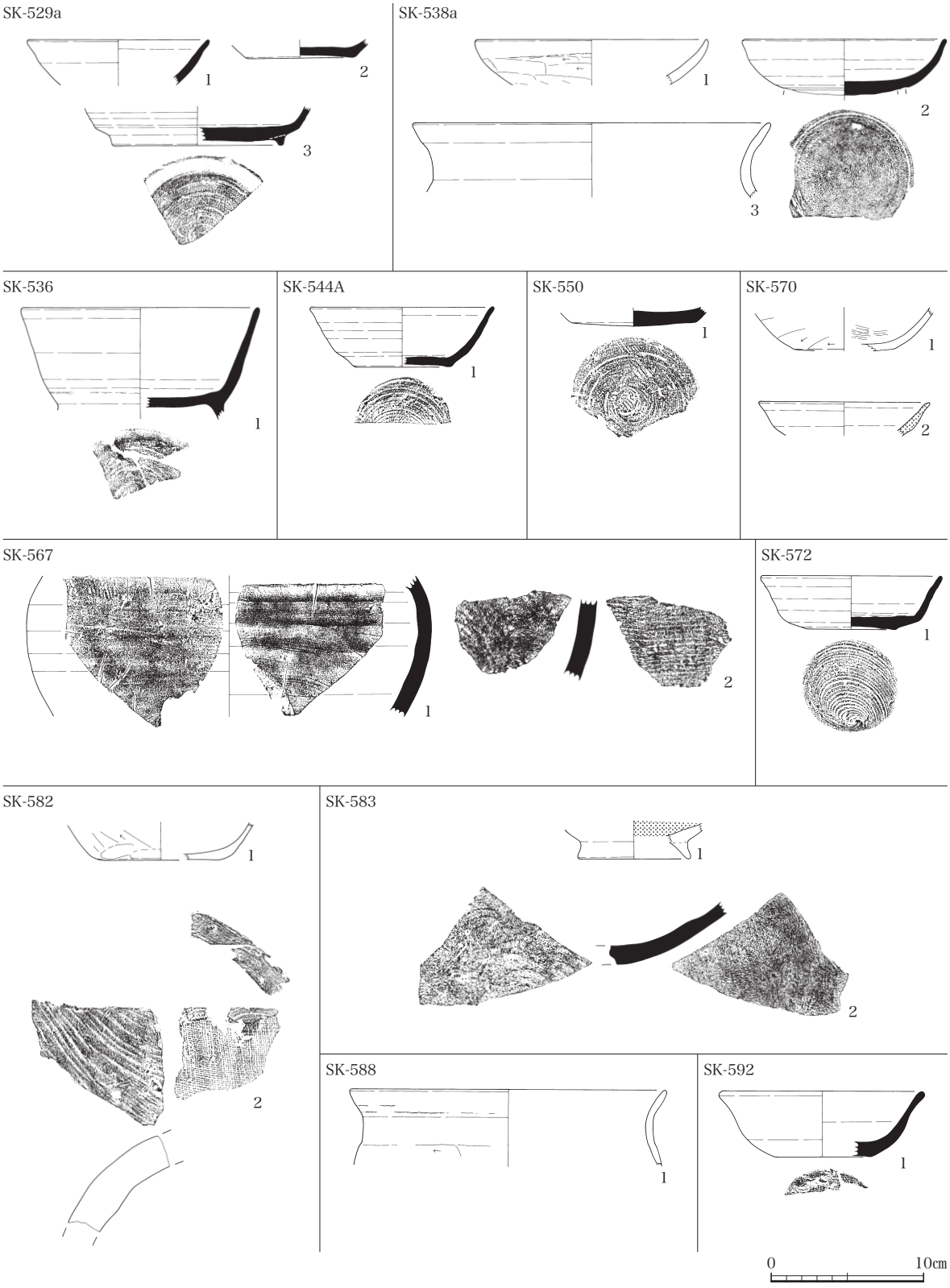


第 269 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（６）

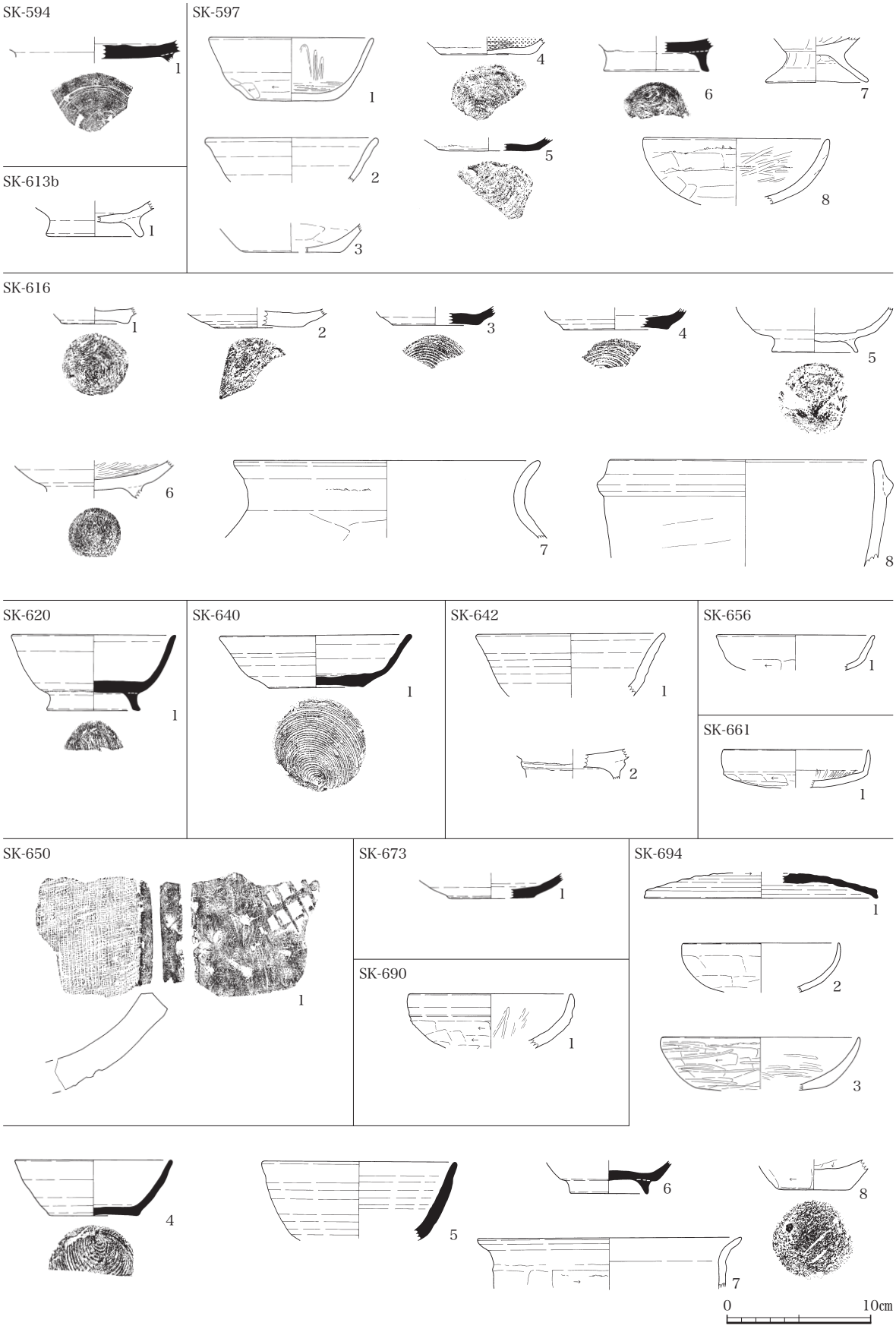


第 270 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（7）

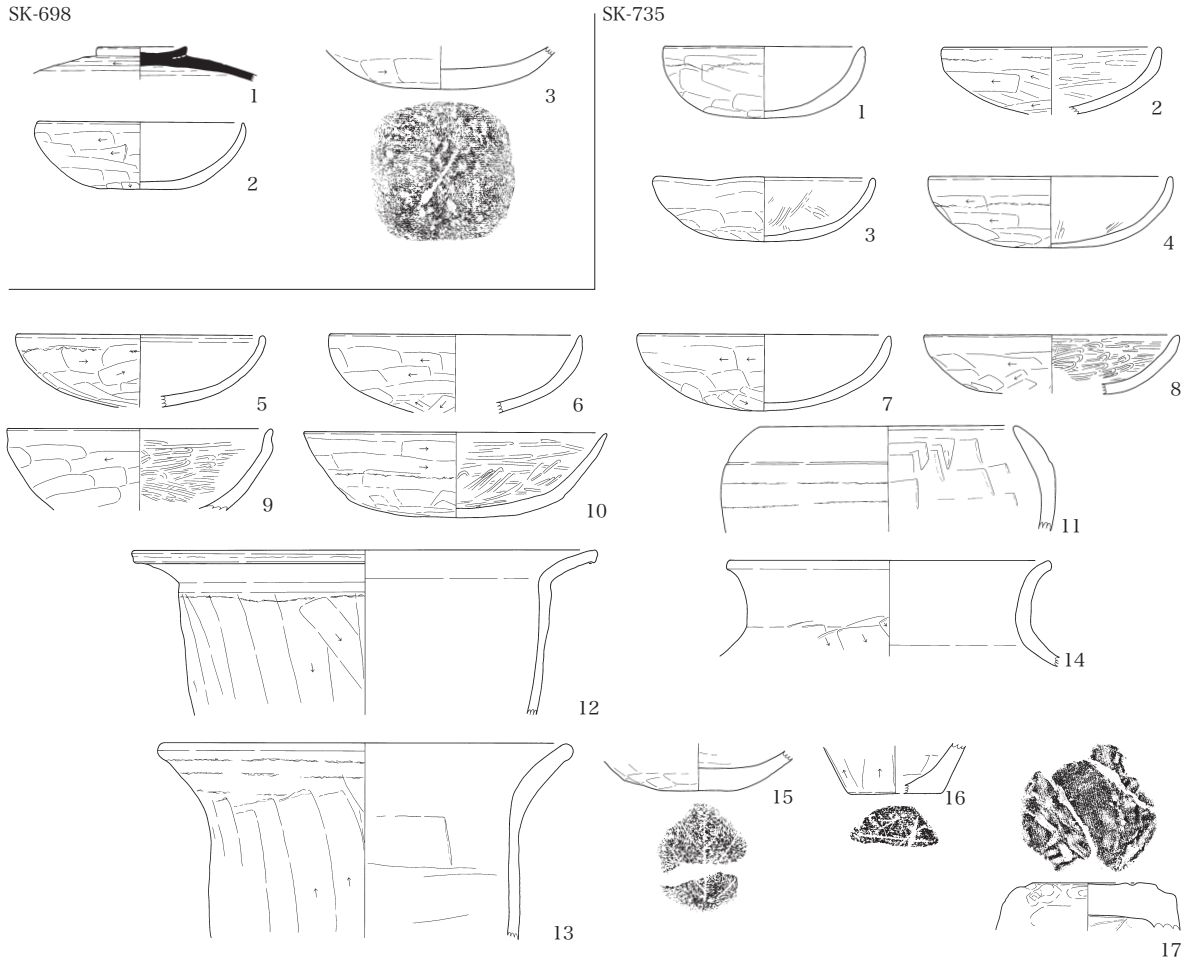
0　10cm

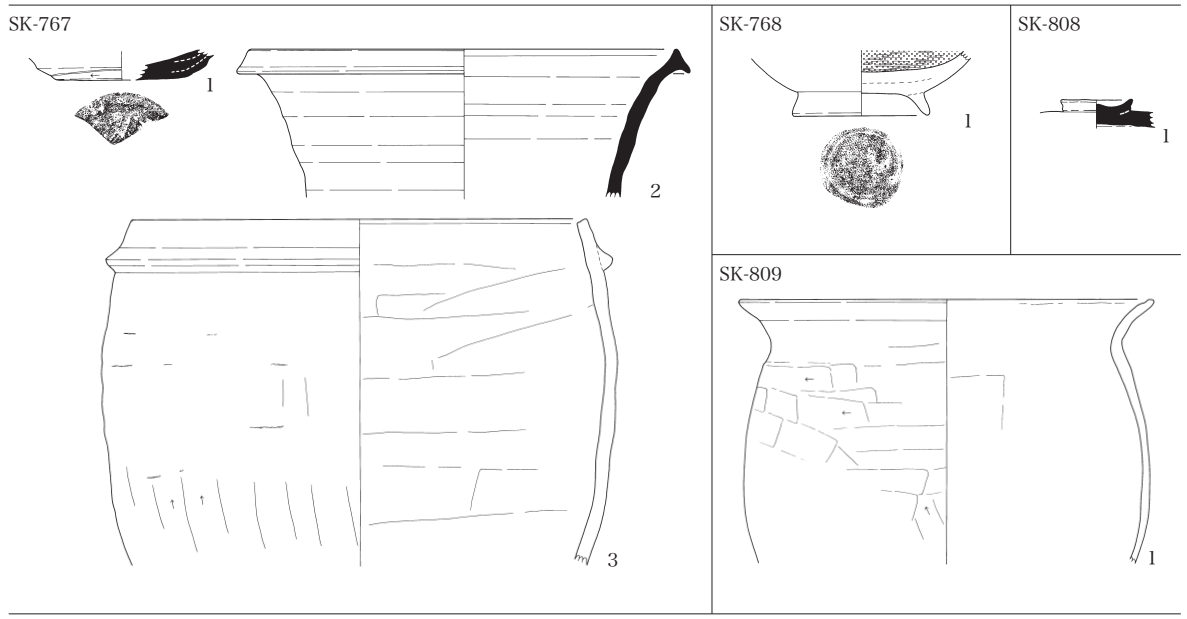


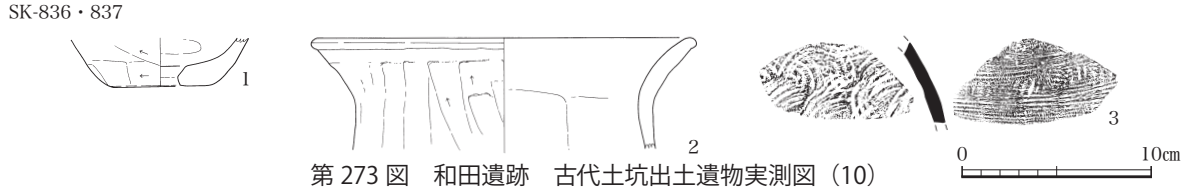
第 271 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（８）



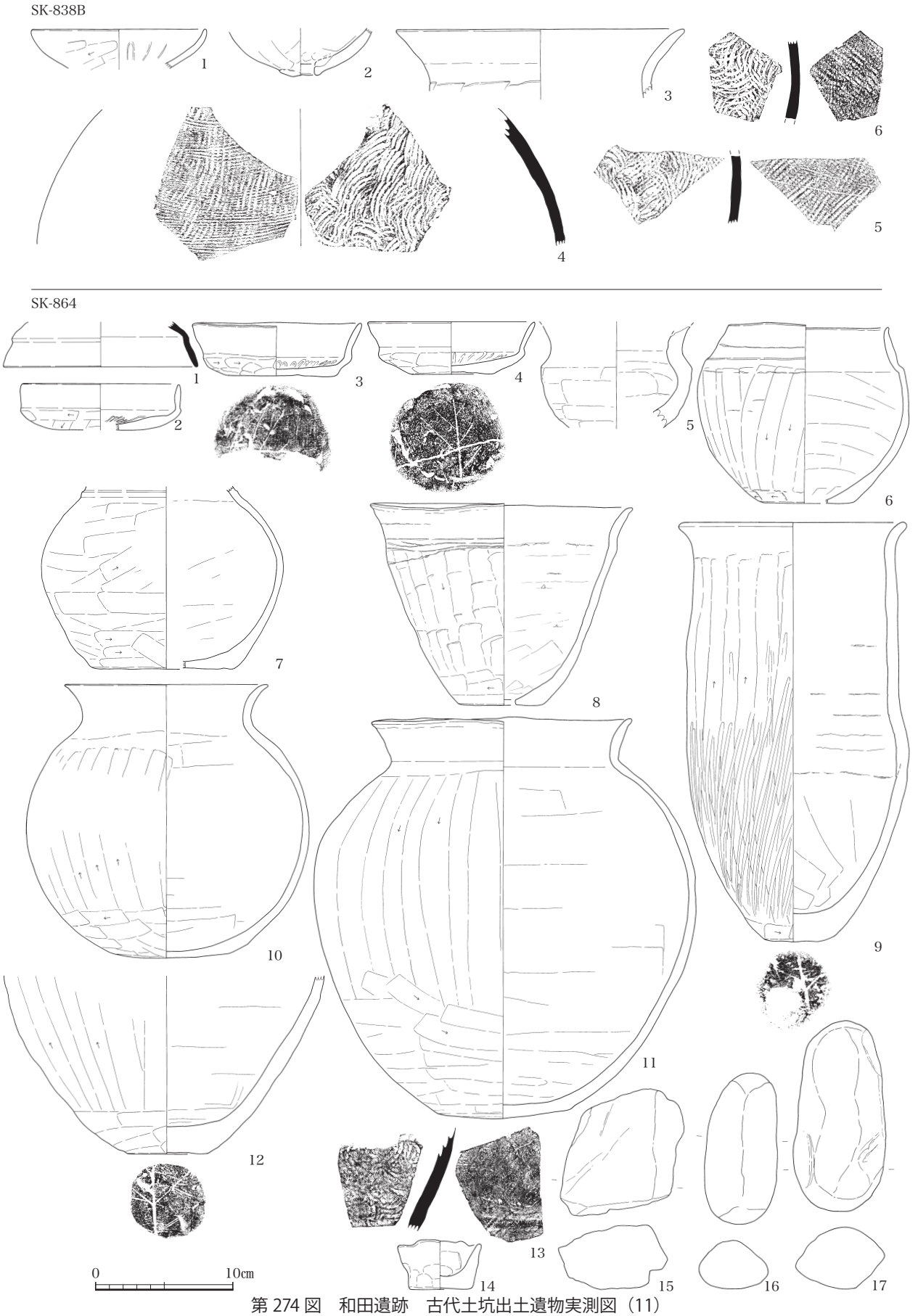
第 272 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（9）



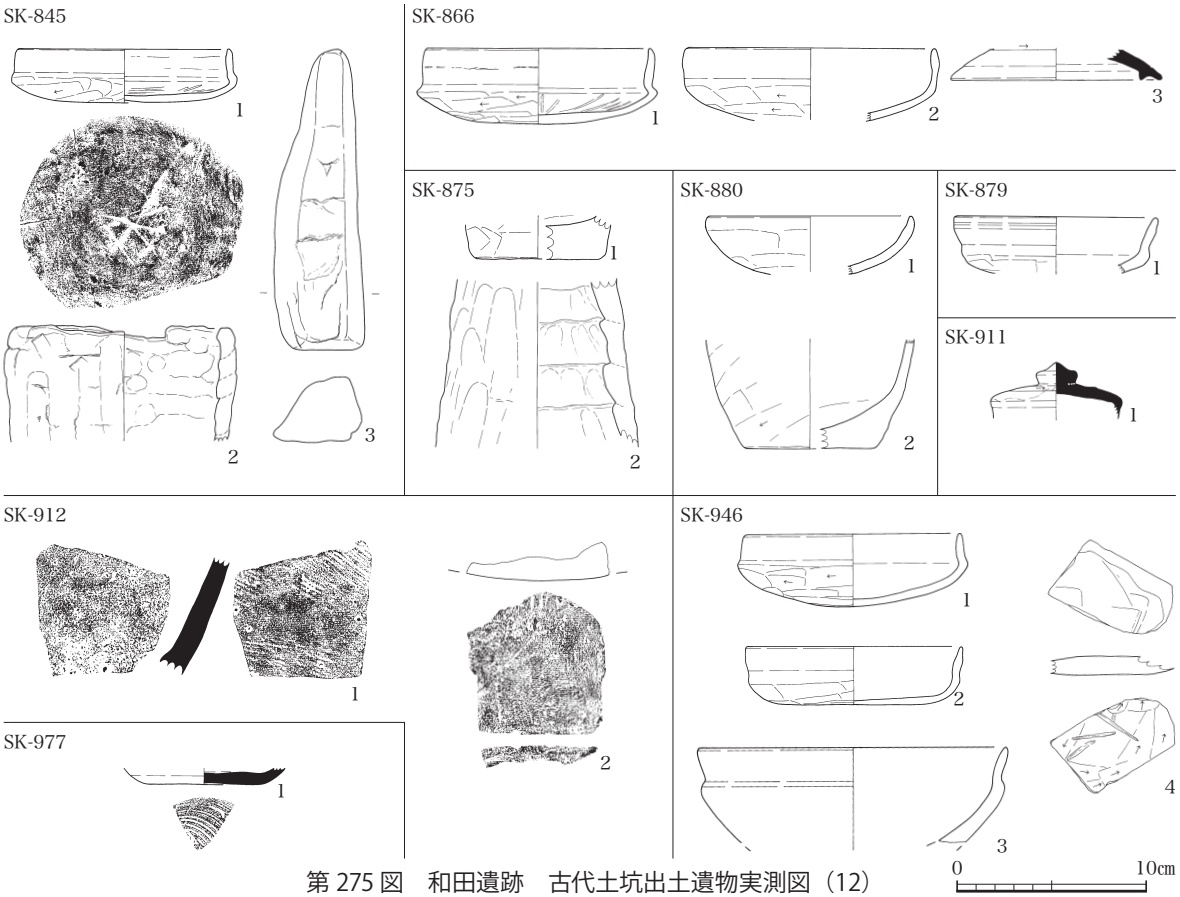




第 273 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（10）



第 274 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（11）



第 275 図　和田遺跡　古代土坑出土遺物実測図（12）

円形で、中軸線はＮ－ 10°－Ｗ、規模は長径 0.75m、短径 0.70m、深さ 0.24m である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。北側にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.33 × 0.23m、土坑底面からの深さ 0.05m である。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　図化した遺物は須恵器坏１点のみで、この他土師器坏片２点（10 ｇ）、甕片９点（50 ｇ）が出土する。土師器甕は武蔵型が主体だが、遺物の多くは SI-200b の混入と見られる。須恵器坏１が遺構の時期を示すと考えた。本遺構は９世紀中葉～後葉と推定する。

第 106 表　和田遺跡　SK-27 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 4.2	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　青灰粗～細粒多量 硬質	南壁際底面上 6 ㎝ 口～体 1/4 No.3
2 須恵器 高台付坏	高　残 2.7 高台　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部調整・切り離し方法ともに不明。高台貼り付け。高台は断面三角形でやや「ハ」の字状に開く。	5Y6/1　灰 やや粗い　白礫～細粒多量、青灰細粒多量、赤褐粗粒微量 やや軟質	中央部底面上 16 ㎝ 体下位～高台 1/6 No.4
3 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.1	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ、体部下半に灰釉一部付着。高台基部径 9.0 ㎝。東濃産。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白粗粒少量、青灰粗粒微量 硬質	南壁際底面上 25 ㎝ 体下位～底 1/4 No.1

第 107 表　和田遺跡　SK-34 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.4 高　3.5 底　6.0	内外面とも表面磨滅著しい。ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端回転ケズリ、底部回転糸切り離しの可能性あり。外周は回転ケズリか。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　白粗粒少量、青灰粗～微粒多量 やや硬質	中央部底面上７㎝、正立 口～底 1/2 No.1

第 108 表　和田遺跡　SK-37 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	高　残 2.0 高台　7.4	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部磨滅により切り離し方法不明。糸切りの可能性あり。高台貼り付け、断面三角形でほぼ垂直。高台下端内側には段あり。	7.5Y8/1　灰白 緻密　青灰粗粒微量 やや軟質	北部底面直上 底～高台完存 No.1
2 灰釉陶器 高台付椀	高　残 3.3 高台　7.4	内面体～底部ロクロナデ、体部施釉。ハケヌリ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は断面三日月形で低く、ほぼ垂直に立つ。光ヶ丘１号窯式、K-90 窯式併行。	5Y7/1　灰白 緻密　白粗粒微量 硬質	北部底面上３㎝、逆位 体下位 1/6、底～高台 1/2 No.2

第 109 表　和田遺跡　SK-39 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	高　残 5.0 高台　復 7.1	表面磨滅が著しい。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。内面底部に同心円状の細かいロクロ目あり。外面体部上半に段あり。	5Y8/2　灰白 やや緻密　青灰粗粒少量、灰褐礫少量、白礫微量 軟質	南部底面上９㎝、逆位 体 1/4、底～高台 1/2 No.1

第 110 表　和田遺跡　SK-41 出土遺物観察表

1 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.4 高台　7.6	内面体～底部ロクロナデ、体部灰釉施釉、ハケヌリ。外面体部ロクロナデ、灰釉施釉、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。高台は低く、やや「ハ」の字状に開く。光ヶ丘１号窯式、東濃産。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白粗粒微量 硬質	東部底面上５㎝ 体下位 1/4、底～高台ほぼ完存 No.1

第 111 表　和田遺跡　SK-44 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 12.9 高　3.8 底　復 6.8	内外表面磨滅が著しい。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色胎土。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　灰礫微量、白粗粒少量、赤褐粗粒微量 軟質	北東隅、ピット状の掘込底面上 13 ㎝ 口～底 1/4 No.2
2 土師器 甕	高　残 3.0 底　復 13.0	内面胴～底部ナデ。外面胴部ケズリ、底部ケズリ。底部外面粗～細砂粒多量に付着。SK-59　1 と同一の可能性あり。	10YR5/3　にぶい黄褐 粗い　白粗粒多量、青灰礫～粗粒多量 硬質	北部底面上 10 ㎝ 胴下端～底 1/4 No.1

第 112 表　和田遺跡　SK-50 出土遺物観察表

1 土製品 紡錘車	長　残 4.9 幅　残 2.3 厚　2.9 重　残 37.0	平面円形。断面台形。粘土を円筒状に固め、中央に穿孔している。表面はナデ調整。径約５㎝の円柱状とみられる。中央の孔は径８㎜前後か。	7.5YR8/6　浅黄橙 緻密　青灰・赤褐礫微量、白粗粒微量 硬質	覆土 1/2

第 113 表　和田遺跡　SK-52 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.8 高　3.7 底　4.9	内面口縁ヨコナデ、底部ナデ、指頭程度の凹凸が目立つ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ、底部ケズリ。全体に歪みがあり調整も粗い。武蔵型甕に似た胎土。	5YR6/6　橙 粗い　白細粒多量、青灰粗～細粒多量、赤褐粗粒少量 硬質	中央北部底面上６㎝ 口～体 1/3、底完存 No.1

第 114 表　和田遺跡　SK-53 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 10.5	内面胴部ナデ後無文当具痕。粘土接合痕あり。全面に自然釉付着し、下半に多い。外面胴部平行叩き後ケズリ、薄く自然釉かかる。	5Y7/1　灰白 緻密　青灰粗粒多量、白粗粒少量 硬質	中央部底面上７㎝ 胴一部 No.1
2 瓦 平瓦	長　残 8.5 幅　残 10.0 厚　2.5 重　残 287.1	凹面布目痕後狭端縁ケズリ。凸面格子叩き。狭端面ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	南部底面上８㎝ 破片 No.2

第 115 表　和田遺跡　SK-58 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.6 高　4.0 底　復 5.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後全面に横方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。厚手。外面調整は粗いが内面は丁寧に調整され平滑。底部は意図的に穿孔した可能性もある。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 口～底 1/4
2 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白粗～細粒多量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6
3 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 2.7	内面口縁部～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで指頭圧痕あり。体部下半ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、粗～細砂粒微量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
4 須恵器 坏	高　残 1.1 底　残 6.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y6/1　灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 体下位～底 1/4
5 土師器 高台付坏	高　残 2.0 高台　復 6.6	内面底部密な一方向のミガキ、黒色処理。外面底部ナデ。高台貼り付け。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや粗い　赤褐礫微量、白細粒少量 硬質	覆土 底～高台 1/2
6 灰釉陶器 高台付椀	口　復 16.0 高　残 4.2	内面口縁～体部ロクロナデ、全面灰釉施釉。外面口縁～体部ロクロナデ、全面薄く灰釉施釉。ハケヌリ。光ヶ丘１号窯式、新段階。東濃産。	5Y8/1　灰白 緻密　黒細粒微量 硬質	覆土 口～体一部
7 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.2 高台　8.5	内面底部ロクロナデ、灰釉施釉。ハケヌリ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリか。切り離し方法不明。高台貼り付け。高台は断面三日月形。底部中央内面は、円形に施釉されない。重ね焼きのためか。光ヶ丘１号窯式、新段階。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白礫～粗粒微量 硬質	覆土 底～高台 1/4
8 土師器 甕	口　復 24.0 高　残 7.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ後胴部ケズリ。	10YR8/1　灰白 やや粗い　青灰粗～微粒多量、白粗粒少量 硬質	覆土 口～胴上位一部

第 116 表　和田遺跡　SK-65 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 10.2 幅　残 9.1 厚　2.0 重　残 241.5	凹面布目痕、布端部の圧痕と模骨痕残る。布に覆われず、直接桶に巻かれた部分あり。凸面縄叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 破片

第 117 表　和田遺跡　SK-67 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 14.4 高　残 4.2	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。口縁部外面には２つの段がある。内面は口縁部の中位で屈曲する。	7.5YR8/3　浅黄橙 やや粗い　灰白粗粒多量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 口辺～体一部
2 土師器 高台付坏	口　復 14.2 高　5.4 高台　6.8	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後密なミガキ。ミガキは口縁～体部横方向、底部一方向。外面口縁～体部ロクロナデ、底部切り離し方法不明。高台貼り付け。高台高めで「ハ」に字状に開く。外面口縁部～内面全面黒色処理。	5YR5/8　明赤褐 緻密　青灰粗～細粒多量、白粗粒少量、砂礫微量、金雲母細粒微量 硬質	北部底面直上、逆位 口～体 1/2、底～高台完存 No.2

第 118 表　和田遺跡　SK-94 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.1 高　4.0 底　復 6.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。口縁部はやや外反する。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　灰礫微量、白細粒微量、砂粗～細粒多量 硬質	覆土 口一部、体 1/4、底 1/6
2 須恵器 坏	口　復 12.7 高　3.9 底　7.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部に墨書あり。	5Y7/1　灰白 やや緻密　灰・白礫微量 やや軟質	覆土 口～体 1/5、底完存
3 須恵器 坏	高　残 2.0 底　復 6.5	口縁体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整、棒状の圧痕あり。底部に墨書あり、１文字。	N7/0　灰白 緻密　灰・白礫微量 やや軟質	覆土 体一部、底 2/3

4 土師器 高台付坏	高　残 2.4	内面体～底部ナデ後ミガキ。表面剝離のためミガキの粗密などは不明。内面黒色処理。外面体部ケズリ、底部磨滅が著しく調整不明。高台貼り付け。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒・白粗粒少量、砂細粒少量 やや硬質	覆土 体一部、脚上半 1/2
5 須恵器 高台付坏	高　残 2.7	内面体部ロクロナデで紐積痕あり。外面体部ロクロナデ、底部表面磨滅により調整不明。高台貼り付けか。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒・白礫微量、砂細粒微量 やや軟質	覆土 体～高台一部
6 須恵器 鉢	高　残 3.5	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒・白礫微量 軟質	覆土 口縁一部
7 須恵器 広口壺	高　残 10.0	内面頸～体部ロクロナデ。外面頸～体部ロクロナデ。	5Y6/1　灰 緻密　黒・白礫微量、白微粒少量 硬質	覆土 頸～胴上位一部
8 須恵器 甕	口　復 30.0 高　残 8.0	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N7/0　灰白 緻密　白礫微量､白細粒微量 硬質	覆土 口 1/6
9 須恵器 甕	高　残 3.9 底　復 14.4	内外表面磨滅が著しい。内面胴～底部ナデ。外面胴部下半ケズリ、底部ケズリ。	N8/0　灰白 やや緻密　黒・白礫微量 軟質	覆土 胴下位一部、底 1/6
10 瓦 平瓦	長　残 4.2 幅　残 6.2 厚　2.1 重　残 72.9	凹面布目痕。凸面格子叩き。	N5/0　灰 やや緻密　白礫微量、白細粒少量 硬質	覆土 破片
11 瓦 平瓦	長　残 2.9 幅　残 5.1 厚　残 1.3 重　残 21.6	凹面表面が剝離するため不明。凸面格子叩き。	10YR6/6　明黄褐 やや緻密　赤褐礫微量、白粗粒微量 硬質	覆土 破片

第 119 表　和田遺跡　SK-95 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.6 高　3.9 底　復 6.0	非ロクロ成形。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒・赤褐・白礫少量、白微粒少量、粗～細砂粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6、底一部
2 土師器 坏	口　復 15.2 高　残 4.0	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　黒・白礫微量､白粗粒微量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 口 1/6、体一部
3 土師器 高台付坏	高　残 2.2 高台　復 7.0	ロクロ成形の可能性あり。内面底部ナデ。外面底部ケズリ後高台貼り付け。武蔵型甕に似た胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒粗粒微量、白細粒少量、砂細粒少量 硬質	覆土 底～高台 1/2
4 須恵器 甕	高　残 6.8	内面上半無文当具痕。外面胴部上半平行叩き後浅いカキ目。	N6/0　灰 緻密　黒・白礫微量、白細粒微量 硬質	覆土 胴上位破片

第 120 表　和田遺跡　SK-96 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 4.0	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上半無調整で紐積痕あり。体部下半ケズリ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒･赤褐礫微量、黒細粒少量、砂細粒少量 やや硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 坏	口　復 14.8 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや粗い　白細粒微量、黒微粒少量 硬質	覆土 口～体一部

3 土師器 甕	口　復 15.8 高　残 5.9	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　赤褐礫微量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 口～胴上位一部
4 土師器 甕	高　残 3.4 底　5.0	内面胴～底部ナデ。外面胴部下半ケズリ、底部全面に木葉痕。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒・赤褐・白礫微量、白粗粒微量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 胴下端～底 1/3
5 土師器 甕	口　復 19.2 高　残 5.5	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。球胴。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白粗粒少量、赤褐粗粒微量、黒灰細粒少量 硬質	覆土 口 1/6、胴上端一部
6 土師器 甕	高　残 4.0 底　復 10.0	表面の磨滅著しい。内面胴～底部ナデ。外面胴～底部ナデと見られる。球胴。	10YR8/2　灰白 やや緻密　黒・白礫微量、黒細粒少量 硬質	覆土 胴下端一部、底 1/4
7 須恵器 甕	高　残 7.7	内面同心円当具痕後ナデ。外面平行叩き。	N6/0　灰 緻密　白礫微量 硬質	覆土 胴下位一部

第 121 表　和田遺跡　SK-97 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	高　残 2.5 つまみ 復6.4	内面体～天井部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ、つまみ貼り付け、リング状。	N6/0　灰 緻密　白礫～細粒礫微量、青灰細粒微量 硬質	中央部底面上 12 ㎝ 体一部、天井 1/4、つまみ 1/5 No.4
2 須恵器 蓋	口　復 15.6 高　残 1.8	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。重ね焼きのため内面口縁が黒灰色を呈する。	N7/0　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
3 須恵器 蓋	高　残 1.9 つまみ 3.3	内面天井部ロクロナデ。外面つまみ貼り付け。つまみは逆台形状で中央が突出する。	N7/0　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 やや軟質	覆土 天井一部、つまみほぼ完形
4 土師器 坏	口　復 12.6 高　残 4.2	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部粗いナデで指頭圧痕あり。底部一方向のケズリ。偏平な丸底。武蔵型甕に似た胎土。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒微量、赤褐粗～細粒微量、金雲母細粒微量 やや硬質	北部底面上 11 ㎝ 口～体 1/4、底ほぼ完存 No.1
5 土師器 坏	高　残 1.7 底　復 6.1	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後密なミガキ。ミガキは体部横方向、底部は一方向。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	10YR8/1　灰白 緻密　赤褐・白細粒微量、砂礫微量 やや軟質	覆土 体下半 2/3、底 3/4
6 須恵器 坏	高　残 2.1 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N8/0　灰白 やや緻密　灰黒・白粗～細粒少量 軟質	覆土 体下半 1/4、底 1/3
7 須恵器 高台付坏	高　残 2.5 高台　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部高台貼り付け。	N6/0　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	覆土 体下半～底～高台一部
8 須恵器 瓶類	高　残 7.5	内面体部ロクロナデ､わずかに自然釉付着｡外面体部ロクロナデ､下端回転ケズリ、薄く自然釉付着。	N8/0　灰白 緻密　青灰細粒微量、白細粒微量 硬質	中央部底面上 9 ㎝ 体一部 No.2
9 土師器 甕	口　復 11.2 高　残 10.7	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。平底。	7.5YR7/8　黄橙 やや粗い　赤褐礫～細粒少量、白細粒微量 やや硬質	中央部底面上 12 ㎝ 口～底 1/4 No.5
10 須恵器 甕	口　復 28.0 高　残 3.3	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、自然釉付着。	N7/0　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	覆土 口辺一部
11 須恵器 甕	高　残 4.8	内面当具痕後ナデ。外面胴部平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	覆土 胴一部

12 瓦 平瓦	長　残 6.2 幅　残 6.0 厚　1.6 重　残 93.0	凹面布目痕後側縁ケズリ、棒状の圧痕あり。凸面格子目叩き。側面ケズリ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　灰褐細粒微量、白微粒微量 硬質	覆土 破片
13 瓦 平瓦	長　残 6.2 幅　残 5.1 厚　1.6 重　残 73.8	凹面布目痕。凸面ナデ、端縁ケズリ。端面ケズリ。	7.5YR8/4　浅黄橙 緻密　灰褐・赤褐粗粒少量 やや軟質	覆土 破片

第 122 表　和田遺跡　SK-98 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.4	酸化焔焼成。内面体～天井ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、天井回転ケズリ、外周部に幅 6 ㎜の沈線が一周する。	7.5YR6/8　橙 緻密　赤褐・白細粒微量、砂礫微量 軟質	南部底面上 11 ㎝ 体一部、天井 1/3 No.5
2 土師器 坏	口　復 11.6 高　残 3.4 最大　11.8	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　赤褐・灰褐細粒微量 やや軟質	覆土 口～体上半 1/5
3 須恵器 坏	高　残 2.0 底　復 6.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。体部下端には、切り離しに使った糸が巻き付いた痕跡あり。	N6/0　灰 緻密　白粗～細粒微量、青灰細粒微量 やや硬質	中央部底面上 16 ㎝ 体下半～底 1/2 No.3
4 須恵器 坏	高　残 3.8 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部内外面ともに墨書あり。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白・青灰細粒微量、砂細粒微量 やや軟質	覆土 体下半 1/4、底 1/2
5 須恵器 高台付坏	口　復 11.5 高　残 4.7 高台　8.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台は「ハ」の字状に開く。外面底部墨書あり。	N7/0　灰白 緻密　白・青灰細粒微量、砂礫微量 硬質	北部底面上 13 ㎝、正立 口～体下半 1/4、高台完形 No.2
6 須恵器 高台付坏	高　残 3.3 高台　残 7.8	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。外面底部に墨書あり。	N7/0　灰白 緻密　白細粒微量、青灰細粒微量、白礫微量 硬質	北部底面上 17 ㎝ 体下半 3/4、底完存、高台完形 No.1
7 土師器 甕	口　復 22.5 高　残 4.6	内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ、口縁部に工具の当たりによる条線あり。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐粗～細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口一部
8 須恵器 甕	口　復 22.6 高　残 3.7	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N8/0　灰白 緻密　白・青灰細粒微量、白礫微量 硬質	覆土 口一部
9 須恵器 甕	高　残 13.1	内面胴部 1 文字当て具痕、粘土紐の接合部あり。外面胴部ナデ、白色の自然釉付着。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量､砂礫微量 硬質	中央部底面上 18 ㎝ 胴一部 No.4
10 須恵器 甕	高　残 10.8	内面胴部無文当具痕。外面胴部擬格子叩き。	7.5Y7/1　灰白 緻密　赤褐・白粗粒少量、黒褐細粒多量 やや硬質	覆土 胴一部
11 須恵器 甕	高　残 6.8	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き、自然釉付着。破片は厚手で丸味なく平坦。大型の甕だろう。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白・青灰細粒少量 硬質	覆土 胴一部
12 須恵器 甕	高　残 1.7 底　復 14.6	内面底部ナデで指頭圧痕あり。外面底部ケズリ、中央部直径 6.5 ㎝の部分がわずかに凹む。	2.5GY8/1　灰白 緻密　赤褐粗粒微量、白細粒微量、砂細微量 やや軟質	覆土 底 3/4

第 123 表　和田遺跡　SK-103 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	高　残 1.7 底　5.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部円柱造りの可能性あり。	2.5Y7/1　灰白 やや緻密　灰褐微粒少量、白微粒微量 軟質	覆土 体～底 4/5

第 124 表　和田遺跡　SK-104 出土遺物観察表

1 須恵器 高坏	高　残 9.2	内面坏底部ロクロナデ、脚部横方向のケズリ。外面脚部ロクロナデ。中位に３条の浅い沈線あり。	N8/0　灰白 やや緻密　灰褐細粒多量 やや軟質	南部底面直上、横位 坏底～脚部中位完存 No.1

第 125 表　和田遺跡　SK-106 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	高　残 2.3 高台　復 11.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼り付け。	N8/0　灰白 緻密　黒微粒多量 やや軟質	覆土 体一部、底 1/4
2 須恵器 甕	高　残 5.3	内面胴部同心円当具痕。外面胴部平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 胴上位一部

第 126 表　和田遺跡　SK-159b 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.7 高　残 3.2	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデ後下半ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　砂礫・白微粒少量、赤褐細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/5
2 土師器 甕	口　復 20.2 高　残 8.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上半横方向のケズリ。武蔵型。	7.5YR4/6　褐 やや粗い　砂粗～細粒少量、赤褐礫～粗粒微量、白細粒微量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 口～胴上半 1/4

第 127 表　和田遺跡　SK-167 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 2.0 底　復 6.0	焼成不良。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部には糸切り離し時に除去できなかったと見られる粘土塊付着。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　灰褐・赤褐細粒少量、白微粒微量 やや軟質	覆土 体～底 1/6

第 128 表　和田遺跡　SK-200a 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 2.3 底　復 6.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5Y6/1　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 体一部、底 1/4

第 129 表　和田遺跡　SK-211 出土遺物観察表

1 土師器 甑	高　残 4.1 底　復 3.2 孔　2.0	内面底部ナデ。外面胴部下半ケズリで笹と見られる棒状の圧痕あり。単孔。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 底～胴下位 1/4
2 土師器 甕	口　復 20.6 高　残 4.4	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　灰褐礫～粗粒少量、白粗～細粒少量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 口一部

第 130 表　和田遺跡　SK-222 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 3.2	表面磨滅が著しい。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐細粒少量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部
2 土師器 坏	口　復 17.2 高　残 2.6	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒褐微粒少量、赤褐細粒多量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部

3 土師器 坏	口　復 10.8 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向の密なミガキ。全面黒色処理。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　黒褐微粒多量、白微粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
4 土師器 坏	口　復 14.2 高　残 5.0	内面口縁～体部ヨコナデ･ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	2.5YR4/6　赤褐 やや粗い　赤褐細粒多量、白細粒少量、透明微粒少量 やや硬質	南西部底面上８㎝ 口～体 1/6 No.10
5 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 2.8	内面口縁～体部ヨコナデ後ミガキ。粗い放射状のミガキか？外面口縁ヨコナデ。体部は紐積痕があり、成形時のまま無調整。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　黒微粒少量、灰褐細粒少量、白微粒微量 やや軟質	覆土 口～体 1/4
6 須恵器 坏	口　復 14.4 高　3.9 底　復 8.4	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～部体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整と見られる。内外面口縁部に重ね焼きによる黒色部分あり。端部から１～ 1.5 ㎝程度。	N8/0　灰白 やや粗い　黒褐粗～細粒少量、灰褐細粒多量 やや軟質	覆土 口～底 1/4
7 土師器 鉢	口　復 20.5 高　残 4.7	内面口縁～体部ヨコナデかナデと見られるが表面剝離のため不明確。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　赤褐細粒多量、白細粒少量、灰褐微粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6
8 土師器 鉢	口　復 20.0 高　残 6.6	内面口縁ヨコナデ、体部ナデで紐積痕あり。内面ミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ後体部上半縦方向のケズリで紐積痕あり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒褐細粒多量、赤褐細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6
9 土師器 鉢	口　復 28.8 高　残 6.0	表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。下端は稜となる。体部ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒褐細粒多量、赤褐細粒微量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
10 須恵器 壺	高　残 7.2 最大　復21.3	内面体部ロクロナデ。外面体部カキ目で自然釉かかる。11 と同一個体の可能性あり。	5Y3/1　オリーブ黒 やや緻密　灰褐細粒少量、赤褐粗～細粒微量、白礫微量 硬質	覆土 体破片
11 須恵器 壺	高　残 5.0	内面体部ロクロナデ。外面体部カキ目後ナデ。10 と同一個体の可能性あり。	7.5YR2/1　黒 緻密　白微粒多量、灰褐細粒少量 硬質	覆土 体破片
12 土師器 甕	口　復 18.0 高　残 7.1	内面口縁ヨコナデ、紐積部分に深い亀裂入る。胴部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。長胴。	2.5Y7/2　灰黄 粗い　砂礫・白細粒少量、黒礫～細粒多量 やや硬質	覆土 口～胴 1/4
13 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 13.2	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部縦方向のケズリ。長胴。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒褐細粒少量、砂礫少量、赤褐細粒少量 硬質	中央部底面上 12 ㎝ 口～胴 1/4 No.4
14 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 19.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデでヘラ状工具痕明瞭に残す。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ。歪み少なく整った形状の長胴。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　砂礫・赤褐細粒少量、黒褐細粒多量 硬質	南西部底面上８㎝、横位 口～胴ほぼ完存 No.10
15 土師器 甕	高　残 2.1 底　復 6.8	内面底部ナデと思われるが表面の剝落のため調整不明確。外面体部ケズリ、底部木葉痕。	7.5YR5/4　にぶい褐 粗い　砂礫粗～細粒多量、赤褐細粒少量、白微粒微量 硬質	覆土 胴下端～底 1/4
16 須恵器 甕	高　残 4.4	内面口縁ロクロナデ。外面口縁部下半ハケ目後口縁部全体ヨコナデ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　砂礫細粒少量、灰褐細粒多量 やや硬質	覆土 口一部

第 131 表　和田遺跡　SK-223B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 12.0 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR7/6　橙 緻密　黒微粒多量、白微粒少量、赤褐細粒微量 硬質	覆土 口破片

第 132 表　和田遺跡　SK-224 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.7 高　3.9 最大　復 12.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/3　にぶい褐 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白細粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/6

第 133 表　和田遺跡　SK-248 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 0.9 底　復 6.8	内面底部ロクロナデ。外面底部糸切り離し後無調整。	10Y8/1　灰白 緻密　青灰・白細粒微量 やや硬質	覆土 底 1/4

第 134 表　和田遺跡　SK-250 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.7 底　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	N8/0　灰白 やや緻密　白・灰褐細粒微量 やや軟質	覆土 体下半～底 1/4

第 135 表　和田遺跡　SK-251 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付皿	口　復 19.2 高　残 2.2	内面口縁～体部ロクロナデ、口縁部自然釉付着。外面口縁～体部ロクロナデ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰細粒微量、白粗粒微量 硬質	覆土 口～体破片
2 須恵器 坏	口　残 16.9 高　5.6 底　8.7	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	10Y8/1　灰白 緻密　青灰・白細粒微量 やや軟質	北部底面上 17 cm 口～体 1/2、底ほぼ完存 No.2
3 須恵器 坏	高　残 1.9 底　復 6.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y8/1　灰白 緻密　青灰細粒微量、白微粒微量 やや軟質	覆土 体下半～底 1/3
4 須恵器 坏	高　残 1.9 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	10Y7/1　灰白 やや緻密　白・青灰細粒微量 やや軟質	覆土 体下半～底破片
5 須恵器 甕	高　残 5.6	内面胴部ロクロナデ後無文当具痕。外面胴部平行叩き後一部ナデ。ヘラ状工具端部によると見られる一条の沈線あり。	5B5/1　青灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 胴破片
6 須恵器 壺	高　残 5.4	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ、自然釉が厚く付着する。	N7/0　灰白 緻密　白～礫微量、青灰微粒微量 硬質	覆土 胴破片
7 瓦 平瓦	長　残 5.1 幅　残 4.9 厚　1.9 重　残 55.7	凹面布目痕。凸面格子叩き。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐・白細粒微量、砂礫微量 やや硬質	覆土 破片

第 136 表　和田遺跡　SK-253 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 13.4 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ体部ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	7.5YR7/8　黄橙 やや粗い　赤褐細粒微量、砂細微量、灰黒粗～細粒多量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片

2 土師器 坏	口　復 14.4 高　残 4.9 底　復 8.9	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。	7.5YR7/8　黄橙 やや緻密　青灰細粒微量、砂細微量 やや軟質	覆土 口～体破片
3 須恵器 坏	口　復 13.6 高　残 3.5	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白・灰褐細粒微量 硬質	覆土 口～体破片

第 137 表　和田遺跡　SK-254・255 出土遺物観察表

1 土師器 坏	高　残 1.7 底　復 7.4	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ後体部横方向、底部一方向の密なミガキ。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5Y8/2　灰白 やや緻密　白細粒微量、粗砂～細粒少量 硬質	覆土 体下半～底 1/4
2 須恵器 坏	高　残 1.6 底　復 6.5	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y8/1　灰白 やや緻密　細砂微量、白・灰褐粗粒微量 やや軟質	覆土 体下半～底 1/4

第 138 表　和田遺跡　SK-267 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 5.3 底　復 15.2	内面体～底部ナデ。外面体部ナデ、底部粗いナデで植物の茎のような棒状物質の圧痕あり。	5PB5/1　青灰 緻密　白礫～細粒微量、青灰細粒微量 硬質	覆土 胴下半～底 1/5

第 139 表　和田遺跡　SK-270 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 8.7 幅　残 6.0 厚　1.8 重　残 123.6 高　残 3.7	凹面布目痕。凸面格子叩き。側面ケズリ。広端面ケズリ。	5Y5/1　灰 緻密　白細粒少量､白礫微量 硬質	覆土 破片

第 140 表　和田遺跡　SK-278 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 4.1 底　6.2	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後粗いミガキ。全面黒色処理。外面口縁～体部ロクロナデ後体部ケズリ、底部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや緻密　白・灰褐細粒微量、金雲母粗粒微量 やや硬質	中央部底面上 10 ㎝ 口～体 1/4、底完存 SX-205 No.2
2 土師器 鉢	高　残 1.7 底　残 7.5	内面底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面体部下端ケズリ、底部ケズリ、中央部の表面が剥離している。平底。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤褐･白細粒微量 硬質	東部底面上 7 ㎝ 体下半～底部ほぼ完存 SX-205 No.1

第 141 表　和田遺跡　SK-286 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.9 高　残 2.4	非ロクロ成形。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部軽いケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　灰黒・白細粒多量、赤褐粗粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6

第 142 表　和田遺跡　SK-300 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 16.2 高　残 3.2	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデと見られるが表面磨滅のため不明確。外面口縁ヨコナデ､体部ケズリ。内面被熱のため赤変する。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐細粒多量 やや硬質	北部底面上 12 ㎝ 口～体一部 No.3
2 須恵器 短頸壺	口　復 10.7 高　残 2.9	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。口唇部は内傾した斜面であり、中央が溝状に窪む。	N6/0　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口 1/5
3 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 5.9	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端ケズリ。武蔵型。	5YR6/6　橙 やや緻密　灰黒・赤褐・白細粒多量 やや硬質	南部底面上 2 ㎝ 口～胴上端 1/6 No.1

第 143 表　和田遺跡　SK-308 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 瓶	高　残 4.3 高台　復 8.7	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　灰黒粗～細粒多量、白細粒少量 硬質	覆土 体下半 1/4、底～脚 1/2

第 144 表　和田遺跡　SK-313 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 15.4 高　残 4.4	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後横方向に密なミガキ。内面全面黒色処理。外面口縁～体部ロクロナデ。口縁は黒色処理。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 口～体 1/6
2 須恵器 坏	口　復 12.4 高　4.1 底　復 5.5	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N6/0　灰 緻密　白粗粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6、底 1/2

第 145 表　和田遺跡　SK-319 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 4.7	内面胴部ナデ。外面胴部平行叩き。内面には自然釉が薄く付着する。	7.5YR6/1　褐灰 緻密　白・青灰粗粒微量 硬質	覆土 胴破片

第 146 表　和田遺跡　SK-323 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 5.4 幅　残 8.7 厚　2.3 重　146.3 高　残 5.5	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。粘土板の接合面で一部剝離する。	2.5Y5/1　黄灰 緻密　白粗～細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 破片

第 147 表　和田遺跡　SK-324 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 6.5	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き後横方向のナデ。断面褐色を呈する。	5YR6/3　にぶい橙 緻密　白細粒微量、砂礫微量 やや硬質	覆土 胴破片

第 148 表　和田遺跡　SK-333 出土遺物観察表

1 土師器 甕	口　復 29.6 高　残 20.8	内面口縁ヨコナデ、胴部上半横方向、下半縦方向の強いナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。一部縦方向ケズリ。口縁部の調整は甘く歪みあり。	5YR5/6　明赤褐 粗い　白・黒・灰礫多量、粗砂～細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	中央部底面上 7 ㎝と 8 ㎝が接合 口一部、胴 1/5 No.1・2
2 石 礫	長　19.0 幅　9.0 厚　1.9 重　386.2	平面不正形。断面長方形。剥片で裏面全面が剝離面。大きな原石から剝離されたものだろう。加工痕なし。カマドの構築材として用いられた可能性あり。	5YR3/4　暗赤褐 緻密　チャート 硬質	中央部底面上 5 ㎝ 完形 No.4

第 149 表　和田遺跡　SK-363 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 2.1 底　6.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	5Y7/1　灰白 緻密　白粗～細粒少量、青灰粗粒微量 硬質	中央部底面上 12 ㎝ 体下端 3/4、底完存 No.13
2 須恵器 甕	高　残 30.2	内面胴部当具痕。胴部下半相当部分に粘土の接合痕あり、接合部下位に巾 2 ～ 3 ㎝の帯状に木葉痕残る。外面胴部平行叩きで内面同様接合部下位に巾 2 ㎝の帯状に木葉痕あり。木葉痕は接合部より下位に限られる。接合前に過度の乾燥を除くために貼ったものか。	5Y5/1　灰 緻密　白色針状物質多量、白礫～粗粒少量 硬質	土坑全体底面上 9 ～ 16 ㎝と SK-650 東部、底面上 15 ㎝が接合 胴下半破片 No.6・7・12・14・17・18・21・35、SK-650 No.2

第 150 表　和田遺跡　SK-407a 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	高　残 2.2 つまみ　4.2	内面天井部ロクロナデで直線の線刻あり。中央指押さえの跡あり。外面天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。つまみはリング状で中央がやや突出する。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒細粒多量、白粗粒少量 硬質	覆土 つまみ～天井完存

2 土師器 坏	口　復 19.0 高　残 3.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。大型。	2.5Y8/1　灰白 緻密　青灰微粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/6 覆土、SK-408
3 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 7.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白細粒微量、黒灰粗粒微量 やや硬質	覆土 体～底 1/6
4 土師器 甕	高　残 2.8 底　復 4.0	内面底部ナデ。外面胴～底部ケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白細～微粒多量、透明粗粒微量、金雲母粗粒微量 硬質	覆土 底～胴下端 1/4
5 須恵器 甕	高　残 5.5	内面同心円当具痕。外面平行叩き、自然釉付着。	N4/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 破片

第 151 表　和田遺跡　SK-422 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口　復 18.8 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。武蔵型。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　白細粒微量、砂細少量、灰黒細粒少量 硬質	覆土 口 1/6

第 152 表　和田遺跡　SK-423 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 2.4 底　復 5.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N5/0　灰 緻密　白微粒少量、砂礫微量 硬質	覆土 体～底 1/6
2 須恵器 甕	高　残 4.1	内面同心円当具痕。外面平行叩き。	N5/0　灰 緻密　黒・白微粒多量、黒細粒微量 硬質	南東部底面上 14 ㎝ 胴破片 No.1

第 153 表　和田遺跡　SK-425 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	口　復 18.0 高　残 1.2	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒・赤褐・白微粒少量、黒細粒微量 軟質	覆土 口破片
2 須恵器 蓋	口　復 16.4 高　残 3.2	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白微粒多量、白粗～細粒微量 硬質	覆土 口～天井破片

第 154 表　和田遺跡　SK-445a 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.2 高　残 3.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後体部ミガキ。ミガキの方向・粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 口～体 1/6

第 155 表　和田遺跡　SK-452 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.2 高　残 2.5	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　黒細粒微量、白粗粒微粒、赤褐粗粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6
2 土師器 坏	口　復 11.9 高　残 3.1	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後放射状のミガキ。表面磨滅によりミガキの粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒微量、白粗粒微量、赤褐粗粒少量 硬質	覆土 口～底 1/5

3 土師器 鉢	口　復 21.0 高　残 4.1	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤褐礫微量、灰黒細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
4 須恵器 甕	口　復 31.6 高　残 8.0	内面口縁ロクロナデ、窯壁の細かな破片が溶着する。外面口縁部ロクロナデ。3段の波状文とそれを区画する沈線あり。	N6/0　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 口 1/6
5 須恵器 甕	高　残 13.1	内面胴部同心円当具痕。外面胴部擬格子叩き後カキ目。	N7/0　灰白 緻密　白礫微量、黒褐粗～細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	覆土 胴破片

第 156 表　和田遺跡　SK-464 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.7	内面天井部ロクロナデ。外面天井部回転ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 体～天井 1/4

第 157 表　和田遺跡　SK-469 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 12.5 高　4.7 底　7.4	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白礫～粗粒微量、灰黒細粒少量 やや硬質	中央部底面上 11 ㎝ 口～体 1/6、底完存 No.1
2 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 5.0	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。武蔵型。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白細粒少量、金雲母粗粒少量 硬質	覆土 口破片

第 158 表　和田遺跡　SK-477 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 13.0 高　復 3.5 底　復 6.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白細粒少量、青灰細粒多量、白礫微量 硬質	覆土 口～体 1/8

第 159 表　和田遺跡　SK-484a 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 14.5 高　復 4.4 底　復 7.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部底部ケズリ、底部は平底。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。ただし内面の漆は磨滅のためほとんど失われている。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白細粒少量、赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 口 1/8、体～底 1/4
2 土師器 坏	口　復 14.6 高　残 4.6 底　復 8.4	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。粗いミガキの可能性あり。表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで紐積痕あり。丸味を帯びた平底。内面全体・外面口縁部漆仕上げ。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白粗粒微量、灰黒細粒多量 やや軟質	中央部底面上 11 ㎝ 口～底 1/3 No.1
3 土師器 坏	口　復 15.0 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後斜方向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。内面黒色処理。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　灰褐細～微粒多量 やや軟質	覆土 口～体 1/8
4 土師器 鉢	口　復 17.2 高　復 5.1 底　復 8.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ナデで指頭圧痕残る。底部ケズリ。体部ナデは粗く歪み残る。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白粗粒少量、細砂粒微量 やや硬質	南東部底面直上 口～体上半 1/6、底～体下半 1/4 No.2
5 土師器 鉢	口　復 18.2 高　復 5.8 底　復 10.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸味を帯びた平底。	5Y6/1　灰 緻密　白細粒少量、灰黒細粒多量 やや軟質	中央部底面上 11 ㎝ 口 1/6、体～底 1/2 No.1
6 土師器 鉢	高　残 5.5 底　復 9.4	内面体～底部ナデで指頭圧痕があり。底部から立ち上がるあたりには接合痕がある。外面体～底部ケズリで被熱のため体部は赤変し、一部スス付着。全体に調整は粗い。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白粗粒少量 やや軟質	中央西部底面上 6 ㎝ 底～体下位 3/4 No.4
7 土師器 台付甕	高　残 2.4	内面底部ナデ、脚部上端ナデ。外面胴部下端～脚部上端ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒微量、砂微粒多量 硬質	覆土 底～脚 1/2

第 160 表　和田遺跡　SK-485 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 17.0 高　残 2.1	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	5Y6/1　灰 緻密　白細粒少量 硬質	覆土 口～体破片
2 土師器 坏	高　残 2.3 底　復 9.6	内面体～底部ナデ。外面体～底部ケズリ。	2.5Y8/2　灰白 緻密　青灰粗～細粒多量 やや軟質	南部底面上 6 ㎝ 底～体下位 1/4 No.1
3 須恵器 坏	高　残 1.6 底　復 7.0	内外面とも表面磨滅が著しい。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ケズリ、底部糸切り離し後無調整と見られる。	5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰礫～細粒少量 やや軟質	覆土 底～体下端 1/4
4 土師器 鉢	口　復 17.4 高　残 4.6	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	10YR7/1　灰白 緻密　白粗粒少量、灰黒細粒少量 やや硬質	覆土 口～体破片
5 土師器 鉢	高　残 2.2 底　復 6.8	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。器壁厚い。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰礫～細粒多量、白粗粒少量 硬質	覆土 底～体下端 3/4
6 瓦 丸瓦	長　残 7.8 幅　残 5.5 厚　2.6 重　225.8 高　残 6.3	凹面布目痕で側縁に平行するナデあり。凸面ナデ。狭端面ケズリ。	7.5Y6/1　灰 緻密　白礫少量 硬質	覆土 破片

第 161 表　和田遺跡　SK-528 出土遺物観察表

1 土師器 甕	口　復 19.8 高　残 6.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白粗粒少量、砂細粒少量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 口～胴上端一部
2 瓦 平瓦	長　残 5.8 幅　残 4.6 厚　1.3 重　残 41.2	凹面布目痕。凸面ナデ。狭端面ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　白・灰礫微量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 破片

第 162 表　和田遺跡　SK-529a 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 12.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N8/0　灰白 緻密　黒・灰礫微量 軟質	覆土 口～体 1/5
2 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 7.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しか。表面磨滅が著しい。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　黒礫微量、白粗粒微量 軟質	覆土 底 1/2
3 須恵器 高台付坏	高　残 2.6 高台　復 11.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼り付け。内面底部平滑。	N8/0　灰白 緻密　黒礫微量､黒微粒少量 硬質	覆土 体一部、底 1/4

第 163 表　和田遺跡　SK-536 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	口　復 15.6 高　残 7.3	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ、高台貼り付け。	N8/0　灰白 やや緻密　白・灰礫微量、白粗粒微量 軟質	西部底面上 8 ㎝ 口一部、体 1/3、底 1/4 No.1、SB-235 P-7

第 164 表　和田遺跡　SK-538a 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 15.3 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。内面漆仕上げの可能性あり。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白・灰褐細粒微量 やや軟質	覆土 口～体 1/5

2 須恵器 高台付坏	口　復 13.5 高　残 3.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ。高台は貼り付け部分で剥離する。高台基部径は約8㎝。	10Y8/1　灰白 やや緻密　青灰細粒少量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口 1/5、体 1/2、底 3/4
3 土師器 甕	口　復 23.5 高　残 4.8	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ。武蔵型。	5YR7/8　橙 やや緻密　赤褐粗～細粒微量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口 1/5

第 165 表　和田遺跡　SK-544A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (㎝・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口　復 12.1 高　3.9 底　復 6.4	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y6/1　灰 緻密　灰黒細粒少量、白粗～細粒微量 硬質	南東部底面上 23 ㎝ 口～底 1/2 No.2

第 166 表　和田遺跡　SK-550 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 8.0	内面底部ロクロナデ。外面体部下端ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ。底部やや厚手。	7.5Y5/1　灰 やや緻密　灰黒細粒少量、白粗～細粒少量 やや硬質	北部底面上 5 ㎝ 体下端～底 1/3 SK-544 No.1

第 167 表　和田遺跡　SK-567 出土遺物観察表

1 須恵器 鉢	高　残 9.2	内面体部ロクロナデ・ナデ。外面体部ロクロナデ後一部平行叩き。	N6/0　灰 緻密　白礫微量、灰黒・白粗粒少量 硬質	中央部底面上 5 ㎝ 体一部 No.1
2 須恵器 甕	高　残 5.3	内面同心円当具痕。外面平行叩き。	N6/0　灰 やや緻密　白・黒礫微量、白粗粒微量、灰黒粗粒少量 やや硬質	中央部底面上 5 ㎝ 胴破片 No.2

第 168 表　和田遺跡　SK-570 出土遺物観察表

1 土師器 坏	高　残 2.8 底　復 6.4	内面体～底部ナデ後ミガキ。密なミガキと推定。ミガキ後黒色処理の可能性あり。外面体～底部ケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒粗粒微量、白細粒微量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 体 1/6、底 1/4
2 灰釉陶器 高台付椀	口　復 11.2 高　残 2.2	内面口縁～体部ロクロナデ、灰釉施釉。外面口縁～体部ロクロナデ、灰釉施釉。ハケヌリか。尾北産か？	2.5Y7/1　灰白 緻密　黒・白褐細粒微量 硬質	覆土 口～体破片

第 169 表　和田遺跡　SK-572 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 11.9 高　3.5 底　5.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N5/0　灰 緻密　黒・白細粒少量、白微粒多量、白粗粒微量 硬質	覆土 口～体 1/4、底完存

第 170 表　和田遺跡　SK-582 出土遺物観察表

1 土師器 甕	高　残 2.4 底　復 7.8	内面胴部下半～底部ナデ。外面胴部下半～底部ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/3　にぶい褐 やや緻密　黒・白微粒多量、黒・白・赤褐細粒少量 硬質	覆土 胴下半～底 1/3
2 瓦 丸瓦	長　残 8.0 幅　残 8.3 厚　2.2 重　残 181.2 高　残 6.2	凹面布目痕後狭端縁ケズリ。凸面布痕。狭端面ケズリ。	N7/0　灰白 やや緻密　白細粒少量、白礫微量、灰黒細粒多量、赤褐粗粒少量 硬質	覆土 破片

第 171 表　和田遺跡　SK-583 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高台付坏	高　残 2.3 高台　復 7.4	ロクロ成形。表面磨滅が著しい。内面底部ロクロナデ、黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部高台貼り付け。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・白細粒微量、白微粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 高台～底破片
2 須恵器 甕	高　残 4.2	内面下半同心円当具痕。外面下半平行叩き。	N5/0　灰 緻密　白微粒多量、白細粒微量 硬質	覆土 胴下半破片

第 172 表　和田遺跡　SK-588 出土遺物観察表

1 土師器 甕	口　復 20.8 高　残 4.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　黒微粒多量、黒・白細粒少量、黒・白粗粒微量 やや硬質	覆土 口～胴上端 1/2

第 173 表　和田遺跡　SK-592 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 13.4 高　4.3 底　復 6.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部厚め。	7.5Y7/1　灰白 緻密　白細粒多量 やや軟質	覆土 口～底 1/5

第 174 表　和田遺跡　SK-594 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	高　残 1.6	内面底部ロクロナデ。外面底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	N6/0　灰 緻密　白礫～粗粒微量 硬質	覆土 底 1/4

第 175 表　和田遺跡　SK-597 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.5 高　4.4 底　6.0	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後ミガキ。口縁～体部は縦、体～底部は横方向主体のミガキ。外面口縁～体部ロクロナデ後体部下端～底部手持ちケズリ。武蔵型甕に似た胎土。	7.5YR6/6　橙 緻密　黒・白褐粗粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	覆土 口～体 1/4、底完存
2 土師器 坏	口　復 12.0 高　残 3.0	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。武蔵型甕に似た胎土。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白粗～細粒少量、赤褐粗粒少量、透明礫～細粒微量 硬質	覆土 口～体破片
3 土師器 坏	高　残 2.0 底　復 7.0	内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面体～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面体～底部ナデかケズリ。武蔵型甕に似た胎土、調整である。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白粗～細粒少量、灰褐粗粒少量、砂細粒少量、金雲母細粒微量 やや硬質	覆土 底～体下位 1/2
4 土師器 坏	高　残 1.1 底　復 6.4	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ後一方向の密なミガキ。黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白粗粒微量、青灰粗～細粒少量 やや軟質	覆土 底 1/4
5 須恵器 坏	高　残 0.9 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部面からの粘土のめくれあり。底部回転糸切り離し後無調整。	5Y8/1　灰白 やや緻密　青灰粗粒少量、白粗粒微量、砂粗～細粒少量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/4
6 須恵器 高台付坏	高　残 2.3 高台　復 7.4	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N8/0　灰白 緻密　青灰粗～細粒少量 やや硬質	覆土 底～高台 1/3（一部欠損）
7 土師器 台付甕	高　残 3.1 高台　復 7.0	内面底部ナデ、脚部上端ナデ後下半ヨコナデ。外面胴部下端横方向のケズリ、脚部縦方向のケズリ後下半ヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤褐細粒少量、白細粒多量、金雲母細粒微量 硬質	覆土 底～脚完存

8 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 4.5	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。外面口縁ヨコナデで体～底部ケズリで紐積痕あり。8 世紀代の遺物の混入。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤褐礫少量、砂細粒少量、白細粒微量 やや軟質	覆土 口～体 1/4

第 176 表　和田遺跡　SK-613b 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高台付坏	高　残 2.4 高台　復 6.8	ロクロ成形。表面磨滅が著しく調整不明な部分あり。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ナデか。高台貼り付け。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐細粒微量、白細粒少量、灰黒粗～細粒少量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 底 1/2、高台 1/2

第 177 表　和田遺跡　SK-616 出土遺物観察表

1 土師器 坏	高　残 1.2 底　4.6	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。甕のような胎土。	7.5YR7/4　にぶい橙 粗い　灰黒粗～細粒・白細粒少量、砂粗～細粒多量 硬質	覆土 底完存
2 土師器 坏	高　残 1.3 底　復 6.0	ロクロ成形。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しか？　内外面とも磨滅が著しい。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　赤褐細粒多量、砂細粒少量 やや軟質	覆土 体 1/6、底 1/3
3 須恵器 坏	高　残 1.3 底　復 6.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。酸化焔焼成。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　白細粒少量 やや硬質	覆土 体下端～底 1/3
4 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5Y7/1　灰白 緻密　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 体下端～底破片
5 土師器 高台付坏	高　残 3.2 高台　復 6.0	ロクロ成形。内外表面の剝離・磨滅が著しく調整不明。特に内面は激しく器壁は本来より薄く表現されている可能性が高い。内面体～底部ロクロナデと考えられる。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離しと考えられる。高台は「ハ」の字状に開く。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　灰黒礫～細粒少量、赤褐細粒多量、砂礫微量 やや硬質	覆土 体一部、底 5/6、高台 1/4
6 土師器 高台付坏	高　残 2.6	内面体～底部ロクロナデ後一方向のやや密なミガキ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリのち高台貼り付け。高台は外反するものと見られる。器壁厚く丁寧なつくり。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密　白細粒多量、砂細～微粒少量 やや硬質	覆土 体 1/4、底 5/6、脚上半 1/2
7 土師器 甕	口　復 21.4 高　残 5.4	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。武蔵型。	5YR6/8　橙 やや粗い　白細粒多量、灰黒粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上端破片
8 土師器 羽釜	口　復 18.8 高　残 7.4 鍔部　復 20.6	内面口縁～胴部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部軽いナデ、鍔部貼り付け。	5YR6/6　橙 やや粗い　白細粒多量、赤褐礫～粗粒少量、灰黒細粒少量 硬質	覆土 口～胴破片

第 178 表　和田遺跡　SK-620 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	口　復 11.5 高　5.3 高台　復 6.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。	5Y7/1　灰白 緻密　白礫～細粒微量、灰黒細粒少量 やや軟質	南東部底面上 4 cm 口 1/5、体 1/4、底 1/2 No.1

第 179 表　和田遺跡　SK-640 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 13.4 高　3.6 底　6.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N7/0　灰白 緻密　黒・白礫微量、白細粒微量 やや硬質	中央部底面上 8 cm、逆位 口～体 1/4、底完存 No.1

第 180 表　和田遺跡　SK-642 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 13.2 高　残 4.3	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　黒・赤褐微粒多量、黒・白・赤褐細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/3
2 土師器 高台付坏	高　残 2.0	ロクロ成形。内面底部ナデ。外面底部高台貼り付け。坏部と高台部の接合部外側に一条の突線貼付。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒・白微粒多量、黒・白細粒少量 硬質	覆土 底～高上半 1/2

第 181 表　和田遺跡　SK-650 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 8.8 幅　残 7.9 厚　2.0 重　242.0 高　残 6.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白礫微量、砂礫微量 硬質	南東部底面上 5 cm 破片 No.1

第 182 表　和田遺跡　SK-656 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 2.4	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒微粒多量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片

第 183 表　和田遺跡　SK-661 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 10.3 高　残 2.6	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後体～底部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤褐礫～細粒多量、白粗粒少量 硬質	覆土 口～底 1/4 No.1

第 184 表　和田遺跡　SK-673 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.7 底　復 6.0	酸化焔焼成。表面磨滅が著しい。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切りか？	5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　白微粒多量、赤褐・白細粒少量 軟質	覆土 体下半～底 1/4

第 185 表　和田遺跡　SK-690 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.4 高　残 3.8 最大　復 11.6	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部上端沈線 2 条あり。体部ケズリ。	10YR7/8　黄橙 やや緻密　白細粒微量、灰黒粗～細粒多量 やや硬質	北部底面上 13 cm 口～体 1/4 No.1

第 186 表　和田遺跡　SK-694 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	口　復 16.2 高　残 1.7	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 緻密　灰黒細粒微量 硬質	中央部底面上 12 cm 口～天井 1/6 No.3
2 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/6　橙 緻密　赤褐粗～細粒多量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
3 土師器 坏	口　復 13.8 高　残 3.7	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後横方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ後粗い横方向のミガキ。	7.5YR8/4　浅黄橙 やや緻密　灰黒細粒少量、砂細粒少量 やや軟質	南西部底面上 18 cm 口～体 1/3 No.4
4 須恵器 坏	口　復 11.0 高　3.9 底　復 6.4	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。口縁部～体部歪みあり。	N5/0　灰 やや緻密　白細粒多量、黒褐粗～細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/6、底 1/2

5 須恵器 坏	口　復 13.6 高　残 5.5	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　赤褐細粒微量、灰黒粗～細粒少量 やや軟質	覆土 口～体破片
6 須恵器 高台付坏	高　残 2.3 高台　復 5.4	内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り離しか？高台貼り付け。	5Y7/1　灰白 やや緻密　灰黒粗～細粒少量、白粗～細粒微量 やや軟質	覆土 体一部、底完存、高台 1/4
7 土師器 甕	口　復 18.2 高　残 3.6	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	5YR5/4　明赤褐 やや粗い　白細粒多量、金雲母細粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上端一部
8 土師器 甕	高　残 2.1 底　5.0	底部ナデでヘラ状工具痕残る。外面胴部下端ケズリ、底部ナデ。底部２条の線状痕あり。木葉痕か？	5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　灰黒・白細粒多量 やや硬質	中央部底面上 16 ㎝ 底完存 No.2

第 187 表　和田遺跡　SK-698 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.8 つまみ 復 4.7	内面体～天井部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。つまみはリング状。	N6/0　灰 やや緻密　白礫微量、黒粗粒微量 やや硬質	南部底面上 22 ㎝ 体一部、天井 1/3、つまみほぼ完存 No.1
2 土師器 坏	口　復 11.2 高　残 3.5 底　復 4.4	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや緻密　灰・赤褐礫微量、細砂粒少量 硬質	中央部底面上 17 ㎝ 口～底 1/4 No.2
3 土師器 坏	高　残 2.3	内外面とも表面磨滅が著しい。内面底部ナデ。外面体部ケズリ、底部中央木葉痕あり。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白・黒礫微量 やや軟質	覆土 底一部欠損

第 188 表　和田遺跡　SK-735 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　10.7 高　3.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、体部上端に紐積痕明瞭に残る。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　黒微粒多量、黒細粒少量 やや硬質	北部底面直上、正立 口～底 1/2 No.2
2 土師器 坏	口　復 11.6 高　残 3.5	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後横向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、赤褐細粒少量、赤褐礫～粗粒微量 やや軟質	覆土 口～底 1/3
3 土師器 坏	口　復 11.7 高　3.3	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後ミガキ。ミガキは密なものと思われるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白粗粒少量 硬質	覆土 口～底 1/3
4 土師器 坏	口　復 13.0 高　3.8	内面口縁～体部ヨコナデ。底部ナデ後ミガキと思われるが表面磨滅のため方向・粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5YR5/8　明赤褐 緻密　黒・白微粒多量、赤褐・白細粒少量 硬質	覆土 口～底 1/3
5 土師器 坏	口　復 13.2 高　残 3.8	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部～底部ケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒微粒多量、黒・白細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/4
6 土師器 坏	口　復 13.4 高　残 4.1	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、赤褐粗～細粒少量 硬質	覆土 口～底 1/3
7 土師器 坏	口　復 13.4 高　4.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後ミガキの可能性あるが表面磨滅のため不明瞭。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、赤褐・白細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	中央部底面直上、正立 口～底ほぼ 1/2 No.1
8 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 3.1	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　黒・白微粒多量、赤褐細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/3

9 土師器 坏	口　復 14.0 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後横向の密なミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	2.5YR4/3　にぶい赤褐 やや緻密　黒微粒多量、白細～微粒・赤褐細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/4
10 土師器 坏	口　復 16.0 高　4.5	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後放射状及び横方向の密なミガキ。底部は一方向。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐粗～細粒少量、白細粒微量 硬質	覆土 口～体 1/4、底完存
11 土師器 鉢	口　復 13.6 高　残 5.6 最大　復 17.6	内面口縁ヨコナデ、体部ナデでヘラ状工具痕明瞭。外面口縁ヨコナデ、体部ナデと見られ紐積痕あり。外面は表面剝離が著しく調整不明瞭。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
12 土師器 甑	口　復 24.6 高　残 8.7	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリ。口唇部は面取りをされ、平坦面中央はやや凹む。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒･白微粒多量、黒・赤褐・白細粒少量、黒粗粒微量 硬質	覆土 口～胴上半 1/6
13 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 10.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ケズリ。口縁がややゆ歪む。長胴。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　黒･白細～微粒多量、黒・赤褐粗粒微量、赤褐細粒微量、砂粗～細粒多量 硬質	覆土 口～胴上半 1/6
14 土師器 甕	口　復 17.2 高　残 5.6	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端縦方向のケズリ。口縁部は面取りされる。球胴。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒･白微粒少量、赤褐・白細粒微量、赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 口～胴上端 1/6
15 土師器 甕	高　残 2.1 底　4.4	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部木葉痕。球胴。小型。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　黒・白・赤褐微粒少量、赤褐細粒微量、赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 胴下端～底 2/3
16 土師器 甕	高　残 2.6 底　復 5.0	内面底部ナデ。外面胴部下端縦方向のケズリ、底部木葉痕。武蔵型。	5YR7/6　橙 やや粗い　黒・赤褐微粒少量、黒・灰粗粒微量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 胴下端～底 1/3
17 土製品 筒形	高　残 2.5 上面　6.0	内面上面ナデでヘラ状工具痕残る。外面上面ナデ、体部ナデ、上面～体部には棒状物質の圧痕があり、特に上面外周に顕著。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒・赤褐微粒少量、赤褐・白細粒微量、赤褐礫～粗微量 やや軟質	覆土 上面 3/4

第 189 表　和田遺跡　SK-767 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.5 底　復 6.8	内面底部ロクロナデ。外面体部下端ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周～体部下端を回転ケズリ。やや厚めの底部で粘土を 3 層重ねた痕跡あり。	7.5Y7/1　灰白 緻密　青灰粗粒少量 やや軟質	覆土 底 1/4
2 須恵器 甕	口　復 24.0 高　残 7.8	内面口縁ロクロナデ、自然釉付着。外面口縁ロクロナデ、一部自然釉付着。	5Y7/1　灰白 緻密　白細粒少量 硬質	中央部底面直上 口破片 No.2
3 土師器 羽釜	口　復 24.0 高　残 18.4 最大　27.3 鍔部　復 26.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデで紐積痕わずかに残る。下半縦方向のケズリ。鍔部貼り付け。	7.5Y6/6　橙 粗い　赤褐礫多量、白粗粒多量、砂粗粒多量 硬質	中央部底面上 2 ㎝と SK-766 の破片が接合 口～胴 1/6 No.1、SK-766

第 190 表　和田遺跡　SK-768 出土遺物観察表

1 土師器 高台付坏	高　残 3.4 高台　復 7.3	内面体～底部ロクロナデ後体部横方向、底部一方向の密なミガキ。内面黒色処理。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼り付け。底部厚く 2 枚の粘土を貼り合わせた痕跡あり。	7.5YR6/6　緻密 白・青灰粗粒微量 やや硬質	南東部底面上 21 ㎝ 逆位と SI-727 の破片が接合 体下半～底一部欠損 No.1、SI-727

第 191 表　和田遺跡　SK-808 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 1.5 つまみ 復3.8	内面天井部ロクロナデ。外面天井部回転ケズリ、つまみ貼り付け。つまみはリング状で中央が突出する。	N7/0　灰白 やや緻密　黒微粒多量、白細粒少量、黒粗粒微量 やや軟質	中央部底面上 27 cm 天井一部、つまみ完存 No.1

第 192 表　和田遺跡　SK-809 出土遺物観察表

1 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 14.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。武蔵型。	5YR4/6　赤褐 緻密　白微粒微量、金雲母粗粒微量 硬質	一括 口～胴上位 1/4 一括

第 193 表　和田遺跡　SK-836・837 出土遺物観察表

1 土師器 甑	高　残 2.5 底　復 5.4	内面底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。単孔、径 1.8 cm	5YR7/4　にぶい橙 緻密　黒微粒多量、赤褐細粒少量、赤褐粗粒少量、赤褐礫微量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/2
2 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 5.9	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ後胴部ケズリ。表面磨滅が著しい。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白細粒多量、黒・赤褐細粒少量、白粗粒微量、金雲母粗粒微量 やや硬質	覆土 口～胴上半 1/6
3 須恵器 甕	高　残 4.2	内面同心円当具痕。外面平行叩き後カキ目。	7.5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒多量、黒細粒少量、白微粒少量、白礫微量 やや硬質	覆土 胴破片

第 194 表　和田遺跡　SK-838B 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 12.8 高　残 2.9	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ後放射状に粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR5/3　にぶい赤褐 やや粗い　黒微粒多量、黒・白細粒少量、赤褐・白粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体破片
2 土師器 甑	高　残 3.6	内面底部ナデで指頭圧痕残る。外面胴部下端ケズリ。孔の周囲には粘土のめくれあり。単孔、径 2.0 cm。内側の孔に接する位置に直径約 1.5 cm、深さ 0.5 cmのくぼみあり。	7.5YR8/2　灰白 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白粗粒微量 やや硬質	覆土 体一部、底完存
3 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 5.1	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリで工具の当たり強く残る。長胴。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、黒・白細粒少量、白粗粒微量 やや硬質	覆土 口 1/6
4 須恵器 甕	高　残 9.0	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き後カキ目。	10Y7/1　灰白 やや緻密　灰褐細粒多量、砂礫細粒、赤粗～細粒少量 やや硬質	北部底面直上 胴破片 SK-222 No.2
5 須恵器 甕	高　残 5.0	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き後浅いカキ目。	N6/0　灰 緻密　白微粒多量、白細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴破片
6 須恵器 甕	高　残 5.7	内面同心円当具痕。外面擬格子文叩き。	N7/0　灰白 緻密　黒微粒多量、黒・白細～微粒少量、赤褐粗～細粒微量 やや軟質	覆土 胴破片

第 195 表　和田遺跡　SK-845 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.2 高　2.8 最大　復 11.9	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ後ミガキ。方向や粗密は不明。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。底部中央に木葉痕あり。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤褐粗～細粒微粒、白細粒多量、砂細粒少量 硬質	東部底面上 25 ㎝ 口～体 2/3、底完存 No.1
2 土製品 筒形	口　12.0 高　残 6.2 最大　12.4	内面口縁～体部軽いナデで紐積痕・指頭圧痕を明瞭に残す。外面口縁～体部軽いナデで紐積痕あり。	2.5Y8/4　淡黄 やや緻密　赤褐細粒多量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体上半ほぼ完存
3 石 礫	長　15.9 幅　4.7 厚　3.4 重　344.1	棒状。上半および下面平坦面が被熱により赤変する。支脚か？	7.5YR7/1　明褐灰 緻密　砂岩 硬質	覆土 完形

第 196 表　和田遺跡　SK-864 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	口　復 14.2 高　残 3.2	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N5/0　灰 緻密　赤褐・白細粒微量 硬質	中央南部底面直上 口～体破片 No.4
2 土師器 坏	口　復 11.4 高　残 3.4 最大 復 11.8	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後体～底部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。	2.5Y3/1　黒褐 やや緻密　透明細～微粒少量、白細粒少量 やや硬質	中央南部底面直上 口～底 1/2 No.1・一括
3 土師器 坏	口　12.3 高　3.9 底　7.6	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後体～底部粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部粗いケズリ、底部木葉痕。外面体～底部のみ調整が粗い。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　透明細～微粒少量、白微粒少量 硬質	西部底面上 2 ㎝ ほぼ完形、外面底部剝離 No.9
4 土師器 坏	口　12.2 高　3.8 底　5.9	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後粗い放射状のミガキ。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、底部中央木葉痕。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白・透明細粒少量 やや硬質	東部底面直上が接合 口 2/3、体～底完存 No.11・12
5 土師器 鉢	高　残 7.4 体　復 11.0	内面口縁～体部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　黒・白細粒少量、砂礫少量 やや軟質	一括 口～体 1/3 一括
6 土師器 鉢	口　11.8 高　13.2 底　6.8 最大　15.4	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部下端横方向のケズリ後体部縦方向のケズリ、底部ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　白細粒少量、赤褐粗粒微量、砂細粒少量 硬質	南部底面上 2 ㎝～ 9 ㎝が接合 ほぼ完形 No2・7・8・一括
7 土師器 鉢	高　残 13.3 底　10.2 体 部　復 17.5	内面体～底部ナデ。外面体部上端巾狭く細い突帯あり。体～底部ケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗～細粒・白細粒多量 やや硬質	南部直上～ 17 ㎝が接合 体上半 1/4、体下半～底外周ほぼ完存 No.2・3・4・10・14
8 土師器 甑	口　18.9 高　14.7 底　6.0 重　765.1	内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ、底部一孔で直径 1.3 ～ 2.2 ㎝の楕円形。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部上半縦方向のケズリ、下端横方向のケズリ、底部ケズリ。外面体部のケズリは凹凸著しい。紐積を成形しきれていないためか。体部下半～底部のケズリは粗い。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　灰褐細粒多量、白細粒微量、砂礫少量 硬質	南部底面直上、横位 完形 No.3
9 土師器 甕	口　16.6 高　30.5 底　4.2	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ、胴部中位は紐積痕が明瞭で下半はヘラ状工具痕を明瞭に残す。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後中位～下半中心に比較的密なミガキ。底部木葉痕。最大径は口縁部。長胴。胴部中位に接合痕あり。内面に器壁の凹凸として明瞭に残るほか、器形の歪みも著しい。	2.5YR5/8　明赤褐 粗い　黒・白細～微粒少量、黒・白粗粒少量、黒・赤褐・白礫微量 硬質	南部底面直上～ 3 ㎝が接合 ほぼ完形 No.2・3・19・20

10 土師器 甕	口　復 14.8 高　残 20.0 底　復 8.5	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデでヘラ状工具痕を明瞭に残す。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後下半横方向のケズリ、底部ケズリ。球胴。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　黒・白微粒少量、黒・白粗～細粒少量、白・黒・赤褐礫微量 硬質	南部、底面直上～2㎝が接合 口～胴上半ほぼ完形、胴中位～下半2/3、底完存 No.2・3・5・8・21
11 土師器 甕	口　19.0 高　29.2 底　9.5 最大　27.8 重　2454.5	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向、下半横方向のケズリ、底部ケズリ。底部はやや突出する平底。球胴。	2.5YR4/6　赤褐 やや粗い　赤褐・白・灰褐細粒少量 硬質	中央部底面直上、横位 ほぼ完形 No.1
12 土師器 甕	高　残 13.0 底　5.7	内面胴～底部ナデ。外面胴部縦方向のケズリ後下端横方向のケズリ、底部木葉痕、外面胴部に部分的にスス付着。球胴。	7.5YR5/6　明褐 やや粗い　砂礫少量、赤褐・白細粒少量 硬質	中央部底面直上、横位 胴下半～底完存 No.6・15
13 須恵器 甕	高　残 7.5	内面同心円当具痕。外面平行叩き。	5Y8/1　灰白 やや緻密　灰褐微粒少量、白細粒少量 やや軟質	覆土 胴破片
14 土師器 手捏ね 鉢形	口　復 6.1 高　3.6 底　4.6 重　76.7	内面口縁～底部ナデで指頭圧痕あり。外面口縁～体部ナデで指頭圧痕あり、底部ナデ。	5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒・白・赤褐微粒少量、黒・赤褐細粒少量、白細粒微量 やや軟質	南部底面上3㎝ ほぼ完形 No.13
15 石 礫	長　9.5 幅　8.6 厚　4.9 重　461.7	平面方形。断面不正形。特に加工の痕跡なし。角礫だが丸味あり。転石だろう。	10YR5/4　にぶい黄褐 緻密　チャート 硬質	西部底面上4㎝ 完形 No.17
16 石 礫	長　11.0 幅　5.3 厚　3.6 重　291.8	平面楕円形。断面三角形。特に加工の痕跡なし。棒状の河原石。	10Y6/1　灰 やや粗い　安山岩 硬質	西部底面上30㎝ 完形 No.16
17 石 礫	長　13.9 幅　6.7 厚　4.5 重　576.3	平面楕円形。断面菱形。特に加工の痕跡なし。棒状の河原石。	N6/0　灰 粗い　結晶片岩 硬質	中央部底面直上 完形 No.18

第 197 表　和田遺跡　SK-866 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　12.0 高　4.0 最大　12.7	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後体～底部放射状の粗いミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	7.5YR8/4　浅黄橙 緻密　黒・赤褐・白細粒微量 硬質	中央部？底面上20㎝と22㎝が接合 ほぼ完形 No.1・3
2 土師器 坏	口　復 13.0 高　残 3.8 最大　復 13.5	内外面とも表面剥離が著しく調整不明瞭。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒・赤褐・白微粒少量、赤褐細粒少量、黒・白細粒微量 やや硬質	中央部？北部底面上22㎝ 口～体 1/5 No.2
3 須恵器 蓋	口　復 11.2 高　残 1.6	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N6/0　灰 緻密　黒・白細粒少量、白微粒少量 硬質	覆土 口～天井破片

第 198 表　和田遺跡　SK-875 出土遺物観察表

1 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 6.6	内面底部ナデ。外面胴部下半ケズリ、底部ナデ。	5YR5/8　明赤褐 粗い　砂礫少量、赤褐細粒多量、白細粒少量 やや硬質	西部底面上2㎝ 底 1/3 No.3
2 土製品 筒形	高　残 9.0 体　復 8.4～10.7	内面体部軽いナデで紐積痕・指頭圧痕明瞭。外面体部ナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや粗い　砂礫少量、赤褐細粒少量、白微粒少量 やや硬質	西部底面上2㎝、7㎝、8㎝が接合 体破片 No.1・2・3

第 199 表　和田遺跡　SK-879 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.9 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。小型。	2.5YR5/2　暗灰黄 やや緻密　黒細粒少量、赤褐・白細粒微量 硬質	覆土 口～体 1/6

第 200 表　和田遺跡　SK-880 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 11.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　赤褐細粒少量、黒微粒少量 やや硬質	覆土 口～体 1/6
2 土師器 甕	高　残 5.8 底　復 6.8	内面胴部下端～底部ナデ。外面胴部下端斜方向のケズリ、底部ケズリ。	2.5YR7/2　灰黄 粗い　砂礫多量 やや硬質	覆土 胴下端～底 1/3

第 201 表　和田遺跡　SK-911 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	高　残 3.1 最大　7.0 つまみ 残 2.2	小型短頸壺の蓋。内面口縁～天井部ロクロナデ、自然釉付着。窯体小破片溶着。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリで自然釉付着。つまみは宝珠形。	N7/0　灰白 緻密　青灰細粒微量、白礫微量 硬質	覆土 口～天井 3/4、つまみ完存 No.1

第 202 表　和田遺跡　SK-912 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 6.1	内面ナデ、自然釉付着。外面平行叩き、自然釉付着。	N4/0　灰白 緻密　青灰・白細粒微量 硬質	覆土 胴破片
2 瓦 平瓦	長　残 7.4 幅　残 7.7 厚　残 1.8 重　残 96.0	凹面剝離している。凸面ナデ、狭端縁ケズリ。狭端面ケズリ。	7.5YR7/2　明褐灰 緻密　砂礫微量、白細粒微量 やや硬質	覆土 破片

第 203 表　和田遺跡　SK-946 出土遺物観察表

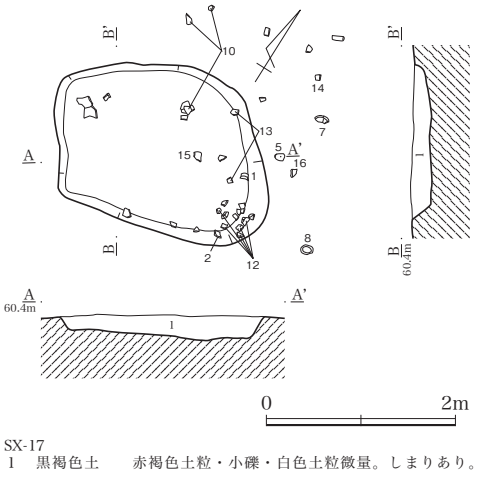
1 土師器 坏	口　復 11.6 高　3.8 最大　復 12.2	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。底部内面やや歪みあり。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白・赤褐微粒少量、黒・白細粒微量、白粗粒微量 硬質	西部底面上 12 cm 口～底 1/3 No.1
2 土師器 坏	口　残 11.6 高　3.1	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。底部ナデは粗いためやや凹凸あり。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。未製品の可能性あり。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　黒・白微粒多量、黒・赤褐・白細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	中央部底面上 9 cm 口～底 1/4 No.2
3 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 4.2	表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上端に段あり、体部ナデか。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒微粒多量、黒・白細粒少量 硬質	西部底面上 14 cm 口～体 1/5 No.3
4 土師器 坏	高　残 1.0	内面底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面底部ケズリ。中央に木葉痕。未製品の可能性あり。	5YR7/6　橙 やや緻密　黒・白微粒少量、赤褐細粒少量、赤褐・白粗粒微量 やや硬質	一括 底破片

第 204 表　和田遺跡　SK-977 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 0.9 底　復 6.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	2.5GY7/1　明オリーブ灰 緻密　灰黒・白細粒少量 やや硬質	覆土 体下端～底 1/6 SI-200　P-2

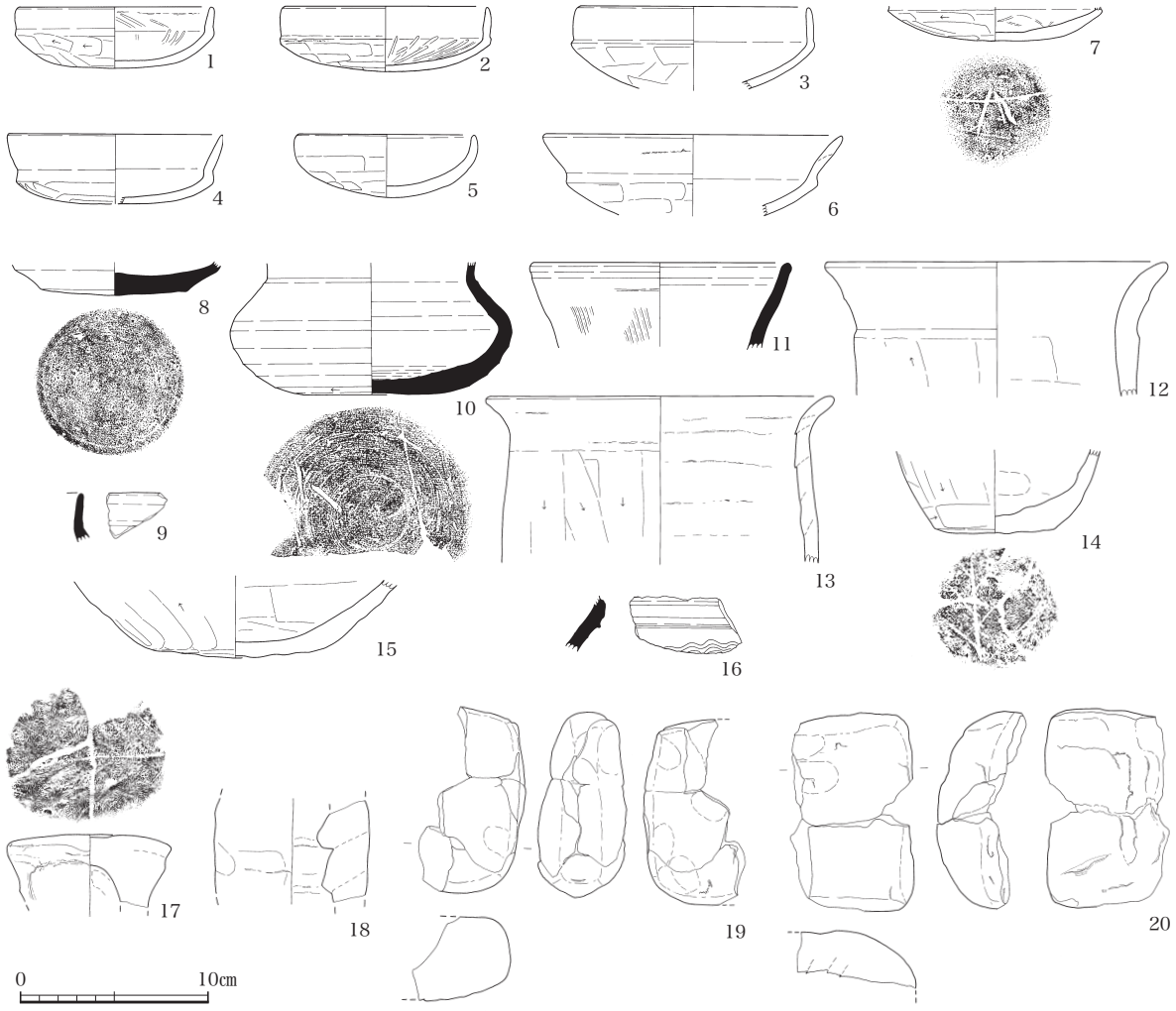
７. 性格不明遺構

ＳＸ－１７（第 276・277 図、第 205 表、図版三八・五八）



第 276 図　和田遺跡　SX-17 実測図

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｆ－29 グリッドに位置する。西に SK-32 が近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は不整な長方形で、中軸線はＮ－ 32°－W、規模は長径 2.10m、短径 1.74m、深さ 0.15 ～ 0.25m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は比較的多く、遺構内東部から遺構外北東部に集中する。遺構外出土遺物についても、本遺構に関連するものと考え、あわせて掲載している。土師器の坏、甕が主体で、坏は口縁部が直立ないし外傾するものが多く、半球状や口縁部が大きく外傾するものも少量ある。甕は長胴と球胴が出土する。須恵器は坏、壷、甕など少量で、ほとん



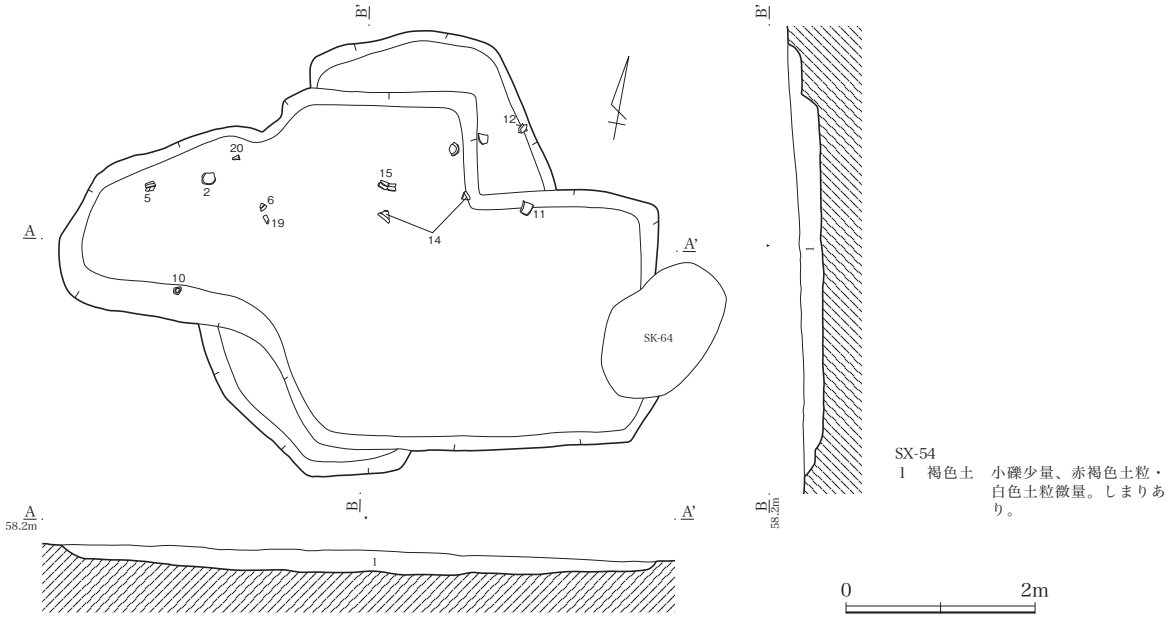
第 277 図　和田遺跡　SX-17 出土遺物実測図

第 205 表　和田遺跡　SX-17 出土遺物観察表

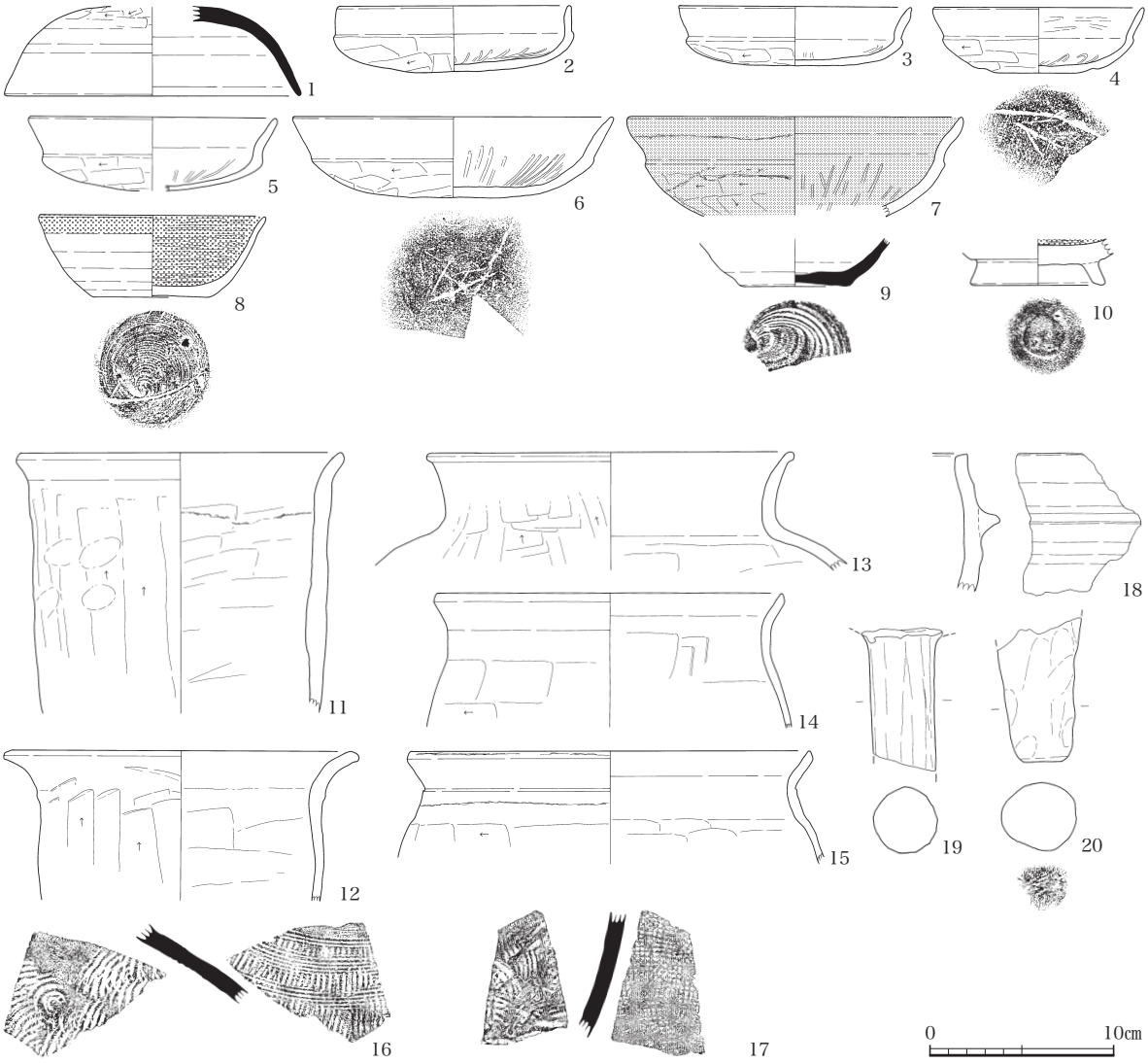
番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 10.5 高　3.3 最大 復 10.6	内外表面とも表面磨滅。内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後口縁～底部粗い放射状のミガキ、上端粘土のシワあり。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。口縁は垂直に立ち上がる。丸底。	10YR8/1　灰白 やや緻密　白細粒少量、黒細～微粒多量 硬質	東壁際底面上 15 ㎝と遺構周辺の破片が接合 口～体 1/4、底完存 No.2・S-17 周辺
2 土師器 坏	口　復 11.4 高　3.4 最大 復 11.7	内外表面とも表面磨滅。内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体部上端に稜と紐積痕あり。体～底部ケズリ。丸底。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　赤褐粗粒少量、白細粒微量 やや軟質	南東隅底面上 3 ㎝と遺構周辺の破片が接合 口～体 1/3、底 1/2 No.35・S-17 周辺
3 土師器 坏	口　復 12.4 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。器壁薄く、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。丸底。	10YR8/1　灰白 緻密　白細粒少量、青灰細～微粒多量、赤褐細粒微量 やや軟質	周辺 口～体 1/4 周辺
4 土師器 坏	口　復 11.4 高　3.7	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ、体部上端の段は明瞭で口縁部は外傾する。丸底。	7.5Y5/4　にぶい褐 やや粗い　白粗～細粒少量、赤褐粗粒少量、青灰細粒少量 やや硬質	周辺 口～底 1/4 S-17 周辺
5 土師器 坏	口　復 9.7 高　3.3	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部ケズリ。器壁やや厚め。半球形。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密　白粗粒少量、砂細粒少量 やや軟質	遺構外北東部、確認面直上 口～体 1/6、底ほぼ完存 No.3
6 土師器 坏	口　復 16.0 高　残 4.3	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。体部上端の段は明瞭で口縁部は大きく外反する。	10YR8/1　灰白 やや緻密　白細粒少量、黒褐粗粒少量 やや硬質	周辺 口 1/3、体 1/4 周辺
7 土師器 坏	高　残 1.8 体径　11.4	内面体部ヨコナデ、底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面体～底部ケズリ、底部中央に木葉痕。偏平な丸底。	2.5Y4/1　黄灰 やや緻密　白粗粒少量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	遺構外北東部、確認面下 10 ㎝ 体～底ほぼ完形 No.7
8 須恵器 坏	高　残 1.8 底　7.8	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ。底部は丸味を持つ。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量、青灰粗粒微量、白礫微量、砂礫微量 やや硬質	遺構外東部確認面下 13 ㎝ 体下位～底完存 No.5
9 須恵器 短頸壺	高　残 2.5	内面ロクロナデ。外面ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	周辺 口辺一部 S-17 周辺
10 須恵器 短頸壺	高　残 7.0 体　復 15.0 頸　復 11.0	内面頸～底部ロクロナデ。外面頸～体部ロクロナデ、底部は回転ケズリで線刻あり、体部上半わずかに自然釉付着。底部に溶解した別団体の須恵器の片が付着する。	N5/0　灰 緻密　白粗～細粒多量 硬質	北部底面上 20.3cm と遺構外北西部確認面下 5 ㎝と 9 ㎝が接合 頸～底 1/2 No.12・13・20
11 須恵器 壺	口　復 14.0 高　残 4.6	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデで縦方向にハケ目。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量、黒灰粗粒少量 やや軟質	周辺 口一部 S-17 周辺
12 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 7.1	内面口縁ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。長胴。	5YR5/6　明赤褐 粗い　白礫微量、赤褐礫少量、砂礫少量 硬質	南東隅底面上 3 ～ 9 ㎝が接合 口～胴上端 1/3 No.27・32・33・34
13 土師器 甕	口　復 18.6 高　残 8.9	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデで紐積痕を明瞭に残す。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向ケズリ。長胴。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐礫～細粒多量、青灰礫少量、白礫～細粒少量 やや硬質	北部底面上 10 ㎝と東部底面上 9 ㎝が接合 口 1/3、胴上半 1/6 No.19・25・周辺

14 土師器 甕	高　残 4.4 底　6.4	内面胴部下位～底部ナデ。外面胴部下位縦方向ケズリ後下端横方向ケズリ。底部木葉痕。	7.5YR7/4　にぶい橙 粗い　赤褐礫～粗粒少量、白礫～細粒少量、砂礫少量 硬質	遺構外北東部確認面 上 15 ㎝ 胴下位～底ほぼ完存 No.21
15 土師器 甕	高　残 4.2 底　復 9.0	内面胴～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面胴部縦方向ケズリ、底部ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 粗い　赤褐礫～粗粒多量、白礫微量、砂礫多量 やや硬質	中央部底面上 4 ㎝ 胴下位～底 1/6 No.23・周辺
16 須恵器 甕	高　残 2.9	内面口縁ロクロナデ。外面口縁一条の突線があり、その下に 4 条以上を一単位とする櫛描波状文施文。	7.5Y5/1　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	遺構外北東部確認面 下 5 ㎝ 口一部 No.4
17 土製品 筒形	高　残 3.9 幅　6.6 厚　1.4 重　残 195.1	内面ナデで指頭圧痕あり。外面体部粗いナデで紐積痕あり。上面木葉痕あり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白粗粒多量、赤褐礫～粗粒少量 硬質	覆土 上面～体上端一部欠損
18 土製品 支脚	長　残 5.5 幅　8.2 厚　1.8 重　残 128.1	体部径 8.2cm の円柱状とみられる。内面わずかにナデで紐積痕を明瞭に残す。外面ナデで紐積痕あり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細粒少量、赤褐礫～細粒少量 硬質	周辺 体 1/2 周辺
19 土製品 不明	長　残 9.9 幅　残 5.2 厚　4.6 重　残 168.9	平面不正方形。断面楕円形。方形ないし長方形状に固めて焼成したものと考える。表面はナデで指頭圧痕あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　赤褐粗～細粒多量、青灰粗粒少量 やや硬質	覆土 1/2
20 土製品 不明	長　残 10.7 幅　残 6.5 厚　4.8 重　残 226.7	平面方形。断面楕円形。板状の粘土を重ねて接合し、厚みをもたせて成形焼成している。全体形は方形ないし長方形だろう。表面はナデで指頭圧痕あり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白粗粒少量、赤褐粗粒多量 硬質	覆土 1/4

どが小破片である。土器類以外では、小礫が多数出土している。石質はチャート主体で、砂岩も含む。図化した遺物は土師器 11 点（坏 7 点、甕 4 点）、須恵器 5 点（坏 1 点、壺 3 点、甕 1 点）、土製品 4 点（円筒 1 点、支脚 1 点、不明 2 点）である。坏 1・2 は遺構の東部より出土、甕は遺構中央部より球胴甕 15 が、長胴甕 12 は南東隅、13・14 は北部から出土する。須恵器は、坏 8 が遺構外東部より、短頸壺 10 は遺構北部のやや高い位置より出土している。図化しなかった遺物は土師器坏片 189 点（1,080g）、甕片 450 点（4,980g）、



第 278 図　和田遺跡　SX-54 実測図



第 279 図　和田遺跡　SX-54 出土遺物実測図

鉢片２点（30g）、須恵器片は７点（140g）のみである。この他、小石が多数出土する。本遺構の時期は７世紀前葉であろう。

ＳＸ－５４（第 278・279 図、第 206 表、図版三八・五八・五九）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。南に SI-68・SK-67、西に SK-51・52 が近接してあり、北西１m に SK- ８がある。　**重複**　東部が SK-64 と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模　東西方向に長い不整形で、規模は東西方向が 6.30m、南北方向が 4.62m、深さは 0.10 ～ 0.25m である。土坑など複数の遺構が重複したものともみられるが、土層などからは区別できない。遺構は東西方向に長いやや深い部分と、その南北に位置するやや浅い部分とに大きく分けることができる。深さはそれぞれ 0.25m、0.15m で、底面はともに緩やかな凹凸はあるもののほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は遺構北部を中心に一定量出土する。土師器主体で、坏と甕が同量くらいある。図化した遺物は土師器 16 点（坏７点、高台付

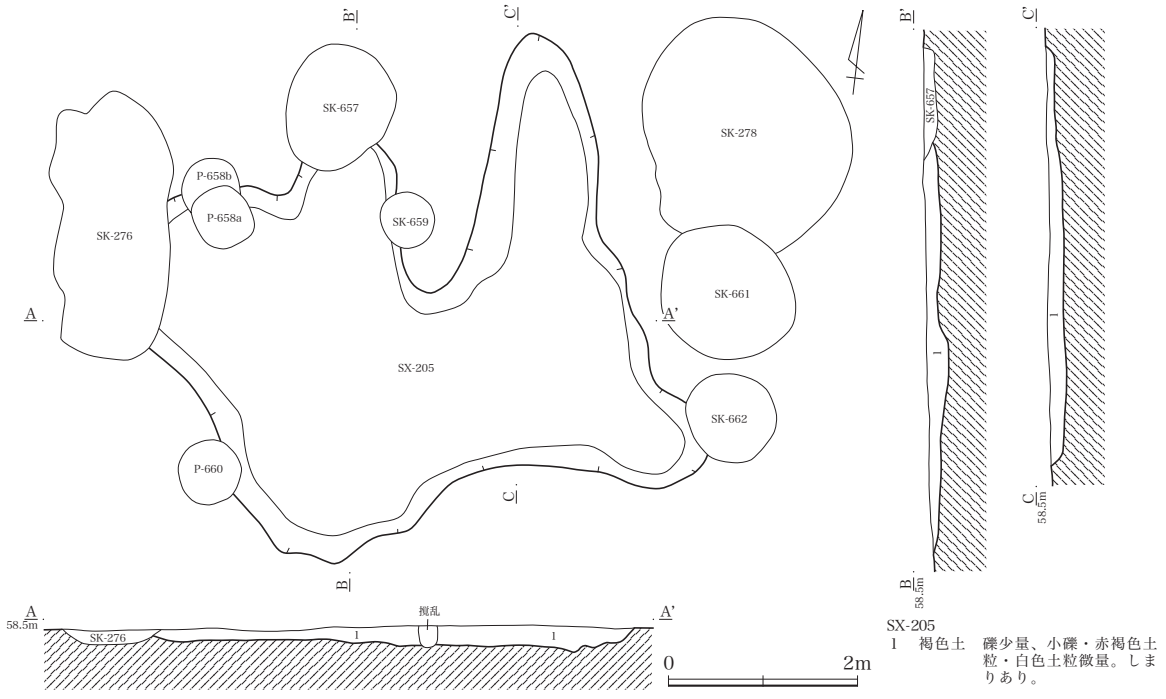
第 206 表　和田遺跡　SX-54 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 16.1 高　残 4.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部手持ちケズリ。	5Y8/1　灰白 緻密　灰粗粒少量 やや硬質	覆土 口～天井 1/6 SI-54
2 土師器 坏	口　12.8 高　3.5 最大　13.1	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。偏平な丸底。口縁は垂直に立ち上がり、体部との境に稜を持つ。丸底。内面漆仕上げの可能性あり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白粗粒少量、赤褐粗粒微量、黒褐粗～微粒少量 硬質	西部底面上 15 cm、正立 口 1/2、体 1/3、底完存 SI-54 No.3
3 土師器 坏	口　復 12.6 高　3.2	内面口縁ヨコナデ、体～底部ヨコナデ・ナデ後粗いミガキ。ミガキは放射状か。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。口縁は大きく外傾し、体部との境に稜を持つ。偏平な丸底。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒少量、黒褐粗粒少量 硬質	覆土 口～底 1/3 SI-54
4 土師器 坏	口　復 11.4 高　3.6	内面口縁ヨコナデ後横方向のミガキ。体～底部ヨコナデ・ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。底部中央平坦で木葉痕あり。口縁は外傾し、体部との境に稜を持つ。偏平な丸底。内外面全面漆仕上げの可能性あり。	2.5Y4/1　黄灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 口 1/5、体 1/4、底ほぼ完存 SI-54
5 土師器 坏	口　復 13.6 高　残 4.0	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。口縁部やや歪む。偏平な丸底。内外面漆仕上げの可能性あり。	10YR8/2　灰白 やや緻密　白細粒微量、黒微粒微量 硬質	西部底面上 18 cm 口～底 1/4 SI-54 No.2
6 土師器 坏	口　復 17.4 高　4.4	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。底部中央に木葉痕あり。口縁は外傾し、体部との境に稜を持つ。偏平な丸底。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　白粗粒微量、黒微粒少量 硬質	西部底面上 15 cm 口～底 1/2 SI-54 No.4
7 土師器 坏	口　復 18.2 高　残 5.3	内面口縁～体部ヨコナデ後粗い放射状のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリで紐積痕残る。口縁部上半は内湾する。内外面口縁～体部漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒微量、砂細粒少量 硬質	覆土 口～体 1/5 SI-54
8 土師器 坏	口　12.4 高　4.4 底　6.0	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後密なミガキ。ミガキは体部横方向、底部一方向。体部下半はロクロ目顕著。黒色処理。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部に切り離しに使用した糸によってつけられた条線 1 本あり。口縁周辺および体部上端一部黒色処理。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白礫微量、赤褐・白・灰粗粒少量 硬質	覆土 口～体 2/3、底完存 SI-54
9 須恵器 坏	高　残 2.6 底　復 5.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色胎土。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　黒・白礫微量、灰黒粗粒微量、白細粒多量 やや軟質	覆土 体～底 1/3 SI-54
10 土師器 高台付坏	高　残 2.5 高台　7.4	ロクロ成形。内面底部ロクロナデ後ミガキ。底部一方向で密なミガキと推定。黒色処理。外面底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。高台はやや高く断面方形で「ハ」の字状に開く。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒礫微量、黒・白粗粒微量、灰黒粗～細粒多量 硬質	西部底面上 3 cm、逆位 底完存、高台 4/5 SI-54 No.1
11 土師器 甕	口　復 17.9 高　残 14.2	調整やや粗い。内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向ケズリで指頭圧痕あり。長胴。口縁部上端わずかにミゾ状に凹む。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　黒・白赤褐礫微量 やや硬質	北東部底面上 8 cm 口～胴上半 1/4 SI-54 No.12
12 土師器 甕	口　復 19.3 高　残 8.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半ケズリ。長胴。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　黒・赤褐礫微量 やや硬質	北部底面直上 口 1/5、胴上位一部 SI-54 No.14
13 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 6.4	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。球胴。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒礫微量、白細粒少量、赤褐粗～細粒少量 硬質	覆土 口 1/4、胴上位一部 SI-54
14 土師器 甕	口　復 19.1 高　残 7.3	内面口縁ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端横方向ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・赤褐礫微量、白細粒少量 硬質	中央部底面上 11 cm と 19 cmが接合 口 1/2、胴上位一部 SI-54 No.6・8
15 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 6.1	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端横方向ケズリ。武蔵型。	5YR4/8　赤褐 やや粗い　黒・透明礫微量、白粗粒少量、金雲母細粒微量 硬質	中央部底面上 9 cm 口～胴上端 1/4 SI-54 No.7

16 須恵器 甕	高　残 4.3	内面上位同心円当具痕。外面上位平行叩き後３段のカキ目。	N5/0　灰 緻密　白粗粒微量、白細粒少量 硬質	覆土 胴上位一部 SI-54
17 須恵器 甕	高　残 6.7	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き。	2.5Y8/1　灰白 緻密　灰礫微量 やや軟質	覆土 胴一部 SI-54
18 土師器 羽釜	高　残 7.5	内面口縁～胴部ロクロナデ。外面口縁～胴部ロクロナデ、鍔部貼り付け。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い　黒・白透明礫微量、砂粗～細粒少量 硬質	覆土 口～胴一部 SI-54
19 土師器 三足土器	高　残 7.8	三足土器の脚部。脚部は円柱状で表面を縦方向にケズリ。断面は円形だがケズリのため多角形状となる。径は上端で 3.6 ㎝、下端欠損面付近で 3.4 ㎝と上下にあまり差がない。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白細粒微量、粗砂粒微量 硬質	中央西部底面上 7 ㎝ 脚破片 SI-54 No.5
20 土師器 三足土器	高　残 7.8	三足土器の脚部。脚部は円柱状で下に向かって細くなる。表面はナデ、底面は丸味を帯びた平坦面で布目のような圧痕あり。径は上端で 4.3 ㎝、底面よりやや上で 3.1 ㎝。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白細粒少量・粗砂粒微量 硬質	北西部底面上 11 ㎝ 脚破片 SI-54 No.13

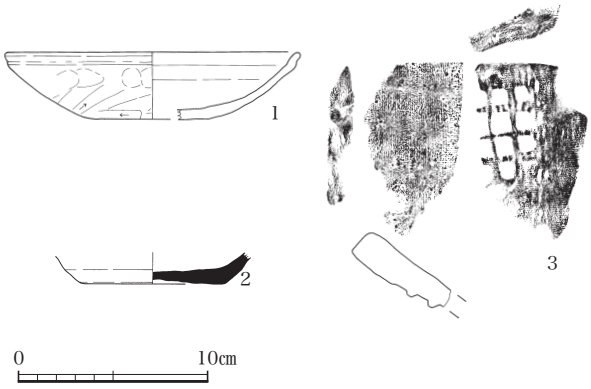
坏１点、甕５点、羽釜１点、三足土器２点）、須恵器４点（蓋１点、坏１点、甕２点）である。須恵器蓋１や土師器坏（２～７）、長胴や球胴の甕（11 ～ 13）など７世紀前葉頃の遺物が多いが、ロクロ成形の土師器坏８や高台付坏 10、須恵器坏９、土師器甕 14・15、羽釜 18、三足土器 19・20 など９世紀後半～ 10 世紀前半期の遺物もあり、２時期ないしそれ以上の遺物が混在した状況となっている。出土位置をみると、古い時期の坏２・５・６は遺構西部にまとまるが、新しい時期の 19 や 20 も付近から出土しており、時期によって位置が明確に異なる様子はうかがえない。垂直方向の位置からも、特定の傾向はみられない。図化しなかった遺物は、土師器坏片が 69 点（1,050g）、甕片 157 点（1,712g）、須恵器片が７点（184g）である。本遺構の時期は、新しい時期の遺物をもとに９世紀後葉から 10 世紀前葉とするが、７世紀前葉の遺物が多く出土することから、当該期の遺構が重複している可能性がある。

ＳＸ－２０５（第 280・281 図、第 207 表、図版三八）



第 280 図　和田遺跡　SX-205 実測図

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－20、Ｋ－20 グリッドに位置する。東に SK-278・661、南に P-275・277 が近接してあるほか、南 1.3m に SI-36 がある。　重複　SK-276・657、P-659 に切られる。SK-662、P-658a・658b・660 とも重複するが、これらの遺構との新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は不整形で、中軸線も把握できない。規模は長径 5.12m、短径 4.16m、深さ 0.08 ～ 0.27m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は一定量出土している。図化した遺物は非ロクロの土師器坏１点、須恵器坏１点、瓦１点で、図化しなかった遺物は土師器坏片 72 点（420g）、甕片 136 点（1,340g）、須恵器坏片 24 点（215g）、甕片 10 点（2,245g）である。土師器坏１は 10 世紀前半頃、須恵器坏２は９世紀でもやや古くみられるなど、遺物は８～ 10 世紀くらいの遺物が混在している。いくつかの時期の土坑などが重複している可能性があるだろう。本遺構の時期は古代とする。



第 281 図　和田遺跡　SX-205 出土遺物実測図

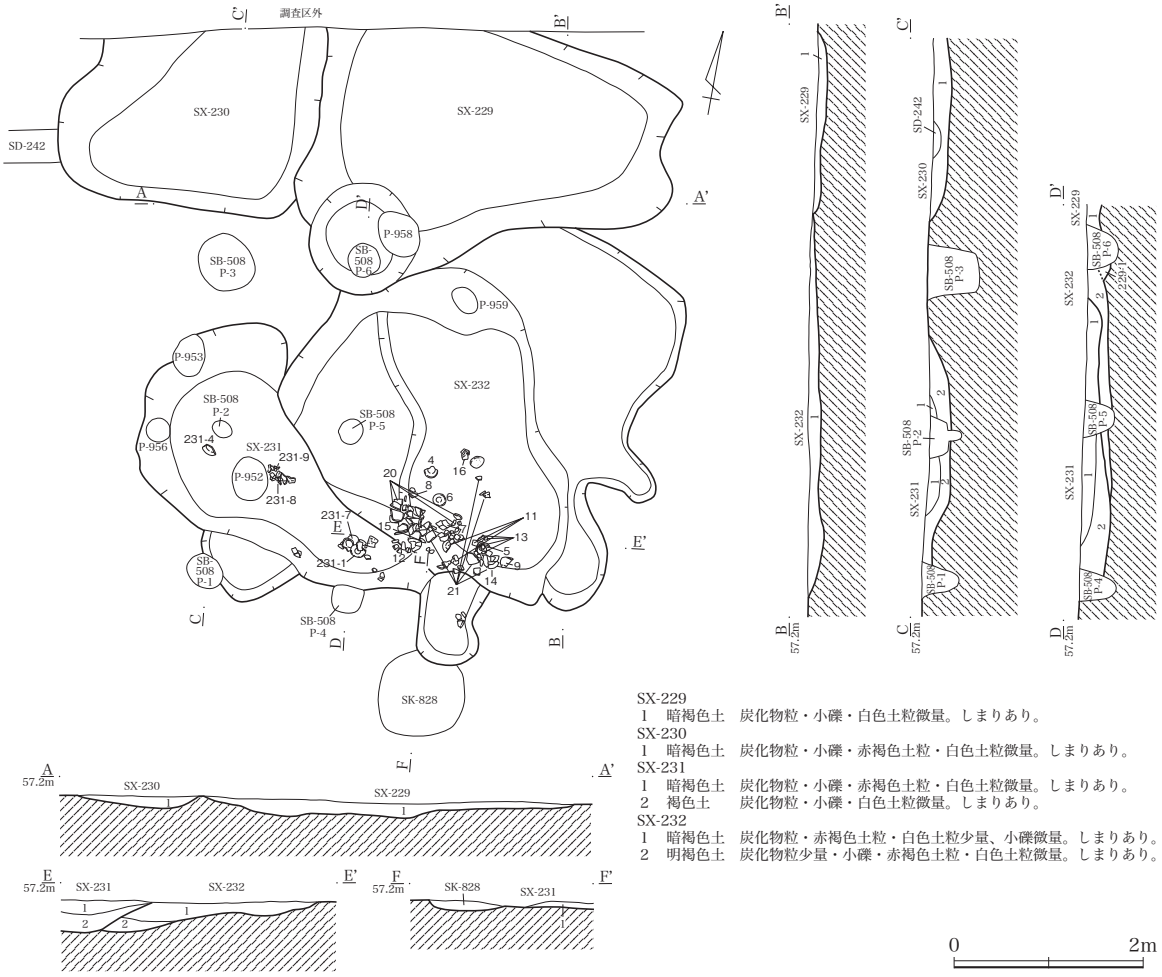
第 207 表　和田遺跡　SX-205 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 15.6 高　残 3.5 底　復 6.4	非ロクロ成形。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデと思われるが表面磨滅のため調整不明。外面口縁ヨコナデ、体部下半ケズリ、体部上半指頭圧痕あり。底部ケズリ。歪みあり。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤褐・白細粒微量、金雲母粗粒微量、砂細粒多量 やや硬質	覆土 口～底 1/5
2 須恵器 坏	高　残 1.6 底　復 7.6	内外表面磨滅が著しい。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ヘラ切り離し後外周ケズリと見られる。	7.5Y8/1　灰白 やや緻密　灰褐礫～粗粒微量 軟質	覆土 体下半～底 1/3
3 瓦 平瓦	長　残 9.5 幅　残 5.1 厚　1.7 重　残 108.2	表面磨滅が著しい。凹面布目痕。凸面縄叩き後格子叩き。側面調整は磨滅により観察できず。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　赤褐細粒微量 やや軟質	覆土 破片

ＳＸ－２２９（第 282・283 図、第 208 表、図版三八・六一）

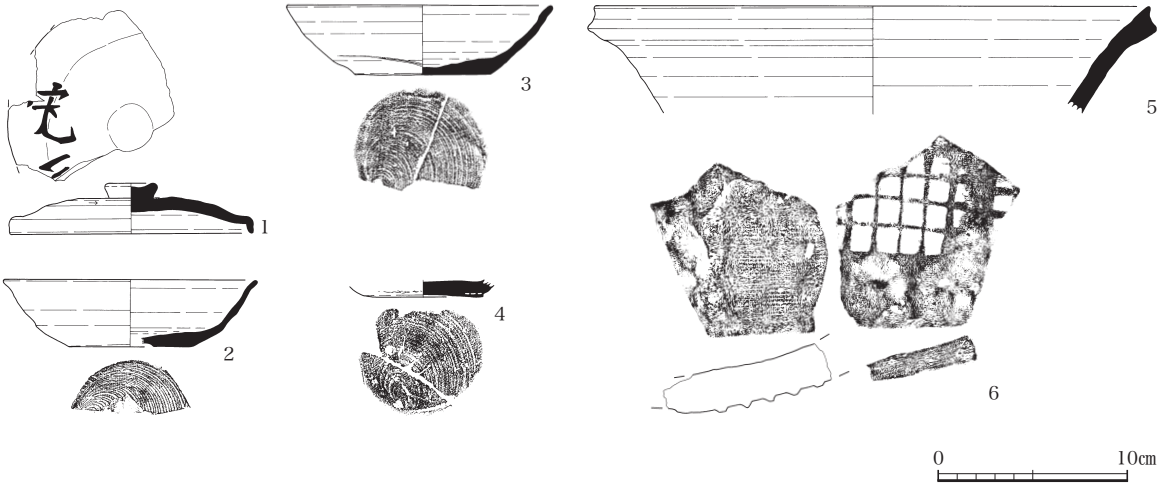
位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｑ－14・15 グリッドに位置する。南に P-959 が近接してあるほか、東１m に P-532 がある。　重複　南西部が SB-508 に切られる。南辺は SX-232 に、中央付近は SD-242 にそれぞれ切られると推定されるが、土層断面では確認できなかった。このほか西辺が SX-230 と、南西部は P-958 と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。北側は調査区外となる。互いに近接する SX-229・230・231・232 は覆土をはじめとして遺構の類似性が強く認められるため、ほぼ同時に存在した可能性がある。

形状・規模　平面形は東西方向に長い不整長方形で、南西部に土坑状にやや深くなる部分がある。中軸線はＮ－ 90°－Ｗ、規模は長径 3.83m、短径は現状で 2.47m、深さ 0.08 ～ 0.18m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻



SX-229
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SX-230
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SX-231
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SX-232
1　暗褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒少量、小礫微量。しまりあり。
2　明褐色土　炭化物粒少量・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 282 図　和田遺跡　SX-229・230・231・232 実測図



第 283 図　和田遺跡　SX-229 出土遺物実測図

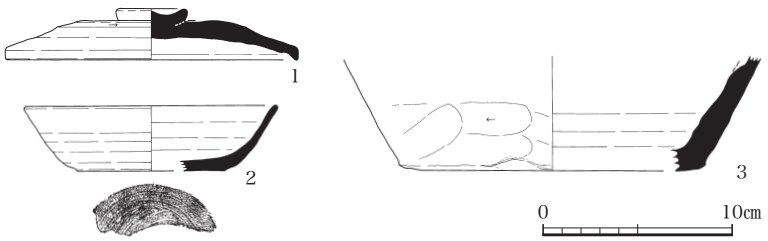
第 208 表　和田遺跡　SX-229 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 12.9 高　残 2.7 つまみ　2.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。外面体～天井部に墨書あり、２文字。	N6/0　灰 やや緻密　白・青灰細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 口 1/4、体～天井 1/3、つまみ完形
2 須恵器 坏	口　復 13.4 高　残 3.5 底　復 6.6	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整で中央の表面が剥離する。口縁端部がやや外反する。底部外面に墨書に似た黒いシミあり。	N6/0　灰 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	覆土 口～底 1/2
3 須恵器 坏	口　復 14.1 高　残 3.7 底　残 7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。白色胎土。	10Y8/1　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 やや軟質	覆土 口～体 1/5、底 2/3
4 須恵器 坏	高　残 0.9 底　残 6.2	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後無調整で粘土のシワが残る。底部円柱造り。	10Y7/1　灰白 緻密　白・青灰細粒微量 やや硬質	覆土 底 3/4
5 須恵器 甕	口　復 30.0 高　残 5.7	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白・青灰細粒微量 硬質	覆土 口一部
6 瓦 平瓦	長　残 9.3 幅　残 8.9 厚　2.2 重　残 235.7	凹面布目痕。凸面格子叩き。狭端面ケズリ。	5YR7/6　橙 やや緻密　赤褐礫～細粒微量、白細粒微量、砂礫微量 硬質	覆土 破片

密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物は須恵器中心で、土師器は少ない。図化した遺物は須恵器５点（蓋１点、坏３点、甕１点）、瓦１点である。蓋１は墨書があるが、判読できない。本遺構の時期は９世紀前葉と考えられる。

ＳＸ－２３０（第 282・284 図、第 209 表、図版三八）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Q－15 グリッドに位置する。南に SB-508 が近接してあるほか、東１m に P-958 がある。　重複　SD-242



第 284 図　和田遺跡　SX-230 出土遺物実測図

第 209 表　和田遺跡　SX-230 出土遺物観察表

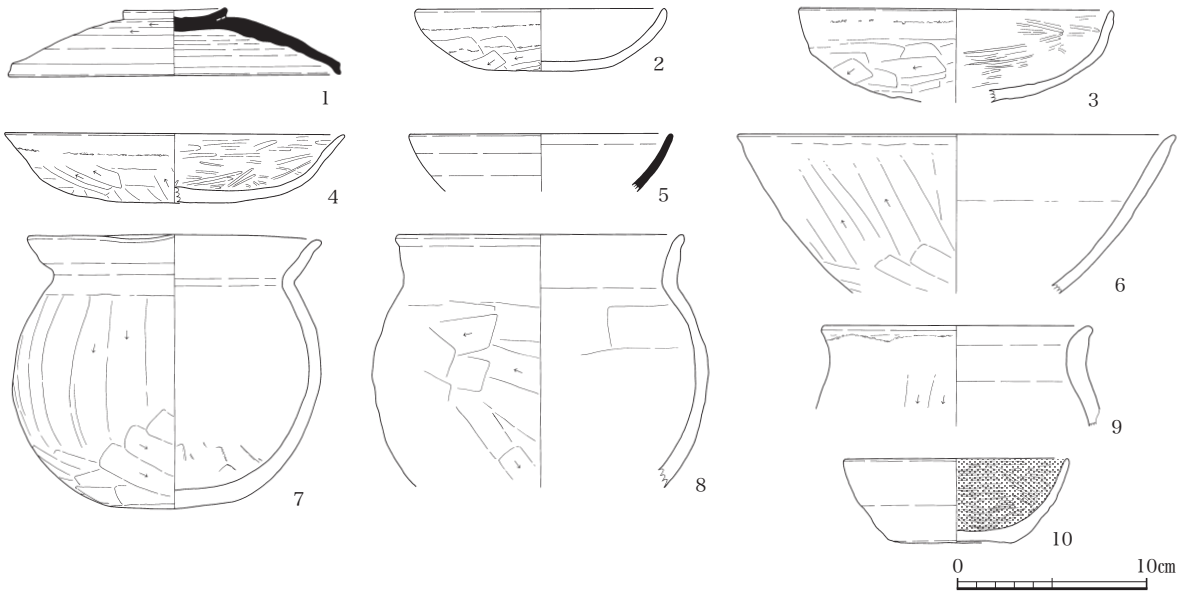
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 15.4 高　残 2.7 つまみ 復 3.8	内面口縁～天井ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。つまみは逆台形状で中央部がわずかに突出する。	N8/0　灰白 緻密　灰褐細粒微量、白礫～細粒微量 やや軟質	覆土 口 1/4、体 1/3、つまみ 3/4
2 須恵器 坏	口　復 13.4 高　3.4 底　復 7.8	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ、切り離し方法不明。酸化焔焼成。外面口縁のみ灰黒色を呈する。	10YR8/2　灰白 やや緻密　灰褐細粒少量、赤褐・白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 1/3、底 1/4
3 須恵器 甕	高　残 6.1 底　復 16.2	内面胴部ロクロナデ。外面胴部下半ナデ、底部ナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒微量 硬質	覆土 胴下半～底 1/4

に覆土が切られる。東辺が SX-229 と重複するが、新旧関係は不明である。北側は調査区外となる。互いに近接する SX-229・230・231・232 は覆土をはじめとして遺構の類似性が強く認められるため、ほぼ同時に存在した可能性がある。　**形状・規模**　平面形は方形に近い形状とみられるが、調査区外となる部分があるため明確にしえない。直線的な南辺をもとにすると、中軸線はＮ－ 87°－Ｅ、中軸線方向の長さは 2.70m、深さ 0.12 ～ 0.20 m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は須恵器、土師器など少量である。図化した遺物は須恵器 3 点（蓋、坏、甕）で、図化以外には土師器坏片 6 点（90g）、甕片 10 点（80g）、須恵器坏片 7 点（55g）、瓶類片 1 点（45g）がある。土師器は坏と甕があり、甕は武蔵型の破片である。本遺構の時期は 8 世紀後葉と考えられる。

ＳＸ－２３１（第 282・285 図、第 210 表、図版三八・五九）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14・15、Ｑ－ 15 グリッドに位置する。西に P-954・955・957、南に SK-828 が近接してあり、北 1.1m に SX-230 が隣接してある。　**重複**　SX-232、P-953 を切り、SB-508 に切られる。SK-828、P-952・956 とも重複するが、新旧関係は不明である。互いに近接する SX-229・230・231・232 は覆土をはじめとして遺構の類似性が強く認められるため、ほぼ同時に存在した可能性がある。

形状・規模　平面形は小さな突出部を持つ不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 60°－Ｗである。規模は長径 3.65m、短径 2.12m、深さ 0.24 ～ 0.33m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第 1 層）と褐色土（第 2 層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺構中央から南東部に遺物が集中する。土師器主体であり、須恵器は少ない。図化した遺物は土師器 8 点（坏 4 点、鉢 1 点、甕 3 点）、須恵器 2 点（蓋 1 点、坏 1 点）である。蓋 1 は南東部の底面上 22cm より、小型の甕 7 は遺南東部の底面上 9 cm から出土する。内面黒色処理された土師器坏 10 は混入であろう。図化しなかった遺物は、土師器坏片 10 点 (120g)、甕片 64 点（620g）、須恵器坏片 1 点（10g）、甕片 2 点（40g）である。本遺構の時期は 8 世紀前葉と考えられる。



第 285 図　和田遺跡　SX-231 出土遺物実測図

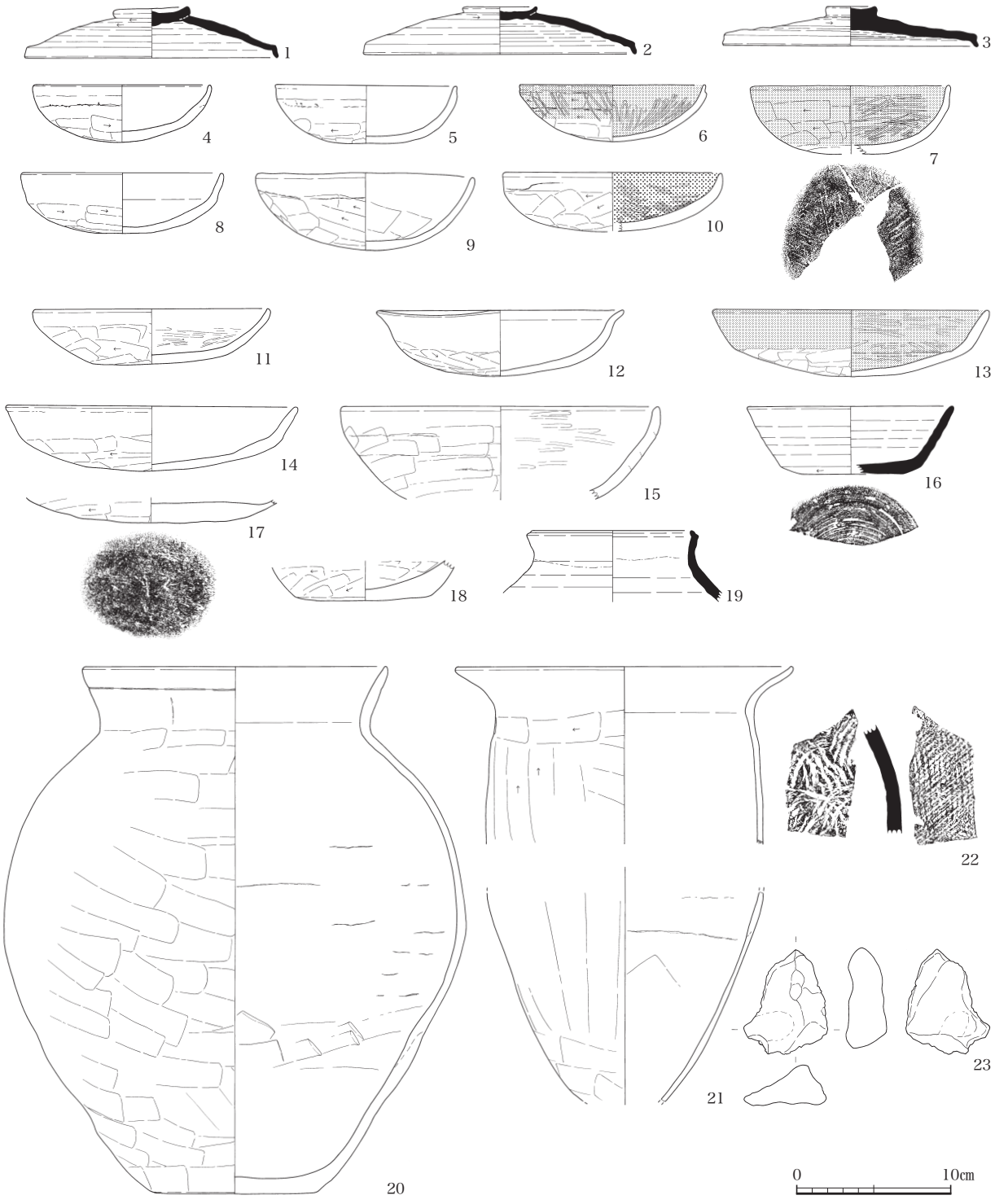
第 210 表　和田遺跡　SX-231 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　17.6 高　3.6	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみ貼り付け。つまみは低いリング状。	10Y8/1　灰白 緻密　黒微粒多量・細粒少量、灰礫微量 やや軟質	南東部底面上 22 cm、SX-232 と接合、逆位 ほぼ完形 SI-232 No.3
2 土師器 坏	口　復 13.3 高　残 3.3	内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。内面漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリで紐積痕あり。半球形を呈し、偏平な丸底。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤褐細粒少量、白細粒微量 やや硬質	覆土 口～底 1/2
3 土師器 坏	口　復 16.6 高　残 5.0	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐細粒微量、白細粒微量、細砂粒少量 硬質	覆土 口 1/5、体 1/4、底 1/4
4 土師器 坏	口　復 18.0 高　3.6	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向主体のミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。	5YR7/8　橙 やや粗い　赤褐細粒少量、白細粒微量、砂細粒少量 硬質	西部底面直上 口～底 1/3
5 須恵器 坏	口　復 14.0 高　残 3.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	10Y8/1　灰白 緻密　灰褐細粒微量 軟質	覆土 口 1/6、体上半 1/6
6 土師器 鉢	口　復 23.2 高　残 8.4	内面口縁ヨコナデ、体部丁寧なナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5YR6/8　橙 やや粗い　白細粒微量、赤褐礫～細粒微量、砂礫微量 やや硬質	覆土 口～体 1/4
7 土師器 甕	口　15.6 高　14.5 底　6.9 最大　16.3	内面口縁ヨコナデ、胴～底部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上半縦方向、下半横方向のケズリ。底部一方向のケズリ。丸味を持つ平底で口縁部には歪みあり。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒・赤・赤褐細粒多量、赤褐粗粒少量、黒粗粒・赤褐礫微量 やや硬質	南東部底面上 9 cm、正立、1 の下 ほぼ完形 SI-232 No.4
8 土師器 甕	口　復 15.3 高　残 13.4 最大　復 17.8	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　赤褐粗～細粒微量、白細粒微量 やや硬質	中央部底面直上 口～胴上半 2/3、胴下半 1/6
9 土師器 甕	口　復 14.4 高　残 5.3	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部上端ケズリ。	7.5YR7/8　黄橙 やや粗い　赤褐礫～細粒少量、白細粒微量、砂礫少量 やや軟質	中央部底面直上 口 1/2、胴上端一部
10 土師器 坏	口　残 12.0 高　残 4.4	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ後口縁～体部横方向・底部一方向の密なミガキ。内面全体黒色処理。外面口縁～体部ロクロナデ。底部ナデで斑状に黒色を呈する。	10YR8/6　黄橙 緻密　赤褐・白細粒微量 やや硬質	覆土 口～体 2/3、底 3/4

ＳＸ－２３２（第 282・286 図、第 211 表、図版三九・五九）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14・15、Ｑ－ 14・15 グリッドに位置する。西 1.5m に P-952・954・955・957 があるほか、北 1 m に SD-242 がある。　重複　西部が SB-508、SX-231 に切られる。北辺で SX-229 を切ると推定されるが、土層断面では確認できなかった。P-959 とも重複するが、新旧関係は不明である。互いに近接する SX-229・230・231・232 は覆土をはじめとして遺構の類似性が強く認められるため、ほぼ同時に存在した可能性がある。　形状・規模　平面形は小さな突出部を持つ不整な楕円形で、中軸線はＮ－２２°－Ｅである。規模は長径 7.72m、短径 3.93m、深さ 0.14 ～ 0.33m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）と明褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器坏・甕主体であり、須恵器は少ない。遺構内南部に集中しており、SX-231 との区別が付きにくいものも多い。図化

した遺物は土師器 16 点（坏 12 点、盤１点、鉢１点、甕２点）、須恵器６点（蓋３点、坏１点、壺１点、甕１点）である。須恵器は蓋、坏、壷、甕などで、完形に近い状態で出土したものはない。蓋はリング状つまみ（１・２）とボタン状のつまみ（３）がある。土師器坏は半球状主体で、口縁部径から小型（約 12cm 以下、４～６）、中型（約 12 ～ 15cm、７～ 10）、大型（15 ～ 20cm、11 ～ 15）に分けられる。完形に近いものもあ



第 286 図　和田遺跡　SX-232 出土遺物実測図

第 211 表　和田遺跡　SX-232 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 16.5 高　3.3 つまみ　5.0	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみはリング状。	N6/0　灰 やや粗い　黒細粒多量、白微粒少量、灰礫微量 やや軟質	覆土 口～天井 1/2、つまみ部 3/4
2 須恵器 蓋	口　復 17.8 高　3.1 つまみ　4.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみはリング状。	N6/0　灰 緻密　黒微粒多量、黒細粒少量、灰粗粒微量 やや硬質	覆土 口～体一部、天井 1/6、つまみほぼ 1/2
3 須恵器 蓋	口　復 16.6 高　2.6 つまみ　3.3	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみは逆台形状で上面は浅くくぼみ中央がやや突出する。	N7/0　灰白 緻密　黒・白微粒多量、黒細粒少量、白粗粒・白礫微量 やや硬質	覆土 口一部、体 1/4、天井～つまみほぼ完存
4 土師器 坏	口　復 11.6 高　3.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部上半ナデで紐積痕あり。体部下半～底部ケズリ。丸底。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐細粒少量、黒粗粒微量 硬質	中央南部底面上 12 cm、正立 口 1/2、体～底 2/3 SI-232 No.9
5 土師器 坏	口　11.8 高　3.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデでミガキの可能性あり。外面口縁ヨコナデ、体部上半無調整、体下半～底部ケズリ。外面底部は色調の異なる淡黄色の粘土を用いる。丸底。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、黒・白細粒少量、赤褐粗粒微量 硬質	南部底面上 6 cm 完形 SI-232 No.30
6 土師器 坏	口　12.1 高　3.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後放射状のやや密なミガキ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ後口縁～底部放射状の粗いミガキ。外面口縁～内面全面漆仕上げ。丸底。口縁部上端外面はわずかな段となる。口縁部の段や外面のミガキはまれ。	5YR7/3　にぶい橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐・白細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	南部底面上 8 cm、逆位 ほぼ完形 SI-232 No.10
7 土師器 坏	口　13.0 高　4.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後口縁～体部は多角形状、底部は主に一方向の緻密なミガキ。全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。底部木葉痕あり。口縁～体部上半漆仕上げ。丸底。	7.5YR7/2　明褐灰 緻密　赤褐・白微粒多量 やや硬質	南部底面上 14 cm と 15 cmが接合 ほぼ完形 SI-232 No.21・23
8 土師器 坏	口　復 13.2 高　3.9	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸底。内面漆仕上げの可能性あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　黒微粒多量、黒・赤褐細粒少量、赤褐礫微量 やや硬質	南西部底面上 4 cm 口～体 1/2、底 3/4 SI-232 No.27
9 土師器 坏	口　14.2 高　5.0	内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデでヘラ状工具痕あり。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。丸底。	2.5YR8/1　灰白 やや緻密　黒微粒多量、黒細粒微量、白微粒微量 やや軟質	南部底面上 4 cm、逆位 ほぼ完形 SI-232 No.13
10 土師器 坏	口　14.2 高　3.8	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後横方向主体のミガキ。内面全面黒色処理。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体～底部ケズリ。浅い丸底で器壁やや厚い。	2.5YR6/1　黄灰 緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～底 2/3
11 土師器 坏	口　復 15.4 高　3.6	内外表面磨滅著しい。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ後ミガキ。ミガキは密で体部は多角形状に施されるとみられる。漆仕上げの可能性あり。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。偏平な丸底。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、赤褐細粒少量、赤褐粗粒微量 やや硬質	南部底面上 2 cm・9 cm・20 cmが接合 口 2/3、体 3/4、底完存 SI-232 No.19・22・31
12 土師器 坏	口　16.1 高　4.3	内外表面磨滅著しい。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。全体にやや歪みあり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白微粒多量、黒・赤褐細粒少量 やや硬質	南部底面上 20 cm、逆位 ほぼ完形、口～底一部欠 SI-232 No.24
13 土師器 坏	口　18.0 高　4.3	内面口縁～体部ヨコナデ後横方向のミガキ、底部ナデ後ミガキ。底部ミガキは表面剥離のため方向不明。全面漆仕上げ。外面口縁ヨコナデ、口縁～体部漆仕上げ、体部～底部ケズリ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤褐微粒多量、黒・赤褐細粒微量 やや硬質	南部底面上 11 cm 口～体 1/2、底ほぼ完存 SI-232 No.18

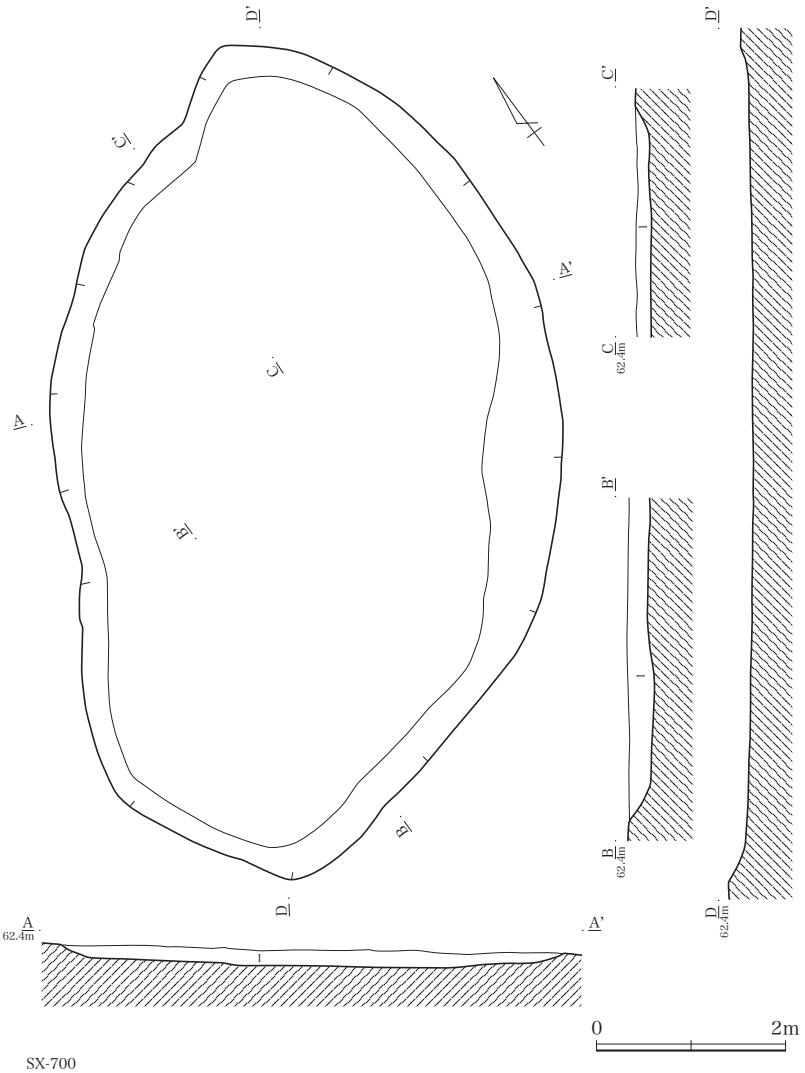
14 土師器 坏	口　19.0 高　4.2	内外表面磨滅著しい。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリ。偏平な丸底。	5YR7/6　橙 やや粗い　黒・赤褐微粒多量、赤褐細粒少量・粗粒微量 やや硬質	南部底面上 14 ㎝、逆位 口縁～体 2/3、底完存 SI-232 No.17
15 土師器 坏	口　復 20.8 高　残 6.0	内面口縁ヨコナデ、体部ヨコナデ・ナデ後口縁～体部横方向のミガキ。密なミガキとみられる。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリで紐積痕あり。	7.5YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　黒細粒少量、赤褐細粒微量 やや軟質	南部床面上 14 ㎝、21 の下 口～体 1/5 SI-232 No.32
16 須恵器 坏	口　復 13.4 高　4.4 底　復 9.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端回転ケズリ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ。	N6/0　灰 緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量、灰礫微量 硬質	中央部底面上 7 ㎝ 口一部、体～底 1/4 SI-232 No.11
17 土師器 盤	高　残 1.6	内面底部ナデ。外面体部ケズリ、底部ケズリで中央に木葉痕あり。大型。偏平な丸底で底部厚い。	10YR8/2　灰白 やや粗い　黒微粒多量、赤褐細粒少量、赤褐粗粒微量、白礫微量 やや軟質	覆土 体一部、底完存
18 土師器 鉢	高　2.6 底　8.3	内面底部ナデ、ヘラ状工具痕あり。外面体部下端ケズリ、底部ケズリ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　黒・赤褐細粒多量、黒・赤褐粗粒微量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/2
19 須恵器 壺	口　11.1 高　残 4.6	内面口縁～胴部ロクロナデ、口縁～口唇部自然釉付着。外面口縁～胴部ロクロナデ、胴部自然釉付着。湖西産か。	7.5YR7/1　灰白 緻密　白微粒多量 硬質	覆土 口～胴上位 2/3
20 土師器 甕	口　復 19.8 高　34.2 底　10.6 最大　復 30.0	内面口縁ヨコナデ。胴～底部ヨコナデ・ナデで紐積痕あり。胴部下半に接合痕があり、ナデが集中する。外面口縁ヨコナデで浅い沈線あり。口縁部下半には、縦方向の浅い沈線数本あり。胴～底部ケズリ。胴部下半接合面の上下で粘土が異なる。下位は明るい橙色、上位はやや濃い橙色。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒微粒多量、白・赤褐細粒少量、赤褐礫微量 やや軟質	南部底面上 16 ㎝と 19 ㎝が接合 口～胴 1/3、底完存 SI-232 No.26・33
21 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 25.1 胴　復 18.0	内面口縁ヨコナデ、胴部ナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ後上端・下端横方向のケズリ。長胴で胎土は武蔵型甕類似。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量、白礫微量 硬質	中央部底面上 13 ㎝と南部底面上 14 ～ 20 ㎝が接合 口 1/3、胴上半～中位 1/2、胴部下半 2/3 SI-232 No.12・16・17・19・25
22 須恵器 甕	高　残 7.0	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き。	7.5Y4/1　灰 緻密　白微粒多量、黒微粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 胴破片
23 土製品 粘土塊	長　6.7 幅　5.4 厚　2.6 重　58.8	平面不正三角形。断面不正三角形。捏ねた粘土を固めて焼成している。表裏面ともに凹面で平坦面あり。表面は部分的にナデが施され指頭圧痕あり。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒少量、黒・赤褐礫微量 やや軟質	覆土 完形

り、多くは遺構内南部の底面からやや浮いた位置から出土する。完形の坏５は南西部の底面上６cm より、９は南部底面上４cm より逆位の状態で、12 は南部底面上 20cm より倒立の状態でそれぞれ出土する。ほぼ完形の７は南部の底面上 14 ～ 15cm で出土した破片の接合である。土師器甕は長胴、球胴、武蔵型甕が認められる。甕 20 は球胴で、口縁部外面には沈線を施す。南部からの出土であり、底面から大きく浮いた破片が接合したものである。甕 21 は武蔵型甕類似の胎土で、甕 20 同様遺構の中央部から南部にかけて底面より少し浮いた位置で出土した破片が接合したものである。図化しなかった遺物は、土師器坏片 101 点（1,660g）、甕片 172 点（2,090g）、須恵器片４点 (110g) である。本遺構の年代は８世紀前葉と考えられる。

ＳＸ－７００（第 287・288 図、第 212 表、図版三九・五九）

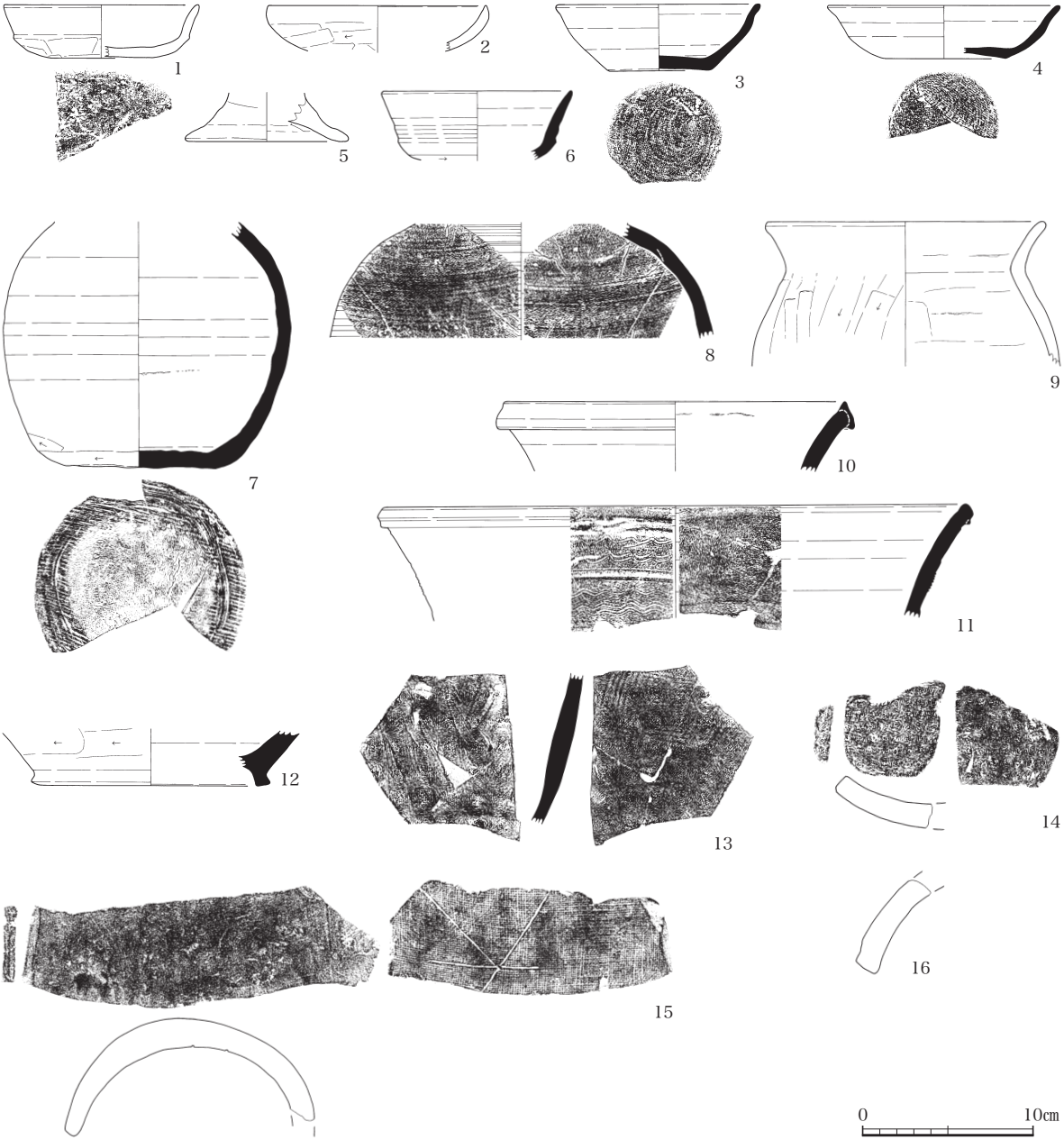
位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｊ－ 36・37、Ｋ－ 36・37 グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南４

m に SB-960、南東７m に SB-961、東９m に SI-753 がそれぞれ隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は不整な長方形で、中軸線はＮ－ 32°－Ｅ、規模は長径 9.10m、短径 5.40m、深さ 0.08 ～ 0.21m である。底面は緩やかな凹凸を伴って遺構中央へと緩やかに窪んでおり、壁は大きく外傾して立ち上がる。地形的には比較的低い場所に位置することから、浅い谷状となる自然地形の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　炭化物などをわずかに含む黒褐色土（第１層）である。　**遺物**　遺物量は多く、７世紀から９世紀頃までの各時期の遺物が混在している。図化したのは土師器４点（坏２点、高坏１点、甕１点）、須恵器９点（坏２点、高坏１点、壺２点、甕４点）、瓦３点（丸瓦１点、平瓦２点）である。土師器坏１・２や高坏５、甕９などは７世紀中葉頃とみられ、須恵器甕や横瓶もこれらと近い時期と考えられる。高坏６は６世紀後半の可能性もあろうか。須恵器坏３・４は９世紀中葉であろう。瓦はいずれも９世紀代とみられ、丸瓦 15 は凹面に「大」字の線刻を持つ。図化しなかった遺物は、土師器坏片 92 点 (880 ｇ)、甕片 97 点（1,940 ｇ）、高坏片２点（90 ｇ）、須恵器坏片４点（60 ｇ）、甕片７点（240 ｇ）である。本遺構の年代は、新しい遺物の時期をとるとすれば９世紀中葉となるが、浅い谷状の自然地形に各時期の遺物が流入した可能性もあるだろう。



SX-700
1　黒褐色土　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 287 図　和田遺跡　SX-700 実測図



第 288 図　和田遺跡　SX-700 出土遺物実測図

第 212 表　和田遺跡　SX-700 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口　復 11.4 高　3.1 底　復 6.0	内外表面磨滅が著しい。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ､体～底部ケズリ。底部木葉痕あり。口縁は外反し、体部との境に稜をもつ。	5Y7/1　灰白 やや緻密　黒褐粗～細粒多量 やや軟質	覆土 口～底 1/6
2 土師器 坏	口　復 13.1 高　残 2.7	内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、体部ケズリ。	5Y7/2　灰白 やや緻密　赤褐粗～細粒少量、白細粒少量 やや軟質	覆土 口～体 1/6
3 須恵器 坏	口　復 12.0 高　残 3.8 底　復 6.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。口縁が外反する。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体一部、底完存

4 須恵器 坏	口　復 13.6 高　3.1 底　復 7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～底 1/3
5 土師器 高坏	高　残 2.8 脚　復 9.5	内面脚部ナデ後下半ヨコナデ。外面脚部ナデ後下半ヨコナデ。	5Y7/2　灰白 やや粗い　赤褐粗～細粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 脚 1/3
6 須恵器 高坏	口　復 11.2 高　残 4.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ、体部２条の沈線あり。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや硬質	覆土 口～体一部
7 須恵器 壺	高　残 14.4 底　復 9.1 最大 復 16.9	内面体～底部ロクロナデで紐積痕あり。底部中央ナデ。外面体部ロクロナデ、底はナデで周縁は回転ケズリ後ハケ目。	5Y6/1　灰 やや緻密　白粗～細粒多量 硬質	覆土 体～底 1/3
8 須恵器 壺	高　残 6.9	内面胴部ロクロナデ。外面胴部浅いカキ目。	5Y6/3　オリーブ黄 やや緻密　褐細粒多量、白細粒微量 やや軟質	覆土 胴一部
9 土師器 甕	口　復 16.6 高　残 8.5	内面口縁ヨコナデで紐積痕あり。胴部ナデでヘラ状工具痕。外面口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。	10Y6/2　灰黄褐 粗い　灰黒礫多量、白粗～細粒少量 やや硬質	覆土 口～胴上半 1/6
10 須恵器 甕	口　復 21.0 高　残 4.1	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量、灰黒細粒微量 硬質	覆土 口一部
11 須恵器 甕	口　復 34.9 高　残 6.6	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデ、２段の櫛描波状文、沈線あり。	N6/0　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 口一部
12 須恵器 甕	高　残 3.3 高台 復 14.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部下端ケズリ、高台貼り付け。	N5/0　灰 緻密　白粗～細粒微量 硬質	覆土 体一部、底 1/5
13 須恵器 甕	高　残 8.8	内面胴部無文当具痕後ナデ。外面胴部平行文叩き。	N5/0　灰 緻密　白細粒多量 硬質	覆土 胴一部
14 瓦 平瓦	長　残 5.9 幅　残 5.7 厚　残 1.9 重　残 65.7 高　残 2.8	表面磨滅著しい。凹面布目痕。凸面ナデ。側面ケズリ。	10Y8/1　灰白 やや粗い　灰黒粗～細粒多量 軟質	覆土 破片
15 瓦 丸瓦	長　残 6.2 幅　残 14.6 厚　1.8 重　残 301.7 高　残 6.5	凹面布目痕「大」字の線刻あり。側縁ケズリ、側面ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　灰黒細粒多量、白細粒微量 やや硬質	覆土 破片
16 瓦 丸瓦	長　残 7.5 幅　残 4.2 厚　残 1.5 重　86.1 高　残 5.5	表面磨滅著しい。凹面ナデ。凸面ナデ。側縁ケズリ。	10Y8/1　灰白 やや粗い　灰黒粗～細粒多量 軟質	覆土 破片

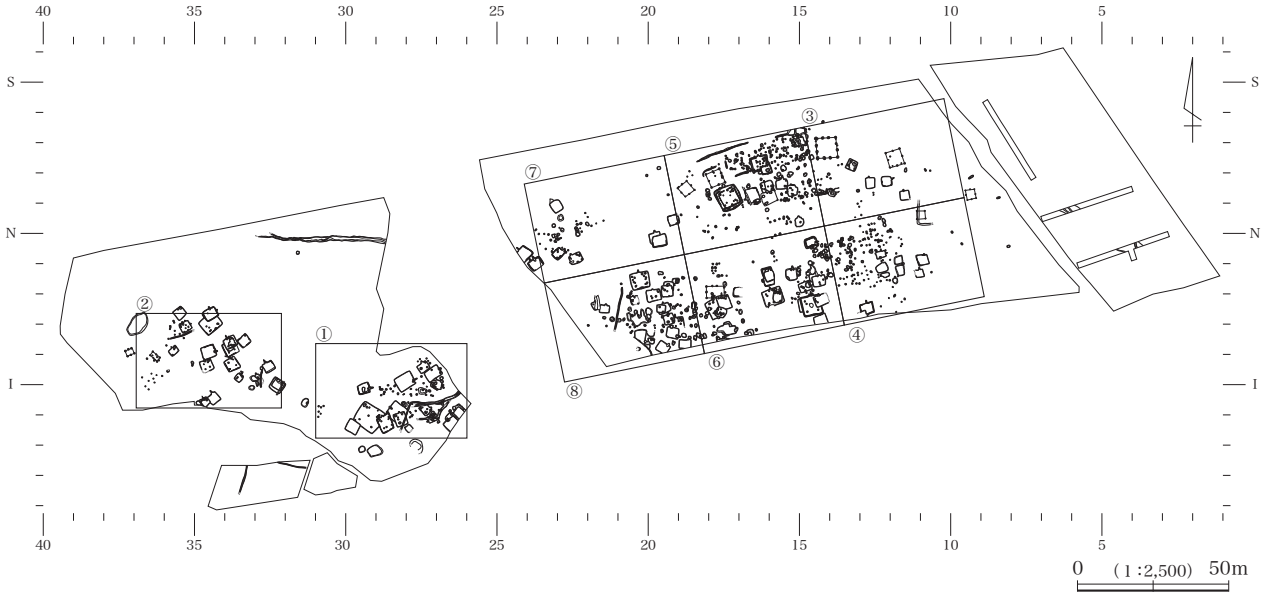
８. ピット（第 289 ～ 301・313・314 図、第 213・215 ～ 222、225 ～ 241・243 ～ 246・248・249 表、図版三四・三八・三九・四〇・四一・四五・五九・六一・六六～六八）

ピットは 567 基確認されている。そのうち出土遺物などから古代と考えられるものは 88 基、時期決定の手だてがなく時期不明としたものは 479 基である。ここでは、時期不明も含めすべてのピットを一覧表と遺構図で掲載した。遺構図は８枚の平面図に分割して掲載したほか、古代ピットと時期不明ピットのうち主なものについて平面図と断面図を掲載した。P-266・277・281・327・413・429・496・503・510・612・625・803・823・952 は古代、P-387・397b・623・804 は時期不明である。

古代ピットからは遺物がわずかに出土し、柱材や礎板が残存するものもある。図化した遺物は計 33 点で、土師器６点（坏２点、盤１点、甑１点、甕１点、台付甕１点）、須恵器 23 点（蓋４点、坏 12 点、高台付坏３点、

鉢１点、壷１点、甕２点）、灰釉陶器埦１点、平瓦２点、筒形土製品１点である。遺物は８世紀代を中心に７～ 10 世紀まで認められる。図化しなかった遺物は、土師器片 370 点 2,736 ｇ（坏 83 点 633 ｇ、甕 287 点 2,103 ｇ）、須恵器片 64 点 1,050 ｇ（坏 46 点 445 ｇ、壺１点 80 ｇ、瓶類１点 20 ｇ、甕 16 点 505 ｇ）であった。図化した遺物は須恵器が中心だが、出土遺物としては土師器が中心で、武蔵型甕の破片が数多く見られる。P-277 出土柱材については放射性炭素年代測定を実施し、780 ～ 870cal.AD. の結果が得られている。

時期不明としたピットの大部分はⅦ区にある。住居跡が集中する地区のためピットも古代の可能性が高いが、時期を確定しうるには至らなかった。遺物は土師器や須恵器の小破片がわずかに出土するのみである。点数は土師器片 110 点（929 ｇ）、須恵器片６点（87 ｇ）である。



第 289 図　和田遺跡　ピット全体図

第 213 表　和田遺跡　古代ピット一覧表

No.	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
1	Ⅴ区	P-128	61×48×18	明褐色土	
2	Ⅴ区	P-135	36×31×28	暗褐色土	
3	Ⅴ区	P-137	46×42×34	褐色土	
4	Ⅴ区	P-141a	42×30×16	暗褐色土	P-141bを切る
5	Ⅴ区	P-141b	39×36×13	褐色土	P-141aに切られる
6	Ⅴ区	P-146	43×37×14	暗褐色土	
7	Ⅴ区	P-151	24×20×15	暗褐色土	
8	Ⅴ区	P-152	28×23×7	暗褐色土	
9	Ⅴ区	P-155	49×45×38	暗褐色土	
10	Ⅴ区	P-161	35×31×30	暗褐色土	
11	Ⅴ区	P-162	49×41×43	暗褐色土	
12	Ⅴ区	P-171	42×37×7	灰褐色土	
13	Ⅴ区	P-176	53×49×16	暗褐色土	
14	Ⅴ区	P-182	36×31×31	暗褐色土	
15	Ⅴ区	P-183	50×47×33	褐色土	
16	Ⅴ区	P-184	32×30×15	暗褐色土	
17	Ⅴ区	P-185	47×43×37	褐色土	
18	Ⅴ区	P-186	33×31×26	褐色土	
19	Ⅵ区	P-243	32×30×21	暗灰褐色土	
20	Ⅵ区	P-244	41×40×25	明褐色土	
21	Ⅵ区	P-246	44×44×30	明褐色土	
22	Ⅵ区	P-247	56×51×32	明褐色土	
23	Ⅵ区	P-249	29×24×9	灰褐色土	
24	Ⅵ区	P-261	38×37×17	灰褐色土	
25	Ⅵ区	P-264	32×28×24	灰褐色土	
26	Ⅵ区	P-266	62×55×11	黒褐色土	
27	Ⅵ区	P-277	73×73×109	暗褐色土	大形、柱材残る
28	Ⅵ区	P-281	57×50×40	黒褐色土	
29	Ⅵ区	P-291	62×49×15	褐色土	
30	Ⅵ区	P-293	65×52×22	褐色土	
31	Ⅵ区	P-327	45×42×40	褐色土	
32	Ⅵ区	P-376	53×41×7	暗褐色土	
33	Ⅵ区	P-393	40×32×10	暗黒褐色土	
34	Ⅵ区	P-408	38×35×23	黒褐色土	
35	Ⅵ区	P-411	40×32×18	青灰褐色土	
36	Ⅵ区	P-412	66×52×36	黒褐色土	
37	Ⅵ区	P-413	80×73×20	黒褐色土	
38	Ⅵ区	P-415	不明×54×23	暗褐色土	
39	Ⅵ区	P-418	63×31×37	黄褐色土	
40	Ⅵ区	P-429	64×53×29	黒褐色土	
41	Ⅵ区	P-432	37×32×25	褐色土	
42	Ⅵ区	P-442	37×37×12	暗褐色土	
43	Ⅵ区	P-443	40×37×7	暗褐色土	
44	Ⅵ区	P-447	65×46×31	黒褐色土	
45	Ⅵ区	P-457	49×40×25	黒褐色土	
46	Ⅵ区	P-458	56×46×26	黒褐色土	P-539を切る
47	Ⅵ区	P-460	52×54×43	暗黒褐色土	P-459に切られる?
48	Ⅵ区	P-462	56×50×50	暗黒褐色土	
49	Ⅵ区	P-471	55×52×34	暗黒褐色土	
50	Ⅵ区	P-475	52×41×45	黒褐色土	
51	Ⅵ区	P-491	37×35×20	黒褐色土	
52	Ⅵ区	P-494	55×46×52	黒褐色土	
53	Ⅵ区	P-495	不明×52×29	暗褐色土	P-627を切る
54	Ⅵ区	P-496	42×40×46	暗褐色土	
55	Ⅵ区	P-502	不明×55×9	暗黒褐色土	P-641に切られる
56	Ⅵ区	P-503	47×37×17	暗褐色土	
57	Ⅵ区	P-510	65×58×55	暗灰褐色土	柱、柱痕確認

No.	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
58	Ⅵ区	P-532	55×45×40	褐色土	
59	Ⅵ区	P-543	42×36×35	黒褐色土	
60	Ⅵ区	P-547	40×32×10	黄褐色土	
61	Ⅵ区	P-571	50×37×12	暗黒褐色土	
62	Ⅵ区	P-575	53×46×40	暗黒褐色土	
63	Ⅵ区	P-577	55×45×20	黒褐色土	
64	Ⅵ区	P-578	54×43×15	黒褐色土	
65	Ⅵ区	P-590	45×27×13	暗黒褐色土	
66	Ⅵ区	P-601	51×50×21	黒褐色土	
67	Ⅵ区	P-602	64×52×7	黒褐色土	
68	Ⅵ区	P-608	40×35×37	暗黒褐色土	
69	Ⅵ区	P-610	57×48×25	黒褐色土	
70	Ⅵ区	P-611	59×50×30	黒褐色土	
71	Ⅵ区	P-612	42×41×22	暗褐色土	
72	Ⅵ区	P-625	55×55×52	暗黒褐色土	P-815を切る
73	Ⅵ区	P-641	41×35×39	黒褐色土	P-502を切る
74	Ⅵ区	P-649	76×58×16	褐色土	
75	Ⅵ区	P-658a	不明×62×38	褐色土	P-658bと重複
76	Ⅵ区	P-658b	65×60×24	不明	P-658aと重複
77	Ⅵ区	P-659	60×55×11	暗褐色土	SX-205を切る
78	Ⅵ区	P-692	57×44×10	暗褐色土	
79	Ⅵ区	P-696	35×31×38	暗黒褐色土	SK-687と重複
80	Ⅵ区	P-803	42×39×39	暗黒褐色土	柱痕確認。P-635・804・815と重複
81	Ⅵ区	P-815	72×不明×24	黒褐色土	P-625に切られる、P-803・804と重複
82	Ⅵ区	P-823	34×30×44	暗黒褐色土	
83	Ⅵ区	P-906	43×41×30	褐色土	
84	Ⅵ区	P-908	54×46×68	灰褐色土	P-918を切る
85	Ⅵ区	P-917	34×29×52	明灰褐色土	
86	Ⅵ区	P-928A	52×48×50	灰褐色土	柱痕確認
87	Ⅷ区	P-928B	43×36×28	灰褐色土	
88	Ⅵ区	P-952	45×38×17	暗灰褐色土	柱、柱痕確認、SX-231と重複

第 214 表　和田遺跡　時期不明ピット一覧表

No.	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
1	Ⅱ区	P-71	42×40×31	褐色土	
2	Ⅱ区	P-72	33×28×18	暗褐色土	
3	Ⅱ区	P-73a	49×45×34	暗褐色土	P-73bと重複
4	Ⅱ区	P-73b	59×53×45	暗褐色土	P-73aと重複
5	Ⅱ区	P-74	35×32×33	灰褐色土	
6	Ⅱ区	P-75	40×32×20	明褐色土	
7	Ⅴ区	P-84	40×36×16	灰褐色土	
8	Ⅴ区	P-108	40×36×32	暗褐色土	
9	Ⅴ区	P-109	45×40×26	暗褐色土	
10	Ⅴ区	P-112	33×27×33	褐色土	
11	Ⅴ区	P-113	23×16×29	褐色土	
12	Ⅴ区	P-114	32×26×10	暗褐色土	
13	Ⅴ区	P-115	36×31×15	暗褐色土	
14	Ⅴ区	P-116	34×27×8	暗褐色土	
15	Ⅴ区	P-117	25×21×16	暗褐色土	
16	Ⅴ区	P-118	38×33×40	暗褐色土	
17	Ⅴ区	P-119	63×41×6	明褐色土	
18	Ⅴ区	P-120a	44×37×33	暗褐色土	P-120bと重複
19	Ⅴ区	P-120b	27×26×34	褐色土	P-120aと重複
20	Ⅴ区	P-121	43×33×47	暗黄褐色土	
21	Ⅴ区	P-122	36×29×26	暗褐色土	
22	Ⅴ区	P-123	18×17×11	黒褐色土	
23	Ⅴ区	P-124	48×26×11	褐色土	
24	Ⅴ区	P-125	49×45×18	暗褐色土	
25	Ⅴ区	P-126	46×39×20	暗褐色土	
26	Ⅴ区	P-127	54×37×14	暗褐色土	
27	Ⅴ区	P-129	56×37×17	褐色土	
28	Ⅴ区	P-130	44×39×25	暗褐色土	
29	Ⅴ区	P-132a	36×33×5	暗褐色土	P-132bと重複
30	Ⅴ区	P-132b	31×27×15	暗褐色土	P-132aと重複
31	Ⅴ区	P-133	65×38×23	暗褐色土	２基の可能性あり
32	Ⅴ区	P-134	20×16×24	暗褐色土	
33	Ⅴ区	P-136a	64×42×25	褐色土	P-136bを切る
34	Ⅴ区	P-136b	37×32×32	暗褐色土	P-136aに切られる
35	Ⅴ区	P-138	31×27×11	暗褐色土	
36	Ⅴ区	P-139	34×21×25	褐色土	P-140と重複
37	Ⅴ区	P-140	33×31×26	褐色土	P-139と重複
38	Ⅴ区	P-142	41×39×26	暗褐色土	
39	Ⅴ区	P-143	46×43×16	暗褐色土	
40	Ⅴ区	P-144	47×37×14	褐色土	
41	Ⅴ区	P-145	47×45×30	暗褐色土	
42	Ⅴ区	P-147	61×51×4	明褐色土	P-148に切られる
43	Ⅴ区	P-148	49×42×24	暗褐色土	P-147を切る
44	Ⅴ区	P-149	61×45×4	褐色土	
45	Ⅴ区	P-150	38×24×6	明褐色土	
46	Ⅴ区	P-153	30×24×7	褐色土	
47	Ⅴ区	P-154	24×20×16	暗褐色土	
48	Ⅴ区	P-156	31×28×6	暗褐色土	
49	Ⅴ区	P-157	57×50×41	暗褐色土	
50	Ⅴ区	P-158a	47×37×35	褐色土	SK-158bを切る
51	Ⅴ区	P-159a	28×27×24	黒褐色土	SK-159bを切る
52	Ⅴ区	P-160	27×26×15	褐色土	
53	Ⅴ区	P-163	33×28×20	暗褐色土	
54	Ⅴ区	P-164	32×28×31	暗褐色土	
55	Ⅴ区	P-165	43×36×27	褐色土	
56	Ⅴ区	P-166	28×24×17	暗褐色土	
57	Ⅴ区	P-169	24×21×33	黒褐色土	
58	Ⅴ区	P-170	22×19×21	褐色土	
59	Ⅴ区	P-172	24×19×17	黒褐色土	
60	Ⅴ区	P-173	30×27×17	黒褐色土	
61	Ⅴ区	P-174	32×29×15	黒褐色土	
62	Ⅴ区	P-175	21×17×19	黒褐色土	
63	Ⅴ区	P-177	28×18×17	褐色土	
64	Ⅴ区	P-178	35×32×25	褐色土	
65	Ⅴ区	P-179	20×17×13	暗褐色土	
66	Ⅴ区	P-180	26×23×19	褐色土	SK-95と重複
67	Ⅴ区	P-181	47×44×22	暗褐色土	
68	Ⅴ区	P-187	48×37×35	褐色土	
69	Ⅴ区	P-191	40×38×19	暗褐色土	
70	Ⅴ区	P-192	21×18×11	暗褐色土	
71	Ⅴ区	P-193	29×26×11	褐色土	
72	Ⅵ区	P-245	44×38×30	明褐色土	
73	Ⅵ区	P-252	31×31×57	灰褐色土	
74	Ⅵ区	P-257	27×24×22	明灰褐色土	
75	Ⅵ区	P-259	48×44×21	明灰褐色土	
76	Ⅵ区	P-262	38×37×17	灰褐色土	
77	Ⅵ区	P-263	36×36×20	灰褐色土	
78	Ⅵ区	P-265	35×34×22	灰褐色土	
79	Ⅵ区	P-268	50×49×9	暗褐色土	
80	Ⅵ区	P-273	78×73×80	黒褐色土	大形
81	Ⅵ区	P-274	54×54×18	褐色土	
82	Ⅵ区	P-275	57×54×16	明褐色土	
83	Ⅵ区	P-279	30×25×40	褐色土	
84	Ⅵ区	P-280	47×44×57	暗褐色土	
85	Ⅵ区	P-282	53×50×40	暗黒褐色土	柱痕確認
86	Ⅵ区	P-294	53×50×33	褐色土	
87	Ⅵ区	P-295	52×47×20	暗褐色土	
88	Ⅵ区	P-296	40×不明×5	黒褐色土	SK-838Aと重複
89	Ⅵ区	P-304	33×32×3	黒褐色土	
90	Ⅵ区	P-305	40×40×20	暗褐色土	
91	Ⅵ区	P-306	33×29×7	黒褐色土	
92	Ⅵ区	P-309	43×38×52	暗褐色土	柱痕確認
93	Ⅵ区	P-311	73×65×20	褐色土	
94	Ⅵ区	P-314	45×40×37	暗褐色土	
95	Ⅵ区	P-325	38×32×10	不明	
96	Ⅵ区	P-331	45×35×23	黒褐色土	
97	Ⅵ区	P-332	27×22×25	暗褐色土	
98	Ⅵ区	P-334	33×24×8	暗褐色土	
99	Ⅵ区	P-338	57×45×16	黒褐色土	
100	Ⅵ区	P-339	69×63×20	黒褐色土	
101	Ⅵ区	P-340	44×41×6	暗褐色土	
102	Ⅵ区	P-341	76×67×9	暗褐色土	

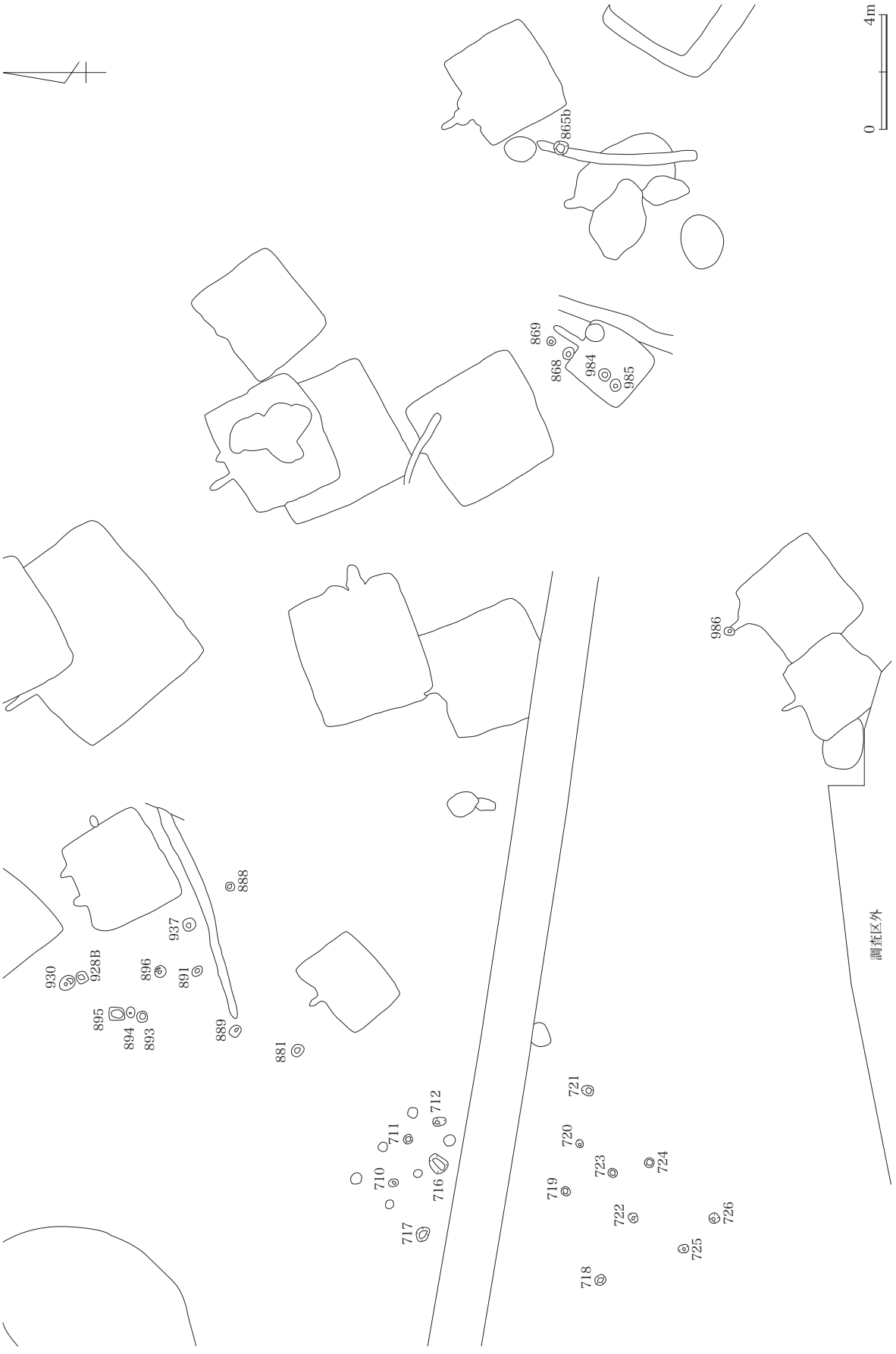
№	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
103	Ⅵ区	P-342	68×55×3	暗褐色土	
104	Ⅵ区	P-343	45×37×4	暗黒褐色土	
105	Ⅵ区	P-344	41×38×4	黒褐色土	
106	Ⅵ区	P-345	40×40×12	黒褐色土	
107	Ⅵ区	P-346	113×81×19	暗黒褐色土	
108	Ⅵ区	P-347	67×50×12	暗黒褐色土	
109	Ⅵ区	P-348	48×36×30	暗褐色土	
110	Ⅵ区	P-356	28×24×28	黒褐色土	
111	Ⅵ区	P-359	51×47×9	暗褐色土	
112	Ⅵ区	P-362	不明×39×16	不明	
113	Ⅵ区	P-365	91×60×30	暗褐色土	
114	Ⅵ区	P-366	76×57×17	暗褐色土	
115	Ⅵ区	P-367	92×65×48	黒褐色土	
116	Ⅵ区	P-368	36×32×17	黒褐色土	P-647と重複
117	Ⅵ区	P-369	68×65×25	黒褐色土	
118	Ⅵ区	P-370	40×38×50	褐色土	
119	Ⅵ区	P-371	35×28×16	暗褐色土	
120	Ⅵ区	P-372	32×24×8	暗黒褐色土	
121	Ⅵ区	P-373	33×33×10	黒褐色土	
122	Ⅵ区	P-374	35×33×14	暗褐色土	
123	Ⅵ区	P-375a	不明×40×5	暗褐色土	P-375bと重複
124	Ⅵ区	P-375b	75×56×11	暗褐色土	P-375aと重複
125	Ⅵ区	P-378	不明×57×15	暗褐色土	P-379に切られる
126	Ⅵ区	P-379	不明×60×14	黒褐色土	P-378を切る
127	Ⅵ区	P-380	55×46×15	暗褐色土	
128	Ⅵ区	P-381	55×55×19	黒褐色土	
129	Ⅵ区	P-382	35×33×27	黒褐色土	
130	Ⅵ区	P-386	53×46×30	黒褐色土	
131	Ⅵ区	P-387	59×57×37	暗黒褐色土	
132	Ⅵ区	P-388	47×38×5	黒褐色土	
133	Ⅵ区	P-389	70×52×33	黒褐色土	
134	Ⅵ区	P-390	47×35×17	暗黒褐色土	
135	Ⅵ区	P-391	60×50×35	黒褐色土	
136	Ⅵ区	P-392	33×30×14	黒褐色土	
137	Ⅵ区	P-394	53×43×12	暗褐色土	
138	Ⅵ区	P-396	83×60×58	灰褐色土	大形、柱痕確認
139	Ⅵ区	P-397b	62×52×27	暗褐色土	SK-397aに切られる
140	Ⅵ区	P-398a	59×33×30	黒褐色土	SK-398bを切る
141	Ⅵ区	P-400	35×28×22	明褐色土	
142	Ⅵ区	P-404	40×37×17	暗黒褐色土	
143	Ⅵ区	P-405	58×55×16	黄褐色土	
144	Ⅵ区	P-406	52×44×34	暗黒褐色土	柱痕確認
145	Ⅵ区	P-407b	28×25×58	不明	SK-407aと重複
146	Ⅵ区	P-409	44×33×17	暗褐色土	
147	Ⅵ区	P-410	44×42×16	黒褐色土	
148	Ⅵ区	P-414a	46×41×20	暗褐色土	
149	Ⅵ区	P-414b	不明×25×16	不明	
150	Ⅵ区	P-416	71×53×37	暗黒褐色土	
151	Ⅵ区	P-417	58×47×8	暗褐色土	
152	Ⅵ区	P-419	32×30×15	暗褐色土	
153	Ⅵ区	P-421	38×34×26	暗褐色土	
154	Ⅵ区	P-426	47×39×32	黒褐色土	
155	Ⅵ区	P-427	51×46×45	暗黒褐色土	柱痕確認
156	Ⅵ区	P-428	50×43×28	黒褐色土	
157	Ⅵ区	P-430	68×57×44	褐色土	
158	Ⅵ区	P-431b	41×35×18	黒褐色土	SK-431aに切られる
159	Ⅵ区	P-433	25×24×5	黒褐色土	
160	Ⅵ区	P-434	30×27×21	褐色土	
161	Ⅵ区	P-436	43×39×10	暗褐色土	
162	Ⅵ区	P-437	41×41×12	暗褐色土	P-438を切る
163	Ⅵ区	P-438	不明×26×12	褐色土	P-437に切られる
164	Ⅵ区	P-439	50×50×11	暗褐色土	
165	Ⅵ区	P-440	35×30×22	暗褐色土	
166	Ⅵ区	P-444	55×55×37	暗黒褐色土	
167	Ⅵ区	P-445b	22×17×10	暗褐色土	SK-445aと重複
168	Ⅵ区	P-446	57×50×25	暗褐色土	
169	Ⅵ区	P-448	35×34×11	黒褐色土	
170	Ⅵ区	P-453A	68×52×32	暗褐色土	P-453Bとは別地点
171	Ⅵ区	P-453B	66×42×32	暗黒褐色土	P-453Aとは別地点
172	Ⅵ区	P-454	30×27×20	黒褐色土	
173	Ⅵ区	P-455	44×40×35	暗黒褐色土	柱痕確認
174	Ⅵ区	P-459	不明×62×37	暗黒褐色土	P-460を切ると見られる
175	Ⅵ区	P-461	50×47×33	黒褐色土	
176	Ⅵ区	P-470	46×45×34	暗黒褐色土	
177	Ⅵ区	P-472	53×51×22	黄褐色土	
178	Ⅵ区	P-473	32×26×7	黒褐色土	
179	Ⅵ区	P-474	55×52×35	暗褐色土	
180	Ⅵ区	P-476	57×45×22	暗褐色土	
181	Ⅵ区	P-482	32×25×35	黒褐色土	柱痕確認
182	Ⅵ区	P-484b	53×47×69	暗黒褐色土	柱痕確認、SK-484aと重複、P-484cを切る
183	Ⅵ区	P-484c	不明×35×18	暗褐色土	SK-484aと重複、P-484bに切られる
184	Ⅵ区	P-486	57×56×12	黒褐色土	
185	Ⅵ区	P-489	46×40×8	暗黒褐色土	
186	Ⅵ区	P-493	45×45×12	暗褐色土	
187	Ⅵ区	P-498	40×38×57	不明	
188	Ⅵ区	P-500	37×33×15	黒褐色土	
189	Ⅵ区	P-504	39×35×17	灰褐色土	
190	Ⅵ区	P-505	52×50×8	暗褐色土	P-636と重複
191	Ⅵ区	P-512	54×50×27	黒褐色土	SK-513を切る
192	Ⅵ区	P-514	39×30×37	黒褐色土	やや大形
193	Ⅵ区	P-519	63×54×15	暗褐色土	
194	Ⅵ区	P-520	47×40×15	黒褐色土	
195	Ⅵ区	P-522	64×40×40	黒褐色土	
196	Ⅵ区	P-525	44×41×23	暗黒褐色土	SK-526に切られる
197	Ⅵ区	P-527	40×30×25	暗褐色土	
198	Ⅵ区	P-529b	41×37×39	暗黒褐色土	柱痕確認、SK-529aと重複
199	Ⅵ区	P-537	40×35×23	黄褐色土	
200	Ⅵ区	P-538b	50×40×39	暗黒褐色土	柱痕確認、SK-538aと重複
201	Ⅵ区	P-538c	50×35×50	不明	SK-538aと重複
202	Ⅵ区	P-538d	32×24×32	不明	SK-538aと重複
203	Ⅵ区	P-539	不明×55×19	黄褐色土	P-458に切られる
204	Ⅵ区	P-540	65×47×8	不明	
205	Ⅵ区	P-541	45×35×63	黒褐色土	
206	Ⅵ区	P-542	47×40×48	不明	
207	Ⅵ区	P-544B	40×38×22	暗褐色土	SK-544Aとは別地点
208	Ⅵ区	P-548A	50×46×55	暗黒褐色土	柱痕確認、SK-845を切ると見られ、P-548Bは別地点
209	Ⅵ区	P-548B	38×35×40	黒褐色土	P-548Aとは別地点
210	Ⅵ区	P-561	55×45×24	黒褐色土	
211	Ⅵ区	P-562	46×35×35	暗黒褐色土	
212	Ⅵ区	P-563	39×36×17	暗黒褐色土	
213	Ⅵ区	P-566	58×45×15	黒褐色土	SK-565を切る
214	Ⅵ区	P-573	64×62×9	暗褐色土	SK-572・P-574と重複
215	Ⅵ区	P-574	不明×39×4	黒褐色土	SK-572・P-573と重複
216	Ⅵ区	P-576	35×35×35	暗褐色土	
217	Ⅵ区	P-579	55×46×32	不明	
218	Ⅵ区	P-580	44×37×15	黒褐色土	
219	Ⅵ区	P-581	41×36×25	黒褐色土	
220	Ⅵ区	P-585	50×45×38	暗褐色土	SK-583・603に切られる
221	Ⅵ区	P-587	60×40×22	黒褐色土	
222	Ⅵ区	P-591	47×30×8	黒褐色土	
223	Ⅵ区	P-604	59×48×53	暗黒褐色土	
224	Ⅵ区	P-605	37×37×47	暗褐色土	
225	Ⅵ区	P-606	38×28×8	黒褐色土	
226	Ⅵ区	P-607	45×35×20	暗黒褐色土	
227	Ⅵ区	P-609	43×40×42	黒褐色土	
228	Ⅵ区	P-617	59×55×20	明褐色土	
229	Ⅵ区	P-618	50×46×26	褐色土	

No.	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
230	Ⅵ区	P-619	25×20×15	黒褐色土	SK-333と重複
231	Ⅵ区	P-623	50×45×50	暗褐色土	柱、柱痕確認
232	Ⅵ区	P-624	27×25×10	明褐色土	
233	Ⅵ区	P-626	50×48×25	暗褐色土	
234	Ⅵ区	P-627	52×42×25	黒褐色土	P-495に切られる
235	Ⅵ区	P-628	40×35×12	黒褐色土	
236	Ⅵ区	P-630	56×51×32	黄褐色土	
237	Ⅵ区	P-633	75×32×14	褐色土	
238	Ⅵ区	P-635	不明×35×9	黒褐色土	
239	Ⅵ区	P-636	55×不明×8	暗褐色土	P-505と重複
240	Ⅵ区	P-638b	33×30×26	暗黒褐色土	柱痕確認。SK-638aと重複
241	Ⅵ区	P-643a	40×33×23	明褐色土	SK-643bを切る
242	Ⅵ区	P-647	不明×38×10	明褐色土	P-648に切られる、P-368と重複
243	Ⅵ区	P-648	32×29×23	褐色土	P-647を切る
244	Ⅵ区	P-660	70×67×53	暗褐色土	P-658aと重複、大形
245	Ⅵ区	P-663	41×27×10	暗褐色土	
246	Ⅵ区	P-664	不明×35×13	黒褐色土	
247	Ⅵ区	P-668	不明×30×19	黒褐色土	
248	Ⅵ区	P-671	42×40×26	明褐色土	SI-219を切る
249	Ⅵ区	P-672b	29×24×29	暗褐色土	
250	Ⅵ区	P-672c	30×27×84	不明	SI-214と重複
251	Ⅵ区	P-672d	48×32×36	不明	SI-214・403と重複、SI-403を切るとみられる。
252	Ⅵ区	P-677	不明×55×43	褐色土	P-678と重複
253	Ⅵ区	P-678	31×26×22	暗褐色土	P-677・689と重複
254	Ⅵ区	P-683	41×38×12	黒褐色土	
255	Ⅵ区	P-684	46×37×3	黒褐色土	
256	Ⅵ区	P-685	53×45×37	暗褐色土	
257	Ⅵ区	P-689	不明×34×25	暗黒褐色土	P-678と重複
258	Ⅵ区	P-691A	47×46×31	暗黒褐色土	柱痕確認、P-691Bは別地点
259	Ⅵ区	P-691B	46×38×21	不明	P-691Aは別地点
260	Ⅶ区	P-710	27×23×23	灰褐色土	
261	Ⅶ区	P-711	30×25×30	灰褐色土	
262	Ⅶ区	P-712	42×28×25	明灰褐色土	
263	Ⅶ区	P-716	68×50×31	明灰褐色土	
264	Ⅶ区	P-717	49×38×28	灰褐色土	
265	Ⅶ区	P-718	33×30×18	明灰褐色土	
266	Ⅶ区	P-719	29×27×20	灰褐色土	
267	Ⅶ区	P-720	23×21×15	明灰褐色土	
268	Ⅶ区	P-721	35×33×24	明灰褐色土	
269	Ⅶ区	P-722	31×26×16	暗灰褐色土	
270	Ⅶ区	P-723	30×27×11	明灰褐色土	
271	Ⅶ区	P-724	29×28×14	暗灰褐色土	
272	Ⅶ区	P-725	33×27×25	暗灰褐色土	
273	Ⅶ区	P-726	33×31×11	暗灰褐色土	
274	Ⅶ区	P-760	53×49×19	暗褐色土	
275	Ⅶ区	P-770	46×33×5	褐色土	
276	Ⅶ区	P-771	33×28×21	褐色土	
277	Ⅶ区	P-772	44×41×9	明褐色土	
278	Ⅶ区	P-773	54×52×17	明褐色土	
279	Ⅶ区	P-774	35×30×14	褐色土	
280	Ⅶ区	P-775	52×50×5	明褐色土	
281	Ⅶ区	P-776	31×25×4	明褐色土	
282	Ⅶ区	P-777	40×34×3	褐色土	
283	Ⅶ区	P-778	29×28×9	褐色土	
284	Ⅶ区	P-779	62×53×51	褐色土	
285	Ⅶ区	P-780	40×37×9	黄褐色土	
286	Ⅶ区	P-781	37×30×35	黄褐色土	
287	Ⅶ区	P-782	56×32×25	黄褐色土	
288	Ⅶ区	P-783	44×40×38	明褐色土	
289	Ⅶ区	P-784	30×28×33	褐色土	
290	Ⅶ区	P-785	36×30×31	明褐色土	
291	Ⅶ区	P-786a	17×14×18	明褐色土	P-786bを切る
292	Ⅶ区	P-786b	42×36×32	褐色土	P-786aに切られる
293	Ⅶ区	P-787a	22×不明×10	明褐色土	P-787bを切る、P-787cと重複
294	Ⅶ区	P-787b	14×不明×19	褐色土	P-787aに切られる
295	Ⅶ区	P-787c	25×不明×10	褐色土	787aと重複
296	Ⅶ区	P-788	78×47×39	褐色土	２基の可能性あり
297	Ⅶ区	P-789	46×37×43	褐色土	
298	Ⅶ区	P-790	57×不明×41	褐色土	P-856を切るとみられる
299	Ⅶ区	P-791	63×47×51	褐色土	
300	Ⅶ区	P-792	60×50×47	褐色土	
301	Ⅶ区	P-794	44×40×18	暗灰褐色土	
302	Ⅶ区	P-795	31×29×5	暗灰褐色土	
303	Ⅶ区	P-796	42×38×6	暗灰褐色土	
304	Ⅶ区	P-797	40×35×4	暗灰褐色土	
305	Ⅶ区	P-798	42×38×7	暗灰褐色土	
306	Ⅶ区	P-799	38×35×4	暗灰褐色土	
307	Ⅵ区	P-800	37×28×44	暗黒褐色土	
308	Ⅵ区	P-802	57×54×46	暗黒褐色土	SK-384を切る
309	Ⅵ区	P-804	58×53×46	黒褐色土	柱痕確認、P-803・815と重複
310	Ⅵ区	P-805	83×45×7	暗褐色土	SK-383を切る
311	Ⅵ区	P-806	28×17×4	暗黒褐色土	
312	Ⅵ区	P-810	40×不明×23	黒褐色土	
313	Ⅵ区	P-813	45×不明×16	暗黒褐色土	SK-695に切られ、SK-698と重複
314	Ⅵ区	P-814	42×25×10	黒褐色土	SK-465と重複
315	Ⅵ区	P-816	50×25×16	黒褐色土	SK-465と重複
316	Ⅵ区	P-818	90×65×57	暗黒褐色土	SK-820と重複
317	Ⅵ区	P-819	45×39×53	黒褐色土	SK-820と重複
318	Ⅵ区	P-826	32×25×30	暗褐色土	SK-593・821・832と重複
319	Ⅶ区	P-850	45×37×32	褐色土	
320	Ⅶ区	P-851	42×39×33	褐色土	
321	Ⅶ区	P-854	33×28×30	暗褐色土	
322	Ⅶ区	P-856	41×31×18	褐色土	P-790に切られるとみられる
323	Ⅶ区	P-857	53×50×32	褐色土	
324	Ⅶ区	P-858	51×49×45	褐色土	
325	Ⅶ区	P-859	49×41×24	褐色土	
326	Ⅶ区	P-860	66×52×9	褐色土	P-861を切る
327	Ⅶ区	P-861	63×57×14	明褐色土	P-860に切られる
328	Ⅶ区	P-862	46×38×6	明褐色土	
329	Ⅶ区	P-863	53×49×41	褐色土	
330	Ⅶ区	P-865b	47×40×33	不明	SD-865aと重複
331	Ⅶ区	P-868	39×32×46	褐色土	
332	Ⅶ区	P-869	29×26×13	褐色土	
333	Ⅶ区	P-870	51×37×5	暗褐色土	
334	Ⅶ区	P-871	53×35×57	暗褐色土	２基の可能性あり
335	Ⅶ区	P-872	44×36×19	褐色土	
336	Ⅶ区	P-873	47×41×41	暗褐色土	
337	Ⅶ区	P-881	41×33×22	灰褐色土	
338	Ⅶ区	P-888	31×29×25	灰褐色土	
339	Ⅶ区	P-889	39×32×34	灰褐色土	
340	Ⅶ区	P-891	33×30×33	褐色土	
341	Ⅶ区	P-893	36×35×29	灰黄褐色土	
342	Ⅶ区	P-894	34×26×29	灰黄褐色土	
343	Ⅶ区	P-895	58×43×14	灰褐色土	
344	Ⅶ区	P-896	34×32×31	灰黄褐色土	
345	Ⅵ区	P-907	45×33×12	灰褐色土	
346	Ⅵ区	P-910	30×28×36	暗灰褐色土	
347	Ⅵ区	P-916	49×41×5	灰褐色土	
348	Ⅵ区	P-918	48×不明×65	暗灰褐色土	P-908に切られる
349	Ⅵ区	P-920	23×21×52	灰褐色土	柱痕確認、SI-902を切るものとみられ、P-921を切る可能性が高い
350	Ⅵ区	P-921	不明×35×21	褐色土	SI-902を切るものとみられ、P-920に切られる可能性が高い

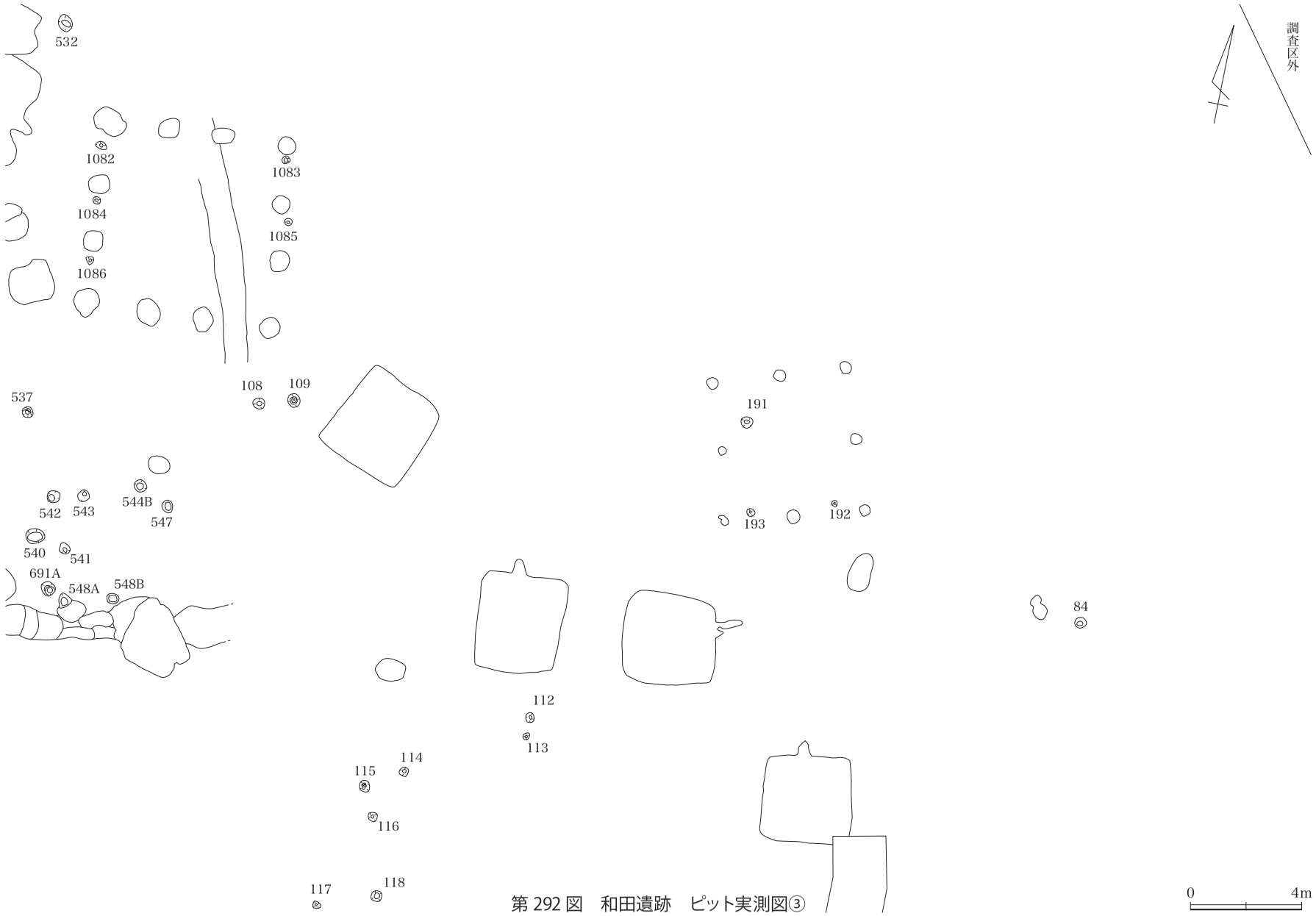
№	地区	遺構名	長×短×深	覆土	備考
351	Ⅵ区	P-922	不明×22×11	灰褐色土	
352	Ⅵ区	P-923	32×31×26	明灰褐色土	
353	Ⅵ区	P-924	29×28×14	灰褐色土	
354	Ⅵ区	P-925	44×42×35	暗灰褐色土	
355	Ⅵ区	P-926	38×29×24	灰褐色土	
356	Ⅵ区	P-927	36×32×20	灰褐色土	
357	Ⅵ区	P-929	46×41×47	灰褐色土	柱痕確認
358	Ⅷ区	P-930	59×44×47	灰褐色土	
359	Ⅷ区	P-937	43×39×22	灰褐色土	
360	Ⅵ区	P-953	45×34×36	暗褐色土	SX-231より古い
361	Ⅵ区	P-954	48×40×45	褐色土	
362	Ⅵ区	P-955	30×30×36	褐色土	
363	Ⅵ区	P-956	26×26×10	黒褐色土	SX-231と重複
364	Ⅵ区	P-957	47×41×42	明褐色土	
365	Ⅵ区	P-958	54×42×9	不明	
366	Ⅵ区	P-959	30×22×6	不明	
367	Ⅰ区	P-962	33×30×30	明褐色土	SI-25を切る
368	Ⅰ区	P-963	41×29×22	褐色土	
369	Ⅱ区	P-964	19×17×28	暗褐色土	SK-53を切る
370	Ⅵ区	P-965	78×不明×25	黒褐色土	SI-207と重複
371	Ⅵ区	P-966	59×53×30	暗褐色土	SI-207と重複
372	Ⅵ区	P-967	39×30×20	褐色土	SI-207と重複
373	Ⅵ区	P-968	45×42×11	暗褐色土	SI-207と重複
374	Ⅵ区	P-969	55×不明×23	褐色土	SI-207と重複
375	Ⅵ区	P-970	25×16×7	褐色土	SI-207と重複
376	Ⅵ区	P-971	21×19×12	黒褐色土	SI-207と重複
377	Ⅵ区	P-972	30×16×9	褐色土	SI-207と重複
378	Ⅵ区	P-973	40×37×43	暗褐色土	SI-207と重複
379	Ⅵ区	P-974	34×32×20	褐色土	SI-207と重複
380	Ⅵ区	P-975	35×31×21	褐色土	SI-207と重複
381	Ⅵ区	P-983	70×63×33	灰褐色土	柱痕確認、SI-198と重複
382	Ⅷ区	P-984	40×38×24	明灰褐色土	SI-741と重複
383	Ⅷ区	P-985	38×32×7	灰褐色土	SI-741と重複
384	Ⅷ区	P-986	32×24×12	明褐色土	SI-751と重複
385	Ⅵ区	P-987	64×49×26	灰褐色土	SI-209aと重複
386	Ⅵ区	P-988	61×46×30	灰褐色土	SI-209aと重複
387	Ⅵ区	P-989	57×50×37	暗黄褐色土	SI-209aと重複
388	Ⅵ区	P-990	54×51×4	赤褐色土	SI-209a・bと重複
389	Ⅵ区	P-992	71×41×25	灰褐色土	SI-214と重複
390	Ⅵ区	P-993	64×52×23	暗灰褐色土	柱痕確認、SI-214と重複
391	Ⅵ区	P-994	30×28×39	灰褐色土	SI-214と重複
392	Ⅵ区	P-995	40×33×19	灰褐色土	SI-214と重複
393	Ⅵ区	P-996	51×50×13	暗灰褐色土	SI-214と重複
394	Ⅵ区	P-997	46×46×16	灰褐色土	SI-214と重複
395	Ⅵ区	P-998	33×31×30	灰褐色土	SI-214と重複
396	Ⅵ区	P-999	38×35×14	灰褐色土	SI-214と重複
397	Ⅵ区	P-1000	29×27×20	灰褐色土	SI-214と重複
398	Ⅵ区	P-1001	27×23×22	灰褐色土	SI-214と重複
399	Ⅵ区	P-1002	30×28×25	灰褐色土	柱痕確認、SI-214と重複
400	Ⅵ区	P-1003	68×42×15	灰褐色土	SI-214と重複
401	Ⅵ区	P-1004	57×52×38	褐色土	SI-220と重複
402	Ⅵ区	P-1005	60×55×13	明褐色土	SI-220と重複
403	Ⅵ区	P-1006	39×34×18	明褐色土	SI-220と重複
404	Ⅵ区	P-1007	42×40×37	暗褐色土	SI-221と重複
405	Ⅵ区	P-1008	43×36×4	明褐色土	SI-222と重複
406	Ⅵ区	P-1009	35×32×22	褐色土	SI-222と重複
407	Ⅵ区	P-1015	60×49×17	褐色土	SI-216・217と重複
409	Ⅵ区	P-1016	46×44×8	褐色土	SI-217と重複
409	Ⅵ区	P-1017	30×29×7	褐色土	SI-217と重複
410	Ⅵ区	P-1018	49×40×10	暗褐色土	SI-217と重複
411	Ⅵ区	P-1019	54×54×14	暗褐色土	SI-225と重複
412	Ⅵ区	P-1020	18×16×8	暗褐色土	SI-225と重複
413	Ⅵ区	P-1021	19×15×9	暗褐色土	SI-225と重複
414	Ⅵ区	P-1022	40×37×45	暗褐色土	SK-674と重複
415	Ⅵ区	P-1023	49×40×25	暗褐色土	SI-227と重複
416	Ⅵ区	P-1024	60×51×50	暗褐色土	SI-227と重複
417	Ⅵ区	P-1025	44×38×49	暗褐色土	SI-227と重複
418	Ⅵ区	P-1026	50×35×19	褐色土	SI-227と重複
419	Ⅵ区	P-1027	30×23×9	褐色土	SI-227と重複
420	Ⅵ区	P-1028	27×27×5	褐色土	SI-227と重複
421	Ⅵ区	P-1029	28×28×4	褐色土	SI-227と重複
422	Ⅵ区	P-1030	35×34×20	褐色土	SI-227と重複
423	Ⅵ区	P-1031	25×22×17	褐色土	SI-227と重複
424	Ⅵ区	P-1032	37×29×22	褐色土	SI-227と重複
425	Ⅵ区	P-1033	27×20×6	明褐色土	SI-228と重複
426	Ⅵ区	P-1034	51×45×8	黒褐色土	SI-228と重複
427	Ⅵ区	P-1035	49×不明×8	暗褐色土	SI-228と重複
428	Ⅵ区	P-1036	47×45×38	褐色土	柱痕確認、SI-902と重複
429	Ⅵ区	P-1037	42×30×7	黒褐色土	SI-902と重複
430	Ⅵ区	P-1038	不明×28×4	灰褐色土	SI-902と重複
431	Ⅵ区	P-1039	50×47×8	黒褐色土	SI-902と重複
432	Ⅵ区	P-1040	25×23×5	暗灰褐色土	SI-902と重複
433	Ⅵ区	P-1041	不明×23×5	黒褐色土	SI-902と重複
434	Ⅵ区	P-1042	42×40×33	灰褐色土	SI-902と重複
435	Ⅵ区	P-1043	42×37×11	明褐色土	SI-903と重複
436	Ⅵ区	P-1044	62×59×7	黒褐色土	SI-903と重複
437	Ⅵ区	P-1045	35×33×20	暗褐色土	SI-903と重複
438	Ⅵ区	P-1046	不明×33×6	暗褐色土	SI-903と重複
439	Ⅵ区	P-1047	45×32×4	黒褐色土	SI-903と重複
440	Ⅵ区	P-1048	27×24×5	暗褐色土	SI-903と重複
441	Ⅵ区	P-1049	40×31×7	暗褐色土	SI-903と重複
442	Ⅵ区	P-1050	42×37×10	暗褐色土	SI-195と重複
443	Ⅵ区	P-1051	39×35×10	褐色土	SI-195と重複
444	Ⅵ区	P-1052	25×22×18	褐色土	SI-195と重複
445	Ⅵ区	P-1053	27×26×34	褐色土	SI-195と重複
446	Ⅵ区	P-1054	26×24×21	暗褐色土	SI-195と重複
447	Ⅵ区	P-1055	53×41×23	褐色土	柱痕確認、SI-196と重複
448	Ⅵ区	P-1056	65×47×21	褐色土	SI-196と重複
449	Ⅵ区	P-1057	45×34×14	暗褐色土	SI-196と重複
450	Ⅵ区	P-1058	45×40×27	暗黄褐色土	SI-196と重複
451	Ⅵ区	P-1059	47×45×21	褐色土	SI-196と重複
452	Ⅵ区	P-1060	46×34×15	暗黄褐色土	SI-196と重複
453	Ⅵ区	P-1061	20×15×21	明褐色土	SI-196と重複
454	Ⅵ区	P-1062	不明×35×11	褐色土	SI-196と重複
455	Ⅵ区	P-1063	43×42×24	明褐色土	SI-196と重複
456	Ⅵ区	P-1064	25×24×25	褐色土	SI-196と重複
457	Ⅵ区	P-1065	48×40×10	暗褐色土	SI-197と重複
458	Ⅵ区	P-1066	60×50×11	褐色土	SI-197と重複
459	Ⅵ区	P-1067	51×39×11	褐色土	SI-197と重複
460	Ⅵ区	P-1068	20×16×12	黒褐色土	SI-204住居跡外
461	Ⅵ区	P-1069	28×26×13	褐色土	SI-204と重複
462	Ⅵ区	P-1074	39×32×10	黒褐色土	SI-213と重複
463	Ⅵ区	P-1075	30×22×23	褐色土	SI-213と重複
464	Ⅵ区	P-1076	不明×22×17	暗褐色土	SI-213と重複
465	Ⅵ区	P-1077	79×30×25	褐色土	SI-213と重複
466	Ⅵ区	P-1078	26×22×11	不明	SI-213と重複
467	Ⅵ区	P-1079	37×31×22	不明	SI-213と重複
468	Ⅵ区	P-1080	48×28×7	不明	SI-213と重複
469	Ⅵ区	P-1081	46×25×16	不明	SI-213と重複
470	Ⅵ区	P-1082	37×26×6	不明	
471	Ⅵ区	P-1083	23×22×6	不明	
472	Ⅵ区	P-1084	23×22×2	不明	
473	Ⅵ区	P-1085	24×20×3	不明	
474	Ⅵ区	P-1086	26×25×2	不明	
475	Ⅱ区	P-1087	47×45×14	褐色土	SI-61と重複
476	Ⅱ区	P-1088	48×42×36	灰褐色土	SI-61・62と重複
477	Ⅱ区	P-1089	48×45×34	灰褐色土	SI-61・62と重複
478	Ⅵ区	P-1090	不明×45×25	褐色土	SI-209と重複
479	Ⅵ区	P-1091	70×53×21	不明	SI-209と重複

798 799 797 796 795 794

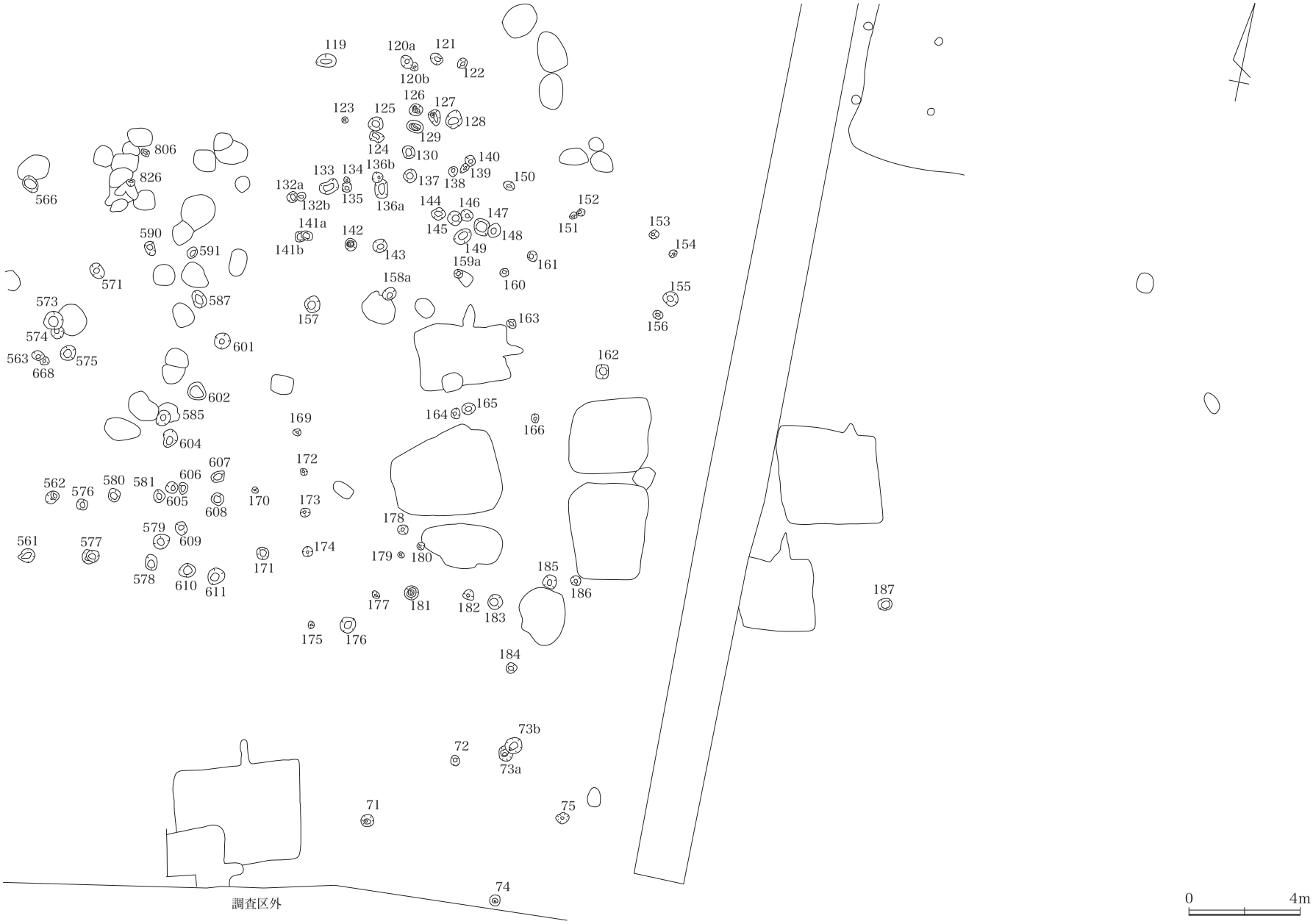
第 290 図　和田遺跡　ピット実測図①



第 291 図　和田遺跡　ピット実測図②

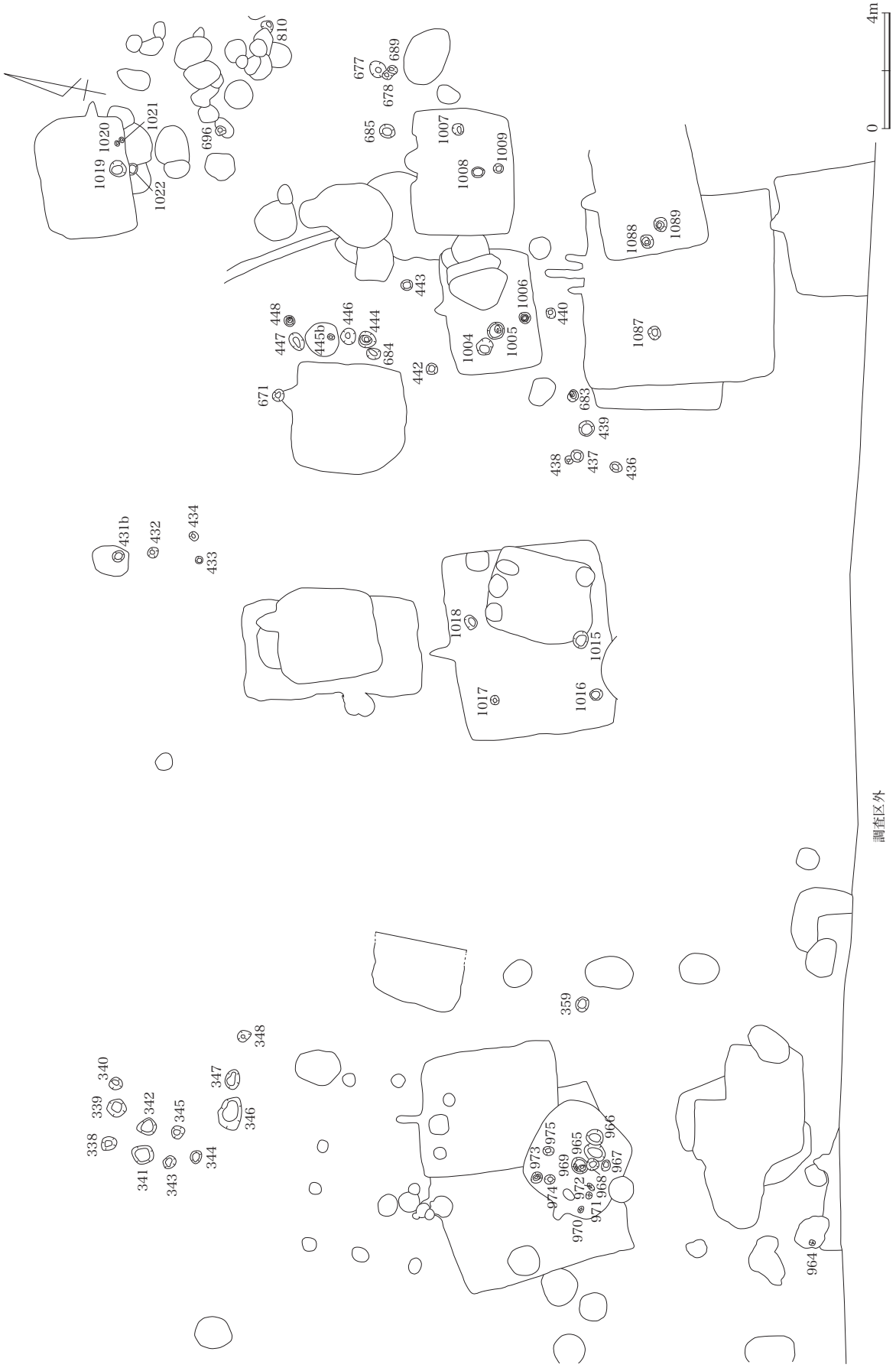


第 292 図　和田遺跡　ピット実測図③

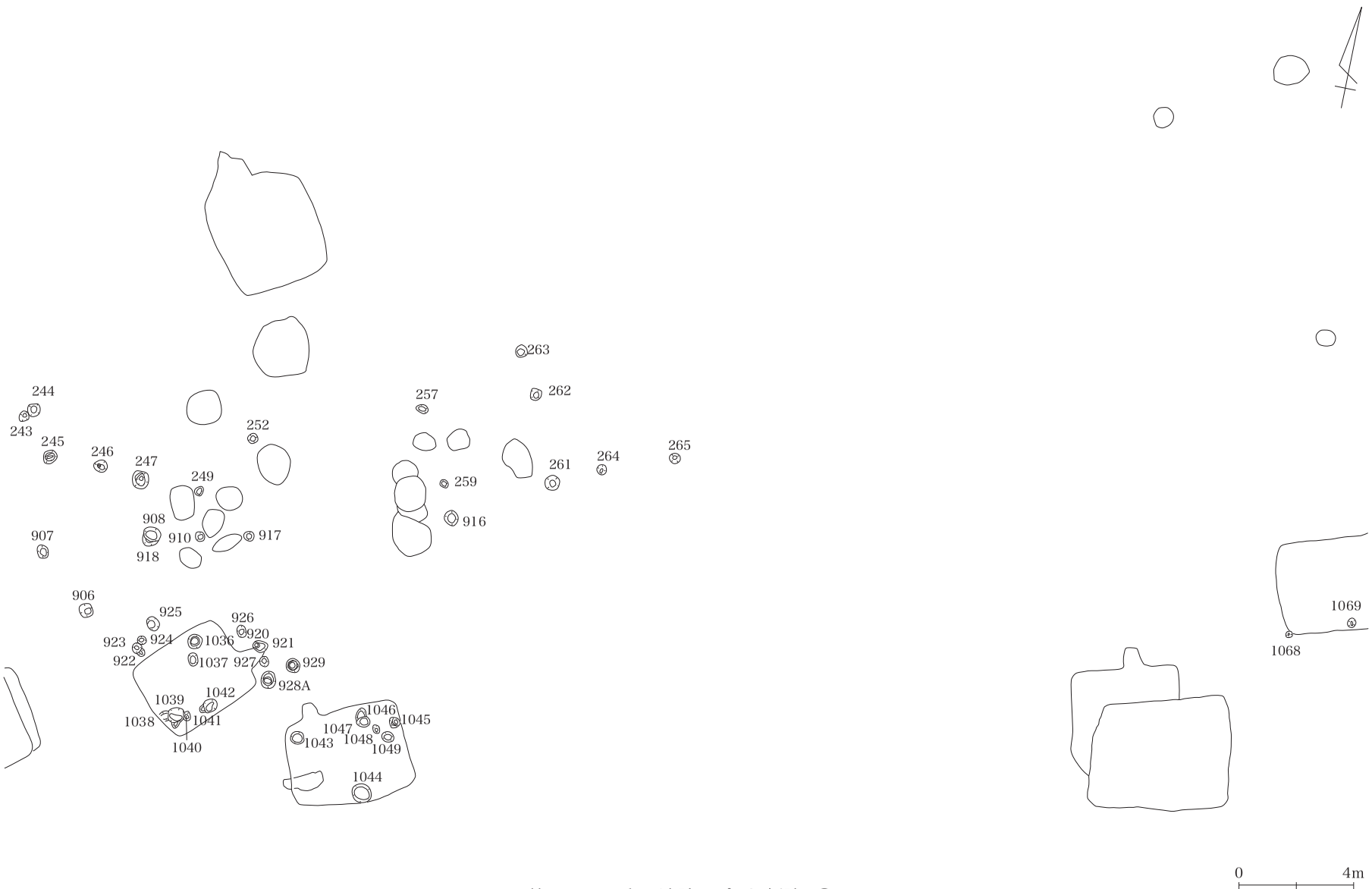


第293図　和田遺跡　ピット実測図④

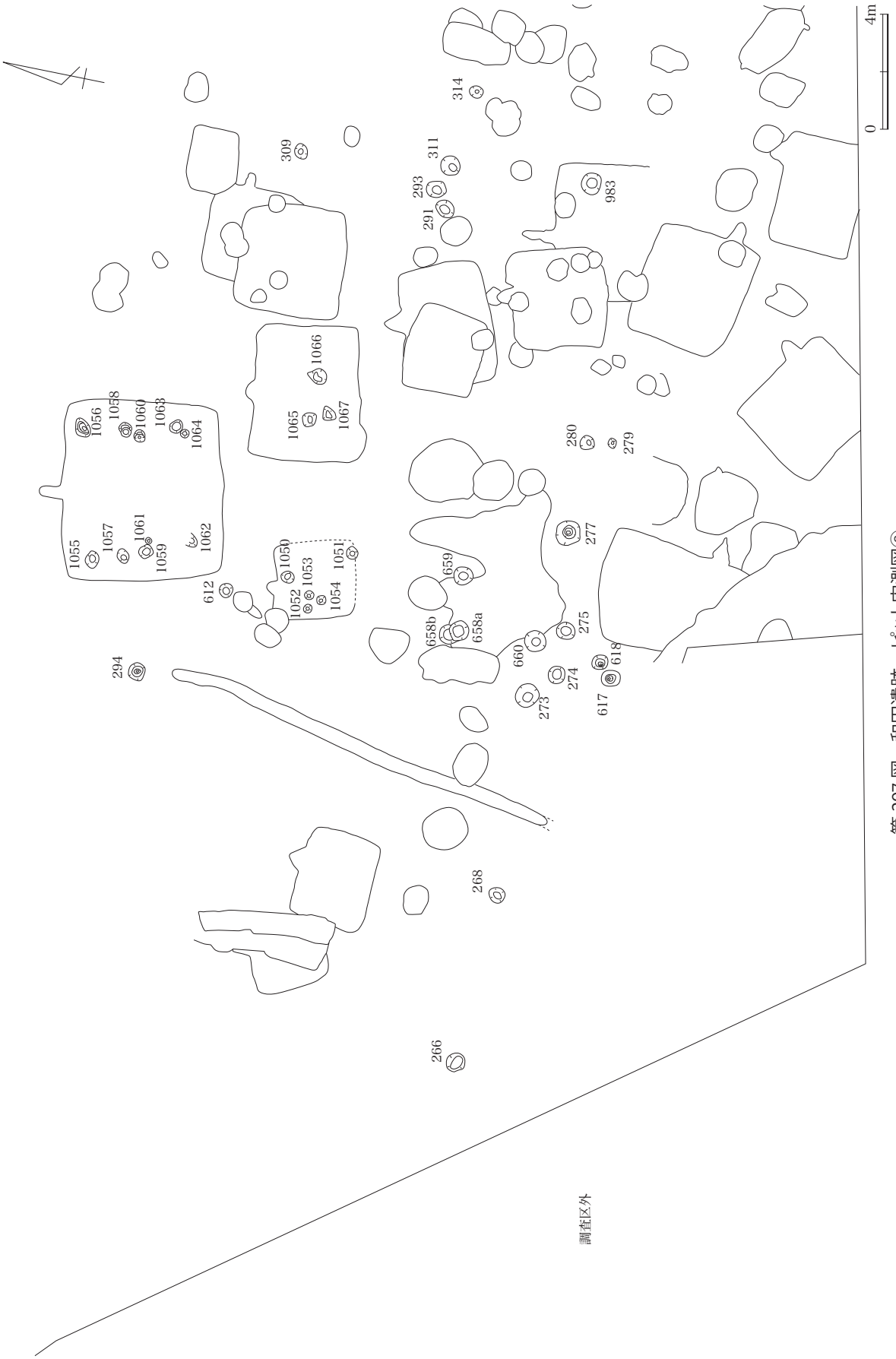
第 294 図　和田遺跡　ピット実測図⑤



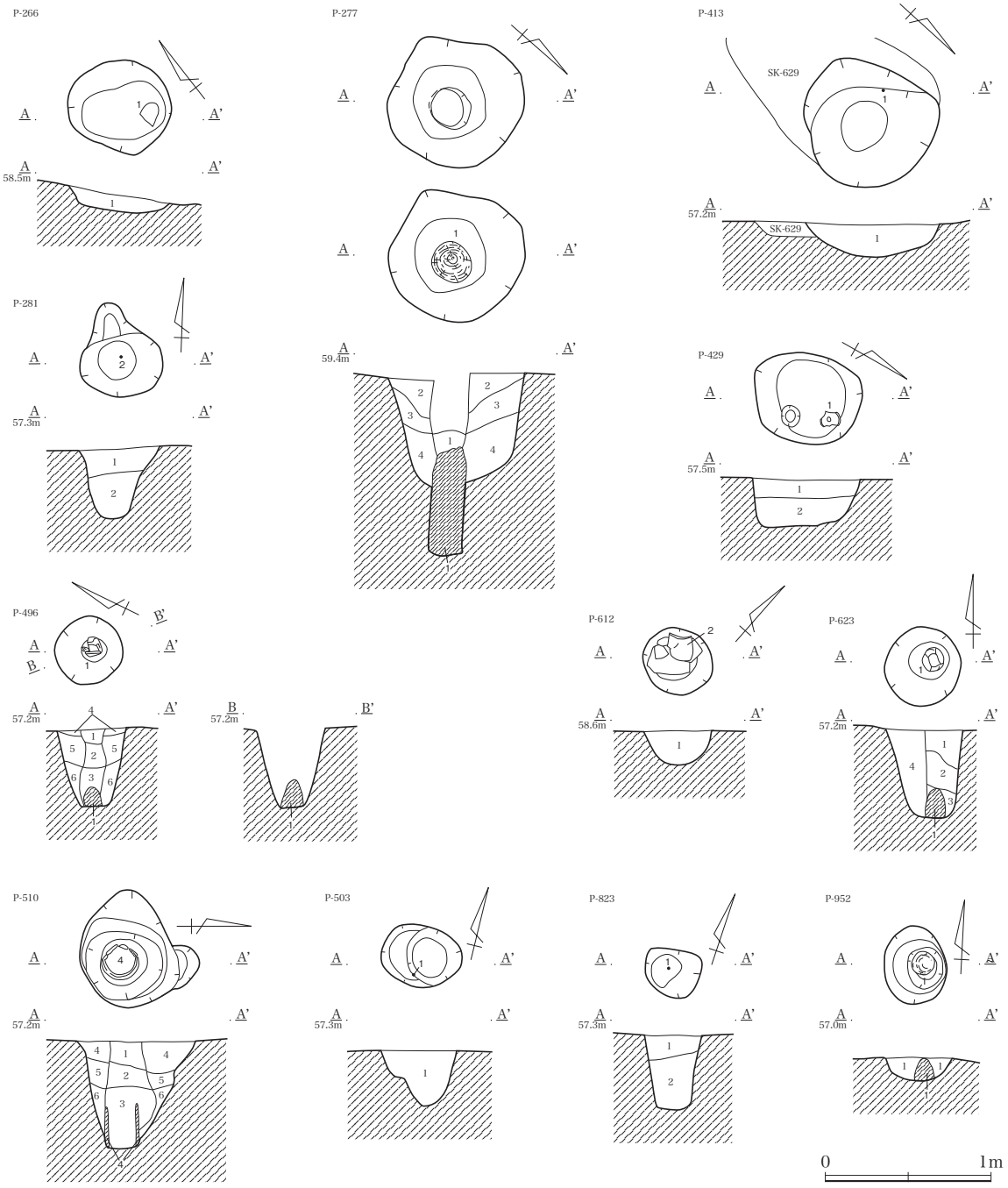
第 295 図　和田遺跡　ピット実測図⑥



第 296 図　和田遺跡　ピット実測図⑦

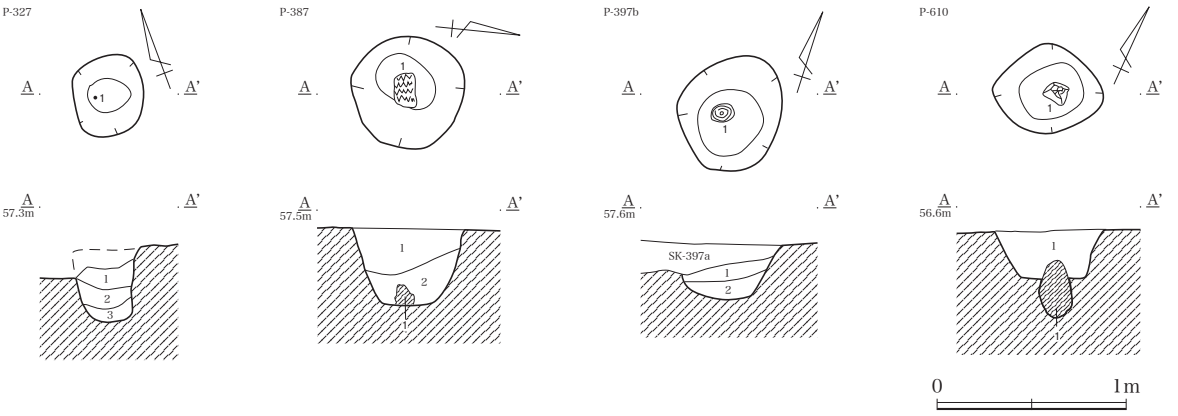


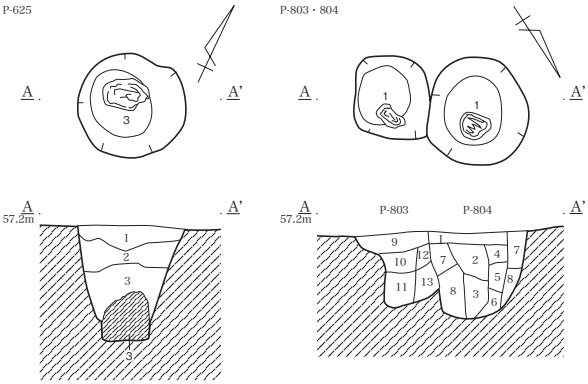
第 297 図　和田遺跡　ピット実測図⑧



P-266
1　黒褐色土　　白色土粒微量。しまりなし。
P-277
1　暗灰褐色土　灰色粘土主体。炭化物粒少量。しまりややあり。
2　暗褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
3　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
4　明褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
P-281
1　暗褐色土　　白色土粒少量、ロームブロック・小礫・赤褐色土粒微量。しまりあり。
2　黒褐色土　　赤褐色土粒微量。粘性強く砂質。しまりややあり。
P-413
1　黒褐色土　　ロームブロック・焼土粒少量、炭化物粒・小礫微量。しまりなし。
P-429
1　暗褐色土　　白色土粒少量、ローム粒・炭化物粒・小礫微量。しまりあり。
2　黒褐色土　　礫少量、炭化物粒微量。砂質。しまりあり。
P-496
1　暗褐色土　　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
2　黒褐色土　　ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりややあり。
3　暗黒褐色土　炭化物粒微量。粘質。しまりややあり。
4　暗褐色土　　炭化物粒少量、ローム粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（掘方）
5　明褐色土　　褐色土ブロック多量、炭化物粒・赤褐色土粒少量。しまりややあり。（掘方）
6　褐色土　　褐色土ブロック多量、炭化物粒微量。粘質。しまりややあり。（掘方）
P-503
1　暗褐色土　　黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック多量、小礫微量。しまりややあり。
P-510
1　暗黒褐色土　炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒少量、礫微量。砂質。しまりあり。
2　黒褐色土　　炭化物粒・赤褐色土粒少量、ローム粒微量。しまりややあり。
3　暗灰褐色土　ロームブロック・炭化物粒微量。粘質土。しまりなし。
4　褐色土　　褐色土ブロック多量、炭化物粒・白色土粒少量、ローム粒・赤褐色土粒微量。砂質。しまりあり。（掘方）
5　暗褐色土　　暗褐色土ブロック・赤褐色土粒少量、ローム粒・炭化物粒微量。しまりややあり。（掘方）
6　灰褐色土　　灰褐色粘土ブロック多量、炭化物粒微量。しまりなし。（掘方）
P-612
1　暗褐色土　　炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
P-623
1　黒褐色土　　ローム粒少量、炭化物粒・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりややあり。
2　暗褐色土　　ロームブロック・褐色土ブロック・炭化物粒微量。粘質。しまりなし。
3　灰褐色土　　灰褐色粘土主体。炭化物粒微量。
4　暗黄褐色土　ロームブロック・褐色土ブロック多量。しまりあり。（掘方）
P-823
1　黒褐色土　　炭化物粒・礫・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。砂質。しまりあり。
2　暗黒褐色土　炭化物粒・小礫微量。砂質。しまりややあり。
P-952
1　暗灰褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

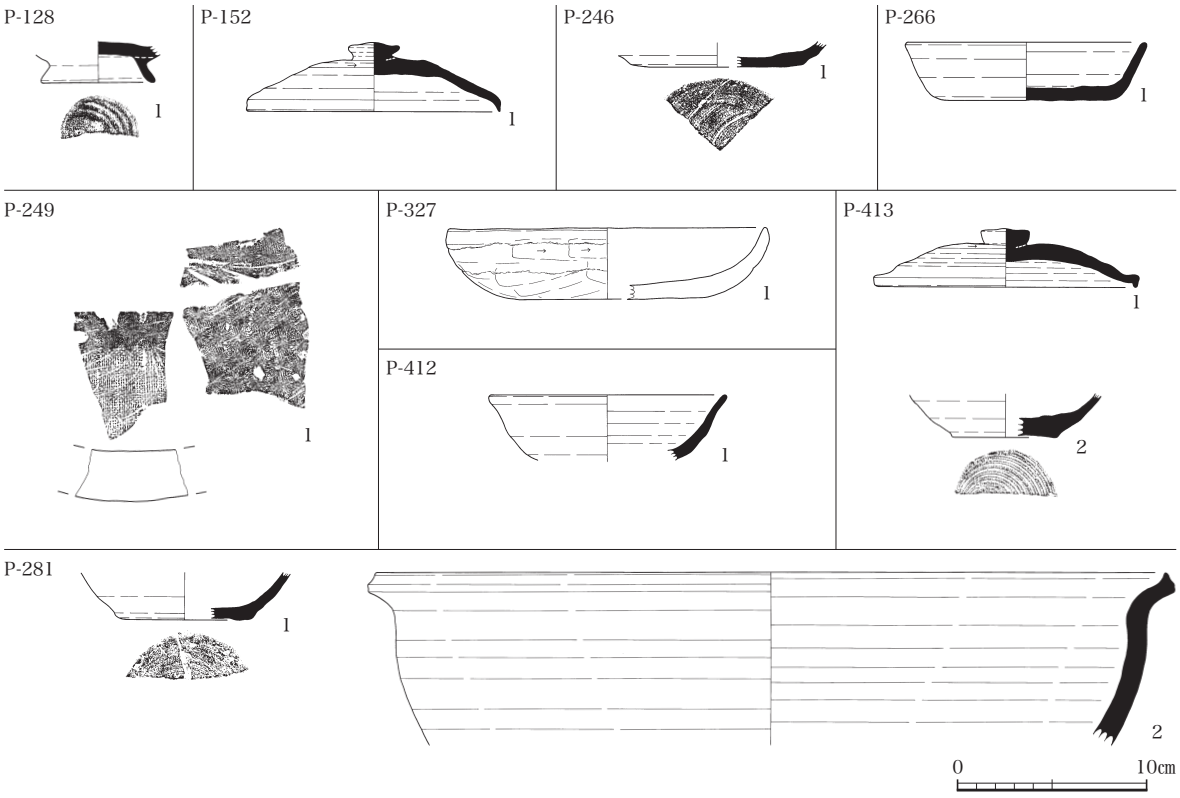
第 298 図　和田遺跡　P-266・277・281・413・429・496・503・510・612・623・823・952 実測図



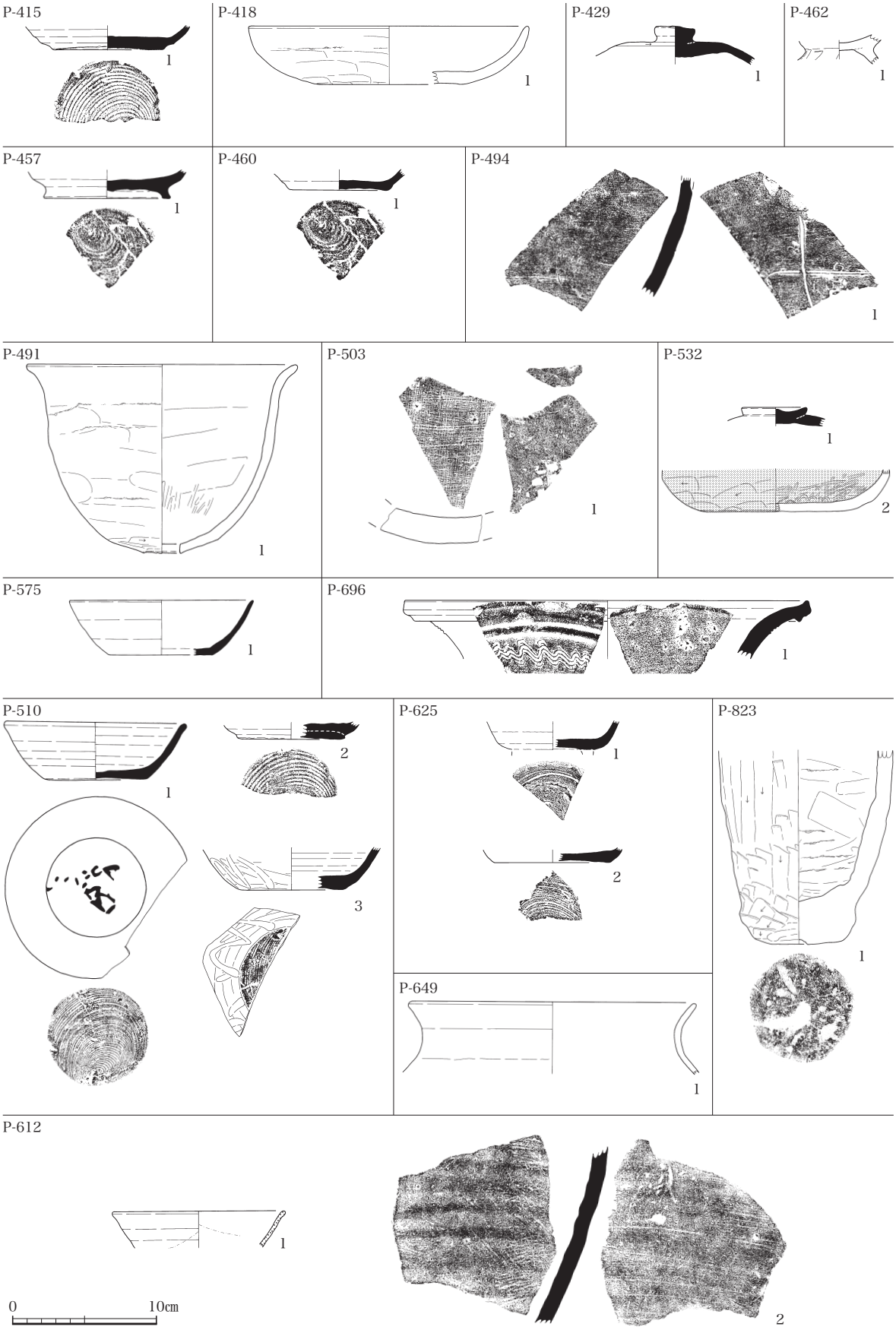


P-327
1　黄褐色土　炭化物粒・赤色土粒微量。ロームブロック多量。しまりややあり。
2　褐色土　炭化物粒・赤色土粒微量。ロームブロック少量。しまりややあり。
3　黒褐色土　小礫微量。砂質土。しまりややあり。
P-387
1　黒色土　ローム粒・焼土粒・炭化物粒微量。しまりなし。
2　暗褐色土　褐色粘質土主体。ロームブロック少量。しまりなし。
P-397b
1　暗褐色土　小礫微量、白色土粒少量。しまりややあり。
2　暗褐色土　小礫微量、白色土粒微量。しまりややあり。
P-610
1　黒褐色土　炭化物粒微量・小礫少量。砂質土。しまりあり。
P-625
1　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫少量。砂質土。しまりややあり。
2　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒・小礫少量。青灰色粘質土ブロック多量。砂質土。しまりややあり。
3　黒色土　炭化物ブロック多量、小礫・焼土粒少量。砂質。しまりややあり。
P-803・804
1　黒褐色土　白色粒微量、ロームブロック多量。しまりあり。（P-804覆土）
2　褐色土　ロームブロック少量。砂質土。しまりあり。（P-804覆土）
3　黒褐色土　ロームブロック少量、炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。（P-804覆土）
4　黒色土　炭化物粒・赤色土粒微量、ロームブロック多量。しまりややあり。（P-804覆土）
5　黒色土　炭化物粒・赤色土粒微量、ロームブロック小量。しまりややあり。（P-804覆土）
6　黒褐色土　ロームブロック多量、炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。（P-804覆土）
7　黄褐色土　ロームブロック多量、炭化物粒微量。しまりあり。（P-804覆土、掘方）
8　黒色土　ロームブロック少量、炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。（P-804覆土、掘方）
9　暗褐色土　ローム粒少量、赤色土粒・白色土粒微量。しまりあり。（P-803覆土）
10　暗褐色土　炭化物粒・赤色土粒微量。地山ブロック多量。砂質土。しまりあり。（P-803覆土、柱痕）
11　黒色土　赤色土粒微量。粘質土。しまりややあり。（P-803覆土、柱痕）
12　黒褐色土　炭化物粒・赤色粒土微量。砂質土。しまりあり。（P-803覆土、掘方）
13　黒色土　ローム粒微量。砂質土。しまりあり。（P-803覆土、掘方）

第 299 図　和田遺跡　P-327・387・397b・625・803・804 実測図



第 300 図　和田遺跡　古代ピット出土遺物実測図（１）



第 301 図　和田遺跡　古代ピット出土遺物実測図（２）

第 215 表　和田遺跡　P-128 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 高台付坏	高　残 2.1 高台　復 6.0	内面底部ロクロナデ。外面底部回転糸切り離し後高台貼り付け。	2.5Y8/1　灰白 やや緻密　灰黒粗～細粒少量 やや軟質	底 1/2、高台 1/6 SK-128

第 216 表　和田遺跡　P-152 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	口　復 13.4 高　3.6 つまみ　2.7	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ、つまみ貼り付け。つまみは高さのあるボタン状で中央部が突出する。	N7/0　灰白 やや粗い　黒・灰・白礫微量、黒・灰・白粗～細粒少量 軟質	口～体 1/4、天井～つまみ完存 SK-152

第 217 表　和田遺跡　P-246 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.3 底　復 8.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後外周を回転ケズリ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　灰黒粗～細粒微量、白細粒少量 やや硬質	体～底 1/4 SK-246

第 218 表　和田遺跡　P-249 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 7.0 幅　残 6.4 厚　2.2 重 残 153.54	凹面布目痕後広端縁ケズリ。凸面格子叩き後広端面ケズリ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　砂礫少量 硬質	破片 SK-249

第 219 表　和田遺跡　P-266 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　復 12.6 高　3.0 底　8.5	内面口縁～底部ロクロナデ。外部口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ。内外面とも表面磨滅が著しい。	N8/0　灰白 やや緻密　灰白礫～粗粒少量、灰黒・白細粒少量 やや硬質	東部底面直上 口 1/3、体～底 1/2 SK-266 No.1

第 220 表　和田遺跡　P-277 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 63.4 径　23.2 × 23.8	芯持丸木。側面を多角形状に加工。底面は平坦で砂が食い込む。底面加工痕あり。分析試料 No. 6。	クリ	底面下 40cm 沈む 柱下部

第 221 表　和田遺跡　P-281 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 2.3 底　5.5	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N5/0　灰 緻密　白粗～細粒多量 やや硬質	体 1/6、底 1/2 SK-281
2 須恵器 鉢	口　復 41.8 高　残 9.1	内面口縁部ロクロナデ。外面口縁部ロクロナデ。	N5/0　灰 緻密　黒・白微砂粒、白礫少量 硬質	中央部底面上 13 ㎝ 口～体破片 SK-281 No.1

第 222 表　和田遺跡　P-327 出土遺物観察表

1 土師器 坏	口　復 17.0 高　3.7	内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体～底部ケズリで体部紐積痕あり。底部中央に木葉痕。	5Y7/2　灰白 やや粗い　灰黒細粒多量、白細粒少量 やや軟質	中央部底面上 18 ㎝ 口～底 1/3 SK-300 No.5

第 223 表　和田遺跡　P-387 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 10.2 径　残 9.7 × 5.1	芯持丸木か？側面の加工は不明瞭。底面は平坦で、一部斜めに加工してある。底部には砂が食い込み、加工痕を明瞭に残す。分析試料 No.20。	クリ	底面より 18cm 沈む 柱下部

第 224 表　和田遺跡　P-397b 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 15.2 径　残 12.5 × 8.2	芯持丸木。芯は抜け出る。側面は多角形状に加工か？底面は平坦で、砂が食い込み、加工痕残る。分析試料 No.10。	クリ	覆土 柱下部

第 225 表　和田遺跡　P-412 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口　復 12.4 高　残 3.5	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N6/0　灰 緻密　黒・白細砂粒少量 硬質	 口～体 1/6 SK-412

第 226 表　和田遺跡　P-413 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	口　復 14.0 高　残 3.0 つまみ　2.5	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け、つまみ部は逆台形状で、中央がわずかに突出する。	5Y6/1　灰 緻密　黒・白微粒少量、黒・白粗粒微量 硬質	中央部底面直上 口～体 1/6、天井～つまみ完存 SK-413 No.1
2 須恵器 坏	高　残 2.5 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	N8/0　灰白 緻密　黒・白微粒少量、灰礫微量 やや軟質	 体 1/6、底 1/2 SK-413

第 227 表　和田遺跡　P-415 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.6 底　復 7.4	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、体部下端に糸切りの糸が食い込んだ部分あり、底部回転糸切り離し後無調整。底部やや厚い。焼成不良のため底部中央は赤褐色を呈す。	5Y7/1　灰白 緻密　黒・白灰細粒少量、灰黒・白・赤褐粗粒微量 やや硬質	 体～底 1/2 SK-415

第 228 表　和田遺跡　P-418 出土遺物観察表

1 土師器 盤	口　復 19.4 高　4.0 底　復 10.0	表面磨滅しており調整不明瞭。内面口縁～底部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデ、体部～底部丁寧なケズリ。	2.5Y7/3　浅黄 緻密　黒粗粒微量、黒・白微粒少量、黒・白細粒少量 硬質	 口～底 1/5 SK-418

第 229 表　和田遺跡　P-429 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	高　残 2.7 つまみ　2.8	内面体～天井部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ貼り付け。逆台形状で中央がわずかに突出する。やや歪む。	5Y8/1　灰白 緻密　黒粗粒微量、黒・白微粒少量、黒・白細粒少量 軟質	中央北部正立 体一部、つまみ～天井完存 SK-429 No.1

第 230 表　和田遺跡　P-457 出土遺物観察表

1 須恵器 高台付坏	高　残 2.0 高台　8.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。	2.5Y7/1　灰白 やや緻密　赤褐・灰黒礫微量、赤褐・灰黒・白細粒少量 軟質	体下端～底 1/4 SK-457

第 231 表　和田遺跡　P-460 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	高　残 1.4 底　復 6.6	酸化焔焼成。内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　砂礫少量、赤褐・白細粒微量 軟質	体～底 1/4 SK-460

第 232 表　和田遺跡　P-462 出土遺物観察表

1 土師器 台付甕	高　残 2.0 台基部　4.6	内面底部ナデ、台部ナデ。外面胴部下端ケズリ後ヨコナデ、台部ケズリ。武蔵型。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや粗い　灰黒・赤褐・白細粒多量、金雲母粗粒微量 硬質	底～台上端完存 SK-462

第 233 表　和田遺跡　P-491 出土遺物観察表

1 土師器 甑	口　復 18.8 高　13.1	内外面とも表面磨滅が著しく調整不明瞭。内面口縁ヨコナデ、体部ナデ後縦方向のミガキ。外面口縁ヨコナデ、胴部ナデ、底部ケズリ。底部に単孔あり、孔径 2.4 cm。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　灰黒礫少量、赤褐・灰黒・白粗粒多量 やや硬質	口 1/6、体 1/3、底 1/4 SK-491

第 234 表　和田遺跡　P-494 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	高　残 8.3	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデで「十」字の線刻あり。線刻は横が先で縦が後。横方向の線は細く狭いが縦はやや幅広で断面形は丸い。よって、先端は板状で薄く、かつ先端が丸味を持つ巾の狭いヘラ状の工具と推定。	7.5Y5/1　灰 緻密　白細粒多量、灰黒粗粒少量 硬質	胴破片 SK-494

第 235 表　和田遺跡　P-496 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 柱材	高　11.5 幅　6.7 厚　4.2	芯持丸木。底面は斜めに加工してあり、加工痕明瞭に残る。分離試料 No.26。	クリ	底面直上 柱下部

第 236 表　和田遺跡　P-503 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 8.9 幅　残 6.9 厚　1.9 重 残 130.32	凹面布目痕後広端縁ケズリ。凸面格子叩き。広端面ケズリ。	N7/0　灰白 緻密　白細粒少量、白礫微量、灰黒粗粒少量 硬質	南部底面上 15 ㎝ 破片 SK-503 No.1

第 237 表　和田遺跡　P-510 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　12.7 高　4.1 底　6.7	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部外面墨書あり。	N6/0　灰 緻密　黒・白微砂粒少量、白・灰礫微量 硬質	口～体 3/4、底完存 SK-510
2 須恵器 坏	高　残 1.2 底　7.4	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部が厚く、円柱造りの可能性あり。	10Y8/1　灰白 緻密　黒・白微砂粒少量、白・灰礫微量 やや軟質	底 1/2 SK-510
3 須恵器 坏	高　残 2.9 底　復 7.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。体部外面に鋸歯状に屈曲する細いナデあり、文様を意図したものか。	10Y8/1　灰白 緻密　黒灰微砂粒少量、灰黒礫微量 やや硬質	体～底 1/4 SK-510
4 木製品 柱材	高　残 20.2 径　25.8×7.5	芯持丸木か？芯は抜け出る。側面は多角形状に加工か。底面は平坦で砂が食い込む。分析試料 No. 1 。	クリ	底面直上 柱下部

第 238 表　和田遺跡　P-532 出土遺物観察表

1 須恵器 蓋	高　残 1.4 つまみ　4.6	内面天井部ロクロナデ。外面天井部つまみ貼り付け。つまみはリング状で中央がわずかに突出する。	N8/0　灰白 緻密　灰白礫～粗粒微量 やや軟質	天井一部、つまみ完存 SK-532
2 土師器 坏	高　残 3.1 底　10.0	内面体～底部ヨコナデ・ナデ後体部横方向、底部放射状主体のやや粗いミガキ。外面体部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内外面全体漆仕上げ。	10YR7/1　灰白 緻密　黒・白微砂粒少量 やや硬質	口～底 1/4 SK-532

第 239 表　和田遺跡　P-575 出土遺物観察表

1 須恵器 坏	口　12.8 高　3.8 底　7.0	表面磨滅著しい。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部糸切り離し後無調整か。	10Y8/1　灰白 緻密　灰黒細粒少量、灰黒粗粒微量 軟質	口～底破片 SK-575

第 240 表　和田遺跡　P-610 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 30.4 径　残 17.5 × 9.1	分割材か？底面がわずかに残存する。分析試料 No.16。	クリ	ピット底面より 20cm 沈む 柱下部 P -1

第 241 表　和田遺跡　P-612 出土遺物観察表

1 灰釉陶器 高台付椀	口　復 12.0 高　残 2.5	内面口縁～体部ロクロナデ、灰釉施釉。外面口縁～体部ロクロナデ、灰釉施釉。施釉はハケヌリ。光ヶ丘 1 号窯式新段階。東濃産。	5Y7/1　灰白 緻密　白細粒少量 硬質	口～体 1/6 SK-612
2 須恵器 壺	高　残 12.7	内面胴部ロクロナデ。外面胴部ロクロナデ。	5Y8/1　灰白 やや緻密　灰黒細粒多量、砂礫微量 やや硬質	中央部底面上 11 ㎝ 胴破片 SK-612 No.1

第 242 表　和田遺跡　P-623 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 16.8 径　15.2 × 14.6	芯持丸木。側面は多角形状に加工。底面はやや斜めに加工されている。分析試料 No.13。	クリ	底面直上 柱下部

第 243 表　和田遺跡　P-625 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 高台付坏	高　残 2.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼り付け。高台基部径 5.7 ㎝。	N5/0　灰 緻密　白礫微量、白・灰黒粗粒少量 硬質	覆土 体下端～底 1/4 SK-625
2 須恵器 坏	高　残 1.0 底　復 8.0	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	2.5Y7/1　灰白 緻密　灰黒粗粒微量、白・灰黒細粒少量 やや軟質	覆土 体下端～底 1/4 SK-625
3 木製品 柱材	高　残 25.9 径　25.0 × 23.3	芯持丸木。側面を多角形状に加工。底面は平坦で砂が食い込み加工痕残る。分析試料 No. 2。	クリ	底面より 10cm 沈む 柱下部

第 244 表　和田遺跡　P-649 出土遺物観察表

1 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 5.0	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデ、胴部上端ケズリ。武蔵型。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白粗～細粒多量、透明粗粒微量、金雲母細粒微量 硬質	口 1/4 SK-649

第 245 表　和田遺跡　P-696 出土遺物観察表

1 須恵器 甕	口　復 28.4 高　残 4.0	内面口縁ロクロナデ、自然釉及び溶けた窯体が付着。外面口縁ロクロナデ、4 条一組の櫛描波状文施文。	N4/0　灰 緻密　灰黒粗～細粒少量 硬質	口破片 SK-696

第 246 表　和田遺跡　P-803 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 9.1 径　15.2 × 9.3	分割材か？芯はあり、断面楕円形。底面は平坦で砂が食い込んでおり、加工痕残る。分析試料 No. 9。	クリ	底面直上 柱下部

第 247 表　和田遺跡　P-804 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 2.1 径　残 5.3 × 4.6	柱の底面とみられ、砂が食い込んでおり、加工痕残る。柱材を分割再利用した礎板の可能性もある。分析試料 No.22。	クリ	底面直上 柱下部

第 248 表　和田遺跡　P-823 出土遺物観察表

1 土製品 筒形	高　残 13.5 底　6.4	内面体～底部粗いナデで紐積痕を明瞭に残し、ヘラ状工具痕も目立つ。外面体部タテ方向のケズリで体部下端に棒状の圧痕あり。底部木葉痕で棒状の圧痕あり。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤褐・白・灰黒砂礫少量、砂粗～細粒少量 やや硬質	中央部底面直上 体下位～底完存 SK-823 No.1

第 249 表　和田遺跡　P-918 出土遺物観察表

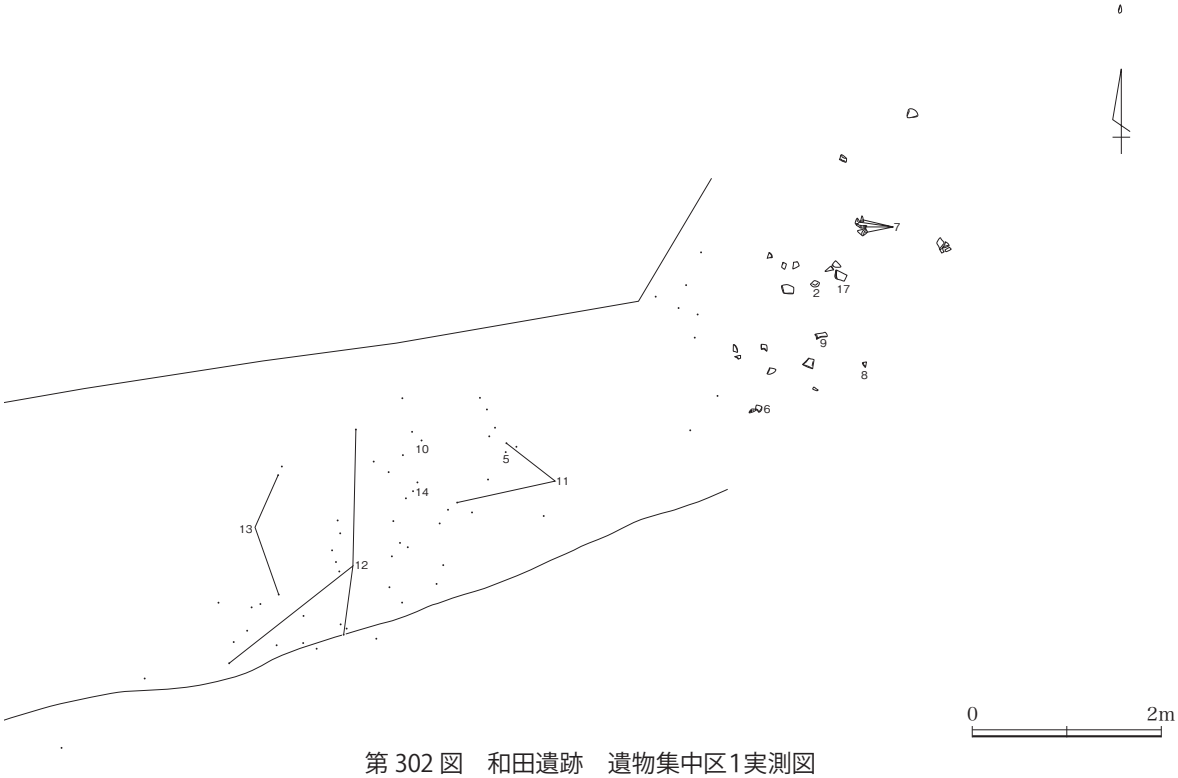
1 木製品 不明	高　11.2 幅　4.7 厚　1.8	完形。柾目。加工痕は確認できない。礎板などの可能性もあろうか。分析試料 No.25。	クリ	底面上 18cm、横位 柱下部 No.1

第 250 表　和田遺跡　P-952 出土遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 11.6 径　残 14.3× 8.3	芯持材。底面は平坦で加工痕あわずかに残る。分析試料 No. 8。	クリ	底面直上 柱下部

９.その他の遺構・遺物

遺物集中区１（第 302・303 図、第 251 表、図版四一・六〇）

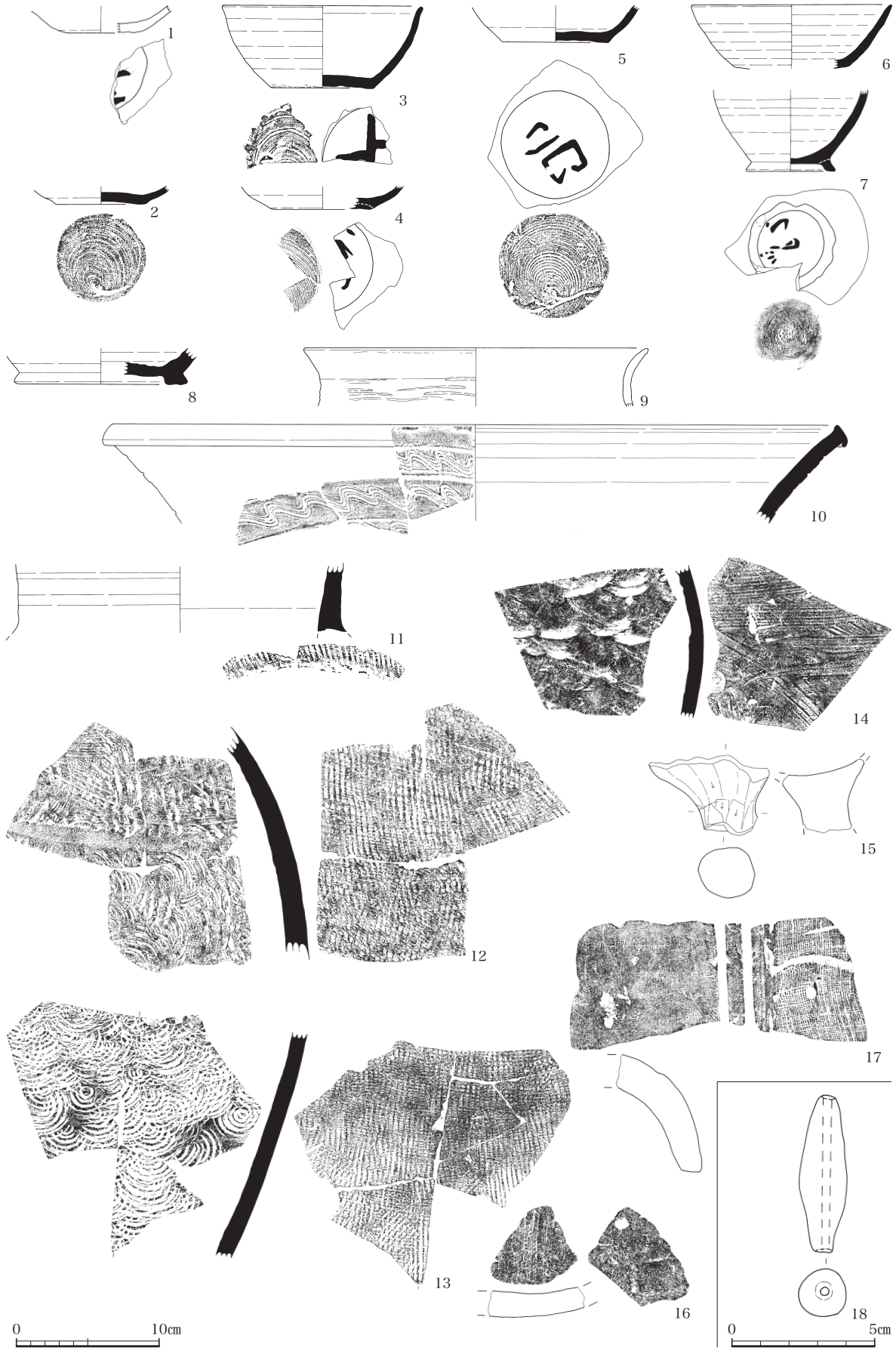


第 302 図　和田遺跡　遺物集中区1実測図

Ⅵ区調査区の P-19・20 グリッドで、SK-297・298 の北西に相当する位置にある。遺物は須恵器甕が主体であり、土師器は少ない。図化した遺物は土師器３点（坏１点、甕１点、三足土器１点）、須恵器 12 点（坏５点、瓶類２点、甕５点）、平瓦１点、丸瓦１点、土錘１点である。墨書土器は多いが遺存状態が悪く、明瞭に判読できるものは少ない。図化しなかった遺物は、土師器坏片 32 点（370 ｇ）、甕片 161 点（1,570g）、須恵器坏片 24 点（230 ｇ）、甕 12 と同一個体とみられる甕片 57 点（3,310 ｇ）、甕 13 と同一個体と見られる甕片 48 点（3,330 ｇ）、その他の甕片 30 点（980 ｇ）、灰釉陶器片１点（1 ｇ）、埴輪片１点（20 ｇ）である。様々な時期の遺物が混入しているが、９世紀中葉頃の遺物が主体となっている。

遺物集中区２（第 304・305 図、第 252 表、図版四一・六〇）

Ⅵ区調査区の 0-23 グリッドで、SI-194 の北西に相当する位置にある。0-23 グリッド周辺は南から北へとゆるやかに下る斜面であり、斜面上に遺物が集中する。遺物は須恵器甕片主体で土師器は少ないが、手捏ね土器は多数出土する。土師器坏は胎土白色の半球状、土師器甕は武蔵型が多い。図示した遺物は土師器 36 点（鉢１点、甕１点、手捏ね土器 34 点）、須恵器６点（蓋１点、坏１点、高台付坏１点、甕３点）、平瓦１点、円筒埴輪片１点である。手捏ね土器はやや大きさの違いはあるがおおむね類似する形状で、底部片でみると図化以外に 17 個体確認できる。須恵器甕には隣接する SI-194 出土のものと同一個体とみられるものがある。SI-194 は本集中区と近い時期と考えられるため、関連する遺構の可能性があろう。図化しなかった遺物は、土師器坏片７点 220 ｇ、甕片 35 点（410 ｇ）、手捏ね土器片 19 点（260 ｇ）、須恵器蓋片１点（10 ｇ）、坏片５点（50 ｇ）、甕片 61 点（1,580 ｇ）である。出土遺物の年代はおよそ８世紀後葉と考えられる。



第 303 図　和田遺跡　遺物集中区1出土遺物実測図

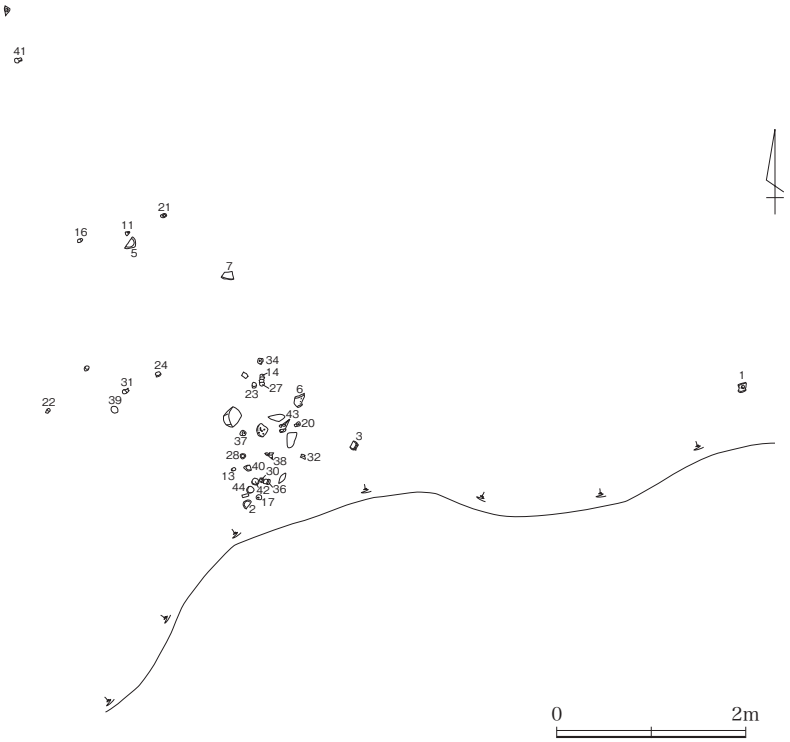
第 251 表　和田遺跡　遺物集中区 1 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高　残 1.8 底　復 6.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ナデ。底部墨書あり。	7.5YR4/4　褐 やや粗い　灰白粗～細粒少量 やや硬質	遺物集中区内 体～底 1/4 P-20 遺物集中区
2 須恵器 坏	高　残 1.3 底　6.2	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや緻密　灰黒粗～細粒少量、白粗粒微量 軟質	遺物集中区東部 標高 58.0m 底完存 P-20 周辺　遺物集中区 No.12
3 須恵器 坏	口　復 14.0 高　5.7 底　復 7.0	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部に墨書あり。	2.5Y7/1　灰白 緻密　灰白細粒少量、黒粗粒微量、灰白礫微量 やや軟質	遺物集中区内 口～底 1/4 P-20 遺物集中区
4 須恵器 坏	高　残 1.6 底　復 7.0	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部は二重になっている。円柱造り。底部墨書あり。	N7/0　灰白 緻密　黒・白細粒微量 やや軟質	遺物集中区内 体～底 1/4 P-19・P-19 遺物集中区
5 須恵器 坏	高　残 2.6 底　7.5	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部墨書あり。２文字か。	5Y8/1　灰白・N5/0　灰 やや緻密　灰礫微量、白・灰粗～細粒少量 軟質	遺物集中区南西部 標高 58.1m 体 1/4、底完存 P-20 遺物集中区 No.51
6 須恵器 坏	口　14.0 高　残 4.4 底　復 7.8	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	7.5Y6/1　灰 緻密　白・灰黒細～粗粒少量、灰黒礫微量 やや硬質	遺物集中区東部 標高 58.0m 口～体 1/6 P-20 周辺　遺物集中区 No.2
7 須恵器 瓶類	高　残 5.7 高台　6.2	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼り付け。底部墨書あり。	N5/0　灰 緻密　白礫微量、白粗粒微量、黒・白細粒微量 硬質	遺物集中区東部標高 57.9m 体部下半 1/4、底～高台ほぼ完存 P-20 周辺　遺物集中区 No.19・20・21・29
8 須恵器 瓶類	高　残 2.5 高台　復 12.0	内面体～底部ロクロナデ。外面底部回転ナデ、高台貼り付け。	N6/0　灰 緻密　白粗粒微量、黒・白細粒微量 硬質	遺物集中区東部 標高 58.0m 体～高台 1/6 P-20 周辺　遺物集中区 No.9
9 土師器 甕	口　復 24.0 高　残 4.0	内面口縁ヨコナデ。外面口縁ヨコナデで頸部ヘラ状工具の当たりが顕著。武蔵型。	7.5YR5/4　にぶい褐 粗い　白・黒微粒多量、白・黒細粒多量 硬質	遺物集中区東部 標高 58.0m 口 1/6 P-20 周辺　遺物集中区 No.10
10 須恵器 甕	口　復 52.2 高　残 6.9	内面口縁ロクロナデ。外面口縁ロクロナデで３本の沈線と４条一単位の櫛描波状文３段施文。	N4/0　灰 緻密　白微粒多量、白礫少量 硬質	遺物集中区西部 標高 58.0m 口辺破片 P-20 遺物集中区 No.40・P-19
11 須恵器 甕	高　残 4.8 頸　復 22.6	内面頸部ロクロナデ。外面頸部ロクロナデで沈線１条あり。下端は胴部接合面で剥離しており、下面に胴部上端に施された平行叩きが確認できる。	N6/0　灰 緻密　黒・白微粒少量、白礫微量 硬質	遺物集中区西部 標高 58.0m と 58.1m が接合 頸 1/6 P-20 遺物集中区 No.43・50
12 須恵器 甕	高　残 16.5	内面同心円当具痕後ナデ。外面擬格子叩きで一部木葉痕あり。	外 2.5GY6/1　オリーブ灰 内 N4/0　灰 緻密　黒・白微砂粒、白粗砂粒多量 硬質	遺物集中区西部 標高 58.0 ～ 58.2m が接合 胴破片 遺物集中区 No.3・14・36
13 須恵器 甕	高　残 16.2	内面同心円当具痕。外面擬格子叩き。	N6/0　灰 緻密　白粗～細粒少量 硬質	遺物集中区西部 標高 58.0m と 58.1m が接合 胴破片 P-20 周辺　遺物集中区 No.11・55

14 須恵器 甕	高　残 10.7	内面無文当具痕。外面平行叩き後カキ目。	7.5Y6/1　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	遺物集中区西部 標高 58.1m 胴破片 P-20 遺物集中区 No.34
15 土師器 三足土器	幅　残 5.4 脚　3.4×4.0	三足土器の脚部。内面底部ナデ。外面脚部ケズリ。脚部は断面楕円形の棒状。	5YR6/6　橙 やや粗い　金雲母細粒微量、黒・赤褐・白粗～細粒少量 やや硬質	底～脚破片 P-19
16 瓦 平瓦	長　残 7.0 幅　残 6.8 厚　1.8 重　残 97.1	凹面布目痕。凸面ケズリ。	10YR2/1　黒 緻密　灰白粗粒微量 やや硬質	破片 P-19
17 瓦 丸瓦	長　残 9.2 幅　残 6.8 厚　2.3 重 残 303.5	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　灰黒細粒少量、赤褐・灰白・灰黒粗粒微量 硬質	遺物集中区東部 標高 58.0m 破片 P-19 周ヘン　No.13
18 土製品 土錘	長　5.5 幅　1.7 重　15.7 孔　0.3	平面紡錘形。断面円形。表面ナデ。	10YR4/6　褐 やや緻密　白・赤褐・灰黒細粒少量 やや軟質	完形 P-19

遺構外出土遺物（第 306 ～ 309 図、第 253 表、図版四一・五九・六〇～六四・巻頭図版一～三）

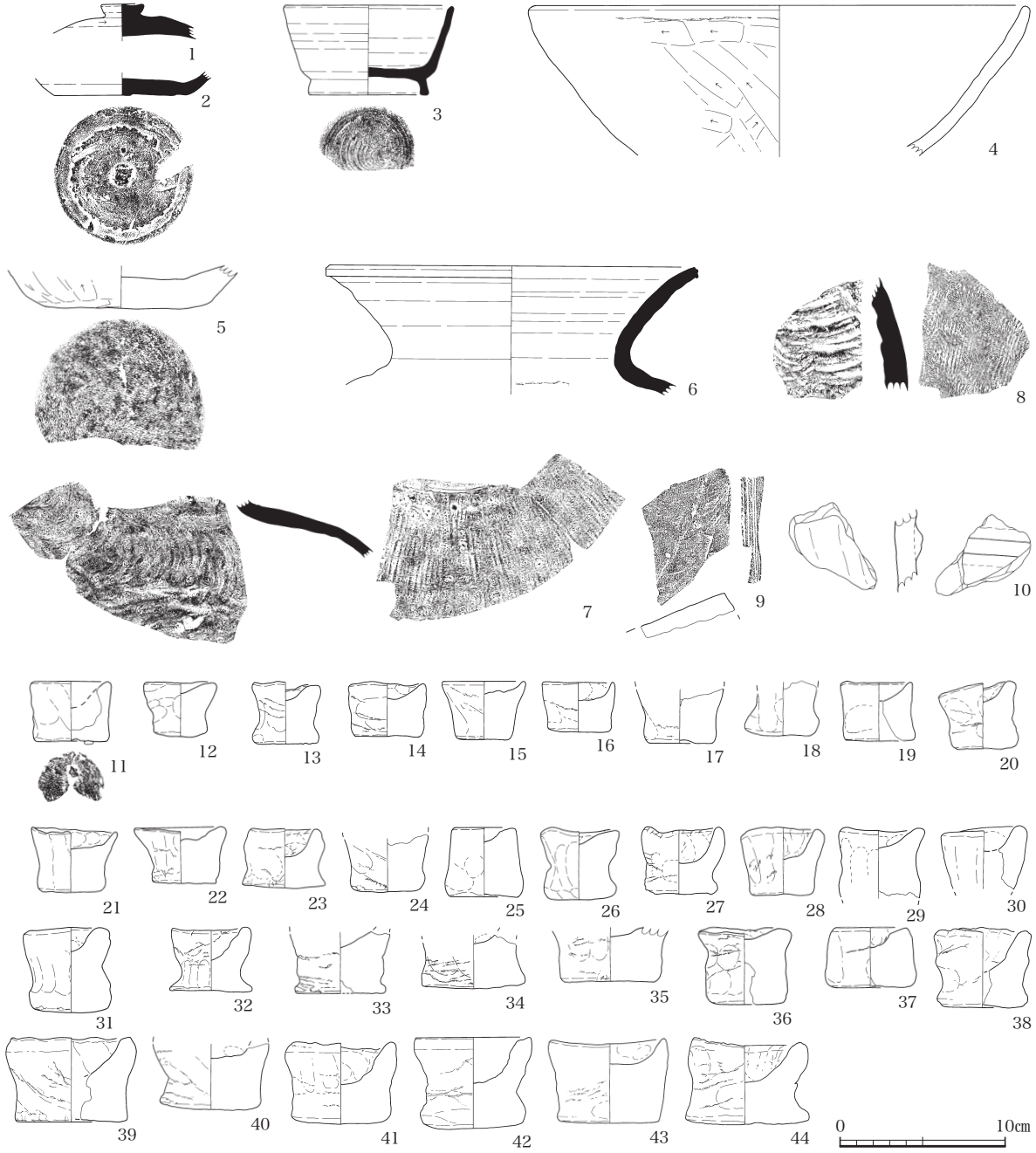
古代の遺物は遺構外からも多数出土しており、遺構が集中するⅡ区・Ⅵ区・Ⅶ区からの出土が多い。図化した遺物は、土師器７点（皿３点、坏２点、羽釜１点、三足土器１点）、須恵器 15 点（蓋２点、坏４点、台付長頸瓶１点、甕８点）、灰釉陶器高台付椀２点、土錘１点、円筒埴輪１点、瓦 28 点（平瓦 20 点、丸瓦８点）、砥石１点、青銅鏡１点である。



第 304 図　和田遺跡　遺物集中区２実測図

須恵器蓋１・２は７世紀前半、坏３は７世紀中葉であろう。皿４～７は 10 世紀中葉頃とみられ、調査区内南東部のⅡ区から出土する。周辺では 10 世紀代の竪穴住居跡などがあるため、いずれかの遺構出土土器であった可能性もある。９世紀代とみられる墨書土器８～ 10 は、調査区内北東部に集中する。灰釉陶器２点は光ヶ丘１号窯式併行と考えられる。調査区内各所から出土する須恵器瓶・甕は時期が判断できないものも多いが、ほぼ９世紀代を中心とするものとみられる。甕 18 は胴部上半に把手が付けられるものだろう。甕 19 は大きく歪んでおり、近隣で生産したものが搬入された可能性が考えられる。羽釜 22 は 10 世紀、三足土器 23 は９世紀の遺物とみられる。埴輪は少なく、図化した 24 の他 SI-207 と遺物集中区２で円筒埴輪片が出土しているため、遺跡全体では計３点となる。瓦は 28 点あり、小破片を除きほぼ全点を図化している。平瓦が多く、軒瓦は出土しない。桶巻作りは２点あり（32・37）、このうち 32 は凸面に縄叩きを持つ。砥石 54 は安山岩質溶岩製で、角柱状の大形な砥石が 1/2 ほどに欠損したものを再利用したものと考えられる。側面４面に研磨痕がある。青銅製の和鏡 55 は調査区内北東部に当

たるP-17グリッドから、鏡背面を上にして出土した。瑞花双鳳八稜鏡である。鋳上がりは良いが、水が豊富な環境であったため表面は緑青に厚く覆われているほか、土壌中の鉄分が部分的に錆着していて除去できない状態になっている。外形は八稜形で径は10.5cm、厚さは縁部で６mm、内区の最も薄い部分で１mmである。鏡面は平坦で、反りはない。鏡背内区は、鳳凰と扇状の瑞花各２点がすべて外向きに点対称に配置される。中央鈕は花文座円鈕で鈕孔は円形、孔径は約1.5mmで、孔内には錆化した土壌が詰まった状態である。鈕孔付近はやや摩滅しているように見える。外区は内区より一段高くなっており、界圏は三角形にわずかに突出する稜を持つ段となる。平面形は八稜形とはならず、内向きの稜が４ヶ所ある円形であり、四花圏とも表現できよう。４つの稜は､外縁の八稜のうち内向きの稜と位置をあわせている。外区は草花文と思われるが、文様は省略化され列点状になっている。時期は平安時代後期と考えられる。なお、付近のQ-15・R-15グリッドで確認面より上の土層から採集された火山灰を分析した結果､天仁元年（1108年）降灰の浅間Ｂ軽石（As-B）



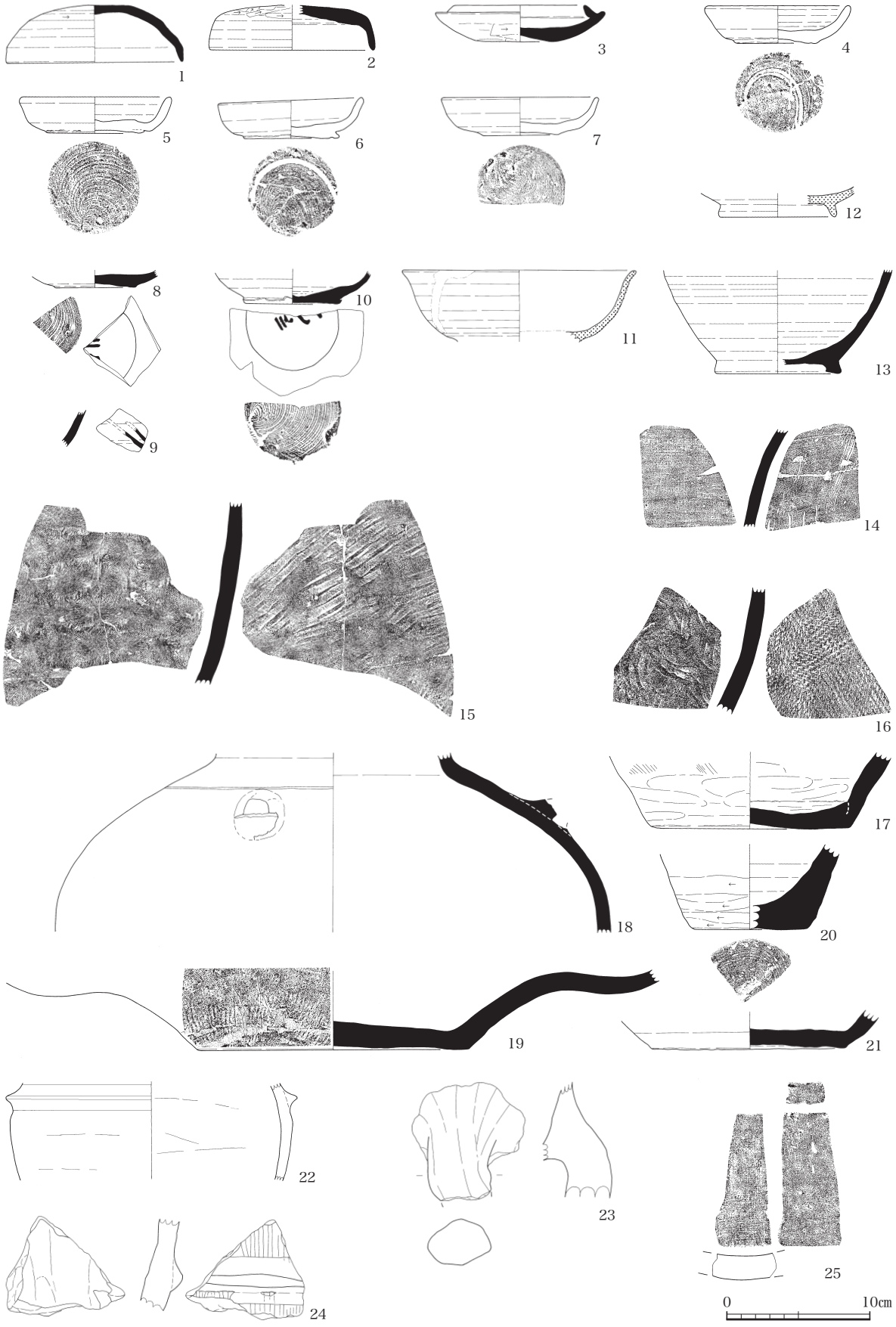
第305図　和田遺跡　遺物集中区２出土遺物実測図

第 252 表　和田遺跡　遺物集中区２出土遺物観察表

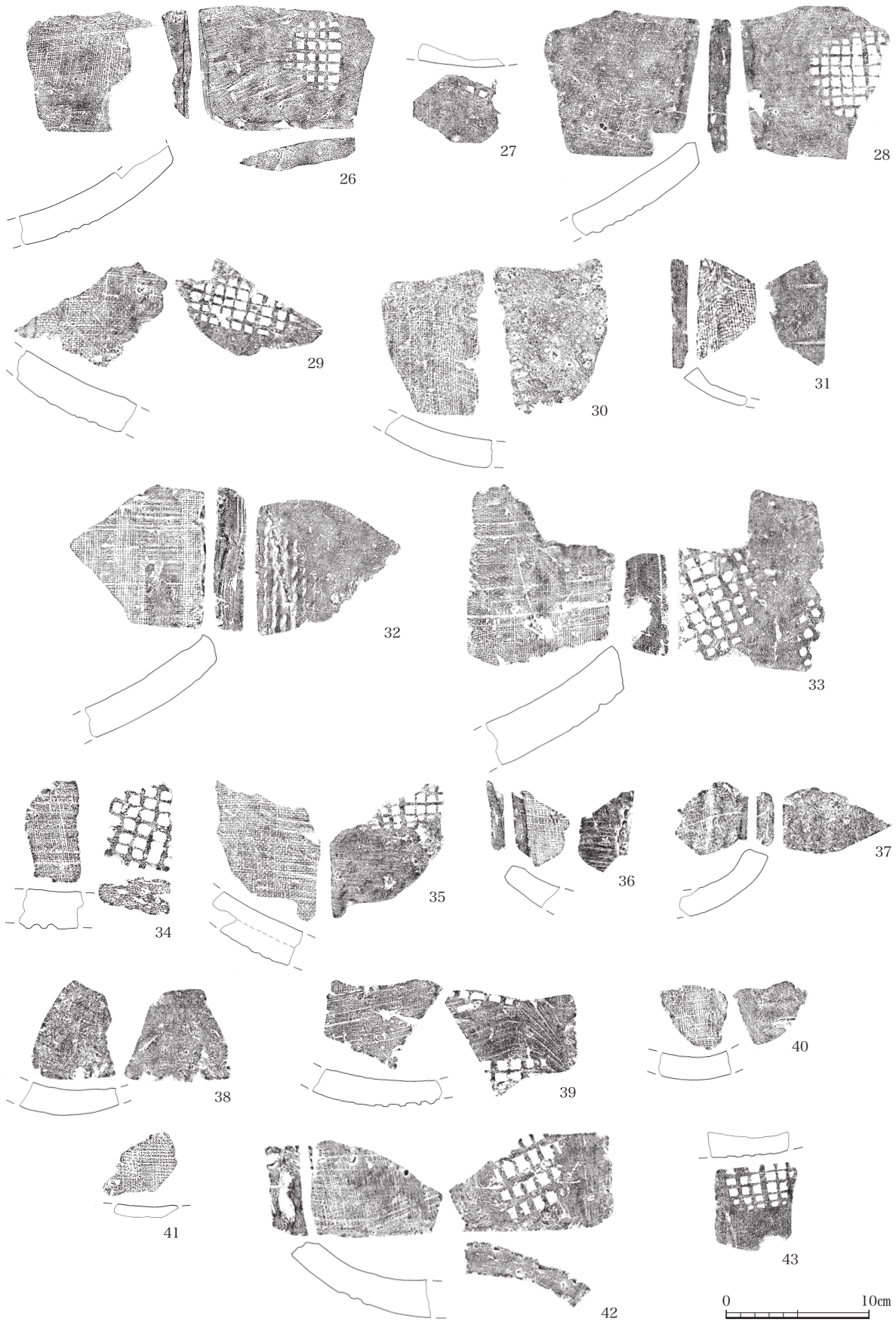
番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	高　残 2.1 つまみ 復 2.6	内面天井部ロクロナデ。外面天井部回転ケズリ、つまみ貼り付け。つまみは逆台形状で、中央がわずかに突出する。	N8/0　灰白 やや緻密　黒・灰微粒・灰粗粒少量 やや硬質	遺物集中区南東部 標高 58.7 m 天井～つまみほぼ完存 O-23 遺物集中区 No.1
2 須恵器 坏	高　残 1.4 底　8.0	内面底部ロクロナデ。外面体部下端ロクロナデ、底部回転ヘラ切り離し後無調整。	N8/0　灰白 やや緻密　白・黒微粒、白・黒粗粒少量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 体下端～底ほぼ完存 O-23 遺物集中区 No.3
3 須恵器 高台付坏	口　復 10.3 高　5.4 高台　復 7.2	内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後高台貼り付け。	N6/0　灰 緻密　白・黒微粒、白・黒礫微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口～高台 1/3 O-23 遺物集中区 No.2
4 土師器 鉢	口　復 30.4 高　残 9.1	内面口縁～体部ヨコナデ・ナデ。外面口縁ヨコナデで紐積痕あり。体部ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　黒・赤微粒、黒・赤粗粒少量 やや硬質	遺物集中区内 口～体一部 O-23 遺物集中区
5 土師器 甕	高　残 2.6 底　10.0	内面底部ナデ。外面胴部下端縦方向のケズリ、底部ケズリ。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　細砂粒少量、白細粒微量、赤褐細粒微量 やや硬質	遺物集中区中央部 標高 58.9 m 底 3/4 O-23 遺物集中区 No.7
6 須恵器 甕	口　復 22.6 高　残 7.7	内面口縁ロクロナデ、胴部上端ナデ。口縁部自然釉わずかに付着。外面口縁ロクロナデ、胴部上端ナデ。胴部上端自然釉わずかに付着。	N4/0　灰 緻密　白粗粒微量、白細粒少量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.7 m 口 1/4 O-23 遺物集中区 No.4
7 須恵器 甕	高　残 3.9	内面上半同心円当具痕。外面平行叩きで上端に沈線 1 条あり。	5PB6/1・5/1　青灰 緻密　白粗粒微量、白・黒細粒少量 硬質	遺物集中区中央部 胴上端破片 O-23 遺物集中区 No.5
8 須恵器 甕	高　残 6.9	内面円形当具痕。外面擬格子叩き。断面赤褐色。	5B5/1　青灰 緻密　白礫微量、白細粒少量 硬質	遺物集中区内 胴上半破片 O-23 遺物集中区
9 瓦 平瓦	長　残 8.4 幅　残 5.5 厚　残 1.2 重　残 66.3	凹面ナデ。凸面剝離のため不明。接合面で剝離する。側面ケズリ。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　灰礫微量、灰・黒粗粒微量 硬質	遺物集中区内 破片 O-23 遺物集中区
10 埴輪 円筒	長　5.1 幅　5.6 厚　1.7	内面体部ナデ。外面体部凸帯貼り付け、凸帯上下をナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤礫微量、灰粗粒少量、白・灰細粒多量 やや硬質	遺物集中区内 凸帯破片 ハニワ
11 土師器 手捏ね	口　4.5 高　3.1 底　4.5 重　30.9	鉢形。手捏ね成形。内面口縁部ナデ。外面ナデ、底部粘土塊付着。底部に浅い線が縞状にある。布の圧痕か。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤褐粗～細粒少量 硬質	遺物集中区南部 標高 59.0 m 口～底 1/2 No.16
12 土師器 手捏ね	口　4.3 高　3.3 底　3.1 重　50.0	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで指頭圧痕あり。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　灰礫微量、白細粒微量 硬質	遺物集中区中央部 標高 58.9 m ほぼ完形 O-23 遺物集中区 No.35
13 土師器 手捏ね	口　4.1 高　3.7 底　4.0 重　63.3	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで口縁～体部斜方向に粘土のシワと指頭圧痕あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒微粒微量、砂粗粒微量 硬質	遺物集中区内 完形 O-23 遺物集中区
14 土師器 手捏ね	口　4.6 高　3.3 底　4.0 重　48.3	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデで体部に斜方向に粘土のシワあり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒・白礫微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口～体 1/2、底完存 O-23 遺物集中区 No.27
15 土師器 手捏ね	口　復 5.0 高　3.5 底　3.0 重　残 26.4	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白礫微量、赤褐粗～細粒微量 硬質	遺物集中区内 口～底 1/2 O-23 遺物集中区

16 土師器 手捏ね	口　残 4.2 高　2.9 底　3.7 重　46.3	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデで体部斜方向の粘土のシワあり。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤・白細粒少量 硬質	遺物集中区中央部 標高 59.0 m ほぼ完形 O-23 遺物集中区 No.34
17 土師器 手捏ね	高　残 3.2 底　4.0 重　残 58.0	鉢形。手捏ね成形。外面体～底部ナデ。底部内側中央に縦方向の粘土のシワがあり、このために外面底部中央にくぼみが生じている。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒微量、赤褐粗～細粒微量、砂礫微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 体～底完存 O-23 遺物集中区 No.9
18 土師器 手捏ね	高　残 3.3 底　4.5 重　残 55.6	鉢形。手捏ね成形。外面体～底部ナデで指頭圧痕あり。形がかなりいびつ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白･灰粗粒、白･灰・赤礫少量 やや硬質	遺物集中区内 体～底完存 O-23 遺物集中区
19 土師器 手捏ね	口　4.4 高　3.6 底　4.2 重　残 47.6	鉢形。手捏ね。内面ナデ。外面ナデで体部指頭圧痕あり。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白礫微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	遺物集中区内 口～底 1/2 O-23 遺物集中区
20 土師器 手捏ね	口　4.7 高　3.9 底　3.8 重　81.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデ、体部に斜方向の粘土のシワと指頭圧痕あり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤微粒、灰粗粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m ほぼ完形 O-23 遺物集中区 No.21
21 土師器 手捏ね	口　5.2 高　4.9 底　4.0 重　残 74.0	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　黒・白礫微量、赤褐細粒微量 硬質	遺物集中区中央部 標高 58.8 m 口 1/2、体～底完存 No.36
22 土師器 手捏ね	口　復 5.6 高　残 3.4 底　3.8 重　残 63.0	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部横方向に粘土のシワと指頭圧痕あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白･黒細粒少量、赤褐粗～細粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口 1/3、体～底完存 O-23 遺物集中区 No.32
23 土師器 手捏ね	口　復 4.0 高　3.6 底　5.0 重　残 72.3	鉢形。手捏ね成形。表面に粘土のシワが顕著。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白礫微量、黒・白細粒微量、赤褐粗～細粒少量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口 1/2、体～底完存 O-23 遺物集中区 No.25 遺物集中区
24 土師器 手捏ね	高　残 3.4 底　4.2 重　残 73.0	鉢形。手捏ね成形。外面体～底部ナデで体部に斜方向の粘土のシワあり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒･赤微粒微量、白粗粒微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 体～底完存 O-23 遺物集中区 No.29 遺物集中区
25 土師器 手捏ね	口　復 3.8 高　4.1 底　4.0 重　残 64.6	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部指頭圧痕あり。	7.5YR6/6　橙 粗い　白礫～粗粒少量、赤褐礫～粗粒微量、砂礫～粗粒少量 やや硬質	遺物集中区内 口 1/4、体 1/2、底完存 O-23 遺物集中区
26 土師器 手捏ね	口　4.8 高　4.4 底　4.3 重　83.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデでナデ部分が深く窪む。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・灰礫微量、赤褐礫～粗粒微量 やや硬質	遺物集中区内 ほぼ完形 O-23 遺物集中区
27 土師器 手捏ね	口　復 5.0 高　4.0 底　4.4 重　残 67.3	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデで体部横方向の粘土のシワあり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐粗～細粒微量、粗～細砂粒微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口～体 1/2、底完存 O-23 遺物集中区 NO.26
28 土師器 手捏ね	口　5.0 高　4.1 底　3.6 重　71.9	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで粘土のシワあり。外面ナデで粘土のシワあり。	5YR6/6　橙 緻密　白細粒微量、赤褐粗～細粒微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口～底 2/3 O-23 遺物集中区 NO.17
29 土師器 手捏ね	口　5.2 高　残 4.3 重　残 70.3	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面口縁～体部ナデで横方向の粘土のシワと指頭圧痕あり。	7.5YR5/6　明褐 緻密　黒・赤微粒、白礫微量 やや硬質	遺物集中区内 口～体 3/4 O-23 遺物集中区
30 土師器 手捏ね	口　5.1 高　残 3.8 重　残 62.7	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面口縁～体部ナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤褐細粒少量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口完存、体 1/3 O-23 遺物集中区 No.13

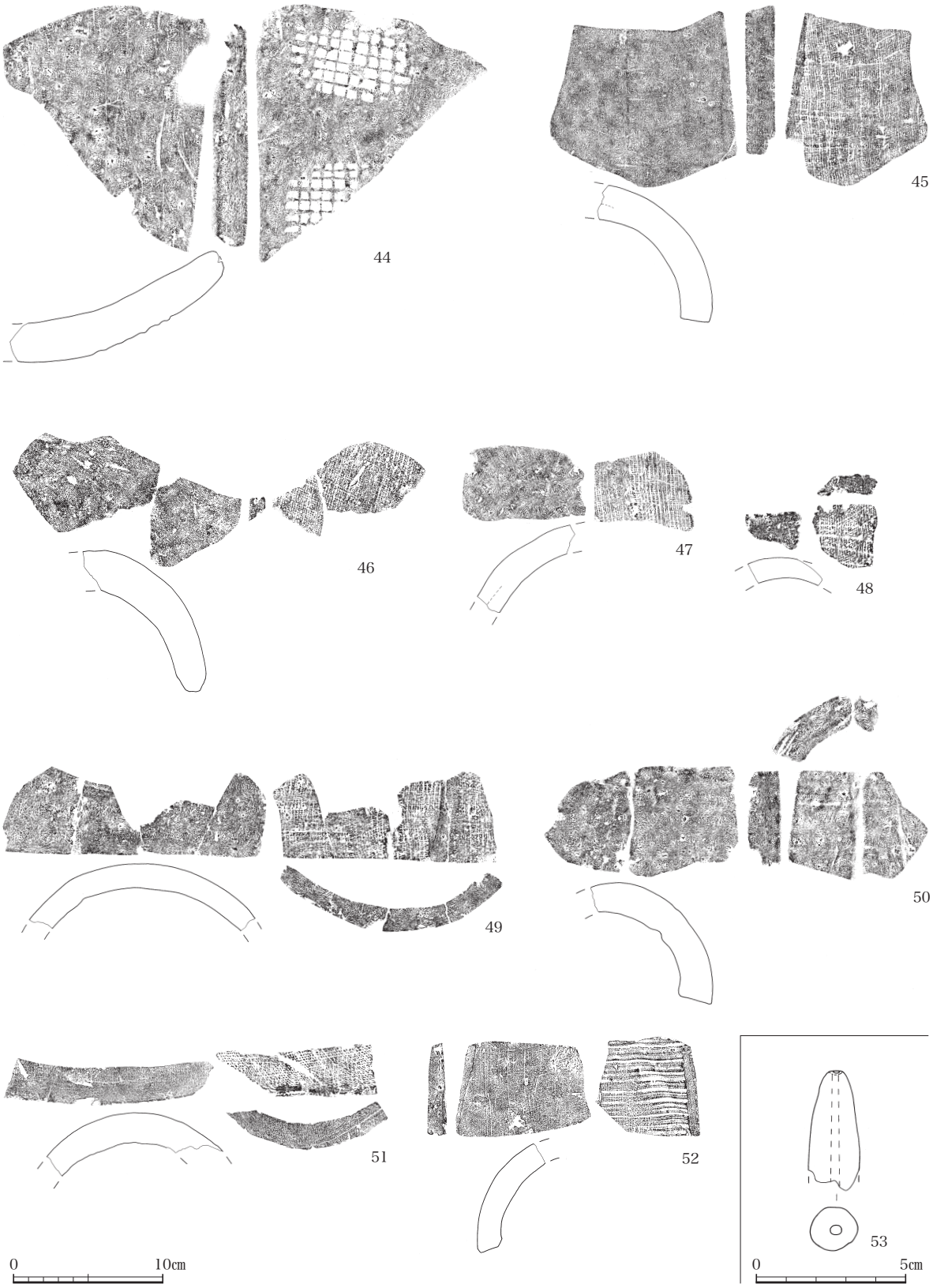
31 土師器 手捏ね	口　5.2 高　5.2 底　4.4 重 残 128.2	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤褐粗～細粒少量、粗砂粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口～体 3/4、底完存 O-23 遺物集中区 No.30
32 土師器 手捏ね	口　復 4.8 高　3.9 底　復 5.0 重　47.2	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部横方向の粘土のシワあり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白・赤褐粗粒微量、白・赤褐細粒微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口～底 1/2 O-23 遺物集中区 No.20
33 土師器 手捏ね	高　残 3.7 底　復 5.5 重　残 47.0	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面体～底部ナデで体部横方向の粘土のシワあり。	7.5YR5/6　明褐 緻密　白粗粒微量、赤褐粗～細粒微量 やや硬質	遺物集中区内 体～底 1/3 O-23 遺物集中区
34 土師器 手捏ね	高　残 3.2 底　6.2 重　残 119.9	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデで体部横方向の粘土のシワあり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒・灰礫微量、赤褐粗粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 体～底ほぼ完存 O-23 遺物集中区 No.28
35 土師器 手捏ね	高　残 3.3 底　復 6.0 重　残 77.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面体～底部ナデで体部斜方向の粘土のシワあり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒・白礫微量、赤褐粗粒微量 やや硬質	遺物集中区内 体～底 1/2 O-23 遺物集中区
36 土師器 手捏ね	口　5.6 高　4.7 底　4.5 重　残 117.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデで体部横方向の粘土のシワあり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白粗～細粒少量、赤褐礫～細粒微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口完存、体 3/4、底 1/3 O-23 遺物集中区 No.14
37 土師器 手捏ね	口　復 4.4 高　3.8 底　復 5.3 重　残 79.7	鉢形。手捏ね成形。底面及び側面にヒビ割れあり。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤褐粗粒少量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口完存、体～底 1/2 O-23 遺物集中区 No.24
38 土師器 手捏ね	口　復 5.8 高　4.8 底　復 5.4 重　残 74.7	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部横方向の粘土のシワあり。大型。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白礫微量、赤褐礫微量、赤褐礫～粗粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口～底 1/2 O-23 遺物集中区 No.19
39 土師器 手捏ね	口　7.2 高　5.0 底　6.8 最大　7.8 重　131.8	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部斜方向の粘土のシワあり。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白粗粒微量、砂礫微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 59.0 m 口～底 1/2 O-23 遺物集中区 No.31
40 土師器 手捏ね	高　4.0 底　6.1 重 残 185.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面体～底部ナデで体部斜方向の粘土のシワあり。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐礫～細粒微量、砂礫微量 やや硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 体 2/3、底完存 O-23 遺物集中区 No.15
41 土師器 手捏ね	口　6.7 高　4.9 底　6.0 重　185.1	鉢形。手捏ね成形。内面ナデで指頭圧痕あり。外面ナデ、体部横方向の粘土のシワあり。口縁部にも粘土のシワあり。大型。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤・白微粒、白粗粒、白礫微量 硬質	遺物集中区北西部 標高 59.0 m ほぼ完形 O-23 遺物集中区 No.37
42 土師器 手捏ね	口　復 7.2 高　残 5.4 底　6.0 重 残 154.5	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面ナデで体部横方向の粘土シワのあり。大型。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、赤褐粗粒微量、砂礫～粗粒微量 やや硬質	南部遺物集中区 標高 58.9 m 口～体 1/4、底完存 O-23 遺物集中区 No.12
43 土師器 手捏ね	口　6.9 高　5.1 底　6.0 最大　7.3 重　215.4	鉢形。手捏ね成形。内面ナデ。外面丁寧なナデで体部横方向の粘土のシワあり。大型。底部外面に細い棒状物質の指突によると見られる孔あり。直径約 2 ㎜。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤褐礫微量、白・赤褐粗粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.8 m 口 1/2、体～底完存 O-23 遺物集中区 No. 22・23
44 土師器 手捏ね	口　7.2 高　5.2 底　7.3 重 残 213.4	鉢形。手捏ね成形。表面に粘土のシワ顕著。内面ナデで指頭圧痕あり。口縁部に縦方向の粘土のシワあり。外面ナデ、体部横方向に粘土のシワあり。大型。	5YR6/6　橙 やや緻密　白粗～細粒微量、赤褐礫～粗粒微量、砂礫～粗粒微量 硬質	遺物集中区南部 標高 58.9 m 口～体 3/4、底完存 O-23 遺物集中区 No.11



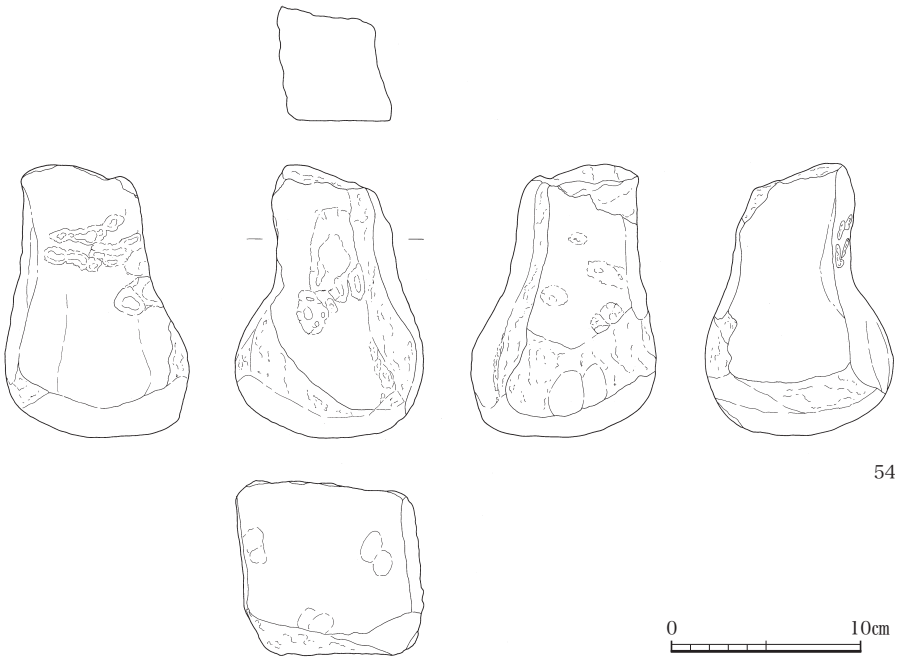
第 306 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（1）



第 307 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（２）

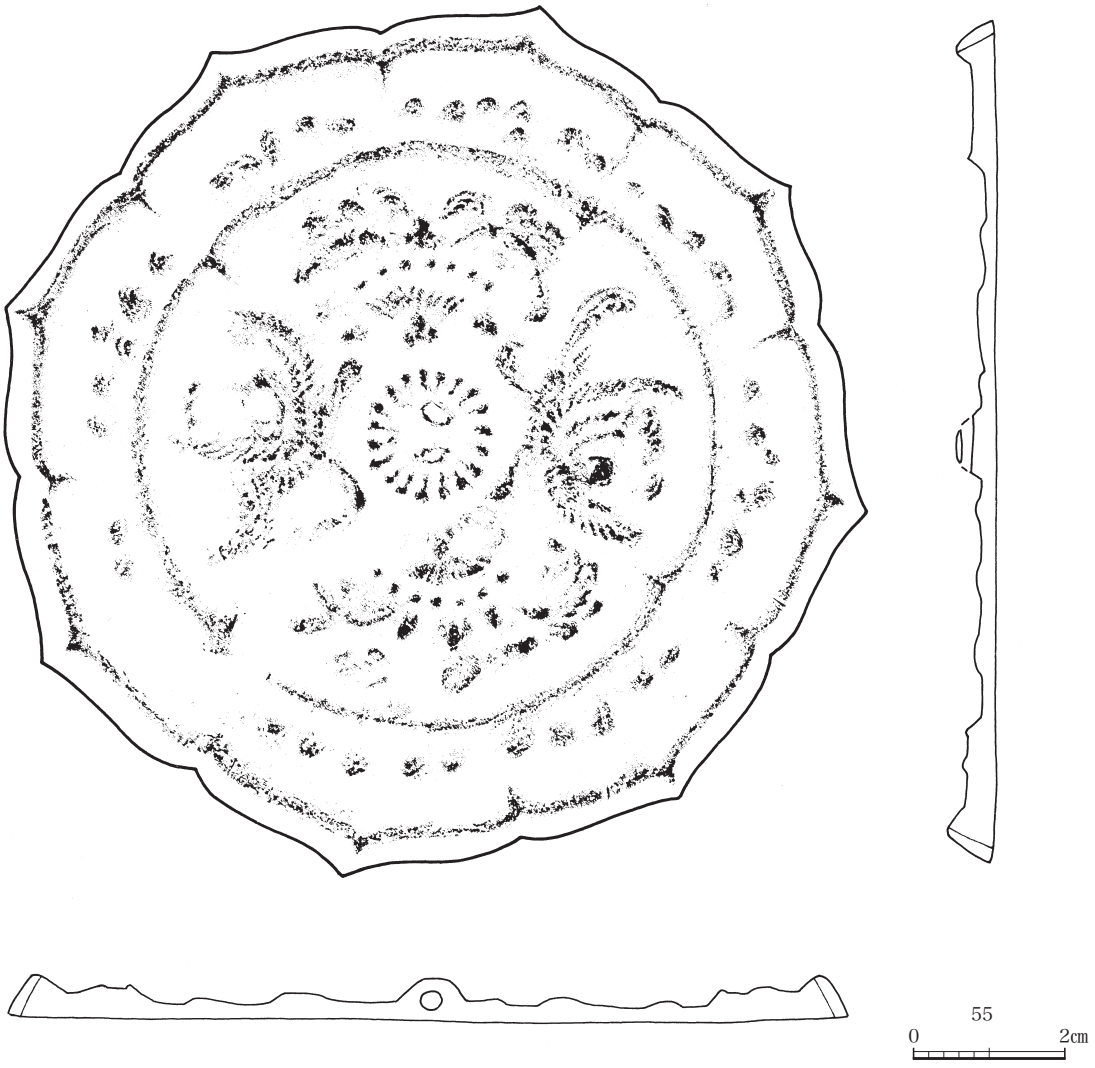


第 308 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（３）



54

0　10cm



55

0　2cm

第 309 図　和田遺跡　遺構外出土遺物実測図（４）

第 253 表　和田遺跡　遺構外出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　12.4 高　4.0	内面口縁～天井部ロクロナデ後天井部ナデ。天井部はロクロ目の凹凸目立つ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。	N5/0　灰 緻密　白礫～細粒礫少量、灰黒粗粒微量 硬質	J-13・14、K-13・14、L-13・14 グリッド 口～体 1/2、天井完存 ㊸・㊹
2 須恵器 蓋	口　復 11.6 高　残 3.1	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、天井部手持ちケズリ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　灰黒細粒少量 やや硬質	N-10 グリッド 口～天井 1/4 N-10
3 須恵器 蓋	口　復 9.2 高　2.6 最大 復 11.8	内面口縁～天井部ロクロナデ。外面口縁ヨコナデ、体～天井部手持ちケズリ。	N4/0　灰 緻密　黒・白微粒、白粗粒少量 硬質	L-14 グリッド 口～天井 1/6 L-14
4 土師器 皿	口　10.2 高　2.6 底　5.6 重　97.4	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後手持ちケズリ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤褐粗粒微量、白・灰細粒多量、砂細粒多量 硬質	Ⅱ区 ほぼ完形 Ⅱ区上
5 土師器 皿	口　10.6 高　2.5 底　6.5 重　121.2	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。内面底部は外周が溝状に深く、中央はやや高くなっている。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・灰・白細粒多量、赤褐礫微量 硬質	Ⅱ区 ほぼ完形 Ⅱ区上
6 土師器 皿	口　10.2 高　2.8 底　6.6	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部は突出する。調整粗い。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白・黒・赤細粒、白・赤粗粒少量、粗～細砂粒少量 硬質	K-15 グリッド ほぼ完形 K-15
7 土師器 皿	口　復 11.0 高　2.7 底　復 5.4	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白・黒・赤砂粗～細粒多量、白・黒礫微量 硬質	J-16・17、K-16・17 グリッド、確認面 口～体 1/3、底 2/3 ㊲
8 須恵器 坏	高　残 1.2 底　復 5.6	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。底部中央に墨書あり。2 文字か。	2,5Y7/1　灰白 緻密　白・灰黒細粒微量、灰白礫微量 やや軟質	Q-17 グリッド 体下端～底 1/4 Q-17・ボクショドキ
9 須恵器 坏	高　残 2.5	内面体部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。外面底部墨書あり。	2.5Y7/1　灰白 緻密　黒微粒微量 やや硬質	Q-14 グリッド 体破片 Q-14
10 須恵器 坏	高　残 2.4 底　6.8	内面体～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。糸切り痕が体部下端まで深く入る。底部外面墨書あり、2 文字か。	5Y5/1　灰 緻密　白粗～細粗粒少量 硬質	Q-15 グリッド 体 1/3、底 1/2 Q-15
11 灰釉陶器 高台付椀	口　復 16.4 高　残 5.0	内面口縁～体部ロクロナデ、口縁～体部灰釉施釉、ハケヌリ？ 外面口縁～体部ロクロナデ、体部一部釉付着。光ヶ丘 1 号窯式併行か。	N7/0　灰白 緻密　灰黒粗～細粒微量 硬質	J-16 グリッド 口～体 1/4 ㊳
12 灰釉陶器 高台付椀	高　残 2.1 高台　復 8.2	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。 光ヶ丘 1 号窯式、東濃産。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　黒褐細粒微量 硬質	I-30 グリッド 体～高台 1/6 I-30
13 須恵器 台付長頸瓶	高　残 7.2 高台　復 8.8	内面体～底部ロクロナデ、底部わずかに自然釉付着。外面体部ロクロナデ、底部回転ケズリ後高台貼り付け。底部中央は内側から人為的に穿孔された可能性あり。	7/0　灰白 緻密　黒・白細粒微量 硬質	P-16、Q-16 グリッド 体～底 1/2 66
14 須恵器 甕	高　残 6.7	内面口縁部ロクロナデ。外面口縁部ロクロナデ後縦方向の細い沈線施文。	N4/0　灰 緻密　白針状物質多量 硬質	J-16・17、K-16・17 グリッド、確認面 口破片 ㊲
15 須恵器 甕	高　残 12.7	内面胴部同心円当具痕。外面胴部擬格子文叩き。	N4/0　灰 緻密　白細粒少量、白・灰黒粗粒・礫微量 硬質	J-16・17、K-16・17 グリッド、確認面 胴破片 ㊲
16 須恵器 甕	高　残 8.9	内面胴部同心円当具痕。外面胴部擬格子叩き。	5Y7/1　灰白 緻密　白粗～細粒微量 硬質	K-16 グリッド、SK-55 の北部 胴破片 ㊲

17 須恵器 甕	高　残 5.4 底　復 14.4	内面胴部下端～底部ナデ。外面胴部下位平行叩き後ナデ。底部ケズリ後一部ナデ。白色の自然釉付着。底部外面に溶けた窯体が付着する。倒立状態で台として使用していたものか。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　灰黒粗粒微量、白細粒少量 軟質	J-16 グリッド 胴下半～底 1/4 ㊳
18 須恵器 甕	高　残 12.5	内面胴部ナデ後無文当具痕。外面胴部上半ナデ。把手貼付。把手は基部のみ残存する。把手上端付近には横方向の浅い沈線あり。	5PB6/1　青灰 緻密　白礫～粗粒少量 硬質	P-16、Q-16 グリッド 胴上半 1/6 66
19 須恵器 甕	高　残 5.5 底　復 19.0	内面胴～底部横方向のナデ後同心円当具痕。外面胴部平行叩き後底部丁寧なケズリ。胴部大きく外へ歪む。	N6/0　灰 緻密　黒･白粗粒微量、黒･白微粒微量、黒・白細粒微量 硬質	P-14・15、Q-14・15 グリッド 胴下端～底 1/4 68
20 須恵器 甕	高　残 5.9 底　復 8.0	内面胴部下半～底部ロクロナデ。外面胴部下半ロクロナデ後胴部下半～底部回転ケズリ。縁がかかった色調を示す個体。	5GY7/1　明オリーブ灰 緻密　黒･茶・白微砂粒、白･灰礫微量 硬質	M-13 グリッド 胴下半～底 1/4 M-13
21 須恵器 甕	高　残 2.6 底　13.5	内面底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部ナデで中央の直径 6 ㎝くらいが浅くくぼむ。底部には細い棒状物質の圧痕と縄の圧痕あり。	N5/0　灰 緻密　白礫～粗粒微量 やや硬質	J-37 グリッド、P-700 の西側 底完存 J-37
22 土師器 羽釜	高　残 6.9 鍔　部　復 20.3	内面胴部横方向のナデ。外面胴部横方向の軽いナデ。鍔部貼り付け。	7.5YR7/3　にぶい橙 粗い　砂礫～粗粒多量 硬質	11 トレンチ 胴上位 1/6
23 土師器 三足土器	高　残 8.2 脚 部 3.3 × 4.4	三足土器の脚部。内面体部ナデ。外面脚部強いナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　黒･白粗粒少量、赤褐粗～細粒少量、黒・白細粒少量 やや硬質	N-29 グリッド 脚上半完存 N-29
24 埴輪 円筒	高　残 6.6 重　95.7	内面胴部ナデ。外面胴部縦方向のハケ目（4 本 /1 ㎝）後突帯貼り付け後上下をナデ。	5YR6/8　橙 やや緻密　黒・白粗～細粒少量、黒・白細粒多量、赤褐粗粒微量、砂礫微量 やや硬質	Ⅱ区 胴破片 Ⅱ区フメイ
25 瓦 平瓦	長　残 9.8 幅　残 4.2 厚　1.7 重　残 107.2	凹面布目痕。凸面ナデ。広端面ケズリ。	7.5YR8/4　浅黄橙 緻密　灰黒細粒少量、砂礫微量 やや軟質	I 区、中央東端 破片
26 瓦 平瓦	長　残 8.6 幅　残 10.8 厚　2.3 重 残 357.2	凹面布目痕後狭端縁ケズリ。凸面格子叩き後側縁･狭端縁ケズリ。側面ケズリ。狭端面ケズリ。	2.5Y3/1　黒褐 緻密　灰黒・白礫～粗粒少量 硬質	3 トレンチ 破片
27 瓦 平瓦	長　残 5.0 幅　残 6.0 厚　残 1.2 重 残 36.3	凹面剝離。凸面格子叩き。	N6/0　灰 やや緻密　白礫微量 硬質	3 トレンチ 破片
28 瓦 平瓦	長　残 10.7 幅　残 8.7 厚　1.8 重 残 313.6	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　白･灰黒礫微量、灰黒・赤褐粗粒少量 やや軟質	G-28 グリッド 破片 G-28
29 瓦 平瓦	長　残 9.8 幅　残 8.0 厚　2.5 重 残 212.0	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面格子叩き。	10YR7/4　明黄褐 やや粗い　白・灰黒礫少量 やや硬質	K-9 グリッド 破片 K-9
30 瓦 平瓦	長　残 11.2 幅　残 8.4 厚　2.0 重 残 245.5	凹面布目痕。凸面ナデ。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　灰黒・赤褐・白礫少量 やや硬質	K-9 グリッド 破片 K-9
31 瓦 平瓦	長　残 7.7 幅　残 4.4 厚　1.2 重　残 40.1	凹面布目痕。凸面ナデ、側面と直交する方向に 2 条の浅い沈線あり。何かの圧痕か。側面ケズリ。薄手。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや粗い　灰黒粗～細粒少量 やや硬質	I-17・18、J-17・18 グリッド 破片 ㊱
32 瓦 平瓦	長　残 9.9 幅　残 9.1 厚　2.3 重 残 303.3	凹面布目痕、模骨痕あり。凸面縄目叩き。側面ケズリ。	5Y7/1　灰白 緻密　灰白･灰黒礫～粗粒微量 硬質	Q-18 グリッド 破片 Q-18

33 瓦 平瓦	長　残 12.8 幅　残 9.6 厚　3.0 重　残 613.7	凹面布目痕。凸面格子叩き。側面ケズリ。意図的に「L」字状に打ち割り成形している可能性あり。	7.5Y7/1　灰白 やや緻密　白・灰黒粗粒～礫少量 硬質	Q-18 グリッド 破片 Q-18
34 瓦 平瓦	長　残 7.2 幅　残 4.4 厚　2.4～2.8 重　残 121.4	凹面布目痕。凸面格子叩き。端面ケズリ。	2.5Y7/1　灰白 緻密　灰白礫少量 やや硬質	R-13 グリッド 破片 R-13
35 瓦 平瓦	長　残 9.4 幅　残 6.5 厚　2.7 重　残 265.0	凹面布目痕。凸面格子叩き。二枚の粘土板を貼り合わせた痕跡が明瞭。	2.5Y7/1　灰白 緻密　灰褐礫～粗粒微量、白礫～粗粒微量 やや硬質	P-16、Q-16 グリッド 破片 66
36 瓦 平瓦	長　残 5.3 幅　残 3.9 厚　1.5～2.0 重　残 47.8	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ、側面と直交する浅い条線あり。側面ケズリ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　白礫～粗粒微量、黒褐細粒微量 硬質	P-16、Q-16 グリッド 破片 66
37 瓦 平瓦	長　残 5.5 幅　残 6.2 厚　1.5～1.7 重　残 76.5	凹面布目痕、横骨痕あり、側縁ケズリ。凸面ナデ。側面ケズリ。	5Y8/1　灰白 緻密　黒褐礫微量、黒褐細粒少量 やや硬質	M-11 グリッド 破片 M-11
38 瓦 平瓦	長　残 7.9 幅　残 6.9 厚　1.4～1.9 重　残 118.3	凹面布目痕。凸面ナデ。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　赤褐・灰白・黒粗～細粒微量、砂礫微量 やや軟質	Q-12 グリッド 破片 Q-12
39 瓦 平瓦	長　残 7.0 幅　残 9.0 厚　1.9 重 残 151.4	凹面布目痕。凸面格子叩き。	2.5Y7/1　灰白 緻密　灰礫微量、白粗粒微量 硬質	P-17 グリッド 破片 P-17
40 瓦 平瓦	長　残 4.8 幅　残 5.2 厚　1.7 重　残 54.8	凹面布目痕。凸面ナデ。	5Y6/1　灰 緻密　白礫・細粒微量 硬質	Q-14 グリッド 破片 Q-14
41 瓦 平瓦	長　残 4.5 幅　残 4.4 厚　残 1.0 重　残 19.8	凹面布目痕。凸面は剝離しているため不明。	5YR7/3　にぶい橙 やや緻密　灰黒・赤褐粗粒少量 やや軟質	Q-15 グリッド 破片 Q-15
42 瓦 平瓦	長　残 7.1 幅　残 9.5 厚　1.7～2.8 重　残 236.4	凹面布目痕後側縁ケズリ、凹面には被熱・赤変した粘土のようなものが付着する。凸面格子叩き。側面ケズリ。狭端面ケズリ。カマドの構築材か？	7.5Y7/1　灰白 緻密　白・灰黒礫微量、白砂細少量、灰黒細粒少量 やや硬質	Ⅵ区 破片
43 瓦 平瓦	長　残 7.0 幅　残 5.8 厚　残 1.2 ～ 1.8 重　残 85.4	凹面は粘土接合面で剝離しているため不明。凸面格子叩き。	5Y8/1　灰白 やや緻密　灰黒粗～細粒少量 やや軟質	Ⅵ区 破片
44 瓦 平瓦	長　残 17.8 幅　残 14.2 厚　2.7 重　残 833.7	表面磨滅する。凹面布目痕後一部ケズリの可能性あり。側縁ケズリ。凸面格子叩き後側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 白・灰黒礫微量、白・灰黒細粒多量 やや硬質	Ⅶ区土捨て場 破片
45 瓦 丸瓦	長　残 10.3 幅　残 8.0 厚　2.4 重 残 410.8	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ケズリ後側縁ケズリ。側面ケズリ。	7.5YR8/3　浅黄橙 緻密　灰黒粗～細粒少量 やや軟質	G-28 グリッド 破片 G-28
46 瓦 丸瓦	長　残 9.8 幅　残 8.1 厚　2.7 重　残 257.7	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ナデ後側縁ケズリ。側面ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白・灰黒・赤褐礫～粗粒微量、灰黒・赤褐細粒少量 やや軟質	I-17・18、J-17・18 グリッド 破片 ㊱
47 瓦 丸瓦	長　残 5.8 幅　残 6.3 厚　1.8 重　残 126.5	凹面布目痕後一部ナデ。凸面ナデ。	N6/0　灰 緻密　白礫～粗粒微量 硬質	P-16、Q-16 グリッド 破片 66
48 瓦 丸瓦	長　残 4.8 幅　残 4.9 厚　1.5 重　残 36.5	凹面布目痕後一部ナデ。凸面ナデ。狭端面ケズリ。	5Y7/1　灰白 緻密　白礫～粗粒微量、灰白礫～粗粒微量 硬質	P-16、Q-16 グリッド 破片 66

49 瓦 丸瓦	長　残 6.4 幅　残 15.2 厚　1.4 ～ 1.7 重　残 218.9	凹面布目痕後縦方向のナデあり。凸面ナデ。広端面ケズリ。	7.5YR4/6　褐 やや緻密　白･灰黒･赤褐粗～細粒微量、砂礫～粗粒微量 やや硬質	O-12 と N-11 が接合 グリッド 破片 O-12
50 瓦 丸瓦	長　残 7.7 幅　残 8.5 厚　2.2 重　残 266.4	凹面布目圧痕。凸面ナデ後端縁一部ケズリ。端面ケズリ。	10YR8/3　浅黄橙 やや粗い　白･灰粗砂粒、白･灰礫少量 やや軟質	O-16 グリッド 破片 O-16　No.2
51 瓦 丸瓦	長　残 3.4 幅　残 12.1 厚　1.5 ～ 2.1 重　残 117.1	凹面布目痕後端縁ケズリ。凸面ナデ。広端面ケズリ。	5Y5/1　灰 緻密　白細粒少量、黒褐礫微量 硬質	K-38 グリッド 破片 K-38
52 瓦 丸瓦	長　残 7.0 幅　残 4.6 厚　1.8 重　残 143.8	凹面布目痕後側縁ケズリ。凸面ケズリ、側縁と平行のケズリ後直交する方向のケズリわずかにあり。側縁ケズリ。側面ケズリ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　白礫～粗粒少量 硬質	Ⅶ区 破片
53 土製品 土錘	長　残 4.0 幅　1.7 孔径　0.4 重　残 9.3	平面紡錘状。断面円形。表面ナデ。	10YR5/4　にぶい黄褐 緻密　赤褐細粒少量 やや軟質	Q-14 グリッド 1/2 Q-14
54 石器 砥石	長　14.4 幅　9.9 厚　9.3 重　1020.1	平面四角柱状。断面方形。四面が研磨され、表面と両側面に敲打による凹みが複数ある。1/2 ほどに欠損した大型・柱状の砥石を再利用したものと考える。4 面は研磨痕が顕著で成形時のものと見られる敲打痕が各所に残る。下面は研磨されていないが丁寧に成型される。上面は欠損面で加工痕は特に認められない。	N4/0　灰 安山岩質溶岩	J-37 グリッド、P-700 の西側 完形 J-37
55 青銅製品 鏡	径　10.5 厚　0.1 ～ 0.6 重　223.0	瑞花双鳳八稜鏡。表面は厚い緑青に厚く覆われ、鉄分も銹着。外形八稜形、鏡面は平坦で反りなし。鏡背鈕は花文座円鈕、内区は鳳凰と扇状の瑞花各２点を点対称に配置。外区は内区より一段高く界圏は三角形にわずかに突出する稜を持つ段。界圏の平面形は四花圏。外区は草花文だが文様は省略化され列点状。	鋳上がりは良好	P-17 グリッド 完形 P-17

であることが確認されている。鏡はこの軽石を含む土層より下で出土しており、鏡式からみた所見とも合う。なお、鏡出土地点周辺で 10 世紀頃の遺構や遺物が多いということはない。

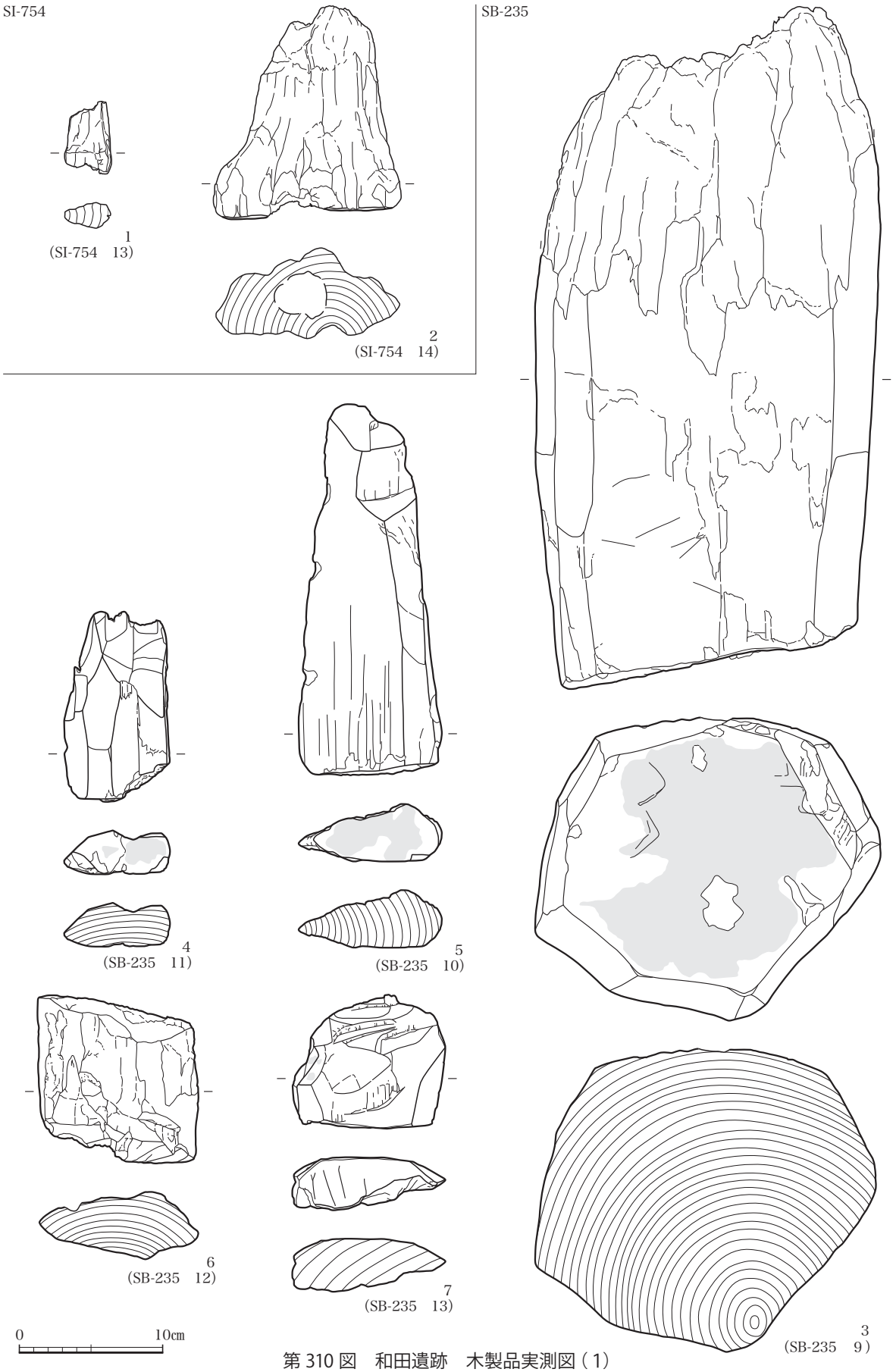
図化しなかった遺物は、土師器片 2,930 点 26,820 ｇ（坏 855 点 8,385 ｇ、高坏 1 点 60 ｇ、甕 2,074 点 18,375 ｇ）、須恵器片 499 点 14,506 ｇ（蓋 8 点 214 ｇ、坏 203 点 2,506 ｇ、鉢 5 点 150 ｇ、壺 3 点 160 ｇ、瓶類 20 点 533 ｇ、甕 260 点 10,943 ｇ）、灰釉陶器片 3 点 53 ｇ、土製品 7 点 105 ｇ、粘土塊 12 点 78 ｇ、瓦片 11 点 1,080 ｇである。土師器甕が最も多く、器種組成は竪穴住居跡等で出土する場合とほぼ同様である。

木製品　（第 310 ～ 316 図、第 86・97・220・223・224・235・237・240・242・243・246・249・250・254・264・265・269・270・271 表、図版三二・三三・三九～四五・六四～六八）

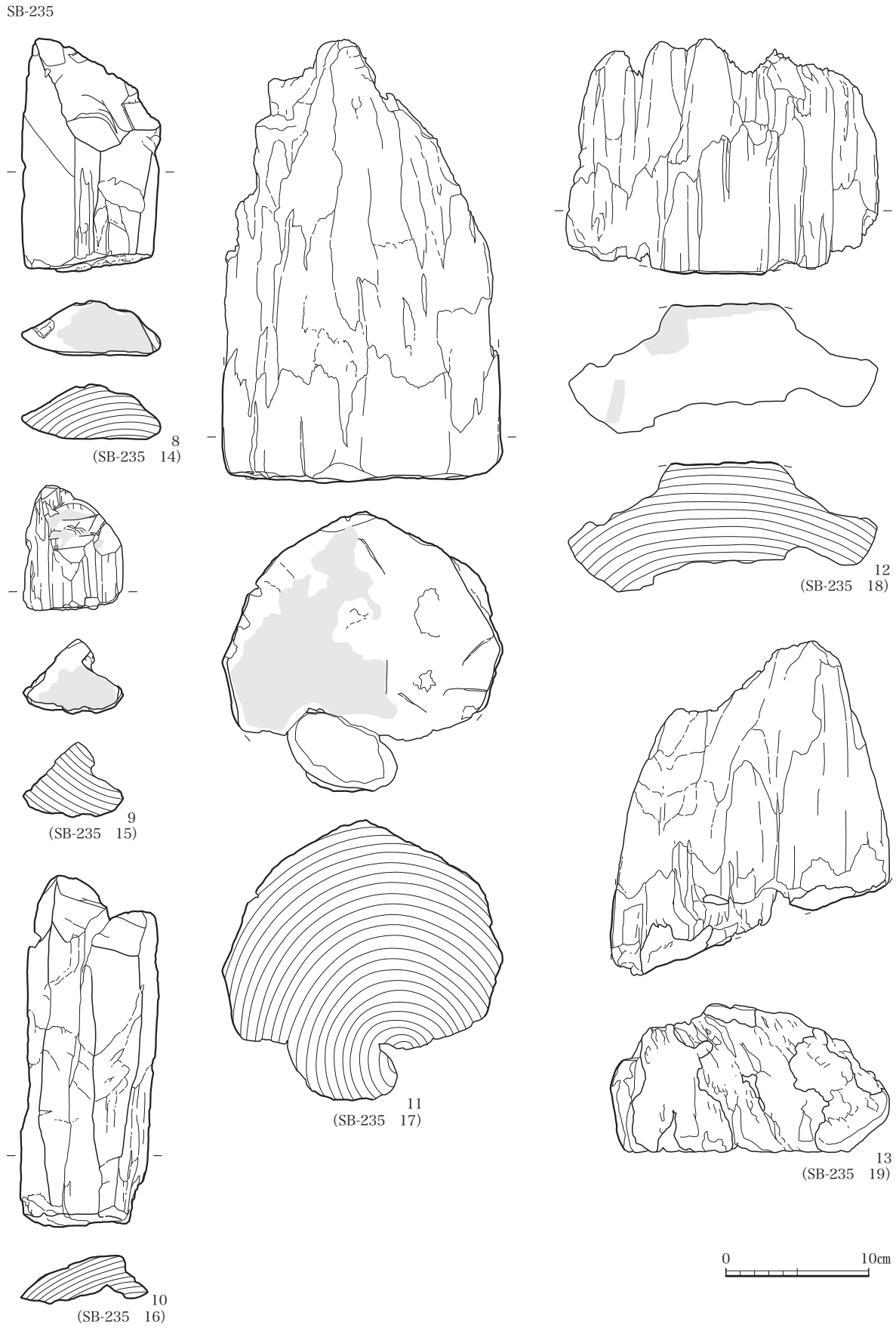
木製品は、掘立柱建物跡などから多数出土している。ここでは、それら各遺構出土木製品の実測図のみをまとめて掲載した。観察表については各遺構のところに掲載しているので、そちらを参照していただきたい。

第 254 表　和田遺跡　木製品一覧表

No.	遺構名	遺物番号	器種	径（長×短）×高さ（cm）	樹種	備考
1	SI- 754	13	柱材	残3.3×1.7×残5.1	クリ	
2	SI- 754	14	柱材	13.1×6.3×残14.9	クリ	年代測定実施
3	SB- 235	9	柱材	24.1×21.1×残47.5	クリ	年代測定実施
4	SB- 235	11	礎板	7.2×3.0×13.3	クリ	
5	SB- 235	10	礎板	10.0×4.0×25.9	クリ	
6	SB- 235	12	不明	11.1×4.7×11.7	モミ属	
7	SB- 235	13	不明	10.4×3.6×9.3	クリ	
8	SB- 235	14	不明	9.4×3.8×16.3	クリ	
9	SB- 235	15	不明	7.0×5.1×8.8	クリ	
10	SB- 235	16	不明	8.9×2.5×24.6	クリ	
11	SB- 235	17	柱材	19.7×19.3×残31.0	クリ	
12	SB- 235	18	柱材	残21.5×7.4×残16.5	クリ	
13	SB- 235	19	柱材	残19.5×10.4×残23.4	クリ	
14	SB- 235	20	柱材	16.0×4.5×14.1	クリ	
15	SB- 235	21	柱材	20.1×14.4×残24.9	クリ	
16	SB- 951	1	柱材	20.2×16.3×残35.9	モミ属	年代測定実施
17	P- 277	1	柱材	23.2×23.8×残63.4	クリ	年代測定実施
18	P- 496	1	柱材	6.7×4.2×11.5	クリ	
19	P- 510	4	柱材	25.8×7.5×残20.2	クリ	
20	P- 610	1	柱材	残17.5×9.1×残30.4	クリ	
21	P- 625	3	柱材	25.0×23.3×残25.9	クリ	
22	P- 803	1	柱材	15.2×9.3×残9.1	クリ	
23	SB- 234	1	柱材	27.2×19.0×残24.6	クリ	
24	SB- 234	2	柱材	残16.1×10.2×残15.9	クリ	
25	SB- 508	1	柱材	22.3×20.5×残23.2	クリ	
26	SK- 335	1	不明	5.3×4.2×12.8	モミ属	
27	SK- 832	1	柱材	14.0×8.8×残15.8	クリ	
28	SK- 833	1	不明	6.4×3.8×11.2	クリ	
29	P- 387	1	柱材	残9.7×5.1×残10.2	クリ	
30	P- 397b	1	柱材	残12.5×8.2×残15.2	クリ	
31	P- 623	1	柱材	15.2×14.6×残16.8	クリ	
32	P- 804	1	柱材	残5.3×2.1×残4.6	クリ	
33	P- 918	1	不明	4.7×1.8×11.2	クリ	
34	P- 952	1	柱材	残14.3×8.3×残11.6	クリ	

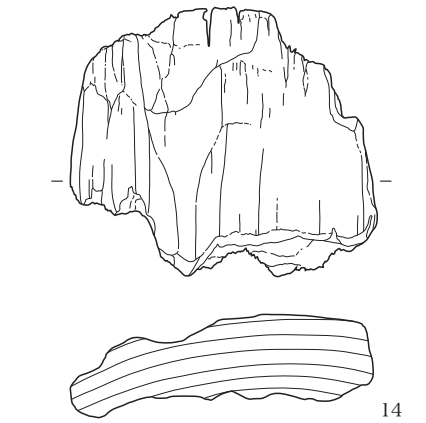


第 310 図　和田遺跡　木製品実測図 (1)

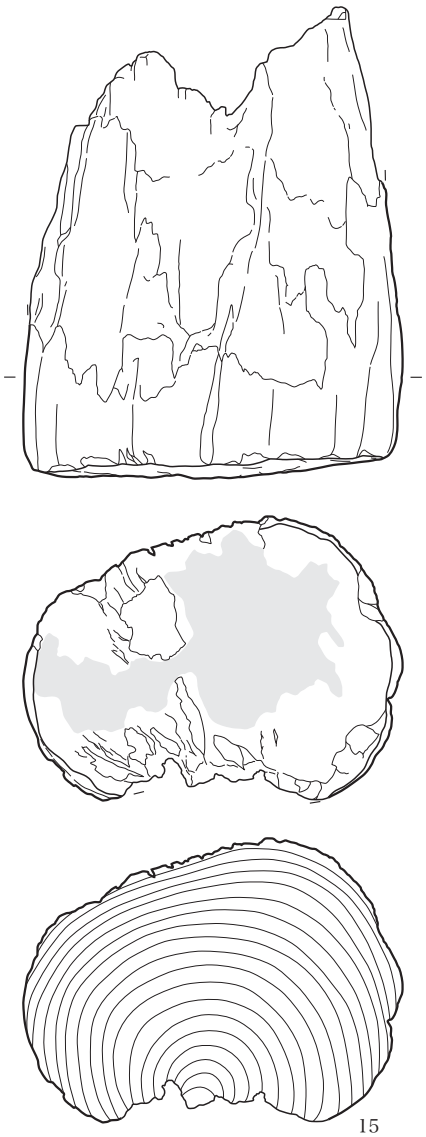


第 311 図　和田遺跡　木製品実測図（2）

SB-235



14
（SB-235　20）



15
（SB-235　21）

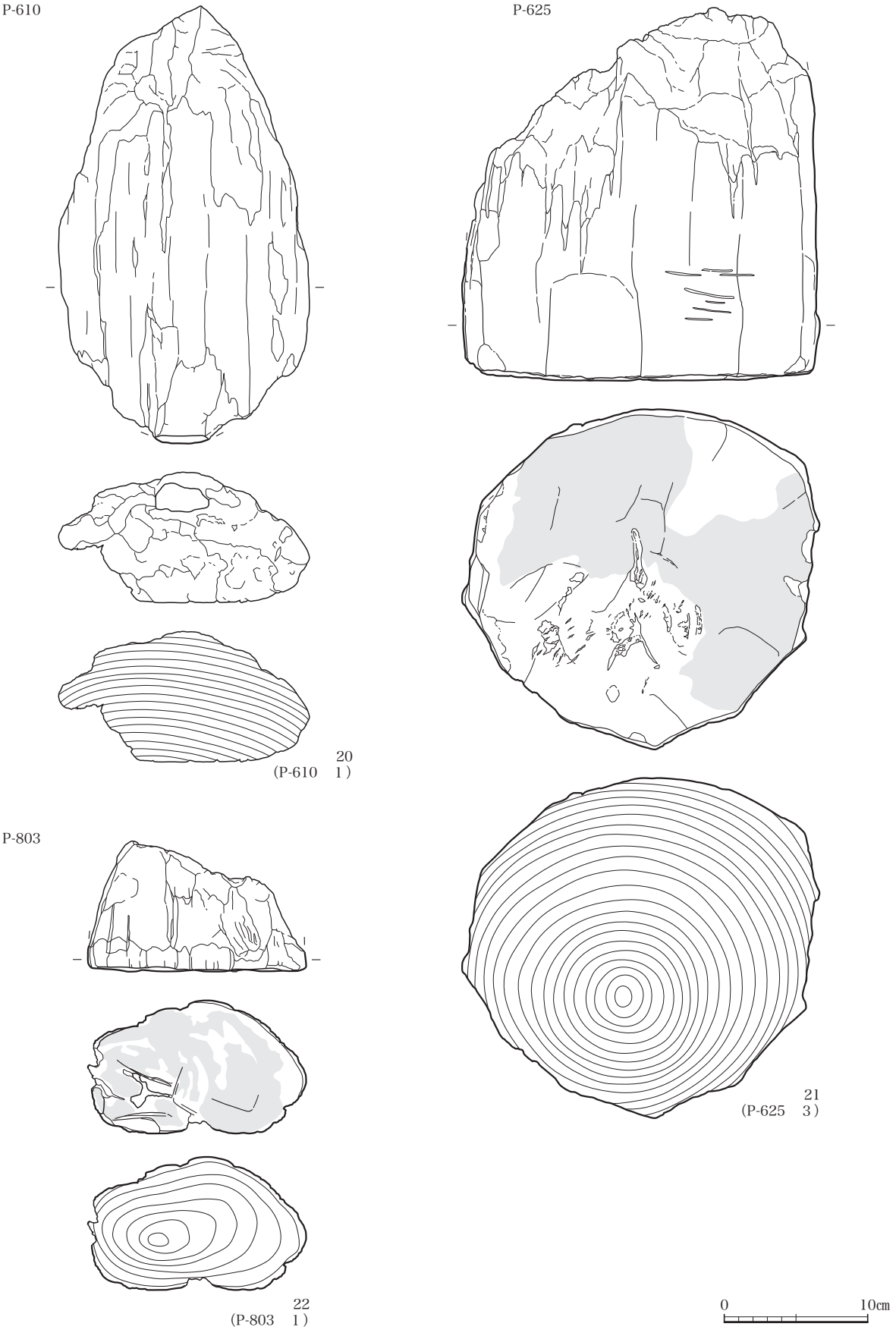
SB-951

16
（SB-951　1）

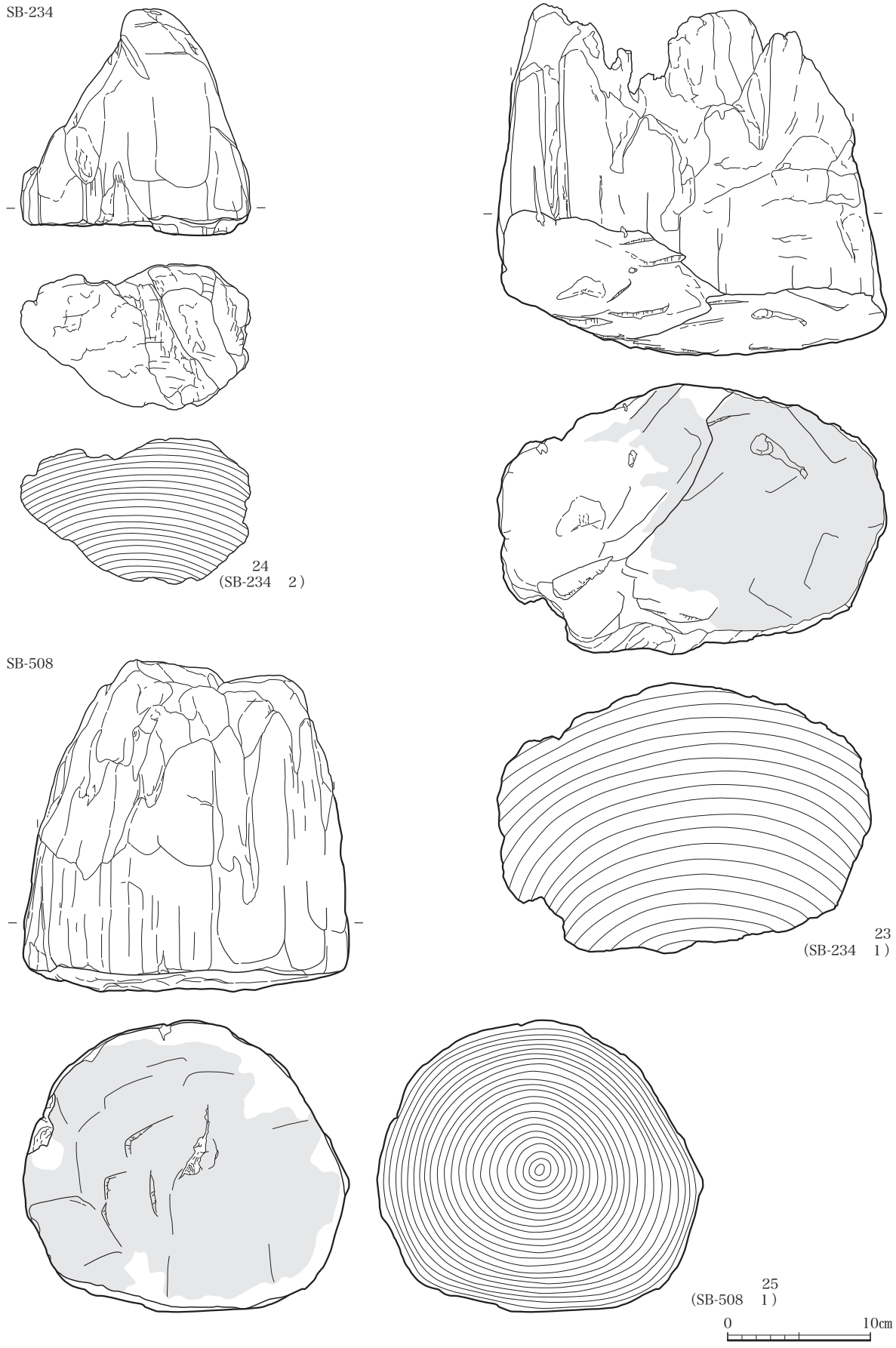
0　10cm

第 312 図　和田遺跡　木製品実測図（3）

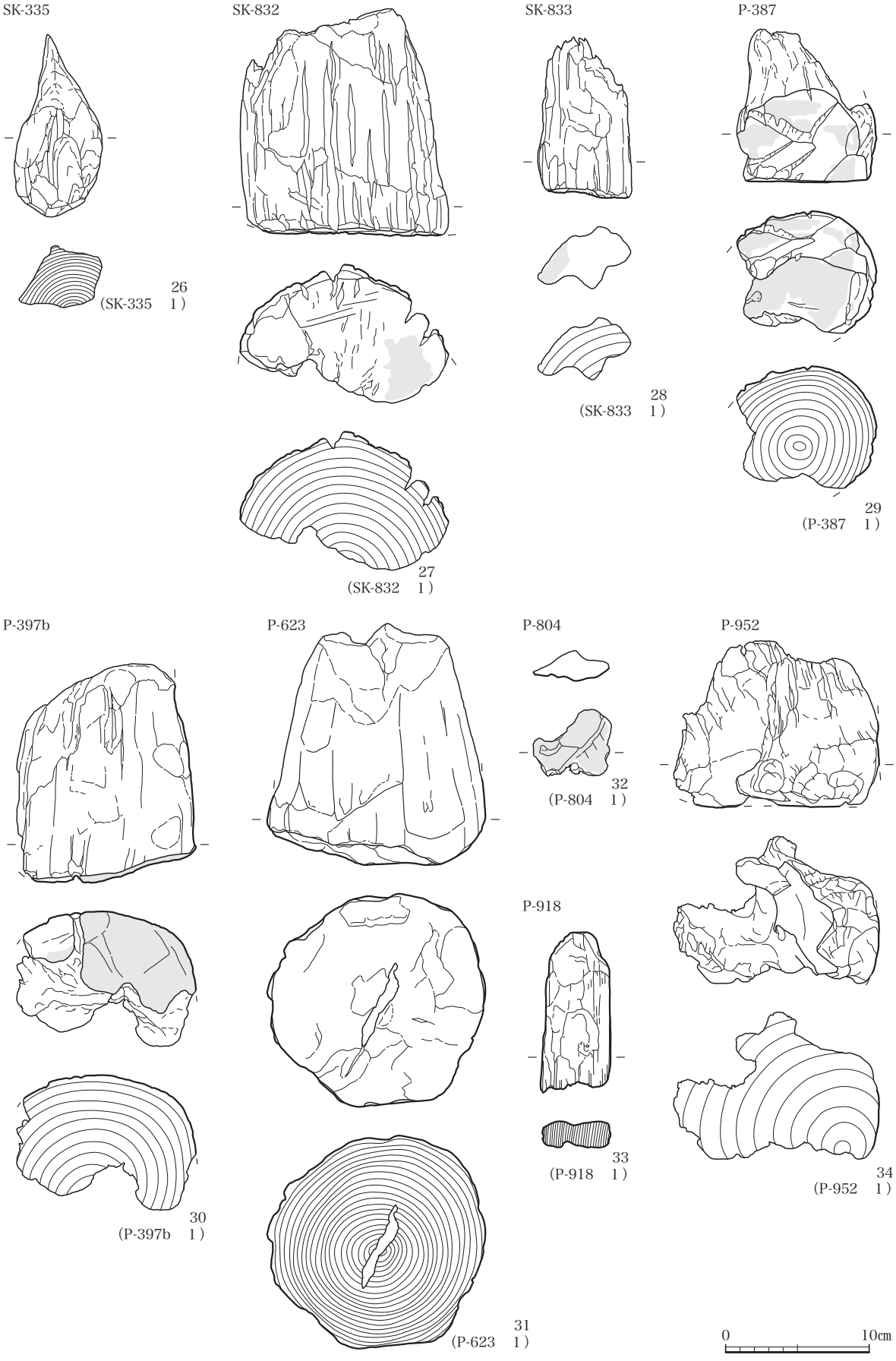
第 313 図　和田遺跡　木製品実測図（4）



第 314 図　和田遺跡　木製品実測図 (5)



第 315 図　和田遺跡　木製品実測図（6）



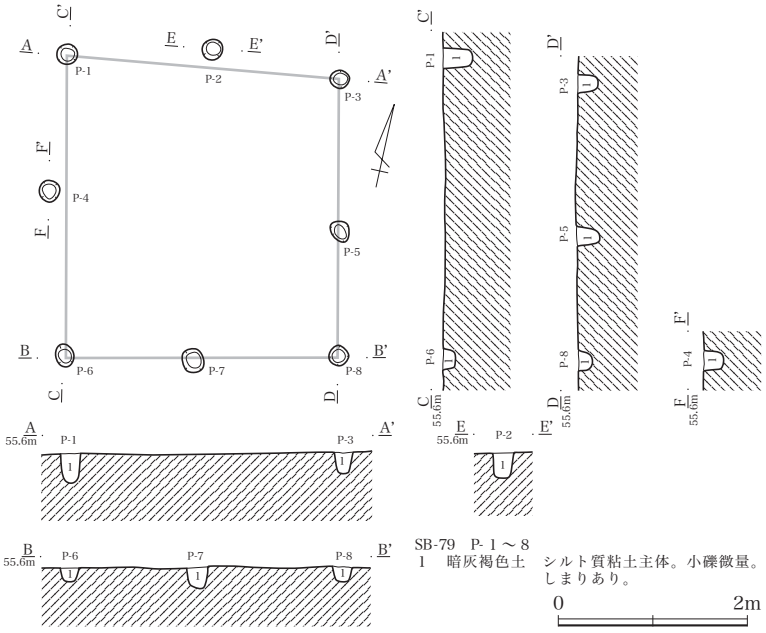
第 316 図　和田遺跡　木製品実測図 (7)

第４節　中・近世

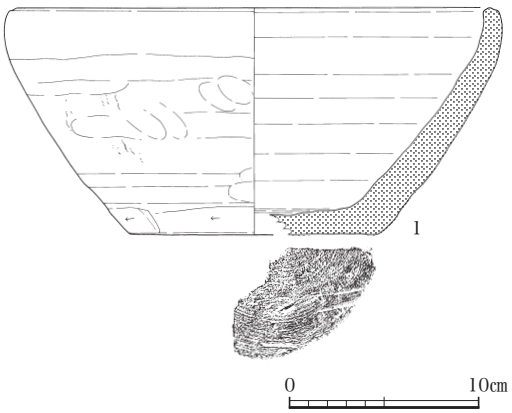
１. 掘立柱建物跡

ＳＢ－７９（第 317・318 図、第 255 表、図版四一・四二）

位置　Ⅴ区中央部の台地平坦面、Ｏ－９グリッドに位置する。東７ｍに SK-86、南東 6.5m に SK-80 がある。　重複　なし。　形状・規模　桁行２間（2.95 ～ 3.21 ｍ）、梁間２間（2.93 ～ 3.12 ｍ）の側柱建物である。南北の中軸線はＮ－ 12°－Ｗで柱穴は８本あり、配置は方形で P- ２・４は外にやや張り出す。柱間は桁行 1.34 ～ 1.76 ｍ、梁間 1.36 ～ 1.57 ｍである。P- １は 22 × 22cm、深さ 30cm、P- ２は 23 × 22cm、深さ 27cm、P- ３は 20 × 18cm、深さ 21cm、P- ４は 24 × 22cm、深さ 22cm、P- ５は 25 × 20cm、深さ 23cm、P- ６は 25 × 20cm、深さ 13cm、P- ７は 22 × 25cm、深さ 24cm、P- ８は 20 × 19cm、深さ 14cm である。P- ６・８がやや浅いほかは、ほぼ同様の深さとなっている。　遺物　遺物はごくわずかで、うち P- ８出土の陶器鉢１を図化した。図化しなかった遺物は、土師器高坏片１点（10 ｇ）、高台坏坏片１点（20 ｇ）、須恵器片は瓶類１点（74 ｇ）である。本遺構の年代は 13 世紀代と考えられる。



第 317 図　和田遺跡　SB-79 実測図



第 318 図　和田遺跡　SB-79 出土遺物実測図

第 255 表　和田遺跡　SB-79 出土遺物観察表

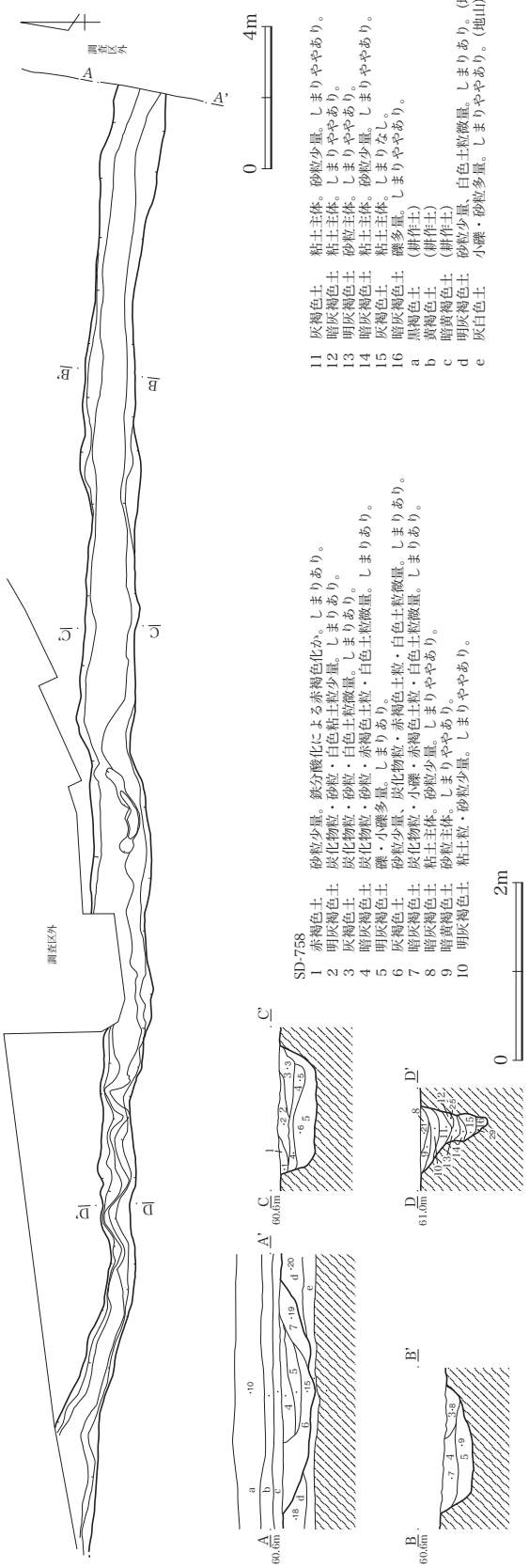
番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
１ 陶器 鉢	口　復 26.2 高　12.1 底　復 13.0	須恵質。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ・ナデ。体部下端ケズリ、底部回転糸切り離し後軽いナデ。口縁部が歪む。内面のロクロ目はそれぞれ平行ではない。	N6/0　灰 緻密　青灰微粒多量、白微粒少量 硬質	P-8 口～底 1/4 P-8

２. 溝

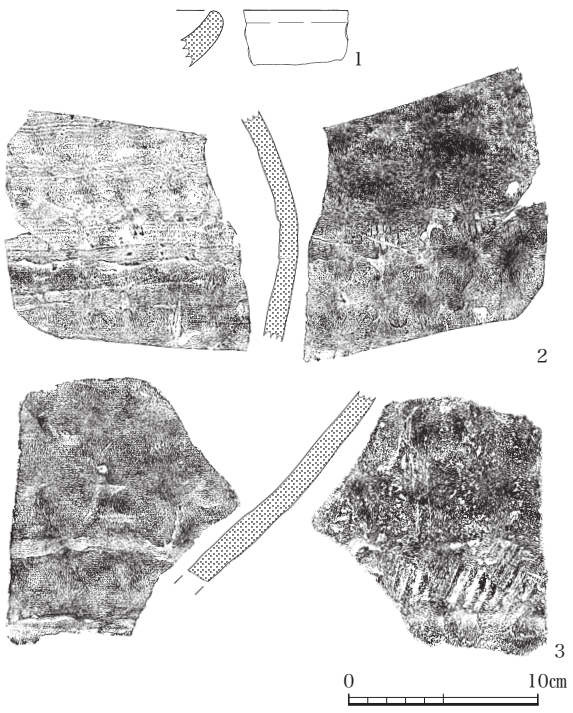
ＳＤ－７５８（第 319・320 図、第 256 表、図版四二）

位置　Ⅶ区調査区の北端、Ｍ－ 28 ～ 32 グリッドに位置する。南３ｍに SK-874 があるほかは、隣接する

遺構はない。　**重複**　なし。東西両端は調査区外となる。　**形状・規模**　東西方向に直線的に延びる溝で、東西両端は調査区外となっており、中軸線はＮ－ 90°－Ｗである。平坦な底面を持つ断面逆台形状の溝と考えられるが、西部では幅がやや狭く断面「Ｖ」字状を呈している。覆土の観察から流水があったと考えられており、地山は東部が粘土質土、西部は砂礫質であることから、水により崩落しやすい砂礫質の地山が抉られ「Ｖ」字状の断面形になったものと推定される。西部では溝の蛇行も著しいが、これも流水による浸食のためだろう。確認できる長さは 40m、幅は 0.80 ～ 1.62m、底面の幅は 0.20 ～ 1.05m、深さは東部で 0.32 ～ 0.42m、西部では 0.54 ～ 0.72m である。底面の標高は西部が最も低いものの、逆台形の断面形を保っている東部では東に向かって徐々に低くなっている。　**覆土の状態**　覆土は 16 層である。砂粒を多く含むなどといった土層の状況から、流水があったと考えられる。西部の「Ｖ」字状の断面形となる部分では、砂層と粘土層が互層をなして堆積する。　**遺物**　遺物はわずかで、甕２は常滑産、３は渥美産であろうか。図化以外は土師器甕片 7 点（115 ｇ）、坏片 2 点（15g）、須恵器甕片 1 点（50 ｇ）



第 319 図　和田遺跡　SD-758 実測図



第 320 図　和田遺跡　SD-758 出土遺物実測図

第256表　和田遺跡　SD-758出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 鉢か	高　残2.9	須恵質。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。口縁は内湾する。14ｃ前半～中葉頃在地産か。	N3/0　暗灰 緻密　白粗粒多量 硬質	覆土 口～体一部
2 陶器 甕	高　残12.3	内面胴部ナデでヘラ状工具痕・指頭圧痕あり、粘土の接合痕残る。外面胴部ナデ後粘土接合部分に格子叩き。自然釉付着する。常滑。	7.5YR4/2　灰褐 緻密　白礫～粗粒多量、黒礫～粗粒少量 硬質	覆土 胴一部
3 陶器 甕	高　残10.3	須恵質。内面胴部ナデ、粘土の接合痕残る。外面胴部ナデ後平行叩き。欠損部はすべて丸く磨滅している。流水などのよる移動の結果だろう。渥美か。	5Y5/1　灰 緻密　白粗粒微量 硬質	覆土 胴一部

であり、8世紀代の遺物の混入が目立つ。本遺構の年代は中世と考えられる。常滑甕が大量に生産される13～14世紀の可能性があろうか。なお覆土の火山灰分析では、土層断面2ヶ所の底面直上層から天仁元年(1108年)のAs-Bが確認されており、構築年代は古くとも12世紀初頭以降となる。

3.土坑

ＳＫ－１６（第223・321図、第257表、図版六三）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｆ－27、Ｇ－27グリッドに位置する。北西2.5mにSI-15がある。　**重複**　南西部分が調査できていないため、確認できるのは遺構全体の半分ほどのみである。　**形状・規模**　平面形は確定できないが、底面の形状から隅丸の方形ないし長方形になると推定される。遺構付近の地山は礫を含んで崩落しやすいため、遺構上端の形状は変化している可能性がある。中軸線はＮ－51°－Ｗで、中軸での規模は2.45m、深さ0.33mである。底面は平坦で、壁は外形して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は多量の礫のほか炭化物粒を含む第1層で、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物は2点ある。1は土師質土器小皿で、土坑北部の覆土中から出土する。2は青磁の破片で、中央底面直上から出土した。図化しなかった遺物としては土師器片2点(20ｇ)があるが、これは古代遺物の混入であろう。本遺構の年代は12～13世紀と考えられる。

ＳＫ－２８（第223・321図、第258表、図版四二）

位置　Ⅰ区東部の台地平坦面、Ｇ－26・27グリッドに位置する。北にSI-18、SD-19が近接し、北西2mにはSK-30・33が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は長方形で、中軸線はＮ－48°－Ｅ、規模は長径0.82m、短径0.64mである。長径0.64m、短径0.60mの方形土坑に浅い段が取り付くもので、段の部分の深さは確認面から0.15mである。方形土坑部分は深さ0.45mまでは確認できているが、それ以上は湧水のため不明である。深さからすると井戸の可能性もあろうか。壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第1層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物は覆土中からわずかに出土する。図化した遺物は陶器甕1点、平瓦1点で、図化以外は古代の土師器甕片4点（40g）のみである。本遺構の年代は中世と考えられる。

ＳＫ－５５４（第236・321図、第259表）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－14グリッドに位置する。北にSK-364・395・399・553、東に

SK-807・824・829・830、西に SK-687 が近接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.01m、短径 0.99m、深さ 0.26m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は砂質で緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　図化した遺物は瓦質土器小形壺（１）のみである。図化以外には土師器坏片４点（10 ｇ）、甕片２点（30 ｇ）、須恵器片３点（20 ｇ）、粘土塊１点（10 ｇ）があるが、これらについては混入とし、小形壺のみを本遺構に伴う遺物とした。中近世の土坑と考えられる。

ＳＫ－７６３（第 227・321 図、第 260 表、図版四二）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 26 グリッドに位置する。南に SI-727 と SK-762、北に SI-728、西に SK-769 が近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形が円形を呈する円筒状の土坑で、規模は長径 1.07m、短径 1.04m、深さ 0.71m である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がっており、壁際には壁面を抉る径８cm ほどの小孔が３ヶ所ある。小孔は 120 度くらいずつ位置を違えて掘り込まれており、底面付近からは棒状の木材が出土する。木材は形状を保ったまま取り上げることができなかったため法量や樹種、木取りなどは不明だが、出土状態から孔に棒状の木材を設置したものと考えられる。小孔の深さは不明である。

覆土の状態　覆土は緻密な４層であり、自然堆積と考えられる。第３層は粘土を主体とする。　**遺物**　壁面にある３ヶ所の小孔から木材が出土するほか、底面付近からチャート質の礫が多量に出土する。図化した遺物は覆土中出土の平瓦１点のみである。本遺構の時期は近世と考えられる。

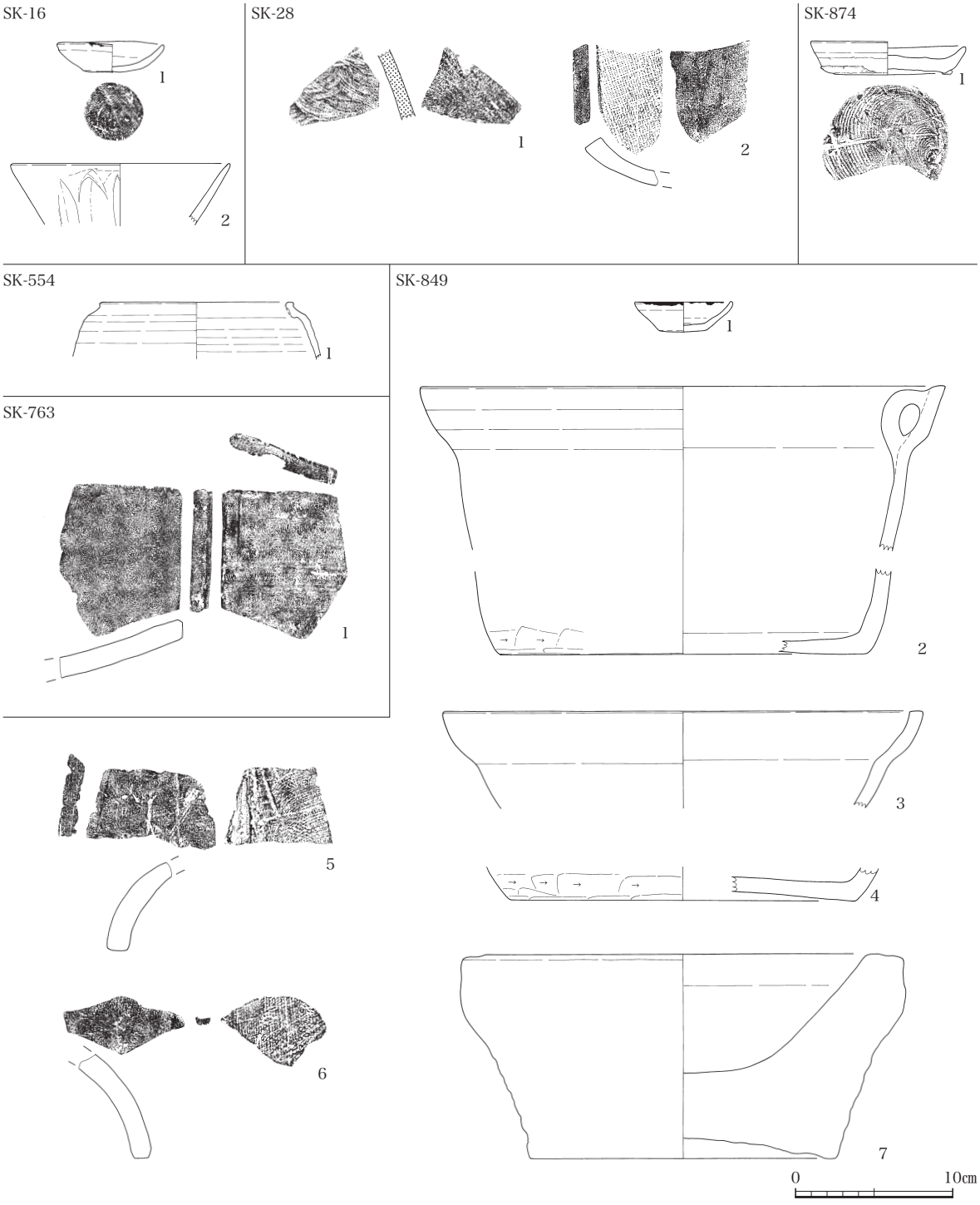
ＳＫ－８４９（第 228・321・322 図、第 261 表、図版四二・六三・六四）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 28 グリッドに位置する。東に SD- ４、P-786 が近接してある。　**重複**　南西部が SI-731 と重複する。土層による新旧関係は不明だが、出土遺物からすると SI-731 を切ると考えられる。

形状・規模　遺構の主体は北西の円形部分だが、南東に緩傾斜で立ち上がる部分があるため平面形は楕円形となる。中軸線はＮ－ 51°－Ｗ、規模は長径 2.00m、短径 1.54m、深さ 0.92m である。底面は丸みを持ち、壁は急に立ち上がったのち底面上 30cm 付近で段となり、北西部はそこから直線的に立ち上がる。南東部は段から立ち上がったあと角度を緩やかに変え、大きく外傾したまま確認面に至る。さほど深くはないが、井戸の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第２・第３層は炭化物を含む。全体に緻密であり自然堆積と考えるが、第２層には礫や小礫が多量に含まれるほか遺物も集中しており、第２層堆積時に人為的な堆積行為があった可能性が指摘できる。　**遺物**　遺物は土師質土器と石製品主体で、覆土第２層中から礫、小礫とともに出土する。図化した遺物は土師質土器小皿１点、内耳土器３点、丸瓦２点、石臼３点、砥石１点である。完形の小皿１は底面上 67cm から正立の状態で、内耳土器２・４はともに底面上 70cm から出土する。丸瓦５・６と砥石 10 は重複する SI-731 や近隣の SI-756 からの混入の可能性が高い。図化以外には土師器坏片 22 点（400 ｇ）、甕片 23 点（410 ｇ）、内耳土器片５点（280 ｇ）、須恵器片６点（380 ｇ）がある。中世の土坑と考えられ、内耳土器からみると 15 世紀頃となろう。

ＳＫ－８７４（第 228・321 図、第 262 表、図版四三・六三）

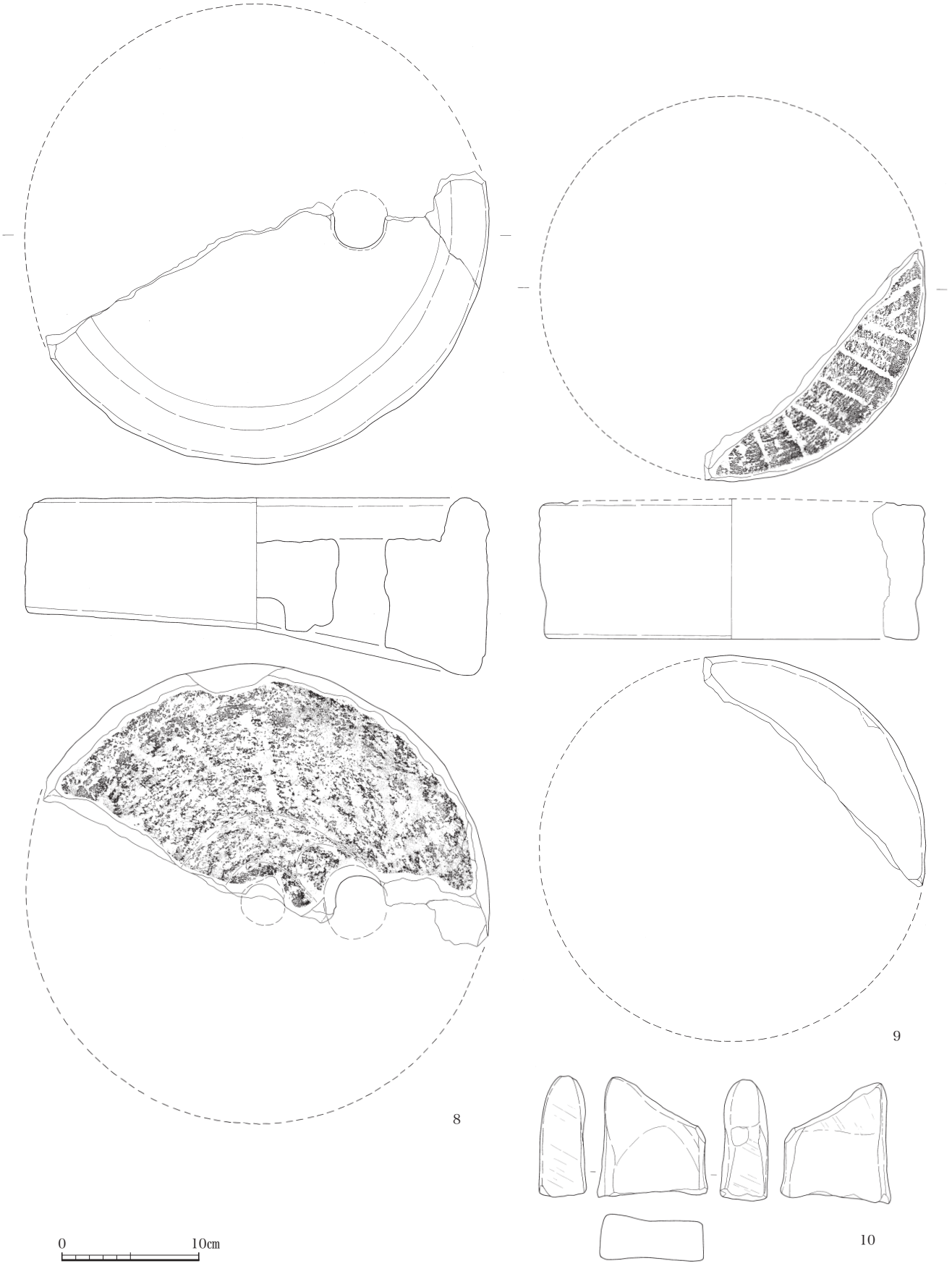
位置　Ⅶ区調査区の北部、Ｍ－ 31 グリッドに位置する。北３m に SD-758 があり、これ以外に隣接する遺構はない。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.06m、短径 0.94m、深さ 0.72m である。底面は丸みを持ち、壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。東部の壁中位は 10cm ほど抉れているが、



第 321 図　和田遺跡　中・近世土坑出土遺物実測図（１）

当初からの形状ではなく、この部分の地山が砂礫質のため崩落した結果と考えられる。さほど深い土坑ではないが、井戸の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は５層で各層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。

遺物　図化した遺物は土師質土器の小皿１点で、これ以外には土師器坏片１点（８ｇ）のみである。小皿は器高が低く底部が厚い形状であり、法界寺編年Ⅲ期（13 世紀末から 14 世紀中頃）とみられる。小皿の年代を本遺構の時期と考える。



第 322 図　和田遺跡　中・近世土坑出土遺物実測図（２）

第 257 表　和田遺跡　SK-16 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 土器 小皿	口　6.8 高　2.0 底　3.8 重　30.4	手づくね成形。内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。外面口縁～体部ヨコナデ、底部ケズリ、口唇部にスス付着、灯明皿として使用。外面 3/4、内面のほとんどが黒褐色を呈する。	2.5Y8/1　灰白 緻密　白細粒微量 やや硬質	北壁際底面上 20 ㎝ ほぼ完形 No.1
2 青磁 碗	口　復 14.0 高　残 3.9	内面口縁～体部ロクロナデ、全面施釉。外面口縁～体部鎬蓮弁文、全面施釉。龍泉窯系。	5GY7/1　明オリーブ灰 緻密　黒微粒少量 硬質	中央部底面直上 口一部 No.2

第 258 表　和田遺跡　SK-28 出土遺物観察表

1 陶器 甕	高　残 4.3	内面同心円当具痕。外面平行叩き、自然釉付着。	10YR4/1　灰褐 緻密　白粗～微粒多量 硬質	覆土 胴一部
2 瓦 平瓦	長　残 7.0 幅　残 4.4 厚　0.9 重　残 45.2	凹面布目痕後側縁わずかにケズリ。凸面ナデ後側縁わずかにケズリ。側面ケズリ。	10YR8/1　灰白 緻密　白礫微量 やや硬質	覆土 破片

第 259 表　和田遺跡　SK-554 出土遺物観察表

1 瓦質土器 小型壺	口　復 12.3 高　残 3.6	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。	N4/0　灰 緻密　白微粒少量 やや軟質	覆土 口破片

第 260 表　和田遺跡　SK-763 出土遺物観察表

1 瓦 平瓦	長　残 10.3 幅　残 7.8 厚　1.3 重　残 143.0 高　残 3.7	凹面ナデ、側縁幅 2 ㎝ほどをケズリ後丁寧なナデ。凸面ナデ、側縁幅 1 ㎝ほどをケズリ後丁寧なナデ。側面ケズリ後ナデ。広端面ケズリ後ナデ。表面燻化により灰色を呈する。	5Y4/1　灰 緻密　砂微粒少量 硬質	覆土 破片

第 261 表　和田遺跡　SK-849 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 土器 小皿	口　6.2 高　1.9 底　3.0	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ナデ。口唇部にスス付着。灯明皿転用。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　黒・赤褐微粒微量、黒・赤褐細粒微量 硬質	北西部底面上 67 ㎝、正立 ほぼ完形 No.2
2 土師質 土器 内耳土器	口　復 33.4 高　復 17.0 底　復 23.2	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部下端ケズリ、底部ケズリ後ナデ。内耳数 2 点以上（1 点は剝離）外面口縁～体部スス付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　黒・白微粒多量、白細粒少量 硬質	北西部底面上 70 ㎝ 口～底破片 No.1
3 土師質 土器 内耳土器	口　復 30.6 高　残 6.2	ロクロ成形。内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ。外面全面にスス付着。	10YR5/2　灰黄褐 緻密　黒細～微粒少量、白細粒少量、砂礫微量 硬質	覆土 口～体破片
4 土師質 土器 内耳土器	高　残 2.1 底　復 22.0	内面体部下端～底部ロクロナデ。外面胴部下端ケズリ後ナデ、底部ケズリ後細いナデ。板目状圧痕あり。	7.5YR5/4　にぶい褐 緻密　黒・白微粒多量、黒・白細粒少量、赤褐細粒微量 硬質	北西部底面上 70 ㎝ 体下端～底 1/4 No.1
5 瓦 丸瓦	長　残 5.4 幅　残 3.9 厚　1.4 重　82.4	内面布目痕、側面と平行するケズリあり。外面ナデ、側縁ケズリ。側面ケズリ。混入だろう。	10YR5/2　灰黄褐 緻密　白微粒多量、黒・白細粒少量、白礫微量 硬質	覆土 破片

6 瓦 丸瓦	長　残 5.0 幅　残 4.6 厚　1.3 重　53.0	内面布目痕後側縁ケズリ。外面ケズリ、側縁ケズリ。側面ケズリ。混入だろう。	5Y6/1　灰 緻密　白微粒多量、白細粒少量、白粗粒微量 硬質	覆土 破片
7 石製品 石臼	口縁 復 28.2 高　13.0 底　19.4 厚　2.5～7.6 重　5,300.0	下臼。すり鉢状。使用面である内面と口縁部上面は研磨されているが凹凸も残る。底面及び側面は整形加工時の凹凸をそのまま残す。	N4/0　灰 やや粗い　花崗岩	南東部底面上 68 ㎝、72 ㎝が接合 口 1/6、体上半～底 2/3 No.5・6・7
8 石製品 石臼	高　13.0 最大 復 33.8 重 残 5,600.0	上臼。下面は使用による研磨あり。片側がやや薄い。上面・側面とも比較的丁寧に整形されている。貫通孔の孔径 3.8 ㎝、下面中央のくぼみは径 3.8 ㎝、深さ 2.0 ㎝。	7.5Y6/1　灰 やや粗い　花崗岩	北西部中央底面上 67 ㎝ 1/2 No.4
9 石製品 石臼	高　残 10.0 最大 復 28.2 重 残 1,951.8	下臼。上面は放射状の線刻あり。使用による研磨あり。8 と組み合わせと見られる。側面・下面は整形時の凹凸を顕著に残す。	10Y6/1　灰 粗い　花崗岩	中央部底面上 35 ㎝ 破片 No.8
10 石器 砥石	長　残 8.8 幅　8.0 厚　3.3 重　319.8	平面不正方形。断面長方形。長方形の板状を呈する。表・裏・両側面に研磨あり。長方形の大形の砥石の破片を再利用したものと考えられる。下端が欠損面で、やや磨滅している。左右両側面と裏面上端には、砥石整形時の加工痕が残る。	5Y6/3　オリーブ黄 緻密　砂岩	北西部底面上 70 ㎝ 完形 No.3

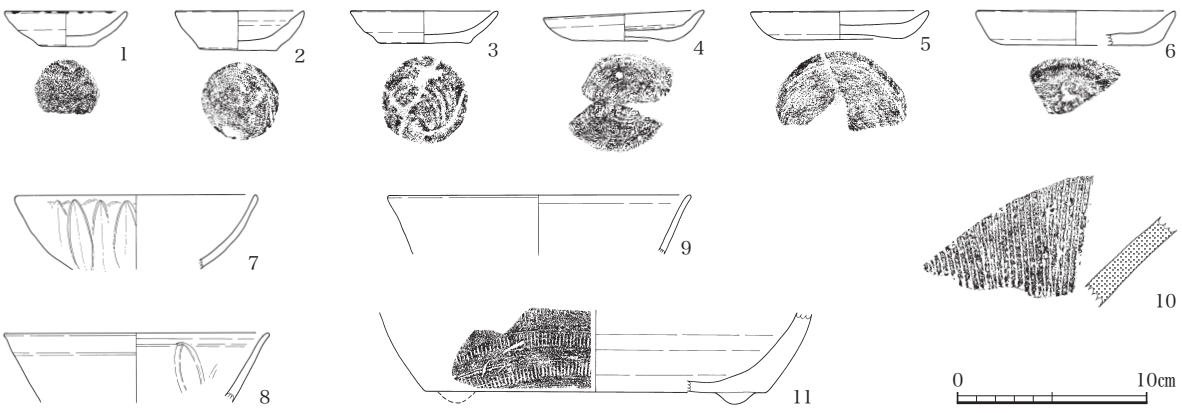
第 262 表　和田遺跡　SK-874 出土遺物観察表

1 土師質 土器 小皿	口　9.8 高　2.1 底　6.9	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整で植物の茎の様な圧痕があるほか直径 1 ㎝の粘土塊付着。口縁部は歪む。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤褐細粒少量、灰褐微粒少量 やや軟質	覆土 口～底 3/4

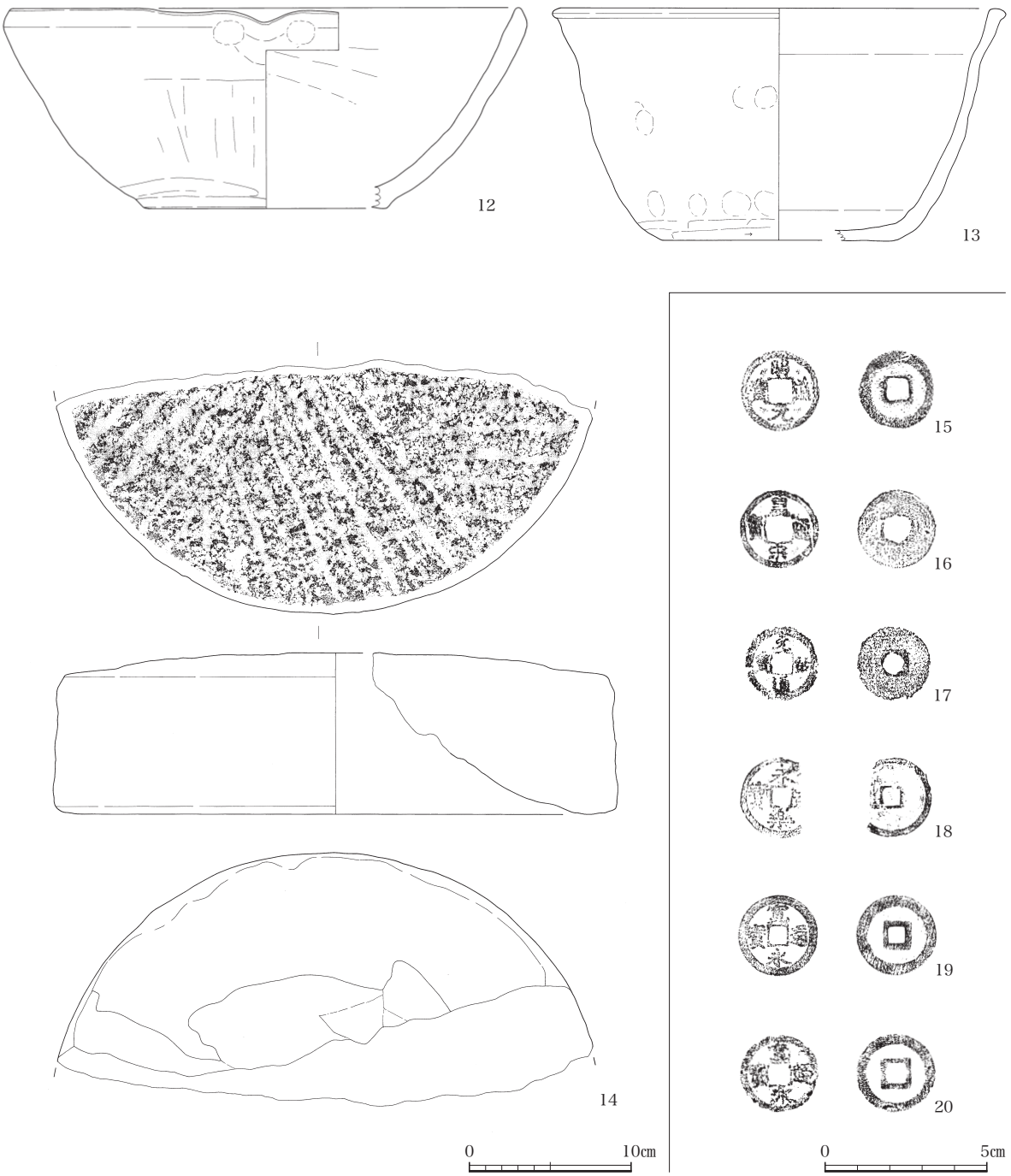
4 . その他の遺構・遺物（第 323・324 図、第 263 表、図版六三・六四）

中・近世に位置づけられる遺物は、古代の遺構内や表土中などから少量出土している。図化した遺物は、土師質土器 7 点（小皿 6 点、内耳土器 1 点）、青磁碗 3 点、陶器 3 点（擂鉢 1 点、火鉢 1 点、片口鉢 1 点）、石臼 1 点、古銭 6 点である。小皿 4 ・ 6 は 13 ～ 14 世紀とみられ、近い時期の遺物としては青磁碗 7 ・ 8 ・ 9 、片口鉢 12 などがある。小皿 1 ・ 2 や内耳土器 13 はそれよりもやや新しく、14 ～ 15 世紀頃と考えられる。小皿 4 は中世、小皿 1 や擂鉢 10、火鉢 11 は近世であろう。石臼 14 も近世であろうか。擂鉢 10 と火鉢 11 はともに O-24・25 グリッドからの出土で、同地点からは染付のある磁器片も出土するなど近世遺物がまとまっており、何らかの遺構があった可能性がある。銭貨は、中世から近世までの 6 枚がある。出土地点が同じものはなく、調査区内各所から出土している。

図化しなかった遺物はすべて破片で、陶器類が多く計 33 点 967 ｇ（甕 19 点 695 ｇ、皿 4 点 145 ｇ、碗 5 点 31 ｇ、鉢 1 点 28 ｇ、擂鉢 1 点 24 ｇ、壺 1 点 10 ｇ、瓶類 1 点 24 ｇ、徳利 1 点 10 ｇ）、磁器は壺 1 点（10 ｇ）である。



第 323 図　和田遺跡　中・近世出土遺物実測図（1）



第 324 図　和田遺跡　中・近世出土遺物実測図（2）

第 263 表　和田遺跡　中・近世出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 土器 小皿	口　復 6.4 高　1.8 底　復 2.8	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部ケズリ。口縁部スス付着。灯明皿転用。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒赤微粒多量 硬質	F-27、G-26・27 グリッド 口～底 1/3 F-27
2 土師質 土器 小皿	口　6.9 高　2.1 底　4.1 重　44.2	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切離し後無調整。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　黒細粒少量、赤褐細粒微量 やや硬質	O-24 グリッド ほぼ完形 O-24

3 土師質 土器 小皿	口　7.8 高　1.7 底　4.8	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切離し後無調整。	10YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白粗粒少量、砂礫微量 やや軟質	K-20 グリッド ほぼ完形 K-20
4 土師質 土器 皿	口　8.5 高　1.6 底　5.2	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り離し後無調整。上げ底で全体にひずむ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒多量、灰粗～細粒少量 やや硬質	K-19 グリッド 口～底 2/3 S-622 No.2・4
5 土師質 土器 小皿	口　復 9.4 高　1.5 底　復 6.6	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切離し後無調整。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　灰粗粒微量、赤褐粗～細粒少量、白礫～粗粒微量 硬質	K-21 グリッド 口～底 1/2 K-21
6 土師質 土器 小皿	口　復 10.6 高　残 1.8 底　復 7.8	ロクロ成形。内面口縁～底部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切離しか？	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒微粒多量、赤褐粗粒少量、白礫～粗粒微量 硬質	K-20 グリッド 口～底 1/5 K-20
7 青磁 碗	口　復 12.8 高　残 4.0	内面口縁～体部ロクロナデ。外面口縁～体部ロクロナデ、体部鎬蓮弁文。全面施釉。	7.5GY6/1　オリーブ灰 緻密　灰黒細粒微量 硬質	M-29 グリッド 口～体破片 M-29
8 青磁 碗	口　復 16.0 高　残 3.1	内面口縁～体部ロクロナデ、口縁部に浅く細い沈線あり。外面口縁～体部ロクロナデ。全面施釉。貫入細かく入る。	2.5GY6/1　オリーブ灰 緻密　灰黒細粒微量 硬質	M-29 グリッド 口～体破片 M-29
9 青磁 碗	口　復 14.0 高　残 3.7	内面口縁～体部ロクロナデで体部に蓮弁文、口縁部に浅い沈線あり。外面口縁～体部ロクロナデ、口縁２条の細線あり。内外口縁～体部全面施釉、貫入入る。	10GY6/1　緑灰 緻密　灰褐細粒微量 硬質	N-29 グリッド 口～体破片 N-29
10 陶器 擂鉢	高　残 5.4	内面擂目は 12 条一組。	5YR5/4　にぶい赤褐 緻密　白粗～細粒少量、砂礫微量、砂粗～細粒少量 硬質	O-24・25 グリッド 体破片 ㊽カクニン面
11 陶器 火鉢	高　残 4.8 底　復 18.0	瓦質。内面体～底部ロクロナデ。外面体部縦の細線施文後回転ケズリ、底部足貼り付け。	N3/0　暗灰 緻密　白・黒細粒少量 硬質	O-24・25 グリッド 体～底破片 ㊽カクニン面
12 陶器 片口鉢	口　復 31.4 高　12.4 底　復 15.0	瓦質。内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデ、口縁部下７㎝くらいから下は使用により研磨され、平滑な面となっている。外面口縁ヨコナデ、体部ナデ、体部下端～底部強いナデ。口縁部の注口わきに指頭圧痕あり。	N6/0・N5/0　灰 緻密　黒褐粗粒少量、黒・白細粒少量 硬質	N-29 グリッド 口縁～底 1/8 N-29
13 土師質 土器 内耳土器	口　復 28.0 高　14.3 底　復 14.2	内面口縁～底部横方向のナデ。外面口縁～胴部横方向のナデで指頭圧痕あり。胴部下端ケズリ、底部ケズリ後ナデ。	7.5Y2/1　黒 緻密　白細～微粒少量 硬質	G-27・28 グリッド、標高 60.1m 口～胴 1/5、底一部 No.4・5・6・7
14 石器 石臼	長　残 15.1 幅　残 34.6 厚　残 10.0 重 残 6,000.0	下臼。上面には放射状の刻線が施され使用面による研磨あり。側面は比較的丁寧に加工されているが、底面は凹凸が目立っており、やや粗い加工。下面中央は欠損する。	N7/0　灰白 やや緻密　花崗岩	SI-728 付近、表土 1/2 SI-728 付近・表土
15 青銅製品 古銭	直径　2.52	開元通宝		Q-11 グリッド 完形 Q-11
16 青銅製品 古銭	直径　2.44	皇宋通宝		K-31 グリッド 完形 K-31
17 青銅製品 古銭	直径　2.37	元祐通宝		P-19・20 グリッド 完形 58
18 青銅製品 古銭	直径　2.48	永楽通宝		G -27,28,29　H -28,29 グリッド 3/4 ⑰
19 青銅製品 古銭	直径　2.51	寛永通宝		P-641 覆土 完形 P-641 覆土
20 青銅製品 古銭	直 径　2.48	寛永通宝		I～K-18・19、K-19・20 完形 ㉛・㉜・㉝・㉞

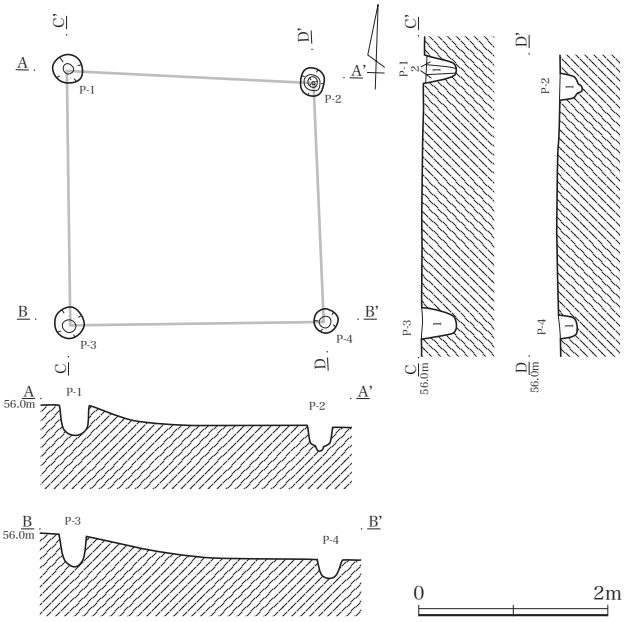
第５節　時期不明

１. 掘立柱建物跡

ＳＢ－１００（第 325 図、図版四三）

位置　Ⅴ区中央部の台地平坦面、Ｎ－ 10・11 グリッドに位置する。北西 4.5m に SI-90 があるほかは、隣接する遺構はない。　重複　なし。遺構中央付近から東側は耕作により浅く撹乱されているため、P- ２・４の確認面は低くなっている。

形状・規模　桁行１間（2.63 ～ 2.75 m）、梁間１間（2.54 ～ 2.74 m）の建物で、南北の中軸線はＮ－５°－Ｗである。柱穴は４本あり、配置は方形である。P- １は 31 × 31cm、深さ 35cm、P- ２は 29 × 26cm、深さ 28cm、P- ３は 35 × 32cm、深さ 36cm、P- ４は 26 × 25cm、深さ 23cm である。標高で比較すると、東側の２本の方が西側の２本より深く掘り込まれていることがわかる。P- １では柱痕が土層で確認できており、それからすると柱の直径は約 10cm となる。　遺物　出土遺物はない。



SB-100　P- 1
1　明褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-100　P- 2
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-100　P- 3
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-100　P- 4
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 325 図　和田遺跡　SB-100 実測図

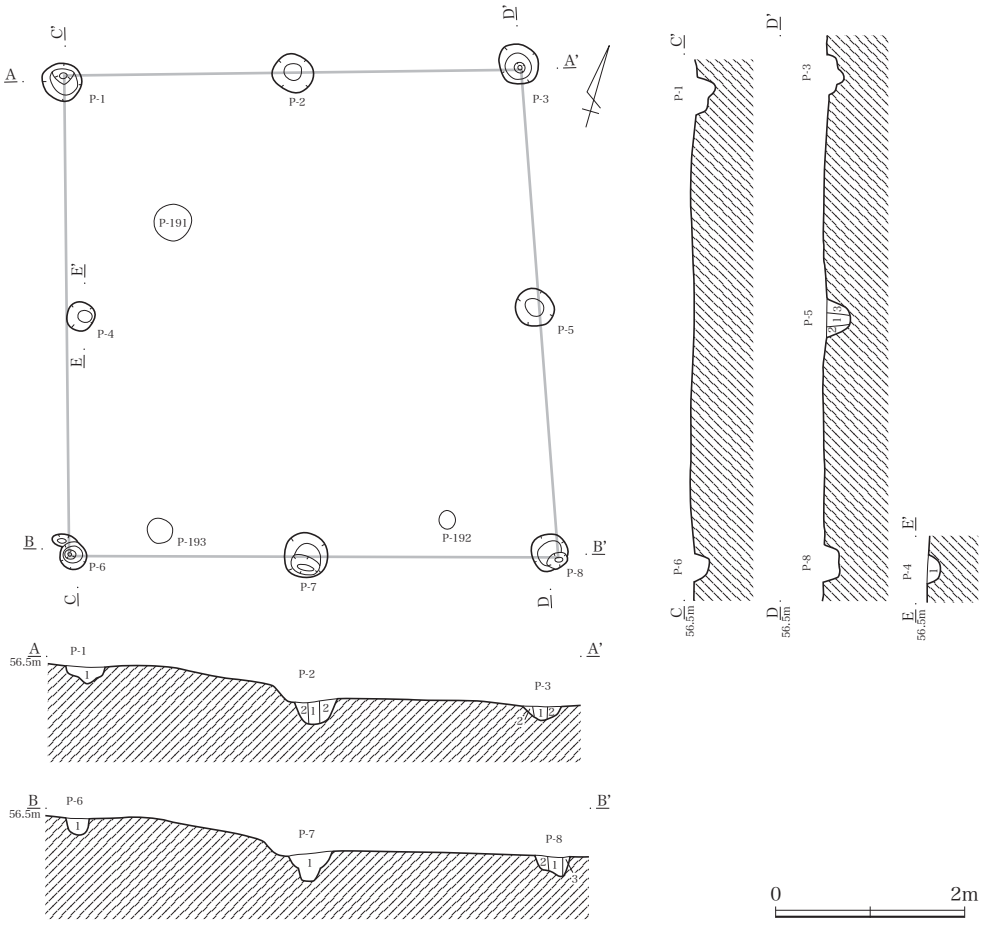
ＳＢ－１０１（第 326 図、図版四三）

位置　Ⅴ区北半の台地平坦面、Ｐ－ 11・12 グリッドに位置する。南 1.5m に SK-110、南西 2.8m に SI-89 が隣接してある。　重複　なし。遺構範囲内に P-191・192・193 があるが、本遺構とは関連しないと考える。遺構中央付近から東側は耕作により浅く撹乱されているため、P- ２・３・５・７・８の確認面は西側の P- １・４・６より 30cm 以上低くなっている。　形状・規模　南北棟の可能性がある。桁行２間（5.10 ～ 5.25 m）、梁間２間（4.26 ～ 5.20 m）の側柱建物で、南北の中軸線はＮ－ 18°－Ｗである。柱穴は８本あり、配置は方形で P- ４はやや内側に入り込む。柱間は桁行 2.55 ～ 2.70 m、梁間 2.40 ～ 2.70 mである。P- １は 43 × 44cm、深さ 23cm、P- ２は 45 × 40cm、深さ 24cm、P- ３は 46 × 42cm、深さ 17cm、P- ４は 32 × 30cm、深さ 14cm、P- ５は 42 × 40cm、深さ 25cm、P- ６は 36 × 28cm、深さ 18cm、P- ７は 48 × 46cm、深さ 28cm、P- ８は 40 × 40cm、深さ 20cm である。標高で比較すると、東側の５本の方が西側の３本より 40cm ほど深く掘り込まれていることになるため、西側の P- １・４・６と東側の５本は別遺構の可能性もあろう。柱痕は P- ２・３・５・８で確認できており、それからすると柱の直径は 10 ～ 16cm となる。

遺物　出土遺物はない。

ＳＢ－２３４（第 315・327 図、第 264 表、図版四三・六七）

位置　Ⅵ区調査区の北部、Ｏ－ 17・18、Ｐ－ 17 グリッドに位置する。南に SI-209a・b・c、SK-839 が近接し、

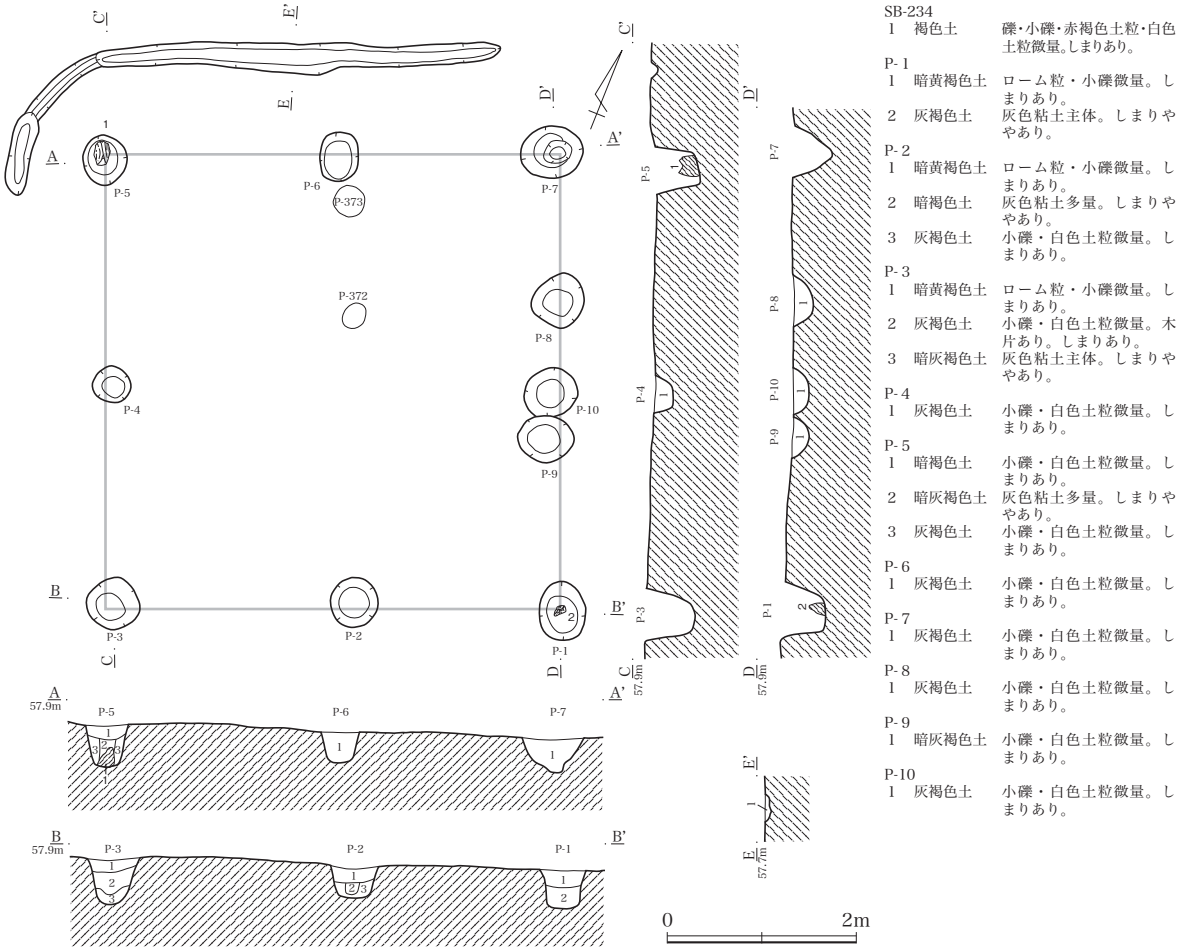


SB-101　P- 1
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒少量。しまりあり。
SB-101　P- 2
1　明褐色土　ローム粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-101　P- 3
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　ローム粒少量、炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-101　P- 4
1　暗褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

SB-101　P- 5
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-101　P- 6
1　褐色土　　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
SB-101　P- 7
1　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-101　P- 8
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
2　褐色土　　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
3　明褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。

第 326 図　和田遺跡　SB-101 実測図

南西 1 m に SK- 620・328 が隣接してある。　**重複**　範囲内に P-372・373 がある。柱穴と重複しないため、新旧関係は不明である。北側の溝は当初別遺構としていたものだが、柱穴列に沿ったあり方から本遺構に伴うものと考えた。　**形状・規模**　桁行２間（4.71 ～ 4.92m）、梁間２間（4.63 ～ 4.81 m）の側柱建物で、南北方向の中軸線はＮ－ 22 °－Ｗである。柱穴は８本に加え東辺に P-8・９があるため、計 10 本となる。配置は方形で、柱間は桁行 2.34 ～ 2.56 m、梁間 4.63 ～ 4.81 mである。P-1 は 62 × 49cm、深さ 45cm、P-2 は 54 × 50cm、深さ 52cm、P-3 は 54 × 53cm、深さ 52cm、P-4 は 48 × 38cm、深さ 22cm、P-5 は 54 × 46cm、深さ 47cm、P-6 は 51 × 40cm、深さ 32cm、P-7 は 67 × 55cm、深さ 40cm、P-8 は 56 × 53cm、深さ 20cm、P-9 は 60 × 50cm、深さ 20cm、P-10 は 58 × 50cm、深さ 18cm である。四隅にあたる P-1・３・５・７が深く、各辺中央付近に配置されるものはやや浅い。P-1・５には柱材の最下部が残存しており、柱の位置のほか使用された木材の特徴や規模などが確認できる。柱穴以外では、北東隅～北辺で、柱穴から 58 ～ 65cm 離れた位置に巡っている溝がある。断面は開いた「Ｕ」字状で、幅は 18 ～ 33cm、深さは 67cm である。



第 327 図　和田遺跡　SB-234 実測図

第 264 表　和田遺跡　SB-234 出土遺物観察表

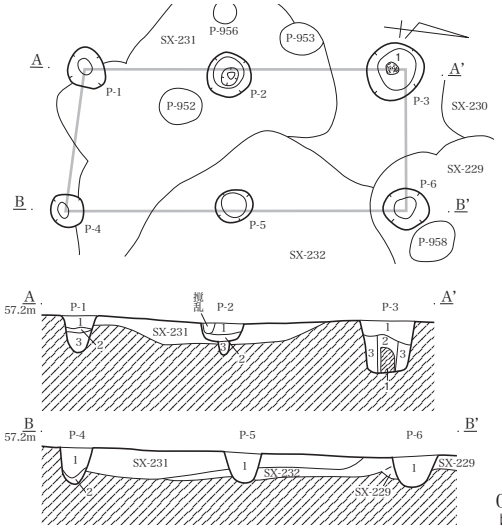
番号 種類 器種	法量 (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 柱材	高　残 24.6 径　27.2 × 19.0	分割材（芯去角材？）。側面を多角形状に加工。底面は平坦で砂がくい込む。底面の一部は斜めに加工され、ここにも僅かに砂が食い込む。底面に加工痕あり。分析試料 No. 3。	クリ	P-5、底面直上 柱下部 P-5
2 木製品 柱材	高　残 15.9 径　残 16.1 × 10.2	分割材か？底面はほぼ平坦。分析試料 No.15。	クリ	P-1、底面直上 柱下部 P-1

遺物　P- 1・P- 5から柱材の最下部が出土する。P- 5出土の 1 は分割材で、側面は多角形状に加工される。2点ともクリ材で、ピットの底面直上から出土する。土器類の出土遺物はない。

ＳＢ－５０８（第 315・328 図、第 265 表、図版四三・四四・六八）

位置　Ⅵ区北東部の台地平坦面、Ｐ－ 15、Ｑ－ 15 グリッドに位置する。北に SX-230・P-958、西に P-953・954・955・956・957、東に P-959 が近接し、北 1 m に SD-242、南東 1 m に SK-828 が隣接してある。

重複　SX-229・231・232 を切る。範囲内には P-952 があるが、新旧関係は不明である。　形状・規模　南北棟であり、桁行２間（3.12 ～ 3.30m）、梁間 1 間（1.36 ～ 1.54 m）の側柱建物である。南北方向の中軸線はＮ－８°－Ｗである。柱穴は６本で、P- 1 が北に寄っているため配置はややいびつな長方形となる。柱間



SB-508
P- 1
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　ローム粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　小礫微量。しまりあり。
P- 2
1　明褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土粒多量。しまりあり。
P- 3
1　暗褐色土　ローム粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　暗灰褐色土　灰色粘土粒主体。しまりあり。
3　灰褐色土　灰色粘土粒多量。しまりあり。
P- 4
1　灰褐色土　小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
2　明褐色土　ローム粒少量。しまりあり。
P- 5
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。
P- 6
1　暗褐色土　炭化物粒・小礫・赤褐色土粒・白色土粒微量。しまりあり。

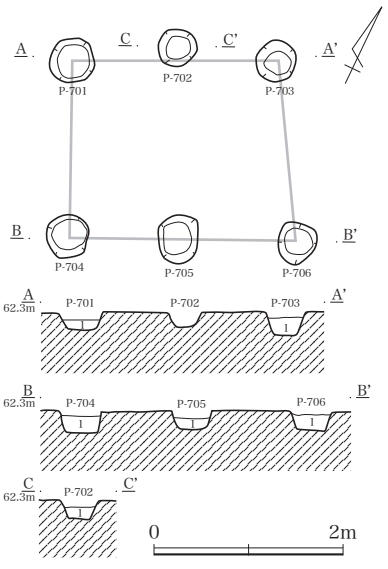
第 328 図　和田遺跡　SB-508 実測図

第 265 表　和田遺跡　SB-508 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 柱材	高　残 23.2 径　22.3 × 20.5	芯持丸木。側面を多角形状に加工している。底面は平坦で砂が食い込み、加工痕明瞭に残る。分析試料 No.18。	クリ	P-3、底面直上 柱下部 P-3

は桁行 1.31 ～ 1.75 ｍで、P-1 － P-2 間が狭い。P-1 は 45 × 38cm、深さ 39cm、P-2 は 46 × 46cm、深さ 24cm、P-3 は 63 × 57cm、深さ 55cm、P-4 は 35 × 34cm、深さ 39cm、P-5 は 40 × 34cm、深さ 32cm、P-6 は 50 × 44cm、深さ 33 ㎝である。北西隅にある P- 3 が最も規模が大きく、四隅に相当する P-1・3・4・6 が深く掘り込まれる。P-2 では柱痕とみられる一段深く掘り込まれる部分があり、直径は 12cm、１段目底面からの深さは 15cm である。柱痕は明瞭なのは P- 3 のみで、土層からみた柱痕部分の直径は約 20cm である。P- 3 には柱材の最下部が残存しており、柱材上端の標高は 56.75m である。

遺物　P- 3 から柱材の最下部が出土する（１）。樹種はクリ材である。土器類は全ての柱穴からわずかに出土するが、何れも小破片のため図化し得ない。出土遺物は、土師器坏片 6 点（40 ｇ）、甕片 16 点（240 ｇ）である。内面黒色処理の土師器坏や「コ」の字状口縁の武蔵型甕など 9 世紀の様相を示す遺物もあるが、重複する SX-229 などからの混入とも考えられる。9 世紀前葉頃とみられる SX-229 を切るためそれ以降の建物となるが、明確な年代は不明である。



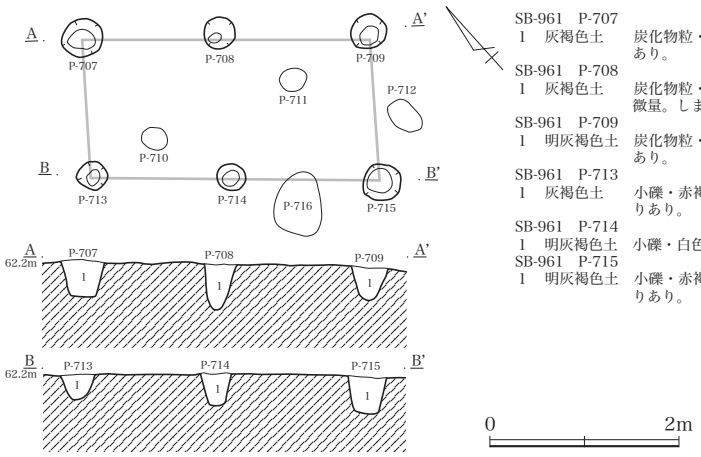
SB-960　P-701
1　灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-960　P-702
1　明灰褐色土　小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-960　P-703
1　明灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-960　P-704
1　灰褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。
SB-960　P-705
1　灰褐色土　炭化物粒・小礫・白色土粒微量。しまりあり。
SB-960　P-706
1　灰褐色土　炭化物粒・白色土粒微量。しまりあり。

第 329 図　和田遺跡　SB-960 実測図

ＳＢ－９６０（第 329 図、図版四四）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－37、Ｊ－36・37 グリッドに位置する。東

５ｍにSB-961、北４ｍにSX-700が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　P-701 ～ 706からなる東西棟で、桁行２間（2.17 ～ 2.23m）、梁間１間（1.85 1.90 m）の側柱建物である。中軸線はＮ－ 64 °－Ｅで柱穴は６本あり、配置は長方形である。柱間は桁行 1.07 ～ 1.25 m、梁間 1.85 2.02 mである。P-701は 48 × 45cm、深さ 18cm、P-702は 42 × 38cm、深さ 19cm、P-703は 43 × 43cm、深さ 24cm、P-704は 45 × 45cm、深さ 23cm、P-705は 52 × 43cm、深さ 18cm、P-706は 44 × 41cm、深さ 20cmであり、６本とも規模は良く類似している。柱痕は土層からは確認できない。P-701・702以外は、覆土中に炭化物を含む。　**遺物**　出土遺物はない。



第 330 図　和田遺跡　SB-961 実測図

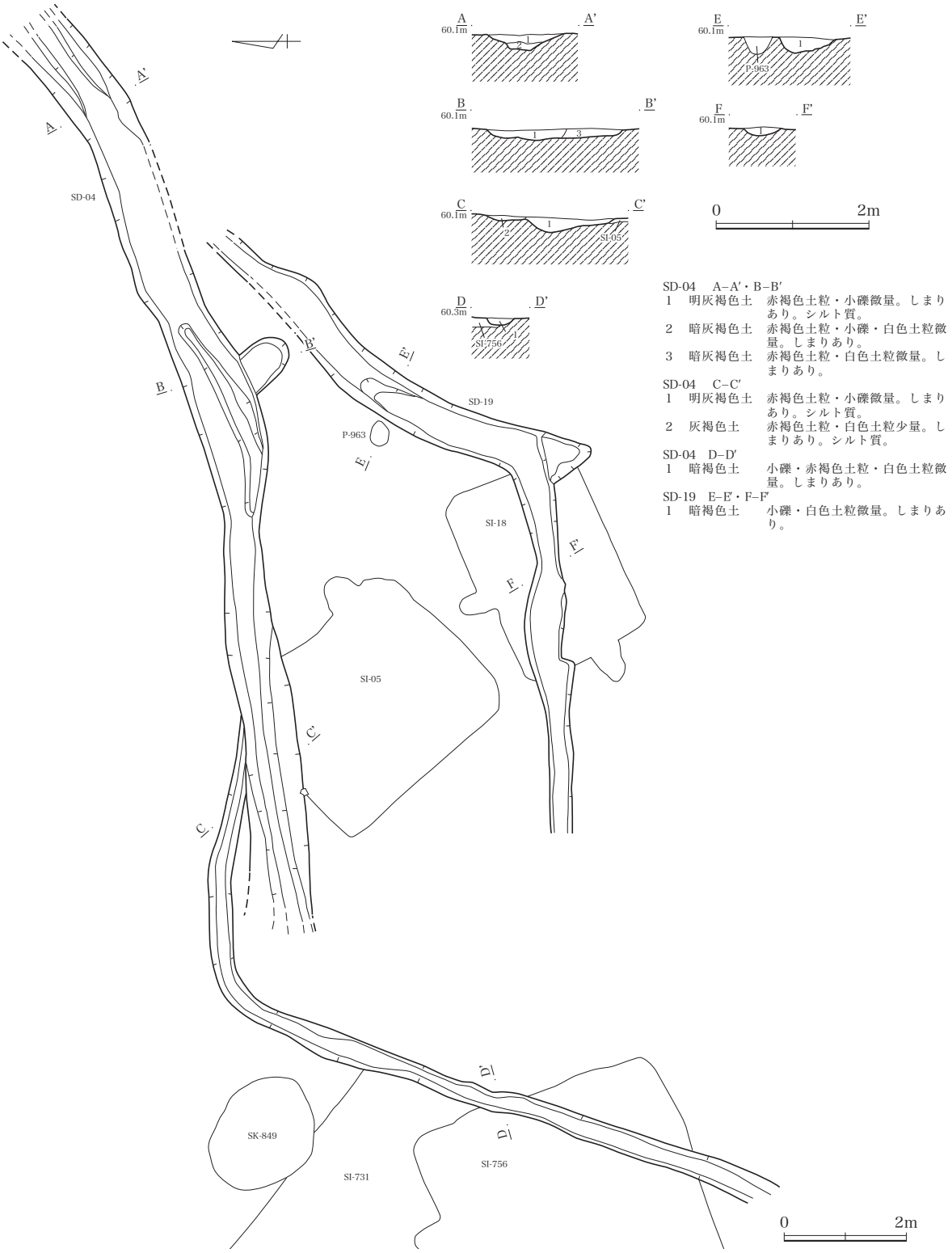
ＳＢ－９６１（第 330 図、図版四四）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－ 36、Ｊ－ 36 グリッドに位置する。西５ｍにSB-960、東４ｍにSI-755が隣接する。　**重複**　なし。　**形状･規模**　P-707 ～ 709･713 ～ 715からなる、桁行２間（3.05 ～ 3.06m）、梁間１間（1.50 ～ 1.54 m）の側柱建物である。中軸線はＮ－ 49 °－Ｗ　で柱穴は６本あり、配置は細長い長方形である。柱間は桁行 1.43 ～ 1.65 m、梁間 1.50 1.54 mである。P-707は 43 × 39cm、深さ 39cm、P-708は 34 × 34cm、深さ 47cm、P-709は 36 × 36cm、深さ 35cm、P-713は 34 × 30cm、深さ 27cm、P-714は 30 × 28cm、深さ 33cm、P-715は 38 × 38cm、深さ 40cmである。柱痕は土層からは確認できない。P-707 ～ 709の３本は、覆土中に炭化物を含む。　**遺物**　出土遺物はない。

２.溝

ＳＤ－４（第 331 図、図版四四）

位置　Ｉ区東部及びⅦ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 28、Ｈ－ 26・27・28 グリッドに位置する。南にSD-19が近接し、南３ｍにSK-24・34・33がある。　**重複**　SI- 5とSI-731・756を切る。　**形状・規模**　Ｌ字状の溝で、Ｉ区で調査した東半の幅広な部分と、主にⅦ区で調査した西半の細い部分とからなる。幅広な部分の中軸線はＮ－ 78°－Ｅで、長さは 15.50m、幅は 0.58 ～ 1.1m、底面の幅は 0.10 ～ 0.74m、深さは 0.13 ～ 0.40mである。西側へはさらに続いていた可能性があるが、遺構確認面が低いⅦ区では確認できなかったため、Ｉ区調査区の境界が遺構西端となっている。東端は撹乱を受けている。断面形は皿状で、底面は湾曲する部分が多い。西半の細い部分の南北中軸線はＮ－ 20°－Ｅである。東端で幅広な部分へと合流するが、細い部分の方が新しいことが土層観察で判明している。長さは 14.29m、幅は 0.28 ～ 0.48m、底面の幅は 0.08 ～ 0.30m、深さは 0.07 ～ 0.10mである。断面形は皿状で、底面は平坦である。双方をあわせると、全体の



第 331 図　和田遺跡　SD- 4・19 実測図

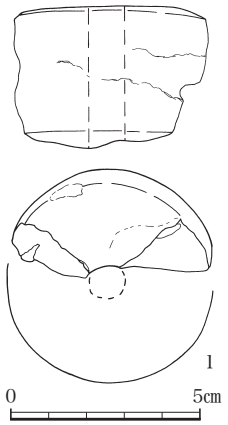
長さは 25.55m となる。底面の標高を確認すると、幅広の部分で約 0.20m、全体では 0.40m の高低差を持って西側が高くなっており、西から東へと水を流すための溝とも考えられよう。　**覆土の状態**　覆土は、西側の細い部分では小礫などを含む暗褐色土だが、東側の幅広な部分は水分が絶えない状況のためか、灰褐色を

呈するシルト質の土壌が堆積する。ともに緻密な覆土であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物は陶器片１点（50 ｇ）のみであり、図化し得た遺物はない。

ＳＤ－１９（第 331・332 図、第 266 表、図版四四）

位置　Ｉ区東部及びⅦ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 26・27、Ｈ－ 26 グリッドに位置する。北に SD- 4、SK-30・33、南に SK-28 が近接し、北 1m に SI- 5 が隣接してある。

重複　SI-18 を切り、SK-29 に切られる。　形状・規模　Ｌ字状の溝で、東西方向に延びる部分の中軸線はＮ－ 85°－Ｅ、東半はＮ－ 33°－Ｅであり、長さは確認できる部分で約 13.05m である。西側へはさらに続いていた可能性があるが、遺構確認面が低いⅦ区では確認できなかったため、Ｉ区調査区の境界が遺構西端となっている。東端も遺構確認面が低いことから、掘り込みは明確にし得ない。断面形は皿状で、底面は湾曲する。幅は 0.28 ～ 0.73m、底面の幅は 0.20 ～ 0.53m、深さは 0.12 ～ 0.22m である。底面の東西両端の標高をみると約 0.27m の高低差を持って西側が高くなっており、西から東へと水を流すための溝とも考えられる。SD- 4 へと合流する溝の可能性もあろうか。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土錘１のみ図化したが、本遺構に伴うかどうかは不明である。これ以外に出土した土師器坏片４点（50 ｇ）、甕片４点（10 ｇ）、須恵器坏片１点（30 ｇ）、陶器甕片１点（20 ｇ）は、重複する遺構からの混入と見られる。



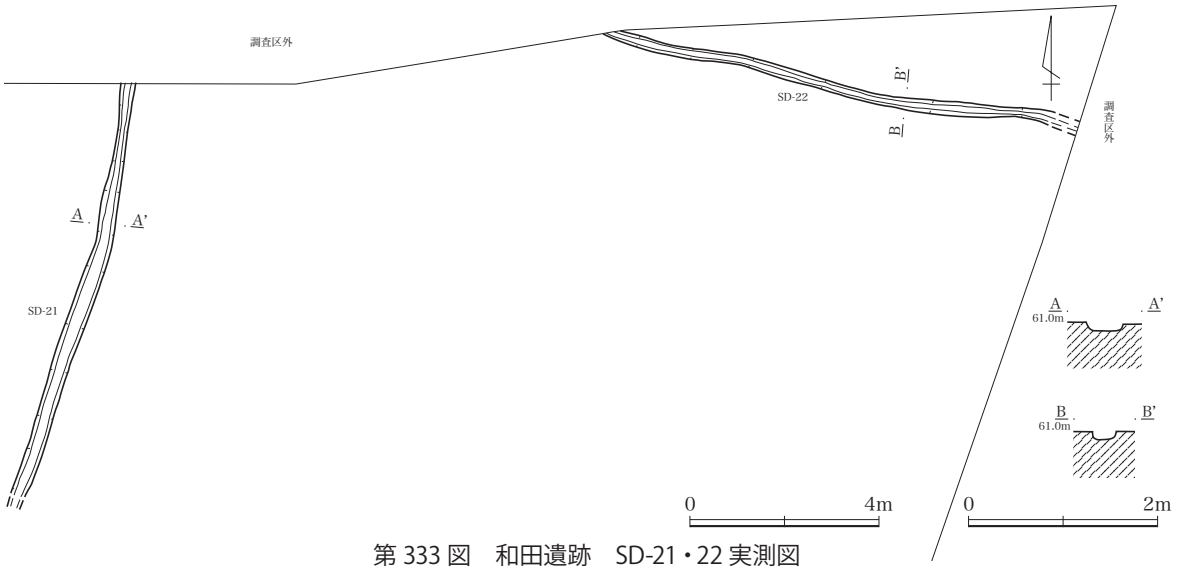
第 332 図　和田遺跡
SD-19 出土遺物実測図

第 266 表　和田遺跡　SD-19 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （cm・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土製品 土錘	長　残 5.3 幅　残 2.9 厚　3.7 重　残 50.4	外面ナデ、上面ナデ、底面ナデ、棒状の圧痕あり。中央に孔が貫通し、孔径およそ１cmと推定される。全体形は中央がやや括れる円柱状で直径は約 5.4 cmと推定。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒・白礫微量 硬質	覆土 1/2 No.1

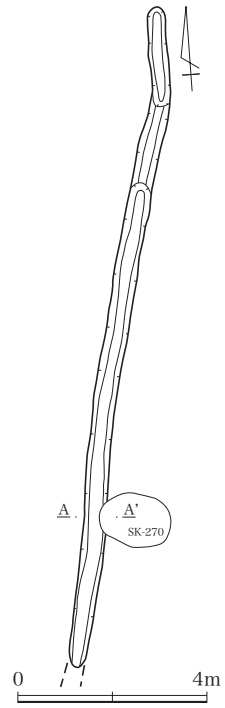
ＳＤ－２１（第 333 図、図版四四）

位置　Ｉ区中央部の台地平坦面、Ｅ－ 33、Ｆ－ 33 グリッドに位置する。東約 10m に SD-22 があるが、



第 333 図　和田遺跡　SD-21・22 実測図

これ以外に周辺に遺構はない。　**重複**　なし。北端は調査区外となる。　**形状・規模**　南北に延びる溝で、南端は浅くなって途切れる。中軸線はＮ－ 16°－Ｅ、断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。長さは確認できる部分で約9.00m、幅は0.22 ～ 0.40m、底面の幅は 0.09 ～ 0.27m、深さは 0.03 ～ 0.08m である。底面の標高は中央部が高く、南北両端へとわずかに低くなっている。　**覆土の状態**　不明である。　**遺物**　出土遺物はない。

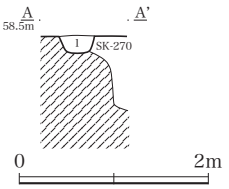


ＳＤ－２２（第 333 図、図版四四）

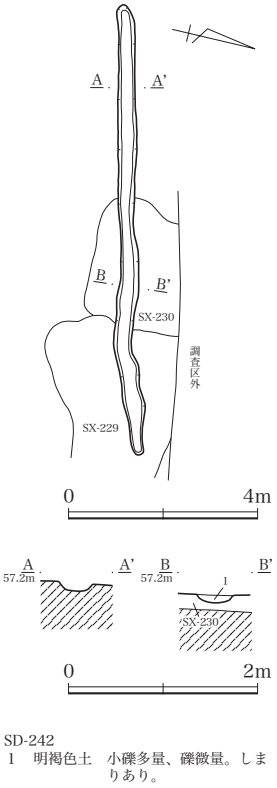
位置　Ⅰ区中央部の台地平坦面、Ｆ－ 31・32 グリッドに位置する。西約 10m に SD-21 があるが、これ以外に周辺に遺構はない。　**重複**　なし。東西両端は調査区外となる。　**形状・規模**　東西に延びる溝で、中軸線はＮ－ 78°－Ｗ、断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。長さは確認できる部分で約 9.70m、幅は 0.19 ～ 0.26m、底面の幅は 0.07 ～ 0.12m、深さは 0.03 ～ 0.09m である。底面の標高をみると、東に向かってわずかずつだが低くなっていることがわかる。東西両端の比高は 0.14m である。　**覆土の状態**　不明である。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＤ－２３６（第 334 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 21、Ｋ－ 20・21、Ｌ－ 20 グリッドに位置する。西に SK-267・269、西 2.5m に SI-905、北 1 m に P-294 が隣接してある。　**重複**　SK-270 を切る。　**形状・規模**　ほぼ南北東方向に延びる直線的な溝であり、北端でわずかに屈曲する。中軸線はＮ－ 11°－Ｅである。断面形は皿状で底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。長さは確認できる部分で 14m、溝の最大幅は 0.19m ～ 0.25m、底面の幅は 0.07m ～ 0.14m、深さは 0.02 ～ 0.19m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第 1 層）である。　**遺物**　出土遺物はない。



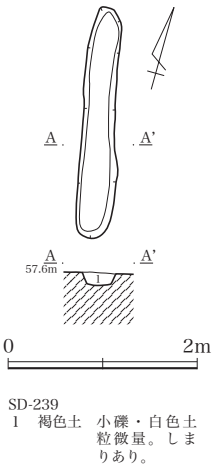
第 334 図　和田遺跡
SD-236 実測図



第 336 図　和田遺跡
SD-242 実測図

ＳＤ－２３９（第 335 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 17 グリッドに位置する。北に P-375a・b が近接し、西２m に SB-234、P-374、東 1 m に SK-377 がある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　南北方向に延びる短く直線的な溝であり、中軸線はＮ－ 12°－Ｗである。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。長さは 2.46m、溝の最大幅は 0.33m ～ 0.42m、底面の幅は 0.24m ～ 0.29m、深さは 0.05 ～ 0.09m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第 1 層）である。　**遺物**　出土遺物はない。

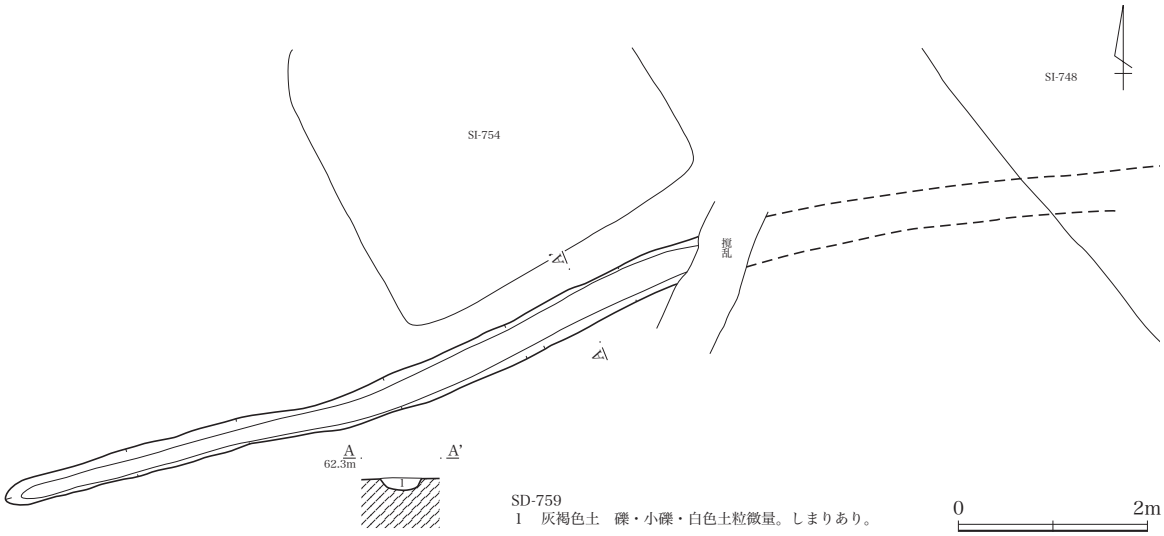


第 335 図　和田遺跡
SD-239 実測図

ＳＤ－２４２（第 336 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｑ－ 14・15 グリッドに位置する。南に SB-508、P-494・496・958 が近接し、南１ｍに P-495・498 がある。　重複　SX-230 を切る。SX-229 も切ると推定されるが、土層断面では確認できなかった。なお、本遺構の西延長線上には SD-238 があることから、SD-238 と同一遺構の可能性も考えられよう。　形状・規模　東西方向に延びる直線的な溝であり、中軸線はＮ－ 74°－Ｅである。断面形は皿状で底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。長さは 4.75m、溝の最大幅は 0.14m ～ 0.23m、底面の幅は 0.09m ～ 0.16m、深さは 0.07 ～ 0.09m である。　覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）である。

遺物　図化した遺物はない。出土遺物は土師器坏片 28 点（114 ｇ）、甕片 12 点（170 ｇ）、須恵器坏片４点（40 ｇ）と甕片３点（260 ｇ）で、８世紀後半代主体の遺物と見られる。重複関係から８世紀後葉と考えられる SX-230 を切るため少なくともそれよりは新しいが、本遺構の明確な時期は不明である。

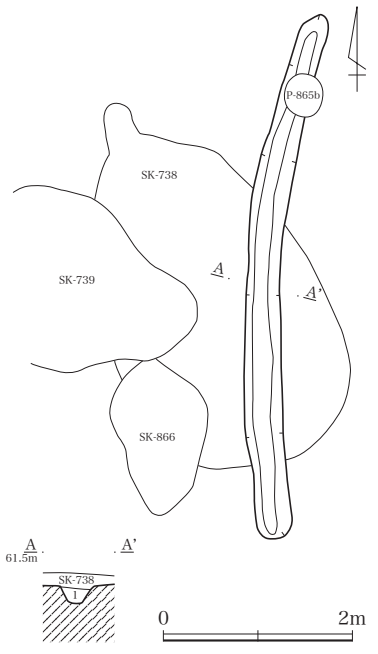


第 337 図　和田遺跡　SD-759 実測図

ＳＤ－７５９（第 337 図、図版四五）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｊ－ 34・35 グリッドに位置する。北に SI-754 が近接し、南 2.5m には SI-755 がある。　重複　東部で SI-748 を切り、一部が撹乱を受けている。　形状・規模　緩やかに湾曲しながら東西に延びる溝で、東端は SI-748 覆土中に確認できる。中軸線はＮ－ 73°－Ｅ、断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。確認できる長さは 12.56m、幅は 0.28 ～ 0.44m、底面の幅は 0.16 ～ 0.28m、深さは 0.03 ～ 0.23m である。底面の標高をみると、東に向かってわずかずつ低くなっている。東西両端の比高は約 0.27m である。　覆土の状態　覆土は、礫などをわずかに含む灰褐色土（第１層）である。

遺物　図化した遺物はないが、土師器坏片 12 点（60g）が出土している。恐らく周辺の SI-748 か SI-754 の遺物が混入したものだろう。



第 338 図　和田遺跡　SD-865a 実測図

本遺構は重複関係から７世紀中葉以降だとは言えるが、明確な時期は不明である。

ＳＤ－８６５ａ（第 338 図、図版四五）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｈ－ 32、Ｉ－ 32 グリッドに位置する。北に SI-737 と SK-946、西に SK-739･866 が近接し、西２m に SK-864、東 2.5m に SI-736 がある。　重複　中央部が SK-738 に切られる。北部で P-865b と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　南北に直線的に続く溝で、東向きに緩やかに湾曲する。中軸線はＮ－ 2°－Ｅである。断面形は浅い「Ｕ」字状で、底面はやや丸みを持つ。長さは 5.56m、幅は 0.30 ～ 0.40m、底面の幅は 0.16 ～ 0.20m、深さは 0.06 ～ 0.14m である。底面は場所により７cm ほどの高低差が認められるが、一定方向に傾斜するわけではない。　覆土の状態　覆土は、炭化物などをわずかに含む黒褐色土（第１層）である。　遺物　出土遺物はない。

３. 土坑

ＳＫ－８（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。南東に SX-54 が隣接し、南 1.5m に SK-51・52 がある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は不整円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.66m、深さ 0.13m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１１（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。西に SK-12 が隣接し、南２m に SK-49 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 11°－Ｅ、規模は長径 1.35m、短径 0.80m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がっており、東部壁際にはピット状の掘り込みがある。ピットの規模は長径 0.21m、短径 0.17m、深さ 0.15m である。　覆土の状態　覆土はローム粒を含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　　図化した遺物はない。７世紀前半頃の可能性もある、口縁が直立する須恵器摸倣坏が１点（８g）出土する。本遺構の年代は不明である。

ＳＫ－１２（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。東に SK-11 が隣接し、南東２m に SK-49 がある。　重複　なし。遺構内にある２本のピット状の掘り込みのうち北側のものは土層を観察できておらず、別遺構の可能性もある。　形状・規模　平面形は南北方向にやや長い楕円形で、中軸線はＮ－ 32°－Ｗ、規模は長径 0.84m、短径 0.67m、深さ 0.33m である。底面はほぼ平坦で、壁は短く外傾して立ち上がっており、東部には南北２本のピット状の掘り込みがある。ピットの規模は南側が長径 0.23m、短径 0.20m、深さ 0.37m、北側が長径 0.26m、短径 0.23m、深さ 0.41m である。　覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。ピット２本の覆土は、南側は第１層だが北側は確認できていない。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２４（第 223・339 図、第 267 表）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。北西に SI- 5、SK-34、南に SI-18、SK-33 が

近接してある。重複　なし。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.96m、短径 0.82m、深さ 0.18m である。底面は平坦で、壁は丸みを持って垂直気味に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は２層でともに緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　土師器、須恵器が出土する。図示した遺物は須恵器の甕１点（１）で、底面上 5cm より出土する。図化しなかった遺物は、土師器片 32 点（310g）である。図化したものも含め、遺物ははすべて混入の可能性がある。本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－２６（第 223 図）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｈ－ 26 グリッドに位置する。東に SK-27、SI-25・31 が近接してある。**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.99m、短径 0.91m、深さ 0.23m である。底面は平坦だが、南～西側の壁際は一段高くなっている。壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はローム粒などを含む緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２９（第 223 図）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 27 グリッドに位置する。東に SK-30 が近接し、北東２m には SK-24・33 が隣接してある。　**重複**　遺構全体で SI-18 を、南半で SD-19 を切る。　**形状・規模**　平面形は不整な円形で、規模は長径 0.74m、短径 0.64m、深さ 0.27m である。底面には小さな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。**遺物**　覆土中から破片がわずかに出土するが､ほぼ全て SI-18 からの混入と考えられる。図化した遺物はなく、出土遺物は甕主体の土師器片 94 点(580g)､須恵器片６点 (30g)､粘土塊４点 (20g) である。SI-18 より新しく、中世土坑とした SK-28 と近いものとも推定されるが、本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－３０（第 223 図）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｇ－ 27 グリッドに位置する。南に SD-19、西に SK-29、北東に SK-24・33 が近接してある。　**重複**　遺構全体で SI-18 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.60m、深さ 0.25m、中軸線はＮ－ 69°－Ｅである。底面には浅いピット状の掘り込みが数ヶ所あり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器片４点 (20g) のみで､SI-18 の混入と見られる。図化した遺物はない。本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－３２（第 223 図）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｆ－ 29 グリッドに位置する。東に SX-17 が近接してある。　**重複**　なし。**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.15m、短径 1.00m、深さ 0.12m である。底面は平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はシルト質の緻密な青灰色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３３（第 223 図）

位置　Ｉ区東部の台地平坦面、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。南東に SD-19、南西に SK-30、北西に SK-24 がそれぞれ近接し、西 1.5m に SK-29 が、南東 2.5m に SK-28 がそれぞれ隣接してある。　**重複**　遺構全体で SI-18 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.64m、短径 0.60m、深さ 0.07m である。底

面は平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は土師器片２点（20 ｇ）、須恵器片１点 (10g) で、SI-18 からの混入と考えられる。図化した遺物はない。周辺の円形土坑と同様に中世の可能性がある。本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－４０（第 224 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。東に SI-42 が隣接する。　**重複**　なし。遺構全体のおよそ半分を調査した。北側はⅥ区調査区内となるが、遺構確認面が低かったためⅥ区では掘り込みを確認できなかった。　**形状・規模**　全体を調査していないため不明だが、平面形は円形ないしは楕円形と推定される。規模は東西 0.72m、南北は調査部分で 0.45m、深さは 0.29m である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。
遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－４９（第 222 図、図版三六）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 18 グリッドに位置する。西に SK-46 が近接し、北２ｍに SK-11 がある。
重複　東部で SK-50 を切る。遺構内には大小のピット状の掘り込み７本があるが、本遺構に伴うかどうかは確認できていない。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 60°－Ｗ、規模は長径 2.75m、短径 1.40m、深さ 0.24m である。底面は長軸方向ではほぼ平坦に見えるが、単軸方向ではやや丸みを持つ。壁は外傾して立ち上がっており、遺構内各所にはピット状の掘り込みが計７本ある。各ピットの規模は、北西端部のものから時計回りに長径 0.18m、短径 0.16m、確認面からの深さ 0.11m、長径 0.18m、短径 0.17m、底面からの深さ 0.14m、長径 0.07m、短径 0.06m、底面からの深さ 0.12m、長径 0.20m、短径 0.18m、底面からの深さ 0.23m、長径 0.20m、短径 0.16m、確認面からの深さ 0.2m、中央左が長径 0.54m、短径 0.52m、底面からの深さ 0.08m、中央右が長径 0.22m、短径 0.20m、底面からの深さ 0.11m である。　**覆土の状態**
覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。７本ある各ピットの覆土は不明である。
遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５５（第 224 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｋ－ 16 グリッドに位置する。南西２ｍに SK-64、南３ｍに SK-56・65 がある。
重複　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 10°－Ｗ、規模は長径 1.37m、短径 1.05m、深さ 0.20m である。底面は北西部がほぼ平坦で、南西部が緩やかに一段低くなっている。壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５６（第 224 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 16 グリッドに位置する。北３ｍに SK-55、北西 2.5m に SK-64 がある。
重複　遺構北東部で SK-65 と重複するが、新旧関係は不明である。北東部にあるピット状の掘り込み１本も、本遺構に伴うかどうか不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 87°－Ｅ、規模は長径 1.35m、短径 0.98m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっていて、北東部にはピット状の掘り込みがある。ピットの規模は長径 0.25m、短径 0.24m、底面からの深さ 0.22m であ

る。　覆土の状態　不明である。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５９（第 224・339 図、第 268 表）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。東 1m に SK-58、南東に SI-45 が隣接し、南西 1.5m に SK-44 がある。　重複　SI-42 遺構内にあり、SI-42 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.95m、短径 0.84m、深さ 0.17m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。焼土や炭化物も含むが、これらは SI-42 カマドからの混入と考えられる。　遺物　遺物はわずかにあり、土師器の甕１点を図化した。図化しなかった遺物は土師器片のみ８点（332 ｇ）である。遺物は重複する SI-42 出土遺物とは異なる特徴があるため、本遺構に伴う可能性もある。10 世紀代とも推定されるが、本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－６４（第 222 図）

位置　Ⅱ区西部の台地平坦面、Ｊ－ 17 グリッドに位置する。北東 2.5m に SK-55、南東 2.5m に SK-56 がある。　重複　西半が SX-54 と重複するが、新旧関係は不明である。北端のピット状の掘り込みは別遺構の可能性もあろう。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 25°－Ｅ、規模は長径 1.51m、短径 1.07m、深さ 0.22m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。北端にピット状の掘り込みがある。ピットの規模は長径 0.46m、短径 0.44m、底面からの深さ 0.40m である。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）で、自然堆積と考えられる。ピット状の掘り込みは、覆土を確認できていない。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－７６（第 224 図）

位置　Ⅱ区中央部の台地平坦面、Ｋ－ 11 グリッドに位置する。南西に P-75 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 18°－Ｗ、規模は長径 0.73m、短径 0.49m、深さ 0.16m である。底面はやや凹凸があり、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８０（第 225 図）

位置　Ⅴ区南部の台地平坦面、Ｍ－８グリッドに位置する。近接する遺構はなく、最も近いのは西 14m にある SK-82 である。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 76°－Ｅ、規模は長径 1.00m、短径 0.78m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土はシルト質粘土主体の緻密な灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８１（第 225 図）

位置　Ⅴ区中央部の台地平坦面、Ｏ－９グリッドに位置する。南 3.5m に SB-79 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は長方形で、中軸線はＮ－ 56°－Ｅ、規模は長径 1.85m、短径 0.50m、深さ 0.44m である。底面は平坦で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土はシルト質粘土主体の２層である。掘り方から撹乱や墓の可能性も考えられるが、覆土は緻密であり自然堆積と見られる。
遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８２（第 225 図）

位置　Ｖ区南部の台地平坦面、Ｍ－９グリッドに位置する。北西４ｍに SK-83 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 35°－Ｗ、規模は長径 0.80m、短径 0.47m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物を多量に含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　多量に出土する炭化物以外に出土遺物はない。

ＳＫ－８３（第 225 図）

位置　Ｖ区南部の台地平坦面、Ｎ－９グリッドに位置する。南東４ｍに SK-82 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 5°－Ｗ、規模は長径 0.84m、短径 0.61m、深さ 0.33m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は３層で、各層とも水性堆積と見られる粘質土である。自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８５（第 225 図）

位置　Ｖ区北部の台地平坦面、Ｐ－ 10 グリッドに位置する。東１ｍに P-84 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 29°－Ｗ、規模は長径 0.87m、短径 0.49m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土はシルト質粘土と炭化物を多量に含む緻密な褐色土（第１層）で、自然堆積と考えられる。覆土は SK-82 に類似する。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８６（第 225 図）

位置　Ｖ区中央部の台地平坦面、Ｏ－８グリッドに位置する。西７ｍに SB-79 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 78°－Ｅ、規模は長径 1.18m、短径 0.48m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　覆土はシルト質粘土と主体とする緻密な２層であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９９（第 225 図）

位置　Ｖ区南西部の台地平坦面、Ｌ－ 11 グリッドに位置する。東 4.5m に SI-92、南東 4.5m に SI-93 がある。　重複　SK-97・98 に挟まれる形になっており、調査時の所見では、SK-97・98 に切られるとされる。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.80m、短径 0.79m、深さ 0.18m である。底面は湾曲しており、壁は丸みを持って立ち上がる。　覆土の状態　不明である。　遺物　出土遺物はない。SK-97・98 に切られるとされるため、古代ないしそれ以前の遺構の可能性がある。

ＳＫ－１０７（第 226 図）

位置　Ｖ区西部の台地平坦面、Ｎ－ 11・12 グリッドに位置する。南東に SK-106、南西に SK-105 が近接し、北西 1.5m には SK-103 がある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.49m、短径 0.44m、深さ 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１１０（第 226 図）

位置　Ｖ区北部の台地平坦面、Ｐ－ 11 グリッドに位置する。北１ｍには SB-101、南西４ｍには SI-89 がある。

重複　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 10°－Ｅ、規模は長径 1.40m、短径 0.78m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物や焼土を含む緻密な黒褐色土（第１層）で、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－１１１（第 226 図）

位置　Ⅴ区北部の台地平坦面、Ｏ－ 13 グリッドに位置する。南約３ｍには P-114・115、北東 2.5m には SI-88 がある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 85°－Ｗ、規模は長径 1.04m、短径 0.83m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物は武蔵型甕片など土師器 13 点（32g）とごくわずかである。図化した遺物はない。本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－１８８（第 226 図）

位置　Ⅴ区南西部の台地平坦面、Ｍ－ 12 グリッドに位置する。南１ｍに P-164・165 が隣接し、北西２ｍには SK-190 がある。　**重複**　大部分が SI-91 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 18°－Ｅ、規模は長径 0.77m、短径 0.66m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って緩やかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な２層であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２２３Ａ（第 235 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。西に SI-221、北東に SK-224 が近接し、西１ｍに P-1007 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 37°－Ｅ、規模は長径 0.80m、短径 0.65m、深さ 0.13m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　土層を確認していないため不明である。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２５８（第 251 図）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 22 グリッドに位置する。西に SK-256 が近接し、東 1.5m に SK-260 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 67°－Ｅ、規模は長径 0.80m、短径 0.70m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗灰褐色土（第１層）と明灰褐色土（第２層）で、第１層中には黒褐色粘土の薄い層が多数確認できる。全体として緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２６０（第 251 図）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｎ－ 21・22 グリッドに位置する。東に P-261 が近接し、西 1.5m に SK-258、北 1.8m に P-263 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 18°－Ｗ、規模は長径 1.35m、短径 1.01m、深さ 0.14m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明灰褐色土（第１層）と黄褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２７１（第 262 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。西に SK-270 が近接し、東１ｍに SK-276、南東 1.3m に P-273 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　SK-267・269・270・271 の土坑４基は遺構の形状や覆土が類似する。平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 21°－Ｅ、規模は長径 1.15m、短径 0.73m、深さ 0.50m である。地山礫層上面となる土坑底面は細かい凹凸があり、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。上半には外傾する部分もある。　覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）、褐色土（第２層）、暗灰褐色土（第３層）である。第３層は灰褐色粘土主体となるが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は小破片ばかりで、土師器坏８点（40 ｇ）、甕 10 点（65 ｇ）がある。７～９世紀代の遺物が混在しており、他遺構からの混入とみられる。古代の可能性もあるが、本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－２７２（第 262 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。南に SK-276 が近接し、北１ｍに SI-195、南東 1.3m に SK-657 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形はやや不整な楕円形で、底部形状を重視した中軸線はＮ－ 40°－Ｅ、規模は長径 1.35m、短径 1.33m、深さ 0.22m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２７６（第 262 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。北に SK-272、東に P-658a・b が近接し、西１ｍに SK-271 が隣接してある。　重複　SX-205 を切る。　形状・規模　平面形は長方形で、中軸線はＮ－６°－Ｗ、規模は長径 2.82m、短径 1.24m、深さ 0.15m である。底面は細かい凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は砂粒を多量に含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２８３（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。北１ｍに SK-284・285、東 1.4m に SI-42 が隣接してある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は円形で、規模は長径 0.65m、短径 0.65m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２８４（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。北に SK-285、SI-199 が近接し、南西１ｍに SK-283 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.45m、短径 0.40m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２８５（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。南に SK-284、東に SI-199 が近接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 25°－Ｅ、規模は長径 0.60m、短径 0.50m、

深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２８７（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｊ－ 19 グリッドに位置する。北に SI-199、SK-288・980 が近接し、西２m に SK-284・285 が隣接してある。　**重複**　SI-42 と SI-198 覆土を切る。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 1.08m、短径 0.83m、深さ 0.06m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２８８（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。西１m に SK-980、南１m に SK-287、SI-42 が隣接してある。　**重複**　SI-198・199 を切る。SK-981 との新旧関係は不明であるが、本遺構が SI-198・199 覆土上面で確認できていることから、本遺構の方が新しい可能性が高い。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.55m、短径 0.53m、深さ 0.19m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　土師器模倣坏２点（30 ｇ）が出土するが、重複する SI-199 の遺物と考えられる。図化した遺物はない。重複関係から SI-198・199 より新しいとは言えるが、本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－２８９（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。西に SI-200b、南東に SK-290、P-291 が近接し、北 2.5m に SI-631 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 20°－Ｗ、規模は長径 0.87m、短径 0.67m、深さ 0.28m である。底面はほぼ平坦で、南寄りには一段深い円形の掘り込みがある。壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２９２（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。北に SK-651・652・653・654、東に SI-670 が近接し、東 2m に SK-976 が隣接してある。　**重複**　SI-208 を切る。遺構確認の状況などから、SB-951 を構成する P-840 を切るとみられる。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.78m、短径 0.73m、深さ 0.17m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。北端にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 17 × 16cm、底面からの深さ 21cm である。　**覆土の状態**　覆土は３層である。各層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２９７（第 250 図）

位置　Ⅵ区調査区の北部、Ｏ－ 20 グリッドに位置する。北東 3.7m に SK-298、南東９m に SK-299 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.71m、短径 0.70m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な （第 1 層）と明褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－２９８（第 250 図）

位置　Ⅵ区調査区の北部、Ｐ－ 19 グリッドに位置する。南西 3.7m に SK-297、南 8.5m に SK-299 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 76°－Ｅ、規模は長径 1.22m、短径 1.02m、深さ 0.10m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は灰色粘土を多量に含む緻密な灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－２９９（第 249 図）

位置　Ⅵ区調査区の北部、Ｏ－ 19 グリッドに位置する。東４m に SB-233、北 8.5m に SK-298 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 87°－Ｅ、規模は長径 0.68m、短径 0.57m、深さ 0.33m である。底面は平坦で、壁はやや外傾して直線的に立ち上がっているが、東壁にはわずかな段がある。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）と明褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。第２層は灰褐色粘土を少量含む。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３０１（第 259 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。南東１m に SK-302、西３m に SI-196 が隣接してある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は瓢箪形に近い楕円形で、土坑２基の重複のようにも見える。中軸線はＮ－ 87°－Ｗ、規模は長径 1.74m、短径 0.92m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。
遺物　遺物は土師器坏片２点（20 ｇ）のみである。図化した遺物はない。古代の可能性もあるが、本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－３０２（第 259 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。北１m に SK-301、南 1.3m に SI-201、SK-1070 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 46°－Ｅ、規模は長径 0.61m、短径 0.41m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　　遺物は土師器甕片１点（30 ｇ）のみである。図化した遺物はない。古代の可能性もあるが、本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－３０３（第 257 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 18・19 グリッドに位置する。東１m に SK-308、南西１m に SI-631、SK-1072 が隣接してある。　重複　SI-201 を切る。　形状・規模　平面形は長方形で、隅部は東半は直角、西半は隅丸状を呈する。中軸線はＮ－ 87°－Ｅ、規模は長径 2.25m、短径 1.74m、深さ 0.25m である。底面はほぼ平坦で、東半に楕円形に深くなる部分が２ヶ所ある。壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器片のみで、坏５点（30 ｇ）、甕 25 点（160 ｇ）である。図化した遺物はない。平底の土師器坏から８世紀代の可能性もあるが、本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－３０７（第 248 図）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 18 グリッドに位置する。西に SI-204 が近接し、東５m に P-325、

SK-326 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.60m、短径 0.55m、深さ 0.10m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３１０（第 257 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北 1.3m に P-309、西に 2.4m に SI-631 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 81°－Ｅ、規模は長径 0.74m、短径 0.56m、深さ 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３１５（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。南に SK-317・318 が近接してあり、西１ｍに P-314 が隣接してある。　**重複**　SK-616 を切る。SK-316 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は長方形で、中軸線はＮ－ 5°－Ｅ、規模は長径 2.40m、短径 1.23m、深さ 0.16m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。北半の壁際には溝が巡っており、断面形は浅い皿状、幅は 18 ～ 24cm、深さは底面から１～３cm である。　**覆土の状態**　覆土は少量の炭化物や礫などを含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　遺物はわずかで、土師器坏片６点（40 ｇ）、甕片６点（40 ｇ）、須恵器坏片２点（25 ｇ）、甕片２点（60 ｇ）が出土する。図化した遺物はない。重複する SK-616 の遺物に類似するものも出土するため 10 世紀代の遺構の可能性もあるが、本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－３１６（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北に SK-616、南に SK-318 が近接し、東 2.5m に SI-208 が隣接してある。　**重複**　SK-317 を切る。SK-315 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は隅丸方形で、中軸線はＮ－ 19°－Ｅ、規模は長径 1.18m、短径 1.04m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３１７（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北に SK-315・616 が近接し、南１ｍに SK-320、南東 1.8m に SK-321 が隣接してある。　**重複**　SK-316・318 に切られる。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.08m、短径 1.00m、深さ 0.21m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第３層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３１８（第 256 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北に SK-316、南に SK-320 が近接し、南東１ｍに SK-321 が隣接してある。　**重複**　SK-317 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 85°－Ｗ、規模は長径 1.38m、短径 1.10m、深さ 0.20m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３２２（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 18 グリッドに位置する。北に SK-323、西１m に SK-321 が近接し、東 1.2m に SI-208 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.99m、短径 0.96m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３２６（第 247 図）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 18 グリッドに位置する。南西 2.5m に P-325、北東４m に SK-329 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 68°－Ｗ、規模は長径 0.88m、短径 0.75m、深さ 0.14m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３２８（第 246 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 17・18 グリッドに位置する。南に SK-329、東 1.5m に SI-209a・b・c が隣接してある。　重複　SK-620 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 3°－Ｅ、規模は長径 1.75m、短径 1.38m、深さ 0.19m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。底面中央には一段深くなる部分があり、規模は径 82 × 74cm、底面からの深さ 0.33cm である。　覆土の状態　覆土は３層である。第１層は黒色土ブロック、第２・第３層はロームブロックを含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３２９（第 246 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 17・18 グリッドに位置する。北に SK-328 が近接し、東 1.5m に SI-209a・b・c が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 88°－Ｅ、規模は長径 1.13m、短径 0.85m、深さ 0.07m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３３０（第 233 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14・15 グリッドに位置する。西に SI-227、東に SK-357・838A、P-282・296、北東に SK-300 が近接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 67°－Ｗ、規模は長径 0.70m、短径 0.55m、深さ 0.06m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３３５（第 247・316 図、第 269 表、図版六八）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 18 グリッドに位置する。西に SK-333、P-332・619 が近接し、南東２m に SK-337、北東 2.3m に SK-336 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.51m、短径 0.51m、深さ 0.25m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　土層堆積状況は、近接する SK-333 や SK-336 に似る。覆土は２層で、第１層は炭化物層と黒

褐色土層が互層をなす。自然堆積と考えるが、炭化物を多量に含む第２層は何らかの焼成行為により形成された可能性がある。　**遺物**　出土遺物は木製品１のみで、柱材か、柱材を加工した礎板の可能性がある。樹種はモミ属である。出土遺物からすると、本遺構は柱穴とも考えられる。SK-336 や古代土坑の SK-333 にも類似しているが、本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－３３６（第 247 図）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｎ－ 17 グリッドに位置する。南３m に SK-337、東 2.5m に P-366 が隣接し、北東 5.5m に SI-209a・b・c が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は不整な円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.66m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　土層堆積状況は、隣接する SK-333・335 に似る。覆土は２層で、第１層は炭化物主体で焼土も多く含む。全体としては自然堆積と考えるが、炭化物主体となる第２層は何らかの焼成行為により形成されたものとみられる。　**遺物**　出土遺物はない。古代土坑の SK-333 に類似するが、本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－３３７（第 247 図）

位置　Ⅵ区調査区の中央部、Ｍ－ 17 グリッドに位置する。北西 1.8m に SK-333・335、北東 3.2m に SK-336 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 52°－Ｅ、規模は長径 0.71m、短径 0.58m、深さ 0.14m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３４９（第 240 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 16 グリッドに位置する。南東 3.4m に SI-218・632、SK-656 が隣接する。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.62m、短径 0.57m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は褐色土（第１層）である。黒色砂質土ブロックを多量に含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３５７（第 233 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-330、北東に SK-300、P-327 が近接し、南１m に P-522 が隣接してある。　**重複**　P-282 に切られる。P-296 と重複するが、新旧関係は不明である。東半が大きく重複する SK-838A との新旧関係も不明だが、土層観察から SK-838A の方が新しい可能性が高いと推定する。　**形状・規模**　遺構の大半が SK-838A と重複するため、平面形は不明である。円形ないし楕円形の可能性があろう。残存部分の規模は径 0.80m、深さは 0.09m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３６０（第 254 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部Ｋ－ 16・17 グリッドに位置する。西に P-359 が近接し、北に 1.8m に SK-361 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 3°－Ｗ、規模は長径 1.67m、

短径 1.12m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３６１（第 254 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部Ｋ－ 16・17 グリッドに位置する。北 1.3m に SI-215、南 1.8m に SK-360、P-359 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 51°－Ｗ、規模は長径 1.06m、短径 0.84m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は礫をわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）で、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３６４（第 236 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-554、南西に SK-687、東に SK-423 が近接し、北 1.5m に SK-555、南東１m に SK-807・824・829・830 が隣接してある。　**重複**　SK-395・399・553 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 42°－Ｗ、規模は長径 0.98m、短径 0.64m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土はローム粒などを多量に含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３７７（第 245 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 17 グリッドに位置する。北西に P-375a・b が近接し、西１m に SD-239、東１m に SK-383、P-382・805 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は隅丸方形で、中軸線はＮ－ 60°－Ｗ、規模は長径 0.98m、短径 0.96m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３８３（第 245 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 17 グリッドに位置する。北に SK-384、P-802 、南西に P-382 が近接し、西１m に SK-377、東に P-386・387・388 が隣接してある。　**重複**　P-805 に切られる。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.19m、短径 1.15m、深さ 0.17m である。底面は丸みを持ち、壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。底面にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.48 × 0.46m、深さは底面から 0.16m である。　**覆土の状態**　覆土は３層で、各層に炭化物が含まれる。第１層には黒褐色土ブロックが含まれるが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３８４（第 245 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 17 グリッドに位置する。南に SK-383、P-805 が近接し、北東 1.5m に SK-385、北２m に SD-238 が隣接してある。　**重複**　P-802 に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 45°－Ｗ、規模は長径 1.15m、短径 0.53m、深さ 0.06m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－３８５（第 245 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。西 1.5m に SK-384 、P-802、北２m に SD-238、南に P-386 が隣接する。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 73°－ W、規模は長径 1.24m、短径 0.80m、深さ 0.07m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む暗褐色土（第１層）である。暗褐色土ブロックも含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３９５（第 236 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-553、南に SK-554 が近接し、南東１m に SK-807・824・829・830 が隣接してある。　重複　SK-399 に切られる。SK-364 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形か楕円形と推定されるが、SK-399 に東側が大きく切られるため不明である。現状は半円形を呈し、径 0.50m、深さ 0.08m、SK-399 に切られる方向の残存部分は 0.25m である。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－３９７ａ（第 244 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。南東に SK-398b･P-398a、北に P-663 が近接し、東１m に SI-214、南 1.2m に SD-240 が隣接してある。　重複　P-397b を切る。P-664 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 3°－W、規模は長径 1.43m、短径 0.57m、深さ 0.18m である。底面は南半が北半より３cm ほど高く、壁は外傾して立ち上がる。北部にはピット状の掘り込みもある。掘り込みの規模は径 0.37 × 0.35m、土坑底面からの深さは 0.59m である。　覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－４３１ａ（第 240 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 15 グリッドに位置する。南１m に P-432、２m に P-433・434 が隣接してある。　重複　P-431b を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 10°－W、規模は長径 1.24m、短径 1.04m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－４３５（第 236 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南１m に SK-830、北１m に SK-558、西１m に SK-399 が隣接する。　重複　SK-423 に切られる。　形状・規模　西側が SK-423 に切られるが、平面形は楕円形と推定する。中軸線はＮ－ 89°－W、規模は短径 0.36m、深さ 0.07m、SK-423 に切られる長径方向の残存部分は 0.33m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土はローム粒などを多量に含む緻密な明黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－４５１（第 237 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 14、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南に SK-222 が近接し、北 1.8m に

SK-552 が隣接してある。　**重複**　SK-452 と重複するが、新旧関係は不明である。調査は本遺構が後であるため、本遺構の方が古い可能性はあるだろう。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 76°－Ｅ、規模は長径 0.70m、短径 0.51m、深さ 0.23m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第１層）と砂質の黒褐色土（第２層）である。第２層は黒褐色土ブロックを少量含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－４６５（第 241 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。西に SK-464 が近接し、北西 1.5m に SK-466、北東 1.3m に SI-227 が隣接してある。　**重複**　SK-820 に切られる。P-814・816 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な楕円形で、中軸線はＮ－ 62°－Ｗ、規模は長径 1.00m、短径 0.72m、深さ 0.08m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む黒褐色土（第２層）と赤褐色土（第３層）である。第２層は多量の礫を含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－４６６（第 241 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。北 1.5m に SI-228、西 1.5m に SI-212、東２m に SI-227 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 21°－Ｗ、規模は長径 0.78m、短径 0.54m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物をわずかに含む砂質の褐色土（第１層）である。礫を多く含んでいるが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－４６８（第 241 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。東に SI-228、北に SI-469、西に P-417 が近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 79°－Ｗ、規模は長径 0.70m、短径 0.58m、深さ 0.07m である。底面は平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。灰褐色砂質土と黒褐色土が薄く互層をなす堆積状況からすると、水性堆積の可能性があろう。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５０１（第 243 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。北に P-491・500・623・628 が近接し、南に P-502・641 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 89°－Ｗ、規模は長径 1.23m、短径 0.93m、深さ 0.12m である。底面にはこまかな凹凸があり、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は焼土や炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５１１（第 231 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-528・529a、639 が近接し、東 1.3m に SK-536、南 1.5m に SK-526 が隣接してある。　**重複**　SK-640 を切る。　**形状・規模**　平面形は不整円形

で、規模は長径 1.08m、短径 0.98m、深さ 0.18m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。覆土の状態　覆土は２層の緻密な暗褐色土であり、自然堆積と考えられる。第１層は多量の焼土のほか少量の炭化物も含む。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５２３（第 233 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。南東 1.5m に SK-538a、P-538b･c･d、北東２m に P-537 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 29°－Ｅ、規模は長径 1.34m、短径 1.04m、深さ 0.20m である。北よりにある底面はほぼ平坦で、壁は北半はやや急に、南半はなだらかに外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）と褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５２６（第 231 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。北に 1.3m に SK-511、南西に 1.7m に SK-513、北東２m に SK-536 が隣接してある。　重複　P-525 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.86m、短径 0.75m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　覆土の状態　多量の焼土のほか、少量の炭化材などを含む黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。
遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５３１（第 230 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｑ－ 14 グリッドに位置する。南５m に SB-235、西 4.5m に P-532 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、規模は長径 0.85m、短径 0.70m、深さ 0.06m、中軸線はＮ－ 35°－Ｅである。底面は平坦で、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５４６（第 232 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 13・14 グリッドに位置する。南に P-544B・547 が近接し、北５m に SB-235 がある。　重複　なし。　形状･規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 81°－Ｗ、規模は長径 0.83m、短径 0.64m、深さ 0.04m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）である。少量の黒褐色土ブロックなどを含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５５１（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-673・674、南に SK-552 が近接し、北 1m に SI-225、北東 1.5m に SK-555 が隣接してある。　重複　SK-686 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 60°－Ｅ、規模は短径 1.20m、深さ 0.13m、SK-686 に切られる長径方向の残存部分は 1.20m である。底面は緩やかな凹凸を持ち、壁は外傾して短く立ち上がる。北西部にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.19 × 0.17m、底面からの深さ 0.18m である。　覆土の状態　覆土は２層の緻密な暗褐色土であり、自然堆積と考えられる。第１層は砂質である。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５５２（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-551、東に SK-687、P-696 が近接し、南 1.5m に SK-451・452 が隣接する。　重複　なし。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 1.03m、短径 0.98m、深さ 0.11m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。北部にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.25 × 0.18m、底面からの深さ 0.09m である。　覆土の状態　覆土はローム粒などを多量に含む砂質で緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５５３（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。南東に SK-554、北西に SK-551 が近接し、西１ｍに SK-552 が隣接してある。　重複　SK-364・687 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　掘り込みが深い円筒状の土坑である。平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 8°－Ｗ、規模は長径 0.72m、短径 0.64m、深さ 0.70m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は４層である。下層の第３・第４層は不明だが、上位の土層は緻密な砂質土であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器甕片１点（20 ｇ）のみで、混入の可能性がある。図化した遺物はない。本遺構の年代は不明である。

ＳＫ－５５７（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-555 が近接し、東 1.2m に SK-565、P-566 が隣接する。　重複　SK-556 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.60m、短径 0.54m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は黒褐色土（第１層）である。黒褐色土ブロックを少量含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５６５（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13・14 グリッドに位置する。西に SK-558 が近接し、東 1.5m に SK-570 が隣接してある。　重複　P-566 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 58°－Ｅ、規模は長径 1.23m、短径 0.87m、深さ 0.19m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は４層で、底面直上に堆積する第４層は炭化物主体の層である。全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５６８（第 235 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 13、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。東に P-602 が近接し、南１ｍに SK-583・603、P-585 が隣接する。　重複　SK-584 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.67m、深さ 0.13m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－５９５（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南西に SK-596 が近接し、南東 1.2m に SK-833

が隣接してある。　**重複**　SK-598 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.77m、短径 0.60m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第１層）である。礫を多量に含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５９６（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。北東に SK-595・598、南に SK-597 が近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 85°－Ｗ、規模は長径 0.96m、短径 0.75m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がるが、北側のみは上半で角度を緩やかに変えて確認面に至る。　**覆土の状態**　覆土は赤褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）である。第２層は礫を多量に含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５９８（第 234 図）

遺物　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南西に SK-596、南東に SK-833 が近接し、南 1.5m に SK-597 が隣接してある。　**重複**　SK-595 に切られる。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 83°－Ｅ、規模は長径 1.21m、短径 0.87m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は暗褐色土（第２層）である。礫を多量に含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－５９９（第 232 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-544A、東に SE-549 が近接してある。　**重複**　SK-567・845 を切り、SK-690 に切られる。　**形状・規模**　平面形は東西方向に長い不整長方形とみられ、中軸線はＮ－ 72°－Ｅ、規模は長径 1.70m、短径 0.85m、深さ 0.09m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は白色土粒を多量に含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６００（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。西１ｍに SK-588、P-587・591 が隣接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－５°－Ｅ、規模は長径 0.99m、短径 0.61m、深さ 0.21m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。南寄りにはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.35 × 0.26m、底面からの深さ 0.12m である。　**覆土の状態**　覆土は炭化物などをわずかに含む砂質で緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６０３（第 235 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 13 グリッドに位置する。南に P-604、北東に P-602 が近接してある。　**重複**　P-585 を切る。SK-583 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.85m、短径 0.60m、深さ 0.10m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は SK-583 の第１層と同じと観察された砂質で緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６１５（第 260 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。北に SK-613a・b が近接し、北東 2.2m に SI-196 が隣接してある。　重複　SI-195 を切り、SK-614 に切られる。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.87m、短径 0.77m、深さ 0.30m である。底面は丸みを持ち、壁は直線的にやや外傾して立ち上がる。南寄りにはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.25m、底面からの深さ 0.07m である。　覆土の状態　覆土は褐色土（第２層）である。少量の褐色土ブロックを含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６２１（第 244 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。東１ｍに P-405、南１ｍに SI-214 が隣接してある。　重複　SK-401 に切られる。　形状・規模　南半が SK-401 に切られているが、平面形は円形とみられる。規模は径 0.60m、深さ 0.33m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。柱穴の可能性もあろう。　覆土の状態　覆土は多量のロームブロックを含む２層の暗褐色土で、第１層は焼土や炭化物もわずかに含む。両層とも人為堆積の可能性がある。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６２９（第 243 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15・16 グリッドに位置する。南に P-362・415、東に P-473、北に P-411・412 が近接してある。　重複　P-413 に切られる。　形状・規模　平面形は楕円形とみられ、中軸線はＮ－ 7°－W、規模は現状で確認できる長径が 1.40m、短径は 0.88m、深さは 0.08m である。底面は平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は焼土や炭化物を含む緻密な黄褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６３７（第 231 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14・15 グリッドに位置する。北に SK-639、西に SK-638a、P-638b、東に SK-511 が近接してある。　重複　SK-640 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.99m、短径 0.91m、深さ 0.15m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は焼土や炭化物をわずかに含む緻密な黒褐色土（第３層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６３８ａ（第 231 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 15 グリッドに位置する。北に SK-510、西に P-504、東に SK-637・639 が近接してある。　重複　Ｐ－ 638b・691B と重複するが、新旧は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 50°－Ｅ、規模は長径 1.01m、短径 0.75m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６３９（第 231 図、図版四五）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14・15 グリッドに位置する。南に SK-637・640・511、北東に P-527、SK-528、南西に SK-638a が近接してある。　重複　なし。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－

2°－W、規模は長径 0.81m、短径 0.57m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は少量の炭化物などを含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６４４（第 242 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。西に SI-210 が近接し、北１m に SI-213、南 1.5m に SK-645 が隣接してある。　**重複**　SI-212 内にある。新旧関係は不明であるが、調査時の状況などから SI-212 に切られる可能性が高い。SI-212 の貼床となる可能性もある。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.94m、短径 0.83m、深さ 0.20m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。SI-212 との重複関係からから、古代ないしそれ以前の土坑の可能性がある。

ＳＫ－６４５（第 242 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｎ－ 16、Ｏ－ 16 グリッドに位置する。北西 1.5m に SK-643b、SK-835、北 1.5m に SK-644、南 1.2m に SK-425 が隣接する。　**重複**　SI-212 内にある。新旧関係は不明であるが、調査時の状況などから SI-212 に切られる可能性が高い。SI-212 の貼床となる可能性もある。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 62°－Ｅ、規模は長径 1.29m、短径 0.77m、深さ 0.15m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。SI-212 との重複関係からから、古代ないしそれ以前の土坑の可能性がある。

ＳＫ－６５１（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。南に SK-292、北東に SK-654 が近接し、東１m に SI-670 が隣接してある。　**重複**　遺構確認の状況などから、SI-208、SB-951 の P-840 を切るとみられる。SK-652 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.50m、短径 0.48m、深さ 0.08m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。北側にピット状の掘り込みが２ヶ所あり、規模は北西が径 0.23 × 0.19m、確認面からの深さ 0.34m、北東が径 0.14 × 0.12m、確認面からの深さ 0.36m である。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６５２（第 255 図）

遺物　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。北に SK-653、南に SI-208、SK-292、南東に SI-670 が近接してある。　**重複**　SK-651・654 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.73m、短径 0.69m、深さ 0.12m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６５３（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17、Ｌ－ 17 グリッドに位置する。南に SK-652、南東に SK-654 が近接してある。　**重複**　SB-951 の遺構範囲内にあるが、柱穴とは重複しないため、新旧関係は不明である。　**形状・**

規模　平面形は円形で、規模は長径 0.80m、短径 0.74m、深さ 0.12m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６５４（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。北西に SK-653、南西に SK-651、南に SI-208、東に SI-670 が近接してある。　**重複**　SK-652 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は径 0.41m、深さ 0.09m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　土層を確認していないため不明である。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６５７（第 261 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 20 グリッドに位置する。南東に P-659、南西に P-658a・b が隣接してある。　**重複**　SX-205 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 18°－Ｅ、規模は長径 1.36m、短径 1.13m、深さ 0.14m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。南～東壁は傾斜が緩やかである。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６６２（第 261 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19・20 グリッドに位置する。北に SK-661・278 が近接し、南西に P-277、南東に P-280 が隣接してある。　**重複**　SX-205 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.00m、短径 0.92m、深さ 0.19m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６６６（第 255 図、図版一六）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。南に P-970・971・972、北に P-973・974 が近接し、北東 1.5m に SI-670 が隣接してある。　**重複**　SI-207・208 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形である。調査時に南東側の覆土を失っているため、円形の土坑であった可能性がある。中軸線はＮ－ 38°－Ｅ、規模は長径 0.84m、短径 0.70m、深さ 0.07m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第１層）である。暗褐色土ブロックなどを含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６６７（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。北に P-971・972 が近接し、北西 1.2m に SK-666 が隣接してある。　**重複**　SI-207・208 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.92m、短径 0.90m、深さ 0.32m である。底面は南に向かって傾斜する斜面で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は砂質の暗褐色土（第１層）と褐色土（第２層）である。礫を多く含むが全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－６６９（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。南に SK-978 が近接し、西１ｍに SK-200a・977 が隣接する。 重複　SI-199・200b を切る。 形状・規模　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.60m、短径 0.52m、深さ 0.07m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６７２ａ（第 244 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。北西に P-993 が近接し、南 1.2m に SK-991 が隣接してある。　重複　SI-214・403、P-672b を切る。P-672c・672d との新旧関係は不明だが、P-672b と同様にこれらを切るものと推定する。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 1.13m、短径 1.09m、深さ 0.23m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は焼土や炭化物などをわずかに含む緻密な褐色土（第１層）と明褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は須恵器坏片１点（10 ｇ）のみである。SK-672a、P-672b いずれの遺物かも分からず、SI-214 からの混入の可能性もある。本遺構の時期は不明である。

ＳＫ－６７５（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に P-1020・1021 が近接し、東１ｍに SK-555、西１ｍに SK-673、P-1019・1022 が隣接してある。　重複　SI-225、SK-674 を切る。　形状・規模　平面形はやや不整な円形で、規模は長径 0.95m、短径 0.87m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って大きく外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土はローム粒などを多量に含む砂質で緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。土層観察では、SK-673 と同質とされている。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６８６（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-673、南に SK-552 が近接し、北 1.3m に SI-225 が隣接してある。 重複　SK-551 を切る。 形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 18°－Ｗ、規模は長径 0.87m、短径 0.61m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる　覆土の状態　覆土はローム粒などを多量に含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６８７（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-552、東に SK-554 が近接し、北１ｍに SK-551 が隣接してある。　重複　P-696 と重複しており、確認面での土層の状況から P-696 に切られるものとみられる。SK-553 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 37°－Ｅ、規模は長径 0.80m、短径 0.46m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土はローム粒などを多量に含む砂質で緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６９３（第 232 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 13 グリッドに位置する。西３ｍに SK-599・845 が隣接してある。　重複　SE-549 を切る。SK-697 と重複するが、新旧関係は不明である。東端は遺構をとらえることができなったため不明である。　形状・規模　平面形は不整楕円形とみられる。中軸線はＮ－ 68°－Ｅ、規模は確認できる長径が 2.00m、短径は 1.56m、深さは 0.15m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－６９７（第 232 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 13・14 グリッドに位置する。西に SK-599・845、北に P-548B が近接する。　重複　SE-549、SK-693・690 と重複するが、新旧関係は不明である　形状・規模　遺構の著しい重複のため平面形は不明である。現状で確認できる規模は長径 1.95m、短径 0.95m で、深さは 0.32m である。底面はほぼ平坦で、西半は東半に比べ 20cm ほど高く、壁は外傾して立ち上がる。ピット状の掘り込みは４ヶ所あり、規模は東側から径 0.36 × 0.30m、深さ 0.17m、径 0.43 × 0.35m、深さ 0.36m、径 0.37 × 0.34m、深さ 0.21m、径 0.40 × 0.28m、深さ 0.17m である。各ピットは別遺構の可能性もあろう。　覆土の状態　覆土は白色土粒などを含む暗褐色土（第１層）や黒褐色土（第２層）である。第１層は暗褐色土ブロックを、第２層は褐色土ブロックを多量に含むが全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－７６１（第 227 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 26、Ｉ－ 26 グリッドに位置する。北に SK-762 が近接し、西２ｍに SK-767・768 などが隣接する。　重複　南側が SI-727 カマド部分と重複する。土層から新旧は確認されていないが、遺構の状況から SI-727 に切られると判断される。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.70m、短径 0.63m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持ち外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。本遺構の年代は不明とする。SI-728、SK-764・766・767・768 などと共に 10 世紀頃の遺構となる可能性がある。

ＳＫ－７６２（第 227 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 26 グリッドに位置する。北に SK-763、南に SK-761 が近接し、西２ｍに SK-768・769 などが隣接する。　重複　南半で SI-727 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 36°－Ｗ、規模は長径 1.08m、短径 0.82m、深さ 0.14m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物はわずかで、SI-727 からの混入の可能性が高い。土師器坏片２点（10 ｇ）、甕片１点（20 ｇ）、粘土塊１点（１ｇ）があり、図化した遺物はない。SI-727 を切るため 10 世紀以降と見られるが、本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－７６４（第 227 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SK-766 ～ 769 が近接する。　重複　SI-727 内にあり、SI-727 に切られる。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.80m、短径 0.82m、深さは SI-727 床面から 0.22m、SI-727 確認面からは 0.52m である。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して直

線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な２層であり、自然堆積と考えられる。第２層は炭化物を多量に含む。SI-727 の覆土の一部が本遺構内に入り込んでいることから、本遺構が SI-727 のピットとなる可能性もあろう。　遺物　出土遺物は土師器甕片２点（15 ｇ）のみである。図化した遺物はない。本遺構の年代は不明とする。SI-728、SK-761・766・767・768 などと共に 10 世紀頃の遺構となる可能性がある。

ＳＫ－７６５（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 27 グリッドに位置する。北２～３ｍに P-774・777・778 が、南２ｍには P-773 が隣接してある。　重複　SI-729 内にあり、SI-729 を切る　形状・規模　平面形が円形を呈する円筒状の土坑で、規模は長径 0.77m、短径 0.70m、深さ 0.81m である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は７層で、黒褐色や暗褐色の層とローム粒を含む層とが互層をなして堆積する。第６層は炭化物を、第７層は黄褐色粘土をそれぞれ多量に含む。各層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。ごく新しい時期の遺構の可能性がある。

ＳＫ－７６６（第 227 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。周囲には SK-764・768・769・852 が近接する。　重複　SI-727 内にあり、SI-727 と SK-767 に切られる。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.71m、短径 0.69m、深さ 0.41m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な２層で、自然堆積と考えられる。第２層は粘土質で、両層とも炭化物をわずかに含む。　遺物　出土遺物は土師器坏片３点（10 ｇ）、甕片３点（10 ｇ）で、図化した遺物はない。本遺構の年代は不明とする。SI-728、SK-761・764・767・768 などと共に 10 世紀頃の遺構となる可能性がある。

ＳＫ－７６９（第 227 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｉ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SK-762 ～ 764・768 が近接してある。　重複　SI-727・728 と重複しており、SI-727・728 の覆土を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 69°－Ｗ、規模は長径 1.61m、短径 1.33m、深さ 0.13m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺物は土師器坏片３点（20 ｇ）、甕５点（35 ｇ）、須恵器片１点（10 ｇ）で、SI-727・728 遺物の混入の可能性もある。図化した遺物はない。本遺構の時期は不明とする。

ＳＫ－７９３（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 28 グリッドに位置する。西に SI-732 が近接し、北東２ｍに SK-855 が隣接する。　重複　SI-731・757 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.72m、短径 0.67m、深さ 0.22m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８１１（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南に SK-812、P-806、南西に SK-570 などが近接し、東 1.7m に SK-596 が隣接してある。　重複　SK-569 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模

平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 72°－Ｅ、規模は長径 0.97m、短径 0.66m、深さ 0.14m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。底面にはピットが１本あり、規模は径 0.21 × 0.16m、底面からの深さ 0.40m である。本遺構と重複するピットの可能性もあろう。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第１層）である。小礫を多量に含むが緻密であり、自然堆積と考えられる。底面にあるピットの覆土は砂質で緻密な黒褐色土（第１層）であり、こちらも自然堆積であろう。　**遺物**　出土遺物は土師器片１点（10 ｇ）、須恵器片１点（50 ｇ）、礫１点のみであり、図化した遺物はない。遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－８１２（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。北に SK-811、P-806、南に SK-594・821・827・832、P-826 などが近接してある。　**重複**　SK-569・570・593 と重複するが、新旧関係は不明である。**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 87°－Ｅ、規模は長径 0.95m、短径 0.54m、深さ 0.22m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は黒褐色土（第１層）と砂質の暗褐色土（第２層）であり、ともに炭化物をわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８２０（第 241 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 15 グリッドに位置する。北に P-819・823、東に P-818、西に SK-465、P-814・816 が近接し、北東 1.2m に SI-227 が隣接してある。　**重複**　SK-465 を切る。P-819 と重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 35°－Ｗ、規模は長径 0.85m、短径 0.71m、深さ 0.12m である。底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は礫を多く含む暗黒褐色土（第１層）である。全体に緻密な砂質土であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８２４（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-830、南に SK-560、西に SK-554、東に SK-809 などが近接してある。　**重複**　SK-807 に切られる。SK-808・829 とも重複するが、新旧関係は不明である。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 84°－Ｗ、規模は長径 0.70m、短径 0.46m、深さ 0.40m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。掘方を持つ柱穴の可能性もあろうか。　**覆土の状態**　覆土は明褐色土（第５層）と明黄褐色土（第６層）である。第５層は褐色土ブロックを、第６層は黄褐色土ブロックをそれぞれ多量に含むため人為堆積の可能性もあるが、全体に緻密であることから自然堆積と考えた。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８２７（第 234 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。東に SK-594、北に P-826、SK-570・593・812・832 などが近接する。　**重複**　SK-821 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 52°－Ｅ、規模は長径 0.70m、短径 0.43m、深さ 0.18m である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は２層の緻密な暗褐色土であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８２８（第 231 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 14 グリッドに位置する。北西に SB-508 が近接し、北東 1.5m に SX-232、南に SK-528・529a、P-527 が隣接してある。　重複　北端が SX-231 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.92m、短径 0.90m、深さ 0.10m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８２９（第 236 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 14 グリッドに位置する。北に SK-395・399・423、南に SK-807、西に SK-554、南東に SK-560・808・809 が近接してある。　重複　SK-830 に切られる。SK-824 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.45m、短径 0.42m、深さ 0.45m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は褐色土（第３層）と暗褐色土（第４層）である。両層とも緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－８３２（第 234・316 図、第 270 表、図版六八）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。南に SK-827、北に SK-569・570・811・812 が隣接してある。　重複　P-826 に切られる。SK-593・594・821 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　SK-593 などとの重複もあり全体形はつかみにくいが、Ｎ－ 47°－Ｗを中軸線とする楕円形とみられる。規模は短径 0.40m、深さ 0.22m で、長径は確認できる部分で 0.74m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。南端底面にはピット状の浅い掘り込みがあり、規模は径 0.23 × 0.16m、深さ 0.04m である。　覆土の状態　覆土は礫を多く含む暗褐色土（第１層）と砂質の黒褐色土（第２層）である。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　覆土中から柱材下部１が出土する。出土状態は不明だが、土坑内の一部または全部が柱穴だった可能性があろう。樹種はクリ材である。

ＳＫ－８３３（第 234・316 図、第 271 表、図版六八）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｍ－ 13 グリッドに位置する。北西に SK-595・596・598 が近接し、南西１mに SK-592・597、南２m に SK-600 が隣接してある。　重複　なし。　形状・規模　柱穴の可能性が高い。平面形は円形で、規模は長径 0.57m、短径 0.53m、深さ 0.57m である。底面は丸みを持ち、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は暗褐色土（第１層）と砂質の黒褐色土（第２層）であり、ともに炭化物などをわずかに含む。全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　遺構底面より５cm 沈んだ位置から生材が出土する。柱材ないしは柱材を分割した礎板の可能性があろう。樹種はクリ材である。

ＳＫ－８３８Ａ（第 233 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 14 グリッドに位置する。西に SK-330、北東に SK-300 が近接し、東に P-281、南に P-522 が隣接してある。　重複　P-282 に切られる。P-296 と重複するが、新旧関係は不明である。西側で重複する SK-357 との新旧関係は不明だが、土層観察からすると SK-357 の方が古い可能性が高いと推定する。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 43°－Ｅ、規模は長径 1.04m、短径 0.78m、深さ 0.36m である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は２層である。

第１層は緻密であり自然堆積と考えられるが、第２層は黒褐色土ブロックを多量に含むため、人為的な堆積の可能性が高い。　**遺物**　出土遺物はない。土師器焼成遺構との関連も考えられる SK-845 と土層堆積状況が類似しており、同様の古代土坑の可能性もある。

ＳＫ－８３９（第 246 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｏ－ 17 グリッドに位置する。北に SB-234 が近接し、西 4.2m に SK-620、北東 5.4m に SD-240 が隣接してある。　**重複**　SI-209a・209b を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.09m、短径 1.03m、深さ 0.29m である。底面は緩やかな凹凸があり、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８５２（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SI-727、SK-766・767・853、P-770・771・850・851 などが近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 84°－W、規模は長径 0.80m、短径 0.64m、深さ 0.17m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８５３（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 27 グリッドに位置する。周囲には、SK-852、P-770・771・772・779・780 などが近接してある。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 88°－W、規模は長径 2.77m、短径 2.02m、深さ 0.16m である。底面は凹凸が目立ち、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。底面には２基のピットがあり、規模は西側が径 0.58 × 0.50m、深さ 0.16m、東側が径 0.37 × 0.27m、深さ 0.16m である。西側ピットは土坑覆土を切り込むようにも見えるため、別遺構の可能性もあろう。　**覆土の状態**　覆土は３層で、第１層は炭化物を多量に含む。全体に緻密であり自然堆積と考える。　**遺物**　出土遺物は土師器坏片 15 点（120 ｇ）、甕片 14 点（180 ｇ）、須恵器甕片１点（60 ｇ）で、７～８世紀代の遺物と見られる。遺構に伴う遺物の可能性もあるが量も少なく、本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－８５５（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の東部、Ｈ－ 28 グリッドに位置する。南西２ｍに SI-757 と SK-793、南２ｍに SI-756 が隣接する。　**重複**　SI-731 のカマド部分を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.67m、短径 0.64m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８６７（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｉ－ 33 グリッドに位置する。西側に P-868・869・984・985 が近接し、東２ｍに SK-739 が隣接する。　**重複**　SI-741 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.67m、短径 0.64m、深さ 0.34m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　**覆土の状態**　覆

土は３層で、第２層は炭化物をわずかに含む。全体に緻密であり自然堆積と考える。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－８８２（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の西寄り、Ｉ－ 35 グリッドに位置する。東２m に SI-750 が、北東３m には SI-749 が隣接してある。　**重複**　北端で SK-879 を切る。　**形状・規模**　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 35°－Ｗ、規模は長径 0.70m、短径 0.40m、深さ 0.11m である。底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。覆土は重複する SK-879 と類似しており、一体の遺構と見ることもできよう。炭化物や焼土が多く含まれることから、何らかの焼成遺構か、竪穴住居跡のカマド部分のみが残存したものの可能性もあろうか。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－９１３（第 252 図）

位置　Ⅵ区調査区の北西部、Ｍ－ 22・23、Ｎ－ 22・23 グリッドに位置する。南に SK-911・912、西に SK-248、P-249 が近接し、北東１m に SK-253 が隣接している。　**重複**　なし。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.95m、短径 0.85m、深さ 0.11m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は炭化物や焼土を少量含む緻密な明灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－９３５（第 228 図）

位置　Ⅶ区調査区の中央部、Ｊ－ 33 グリッドに位置する。周辺に土坑はなく、東に SI-745 が近接する。　**重複**　SI-743・744 内にあり、SI-743 に切られ、SK-934 を切る。SI-744 とは直接切り合わないが、SI-744 にも切られると推定する。　**形状・規模**　平面形は円形で規模は長径 0.80m、短径 0.75m、深さ 0.23m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は３層で、重複する SK-934 と類似する。第１層は比較的緻密だが第２層は粘土主体であり、全体として人為堆積の可能性がある。第１・第２層は炭化物や焼土を含むため、SI-743 の掘方との想定もできる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－９５０（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17・18 グリッドに位置する。南西に SK-323 が近接し、東 1.3m に SI-207、SK-666、北東３m に SI-670 が隣接してある。　**重複**　SI-208 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 1.10m、短径 1.04m、深さ 0.18m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な明褐色土（第１層）と褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－９７６（第 255 図）

位置　Ⅵ区調査区の南部、Ｋ－ 17 グリッドに位置する。西 2.4m に SK-292・651・652・653・654、、南３m に SI-207 が隣接してある。　**重複**　SI-670 を切る。　**形状・規模**　平面形は円形で、規模は長径 0.75m、短径 0.73m、深さ 0.11m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。

ＳＫ－９７８（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。北に SI-200b、SK-200a・669・977 が近接し、西 1 m に SK-286、北東 2.4m に SK-290、南東 2.3m に SI-198 が隣接してある。　重複　SI-199 を切る。形状・規模　底面にピット状の掘り込みを持つことなどから、柱穴の可能性もあろう。平面形は隅丸方形で、中軸線はＮ－ 45°－Ｗ、規模は長径 0.70m、短径 0.67m、深さ 0.62m である。底面は丸みを持ち、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。北側にはピット状の掘り込みがあり、規模は径 0.27m、土坑底面からの深さ 0.06m である。　覆土の状態　覆土は礫を少量含む緻密な暗褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９７９（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。南に SK-288・981、南西に SK-980 が近接し、南 2m に SI-42、SK-287 が隣接してある。　重複　SI-199 と重複する。SI-199 床面で確認されたものであり、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 64°－Ｗ、規模は長径 0.81m、短径 0.70m、深さ 0.23m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９８０（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。東に SI-198、SK-288・979・981 が近接し、南 1.5m に SI-42、SK-287、西 1.3m に SK-285 が隣接してある。　重複　SI-199 と重複する。SI-199 床面で確認されたものであり、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 76°－Ｅ、規模は長径 0.89m、短径 0.69m、深さ 0.25m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は小礫を少量含む緻密な暗褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９８１（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 19 グリッドに位置する。北に SK-979、西に SK-980 が近接し、南に 2 m に SI-42、SK-287 が隣接してある。　重複　SI-199 と重複する。SI-199 床面で確認できたものであり、新旧関係は不明である。SK-288 との新旧関係も不明であるが、SK-288 は SI-198・199 覆土上面で確認できていることから、本遺構の方が古い可能性が高い。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.69m、短径 0.62m、深さ 0.13m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は焼土や炭化物を少量含む緻密な明褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９８２（第 258 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｋ－ 18・19 グリッドに位置する。南東に P-983 が近接し、西 1 m に SI-199、北東 1 m に SK-312 が隣接してある。　重複　SI-198 を切る。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 86°－Ｅ、規模は長径 0.82m、短径 0.70m、深さ 0.13m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は焼土や炭化物などをわずかに含む緻密な褐色土（第 1 層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－９９１（第 244 図）

位置　Ⅵ区調査区の北東部、Ｐ－ 16 グリッドに位置する。北に SI-214 が近接し、西 1.5m に SK-650、北 1.2m に SK-672a、P-672b・c・d が隣接してある。　重複　SI-403 内にあり、SI-403 に切られる。　形状・規模　平面形は隅丸長方形で、中軸線はＮ－ 74°－Ｅ、規模は長径 1.20m、短径 0.90m、深さ 0.24m である。底面は平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な明灰褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１０１０（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。南に SK-1011・1014 が近接し、西 1．2m に SK-1013、北西 2.5m に SI-218 が隣接してある。　重複　SI-217 内にあり SI-217 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形はやや角がある楕円形で、中軸線はＮ－ 11°－Ｗ、規模は長径 0.80m、短径 0.67m、深さ 0.16m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）と明灰褐色土（第２層）であり、自然堆積と考えられる。第２層は灰褐色粘土粒を多量に含む。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１０１１（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｋ－ 15、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。北に SK-1010、西に SK-1014 が近接し、西１ｍに SK-1013、南２ｍに SK-1012 が隣接してある。　重複　SI-216・217 と重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 5°－Ｗ、規模は長径 0.82m、短径 0.48m、深さ 0.13m である。底面はほぼ平坦で、壁は丸みを持って外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１０１２（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｋ－ 15 グリッドに位置する。西 1.7m に P-1015、北２ｍに SK-1011・1013・1014 が隣接してある。　重複　SI-216・217 と重複する。SI-216 床面で確認されているため、SI-217 を切ると考えられる。SI-216 との新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.70m、短径 0.57m、深さ 0.08m である。底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾してなだらかに立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　SI-216・217 として取り上げられた遺物中に本遺構出土遺物が含まれる可能性があるが、判別できない。本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－１０１３（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。北に P-1018、東に SK-1014 が近接し、東 1.3m に SK-1010・1011 が隣接してある。　重複　SI-216・217 を切る。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.64m、短径 0.57m、深さ 0.05m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　SI-216・217 として取り上げられた遺物中に本遺構出土遺物が含まれる可能性があるが、判別できない。本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－１０１４（第 239 図）

位置　Ⅵ区調査区の南東部、Ｌ－ 15 グリッドに位置する。東に SK-1011、西に SK-1013、北東に SK-1010、南 2.5m に SK-1012 が隣接してある。　重複　SI-216・217 と重複する。SI-216 床面で確認されているため、SI-217 を切ると考えられる。SI-216 との新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 79°－Ｗ、規模は長径 0.83m、短径 0.67m、深さ 0.12m である。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物をわずかに含む緻密な黒褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　　SI-216・217 として取り上げられた遺物中に本遺構出土遺物が含まれる可能性があるが、判別できない。本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－１０７０（第 257・339 図、第 272 表）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。北東１m に SK-303、南西 1.2m に SK-1071・1073 が隣接してある。　重複　SI-631 を切る。SI-201 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 52°－Ｅ、規模は長径 1.23m、短径 0.83m、深さ 0.24m である。土坑２基の重複のようにも見られ、南西の楕円形部分が深く、北東の円形部分が浅い。南西部、北東部とも底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は４層で全体に緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　角柱状ないし板状のチャートが出土する。SI-631 のカマド構築材の可能性もあるが確実ではない。本遺構の年代は不明とする。

ＳＫ－１０７１（第 257 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。北西に SK-1073 が近接し、北東 1.2m に SK-1070、西 1.4m に SI-197 が隣接してある。　重複　SI-631 を切る。SI-201 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.67m、短径 0.62m、深さ 0.15m である。底面は丸みを持ち、壁は大きく外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は緻密な褐色土（第１層）と黒褐色土（第２層）であり、第２層は多量の炭化物を含む。全体としては緻密であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

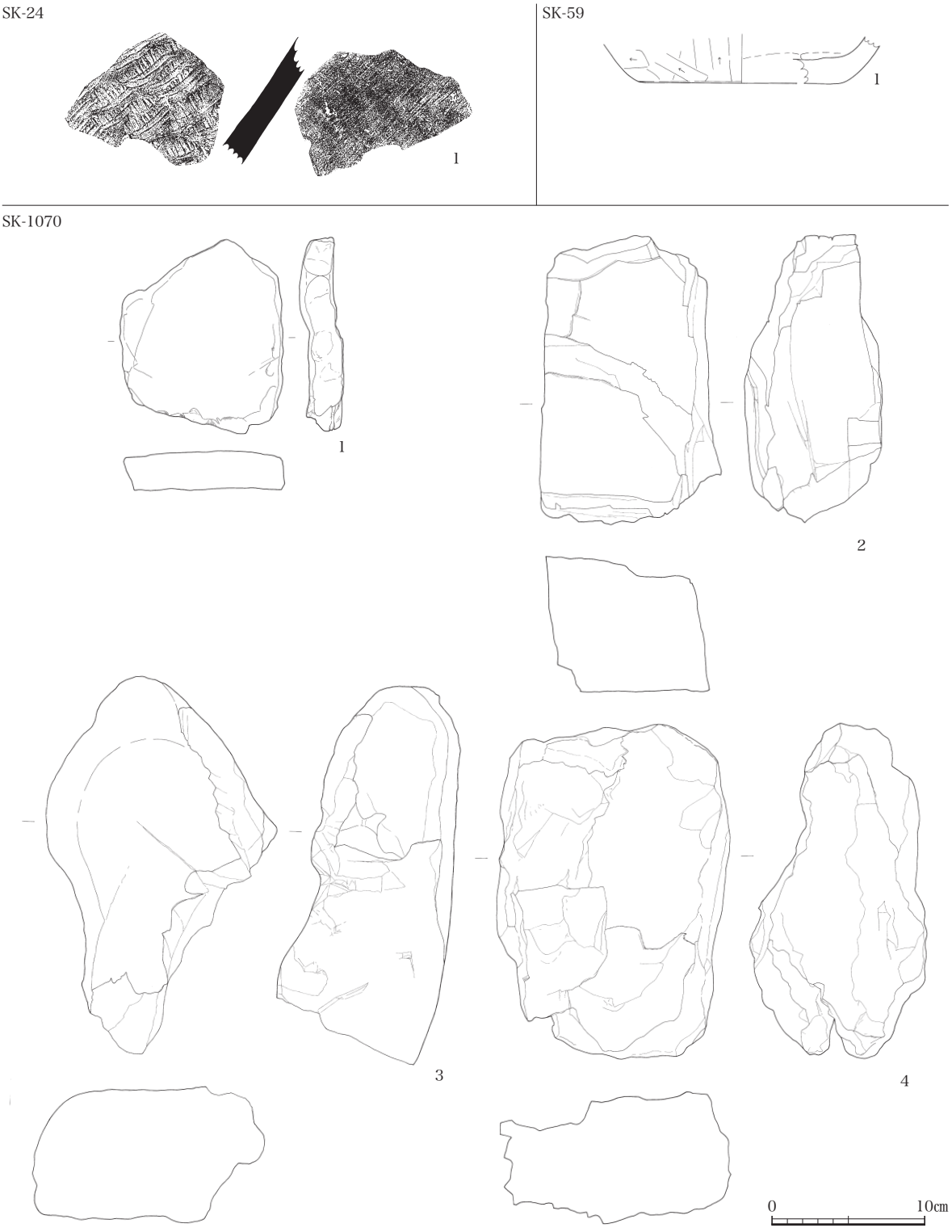
ＳＫ－１０７２（第 257 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。北東 1.5m に SK-303、西２m に SK-1071、北西 1.2m に SK-1070 が隣接してある。　重複　SI-631 を切る。SI-201 とも重複するが、新旧関係は不明である。　形状・規模　平面形は円形で、規模は長径 0.61m、短径 0.59m、深さ 0.32m である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。　覆土の状態　覆土は炭化物などをわずかに含む緻密な暗褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　遺物　出土遺物はない。

ＳＫ－１０７３（第 259 図）

位置　Ⅵ区調査区の南西部、Ｌ－ 19 グリッドに位置する。南西に SI-197、南東に SK-1071 が近接し、北東 1.3m に SK-1070 が隣接してある。　重複　SI-631 と重複する。SI-631 床面で確認されたものであり、新旧関係は不明である。SI-201 とも重複するが、こちらも新旧関係は確かめられていない。　形状・規模　平面形は楕円形で、中軸線はＮ－ 17°－Ｗ、規模は長径 0.57m、短径 0.46m、深さ 0.09m である。底面はほ

ぼ平坦で、壁は外傾して短く立ち上がる。　**覆土の状態**　覆土は緻密な褐色土（第１層）であり、自然堆積と考えられる。　**遺物**　出土遺物はない。



第 339 図　和田遺跡　時期不明土坑出土遺物実測図

第 267 表　和田遺跡　SK-24 遺物観察表

番号 種類 器種	法量 （㎝・ｇ）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 7.1	内面当具痕。外面平行叩き。内面当具は３条の弧線を刻んだもので、直交する方向に数条の直線がある。直線は木目の可能性もあろう。	N4/0　灰 緻密　白粗～細粒多量 硬質	中央部底面上５㎝ 胴一部 No.3

第 268 表　和田遺跡　SK-59 遺物観察表

1 土師器 甕	高　残 3.1 底　復 13.2	内面胴部下端～底部ナデ。外面胴部下端ケズリ、底部ケズリ。SK-44・2 と同一の可能性あり。	10YR4/2　灰黄褐 粗い　青灰礫～粗粒多量、白粗粒多量 硬質	覆土 胴下端～底 1/4

第 269 表　和田遺跡　SK-335 遺物観察表

1 木製品 不明	高　12.8 幅　5.3 厚　4.2	加工痕残り、図の下端一部に砂がくい込む。柱下部の可能性あるが出土状況不明のため器種不明とする。分析試料 No.23。	モミ属	覆土 柱下部？

第 270 表　和田遺跡　SK-832 遺物観察表

1 木製品 柱材	高　残 15.8 径　14.0 × 8.8	芯持丸木か？底面は平坦で砂がくい込み、加工痕あり。分析試料 No.14。	クリ	底面上 4cm 柱下部

第 271 表　和田遺跡　SK-833 遺物観察表

1 木製品 不明	高　11.2 幅　6.4 厚　3.8	分割材か。図の底面は平坦面をなし一部砂付着。柱下部とも考えられるが出土状況不明のため器種不明とする。分析試料 No.31。	クリ	底面より 5cm 沈む 柱下部

第 272 表　和田遺跡　SK-1070 遺物観察表

1 石 礫	長　12.7 幅　10.6 厚　残 2.6 重　561.0	平面不正形。断面長方形。表面・裏面は平坦、側面は平滑。板状の転石。完。下端は一部欠損している可能性あり。	5YR4/3　にぶい赤褐 緻密　チャート 硬質	南西部底面上 24 ㎝ 完形 SI-201P-1 No.4
2 石 礫	長　18.9 幅　11.9 厚　8.9 重　2603.5	平面長方形。断面方形。加工の痕跡なし。板状節理の発達したチャートを角柱状に加工・分割したもの。表面の一部に丸味をおびる部分があるため転石を素材にした可能性がある。	5YR4/3　にぶい赤褐 緻密　チャート 硬質	東部底面上 10 ㎝ 完形 SI-201P-1 No.1
3 石 礫	長　24.8 幅　15.1 厚　9.0 重　3581.3	平面不正楕円形。断面不正方形。特に加工の痕跡なし。楕円形と推定される転石を分割したもの。	2.5YR3/4　暗赤褐 緻密　チャート 硬質	北部底面上 22 ㎝ 完形 SI-201P-1 No.3
4 石 礫	長　21.9 幅　15.4 厚　11.7 重　4350.0	平面不正長方形。断面不正長方形。特に加工の痕跡なし。巨大な角礫を分割したものとみられる。	7.5YR3/1　黒褐 緻密　チャート 硬質	北部底面上 27 ㎝ 完形 SI-201P-1 No.2

４. ピット（第 289 ～ 299 図、第 214・223・224・242・247・250 表、図版三四・六七・六八）

ピットは調査区内で 567 基確認されており、このうち遺物などから時期を確定できないものは 479 基である。古代に位置づけたピットと規模・形状が異なることはなく、確認された位置も類似することから、多くは古代の所産の可能性があると考えられる。遺構図や一覧表などについては第３節８. ピットの項に、出土木材などについては第３節９に掲載しているので、そちらを参照していただきたい。

第 5 章　自然科学分析

和田遺跡より出土した土壌や植物遺体については、遺構の年代や木材利用の解明等を目的として自然科学分析を実施している。分析内容は、竪穴住居跡や溝等の覆土および遺構確認面から出土したテフラの同定、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、ピットより出土した木材の樹種同定と年代測定、竪穴住居跡から採集された種実の種実同定である。分析はパリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社加速器分析研究所に委託して行った。分析結果報告は複数あり、1 報告につき 1 節として掲載する。

第 1 節は、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った平成 17 年度の分析結果であり、Ⅰ．遺構覆土のテフラ同定、Ⅱ．焼失家屋の年代と構築材、について分析を行った。テフラ同定試料は、竪穴住居跡 SI-36、SI-201、溝 SD-78 の覆土、Q-15・R-15 グリッドより採集した土壌サンプルである。Q-15・R-15 グリッドは、近隣の P-17 グリッドで青銅鏡が出土するため、土層の年代を知る目的で分析を行ったものである。また、焼失家屋と見られる SI-919 では、床面から出土した炭化材 11 点の樹種同定と年代測定を実施した。

第 2 節は、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った平成 18 年度の分析結果である。平成 18 年度の発掘調査で確認された遺構、遺物を対象に、Ⅰ．調査区内堆積層および遺構覆土のテフラ同定、Ⅱ．焼失家屋の年代と構築材、Ⅲ．植物利用に関する分析、を実施した。テフラ同定試料は、SD-758 覆土、K-34 グリッド、M-35 グリッド、鋸工場下（M-26 グリッドの周辺）より採集された土壌サンプルである。樹種同定と年代測定は、SI-748 の床面から出土した炭化材 16 点を対象とした。植物利用に関する分析では、SB-235 出土の柱材・礎板、ピット P-277 出土木材の樹種同定と年代測定、SI-727、SI-730、SI-733 のカマド採集の土壌に対して出土種実の同定を行った。

第 3 節は、平成 23 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った樹種同定の分析結果である。分析対象遺構は、SI-754、SB-234、SB-508、SB-951、SK-335、SK-832、SK-833、P-387、P-397b、P-496、P-510、P-610、P-623、P-625、P-803、P-804、P-918、P-952 出土の木材、計 27 点である。

第 4 節は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った放射性炭素年代（AMS 測定）の結果である。測定対象は、SI-754、SB-235、SB-951、P-277 出土の木材と、SK-738 出土の炭化物である。

第 1 節　自然科学分析 1

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

足利市月谷町に所在する和田遺跡は、足尾山地南部に形成された足利市街地の広がる谷の北西方奥部の支谷内に位置する。この支谷は袋川により形成された谷であり、調査区は袋川右岸の沖積低地上に広がる。また、調査区の西側にはさらに小さな支谷が伸びており、調査区はこの小さな支谷が袋川の谷と合流する位置にあるといえる。また、調査区では、地表が東に向かって緩く傾斜していることから、小さな支谷の出口に形成された小規模な扇状地上にあると考えられる。

発掘調査では、古墳時代後期から奈良・平安時代までの竪穴住居跡や掘立柱建物跡および溝、土坑などの遺構が検出され、これらの遺構に伴い土師器や須恵器、瓦片などの遺物が多数出土している。本報告では、遺構覆土中に認められたテフラとされる砕屑物について、分析により検出と同定を行い、テフラである場合

には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比により、遺構の年代に係わる資料を作成する。また、住居構築材と考えられる炭化材が出土したことから、焼失家屋とされた竪穴住居跡について、炭化材の放射性炭素年代測定を行い、その年代資料を得るとともに、炭化材の樹種同定から、用材についての検討を行う。

Ⅰ . 遺構覆土のテフラ同定

1. 試料

テフラ同定の対象とされた試料は、SI-36、SI-201、SD-78 の各遺構覆土と Q-15・R-15 グリッドより採取された土壌である。これらのうち、SI-36、SI-201 の各遺構覆土と Q-15・R-15 グリッド採取土壌では、発掘調査所見により、平安時代の 1108 年 (天仁元年) に浅間火山から噴出したテフラである浅間 B テフラ (As-B: 新井 ,1979) が包含されていると指摘されており、ここでは、その確認を行う。なお、便宜上、これらの試料を As-B 関連試料と呼ぶ。一方、SD-78 の覆土では、白色粒子を含むなどの記載はあるが、発掘調査所見によるテフラの包含は指摘されていない。したがって、SD-78 では、各覆土層について採取された試料の分析から、テフラを検出し、その構築または埋積年代を検討する。以下に、各遺構覆土について述べる。

SI-36: 試料は B-B’ 断面の 1 層より採取された。1 層は、SI-36 の床面との間に厚さ約 20cm の覆土の間層を挟んで堆積する厚さ 10 ～ 15cm の灰褐色土層とされており、その上位には現地表を構成する耕作土および客土が堆積する。

SI-201: 試料は B-B’ 断面の 1 層より採取された。1 層は、SI-36 の床面と検出面との間を埋める厚さ約 10cm の黒色砂とされている覆土である。なお、本住居跡のみ 11 ～ 12 世紀の構築年代が推定されている。

Q-15・R-15 グリッド : 黒褐色を呈するシルト混じりの砂である。

SD-78:A-A’ 断面と B-B’ 断面の 2 箇所から採取された。A-A’ 断面では、耕作土と客土の下位に厚さ最大約 35cm の覆土上部を構成する 1 層と厚さ最大約 30cm の覆土下部の 2 層とが分層されている。1 層は明灰褐色土、2 層は暗灰褐色土とされている。試料は、遺構基底直下の地山より試料番号 1 が採取され、覆土からは、試料番号２から上位に向かって試料番号４までは２層、試料番号５～７は１層より採取され、試料番号８は客土、試料番号 9 は耕作土より採取された。また、溝断面東端部付近の 1 層において白色粒子の集中が認められた部分より試料番号 10 が採取されている。B-B’ 断面では、耕作土と客土の下位に、上位より順に 3、4、5、1、2、6、7、8、9 の各覆土層が分層されている。3 層は厚さ約 10cm の灰褐色土、4 層はレンズ状に堆積する厚さ約 10cm の青灰色土、5 層は溝断面西側に部分的に堆積する厚さ約 20cm の暗黄褐色土、1 層は厚さ最大約 35cm の明灰褐色土、2 層は厚さ最大約 20cm の暗灰褐色土、6 層は厚さ最大約 20cm の黄褐色土、7 層は厚さ約 10cm の暗灰褐色土、8 層は厚さ約 10cm の暗黄褐色土、基底直上の 9 層は厚さ約 20cm のオリーブ灰色土とされている。試料は、9 層下部より試料番号 11 が採取され、上位に向かって順に試料番号 23 まで採取された。これらのうち、試料番号 11、12 は 9 層、試料番号 13 は 8 層、試料番号 14 は 7 層、試料番号 15、16 は 6 層、試料番号 17 は 2 層、試料番号 18 ～ 20 は 1 層、試料番号 21 は 3 層、試料番号 22 は客土、試料番号 23 は耕作土の各層より採取されている。さらに 2 層の溝断面東側の部分より試料番号 24、4 層より試料番号 25、5 層より試料番号 26 がそれぞれ採取された。なお、SD-78 の試料については、表 1 に呈示した 19 点を選択し、分析に供した。したがって、分析点数は計 23 点である。

2. 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、

テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

3. 結果

（1）As-B 関連試料

結果を第 273 表に示す。SI-201 および Q-15・R-15 グリッドには多量、SI-36 には少量の軽石がそれぞれ含まれる。主たる軽石の特徴は、いずれの試料も同様であり、最大径約 1.8mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良、斜方輝石の斑晶を包有する。また、いずれの試料にも斜方輝石の遊離結晶と径 1mm 前後の暗灰～灰黒色を呈する角礫状の安山岩片が認められ、その量比は軽石の量比と正の相関を示す。さらに、SI-36 と SI-201 には、この軽石とは特徴の異なる軽石が微量および極めて微量それぞれに含まれる。その特徴は、最大径約 5mm、灰白色を呈し、発泡は不良、角閃石の斑晶を包有する。

なお、スコリアおよび火山ガラスは、いずれの試料にも認められなかった。

（2）SD-78

結果を第 273 表に示す。いずれの試料においてもスコリアおよび火山ガラスは認められなかった。一方、軽石は、各試料に極めて微量～中量まで様々な産状を呈する。以下に、断面ごとにその産状を述べる。

A-A’ 断面 : 試料番号 3(2 層)、試料番号 10(1 層東端部)、試料番号 8(客土) に少量、試料番号 1(地山)、試料番号 5(1 層下部)、試料番号 9(耕作土) に微量、試料番号 7(1 層上部) に極めて微量含まれる。軽石には、色調と発泡度および斑晶の違いから、3 種類の軽石が認められた。まず第 1 番目の軽石として、最大径約 7mm、灰白色を呈し、発泡不良、一部に角閃石の斑晶を包有するという特徴の軽石があげられる。この軽石は、全試料に認められるが、2 層に比較的多い傾向が窺える。第 2 番目の軽石は、最大径約 1.8mm、灰褐色を呈し、発泡やや不良、一部に斜方輝石の斑晶を包有するという特徴の軽石である。この軽石は、試料番号 9 ～ 5 に認められるが、客土の試料番号 8 に比較的多い。なお、この軽石は、その特徴から、上述した As-B 関連試料中に認められた軽石と同一のテフラに由来すると判断される。第 3 番目の軽石は、最大径約 2mm、淡褐灰色を呈し、発泡良好、一部に斜方輝石の斑晶を包有するという特徴の軽石である。この軽石は、試料番号 5、3、1 に認められるが、2 層に比較的多い傾向が窺える。

B-B’ 断面 : 試料番号 11(9 層) に中量、試料番号 13(8 層)、試料番号 14(7 層)、試料番号 24(2 層東側)、試料番号 21(3 層) には少量、試料番号 15(6 層)、試料番号 17(2 層中央)、試料番号 19(1 層)、試料番号 26(5 層)、試料番号 25(4 層)、試料番号 22(客土)、試料番号 23(耕作土) には、それぞれ微量認められた。本断面においても、上述した 3 種類の軽石を識別することができた。A-A’ で第 1 番目の軽石とした灰白色軽石は、本断面では、客土の試料番号 22 を除く全試料に認められた。9 層下部の試料番号 11 に比較的多い。第 2 番目の軽石とした灰褐色軽石は、耕作土の試料番号 23 から 3 層の試料番号 21 までの試料に認められ、3 層の試料番号 21 に比較的多く含まれる。第 3 番目の軽石とした淡褐灰色軽石は、5 層の試料番号 26 から 9 層下部の試料番号 11 まで認められ、試料番号 11 に比較的多く含まれる。

4. 考察

（1）テフラの同定

As-B 関連試料の全試料に共通して認められた軽石および SD-78 においてそれと同様の特徴を持ち、他の軽石より上位に産出する傾向を示す第 2 番目の軽石とした軽石は、その特徴と本遺跡の地理的位置および産出層位から、発掘調査所見で指摘された As-B に由来すると考えられる。なお、新井 (1979) による As-B の特徴

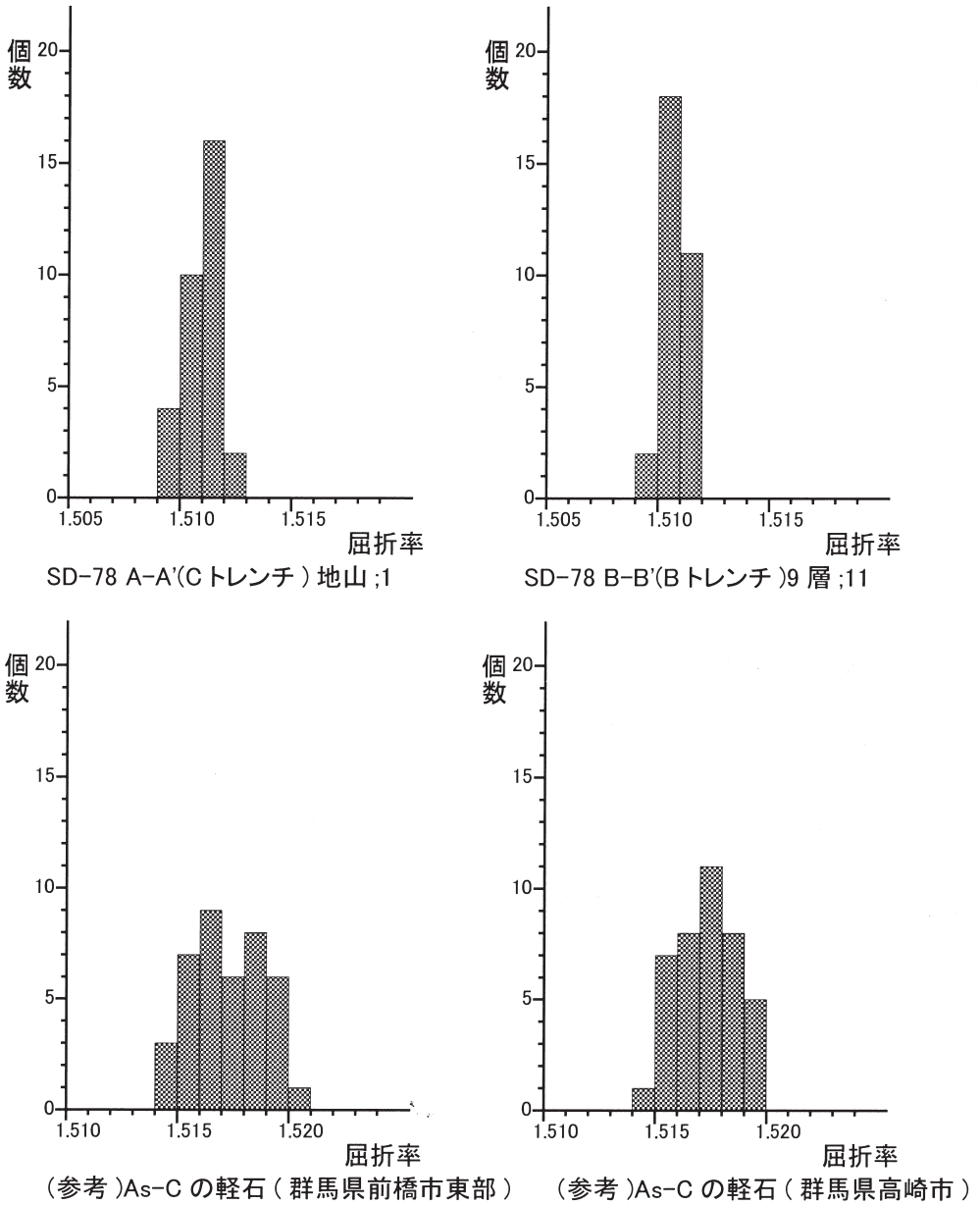
第 273 表　テフラ分析結果

遺構名・地点名	断面	層名	試料番号	スコリア	火山ガラス	軽石			検出されたテフラ
				量	量	量	色調・発泡度	最大粒径	
SI-36	B-B'	1	—	—	—	++	GBr・sb	1.8	As-B
						+	GW・b	3.5	Hr-FP
SI-201	B-B'	1	—	—	—	++++	GBr・sb	1.8	As-B
						(+)	GW・b	5.0	Hr-FP
Q-15・R-15 グリッド	—	—	—	—	—	++++	GBr・sb	1.8	As-B
SD-78	A-A'(Cトレンチ)	耕作土	9	—	—	+	GBr・sb	1.5	As-B
						(+)	GW・b	2.0	Hr-FP
		客土	8	—	—	++	GBr・sb	1.8	As-B
						(+)	GW・b	1.2	Hr-FP
		1	7	—	—	(+)	GBr・sb	1.2	As-B
						(+)	GW・b	3.0	Hr-FP
			5	—	—	+	GBr・sb	1.0	As-B
						+	GW・b	4.0	Hr-FP
						+	PBrG・g	1.5	更新世不明テフラ
			10	—	—	++	GW・b	7.0	Hr-FP
		2	3	—	—	++	GW・b	3.0	Hr-FP
						++	PBrG・g	2.0	更新世不明テフラ
		地山	1	—	—	+	GW・b	4.0	Hr-FP
						+	PBrG・g	1.8	更新世不明テフラ
	B-B'(Bトレンチ)	耕作土	23	—	—	+	GBr・sb	1.5	As-B
						(+)	GW・b	1.5	Hr-FP
		客土	22	—	—	+	GBr・sb	1.5	As-B
		3	21	—	—	++	GBr・sb	1.3	As-B
						(+)	GW・b	2.5	Hr-FP
		4	25	—	—	+	GW・b	4.0	Hr-FP
		5	26	—	—	+	GW・b	4.0	Hr-FP
						(+)	PBrG・g	1.5	更新世不明テフラ
		1	19	—	—	+	GW・b	2.3	Hr-FP
		2	17	—	—	+	GW・b	3.5	Hr-FP
						(+)	PBrG・g	1.8	更新世不明テフラ
			24	—	—	++	GW・b	3.5	Hr-FP
						(+)	PBrG・g	1.8	更新世不明テフラ
		6	15	—	—	+	GW・b	5.0	Hr-FP
						(+)	PBrG・g	1.8	更新世不明テフラ
		7	14	—	—	++	GW・b	3.5	Hr-FP
						+	PBrG・g	1.8	更新世不明テフラ
		8	13	—	—	++	GW・b	4.5	Hr-FP
						+	PBrG・g	2.0	更新世不明テフラ
		9	11	—	—	+++	GW・b	8.0	Hr-FP
						++	PBrG・g	2.7	更新世不明テフラ

凡例　—:含まれない．(+):きわめて微量．+:微量．++:少量．+++:中量．++++:多量．
GBr:灰褐色．GW:灰白色．PBrG:淡褐灰色．
g:良好．sg:やや良好．sb:やや不良．b:不良．最大粒径はmm.

として、多量の安山岩片を伴うことがあげられているが、As-B 関連試料で認められた安山岩片は、これに相当すると考えられる。すなわち、As-B 関連試料においては、安山岩片の産状も、軽石が As-B に由来することを支持している。

SD-78 のほぼ全試料に認められ、第 1 番目の軽石とした灰白色の軽石、および As-B 関連試料の SI-36 と SI-201 に微量および極めて微量認められた灰白色の軽石は、上述した As-B よりも下位であることを示唆する層位的な産状と軽石の特徴および本遺跡の地理的位置から、古墳時代に榛名火山より噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA: 新井 ,1979; 早田 ,1989) または榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP: 新井 ,1979; 早田 ,1989) の



第 340 図　不明テフラおよび As-C の軽石屈折率測定結果

いずれかに対比される可能性がある。Hr-FA は 6 世紀初頭に噴出したとされ、細粒の火山灰と火砕流の噴出を主体としたテフラであり、その分布軸は榛名火山から東方へ向き、南北方向にも幅広い分布が示されている (町田・新井 ,2003)。一方、Hr-FP は 6 世紀中葉に多量の軽石を噴出したテフラであり、その分布軸は北東方向を向いており、分布幅は比較的狭い (町田・新井 ,2003)。本遺跡の所在する足利市付近は、その分布範囲からややはずれた位置にある。しかし、今回の分析で検出された火山砕屑物は、径は小さいが、斑晶を包有する軽石であり、火山ガラスではない。また、灰白色の軽石の検出された試料には、早田 (1989) のいう遠隔地における Hr-FA を構成するスポンジ状に発泡した細粒の火山ガラスを認めることはできなかった。したがって、今回検出された古墳時代の榛名火山のテフラは、Hr-FP に対比される可能性がある。なお、As-B および Hr-FP は、ともに、本遺跡より東方へ約 1km 離れた谷内の沖積低地に位置する田島持舟遺跡の自然堆積層においても当社分析により確認されている。

SD-78 の比較的下位の試料に認められた第 3 番目の軽石とした淡褐灰色の軽石については、Hr-FP よりも

下位に出現する傾向のある産状と軽石の特徴および本遺跡の地理的位置から、4 世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C: 新井 ,1979) に対比される可能性があると考えた。しかし、上述した田島持舟遺跡においても当社分析により As-C が確認されているが、その軽石とは、粒径 (田島持舟遺跡では 1.0 ～ 1.5mm) および色調 (田島持舟遺跡では黄白色) に違いが認められる。そのため、A-A’ 断面試料番号 1 および B-B’ 断面試料番号 11 の 2 点の試料から、それぞれ淡褐灰色の軽石を拾い出し、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法屈折率測定による検討を行った。屈折率測定結果を第 340 図に示す。第 340 図には、参考として当社保有の As-C 試料の軽石の屈折率測定結果も呈示する。SD-78 の 2 点の軽石は、ともに n1.509-1.512 のレンジを示し、1.510-1.511 に高い集中を示す。一方、参考とした As-C の軽石は、ともに n1.514-1.520 のレンジを示し、1.516-1.518 にモードがある。これらの参考試料の結果は、町田・新井 (2003) の As-C の屈折率および田島持舟遺跡で検出された As-C の屈折率と同様である。したがって、今回測定した SD-78 の淡褐灰色軽石の屈折率は、As-C の屈折率とは有意に異なるものと判断される。すなわち、淡褐灰色軽石の由来するテフラは、As-C ではないと考えられる。

現時点 (町田・新井 (2003) による記載) では、Hr-FP より古い完新世のテフラで、今回得られた淡褐灰色軽石の示す屈折率を有するテフラは認められない。したがって、淡褐灰色軽石は、SD-78 の覆土となった、周辺に分布する更新世の土壌や堆積物に含有されているテフラに由来する可能性がある。町田・新井 (2003) 記載の後期更新世のテフラから、軽石質テフラであることと淡褐灰色軽石の屈折率および足利市付近にも分布する可能性のある分布域という条件でみると、2 ～ 2.5 万年前の浅間板鼻褐色テフラ群 (As-BP) の中の中部層および 5 ～ 5.5 万年前の赤城大胡火砕流 (Ag-Og) の 2 種類のテフラのみが条件に適うテフラとしてあげられる。しかし、現時点では、いずれのテフラも遺跡周囲における産状は不明であり、淡褐灰色軽石の由来するテフラとして特定されるものではない。今後は、遺跡周辺における前期および中期更新世も含めたテフラの産状を確認し、その砕屑物の特性を分析し、今回の結果と比較することにより、更新世不明テフラの特定を進めていきたい。

（2）各遺構の年代について

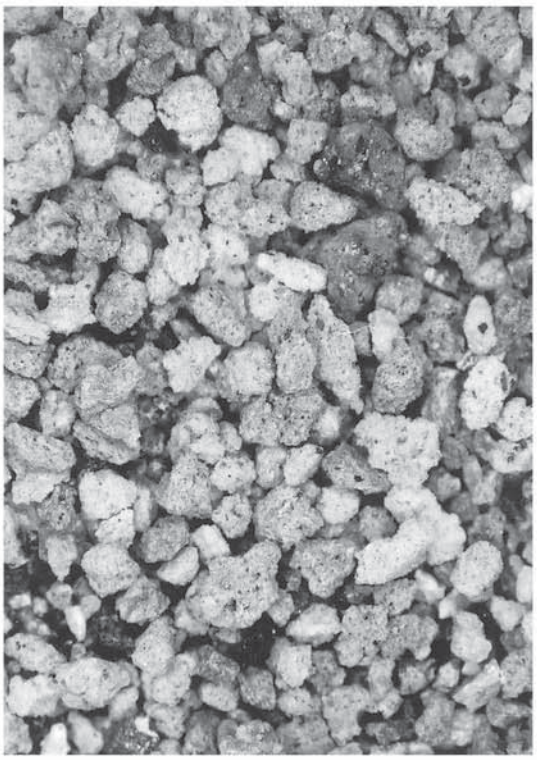
推定されるテフラの産状を第 273 表に併記する。そのテフラの産状から推定される各遺構の年代を以下に述べる。

SI-36:As-B の軽石が含まれていることは、1 層の堆積が As-B の降灰以降であることを示唆する。すなわち、As-B 降灰以降のある時期における 1 層堆積直前の頃には、SI-36 は既に厚さ約 20cm ほどの覆土により埋積されていた状態であったと考えられる。SI-36 の構築年代については、現時点では 1 層の下位の覆土層における As-B や Hr-FP の産状が不明であるため、推定することはできない。

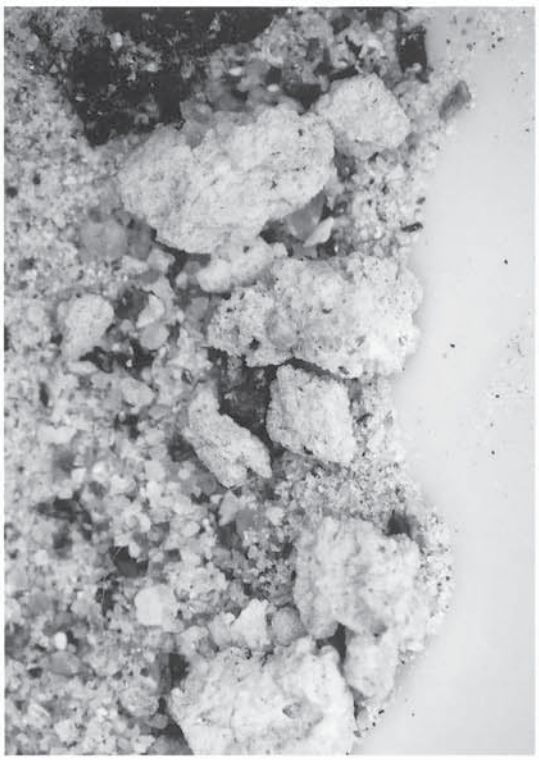
SI-201: 多量の As-B の軽石と斜方輝石の遊離結晶および安山岩片が床面直上の 1 層から検出されたことから、SI-201 が廃棄されて間もない頃に As-B の降下堆積があった可能性が高い。すなわち、SI-201 の廃棄年代は 11 世紀末から 12 世紀の初め頃であると考えられる。したがって、その構築年代も同様の年代が推定される。この年代は、遺物等による発掘調査所見とも整合する。なお、極めて微量混在する Hr-FP の軽石は、遺構周囲の土層より混入したものと考えられる。

Q-15・R-15 グリッド : 軽石や斜方輝石の遊離結晶および安山岩片の産状から、試料が採取された層位は、As-B の降下堆積層であると考えられる。したがって、試料採取層位の基底は、As-B の噴出した 12 世紀初め頃の地表面である可能性が高い。

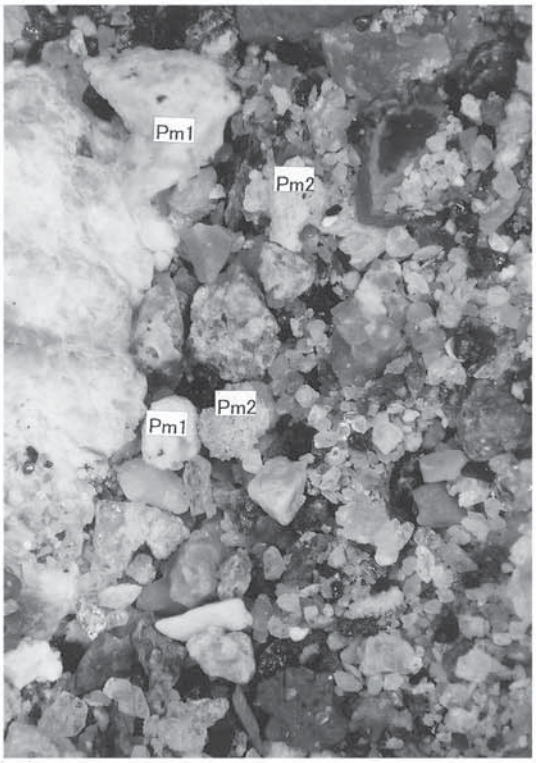
SD-78: いずれの断面においても、溝底直上の覆土中に Hr-FP と更新世不明テフラの軽石が同量程度に混在



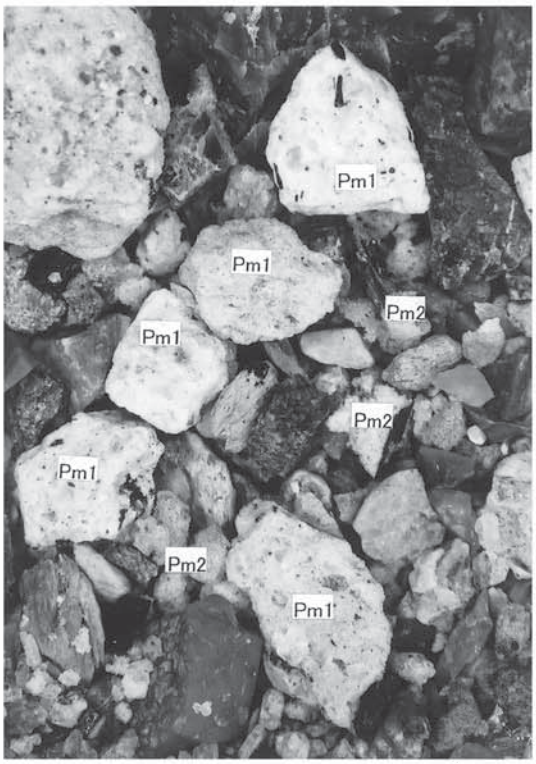
1. As-Bの軽石(Q-15・R-15グリッド)



2. Hr-FPの軽石(SD-78　A-A'(Cトレンチ)1層;10)



3. Hr-FPの軽石と更新世不明テフラの軽石
(SD-78　A-A'(Cトレンチ)地山;1)



4. Hr-FPの軽石と更新世不明テフラの軽石
(SD-78　B-B'(Bトレンチ)9層;11)

Pm1:Hr-FP　Pm2:更新世不明テフラ

2mm (1,3)　2mm (2)　3mm (4)

第341図　テフラ

していることから、Hr-FP の軽石は、溝底上に降下堆積したものではなく、溝の覆土の給源となった周囲の土層中に元々含まれていたものであると考えられる。すなわち、溝の埋積当初の時期に、既に周囲の土層中には Hr-FP が含まれていた可能性が高い。したがって、溝の構築年代は、古くとも Hr-FP の降灰した 6 世紀中葉以降であると考えられる。なお、溝底直下の地山にも Hr-FP の軽石が認められたが、微量であることから、覆土からの拡散によるものと考えられる。

また、As-B の軽石は、溝の覆土の下部には認められず、上部より出現することから、溝の埋積がある程度進んだ頃に As-B の降灰があったと考えられる。すなわち、溝の構築年代は、新しくとも As-B の降灰した 12 世紀初頭よりは以前であると考えられる。

なお、上述したように、溝覆土中における各テフラの産状は溝覆土の堆積年代を直接示すものではないが、A-A’ 断面と B-B’ 断面のように近接する 2 地点間の覆土においては、テフラの産状が同様であれば、連続する堆積物すなわち同時期の堆積物である可能性がある。したがって、更新世不明テフラおよび As-B の各軽石の消失および出現状況から、A-A’ 断面と B-B’ 断面との覆土各層の対比については、次のように考えることができる。まず、更新世不明テフラの軽石は、A-A’ 断面では 2 層および 1 層の下部 (試料番号 5) まで含まれており、1 層の上部以上には含まれていない。B-B’ 断面では 9 層から 2 層までの層位に含まれており、1 層以上の層位には含まれていない。なお､1 層より上位の 5 層中にも更新世不明テフラはきわめて微量含まれるが、本層は溝縁辺の一部に分布するにすぎないため、溝全体の埋積過程からは除いて考えたほうが良い。したがって、この更新世不明テフラの軽石の産状から、A-A’ 断面の 2 層は、B-B’ 断面の 9 層から 2 層までの層位にほぼ対比されると考えられる。さらに、この対比から、A-A’ 断面の 1 層は、B-B’ 断面の 1 層および 3 層に対比される可能性がある。なお、A-A’ 断面の 1 層には下部から上部まで As-B の軽石が含まれているが、B-B’ 断面の 1 層には As-B の軽石は含まれていない。A-A’ 断面の方が下流であることと両地点の各覆土層の層厚などを考慮すると、A-A’ 断面の 1 層は、B-B’ 断面の 1 層と 3 層が混合した覆土であると考えられる。

Ⅱ . 焼失家屋の年代と構築材

1. 試料

試料は、SI-919 とされた竪穴住居跡の床面より出土した炭化材 11 点である。これら炭化材の出土により、SI-919 は焼失家屋であるとの発掘調査所見が示され、また、出土した土器等から、その年代は古墳時代末から奈良時代頃の可能性があるとされている。

試料とされた炭化材 11 点には、a ～ k までの試料名が付されている。これらのうち、e、f、g の 3 点は、住居跡の北東縁付近から出土した比較的大型の材 (径 10 ～ 20cm、長さ 40 ～ 70cm) である。放射性炭素年代測定は、これら 3 点を対象とし、樹種同定は 11 点全点を対象とする。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。β 線計数装置の気体比例計数管で、14C の崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中の δ 13C を測定する。

炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であ

り、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

（2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東 (1982) および Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林 (1991)、伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

（1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 274 表に示す。試料 e は 1,870 ± 100BP、試料 f は 1,980 ± 100BP、試料 g は 2,100 ± 80BP を示す。

また、較正した暦年代を第 275 表に示す。暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2 σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差σの値をみると、試料 e は calAD25-251、試料 f は calBC152-calAD129、試料 g は calBC348-calBC2 を示す。

（2）樹種同定

樹種同定結果を第 276 表に示す。炭化材は、針葉樹 1 種類 (カヤ)、広葉樹 1 種類 (ヌルデ) とイネ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・カヤ (Torreya nucifera Sieb. et Zucc.)　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には 2 本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

第 274 表　放射性炭素年代測定結果

遺構名	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
SI-919	e	炭化材	ヌルデ	1,870 ± 100	-25.5	1,880 ± 100	IAA-954
	f	炭化材	ヌルデ	1,980 ± 100	-25.9	2,000 ± 100	IAA-955
	g	炭化材	ヌルデ	2,100 ± 80	-25.3	2,110 ± 80	IAA-956

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第 275 表　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）												相対比	Code No.
e	1,871 ± 97	σ	cal	AD	25	-	cal	AD	251	cal	BP	1,925	-	1,699	1.000	IAA-954
		2 σ	cal	BC	88	-	cal	BC	76	cal	BP	2,038	-	2,026	0.005	
			cal	BC	56	-	cal	AD	394	cal	BP	2,006	-	1,556	0.995	
f	1,982 ± 103	σ	cal	BC	152	-	cal	BC	139	cal	BP	2,102	-	2,089	0.032	IAA-955
			cal	BC	112	-	cal	AD	129	cal	BP	2,062	-	1,821	0.968	
		2 σ	cal	BC	351	-	cal	BC	298	cal	BP	2,301	-	2,248	0.027	
			cal	BC	228	-	cal	BC	222	cal	BP	2,178	-	2,172	0.002	
			cal	BC	210	-	cal	AD	254	cal	BP	2,160	-	1,696	0.971	
			cal	AD	309	-	cal	AD	310	cal	BP	1,641	-	1,640	0.000	
g	2,104 ± 82	σ	cal	BC	348	-	cal	BC	316	cal	BP	2,298	-	2,266	0.110	IAA-956
			cal	BC	208	-	cal	BC	37	cal	BP	2,158	-	1,987	0.837	
			cal	BC	29	-	cal	BC	21	cal	BP	1,979	-	1,971	0.024	
			cal	BC	11	-	cal	BC	2	cal	BP	1,961	-	1,952	0.028	
		2 σ	cal	BC	364	-	cal	AD	30	cal	BP	2,314	-	1,920	0.984	
			cal	AD	37	-	cal	AD	52	cal	BP	1,913	-	1,898	0.016	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2 σは 95% である

5) 相対比は、σ、2 σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 276 表　樹種同定結果

遺構	試料	樹種
SI-919	a	カヤ
	b	カヤ
	c	ヌルデ
	d	ヌルデ
	e	ヌルデ
	f	ヌルデ
	g	ヌルデ
	h	ヌルデ
	i	ヌルデ
	j	ヌルデ
	k	イネ科

・ヌルデ (Rhus javanica L.)　ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は 4-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は円柱状で、中空となる。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

4. 考察

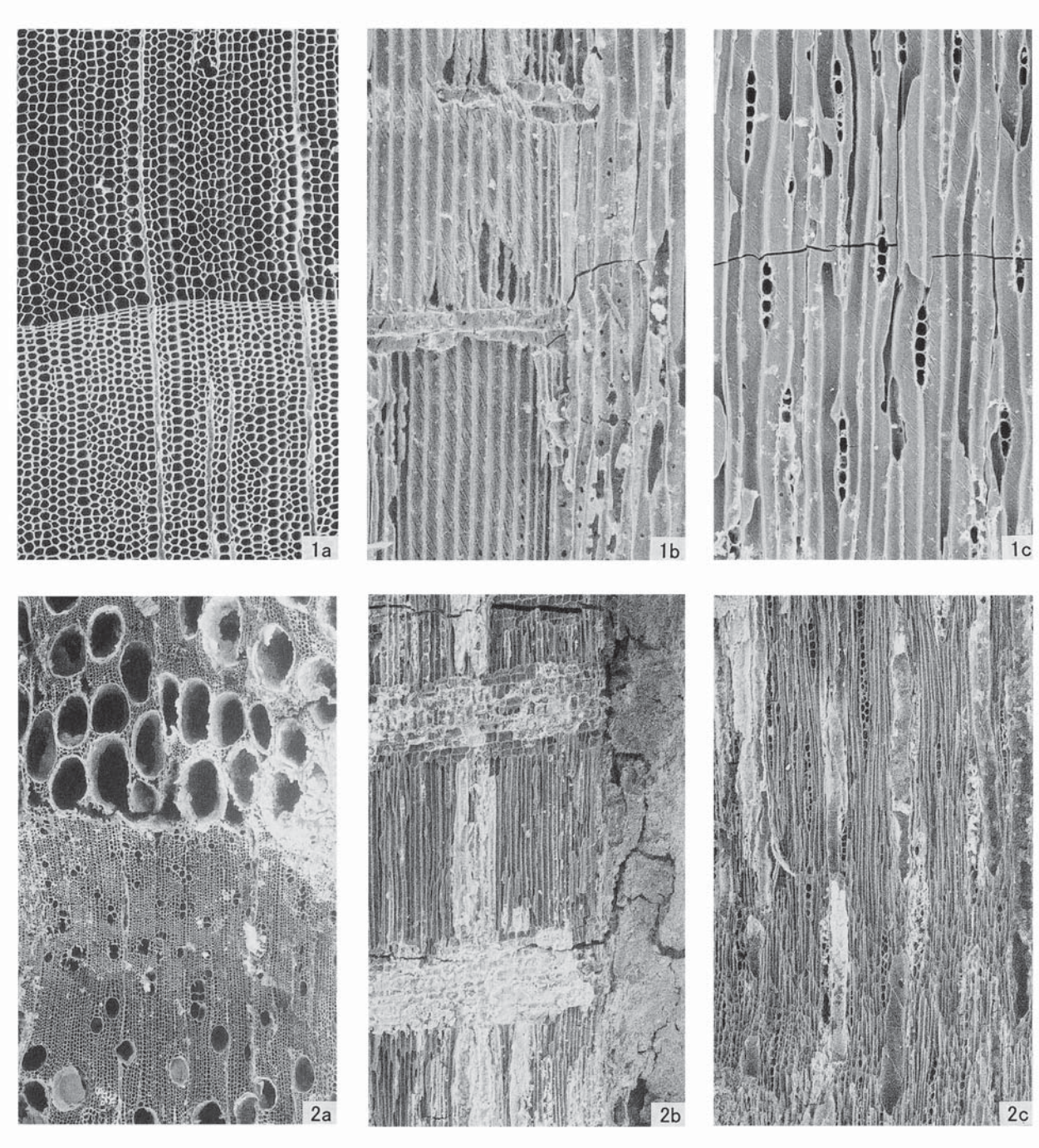
（１）焼失家屋の年代について

炭化材３点より得られた年代は、放射性炭素年代およびその較正暦年ともに、全て弥生時代に相当し、発掘調査所見よりも古い年代を示す。３点の試料の年代が重複する年代を取ると較正暦年で 1 世紀頃となる。SI-919 からの検出遺物の時代時期や、竈が検出されていることなども考慮すると、この年代が住居跡の年代を示唆する可能性は低い。一方で、平面図に記載されている年代測定を行った炭化材の産状も、それらの炭化材が住居構築材であることを示唆している。また、後述するように年代測定を行った炭化材の樹種はいずれもヌルデであったが、樹齢数百年となるような樹種ではなく、したがって、心材の使用による年代差や古材の使用などという可能性も低い。現時点では、測定された年代と住居跡の年代との関係は不明と言わざるを得ない。

今後は、さらに放射性炭素年代の測定例を増やすかあるいは住居の形態や土器の型式などの考古学における年代観の検討を重ねることが必要と思われる。

（２）焼失家屋の構築材について

SI-919 の炭化材は、主に住居北東壁付近の床面から出土しており、住居北西のカマド付近からも出土して



第 342 図　炭化材

いる。南東壁付近からは屋根材と考えられる炭化物が出土している。これらの炭化材にはカヤとヌルデの２種類が認められた。また、屋根材と考えられる炭化物はイネ科であった。

カヤは、暖温帯に分布の中心がある針葉樹で、木材は重硬で強度および耐水性が高い。一方、ヌルデは、自然堤防や道路脇等の明るくやや湿った環境によく生育する落葉広葉樹で木材の強度は高くない。樹種同定結果と出土状況を合わせて見ると、カヤはカマド脇の炭化材２点 (a,b) である。２点の距離がやや離れているが、試料間を結んだ直線と２点の試料の軸方向が一致することから、元は同一個体に由来する可能性もある。ヌ

ルデは北東壁付近から集中して出土しており、比較的大型の部材 (c,e,f,g) と小片の試料 (d,h,i,j) がある。このうち、炭化材 c,e は軸方向がほぼ同じ方向を向いており、同一個体の可能性がある。また、炭化材 c,e の間に炭化材 d があることから、炭化材 d も同一個体の可能性がある。炭化材 h,i は炭化材 g の延長線上に位置することから、同一個体の可能性がある。炭化材 f は、炭化材 c,d,e と同一個体の可能性があるが、断定はできない。炭化材 j は、その他のヌルデの炭化材とは出土位置がやや離れており、軸方向の延長線上に一致する炭化材もないため、別部材と考えられる。樹種同定結果ではヌルデが多くを占める結果となっているが、出土状況も併せると、SI-919 の建築部材として少なくともカヤ 1 点、ヌルデ 3-4 点程度が利用されていたと考えられる。住居の建築部材としては、この他にも多くの部材が利用されていたと考えられるが、火災とその後の埋積過程により遺存しなかったと考えられる。

本遺跡周辺では同時期の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行った例が知られていない。一方、栃木県内の他地域では古墳時代～古代にかけての樹種同定がいくつか報告されている。それらの結果をみると、多くの遺跡でクヌギ節が多く利用される傾向があるが、上三川町多功南原遺跡でヌルデやウルシ属とされる木材が確認された例がある (株式会社古環境研究所 ,1999a; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1987b,1993,1999a,1999b)。しかし、ウルシ属やヌルデは、住居跡から出土した炭化材の中で多くを占める樹種ではなく、クリやクヌギ節等の木材に混じって利用されている状況である。これらの点を考慮すると、SI-919 でもカヤやヌルデの他にクヌギ節等が利用されていた可能性がある。

今後、本地域の木材利用状況を明らかにするためには、周辺地域で同時期の炭化材の樹種に関する資料をさらに蓄積することが望まれる。

第２節　自然科学分析２

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成 17 年度の分析（第 1 節）では、遺構覆土からのテフラの検出による遺構年代資料の作成と、焼失家屋とされた竪穴住居跡を対象として、炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定による、年代と用材の検討を行った。その結果、遺構覆土からは浅間 B テフラ (As-B: 新井 ,1979) と榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP: 新井 ,1979; 早田 ,1989) の 2 種類のテフラを検出したことにより、遺構の年代観を検証することができた。しかし、一方で既存のテフラに対比できないテフラ (更新世不明テフラとした) も認められ、調査区内のテフラの産状に課題も残された。また、竪穴住居跡については、放射性炭素年代測定から得られた年代値が、考古資料による所見より大幅に古い値となり、用いられている材の樹種も、住居構築材としては珍しい種類のものであった。

本節では、平成 18 年度の発掘調査により確認されたテフラ層や遺構を対象とした自然科学分析結果を掲載し、平成 17 年度の分析成果の検証も含めて解析する。対象とされた遺構とその分析は以下の通りである。

1) 調査区内各所で認められた As-B のテフラ層とされる堆積物についてテフラの検出による同定を行う。また、溝遺構の覆土を対象としたテフラの検出を行い、平成 17 年度報告と同様にその年代資料を作成する。

2) 平成 17 年度報告で分析の対象とされた焼失家屋とほぼ同時期 (古墳時代末～奈良時代初頭) とされる焼失家屋床面から出土した炭化材を対象とし、放射性炭素年代測定と樹種の同定を行い、年代と用材について検討する。

3) 発掘調査所見では、奈良時代の可能性があるとされる掘立柱建物跡の柱穴より出土した柱材および礎板の樹種同定を行い、当時の用材について検討する。

4) 平安時代とされる竪穴住居跡で確認されたカマドの覆土から種実遺体等の微細物の検出を行い、食糧資源等の植物利用を検討する。

Ⅰ．調査区内堆積層および遺構覆土のテフラ同定

1. 試料

テフラ同定の対象とされた試料は、調査区内各所の確認面等で認められた As-B とされる堆積物３点と SD-758 とされた溝遺構の覆土より採取された土壌である。As-B とされる堆積物の採取場所は、鋸工場下（M-26 グリッドを中心とする 200 ㎡周辺）、K-34 グリッド、M-35 グリッドとされている。これらの位置の詳細は、分析結果を呈示した第 277 表に併記する。試料は、いずれも極粗粒砂を含む粗粒～中粒砂である。

SD-758 の覆土は、A-A’ 断面と D-D’ 断面の２箇所から採取された。A-A’ 断面では、厚さ 50cm ほどの耕作土由来の土とされる土層の下位に、覆土上部を構成する１層と覆土中部の２層および覆土下部の３層、さらに片側の断面側壁に沿って堆積する４層とが分層されている。４層は層位的には３層の下位に分層されている。各層の厚さは 15 ～ 20cm 程度である。なお、耕作土由来の土は、上部の黒ボク土、中部の黄褐色土、下部の暗黄褐色土に分層され、遺構底面より下位の地山についても、上位より５～７層まで分層されている。

発掘調査所見による覆土各層の記載は、１層は暗灰褐色土、２層は明灰褐色土、３層は灰褐色土、４層は暗灰褐色土とされている。試料は、耕作土由来の土の黒ボク土、黄褐色土、暗黄褐色土の各層位より、それぞれ試料番号 10、11、12 が採取され、遺構覆土の１～３層からは、それぞれ試料番号 13 ～ 15 が、４層からは試料番号 19 が採取されている。また、地山の６層と７層からはそれぞれ試料番号 16、17、遺構側壁の直下の地山である５層からは、遺構の両側より試料番号 18 と 20 が採取されている。

D-D’ 断面では、遺構覆土が上位より順に 11 ～ 19 までの各層に分層されている。これらのうち、11、15、17、19 の各層は暗灰褐色土、13、16 の各層は明灰褐色土、14、18 の各層は灰褐色土、12 層は明オリーブ灰色土とされている。試料は、11 層から 19 層までの各層より１点ずつ、試料番号 21 ～ 29 までが採取されている。

本分析では、SD-758 の試料については、A-A’ 断面の耕作土由来の各層および覆土の１～４の各層の試料７点と D-D’ 断面の全試料９点の計 16 点を選択し、分析に供した。

2. 分析方法

第５章第１節Ⅰ．２を参照。

3. 結果

（１）As-B 関連試料

結果を第 277 表に示す。３点ともに多量の軽石が含まれる。軽石の特徴は、いずれの試料も同様であり、最大径 2.0 ～ 2.5mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良、斜方輝石の斑晶を包有する。また、いずれの試料にも斜方輝石の遊離結晶と径 1mm 前後の暗灰～灰黒色を呈し、斜長石の斑晶を包有する角礫状の安山岩片が認められる。さらに、鋸工場下（M-26 グリッド周辺）の試料には、この軽石とは特徴の異なる軽石が極めて微量含まれる。その特徴は、最大径約 2mm、灰白色を呈し、発泡は不良、角閃石の斑晶を包有する。

なお、スコリアおよび火山ガラスは、いずれの試料にも認められなかった。

（２）SD-758

結果を第 277 表に示す。いずれの試料においてもスコリアおよび火山ガラスは認められなかった。一方、軽石は、各試料に極めて微量～多量まで様々な産状を呈する。以下に、断面ごとにその産状を述べる

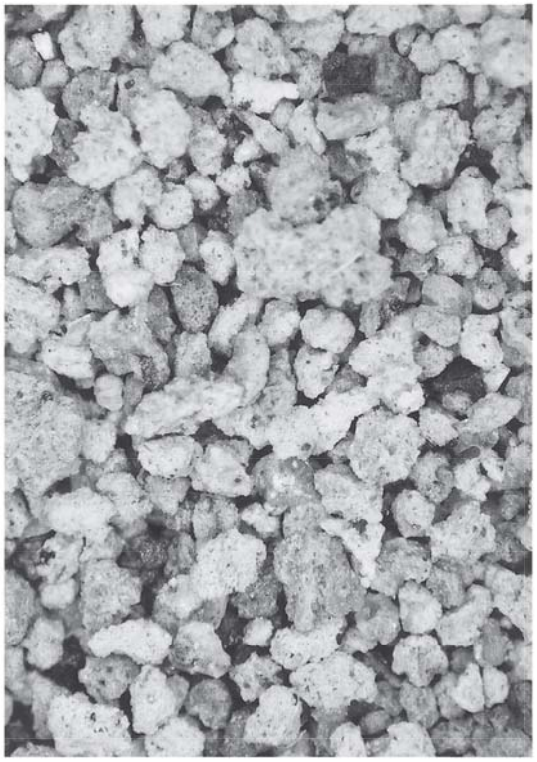
A-A’：試料番号 12(暗黄褐色土) と試料番号 14(2 層) に微量、それ以外の試料には少量含まれる。色調と発泡度および斑晶の異なる 2 種類の軽石が全試料に認められた。2 種類のうち一方は、上述した As-B 関連試料の軽石と同様の特徴であり、同様の安山岩片の供伴も確認された。安山岩片の量比は、軽石の量比と概ね正の相関を示す。もう一方の軽石は、最大径約 5mm、灰白色を呈し、発泡不良、一部に角閃石の斑晶を包有する。いずれの試料でも前者の軽石の方が多く含まれる。また、特に軽石の濃集する層位は認められない。

D-D’：試料番号 23(13 層) と試料番号 25(15 層) に多量、試料番号 21(11 層)、試料番号 22(12 層)、試料番号 24(14 層) に中量、試料番号 26(16 層)、試料番号 27(17 層) には少量、試料番号 28(18 層) には微量、

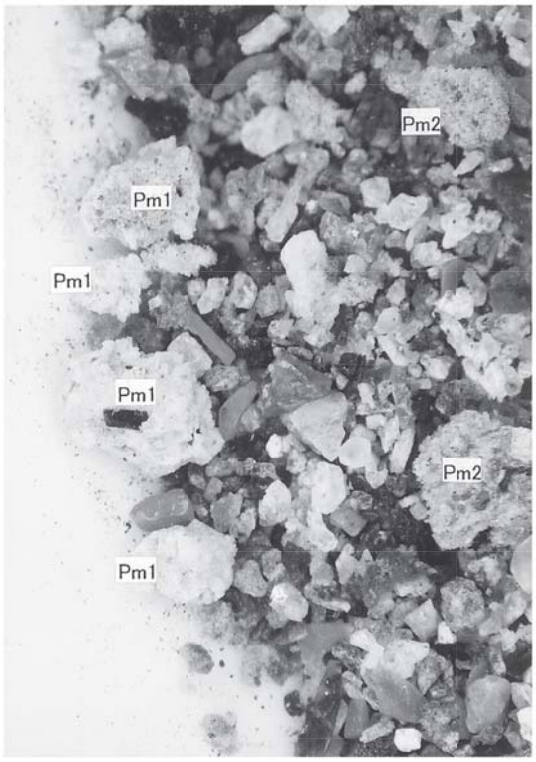
第 277 表　テフラ分析結果

遺構名・地点名	断面または位置等	層名	試料番号	スコリア	火山ガラス	軽石			検出されたテフラ
				量	量	量	色調・発泡度	最大粒径	
鋸工場下（M-26周辺）	Lv=3.07m	浅間Bサンプル		－	－	＋＋＋＋	GBr・sb	2.0	As-B
						(+)	GW・b	2.0	Hr-FP
K-34	K-34から西へ2.7m南へ1.8m	浅間Bサンプル		－	－	＋＋＋＋	GBr・sb	2.0	As-B
M-35	M-35から西へ4m北へ2.8m	浅間Bサンプル		－	－	＋＋＋＋	GBr・sb	2.5	As-B
SD-758	A-A'	黒ボク土	10	－	－	＋＋	GBr・sb	1.5	As-B
						＋	GW・b	2.7	Hr-FP
		黄褐色土	11	－	－	＋＋	GBr・sb	1.7	As-B
						＋	GW・b	3.5	Hr-FP
		暗黄褐色土	12	－	－	＋	GBr・sb	1.7	As-B
						＋	GW・b	5.0	Hr-FP
		1	13	－	－	＋＋	GBr・sb	1.2	As-B
						＋	GW・b	3.0	Hr-FP
		2	14	－	－	＋	GBr・sb	1.7	As-B
						＋	GW・b	5.0	Hr-FP
		3	15	－	－	＋＋	GBr・sb	1.7	As-B
						(+)	GW・b	5.0	Hr-FP
		4	19	－	－	＋＋	GBr・sb	1.2	As-B
						(+)	GW・b	3.0	Hr-FP
	D-D'	11	21	－	－	＋＋＋	GBr・sb	1.5	As-B
						(+)	GW・b	1.8	Hr-FP
		12	22	－	－	＋＋＋	GBr・sb	1.8	As-B
						＋	GW・b	3.0	Hr-FP
		13	23	－	－	＋＋＋＋	GBr・sb	1.7	As-B
						(+)	GW・b	2.0	Hr-FP
		14	24	－	－	＋＋＋	GBr・sb	2.0	As-B
						(+)	GW・b	4.0	Hr-FP
		15	25	－	－	＋＋＋＋	GBr・sb	1.7	As-B
						(+)	GW・b	2.2	Hr-FP
		16	26	－	－	＋＋	GBr・sb	1.5	As-B
						(+)	GW・b	2.0	Hr-FP
		17	27	－	－	＋＋	GBr・sb	1.5	As-B
						(+)	GW・b	2.5	Hr-FP
		18	28	－	－	(+)	GBr・sb	1.0	As-B
						＋	GW・b	3.5	Hr-FP
		19	29	－	－	(+)	GBr・sb	1.0	As-B
						(+)	GW・b	4.0	Hr-FP

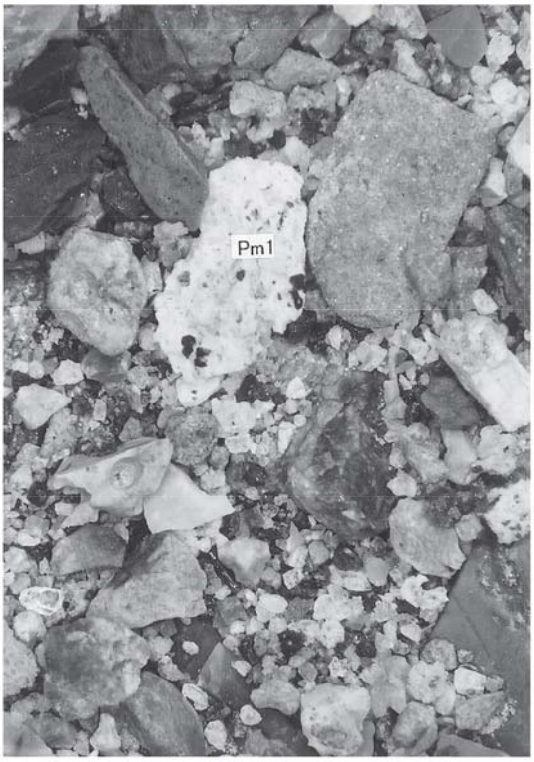
凡例　－:含まれない．(+):きわめて微量．＋:微量．＋＋:少量．＋＋＋:中量．＋＋＋＋:多量．
GBr:灰褐色．GW:灰白色．
g:良好．sg:やや良好．sb:やや不良．b:不良．最大粒径はmm．



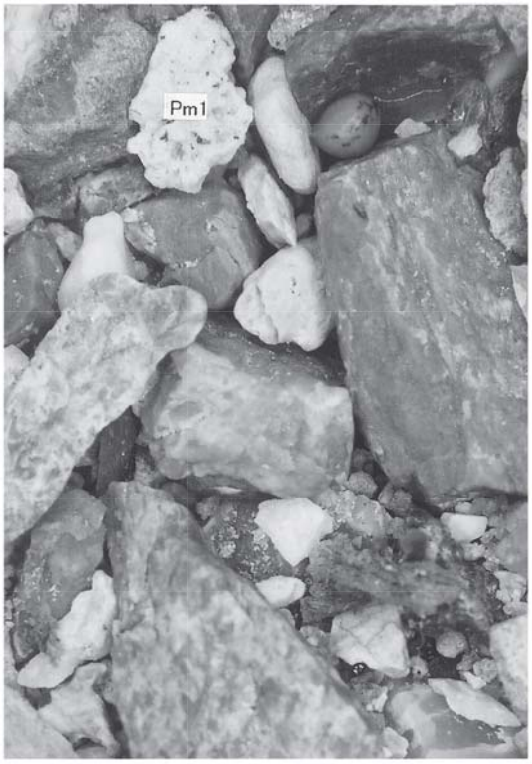
1. As-Bの軽石(M-35浅間Bサンプル)



2. Hr-FPの軽石(SD758A-A'黒ボク土;10)



3. 砂分の状況(SD758A-A'2層;14)



4. 砂分の状況(SD758D-D'19層;29)

Pm1：Hr-FPの軽石　Pm2：As-Bの軽石

2mm　2mm　3mm
1　2　3,4

第 343 図　テフラ

試料番号 29(19 層) には極めて微量認められた。本断面においても、全試料において上述した 2 種類の軽石を識別することができた。また、試料番号 28 以外の試料では、いずれも灰褐色軽石の方が灰白色軽石よりも多く含まれる。特に、11 層～ 15 層の覆土上半部において灰褐色軽石が濃集する。灰白色軽石は、いずれの試料においても微量～極めて微量であり、濃集する層位は認められない。

4. 考察

（１）テフラの同定

As-B 関連試料と SD-758 の覆土に認められた灰褐色軽石は、その特徴と安山岩片を伴うことから、平成 17 年度発掘調査に伴う分析において同定した As-B の軽石に由来すると考えられる。一方、As-B 関連試料の鋸工場下（M-26 グリッド周辺）試料と SD-758 の全試料に認められた灰白色の軽石は、同様に平成 17 年度発掘調査に伴う分析において同定した Hr-FP の軽石に由来すると考えられる。

なお、平成 17 年度発掘調査に伴う分析で認められた更新世不明テフラとした軽石は、今回の試料からはみとめることはできなかった。

（２）SD-758 の年代について

いずれの断面においても、溝底直上の覆土中に As-B と Hr-FP の軽石が混在していることから、いずれの軽石も、溝底上に降下堆積したものではなく、溝の覆土の給源となった周囲の土層中に元々含まれていたものであると考えられる。すなわち、溝の埋積当初の時期に、既に周囲の土層中には As-B が含まれていた可能性が高い。したがって、溝の構築年代は、古くとも As-B の降灰した 12 世紀初頭以降であると考えられる。

なお、D-D’ 断面の遺構覆土上部に As-B の軽石の濃集が認められるが、その産状から、降灰層準を示すものではないと考えられる。おそらく、今回の As-B 関連試料が採取されたような As-B の降下堆積層から削剥された砕屑物が長く移動することなく、溝底に堆積した状況が推定される。

Ⅱ . 焼失家屋の年代と構築材

1. 試料

試料は、SI-748 とされた竪穴住居跡の床面より出土した炭化材 16 点である。出土した土器等から、その年代は古墳時代末から奈良時代頃の可能性があるとされている。

試料とされた炭化材 16 点には、a ～ p までの試料名が付されている。これらのうち、d、h、o の 3 点を対象として放射性炭素年代測定を行った。d は住居跡の南東部、h は南西部、o は北西部のカマド付近から出土した比較的大型の材である。樹種同定は 16 点全点を対象とする。

2. 分析方法

（１）放射性炭素年代測定

第 5 章第 1 節Ⅱ . 2（１）を参照。

（２）樹種同定

第 5 章第 1 節Ⅱ . 2（２）を参照。

3. 結果

（１）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 278 表に示す。試料 d は 1,330 ± 70BP、試料 h は 1,370 ± 90BP、試料 o は 1,020 ± 80BP を示す。

また、較正した暦年代を第 279 表に示す。暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年と

して算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2 σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差σの値をみると、試料 d は calAD643-771、試料 h は calAD579-calAD769、試料 o は calAD897-calAD1149 を示す。

（２）樹種同定

樹種同定結果を第 280 表に示す。炭化材は、a、b の 2 点が黒色土の塊であり、同定可能な炭化材が認めら

第 278 表　放射性炭素年代測定結果

遺構名	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
SI-748	d	炭化材	広葉樹（散孔材）	1,330 ± 70	-24.2	1,317 ± 70	IAA-1010
	h	炭化材	クリ	1,370 ± 90	-25.6	1,380 ± 90	IAA-1011
	o	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	1,020 ± 80	-26.2	1,040 ± 80	IAA-1012

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第 279 表　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
d	1,336 ± 66	σ	cal AD 643 - cal AD 725	cal BP 1,307 - 1,225	0.746	IAA-1010
			cal AD 738 - cal AD 771	cal BP 1,212 - 1,179	0.254	
		2 σ	cal AD 594 - cal AD 831	cal BP 1,356 - 1,119	0.966	
			cal AD 836 - cal AD 869	cal BP 1,114 - 1,081	0.034	
h	1,374 ± 89	σ	cal AD 579 - cal AD 719	cal BP 1,371 - 1,231	0.866	IAA-1011
			cal AD 742 - cal AD 769	cal BP 1,208 - 1,181	0.134	
		2 σ	cal AD 442 - cal AD 454	cal BP 1,508 - 1,496	0.008	
			cal AD 460 - cal AD 484	cal BP 1,490 - 1,466	0.015	
			cal AD 532 - cal AD 882	cal BP 1,418 - 1,068	0.977	
o	1,028 ± 75	σ	cal AD 897 - cal AD 921	cal BP 1,053 - 1,029	0.123	IAA-1012
			cal AD 943 - cal AD 1,047	cal BP 1,007 - 903	0.677	
			cal AD 1,089 - cal AD 1,122	cal BP 861 - 828	0.151	
			cal AD 1,139 - cal AD 1,149	cal BP 811 - 801	0.048	
		2 σ	cal AD 784 - cal AD 787	cal BP 1,166 - 1,163	0.002	
			cal AD 824 - cal AD 841	cal BP 1,126 - 1,109	0.011	
			cal AD 861 - cal AD 1,187	cal BP 1,089 - 763	0.984	
			cal AD 1,199 - cal AD 1,206	cal BP 751 - 744	0.003	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2 σは 95% である

5) 相対比は、σ、2 σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

れなかった。また、d は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、該当種が見つからなかったため、観察できた木材組織の特徴を記した上で種類不明として報告する。その他の炭化材は、広葉樹 4 種類 (コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・カエデ属) に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

試料は、SI-748 から出土した炭化材 p の 1 点のみ。小片で保存状態が悪く、年輪界で割れて晩材部のみの観察できた。年輪界に僅かに翌年の早材部道管の一部が残っており、年輪界を挟んだ道管径の変化から環孔材と判断される。晩材部では、小径の道管が漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。木口面において複合放射組織が観察できる。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・カエデ属（Acer）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および 2-3 個が複合して散在し、年輪界へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

4. 考察

（１）焼失家屋の年代について

炭化材より得られた年代は、d および h の試料の年代が重複する年代を取ると較正暦年で 7 世紀中頃から 8 世紀後半となる。この年代は、発掘調査所見による古墳時代末～奈良時代とする年代観とほぼ整合する。一方、O の示す年代は、この年代観より若干新しい。出土位置の離れた 3 点のうち、2 点の示す年代が発掘調査所見と整合することから、住居跡の年代は、o よりも d および h の示す年代に近い可能性の方が高いと言える。

第 280 表　炭化材の樹種同定結果

遺構	時期	試料名	樹種	備考
SI-748	古墳時代末～奈良時代初頭	a	不明	黒色土の塊
		b	不明	黒色土の塊
		c	コナラ属アカガシ亜属	
		d	広葉樹（散孔材）	
		e	クリ	
		f	コナラ属アカガシ亜属	
		g	コナラ属アカガシ亜属	
		h	クリ	
		i	コナラ属アカガシ亜属	
		j	カエデ属	
		k	カエデ属	
		l	カエデ属	
		m	コナラ属アカガシ亜属	
		n	コナラ属アカガシ亜属	
		o	コナラ属アカガシ亜属	
		p	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

（２）焼失家屋の構築材について

炭化材が出土した SI-748 は、古墳時代末～奈良時代初頭の住居跡と考えられている。炭化材は、垂木等が火災の際の崩落・炭化したものと考えられるが、部位の詳細については不明である。炭化材には、アカガシ亜属が多く、クリ、カエデ属、コナラ節が利用されていたことが明らかとなった。いずれも比較的重硬で強度が高い材質を有しており、

住居構築材として強度の高い木材を選択していたことが推定される。本遺跡では、SI-919 でも出土した炭化材の樹種同定を実施しているが、その結果はヌルデが多く、針葉樹が混じる組成であり、今回とは全く異なる結果であった。SI-919 と SI-748 を比較すると、SI-748 の方が若干床面積が大きい。SI-919 では住居北東壁付近に分析した炭化材の多くが集中しており、小片も多い。一方、ＳＩ－748 では、住居南側の壁際付近を中心に出土しており、SI-919 と同様に小片が多い。これらの状況をみる限り、住居の規模や炭化材の出土状況に大きな違いは認められず、遺跡内で住居によって木材の種類構成が異なっていた可能性がある。

栃木県内では、これまでにも同時期の住居跡出土炭化材について樹種同定を実施している。古墳時代後期では、富士前遺跡、稲荷塚遺跡、清六Ⅲ遺跡、下台原南遺跡、磯岡遺跡で調査されており、稲荷塚遺跡を除く各遺跡ではクヌギ節の多い結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1987b,1995,1999a; 株式会社古環境研究所 ,1999b）。稲荷塚遺跡では、ニガキやクヌギ節が比較的多く、カエデ属、カマツカ、クリ、ケヤキ等が混じる組成が報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1987a）。一方、東野田遺跡の古墳後期～古代とされる住居跡出土炭化材ではクリが確認されており、古墳後期の資料とは木材利用が異なる（財団法人栃木県文化振興事業団 ,1990）。また、多功南原遺跡では、8 世紀前半とされる住居跡出土炭化材について樹種同定を実施しており、ウルシ属とクリを中心に、ケヤキ、アカガシ亜属が混じる組成が確認されている（株式会社古環境研究所 ,1999a）。今回のようなアカガシ亜属を主とした住居跡はこれまでのところ確認されていない。

これまで栃木県内でアカガシ亜属が確認された事例をみると、住居構築材では前述の多功南原遺跡の 1 例の他、寺野東遺跡の古墳時代前期の 1 例がある（藤根・植田 ,1997）。本遺跡を含め、アカガシ亜属が確認されている遺跡は栃木県内では比較的南部の台地上に位置する。栃木県の平野部の現存植生は、開発等により、ほとんどが代償植生（二次林）になっているか、宅地になっており、本来の植生は不明である。しかし、所々に点在するクヌギ－コナラ群集はヤブツバキ域のシラカシ群集等の二次林とされ、放置された二次林の林床や社寺林・屋敷林にシラカシが混じる場合もある（宮脇 ,1986）。これらの点とこれまでの調査結果を考慮すれば、少なくとも栃木県南部ではアカガシ亜属が生育し、その木材を利用可能であったことが推定される。

Ⅲ . 植物利用に関する分析

1. 試料

木材の樹種同定の対象とした試料は、奈良時代の可能性があるとされた SB-235 掘立柱建物跡から出土した柱材・礎板など 13 点とピット P-277 より出土した木材 1 点である。また、種実分析は、SI-727 第 1 カマド・第 2 カマドと、SI-730 カマド、SI-733 カマドから採取された土壌 4 点 (各 50-100cc 程度) について実施する。

2. 分析方法

（１）樹種同定

各遺物から 5mm 角程度の木片を採取する。木片は剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、炭化材の項と同様である。

（２）種実分析

土壌試料は、秤量後水に浸し、0.5mm 目の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材を抽出する。種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、

現生標本および原色日本植物種子写真図鑑 (石川 ,1994)、日本植物種子図鑑 (中山ほか ,2000) との対照から種類と部位を同定し、個数を数える。

分析後の種実遺体は、種類毎に容器に入れ、70% 程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。炭化材は、48 時間 70℃乾燥後の重量を求め、容器に入れて保管する。

3. 結果

（１）樹種同定

柱材・礎板等の樹種同定結果を第 281 表に示す。柱材・礎板は、針葉樹のモミ属と落葉硬葉樹のクリに同定され、クリが多い。各種類の解剖学的特徴等を記す。

第 281 表　柱材・礎板等の樹種同定結果

遺構	注記	掲載 No.	時期	用途など	樹種
SB-235	P1 No.1	9	古代	柱材	クリ
SB-235	P1 No.2	12	古代	不明	モミ属
SB-235	P1 No.5	11	古代	礎板	クリ
SB-235	P1 No.6	10	古代	礎板	クリ
SB-235	P2 No.1	13	古代	不明	クリ
SB-235	P2 No.2	14	古代	不明	クリ
SB-235	P2 No.3	15	古代	不明	クリ
SB-235	P3	16	古代	不明	クリ
SB-235	P4	17	古代	柱材	クリ
SB-235	P5	18	古代	柱材	クリ
SB-235	P6	19	古代	柱材	クリ
SB-235	P7	20	古代	柱材	クリ
SB-235	P12	21	古代	柱材	クリ
P-277		1	古代	柱材	クリ

・モミ属（Abies） マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-20 細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

（２）種実分析

結果を第 282 表に示す。土壌試料からは、3mm 角以下の炭化材が微量 (0.01g 未満 -0.1g) 検出された。その他に、SI-733 カマドから、草本のシロネ属 (Lycopus：シソ科) の果実が 2 個検出された。果実は淡褐色、長さ 1.5mm、径 1mm 程度の三稜状広倒卵体。背面は平らで、両側にはスポンジ状の翼がある。腹面の正中線上は鈍稜をなし、基部は切形で長楕円形の臍がある。

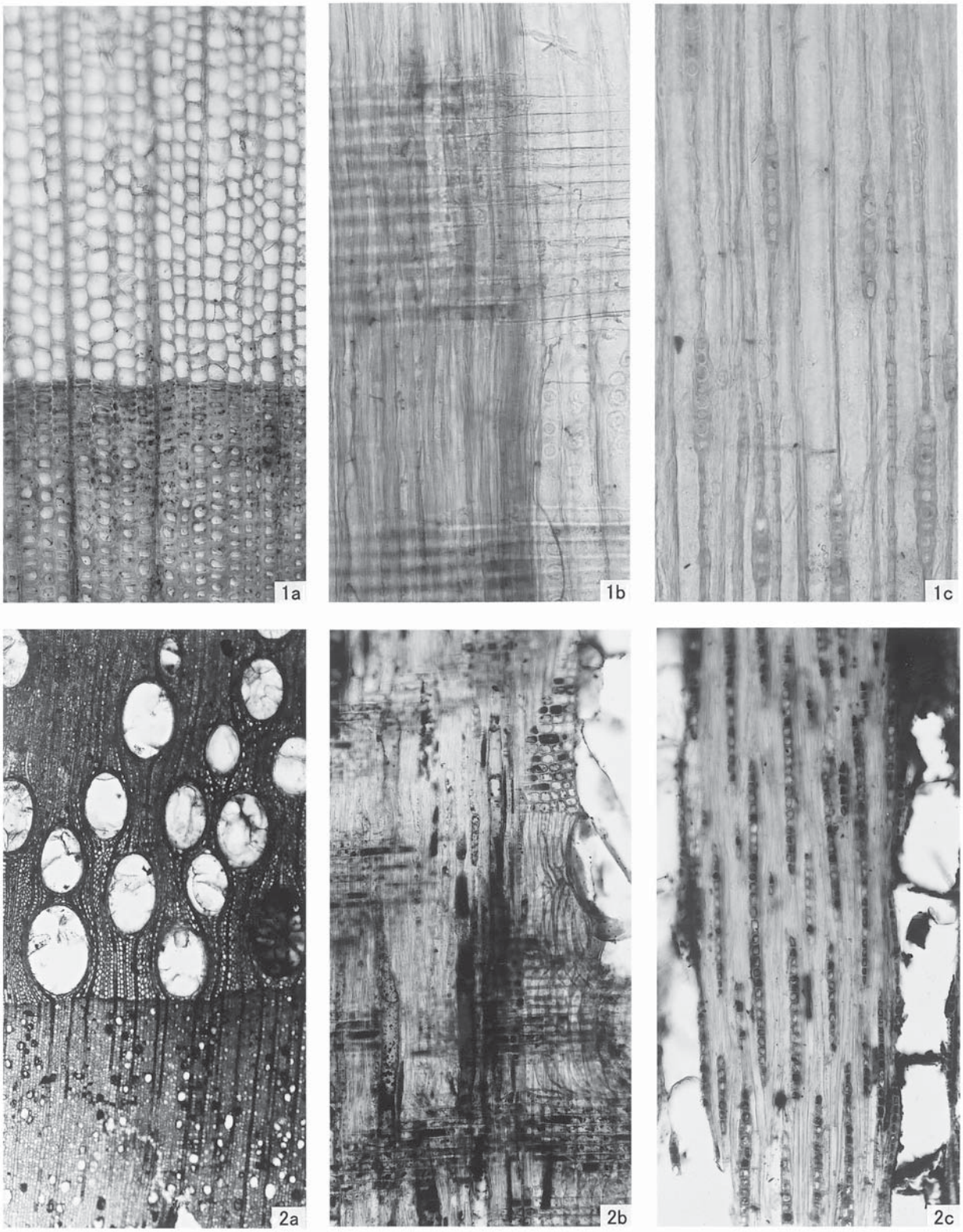
シロネ属は、湿った場所に生育する多年草で、調査区付近に生育していたものに由来すると思われる。ただし、状態が良好である点と、カマド跡とされる遺構覆土から共伴する植物遺体が炭化材のみである点から、後代より混入した可能性がある。よって、シロネ属果実は遺構の性格を反映していないと判断され、考察からは除外している。

第 282 表　種実分析結果

遺構名		分析量	分類群・部位	個数 / 重量	備考
SI-727	第 1 カマド	土壌 50cc(88.9g)	炭化材	0.1g	
	第 2 カマド	土壌 80cc(167.7g)	炭化材	0.05g	
SI-730	カマド	土壌 80cc(152g)	炭化材	<0.01g(2 個)	
SI-733	カマド	土壌 100cc(138g)	炭化材	<0.01g(1 個)	
			シロネ属 果実	2 個	後代からの混入？

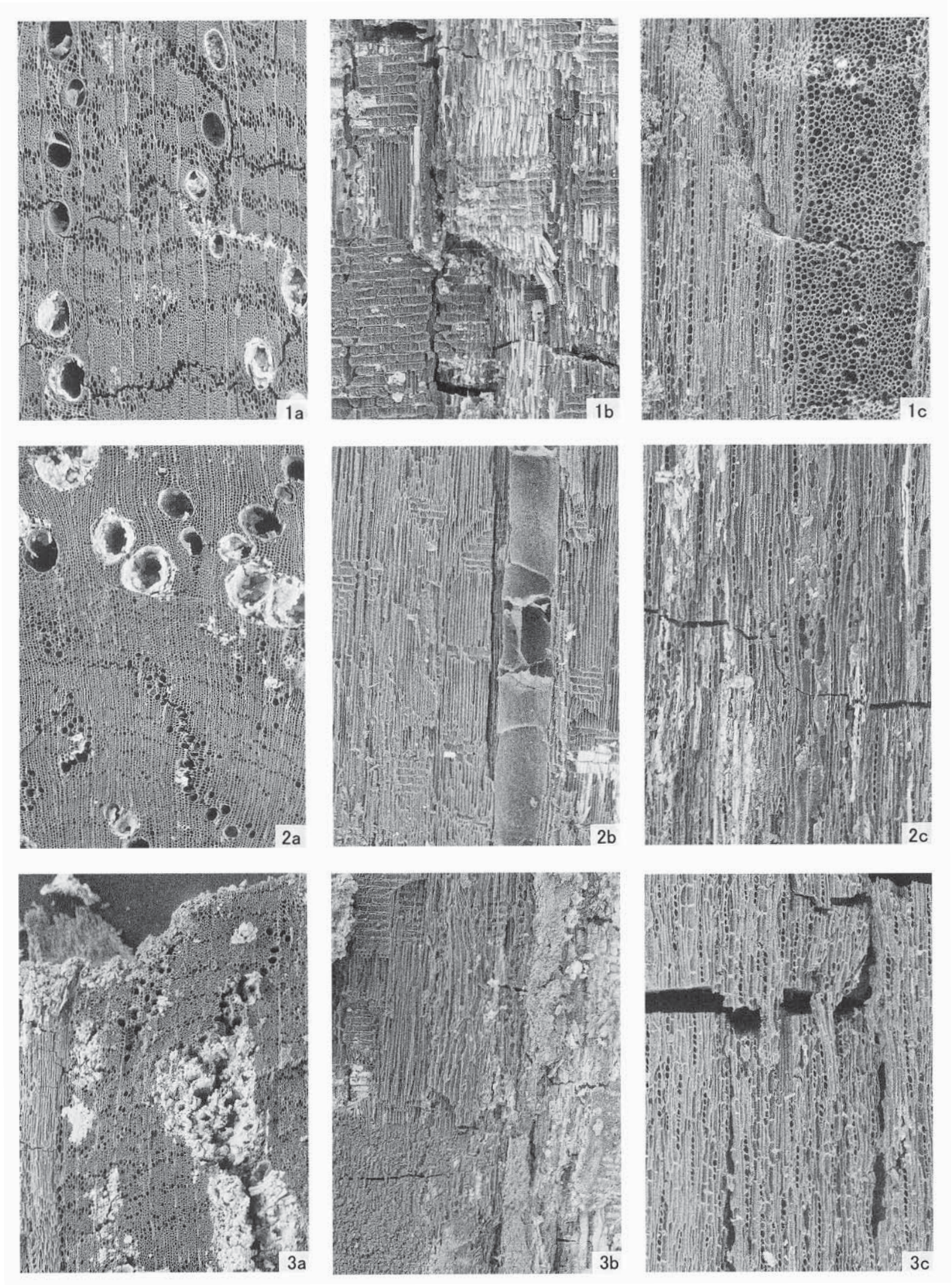
4. 考察

（１）掘立柱建物の柱材・礎板について



1. モミ属（SB-235P1;2）
2. クリ（SB-235P2;1）
　a：木口，b：柾目，c：板目

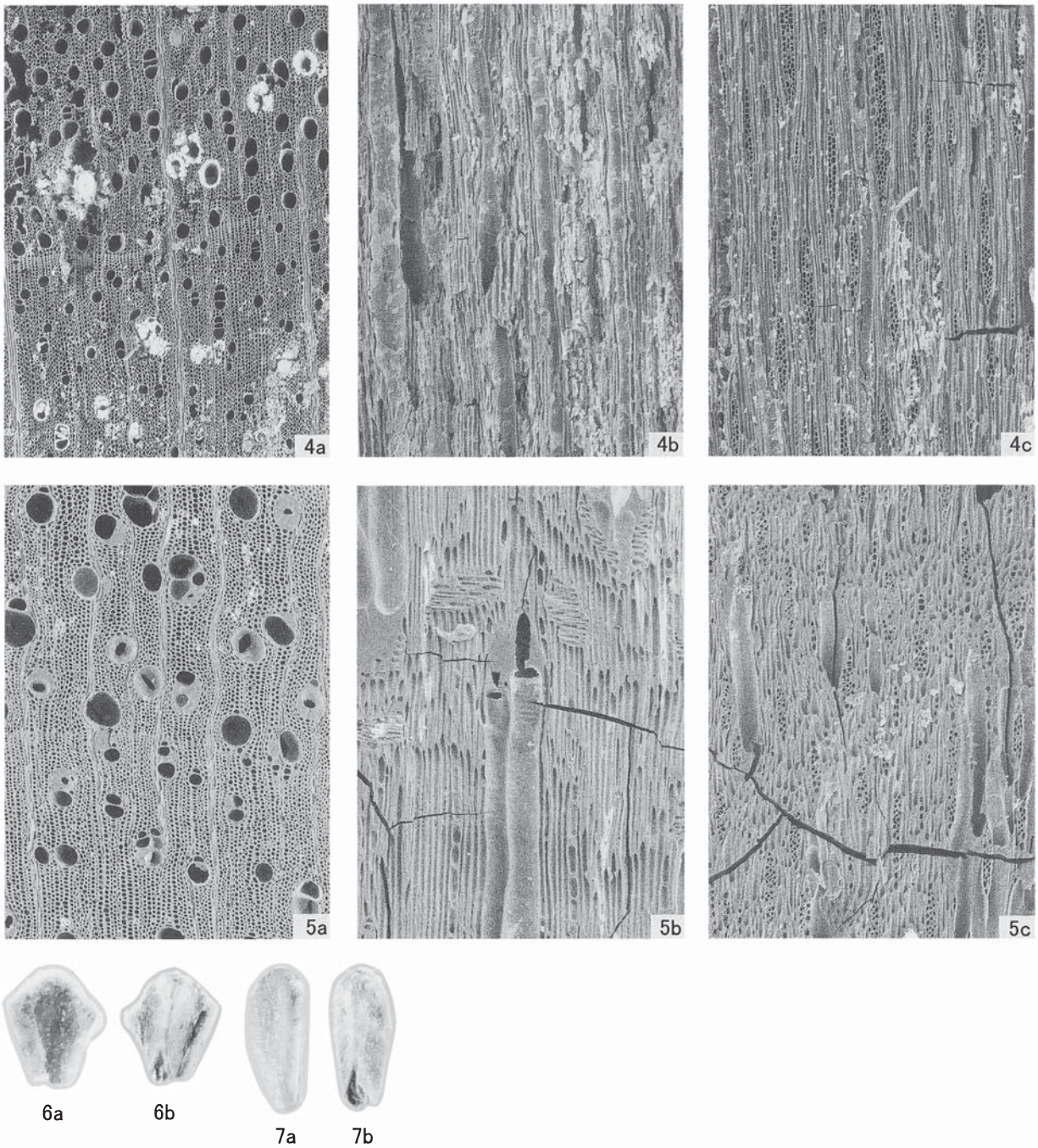
第 344 図　木材



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SI-748;p）
2. コナラ属アカガシ亜属（SI-748;c）
3. クリ（SI-748;e）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

第 345 図　炭化材（１）



第 346 図　炭化材（２）・種実遺体

奈良時代の可能性があるとされる掘立柱建物跡 SB-235 の柱穴から出土した柱材・礎板は、用途が不明の SB-235 No.12(注記番号 P-1 No.2）を除く 12 点が落葉広葉樹のクリであった。クリは、重硬で強度および耐朽性に優れた材質を有しており、強靭で腐りにくいクリを選択的に利用していたことが推定される。

栃木県内では、これまでにも住居跡出土炭化材等を中心に多くの建築部材について樹種同定を実施しているが、今回と同時期の掘立柱建物跡の柱根や礎板について樹種を明らかにした例は報告されていない。そのため、木材利用については不明であったが、今回の結果からクリが利用されていたことが推定される。今後、さらに資料を蓄積し、地域的な傾向や建物跡の規模・性格なども含めて検討することが望まれる。

第３節　自然科学分析３

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本節では、和田遺跡より検出された古墳時代後期頃の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等から出土した柱材等の木製品の樹種、および木材利用の検討を目的として実施した樹種同定結果を掲載する。

1. 試料

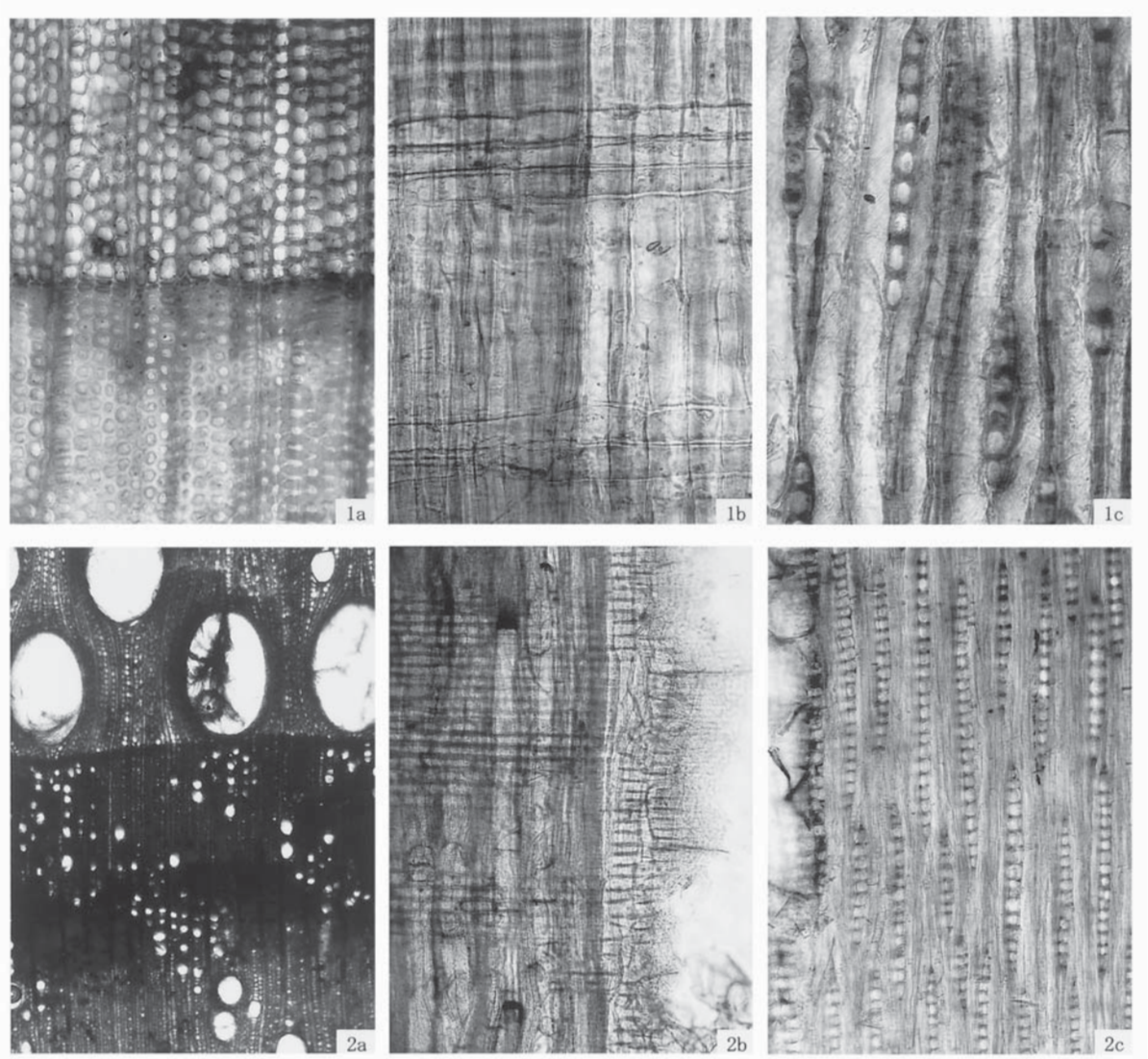
試料は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、柱穴等から出土した柱材や木片等計 20 点である。試料の詳細は、結果とともに第 283 表に示す。

第 283 表　樹種同定結果

№.	遺構名	掲載 No.	形状	最大長 (cm)	木取り	樹種	備考
1	P-510	4	柱材	25	芯持丸木か？	クリ	芯抜ける
2	P-625	3	柱材	25	芯持丸木	クリ	
3	SB-234 P-5	1	柱材	25	分割材 (芯去角材？)	クリ	
7	SB-951 P-350	1	柱材	40	芯持丸木	モミ属	
8	P-952	1	柱材	15	芯持材	クリ	
9	P-803	1	柱材	18	分割材か (芯有)	クリ	
10	P-397b	1	柱材	14	芯持丸木	クリ	
12	SI-754 P-8	14	柱材	16	分割材？	クリ	全体形状不明
13	P-623	1	柱材	17	芯持丸木	クリ	
14	SK-832	1	柱材	17	芯持材か？	クリ	
15	SB-234 P-1	2	柱材	17	分割材か？	クリ	
16	P-610 P-1	1	柱材	32	分割材	クリ	
18	SB-508 P-3	1	柱材	25	芯持丸木	クリ	
20	P-387	1	柱材	13	芯持丸木か？	クリ	
21	SK-833	1	不明	20	分割材か？	クリ	破片多数、一番大きいものを対象
22	P-804	1	柱材	7	―	クリ	小破片多数で形状不明
23	SK-335	1	不明	13	分割材 (ミカン割状)	モミ属	
25	SK-918 №. 1	1	不明	12	柾目	クリ	
26	P-496	1	柱材	15	芯持丸木	クリ	
27	SI-754 P-2	13	柱材	6	柾目	クリ	

第 284 表　遺構別樹種構成

	竪穴住居跡		掘立柱建物跡							柱穴			合計
	SI-754		SB-234	SB-235				SB-508	SB-951				
分類群	柱	木片	柱	礎板	柱	板材	木片	柱	柱	柱	板材	木片	
針葉樹													
モミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	3
広葉樹													
クリ	1	1	2	1	7	3	1	1	-	11	1	2	31
計	1	1	2	1	7	4	1	1	1	11	1	3	34



第 347 図　木材

2. 分析方法

第５章第２節Ⅲ．２（１）参照。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

同定結果を第 283 表に示す。木製品は、針葉樹 1 分類群（モミ属）と、広葉樹 1 分類群（クリ）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（Abies）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は保存状態が悪いが、一部の垂直壁でじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-20 細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

4. 考察

古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡、柱穴等から出土した柱材や木片の樹種同定の結果、落葉広葉樹のクリが多く、この他に針葉樹のモミ属が認められた。モミ属の木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが、保存性は低い。一方、クリは、重硬で強度や耐朽性が高く、加工はやや困難な部類に入る。今回の分析結果から、柱材等には強度や耐朽性を重視した木材利用が推定される。

和田遺跡では、過去にも竪穴住居跡および掘立柱建物跡の柱材や板材を対象に調査が実施されている。過去の調査結果を含めた計 34 点の出土木製品の遺構別樹種構成（第 284 表）についてみると、掘立柱建物跡では、SB-235 の建築材（柱 7 点、礎板 1 点）が全てクリであり、板材や木片ではクリが多く、モミ属が混じる組成が確認されている。この他では SB-234 および SB-508 の柱材にはクリ、SB-951 の柱材にはモミ属が確認されている。SB-235 における樹種構成から、クリ材が選択的に利用されるという特徴が窺え、少ないながらもモミ属も利用されていたことが示唆される。また、竪穴住居跡では、SI-754 の建築材（柱）と木片にクリが確認されたことから、掘立柱建物跡と同様の木材利用が推定される。なお、SI-748 から出土した炭化材の調査では、アカガシ亜属、カエデ属、コナラ節、クリが確認されている。このうち、柱材に利用されている分類群はクリのみであることから、柱材と垂木等の上屋材とでは木材利用が異なっていた可能性がある。

本遺跡周辺では、一本杉 II 遺跡（群馬県旧新田町）の古墳時代後期とされる竪穴住居跡から出土した柱材にクリ、礎板にモミ属が確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2000）、本遺跡と同様の木材利用が推定される。

第 4 節　自然科学分析 4

株式会社 加速器分析研究所

1　測定対象試料

和田遺跡は、栃木県足利市月谷町に所在する。測定対象試料は、SB-235 P-1 出土の柱から採取された木片（No.1：Ｉ AAA-103478、掲載番号 SB-235 No.9 ）、P-277 出土の柱から採取された木片（No.2：Ｉ AAA-103479、掲載番号 P-277 No.1）、SB-951 P-350 出土の柱から採取された木片（No.3：Ｉ AAA-103480、掲載番号 SB-951 No.1）、SI-754 P-8 出土の柱から採取された木片（No.4：Ｉ AAA-103481、掲載番号 SI-754 No.14）、SK-738 出土炭化物（No.5：Ｉ AAA-103482）の合計 5 点である（第 285 表）。

2　測定の意義

関連する遺構の年代を調べる。

3　化学処理工程

（1）　メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）　酸 - アルカリ - 酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l（1M）の塩酸（HCL）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」

と第 285 表に記載する。

（3） 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（4） 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5） 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6） グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

3 MV タンデム加速器（NEC Pelletron　9SDH-2）をベースとした 14C-AMS 専用装置を使用し、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO x Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1） δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 285 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）14C 年代（Libby Age:yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C 年代は δ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 285 表に、補正していない値を参考値として第 286 表に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

第 285 表　表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）AMS	δ 13C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
Ⅰ AAA-103478	No.1	SB-235 P-1	木片	AAA	-28.03 ± 0.71	1,270 ± 30	85.36 ± 0.29
Ⅰ AAA-103479	No.2	P-277	木片	AAA	-27.12 ± 0.62	1,200 ± 30	86.11 ± 0.29
Ⅰ AAA-103480	No.3	SB951 P-350	木片	AAA	-25.73 ± 0.73	1,300 ± 30	85.04 ± 0.29
Ⅰ AAA-103481	No.4	SI-754 P-8	木片	AAA	-26.74 ± 0.61	1,250 ± 30	85.57 ± 0.29
Ⅰ AAA-103482	No.5	SK-738	炭化物	AAA	-23.97 ± 0.59	1,460 ± 30	83.34 ± 0.28

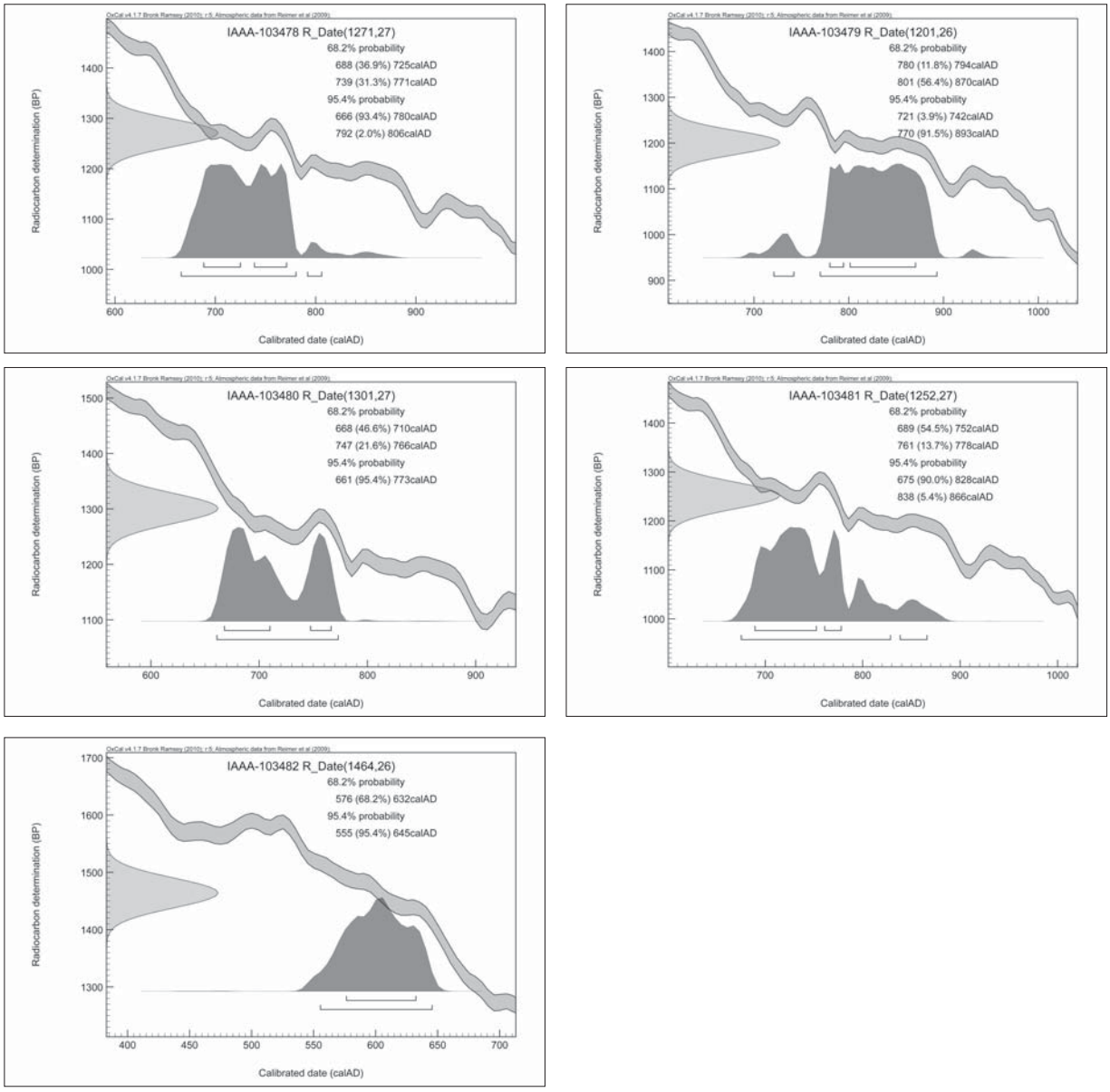
第 286 表　表 2

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
Ⅰ AAA-103478	1,320 ± 30	84.83 ± 0.26	1,271 ± 27	688calAD - 752calAD(36.9%) 739calAD - 771calAD(31.3%)	666calAD - 780calAD(93.4%) 792calAD - 806calAD(2.0%)
Ⅰ AAA-103479	1,240 ± 30	85.73 ± 0.26	1,201 ± 26	780calAD - 794calAD(11.8%) 801calAD - 804calAD(56.4%)	721calAD - 742calAD(3.9%) 770calAD - 893calAD(91.5%)
Ⅰ AAA-103480	1,310 ± 30	84.92 ± 0.26	1,301 ± 27	668calAD - 710calAD(46.6%) 747calAD - 766calAD(21.6%)	661calAD - 773calAD(95.4%)
Ⅰ AAA-103481	1,280 ± 30	85.26 ± 0.27	1,252 ± 27	689calAD - 752calAD(54.5%) 761calAD - 778calAD(13.7%)	675calAD - 828calAD(90.0%) 838calAD - 866calAD(5.4%)
Ⅰ AAA-103482	1,450 ± 30	83.51 ± 0.26	1,464 ± 26	576calAD - 632calAD(68.2%)	555calAD - 645calAD(95.4%)

〔参考値〕

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい（14C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（14C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を第 285 表に、補正していない値を参考値として第 286 表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線　上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝ 68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝ 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ 13C 補正を行い、なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース



第 348 図　　［参考］暦年較正年代グラフ

（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラム入力する値とともに参考値として第 286 表に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の 14C 年代は、SB-235 P-1 出土の柱から採取された木片 No.1（掲載番号 SB-235 9 ）が 1270 ± 30yrBP、P-277 出土の柱から採取された木片 No.2（掲載番号 P-277 1 ）が 1200 ± 30yrBP、SB-951 P-350（掲載番号 SB-951 1 ）出土の柱から採取された木片 No.3 が 1300 ± 30yrBP、SI-754P-8（掲載番号 SI-754 14 ）出土の柱から採取された木片 No.4 が 1250 ± 30yrBP、SK-738 出土炭化物 No.5 が 1460 ± 30yrBP である。暦年較正年代（１σ）は、No. 1 が 688 ～ 771cal AD の間に２つの範囲、No. 2 が 780 ～ 870cal AD の間に２つの範囲、No. 3 が 668 ～ 766cal AD の間に２つの範囲、No.4 が 689 ～ 778cal AD の間に２つの範囲、No. 5 が 576 ～ 632cal AD の範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて 50％を越え、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用文献１（第１・第２・第３節　パリノ・サーヴェイ株式会社執筆）

新井房夫 ,1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層 . 考古学ジャーナル ,157,41-52.

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

株式会社古環境研究所 ,1999a, 多功南原遺跡から出土した炭化材の同定 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 222 集　多功南原遺跡　－住宅・都市整備公団宇都宮都市計画事業多功南原地区埋蔵文化財発掘調査－　＜理化学分析編＞」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,16-20.

株式会社古環境研究所 ,1999b, 栃木県、磯岡遺跡Ⅰ区の自然科学分析 .「栃木県埋蔵文化財調査報告書第 229 集　東谷・中島地区遺跡群 No.1　- 住宅・都市整備公団による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -　磯岡遺跡（Ⅰ区）」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,409-417, 図版 116-120.

財団法人栃木県文化振興事業団 ,1990, 炭化材同定調査結果 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 110 集　一般国道 4 号（新 4 号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過（平成元年度）」,24.

島地謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

林昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

早田勉 ,1989, 六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害 . 第四紀研究 ,27,297-312.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1987a, 稲荷塚遺跡出土炭化材同定報告 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 84 集　稲荷塚・大野原　運転免許センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」, 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団 ,374-378, 図版 125-129.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1987b, 炭化材・炭化種子同定 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 85 集　宇都宮競馬場附属総合きゅう舎建設地内遺跡　御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡」, 栃木県教育委員会 ,193-197.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1993, 砂田 A 遺跡出土の炭化材同定・種子同定及びプラントオパール等の分析結果について .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 132 集　砂田 A 遺跡」, 財団法人栃木県文化振興事業団 ,204-218.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1995, 下台原南遺跡自然科学分析報告 .「栃木県埋蔵文化財調査報告書第 162 集柿の内遺跡・下台原南遺跡　宇都宮鹿沼有料道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,61-69.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1999a, 清六Ⅲ遺跡の自然科学分析 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 228 集　清六Ⅲ遺跡Ⅳ（古代・中世編）」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,340-353.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1999b, 住居構築材・燃料材の推定 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 222 集　多功南原遺跡　－住宅・都市整備公団宇都宮都市計画事業多功南原地区埋蔵文化財発掘調査－　＜理化学分析編＞」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,27-30.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2000, 樹種同定その他の分析 . 新田東部遺跡群 II　- 新田東部工業団地造成に伴う発掘調査報告書 -　第 3 分冊　槍花遺跡・遺跡群地内出土遺物・自然科学分析・考察・写真図版 , 新田町教育委員会・群馬県企業局 ,1147-1177.

藤根　久・植田弥生 ,1997, 竪穴住居跡および土坑から出土した炭化材の樹種同定 .「栃木県埋蔵文化財調査報告第 201 集　寺野東遺跡Ⅵ　小山市小山東部地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査（古墳時代 集落編）」, 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 ,248-252, 図版 40 － 43.

古澤明 ,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

町田洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

宮脇　昭 (編),1986, 日本植生誌　関東 . 至文堂 ,641p.

Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998, 広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修), 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

引用文献２（第４節　株式会社 加速器研究所執筆）

Stuiver M. and Polachi H.A. 1977 Discussion: Peorting of 14C data, *Radiocarbon 19（3）*, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon 51（1）*, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon 51（4）*, 1111-1150

第６章　まとめ

第１節　縄文・弥生時代の遺物

１　縄文時代（第 349 図）

和田遺跡では、縄文時代の遺構は確認されておらず、早期～前期の土器および石器が少量出土する。早期の土器は鵜ヶ島台式と条痕文系土器２点のみで、ともに調査区内西部から出土する。前期は黒浜式を主体とする土器片があり、関山Ⅱ式１点が含まれる。第４章第１節に図化した３点の土器は調査区内南東部からの出土である。図化しなかった黒浜式土器片のうち３点は西部で出土するが、これ以外はすべて南東部に集中する。遺物量は少ないながらも、早期は調査区内西部の山麓北側付近、前期はそれよりやや開けた微高地上と、時期ごとの遺物分布域の違いが見て取れる。それぞれの分布域に当該期の遺構が存在した可能性がある。

石器は８点出土する。器種は剝片１点、打製石斧１点、磨製石斧１点、磨石１点、凹石１点、石皿３点であり、狩猟具は出土しない。特に集中する部分はなく、調査区西部～中央部の微高地上に分布する。前期土器が多い東部からは出土しておらず、位置的な関連だけからすれば早期の可能性が高いとも言える。前期土器は西部でもわずかに確認されているため、早期～前期の石器と考えておく。

本遺跡周辺を見渡すと、早・前期の遺跡としては東に 1.5km ほど離れた田島川流域で早期の北郷小裏遺跡、前期の田島持舟遺跡等が存在するのみであり、袋川上流域には見あたらない。ただ、本遺跡のすぐ北側には縄文時代の散布地である月谷遺跡がある。石鏃しか採集されていないため時期等詳細は不明だが、本遺跡出土資料はこの遺跡に関連する遺物の可能性もあるだろう。

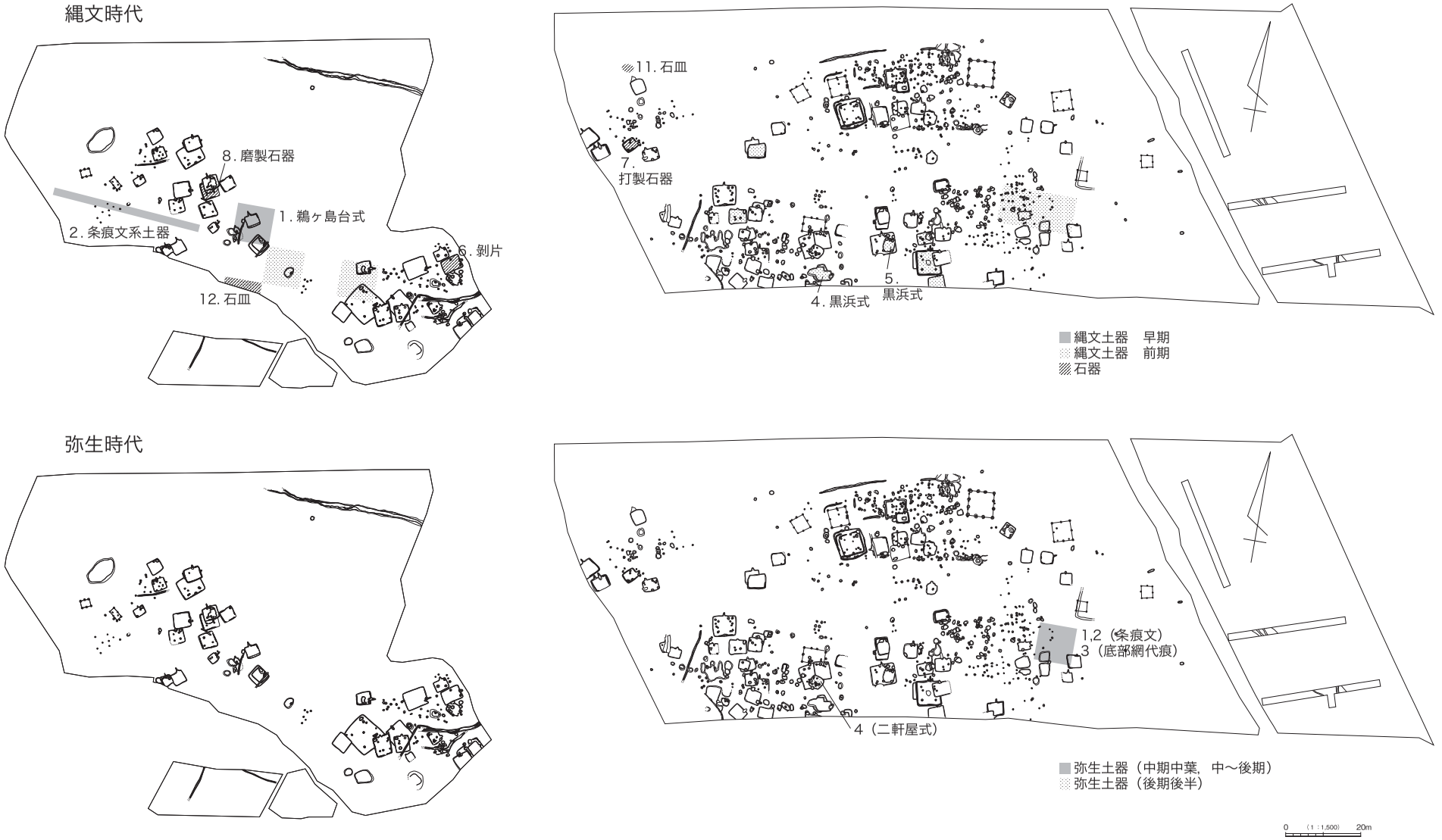
２　弥生時代（第 349 図）

弥生時代は、縄文時代と同じく遺構は確認されておらず、土器がわずかに出土するのみである。土器片は４点あり、中期中葉２点、中～後期１点、後期１点で、すべて調査区内南東部に分布する。出土量が少ないため明確にはできないが、南東部に当該期の遺構が存在した可能性が指摘できる。

本遺跡周辺では、弥生時代の遺跡は袋川上流域には見あたらず、現在の市街地である平地北端に相当する田島川流域で遺構・遺物が確認できる。田島古墳群では中期土器、利保南遺跡、赤松台遺跡では後期土器が認められるほか、田島持舟遺跡では前・中期土器と後期の住居跡が、菅田西根遺跡では後期の竪穴住居跡と後期～古墳前期の方形周溝墓、弥生時代中期にまで遡る可能性のある水田等が確認されている。中～後期における田島川流域の優位性は明らかであり、集落を支える経済基盤である水田等の耕作地開発が進んだ田島川流域を中心とした平地部に対し、袋川上流域ではいまだ開発が及ばなかったと考えることも可能である。仮に本遺跡近辺で集落が存在したとしても、規模は小さなものでしかないであろう。

第２節　古代の遺構と遺物

古代は、和田遺跡の主体となる時代である。確認された遺構は、竪穴住居跡 94 軒、掘立柱建物跡３棟、井戸１基、溝４条、土師器焼成遺構４基、土坑 143 基、ピット 88 基、性格不明遺構８基、遺物集中区２ヶ所などである。出土遺物は土師器、須恵器を主体に、灰釉陶器、瓦、支脚や筒形などの土製品、砥石、石製紡錘車、刀子、鎌、鏡など多岐に渡っている。ここでは、まず遺物の主体となる土器について所属時期を想定し、時期別の変遷を明らかする。土器以外の遺物については種別ごとにまとめてみたい。遺構については、特徴的な遺構のみを個別に取り上げるとともに、土器の変遷を基に調査区内での動態をみることとする。



第 349 図　和田遺跡　縄文・弥生時代の遺物出土位置図

１　土器の変遷について（第 350 ～ 352 図）

和田遺跡の土器は、古墳時代後期から平安時代に相当し、ほぼ１世紀を３分割するのを基本として 13 期に区分した。各期の時期は、１期：６世紀後葉、２期：７世紀前葉、３期：７世紀中葉、４期：７世紀後葉、５期：７世紀末～８世紀前葉、６期：８世紀中葉、７期：８世紀後葉、８期：９世紀前葉、９期：９世紀中葉、10 期：９世紀後葉、11 期：10 世紀前葉、12 期：10 世紀中葉、13 期：11 世紀、に相当する。降下テフラとの関連では、As-B（浅間 B 軽石）の降灰が 13 期の直後に位置付けられる。

須恵器の田辺編年（田辺 1966・1981）や三毳山麓窯跡群編年（津野 2011）、近隣に位置する田島岡窯跡群や渡戸窯跡、土師器編年（田熊・梁木 1990、津野 1995）と各期との対応については、各時期の遺構をまとめた第 287 表に示している。

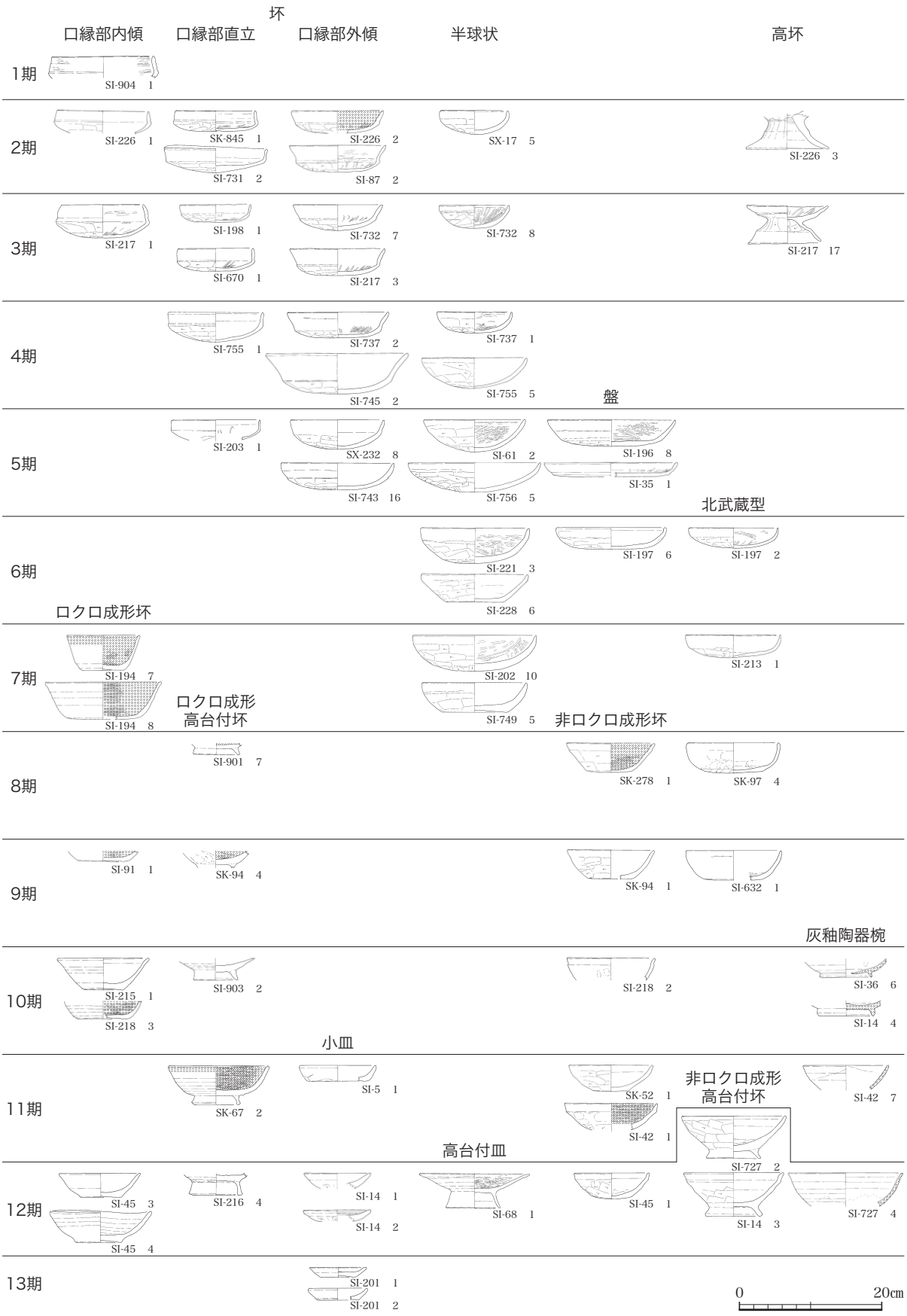
２　各遺物の様相について

出土遺物のうち、いくつかについてまとめてみたい。

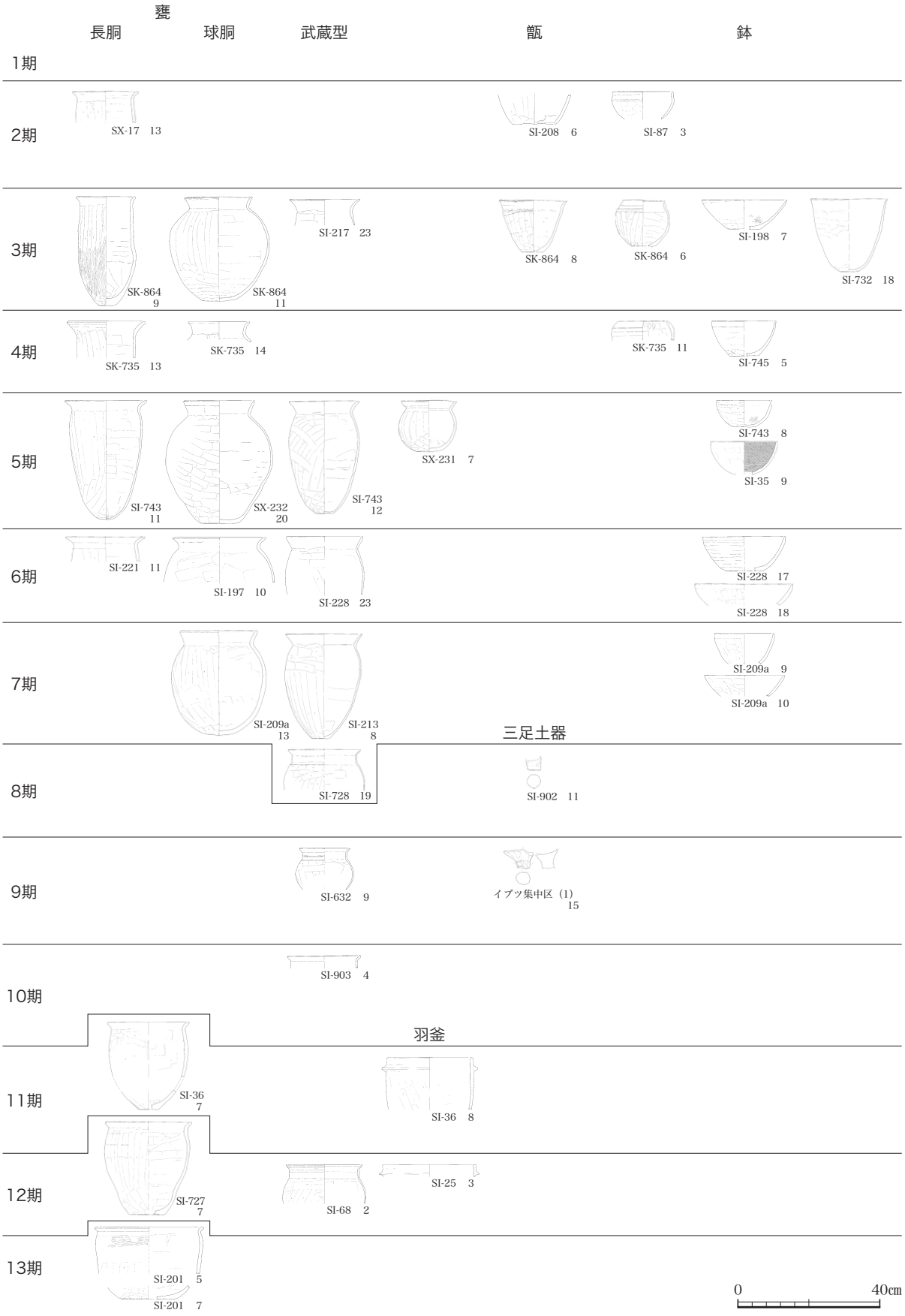
三足土器（第 354 図）　SI-61-20、SI-902-11、SX-54-19・20、遺物集中区１-15、N-29 グリッド（遺構外-23）から、計６点出土する。脚部片のみであり、全体形状がうかがえる資料はない。SX-54-19、遺物集中区１-15 は底部に脚部が接合するもの、遺構外 -23 は胴部に脚部が付くと考えられる。時期は、SI-902 が８期であるほか、遺物集中区１は９世紀中葉中心、SX-54 では９世紀後半～ 10 世紀前半の遺物が出土することから、三足土器についてはおよそ８・９期を主体とする９世紀代の遺物ととらえることができる。SI-61-20 は混入と考えた。県内では、小山市八幡根東遺跡の SI-11 から１点、同遺跡包含層から１点の計２点が出土するのみであり、本遺跡が県内２例目となる。八幡根東 SI-11 は９世紀中葉の遺構であり、本遺跡で想定された時期と近い。三足土器と関連すると考えられる獣脚は県内で４点出土する。須恵器製は宇都宮市辻の内遺跡１点と益子町益子窯跡群・篠倉窯跡２点で、灰釉陶器製は上三川町大町遺跡１点である。なお、群馬県太田市では八幡遺跡Ｊ区で三足土器とみられる土師質の脚部片１点、境ヶ谷戸遺跡で火舎香炉脚部とされる須恵器獣脚片２点が確認できる。

土師器未製品ないし失敗品（第 354 図）　完成品とならなかった土師器であり、可能性があるものも含め５点出土する。全体に調整が粗く、特に内面調整がなされないままとなっている点が特徴といえる。土師器焼成遺構である SK-738 からは坏２点と甕１点が、SK-739 からは坏１点が出土しており、これらが焼成遺構であることを証明する遺物ともなっている。このほか坏１点が SK-946 から出土する。SK-946 は SK-738・739 に隣接する遺構であり、土師器焼成に関わる遺構の可能性もある。これらの遺物の時期は３～４期である。

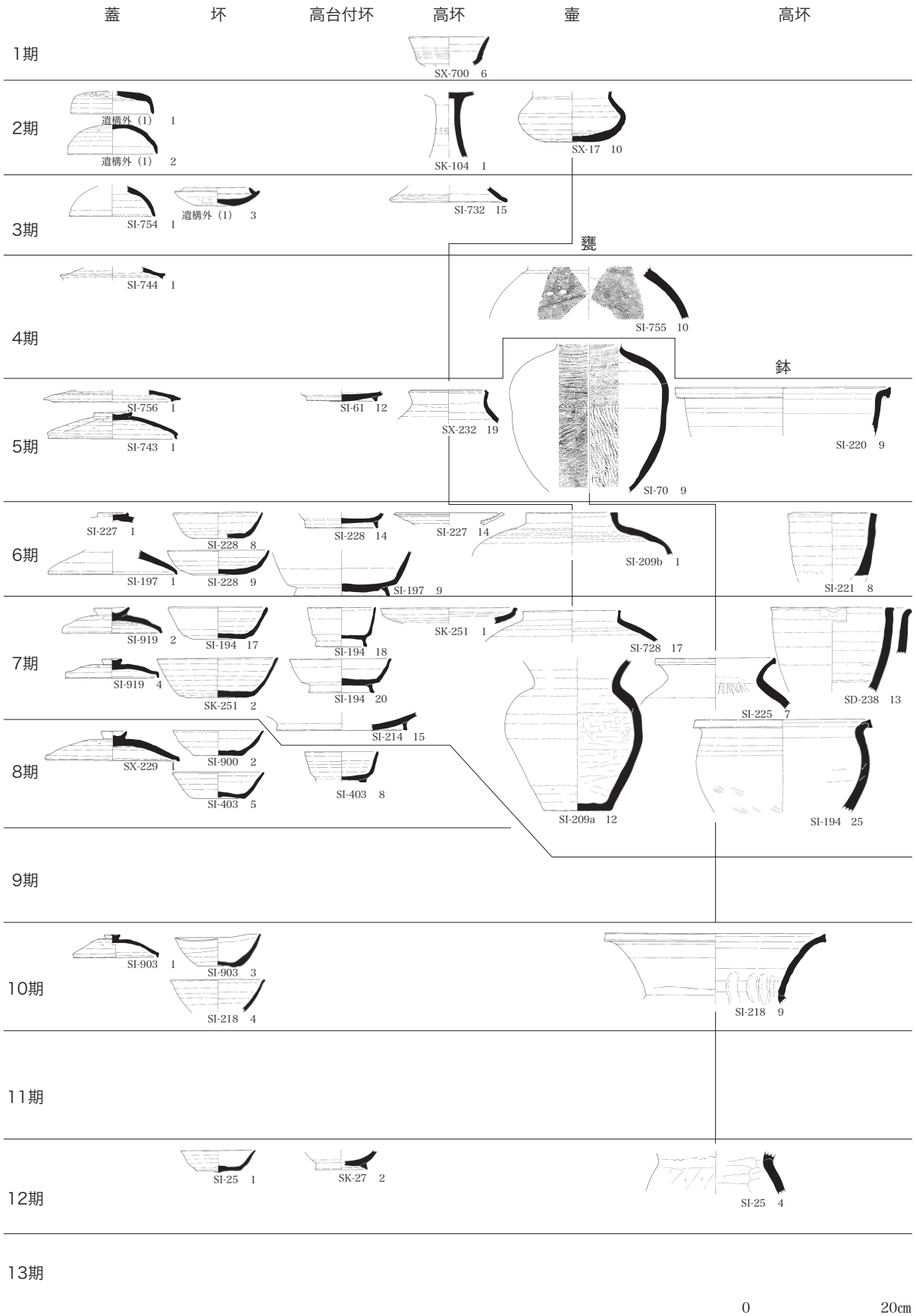
須恵器（第 352 図）　13 期を除く各期の遺構内外で出土する。各期の出土量は遺構数と相関するが、特に７期に多い。器種は蓋、坏、高台付坏、高坏、横瓶、長頸壷、短頸壷、甕、鉢等である。産地は全点確認しているわけではないが、三毳産を筆頭に、群馬産、あるいは太田産とみられるものが多く、胎土等の特徴から末野窯産かとみられるもの（SI-901-8）や南比企産（SK-363-2）など埼玉方面からの搬入もわずかながらある。時期ごとの産地の変遷をみるため、５期から 10 期の竪穴住居跡５軒から出土した須恵器について産地ごとの数量を示す（第 353 図）。グラフでは、７期までは三毳産が多いが、８期ではまったく認められず、９世紀以降三毳産の占める割合が減ることがわかる。群馬産ないしは太田産とされるものは、増減がありながらも各期で出土している。末野窯産かとする高台付坏が出土する SI-901 は８期、南比企産の甕が出土する SK-363 は８～９期であり、三毳産須恵器の減少に対応し、それに代わって埼玉からの搬入が開始されると考えることもできる。産地不明の須恵器には、窯体片が付着したものや胴部下半が大きく歪んだ甕等があり、近隣の窯からの搬入が一定量あることを想定させる。本遺跡から最も近い須恵器窯としては、北東 1.5km にある田



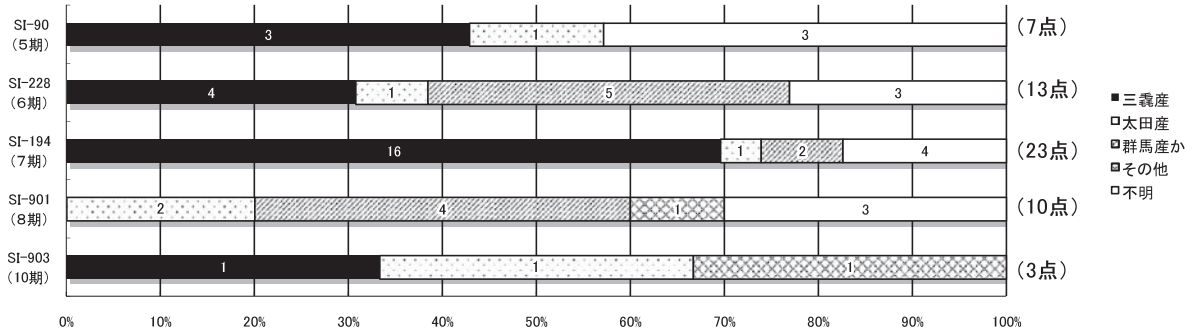
第 350 図　和田遺跡　土器の変遷（1）



第 351 図　和田遺跡　土器の変遷（2）



第 352 図　和田遺跡　土器の変遷（3）



第 353 図　竪穴住居跡出土須恵器の時期別産地変遷図

島岡窯跡がある。近距離にあることから相当数の搬入があっても良いはずだが、田島岡窯跡産と特定できる須恵器はない。白色針状物質を含むのは、南比企産とみられる甕１点（SK-363-2）のみである。この甕は胴部片で、胴部下半内外面には幅２～３cm の帯状に木葉痕が残る。胴部下半にある粘土接合痕の下位に相当する位置であり、接合前に過度の乾燥を防ぐために貼られたものかと推定する。器種不明 SI-202-27 は、坏を三連にして高台を付けたようにも見える。類似するものは群馬県太田市大道東遺跡 51 号住居から出土する。SI-202-27 は太田産だろう。

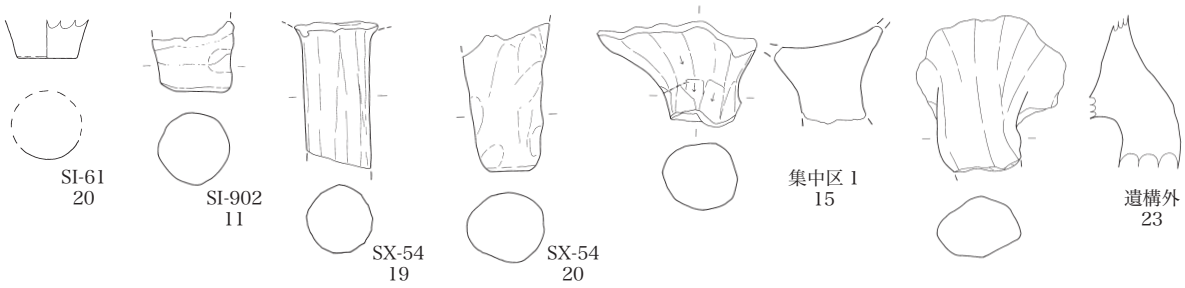
灰釉陶器（第 354 図）　21 点出土する。遺構は竪穴住居跡や土坑、ピットであり、竪穴住居跡からは 12 点、土坑６点、ピット１点、遺構外２点である。SI-227-14、SI-225- 8 は混入であろう。器種は高台付椀が 19 点と最も多く、このほか高台付皿１点、壷２点がある。産地は東濃産主体で、光ヶ丘１号窯式期が最も多く 13 点、大原２号窯式期は２点である。光ヶ丘１号窯式期としたものの中には 11 期ないし 12 期の遺構から出土するものが多い。長期間の使用によって時期的なずれが生じたのであろうか。

墨書土器（第 355 図）　21 点確認できる。山麓に近い調査区西半からの出土はなく、すべて調査区東半から出土する。須恵器坏 18 点、須恵器高台付坏１点、須恵器蓋１点、土師器坏１点で、坏の場合多くは外面底部に書かれる。SK-98-4 は内外面に墨書を持つ。文字は１文字が多く、２文字と見られるものは４点である。湧水が多い環境のためか土器表面は荒れており、墨書が良好に残存するものは少ない。文字は、SB-235- 5 は「内」、SD-238- 5 は「完足」あるいは「究足」かと推定されるのみで、判読できないものがほとんどである。出土遺構は、竪穴住居跡３点、掘立柱建物跡、井戸、溝、性格不明遺構、ピット各１点、土坑５点であり、このほか遺物集中区１から５点、グリッド出土が３点ある。遺物集中区１からは比較的まとまって出土しており、祭祀的な行為が想定される。遺構の時期は、SE-549（10 ～ 11 期）を除き７～９期にまとまる。

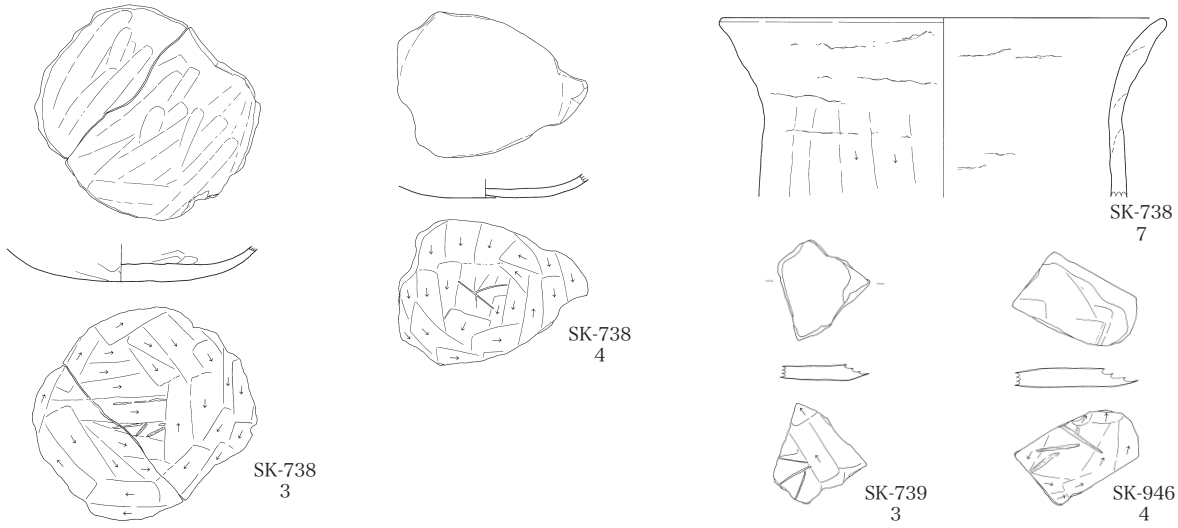
線刻を持つ土器（第 355 図）　６点ある。SI-194-20 高台付坏底部外面の「山」字、SI-743-1 須恵器蓋外面の直線、SD-238-25 須恵器甕底部内面の直線、SK-407a 須恵器蓋内面の直線、SX-17-10 須恵器短頸壷底部外面の直線、SX-700-15 丸瓦凹面の「大」と推定されるもの、P-494-1 須恵器甕胴部外面の十字であり、文字は SI-194-20「山」と SX-700-15「大」と推定されるもの２点である。SD-238-25 は底部内面中央に４本以上の直線が確認できるが、直線と同方向のナデにより一部が消されているため、調整に関わるものとみられる。これ以外は工人識別などのための記号であろう。時期的には、８世紀代の遺物に多い。

手捏ね土器　38 点ある。このうち 34 点は遺物集中区２であり、この他 SI-198 が２点、SI-216 が１点、SK-864 が１点である。形状は鉢形がほとんどで、SI-198-10 は甕形の可能性がある。特定の分布域、時期に

三足土器

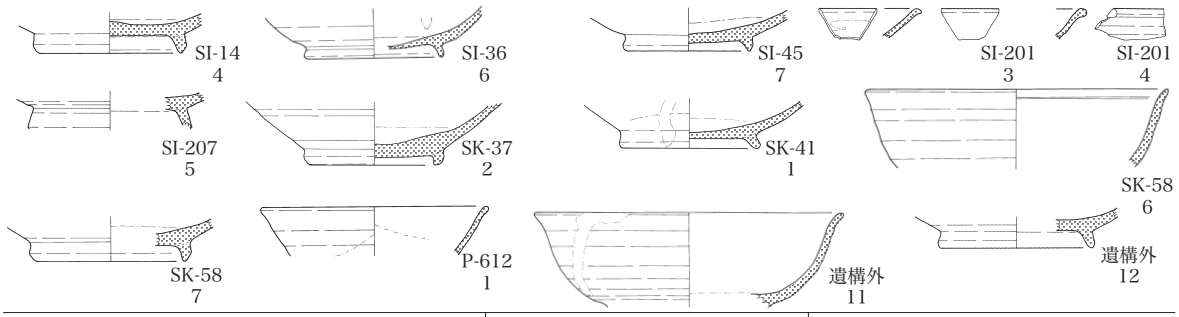


土師器未製品・失敗品

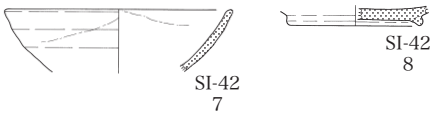


灰釉陶器

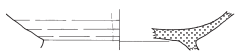
高台付椀　東濃産　光ヶ丘１窯式



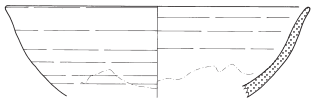
東濃産　大原２窯式



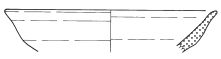
東濃産　時期不明

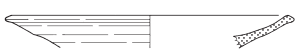


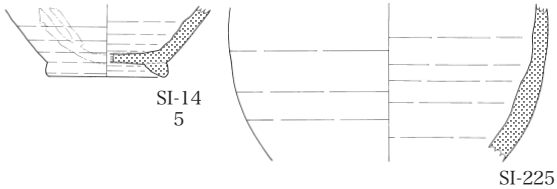
東濃産以外



尾北産か



皿　K-90 窯式併行

壺　東濃産・不明



0　10cm

第 354 図　和田遺跡出土遺物（1）

偏るような様子はうかがえない。

土製品（第 356 図）　紡錘車、紡錘車未製品、土錘、支脚、筒形土製品、粘土塊等がある。紡錘車は、SK-50、SI-90 から各１点出土しており、SK-50-1 は土師質で円筒状のもの、SI-90-9 は大形の須恵器の破片を利用し研磨・成型したものである。SE-549-8 は須恵器坏底部に穿孔の痕跡があり、紡錘車未製品と考えた。穿孔途中の破損により放棄してしまったものか。SK-50 は７～８世紀、SI-90 は５期、SE-549 は 10 ～ 11 期である。

土錘は４点のみであり、漁撈活動が活発ではないという本遺跡周辺の生業がうかがえる。棒状３点（SI-194-36、遺物集中区１-18、遺構外 -53）、円筒状１点（SD-19-1）である。SI-194 は７期、遺物集中区１は７期中心、SD-19 は時期不明である。

支脚は６点（SI-25-6、SI-198-14、SI-670-6、SI-730-3、SI-752-6、SX-17-18）出土する。内部が中実なのは SI-25-6 のみで、これ以外は中空である。時期としては７世紀代に多く、SX-17 は２期、SI-198･670 は３期、SI-752 は５期である。SI-25-6 は 12 期であり、混入の可能性が高い。

筒形土製品は 26 点（SI-61-18・19、SI-196-21・22、SI-198-11・12・13、SI-200b-9、SI-217-24、SI-220-14、SI-227-13、SI-632-14、SI-670-5、SI-742-7、SI-744-7 ・ 8、SI-745-8 ・ 9、SI-747-7、SI-754-10、SI-755-12、SK-735-17、SK-845-2、SK-875-2、SX-17-17、P-823-1）ある。完形のものはなく、竪穴住居跡のほか土坑やピットからも出土する。時期は３期を中心に２～５期が主体であり、これまでの研究で示された県内出土筒形土製品の年代（山口 1998）と整合する。ただ、共伴することが多いとされるハケ目甕は本遺跡では出土しておらず、この点は他の出土事例と異なる。

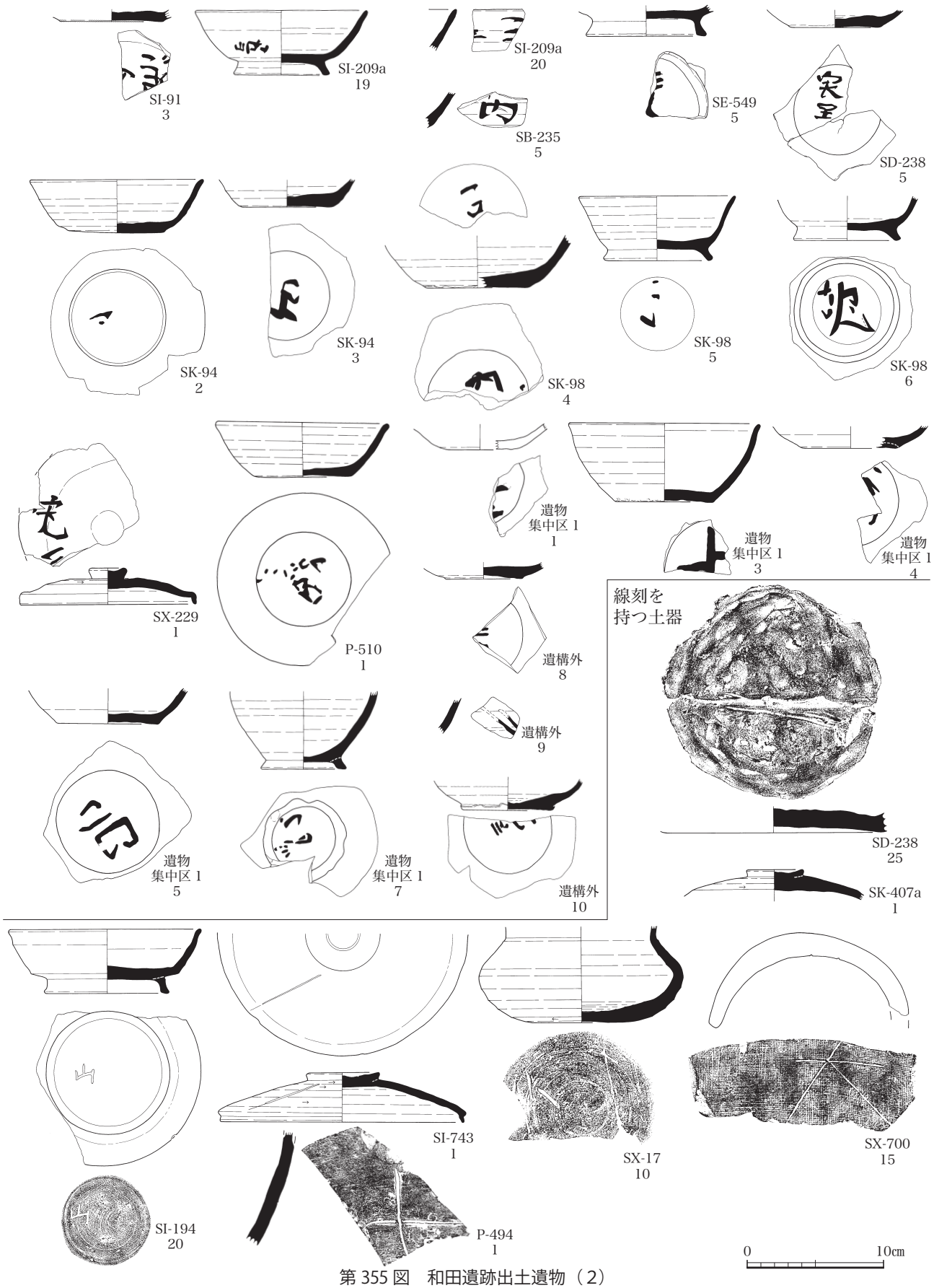
粘土塊は 25 点（SI-5-6・7、SI-14-6、SI-45-9、SI-62-7、SI-63-9、SI-70-10、SI-196-23・24、SI-198-15、SI-202-32、SI-228-29、SI-727-10 ・ 11、SI-728-24、SI-732-23、SI-745-10、SI-747-8、SI-748-12、SI-749-11、SI-750-9、SI-754-12、SI-901-19、SI-902-14、SK-232-23）図化した。特定の時期に集中することはなく、各期の遺構から出土する。形態はやや扁平な不整楕円形で、長さは３～７cm、重さは 10 ｇ以下から 80 ｇ位と多様である。図化以外には 121 点あり、出土量は多い。集落内に焼成遺構を持つためであろうか。１遺構からの出土点数は数点の場合が多いが、SI- 5 では 52 点、SI-196 では 22 点、SI-728・732 ではともに 10 点出土するなど、一遺構から多数出土する例がある。

このほか、SX-17 からは不整方形の土製品（SX-17-19・20）が出土する。

埴輪　円筒埴輪片が４点ある。突帯は低く外面は縦ハケのみであり、古墳時代後期とみられる。調査区内東部から出土する。本遺跡のすぐ北側には後期古墳群である月谷古墳群があるため、そこから混入した可能性があろう。月谷古墳群中に、６世紀代まで遡る古墳が存在することが示唆される。

瓦（第 356 図）　119 点あり、竪穴住居跡出土から 61 点（平瓦 47、丸瓦 14）、土坑から 18 点（平瓦 14、丸瓦４）、溝から平瓦１点、性格不明遺構から５点（平瓦３、丸瓦２）、ピットから平瓦２点、遺構外から 32 点（平瓦 23、丸瓦９）出土する。竪穴住居跡から出土する瓦には、SI-733 のようにカマド構築材となっている例がある。平瓦 90 点、丸瓦 29 点であり、軒平瓦、軒丸瓦は出土しない。線刻を持つのは、SX-700-15 丸瓦凹面の「大」と推定されるもの１点のみである。桶巻き作りは 15 点ある。平瓦の凸面叩きは縄叩き、格子叩き、入子状極印文叩きがあり、縄叩きは 11 点、格子叩きは 45 点、入子状極印文叩きは２点である。桶巻き作りの場合凸面は縄叩きとなるものが多い。縄叩きは凸面にまばらに施されており、国府野遺跡出土瓦にみられるような密に施される縄叩きはほとんどない。格子叩きでは、同一の叩き具によるものが３種確認できる。１類は SI-218-11 と SI-753-3 の２点、２類は SI-194-33、SI-919-28、遺構外 33・34 の４点、３類は SI-194-32、SI-202-28・30、SI-919-21・22・26、遺構外 28・29・35・44 である。それぞれ複数の遺構に

墨書土器



第 355 図　和田遺跡出土遺物（2）

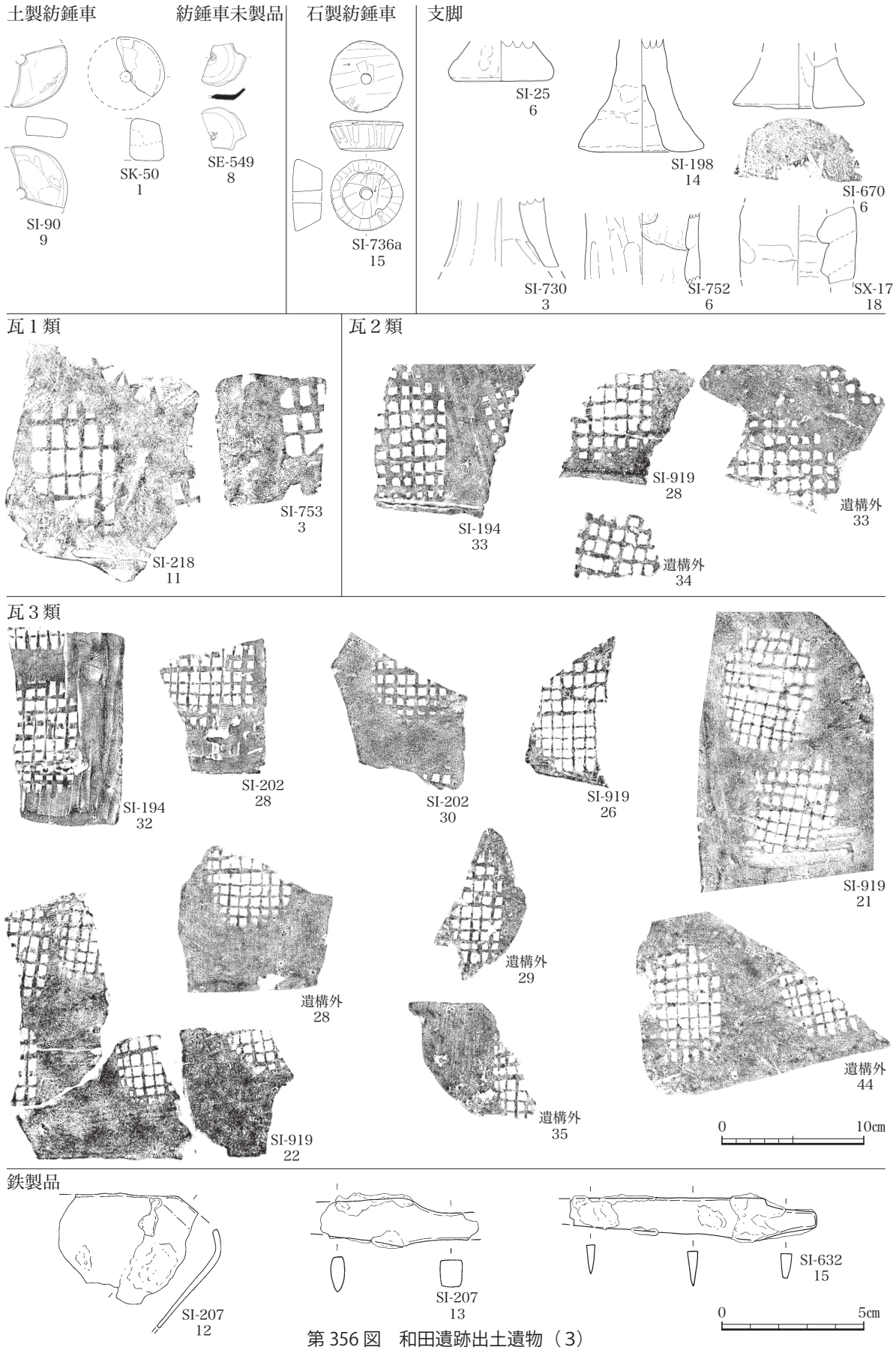
またがって出土しており、遺構の同時性を証明する手だてともなっている。桶巻き作りで格子叩きが施されるのは、SD-238-26 の１点のみである。出土遺構の時期は７期を主体とし、８期からもわずかだが出土する。これ以外の時期の遺構から出土する例は混入の可能性が高いと考えられる。距離の近さや極印文の存在などから生産した窯は田島岡窯跡が想定されるが、田島岡の瓦は青灰色や褐色を呈し概して焼成は良好で薄く、平瓦凸面の叩きは格子や極印文のほか斜格子がある。本遺跡出土瓦は焼成不良で灰白色のものが多く、器壁は薄いものと厚手なものがあり、斜格子叩きは１点も確認できない。極印文も若干文様が異なる上、凹面の布目も田島岡窯跡瓦より粗いなど、田島岡窯跡産の瓦ではない可能性が高いと考える。調査されていない田島岡窯跡群内の窯、あるいは北側にある東光寺裏山古窯跡産の可能性もあろうか。本遺跡周辺で瓦葺建物を有する遺跡としては、南約４km に群衙推定値である国府野遺跡があるが、このほか西約１km の大岩山毘沙門堂及び十二坊跡、北西 1.5km の行道山浄因寺でも古代瓦の出土が確認されている。最も近い大岩山出土の平瓦は桶巻き作りであり、時期的にも本遺跡と関連する可能性があろう。国府野遺跡出土瓦と類似する瓦としては、密な縄叩きののち格子叩きを施す平瓦２点（SI-218-12、SX-205-3）のみである。下野国分寺出土瓦との比較も行っているが、本遺跡の瓦はより小型で器壁は薄く、類似する瓦は見あたらない。同一の格子叩きも確認できなかった。

石器（第 356 図）　紡錘車は１点（SI-736a-15）、砥石は３点（SI-742-8、SK-849-10、遺構外 -54）、敲石１点（SI-197-16）、台石１点（SI-733-15）、編物石 15 点（SI-750-10 ～ 24）ある。SI-730-4 は粘板岩の破片であり、砥石の可能性がある。このほか遺構内からは礫も出土するが、石質は遺跡周辺山地の基盤となっているチャートや砂岩が主体で、結晶片岩などの堆積岩や安山岩などの火山岩も少量認められる。

木製品　生材は 34 点出土する。器種は柱材が 24 点と最も多く、このほか柱材の下に敷く礎板２点、器種不明８点がある。柱材は芯持丸木が多く、表面は多角形状に加工される。分割材、あるいは芯去材とみられるものもある。下面は平坦に加工されており、重さのためか地山に含まれる砂粒が表面に食い込んでいる。こうした砂粒の食い込みは柱材下面のみの特徴であり、転用された柱材を見分けるポイントとなる。残存状態の良好な柱材としては、SB-235-9、P-277-1 等がある。完形の礎板２点は SB-235 出土で、SB-235-10 はミカン割り材、SB-235-11 は板目材である。材の一端には砂粒の食い込みが確認できるため、柱材下部を分割し再利用したものと考えられる。器種不明の多くも柱材ないし礎板と推定され、分割材については砂粒の食い込みが認められることから、柱材の再利用であることが知られる。出土遺構は、竪穴住居跡：柱材２点、掘立柱建物跡：17 点（柱材 10、礎板２、不明５）、土坑：３点（柱材１、不明２）、ピット：12 点（柱材 11、不明１）で、竪穴住居跡出土の２点については住居跡に伴うかどうか定かではない。樹種はクリ 31 点、モミ属３点とクリ材主体であり、水に強いクリを柱材に多用したことがわかる。なお、住居跡出土炭化材については SI-748 と SI-919 で樹種同定を実施し、SI-748 ではコナラ属コナラ亜属コナラ節、アカガシ亜属、クリ、カエデ属、広葉樹と判明、SI-919 ではカヤ、ヌルデと判明した。第５章第３節ですでに指摘しているように、古代の竪穴住居跡において柱材と垂木等の上屋材とでは利用する樹種を変えていた可能性があろう。

鉄製品（第 356 図）　３点ある。刀子２点（SI-207-13、SI-632-15）、鎌１点（SI-207-12）である。当該期の遺跡としては少ないが、これは地山が多くの水分を含むという本遺跡の環境により、失われてしまっているものと推定される。

青銅製品（第 357 図）　P-17 グリッド出土の瑞花双鳳八稜鏡１面がある。鋳上がりは良いが、水が豊富な環境であったため表面は厚い緑青に覆われ、土壌中の鉄分が部分的に銹着する。外形は八稜形で径は 10.5cm、厚さは縁部で６mm、内区の最も薄い部分で１mm である。鏡面は平坦で、反りはない。鏡背内区は、鳳凰と



第 356 図　和田遺跡出土遺物（3）

扇状の瑞花各２点がすべて外向きに点対称に配置される。中央鈕は花文座円鈕で鈕孔は円形、孔径は約 1.5mm で鈕孔付近はやや摩滅しているように見える。孔内に錆化した土壌が詰まっている。外区は内区より一段高く、界圏は三角形にわずかに突出する稜を持つ段となる。平面形は八稜形ではなく内向きの稜が４ヶ所ある円形であり、四花圏とも表現できよう。４つの稜は、外縁の八稜のうち内向きの稜と位置をあわせている。外区の草花文は省略化され列点状である。点は５点を基本とし、１区画おきに中央内寄りに１点ないし２点を追加する。上端右寄り及び右端の区画のみは、さらに１点追加している。

八稜鏡は県内で 119 面出土する。このうち 115 面は日光男体山山頂遺跡出土鏡で、それ以外には岩舟町出土鏡１面（岩舟町教委 1974）、日光市生岡神社南遺跡出土鏡１面（日光市史編さん委員会 1986b）、足利市出土鏡１面（足利市教委 1987）の３面がある。本遺跡出土鏡と同形式の瑞花双鳥八稜鏡は岩舟鏡１、生岡神社南遺跡鏡１、男体山山頂遺跡鏡 89 の計 92 面である。日光男体山山頂遺跡出土鏡には鏡背文様が類似するものがあるが、界圏の形状が同一のものは見あたらない。瑞花双鳥式の八稜鏡については長久智子氏の論攷があり（長久 2010）、その分類ではⅡ類（舞鳳形）－Ａ群（２羽）－３式（外向旋回）－葉文Ⅱ：正円鈕孔工房系となり、10 世紀後半～ 11 世紀という年代が与えられる。本遺跡では集落の消滅していく段階であり、集落の終焉に関わる祭祀の可能性があろうか。なお、足利市出土の八稜鏡（径 7.0cm）は、本遺跡から近い大岩山南麓の緩斜面から出土したとされる。鈕座を持たず内区は外区より一段高くなっており、内区文様は鳥と瑞花が三分割構図で示される。文様の退化は著しく、本遺跡出土鏡よりも新しく位置付けられるだろう。出土地状況は不明だが、山岳信仰の場としての大岩山に関連する遺物とも考えられる。本遺跡出土鏡についても、山岳信仰に関わる埋納品と考えることも可能である。

第 357 図　八稜鏡三次元ＣＧ画像

３　各遺構の様相について

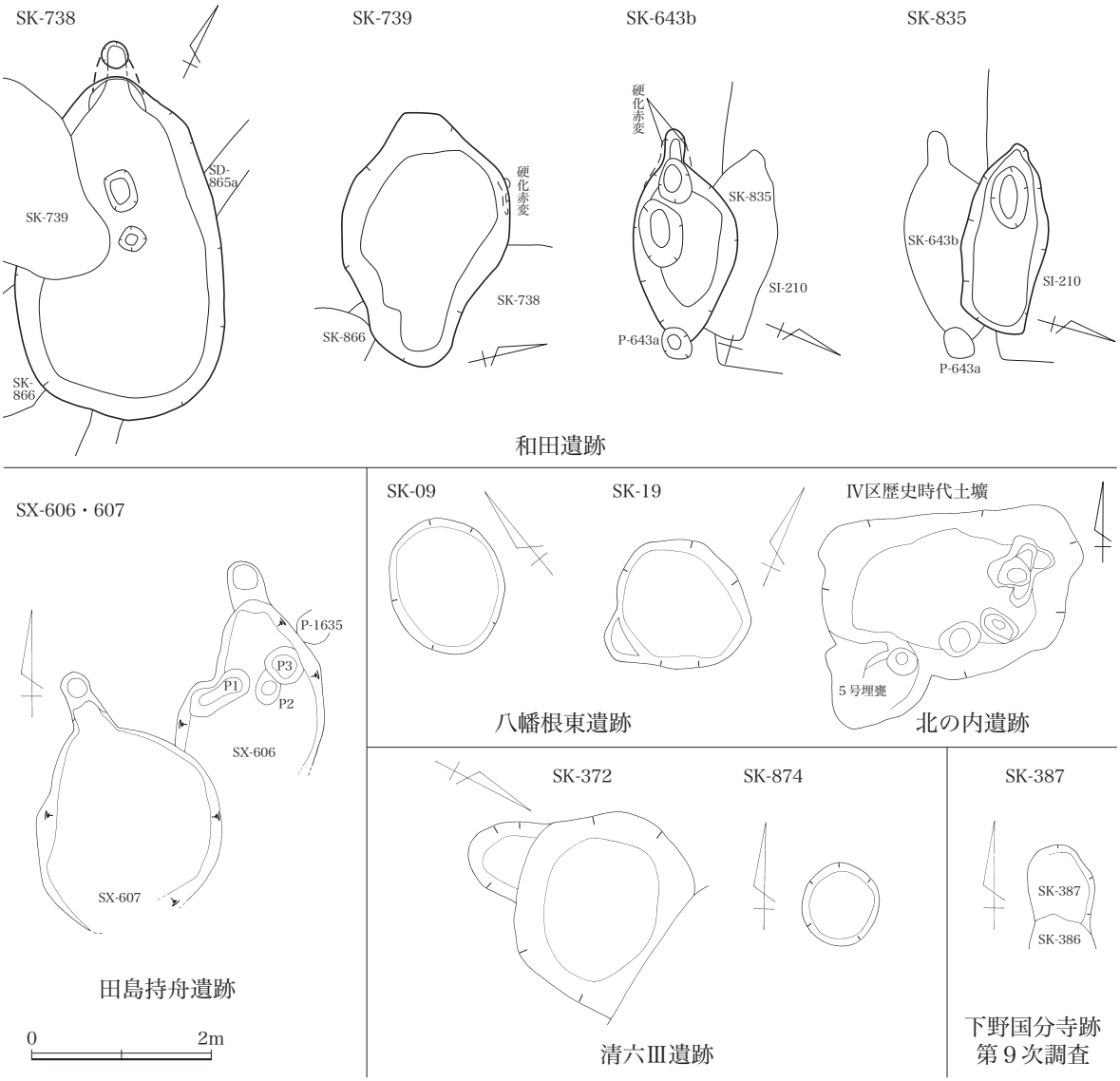
古代には竪穴住居跡をはじめ多くの遺構があるが、そのうちここでは竪穴住居跡と土師器焼成遺構についてまとめる。なお、所属時期が決められず時期不明とした掘立柱建物跡、溝、土坑、ピットの中には、遺構の位置、規模、形状の類似などから、古代に属するものも多いと推定される。

竪穴住居跡　94 軒あり、他の遺構とともに調査区内のやや高くなった微高地上に立地する。平面形は多くが方形で長方形もあり、火処としてカマドを持つ。長方形はカマドを上にみて縦長（SI-225・902 等）と横長（SI-218・900・901）がある。時期的には横長は４期以降の各期にあり、縦長は８期前後に特徴的である。規模は一辺約８ｍを最大とし、一辺６ｍほどの中型、一辺３～４ｍの小型に大きく分けられる。大型・中型は７期までにはなくなり、以降は小型のみとなる。主柱穴は大型・中型は４本あるが、小型は持たないものがほとんどである。SI-754 では柱穴から柱材が出土するが、住居跡に伴わない可能性もある。張り出しピットはなく、入口ピットは SI-196 などにわずかに認められるのみである。カマドの位置は北側を主体とし、東（SI-749 等）、西（SI-210 等）、北東隅（SI-204）に位置する例も確認できる。構築材に瓦を使用する例（SI-733）やチャートの礫を立てて使用する例（SI-727）もある。貯蔵穴は北東隅、北隅、北西隅など北寄りに位置するが、貯蔵穴を持つ住居跡自体が少ない。

土師器焼成遺構（第 358 図）　４基確認されている（SK-643b、738、739、835）。出土遺物などから SK-738 は３期、SK-739 は３～４期、SK-643b は５期と考え、遺物が出土しない SK-835 は重複関係などから５期と推定した。SK-643b・835 は調査区北東部、SK-738、739 は調査区西端にそれぞれ位置し、各２基は近接している。遺構周囲には各所属時期前後の遺構が多く存在しており、竪穴住居跡などに隣接して土師器を焼成していたとみられる。遺構の平面形は楕円形で、西端ないし北端に煙道と見られる突出部が取り付く。規模は SK-738 が 4.22 × 2.32m、深さ 0.15m、SK-739 が 2.83 × 1.88m、深さ 0.38m、SK-643b は 2.35 × 1.16m、深さ 0.23m、SK-835 は 2.08 × 0.95m、深さ 0.20m である。最も残存状態の良い SK-738 ではトンネル状に掘り込まれた煙道が確認でき、トンネル天井部分を中心に著しく硬化赤変する。SK-643b、835 も突出部分が赤変しており、残存状態が良くないため煙道底面しか確認できないが、同様の形状と考えられる。SK-739 では突出部分がなく壁面上部の一部のみが赤変するもので、遺構長軸方向からややずれた位置に煙道が作られるものと推定する。煙道以外には被熱痕跡はなく、焼成を示す特徴は少ない。覆土中には焼土や炭化物が比較的多く、SK-643b・835 では底面付近を中心に炭化物層が認められる。遺物は、SK-738・739 で失敗品と見られる土師器坏や土師器甕が出土しており、焼成遺構を表す証左であるとともにここで焼成した器種がロクロを使用しない丸底の坏や長胴甕であったことが示される。

同様の遺構は、本遺跡の東 1.5km にある田島持舟遺跡で２基（SX-606・607）確認されている。微高地から低地へと緩やかに傾斜する斜面にあり、ともに不整楕円形の土坑部分に煙道が取り付く形状で、トンネル状の煙道部分が著しく硬化赤変している。煙道は斜面上方に位置する。２基は重複するが、新旧関係は不明である。覆土中には焼土や炭化物が含まれる。煙道と反対側の土坑南端の立ち上がりが明確ではないため全長が不明確だが、規模は SK-606 が煙道を含む残存全長 2.8m、幅 1.6m、深さ 0.20m、SX-607 は煙道を含む残存全長 3.0m、幅 2.1m、深さ 0.1 ～ 0.3m である。土師器焼成遺構を示すような遺物は出土しないが、形態的な類似性は明らかであり、本遺跡例と同様の遺構と考えられよう。時期は SX-606 が８世紀代～９世紀中頃、SX-607 が９世紀中頃とされる。

県内ではこのほか、４遺跡６遺構の土師器焼成遺構が確認されている。小山市八幡根東遺跡で２基（SK-09、19）、清六Ⅲ遺跡で２基（SK-372、874）、佐野市北の内遺跡で１基、下野市下野国分寺で１基（KS-9



第 358 図　栃木県内の土師器焼成遺構

SX-355）である。すべてロクロ成形の土師器を焼成していたとみられ、遺構形状は北の内遺跡例が不整長方形、八幡根東 SK-09・下野国分寺 KS-9 SX-355 が楕円形、八幡根東 SK-19・清六Ⅲ SK-372 が楕円形に張出部を持つ形状、清六Ⅲ SK-874 は円形である。時期は八幡根東 SK-19 が８世紀後半、八幡根東 SK-09 が９世紀で、これ以外の４遺構は 10 世紀とみられている。本遺跡調査例よりも新しい上に遺構形態や焼成土器も違っており、関連を伺うことはできない。

土師器焼成遺構に関しては、埼玉県や東京都を中心とした集成、分類があり（富田 1997）、時期はおよそ７世紀後半以降で８～ 10 世紀が中心とされ、非ロクロ土師器を主に生産する水深逆台形タイプと、ロクロ土師器を焼成したＢ類焼成坑があるとされる。本遺跡例との比較でいえば、焼成土器と時期から水深逆台形タイプと関連する可能性はあるが、逆台形の他に無花果形や長三角形とされるものもある（富田 2007）ものの、木葉形の平面形態で煙道が付随する本遺跡例との共通点はみえない。東北、甲信地方でも形態が類似するものや系譜がたどれるような遺構は見あたらず、現状では当地域で独自に発生したと推測しておく。明確な煙道を付設することなどから、須恵器生産技術が応用された可能性もあろうか。

ここで、本遺跡および田島持舟遺跡で確認された、「和田タイプ」とも呼称できる土師器焼成遺構についてまとめておく。遺構は集落内に存在し、竪穴住居跡などからさほど遠くない位置にある。長さ２～４ｍの楕円形で遺構長軸の一端に煙道を持ち、平坦か煙道がやや高くなるような場所に構築される。被熱痕跡があるのは煙道のみで、床面は被熱しない。ロクロを使用しない須恵器模倣坏や甕を焼成する。出現時期は７世紀中葉で８世紀前葉までは確実にあり、９世紀代まで存続した可能性がある。

４　集落の動向（第 359 ～ 365 図、第 287 表）

和田遺跡の各種遺構について、先に提示した土器変遷区分に基づいて時期を想定し、各時期の遺構群の様相を示す。図には２時期以上にまたがる遺構については図示せず、所属時期が明確なもののみを示している。

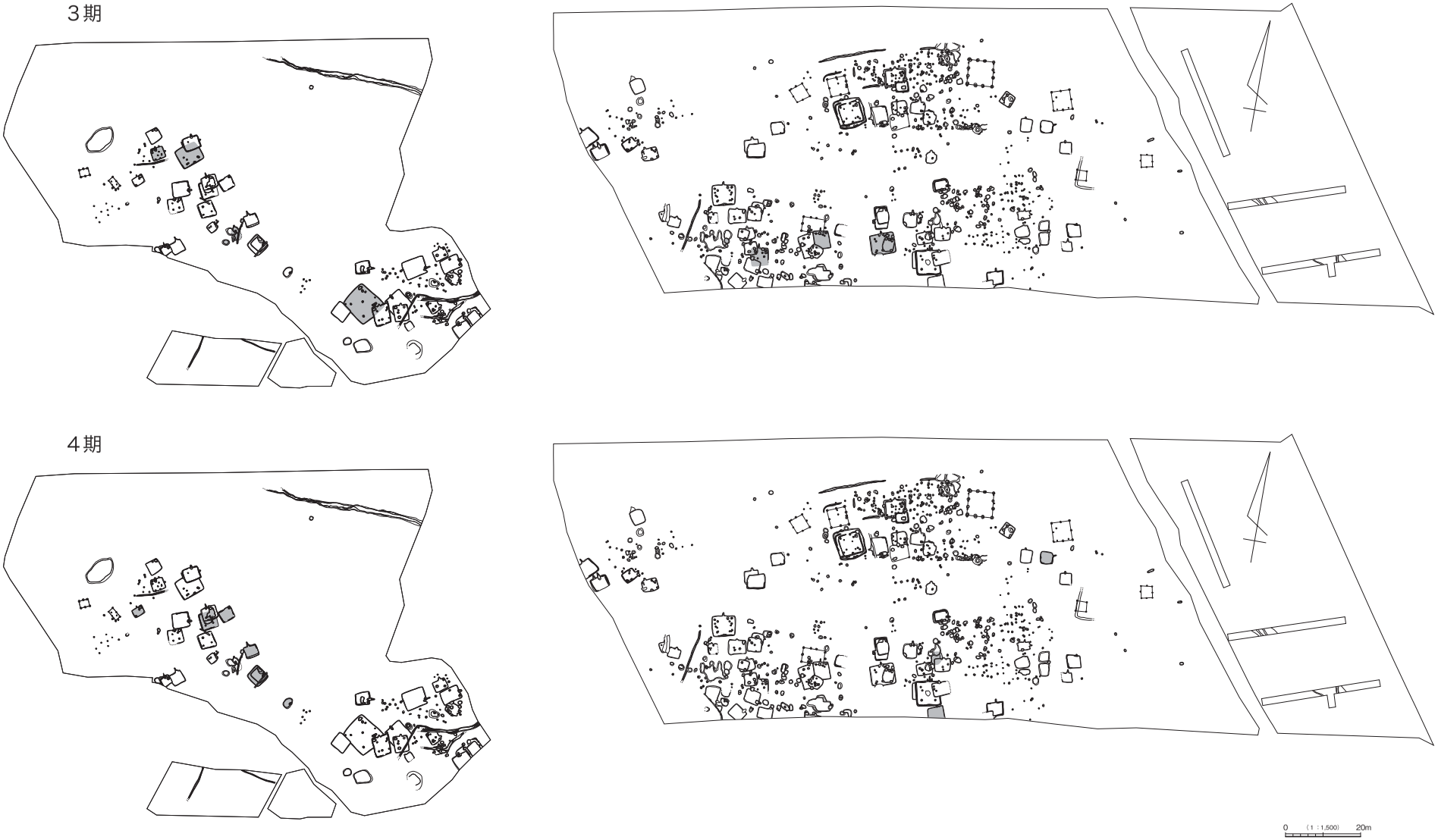
１期　竪穴住居跡１軒（SI-904）があり、調査区内ほぼ中央に位置する。遺構はこれのみであり、集落の開始と言えるかどうかは不明である。円筒埴輪の出土から、北側の月谷古墳群で古墳が築造された可能性がある。SX-54-10 や SK-845-1 の須恵器蓋のように６世紀後半かあるいはより古く位置付けられる遺物もあるため、居住の開始はさらに遡る可能性がある。

２期　竪穴住居跡は５軒（SI-60、87、208、226、731）であり、この他溝１条、土坑３基、性格不明遺構１基がある。本格的な集落の開始時期と考えられ、遺構は調査区内東半と南東部に分布する。比較的規模の大きな SI-60、208、731 は中央部南寄りに位置するため、この周辺が集落内の中心の一つになるとみられる。

第 287 表　和田遺跡　古代遺構の時期

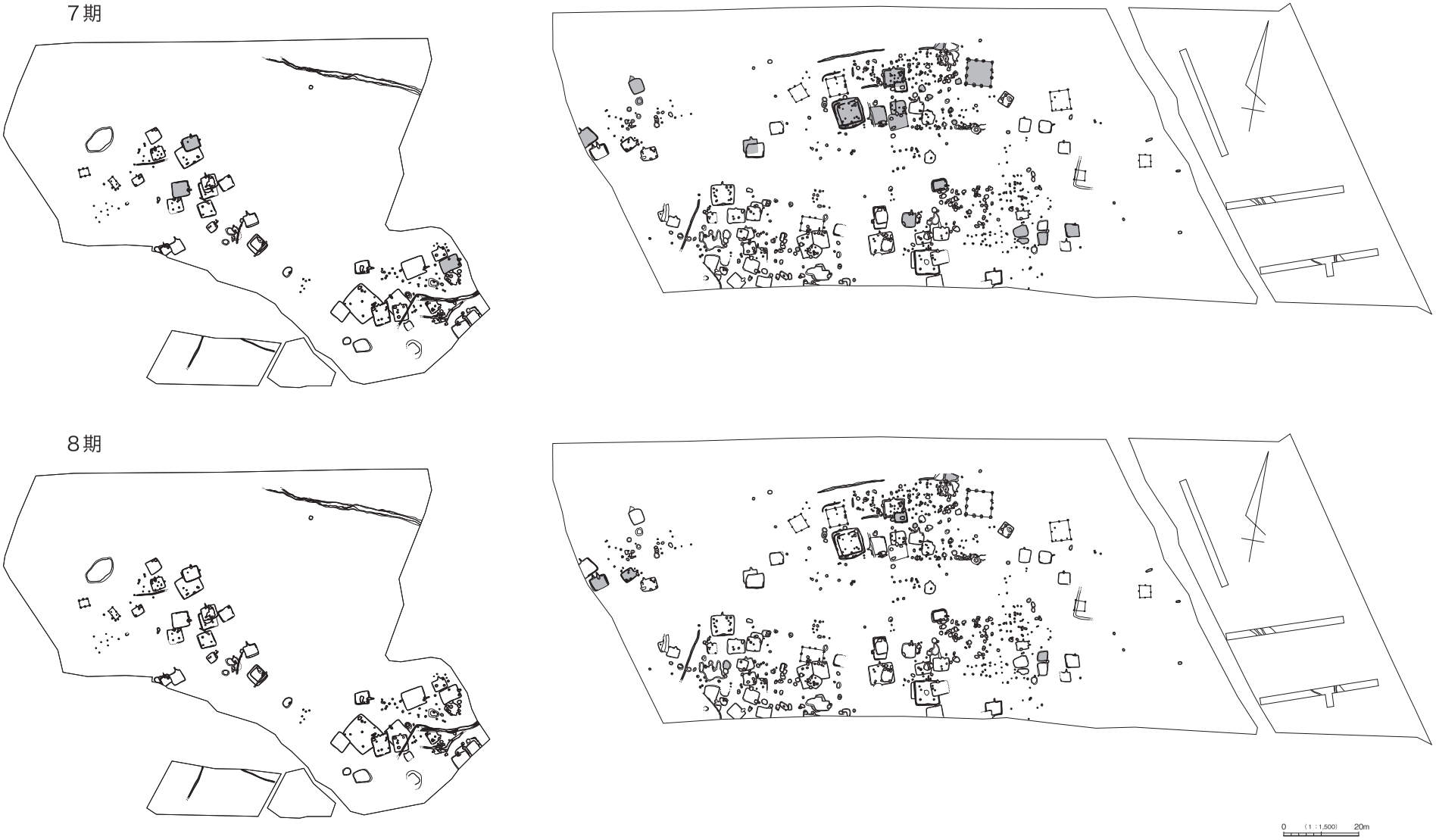
時期	竪穴住居跡 (SI)	掘立柱建物跡 (SB)	溝 (SD)	土師器焼成遺構 (SK)	土坑 (SK)	性格不明遺構 (SX)	ピット (P)	土器区分 須恵器窯	土器区分 田熊・梁木 (1990) 津野 (1995)
１期	904							TK-43	津野（Ⅲ）
２期	60　87　208　226 731		78		104　224　845	17		TK-209・217 樺崎渡戸窯	津野（Ⅳ・Ⅴ）
３期	198　217　670　732 748　754			738	661　690　864　866 880　946			TK-217・46 北之沢一号窯	田熊・梁木（Ⅰ） 津野（Ⅳ）
４期	63　89　736a 737 744　745　755				441　735　838B			古江浄琳寺裏山窯	田熊・梁木（Ⅱ） 津野（Ⅶ）
５期	35　61　62　70 77　90　93　196 200b 203　209c 220　734　743　751 752　756　757　905			643b 835	96　106　223B 407a 425　452　464　594 836　837　934	231 232	137　418	北山・八幡窯 和田窯	田熊・梁木（Ⅲ）
６期	197　199　209b 221 227　228				300　698		246　532	下津原窯	田熊・梁木（Ⅳ）
７期	92　194　202　209a 210　212　213　214 219　225　728　747 749　919	235	238		94　95　98　248 250　251　323　422 477　484a 485　513 528　536　538a 550 567　572　582　640 694　809	230	152　266 412　415 429　457 495　917	三通窯	田熊・梁木（Ⅴ）
８期	403　900　901　902				97　278　469　544A 650	229	510	寂光沢三号窯・ 寂光沢二号窯、 岡窯跡Ｂ地点１号窯	田熊・梁木（Ⅵ）
９期	91　632				159b 915			大芝原窯跡Ａ地点、 岡窯跡Ｂ地点２号窯	田熊・梁木（Ⅶ）
10 期	215　218　903				41　58　313　570 583　592　597　613a 613b 620　673		281　612	大芝原窯跡Ｂ地点	田熊・梁木（Ⅷ）
11 期	5　36　42　43 45　195　207		38		34　37　39　52 67　168　286　614 616		608		田熊・梁木（Ⅸ）
12 期	14　25　68　216 727				27				田熊・梁木（Ⅹ）
13 期	201								

第 359 図　和田遺跡　古代集落の変遷（1）



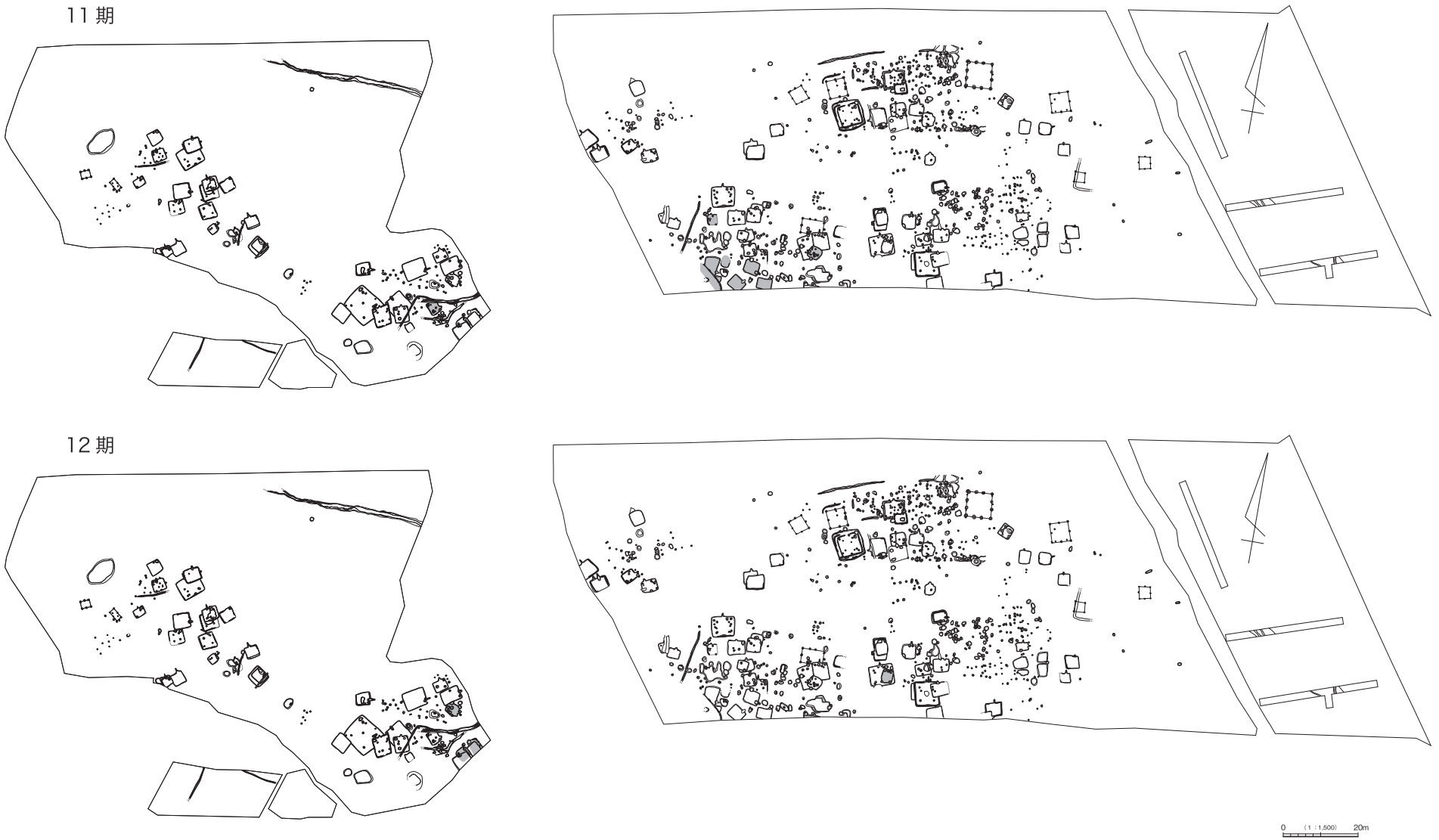
第 360 図　和田遺跡　古代集落の変遷（2）

第 361 図　和田遺跡　古代集落の変遷（3）

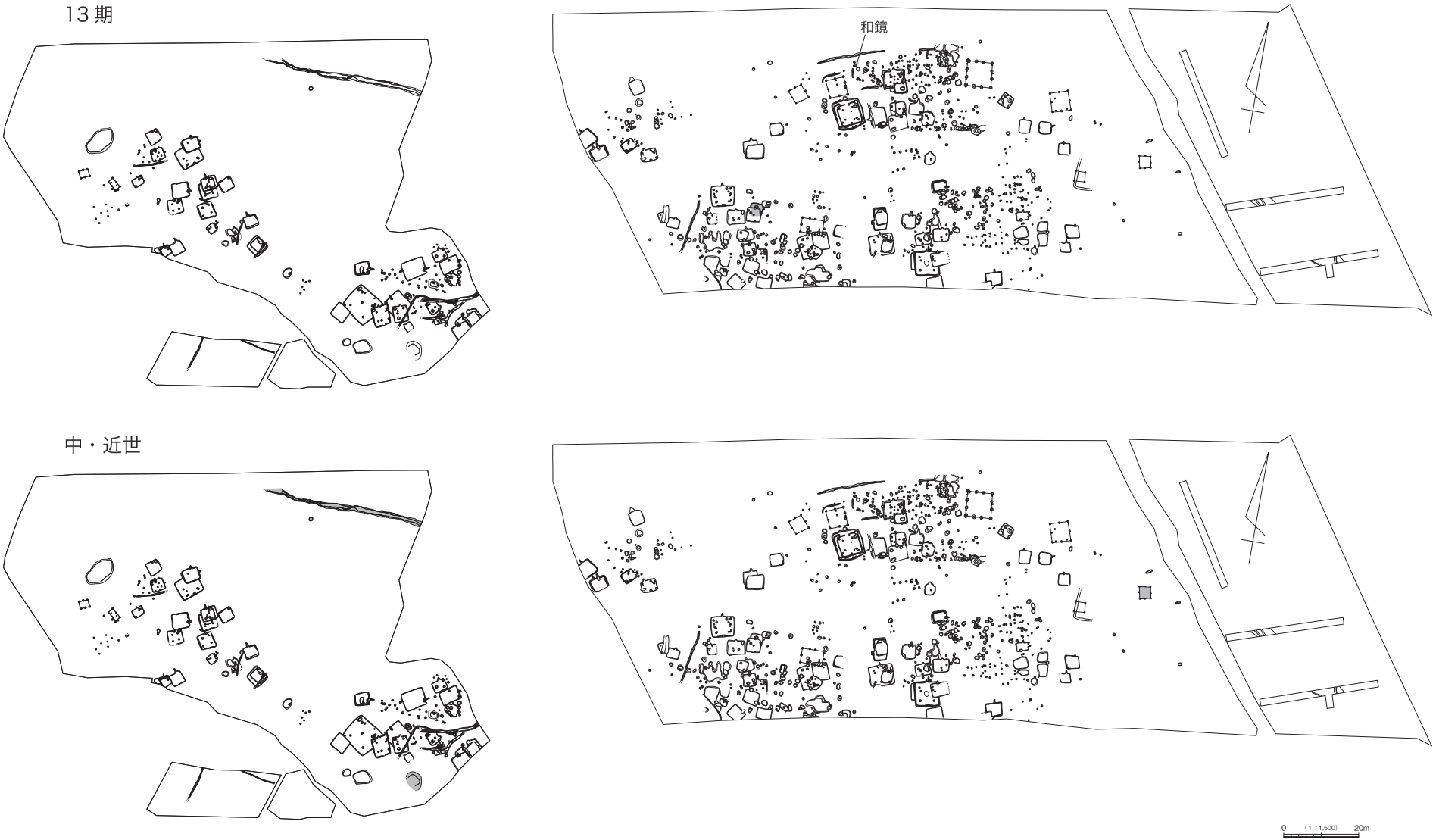


第 362 図　和田遺跡　古代集落の変遷（4）

第 363 図　和田遺跡　古代集落の変遷（5）



第 364 図　和田遺跡　古代集落の変遷（6）



第365図　和田遺跡　古代集落の変遷（7）と中・近世の遺構配置

竪穴住居跡の平面形は方形である。

3期　竪穴住居跡6軒（SI-198、217、670、732、748、754）、土師器焼成遺構1基（SK-738）、土坑6基がある。遺構数は2期からさほど変化しないが、調査区西端に新たに遺構が作られ始める。最も規模の大きいSI-732は南東部に位置する。竪穴住居跡の平面形は、規模に関わらずほぼ方形である。土師器焼成遺構であるSK-738は、新しく遺構が存在するようになる西端地区に位置する。集落域が拡大するとともに、日常什器の不足を補うため土師器焼成遺構が作られたと理解できようか。なお、土師器焼成遺構としてはSK-738の近隣に3～4期と推定されるSK-739がある。

4期　竪穴住居跡は7軒（SI-63、89、736a、737、744、745、755）であり、この他土坑3基がある。3期と比較すると遺構数・分布域ともほぼ変わらないが、中央部の遺構は確認できなくなる。規模の大きな竪穴住居跡は存在しない。竪穴住居跡の平面形は方形だが、SI-755はカマドを上にみて横長長方形となる。

5期　竪穴住居跡19軒（SI-35、61、62、70、77、90、93、196、200b、203、209c、220、734、743、751、752、756、757、905）、土師器焼成遺構2基（SK-643b･835）、土坑11基、性格不明遺構2基、ピット2基がある。遺構数は増加し、調査区のほぼ全域に遺構が拡散する。古代で最も竪穴住居跡数が多い時期であり、集落の拡大期と言える。これまで目立った遺構のない北東部には、大型の竪穴住居跡であるSI-209cが建てられるとともに、土師器焼成遺構であるSK-643bが作られる。SK-643bと重複する土師器焼成遺構SK-835は出土遺物がないが、遺構の類似性や重複関係などからこの時期に所属する可能性がある。集落域の拡大と連動する土師器焼成遺構のあり方は、3期の西端地区の状況とよく似ている。竪穴住居跡の平面形は方形主体だが、カマドを上にみて横長長方形となるものも一定数存在する。

6期　竪穴住居跡6軒（SI-197、199、209b、221、227、228）、土坑2基、ピット2基がある。遺構数は減り、西端地区に遺構は確認できなくなる。大型の竪穴住居跡であるSI-209bを中心に、全体に中央部～東半に寄った分布を示す。竪穴住居跡平面形は方形主体だが､SI-197などカマドを上にみて横長長方形となるものもある。

7期　遺構は多く、竪穴住居跡14軒（SI-92、194、202、209a、210、212、213、214、219、225、728、747、749、919）、掘立柱建物跡1棟（SB-235）、溝1条、土坑22基、性格不明遺構1基、ピット8基がある。集落規模が再度拡大する時期であり、遺構、遺物とも最も充実している。遺構が密集するのは大型の竪穴住居跡SI-209aや掘立柱建物跡SB-235がある北東部である。竪穴住居跡の平面形は方形主体で、SI-728などカマドを上にみて縦長長方形となるものがみられ始める。多数の手捏ね土器が出土する遺物集中区2は中央北寄りにあり、SI-194とともに7期に形成された可能性が高い。集落北辺における祭祀行為であろうか。SD-238は集落の北側を画する溝とみることもできよう。

8期　竪穴住居跡4軒（SI-403、900、901、902）、土坑5基、性格不明遺構1基、ピット1基がある。集落規模が急激に縮小する。遺構分布域はさほど変わらず、中央北寄りの地区を遺構群の中心としながら、全体の遺構数が減っている。竪穴住居跡は大型のものがなくなり、カマドを上にして縦長ないし横長の平面形を持つ掘り込みの深いものとなる。

9期　竪穴住居跡2軒（SI-91、632）、土坑2基のみであり、集落規模はさらに縮小する。調査区北寄りの地区に遺構はなくなり、南寄り中央～南東部にコンパクトにまとまる。

10期　竪穴住居跡3軒（SI-215、218、903）、土坑11基、ピット2基がある。土坑は多いが集落規模は小さいままであり、9期と遺構分布域は変わらない。集落規模を変化させる要因がなかったものと言えようか。

11期　竪穴住居跡8軒（SI- 5、36、42、43、45、195、207）、溝1条、土坑9基、ピット1基であり、遺構数はわずかに増加に転じる。遺構の位置は、9・10期に遺構が多く分布した調査区中央南寄りに多く、こ

の部分に明確に集中する様子がうかがえる。竪穴住居跡は平面方形や長方形である。

12 期　竪穴住居跡４軒（SI-14、25、68、216、727）、土坑１基であり、11 期と同じく遺構は調査区中央南寄りにまとまるが、集落規模はやや縮小する。竪穴住居跡の平面形は方形を基本としながらも、いびつなものが目立つ。

13 期　竪穴住居跡１軒（SI-201）のみであり、12 期で遺構が集中した調査区中央南寄りに位置する。この遺構を最後に、古代遺構は確認できなくなる。

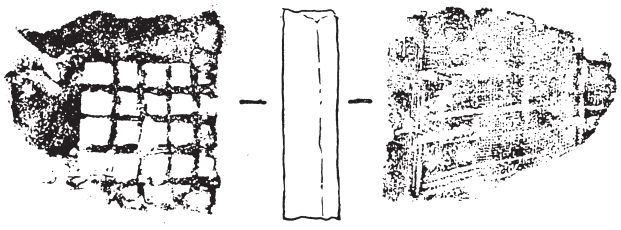
５　和田遺跡と周辺遺跡との関係　（第 366 ～ 368 図）

前項でみたように、和田遺跡の古代集落は古墳時代後期に始まり、盛衰を繰り返し 11 世紀まで存在することが判明した。ここでは、そうした集落の動向を足利北部にある同時代の遺跡の状況とあわせて概観する。

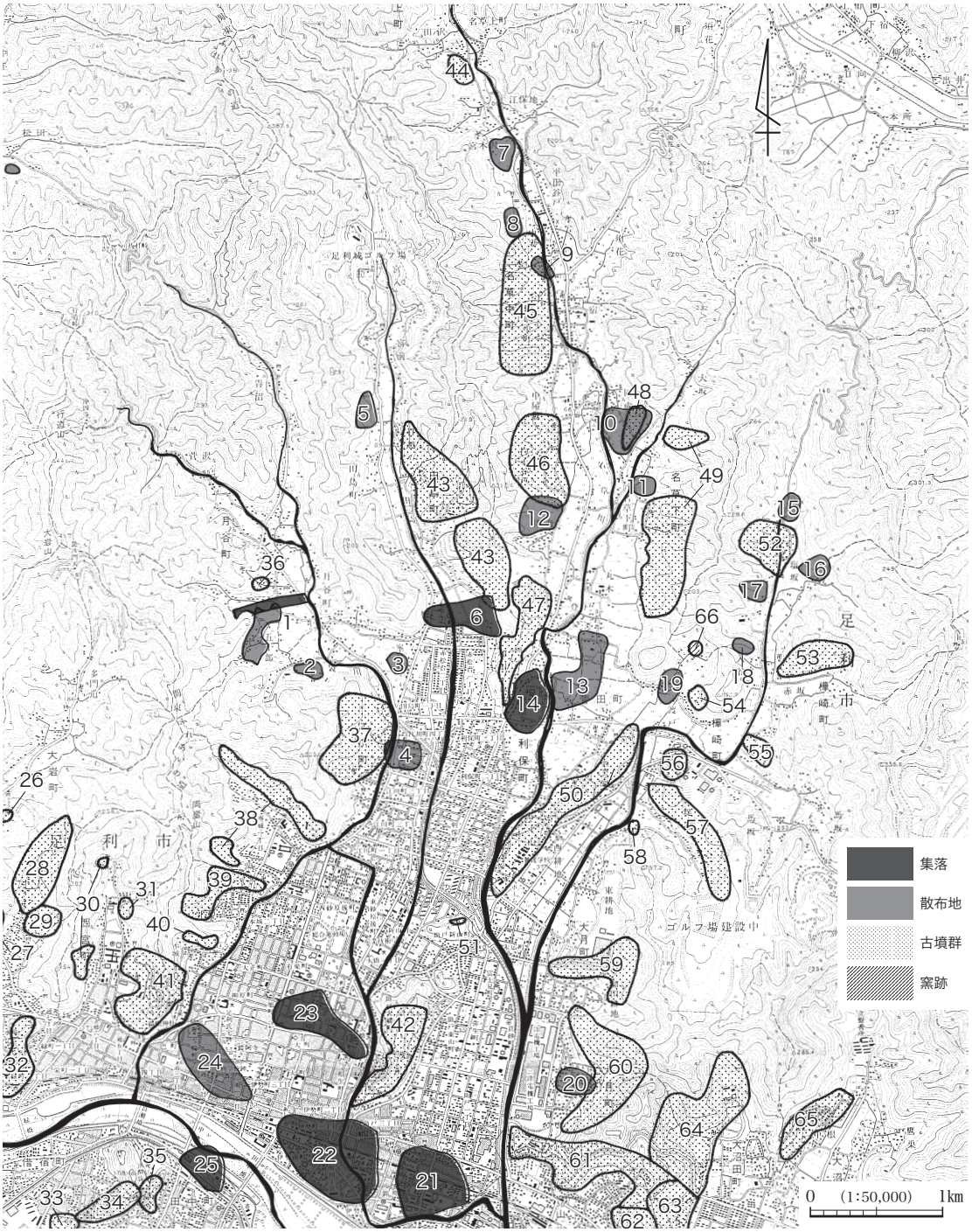
和田遺跡の集落の開始時期は、多数の古墳群が築かれる古墳時代後期～終末期に相当する。足利市は 1,300 基以上の古墳があるとされる全国有数の古墳集中地域で、その大半が後期群集墳である。爆発的に増加した古墳は、渡良瀬川北岸の支流によって開析された山麓や山頂に古墳群を形成した。市内北部では現市街地周辺および名草川、田島川流域の丘陵上に広く分布し、各河川の上流域にまで形成される。古墳群とそれに対応する集落のあり方については、田島川流域の菅田古墳群と田島持舟遺跡が一例となる。田島持舟遺跡は古墳時代中期後半から後期（５世紀後半～７世紀中葉）を中心とした集落で、東側の丘陵上にある菅田古墳群とその推移が連動していることがわかっている。古墳群に隣接して古墳を造営した集落が存在するということであり、古墳群周辺で散布地として把握されている遺跡などがそうした集落に相当しよう。

袋川流域では、機神山古墳群や江川古墳群など古墳群は多数存在するが、それらは現市街地となる平野部に面する。本遺跡のある袋川上流域では小規模な月谷古墳群があるのみで、確実に古墳時代に位置づけられる集落は確認できない。田島持舟遺跡や菅田西根遺跡の弥生時代遺構が示すように、田島川・名草川流域では早くから開発が始まったとみられるが、それに対して袋川上流域では古墳時代後期まではさほど開発されてこなかったとみることができる。７世紀以降の和田遺跡における集落の本格的な形成は、袋川上流域で開発が開始されたことを示すと考えられる。要因としては人口の増加やそれに起因する既存耕作地の不足、農業技術の向上などが想定されようか。いずれにせよ、和田遺跡の集落の開始には地域開発の進行といった背景があると考える。これ以後奈良時代前期に相当する５期にかけて和田の集落は規模を大きくしていくが、これについては更なる耕地拡大等が集落拡大に繋がったとみておきたい。ただ、５期の遺構数の増加は急激であり、律令体制導入期における政治的な要因が働いた可能性もあろう。

６期に遺構数は減少するが、７期になると再度増加し、遺構・遺物が最も充実した時期を迎える。三毳産をはじめとする須恵器も多数出土するようになるが、特徴的な遺物としては竪穴住居跡などから出土する瓦が挙げられる。すでにまとめたように、瓦は模骨痕を持つ平瓦 15 点を含め 119 点あり、その多くは７期の遺構から出土する。本遺跡周辺で瓦葺建物を有すると考えられる遺跡としては、南約４km に郡衙推定地である国府野遺跡があるほか、西約１km に位置する大岩山毘沙門堂及び十二坊跡、北西 1.5km にある行道山浄因寺が挙げられる。これらは中世から続く寺院だが僧行基開山の縁起が伝わり、古代瓦の出土が確認されている。

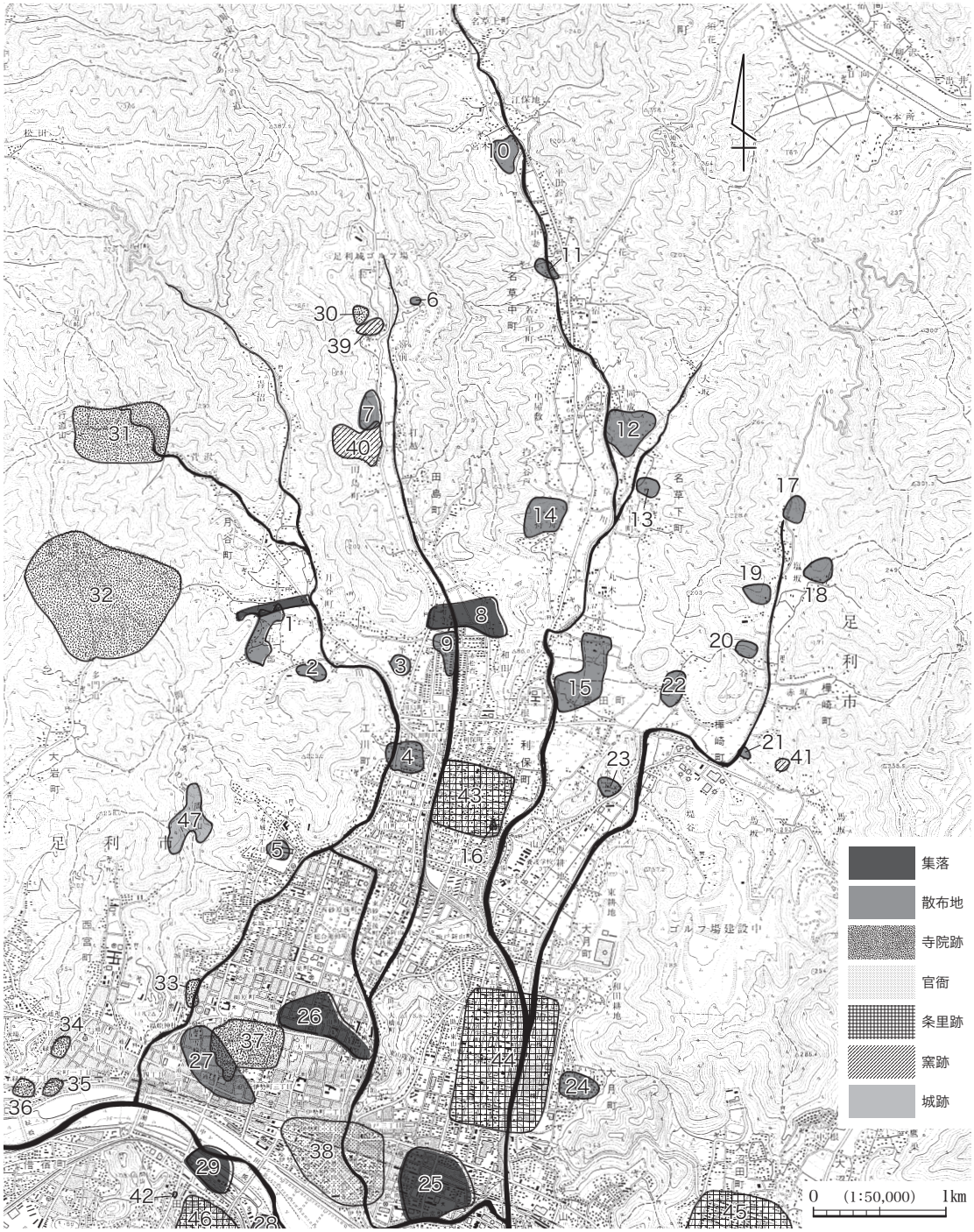


第 366 図　大岩山毘沙門堂出土の瓦
（足利市史第三巻 1979 p.160）



1	和田遺跡	集落	16	塩坂遺跡	散布地	30	西宮西古墳群	古墳群	41	機神山古墳群	古墳群	54	坊山古墳群	古墳群
2	和田南遺跡	散布地	17	樺崎中妻遺跡	散布地	31	西宮東古墳群	古墳群	42	助戸山古墳群	古墳群	55	馬坂古墳群	古墳群
3	岩花遺跡	散布地	18	樺崎八幡宮北遺跡	散布地	32	水道山・足利公園古墳群	古墳群	43	田島古墳群	古墳群	56	渡戸古墳群	古墳群
4	江川遺跡	散布地							44	大橋古墳群	古墳群	57	堤谷古墳群	古墳群
5	田島宮前遺跡	散布地	19	渡戸遺跡	散布地	33	八幡山古墳群	古墳群	45	殿入古墳群	古墳群	58	東耕地古墳群	古墳群
6	田島持舟遺跡	集落	20	南耕地遺跡	散布地	34	坊主山古墳群	古墳群	46	杓子谷戸古墳群	古墳群	59	和田耕地古墳群	古墳群
7	江保地遺跡	散布地	21	助戸・観農遺跡	集落	35	田中古墳群	古墳群						
8	名草清水遺跡	散布地	22	国府野遺跡	集落	36	月谷古墳群	古墳群	47	菅田古墳群	古墳群	60	南耕地古墳群	古墳群
9	名草中妻遺跡	散布地	23	丸山耕地遺跡	集落	37	江川古墳群	古墳群	48	岡成古墳群	古墳群	61	宮先古墳群	古墳群
10	岡成遺跡	散布地	24	新田町遺跡	散布地	38	本城一丁目古墳群	古墳群	49	丸木古墳群	古墳群	62	高寂寺古墳群	古墳群
11	上丸木遺跡	散布地	25	反過遺跡	集落				50	稲山西耕地古墳群	古墳群	63	八椚古墳群	古墳群
12	名草持舟遺跡	散布地	26	中堀古墳群	古墳群	39	本城二丁目古墳群	古墳群				64	西根古墳群	古墳群
13	神畑遺跡	散布地	27	吾妻古墳群	古墳群							65	中根古墳群	古墳群
14	菅田西根遺跡	集落	28	物見古墳群	古墳群	40	本城三丁目古墳群	古墳群	51	助戸新山古墳群	古墳群	66	樺崎渡戸古窯跡	窯跡
15	樺崎入谷遺跡	散布地	29	東山古墳群	古墳群				52	入谷古墳群	古墳群			
									53	赤坂古墳群	古墳群			

第 367 図　足利北部における古墳時代後期集落と古墳群



1	和田遺跡	集落	13	上丸木遺跡	散布地	25	助戸・観農遺跡	集落	36	蓮岱寺跡	寺院跡
2	和田南遺跡	散布地	14	名草持舟遺跡	散布地	26	丸山耕地遺跡	集落	37	鑁阿寺十二坊跡	寺院跡
3	岩花遺跡	散布地	15	神畑遺跡	散布地	27	新田町遺跡	散布地	38	国府野遺跡	官衙・集落
4	江川遺跡	散布地	16	利保南遺跡	散布地	28	田中阿弥陀堂遺跡	散布地	39	東光寺裏山古窯跡	窯跡
5	本城一丁目遺跡	散布地	17	樺崎入谷遺跡	散布地	29	反過遺跡	集落	40	田島岡古窯跡	窯跡
6	田島宮入遺跡	散布地	18	塩坂遺跡	散布地	30	堂平遺跡	寺院跡	41	馬坂古窯跡	窯跡
7	田島宮前遺跡	散布地	19	樺崎中妻遺跡	散布地	31	行道山浄因寺	寺院跡	42	田中瓦窯跡	窯跡
8	田島持舟遺跡	集落	20	樺崎八幡宮北遺跡	散布地	32	大岩山毘沙門堂及十二坊跡	寺院跡	43	江川・利保条里跡	条里跡
9	赤松台遺跡	散布地	21	馬坂遺跡	散布地				44	助戸・大月条里跡	条里跡
10	江保地遺跡	散布地	22	渡戸遺跡	散布地	33	徳正寺跡	寺院跡	45	大沼田条里跡	条里跡
11	名草中妻遺跡	散布地	23	西耕地遺跡	散布地	34	緑町発寺	寺院跡	46	田中・朝倉条里跡	条里跡
12	岡成遺跡	散布地	24	南耕地遺跡	散布地	35	宝憧寺跡	寺院跡	47	足利城跡	城館跡

第 368 図　足利北部における古代遺跡

和田遺跡は大岩山の東麓に位置し、遺跡のすぐ北側にある道は大岩山の裏参道とされるなど、大岩山との地理的な繋がりは深い。大岩山出土の平瓦は桶巻き作りで、時期は本遺跡出土瓦に近いとみられる。大岩山出土瓦は実見しておらず類似性は確かめていないが、瓦葺建物が建設されたとすれば和田の集落がそれに関わった可能性も想定できる。集落の拡大は、建設に伴う人員増加の結果と考えられよう。８期以降の集落規模縮小は、７期の中で建設が終了したことを示すものかもしれない。

規模が縮小する８・９期には少ないながらも竪穴住居跡があり、少量の瓦等とともに三足土器が特徴的にみられる。香炉としての用途が考えられるなど三足土器は仏教関連の遺物とされており、集落内で山岳信仰等に関わる宗教的な行為が行われた可能性がある。建物建設のためのムラから仏教的行為を行うムラへと変容したと言えようか。墨書土器を多数出土し祭祀的な行為が行われたとみられる遺物集中区２なども、こうした想定の中で捉えられる遺構であろう。11 期には竪穴住居跡がわずかに増えるたあと 12 期には再び減少していくことになるが、９期以降では調査区南寄り中央付近に遺構が集中しており、この時期の中心が調査区外南側へと移動しているとみることもできる。

12 期以降は、わずかな遺構の他鏡１面が出土する。鏡が出土したのは集落の北端であり、仏教的行為も行うと推定した集落北端での山岳信仰に関連する埋納の結果とも推定される。ただ、鏡式から導き出された年代は 10 世紀後半～ 11 世紀であり、これは集落内で遺構が確認されなくなる 12 ～ 13 期に相当する。鏡は、集落の終焉に伴う儀式的行為を示すものとも考えられよう。

第３節　中・近世の遺構と遺物

１　中世（第 365 図）

掘立柱建物跡１棟（SB-79）、溝１条（SD-758）、土坑６基（SK-16、28、849、874）が明確に中世と位置付けられる遺構である。SB-79 からは陶器鉢、SD-758 からは常滑産や渥美産かとみられる陶器甕片や須恵質の鉢、SK-16 では土師質土器小皿と青磁碗片、SK-28 では陶器甕片と平瓦片、SK-849 土師質土器小皿、内耳土器、丸瓦、石臼、砥石、SK-874 では土師質土器小皿がそれぞれ出土する。時期は 12 ～ 15 世紀頃までと幅広く、特定の時期に集中することはない。遺物としてはこの他 13 ～ 14 世紀とみられる土師質土器小皿や片口鉢、青磁碗、14 ～ 15 世紀かとみられる土師質土器小皿や内耳土器がある。

古代で触れたように遺跡北側は大岩山への裏参道となっている。仏教関連の建造物は多く、裏参道沿いに西 500 mには大岩山毘沙門天十二坊の一つである大日坊があり、五輪塔、宝篋印塔部材、石仏、不動明王像が現存し、宝篋印塔部材には明徳四年（1393 年）と刻銘されるものがある。北東 500 mには高松坊があり、宝篋印塔の部材と考えられる方形の石に観応元年（1350 年）との刻銘が確認できる。和田遺跡にも仏教関連の施設があった可能性はあるが、詳細は不明である。なお、南東 1.5km には 11 世紀に築城されたという伝承を持つ足利城跡があるため、それとの関連も考えられようか。

２　近世（第 365 図）

遺構としては土坑１基（SK-763）がある。遺物は土師質土器小皿、擂鉢、火鉢、石臼、銭貨などがある。陶器類は O － 24・25 グリッド付近に集中しており、何らかの遺構があった可能性がある。近隣を見渡せば、中世から続く仏教関連施設が数多くあるほか、南西 400 mには弁財天があり、無縫塔の刻銘から元文年間（1736 ～ 1741 年）以前に寺院が創建されていたことがわかっている。

【主要参考文献】

阿部　茂・後藤信祐　1990『溜ノ台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 107 集　栃木県教育委員会
阿部　茂・芹澤清八・熊谷淳　　1992『辻の内遺跡・柿の内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 127 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
赤井博之・池田敏宏・内山敏行・及川真紀・片根義幸・篠原睦美・津野仁・山口耕一　1994「足利市岡窯跡群採集の須恵器と瓦について」『栃木県考古学会誌』第 16 集　栃木県考古学会　pp. 15 － 43
足利市遺跡調査団編　1987『菅田西根遺跡－古代水田跡・方形周溝墓群－』足利市埋蔵文化財調査報告第 16 集　足利市遺跡調査団・足利市教育委員会
足利市遺跡調査団編　1987『国府野遺跡第９次調査報告－正倉遺構－』足利市埋蔵文化財調査報告第 17 集　足利市遺跡調査団・足利市教育委員会・学校法人上岡学園
足利市教育委員会　1989『足利市文化財総合調査　総括報告書』足利市教育委員会
足利市教育委員会編　1987『足利の文化財』足利市教育委員会
足利市教育委員会文化財保護課編　1999「９　田島岡古窯跡第２次発掘調査」『平成２年度文化財保護年報』足利市文化財調査報告第 23 集　足利市教育委員会文化財保護課
足利市教育委員会文化課編　1997「10　田島岡古窯跡測量調査」『平成７年度文化財保護年報』足利市文化財調査報告第 32 集　足利市教育委員会文化課
足利市教育委員会文化課編　1998「11　田島岡古窯跡第３次発掘調査」『平成８年度文化財保護年報』足利市文化財調査報告第 38 集　足利市教育委員会文化課
足利市教育委員会文化課編　1999「12．田島岡古窯跡第４次発掘調査」『平成９年度文化財保護年報』足利市文化財調査報告第 39 集　足利市教育委員会文化課
足利市教育委員会文化課編　1999「６．田島岡古窯跡第５次発掘調査」『平成 11 年度文化財保護年報』足利市文化財調査報告第 44 集　足利市教育委員会文化課
足利市史編さん委員会　1979『近代足利市史』第三巻資料編　原始・古代、中世、近世　足利市
足利市文化財愛護協会編　2009『足利の廃寺』足利市文化財愛護協会
新井　仁・佐藤明人・岩崎泰一　2010『大道東遺跡』（２）－弥生時代以降篇１－　（財）群馬県埋蔵文化調査事業団調査報告書 481　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
新井　仁・佐藤明人・岩崎泰一・女屋和志雄・神谷佳明　2010『大道東遺跡』（３）－弥生時代以降篇２－　（財）群馬県埋蔵文化調査事業団調査報告書 506　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
出居　博・茂木克美・中村岳彦 2010『傾城塚遺跡』佐野市文化財調査報告書第 26 集　佐野市教育委員会
岩舟町教育委員会編　1974『岩舟町の歴史』岩舟町
上原康子・篠原祐一　1999『清六Ⅲ遺跡』Ⅳ（古代・中世編）　栃木県埋蔵文化財調査報告第 228 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
海老原郁雄・亀田幸久・川原由典・斎藤弘・津野仁・藤田典夫　1996『八幡根東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 181 集　（財）栃木県文化振興事業団・栃木県教育委員会
大江正行・下城　正　1990『太田市八幡遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 105 集　群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
大金宣亮・木村　等・大橋泰夫・篠原祐一　1988『下野国分寺Ⅳ』栃木県埋蔵文化財調査報告第 91 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
大橋泰夫　1996『下野国分寺跡ⅩⅡ』瓦・図版編　栃木県埋蔵文化財調査報告第 169 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
大橋泰夫　1997『下野国分寺跡ⅩⅢ』瓦・本文編　栃木県埋蔵文化財調査報告第 169 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
大橋泰夫　1999『下野国分寺跡ⅩⅣ』遺構編　栃木県埋蔵文化財調査報告第 220 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
木村　等　1981『北の内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 31 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
後藤守一　1977『古鏡聚英』下篇（隋唐鏡より和鏡）　東京堂出版
小宮俊久　1994『境ヶ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡』新田町文化財調査報告書第 13 集　新田町教育委員会
桜井元子　2002「埼玉県本庄市天神林Ⅱ遺跡出土の三足鉢形土器」『埼玉考古』第 37 号　埼玉考古　pp. 101 － 116
酒井清治・藤野一之・佐藤絵里奈・坂詰秀一　2007『群馬・金山丘陵窯跡群』Ⅰ－辻小屋窯跡群・八幡遺跡群・入宿遺跡の発掘調査報告－　駒澤大学考古学研究室
酒井清治・小林孝秀・藤野一之・三原翔吾 2009『群馬・金山丘陵窯跡群』Ⅱ－菅ノ沢遺跡（須恵器窯跡群・古墳群）・巌穴山古墳の発掘調査報告　駒澤大学考古学研究室
篠原浩恵・藤田典夫　2011『田島持舟遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 339 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
鈴木徳雄　1983「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第７号　土曜考古学研究会　pp. 13 － 22
鈴木徳雄　1984「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態－古代武蔵国における土師器生産と交易－」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会　pp. 47 － 76
田熊清彦　1988『下野国分寺跡Ⅷ』土器類調査報告　栃木県埋蔵文化財調査報告第 90 集　（財）栃木県文化振興事業団
田熊清彦・梁木　誠　1990「栃木県の黒色土器」『東国土器研究』第３号　東国土器研究会　pp. 41 － 70
田辺昭三　1966「陶邑古窯址群１」『平安学園考古クラブ研究論集』第 10 号
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
津野　仁　1995「栃木県における６・７世紀の土器様相」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会 pp. 43 － 62
津野　仁　2011『寂光沢窯跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 341 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
富田和夫　1997「第６節　関東西部」　窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社　pp. 153 － 168
富田和夫　2007『荒川附遺跡』Ⅱ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 338 集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中川あや　2004「唐鏡の変遷－盛唐期以降を中心に－」『考古学雑誌』第 88 巻第１号　日本考古学会　pp. 33 － 68
長久智子　2010「9 世紀における瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式」『愛知県陶磁資料館研究紀要』15　pp.95-118
中村倉司　1984「器種組成の変遷と時期区分－古代北武蔵の例から－」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会　pp. 77-94
楢崎彰一監修　2010『古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺－』　MIHO MUSEUM 他
日光市史編さん委員会　1986a『日光市史』上巻　日光市
日光市史編さん委員会　1986b『日光市史』資料編上巻　日光市
日光二荒山神社・喜田川清香編 1991『日光男体山』山頂遺跡発掘調査報告書　名著出版（初版　1963 年角川書店）
前沢輝政　1967「下野国足利・岡瓦窯址」『古代』49・50 合併号　早稲田大学　pp. 22 － 36
水口由紀子　1990「関東地方における中世成立期の様相」シンポジウム『土器からみた中世社会の成立』　pp. 43 － 55
峰岸純夫・市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代 1995『法界寺跡発掘調査概要』足利市埋蔵文化財調査報告第 29 集　足利市教育委員会　文化財保護課
梁木　誠・田熊清彦　1981「栃木県における歴史時代の須恵器研究ノート－窯跡出土資料の検討とその編年について」『栃木県考古学会誌』第６号　栃木県考古学会　pp. 83 － 129　pp. 54 － 71
梁木　誠・田熊清彦　1989「栃木県の彩色土器について」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会　pp. 54 － 71
山口耕一　1998「古墳時代後期の円筒形土製品－栃木県下の事例を中心に－」『研究紀要』第６号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　pp. 39 － 60

写　真　図　版

図版一　和田遺跡　航空写真

遺跡全景（東上空から）

南西部〔Ⅰ区〕全景（南上空から）

図版二　和田遺跡　航空写真

東部〔Ⅴ区〕全景（西上空から）

南東部〔Ⅱ区〕全景（東から）

図版三　和田遺跡　航空写真

東部〔Ⅵ区東半〕全景（西上空から）

東部〔Ⅵ区西半〕全景（西上空から）

図版四　和田遺跡　航空写真

西部〔Ⅶ区〕全景（南上空から）

西部〔Ⅶ区南西部〕全景（南上空から）

SI-5 完掘（西から）

SI-5 カマド遺物出土状況（西から）

SI-5 完掘（西から）

SI-14・35 土層断面（南から）

SI-14 カマド遺物出土状況（西から）

SI-15 全景（東から）

SI-18 完掘（南から）

SI-18 北カマド完掘（南から）

SI-18 西カマド遺物出土状況（東から）

SI-25 土層断面（西から）

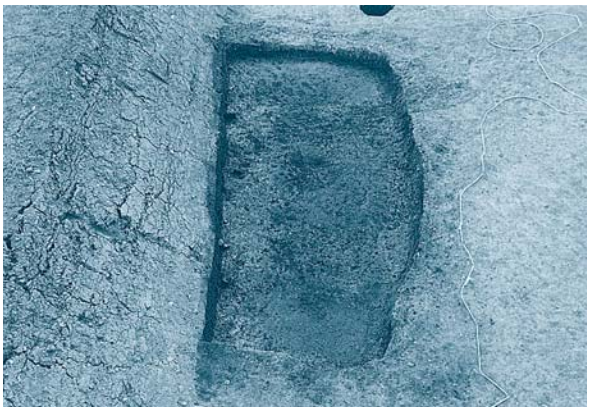
SI-31 カマド完掘（西から）

SI-35 北東隅 遺物出土状況（南から）

SI-35 カマド土層断面（東から）

SI-35 カマド遺物出土状況（南から）

SI-36・SK-37・SD-38 完掘（西から）


SI-36 完掘（東から）

SI-36 カマド遺物出土状況（西から）

SI-36 カマド内礫出土状況（西から）

SI-36 カマド完掘（西から）

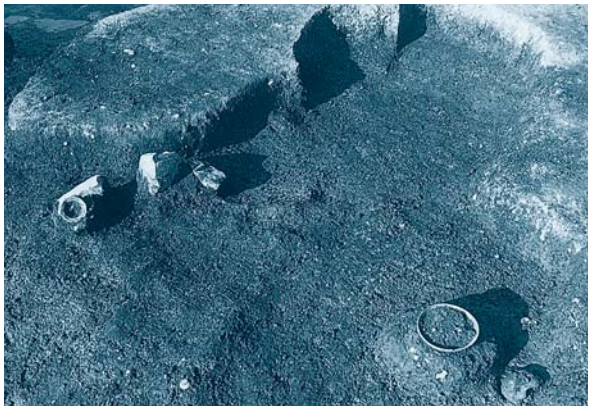
SI-42 完掘（北西から）

SI-42 カマド完掘（西から）

SI-43 完掘（南西から）

SI-43 カマド完掘（南から）

SI-45 完掘（南西から）

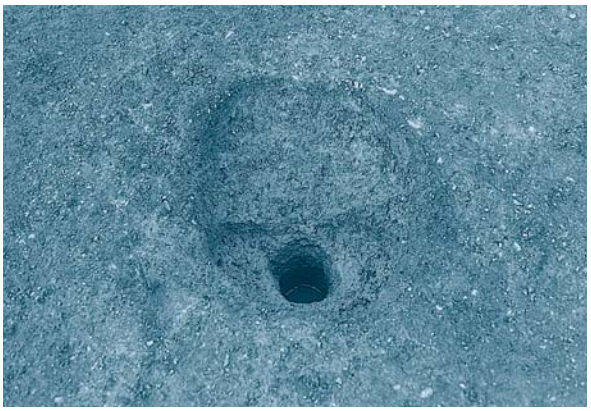

SI-45 カマド遺物出土状況（南から）

SI-61 完掘（東から）

SI-60・61・62 遺物出土状況（南から）

SI-61 南西隅 遺物出土状況（南東から）

SI-61 西壁付近 遺物出土状況（南東から）


SI-61 P-3 完掘（南から）

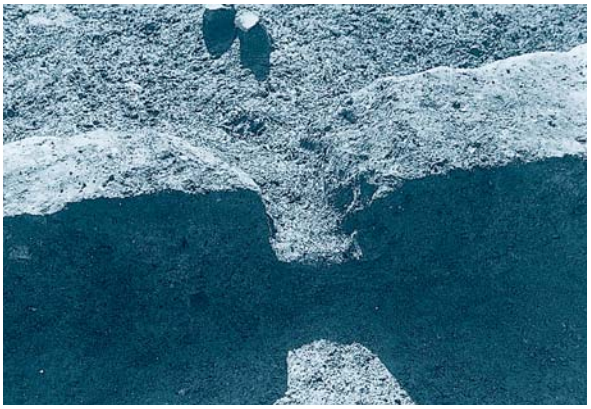
SI-61 カマド完掘（南から）

SI-62 土層断面（南から）

SI-62 カマド遺物出土状況（南から）

SI-62 カマド遺物出土状況（東から）

SI-63 遺物出土状況（南東から）


SI-63 カマド完掘（北から）

SI-68 完掘（北から）

SI-68 カマド遺物出土状況（南から）

SI-70・77 完掘（南から）

SI-70 カマド遺物出土状況（南から）

SI-77 カマド完掘（西から）

SI-77 カマド土層断面（北から）

SI-87 遺物出土状況（南から）

SI-88 完掘（南から）

SI-88 カマド完掘（南から）

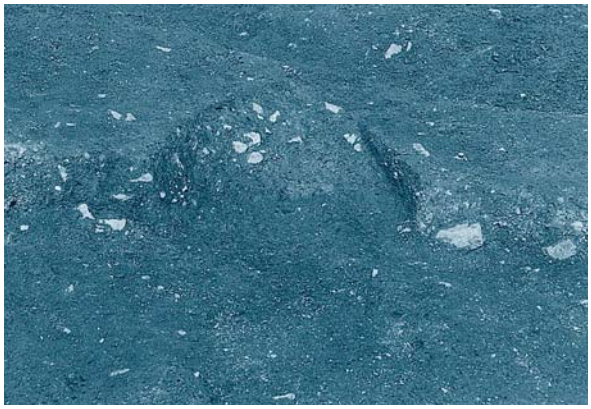
SI-89 完掘（東から）

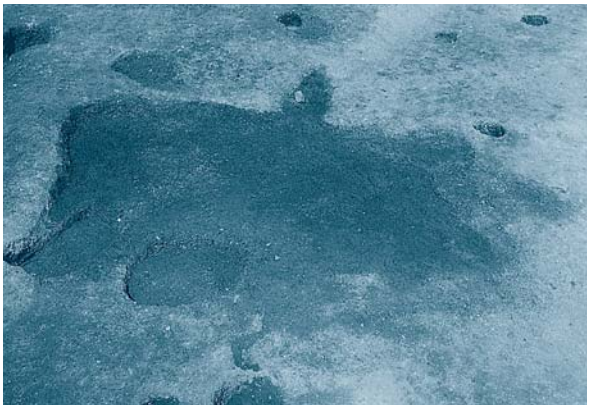
SI-89 遺物出土状況（西から）

SI-89 カマド完掘（西から）

SI-90 完掘（南から）

SI-90 遺物出土状況（南から）


SI-90 カマド完掘（南から）


SI-91 完掘（南から）

SI-91 北カマド完掘（東から）

SI-91 東カマド完掘（西から）

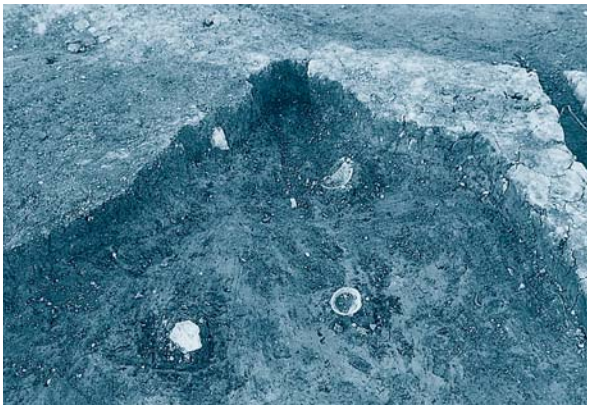
SI-92 完掘（南から）

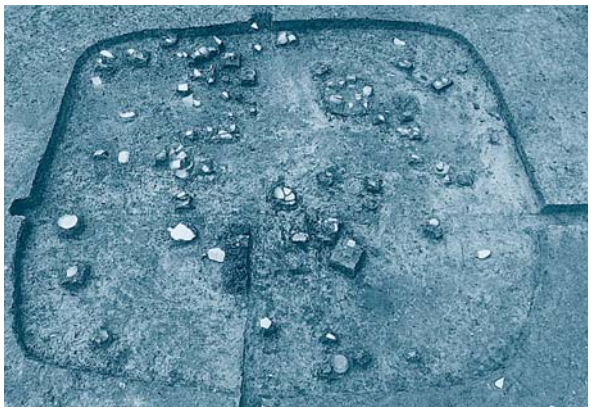
SI-92 カマド遺物出土状況（南から）

SI-93 完掘（南から）

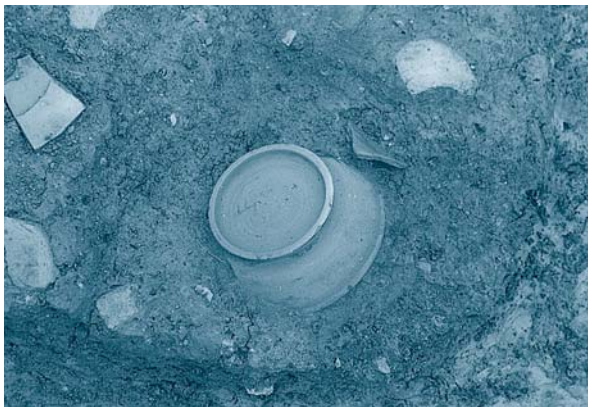
SI-93 カマド完掘（南から）

SI-194 遺物出土状況（南から）

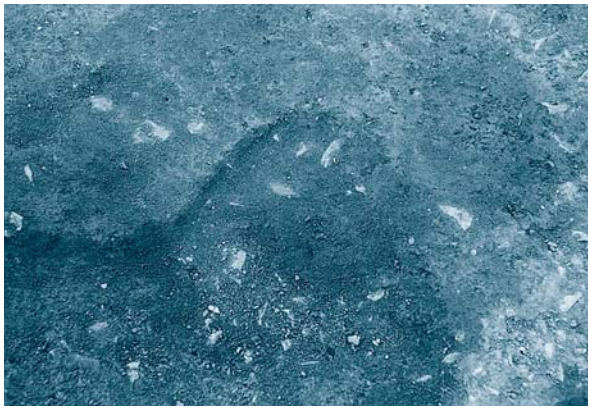

SI-194 カマド遺物出土状況（南から）


SI-194 遺物出土状況（東から）

SI-194 南西隅 遺物出土状況（南から）


SI-194 須恵器高台付坏出土状況（南から）

SI-195 完掘（南から）

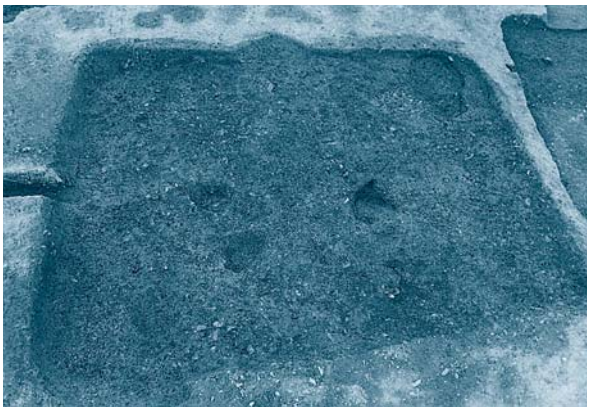

SI-195 カマド完掘（南から）

SI-196 完掘（南から）

SI-196 遺物出土状況（南から）

SI-196 P-4 土層断面（南から）

SI-196 カマド完掘（南から）

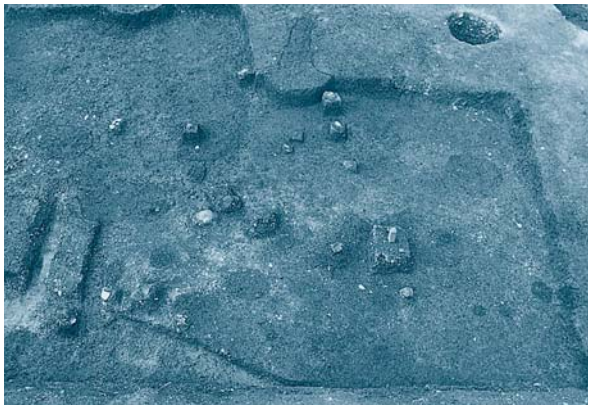

SI-197 完掘（南から）

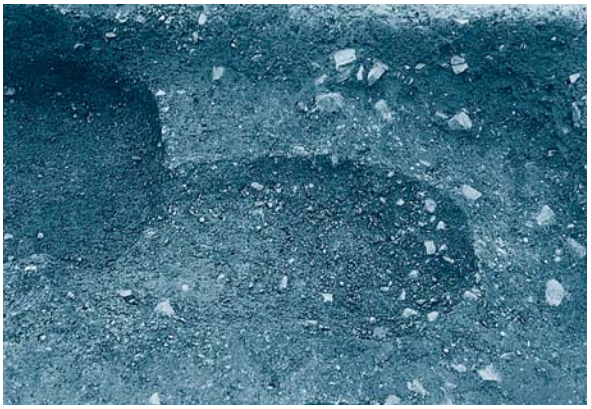
SI-197 遺物出土状況（南から）

SI-197 北東隅 遺物出土状況（南から）

SI-197 カマド遺物出土状況（南から）

SI-198 完掘（南から）


SI-198 遺物出土状況（南から）


SI-198 P-1 完掘（南から）

SI-198 カマド完掘（南から）

SI-199 完掘（南から）

SI-199 カマド完掘（南から）

SI-200b、SK-200a 完掘（南から）

SI-200b 土層断面（南から）

SI-200b カマド完掘（南から）

SI-201 完掘（西から）

SI-201 カマド完掘（西から）

SI-201 P-1 遺物出土状況（西から）

SI-202 完掘（南から）

SI-202 遺物出土状況（南から）

SI-202 北東隅 遺物出土状況（西から）

SI-202 カマド遺物出土状況（南から）

SI-203 完掘（南から）

SI-203 北東隅 遺物出土状況（南から）

SI-204 完掘（南から）

SI-204 北東隅 赤変部分（南西から）

SI-207 完掘（南東から）

SI-207 作業風景（南東から）

SI-207 カマド、SK-666 完掘（東から）

SI-208 完掘（南から）

SI-208 カマド完掘（南から）

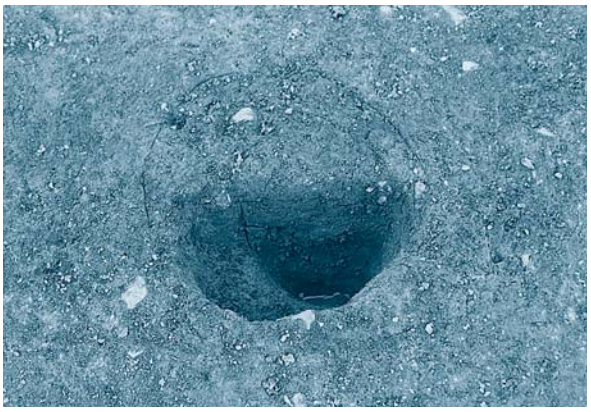
SI-209a 完掘（南から）

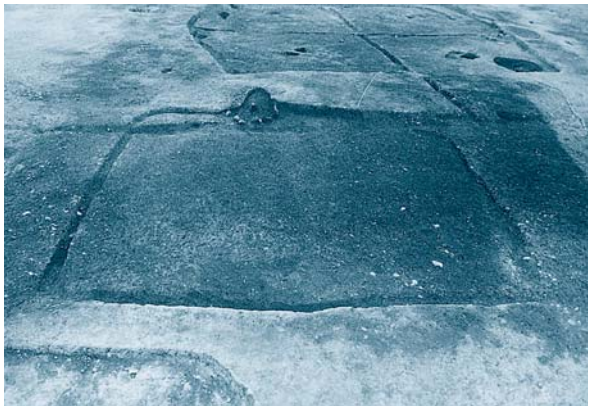
SI-209a 北東隅 遺物出土状況（南から）

SI-209a P-7 遺物出土状況（南から）

SI-209a・209b 完掘（柱穴部分に人・南から）

SI-209c 完掘（南から）


SI-209c P-11 土層断面（南から）



SI-210 完掘（東から）

SI-210 カマド遺物出土状況（南から）

SI-212 完掘（南から）

SI-212 遺物出土状況（南から）

SI-213 完掘（南から）

SI-213 カマド遺物出土状況（南から）

SI-214 完掘（南から）

SI-214 カマド完掘（南から）

SI-215 完掘（南から）

SI-216 遺物出土状況（東から）

SI-217 完掘（南から）

SI-217 カマド遺物出土状況（南から）

SI-217 カマド袖部内遺物出土状況（南から）

SI-218 遺物出土状況（東から）

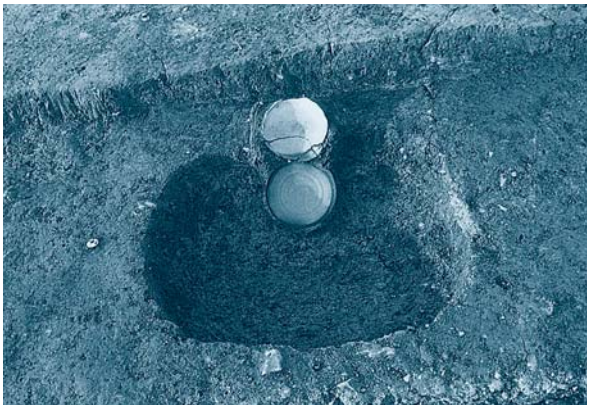
SI-218 カマド完掘（東から）

SI-219 完掘（南から）

SI-219 カマド完掘（南から）

SI-220 完掘（南から）

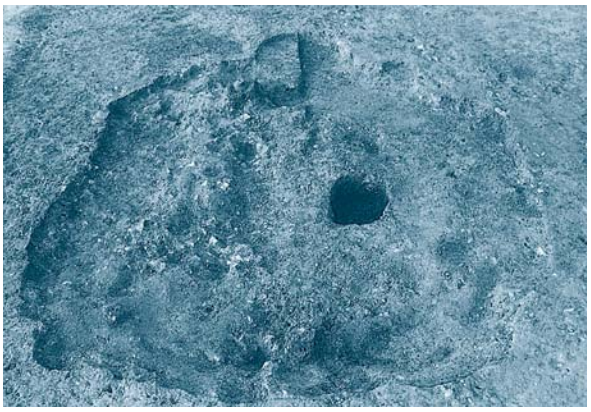
SI-220 カマド遺物出土状況（南から）


SI-220 P-1 遺物出土状況（南から）

SI-221 完掘（南から）

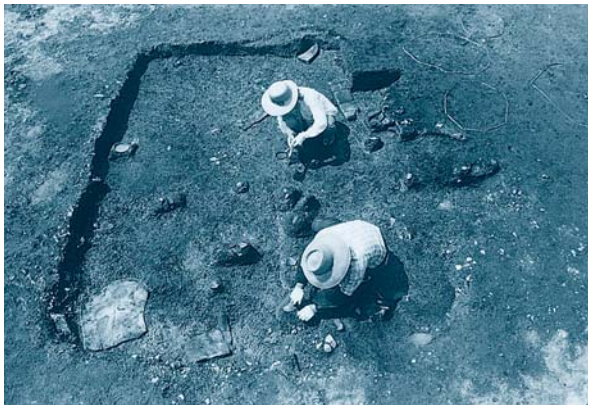
SI-221 カマド遺物出土状況（南から）

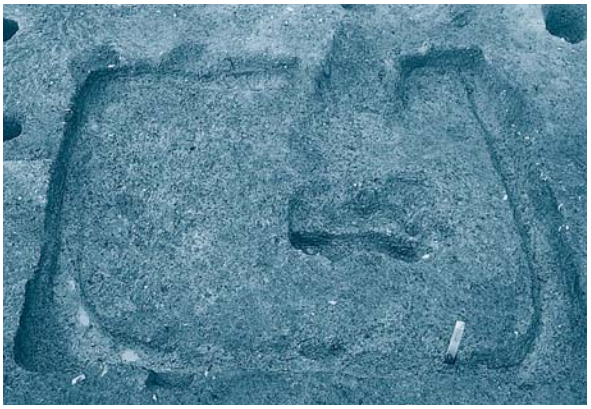
SI-225 完掘（西から）


SI-226 遺物出土状況（南から）

SI-227 遺物出土状況（南から）

SI-228 完掘（南から）


SI-228 作業風景（東から）


SI-403 完掘（南から）

SI-403 カマド完掘（南から）

SI-631 完掘（南から）

SI-632 完掘（南から）

SI-632 カマド遺物出土状況（南から）

SI-670 完掘（南から）

SI-670 カマド完掘（南から）

SI-727 完掘（北西から）

SI-727 北カマド遺物出土状況（西から）

SI-727 南カマド遺物出土状況（北西から）

SI-727 南カマド礫出土状況（北西から）

SI-727 北・南カマド礫出土状況（北西から）

SI-727 北・南カマド掘方 完掘（北西から）

SI-728 完掘（西から）

SI-728 カマド遺物出土状況（西から）

SI-729 完掘（南から）

SI-729 カマド完掘（南から）

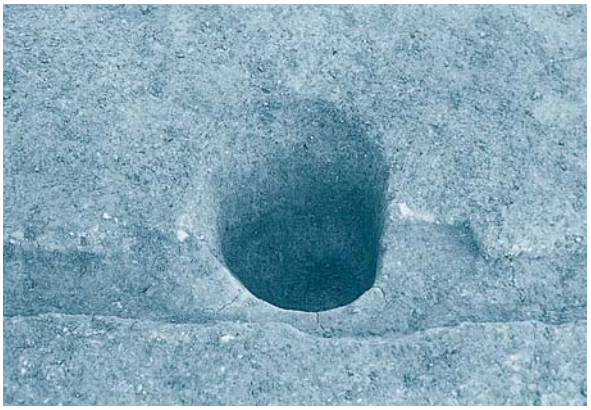
SI-730 完掘（西から）

SI-730 カマド完掘（西から）

SI-731 完掘（南東から）

SI-731 カマド遺物出土状況（南東から）

SI-732 遺物出土状況（南から）


SI-732 P-1 完掘（北から）

SI-733 完掘（西から）

SI-733 カマド遺物出土状況（西から）

SI-733 カマド遺物出土状況（西から）

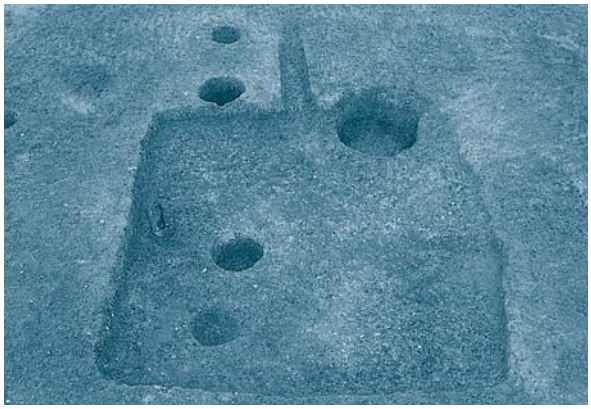
SI-734 完掘（南東から）

SI-736a・736b 完掘（南から）

SI-736a カマド袖部内遺物出土状況（西から）

SI-737 完掘（南から）

SI-737 カマド遺物出土状況（南から）


SI-741 完掘（南から）

SI-741 カマド完掘（南西から）

SI-742 完掘（南から）

SI-742 カマド完掘（南から）

SI-743 完掘（南から）

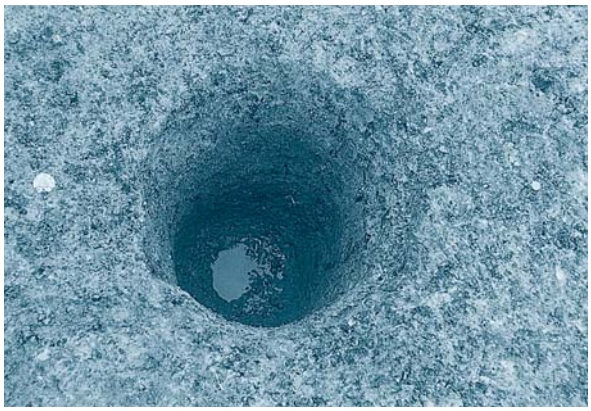
SI-743 遺物出土状況（南から）

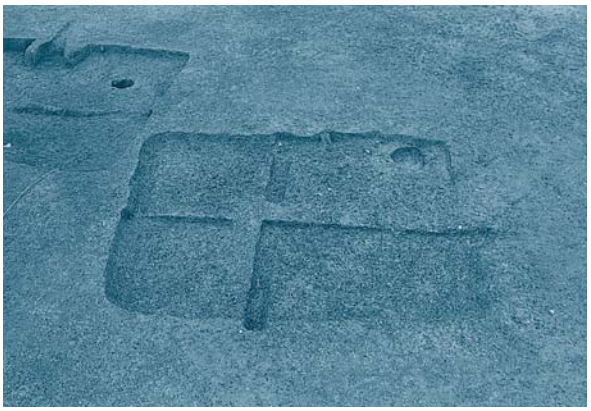
SI-743 西部遺物出土状況（北西から）

SI-743 西カマド遺物出土状況（南から）

SI-743 東カマド遺物出土状況（南から）

SI-743・744 完掘（東から）


SI-744 P-4 完掘（南から）


SI-745 完掘（南から）

SI-745 カマド遺物出土状況（南から）

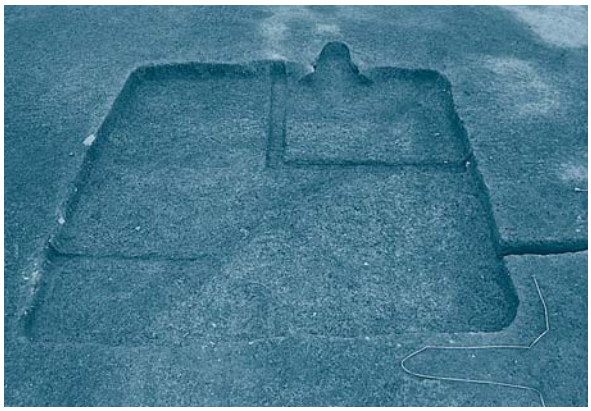
SI-747 完掘（南から）

SI-747 北西カマド遺物出土状況（南から）

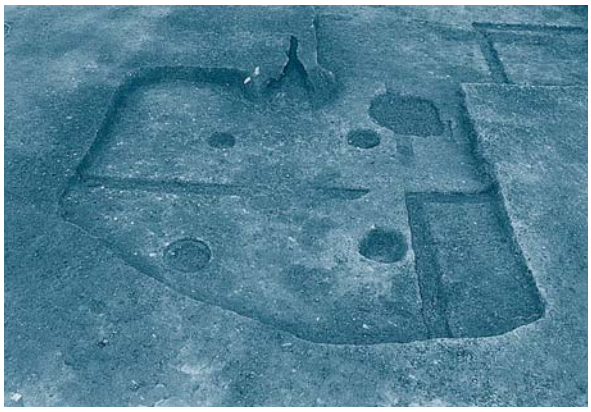
SI-748 完掘（南から）

SI-748 P-2 遺物出土状況（北から）

SI-748 カマド完掘（南から）


SI-749 完掘（西から）

SI-749 カマド遺物出土状況（西から）


SI-750 完掘（南から）

SI-750 遺物出土状況（南から）

SI-750 カマド完掘（南から）

SI-751 完掘（南から）

SI-752 完掘（南から）

SI-752 カマド遺物出土状況（南から）

SI-753 完掘（南から）

SI-753 カマド完掘（南から）

SI-754 完掘（南から）

SI-754 遺物出土状況（南から）

SI-754 西カマド完掘（南から）

SI-754 P-1 遺物出土状況（南から）

SI-755 完掘（南から）

SI-755 カマド完掘（南東から）

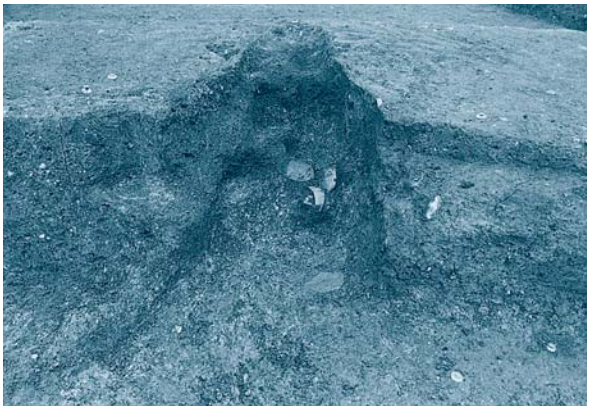
SI-756 完掘（南から）

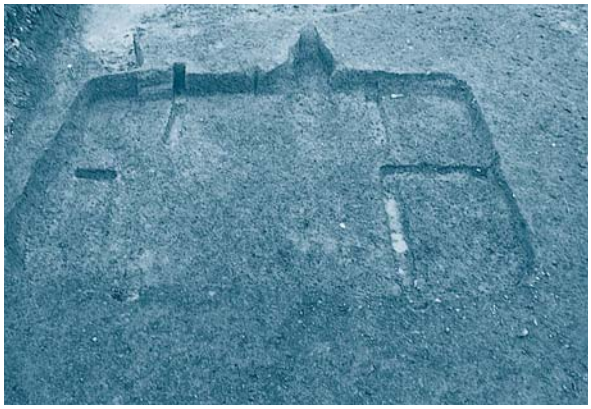
SI-756 カマド完掘（南から）

SI-757 完掘（南から）

SI-757 カマド遺物出土状況（南から）

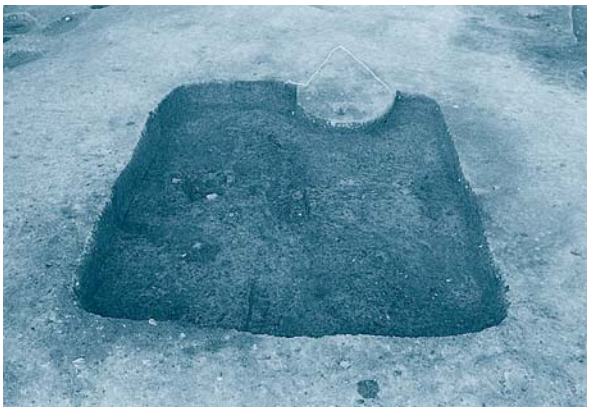
SI-900・901 完掘（南から）


SI-900 カマド遺物出土状況（南から）


SI-901 完掘（南から）

SI-901 カマド遺物出土状況（南西から）

SI-902 完掘（西から）


SI-902 遺物出土状況（西から）

SI-902 カマド土層断面（南から）

SI-902 カマド遺物出土状況（西から）

SI-903 掘方完掘（南から）

SI-904 完掘（南から）

SI-905 完掘（南から）

SI-905 カマド完掘（南から）

SI-919 完掘（南から）

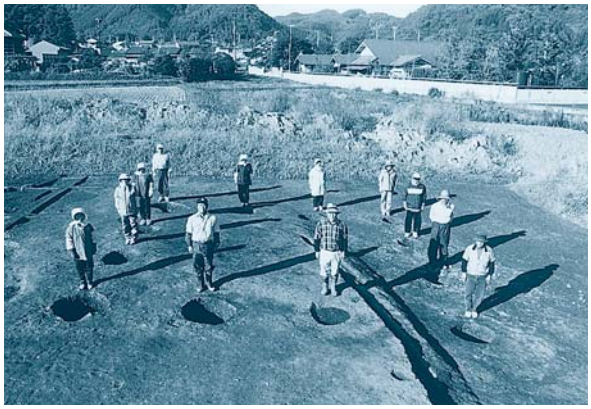
SI-919 遺物出土状況（南から）

SI-919 南東隅 遺物出土状況（北東から）

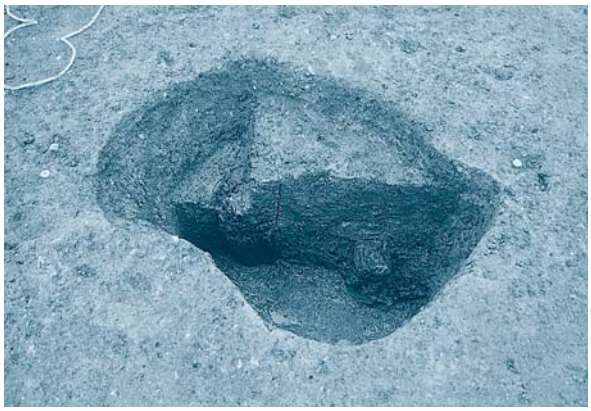
SI-919 カマド遺物出土状況（南から）

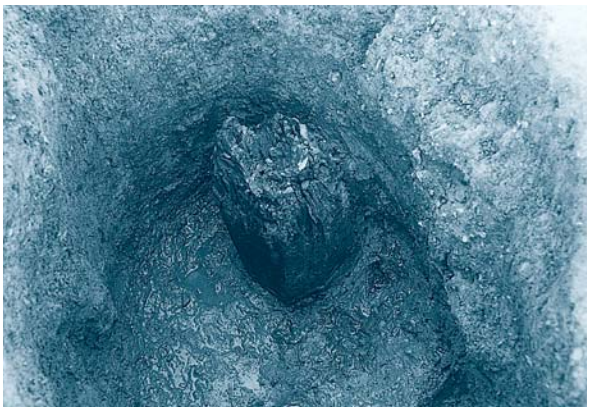
SB-233 完掘（南から）

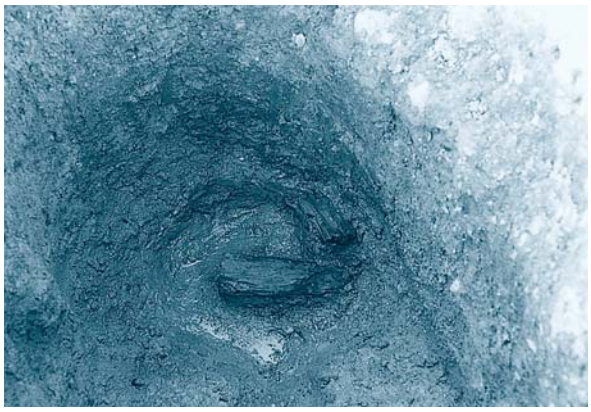
SB-235 完掘（南から）


SB-235 完掘（南から）

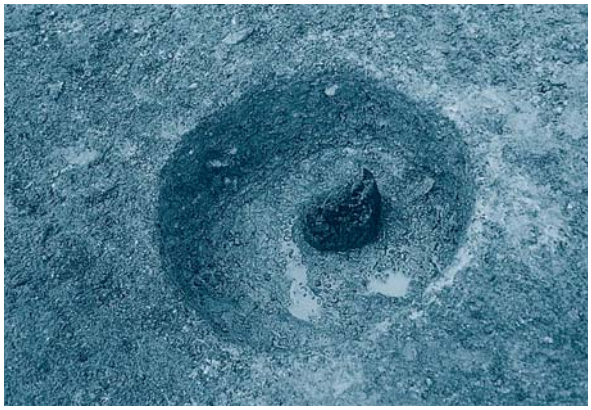
SB-235 P-1 柱痕確認状況（南から）

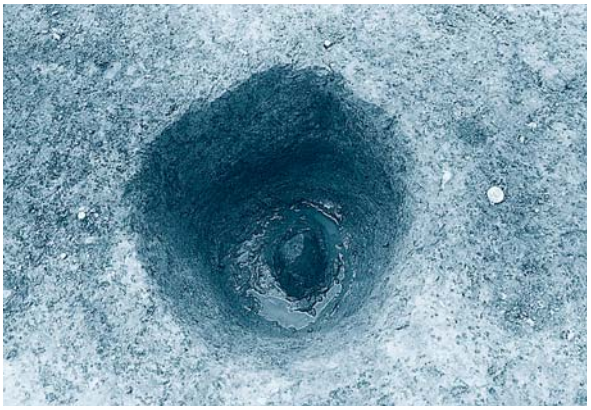

SB-235 P-1 柱材出土状況（南から）

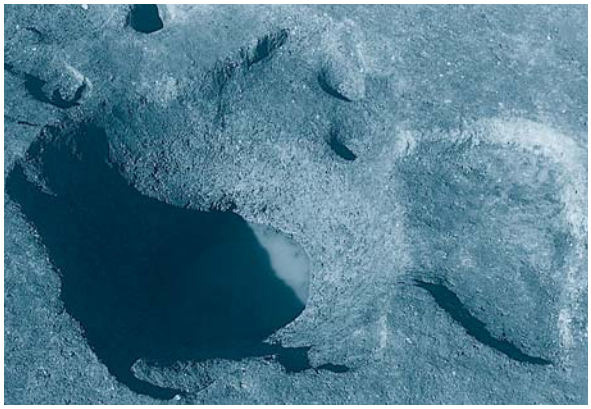

SB-235 P-1 柱材出土状況（南東から）


SB-235 P-1 礎板出土状況（南東から）

SB-235 P-3 木製品（礎板か）出土状況（南から）

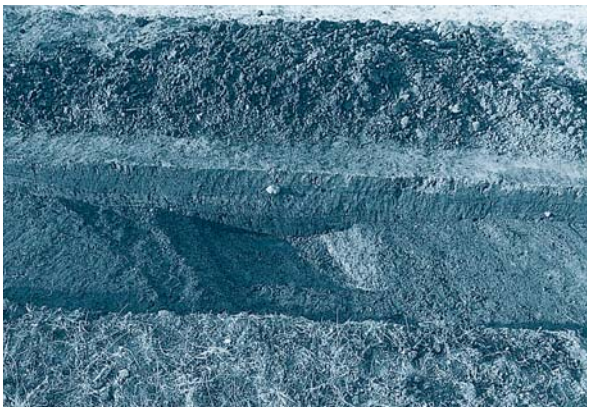

SB-235 P-12 柱材出土状況（西から）


SB-951 P-350 柱材出土状況（北から）


SE-549、SK-693 完掘（南東から）

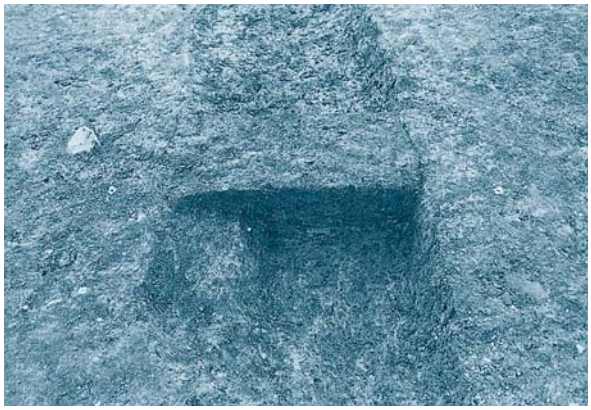
SE-549 完掘（南西から）

SD-38 完掘（南東から）


SD-78 A-A’ 土層断面（南から）

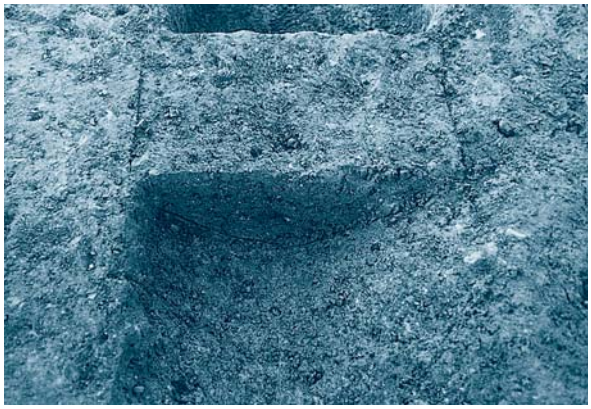
SD-78 B-B’ 土層断面（南から）

SD-238 完掘（東から）



SD-238 A-A’ 土層断面（東から）

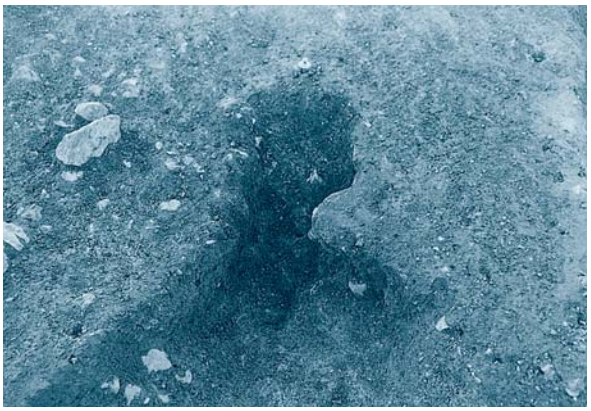
SD-240 完掘（東から）



SD-240 土層断面（東から）

SK-643b・P-643a 完掘（東から）

SK-643b・P-643a 土層断面（南から）

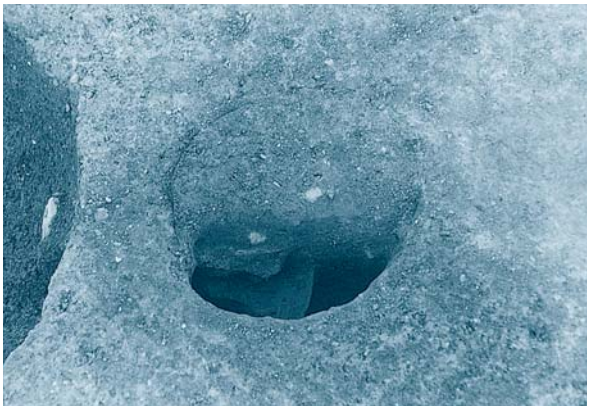


SK-643b 完掘（東から）

SK-738・739 土層断面（南から）

SK-738・739 土層断面（東から）

SK-738 煙道部半截（南から）


SK-738 煙道部土層断面（北東から）

SK-738 煙道部土層断面（北東から）

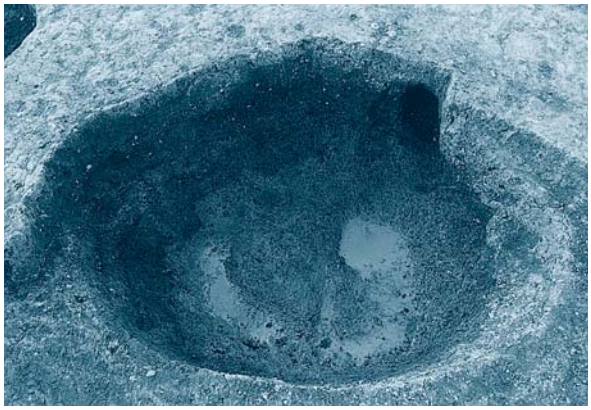
SK-738 煙道完掘（南東から）

SK-738 煙道完掘（南から）

SK-835 完掘（東から）

SK-835 土層断面（南東から）

SK-835 土層断面（南から）



SK-27 完掘（南東から）

SK-37 完掘（南西から）

SK-49・50 完掘（南から）

SK-53 完掘（北東から）

SK-97・98 遺物出土状況（南から）

SK-222 遺物出土状況、SK-452 完掘（東から）

SK-250 遺物出土状況（南東から）

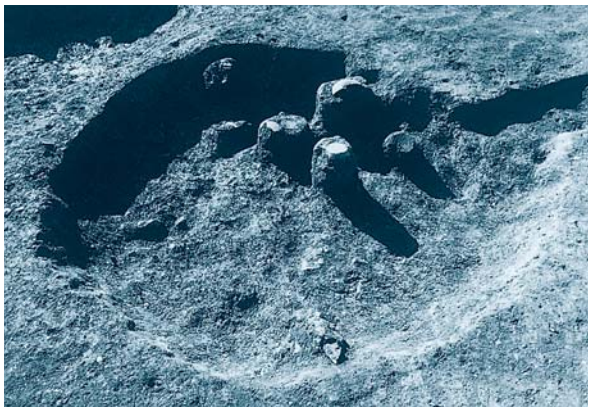
SK-256 土層断面（南から）

SK-267 完掘（南から）

SK-312 完掘（南から）

SK-333 遺物出土状況（南から）

SK-363 遺物出土状況（東から）


SK-694 遺物出土状況（北から）

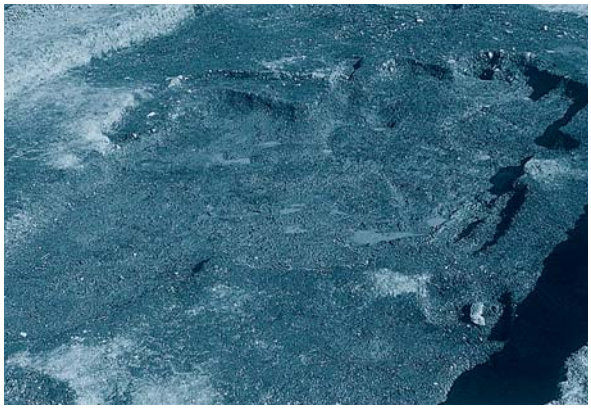
SK-768 遺物出土状況（東から）

SK-864 遺物出土状況（北東から）

SK-946 遺物出土状況（西から）

SX-17 完掘（北から）

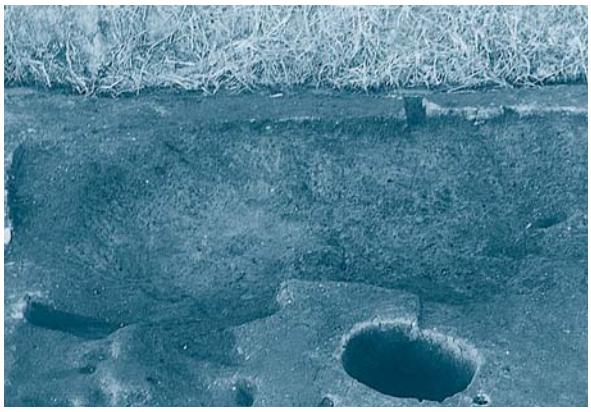
SX-17 遺物出土状況（西から）


SX-54 完掘（南西から）

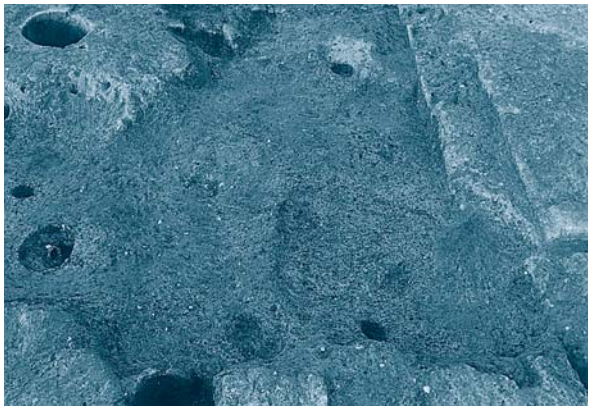
SX-205 完掘（南から）

SX-205 南北土層断面（東から）

SX-229・P-958・P-959 完掘（南から）


SX-230 完掘（南から）

SX-231・P-952 ～ 957 遺物出土状況（南から）

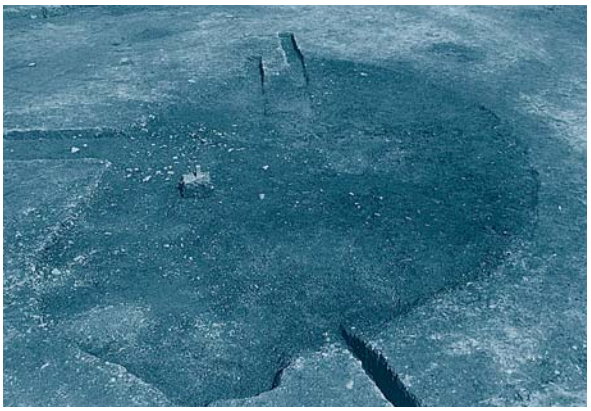

SX-232・P-959 完掘（南から）

SX-232 遺物出土状況（南から）

SX-232 遺物出土状況（南から）

SX-232 遺物出土状況（北西から）

SX-232 遺物出土状況（南東から）


SX-700 完掘（南から）

P-277 土層断面（断ち割り東から）

P-277 柱材出土状況（東から）

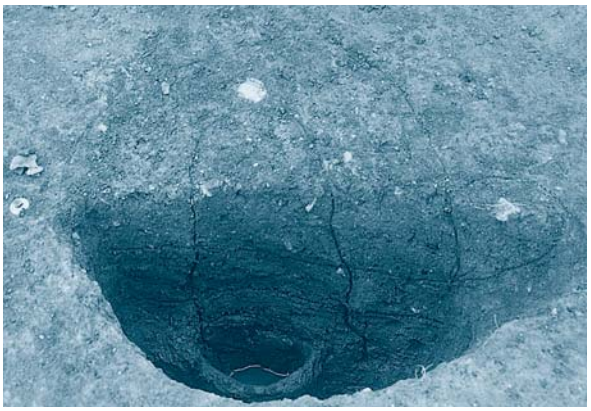
P-429 遺物出土状況（東から）

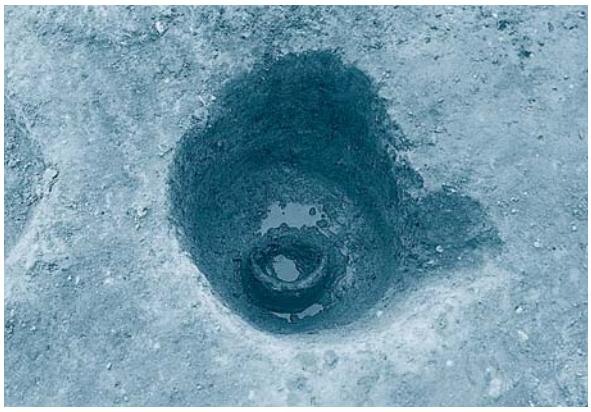
P-491 遺物出土状況（南西から）

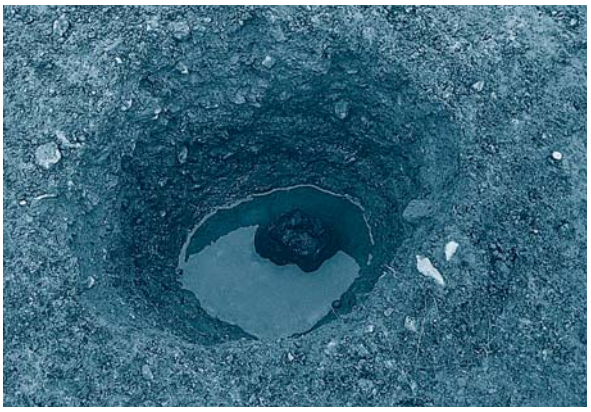
P-496 土層断面（西から）

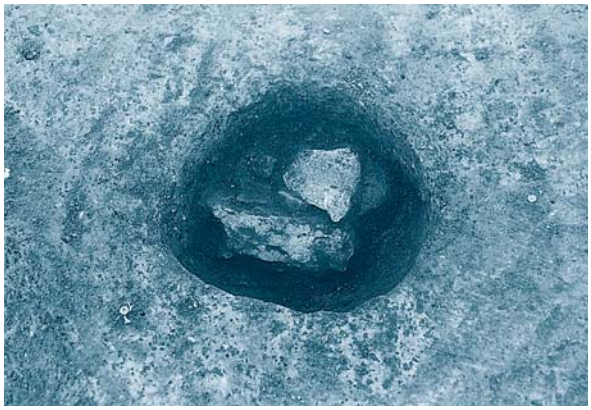
P-496 柱材出土状況（西から）

P-503 完掘（南から）

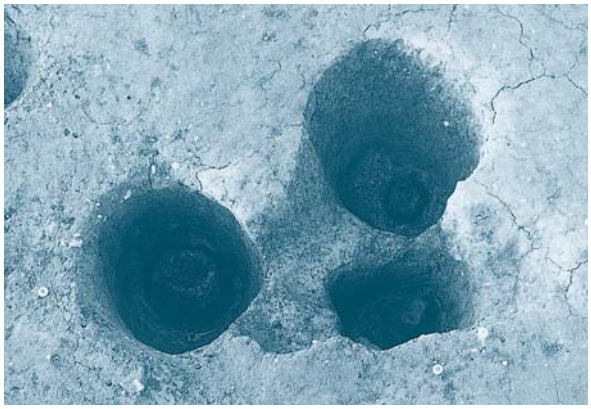

P-510 土層断面（東から）

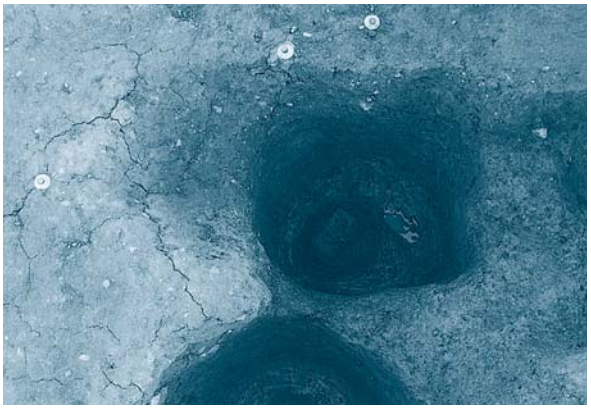

P-510 柱材出土状況（東から）


P-610 柱材出土状況（南から）


P-612 遺物出土状況（南東から）

P-625 柱材出土状況（南東から）

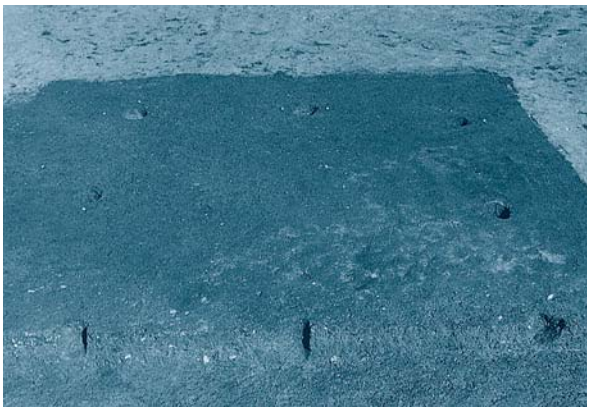

P-625・635・803・804・815 完掘（南東から）


P-803 柱材出土状況（北西から）

遺物集中区 1 遺物出土状況（南東から）

遺物集中区 2 遺物出土状況（東から）

八稜鏡出土状況（南から）


SB-79 完掘（南から）

SB-79 P-8 遺物出土状況（東から）

SD-758 完掘（東から）

SD-758 D-D’ 土層断面（東から）

SK-28 完掘（北から）

SK-763 遺物出土状況（南東から）

SK-763 柱材出土状況（北西から）

SK-849 完掘（東から）

SK-849 遺物出土状況（北西から）

SK-874 完掘（西から）

SB-100 完掘（南から）

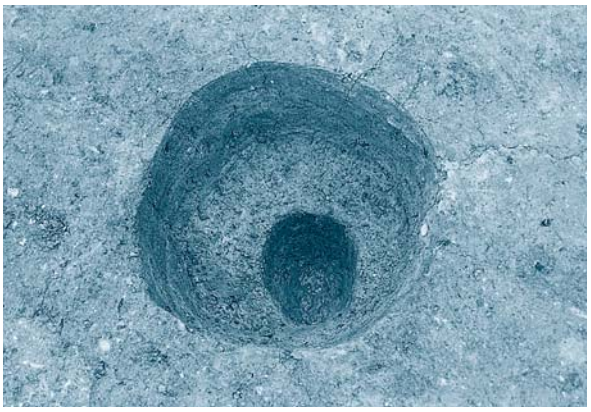
SB-101 完掘（東から）

SB-234 完掘（東から）

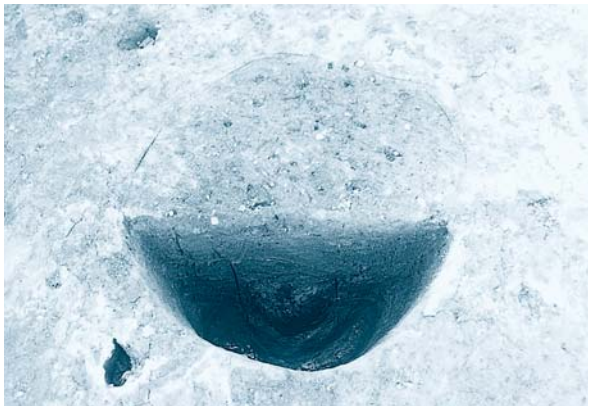
SB-234 完掘（柱穴に人・南から）

SB-234 P-5 柱出土状況（南から）

SB-508 完掘（東から）

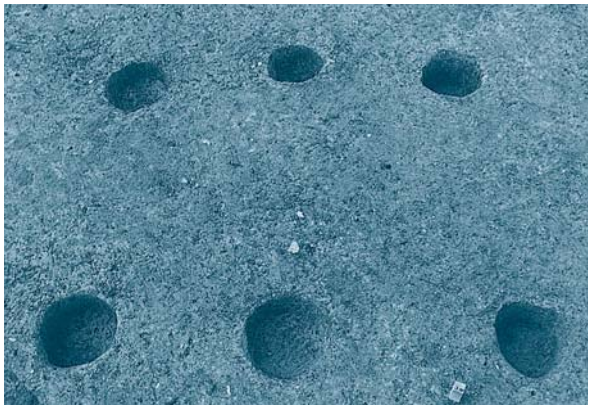

SB-508 P-2 完掘（東から）

図版四四　和田遺跡　時期不明の遺構



SB-508 P-3 土層断面（南から）

SB-508 P-3 柱材出土状況（北東から）



SB-960 完掘（南から）

SB-961 完掘（南西から）

SD-4 完掘（北西から）

SD-19 F-F’ 土層断面（東から）

SD-21 完掘（南から）

SD-22 完掘（東から）

図版四五　和田遺跡　時期不明の遺構

SD-239 完掘（南から）

SD-242 完掘（東から）

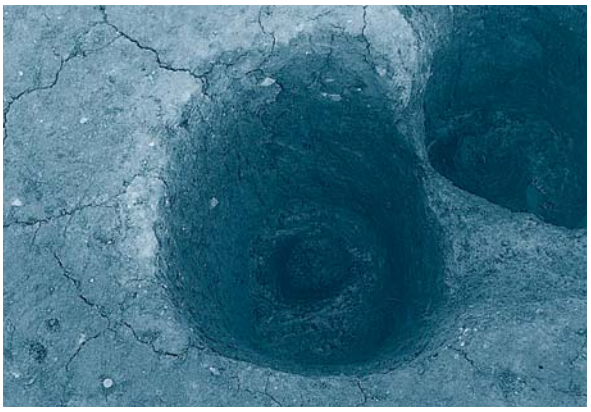
SD-759 完掘（東から）

SD-865a、SK-738・739・864・866 遺物出土状況（東から）

SK-364・395・399・423・435 完掘（北から）

SK-511・637・639・640 完掘（南東から）

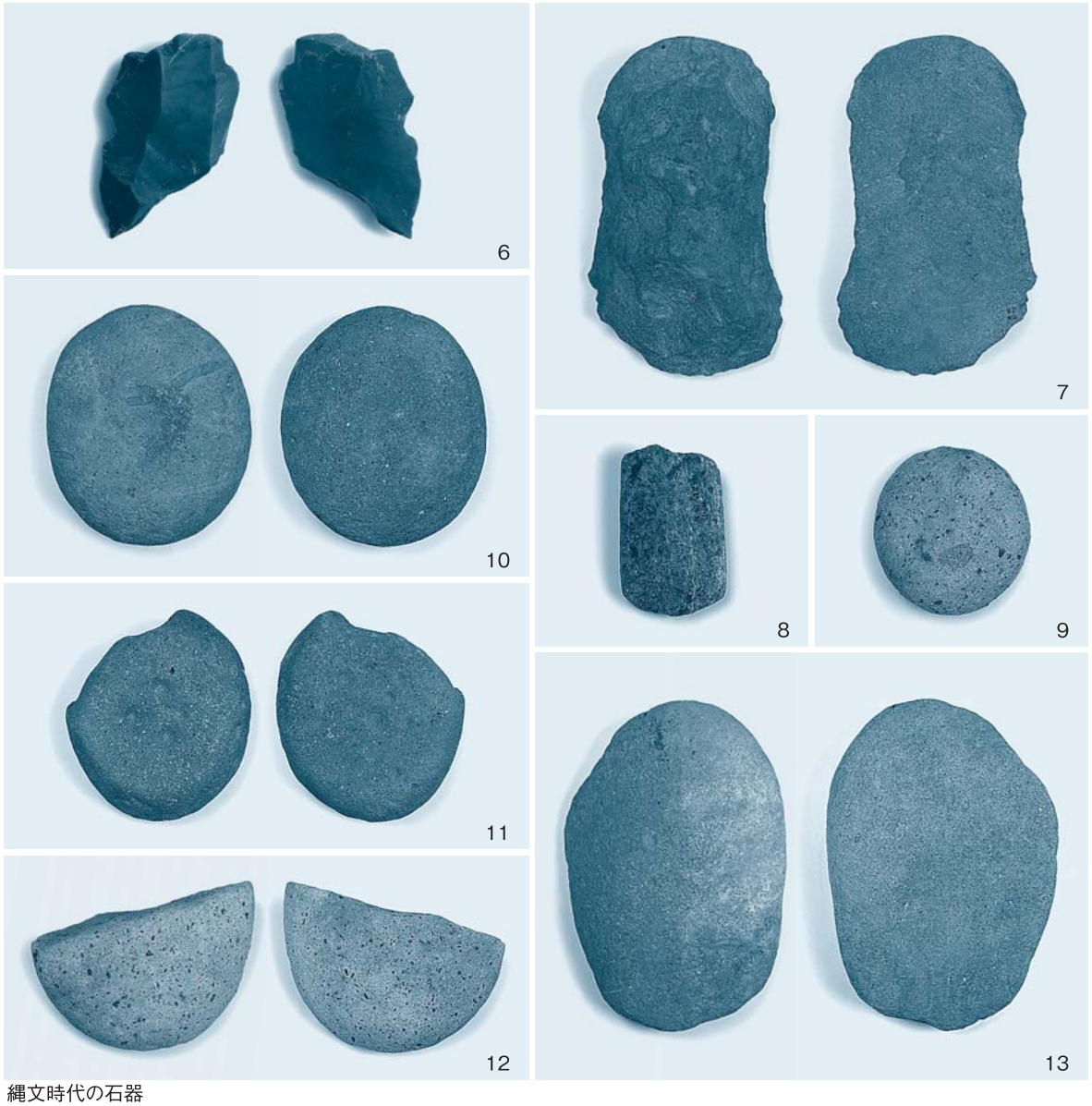
P-623 柱材出土状況（西から）



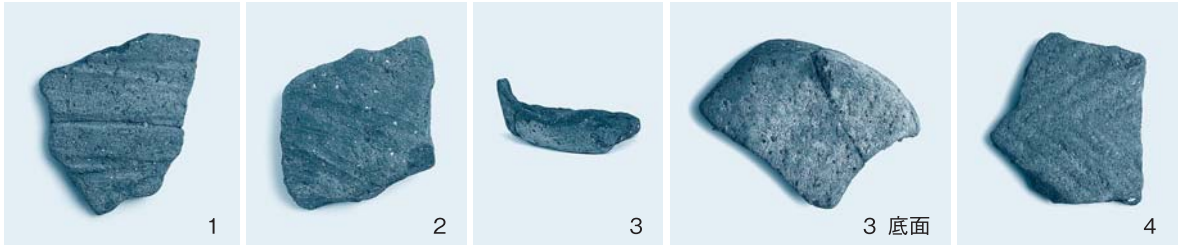
P-804 柱材出土状況（南から）

図版四六　和田遺跡　縄文・弥生時代の遺物

縄文時代の土器



縄文時代の石器



弥生時代の土器

図版四七　和田遺跡　古代の遺物

SI-202

SI-217

遺物集中区2

図版四八　和田遺跡　古代の遺物

SI-14 3

SI-14 4

SI-36 12

SI-45 1

SI-45 4

SI-45 7

SI-45 1 底面

SI-61 3

SI-61 7

SI-61 4

SI-63 3 内面

SI-62 3

SI-68 1

SI-63 3

SI-68 2

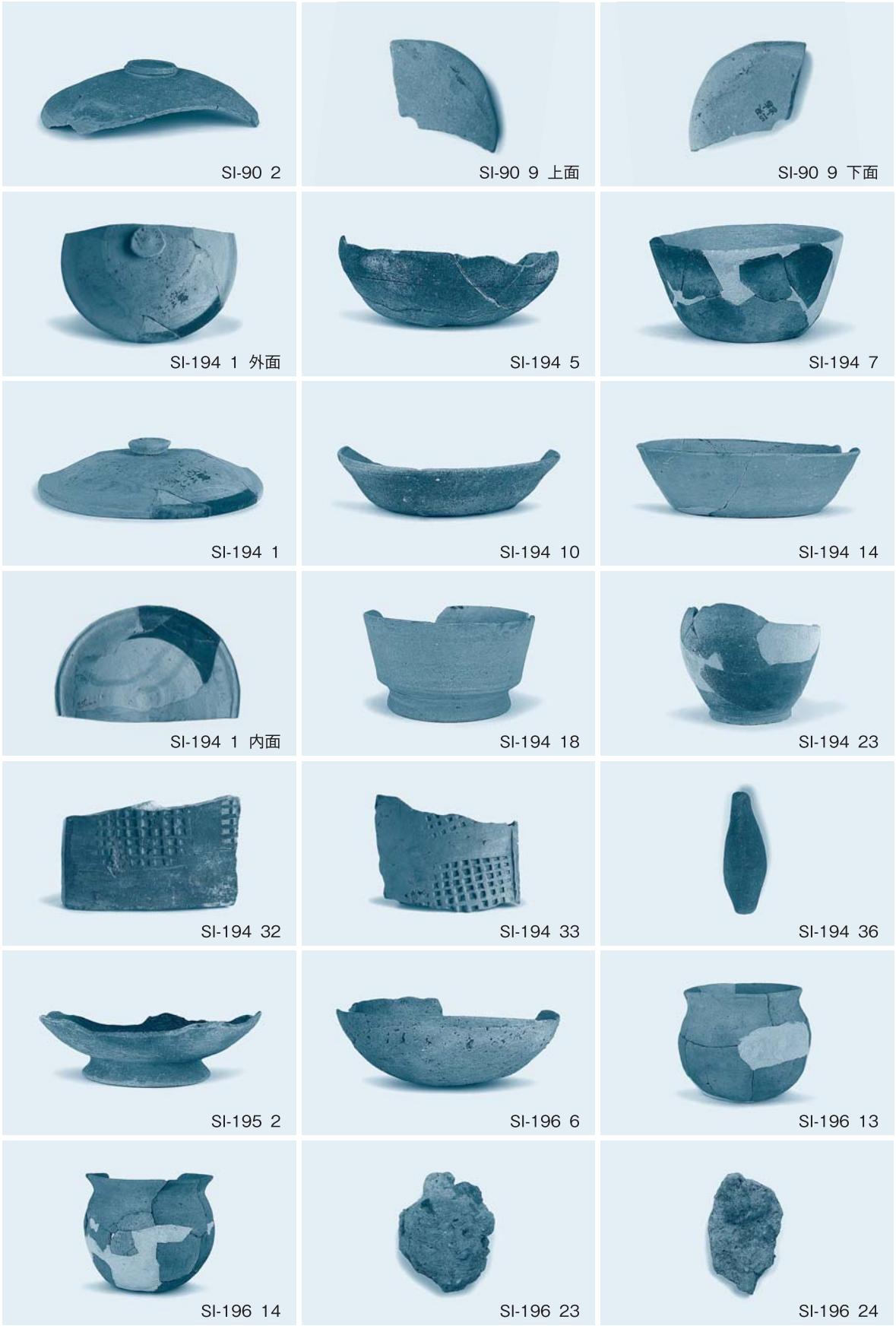
SI-70 6

SI-87 1

SI-70 2

SI-70 9

図版四九　和田遺跡　古代の遺物



SI-90 2
SI-90 9 上面
SI-90 9 下面
SI-194 1 外面
SI-194 5
SI-194 7
SI-194 1
SI-194 10
SI-194 14
SI-194 1 内面
SI-194 18
SI-194 23
SI-194 32
SI-194 33
SI-194 36
SI-195 2
SI-196 6
SI-196 13
SI-196 14
SI-196 23
SI-196 24

SI-197 2

SI-197 5

SI-197 7

SI-197 8

SI-197 16

SI-198 1

SI-198 2

SI-198 9

SI-198 10

SI-198 13

SI-198 14

SI-198 15

SI-201 1

SI-201 5

SI-202 2

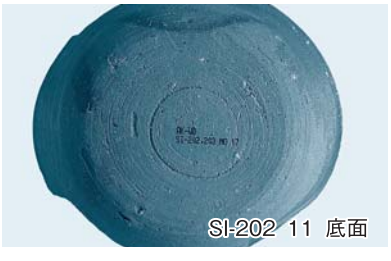
SI-202 3

SI-202 6

SI-202 11

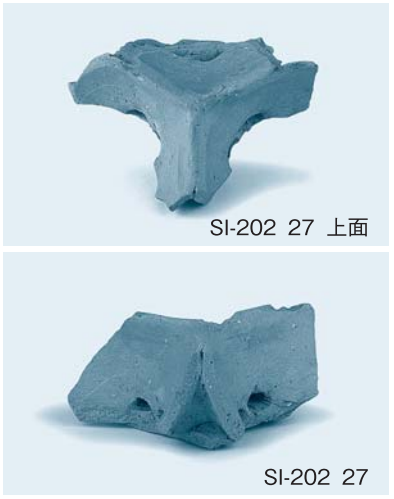
SI-202 8

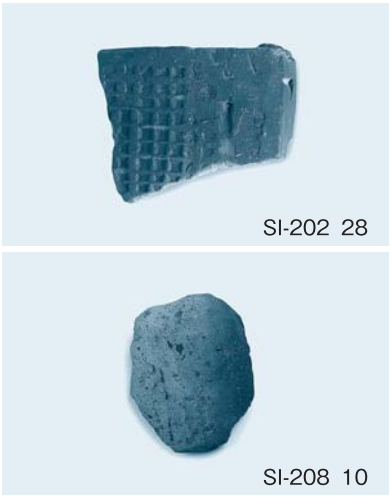
SI-202 9


SI-202 11 底面

図版五一　和田遺跡　古代の遺物

SI-202 25


SI-202 27 上面


SI-202 28

SI-202 27

SI-208 10

SI-208 11

SI-202 27 底面

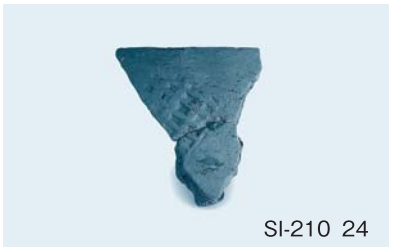
SI-209a 4

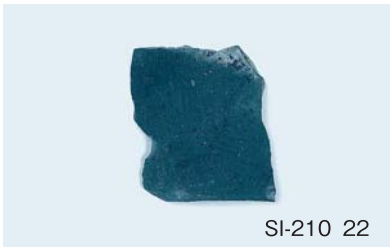
SI-209a 11

SI-209a 12

SI-209a 13

SI-210 12


SI-210 24


SI-210 22

SI-210 22 拡大

SI-210 23

SI-213 1

SI-215 1

図版五二　和田遺跡　古代の遺物

SI-213 8

SI-217 2

SI-217 3

SI-217 5

SI-217 7

SI-217 9

SI-217 12

SI-217 13

SI-217 17

SI-217 24

SI-217 22

SI-218 11

SI-220 1

SI-218 11 拡大

SI-220 5

SI-221 8

SI-221 17

SI-228 8

SI-403 4

SI-403 5

SI-631 3

SI-632 8

SI-403 6 底面

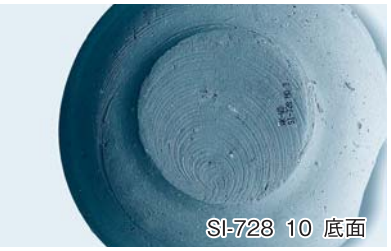
SI-632 9

SI-727 2

SI-727 7

SI-727 8

SI-728 10

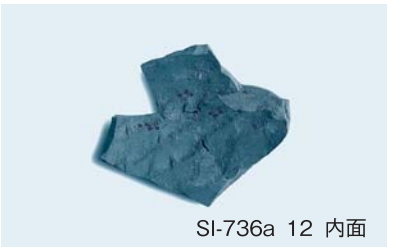

SI-728 10 底面

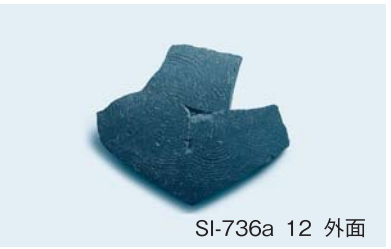
SI-731 1

SI-731 2

SI-732 5

SI-732 12


SI-736a 12 内面


SI-736a 12 外面

SI-733 14

SI-736a 15 上面

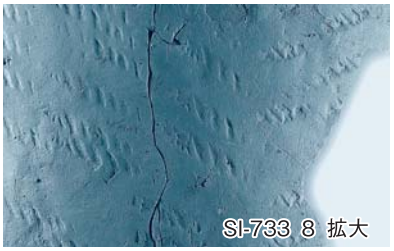
SI-736a 15 下面

SI-733 15 表面

SI-733 15 裏面

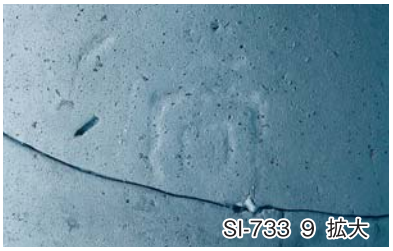
SI-742 7

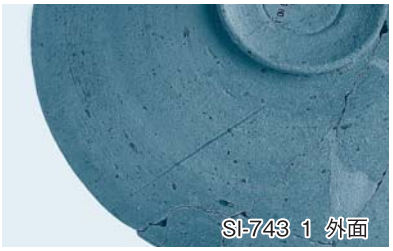
SI-733 8


SI-733 8 拡大

SI-743 8

SI-733 9


SI-733 9 拡大


SI-743 1 外面

SI-743 16

SI-743 1

SI-742 8

SI-743 12

図版五五　和田遺跡　古代の遺物

SI-743 10

SI-743 11

SI-743 14

SI-745 2

SI-745 3

SI-747 1

SI-747 2

SI-747 9

SI-748 2

SI-748 4

SI-748 7

SI-749 6

SI-752 4

SI-754 5

SI-755 5

SI-757 1

SI-900 3

SI-903 1

図版五六　和田遺跡　古代の遺物

SI-750 10　SI-750 11　SI-750 12　SI-750 13　SI-750 14

SI-750 15　SI-750 16　SI-750 17　SI-750 18　SI-750 19

SI-750 20　SI-750 21　SI-750 22　SI-750 23　SI-750 24

SI-756 7

SI-901 9

SI-903 2

SI-903 3

SI-919 2

SI-919 3

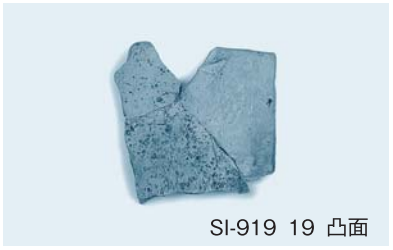
SI-919 4

SI-919 7

SI-919 21

SI-919 21 拡大

SI-919 8

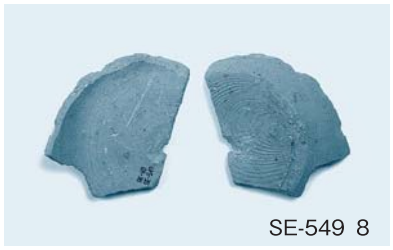

SI-919 19 凸面

SI-919 19 凹面

SI-919 18

SI-919 22

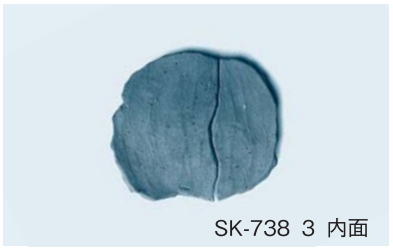
SI-919 22 拡大


SE-549 8

SD-238 6

SD-238 13

SK-738 3 外面


SK-738 3 内面

SK-37 2

SK-50 1

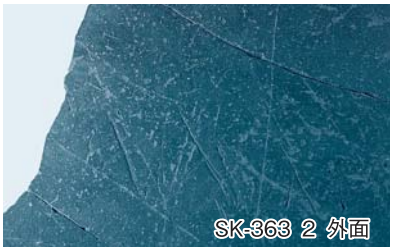
SK-53 2

SK-97 4

SK-98 1

SK-222 11

SK-845 1


SK-363 2 外面

SK-363 2 内面

SK-845 1 底面

図版五八　和田遺跡　古代の遺物

SK-864 3

SK-845 3

SK-864 6

SK-864 3 底面

SK-864 7

SK-864 8

SK-864 9

SK-864 11

SK-864 10

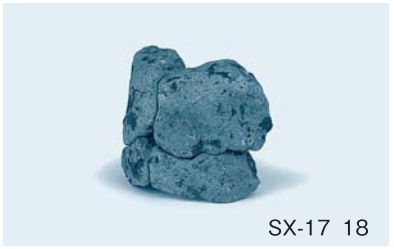
SK-864 12

SK-866 1

SK-911 1

SX-17 10

SX-17 17

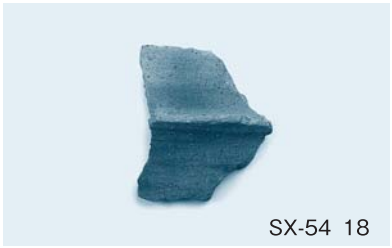

SX-17 18

SX-17 19

SX-17 20

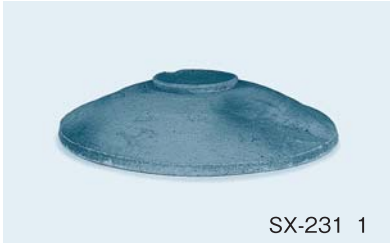
SX-54 2

SX-54 8


SX-54 18

SX-54 19

SX-54 20


SX-231 1

SX-231 7

SX-232 5

SX-232 6

SX-232 7

SX-232 9

SX-232 12

SX-232 13

SX-232 14

SX-232 20

SX-232 21

SX-700 7

SX-700 15

P-510 1

P-510 3

P-823 1

遺構外 23

遺物集中区1 15 側面

遺物集中区1 15 前面

遺物集中区2 12

遺物集中区2 13

遺物集中区2 20

遺物集中区2 31

遺物集中区2 41

遺物集中区2 43

遺物集中区2 44

遺構外 5

遺構外 32

遺構外 32 拡大

遺構外 4

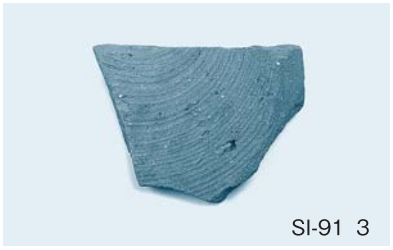
遺構外 44

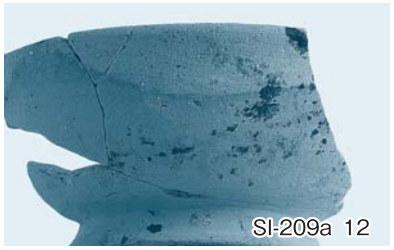
遺構外 44 拡大

遺構外 18

遺構外 54

図版六一　和田遺跡　古代の遺物（墨書土器）


SI-91　3

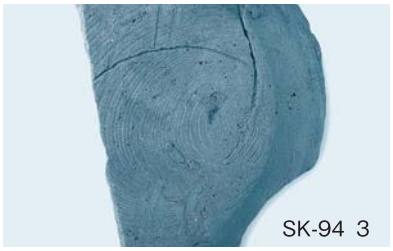

SI-209a　12

SI-209a　13

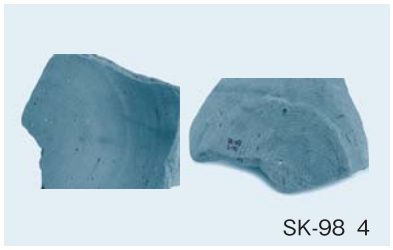
SB-235　4

SE-549　4

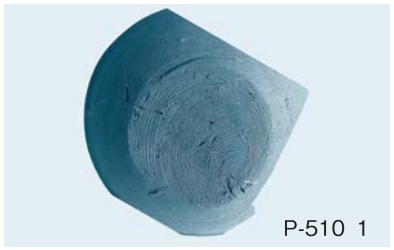
SK-94　2

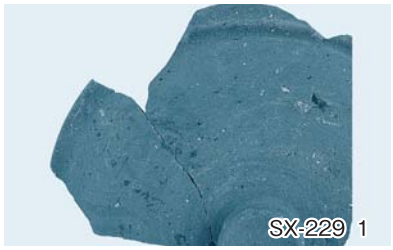

SK-94　3

SK-98　5

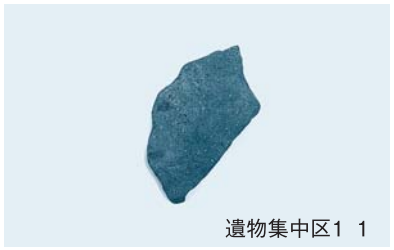

SK-98　4

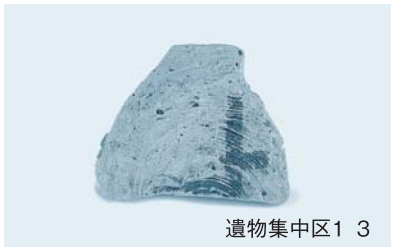
SK-98　6

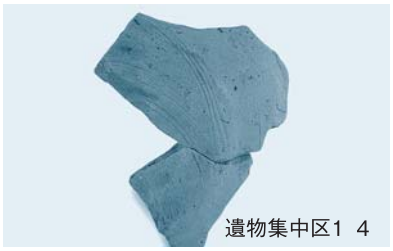

P-510　1

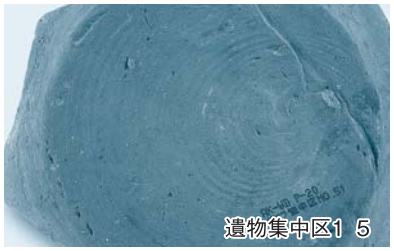

SX-229　1

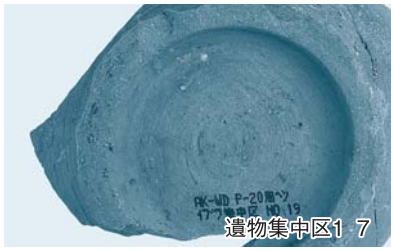
SD-238　9

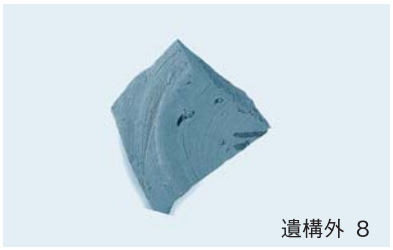

遺物集中区1　1

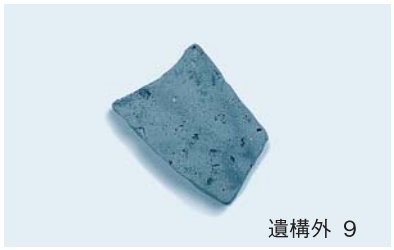

遺物集中区1　3

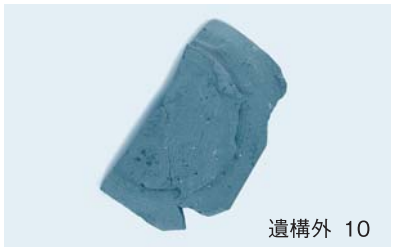

遺物集中区1　4


遺物集中区1　5

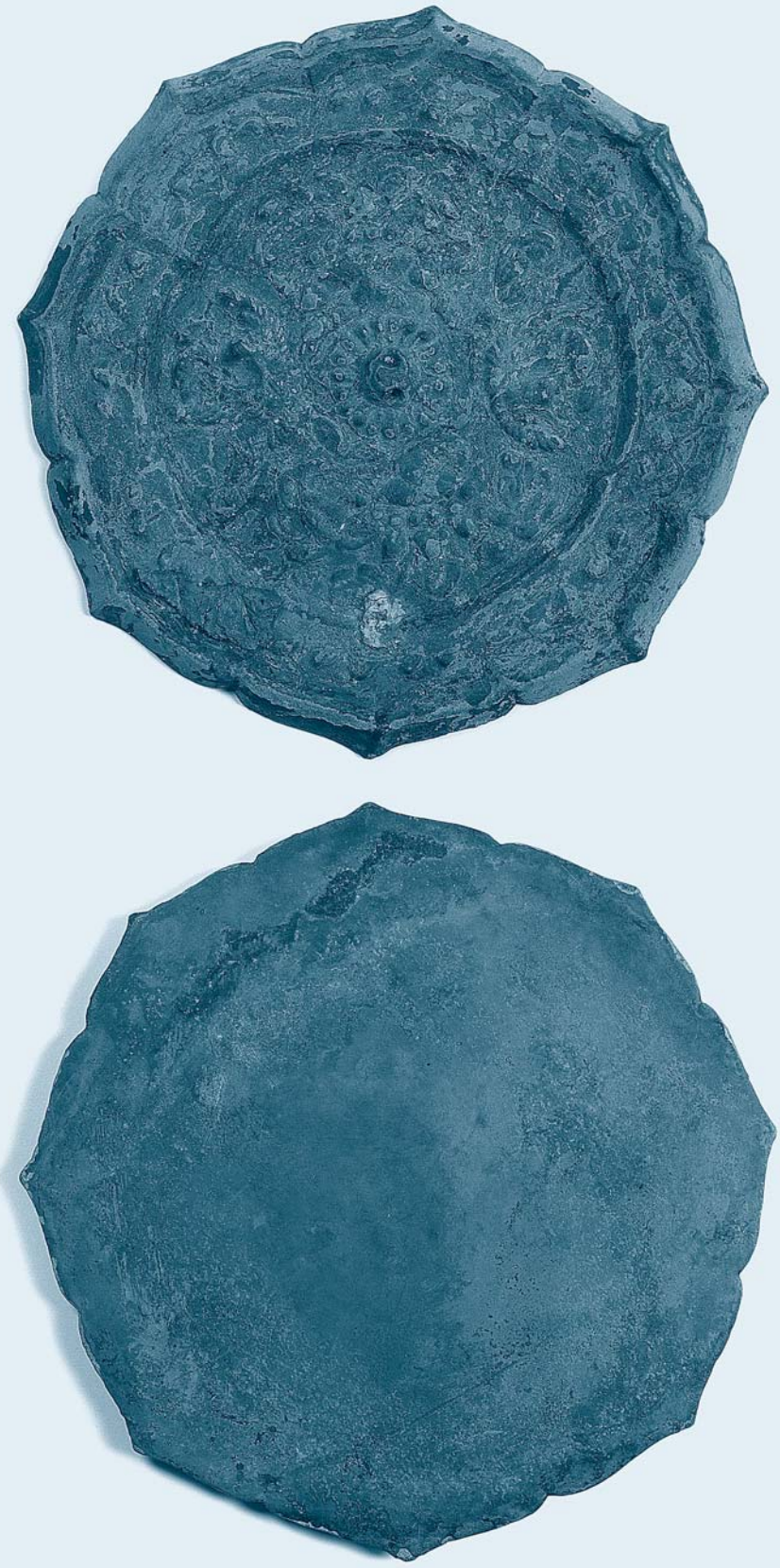

遺物集中区1　7


遺構外　8


遺構外　9


遺構外　10

図版六二　和田遺跡　古代の遺物（青銅製品）



遺構外 55

図版六三　和田遺跡　古代の遺物（鉄製品）、中・近世の遺物

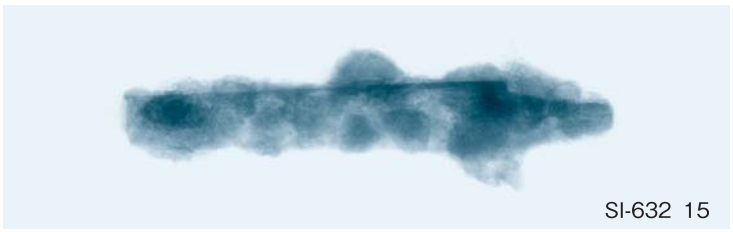
SI-207 13

SI-207 12

SI-632 15

SI-207 13

SI-207 12


SI-632 15

X線写真

SK-16 1

SK-849 1

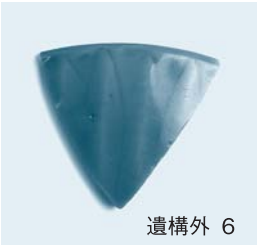
SK-874 1

遺構外 2

遺構外 3

SK-849 7

SK-16 2


遺構外 6

遺構外 7

SK-849 8 上面

SK-849 8 下面

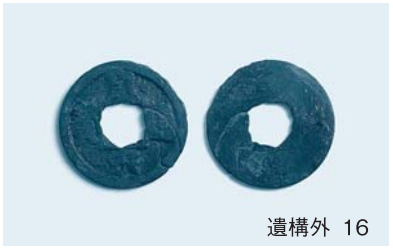
SK-849 9

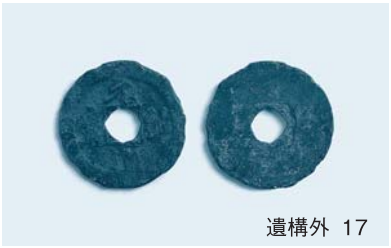
図版六四　和田遺跡　中・近世の遺物、遺物（木製品）

SK-849　10

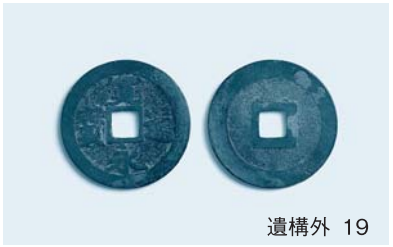
遺構外　4

遺構外　15

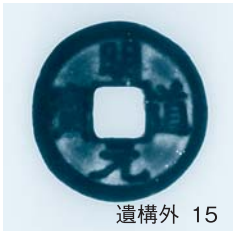

遺構外　16

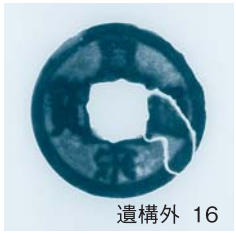

遺構外　17

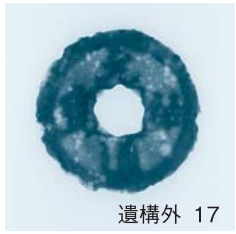
遺構外　18


遺構外　19

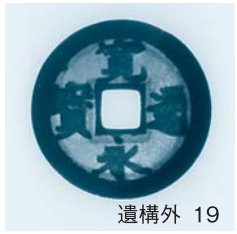
遺構外　20

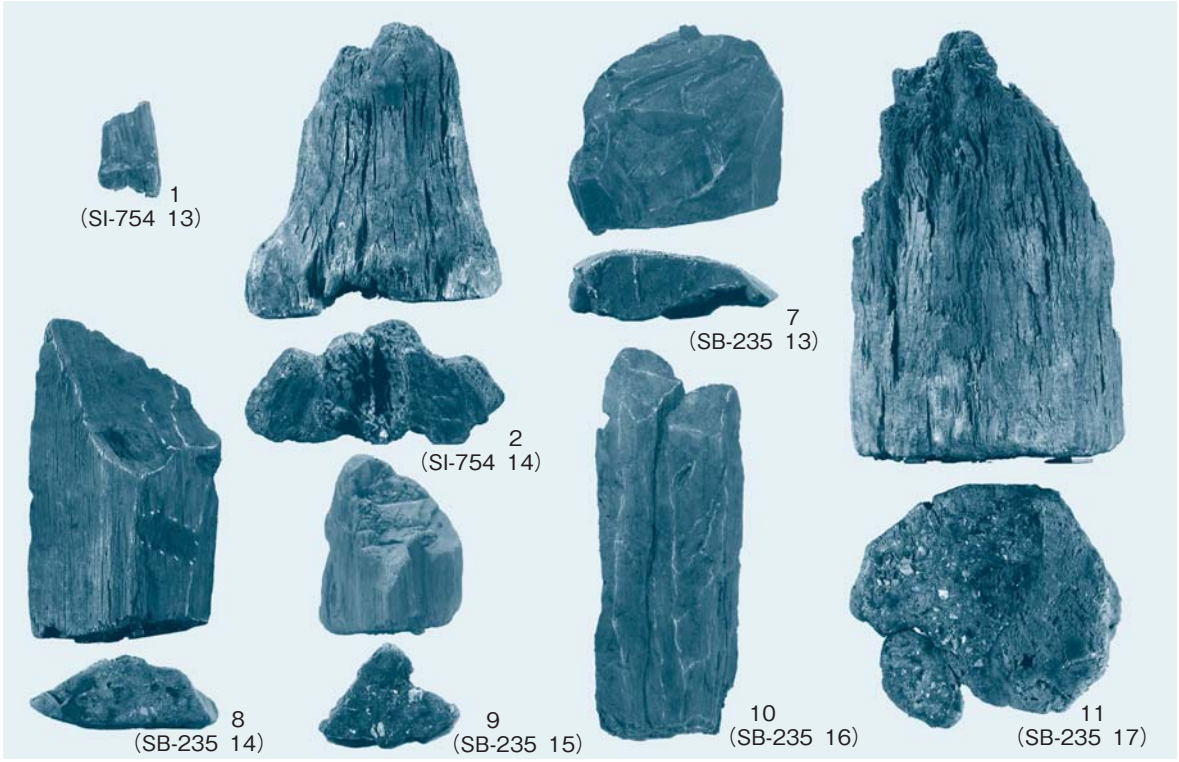

遺構外　15


遺構外　16


遺構外　17

遺構外　18


遺構外　19


1
（SI-754　13）

2
（SI-754　14）

7
（SB-235　13）

8
（SB-235　14）

9
（SB-235　15）

10
（SB-235　16）

11
（SB-235　17）

図版六五　和田遺跡　遺物（木製品）

4
（SB-235 11）

6
（SB-235 12）

5
（SB-235 10）

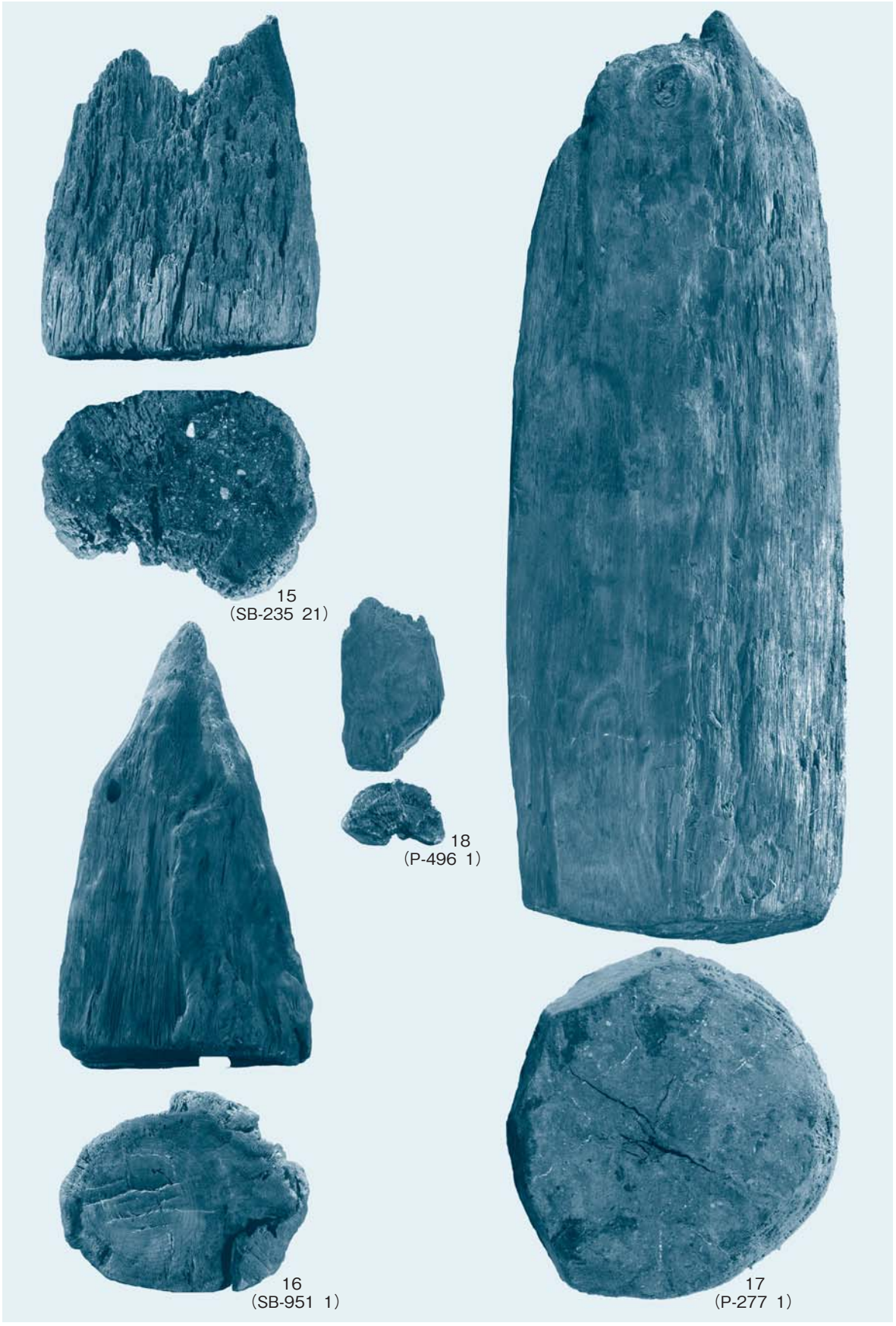
3
（SB-235 9）

13
（SB-235 19）

12
（SB-235 18）

14
（SB-235 20）

図版六六　和田遺跡　遺物（木製品）



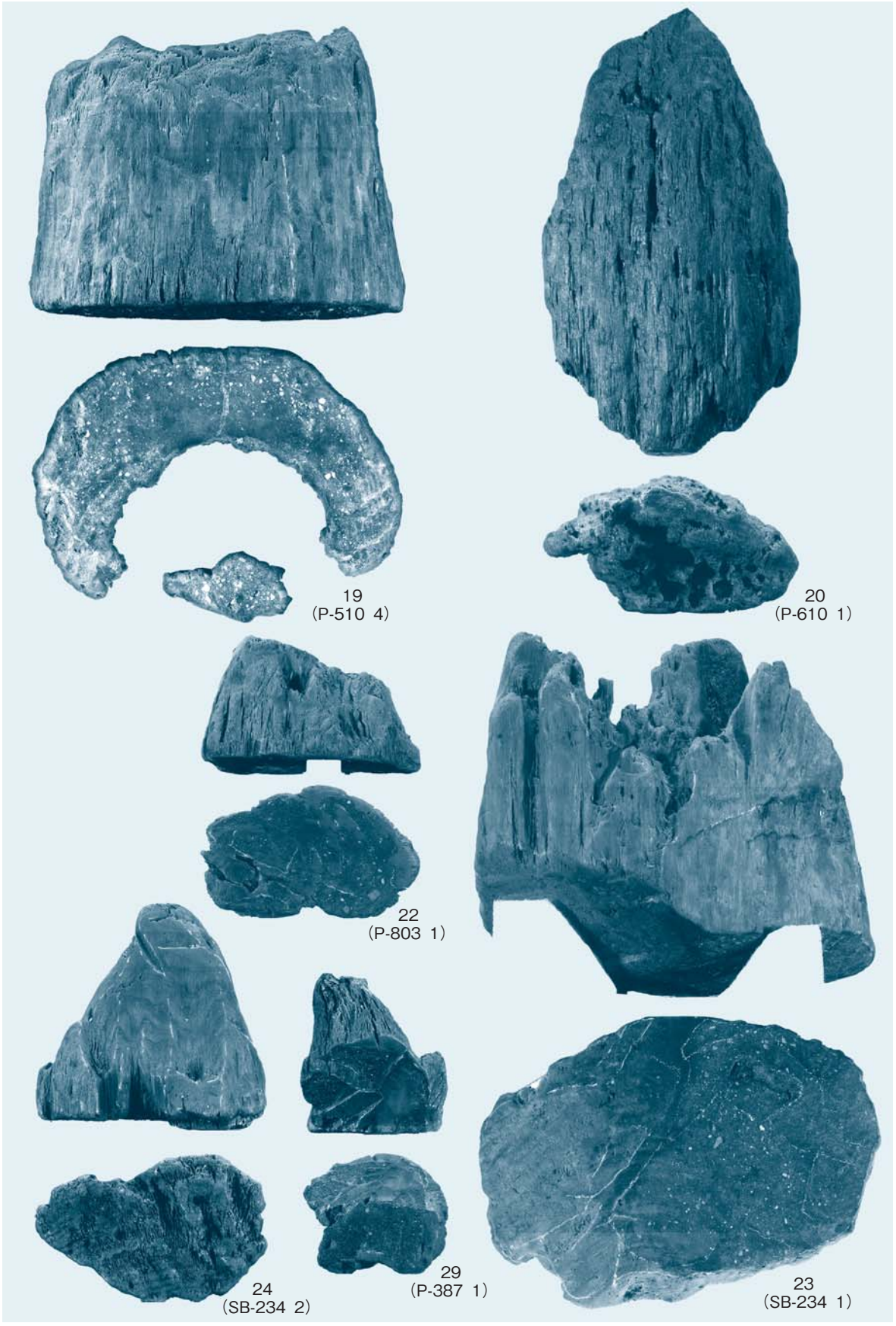
15
（SB-235 21）

18
（P-496 1）

16
（SB-951 1）

17
（P-277 1）

図版六七　和田遺跡　遺物（木製品）



19
（P-510 4）

20
（P-610 1）

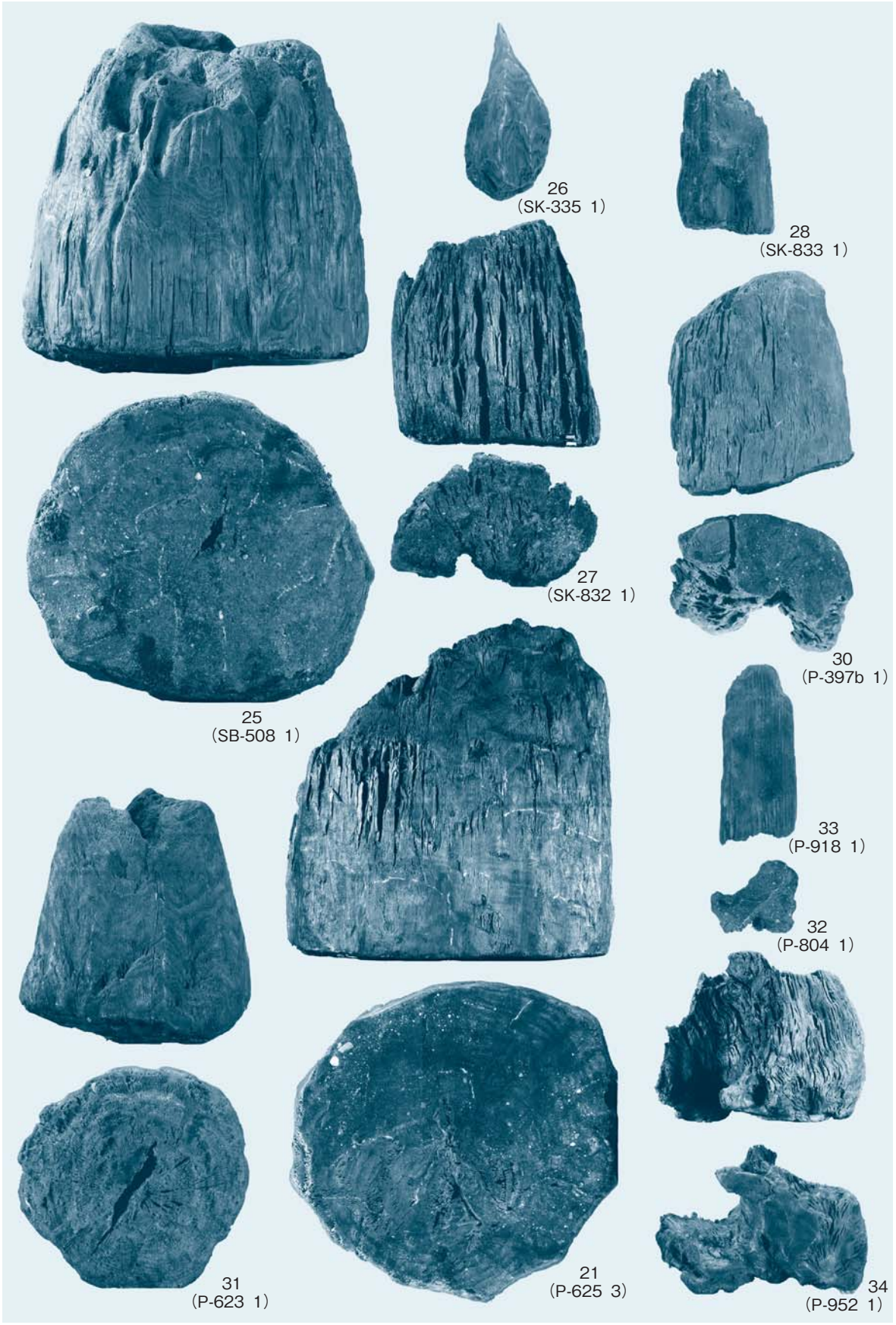
22
（P-803 1）

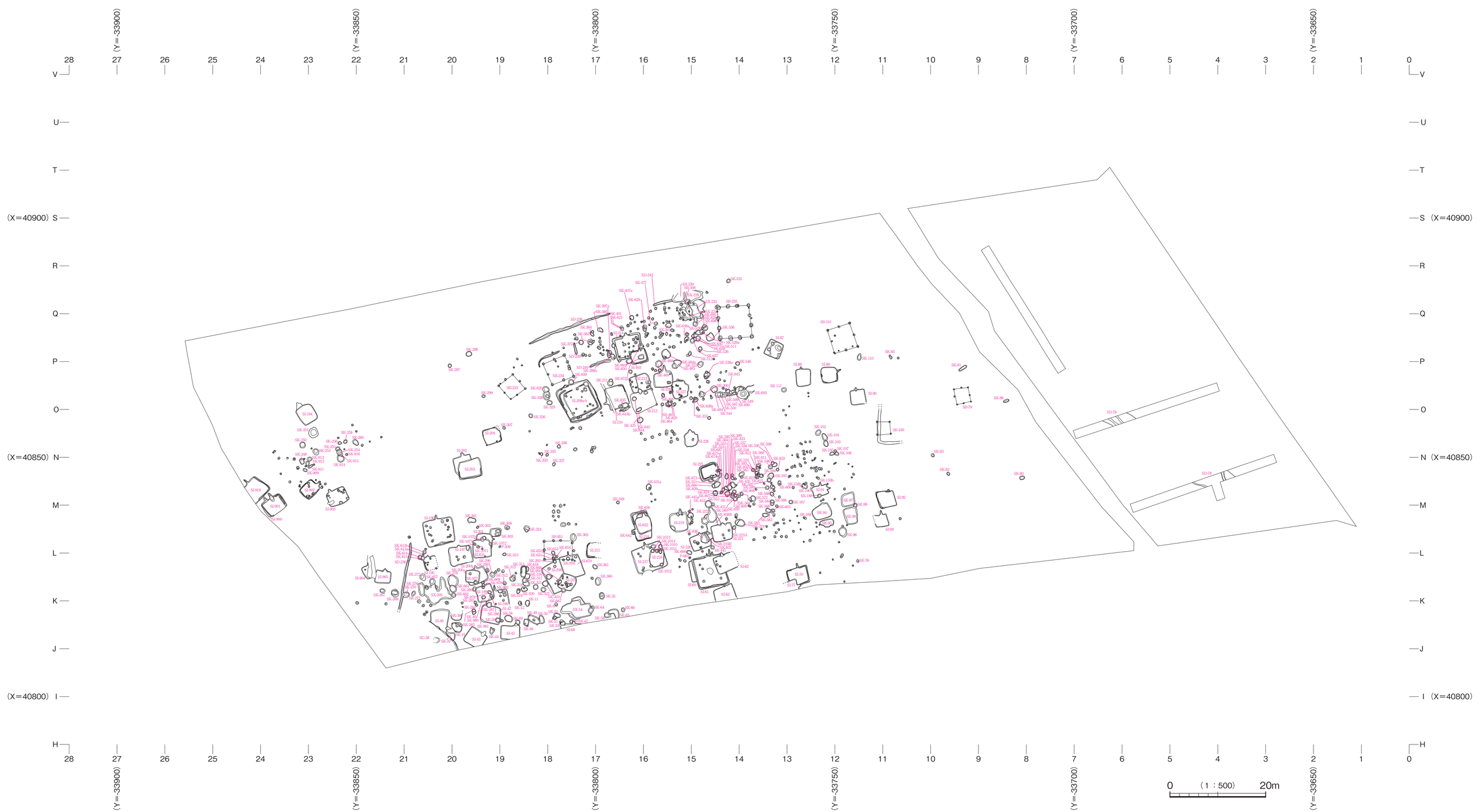
24
（SB-234 2）

29
（P-387 1）

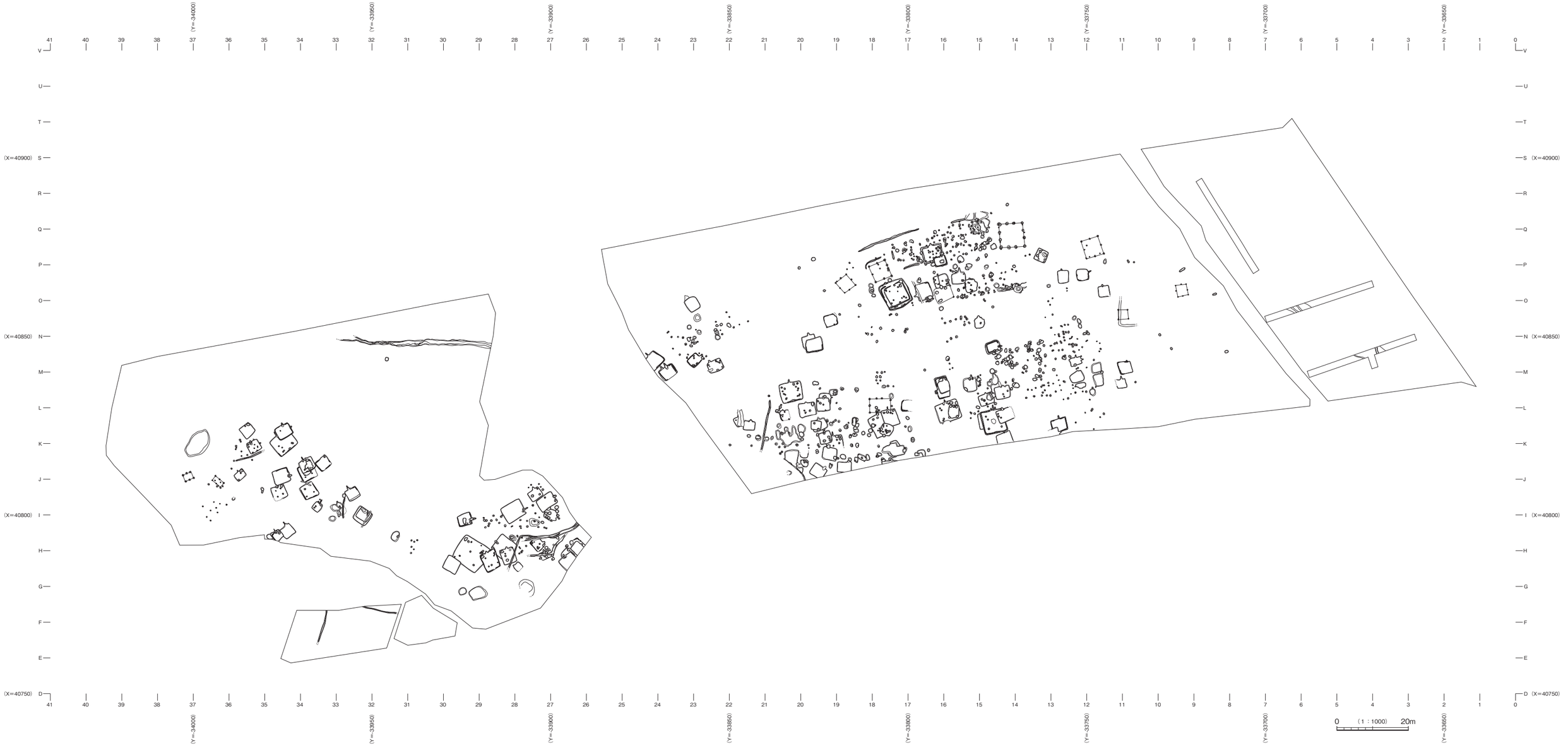
23
（SB-234 1）

図版六八　和田遺跡　遺物（木製品）

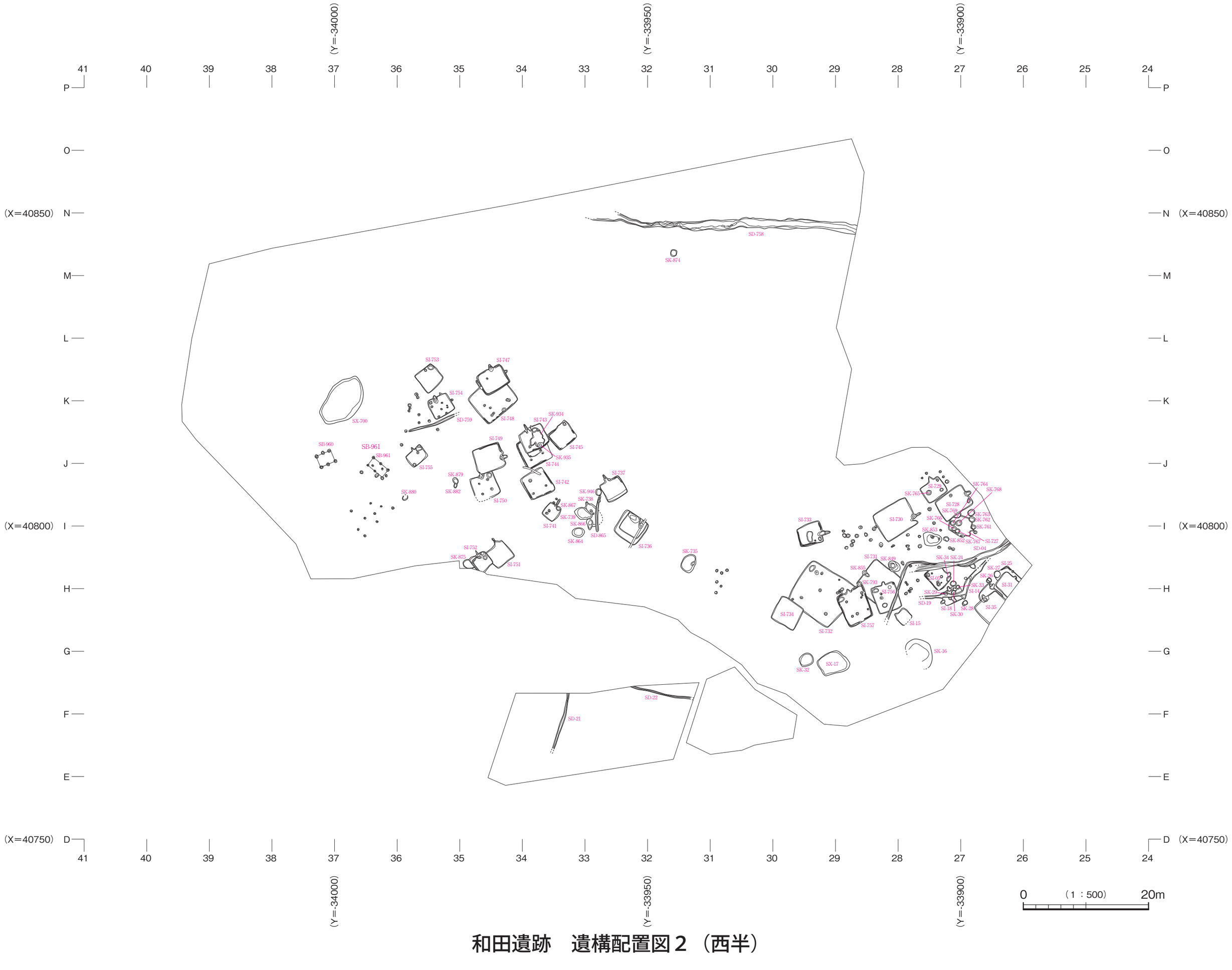




和田遺跡　遺構配置図１（東半）


(Y=-34000)
(Y=-33950)
(Y=-33900)
(Y=-33850)
(Y=-33800)
(Y=-33750)
(Y=-33700)
(Y=-33650)
41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0
V U T S R Q P O N M L K J I H G F E D
(X=40900)
(X=40850)
(X=40800)
(X=40750)
0 (1：1000) 20m

和田遺跡　全体図



和田遺跡　遺構配置図２（西半）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	わだいせき
書　　名	和田遺跡
副 書 名	北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ＸＸＩ
巻　　次	21
シ リ ー ズ 名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 350 集
編 著 者 名	谷中　隆・田中裕子
編 集 機 関	財団法人とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒329−0418　栃木県下野市紫 474 番地　TEL 0285−44−8441
発 行 機 関	栃木県教育委員会　財団法人とちぎ未来づくり財団
発 行 年 月 日	西暦　2012年3月30日　（平成24年3月30日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
和田遺跡 わだいせき	足利市 あしかがし 月谷町 つきやちょう	187	4908	36° 22′ 03″	139° 27′ 22″	20040611 ～20060831	28,000	道路（北関東自動車道）建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
和田	集落	縄文時代		縄文土器・石器	
		弥生時代		弥生土器	
		古墳時代後期～平安時代	竪穴建物跡　94 軒 掘立柱建物跡　3 棟 井戸　1 基 溝　4 条 土師器焼成遺構 4 基 土坑　143 基 性格不明遺構　8 基 ピット　88 基	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦・土製品・砥石・石製紡錘車・鉄鎌・刀子・青銅鏡	古墳～平安時代の集落
		中・近世	掘立柱建物跡　1 棟 溝　1 条 土坑　6 基	土師質土器・瓦質土器・陶器・青磁・瓦・石臼・砥石・銭貨	
		時期不明	掘立柱建物跡　6 棟 溝　9 条 土坑　161 基 ピット　479 基		

要 約	足利市街地北西部、袋川西岸の山麓に立地。縄文時代は黒浜式主体に早～前期の土器（鵜ヶ島台・条痕文系・関山Ⅱ）・石器、弥生時代は中～後期の土器出土。古墳時代後期～平安時代の集落は竪穴住居跡 94 軒をはじめ多数の遺構があり、三足土器、灰釉陶器、土製品（紡錘車、紡錘車未製品、土錘、支脚、筒形土製品、粘土塊等）、瓦、石器（紡錘車等）、木製品、瑞花双鳳八稜鏡等出土。瓦は桶巻き作りあり。須恵器は三毳産の他群馬産や太田産がみられ、埼玉産も含む。木製品は柱材や礎板でクリ材を多用し、上屋材と使用樹種を変えていた可能性が指摘される。土師器焼成遺構は 4 基あり、楕円形の土坑に煙道が付く特徴的な形状で、土師器未製品ないし失敗品が出土する。中世は掘立柱建物跡 1 棟、溝 1 条、土坑 6 基、近世は土坑 1 基あり。西側山頂付近にある大岩山毘沙門堂及び十二坊跡との関連も想定される。

北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

Ⅰ「一本松遺跡・文殊山遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 230 集　1999 年 3 月
Ⅱ「杉村・磯岡・磯岡北」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集　2000 年 3 月
Ⅲ「八剣遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集　2001 年 3 月
Ⅳ「谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 255 集　2001 年 3 月
Ⅴ「上神主・茂原　茂原向原　北原東」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 256 集　2001 年 3 月
Ⅵ「権現山遺跡・百目鬼遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集　2001 年 3 月
Ⅶ「西赤堀遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 304 集　2007 年 3 月
Ⅷ「峰高前遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 308 集　2007 年 9 月
Ⅸ「高島遺跡群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 309 集　2008 年 3 月
Ⅹ「下陰遺跡Ⅰ」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 310 集　2008 年 3 月
Ⅺ「西物井遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 316 集　2009 年 3 月
Ⅻ「西根２遺跡・小野寺城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 320 集　2009 年 3 月
ⅩⅢ「谷向遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 321 集　2009 年 3 月
ⅩⅣ「五霊遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 322 集　2009 年 3 月
ⅩⅤ「原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎Ⅲ遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 323 集　2009 年 3 月
ⅩⅥ「曲田遺跡・馬場先遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 324 集　2009 年 3 月
ⅩⅦ「下陰遺跡Ⅱ」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 330 集　2010 年 3 月
ⅩⅧ「田島持舟遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 339 集　2011 年 3 月
ⅩⅨ「四十八塚古墳群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 340 集　2011 年 3 月
ⅩⅩ「寂光沢窯跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 341 集　2011 年 3 月
ⅩⅩⅠ「和田遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 350 集　2012 年 3 月
ⅩⅩⅡ「菅田古墳群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 351 集　2012 年 3 月
ⅩⅩⅢ「神畑遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 352 集　2012 年 3 月
ⅩⅩⅣ「樺崎渡戸古窯跡・樺崎中妻遺跡・栃本西遺跡・唐沢山城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 353 集　2012 年 3 月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 350 集

和田遺跡

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅩⅠ－

発行　栃　木　県　教　育　委　員　会
宇都宮市塙田 1 － 1 － 20
ＴＥＬ　028（623）3425
財団法人とちぎ未来づくり財団
宇都宮市本町 1 － 8
ＴＥＬ　028（643）1011
平成 24 年 3 月 30 日発行

編集　財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫 474 番地
ＴＥＬ　0285（44）8441

印刷　株式会社松井ピ・テ・オ・印刷